KAIZO

# 改造

七月號

山岳特輯

1929

「超人子規」の藝術を讀まずして誰の藝術に就く

# 子規全集

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社

## 子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の閫閾より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして強力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、強烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虚飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八卷は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

（内容見本進呈）

## 子規の藝術を仰げ

1 俳句全集（第一卷）
2 俳句全集（第二卷）
3 俳句全集（第三卷）
4 俳論及俳話（上卷）
5 俳論及俳話（下卷）
6 歌論歌話及評論
7 和歌、新體詩、漢詩
8 隨筆（上卷）
9 隨筆（下卷）
10 小說、紀行、小品
11 少年時代創作篇（上卷）
12 少年時代創作篇（下卷）
13 編著（上卷）
14 編著（下卷）
15 書簡（上卷）
16 書簡（中卷）
17 書簡（下卷）
18 未發表作品及年譜、總書目録

第一回配本 隨筆篇（上卷）
仰臥漫録・病牀六尺・堂々五百
松蘿玉液・墨汁一滴・七十四頁

全十八卷 一冊壹圓
一時拂 十七圓
〆切 七月二十日



# 改造七月號目次

◊文學士吉村[illegible]治氏[illegible]著◊

# 三十過ぎての肥滿は危險

三十歳を過ぎるとデブ〳〵に肥つて來る人があります、これは骨格や筋肉が增加するのでなく只皮下の脂肪だけが過剩に溜る生理的に不自然な現象で肺臟、心臟、血管その他の臟器が壓迫され、その活動機能が妨げられ、且つ身分不相應に重い脂肪を身につけてゐるため、色々な病氣を起す原因となります。肥滿そのものは決して病氣でないが、腎臟病、糖尿病、心臟病、動脈硬化症、といつた病氣は何れも肥滿型の人に多いのはこの譯で、一見健康そうに見えても重大なる危險が常に體內に潛在してゐるものです。

## 瘦せる秘訣は『減食』のみ

殊に婦人にありては肥滿することが單に美容上の問題でなく、月經が不順になつたり、頭痛、のぼせ、息切れ等が頻發したり健康上にも宜しからざる影響を與へます。然しこれまで瘦せる法として行はれたものはその大部分が、これを服用したゝめに有害な副作用が起きたり或は無益であつたりするもので、瘦せる秘訣としては極めて少數の病的肥滿の外はどうしても食物による攝制、特に減食の他にないことは、學問上及び實驗の上から來た結論であります。

## 一ケ月一貫匁以上

然し減食乃至少食は理想ではあるが實行は決して容易でない、玆にデコルパといふ肥滿者向きの食糧があります。植物性の粘液素を乾固したもので食事の半乃至一時間前に一―二匙を食べて置けば胃の中で約二十倍に膨脹し、食事に際して飽食の感を與へ、例へば普通五杯の飯を食べる場合に、二三杯でもう胃が充滿し、これを毎日或は一週間十ケ月と續けてゆく內に、自然と過剩脂肪の調節が出來ます、醫學者の實驗報告に據つても一ケ月に平均一貫匁以上を減ずる事は容易であると述べてあります。



# 脫脂（瘦せる）食糧 デコルパ



## 肥滿者共通の惱み

デコルパは身體に全く無害である點に於いて、これまでの瘦せる療法とは全然趣きを異にして居ります。ツマリ只腹の中で膨脹するだけで害にも藥にもならず、一定の時間が來れば、その儘便となつて排泄さるゝことは丁度野菜や果物を多食した時と同樣です。肥えた人は常に便秘じ勝ちですがデコルパは生理的に排便を促しますから肥滿者の苦惱である便秘の問題をも解決して身心を爽快ならしむるだけでも大いに喜ばれます。兎に角デコルパの出來たことは肥滿の危險と惱みを簡單率直に解決し得るものとして世界到る處で大變に評判になつて居ります。

詳しいことはデコルパの現品に添付した說明書にありますから御覽下さい、約一週間分三圓、約一ケ月分十二圓で各地の著名な藥店で販賣して居ります。製造元はチエツクスロバーク國ノルギーネ製藥會社です。

**見本送呈**

御入要の節は東京市日本橋區本町田邊商店デコルパ係宛て御申込次第御送りします。



山の春（アルベルト・シユタイナー撮影）——松方三郎氏蔵



山の夕暮（アルベルト・シュタイナー撮影）——松方三郎氏藏



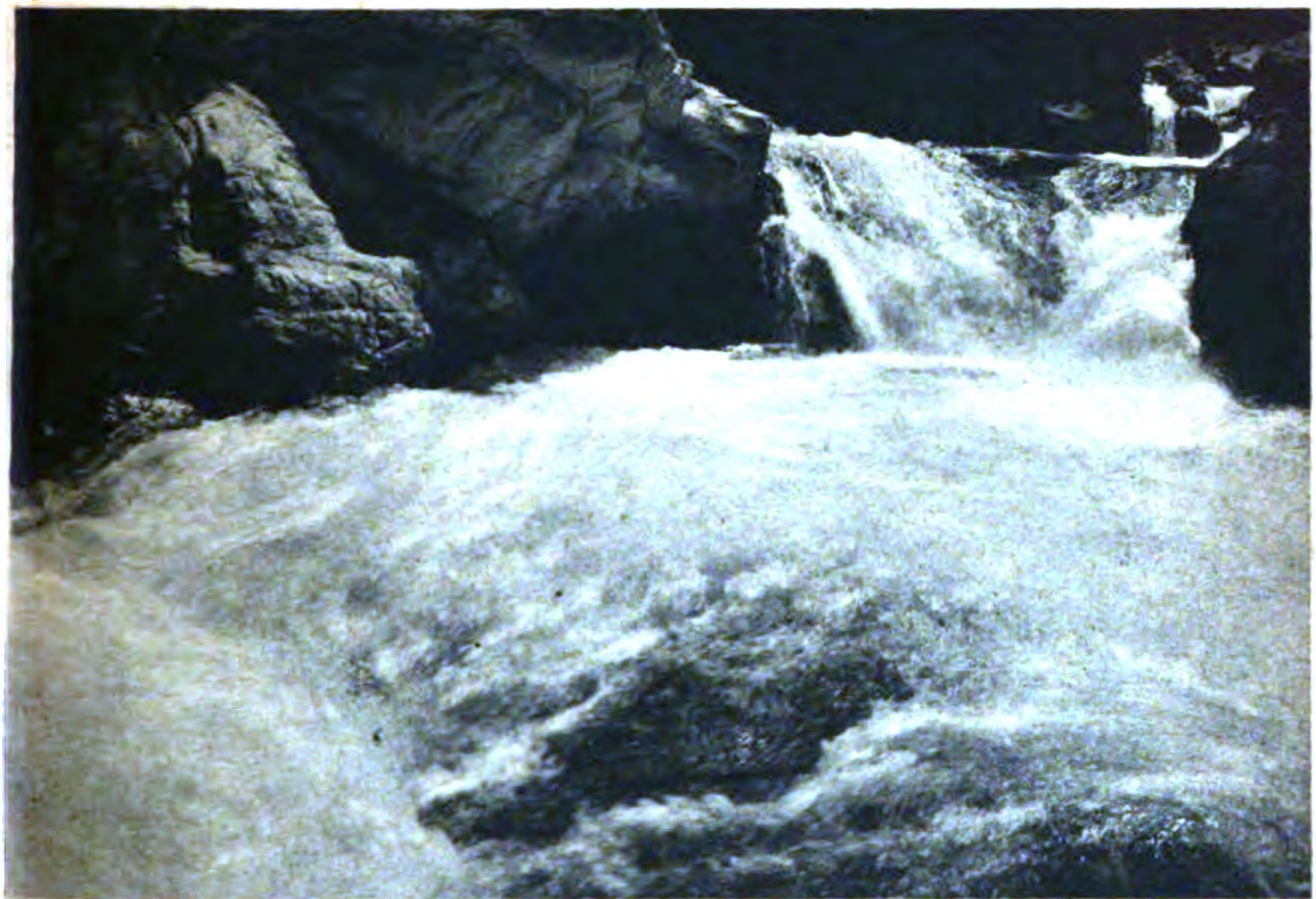
ピッツ・ベルニナ（アルベルト・シユタイナー撮影）——松方三郎氏藏



ラ・グランド・ルイヌとプロモントアールの山小屋——松方三郎氏記事參照



十一月の富士山（七合五勺）——槇　有恒氏記事參照



下廊下の奔湍（黒部川）——冠松次郎氏記事参照





（上）立山一の越の南望

（下）劔嶽（丸山より）——冠松次郎氏記事參照



マツターホルンとダンデラン —— 浦松佐美太郎氏記事參照





（上）マツターホルンより見たるダンブランシユ

（下）モンテローザ——浦松佐美太郎氏記事参照





(上) 上田代から燧ケ嶽

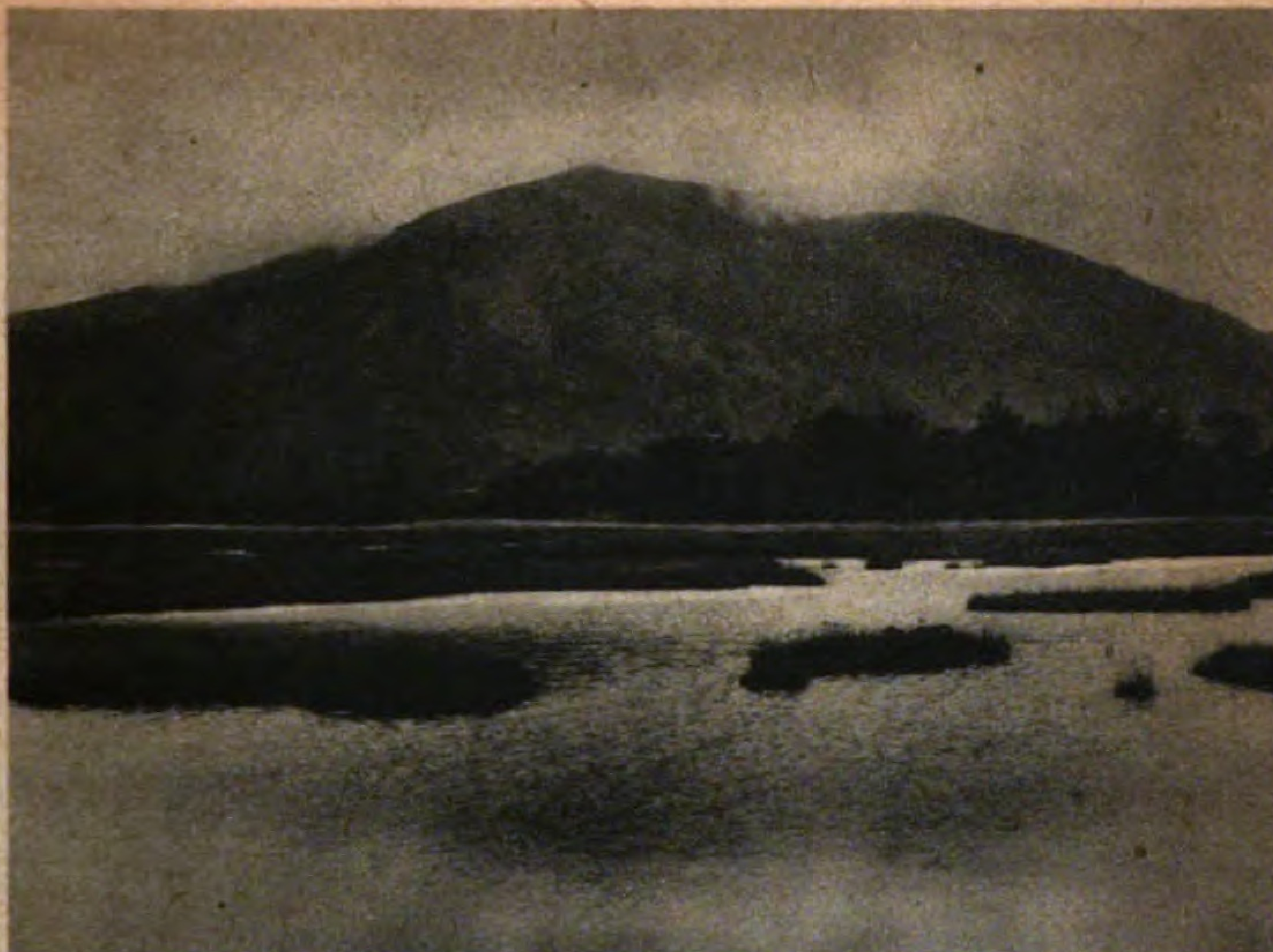
(下) 尾瀬沼を距て燧ケ嶽——武田久吉氏記事參照





（上）押出濕原から檜の高山

（下）白砂濕原——武田久吉氏記事參照





（上）中田代から至佛山

（下）鬼怒沼（遠景は根名草山）——武田久吉氏記事參照



シヤスタ山頂の火口壁及び其破片岩——小島水氏記事參照

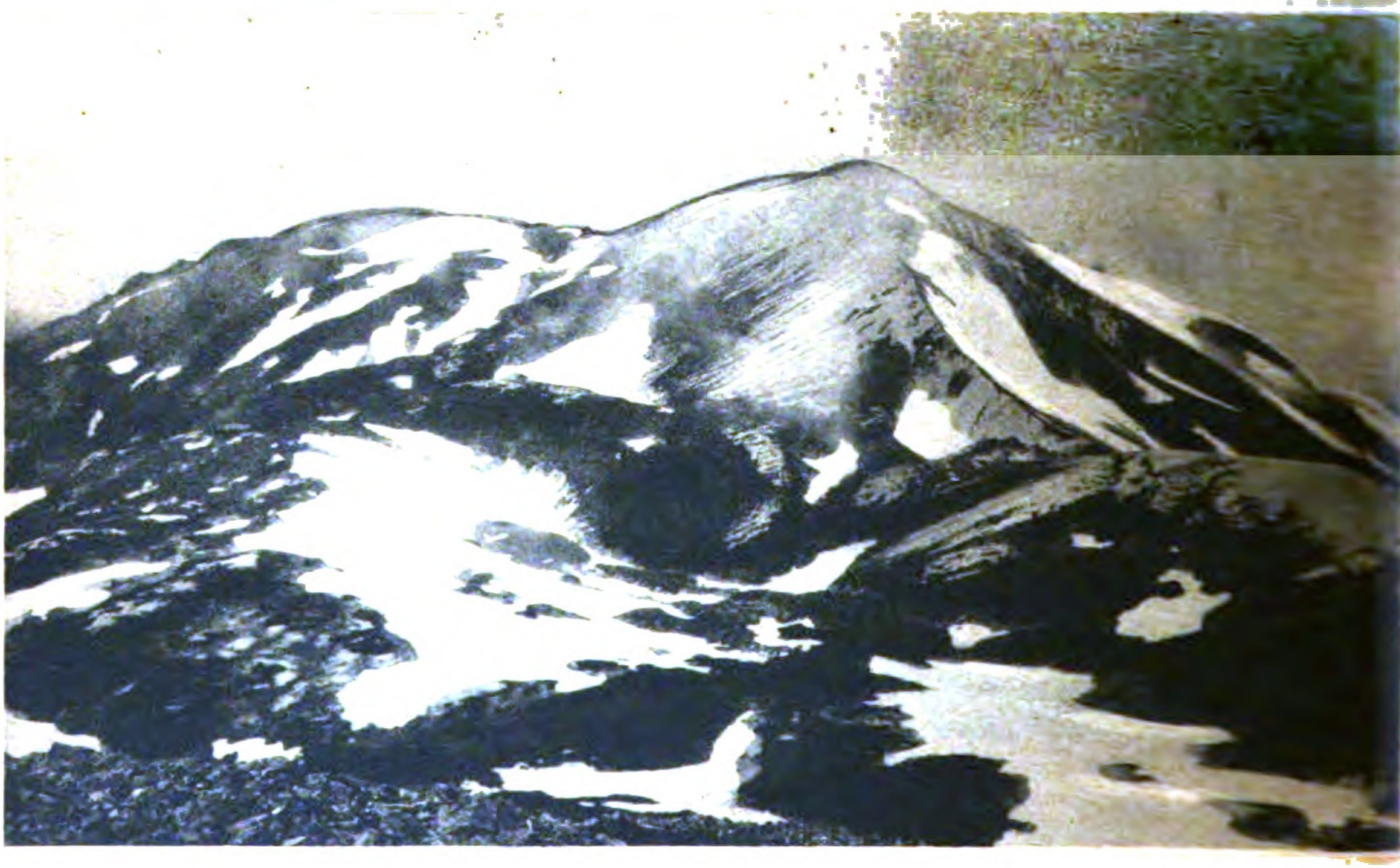




（上）氷雪のシヤスタ休火山

（下）シヤスタ山萬年雪のテーブル・ストン（立てるは小島烏水氏）――小島烏水氏記事參照





（上）朝日岳附近より見たる北アルプスの連嶺（又木周夫氏撮影）
（下）南より見たる雪倉岳（又木周夫氏撮影）——木暮理太郎氏記事參照



間の岳より見たる白峰北岳（山田應水氏撮影）——木暮理太郎氏記事參照

# 寫眞解說

**第一頁　山の春　第二頁　山の夕暮　第三頁　ピッツ・ベルニナ**

山の寫眞家として圖抜けて優れた腕を持つ人としてアルベルト・シュタイナー氏を擧げる事は、アルプや氷河の間を放浪した經驗を持つ何人も躊躇しない事であらう。山の上に特有な空氣の色や香りや肌ざわりを彼程によく掴んで、之をレンズに通して再現した人は少い。特に彼の住むサン・モーリッツの周圍、卽ち、アルペンの中でも特に嬋麗な風物に富むと云はれて居るエンガディンの山々と之をとり圍むアルプの草原や小さい湖、それ等の物が造り出して居る獨特の清々しい世界、それを表現する事に於てシュタイナーは確かに寫眞の世界に於けるセガンチニの地位を占めてゐる。

「山の春」　山はまだ雪がとけてゐないのに下のアルプではもう青草が芽生えて、花が微笑む。

「山の夕暮」　時季は前と同じ頃であらう。セガンチニの繪に之に似た背景が取扱はれて居る。

「ピッツ・ベルニナ」　エンガディンの最高峰（四、〇五二米）である。前の氷河はモルテラッチ氷河。

**第四頁　ラ・グランド・ルイヌとプロモントアールの登山小屋**

屛風の様なメイジュの岩壁にかけられた堡壁の裾にあるプロモントアールの小屋が繪の中央のやゝ下に見える。登攀はその小屋の直ぐ左手におちて居る岩稜に沿ふてなされる。右下の谷はエタンソンの谷である。ラ・グランド・ルイヌ（三、七五四米）とはその形が如何にも偉大なる廢墟を想はせる所からつけられた名前であらう。

**第五頁　十一月の富士**

十一月の正午である。七合五勺の小屋からギラ〱光つて居る斜面に見とれて居るのは三人連れの一人である。氷は此の日中の太陽に少しも溶かされなかつた。

**第六頁　黑部川下廊下の奔湍**

下廊下新越澤落口下流の奔湍であつて、黑部峽谷中最も壯麗なる部分である。上流には新越瀑布三十米突の懸川あり、而して對岸の岩壁は直立三百米突を算す。

**第七頁上段　立山一の越の南望**

立山一ノ越よりの南望にして右より笠ヶ岳、赤牛岳、黑岳、野口五郎岳、三ッ岳、大天井の群峰であつて、中央の遠望は槍、穗高の嵩岳である。（六月上旬）

**同頁下段　劍岳**

立山東面の別米丸山より北望せる劍岳の雄姿であつて左方に丸きは別山である。（六月上旬）

**第八頁　マッターホルンとダンデラン**

均齊の取れた美しい形、ぐんぐんと延びてゐる力强い線、そしてたつたひとりぼっち。朝の光に浮び出て來るマッターホルンを、谷向ふの山から眺めてゐると、心に思ひ得る一番尊いものゝ様に感じられる。ダンデランはマッターホルンの後に續く山で斷崖にかゝる氷が如何にも美しい。

**第九頁上段　ダンブランシュ**

マッターホルンをツムットの山稜から登つてゆくと、ダンブランシュが何時も何時も眞正面に眺められる。山に縱に入つてゐる襞が

心を惹きつける。寫眞の向つて右側の山稜は「國西の鷲鳥の尾根」としてアルプスで有名な登攀のひとつになつてゐる。

**同頁下段　モンテローザ**

眞白に陽の光を反射する氷河に蔽はれたモンテローザの、その所々から眞黒な岩の峰が頭を出してゐる。その白と黒との對照が如何にも純でそして靜かである。

**第十頁上段　上田代から燧ケ嶽**

尾瀬ケ原の東に峙つ火山で、この地方での最高峯（二三六〇米）をなす燧ケ嶽を、原の西端から遠望したもので、前面は上田代と名けられる濕原の一部とそこに立つカラマツの巨樹やシラカバ等。

**同頁下段　尾瀬沼を距てゝ燧ケ嶽**

見所によつて著しく形の變はる燧ケ嶽を、尾瀬沼の東南端から仰いだもので、右端に見える隆起は三角點を戴くマナイタグラと呼ばれる第二高點、上圖の左端に見える最高點シバヤスグラは僅に頭上を顯すのみである。

**第十一頁上段　押出濕原から檜ノ高山**

尾瀬沼北岸に注ぐ押出澤に近い小濕原から望んだ檜ノ高山（一九三二米）で、この西北麓に長藏小屋がある。前景はこの小濕原の一部で、右手には尾瀬沼の一部が見える。左方の高い木はヒメコマツ。

**第十二頁上段　中田代から至佛山**

尾瀬ケ原の西に利根川との境に立つ至佛山は、燧ケ嶽に亞ぐ高峯で二二二八米と測られ利根地方での最高峯である。これを原の中部稍西に寄つた邊から、固定浮島を有する池塘を距てゝ仰いだもの。

**同頁下段　鬼怒沼**

鬼怒沼は海拔二千米以上の地にあつて、黒木立で圍まれた小濕原に大小三四十の池塘を湛えるもので、中でも最大の池を前景として東南に鬼怒川本流を距てゝ根名草山を望んだもの。左の峯が二三三〇米を算する最高點。

**第十三頁　シヤスタ山頂の火口壁及び其破片岩**

シヤスタ山頂火口壁の外輪にして前景は俗に「熔岩の庭園」と呼ばるる破片岩の累積歩行頗る難澁、向つて右の方に比較的近代噴火の跡の「レッド・ブラツフ」なる諸岩あり（寫眞には出でず）寫眞の外輪を越えて絶頂に向ふを常道とす（東側登山口）

**第十四頁上段　氷雪のシヤスタ休火山**

向て右の後部の突起が絶頂シヤスタ・ピーク（一萬四千百尺）にして左のやゝ低き部分はシヤスチナ（一萬二千三百尺）の一部を示す。

**同頁下段　シヤスタ山萬年雪のテーブル・ストン**

氷雪の上に漂石あり、日光を遮りて前後左右の雪融解すれども漂石を戴ける部分殘存して松茸の莖の如き形狀をなす、氷卓とも稱せり。

**第十五頁上段　朝日岳附近より見たる北アルプスの連嶺**

**同頁下段　南より見たる雪倉岳**

此山は白馬嶽の北方一時間程の距離にあり、殘雪と高山植物に富み、就中艶麗なる高根薔薇の偃松中に點綴せるさま、高嶺叢中紅千點とも稱す可く美觀を極む。正面の窪地には小池あり、附近高山植物亂咲す。

**第十六頁　間の岳より見たる白峰北岳**

間ノ岳頂上北東側の大雪田より北面して北嶽を仰ぎ見たもの。頂上の三隆起は右のものが最も高い。中央のものは低けれども大岩塊をなし高山植物の美花繚亂す。左に遠きは甲斐の駒ケ嶽である。

# 某重大事件と政局の展開

いろいろの問題をめぐりて田中內閣に對し我識者の疑惑いよ〳〵濃厚となり、政界ばかりでなく、財界もこれに伴うて不安の度を高め、殆んどその歸趨するところを知らざるものの如くである。就中、滿洲某重大事件、不戰條約問題の如き國際的にその解決を重要とさるるものをいつまでも引きのばしてをるのは我國の國際的立場を不利にし、引いて我國の蒙る影響は經濟的に、政治的に非常なるものであらうことを信ずる。ただ不戰條約問題の如きその關はるところは國體的に大きいものがあるが、それは內田君と外務省の惡意のない手落ちと、無知識から來た錯誤であることはたれにでもほぼ想見さるるところである。この問題を以つて直ちに倒閣の武器となすことは前にものべた通り我我の欲せざるところである。ただ滿洲某重大事件は我々はその眞相を知らない。隨つて國家的にどれだけの重大性が含まれてをるのかそれはわからない。しかし田中首相の解決が一日後るれば、後るるほど疑惑も深まり行くわけで、我國の國際政治上の立場もこれに並行して不利難局に陷る譯である。尙我陸軍威信の損傷は絕對的である。頃者また三土藏相の辭意なるものを聞く。それがホンの噂であるか、眞實であるかは別問題として、とにかく金解禁、地租委讓等々の重要政策を遂行することが不能となつたことを適確に裏書するものであることだけは眞實だ。もしさうとしたら現內閣はこれで存立の意義を全く失つたと見るが妥當である。加之、人心は現內閣を全然離れ、至るところに政局の轉換を切望するものばかりである。田中首相はこれ等の事態を靜觀して政友會更生のために挂冠の一路を選ぶのが上分別だと思ふ。而して後繼として男らしく第二黨の黨首を推挽することが田中君が大きく生きるための唯一の殘された道であり、また政黨內閣制の常道を固くする意味においても當然の措置だと思ふ。いろいろと政友會の內輪のことを考へたり、失脚後の統率のことを案じたりすればそこに非常な困難はあるに違ひはあるまい。しかしこの困難を田中君が押切ることに依つてのみ光明は生れ來るのだ。我々は何も樞府や上院の惡氣流の瀰滿のためにしかく斷言するのではない。我々はいつでも國民的、國家的の高い立場より輿論を正視してゐる。大衆の眞の動きを洞觀してゐる。またこの機に當りて超然內閣の樹立に策動するが如きことあらばそれは永遠に政黨政治の墓穴を掘るものである。乞ふ、先づ英國政局の動きに見よ。某重大事件の解決？　政局の重大な危機はそこに潛んでゐる。



# 餘剰の生産、交換、分配

## =資本主義社會に於ける『共産原則』の展開=

福田徳三

(一)

費用原則と利用原則との對立は、永く我々の經濟學に纒綿してゐる。學問の考察は先づ利用原則に目ざめる。希臘の經濟學は、利用の經濟學であつた。

勞働原則の形ちに於ける費用原則を發見したものは、基督教の教理を以て、アリストテレースを解釋したアルベルトスとトマソとであつた。トマソのニコマケア倫理の註釋は、名は註釋であつて、實は修正であつた。誰人も殆んど氣の付かぬ間に、此の巨匠は、利用原則を費用原則に回轉せしめた。アダム・スミスからマルクスに至る勞働價値論の基礎は、すでに其處に置かれてあつたのである。而して、明瞭に其清算を爲したものは、實にマルクスその人であつた。この清算に於て、マルクスはアリストテレースの價値論從つて其經濟學の全體を、正當に描出し、其根抵を剖すべく努めた。勞働原則としての費用原則

は、明かに利用原則と對立するものなることが、玆に明かにされた。併し、其れと同時に、マルクスは、其信條たる共産原則の實現を遙かに遠い將來へ押しやつた。

費用原則を固守する限り、共産原則は其實現性を失ふ。資本主義社會の本體を暴露する爲めには、費用原則は、最もよく役立つ。しかし其れと共に、唯物辨證法によらざる限り共産原則の展開は、絶望的とならざるを得ない。其反對に、アリストテレースの價値論從つて少くともニコマケア倫理に現はれた其の經濟觀は、共産原則の展開と相容るゝものである。其の所謂流通の正義とは、これを言ひ換へて、共産原則の正義と做すことが出來よう。

『流通社會の任意的取引流通にあつては、報復は人と人とを結び付ける通帶である。即ち、これは、一の比例に基く報復であつて、均等の報酬に基く報復ではない。何となれば、一のポリス（國家、社會）を結束するものは、比例的報酬の原則であるから。……我々は平方形の兩對角の結合によつて、比例的報酬を見出すことが出來る。……若し始めに、兩者の財の比例的均等が存してゐて、而して、これについて相互交換の行爲が起つたのならば、我々が示した通りの結果は、得られるであらう。反對に然らざる場合には、其取引は（始めから）均等でなかつたもので、從つてそれは妥當（有效とありしを斯く改む）でない。何となれば、一方の仕事が、他方の仕事に（價値の上に於いて）勝ることあり得るを妨ぐべき何物も存しないから。從て、兩者は、（先づ始めに）均等に持ち來たされてあらねばならぬのである。醫者と醫者との間には、流通は起らぬ。醫者と農夫との間には、流通は起る。一般に流通は相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから。これ即ち、交換されるものは、すべて、何等かの方法に於いて、通約的でなければならぬ所以である。……すべての財貨は、何か或る一物によつて測られるのでなければならぬ。此の評價の單位は眞實に於いては、需要である。需要は、すべての物を結び付ける（何となれば、若し人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを要することがないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は、成立たないであらうから）貨幣は、（唯だ）便宜上設定せられた、一種の需要代表物である。……すべての貨物は、一定の價格を附與せられてあらねばならぬ。かくてこそ、交換は、常に可能であり、從つてまた、人と人との間に、流通が成立し得るのである。貨幣は、一の尺度として働いて、すべての財を通約的ならしめ、而して、すべての財を均等ならしめる

のである。蓋し、交換行はれざれば、流通は成立せず、均等存せざれば、交換は行はれず、通約性成立せざれば、均等は行はれないからである。さて、眞實に於いて、かく、多くの相異る諸物が、通約的となることは、不可能なことである。乍去、需要の立場から見れば、相應に可能である。(通約には)單位となるものがなければならぬ。而して、其れは合意によつて、定められたものでなければならぬ、』改造拙文『アリストテレースの流通の正義』(其四)八六―八九頁。

需要に對照して通約せられる比例的報復は、單なる均等の報酬であつてはならぬと云ふのが、ア氏の力點を置くところである。比例的報酬の原則は『一方の仕事が、他方の仕事に(價値の上に於いて)勝ることあり得』『從つて、兩者は、(先づ始めに)均等に持來されてあらねばならぬ』『醫者と醫者との間には、流通は起らず、醫者と農夫との間には起る』、『流通は、相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから』『人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを、要することないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は成立たない』といふところの比例的報酬の原則は、費用原則ではない。所謂交換原則でもない。其れは、共產原則の最も早い、而かも或意味に於いては、甚だ徹底してゐる言ひ現はしでなくて、何であらうか。單なる均等報酬の原則と、アリストテレースの名くるもの、其れは即ち費用原則であり、所謂交換原則であつて、ア氏は明かに、其の比例的報酬の原則を、之れと對抗せしめてゐるのである。匡正の正義と分配の正義とを對立せしめ、前者は算術的比例に從ひ、後者は幾何的比例に從ふとし、流通の正義も亦た幾何的比例に從ふものだとしたのは、更らに此の對抗を明瞭ならしめたものである。費用原則は、匡正の正義に屬し、算術的比例に從ふ。共產原則は、流通の正義に屬し、幾何的比例に從ふ。

流通の正義は、單なる利用原則を認むるものではない。其れは、共產原則の展開を許容するものである。此點に於いて現代の經濟理論家中最も深くアリストテレースに通ずるロシアのゲレスノフ氏の說も、未だ說いて精しからざるものと思ふ。『經濟學原論』アルトシュル氏獨譯第二版(一九二八年刊)一九七頁以下、及『社會科學及社會政策集報』第五十卷第一册の其論文『アリストテレースの經濟學的思界』。

マルクスは、たしかに、アリストテレースの論點を捉へた。しかし乍ら、私が嘗て指摘した通り、マルクスには尠からざる誤解が見出される。此誤解が、彼れに累して、彼は、ついに、アリストテレースの流

通の正義の中に、赤き絲の如くに貫通してゐる共産原則を消し去らしめたものと思ふ。否、彼がブルヂオア社會の本體を承諾するに、最も有力なる理論として拉へ來つた費用原則、——勞働價値說——こそ、マルクスを束縛して、此の誤解に陷らしめたものであらうと思はれる。其處には、未だ見出されざる一の深い陷穽があるのであらう。私はマルクスの側からもアリストテレースの側からも、此の陷穽の見出しは、決して怠るべからざる仕事であると信ずる。

## (二)

『各人からは、其能力に應じて、各人へは、其需要（欲望）に應じて』なる『共産原則』は、ひとり、フランスの社會主義の獨占物ではない。分配論を大事そうに取扱ふことを以つて、俗流社會主義を嘲つた『ゴタ綱領批判』に於て マルクスも、亦これを、共産主義の高階段に於ける原則なりとしたのである。而して、此原則は、共産主義の第一期たる過渡時代、、、、、、、、、、に於いては、未だ展開され得ず、其處に於いては『各人へは、其給付に應じて』なる『給付原則』（報復原則）が行はれるにすぎないとする。マルクスはいふ。『茲に我々が考察する社會は、其れ自らの基礎の上に發展したのでない一の共産的社會である。其れは反對に、資本主義社會から發生したものである。即ち、經濟的にも、倫理的にも、精神的にも、何れの關係に於いても、未だ其れから發生し來つた母胎たる舊社會の母斑を以つて纏はれてゐるものである。かるがゆへに、各生産者は、——諸々の差引をした上で——彼が社會に與へたものを、正確に還付して貰ふのみ（△△を附せるは、私の挿入した字句、以下同じ。）である。彼が社會に與へたものは、彼の個人的勞働量である。例。社會的勞働日は、個人的勞働時間の總和から成立つ。各個生産者の個人的勞働時間は、社會的勞働日の中、彼れの提供した部分、其れに於ける彼れの參加分である。彼れは、何程の勞働を給付したとの證明書共（同基本に對する彼れの勞働を控除して）を、社會から受取る。而して、此證明書と引換へに、消費手段の社會的蓄積から——彼れが提供した勞働と——同量の勞働を値するだけを取り出す。彼れは、一の形態に於いて、社會に與へた勞働量と同量の勞働を、他の形態に於いて、還へして貰ふのである。——故に——此場合に於ては、明かに、同一價値者間の交換たる限りの商品交換を左右すると同一の原則が支配するのである。但し、其の內容と形態は異る。何となれば、斯く變化した諸事情の下に於いては、誰人も、彼れの勞働以外何ものをも——社會に與ふること能はず、また、個人的消費手段以外、何ものも、各個人の所有に歸し能はぬから。しかし、消費手段の各個生産者間に於ける分配については、商品等價物の交換に於けると同樣なる原則が

支配する。即ち、一の形態に於けるだけの勞働が、他の形態に於ける其れだけの量の勞働と交換されるのである。……此くの如き進步あるに拘らず、此の平等の權利は、未だ一のブルヂオア的制限を蒙るを免れない。諸生產者の權利は、夫れ〳〵の勞働給付に比例的である。平等は勞働てふ平等の標準を以つて測られると云ふことに存する――のみ――である。……これらすべての缺陷は、資本主義社會から、長い生みの惱みの後、やつと生れ出たばかりの共產社會の第一形相には不可避的なものである。權利は、經濟的形狀と、其れに條件付けられた社會の文化發展以上のものたり能はぬ。――然るに――共產社會のより高き形相に於いては分業の下に於ける個人の奴隷的從屬、其れと共に、精神的對肉體的勞働の對抗が消滅した後、勞働が單に生活の爲めの手段たるのみでなく、其れ自ら、第一の生活欲望となつた後、各個人のすべての側に於ける發展に伴つて、生產諸力が增大した後、而して、團體的富の一切の源泉がより豐かに流るゝとき、此時に至つて始めて狹きブルヂオア的權利水平は全く超越せられ、而して、社會は、其旗の上に『各人は、其能力に應じて、各人へは、其需要(欲望)に應じて』と認め得るのである』『ノイエ・ツアイト』第九卷第十八號五六六―五六七頁。『ドイツ勞働黨綱領標註』(普通『ゴタ綱領批判』と名く。)拙著經濟學全集第五集一一七八頁參照。

約して、これをいへば、マルクスは、資本主義社會の原則を絞取原則とし、第一次共產主義(レニンの解によれば、即ち社會主義)社會の原則を給付報復原則とし、高次共產主義(完全なる共產主義)社會の原則を共產原則なりとするものである。

正統派經濟學は、給付(報復)原則を、現社會の最根本原則と見る。其れは、グスタフ・カッセルの明かにした通り、事實に於いて費用原則である。『理論經濟學の出立點』『國家學雜誌第五十八年度(一九〇二)六六八頁以下。費用原則は、取りも直さず勞働原則であり、同時に所謂交換原則シュムペーターの交換原則と餘剩原則との對立を見よ。であつた。

カッセルはアダム・スミスに據る自由競爭の前提下に於ける價格の成立は三の根抵の上に立つと云ふ。(一)各生產物に對しては、唯一つの價格のみが成立つ(二)其價格は生產費と一致す(三)各生產要因に對しても亦た唯一つの價格のみが成立つ。而して、一方に於いては、すべての有効需要――價格を支拂ひ得る需要――は必ず充され、他方に於いては、また、すべての生產給付は、悉く所要せらるゝ樣に、生產は嚮導せられる。これ即ち『費用原則』なりといふ。同上文六六九頁。かくて需要=供給、價格=費用てふ均衡が成立するといふのが、アダム・スミスの出立點である。唯だ自由競爭が妨げられるとき、此の均衡は

破られる。經濟政策の當爲は、自由競爭を完全ならしめて、此均衡を支持することのみに存する。リカルドは更らに、此の生產費を勞働に歸一することによつて、アダム・スミスの多元觀に纒綿する矛盾と曖昧とを一掃し、費用＝勞働、即、價格＝費用＝勞働なる公式を打建てた。カッセル『リカルドの生產理論と理論經濟學の第一の任務』國家學雜誌五十七年度（一九〇一年）六八頁以下。

マルクスの勞働價値論は、此の正統經濟學の費用原則を拉らへ來つて、逆まに、資本主義社會の本體を暴露したものにすぎない。資本主義社會を事實に於いて支配するものは、絞取原則である。費用原則は、價値の唯一眞實の解釋なりとせられる。此の解釋を、其儘資本主義社會に適用するとき、其處に、資本主義社會の矛盾せる正體は暴露せられる。他の何の解釋を輸入し來る必要もない。資本主義者其人の出立點に立戾りさへすれば、事は足りる。若しもアリストテレースの價値論の如きを拉し來るならば、其れは不可能である。ソコデ、彼は其の等價形原論の條下に、やゝ詳密に、アリストテレース說を商搉して、これを排擊するに力を用ゐたのである。前揭拙文參照　何となれば、アリストテレース氏說は、費用原則に對する一大敵國の觀を有つものであるから。だから、カウツキーはいふ。『事實に於いて、マルクスの價値理論は、社會主義とは、何等相涉るところなきものである。價値の理論は、社會主義の根柢ではない。却つて、今日の資本主義經濟の根柢である。マルクスの價値理論を排擊し得たりとて、社會主義は、爲めに、些も排擊し得られるものではない。此の理論は、我々に、社會主義を敎ゆるものではない。却つて、其反對に、資本主義の運營を理解せしむるものである』『ノイエ・ツアイト』第三卷二八二頁。

マルクスの勞働價値說は、資本主義社會が絞取原則の支配するところなるを示めすには、無二の精銳なる武具であつた。其れが餘りに力强いものである爲めに、甚だ多くの人は、敵の本能寺にあることを見出す能はず、此の前哨を以つて、敵の本營なりと考へ誤り、其攻擊、其排擊の主力を其處に集中した。元より若干の取除けはある。顯著なる例は、オッペンハイマーである。『マルクス社會學說の根本法則』一九〇三年刊　また英國現代の大古典學者たるリンドゼー氏である。『カール・マルクスの資本論』一九二五年。此著は啓蒙的の小冊子であるけれども、中たしかに出色の作である。マルクス評論　多數の人々は、カウツキーの、而してまたベルンシュタインの警告あるにも拘らず、マルクス勞働價値論の排擊に沒頭沒身してゐる。而して、其殆んど何れもが、滿身の創痍を被つて衆人嘲笑の間に、擊退せられた。擊退される筈である。敵の主力は遙か別の處にあるから。河上博士は一九二五年頃福本氏との應酬以來、此の『クラデラッチ』から全く身をひかれた、從て、小泉教授の近時の評論は、『カノナード・インス・レーレ』であつた。

## (三)

併し乍ら、私は、茲に一の他の問題の横つてゐることを見る。搾取社會としての資本主義社會を暴露するに、甚だ役立つた正統經濟學の費用原則は、マルクスをして、餘剩の生産を十分に明かならしむるを得たと同時に、其れを生産の領域に閉ぢ込め過ぎしめた。費用原則を拉へたマルクスは、逆まに費用原則に拉へられた。資本論第一卷對第三卷の矛盾云々の觀察は、餘りにも淺薄である。しかし、其樣な淺薄な觀察を可能ならしめたものは、費用原則の『物神崇拜教』の致すところではなかつたであらうか？

マルクスはいふ。『いはゆる分配なるものを後生大事に取扱ひ、主力點を其上に置くことは誤りである。消費手段の其時々の分配は、生産諸條件其れ自らの分配の結果たるにすぎないものである。生産諸條件の分配は、また、生産方法の一特徴である。例。資本主義的生産方法は次ぎのことの上に立脚する。物的生産諸條件は、資本所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ、他方、大衆は、單に、人的生産條件たる勞働力の所有者たるにすぎざること、これである。生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば、今日の如き消費手段の分配は、當然其から生じ來る。――然るに――物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば、今日のとは異る消費手段の分配は、同じく、當然に其れから生じ來る。俗流社會主義（其の中でもデモクラシーの一部）は、俗流經濟學から、分配を生産方法から引離して、獨立的に考察し、取扱ふことを受け繼ぎ、從つて、社會主義を以つて、主として、分配を中心として回轉するものと說く。眞實の關係が、すでに、久しく明かにせられてゐる今日、何故あつて、再び跡戻りをするのか？』（『ノイエ・ツアイト』第九年度第一卷第十八冊五六八頁。（所謂『ゴタ綱領批判』）

『共產宣言』以來、マルクスもエンゲルスも、生産――而して第二次に交換――のみを經濟生活の本體と見るとは、誰人も一樣に唱へるところである。高田保馬博士『價格と獨占』にも、其れに追從したらしい有力な一論文が見出される。此點から見て改造六月號に揭げられた大熊信行教授の論文は、マルクスに對する理解十分ならざるの嫌あることを免れまい。乍去、我々が耳に『たこ』の生ずるほど屢々說き聞かされるマルキシストの此點に關する力說は、私を以て見れば、却つて、マルクスの眞意を歪めたものではあるまいかと思はれる。マルクスは、右の引用句にいとも明瞭に、生産諸條件の生産先行的分配を說いてゐるではないか。唯だ彼れの俗流社會主義に――而して、俗流經濟學に――責めるところは、『消費手段の其時々の分

配』を、後生大事に取扱ひ、其れが『生産諸條件其れ自らの分配の結果たること』を悟らないことこれである。元より彼は、此の『生産諸條件の分配』を以つて、『生産方法の一特徴である』としてゐる。從つて輕卒にこれを見れば、すべては、『生産』に歸着するが如く考られよう。乍去、『物的生産諸條件は、資本所有並に土地所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ』『生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば』『今日の如き消費手段の分配は、當然其れから生じ來る』といひ、『物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば』『今日のとは異る消費手段の分配は、同じく當然に其れから生じ來る』と、一の疑似曖昧を容れざる斷言を爲してゐるではないか。大熊教授の『配分の原理』なるものは、私は未だ十分にこれを究めず、また理解し得ないものであるが、其れが生産先行的なる生産諸條件――諸要素――の分配を意味するものならば、マルクスは明かにこれを認めるものであり、大熊教授が『配分』と嚴密に區別すべしと主張する『分配』がマルクスのいふ『消費手段の其時々の分配』に當るものならば、教授の嚴密區別論は、此點に於いては、マルクスの贊同するところであらう。

此考察は、若干の吟味を兼ぬるときは、同様にリカルドにも適用し得られるかの如くである。いふまでもなく、リカルドは、『分配』を以つて經濟學の主問題としたことは、其『諸原理』の序文に明かに示されてゐるところである。『土地の生産物――勞働と機械と資本との結合投下に由て、土地の表面より取得らるゝ一切のものは、共同社會の三階級の間に分割せられる。……併し乍ら、社會發達の異なる段階に於ては、地代、利潤及び賃銀なる名稱の下に、是等諸階級の各個に割り當てらるべき土地全産物の比例も、亦た大に異なるであらう。……此分配を左右する諸法則を決定すること、これが經濟學の主要問題たるものである』小泉教授邦譯本三頁。堀教授同上一頁。併し乍ら、カッセル教授のいとも明快に示した如く、リカルドは、先づ地代を生産費以外に驅逐し、利潤を勞銀に還元することによつて、其費用原則を勞働原則に歸一したのである。從つて、此立場より見れば、主要問題たる分配は三階級間の分割としては殘るに相違ないが、『此分配を左右する諸法則の決定』は、勞働原則――費用原則――の一の運用に外ならないこととなり、其れが經濟學の主要問題たる實は、殆んど意味を失つて仕舞つたと云はねばならぬのではないか。

唯玆に、勞賃と平均利潤との問題が殘る。而も、其れは、リカルドにあつて問題たりしのみではない、マルクスにあつても、一の重要なる問題であつたのである。否、堀教授は斷言していふ。『彼(マルクス)

は、リカルドウの學說を十分に理解し、しかも、正當なる論理を以て、之を發展せしめたといふ特徴を有つてゐる。これ、私が、彼れを以つて、勞働價値論の完成者なりとなす所以である。而して、彼れの功績の中、最も大なるものは、勞働價値より生產價格への「轉化」を論じて、リカルドウを、眞に惱ました所の難點を解決したることこれである。かくの如く、マルクスに至るまでのリカルドウの勞働價値論は、或は通俗化せられ、或は變形せられ、或は否定せられつゝ、可なり數奇なる運命を辿り來つたのであるが、惟ふに、それは、リカルドウ自身が、十分に取除き得ざりし「平均利潤」てふ躓き石の存在に基因するものであつた。……最後に、この石の周圍を掘つて、之を沈下せしむることによつて……この難所を平坦ならしむることを主張せる者(マルクス)が勝を制したのである』『リカルドウの價値論及び其の批判史』五七七──五七八頁。因に云ふ、堀教授の此書は、邦文で書かれた經濟學說批判の書(マルクスについてのものまでも含めて)中私が今日まで眼目し得た限りに於いて斷然一頭地を拔くもので、『研究』なる甚だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へずこれを適用し得るものと信ずる。但し所論の內容については、私に異存なきわけではない。

『平均利潤』の謎の解答は、生產の問題ではない、分配の問題である。マルクスが、リカルドを惱ました此問題を解答したことは、たしかに、大なる業績であつた。乍併、其れと同時に『消費手段の其時々の分配』を、經濟學の領域から驅逐すべしとの主張は、其の努力の中に、其影を著しく薄くしたことは否み難い。『資本論』第一卷對第三卷矛盾云々の淺薄な觀察は、其處に惠まれた沃土を見出した。

## (四)

費用原則の上に立つ正統經濟學は、決して、餘剰の存在を無視したものではない。シュムペーター氏が、其昔し、『交換原則』と『餘剰原則』とを對立せしめた立論は、若き日に於けるシュムペーター其人の如何に、其時すでに優秀なる理論學者たりしかを僅に示めした所以であらうと思ふ。カウツキーはいふ『マルクスは、餘剰價値の本體を發見したものではない。アダム・スミス以來、誰人も眞面目に、經濟學を學んだ人ならば、餘剰價値の存在することを知つてゐる。乍去、マルクスは、餘剰價値は、其れが生產せられるとき、すでに成立するものなるを示めした第一人者である。此れによつて、餘剰價値は、資本主義的生產方法を理解すべき鍵となるを得たのである』『ノイエ・ツァイト』一八八六年一五五頁。

餘剰價値の生ずる源は、生產先行的なる生產諸條件の配分の中にすでに存してゐる。其れが、生產せられるとき、すでに成立する所以は、

勞働力の賣買』てふ交換過程によつて說明される。エンゲルスは『資本論』第二卷の序中にいふ『ラヴォアシエーがプリーストレー及びシエーレに於ける關係は、マルクスの餘剩價値理論の諸先輩に於ける關係である。我らが今餘剩價値と名くる生產物價値部分の存在は、マルクス以前すでに久しく確認されてゐた。同樣に、何から其れが成立つか、卽ち其れは、勞働の生產物から成立ち、其れに對しては、其收得者は、何等の對價を支拂はぬものであることも大なり小なりの明暸さを以て主張されてゐたのである。……彼れ（マルクス）は、貨幣の資本への轉化を研究し、而して、其れは、勞働力の賣買に存することを證明した。彼は、玆に、勞働力卽ち價値創造的性能を、勞働に代位することによつて、リカルド學派を斃した困難卽ち、資本と勞働との相互交換をリカルドの勞働による價値決定の法則と一致せしむるの不可能を一擧にして解決したのである。……一の價値を有するものは勞働ではない。……商品として買はれ而して賣られるものは、勞働ではなく、勞働力である』序の二一—二二頁。

乍併、マルクスの此發見は、割合に永い時間を要した後、完成したものであつて、其以前には、此點についての彼の說は、甚だ不徹底のものであつたことは、周知の事實である（私が嘗て河上博士の『勞賃と資本』の第一邦譯に對して妄言を敢てしたのは、此顛末の重要性を明かにしたい爲めであつた、幸に河上博士は、拙言を忝く容れて、其邦譯を改められた。回顧すれば、其は一昔前のこととなつた。）他方に於いて、リカルドは、必ずしも、此點について、全く何事もなさなかつたものでないことは、關教授の力作これを詳細に論究して、殆んど遺憾ない。此一事だけを以てしても、私は關教授の純一無雜の研究者としての態度に深厚なる敬意を捧げざるを得ない。乍去、マルクスの透明は、たしかに、前人未踏の分野を開拓したものであつて、關教授の詳論を以てしても、リカルドにまつはる陰影は、これを一掃することは出來ない。

併し、玆に、私は公平無私なる諸研究者に一考を煩したい。賣られ而して買はれるものは、勞働にあらず、勞働力であるといふことは、生產過程に於ける問題ではない。其れは、交換（賣買）の問題である。無論其の賣買は、資本主義的生產方法の一特徵たるに相違ない。しかし、其特徵を成立せしめたものは、生產に先行する生產諸條件の分配關係これである。

かくてエンゲルスが、リカルドが之を解き能はずして斃れたと云ふ二つの難問の解答は、何れも、生產方法の上に於いて與へられず、交換及分配過程の中に於いて與へられたのである。二つの難問とは、

（一）『生きた勞働の一定量の價値たる勞賃は、常に生きた勞働の此の量によつて生産せられる生産物の價値より小である』（二）『同一額の資本は其適用する生きた勞働が如何に多くとも少くとも、同一時間には、平均的に、同一の利潤を生産する』これである。（一）は、勞働力の賣買を以て、（二）は平均利潤率の謎の解答を以つて、解かれた。二つの解答、其何れもが生産方法の上に於いては、與へられてないのである。解答の場面は、明かに流通行程の上に置かれてある。

餘剩は、生産方法の對象たるのみに止まらない。生産先行的なる分配過程の内に、すでに孕まれて居り、生産直前に於ける、勞働力の賣買てふ交換過程の中に、はぐくまれてゐる。其生れ出づるは、資本主義的生産過程の中にあるには相違ないが、生れたものは、其瞬間に成立したものではない。出生は、唯一つの『ツギャシエン・フオアガング』である。而して、人は木の股からは生れず。

商品の解剖を以つて、資本主義的生産の考察を始めるは、價格經濟學に取つては、而して、殊に費用原則を固守する限りは、正しい。併し、其れは、唯一の出立點ではない。

## （五）

資本主義社會の實體を暴露するに、費用原則は役立つ。甚だ役立つ。併し乍ら、然る限り、費用原則と利用原則との葛藤から脱出することは出來ない。ボエーム・バヴエルク教授の研究室へ學問的スパイとして這入り込んだブハーリンが、利喰經濟學に向けた嘲笑は、唯二三十冊の本を讀んで、價値論を知り得たりとする人々の耳には、痛快に響く。しかし乍ら費用對利用原則の『クラデラッチ』は、其の爲めに、些も釋け能ふものではない。

ロバート・リーフマンが出生作たる『主觀的評價よりする價格の成立』は不遇の作であつた。しかし、私は其中に一の大きなものあるを見出した。氏の其自傳に於ける私に對する感謝は私は心から喜んでこれを拜受する。餘剩原則の確認は、即ち其れである。其れは、エンゲルスの言葉を借りれば、一のラヴオアシエー的回轉であつた。氏の其後の作は、今言及せず。

資本主義社會に分配の問題の存するは、否、抑も我が學に分配の問題の存し、深き洞察者リカルドが、其れを經濟學の主要問題——私は、あへて中心問題と云ふ——としたのは、餘剩原則こそ、資本主義社會を支配する根本原則であるからである。費用原則でもない、利用原

問でもない。だから、リカルドは、分配の問題は、其の勞働價値說と無關係に說き得るとさへ斷言したのである。日く、『これを要するに地代勞賃並に利潤の諸大問題は、全生產物が、地主、資本主、及勞働者の間に分配せらるゝ比例によつて說明せられねばならぬ。而して、此比例は價値の理論と、本質的に結び付いてゐないものである』（マカロックへの書簡集七二頁）

此一節こそトウガン・バラノフスキーが其の無價値的分配論、極力分配論の出立點としたものである。（猶後段參照）唯だリーフマンの如く──而して私が長く賛同しつゝあつた如くに──此餘剩を、利用と費用との較差などと見てゐては發見以上一步も進出するとは出來ぬ。發見せられた餘剩原則は、更らに、更らに尋究せられねばならぬ。而して其の眞の所在を見究めねばならぬ。其眞の見究めはこれを資本主義社會に於ける共產原則の展開にまで、導くものでなければならない。

資本主義社會は、所得獲得社會である。何となれば、それは餘剩の分配によつて、活き而して發展して行く社會であるから。餘剩のなきところ、餘剩の分配のなきところ、所得の問題は存し得ぬ。單なる『消費手段の其時々の分配』は、決して適當の意味に於て云ふ分配の問題を提供するものではない。ジエ・エー・ホブソンが、發展なき假定社會には分配の問題なしと斷言せるは、今猶私の耳朶に鏘々たる響を殘してゐる。（『產業組識』第一版（一九一〇年刊）に於いて。猶一九二七年の其第二版をも見よ。一九二六年私は倫敦に於て氏と會することを榮としてゐた。エコノミスト誌の主筆ハースト氏は私の意を諒として氏を招かれた。不幸にして、氏は病ありて來會せられず、私は其の夫人と長時會談した。夫人亦一個の經濟學者である。私は、ホブソン氏に傾れる所以を述べた。夫人卽ち諄々として、良人の持說を布演して敎へられた。茲に一言して深き敬仰の意を新にしておく。）費用原則や利用原則の立場に立つ限り、其の經濟理論は永に、眞の分配問題──異なる比例にあらざる──の全く存せざることは、其原則の假定の上に立つ發展なき產業社會に分配の事實の存し得ざるに同じ。マルクスが、此理を道破したことは、其一事だけを以てして千古の卓見なりと云はざるを得ぬ。マルクスに少しもかゝはることなく、同じ洞察に到達したホブソン氏を私が現代英國理論家の第一位（ホートレー、ピグー兩氏と並べて。而して、ケーンズ氏などは與らす。）に置く所以は、其處にある。

餘剩の原則の上に立つ資本主義社會にして、始めて眞の分配の問題は起る。其れは、『消費手段の其時々の分配』と斷然混同すべきものではない。資本主義社會は、餘剩の生產交換分配の社會である。言を換へて云へば所得中心の社會である。階級の本質は、此所得の性質に存する其の多寡に存するのではない。（其昔し河津河田其他諸博士に對して私の論じたところ、社會政策學會論叢にかゝげあり。）所得の性質とは、卽ち、マルクスの所謂『生產方法』に對向するものである。其れを名けて、眞の意味に於ける『分配』といふのである。資本主義社會にあつては、欲望充足の行爲は、決して、經

濟行爲ではない。欲望充足の準備行爲、準備行爲の中、所得の配分大熊教授の語を借用すればにかゝはる商量、適合の計慮的合理行爲こそ、經濟行爲である。マルクスの口吻を單に模して、經濟行爲は生産行爲なりとするはマルクスの意を裏切るものであつて、而して資本主義理論としては、沒理に墮するものである。言葉の整頓は、思想の困迷を掩ふことは出來ぬ。所得にかゝはる商量適合の計慮的合理行爲は、略して、これを所得行爲（アーニング、アクチヴヰチース）と名け得る。其れが卽ち經濟行爲の全體である。私の『敎科書』に於ける記述は、此意味を不十分にしか述べてゐない。

資本主義社會にあつては、物は保持せられず、所有せられる。所有も亦た、『エルヴエルブ』の故を以て、所得行爲であり、從つて、經濟行爲である。勞働も亦『エルヴエルブ』曾て當時新進の某博士の經濟卽所有云々の論に接して私信を以て『エルヴエルブ』の考察缺く可からずと開陳した。答書に曰く『私は『營利』を所有と同樣に考へたくありません』と。博士は、『エルプエルグ』てふ、ブュクセンシュッツ以來の成語の其の格段の意味をすら、知らなかつたのを見出して、私はついに對論を斷念した。事は、數年の昔に屬する。今は、學ばれたであらう？たるの故を以て、經濟行爲となる。否、否、貨幣も亦『エルヴエルブ』の故を以て、經濟圈内に入り來る。左右田博士の貨幣概念文化價値の說に、私が如何にしても、追從する能はざりしは、これが爲めである。私は問ふた。何故に、同じ樣に、所得概念文化價値を主張し得ざるやと。アモン氏も亦問ふた。何故に資本概念文化價値を主張し得ざるやと。これはアモン氏の處女評論であつた。私は其時すでに同氏の輕視するを許さゞる理論學者たるを知つた。今や我々の質問は、永じなへに、其答を得るの機會なくして已む。地上に於ける其墓未だ成らざる故博士の爲めに、學問上の業を建つる人は誰れ。吁 經濟行爲は、欲望充足行爲にあらず、欲望の經濟的充足行爲なりと言つた其昔しのオッペンハイマー氏は、此消息を半ば解して終んだものであらう。

價格を以て理論經濟學の中心問題とするは、費用原則又は利用原則のみの上に立つブルヂオア學としては、正しい。人間の厚生經濟學としては、唯一つの便法たるにすぎない。マルクスは町人の經濟學を以て町人經濟社會の實體を痛快に暴露した。然し、後には、其便法の爲めに甚しい不便に遭遇した。餘剩原則の上に立ち、而して、資本的生産方法の下に、共産原則を展開しつゝある資本主義社會の實體は、かくして唯其一つの姿を現はしたにすぎない。

我ゝは所得を以て生きて行く。我資本主義社會は、生産に先行し、更らに生産諸條件の分配に先行する、この所得の分配によりて、維持せられ而して發展して行く。價格は此所得を決定する一の道具たるのみ。道具の吟味は肝要である。然し、其れは畢竟道具の吟味たるに止る。其以上の何ものでもない。我ゝの經濟的存在に取つて、而して其を通して、我ゝの眞の生存に取つて、意味を有つものは、獨り所得である。價格ではない。價格は意味を有つものゝ、其意味を測るメートルに

ぎない。所有も、貨幣も、我々の經濟生活に取つて、眞の意味を有つものではない。其れは、所得の形成上の現象態たるに外ならない。

だから、資本主義社會の止揚は、所得の止揚でなければならない。所得の存在にして、今日の儘なる限り、資本主義社會は止揚せられ能はぬ。從つて、資本主義社會の眞の檢討は、所得の檢討であらねばならぬ。商品の解剖、價格の吟味は、其れが所得の檢討に役立つ限りに於てのみ、意味を有つ。其以外には、一の意味をも有つものではない。リカルドが或は蹟いたと云はれ、或は斃れたと云はれるところの難問を、釋いたマルクスは、其れをリカルドが提出した姿に於てゞなく、所得の生産、交換、分配の問題に轉化するによつて、成し遂げたことは、我々をして、反省せしむ可きではないか。

所得は貨幣の一定額を以つて言表はされる。しかし、其れは云ふまでもなく、名目所得である。眞の所得は、其貨幣額の購ひ得るところのものである。發展なき社會——人口數、需要、生産方法に異動なき——を假定すれば、一定時期に於ける所得とは、消費の爲めに生産せられ、而して其一定期間に於いて、消費者に引渡される一切の貨物及び勤勞の總量であらう。但し其外に、物的生産要素の消耗補塡に當るものは生産せられなければならない。此補塡を差引いた殘餘について云へば、生産=所得=消費となる。而して、貨幣の流通額は、此の生産額=所得額=消費額と、正確に一致するであらう。一社會の眞の所得は、消費者の手に引渡された貨物及勤勞の總量であると云ふことは、貨幣所得の受取者が消費の爲めに購つた貨物及勤勞の總量であると云ふことと同一となる。更らに詳しく云へば、勞賃、地代、利潤等の形に於いて支拂はれた貨幣所得の總和は、消費用の諸貨物及び勤勞を購ふに費される。從つて、其處には、貯蓄と云ふことは起らぬ、起り得ぬ、また起る必要もない。從つて眞の意味に於ける所得は存せぬ。眞の意味に於ける分配の問題は見出し能はぬ。アダム・スミスが、需要=供給の均衡を破る除外例として認めた(一)技術及需要種類の變化(二)市場の景氣變動の二つは、發展なき經濟社會の前提によつて、之を考慮の外に置き得るとしたのは、理論的研究として許されたことである。 カッセル『理論經濟學の出立點』前掲所六七〇頁。

現實の資本主義社會は、無論これとは異る。 シュムペーター『經濟發展の理論』第一版及第二版共に。 其處には、人口の増加がある。消費程度の向上がある、生産技術の進歩と變遷がある。増加する人口の需要に應ずる爲めには、より多くの生産物が生産せられなければならぬ。即ち社會の生産は、其す

べてを通じて、生産手段の増加を要求する。増加する人口の求めに應じてより多くの商品が賣られ得る爲めには、其れに先つて、生産行程の各階段に於いて、より多くの資本、より多くの勞働が具へられてあらねばならぬ。其れを爲すの道は唯一つあるのみ、社會の貨幣所得の全額を産業行程の終末に於いて、消費用の完製品を購ふに、用ひ盡さず、其或部分を割いて、生産の各部面に亘りて、より多くの生産設備、より多くの機械等を作る爲めに、勞働者に支拂ふ可く充用せられねばならぬ。また、此の増加した資本を各種の生産行程に於いて、原料の加工精製に充用せねばならぬ。かくて、消費者に賣らるべき商品の量は、より大なるものとせられなければならぬ。發展なき社會に於いては、社會に流通する貨幣の全額は、生産行程の各段階に於いて、生産行爲を活かし、動かすことによつて、貨物の消費への進行を促しつゝ、全行程を通じて流通し行つて、其終末に及んで、生産品の一切を購ふに充てられ終る。支拂はれたる貨幣の全額は、生産せられ而して消費せらるゝ商品の全價と全く一致する。販賣者が受取りたる貨幣所得の全部は、再び同一の行程を繰返すことに當てらる。かくて、限りなき循環が繼續する。

現實の資本主義社會に於いては、左樣ではない。其受取らるゝ貨幣所得の或ものは、生産行程の進行中處々の關所に喰ひ止められる。喰止められた貨幣所得は、其場所に於いて、從前の生産活動を維持するに要するよりより以上に、生産を促進する用に充てられるのである。だから、此の二つの流れを、マルクス流に表示して見れば、發展なき社會に於いては、

$$G-W-G$$

であるが、發展する資本主義社會に於いては、

$$G-W-G'$$

$$(G'=G+\Delta G)$$

である。

發展する資本主義社會に於ける最終の購買者(A)——最終の貨幣所得收得者——は、發展なき社會に於ける同一假定の場合に比しては、より少き貨幣所得しか收得しない。從つて、彼れは、其次の貨幣所得收得者(B)に對しても、より少き貨幣額をしか支拂ひ得ない。(B)はまた、其次の貨幣所得收得者(C)に對しても、同樣である。かくて、全産業行程に亘つて、より少き貨幣所得の額しか流通せぬこととなる。これは最終段に於ける商品の消費量の減少の作用である、其減少額は、即ち貯蓄せられたと云はれる。貯蓄せられたとは、貨幣所得の促進作用を全く停止することの謂ではない。其れは、消費者の手に商品の移り

行く階段に於いて、商品に對する需要に對して此の促進作用を及ぼすことを停止するの謂に外ならぬ。　パレト『マヌアール』(一九〇九年刊)第九章四三八頁以下。佛譯では、四五九頁以下。ベンフヰールド『産業組織四講』(一八四五年)。ホブソン『産業組織』一九二七年改訂版三九頁以下。

消費者の商品に對する需要額の減少は、生産全行程の進行中、何れかの一又は數階段に於いて、誰人かゞこれを餘儀なからしめたものである。其れは、需要の全體を減少するのではない、最終階段に於ける商品需要を減少するのである。此の減少は、其の先行過程中の或る一又は數階段に於ける需要の增加となつて現はれてゐるものである。需要全體として見れば減＝增、何等の差違はないのである。唯だ價格經濟學に於いては、最終階段に於ける商品需要を需要と見ることに限らるるにより、一般に此れを需要の減少と稱するにすぎない。マーシアルは消費者需要と『トレーダース・デマンド』とを區別した。其れは、價格經濟學の中にあつては、實に卓越した見解と云はねばならぬ。

最終段の商品需要の促進から取り去られた貨幣所得は、生産行程の何れかの階段に在つて、依然として其促進作用を營む。其れはひとり、或る與へられた商品其ものゝ生産行程の上に限られない、幾多の旁系行程へも押し進み行く。諸價格相關の理は、近頃カッセルの力を置いて說くところである。諸所得相關の理に至つては、未だ斯くの如き力說者を見出し得ない。　諸價格相關の理についーは、私の『教科書』中の其節。

發展なき社會にあつては、資本に向けられる生産活動は、唯だ其の消耗を補塡することに止る。　マルクスの『不變資本』!　これは、決して貯蓄ではない。發展する經濟社會に於いては、生産活動は、より多くの資本を作り出すことに向けられる。其れは既ち貯蓄である。　ロバート・リーフマン『貯蓄の理論』シュモラー年報掲載　現代の流通社會にあつては、消費は所得を以て消費品を備ふことを意味する。貯蓄は、所得を以て、生産財を購ふことを意味する。消費は商品の生産を促し、貯蓄は資本の生産を促す。消費の節約とは、需要の節約ではない。唯其の充用階段の轉化を意味する。乍去、所得は、如何なる場合にも之れを貯蓄することによりて、より多くの用を爲し得るものと考へてはならぬ。發展する社會は、これなき社會に比して、貯蓄の彈力性を著しく多く有つには相違ない。然し其れは無限なるものでもなく、また如何なる場合にも用あるものでもない。其處に必ず限度あり、其處に必ず選擇あるを要する。大熊教授の所謂『配分の原理』なるものが、此事を意味するならば、其れは正しい。マルクスの所謂『社會的必要勞働時間』の考へ方は、玆に甚だ深き洞察を與へる。社會的に必要な貯蓄のみが、眞の貯蓄である。『社會的に必要』といふことが曖昧なりと難ずる人は、先づマルクスについて、『社會的に必要な勞働時間』の曖昧なりや否やを吟

秀子集　チンピラ探偵　浮かれてゐる隼
隼の勝利　隼の解決　濱のお政　隼登場
隼の萬引見物　隼のお正月
四郎集　彼が殺したか？　悪魔の弟子　黄
昏の告白

## 第一七篇　長谷川伸集　山本禾太郎集

伸集　舶來巾着切　掏摸の家　その他
禾太郎集　童貞　ぼんぷの箱　當選美人の
死　小坂町事件　閉鎖を命ぜられた妖怪館
窓

## 第一八篇　國枝史郎集　渡邊溫集

史郎集　沙漠の寶庫　奥さんの家出
その他
溫集　少女　譃　風船美人　赤い煙突　戀
勝敗　遺書に就いて　兵隊の死　父を失ふ
話　シルクハット　可哀想な姉

## 第一九篇　牧逸馬集　城昌幸集

逸馬集　釘抜藤吉物語　水晶の座　死三題
百日紅　一九二七年の出來事　幽明　民さ
んの戀　舞馬
昌幸集　その暴風雨　怪奇の創造　都會の
神秘　神ぞ知食す　切札　殺人淫樂　チャ
マイカ氏の實驗　シャンプオオル氏事件の
顚末　祕密を賣られる人々　妄想の囚虜
鑑定料　寶石　月光　晶杯　七夜譚　東方
見聞　薄暮　運命の拋物線　不思議

## 第二〇篇　佐藤春夫集　芥川龍之介集

春夫集　指紋　陳述　發見　家常茶飯　女
誡扇奇譚
龍之介集　開化の殺人　開化の良人　妙な
話　黒衣聖母　影　奇怪な再會

マルクス＝エンゲルス全集第十一巻

# 剩餘價値學說史 第三卷

第八回配本

五月下旬

久しく待たれたる剩餘價値學說史第三卷出づ。本學說史は實に『資本論』の第四卷とも見るべきもの。在來の諸經濟學說に對する批判の形式を具備し、經濟學の中心問題たる剩餘價値に關する詳細なる歷史的硏究にその重點を置く。謂はばマルキシズムの經濟學史的理論として重要視せらるゝ書である。譯者はそれぐ斯界の俊豪、蓋し本全集中の壓卷である。（六百頁）

（目次一斑）

第一章 トマス・ロバート・マルサス―第二章 リカード學派の解消―第三章 經濟學者に對する反對論―第四章 ジョージ・ラムゼイ―第五章 シェルビュリエ―第六章 リチャード・ジョーンズ―第七章 利潤利子および俗流經濟學―附錄

次回配本豫告 第三卷

（イギリス勞働階級の狀態。哲學の貧困。以下十數篇）

約五百八十頁 目下印刷中

東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番

POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.



株式會社秀英舎印刷

KAIZO

# 改造

七月號

山岳特輯

1929

「超人子規」の藝術を讀まずして誰の藝術に就く

# 子規全集

## 子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の園圃より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて淸節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虛飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八卷は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

（內容見本進呈）

## 子規の藝術を仰げ

1 俳句全集（第一卷）
2 俳句全集（第二卷）
3 俳句全集（第三卷）
4 俳論及俳話（上卷）
5 俳論及俳話（下卷）
6 歌論歌話及評論
7 和歌、新體詩、漢詩
8 隨筆（上卷）
9 隨筆（下卷）
10 小說、紀行、小品
11 少年時代創作篇（上卷）
12 少年時代創作篇（下卷）
13 編著（上卷）
14 編著（下卷）
15 書簡（上卷）
16 書簡（中卷）
17 書簡（下卷）
18 未發表作品及年譜、藏書目錄

第一回配本 隨筆篇（上卷）
仰臥漫錄・病牀六尺・松蘿玉液・墨汁一滴・堂々五百七十四頁

全十八卷 一冊壹圓
一時拂 七十圓
〆切 七月二十日

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社



# 改造七月號目次

普及版

佛國 ブーリエンヌ著
文學士 栗原古城譯

三版

# 奈翁實傳

本書が材料の豊富と記事の徹底とを以て古今第一のナポレオン傳として定評あり、原著者は幼少の頃より奈翁の親友で公私内外の樞機に參劃した人。カーライルやエマーソン等の奈翁に關する評論なども主として材料を之に採つたと云はるゝもの。**本書を讀まずして奈翁を語るべきでない。**

菊判紙表紙美本
九百五十頁
寫眞挿畫五葉入
定價 貳圓六拾錢
送料―内地十八錢 其他五十五錢

十三版

獨逸 ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

# 宇宙の謎(ナゾ)

著者は近代獨逸に於ける科學界の最大大家で、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるゝ人。**原著は發賣後本國にて數十萬部、**英譯のみにて**十四萬部を賣盡**したといふ程の世界的名著。譯筆の明快は云ふ迄もない。

四六判總布製
定價 參圓
郵税十二錢

四版

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯

# 人生達觀

最高等の占ひであり、豫言であるのは**偉大な哲學者の人生觀**である。本書は人間を達觀せる偉大なる哲學者ショーペンハウエル氏の人生觀で、街も**人生の眞相、人生の歸趨**を知らんとする讀者に取つてはこれ以上のものはない。

四六判總布製
定價 貳圓七拾錢
郵税十二錢

東京本郷西片町 玄黄社
振替東京七九九五番
電話小石川一三九番



山の春（アルベルト・シユタイナー撮影）——松方三郎氏藏



山の夕暮（アルベルト・シュタイナー撮影）——松方三郎氏藏



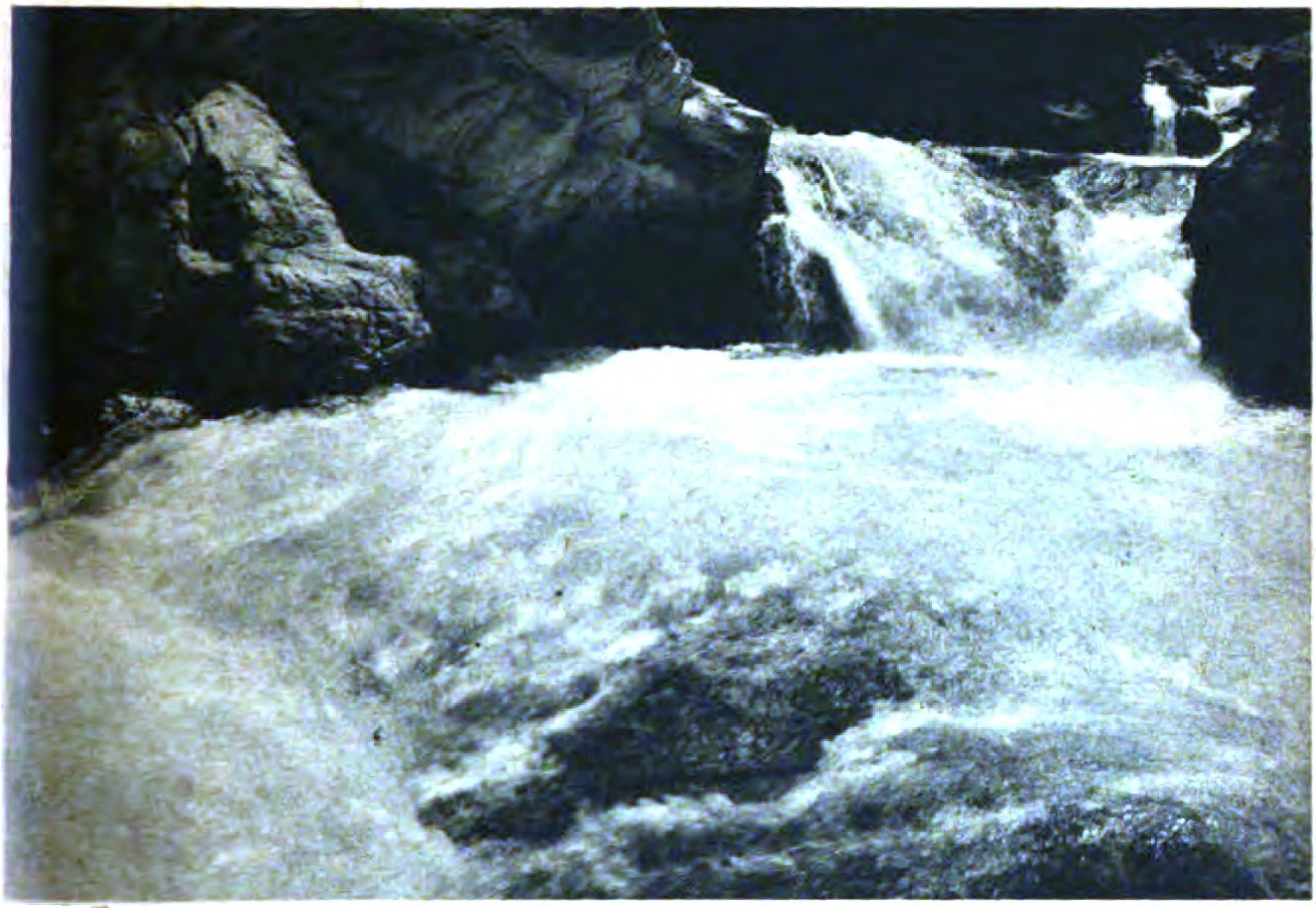
ピツツ・ベルニナ(アルペルト・シユタイナー撮影)——松方三郎氏藏



ラ・グランド・ルイスとプロモントアールの山小屋——松方三郎氏記事參照



十一月の富士山(七合五勺)——槇有恒氏記事參照



下廊下の奔湍（黑部川）——冠松次郎氏記事參照





(上)立山一の越の南望

(下)劍嶽(丸山より)——冠松次郎氏記事參照



マツターホルンとダンデラン —— 浦松佐美太郎氏記事參照





(上) マツターホルンより見たるダンブランシユ

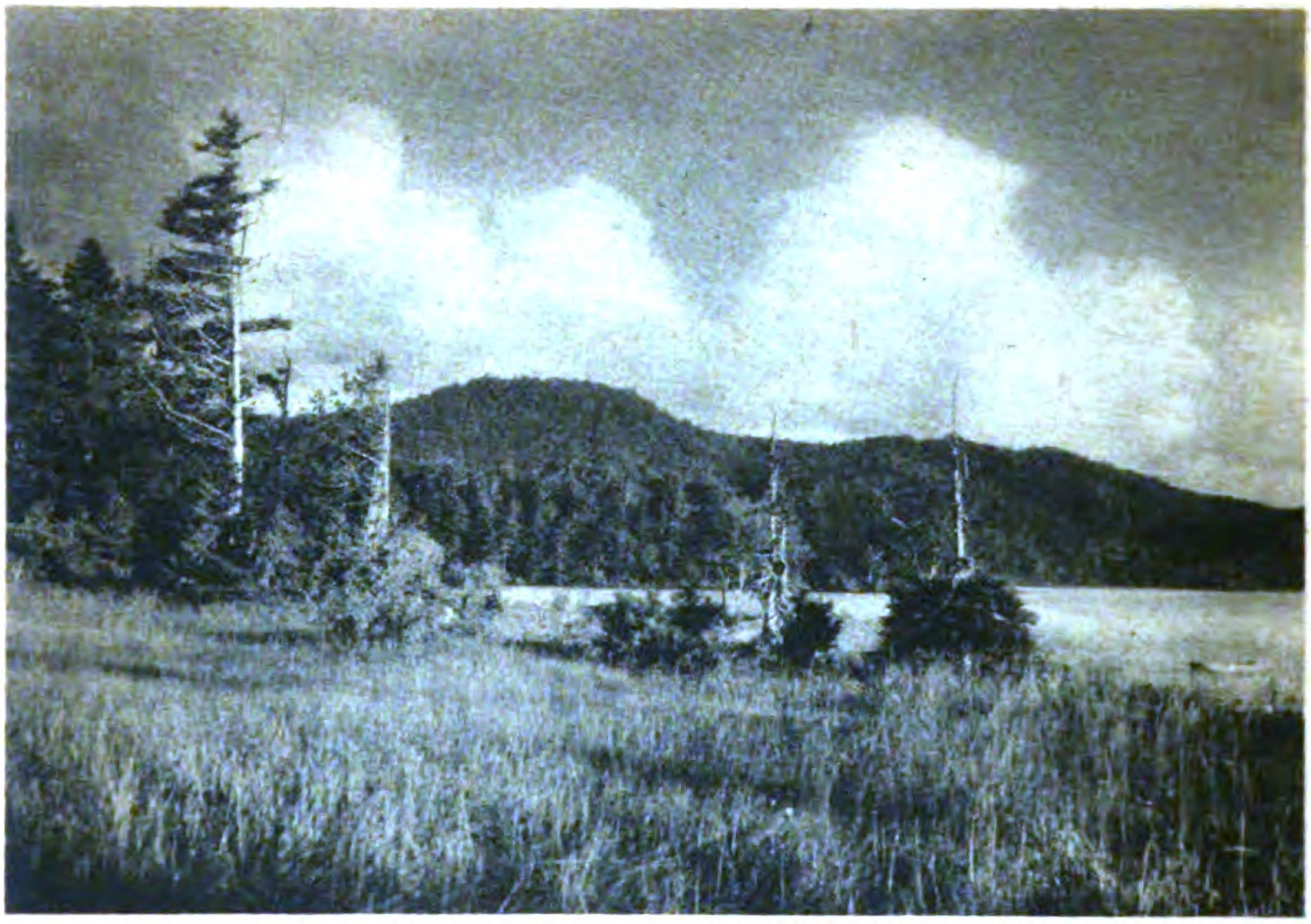
(下) モンテローザ —— 浦松佐美太郎氏記事參照





（上）上田代から燧ケ嶽

（下）尾瀬沼を距て燧ケ嶽——武田久吉氏記事參照





（上）押出濕原から檜の高山

（下）白砂濕原——武田久吉氏記事參照





（上）中田代から至佛山

（下）鬼怒沼（遠景は根名草山）——武田久吉氏記事參照



シヤスタ山頂の火口壁及び其破片岩——小島烏水氏記事參照

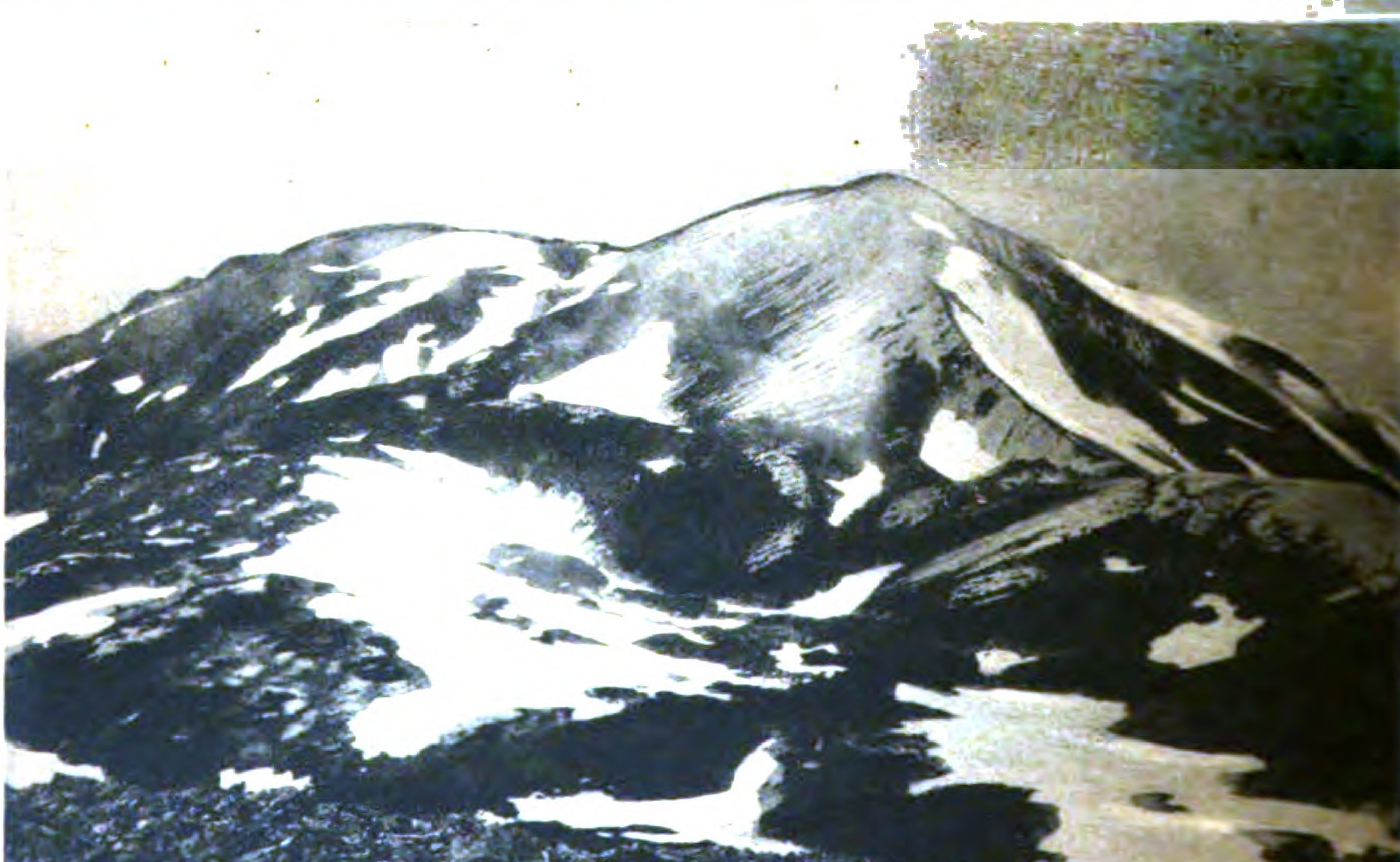




（上）氷雪のシヤスタ休火山

（下）シヤスタ山萬年雪のテーブル・ストン（立てるは小島烏水氏）——小島烏水氏記事參照





（上）朝日岳附近より見たる北アルプスの連嶺（又木周夫氏撮影）
（下）南より見たる雪倉岳（又木周夫氏撮影）——木暮理太郎氏記事參照



間の岳より見たる白峰北岳（山田應水氏撮影）——木暮理太郎氏記事參照

# 寫眞解說

**第一頁 山の春 第二頁 山の夕暮 第三頁 ピッツ・ベルニナ**

山の寫眞家として圖拔けて優れた腕を持つ人としてアルベルト・シュタイナー氏を擧げる事は、アルプや氷河の間を放浪した經驗を持つ何人も躊躇しない事であらう。山の上に特有な空氣の色や香りや肌ざわりを彼程によく握んで、之をレンズに通して再現した人は少い。特に彼の住むサン・モーリッツの周圍、卽ち、アルペンの中でも特に綺麗な風物に富むと云はれて居るエンガディンの山々と之をとり圍むアルプの草原や小さい湖、それ等の物が造り出して居る獨特の淸々(すが)しい世界、それを表現する事に於てシュタイナーは確かに寫眞の世界に於けるセガンチニの地位を占めてゐる。

「山の春」 山はまだ雪がとけてゐないのに下のアルプではもう靑草が芽生えて、花が微笑む。

「山の夕暮」 時季は前と同じ頃であらう。セガンチニの繪に之に似た背景が取扱はれて居る。

「ピッツ・ベルニナ」 エンガディンの最高峰(四、〇五二米)である。前の氷河はモルテラッチ氷河。

**第四頁 ラ・グランド・ルイヌとプロモントアールの登山小屋**

屏風の樣なメイジュの岩壁にかけられた傑壁の裾にあるプロモントアールの小屋が繪の中央のやゝ下に見える。登攀はその小屋の直ぐ左手におちて居る岩稜に沿ふてなされる。右下の谷はエタンソンの谷である。ラ・グランド・ルイヌ(三、七五四米)とはその形が如何にも偉大なる廢墟を想はせる所からつけられた名前であらう。

**第五頁 十一月の富士**

十一月の正午である。七合五勺の小屋からギラ〱光つて居る斜面に見とれて居るのは三人連れの一人である。氷は此の日中の太陽に少しも溶かされなかつた。

**第六頁 黑部川下廊下の奔湍**

下廊下新越澤落口下流の奔湍であつて、黑部峽谷中最も壯麗なる部分である。上流には新越瀑布三十米突の懸川あり、而して對岸の岩壁は直立三百米突を算す。

**第七頁上段 立山一の越の南望**

立山一ノ越よりの南望にして右より笠ケ岳、赤牛岳、黑岳、野口五郎岳、三ッ岳、大天井の群峰であつて、中央の遠望は槍、穗高の諸岳である。(六月上旬)

**同頁下段 劍岳**

立山東面の別米丸山より北望せる劍岳の雄姿であつて左方に丸きは別山である。(六月上旬)

**第八頁 マッターホルンとダンデラン**

均齊の取れた美しい形、ぐんぐんと延びてゐる力强い線、そしてたつたひとりぼっち。朝の光に浮び出て來るマッターホルンを、谷向ふの山から眺めてゐると、心に思ひ得る一番淋しいものゝ樣に感じられる。ダンデランはマッターホルンの後に續く山で斷崖にかゝる氷が如何にも美しい。

**第九頁上段 ダンブランシュ**

マッターホルンをツムットの山稜から登つてゆくと、ダンブランシュが何時も何時も眞正面に眺められる。山に縱に入つてゐる襞が

心を惹きつける。寫眞の向つて右側の山稜は『関西の鎗馬の尾根』としてアルプスで有名な登攀のひとつになつてゐる。

**同頁下段　モンテローザ**

眞白に陽の光を反射する氷河に蔽はれたモンテローザの、その所々から眞黒な岩の峰が頭を出してゐる。その白と黒との對照が如何にも純でそして鮮かである。

**第十頁上段　上田代から燧ケ嶽**

尾瀬ケ原の東に峙つ火山で、この地方での最高峯（二三六〇米）をなす燧ケ嶽を、原の西端から遠望したもので、前面は上田代と名づけられる濕原の一部とそこに立つカラマツの巨樹やシラカバ等。

**同頁下段　尾瀬沼を距てゝ燧ケ嶽**

見所によつて著しく形の變はる燧ケ嶽を、尾瀬沼の東南端から仰いだもので、右端に見える隆起は三角點を戴くマナイタグラと呼ばれる第二高點、上圖の左端に見える最高點シバヤスグラは僅に頂上を顯すのみである。

**第十一頁上段　押出濕原から燧ノ高山**

尾瀬沼北岸に注ぐ押出澤に近い小濕原から望んだ燧ノ高山（一九三二米）で、この西北麓に長藏小屋がある。前景はこの小濕原の一部で、右手には尾瀬沼の一部が見える。左方の高い木はヒメコマツ。

**第十二頁上段　中田代から至佛山**

尾瀬ケ原の西に利根川との境に立つ至佛山は、燧ケ嶽に亞ぐ高峯で二二二八米と測られ利根地方での最高峯である。これを原の中部稍西に寄つた邊から、固定浮島を有する池塘を距てゝ仰いだもの。

**同頁下段　鬼怒沼**

鬼怒沼は海拔二千米以上の地にあつて、黒木立で圍まれた小濕原に大小三四十の池塘を湛えるもので、中でも最大の池を前景として東南に鬼怒川本流を距てゝ根名草山を望んだもの。左の峯が二三三〇米を算する最高點。

**第十三頁　シヤスタ山頂の火口壁及び其破片岩**

シヤスタ山頂火口壁の外輪にして前景は俗に「嵌岩の庭園」と呼ばるる破片岩の累積歩行頗る難澁、向つて右の方に比較的近代噴火の跡の「レッド・ブラッフ」なる赭岩あり（寫眞には出でず）寫眞の外輪を越えて絶頂に向ふを常道とす（東側登山口）

**第十四頁上段　氷雪のシヤスタ休火山**

向て右の後部の突起が絶頂シヤスタ・ピーク（一萬四千百尺）にして左のやゝ低き部分はシヤスチナ（一萬二千三百尺）の一部を示す。

**同頁下段　シヤスタ山萬年雪のテーブル・ストン**

氷雪の上に漂石あり、日光を遮りて前後左右の雪融解すれども漂石を戴ける部分殘存して松茸の臺の如き形狀をなす、氷卓とも稱せり。

**第十五頁上段　朝日岳附近より見たる北アルプスの連嶺**

**同頁下段　南より見たる雪倉岳**

此山は白馬嶽の北方一時間程の距離にあり、残雪と高山植物に富み、其中鮮麗なる高根薔薇の偃松中に點綴せるさま、高嶺叢中紅千鳥とも稱す可く美觀を極む。正面の窪地には小池あり、附近高山植物叢生す。

**第十六頁　鑓の岳より見たる白嶺北岳**

間ノ岳頂上北東側の大雪田より北面して北嶽を仰ぎ見たもの。頂上の三隆起は右のものが最も高い。中央のものは低けれども大岩塊をなし高山植物の美花繚亂す。左に遠きは甲斐の駒ケ嶽である。

# 某重大事件と政局の展開

いろいろの問題をめぐりて田中內閣に對し我識者の疑惑いよ〳〵濃厚となり、政界ばかりでなく、財界もこれに伴うて不安の度を高め、殆んどその歸趨するところを知らざるものの如くである。就中、滿洲某重大事件、不戰條約問題の如き國際的にその解決を重要とさるるものをいつまでも引きのばしてをるのは我國の國際的立場を不利にし、引いて我國の蒙る影響は經濟的に、政治的に非常なるものであらうことを信ずる。ただ不戰條約問題の如きその關はるところは國體的に大きいものがあるが、それは內田君と外務省の惡意のない手落ちと、無知識から來た錯誤であることはたれにでもほぼ想見さるるところである。この問題を以つて直ちに倒閣の武器となすことは前にものべた通り我我の欲せざるところである。ただ滿洲某重大事件は我々はその眞相を知らない。隨つて國家的にどれだけの重大性が含まれてをるのかそれはわからない。しかし田中首相の解決が一日後るれば、後るるほど疑惑も深まり行くわけで、我國の國際政治上の立場もこれに並行して不利難局に陷る譯である。尙我陸軍威信の損傷は絕對的である。頃者また三土藏相の辭意なるものを聞く。それがホンの噂であるか、眞實であるかは別問題として、とにかく金解禁、地租委讓等々の重要政策を遂行することが不能となつたことを適確に裏書するものであることだけは眞實だ。もしさうとしたら現內閣はこれで存立の意義を全く失つたと見るが妥當である。加之、人心は現內閣を全然離れ、至るところに政局の轉換を切望するものばかりである。田中首相はこれ等の事態を靜觀して政友會更生のために挂冠の一路を選ぶのが上分別だと思ふ。而して後繼として男らしく第二黨の黨首を推挽することが田中君が大きく生きるための唯一の殘された道であり、また政黨內閣制の常道を固くする意味においても當然の措置だと思ふ。いろいろと政友會の內輪のことを考へたり、失脚後の統率のことを案じたりすればそこに非常な困難はあるに違ひはあるまい。しかしこの困難を田中君が押切ることに依つてのみ光明は生れ來るのだ。我々は何も樞府や上院の惡氣流の瀰滿のためにしかく斷言するのではない。我々はいつでも國民的、國家的の高い立場より輿論を正視してゐる。大衆の眞の動きを洞觀してゐる。またこの機に當りて超然內閣の樹立に策動するが如きことあらばそれは永遠に政黨政治の墓穴を掘るものである。乞ふ、先づ英國政局の動きに見よ。某重大事件の解決？　政局の重大な危機はそこに潛んでゐる。



# 餘剩の生產、交換、分配

## ＝資本主義社會に於ける『共產原則』の展開＝

福田德三

(一)

費用原則と利用原則との對立は、永く我々の經濟學に纏綿してゐる。學問の考察は先づ利用原則に目ざめる。希臘の經濟學は、利用の經濟學であつた。

勞働原則の形ちに於ける費用原則を發見したものは、基督教の教理を以て、アリストテレースを解釋したアルベルトスとトマソとであつた。トマソのニコマケア倫理の註釋は、名は註釋であつて、實は修正であつた。誰人も殆んど氣の付かぬ間に、此の巨匠は、利用原則を費用原則に回轉せしめた。アダム・スミスからマルクスに至る勞働價値論の基礎は、すでに其處に置かれてあつたのである。而して、明瞭に其清算を爲したものは、實にマルクスその人であつた。この清算に於て、マルクスはアリストテレースの價値論從つて其經濟學の全體を、正當に描出し、其根柢を剷すべく努めた。勞働原則としての費用原則

は、明かに利用原則と對立するものなることが、茲に明かにされた。併し、其れと同時に、マルクスは、其信條たる共產原則の實現を遙かに遠い將來へ押しやつた。

費用原則を固守する限り、共產原則は其實現性を失ふ。資本主義社會の本體を暴露する爲めには、費用原則は、最もよく役立つ。しかし其れと共に、唯物辨證法によらざる限り共產原則の展開は、絶望的とならざるを得ない。其反對に、アリストテレースの價値論從つて少くともニコマケア倫理に現はれた其の經濟觀は、共產原則の展開と相容るゝものである。其の所謂流通の正義とは、これを言ひ換へて、共產原則の正義と做すことが出來よう。

『流通社會の任意的取引流通にあつては、報復は人と人とを結び付ける連繫である。即ち、これは、一の比例に基く報復であつて、均等の報酬に基く報復ではない。何となれば、一のポリス（國家、社會）を結束するものは、比例的報酬の原則であるから。……我々は平方形の兩對角の結合によつて、比例的報酬を見出すことが出來る。……若し始めに、兩者の財の比例的均等が存してゐて、而して、これについて相互交換の行爲が起つたのならば、我々が示した通りの結果は、得られるであらう。反對に然らざる場合には、其取引は（始めから）均等でなかつたもので、從つてそれは妥當（有效とありしを斯く改む）でない。何となれば、一方の仕事が、他方の仕事に（價値の上に於いて）勝ることあり得るを妨ぐべき何物も存しないから。從て、兩者は、（先づ始めに）均等に持ち來たされてあらねばならぬのである。醫者と醫者との間には、流通は起らぬ。醫者と農夫との間には、流通は起る。一般に流通は相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから。これ即ち、交換されるものは、すべて、何等かの方法に於いて、通約的でなければならぬ所以である。……すべての財貨は、何か或る一物によつて測られるのでなければならぬ。此の評價の單位は眞實に於いては、需要である。需要は、すべての物を結び付ける（何となれば、若し人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを要することがないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は、成立たないであらうから）貨幣は、（唯だ）便宜上設定せられた、一種の需要代表物である。……すべての貨物は、一定の價格を附與せられてあらねばならぬ。かくてこそ、交換は、常に可能であり、從つてまた、人と人との間に、流通が成立し得るのである。貨幣は、一の尺度として働いて、すべての財を通約的ならしめ、而して、すべての財を均等ならしめる

のである。蓋し、交換行はれざれば、流通は成立せず、均等存せざれば、交換は行はれず、通約性成立せざれば、均等は行はれないからである。さて、眞實に於いて、かく、多くの相異る諸物が、通約的となることは、不可能なことである。乍去、需要の立場から見れば、相應に可能である。(通約には)單位となるものがなければならぬ。而して、其れは合意によつて、定められたものでなければならぬ、』改造拙文『アリストテレースの流通の正義』(其四)八六―八九頁。

需要に對照して通約せられる比例的報復は、單なる均等の報酬であつてはならぬと云ふのが、ア氏の力點を置くところである。比例的報酬の原則は『一方の仕事が、他方の仕事に(價値の上に於いて)勝ることあり得る』『從つて、兩者は、(先づ始めに)均等に持來されてあらねばならぬ』『醫者と醫者との間には、流通は起らず、醫者と農夫との間には起る』、『流通は、相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから』『人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを、要することないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は成立たない』といふところの比例的報酬の原則は、費用原則ではない。所謂交換原則でもない。其れは、共產原則の最も早い、而かも或意味に於いては、甚だ徹底してゐる言ひ現はしでなくて、何であらうか。單なる均等報酬の原則と、アリストテレースの名くるもの、其れは卽ち費用原則であり、所謂交換原則であつて、ア氏は明かに、其の比例的報酬の原則を、之れと對抗せしめてゐるのである。匡正の正義と分配の正義とを對立せしめ、前者は算術的比例に從ひ、後者は幾何的比例に從ふとし、流通の正義も亦た幾何的比例に從ふものだとしたのは、更らに此の對抗を明瞭ならしめたものである。費用原則は、匡正の正義に屬し、算術的比例に從ふ。共產原則は、流通の正義に屬し、幾何的比例に從ふ。

流通の正義は、單なる利用原則を認むるものではない。其れは、共產原則の展開を許容するものである。此點に於いて現代の經濟理論家中最も深くアリストテレースに通ずるロシアのゲレスノフ氏の說も、未だ說いて精しからざるものと思ふ。『經濟學原論』アルトシュル氏獨譯第二版(一九二八年刊)一九七頁以下、及『社會科學及社會政策集報』第五十卷第一册の拙論文『アリストテレースの經濟學的思界』。

マルクスは、たしかに、アリストテレースの論點を捉へた。しかし乍ら、私が嘗て指摘した通り、マルクスには尠からざる誤解が見出される。此誤解が、彼れに累して、彼は、ついに、アリストテレースの流

通の正義の中に、赤き絲の如くに貫通してゐる共產原則を逸し去らしめたものと思ふ。否、彼がブルヂオア社會の本體を暴露するに、最も有力なる理論として拉へ來つた費用原則、──勞働價値說──こそ、マルクスを束縛して、此の誤解に陷らしめたものであらうと思はれる。其處には、未だ見出されざる一の深い陷穽があるのであらう。私はマルクスの側からもアリストテレースの側からも、此の陷穽の見出しは、決して怠るべからざる仕事であると信ずる。

(二)

『各人からは、其能力に應じて、各人へは、其需要(欲望)に應じて』なる『共產原則』は、ひとり、フランスの社會主義の獨占物ではない。分配論を大事そうに取扱ふことを以つて、俗流社會主義を嘲つた『ゴタ綱領批判』に於て マルクスも、亦これを、共產主義の高階段に於ける原則なりとしたのである。而して、此原則は、共產主義の第一期たる過渡時代、、、、、、、、、に於いては、未だ展開され得ず、其處に於いては『各人へは、其給付に應じて』なる『給付原則』(報復原則)が行はれるにすぎないとする。マルクスはいふ。『茲に我々が考察する社會は、其れ自らの基礎の上に發展したのでない一の共產的社會である。其れは反對に、資本主義社會から發生したものである。卽ち、經濟的にも、倫理的にも、精神的にも、何れの關係に於いても、未だ其れから發生し來つた母胎たる舊社會の母斑を以つて纏はれてゐるものである。かるがゆへに、各生產者は、──諸々の差引をした上で──彼が社會に與へたものを、正確に還付して貰ふのみ私の插入した字句△△を附せるは、以下同じ。である。彼が社會に與へたものは、彼の個人的勞働量である。例。社會的勞働日は、個人的勞働時間の總和から成立つ。各個生產者の個人的勞働時間は、社會的勞働日の中、彼れの提供した部分、其れに於ける彼れの參加分である。彼れは、何程の勞働を給付したとの證明書共(同基本に對する彼れの勞働を控除して)を、社會から受取る。而して、此證明書と引換へに、消費手段の社會的蓄積から──彼れが提供した勞働と──同量の勞働を値するだけを取り出す。彼れは、一の形態に於いて、社會に與へた勞働量と同量の勞働を、他の形態に於いて、還へして貰ふのである。──故に──此場合に於ては、明かに、同一價値者間の交換たる限りの商品交換を左右すると同一の原則が支配するのである。但し、其の內容と形態は異る。何となれば、斯く變化した諸事情の下に於いては、誰人も、彼れの勞働以外何ものをも──社會に與ふること能はず、また、個人的消費手段以外、何ものも、各個人の所有に歸し能はぬから。しかし、消費手段の各個生產者間に於ける分配については、商品等價體の交換に於けると同樣なる原則が

支配する。即ち、一の形態に於けるだけの勞働が、他の形態に於ける其れだけの量の勞働と交換されるのである。……此くの如き進歩あるに拘らず、此の平等の權利は、未だ一のブルヂオア的制限を蒙るを免れない。諸生產者の權利は、夫れ〲の勞働給付に比例的である。平等は勞働てふ平等の標準を以つて測られると云ふことに存する──のみ──である。……これらすべての缺陷は、資本主義社會から、長い生みの惱みの後、やつと生れ出たばかりの共產社會の第一形相には不可避的なものである。權利は、經濟的形狀と、其れに條件付けられた社會の文化發展以上のものたり能はぬ。──然るに──共產社會のより高き形相に於いては分業の下に於ける個人の奴隸的從屬、其れと共に、精神的對肉體的勞働の對抗が消滅した後、勞働が單に生活の爲めの手段たるのみでなく、其れ自ら、第一の生活欲望となつた後、各個人のすべての側に於ける發展に伴つて、生產諸力が增大した後、而して、團體的富の一切の源泉がより豐かに流るゝとき、此時に至つて始めて狹きブルヂオア的權利水平は全く超越せられ、而して、社會は、其旗の上に『各人は、其能力に應じて、各人へは、其需要(欲望)に應じて』と認め得るのである』『ノイエ・ツアイト』第九卷第十八號五六六─五六七頁。『ドイツ勞働黨綱領標註』(普通『ゴタ綱領批判』と名く。)拙著經濟學全集第五集一一七八頁參照。

約して、これをいへば、マルクスは、資本主義社會の原則を絞取原則とし、第一次共產主義(レニンの解によれば、即ち社會主義)社會の原則を給付報復原則とし、高次共產主義(完全なる共產主義)社會の原則を共產原則なりとするものである。

正統派經濟學は、給付(報復)原則を、現社會の最根本原則と見る。其れは、グスタフ・カツセルの明かにした通り、事實に於いて費用原則である。『理論經濟學の出立點』國家學雜誌第五十八年度(一九〇二)六六八頁以下。費用原則は、取りも直さず勞働原則であり、同時に所謂交換原則シュムペーターの交換原則と餘剩原則との對立を見よ。であつた。

カツセルはアダム・スミスに據る自由競爭の前提下に於ける價格の成立は三の根抵の上に立つと云ふ。(一)各生產物に對しては、唯一つの價格のみが成立つ(二)其價格は生產費と一致す(三)各生產要因に對しても亦た唯一つの價格のみが成立つ。而して、一方に於いては、すべての有効需要──價格を支拂ひ得る需要──は必ず充され、他方に於いては、また、すべての生產給付は、悉く所要せらるゝ樣に、生產は誘導せられる。これ即ち『費用原則』なりといふ。同上文六六九頁。かくて需要＝供給、價格＝費用てふ均衡が成立するといふのが、アダム・スミスの出立點である。唯だ自由競爭が妨げられるとき、此の均衡は

破られる。經濟政策の當爲は、自由競爭を完全ならしめて、此均衡を支持することのみに存する。リカルドは更らに、此の生産費を勞働に歸一することによつて、アダム・スミスの多元觀に纏綿する矛盾と曖昧とを一掃し、費用＝勞働、卽、價格＝費用＝勞働なる公式を打建てた。カッセル『リカルドの生産理論と理論經濟學の第一の任務』國家學雜誌五十七年度（一九〇一年）六八頁以下。

マルクスの勞働價値論は、此の正統經濟學の費用原則を拉らへ來つて、逆まに、資本主義社會の本體を暴露したものにすぎない。資本主義社會を事實に於いて支配するものは、絞取原則である。費用原則は、價値の唯一眞實の解釋なりとせられる。此の解釋を、其儘資本主義社會に適用するとき、其處に、資本主義社會の矛盾せる正體は暴露せられる。他の何の解釋を輸入し來る必要もない。資本主義者其人の出立點に立戻りさへすれば、事は足りる。若しもアリストテレースの價値論の如きを拉し來るならば、其れは不可能である。ソコデ、彼は其の等價形態論の脚下に、やゝ詳密に、アリストテレース説を商搉して、これを排撃するに力を用ゐたのである。前掲拙文參照 何となれば、ア氏説は、費用原則に對する一大敵國の觀を有つものであるから。だから、カウツキーはいふ。『事實に於いて、マルクスの價値理論は、社會主義とは、何等相涉るところなきものである。價値の理論は、社會主義の根柢ではない。却つて、今日の資本主義經濟の根柢である。マルクスの價値理論を排撃し得たりとて、社會主義は、爲めに、些も排撃し得られるものではない。此の理論は、我々に、社會主義を敎ゆるものではない。却つて、其反對に、資本主義の運營を理解せしむるものである』『ノイエ・ツアイト』第三卷二八二頁。

マルクスの勞働價値説は、資本主義社會が絞取原則の支配するところなるを示めすには、無二の精鋭なる武具であつた。其れが餘りに力強いものである爲めに、甚だ多くの人は、敵の本能寺にあることを見出す能はず、此の前哨を以つて、敵の本營なりと考へ誤り、其攻撃、其排撃の主力を其處に集中した。元より若干の取除けはある。顯著なる例は、オッペンハイマーである。『マルクス社會學説の根本法則』一九〇三年刊 また英國現代の大古典學者たるリンドゼー氏である。『カール・マルクスの資本論』一九二五年。此著は啓蒙的の小册子であるけれども、マルクス評論中たしかに出色の作である。 多數の人々は、カウツキーの、而してまたベルンシュタインの警告あるにも拘らず、マルクス勞働價値論の排撃に沒頭沒身してゐる。而して、其殆んど何れもが、滿身の創痍を被つて衆人嘲笑の間に、撃退せられた。撃退される筈である。敵の主力は遙か別の處にあるから。河上博士は一九二五年頃福本氏との應酬以來、此の『クラデラッチ』から全く身をひかれた、從て、小泉教授の近時の評論は、『カノナード・インス・レーレ』であつた。

## (三)

併し乍ら、私は、玆に一の他の問題の横つてゐることを見る。絞取社會としての資本主義社會を暴露するに、甚だ役立つた正統經濟學の費用原則は、マルクスをして、餘剩の生産を十分に明かならしむるを得たと同時に、其れを生産の領域に閉ぢ込め過ぎしめた。費用原則を拉へたマルクスは、逆まに費用原則に拉へられた。資本論第一卷對第三卷の矛盾云々の觀察は、餘りにも淺薄である。しかし、其樣な淺薄な觀察を可能ならしめたものは、費用原則の『物神崇拜教』の致すところではなかつたであらうか?

マルクスはいふ。『いはゆる分配なるものを後生大事に取扱ひ、主力點を其上に置くことは誤りである。消費手段の其時々の分配は、生産諸條件其れ自らの分配の結果たるにすぎないものである。生産諸條件の分配は、また、生産方法の一特徴である。例。資本主義的生産方法は次ぎのことの上に立脚する。物的生産諸條件は、資本所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ、他方、大衆は、單に、人的生産條件たる勞働力の所有者たるにすぎざること、これである。生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば、今日の如き消費手段の分配は、當然其から生じ來る。――然るに――物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば、今日のとは異る消費手段の分配は、同じく、當然に其れから生じ來る。俗流社會主義(其の中でもデモクラシーの一部)は、俗流經濟學から、分配を生産方法から引離して、獨立的に考察し、取扱ふことを受け繼ぎ、從つて、社會主義を以つて、主として、分配を中心として回轉するものと說く。眞實の關係が、すでに、久しく明かにせられてゐる今日、何故あつて、再び跡戻りをするのか?』(『ノイエ・ツアイト』第九年度第一卷第十八冊五六八頁。(所謂『ゴタ綱領批判』))

『共産宣言』以來、マルクスもエンゲルスも、生産――而して第二次に交換――のみを經濟生活の本體と見るとは、誰人も一樣に唱へるところである。(高田保馬博士『價格と獨占』にも、其れに追從したらしい有力な一論文が見出される。)此點から見て改造六月號に掲げられた大熊信行教授の論文は、マルクスに對する理解十分ならざるの嫌あることを免れまい。乍去、我々が耳に『たこ』の生ずるほど屢々說き聞かされるマルキシストの此點に關する力說は、私を以て見れば、却つて、マルクスの眞意を歪めたものではあるまいかと思はれる。マルクスは、右の引用句にいとも明瞭に、生産諸條件の生産先行的分配を說いてゐるではないか。唯だ彼れの俗流社會主義に――而して、俗流經濟學に――責めるところは、『消費手段の其時々の分

配』を、後生大事に取扱ひ、其れが『生産諸條件其れ自らの分配の結果たること』を悟らないことこれである。元より彼は、此の『生産諸條件の分配』を以つて、『生産方法の一時徴である』としてゐる。從つて輕卒にこれを見れば、すべては、『生産』に歸着するが如く考られよう。乍去、『物的生産諸條件は、資本所有並に土地所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ』『生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば』『今日の如き消費手段の分配は、當然其れから生じ來る』といひ、『物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば』『今日のとは異る消費手段の分配は、同じく當然に其れから生じ來る』と、一の疑似曖昧を容れざる斷言を爲してゐるではないか。大熊教授の『配分の原理』なるものは、私は未だ十分にこれを究めず、また理解し得ないものであるが、其れが生産先行的なる生産諸條件——諸要素——の分配を意味するものならば、マルクスは明かにこれを認めるものであり、大熊教授が『配分』と嚴密に區別すべしと主張する『分配』がマルクスのいふ『消費手段の其時々の分配』に當るものならば、教授の嚴密區別論は、此點に於いては、マルクスの贊同するところであらう。

此考察は、若干の吟味を重ぬるときは、同様にリカルドにも適用し得られるかの如くである。いふまでもなく、リカルドは、『分配』を以つて經濟學の主問題としたことは、其『諸原理』の序文に明かに示されてゐるところである。『土地の生産物——勞働と機械と資本との結合投下に由て、土地の表面より取得らるゝ一切のものは、共同社會の三階級の間に分割せられる。……併し乍ら、社會發達の異なる段階に於ては、地代、利潤及び賃銀なる名稱の下に、是等諸階級の各個に割り當てらるべき土地全産物の比例も、亦た大に異なるであらう。……此分配を左右する諸法則を決定すること、これが經濟學の主要問題たるものである』（小泉教授邦譯本三頁。堀教授同上一頁。）併し乍ら、カッセル教授のいとも明快に示した如く、リカルドは、先づ地代を生産費以外に驅逐し、利潤を勞銀に還元することによつて、其費用原則を勞働原則に歸一したのである。從つて、此立場より見れば、主要問題たる分配は三階級間の分割としては殘るに相違ないが、『此分配を左右する諸法則の決定』は、勞働原則——費用原則——の一運用に外ならないこととなり、其れが經濟學の主要問題たる實は、殆んど意味を失つて仕舞つたと云はねばならぬのではないか。

唯玆に、勞賃と平均利潤との問題が殘る。而も、其れは、リカルドにあつて問題たりしのみではない、マルクスにあつても、一の重要なる問題であつたのである。否、堀教授は斷言していふ。『彼（マルクス）

は、リカルドウの學説を十分に理解し、しかも、正當なる論理を以て、之を發展せしめたといふ特徴を有つてゐる。これ、私が、彼れを以つて、勞働價値論の完成者なりとなす所以である。而して、彼れの功績の中、最も大なるものは、勞働價値より生産價格への「轉化」を論じて、リカルドウを、眞に惱ました所の難點を解決したることこれである。かくの如く、マルクスに至るまでのリカルドウの勞働價値論は、或は通俗化せられ、或は變形せられ、或は否定せられつゝ、可なり數奇なる運命を辿り來つたのであるが、惟ふに、それは、リカルドウ自身が、十分に取除き得ざりし「平均利潤」てふ躓き石の存在に基因するものであつた。……最後に、この石の周圍を掘つて、之を沈下せしむることによつて……この難所を平坦ならしむることを主張せる者(マルクス)が勝を制したのである』『リカルドウの價値論及び其の批判史』五七七——五七八頁。因に云ふ、堀教授の此書は、邦文で書かれた經濟學說批判の書(マルクスについてのものまでも含めて)中私が今日まで寓目し得た限りに於いて嶄然一頭地を拔くもので、『研究』なる甚だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へずこれを適用し得るものと信ずる。但し所論の内容については、私に異存なきわけではない。

『平均利潤』の謎の解答は、生産の問題ではない、分配の問題である。マルクスが、リカルドを惱ました此問題を解答したことは、たしかに、大なる業績であつた。乍併、其れと同時に『消費手段の其時々の分配』を、經濟學の領域から驅逐すべしとの主張は、其の努力の中に、其影を著しく薄くしたことは否み難い。『資本論』第一卷對第三卷矛盾云々の淺薄な觀察は、其處に惠まれた沃土を見出した。

## (四)

費用原則の上に立つ正統經濟學は、決して、餘剰の存在を無視したものではない。シュムペーター氏が、其昔し、『交換原則』と『餘剰原則』とを對立せしめた立論は、若き日に於けるシュムペーター其人の如何に、其時すでに優秀なる理論學者たりしかを僅に示めした所以であらうと思ふ。カウツキーはいふ『マルクスは、餘剰價値の本體を發見したものではない。アダム・スミス以來、誰人も眞面目に、經濟學を學んだ人ならば、餘剰價値の存在することを知つてゐる。乍去、マルクスは、餘剰價値は、其れが生産せられるとき、すでに成立するものなるを示めした第一人者である。此れによつて、餘剰價値は、資本主義的生産方法を理解すべき鍵となるを得たのである』『ノイエ・ツアイト』一八八六年五五頁。

餘剰價値の生ずる源は、生産先行的なる生産諸條件の配分の中にすでに存してゐる。其れが、生産せられるとき、すでに成立する所以は、

勞働力の賣買』てふ交換過程によつて說明される。エンゲルスは『資本論』第二卷の序中にいふ『ラヴオアシエーがプリーストレー及びシエーレに於ける關係は、マルクスの餘剩價値理論の諸先輩に於ける關係である。我らが今餘剩價値と名くる生產物價値部分の存在は、マルクス以前すでに久しく確認されてゐた。同樣に、何から其れが成立つか、卽ち其れは、勞働の生產物から成立ち、其れに對しては、其收得者は、何等の對價を支拂はぬものであることも大なり小なりの明瞭さを以て主張されてゐたのである。‥‥彼れ(マルクス)は、貨幣の資本への轉化を研究し、而して、其れは、勞働力の賣買に存することを證明した。彼は、玆に、勞働力卽ち價値創造的性能を、勞働に代位することによつて、リカルド學派を斃した困難卽ち、資本と勞働との相互交換をリカルドの勞働による價値決定の法則と一致せしむるの不可能を一擧にして解決したのである。‥‥一の價値を有するものは勞働ではない。‥‥商品として買はれ而して賣られるものは、勞働ではなく、勞働力である』(序の二一—二二頁)。

乍併、マルクスの此發見は、割合に永い時間を要した後、完成したものであつて、其以前には、此點についての彼の說は、甚だ不徹底のものであつたことは、周知の事實である(私が曾て河上博士の『勞貨と資本』の第一邦譯に對して妄言を敢てしたのは、此顚末の[illegible]明かにしたい[illegible]。河上博士は、翻譯を悉く棄れて、其邦譯を改められた[illegible]。昔前のこととなつた。)他方に於いて、リカルドは、必ずしも、此點について、全く何事もなさなかつたものでないことは、[illegible]教授の力作これを詳細に論究して、殆んど遺憾ない。此一事だけを以てしても、[illegible]教授の純一無雜の研究者としての態度に深厚なる敬意を捧げざるを得ない。乍去、マルクスの透明は、たしかに、前人未踏の分野を開拓したものであつて、同教授の評論を以てしても、リカルドにまつはる陰影は、これを一掃することは出來ない。

併し、玆に、私は公平無私なる諸研究者に一考を煩したい。賣られ而して買はれるものは、勞働にあらず、勞働力であるといふことは、生產過程に於ける問題ではない。其れは、交換(賣買)の問題である。無論其の賣買は、資本主義的生產方法の一特徴たるに相違ない。しかし、其特徴を成立せしめたものは、生產に先行する生產諸條件の分配關係これである。

かくてエンゲルスが、リカルドが之を解き能はずして斃れたと云ふ二つの難問の解答は、何れも、生產方法の上に於いて與へられず、交換及分配過程の中に於いて與へられたのである。二つの難問とは、

は、リカルドウの學說を十分に理解し、しかも、正當なる論理を以て、之を發展せしめたといふ特徵を有つてゐる。これ、私が、彼れを以つて、勞働價値論の完成者なりとなす所以である。而して、彼れの功績の中、最も大なるものは、勞働價値より生產價格への「轉化」を論じて、リカルドウを、眞に惱ました所の難點を解決したることこれである。かくの如く、マルクスに至るまでのリカルドウの勞働價値論は、或は通俗化せられ、或は變形せられ、或は否定せられつゝ、可なり數奇なる運命を辿り來つたのであるが、惟ふに、それは、リカルドウ自身が、十分に取除き得ざりし「平均利潤」てふ躓き石の存在に基因するものであつた。………最後に、この石の周圍を掘つて、之を沈下せしむることによつて……この難所を平坦ならしむることを主張せる者（マルクス）が勝を制したのである」『リカルドウの價値論及び其の批判史』五七七——五七八頁。因に云ふ、堀教授の此書は、邦文で書かれた經濟學說批判の書（マルクスについてのものまでも含めて）中私が今日まで寓目し得た限りに於いて嶄然一頭地を拔くもので、『研究』なる甚だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へずこれを適用し得るものと信ずる。但し所論の內容については、私に異存なきわけではない。

『平均利潤』の謎の解答は、生產の問題ではない、分配の問題である。マルクスが、リカルドを惱ました此問題を解答したことは、たしかに、大なる業績であつた。乍併、其れと同時に『消費手段の其時々の分配』を、經濟學の領域から驅逐すべしとの主張は、其の努力の中に、其影を著しく薄くしたことは否み難い。『資本論』第一卷對第三卷矛盾云々の淺薄な觀察は、其處に惠まれた沃土を見出した。

（四）

費用原則の上に立つ正統經濟學は、決して、餘剩の存在を無視したものではない。シュムペーター氏が、其昔し、『交換原則』と『餘剩原則』とを對立せしめた立論は、若き日に於けるシュムペーター其人の如何に、其時すでに優秀なる理論學者たりしかを僅に示めした所以であらうと思ふ。カウツキーはいふ『マルクスは、餘剩價値の本體を發見したものではない。アダム・スミス以來、誰人も眞面目に、經濟學を學んだ人ならば、餘剩價値の存在することを知つてゐる。乍去、マルクスは、餘剩價値は、其れが生產せられるとき、すでに成立するものなるを示めした第一人者である。此れによつて、餘剩價値は、資本主義的生產方法を理解すべき鍵となるを得たのである』『ノイエ・ツァイト』一八八六年五五頁。

餘剩價値の生ずる源は、生產先行的なる生產諸條件の配分の中にすでに存してゐる。其れが、生產せられるとき、すでに成立する所以は、

勞働力の賣買』てふ交換過程によつて説明される。エンゲルスは『資本論』第二卷の序中にいふ『ラヴォアシエーがプリーストレー及びシエーレに於ける關係は、マルクスの餘剩價値理論の諸先輩に於ける關係である。我らが今餘剩價値と名くる生産物價値部分の存在は、マルクス以前すでに久しく確認されてゐた。同様に、何から其れが成立つか、卽ち其れは、勞働の生産物から成立ち、其れに對しては、其收得者は、何等の對價を支拂はぬものであることも大なり小なりの明瞭さを以て主張されてゐたのである。……彼れ(マルクス)は、貨幣の資本への轉化を研究し、而して、其れは、勞働力の賣買に存することを證明した。彼は、玆に、勞働力卽ち價値創造的性能を、勞働に代位することによつて、リカルド學派を斃した困難卽ち、資本と勞働との相互交換をリカルドの勞働による價値決定の法則と一致せしむるの不可能を一擧にして解決したのである。……一の價値を有するものは勞働ではない。……商品として買はれ而して賣られるものは、勞働ではなく、勞働力である』序の二一—二二頁。

乍併、マルクスの此發見は、割合に永い時間を要した後、完成したものであつて、其以前には、此點についての彼の說は、甚だ不徹底のものであつたことは、周知の事實である　私が曾て河上博士の『勞賃と資本』の第一邦譯に對して妄言を敢てしたのは、此顛末の[illegible]河上博士は、拙言を悉く容れて、[illegible]昔前のこととなつた。

全く何事もなさなかつたもの[illegible]に論究して、殆んど遺憾ない。此一事だけを以てしても、[illegible]授の純一無雜の研究者としての態度に深厚なる敬意を捧げざるを得ない。乍去、マルクスの透明は、たしかに、前人未踏の分野を開拓したものであつて、[illegible]教授の評論を以てしても、リカルドにまつはる陰影は、これを一掃することは出來ない。

併し、玆に、私は公平無私なる諸研究者に一考を煩したい。買られ而して買はれるものは、勞働にあらず、勞働力であるといふことは、生産過程に於ける問題ではない。其れは、交換(賣買)の問題である。無論其の賣買は、資本主義的生産方法の一特徴たるに相違ない。しかし、其特徴を成立せしめたものは、生産に先行する生産諸條件の分配關係これである。

かくてエンゲルスが、リカルドが之を解き能はずして斃れたと云ふ二つの難問の解答は、何れも、生産方法の上に於いて與へられず、交換及分配過程の中に於いて與へられたのである。二つの難問とは、

(一)『生きた勞働の一定量の價値たる勞賃は、常に生きた勞働の此の量によつて生産せられる生産物の價値より小である』(二)『同一額の資本は其適用する生きた勞働が如何に多くとも少くとも、同一時間には、平均的に、同一の利潤を生産する』これである。(一)は、勞働力の賣買を以て、(二)は平均利潤率の謎の解答を以つて、解かれた。二つの解答、其何れもが生産方法の上に於いては、與へられてないのである。解答の場面は、明かに流通行程の上に置かれてある。

餘剰は、生産方法の對象たるのみに止まらない。生産先行的なる分配過程の内に、すでに孕まれて居り、生産直前に於ける、勞働力の賣買てふ交換過程の中に、はぐくまれてゐる。其生れ出づるは、資本主義的生産過程の中にあるには相違ないが、生れたものは、其瞬間に成立したものではない。出生は、唯一つの『ツヰキシエン・フオアガング』である。而して、人は木の股からは生れず。

商品の解剖を以つて、資本主義的生産の考察を始めるは、價格經濟學に取つては、而して、殊に費用原則を固守する限りは、正しい。併し、其れは、唯一の出立點ではない。

## (五)

資本主義社會の實證を暴露するに、費用原則は役立つ。甚だ役立つ。併し乍ら、然る限り、費用原則と利用原則との葛藤から脱出することは出來ない。ボエーム・バヴエルク教授の研究室へ學問的スパイとして這入り込んだブハーリンが、利喰經濟學に向けた嘲笑は、唯二三十册の本を讀んで、價値論を知り得たりとする人々の耳には、痛快に響く。しかし乍ら費用對利用原則の『クラデラッチ』は、其の爲めに、些も釋け能ふものではない。

ロバート・リーフマンが出生作たる『主觀的評價よりする價格の成立』は不遇の作であつた。しかし、私は其中に一の大きなものあるを見出した。氏の其自傳に於ける私に對する感謝は私は心から喜んでこれを拜受する。餘剰原則の確認は、即ち其れである。其れは、エンゲルスの言葉を借りれば、一のラヴオアシエー的回轉であつた。氏の其後の作は、今言及せず。

資本主義社會に分配の問題の存するは、否、抑も我が學に分配の問題の存し、深き洞察者リカルドが、其れを經濟學の主要問題——私は、あへて中心問題と云ふ——としたのは、餘剰原則こそ、資本主義社會を支配する根本原則であるからである。費用原則でもない、利用原

關でもない。だから、リカルドには、分配の問題は、其の勞働價値說と無關係に說き得るとさへ斷言したのである。曰く、『これを要するに地代勞賃並に利潤の諸大問題は、全生產物が、地主、資本主、及勞働者の間に分割せらるゝ比例によつて說明せられねばならぬ。而して、此比例は價値の理論と、本質的に結び付いてゐないものである』マカロックへの書簡集七二頁

此一節こそトゥガン・バラノフスキーが其の無價値的分配論、勢力分配論の出立點としたものである。（猶後段參照）唯だリーフマンの如く――而して私が長く賛同しつゝあつた如くに――此餘剰を、利用と費用との較差などと見てゐては發見以上一步も進出するとは出來ぬ。發見せられた餘剰原則は、更らに、更らに尋究せられねばならぬ。而して其の眞の所在を見究めねばならぬ。其眞の見究めはこれを資本主義社會に於ける共產原則の展開にまで、導くものでなければならない。

資本主義社會は、所得獲得社會である。何となれば、それは餘剰の分配によつて、活き而して發展して行く社會であるから。餘剰のなきところ、餘剰の分配のなきところ、所得の問題は存し得ぬ。單なる『消費手段の其時々の分配』は、決して適當の意味に於て云ふ分配の問題を提供するものではない。ジエ・エー・ホブソンが、發展なき假定社會には分配の問題なしと斷言せるは、今猶私の耳朶に鏘々たる響を殘してゐる。『產業組識』第一版（一九一〇年刊）に於いて。猶一九二七年の其第二版をも見よ。一九二六年私は倫敦に於て氏と會することを榮としてゐた。エコノミストの前主筆ハースト氏は私の意を諒として氏を招かれた。不幸にして、氏は病ありて來會せられず、私は其の夫人と長時會談した。夫人亦一個の經濟學者である。私は、ホブソン氏に傾れる所以を述べた。夫人卽ち諄々として、良人の持說を布演して敎へられた。茲に一言して深き敬仰の意を新にしておく。費用原則や利用原則の立場に立つ限り、其の經濟理論體系に、眞の分配問題――單なる比例にあらざる――の全く存せざることは、其原則の假定の上に立つ發展なき產業社會に分配の事實の存し得ざるに同じ。マルクスが、此理を道破したことは、其一事だけを以てして千古の卓見なりと云はざるを得ぬ。マルクスに少しもかゝはることなく、同じ洞察に到達したホブソン氏を私が現代英國理論家の第一位ホートレー、ピグー兩氏と並べて。而して、ケーンズ氏などは與らず。に置く所以は、其處にある。

餘剰の原則の上に立つ資本主義社會にして、始めて眞の分配の問題は起る。其れは、『消費手段の其時々の分配』と斷然混同すべきものではない。資本主義社會は、餘剰の生產交換分配の社會である。言を換へて云へば所得中心の社會である。階級の本質は、此所得の性質に存する其の多寡に存するのではない。其昔し河津河田其他諸博士に對して私の論じたところ、社會政策學會論叢にかゝげあり。所得の性質とは、卽ち、マルクスの所謂『生產方法』に對向するものである。其れを名けて、眞の意味に於ける『分配』といふのである。資本主義社會にあつては、欲望充足の行爲は、決して、經

濟行爲ではない。欲望充足の準備行爲、準備行爲の中、所得の配分大熊教授の語を借用すればにかゝはる商量、適合の計慮的合理行爲こそ、經濟行爲である。マルクスの口吻を單に模して、經濟行爲は生產行爲なりとするはマルクスの意を裏切るものであつて、而して資本主義理論としては、沒理に墮するものである。言葉の整頓は、思想の困迷を掩ふことは出來ぬ。所得にかゝはる商量適合の計慮的合理行爲は、略して、これを所得行爲（アーニング、アクチヴヰチース）と名け得る。其れが卽ち經濟行爲の全體である。

私の『教科書』に於ける記述は、此意味を不十分にしか述べてゐない。

資本主義社會にあつては、物は保持せられず、所有せられる。所有も亦た、『エルヴエルブ』の故を以て、所得行爲であり、從つて、經濟行爲である。勞働も亦『エルヴエルブ』たるの故を以て、經濟行爲となる。否、否、貨幣も亦『エルヴエルブ』の故を以て、經濟圏內に入り來る。

曾て當時新進の某博士の經濟的所有云々の論に接して私信を以て『エルヴエルブ』の考察缺く可からずと開陳した。答書に曰く『私は『營利』を所有と同樣に考へたくありません』と。博士は、『エルブエルグ』てふ、ブュクセンシュッツ以來の成語の其の格段の意味をすら、知らなかつたのを見出して、私はついに對論を斷念した。事は、數年の昔に屬する。今は、學ばれたであらう？　左右田博士の貨幣概念文化價値の說に、私が如何にしても、追從する能はざりしは、これが爲めである。私は問ふた。何故に、同じ樣に、所得概念文化價値を主張し得ざるやと。アモン氏も亦問ふた。何故に資本概念文化價値を主張し得ざるやと。これはアモン氏の處女評論であつた。私は其時すでに同氏の輕視するを許さゞる理論學者たるを知つた。今や我々の質問は、永しなへに、其答を得るの機會なくして已む。地上に於ける其墓未だ成らざる故博士の爲めに、學問上の業を建つる人は誰れ。吁

經濟行爲は、欲望充足行爲にあらず、欲望の經濟的充足行爲なりと言つた其昔しのオッペンハイマー氏は、此消息を半ば解して終んだものであらう。

價格を以て理論經濟學の中心問題とするは、費用原則又は利用原則のみの上に立つブルヂオア學としては、正しい。人間の厚生經濟學としては、唯一つの便法たるにすぎない。マルクスは町人の經濟學を以て町人經濟社會の實體を痛快に暴露した。然し、後には、其便法の爲めに甚しい不便に遭遇した。餘剩原則の上に立ち、而して、資本的生產方法の下に、共產原則を展開しつゝある資本主義社會の實體は、かくして唯其一つの姿を現はしたにすぎない。

我々は所得を以て生きて行く。我資本主義社會は、生產に先行し、更らに生產諸條件の分配に先行する、この所得の分配によりて、維持せられ而して發展して行く。價格は此所得を決定する一の道具たるのみ。道具の吟味は肝要である。然し、其れは必竟道具の吟味たるに止る。其以上の何ものでもない。我々の經濟的存在に取つて、而して其を通して、我々の眞の生存に取つて、意味を有つものは、獨り所得である。價格ではない。價格は意味を有つものゝ、其意味を測るメートルに

ぎない。所有も、貨幣も、我々の經濟生活に取つて、眞の意味を有つものではない。其れは、所得の形成上の現象態たるに外ならない。

だから、資本主義社會の止揚は、所得の止揚でなければならない。所得の存在にして、今日の儘なる限り、資本主義社會は止揚せられ能はぬ。從つて、資本主義社會の眞の檢討は、所得の檢討であらねばならぬ。商品の解剖、價格の吟味は、其れが所得の檢討に役立つ限りに於てのみ、意味を有つ。其以外には、一の意味をも有つものではない。リカルドが或は覗いたと云はれ、或は觸れたと云はれるところの謎問を、釋いたマルクスは、其れをリカルドが提出した姿に於てゞなく、所得の生産、交換、分配の問題に轉化するによつて、成し遂げたことは、我々をして、反省せしむ可きではないか。

所得は貨幣の一定額を以つて言表はされる。しかし、其れは云ふまでもなく、名目所得である。眞の所得は、其貨幣額の購ひ得るところのものである。發展なき社會——人口數、需要、生産方法に異動なき——を假定すれば、一定時期に於ける所得とは、消費の爲めに生産せられ、而して其一定期間に於いて、消費者に引渡される一切の貨物及び勤勞の總量であらう。但し其外に、物的生産要素の消耗補塡に當るものは生産せられなければならない。此補塡を差引いた殘餘について云へば、生産＝所得＝消費となる。而して、貨幣の流通額は、此の生産額＝所得額＝消費額と、正確に一致するであらう。一社會の眞の所得は、消費者の手に引渡された貨物及勤勞の總量であると云ふことは、貨幣所得の受取者が消費の爲めに購つた貨物及勤勞の總量であると云ふことと同一となる。更らに詳しく云へば、勞賃、地代、利潤等の形に於いて支拂はれた貨幣所得の總和は、消費用の諸貨物及び勤勞を購ふに費される。從つて、其處には、貯蓄と云ふことは起らぬ、起り得ぬ、また起る必要もない。從つて眞の意味に於ける所得は存せぬ。眞の意味に於ける分配の問題は見出し能はぬ。アダム・スミスが、需要＝供給の均衡を破る除外例として認めた（一）技術及需要種類の變化（二）市場の景氣變動の二つは、發展なき經濟社會の前提によつて、之を考慮の外に置き得るとしたのは、理論的研究として許されたことである。（カッセル『理論經濟學の出立點』前掲所六七〇頁。）

現實の資本主義社會は、無論これとは異る。（シュムペーター『經濟發展の理論』第一版及第二版共に。）其處には、人口の增加がある。消費程度の向上がある、生産技術の進步と變遷がある。增加する人口の需要に應ずる爲めには、より多くの生産物が生産せられなければならぬ。即ち社會の生産は、其す

べてを通じて、生産手段の増加を要求する。増加する人口の求めに應じてより多くの商品が賣られ得る爲めには、其れに先つて、生産行程の各階段に於いて、より多くの資本、より多くの勞働が具へられてあらねばならぬ。其れを爲すの道は唯一つあるのみ。社會の貨幣所得の全額を産業行程の終末に於いて、消費用の完製品を購ふに、用ひ盡さず、其成部分を割いて、生産の各部面に亘りて、より多くの生産設備、より多くの機械等を作る爲めに、勞働者に支拂ふ可く充用せられねばならぬ。また、此の増加した資本を各種の生産行程に於いて、原料の加工精製に充用せねばならぬ。かくて、消費者に賣らるべき商品の量は、より大なるものとせられなければならぬ。發展なき社會に於いては、社會に流通する貨幣の全額は、生産行程の各段階に於いて、生産行爲を活かし、動かすことによつて、貨物の消費への進行を促しつゝ、全行程を通じて流通し行つて、其終末に及んで、生産品の一切を購ふに充てられ終る。支拂はれたる貨幣の全額は、生産せられ而して消費せらるゝ商品の全價と全く一致する。販賣者が受取りたる貨幣所得の全部は、再び同一の行程を繰返すことに當てらる。かくて、限りなき循環が繼續する。

現實の資本主義社會に於いては、左樣ではない。其受取らるゝ貨幣所得の或ものは、生産行程の進行中諸々の關所に喰ひ止められる。喰止められた貨幣所得は、其場所に於いて、從前の生産活動を維持するに要するよりより以上に、生産を促進する用に充てられるのである。だから、此の二つの流れを、マルクス流に表示して見れば、發展なき社會に於いては、

$$G—W—G$$

であるが、發展する資本主義社會に於いては、

$$G—W—G'$$

$$(G'=G+\Delta G)$$

である。

發展する資本主義社會に於ける最終の購買者(A)——最終の貨幣所得收得者——は、發展なき社會に於ける同一假定の場合に比しては、より少き貨幣所得しか收得しない。從つて、彼れは、其次の貨幣所得收得者(B)に對しても、より少き貨幣額をしか支拂ひ得ない。(B)はまた、其次の貨幣所得收得者(C)に對しても、同樣である。かくて、全産業行程に亘つて、より少き貨幣所得の額しか流通せぬこととなる。これは最終段に於ける商品の消費量の減少の作用である、其減少額は、即ち貯蓄せられたと云はれる。貯蓄せられたとは、貨幣所得の促進作用を全く停止することの謂ではない。其れは、消費者の手に商品の移り

行く階段に於いて、商品に對する需要に對して此の促進作用を及ぼすことを停止するの謂に外ならぬ。パレト『マヌアーレ』(一九〇九年刊)第九章四三八頁以下。佛譯では、四五九頁以下。ベンフキールド『產業組織四講』(一八四五年)。ホブソン『產業組織』一九二七年改訂版三九頁以下。

消費者の商品に對する需要額の減少は、生產全行程の進行中、何れかの一又は數階段に於いて、誰人かゞこれを餘儀なからしめたものである。其れは、需要の全體を減少するのではない、最終階段に於ける商品需要を減少するのである。此の減少は、其の先行過程中の或る一又は數階段に於ける需要の增加となつて現はれてゐるものである。需要全體として見れば減＝增、何等の差違はないのである。唯だ價格經濟學に於いては、最終階段に於ける商品需要を需要と見ることに限るるにより、一般に此れを需要の減少と稱するにすぎない。マーシアルは消費者需要と『トレーダース・デマンド』とを區別した。其れは、價格經濟學の中にあつては、實に卓越した見解と云はねばならぬ。

最終段の商品需要の促進から取り去られた貨幣所得は、生產行程の何れかの階段に在つて、依然として其促進作用を營む。其れはひとり、或る與へられた商品其ものゝ生產行程の上に限られない、幾多の旁系行程へも押し進み行く。諸價格相關の理は、近頃カッセルの力を置いて說くところである。諸所得相關の理に至つては、未だ斯くの如き力說者を見出し得ない。諸價格相關の理については、私の『教科書』中の其節。

發展なき社會にあつては、資本に向けられる生產活動は、唯だ其の消耗を補塡することに止る。マルクスの『不變資本』！これは、決して貯蓄ではない。發展する經濟社會に於いては、生產活動は、より多くの資本を作り出すことに向けられる。其れは既ち貯蓄である。パロート・リーフマン『貯蓄の理論』シュモラー年報掲載 現代の流通社會にあつては、消費は所得を以て消費品を備ふことを意味する。貯蓄は、所得を以て、生產財を購ふことを意味する。消費は商品の生產を促し、貯蓄は資本の生產を促す。消費の節約とは、需要の節約ではない。唯其の充用階段の轉化を意味する。乍去、所得は、如何なる場合にも之れを貯蓄することによりて、より多くの用を爲し得るものと考へてはならぬ。發展する社會は、これなき社會に比して、貯蓄の彈力性を著しく多く有つには相違ない。然し其れは無限なるものでもなく、また如何なる場合にも用あるものでもない。其處に必ず限度あり、其處に必ず選擇あるを要する。大熊教授の所謂『配分の原理』なるものが、此事を意味するならば、其れは正しい。マルクスの所謂『社會的必要勞働時間』の考へ方は、玆に甚だ深き洞察を與へる。社會的に必要な貯蓄のみが、眞の貯蓄である。『社會的に必要』といふことが曖昧なりと難ずる人は、先づマルクスについて、『社會的に必要な勞働時間』の曖昧なりや否やを吟

味して見なくてはならない。社會的に必要ならざる貯蓄に、厚生を害する。其れと同様に、社會的に必要な貯蓄を滅ずる消費も亦た、厚生を害する。何となれば、兩者何れも、社會の生産力を消盡するものであるから。前者を名けて、過超貯蓄と云ひ後者を名けて、過超消費と云ふ。而してまた同様に、過少貯蓄、過少消費も、厚生を害する。何となれば、其れは、社會の生産力を萎縮せしむるものであるから。現代の産業社會は、一定期間の所得の總額以上を消費し能はざるは、言ふまでもない。從つて、過超消費とは、所得以上を消費することを意味するものではない。生産力の維持と増進とに充てらるべきものを、直ちに消費することの謂である。生産力の維持と増進とに社會的に必要なる貯蓄と、同じく生産力の維持と増進とに社會的に必要なる消費との間には、其時々に應じた一の正しい配分の比例が存する。此比例を保つことが、眞の均衡である。(所謂エキリーブル・エコノミツク、需要と供給との均衡は其れではない)。

此の均衡を破るものは、生産に先行する生産諸條件の分配關係の中にも存する。其れと共に、生産行程の進行中に於ける貯蓄と消費との相互關係の間にも存する。更らにまた、マルタスがこれを大事さうに取扱ふことを嫌つた『消費手段の其時々の分配』關係の間にも存する。言葉を換へて云へば、生産方法の特徴の中にも存するし、勞働力賣買の交換課程の中にも存するし、更らにまた、諸々の生産關與者と諸々の生産非關與者との間にも存する。而してまた、所得收得者と所得徴發者たる國家、自治體、其他の團體との間にも存する。『餘剰價値鬪爭』は、元より、資本主義社會にあつては、先づ第一に、利潤所得者と賃銀勞働所得者との間に行はれる。これは、誰人の眼にも明なるところである。しかし乍ら、厚生經濟の立場から見れば、社會的に必要な所得と、社會的に必要ならざる所得――前者を『値する所得』、後者を『値せざる所得』と名けよう――との間に於ける鬪爭こそ、眞の厚生的意義を有つものであつて、雇主と雇傭勞働者との階級鬪爭に、其れが、此意味の眞の厚生鬪爭であるが故に、重大なる厚生的意義を有つものとなるのである。

國家、自治體、其他の公私の團體の強制的並びに任意的徴發には、所得の正しい分配を、或は助長し、或は阻碍する。また、國家、自治體の公企業も、同様の作用を有する。租税公課を以て、單に國家、自治體の消費の爲めの徴發と見るは、專制國家時代についても、全く誤つた觀察である。少しでも、社會政策的に目ざめた國家、自治體については、其の言說は更らに甚しい。私は自治體の公企業については、久しい以前から、此說を持して、所謂營造物手數料論に對抗しつゝあつた。幸ひに關博士は、當時に於いて、私の論に非とせられたところを

劈頭に至つて、覆へされた。（市營事業に關する同博士の論文、東京市政調査會發行。）

今日に於いて、所得の派生的分配の立場から見れば、國家、自治體の租稅、公課、並に其の諸々の公企業及公事業、社會政策的の諸々の事業及び施設は、幾多の過誤あるにも拘らず、これを、他の生產非關與者の所得、並びに生產關與者の不必要貯蓄及び消費――これらを一括して、不勞所得と名けてもいゝ。『値せざる所得』『ウンフェルヂーンテス・アイン・コメン』の意に於いて――に比するときは、正しき均衡の持ち來しに、著しく役立つことは、これを拒むことは出來ない。租稅論を經濟原理と並べて說くことを忘れなかつたアダム・スミスとリカルドとは、學問の體系に拘泥するものからは、非難されよう。現代資本主義社會の實相を捉らへる點に於いては、たしかに、透徹した取扱を試したものである。財政學を國家の家計學に追ひ落した獨逸の學問體系はこれに比すれば、遙かなる退步を示めすものである。（私は過ぐる二十八年間、唯一回財政學の講義をしたことがある。即ち明治四十一年堀江教授外遊中の代講であつた。其時此考へを始めて述べて見た。しかし、一人の賛成者をも見出さなかつた。）

## (六)

現代の資本主義社會に於いて生產せらるゝ餘剩は、何人かの手に所得となつて流れ込む。其の流れ込みは、交換流通の課程を經過せざるを得ない。所得の流れ込みは、これを分配と名ける。餘剩は生產せられつゝ直ちに流れ込むと見るは、費用原則に囚はれすぎた見方である。其の見方は、國家、自治體、其他の團體に流れ込む餘剩を說くことは出來ない。尤も獨逸の財政學はこれらを、派生的所得と見て、親のすねをかぢる道樂兒の小使錢と同樣に取扱ふ。公企業の主體を、單なる資本的企業者扱にするときは、勞農露國の社會組織をすら說くことも出來ぬ。

發展なき社會には、眞の分配の問題はない。適當の意味に於ける所得はない。其處には、單なる價格經濟が存するのみである。單なる費用原則が支配するのみである。其處では『すべてのもの皆其價を受く』るに止る。『其處では、各人へは、其給付に應じて』なる報復原則が行はれるに止る。其處では、『與ふるもの』『受くるもの』てふ均衡が存するのみである。現代の資本主義社會に於ける經濟的均衡（ワラス及びパレト）とは、其れではない。其れは單なる『ギヴ・エンド・テーキ』ではない。『テーキ・モーア・エンド・ギヴ・モーア』である。アリストテレースの所謂『幾何比例的均等』である。私は、其れを共產原則展開の一場面と見る。

發展なき産業社會、シュムペーターの意味に於ける『靜態經濟』の假定は、餘りに便利であつたが故に、永く我が學を支配した。而して費用原則と利用原則との葛藤は、我々を惱殺した。利潤なく利子なき經濟社會の假定は、論理の玩具としては、甚だ調法であつたであらう。然し玩具は必竟玩具である。獨逸の經濟學が大戰の苦を嘗めて、俄かに景氣變動論に於いて、アメリカに追從し始めたのも、靜態經濟學のチャムピオンたるシュムペーターが、其の『經濟發展の理論』改訂第二版に於いて、全く別人の觀を示めし來り、更らにまた、銀行、取引所、金融市場、國際的資本市場から遊離した經濟理論の無用を、俄かに高調力說すべく始めたのも畢に玩具に飽いた成童の目ざめとのみ見るべきではない。

『資本主義社會に於ける共産原則の展開』これが私の暫定的結論である。

『各人よりは、其能力に應じて』而して、『各人へは、其需要に應じて』てふ原則は、餘剩の生産、交換、分配の一切を通じて、一の赤き糸の如くに、現代の資本主義社會の機構の中に、織り込まれてゐる。價格經濟理論の中には、これは現はれ得ない。ひとり、所得經濟理論の中にのみ、現はれる。費用原則と利用原則との葛藤の中には、それは見ることは出來ない。餘剩原則の所在に目ざめ、端的に餘剩の流れ其ものを見るとき其處にかすかとはいへど、——見る人によつては、著しく——其姿を現はしてゐる。 これを、『經濟外力』の問題と見るは、トウガン・バラノフスキーの『社會的分配の理論』の死用である。私が價格決定に於ける權力の關與を力說したのは、今は昔しのこととなつたが、其れはホブソンが近く其の『産業組織』の改訂版第九章に說くが如き意であつた。猶、河上對高田兩博士の經濟と權力に關する近來の討論參照。

元より、現實の經濟社會は資本主義社會であつて、共産社會ではない。『各人へは、其需要に應じて』とは、元より『資本主義的有効需要に應じて』の意に於てのみ、其姿を示めすにすぎない。乍併、共産社會に於いてといへども、其の『需要』とは、單なる『直接生活資料』『享樂の對象』の其れではなかるべき筈である。共産社會が必要なりとする需要——『これを共産的有効需要』と名づけて差支あるまい——のことである。資本主義社會は、其の階級鬪爭により、其の『勞働協約』により、其の『最低又は生存勞賃』により、其の勞働保險其の失業保險により、而して、また、其の資本主義的國家及公團體の租稅、公課と、而して、諸々の公企業、公營造物により、『餘剩價値鬪爭』 拙著『階級鬪爭とその當事者』第一・二章 經濟學全集第五集二六五——四六三頁。 を、漸次に展開せしめつゝある。否、高度資本主義國の或もの(英國)に於いては、其れらに勝つて、其の失業問題に關する惱み、而して他方には、新資本主義國の或もの(日

本)に於いては、其人口問題にまつはる悩み（尤も高田博士に從へば、何等の悩みはなく、唯『産業振興』の問題あるのみだそうであるけれども。）更らに至められた高度資本主義國の現もの(獨逸)に於いては、生産力増進にかゝる悩み（ゾムバルトの社會政策學會に於ける有名なる報告『資本主義の變遷』(同會會報第一七五巻一九二九年刊)並にボン氏の『獨逸資本主義の運命』一九二六年刊）並びに、人口増加率支持又は引上げに關する煩悶(佛蘭西、伊太利、獨逸、但し夫れ〲に異なる意味に於いて)而してまた、米國や獨逸に於ける『産業合理化』運動など、などは、何れも、資本主義社會に於ける共産原則展開のエピソーデでなくして、何であらうぞ?

私は、右の如き考へ方の最初の叙述を試みた『階級鬪爭と其當事者』なる拙文へ、第三章として『資本増殖の理法と資本主義の崩壞』なる文を添加したことを、今に至つて甚だ誤れることなりと知る。後文の如きは、單なる算術遊戯をマルクスとトウガン・バラノフスキーとに模倣した偶殊にすぎない。さりとてゾムバルト教授の『晩期資本主義』の說（前掲報告を見よ）に追從するつもりをも有たぬ。資本主義社會は、內在的矛盾を有つとの見解に服し能はざることは依然たるのである。其れと同時に資本主義社會は、其進行に從つて、少くとも、ゾムバルトの所謂『高度資本主義』の姿の中に於いて、共產原則の展開——著しきと云ふことを許さるゝならば、左様言ふ——を、現實に、端的に示めしつゝあることを知らざる能はざるものである。

マルクスが解いたといはれる二つの難問。其一つは、勞働力の賣買。其の勞働力の賣買は、何故これを賣買と見なければならぬか。ブルヂオア民法でさへも、これを『雇傭』として、特別に取扱ふ。羅馬法の『ロカチオ・コンドクチヨ・オペラリス』『併に同く『オペリス』は、明かに、一つの賃借(雇傭及請負)である。勞働力は貸されるのであつて、賣られるのではない。引渡されるものは、マルクスに從つて勞働とするも、勞働力は唯其の使用を引渡さるゝにすぎない。勞働力其ものを引渡すのではない。玆に、勞働組合あり、玆に社會政策あり、玆に社會立法あり、其引渡しを、單なる賣買たらしめざる可く、少くとも努力だけはする。其處に『各人へは其需要に應じて』なる原則は、甚だ微弱ながら、其姿を現はす。しかし、其れは、勘定に入れずともいゝ。資本主義社會其ものゝ支持、其ものゝ發展は、此の共產原則を蹂躙することを、斷乎として拒む。相對的餘剩價値の增加は、此の拒否を支持する。無論其支持は、資本主義の爲めにされる。しかし、厚生社會其ものゝ立場から見れば、其れは、共產原則の展開を意味するに外ならぬ。

マルクスの解いたといはれる第二の難問、平均利潤率の謎。平均利潤率の現實的存在は、經驗的には、無論立證されぬ。しかし、假りにこれを許す。これを許すとき、其は、何を意味するか。產業の合理化は必竟するに、此の苦悶を免れんとの努力である。產業の合理化とは其れが技術の上に限られるとするも、猶『各人へは、其需要に應じて』てふ原則を、漸次に展開せしめる外はない。況んや、これを、經濟的に實現せんとすれば、先づ此原則の前に跪くにあらざる限り、其努力は徒勞に歸する。『テーラー主義』のすたれ、『フオルチズム』の起ることの說明は、かくせざれば與へられぬ。

ゴットル・オチリエンフエルド氏の諸文を見よ。

高田博士の此問題に關する一文は、其の人口論と同樣博士の『プロリフヰケーシー』の一產物たるにすぎまい。猶宮田喜代藏教授のマークト・シュライエリッシュならざる諸文往見すべし。經濟調查聯合會に於ける私の講演『產業の合理化と資本主義の前途』あり。言甚だ蕪雜なれども、私の考は正直に述べて置いた。

一九二五年の夏、私は伯林に於いて、ボン教授の厚意により、一夜を同氏の家に於いて、特に私と語る可く來會せられたゾムバルト、ヒルフアデング、其他の諸先輩と過した。其夜の會話題は主として、『資本主義の前途』であつた。ゾムバルト氏最も多く語り、私は最も少く語つた。ヒルフアデング氏は、切りと私の發言を促した。ボン氏は其後一書として刊行した『獨逸資本主義の運命』の要旨を示めして、私の評言を求めた。爾來烏兎匆々四ケ年の時間を空過し、私は、今漸く、此の一短文を草するを得た。唯だ恐る。其れは、諸先輩の一顧にも値せぬであらうことを。（終）（二九。五・五―六・三）

追記。此文を草し終れる日の朝ブレンタノ先生の『英國經濟發展史』の最終卷（第三卷の下）到着。八十六歲の老翁宿痾の眼病と鬪ひつゝ、ついに、此大著を完成されたことに驚畏せざるを得ぬ。而して、其總結論は、英國資本主義の運命論と日本、印度、支那其他有色人種の勃興に關する先生の斷案とから成る。私は過る若干月、先生と粗ぼ同一の問題について、商量した結果を、今本文に綴つたものなるを知り、尠からざる興味を覺へた。更らに、今朝の新聞紙上、マクドナルド氏が去八日親任式の夜の放送演說に於いて、產業組織の改造と失業問題の解決とを、新內閣の二大事業とする旨聲明したことを知つた。此內閣の成立が英國に於ける『共產原則の展開』に重大なる意義を有つに至るかも知れぬこと、而して、其れが英國資本主義の前途に、些少ならざる關係を有つであらうことを思ひ、私の興味は更らに一段の刺戟を覺へる。

（二九・六・十・）

# 動物界の生活難

川村多實二

近頃は新聞紙上で負債に苦んだ揚句一家族が揃つて身投したり、貧故に盗み騙りをして法網に觸れたりした記事を讀むことが多くなつたやうに思ふ。之に反して人間以外の動物は無事平穏なる生活を營み、不景氣生活難などの風は何處を吹くかと太平樂を並べてゐるかの如くに考へる人があるかも知れない。然し乍ら實際の處は、野生の動物は高等下等を問はず、四季晝夜間斷なく恐敵と飢餓に苦しめられつゝあるので、此點は人間以上である。然も彼等は自殺によつて此苦艱から脱するといふやうな卑怯な眞似をせず、惡戰苦闘斃れて後止むの意氣込で努力して居る點は或意味からいつて稱讚に値するものがあるのである。

動物が地球上にその生を續ける手段としては、單獨なる生活法もあれば、寄生、共生、又は群集の生活方法がある。少數のものは更に進んだ方法即ち社會生活をさへやつてゐるが、これ等の生活方法は皆その種族を保存せんが爲めに、即ち個體としては無事安穏にその生活を續け、適當の時期に子を產むで次代の生存を確保することを目的として案出せられたものである。尤も此案出といふ云ひ方は方便として使川するに過ぎないので、私が此稿の終りに近く説明する通り、動物自身が利害を考案してやつて居るのでは決して無い。若し之を設計した者があるとすれば、それは大自然の攝理である。若し又此攝理といふやうな言葉を忌むならば、偶然の成行の中で有利なるが爲めに殘されて益々助長せしめられた進化の一方向である。

さて、一種が他種に依賴して生存する寄生の場合、若しくは二つ以上の種類なり個體なりが協力して生活する場合をば合名會社か株式會社かに譬へて、單獨生活の場合を一個人の經營に相當するものと考へて、恰も是等の法人や個人が商工業界に於て、相競爭し、若くは相提携して營業を續けると同樣に、各種方法による生活者が一地方に雜然として住居し、各自は略ぼ一定した最大限度の數量を持して、互角に、にらみ合つてゐる狀況を生態學者は平衡狀態といふ。勿論長い進化史上の變遷を回顧して見れば生存競爭の落伍者たる絶滅種屬も決して少くないが、差當り現在の動物界では年々歳々略ぼ同一の種屬が同一の

比例を以て共に生存を續けてゐる。體制の簡單複雜、習性の巧拙からいつて、隨分程度を異にした各種の動物が雜居して、自由競爭の狀態にありながら、彼等の間に遂に優劣の勝負がつかないのは、何故であるか、天下無敵と自稱する人類が今尙ほ依然として他の高等下等の動物と輕重を爭ひ鎬を削らねばならぬ理由は何處にあるかといふことを考へて見る必要がある。

## 單獨生活者の受くる制限

凡そ生物界には現在の平衡狀態をなる可くそのまゝに持續せしめやうとする力が働いて居る。之が遂かに一種二種の動物に徹底的勝利を得せしめない樣に調節することになつてゐる。而して此平衡狀態の持續に關し有力なる原因が種々ある。其第一は食物である。食物が個體の數を制限することは、旣にマルサスの時代から知られてゐることで、或動物の增數を防壓するには、その糧道を絕つて飢えしめることが最も有効なる手段である。鼠をいくら十錢二十錢に買ひ上げても、世人が彼等の食物を隨處にこぼして置く間は決して鼠は減らない。少し減つたやうでも直ぐにまた元の通りになる。かくの如く食物が動物の蕃殖を制限する爲めに、動物食性の進化としては、單純なる食物をとるものが次第に多種類の食物をとるやうになる。尤も狸の如くに蛇蛙魚貝から塵相の野菜屑、遂には木の上の果實まで食ふやうなのと、狐の如くに野鼠、雞、兎と肉類のみに限られたのと比較すれば、後者の方が進化したものではあるが、唯一種に依賴してゐる動物は種々のものを攝り得る動物に比して、生活上の適應力が弱いことは爭はれない。北極の狐は鳥の多い夏季には鳥を而して鳥の少い冬季は兎を食ふ習性があるが、かういふ switch arrangement は澤山の動物にも亦見られる。半歲は害蟲を食ひ半歲は穀物を食ふために、學者は益鳥だと考へ、農民は害鳥だといふやうな場合もある。熱帶地方の鷺やマラグーとてコウノトリに近い鳥は獅子等が食ひ殘した屍體をつゝついて生活する所謂腐食性動物であるために腐つたものを食ふても中毒しない。何かの必要で人間が毒殺しやうとしてもなかなか目的を達せぬが、之も畢竟食物からの人口制限を脫せんとして變更せられた適應の一例である。要するに食物選擇の巧拙はあるけれども、いづれの種にあつても、其地域に與へられたる數量の食物を食ひ潰すとき、その個數は勢減退せざるを得ないのである。

第二には食物以外の土地の種々の狀態が或動物の無限の發育を阻止する。その原因となるものは決して一つや二つに限られないが、例へば海產の動物なれば水温とか鹽分濃度とか、波浪の衝擊とか、潮の干滿とかが、夫々或度の制限を加へる。米國東海岸に英國から侵入し來つた小さな卷貝(タマキビの一種)はボストン附近から始まつて次第に太西洋の岸を南下して往つたが、或所以南は進行することが出來ない。之は此貝の卵が耐へ得る水温に或限度があり、南方にはメキシコ灣流の影響で夏季にその限度以上に水温が上昇するからである。或場

合にはその原因を正確に指摘することの出來ぬ場合がある。例へば亞米利加にある有名な傳染病の睡眠病の媒介者たるツェツェ蠅はヴイクトリア湖中の島々の內で、或程度以上の面積の島には棲息せぬことが知られた。又概して島國の動物は大陸のものに比して形が小さく、發育のわるいのが通則となつて居るが、之なども或複雜なる原因のために生活上幾分不適當なる所があるからであらう。要するに、生活狀況として註文條件の多い種類の動物になる程、土地の狀況に制肘せらることが多いことが疑無い。

第三には自然敵（Natural enemies）の關係である。一地方にある動植物種屬は甲は乙に食はれ、乙は又丙に食はれるといふ風に、食物關係上一種の連鎖をなしてゐる。但し啻に食物關係ばかりでなく、寄生、共生の關係等も亦此連鎖を形成せしめる原因となる。此連鎖を Food chain 又は Food cycle といひ、時には同一種にして多數種に依頼するものがあつて、連鎖が Food pyramid となり、或は一層錯雜したる Food complex となる。いづれにしても、或一種の動物にとつては一方に食物として利益を與ふるものがある代りに、他方には自然敵として彼の頭を抑へる動物があるわけで、從つて若し彼が少しでも頭を擡げやうとすれば直に此自然敵が勢を得て、彼をとつちめることになるのである。然らば此連鎖の最後の輪を形づくる種、ピラミッドの頂端に位する動物は、何によつて制肘せられるかといふと、或時には食物である。曾て或孤島に放たれた兎の蕃殖を抑止するために猫を輸入したところ、兎が食ひつくされて、猫も亦餓死してしまつた實例がある。又或時には氣候である。南氷洋の動物界はプランクトンの甲殼類などから、準優勝戰で魚や烏賊に達し、更に最後の勝利はペンギンによつて占められる。北氷洋の陸地と違つて狐や北極熊の居ない南極では、ペンギン鳥は天下無敵である。然るに此地方は寒氣が激烈し、地上で卵を溫めたり雛を孵させたりすることが出來ないから王侯（エムペラア）ペンギンと呼ばれる一種の如きは脚の上に卵や雛をのせて、腹部の毛を以て之を包み僅に之を育てゝ居る有樣である、從つて雪嵐や崩雪に出遭へば雛や卵は一たまりも無く死んでしまふ。實際之が此鳥の無限增殖を制限する力であると報告せられる。

第四は天候氣象等による突發的狀況である。前三項に述べた制限をうまく切りぬけて、相當に多くの個數に達しつゝある動物が、急に襲ひ來つた寒氣のために、一齊に斃死し、恰かも拭ひ去つたかの如くに跡を絕つことがある。例へば亞細亞の中部、西比利亞の南方に、東西に通亘する高原は、一望廣漠たる草原で、野鼠や兎の類は勿論モルモツトに似た嚙齒類の小獸が多數棲息するところであるが、夫等は割合に繁殖力の强いものであり、野の草も亦頗潤澤に與へられて居るので、年々增加して時には非常な多數に達するのであるが、その中に恐ろしい酷寒が來たり、凍雨が降つて彼等の土窟に浸水して、一齊に横死せしめるのである。その有樣はクロポトキンを初め多數の旅行者を驚嘆せしめた位である。河岸の渚生生物も亦同樣で、大分よく發育し

比例を以て共に生存を續けてゐる。體制の簡單複雜、習性の巧拙からいつて、隨分程度を異にした各種の動物が雜居して、自由競爭の狀態にありながら、彼等の間に遂に優劣の勝負がつかないのは、何故であるか、天下無敵と自稱する人類が今尙ほ依然として他の高等下等の動物と輸贏を爭ひ鎬を削らねばならぬ理由は何處にあるかといふことを考へて見る必要がある。

### 單獨生活者の受くる制限

凡そ生物界には現在の平衡狀態をなる可くそのまゝに持續せしめやうとする力が働いて居る。之が遙かに一種二種の動物に徹底的勝利を得せしめない樣に調節することになつてゐる。而して此平衡狀態の持續に關し有力なる原因が種々ある。其第一は食物である。食物が個體の數を制限することは、既にマルサスの時代から知られてゐることで、或動物の增數を防壓するには、その糧道を絕つて飢えしめることが最も有効なる手段である。鼠をいくら十錢二十錢に買ひ上げても、世人が彼等の食物を隨處にこぼして置く間は決して鼠は減らない。少し減つたやうでも直ぐにまた元の通りになる。かくの如く食物が動物の蕃殖を制限する爲めに、動物食性の進化としては、單純なる食物をとるものが次第に多種類の食物をとるやうになる。尤も狸の如くに蛇蛙魚貝から塵埃の野菜屑、遂には木の上の果實まで食ふやうなのと、狐の如くに野鼠、雛、兎と肉類のみに限られたのと比較すれば、後者の方が進化したものではあるが、唯一種に依賴してゐる動物は種々のものを攝り得る動物に比して、生活上の適應力が弱いことは爭はれない。北極の狐は鳥の多い夏季には鳥を而して鳥の少い冬季は兎を食ふ習性があるが、かういふ Switch arrangement は澤山の動物にも亦見られる。半歳は害蟲を食ひ半歳は穀物を食ふために、學者は益鳥だと考へ、農民は害鳥だといふやうな場合もある。熱帶地方の鷲やマラグーとてコウノトリに近い鳥は獅子等が食べ殘した屍體をつゝついて生活する所謂腐食性動物であるために腐つたものを食ふても中毒しない。何かの必要で人間が毒殺しやうとしてもなか／＼目的を達せぬが、之も畢竟食物からの人口制限を脫せんとして變更せられた適應の一例である。要するに食物選擇の巧拙はあるけれども、いづれの種にあつても、其地域に與へられたる數量の食物を食ひ潰すとき、その個數は勢減退せざるを得ないのである。

第二には食物以外の土地の種々の狀態が或動物の無限の發育を阻止する。その原因となるものは決して一つや二つに限られないが、例へば海產の動物なれば水溫とか鹽分濃度とか、波浪の衝擊とか、潮の干滿とかが、夫々或度の制限を加へる。米國東海岸に英國から侵入し來つた小さな卷貝（タマキビの一種）はボストン附近から始まつて次第に太西洋の岸を南下して往つたが、或所以南は進行することが出來ない。之は此貝の卵が耐へ得る水溫に或限度があり、南方にはメキシコ灣流の影響で夏季にその限度以上に水溫が上昇するからである。或場

合にはその原因を正確に指摘することの出來ぬ場合がある。例へば亞米利加にある有名な傳染病の睡眠病の媒介者たるツエツエ蠅はヴイクトリア湖中の島々の內で、或程度以上の面積の島には棲息せぬことが知られた。又概して島國の動物は大陸のものに比して形が小さく、發育のわるいのが通則となつて居るが、之なども或複雜なる原因のために生活上幾分不適當なる所があるからであらう。要するに、生活狀況として註文條件の多い種類の動物になる程、土地の狀況に制肘せらることが多いことが疑無い。

第三には自然敵(Natural enemies)の關係である。一地方にある動植物種屬は甲は乙に食はれ、乙は又丙に食はれるといふ風に、食物關係上一種の連鎖をなしてゐる。但し啻に食物關係ばかりでなく、寄生、共生の關係等も亦此連鎖を形成せしめる原因となる。此連鎖を Food chain 又は Food cycle といひ、時には同一種にして多數種に依賴するものがあつて、連鎖が Food pyramid となり、或は一層錯雜したる Food complex となる。いづれにしても、或一種の動物にとつては一方に食物として利益を與ふるものがある代りに、他方には自然敵として彼の頭を抑へる動物があるわけで、從つて若し彼が少しでも頭を擡げやうとすれば直に此自然敵が勢を得て、彼をとつちめることになるのである。然らば此連鎖の最後の輪を形づくる種、ピラミッドの頂端に位する動物は、何によつて制肘せられるかといふと、或時には食物である。曾て或孤島に放たれた兎の蕃殖を抑止するために猫を輸入したところ、兎が食ひつくされて、猫も亦餓死してしまつた實例がある。又或時には氣候である。南氷洋の動物界はプランクトンの甲殼類などから、準優勝戰で魚や烏賊に達し、更に最後の勝利はペンギンによつて占められる。北氷洋の陸地と違つて狐や北極熊の居ない南極では、ペンギン島は天下無敵である。然るに此地方は寒氣が激烈し、地上で卵を溫めたり雛を孵させたりすることが出來ないから王侯(エムペロア)ペンギンと呼ばれる一種の如きは脚の上に卵や雛をのせて、腹部の毛を以て之を包み僅に之を育てゝ居る有樣である、從つて雪嵐や崩等に出遭へば雛や卵は一たまりも無く死んでしまふ。實際之が此鳥の無限増殖を制限する力であると報告せられる。

第四は天候氣象等による突發的狀況である。前三項に述べた制限をうまく切りぬけて、相當に多くの個數に達しつゝある動物が、急に襲ひ來つた寒氣のために、一齊に斃死し、恰かも拭ひ去つたかの如くに跡を絕つことがある。例へば亞細亞の中部、西比利亞の南方に、東西に通亙する高原は、一望廣漠たる草原で、野鼠や兎の類は勿論モルモツトに似た嚙齒類の小獸が多數棲息するところであるが、夫等は割合に繁殖力の強いものであり、野の草も亦頗潤澤に與へられて居るので、年々増加して時には非常な多數に達するのであるが、その中に恐ろしい酷寒が來たり、豪雨が降つて彼等の土窟に浸水して、一齊に斃死せしめるのである。その有樣はクロポトキンを初め多數の旅行者を驚嘆せしめた位である。河岸の着生生物も亦同樣で、大分よく發育し



間の岳より見たる白峰北岳（山田應水氏撮影）——木暮理太郎氏記事參照

# 寫眞解說

**第一頁　山の春　第二頁　山の夕暮　第三頁　ピッツ・ベルニナ**

山の寫眞家として圖抜けて優れた腕を持つ人としてアルベルト・シュタイナー氏を擧げる事は、アルプや氷河の間を放浪した經驗を持つ何人も躊躇しない事であらう。山の上に特有な空氣の色や香りや肌ざわりを彼程によく掴んで、之をレンズに通して再現した人は少い。特に彼の住むサン・モーリッツの周圍、即ち、アルペンの中でも特に綺麗な風物に富むと云はれて居るエンガディンの山々と之をとり圍むアルプの草原や小さい湖、それ等の物が造り出して居る獨特の淸々(すが)しい世界、それを表現する事に於てシュタイナーは確かに寫眞の世界に於けるセガンチニの地位を占めてゐる。

「山の春」　山はまだ雪がとけてゐないのに下のアルプではもう青草が芽生えて、花が微笑む。

「山の夕暮」　時季は前と同じ頃であらう。セガンチニの繪に之に似た背景が取扱はれて居る。

「ピッツ・ベルニナ」　エンガディンの最高峰(四、〇五二米)である。前の氷河はモルテラッチ氷河。

**第四頁　ラ・グランド・ルイヌとプロモントアールの登山小屋**

屏風の様なメイジュの岩壁にかけられた保壁の裾にあるプロモントアールの小屋が繪の中央のやゝ下に見える。登攀はその小屋の直ぐ左手におちて居る岩稜に沿ふてなされる。右下の谷はエタンソンの谷である。ラ・グランド・ルイヌ(三、七五四米)とはその形が如何にも偉大なる廢墟を想はせる所からつけられた名前であらう。

**第五頁　十一月の富士**

十一月の正午である。七合五勺の小屋からギラ〳〵光つて居る斜面に見とれて居るのは三人連れの一人である。氷は此の日中の太陽に少しも溶かされなかつた。

**第六頁　黑部川下廊下の奔湍**

下廊下新越澤落口下流の奔湍であつて、黑部峽谷中最も壯麗なる部分である。上流には新越瀑布三十米突の懸川あり、而して對岸の岩壁は直立三百米突を算す。

**第七頁上段　立山一ノ越の南望**

立山一ノ越よりの南望にして右より笠ケ岳、赤牛岳、黑岳、野口五郎岳、三ッ岳、大天井の群峰であつて、中央の遠望は槍、穗高の嵩岳である。(六月上旬)

**同頁下段　劒岳**

立山東面の別米丸山より北望せる劒岳の雄姿であつて左方に丸きは別山である。(六月上旬)

**第八頁　マッターホルンとダンデラン**

均齊の取れた美しい形、ぐんぐんと延びてゐる力強い線、そしてたつたひとりぼつち。朝の光に浮び出て來るマッターホルンを、谷向ふの山から眺めてゐると、心に思ひ得る一番醇いものゝ様に感じられる。ダンデランはマッターホルンの後に續く山で斷崖にかゝる氷が如何にも美しい。

**第九頁上段　ダンブランシュ**

マッターホルンをツムットの山稜から登つてゆくと、ダンブランシュが何時も何時も眞正面に眺められる。山に縦に入つてゐる襞が

心を惹きつける。寫眞の向つて右側の山稜は『國匠の臍馬の尾根』としてアルプスで有名な登攀のひとつになつてゐる。

**同頁下段　モンテローザ**

眞白に陽の光を反射する氷河に蔽はれたモンテローザの、その所々から眞黑な岩の峰が顔を出してゐる。その白と黑との對照が如何にも純でそして豁かである。

**第十頁上段　上田代から燧ケ嶽**

尾瀨ケ原の東に峙つ火山で、この地方での最高峯（二三六〇米）をなす燧ケ嶽を、原の西端から遠望したもので、前面は上田代と名けられる濕原の一部とそこに立つカラマツの巨樹やシラカバ等。

**同頁下段　尾瀨沼を距てゝ燧ケ嶽**

見所によつて著しく形の變はる燧ケ嶽を、尾瀨沼の東南端から仰いだもので、右端に見える隆起は三角點を戴くマナイタグラと呼ばれる第二高點、上圖の左端に見える最高點シバヤスダラは僅に頭上を顯すのみである。

**第十一頁上段　押出澤原から燧ノ高山**

尾瀨沼北岸に注ぐ押出澤に近い小濕原から望んだ燧ノ高山（一九三二米）で、この西北麓に長藏小屋がある。前景はこの小濕原の一部で、右手には尾瀨沼の一部が見える。左方の高い木はヒメコマツ。

**第十二頁上段　中田代から至佛山**

尾瀨ケ原の西に利根川との境に立つ至佛山は、燧ケ嶽に亞ぐ高峯で二二二八米と測られ利根地方での最高峯である。これを原の中部稍西に寄つた邊から、固定浮島を有する池塘を距てゝ仰いだもの。

**同頁下段　鬼怒沼**

鬼怒沼は海拔二千米以上の地にあつて、黑木立で圍まれた小濕原に大小三四十の池塘を堪へるもので、中でも最大の池を前景として東南に鬼怒川本流を距てゝ根名草山を望んだもの。左の峯が二三三〇米を算する最高點。

**第十三頁　シャスタ山頂の火口壁及び其破片岩**

シャスタ山頂火口壁の外輪にして前景は俗に「熔岩の庭園」と呼ばるゝ破片岩の累積歩行頗る難澁、向つて右の方に比較的近代噴火の跡の「レッド・ブラッフ」なる熔岩あり（寫眞には出でず）寫眞の外輪を越えて絕頂に向ふを常道とす（東側登山口）

**第十四頁上段　氷雲のシャスタ休火山**

向て右の後部の突起が絕頂シャスタ・ピーク（一萬四千百尺）にして左のやゝ低き部分はシャスチナ（一萬二千三百尺）の一部を示す。

**同頁下段　シャスタ山萬年雪のテーブル・ストン**

氷雪の上に漂石あり、日光を遮りて前後左右の雪融解すれども漂石を戴ける部分殘存して松茸の蓋の如き形狀をなす、氷卓とも稱せり。

**第十五頁上段　朝日岳附近より見たる北アルプスの連嶺**

**同頁下段　南より見たる雪倉岳**

此山は白馬嶽の北方一時間程の距離にあり、殘雪と高山植物に富み、就中豐麗なる高嶺薔薇の偃松中に點綴せるさま、萬綠叢中紅千點とも稱す可く美觀を極む。正面の窪地には小池あり、附近高山植物亂咲す。

**第十六頁　間の岳より見たる白峰北岳**

間ノ岳頂上北東側の大雪田より北面して北嶽を仰ぎ見たもの。頂上の三隆起は右のものが最も高い。中央のものは低けれども大岩塊をなし高山植物の美花繚亂す。左に遠きは甲斐の駒ケ嶽である。

# 某重大事件と政局の展開

いろいろの問題をめぐりて田中內閣に對し我識者の疑惑いよ〳〵濃厚となり、政界ばかりでなく、財界もこれに伴うて不安の度を高め、殆んどその歸趨するところを知らざるものの如くである。就中、滿洲某重大事件、不戰條約問題の如き國際的にその解決を重要とさるるものをいつまでも引きのばしてをるのは我國の國際的立場を不利にし、引いて我國の蒙る影響は經濟的に、政治的に非常なるものであらうことを信ずる。ただ不戰條約問題の如きその懸はるところは國體的に大きいものがあるが、それは內田君と外務省の惡意のない手落ちと、無知識から來た錯誤であることはたれにでもほぼ想見さるるところである。この問題を以つて直ちに倒閣の武器となすことは前にものべた通り我我の欲せざるところである。ただ滿洲某重大事件は我々はその眞相を知らない。隨つて國家的にどれだけの重大性が含まれてをるのかそれはわからない。しかし田中首相の解決が一日後るれば、後るるほど疑惑も深まり行くわけで、我國の國際政治上の立場もこれに並行して不利難局に陷る譯である。尙我陸軍威信の損傷は絕對的である。或者また三土藏相の辭意なるものを聞く。それがホンの噂であるか、眞實であるかは別問題として、とにかく金解禁、地租委讓等々の重要政策を遂行することが不能となつたことを適確に裏書するものであることだけは眞實だ。もしさうとしたら現內閣はこれで存立の意義を全く失つたと見るが妥當である。加之、人心は現內閣を全然離れ、至るところに政局の轉換を切望するものばかりである。田中首相はこれ等の事態を靜觀して政友會更生のために挂冠の一路を選ぶのが上分別だと思ふ。而して後繼として男らしく第二黨の黨首を推挽することが田中君が大きく生きるための唯一の殘された道であり、また政黨內閣制の常道を同くする意味においても當然の措置だと思ふ。いろいろと政友會の內輪のことを考へたり、失脚後の統率のことを案じたりすればそこに非常な困難はあるに違ひはあるまい。しかしこの困難を田中君が押切ることに依つてのみ光明は生れ來るのだ。我々は何も樞府や上院の惡氣流の瀰滿のためにしかく斷言するのではない。我々はいつでも國民的、國家的の高い立場より輿論を正視してゐる。大衆の眞の動きを洞觀してゐる。またこの機に當りて超然內閣の樹立に策動するが如きことあらばそれは永遠に政黨政治の墓穴を掘るものである。乞ふ、先づ英國政局の動きに見よ。某重大事件の解決？　政局の重大な危機はそこに潛んでゐる。



# 餘剰の生産、交換、分配

## ＝資本主義社會に於ける『共産原則』の展開＝

福田徳三

(一)

費用原則と利用原則との對立は、永く我々の經濟學に纏綿してゐる。學問の考察は先づ利用原則に目ざめる。希臘の經濟學は、利用の經濟學であつた。

勞働原則の形ちに於ける費用原則を發見したものは、基督教の教理を以て、アリストテレースを解釋したアルベルトスとトマソとであつた。トマソのニコマケア倫理の註釋は、名は註釋であつて、實は修正であつた。誰人も殆んど氣の付かぬ間に、此の巨匠は、利用原則を費用原則に回轉せしめた。アダム・スミスからマルクスに至る勞働價値論の基礎は、すでに其處に置かれてあつたのである。而して、明瞭に其清算を爲したものは、實にマルクスその人であつた。この清算に於て、マルクスはアリストテレースの價値論從つて其經濟學の全體を、正當に描出し、其根柢を覆すべく努めた。勞働原則としての費用原則

は、明かに利用原則と對立するものなることが、玆に明かにされた。併し、其れと同時に、マルクスは、其信條たる共產原則の實現を遙かに遠い將來へ押しやつた。

費用原則を固守する限り、共產原則は其實現性を失ふ。資本主義社會の本體を暴露する爲めには、費用原則は、最もよく役立つ。しかし其れと共に、唯物辨證法によらざる限り共產原則の展開は、絕望的とならざるを得ない。其反對に、アリストテレースの價値論從つて少くともニコマケア倫理に現はれた其の經濟觀は、共產原則の展開と相容るゝものである。其の所謂流通の正義とは、これを言ひ換へて、共產原則の正義と做すことが出來よう。

『流通社會の任意的取引流通にあつては、報復は人と人とを結び付ける連帶である。即ち、これは、一の比例に基く報復であつて、均等の報酬に基く報復ではない。何となれば、一のポリス（國家、社會）を結束するものは、比例的報酬の原則であるから。……我々は平方形の兩對角の結合によつて、比例的報酬を見出すことが出來る。……若し始めに、兩者の財の比例的均等が存してゐて、而して、これについて相互交換の行爲が起つたのならば、我々が示した通りの結果は、得られるであらう。反對に然らざる場合には、其取引は（始めから）均等でなかつたもので、從つてそれは妥當（有效とありしを斯く改む）でない。何となれば、一方の仕事が、他方の仕事に（價値の上に於いて）勝ることあり得るを妨ぐべき何物も存しないから。從て、兩者は、（先づ始めに）均等に持ち來たされてあらねばならぬのである。醫者と醫者との間には、流通は起らぬ。醫者と農夫との間には、流通は起る。一般に流通は相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから。これ即ち、交換されるものは、すべて、何等かの方法に於いて、通約的でなければならぬ所以である。……すべての財貨は、何か或る一物によつて測られるのでなければならぬ。此の評價の單位は眞實に於いては、需要である。需要は、すべての物を結び付ける（何となれば、若し人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを要することがないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は、成立たないであらうから）貨幣は、（唯だ）便宜上設定せられた、一種の需要代表物である。……すべての貨物は、一定の價格を附與せられてあらねばならぬ。かくてこそ、交換は、常に可能であり、從つてまた、人と人との間に、流通が成立し得るのである。貨幣は、一の尺度として働いて、すべての財を通約的ならしめ、而して、すべての財を均等ならしめる

のである。蓋し、交換行はれざれば、流通は成立せず、均等存せざれば、交換は行はれず、通約性成立せざれば、均等は行はれないからである。さて、眞實に於いて、かく、多くの相異る諸物が、通約的となることは、不可能なことである。乍去、需要の立場から見れば、相應に可能である。（通約には）單位となるものがなければならぬ。而して、其れは合意によつて、定められたものでなければならぬ、』

改造拙文『アリストテレースの流通の正義』（其四）八六—八九頁。

需要に對照して通約せられる比例的報復は、單なる均等の報酬であつてはならぬと云ふのが、ア氏の力點を置くところである。比例的報酬の原則は『一方の仕事が、他方の仕事に（價値の上に於いて）勝ることあり得』『從つて、兩者は、（先づ始めに）均等に持來されてあらねばならぬ』『醫者と醫者との間には、流通は起らず、醫者と農夫との間には起る』『流通は、相均しき者の間に起らず、互に相異る者の間に行はれる。何となれば、相異る者たちこそ、均等に持ち來たされることを要するものであるから』『人々が、相互に、他人のものを要すること全くこれなく、若しくは、均等に、相互のものを、要することないならば、交換は全く成立たないか、若しくは、相互同等の交換は成立たない』といふところの比例的報酬の原則は、費用原則ではない。所謂交換原則でもない。其れは、共產原則の最も早い、而かも或意味に於いては、甚だ徹底してゐる言ひ現はしでなくて、何であらうか。單なる均等報酬の原則と、アリストテレースの名くるもの、其れは卽ち費用原則であり、所謂交換原則であつて、ア氏は明かに、其の比例的報酬の原則を、之れと對抗せしめてゐるのである。匡正の正義と分配の正義とを對立せしめ、前者は算術的比例に從ひ、後者は幾何的比例に從ふとし、流通の正義も亦た幾何的比例に從ふものだとしたのは、更らに此の對抗を明瞭ならしめたものである。費用原則は、匡正の正義に屬し、算術的比例に從ふ。共產原則は、流通の正義に屬し、幾何的比例に從ふ。

流通の正義は、單なる利用原則を認むるものではない。其れは、共產原則の展開を許容するものである。此點に於いて現代の經濟理論家中最も深くアリストテレースに通ずるロシアのゲレスノフ氏の說も、未だ說いて精しからざるものと思ふ。

『經濟學原論』アルトシユル氏獨譯第二版（一九二八年刊）一九七頁以下、及『社會科學及社會政策集報』第五十卷第一册の拙論文『アリストテレースの經濟學的思界』。

マルクスは、たしかに、アリストテレースの論點を捉へた。しかし乍ら、私が嘗て指摘した通り、マルクスには尠からざる誤解が見出される。此誤解が、彼れに累して、彼は、ついに、アリストテレースの流

通の正義の中に、赤き絲の如くに貫通してゐる共產原則を逸し去らしめたものと思ふ。否、彼がブルヂオア社會の本體を暴露するに、最も有力なる理論として拉へ來つた費用原則、──勞働價値說──こそ、マルクスを誤解して、此の誤解に陷らしめたものであらうと思はれる。共產には、未だ見出されざる一の深い陷穽があるのであらう。私はマルクスの側からもアリストテレースの側からも、此の陷穽の見出しは、決して怠るべからざる仕事であると信ずる。

## （二）

『各人からは、其能力に應じて、各人へは、其需要（欲望）に應じて』なる『共產原則』は、ひとり、フランスの社會主義の獨占物ではない。分配論を大事そうに取扱ふことを以つて、俗流社會主義を嘲つた『ゴタ綱領批判』に於てマルクスも、亦これを、共產主義の高階段に於ける原則なりとしたのである。而して、此原則は、共產主義の第一期たる過渡時代、、、、、、、、、、、に於いては、未だ展開され得ず、其處に於いては『各人へは、其給付に應じて』なる『給付原則』（報復原則）が行はれるにすぎないとする。マルクスはいふ。『茲に我々が考察する社會は、其れ自らの基礎の上に發展したのでない一の共產的社會である。其れは反對に、資本主義社會から發生したものである。即ち、經濟的にも、倫理的にも、精神的にも、何れの關係に於いても、未だ其れから發生し來つた母胎たる舊社會の母斑を以つて纏はれてゐるものである。かるがゆへに、各生產者は、──諸々の差引をした上で──彼が社會に與へたものを、正確に還付して貰ふのみ△△を附せるは、私の補入した字句以下同じ。である。彼が社會に與へたものは、彼の個人的勞働量である。例。社會的勞働日は、個人的勞働時間の總和から成立つ。各個生產者の個人的勞働時間は、社會的勞働日の中、彼れの提供した部分、其れに於ける彼れの參加分である。彼れは、何程の勞働を給付したとの證明書共（同基本に對する彼れの勞働を控除して）を、社會から受取る。而して、此證明書と引換へに、消費手段の社會的蓄積から──彼れが提供した勞働と──同量の勞働を値するだけを取り出す。彼れは、一の形態に於いて、社會に與へた勞働量と同量の勞働を、他の形態に於いて、還へして貰ふのである。──故に──此場合に於ては、明かに、同一價値者間の交換たる限りの商品交換を左右すると同一の原則が支配するのである。但し、其の內容と形態は異る。何となれば、斯く變化した諸事情の下に於いては、誰人も、彼れの勞働以外何ものをも──社會に與ふること能はず、また、個人的消費手段以外、何ものも、各個人の所有に歸し能はぬから。しかし、消費手段の各個生產者間に於ける分配については、商品等價體の交換に於けると同樣なる原則が

支配する。即ち、一の形態に於けるだけの勞働が、他の形態に於ける其れだけの量の勞働と交換されるのである。……此くの如き進歩あるに拘らず、此の平等の權利は、未だ一のブルヂオア的制限を蒙るを免れない。諸生産者の權利は、夫れ〲の勞働給付に比例的である。平等は勞働てふ平等の標準を以つて測られると云ふことに存する——のみ——である。……これらすべての缺陷は、資本主義社會から、長い生みの惱みの後、やつと生れ出たばかりの共産社會の第一形相には不可避的なものである。權利は、經濟的形狀と、其れに條件付けられた社會の文化發展以上のものたり能はぬ。——然るに——共産社會のより高き形相に於いては分業の下に於ける個人の奴隷的從屬、其れと共に、精神的對肉體的勞働の對抗が消滅した後、勞働が單に生活の爲めの手段たるのみでなく、其れ自ら、第一の生活欲望となつた後、各個人のすべての側に於ける發展に伴つて、生産諸力が增大した後、而して、團體的富の一切の源泉がより豐かに流るゝとき、此時に至つて始めて狹きブルヂオア的權利水平は全く超越せられ、而して、社會は、其旗の上に『各人は、其能力に應じて、各人へは、其需要（欲望）に應じて』と認め得るのである』 『ノイエ・ツアイト』第九卷第十八號五六六—五六七頁。『ドイツ勞働黨綱領標註』（普通『ゴタ綱領批判』と名く。）構者經濟學全集第五集一一七八頁參照。

約して、これをいへば、マルクスは、資本主義社會の原則を絞取原則とし、第一次共産主義（レニンの解によれば、即ち社會主義）社會の原則を給付報復原則とし、高次共産主義（完全なる共産主義）社會の原則を共産原則なりとするものである。

正統派經濟學は、給付（報復）原則を、現社會の最根本原則と見る。其れは、グスタフ・カッセルの明かにした通り、事實に於いて費用原則である。『理論經濟學の出立點』國家學雜誌第五十八年度（一九〇二）六六八頁以下。 費用原則は、取りも直さず勞働原則であり、同時に所謂交換原則 シュムペーターの交換原則と餘剩原則との對立を見よ。 であつた。

カッセルはアダム・スミスに據る自由競爭の前提下に於ける價格の成立は三の根抵の上に立つと云ふ。（一）各生産物に對しては、唯一つの價格のみが成立つ（二）其價格は生産費と一致す（三）各生産要因に對しても亦た唯一つの價格のみが成立つ。而して、一方に於いては、すべての有効需要——價格を支拂ひ得る需要——は必ず充され、他方に於いては、また、すべての生産給付は、悉く所要せらるゝ樣に、生産は誘導せられる。これ即ち『費用原則』なりといふ。同上文六六九頁。 かくて需要＝供給、價格＝費用てふ均衡が成立するといふのが、アダム・スミスの出立點である。唯だ自由競爭が妨げられるとき、此の均衡は

破られる。經濟政策の當爲は、自由競爭を完全ならしめて、此均衡を支持することのみに存する。リカルドは更らに、此の生産費を勞働に歸一することによつて、アダム・スミスの多元觀に纒綿する矛盾と曖昧とを一掃し、費用＝勞働、卽、價格＝費用＝勞働なる公式を打建てた。カッセル『リカルドの生産理論と理論經濟學の第一の任務』國家學雜誌五十七年度（一九〇一年）六八頁以下。

マルクスの勞働價値論は、此の正統經濟學の費用原則を拉らへ來つて、逆まに、資本主義社會の本體を暴露したものにすぎない。資本主義社會を事實に於いて支配するものは、絞取原則である。費用原則は、價値の唯一眞實の解釋なりとせられる。此の解釋を、其儘資本主義社會に適用するとき、其處に、資本主義社會の矛盾せる正體は暴露せられる。他の何の解釋を輸入し來る必要もない。資本主義者其人の出立點に立戻りさへすれば、事は足りる。若しもアリストテレースの價値論の如きを拉し來るならば、其れは不可能である。ソコデ、彼は其の等價形態論の條下に、やゝ詳密に、アリストテレース説を商搉して、これを排撃するに力を用ゐたのである。前掲拙文參照　何となれば、アリストテレース氏説は、費用原則に對する一大敵國の觀を有つものであるから。だから、カウツキーはいふ。『事實に於いて、マルクスの價値理論は、社會主義とは、何等相渉るところなきものである。價値の理論は、社會主義の根柢ではない。却つて、今日の資本主義經濟の根柢である。マルクスの價値理論を排撃し得たりとて、社會主義は、爲めに、些も排撃し得られるものではない。此の理論は、我々に、社會主義を教ゆるものではない。却つて、其反對に、資本主義の運營を理解せしむるものである』『ノイエ・ツアイト』第三卷二八二頁。

マルクスの勞働價値説は、資本主義社會が絞取原則の支配するところなるを示めすには、無二の精鋭なる武具であつた。其れが餘りに力強いものである爲めに、甚だ多くの人は、敵の本能寺にあることを見出す能はず、此の前哨を以つて、敵の本營なりと考へ誤り、其攻撃、其排撃の主力を其處に集中した。元より若干の取除けはある。顯著なる例は、オッペンハイマーである。『マルクス社會學説の根本法則』一九〇三年刊　また英國現代の大古典學者たるリンドゼー氏である。『カール・マルクスの資本論』一九二五年。此著は啓蒙的の小册子であるけれども、マルクス評論中たしかに出色の作である。　多數の人々は、カウツキーの、而してまたベルンシュタインの警告あるにも拘らず、マルクス勞働價値論の排撃に沒頭沒身してゐる。而して、其殆んど何れもが、滿身の創痍を被つて衆人嘲笑の間に、撃退せられた。撃退される筈である。敵の主力は遙か別の處にあるから。河上博士は一九二五年頃福本氏との應酬以來、此の『クラデラッチ』から全く身をひかれた、從て、小泉教授の近時の評論は、『カノナード・インス・レーレ』であつた。

(三)

併し乍ら、私は、玆に一の他の問題の橫つてゐることを見る。絞取社會としての資本主義社會を暴露するに、甚だ役立つた正統經濟學の費用原則は、マルクスをして、餘剩の生產を十分に明かならしむるを得たと同時に、其れを生產の領域に閉ぢ込め過ぎしめた。費用原則を拉へたマルクスは、逆まに費用原則に拉へられた。資本論第一卷對第三卷の矛盾云々の觀察は、餘りにも淺薄である。しかし、其樣な淺薄な觀察を可能ならしめたものは、費用原則の『物神崇拜教』の致すところではなかつたであらうか?

マルクスはいふ。『いはゆる分配なるものを後生大事に取扱ひ、主力點を其上に置くことは誤りである。消費手段の其時々の分配は、生產諸條件其れ自らの分配の結果たるにすぎないものである。生產諸條件の分配は、また、生產方法の一特徵である。例。資本主義的生產方法は次ぎのことの上に立脚する。物的生產諸條件は、資本所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ、他方、大衆は、單に、人的生產條件たる勞働力の所有者たるにすぎざること、これである。生產の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば、今日の如き消費手段の分配は、當然其から生じ來る。——然るに——物的生產諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば、今日のとは異る消費手段の分配は、同じく、當然に其れから生じ來る。俗流社會主義(其の中でもデモクラシーの一部)は、俗流經濟學から、分配を生產方法から引離して、獨立的に考察し、取扱ふことを受け繼ぎ、從つて、社會主義を以つて、主として、分配を中心として回轉するものと說く。眞實の關係が、すでに、久しく明かにせられてゐる今日、何故あつて、再び跡戻りをするのか?』『ノイエ・ツアイト』第九年度第一卷第十八册五六八頁。(所謂『ゴタ綱領批判』)

『共產宣言』以來、マルクスもエンゲルスも、生產——而して第二次に交換——のみを經濟生活の本體と見るとは、誰人も一樣に唱へるところである。高田保馬博士『價格と獨占』にも、其れに追從したらしい有力な一論文が見出される。此點から見て改造六月號に揭げられた大熊信行教授の論文は、マルクスに對する理解十分ならざるの嫌あることを免れまい。乍去、我々が耳に『たこ』の生ずるほど屢々說き聞かされるマルキシストの此點に關する力說は、私を以て見れば、却つて、マルクスの眞意を歪めたものではあるまいかと思はれる。マルクスは、右の引用句にいとも明瞭に、生產諸條件の生產先行的分配を說いてゐるではないか。唯だ彼れの俗流社會主義に——而して、俗流經濟學に——責めるところは、『消費手段の其時々の分

配』を、後生大事に取扱ひ、其れが『生産諸條件其れ自らの分配の結果たること』を悟らないことこれである。元より彼は、此の『生産諸條件の分配』を以つて、『生産方法の一特徴である』としてゐる。從つて輕卒にこれを見れば、すべては、『生産』に歸着するが如く考られよう。乍去、『物的生産諸條件は、資本所有並に土地所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ』『生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば』『今日の如き消費手段の分配は、當然其れから生じ來る』といひ、『物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば』『今日のとは異る消費手段の分配は、同じく當然に其れから生じ來る』と、一の疑似曖昧を容れざる斷言を爲してゐるではないか。大熊教授の『配分の原理』なるものは、私は未だ十分にこれを究めず、また理解し得ないものであるが、其れが生産先行的なる生産諸條件――諸要素――の分配を意味するものならば、マルクスは明かにこれを認めるものであり、大熊教授が『配分』と嚴密に區別すべしと主張する『分配』がマルクスのいふ『消費手段の其時々の分配』に當るものならば、教授の嚴密區別論は、此點に於いては、マルクスの贊同するところであらう。

此考察は、若干の吟味を重ぬるときは、同樣にリカルドにも適用し得られるかの如くである。いふまでもなく、リカルドは、『分配』を以つて經濟學の主問題としたことは、其『諸原理』の序文に明かに示されてゐるところである。『土地の生産物――勞働と機械と資本との結合投下に由て、土地の表面より取得らるゝ一切のものは、共同社會の三階級の間に分割せられる。……併し乍ら、社會發達の異なる段階に於ては、地代、利潤及び賃銀なる名稱の下に、是等諸階級の各個に割り當てらるべき土地全産物の比例も、亦た大に異なるであらう。……此分配を左右する諸法則を決定すること、これが經濟學の主要問題たるものである』（小泉教授邦譯本三頁。堀教授同上一頁。）併し乍ら、カツセル教授のいとも明快に示した如く、リカルドは、先づ地代を生産費以外に驅逐し、利潤を勞銀に還元することによつて、其費用原則を勞働原則に歸一したのである。從つて、此立場より見れば、主要問題たる分配は三階級間の分割としては殘るに相違ないが、『此分配を左右する諸法則の決定』は、勞働原則――費用原則――の一の運用に外ならないこととなり、其れが經濟學の主要問題たる實は、殆んど意味を失つて仕舞つたと云はねばならぬのではないか。

唯玆に、勞賃と平均利潤との問題が殘る。而も、其れは、リカルドにあつて問題たりしのみではない、マルクスにあつても、一の重要なる問題であつたのである。否、堀教授は斷言していふ。『彼（マルクス）

は、リカルドウの學說を十分に理解し、しかも、正當なる論理を以て、之を發展せしめたといふ特徵を有つてゐる。これ、私が、彼れを以つて、勞働價値論の完成者なりとなす所以である。而して、彼れの功績の中、最も大なるものは、勞働價値より生産價格への「轉化」を論じて、リカルドウを、眞に惱ました所の難點を解決したることこれである。かくの如く、マルクスに至るまでのリカルドウの勞働價値論は、或は通俗化せられ、或は變形せられ、或は否定せられつゝ、可なり數奇なる運命を辿り來つたのであるが、惟ふに、それは、リカルドウ自身が、十分に取除き得ざりし「平均利潤」てふ躓き石の存在に基因するものであつた。………最後に、この石の周圍を掘つて、之を沈下せしむることによつて….この難所を平坦ならしむることを主張せる者（マルクス）が勝を制したのである』『リカルドウの價値論及び其の批判史』五七七――五七八頁。因に云ふ、堀教授の此書は、邦文で書かれた經濟學說批判の書（マルクスについてのものまでも含めて）中私が今日まで寓目し得た限りに於いて嶄然一頭地を拔くもので、『研究』なる甚だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へずこれを適用し得るものと信ずる。但し所論の內容については、私に異存なきわけではない。

『平均利潤』の謎の解答は、生産の問題ではない、分配の問題である。マルクスが、リカルドを惱ました此問題を解答したことは、たしかに、大なる業績であつた。乍併、其れと同時に『消費手段の其時々の分配』を、經濟學の領域から驅逐すべしとの主張は、其の努力の中に、其影を著しく薄くしたことは否み難い。『資本論』第一卷對第三卷矛盾云々の淺薄な觀察は、其處に惠まれた沃土を見出した。

## （四）

費用原則の上に立つ正統經濟學は、決して、餘剰の存在を無視したものではない。シュムペーター氏が、其昔し、『交換原則』と『餘剰原則』とを對立せしめた立論は、若き日に於けるシュムペーター其人の如何に、其時すでに優秀なる理論學者たりしかを僅に示めした所以であらうと思ふ。カウツキーはいふ『マルクスは、餘剰價値の本體を發見したものではない。アダム・スミス以來、誰人も眞面目に、經濟學を學んだ人ならば、餘剰價値の存在することを知つてゐる。乍去、マルクスは、餘剰價値は、其れが生産せられるとき、すでに成立するものなるを示めした第一人者である。此れによつて、餘剰價値は、資本主義的生産方法を理解すべき鍵となるを得たのである』『ノイエ・ツアイト』一八八六年五五頁。

餘剰價値の生ずる源は、生産先行的なる生産諸條件の配分の中にすでに存してゐる。其れが、生産せられるとき、すでに成立する所以は、

勞働力の賣買』てふ交換過程によつて說明される。エンゲルスは『資本論』第二卷の序中にいふ『ラヴオアシエーがプリーストレー及びシエーレに於ける關係は、マルクスの餘剩價値理論の諸先輩に於ける關係である。我らが今餘剩價値と名くる生產物價値部分の存在は、マルクス以前すでに久しく確認されてゐた。同樣に、何から其れが成立つか、卽ち其れは、勞働の生產物から成立ち、其れに對しては、其收得者は、何等の對價を支拂はぬものであることも大なり小なりの明瞭さを以て主張されてゐたのである。……彼れ（マルクス）は、貨幣の資本への轉化を研究し、而して、其れは、勞働力の賣買に存することを證明した。彼は、玆に、勞働力卽ち價値創造的性能を、勞働に代位することによつて、リカルド學派を斃した困難卽ち、資本と勞働との相互交換をリカルドの勞働による價値決定の法則と一致せしむるの不可能を一擧にして解決したのである。……一の價値を有するものは勞働ではない。……商品として買はれ而して賣られるものは、勞働ではなく、勞働力である』（序の二一―二二頁。）

乍併、マルクスの此發見は、割合に永い時間を要した後、完成したものであつて、其以前には、此點についての彼の說は、甚だ不徹底のものであつたことは、周知の事實である（私が曾て河上博士の『勞賃と資本』の第一邦譯に對して妄言を敢てしたのは、此顚末の重要性を明かにしたい爲めであつた。幸に河上博士は、拙言を悉く容れて、其邦譯を改められた。回顧すれば、其は一昔前のこととなつた。）他方に於いて、リカルドは、必ずしも、此點について、全く何事もなさなかつたものでないことは、堀教授の力作これを詳細に論究して、殆んど遺憾ない。此一事だけを以てしても、私は堀教授の純一無雜の研究者としての態度に深厚なる敬意を捧げざるを得ない。乍去、マルクスの透明は、たしかに、前人未踏の分野を開拓したものであつて、堀教授の詳論を以てしても、リカルドにまつはる陰影は、これを一掃することは出來ない。

併し、玆に、私は公平無私なる諸研究者に一考を煩したい。賣られ而して買はれるものは、勞働にあらず、勞働力であるといふことは、生產過程に於ける問題ではない。其れは、交換（賣買）の問題である。無論其の賣買は、資本主義的生產方法の一特徵たるに相違ない。しかし、其特徵を成立せしめたものは、生產に先行する生產諸條件の分配關係これである。

かくてエンゲルスが、リカルドが之を解き能はずして斃れたと云ふ二つの難問の解答は、何れも、生產方法の上に於いて與へられず、交換及分配過程の中に於いて與へられたのである。二つの難問とは、

(一)「生きた勞働の一定量の價値たる勞賃は、常に生きた勞働の此の量によつて生產せられる生產物の價値より小である」(二)『同一額の資本は其適用する生きた勞働が如何に多くとも少くとも、同一時間には、平均的に、同一の利潤を生產する』これである。(一)は、勞働力の賣買を以て、(二)は平均利潤率の謎の解答を以つて、解かれた。二つの解答、其何れもが生產方法の上に於いては、與へられてないのである。解答の場面は、明かに流通行程の上に置かれてある。

餘剰は、生產方法の對象たるのみに止まらない。生產先行的なる分配過程の内に、すでに孕まれて居り、生產直前に於ける、勞働力の賣買てふ交換過程の中に、はぐくまれてゐる。其生れ出づるは、資本主義的生產過程の中にあるには相違ないが、生れたものは、其瞬間に成立したものではない。出生は、唯一つの『ツギャシエン・フオアガング』である。而して、人は木の股からは生れず。

商品の解剖を以つて、資本主義的生產の考察を始めるは、價格經濟學に取つては、而して、殊に費用原則を固守する限りは、正しい。併し、其れは、唯一の出立點ではない。

## (五)

資本主義社會の實證を暴露するに、費用原則は役立つ。甚だ役立つ。併し乍ら、然る限り、費用原則と利用原則との葛藤から脫出することは出來ない。ボエーム・バヴエルク教授の研究室へ學問的スパイとして這入り込んだブハーリンが、利喰經濟學に向けた嘲笑は、唯二三十册の本を讀んで、價値論を知り得たりとする人々の耳には、痛快に響く。しかし乍ら費用對利用原則の『クラデラッチ』は、其の爲めに、些も釋け能ふものではない。

ロバート・リーフマンが出生作たる『主觀的評價よりする價格の成立』は不遇の作であつた。しかし、私は其中に一の大きなものあるを見出した。(氏の其自傳に於ける私に對する感謝は私は心から喜んでこれを拜受する。)餘剰原則の確認は、即ち其れである。其れは、エンゲルスの言葉を借りれば、一のラヴオアシエー的回轉であつた。氏の其後の作は、今言及せず。

資本主義社會に分配の問題の存するは、否、抑も我が學に分配の問題の存し、深き洞察者リカルドが、其れを經濟學の主要問題——私は、あへて中心問題と云ふ——としたのは、餘剰原則こそ、資本主義社會を支配する根本原則であるからである。費用原則でもない、利用原

則でもない。だから、リカルドは、分配の問題は、其の勞働價値說と無關係に說き得るとさへ斷言したのである。曰く、『これを要するに地代勞賃並に利潤の諸大問題は、全生産物が、地主、資本主、及勞働者の間に分割せらるゝ比例によつて說明せられねばならぬ。而して、此比例は價値の理論と、本質的に結び付いてゐないものである』マカロックへの書簡集七二頁　此一節こそトウガン・バラノフスキーが其の無價値的分配論、權力分配論の出立點としたものである。(猶後段參照)唯だリーフマンの如く――而して私が長く贊同しつゝあつた如くに――此餘剰を、利用と費用との較差などと見てゐては發見以上一歩も進出するとは出來ぬ。發見せられた餘剰原則は、更らに、更らに尋究せられねばならぬ。而して其の眞の所在を見究めねばならぬ。其眞の見究めはこれを資本主義社會に於ける共産原則の展開にまで、導くものでなければならない。

資本主義社會は、所得獲得社會である。何となれば、それは餘剰の分配によつて、活き而して發展して行く社會であるから。餘剰のなきところ、餘剰の分配のなきところ、所得の問題は存し得ぬ。單なる『消費手段の其時々の分配』は、決して適當の意味に於て云ふ分配の問題を提供するものではない。ジエ・エー・ホブソンが、發展なき假定社會には分配の問題なしと斷言せるは、今猶私の耳朶に鏘々たる響を殘してゐる。『産業組識』第一版(一九一〇年刊)に於いて。猶一九二七年の其第二版をも見よ。一九二六年私は倫敦に於て氏と討することを榮としてゐた。『エコノミスト』の前主筆ハースト氏は私の意を諒として氏を招かれた。不幸にして、氏は病ありて來會せられず、私は其の夫人と長時會談した。夫人亦一個の經濟學者である。私は、ホブソン氏に慊れる所以を述べた。夫人は即ち諄々として、良人の持說を布演して教へられた。茲に一言して深き敬仰の意を新にしておく。　費用原則や利用原則の立場に立つ限り、其の經濟理論體系に、眞の分配問題――單なる比例にあらざる――の全く存せざることは、其原則の假定の上に立つ發展なき産業社會に分配の事實の存し得ざるに同じ。マルクスが、此理を道破したことは、其一事だけを以てして千古の卓見なりと云はざるを得ぬ。マルクスに少しもかゝはることなく、同じ洞察に到達したホブソン氏を私が現代英國理論家の第一位ホートレー、ビグー兩氏と並べて。而して、ケーンズ氏などは與らす。に置く所以は、其處にある。

餘剰の原則の上に立つ資本主義社會にして、始めて眞の分配の問題は起る。其れは、『消費手段の其時々の分配』と斷然混同すべきものではない。資本主義社會は、餘剰の生産交換分配の社會である。言を換へて云へば所得中心の社會である。階級の本質は、此所得の性質に存する其の多寡に存するのではない。其昔し河津河田其他諸博士に對して私の論じたところ、社會政策學會論叢にかゝげあり。　所得の性質とは、即ち、マルクスの所謂『生産方法』に對向するものである。其れを名けて、眞の意味に於ける『分配』といふのである。資本主義社會にあつては、欲望充足の行爲は、決して、經

濟行爲ではない。欲望充足の準備行爲、準備行爲の中、所得の配分

大熊教授の語を借用すれば

にかゝはる商量、適合の計慮的合理行爲こそ、經濟行爲である。マルクスの口吻を單に模して、經濟行爲は生産行爲なりとするはマルクスの意を裏切るものであつて、而して資本主義理論としては、沒理に墮するものである。言葉の整頓は、思想の困迷を掩ふことは出來ぬ。所得にかゝはる商量適合の計慮的合理行爲は、略して、これを所得行爲（アーニング、アクチヴヰチース）と名け得る。其れが卽ち經濟行爲の全體である。

私の『教科書』に於ける記述は、此意味を不十分にしか述べてゐない。

資本主義社會にあつては、物は保持せられず、所有せられる。所有も亦た、『エルヴエルブ』の故を以て、所得行爲であり、從つて、經濟行爲である。勞働も亦『エルヴエルブ』

曾て當時新進の某博士の經濟卽所有云々の論に接して私信を以て『エルヴエルブ』の考察缺く可からずと開陳した。答書に曰く『私は『營利』を所有と同樣に考へたくありません』と。博士は、『エルブエルゲ』てふ、ブュクセンシュッツ以來の成語の其の格段の意味をすら、知らなかつたのを見出して、私はついに討論を斷念した。事は、數年の昔に屬する。今は、學ばれたであらう？

たるの故を以て、經濟行爲となる。否、否、貨幣も亦『エルヴエルブ』の故を以て、經濟圈内に入り來る。

左右田博士の貨幣概念文化價値の說に、私が如何にしても、追從する能はざりしは、これが爲めである。私は問ふた。何故に、同じ樣に、所得概念文化價値を主張し得ざるやと。アモン氏も亦問ふた。何故に資本概念文化價値を主張し得ざるやと。これはアモン氏の處女評論であつた。私は其時すでに同氏の輕視するを許さゞる理論學者たるを知つた。今や我々の質問は、永しなへに、其答を得るの機會なくして已む。地上に於ける其墓未だ成らざる故博士の爲めに、學問上の墓を建つる人は誰れ。吁

經濟行爲は、欲望充足行爲にあらず、欲望の經濟的充足行爲なりと言つた其昔しのオッペンハイマー氏は、此消息を半ば解して終んだものであらう。

價格を以て理論經濟學の中心問題とするは、費用原則又は利用原則のみの上に立つブルヂオア學としては、正しい。人間の厚生經濟學としては、唯一つの便法たるにすぎない。マルクスは町人の經濟學を以て町人經濟社會の實體を痛快に暴露した。然し、後には、其便法の爲めに甚しい不便に遭遇した。餘剰原則の上に立ち、而して、資本的生産方法の下に、共産原則を展開しつゝある資本主義社會の實體は、かくして唯其一つの姿を現はしたにすぎない。

我々は所得を以て生きて行く。我資本主義社會は、生産に先行し、更らに生産諸條件の分配に先行する、この所得の分配によりて、維持せられ而して發展して行く。價格は此所得を決定する一の道具たるのみ。道具の吟味は肝要である。然し、其れは必竟道具の吟味たるに止る。其以上の何ものでもない。我々の經濟的存在に取つて、而して其を通して、我々の個の生存に取つて、意味を有つものは、獨り所得である。價格ではない。價格は意味を有つものゝ、其意味を測るメートルに

ぎない。所有も、貨幣も、我々の經濟生活に取つて、眞の意味を有つものではない。其れは、所得の形成上の現象態たるに外ならない。

だから、資本主義社會の止揚は、所得の止揚でなければならない。所得の存在にして、今日の儘なる限り、資本主義社會は止揚せられ能はぬ。從つて、資本主義社會の眞の檢討は、所得の檢討であらねばならぬ。商品の解剖、價格の吟味は、其れが所得の檢討に役立つ限りに於てのみ、意味を有つ。其以外には、一の意味をも有つものではない。リカルドが或は躓いたと云はれ、或は斃れたと云はれるところの難問を、解いたマルクスは、其れをリカルドが提出した姿に於てゞなく、所得の生産、交換、分配の問題に轉化するによつて、成し遂げたことは、我々をして、反省せしむ可きではないか。

所得は貨幣の一定額を以つて言表はされる。しかし、其れは云ふまでもなく、名目所得である。眞の所得は、其貨幣額の購ひ得るところのものである。發展なき社會——人口數、需要、生産方法に異動なき——を假定すれば、一定時期に於ける所得とは、消費の爲めに生産せられ、而して其一定期間に於いて、消費者に引渡される一切の貨物及び勞務の總量であらう。但し其外に、物的生産要素の消耗補塡に當るものは生産せられなければならない。此補塡を差引いた殘餘について云へば、生産＝所得＝消費となる。而して、貨幣の流通額は、此の生産額＝所得額＝消費額と、正確に一致するであらう。一社會の眞の所得は、消費者の手に引渡された貨物及勞務の總量であると云ふことは、貨幣所得の受取者が消費の爲めに購つた貨物及勞務の總量であると云ふことと同一となる。更らに詳しく云へば、勞賃、地代、利潤等の形に於いて支拂はれた貨幣所得の總和は、消費用の諸貨物及び勞務を購ふに費される。從つて、其處には、貯蓄と云ふことは起らぬ、起り得ぬ、また起る必要もない。從つて眞の意味に於ける所得は存せぬ。眞の意味に於ける分配の問題は見出し能はぬ。アダム・スミスが、需要＝供給の均衡を破る除外例として認めた(一)技術及需要種類の變化(二)市場の景氣變動の二つは、發展なき經濟社會の前提によつて、之を考慮の外に置き得るとしたのは、理論的研究として許されたことである。カッセル『理論經濟學の出立點』前掲所六七〇頁。

現實の資本主義社會は、無論これとは異る。シュムペーター『經濟發展の理論』第一版及第二版共に。其處には、人口の增加がある。消費程度の向上がある、生産技術の進步と變遷がある。增加する人口の需要に應ずる爲めには、より多くの生産物が生産せられなければならぬ。即ち社會の生産は、其

べてを通じて、生產手段の增加を要求する。增加する人口の求めに應じてより多くの商品が賣られ得る爲めには、其れに先つて、生產行程の各階段に於いて、より多くの資本、より多くの勞働が具へられてあらねばならぬ。其れを爲すの道は唯一つあるのみ、社會の貨幣所得の全額を產業行程の終末に於いて、消費用の完製品を購ふに、用ひ盡さず、其或部分を割いて、生產の各部面に亙りて、より多くの生產設備、より多くの機械等を作る爲めに、勞働者に支拂ふ可く充用せられねばならぬ。また、此の增加した資本を各種の生產行程に於いて、原料の加工精製に充用せねばならぬ。かくて、消費者に賣らるべき商品の量は、より大なるものとせられなければならぬ。發展なき社會に於いては、社會に流通する貨幣の全額は、生產行程の各段階に於いて、生產行爲を活かし、動かすことによつて、貨物の消費への進行を促しつゝ、全行程を通じて流通し行つて、其終末に及んで、生產品の一切を購ふに充てられ終る。支拂はれたる貨幣の全額は、生產せられ而して消費せらるゝ商品の全額と全く一致する。販賣者が受取りたる貨幣所得の全部は、再び同一の行程を繰返すことに當てらる。かくて、限りなき循環が繼續する。

現實の資本主義社會に於いては、左樣ではない。其受取らるゝ貨幣所得の或ものは、生產行程の進行中諸々の個所に喰ひ止められる。喰止められた貨幣所得は、其場所に於いて、從前の生產活動を維持するに要するよりより以上に、生產を促進する用に充てられるのである。だから、此の二つの流れを、マルクス流に表示して見れば、發展なき社會に於いては、

$$G-W-G$$

であるが、發展する資本主義社會に於いては、

$$G-W-G'$$

$$(G'=G+\Delta G)$$

である。

發展する資本主義社會に於ける最終の購買者(A)──最終の貨幣所得收得者──は、發展なき社會に於ける同一假定の場合に比しては、より少き貨幣所得しか收得しない。從つて、彼れは、其次の貨幣所得收得者(B)に對しても、より少き貨幣額をしか支拂ひ得ない。(B)はまた、其次の貨幣所得收得者(C)に對しても、同樣である。かくて、全產業行程に亙つて、より少き貨幣所得の額しか流通せぬこととなる。これは最終段に於ける商品の消費量の減少の作用である、其減少額は、即ち貯蓄せられたと云はれる。貯蓄せられたとは、貨幣所得の促進作用を全く停止することの謂ではない。其れは、消費者の手に商品の移り

行く階段に於いて、商品に對する需要に對して此の促進作用を及ぼすことを停止するの謂に外ならぬ。パレト『マヌアーレ』(一九〇九年刊)第九章四三八頁以下。佛譯では、四五九頁以下。ベンフキールド『產業組織四講』(一八四五年)。ホブソン『產業組織』一九二七年改訂版三九頁以下。

消費者の商品に對する需要額の減少は、生產全行程の進行中、何れかの一又は數階段に於いて、誰人かゞこれを餘儀なからしめたものである。其れは、需要の全體を減少するのではない、最終階段に於ける商品需要を減少するのである。此の減少は、其の先行過程中の或る一又は數階段に於ける需要の增加となつて現はれてゐるものである。需要全體として見れば減＝增、何等の差違はないのである。唯だ價格經濟學に於いては、最終階段に於ける商品需要を需要と見ることに限るにより、一般に此れを需要の減少と稱するにすぎない。マーシァルは消費者需要と『トレーダース・デマンド』とを區別した。其れは、價格經濟學の中にあつては、實に卓越した見解と云はねばならぬ。

最終段の商品需要の促進から取り去られた貨幣所得は、生產行程の何れかの階段に在つて、依然として其促進作用を營む。其れはひとり、或る與へられた商品其もの丶生產行程の上に限られない、幾多の旁系行程へも押し進み行く。諸價格相關の理は、近頃カッセルの力を置いて說くところである。諸所得相關の理に至つては、未だ斯くの如き力說者を見出し得ない。諸價格相關の理については、私の『教科書』中の其節。

發展なき社會にあつては、資本に向けられる生產活動は、唯だ其の消耗を補塡することに止る。マルクスの『不變資本』! これは、決して貯蓄ではない。發展する經濟社會に於いては、生產活動は、より多くの資本を作り出すことに向けられる。其れは既ち貯蓄である。ロバート・リーフマン『貯蓄の理論』シュモラー年報揭載 現代の流通社會にあつては、消費は所得を以て消費品を備ふことを意味する。貯蓄は、所得を以て、生產財を購ふことを意味する。消費は商品の生產を促し、貯蓄は資本の生產を促す。消費の節約とは、需要の節約ではない。唯其の充用階段の轉化を意味する。乍去、所得は、如何なる場合にも之れを貯蓄することによりて、より多くの用を爲し得るものと考へてはならぬ。發展する社會は、これなき社會に比して、貯蓄の彈力性を著しく多く有つには相違ない。然し其れは無限なるものでもなく、また如何なる場合にも用あるものでもない。其處に必ず限度あり、其處に必ず選擇あるを要する。大熊教授の所謂『配分の原理』なるものが、此事を意味するならば、其れは正しい。マルクスの所謂『社會的必要勞働時間』の考へ方は、茲に甚だ深き洞察を與へる。社會的に必要な貯蓄のみが、眞の貯蓄である。『社會的に必要』といふことが曖昧なりと難ずる人は、先づマルクスについて、『社會的に必要な勞働時間』の曖昧なりや否やを[illegible]

味して見なくてはならない。社會的に必要ならざる貯蓄に、厚生を害する。其れと同樣に、社會的に必要な貯蓄を減ずる消費も亦た、厚生を害する。何となれば、兩者何れも、社會の生產力を消費するものであるから。前者を名けて、過超貯蓄と云ひ後者を名けて、過超消費と云ふ。而してまた同樣に、過少貯蓄、過少消費も、厚生を害する。何となれば、其れは、社會の生產力を萎縮せしむるものであるから。現代の產業社會は、一定期間の所得の總額以上を消費し能はざるは、言ふまでもない。從つて、過超消費とは、所得以上を消費することを意味するものではない。生產力の維持と增進とに充てらるべきものを、直ちに消費することの謂である。生產力の維持と增進とに社會的に必要なる貯蓄と、同じく生產力の維持と增進とに社會的に必要なる消費との間には、其時々に應じた一の正しい配分の比例が存する。此比例を保つことが、眞の均衡である。（所謂エキリーブル・エコノミツク、需要と供給との均衡は其れではない）。

此の均衡を破るものは、生產に先行する生產諸條件の分配關係の中にも存する。其れと共に、生產行程の進行中に於ける貯蓄と消費との相互關係の間にも存する。更らにまた、マルクスがこれを大事さうに取扱ふことを嘲つた「消費手段の其時々の分配」關係の間にも存する。言葉を換へて云へば、生產方法の特徵の中にも存するし、勞働力賣買の交換課程の中にも存するし、更らにまた、諸々の生產關與者と諸々の生產非關與者との間にも存する。而してまた、所得收得者と所得徵發者たる國家、自治體、其他の團體との間にも存する。『餘剩價値鬪爭』は、元より、資本主義社會にあつては、先づ第一に、利潤所得者と賃銀勞賃所得者との間に行はれる。これは、誰人の眼にも明なるところである。しかし乍ら、厚生經濟の立場から見れば、社會的に必要な所得と、社會的に必要ならざる所得——前者を『値する所得』、後者を『値せざる所得』と名けよう——との間に於ける鬪爭こそ、眞の厚生的意義を有つものであつて、雇主と賃銀勞働者との階級鬪爭は、其れが、此意味の眞の厚生鬪爭であるが故に、重大なる厚生的意義を有つものとなるのである。

國家、自治體、其他の公私の團體の强制的並びに任意的徵發に、所得の正しい分配を、或は助長し、或は阻碍する。また、國家、自治體の公企業も、同樣の作用を有する。租稅公課を以て、單に國家、自治體の消費の爲めの徵發と見るは、專制國家時代についても、全く誤つた觀察である。少しでも、社會政策的に目ざめた國家、自治體については、其の誤謬は更らに甚しい。私は自治體の公企業については、久しい以前から、此說を持して、所謂營造物手數料說に對抗しつゝあつた。幸ひに山田博士は、當時に於いて、私の論に非とせられたところを

近頃に至つて、飜へされた。（市營事業に關する同博士の論文、東京市政調査會發行。）

今日に於いて、所得の厚生的分配の立場から見れば、國家、自治體の租稅、公課、並に其の諸々の公企業及公事業、社會政策的の諸々の事業及び施設は、幾多の過誤あるにも拘らず、これを、他の生產非關與者の所得、並びに生產關與者の不必要貯蓄及び消費──これらを一括して、不勞所得と名けてもいゝ。『値せざる所得』『ウンフェルヂーンテス・アイン・コメン』の意に於いて──に比するときは、正しき均衡の持ち來しに、著しく役立つことは、これを拒むことは出來ない。租稅論を經濟原理と並べて說くことを忘れなかつたアダム・スミスとリカルドとは、學問の體系に拘泥するものからは、非難されよう。現代資本主義社會の實相を捉らへる點に於いては、たしかに、透徹した取扱を露したものである。財政學を國家の家計學に追ひ落した獨逸の學問體系はこれに比すれば、遙かなる退歩を示めすものである。

私は過ぐる二十八年間、唯一回財政學の講義をしたことがある。即ち明治四十一年堀江敎授外遊中の代講であつた。其時此考へを始めて述べて見た。しかし、一人の贊成者をも見出さなかつた。

（六）

現代の資本主義社會に於いて生產せらるゝ餘剩は、何人かの手に所得となつて流れ込む。其の流れ込みは、交換流通の課程を經過せざるを得ない。所得の流れ込みは、これを分配と名ける。餘剩は生產せられつゝ直ちに流れ込むと見るは、費用原則に囚はれすぎた見方である。其の見方は、國家、自治體、其他の團體に流れ込む餘剩を說くことは出來ない。尤も獨逸の財政學はこれらを、派生的所得と見て、親のすねをかぢる道樂兒の小使錢と同樣に取扱ふ。公企業の主體を、單なる資本的企業者扱にするときは、勞農露國の社會組織をすら說くことも出來ぬ。

發展なき社會には、眞の分配の問題はない。適當の意味に於ける所得はない。其處には、單なる價格經濟が存するのみである。單なる費用原則が支配するのみである。其處では『すべてのもの皆其價を受く』るに止る。『其處では、各人へは、其給付に應じて』なる報復原則が行はれるに止る。其處では、『與ふるもの』『受くるもの』てふ均衡が存するのみである。現代の資本主義社會に於ける經濟的均衡ワラス及びパレトとは、其れではない。其れは單なる『ギヴ・エンド・テーキ』ではない。『テーキ・モーア・エンド・ギヴ・モーア』である。アリストテレースの所謂『幾何比例的均等』である。私は、其れを共產原則展開の一場面と見る。

發展なき產業社會、シュムペーターの意味に於ける『靜態經濟』の假定は、餘りに便利であつたが故に、永く我が學を支配した。而して費用原則と利用原則との葛藤は、我々を惱殺した。利潤なく利子なき經濟社會の假定は、論理の玩具としては、甚だ調法であつたであらう。然し玩具は畢竟玩具である。獨逸の經濟學が大戰の苦を嘗めて、俄かに景氣變動論に於いて、アメリカに追從し始めたのも、靜態經濟學のチヤムピオンたるシュムペーターが、其の『經濟發展の理論』改訂第二版に於いて、全く別人の觀を示めし來り、更らにまた、銀行、取引所、金融市場、國際的資本市場から遊離した經濟理論の無用を、俄かに高調力說すべく始めたのも單に玩具に飽いた成童の目ざめとのみ見るべきではない。

『資本主義社會に於ける共產原則の展開』これが私の暫定的結論である。

『各人よりは、其能力に應じて』而して『各人へは、其需要に應じて』てふ原則は、餘剩の生產、交換、分配の一切を通じて、一の赤き糸の如くに、現代の資本主義社會の機構の中に、織り込まれてゐる。價格經濟理論の中には、これは現はれ得ない。ひとり、所得經濟理論の中にのみ、現はれる。費用原則と利用原則との葛藤の中には、それは見ることは出來ない。餘剩原則の所在に目ざめ、端的に餘剩の流れ其ものを見るとき其處にかすかとはいへど、――見る人によつては、著しく――其姿を現はしてゐる。 これを、『經濟外力』の問題と見るは、トウガン・バラノフスキーの『社會的分配の理論』の死用である。私が價格決定に於ける權力の關與を力說したのは、今は昔しのこととなつたが、其れはホブソンが近く其の『產業組織』の改訂版第九章に說くが如き意であつた。猶、河上對高田兩博士の經濟と權力に關する近來の討論參照。

元より、現實の經濟社會は資本主義社會であつて、共產社會ではない。『各人へは、其需要に應じて』とは、元より『資本主義的有効需要に應じて』の意に於てのみ、其姿を示めすにすぎない。乍併、共產社會に於いてといへども、其の『需要』とは、單なる『直接生活資料』『享樂の對象』の其れではなかるべき筈である。共產社會が必要なりとする需要――『これを共產的有効需要』と名づけて差支あるまい――のことである。資本主義社會は、其の階級鬪爭により、其の『勞働協約』により、其の『最低又は生存勞賃』により、其の勞働保險其の失業保險により、而して、また、其の資本主義的國家及公團體の租稅、公課と、而して、諸々の公企業、公營造物により、『餘剩價値鬪爭』拙著『階級鬪爭とその當事者』第一・二章 經濟學全集第五集二六五――四六三頁。を、漸次に展開せしめつゝある。否、高度資本主義國の或もの(英國)に於いては、其れらに勝つて、其の失業問題に關する惱み、而して他方には、新資本主義國の或もの(日

本）に於いては、其人口問題にまつはる悩み（むしろ高田博士に從へば、何等の悩みはなく、唯『産業振興』の問題あるのみだそうであるけれども。）更らに歪められた高度資本主義國の最もの（獨逸）に於いては、生産力増進にかゝる悩み（ゾムバルトの社會政策學會に於ける有名なる報告『資本主義の變遷』（同會叢書第一七五卷一九二九年刊）並にボン氏の『獨逸資本主義の運命』一九二六年刊）並びに、人口増加率支持又は引上げに關する煩悶（佛蘭西、伊太利、獨逸、但し夫れ〲に異なる意味に於いて）而してまた、米國や獨逸に於ける『産業合理化』運動など、などは、何れも、資本主義社會に於ける共産原則展開のエピソーデでなくして、何であらうぞ？

私は、右の如き考へ方の最初の叙述を試みた『階級鬪爭と其當事者』なる拙文へ、第三章として『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』なる文を追綴したことを、今に至つて甚だ誤れることなりと知る。後文の如きは、單なる算術遊戲をマルクスとトウガン・バラノフスキーとに模倣した愚擧にすぎない。さりとてゾムバルト教授の『晩期資本主義』の説（前掲報告を見よ）に追從するつもりをも有たぬ。資本主義社會は、內在的矛盾を有つとの見解に賛し能はざることは依然たるのである。其れと同時に資本主義社會は、其進行に從つて、少くとも、ゾムバルトの所謂『高度資本主義』の姿の中において、共産原則の展開――著しきと云ふことを許さるゝならば、左樣言ふ――を、現實に、端的に示めしつゝあることを知らざる能はざるものである。

マルクスが解いたといはれる二つの難問。其一つは、勞働力の賣買。其の勞働力の賣買は、何故これを賣買と見なければならぬか。ブルヂオア民法でさへも、これを『雇傭』として、特別に取扱ふ。羅馬法の『ロカチオ・コンドクチヨ・オペラリス』併に同く『オペリス』は、明かに、一つの賃借（雇傭及請負）である。勞働力は貸されるのであつて、賣られるのではない。引渡されるものは、マルクスに從つて勞働とするも、勞働力は唯其の使用を引渡さるゝにすぎない。勞働力其ものを引渡すのではない。玆に、勞働組合あり、玆に社會政策あり、玆に社會立法あり、其引渡しを、單なる賣買たらしめざる可く、少くとも努力だけはする。其處に『各人へは其需要に應じて』なる原則は、甚だ微弱ながら、其姿を現はす。しかし、其れは、勘定に入れずともいゝ。資本主義社會其ものゝ支持、其ものゝ發展は、此の共産原則を蹂躙することを、斷乎として拒む。相對的餘剩價値の增加は、此の拒否を支持する。無論其支持は、資本主義の爲めにされる。しかし、厚生社會其ものゝ立場から見れば、其れは、共産原則の展開を意味するに外ならぬ。

マルクスの解いたといはれる第二の難問、平均利潤率の謎。平均利潤率の現實的存在は、經驗的には、無論立證されぬ。しかし、假りにこれを許す。これを許すとき、其は、何を意味するか。産業の合理化は必竟するに、此の苦悶を免れんとの努力である。産業の合理化とは其れが技術の上に限られるとするも、猶、『各人へは、其需要に應じて』てふ原則を、漸次に展開せしめる外はない。況んや、これを、經濟的に實現せんとすれば、先づ此原則の前に跪くにあらざる限り、其努力は徒勞に歸する。『テーラー主義』のすたれ、『フオルヂズム』の起ることの說明は、かくせざれば與へられぬ。ゴットル・オチリエンフエルド氏の諸文を見よ。

高田博士の此問題に關する一文は、其の人口論と同樣博士の『プロリフキケーシー』の一產物たるにすぎまい。猶宮田喜代藏教授のマークト・シユライエリッシユならざる諸文往見すべし。經濟調査聯合會に於ける私の講演『產業の合理化と資本主義の前途』あり。言甚だ蕪雜なれども、私の考は正直に述べて置いた。

一九二五年の夏、私は伯林に於いて、ボン教授の厚意により、一夜を同氏の家に於いて、特に私と語る可く來會せられたゾムバルト、ヒルフアデング、其他の諸先輩と過した。其夜の會話題は主として、『資本主義の前途』であつた。ゾムバルト氏最も多く語り、私は最も少く語つた。ヒルフアデング氏は、切りと私の發言を促した。ボン氏は其後一書として刊行した『獨逸資本主義の運命』の要旨を示めして、私の評言を求めた。爾來烏兎匆々四ケ年の時間を空過し、私は、今漸く、此の一短文を草するを得た。唯だ恐る。其れは、諸先輩の一顧にも値せぬであらうことを。(終)(二九。五・五—六・三)

追記。此文を草し終れる日の朝ブレンタノ先生の『英國經濟發展史』の最終卷(第三卷の下)到着。八十六歳の老翁宿痾の眼病と鬪ひつゝ、ついに、此大著を完成されたことに驚畏せざるを得ぬ。而して、其總結論は、英國資本主義の運命論と日本、印度、支那其他有色人種の勃興に關する先生の斷案とから成る。私は過る若干月、先生と稍ぼ同一の問題について、商量した結果を、今本文に綴つたものなるを知り、尠からざる興味を覺へた。更らに、今朝の新聞紙上、マクドナルド氏が去八日親任式の夜の放送演說に於いて、產業組織の改造と失業問題の解決とを、新內閣の二大事業とする旨聲明したことを知つた。此內閣の成立が英國に於ける『共產原則の展開』に重大なる意義を有つに至るかも知れぬこと、而して、其れが英國資本主義の前途に、些少ならざる關係を有つであらうことを思ひ、私の興味は更らに一段の刺戟を受へる。

(二九・六・十・)

# 動物界の生活難

川村多實二

近頃は新聞紙上で負債に苦んだ揚句一家族が揃つて身投したり、貧故に盗み騙りをして法網に觸れたりした記事を讀むことが多くなつたやうに思ふ。之に反して人間以外の動物は無事平穩なる生活を營み、不景氣生活難などの風は何處を吹くかと太平樂を並べてゐるかの如くに考へる人があるかも知れない。然し乍ら實際の處は、野生の動物は高等下等を問はず、四季晝夜間斷なく恐敵と飢餓に苦しめられつゝあるので、此點は人間以上である。然も彼等は自殺によつて此苦艱から脫するといふやうな卑怯な眞似をせず、惡戰苦鬪斃れて後止むの意氣込で努力して居る點は或意味からいつて稱讚に値するものがあるのである。

動物が地球上にその生を續ける手段としては、單獨なる生活法もあれば、寄生、共生、又は群集の生活方法がある。少數のものは更に進んだ方法即ち社會生活をさへやつてゐるが、これ等の生活方法は皆その種族を保存せんが爲めに、即ち個體としては無事安穩にその生活を續け、適當の時期に子を産むで次代の生存を確保することを目的として案出せられたものである。尤も此案出といふ云ひ方は方便として使用するに過ぎないので、私が此稿の終りに近く說明する通り、動物自身が利害を考案してやつて居るのでは決して無い。若し之を設計した者があるとすれば、それは大自然の攝理である。若し又此攝理といふやうな言葉を忌むならば、偶然の成行の中で有利なるが爲めに殘されて益々助長せしめられた進化の一方向である。

さて、一種が他種に依賴して生存する寄生の場合、若しくは二つ以上の種類なり個體なりが協力して生活する場合をば合名會社か株式會社かに譬へて、單獨生活の場合を一個人の經營に相當するものと考へて、恰も是等の法人や個人が商工業界に於て、相競爭し、若くは相提携して營業を續けると同樣に、各種方法による生活者が一地方に雜然として住居し、各自は略ぼ一定した最大限度の數量を持して、互角ににらみ合つてゐる狀況を生態學者は平衡狀態といふ。勿論長い進化史上の變遷を回顧して見れば生存競爭の落伍者たる絕滅種屬も決して少くないが、差當り現在の動物界では年々歲々略ぼ同一の種屬が同一の

比例を以て共に生存を續けてゐる。體制の簡單複雜、習性の巧拙からいつて、隨分程度を異にした各種の動物が雜居して、自由競爭の狀態にありながら、彼等の間に遙に優劣の勝負がつかないのは、何故であるか、天下無敵と自稱する人類が今尙ほ依然として他の高等下等の動物と勝敗を爭ひ鎬を削らねばならぬ理由は何處にあるかといふことを考へて見る必要がある。

## 單獨生活者の受くる制限

凡そ生物界には現在の平衡狀態をなる可くそのまゝに持續せしめやうとする力が働いて居る。之が遙かに一種二種の動物に徹底的勝利を得せしめない樣に調節することになつてゐる。而して此平衡狀態の持續に關し有力なる原因が種々ある。其第一は食物である。食物が個體の數を制限することは、既にマルサスの時代から知られてゐることで、或動物の增數を防壓するには、その糧道を絕つて飢えしめることが最も有効なる手段である。鼠をいくら十錢二十錢に買ひ上げても、世人が彼等の食物を隨處にこぼして置く間は決して鼠は減らない。少し減つたやうでも直ぐにまた元の通りになる。かくの如く食物が動物の蕃殖を制限する爲めに、動物食性の進化としては、單純なる食物をとるものが次第に多種類の食物をとるやうになる。尤も狸の如くに蛇蛙魚貝から塵箱の野菜屑、遂には木の上の果實まで食ふやうなのと、狐の如くに野鼠、雞、兎と肉類のみに限られたのと比較すれば、後者の方が進化したものではあるが、唯一種に依賴してゐる動物は種々のものを攝り得る動物に比して、生活上の適應力が弱いことは爭はれない。北極の狐は鳥の多い夏季には鳥を而して鳥の少い冬季は兎を食ふ習性があるが、かういふ Switch arrangement は澤山の動物にも亦見られる。半歳は害蟲を食ひ半歳は穀物を食ふために、學者は益鳥だと考へ、農民は害鳥だといふやうな場合もある。熱帶地方の鷲やマラグーとてコウノトリに近い鳥は獅子等が食へ殘した屍體をつゝついて生活する所謂腐食性動物であるために腐つたものを食ふても中毒しない。何かの必要で人間が毒殺しやうとしてもなか／＼目的を達せぬが、之も畢竟食物からの人口制限を脫せんとして變更せられた適應の一例である。要するに食物選擇の巧拙はあるけれども、いづれの種にあつても、其地域に與へられたる數量の食物を食ひ潰すとき、その個數は勢減退せざるを得ないのである。

第二には食物以外の土地の種々の狀態が或動物の無限の發育を阻止する。その原因となるものは決して一つや二つに限られないが、例へば海産の動物なれば水溫とか鹽分濃度とか、波浪の衝擊とか、潮の干滿とかが、夫々或度の制限を加へる。米國東海岸に英國から侵入し來つた小さな卷貝（タマキビの一種）はボストン附近から始まつて次第に太西洋の岸を南下して往つたが、或所以南は進行することが出來ない。之は此貝の卵が耐へ得る水溫に或限度があり、南方にはメキシコ灣流の影響で夏季にその限度以上に水溫が上昇するからである。或場

合にはその原因を正確に指摘することの出來ぬ場合がある。例へば亞米利加にある有名な傳染病の睡眠病の媒介者たるツェッツェ蠅はヴイクトリア湖中の島々の內で、或程度以上の面積の島には棲息せぬことが知られた。又概して島國の動物は大陸のものに比して形が小さく、發育のわるいのが通則となつて居るが、之なども或複雜なる原因のために生活上幾分不適當なる所があるからであらう。要するに、生活狀況として註文條件の多い種類の動物になる程、土地の狀況に制肘せらることが多いことが疑無い。

第三には自然敵(Natural enemies)の關係である。一地方にある動植物種屬は甲は乙に食はれ、乙は又丙に食はれるといふ風に、食物關係上一種の連鎖をなしてゐる。但し啻に食物關係ばかりでなく、寄生、共生の關係等も亦此連鎖を形成せしめる原因となる。此連鎖を Food chain 又は Food cycle といひ、時には同一種にして多數種に依賴するものがあつて、連鎖が Food pyramid となり、或は一層錯雜したる Food complex となる。いづれにしても、或一種の動物にとつては一方に食物として利益を與ふるものがある代りに、他方には自然敵として彼の頭を抑へる動物があるわけで、從つて若し彼が少しでも頭を擡げやうとすれば直に此自然敵が勢を得て、彼をとつちめることになるのである。然らば此連鎖の最後の輪を形づくる種、ピラミッドの頂端に位する動物は、何によつて制肘せられるかといふと、或時には食物である。嘗て或孤島に放たれた兎の蕃殖を抑止するために猫を輸入したところ、兎が食ひつくされて、猫も亦餓死してしまつた實例がある。又或時には氣候である。南氷洋の動物界はプランクトンの甲殼類などから、漸次優勝戰で魚や烏賊に達し、更に最後の勝利はペンギンによつて占められる。北氷洋の陸地と違つて狐や北極熊の居ない南極では、ペンギン島は天下無敵である。然るに此地方は寒氣が激烈し、地上で卵を溫めたり雛を孵させたりすることが出來ないから王侯(エムペラア)ペンギンと呼ばれる一種の如きは脚の上に卵や雛をのせて、腹部の毛を以て之を包み僅に之を育てゝ居る有樣である、從つて雪嵐や崩雪に出遭へば雛や卵は一たまりも無く死んでしまふ。實際之が此鳥の無限增殖を制限する力であると報告せられる。

第四は天候氣象等による突發的狀況である。前三項に述べた制限をうまく切りぬけて、相當に多くの個數に達しつゝある動物が、急に襲ひ來つた寒氣のために、一齊に斃死し、恰かも拭ひ去つたかの如くに跡を絕つことがある。例へば亞細亞の中部、西比剌亞の南方に、東西に涉亙する高原は、一望廣漠たる草原で、野鼠や兎の類は勿論モルモットに似た嚙齒類の小獸が多數棲息するところであるが、夫等は割合に繁殖力の强いものであり、野の草も亦頗潤澤に與へられて居るので、年々增加して時には非常な多數に達するのであるが、その中に恐ろしい酷寒が來たり、豪雨が降つて彼等の土窟に浸水して、一齊に橫死せしめるのである。その有樣はクロポトキンを初め多數の旅行者を驚嘆せしめた位である。河岸の瀦生生物も亦同樣で、大分よく發育し

たと思ふ頃に洪水が出て殺して掃除してしまふ。大洋を超えて長旅をする渡り鳥等もその途中で暴風雨のために溺れたり、地面に叩きつけられたりして死ぬるものが決して少くない。斯ういふ風に、普通ならばどし／＼數を增して夥しい盈に達する筈の動物が、右に記す突發的狀況のために間引かれて、平均員數のレベル以上に昇り來り得ないのである。或は之を云ひかへて、そんな外力の屠殺に遭ふやうな危險な生活をやつて居る動物なればこそ、天は異常なる繁殖力を與へて、恢復を容易ならしめてゐると、說明してもよろしい。

いづれにしても、現今地球上に棲息する動物は、少時と雖も安穩なるは無く、常に死を以て脅かされて居るといつてよいのである。

### 寄生、共生の生活に伴ふ困難

寄生生活といふものは他の動植物が努力して作つた養分をそのまゝ頂戴するものであるから、如何にも呑氣な、安穩な生活の如くに見えるが、實際は左樣でない、といふのは、寄生蟲の種類によつては、隨分いろ／＼の宿主に厄介になるものもあるけれども、概して極少數に限られたる、時には唯一種の宿主を選んで寄生す可く運命づけられてゐる。之を寄生關係の特殊性と呼ぶが、何故左樣なつてゐるかは、今日の所よく分らぬ。體質や營養に幾分か關係のあることは、試みに宿主の食物を變ずれば寄生蟲の中に續々死ぬるものがあるので推測せられる。

さて此特殊性があるために、寄生蟲は手當り次第に大形の動植物を求めて厄介になることが出來ず、進化の主宰者たる大自然から割當てられた宿主にめぐり遭ふ時をまたねばならぬ。更に多くの寄生蟲は何回か宿主を變更すべき運命を與へられ、所謂終結宿主の所で體が成熟して次代となるべき卵を放出するまでには、第一第二と所謂中間宿主を求めて或期間その厄介にならねばならぬ。之がうまくトン／＼拍子に行けば結構だが、なか／＼さうはゆかない。之等の事情から考へると之は正しく今日の官吏や職工の就職難に比すべきもの、或は封建時代の浪人がよき主取りが出來なくて、裏長屋に手習師匠をしたことも聯想せられる。又一箇所一回ですまない所は僧侶の修業や學生の入學難に較べることも出來やう。

此困難があるために、寄生蟲は體の他の部分、例へば運動器官や消化器官の如く、自由生活には必要でも寄生生活には不必要であるところの部分を片づけてしまひ、生殖器官を異常に發達せしめて、生殖素の產出に全力を擧げてゐる形である。內科醫者が糞便の檢査をするときに糞便の極少部分を取つて顯微鏡にかけるために、素人には見落しがありはせぬかと危ぶまれることがあるがよく成熟した寄生蟲では晝夜殆んど間斷なく蟲卵を放出してゐるから、糞便のどの部分にも蟲卵が含まれて出る結果となるのである。之も澤山の卵が無駄になることを豫定してのやり方である。要するに一匹の寄生蟲が首尾よく宿主の體に達すると同時に他に何千何萬匹の同じ蟲が、習通りの宿主にたどり

つき得ないで、空しく死んでゆきつゝあることを思ふならば、他人の褌で角力をとることばかり考へたり、他人の物を右から左に轉賣して飯を食つてゆかうとする寄生的人間が生活難にあへぐ位は、當然すぎる程當然である。

寄生生活といふ内には、なほいろ／＼の變つた方法がある。親は自由生活をやつて居り乍ら、卵を他の動植物にもつて行つておしつけるのがある。例へば蝶蛾の如く或植物に産みつけたり、胡蜂の如く他の昆蟲の幼期に體中に産み入れたりするやうな場合が之で、孵化した幼蟲に直ぐ手近の植物の葉や、動物の肉を蠶食して成長し得る便宜を與へられてゐるので、之を親ゆづりの食物、或は財産に比較することも出來やう。

東半球の杜鵑類は他の鳥の巣に卵を寄托する奇性をもつてゐる。即ち、我邦のホトトギスはウグヒスやミソサザイの巣に、クワクコウはモズやホホジロの巣に、ツツドリはセンダイムシクヒ、サンクワウテウ、ヤブサメ、メジロ等の巣に、而してジウイチはコルリ、オホルリ、ルリビタキ等の巣に、いづれも一巣に一卵づゝを配布して委托する。ウグヒスの巣は小さくて口が横に開き、大形のホトトギスにはとてもはいれないから、其巣の中に産み落すのではなくて、一度地上に産み落し、嘴にくはへて運びこむことが察せられる。なほ右の四種の杜鵑科の鳥はいづれも、繼母たる鳥に比較して體が著しく大きいから、孵化後少しく時間が經過すれば、育てゝ貰ふ雛の方が、餌を運ぶ親に比して遙に大きく、繼母は眞に一服休息する暇もない有樣である。而して此雛の習性として實子たる卵や雛を巣から押し出して、自分獨り餌を貰はふとする本能があり、發育中の或時期には彼の背中が匙の如き窪みをもち、それで實子の卵なり雛なりを掬ふやうにして巣の縁まで運び出し、巣の外に放り出すに好都合になつてゐる。此寄托卵の習性は西半球の杜鵑類には無いことで進化史上では餘程後で出來上つた本能に相違ない。どうしてこんな奇妙な本能が出來たかに關してはいろ／＼の説がある。或人は營巣本能と卵巣の成熟との聯絡がうまくゆかないことから起つた便法だといひ、他の人はアヒルや鷄が誤つて外に卵を産み落すことがあると同樣に産卵時間の調節が狂つたためだといひ、又或人は一卵を産んでから次の卵を産む迄の間に長い日數があり、皆揃つてから自分で温めたのでは、卵の老幼があまり不揃となつて不便であることに起因してゐると説明する。それはともかく、杜鵑類にしては丁度よい時期の繼母の巣を探しあてゝ委托せねばならず、又鶯や頬白にして見れば、委托せられたら、最後骨を折つて育てる子が自分の子でなく、自種族の繁榮といふ點からいへば、全然徒勞に歸するわけであるから、その意味で双方共に著るしい育兒難に苦しんでゐるわけである。

寄生生活の中にも宿主の營養分を頂戴せずに、唯附着點だけを貸して貰ふ程度のものがある。鮫の腹につくコバンイタダキ、鯨の背につくウシツボは、必ずしも魚とか鯨とかでなくても、軍艦の底でも差支

へなく、よほど呑氣なやうに見えるが、その代りに餌の流れて來るのを待たなければならぬ。若し軍艦が楊子江にでも入れば直ぐに死んでしまふのであるから、決して安全なる生活法ともいはれまい。ヤドカリは卷貝の空殼を探して體を入れるが、世間にはうまく空殼に出會はぬヤドカリがどの位あるか知れぬ。

動物學の書物によく出て來る共生（又は共棲）生活の場合を、一般の人は如何にも呑氣な、巧妙な生活方法の例にするが、考へ方によつては必ずしも左樣ではない。一種の動物が落ち合つて道連れになるやうに運命づけられてゐるだけ、それだけ窮屈であり、條件つきである。譬へば徒歩競爭の仲間に二人三脚が交つたやうなもので、實は却て不利益なことも少くないのである。若しも周圍に恐ろしい敵がなく、食物が自由に獲られるものならば、單獨生活の自由なのに越したことはないのである。此點では前項の場所だけを借りる場合、（之を或人は片利共生と呼んで双方利益を交換する双利共生に對立せしめるが）の方が、幾らかましであるといふのは、場所の選擇が幾分自由で多少融通が利くからである。共生にしろ、次に說明する群集生活や社會生活にしろ、習性上の進化といへば進化であるけれども、いづれも單獨自由の生活では到底生存競爭場裡に立てなくて、世の荒浪を乘り切れないから、仕方なく發達したものである。事玆に到らしめた必要如何といふ方面に思ひ及ぶならば、却て其裏面に著るしい生活難が潜んでゐることが容易に看取せられるのである。

## 群衆生活に伴ふ困難

亞弗利加の草原に群棲する縞馬やカモシカ類には、大抵一群毎に之を指導する老獸がありといはれる。森林中の猿類でも亦同樣である。北氷洋に近い海の島では諸種の海獸が子を育てるために夏の數ケ月を送るが、一雄よく數十雌を擁してその保護に任じ、彼等を統制して居る。中央亞細亞の高原に棲む馬や驢馬の野生種にはそれ程の統一はなけれども、數十數百の個數が同一行動をとり、水草を追うて彷徨するが是等は夫々獅子、北極熊又は虎、豹の如き猛獸の襲擊を防ぐために密集してゐるのであつて、恰かも渡りをする小鳥が鷲鷹の襲擊を受けても全滅とならぬために密集して旅行を續けるのと同樣である。城砦を守る者若しくは圍を衝いて脫出する者が、若し個人的行動をとるならば、片端から殺されてしまふ。然し此密集行動は食糧を隨所に求めやうとする事からいへば、甚だ不得策なやり方である。中央亞細亞の馬や驢馬は草の少い野に迷ひゆく結果、數百數千が枕を並べて餓死することがある。北米紫燕は早春急いで北行する際に、氣溫の低下に遭つて、全群が餓死することが報告せられた。之も一匹や二匹の鳥獸なら、何とかなる筈のところ、大群の團體なるが故に行倒を免れないのである。

群棲生活を爲す動物の食物を吟味して見ると、魚、昆蟲、若しくは野の草の如く、比較的一個所に多量に存在する食糧であることが分る。

所謂肉食動物の中には狩獵の必要から數頭位協力するものもあるが、眞の肉食動物には夫以上の大群團をつくるものがないのは、全く食物を得ることの困難に制限せられてゐるので、同時に餌となる動物が一箇所に密集して存在することは、自然界に於ては割合に少く、之に反して草木なれば、隨分豐富に見出されるから、此理からしても、草食動物の方が群棲し易いわけである。

然し幾ら植物性餌料が豐富であるといつても、動物の數量が無暗に多くなつては不足を告げるは當然であるから、群棲動物は常に人口過剩といふことを憂へねばならぬ。それ故熱帶の草原を走り廻るカモシカ類には群中の老獸を遺棄し去ることが稀でない。之は足手纏を脫するといふ點もあるが、食糧問題が之に關聯してゐる。亞弗利加から亞剌比亞邊の沙漠にかけて不毛の地に棲む狒々の類は、他の猿類と違つて樹上生活をやらず、岩窟や石塊の小丘を棲所として群居し、砂地に生へるウエルウイッチヤのやうな沙漠特有の植物をむしつて食つて居る種類である。前にも述べた通り、熱帶の沙漠は生存競爭の激しい所であるから、猿の類でもウッカリしてはゐられぬ、從つて彼等の犬齒は小さな猛獸と互角の鬪をなし得るまでに鋭くなり、動作も亦頗る敏捷となつて居るが、彼等には老衰した親をば皆で寄つてたかつて嚙み殺す本能がある。之は全く食糧の節約を計るために起つた特殊の習性に外ならない。年とつた親を遺棄したり殺したりするところは流石畜生だなどと考へてはならない。わが國の姥捨の傳說や枝折の名の起りの眞僞はともかく、諸外國には老人を山林に遺棄したり、湖海に沈めた昔の歷史が殘つて居り、蠻風の時代にも尙その風俗があつたと知られる。

老動物の除去ばかりでなく、生れた卵や雛を棄てたり殺したりする習性も亦食糧節約の原理から起つたものである。而して之は島國や、他との交通を妨げられた田舍でおひねりと稱して嬰兒を間引いた人間の場合とよく一致してゐることである。

## 社會生活の起源と生活難

動物の社會生活なるものは、種族保存のために必要なる二つの努力、即ち個體の防護、食物の供給、並に蕃殖の遂行を完全確實ならしむる手段として起つたものである。而して之は無脊椎動物中では高度に進化したと認めらるゝ昆蟲の內、胡蜂蜜蜂蟻及び白蟻の四類に於て、各自獨立に進化發達したものである。脊椎動物では人類が之に比す可きものを作つてゐるが、その出來方に於ては右の昆蟲の場合と趣を異にしてゐる。此點に就てはいづれ後節に再說するが、此外に尙クロポトキンの相互扶助論をはじめ、動物學上の事實を引用した社會學者の論者では、社會といふ文字の意義を勝手に擴張して、群集生活の場合は勿論、單獨自由生活者の偶然集合せる場合までも社會生活の中に含ませてゐるけれども、茲で申すのは嚴密なる意味の社會生活、即ち多數の同一種個體が集合して秩序ある共同生活をなし、體形並に習性に於て必要なる分化分業を行つて居る場合である。此一秩序ある共同生活で

あり、分化分業が行はれてゐる」といふことが、大切なる點である。昆蟲の社會生活に關しては近年我邦に於ても既に澤山の書物が公にせられてゐるから、玆に改めて說明するまでもなからうが、蜂では王蜂(女王)雄蜂竝に職蜂の別があり、蟻では職蟻の中に戰鬪を得意とする大形のもの即ち兵蟻がある。更に白蟻には雄蟻にも兵蟻、職蟻にも各二種以上の分化があつて、仕事の分擔が一層進んでゐる。是等は要するに、分業によつて個人の勞力を節約すること、即ち害敵の防禦住家の建設保持、幼者の看護、若しくは食糧の分配等に於て、多大の利便を有つことは、申迄もない。然し乍ら食糧の供給といふことに就て考へれば、社會生活なるものは決して好都合とは申されない。狹い場所に多數の個體が密集して棲むことは、食料を天產物に仰ぐとしたならば、甚だ無理なことであり、獨棲者に較べて著るしいハンデイキヤツプを課せられてゐるものである。米國ハーバート大學昆蟲學教授で、昆蟲の社會生活の研究に於ては世界第一人者であると認めらるゝホイーラーは曾て、「社會生活をなせる昆蟲は常に飢餓に瀕して居る」といつたことがあるが、次に示す二三の內情を知るならば、何人も直ちに此說に贊成するに相違ない。

私は前項に於て、肉食性が多數個體の密集生活に不便であることを說いた。蜘蛛や鷹又は虎の如き型的の肉食動物がすべて單獨生活に限られてゐるのは、此故である。然るに蜂や蟻は元來肉食性のものであるから、彼等が若し眞に社會生活に入ることを必要とするならば、先づ以て動物食を廢し、一時に多量に收穫せられ、且つ長期保存に便なる植物食に改めなければならぬことは、猪鹿を射て活きて居た人類が、常食を米麥に改めなければならないのと同理である。この社會生活の進展と關聯して起つた食物の變更は、蟻の如く、同類中で種々の進化程度を倂せ見らるゝ部類に就て甲乙丙各種を比較すれば、具體的に立證すること、決して困難ではない。

蟻は元來乾燥した熱帶地の半沙漠から溫帶の草原にかけて棲むやうに作られた昆蟲であるが、外圍狀況に對する適應力の強い昆蟲類の中でも、特に此性の著るしいものであつたために、今では地球上の全陸面に擴がり、森林といはず濕地といはず、寒帶にも高山にも到る處その姿を見せぬ所はなく、その個體の員數に於ては、他のすべての陸產動物の總和をも凌駕する上に、その巢もこんな小形の動物としては珍らしく永く續き、往々人間の一代にも及ぶことがある。而して其社會組織には僅々十匹內外の個體から成る簡單なものから、數萬の個體を包擁し、種々の職務に服する部屬員を備ふる大社會に到るまでの、種々の程度が倂せ存するのである。

蟻の中でも最も最原始的な種類は、熱帶にあつて未だ肉食性を捨てないために、右に述べた通り僅に十匹內外が集つて一群を作つて居るに過ぎない。即ち未だ群棲生活の域を脫しないのである。之に次では未だ肉食性は捨てないが、幸に移住性を得て、その群が甲地から乙地へと漂浪し步くことのために、稍多數の、即ち數百乃至數千の個體が

集つて一社會を作つて居る種類がある。之を「進軍蟻」と俗稱するが、何處でも此一群が通過した後は、その附近の動物性の汚物が一掃せられ、鼠や蟲の死屍も綺麗に取片づけられるので、甚だ清潔となるから、熱帶の住民は之を歡迎して屋內を通過せしめるさうである。

次には植物性の食物を探して歩くステージがあつて、地中の巣を出でゝ野の草の花粉や蜜槽を採集する。蜜蜂の場合が丁度此蟻の場合に對比せしむ可きものである。又アリマキやカヒガラムシの如き他類の昆蟲を利用して之に植物を食はせ、自分はその尻から排出せられる糖液を集めるやうな便法をやるものもある。又花の少い地方では禾本科の雜草の種子を集める所謂「收穫蟻」がある。目的の植物のある場所を見つけて、其附近の他の草を嚙み切るために、恰かも栽培してゐるかの如くに見える。而して此種子は巣の中に運び入れた後も、注意して乾燥に力め、好晴の日を見ては時々外に出して乾かすのは驚く可く行屆いたやり方である。かく注意するものゝ、それでも濕氣の多い地中の穴倉に藏つてある穀物のことであるから、間もなく發芽しさうなものであるが、それが起らぬのは不思議である。試みに職蟻を此土藏に近づかしめずに置くと間もなく發芽するところから見れば、日向に出して干すこと以外にも尙何等かの方策を講じてゐるものと思はれる。人間が米麥や鰹節の貯藏に苦心するのに似て面白いことである。

眞の農藝耕作に比すべきものは動物の社會生活には見られないが、唯蟻の社會生活の最高度に進化したものでは、栽培に類することをやるものがある。それは「一葉切蟻」といつて熱帶亞米利加に產する種屬で、植物の葉を喰ひ切つて巣の中の腔室に運び入れ、海綿のやうな塊をつくり、之に或菌絲を植えつけて繁茂せしめ、やがてその菌が作る胞子や菌絲を取つて食用とするので、つまり畑を作つて食ふのである。此菌絲は此巣を初めた王蟻が最初分房して玆に來るときに、親の女王から少しく分與して貰ひ、口中にふくんで來るのだそうで、極ポツチリではあるが、財產の相續に比してよいものである。

蟻以外の社會生活性昆蟲は右の食性變更が、どの程度に進んでゐるかといふと、胡蜂の類は未だ肉食性を捨てないから、少數の一群をなし得るだけ、蜜蜂は植物食に移つたものゝ、花粉蜜槽の蒐集だけしか知らず、他の方法を知らないために、貯藏はするが生產即ち栽培に比すべき何等の策をも講じて居ない。而して白蟻では、植物食に變つてはゐるが、奇妙に木質部のみを食ふために、消化に大なる困難を感じ、腸內に多數の原生動物を養つて、之にセルローズを分解して貰ふといふ共生的生活をやつてゐる。

之を要するに、昆蟲が社會生活をやるやうになつたのは、個體の保護種屬の繁榮を目的として起つた進化であり、內部の分化分業は此社會の膨脹に伴ふ秩序維持の必要から起つた進化であるから、食糧問題の解決に於ては敢て向上したものとはいはれない。寧ろ食糧缺乏の危險を冒して開始せられた方法だと稱して差支ない。從つて人口の過剩といふことに困る點は、前項に述べた群集生活の場合と異るところが

無い。此ためには、第一に産兒制限の方法を實施して居る。即ち社會の全員中、産兒の能力を有つものは唯一匹の女王であつて、其他の雌は一匹殘らず去勢せられてゐる。若し社會の個員が一時に增數すれば全員が食を減じ、過勞營養不良となり、女王までが瘠せ衰へ、産兒を差控へ、産兒制限の程度が一層確實となる仕掛になつてゐる。第二には老者の始末で、交尾を終つて無用の長物となつた雄は間もなく職蜂又は職蟻のために嚙み殺されてしまふ。第三には蜜蜂でいふ分房即ち社會の分劇である。之は社會が膨大すればする程食糧供給が困難となり遂には維持し來れぬから、かくして、或距離を去つた別の處に新社會を建つるの外はないのである。

社會生活性の昆蟲が食糧問題に於て更に苦しまなければならぬ一事がある。それは食客の多數に入り込むことである。多數の個員が協力して一家の中に同居する場合には、食物を平等に分配することが必要である。之は本能としてさういふ性質を賦與して置けば、わけはない様なものゝ、實際はそれだけでは薄弱で、それでは職務を怠るメムバーが起り易い。之には恰も高等動物の場合に、生殖に快感を伴はしめてあるやうに、又例へば犬の子が親の乳房に吸ひつくことで、親犬は快感を味ふやうにしてあるやうに、何等かの奬勵法を伴はしめた方が、行屆いたやり方である。此理によつて胡蜂の幼蟲には口の所に或腺があつて親の好む液を分泌し、親をして絶えず幼蟲の所へ來往せしむる仕掛になつてゐる。白蟻の女王には腹部に脂肪に富んだ物質を泌出する腺があり、職蟻は之をなめるために女王の身邊に近づくことを好むやうになつてゐる。尙此外に仲間同志の合圖として自他の巢の昆蟲を辨別する爲めに、或共通な香氣（體臭といつてもよいか）を全員が持つて居るが、若し他種の昆蟲でも、此分泌物なり香氣なりを有つて入り込んで行くなれば、巢の中の何人も彼を他よりの侵入者とは考へないから、大手を振つて入口を通り、巢の中の眞實の仲間同等の待遇を受け、遊んでゐてゝ養つて貰はれる。蟻や白蟻の巢には、右の如き手段で紛れ入つてゐる食客が澤山ある。ホイーラーによれば、今日迄に知られた蟻の巢の中の食客が、種類の數でいつて千五百を超えて居り、中には二匹の蟻が口移に食物をやり取りする時、二匹の中間に蹲まり、唇から溢れ落つるよだれをなめるやうな情無い奴もある。既に食物の不足を訴え勝な社會生活の中で、こんな厄介な者まで養はねばならぬとは、如何にも氣の毒である。乞食や居候の類は決して人間社會だけに限られたものではない。蟻の巢では、此食客の個數があまりに增加する結果、全員が營養不良となり、女王さへも完全に成熟して女王になり切り得ない場合があつたりする。唯此食客が無暗に增大せぬ事情として、次の如き關係がある。即ち是等の食客が産むだ卵が幼蟲から蛹となつたときに、靜に土中に眠ることを必要とするのに、職蟻の方ではそんなことに頓着なく、自分等の蛹と同様に、早く地中から掘り出して空氣にさらしてしまふので、食客の蛹が偶然にも殺されて其結果食客の增加が防壓せられるのである。

以上述べ來つたところは主として食糧問題の側から見たる生活難であるが、此外に尙外敵の襲來とか、氣候の激變とかに基づく脅威が絕えず彼等に迫害しつゝあることは勿論である。寄生生活の場合は食物の潤澤と身邊の安全とが多少保證せられてゐるけれども、其他の場合には死の危險を冐してまで食物を探さなければならなかつたり、食物の不足を忍んでまで遁竄せなければならなかつたりすることを思へば、一見平和なる如き彼等の世界も、其實火の車を廻し、惡戰苦鬪を續けるものと謂はねばならぬ。

## 世智辛き土地と暮しよき土地

一見平穩無事と思はるゝ動物界もよく調べて見れば右に述べた如く生存競爭の暗鬪明鬪があり、少しく自分の種屬を增殖せしめやうとすれば、直ぐにいろ〳〵の方面から頭を叩かれるのが實狀であるから、何處の世界に往つても生活難の見られない所は無いといつてよろしい。

此世智辛さの特に著るしい場所の好例は沙漠と深海との動物である。その理由は此二區域では植物性の食物といふものが殆どなく、動物はいづれも肉食によつて饑を凌がねばならぬ。從つてなる可く賢く狡く立廻つてうまく食物にありつくことが必要であり、食はれる側では、絕えず油斷なく警戒し、素破といへば逸早く逃げ出さねばならぬ。亞弗利加の獅子やハイエナなどの巧なる攻擊、キリンや駝鳥の展望臺の働きをする長い頸、高い背たけ、或はカモシカ類の快速力は皆これが爲めの形質である。又深海魚の大きな口や、ゴムの如く膨れる腹の皮によつて、自體よりも大なる餌を呑む習性、發達した眼や發光器官等も皆この世界の世智辛さを示してゐる形質に外ならないのである。

地球上の所によつて動物界の世智辛さに相違のあることを知るのも、亦動物が不斷如何に生活難と戰ひつゝあるかを了解する一法であらうと思ふから、次に數例を揭げる。

今から一世紀近くも前のことであるが、北米合衆國の東部で、二三都市の公園の樹木が、シャクトリムシの慘害を被ることが度重つたので、何か適當なる驅除法もがなと頭腦をひねつた末に、之は小鳥を集めて啄ましめるのが一番、然し渡り鳥の類では到底都會の中央に居附く筈が無いので、結局英吉利から市街に住む雀を輸入するのが最良策だといふことになり、前後十五回の徒勞を繰返した後、遂に千八百五十一年の輸入が其効を奏して、希望通り都市定住の小鳥を得たまでは先づ好かつたが、さて此雀といふ鳥は、人の知る通り中々繁殖力の旺盛な奴であるから、直ぐ樣各方面に向つて擴がり初め、郊外の耕作物を荒し、他の益鳥を驅逐し、夏季に煖爐の孔に藁や芥を運んで置くので、秋冬の頃に焚き初めの時に火事を起すことがある。或は雨樋の中に綿屑を詰めて雨漏を起す、之を除かうとすれば高い建物に足場をかけて幾日もかけねばならぬ、中には朝早くから窓際で喧しく囀るために市民の安眠を妨げ仕事の能率が上らぬ、一ヶ年に積つて延時間何程

の損失に當る等といふ苦情なども出て、益々評判が惡く、輸入した當時は人々から賞められた當事者が、間もなく世間に顏出しならぬ始末となり、政府は英吉利雀撲滅に每年多額の費用を投じ、驅除方法の宣傳に全力を注いだが、中々その效果が見えない計りか、年々西部から加奈陀に擴がり行き又次第に市街地から田舍に入り込む有樣、今以て官民共に弱り拔いて居る。今は各種の野生鳥獸の調査をやつてゐる米國農務省の動物調査局も實は此英吉利雀の防壓のために作られたのが濫觴である。唯近年自働車が出來て馬車が影をひそめ、雀の主食物であつた馬糞が街路上に轉がつて居らぬやうになつた爲め幾分少くなつたやうに思はれるが、然し食物に對する適應力の相當强い雀のこと故決して油斷はならぬ。若しも田舍に廻つて一層猛威を振ふやうになれば、それこそ大變だと心配する人もあるが、日本や英本國の例でも、さう無限に擴がることはなからう。

　千八百六十九年ハーバード大學のツルーベルトいふ昆蟲學者が歐羅巴から蛾の一種 Gypsy moth（和名ハンノキケムシ）の卵を取寄せて、孵化飼育をやつて居た。彼の目的は霜害で桑が作れず、蠶の飼えない米國で、蠶に代る可き蛾を發見しやうといふのであつた。所が或日彼の不在中、風のために机上の飼育函が吹き倒され、中の毛蟲が何處かへ逃げ出してしまつた。暫く經つて彼は此毛蟲が、曾て歐羅巴の森林に大害を與へた歷史を聞き出し、捨てゝ置いては危險だといふので早速公衆に右の事實を發表して警告するは勿論、百方捜索してその行衞を探査したけれども、何處にも蕃殖の兆候を發見せず、其後杳として消息を絕ち、世間からも全く忘れられてしまつたが、實は其間に毛蟲の方では徐ろに地盤を擴張しつゝあつたと見え、丁度二十年後の千八百八十九年にニューイングランド地方の森林に其被害が現はれ、次第に西方に向つて蔓延し始めたので、政府はボストン市近郊に此昆蟲專門の研究所を設け、今尚續けて種々之が鎭壓策を講じてゐるが被害は年々擴大する計り、千九百五年マサチユセッツ一州だけで費した驅除費が百萬弗を超えたのであるから、各州及び加奈陀を併せて今日に到る迄の費用を通算したらば、餘程の額に上るであらう、森林そのものゝ被害に到つて、果して幾何の額に上るか、計算も出來ない有樣である。

　右に似た話は米國にまだ〳〵澤山ある。今から十年程前のこと、東部の方からは English Corn-borer とて玉蜀黍の莖に喰ひ入つて心を蝕つて枯らす昆蟲が擴がりつゝあり、フイラデルフイア市を中心としては Japanese beetle とて園藝植物の根を嚙み切る甲蟲で、多分日本から送つた花菖蒲の根に附いて侵入したらしい昆蟲が蔓延しつゝあつて、共に國內に至る處にその防遏の宣傳ビラを貼り出し、昆蟲局では地圖上に防禦の第一線第二線を劃して被害植物の移動を取締り、出來得るだけ少區域で食ひ止めやうとする苦心は、餘所の見る目も氣の毒千萬、同時に亦吾々日本人にとつては床屋へ行つてもホテルへ行つても、停車場といはず、學校といはず、入口の壁に日本昆蟲の恐るべき

ことを書いたポスターが下つて居て、居合す人から話しかけられ、不逞鮮人の排日宣傳と共に、散々いやな氣持をさせられたものである。

更に同様なる事例は、植物の方にもあつた、例へば、中部諸州ではタンポポが侵入して來て、美しく刈り込んだ芝生の中に根を張り、切つても掘つても減らばこそ、益々殖える一方で、其乳液で芝生で遊ぶ小兒の白衣にシミがつく。其他斯ういふ風に、移入動植物の醸した災害の實例は、最近五十年間に甚だ多數に上り、都會の人も田舍の農夫も朝晩その話を口にし、小供の時から繰返し〱それを聞かされて成人する有様である。從つて吾々が舶來ときけば一も二もなく良質と判斷したと同様に、米國人は外來の生物と聞けば、もう頭から、有害物である、警戒す可きものであると、速斷する程に習慣づけられて居るのである。此點は排日問題を論議する者が第一に考察す可き要因であるにも拘はらず、從來一向之に留意した人が少い。

然らば何が故に、米國に限つて移入せられる他國の動植物がそんなに猛威を振ふか、雀は英本國ではそれ程暴れて居らず、ハンノキケムシや日本甲蟲が我國ではそれ程惡辣でないのは、一體どういふわけか、之は甚だ不可解のやうであるが、其實何でもなきことである。即ち米大陸は動物生態學上からいつて、新らしい「土地」であつて、其處に棲息する動植物の食物に對する競爭が他の「舊い土地」に比べて、未だ激甚でないためである。つまり世智辛くない、生活難の未だ割合に少い地方だからである。生存競爭の激しい地方の動植物は、種々の生活難を凌いで、よく生存を續け得る活力を獲て居るが、然し同時に之に對抗する生物即ち自然敵が澤山居て、結局一つの平衡狀態を維持して居る。生馬の眼を拔く都會には、そんな人間同志で張合つてゐるのだ。從つて例へば我邦でハンノキケムシの無闇に擴がらぬのは、恐らく此毛蟲の體に卵を産みつける寄生蜂が第一となり、他の若干の要因が相當に彼を抑制してゐるからである。そこで、若しかういふ動植物が競爭力の少い、又は無氣力な、新らしい「土地」に移入せられたならば破竹の勢を以て、其地在來の生物を打負かし、其後何十年か何百年を經て、或有力なる自然敵の現はれ來る迄は、傍若無人に振舞ひ得ることは實に當然至極のことである。尤も如何に惡辣な移入者でも、全く新らしい土地では勝手の違ふことがあると見えて、大抵最初の數年間に移入に成功したかどうか不分明なのが原則で、時には英吉利雀の如く何回も繰返して搬入を必要とする場合もあるが、之はどんな動植物でも年々何割かは死んで消えて行くものであるから、新入者もあまり個數が少ければ抹殺し去らるゝからである。然し一度地盤を獲た以上はグン〱頭角を露はし初め、席捲の猛威力を示すのが通則である。

之と同様なる實例は他の大陸の場合にも擧げ得るものである。濠洲大陸は人の知る如く亞細亞や亞弗利加とは割合に夙くから陸地の連絡を絶たれ、此等の陸地に食肉獸が出現した頃には、既に海がその侵入を遮つたのであつた。比較的低能で穩柔なる一孔類や有袋類の多數種が、他の大陸では既に死絶へたるにも拘はらず、濠洲に於てのみ無事に生

き存へて現在に及んだわけは、主として玆にあるのである。從つて、濠洲の動物界は亞細亞や亞弗利加の內地などから見れば、餘程生存競爭の緩和なる場所で、生態學上の「新らしい土地」である。そこで前世紀以來他の大陸から故意に又は偶然に移入せしめられたいろ〳〵の動物の爲めに、舊來の平衡を攪亂せられたことが實に多い。例へば今から三百年前に白人が連れて往つた飼兎が脫走して野生狀態となり、直ぐに非常なる勢で蕃殖し、終には汽車の窓から此所彼所に野兎の跳ぶのが見られる程になり、牧草を食つて牛羊の食物を減じ、牧場の有効面積は狹められ地價は下落する。之を驅除せんとして放つた犬は狼の如き野獸となり、播いた毒團子は却て狩獵の目的で態々移殖して置いた雉子や鶉を鏖すといふ苦境に陷り、政府は年々巨費を投じて兎の撲殺をやるが中々追つかぬ。後肢の毛を刷毛にしやうと目論見て狩り立てれば、忽ち死兎の山を築くといふ有樣である。聞くところによれば、近來此兎の肉を冷藏して歐洲下級民の食物とするために送り出すこととなり、驅除費の幾分を償ふ樣になつたとか、それにしても猶厄介千萬の獸である。

玆に注目す可きことは、右の如く動物の移入で騷動を釀す土地が同時に人類の移入に關しても亦常に面倒の起る土地であるといふ一事である。之は當然のことで、人間も亦動物界の一員である以上、右の生態學上の法則の示す眞理からは免れることは出來ない。此事は又過去に於ける人種移動の歷史が又明に立證してゐる事柄で、古い世智辛い國に育つた人種は、概して新らしい暮しよい國に育つた人種よりも怜悧若しくは狡猾である。米人は東洋人を賢過ぎる(too clever)といふが兎も角も支那や伊太利の勞働者が米國や濠洲に押渡れば生存競爭上何程かの勝味を有するは、左程怪しむに足りない。そこで行儀が惡いとか、寄生蟲を携帶するとか、いろ〳〵の難癖をつけて排外の口實にすることになるのは、恰かも海港に植物檢査所や檢疫所を置いて動植物の移入を阻止せんとするのと變りはない。但しこの事に就ては他日更に詳述したいと思ふから、玆では平行せる事實のみを擧げるに止めて置く。

### 動物の大量出現

右に述べた新移入者の跋扈は、此を生態學的に云へば、平衡の破壞若しくは破綻に外ならない、然るにかくの如き破綻は必ずしも新移入者の飛込んだときに限るのではなくて、諸般の事情が一見何等の變動をも認めない場合に突發することがある。勿論宇宙間の現象一として原因の無いものはないから、吾々の知識さへ完全であれば、何とかその遠因近因を推定し得る筈であるが、吾人現今の知識ではなか〳〵さうはゆかない。それで、先づ原因不明の大量出現とでも申して置くの外はない。

農作物でも水產物でも毎年の產額は略ぼ一定してゐるもの﹅時に著るしい變動があり、素敵らしい豐年も來れば、恐ろしい凶作も來る。

魚介の數量に於て、或種が滅茶に澤山網に入ることもあり反對にサッパリ捕れぬこともある。同じ年でも場所が異れば必ずしも一致しない。一昨々年は木曾地方の霞網でツグミが豐獵であつたが一昨年はツグミは非常に少くてアトリが多かつた。琵琶湖の或所では昨秋モロコがどつさり捕れて値が下つたが、淀川の或所では今春コヒが澤山居て餌をつけない針でひつ掛けて取つた男があつたと聞く。曾て知多半島の海岸に蟹が多數現はれて人を驚かしたことがあり、神奈川縣の三崎でナメクジが澤山出て家々の臺所を匍ひ廻つて町民を困らせたことがある。一昨年の夏岐阜縣の一部で水田に無數のモノアラガヒが發生し、稻に匍ひ上つて横に倒すので農民が閉口した。もつと古い話をすれば、後一條天皇の寛仁元年八月に山城近江丹波に多量のイナゴが發生して、稻を食ひ荒し百姓困却したので、朝廷からは二十一社に奉幣使を立てられ、イナゴ退散の御祈禱をなされたりしたが、幸に何處からか鳥が澤山來て此のイナゴを食つてくれたといふ記錄がある。

水産物の收獲高が増したときには默つてゐるから分らぬが、減じたときには漁民がワイ／＼騷ぎ立てるから、よく分ることがある。而して素人考でいろ／＼と原因の推定をやり、傍にある工場や會社に損害の賠償を要求したりすることはよくあるが、その中には大分見當の外れたものがある。先年宇治、木幡附近の茶畑にシャクトリムシが大發生をして、激しい害を與へたときは、そんな問題が起らなかつたが、次で京都から伏見へかけユスリカの大量出現があつたとき伏見では料理店や網船が營業出來ぬとて大騷となり、結局四方釀造會社の排水の影響だらうとて、同社に一萬餘金を出させて、河筋の掃除をやつたと聞いたが、京都ではこんな寄附金を出した家はなかつたやうである。總てかういふ大量出現は昆蟲とか、嚙齒類とか産兒産卵の率が大きくて、急激に員數を増減し得る種類に多いのは勿論であるが、一朝外界の事情さへ許せば、即刻その種屬の個數を増加するやうに、總ての動物が準備を調へて待つてゐるといふ可きものである。譬へば膨脹してハチ切れさうな球を澤山狹い函の中に押し込んで置くやうなもので、若しその中に一個でも彈力の弱るものが出來たり、脫け出したりするものがあつたら、其隣りの球が直ぐに膨れ出して空間をふさぐやうになつてゐると考へればよろしい。而して之も畢竟動物各個が、強く活きよ、子孫を成る可く多く速に増せよ」と申渡されたかの如く自由競爭場裡に置かれてゐることの結果である。

さて、右の如く一時に激生した動物の末路はどうであるか、直ぐに起ることは食糧問題で、愚圖々々して居ては、一同打揃うて餓死するの外はない。また産卵の場所もない。此場合に通例起る現象が三ある。第一は大群移住である。即ち臨時に生態學上の所謂不定期的移住性が出來て、一地から他地へと進軍するのである。その著るしい例は鼠である。鼠は昔亜細亜の中央より起つて次第に全世界に擴がり往つたもので、一國から他國へ侵入した年代なども略ぼ分つてゐるが、我邦に於てもその移住の例が少くない。古今著聞集には安貞の頃に、伊豫の

黒島で、漁夫が魚と間違へて地曳網で岸に引上げた話が載つて居り、古事類苑によれば、延寶七年に奥州の津輕で同樣なことがあつた。即ち鼠が移住のため大群で海峽をさへ游ぎ渡ることが明である。源平盛衰記によれば、白河院の御宇に三井寺の頼豪阿闍梨が勅命により皇子御誕生の御祈禱を奉仕し、御褒美に三井寺山内に戒壇の建立を願出たところ、比叡山僧の異議申立で勅許が出ず、遂に怨み死にに死んでしまひ、その亡鬼大鼠となり「谷々坊々充ち滿ちて、聖教をかぶり食」ふた話が載つてゐるが、之も右の一大鼠出現と移住本能突發の一例といつてよからう。鼠と同じく嚙齒類のレミングといふ小獸は那威山の地に棲むものであるが、數年に一度位、非常な大數に現はれ、山を越へ河を渡り狼に襲はれても鷲に食はれても少しもひるまず何でもかでも續けや者共と一直線に驀進し、遂には海岸に達して沖に游ぎ出し一齊に溺死することで有名である。露人クロポトキンは黒龍江の上流の或コザックの村で、河の上下四十哩の間を數日間休無しに鹿の大群が渡渉したことがあり、狂喜した村民が殺し得た數だけでも數千頭に達したことを書いてゐる。

昆蟲ではイナゴの不定期的移住が有名である。イナゴは沙漠に近い荒地に産卵するものであるから、埃及小亞細亞、支那中部若しくは米國のコロラド州あたりに多いが、之が不意に大量發生をやり、雲霞の如く天日を蔽ひつゝ故國を出でて放浪の旅を續ける。小亞細亞で起つた群は屢々西北方に向ひ佛國を通り拔けて英國に達したり、或は埃獨を過ぎて北海の波に沈むまで前進する。之に似たことは蜻蛉、蝶其他にもある。又翅の未だ伸びないイナゴや芋蟲等が地上を匍つて、一方より他方へ鐵道線路を横ぎるときに、汽車が來合せて、蟲の脂で車輪が空轉し、前進不能に陷ることがあつて、山東鐵道でも其他の處でもかねてから砂を用意して置き、これを線路に振りかけて進むやうになつてゐる。すべてかく大群で押し歩く動物は結局どこかへ往き詰つて野たれ死をするのが通則である。

第二には自然的の激増である。曾て南米の或所で野鼠の大增發生あり、ステッキを地面の何處に立てゝも、絶えず動いてゐるといふ位に濃密であつたが野鼠を食つて生きてゐる梟や耳木兎の類は大喜でいつも産む卵の數を倍にして温め、又例年一番子だけでやめるのを二番子までも育てたさうである。亞弗利加でも亞米利加でもイナゴの激生したときには、平生その邊に居ない鳥が澤山出て來て、盛に之を喰ふ。今ソルトレーキ市には昔イナゴの慘害を大鹽湖のカモメが來て食つて與れた恩を記念するために、公園内に記念碑が立つて居る。前に述べた寛仁元年の近畿のイナゴ被害のときに働らいた鳥は何鳥か明記されてゐないが米國の例から推せば琵琶湖に浮んで居たカモメ類かも知れない。

第三には流行病の突發である。即ち移住もやらず、自然敵の効果も徹底的でないために、一箇所の個數が稠密その極度に達すれば、何處からともなく流行病が起つて、全員枕を並べて斃死するのである。尤も之も細菌か何かの病氣であらうから、或は第二の自然敵の項に合併

じてもよいかも知れない。この例は澤山あるが例へば西比利亞から滿洲にあるタルバーガンといふ囓齒類の小獸は最大限度の員數に達すると肺ペストにかゝつて一齊に斃れる。之が人間にも傳染して大騷をやることは世人がよく知つて居る。南米中央の廣漠たる草原(之を Pampa といふが)は白人が移住した頃、不思議に有蹄類が少しも居らない。生存に適せないのかと思ふて試みに家畜を輸入して見ると非常に好成績である。それで之は昔最大限度に增したときに起つた一齊斃死のコントロールがちと効き過ぎて種切れになつたのであらうと認める學者もある。

かくの如く自然は或動物が無闇と增數したときに之を抑へつける巧妙なる仕掛を持つてゐる。然し此どん詰りの最後手段に訴へられるまでの、生活難といへば、それこそ徹底したもので、恐らく今日の人間が愁訴するやうな生やさしいものではあるまい。

之で私の動物界の生活難に關する事實の記述は終つたわけである。私は之に引續き、人間の生活難との比較を考へて見るつもりで稿を起したのであるが、既に餘程紙數を費したから、後者に就ては、又次の機會をまつことゝして擱筆する。

# 支那共產黨の理論及び方略

橘　樸

## 一

支那共產黨は一九二八年夏、上海近郊の呉淞又はモスクワで其最高決議機關たる第六次全國代表大會を開き、其結果たる各種の決議が同年七月九日附で記錄された。諸決議中最も重要であり且他の決議に對して總論的地位を占めるものは「政治決議案」である。然るに本文の儘では秘密裡に廣く會員に配附し理解させるに不便なところから、該黨地方機關の筆頭たる江蘇省委員會（上海）では、同年十月卅一日附で政治決議案の內容を要約し且つ之を通俗化した「第六次大會報告大綱」なるものを作成して黨員に配布した。この二つの文書は一九二七年五月の第五次全國代表大會（漢口）以來波瀾重疊の環境に處して幾たびか變轉した黨の態度及行動に總決算を與へると同時に、少くも次期大會迄の間の最高指導方針たるべきものである。故に此二つの文書を解說批判することは、取も直さず支那共產黨が現に抱持する革命理論と其方略とを明かにする所以である。

## 二

政治決議案第三節「支那革命の性質及任務」の冒頭に、中國共產黨第六次大會は、完全に共產國際執行委員會第七八九次總會の支那革命の性質に對する測定に同意する旨を明かにして居る。該測定の內容は

一、支那革命の現在の階級は資本家階級的民主主義革命であること

二、及び三、（全文削除）

四、支那現時の資本家階級的民主主義革命は、（以下二行削除）

第一項の理由とするところは

イ、眞の國家統一がまだ少しも實現されず、支那はまだ帝國主義の羈絆から解放されて居ない。

ロ、（十七字削除）、一切の半封建的勢力が少しも排除されて居ない。

ハ、現在の政權は（十五字削除）の國家政權であり、且つこの反動聯盟は國際帝國主義の政治的經濟的威力に凭りかゝつて居る。

その當然の結論として第二項の二大任務が指摘されるのであるが、支那共産黨の所謂（四字削除）なるものは「徹底的に且つ平民的に地主階級の（六字削除）を推翻して（四字削除）を實行し、支那農民（小私有者（を束縛するところの土地制度中の一切の半封建性を完全に克服するにある」。所謂二大任務を遂行する方法として共産主義者の主張するところは「（以下三行削除）」にある。

第三項に所謂（七字削除）とは、共産主義者によれば「支那革命の現階段即ち（以下四十六字削除）。これが廣大なる（四字削除）を押進めて國事管理に參加せしむる最良方法である」と主張する。資本家階級的民主主義革命の階段を認めながら、共産主義者は何故に資本家階級自身の參加を拒むのであるか。この疑問に對して、第四項の說明は左の如く答へる。

支那の民族資本家階級は革命に背いて帝國主義、土豪劣紳地主の反革命陣營に走つた。曾て彼等は帝國主義に反抗し軍閥制度を搖り動かすところの一勢力たり得たが、それは一九二七年春以前のことで、今日では逆に帝國主義及び軍閥制度を强固にし且團結させるところの一勢力に變化した。（以下二行削除）

そして昔の同盟者たりし「民族資本家階級は、（以下二十七字削除）」と主張する。

## 三

政治決議案の第四節は「支那革命の現階段に於ける政綱」と題し、左の十箇の標語を列擧する。

一、帝國主義的統治を推翻せよ
二、外國資本による（十字削除）
三、支那を統一し、民族自決權を承認せよ
四、國民黨の政府を推翻せよ
五、（削除）
六、八時間勞働制、工賃の增加、失業救濟及社會保險等を實行せよ
七、（十七字削除）農民に與へよ
八、（削除）
九、（八字削除）一切の地方税を取消し、統一的累進税を實行せよ
十、（削除）

支那共産黨は之れに附記して「この十大要求は中國共産黨が今日（以下三十九字削除）」と斷はつて居る。

前述の如き理論及方法を內容とするところの所謂資本家階級的民主主義革命の前途は如何。この階段に於ける革命行動の直接目標が（以下十四字削除）にあることは明かだが、この第一段の目的が達成された後に、共産主義者は果して何を期待するか。政治決議案第五節は、この疑問に對する解答を與へて曰く

（三行削除）既に資本家階級的民主主義革命の階段中に打立てられた。故に將來の支那革命が進み行く筋途は、（以下二十一字削除）。

何となれば「(以下四十三字削除)」とも主張して居る。卽ち共産主義者の所信によれば、支那の無産者階級は資本家階級的民主主義革命の階段中に於て、早くも(以下四行削除)。これ等の見解がどの程度に正しいかは後の評論に讓る。

## 四

前に紹介したやうな使命及び標語を、目前の共産黨に不利なる客觀的情勢の中で實踐する爲に、中國共産黨は果して如何なる方略を持つか。それは政治決議案第十二節「群衆獲得の任務」中に詳説されてある。私は其中から黨員に對するもの、勞働者に對するもの、農民に對するもの、サウエートに關するもの、帝國主義軍閥及び國民黨に對するものの五種を簡んで解説を試みやうと思ふ。何となればこれで大體支那共産黨の現在及び近き將來に於ける革命方略の要點を明かにし得るからである。

先づ黨の組織に關しては、有名な「民主集權制」の組織原理を强調し、出來得る限り黨內の民主主義的集團生活を保障すると同時に、民主主義的行動が其限度を超えて規律を破壞したり、責任を輕視したり、指導機關の權威を傷けたりする弊害を嚴重に誡めて居る。支那共産黨の組織上の缺陷として第二に指摘されたものは所謂地方主義及び小團體主義的傾向である。此種の傾向は獨り共産黨のみならず、複雜なる國民黨には此弊害が一層激しい。手つ取り早く云へば支那民族に共通した缺陷の一つである。何故支那人に斯の如き民族性的缺陷が附纏つて居るかと云ふに、それは專ら支那の經濟發達階段に照應するところの一現象に外ならぬ。支那の產業は農業を主とし、問屋工業を代表的生產形態とするところの工業が之に伴つて居る。この經濟組織の上層に之に照應した社會及政治組織が築かれて居るのであるから、現在の支那民族性に地方主義乃至小團體的傾向があつて、それが「黨內の統一を損ない其戰鬪力を減殺」して居ることは少しも不思議でない。

註　孫文主義のブルードン的解釋を主張する李石曾氏等の所謂「分治合作」卽ち地方分權論は、支那の持つ右の如き事實に立脚するもので、從て軍閥及地主を支持する反動思想と非難される次第であるが、此派の理論の詳細に關しては、後日これに觸れる機會があると思ふ。

又支那共産黨の現狀に於て致命的な弱點とも云ひ得べきものは、黨員の八割迄が農民で、所謂指導階級たる勞働者がインテリゲンチアと共に僅かに殘る二割を充たして居るに過ぎないことである。

註　有ゆる重要都會の中、武漢、廣東、天津、北京、南昌、九江、長沙、鄭州、開封、濟南、靑島等に於ては、黨の勢力が非常に薄弱であつた。職工運動には全く基礎がなく、武漢長沙の黨部は檢擧をうけたのち、濟南は濟南事件の後、都市黨部の組織は殆ど瓦解に等しかつた。廣東市內の工作は甚だ貧弱であり、上海は比較的よかつたが、それでも(十一字削除)、五卅及六二記念日に於て非常に少かつ

たことを證明して居る。且つ（四字削）内の位地が餘りに低い。各省に於ける普遍的現象としては、縣城や小都市に於ける工作は認められず、只困難（白色恐怖）を避けて、、活動に沒頭するのみである。この故に、黨の組織成分は、、が百分の八十以上を占むるに至つた。これ我黨絶大の危機である。今回の反帝國主義運動を通じて、我黨が指導的勢力たり得なかつたのは、その明白なる例證である。（城市農村工作指南、中國共產黨中央委員會。一九二八年七月廿六日）

それ故に第六次大會政治決議は黨組織に關する注意の第二項に「積極的に勞働者の中から黨員を募り、且つ引續き勞働者出身の黨員中から優秀なものを撰んで黨指導機關に參加せしめ、努めて指導機關を勞働者化せねばならぬ」と主張するのである。

## 五

次は共產黨の「勞働者に對する任務」である。この任務に關する第六次大會決議の指令の中で、特に我々の注意を惹くことは、共產黨と勞働者階級の關係である。それによれば支那共產黨員の間には「黨は階級の先方に立つところの一つの特殊勢力であり、從てそれは階級を援助し階級に命令し得る」ところの外的存在であると云ふ錯誤觀念が相當廣く行はれて居る。それで決議中事新らしくも「黨は勞働者階級自體内の最も覺醒し最も前進的なる一部分であることを知らなくてはならぬ」と注意して居る。一九二六年秋に開始された共產黨の（七字削除）以來、黨の「階級に命令」する態度が日を逐うて著しくなつた。大會決議によれば、自身の階級に對して命令又は强制手段を用ひ罷工や（四字削除）を押附けることは「無產階級と共產黨との、、を背馳せしむることによりて支那革命を滅ぼすものだ」と迄極言するに至つた。この方面の注意は共產國際の二月決議（一九二八年）を最初のものとし、第六次大會が重ねて之を强調したものである。

勞働運動に於ける强制主義の錯誤を認めて深く說得主義に立歸つた支那共產黨の新任務が「群衆の（六字削除）を激勵し指導すること」に努力を集中し、この努力によりて勞働大衆を獲得しつつ、（十二字削除）の組織及勢力を回復すると同時に、進んで「大衆的勞働組合は勿論、反動的組合に迄も黨員は自ら身を投じて勞働大衆獲得の目的を達成せねばならない」といふにあることは當然であらう。第六次大會の見解によれば、大衆獲得の爲には、國民黨に對する幻想から彼等を解放する必要がある。それには大衆に對して詳細に「支那革命の敎訓及び支那共產黨の政策と任務とを解決すべきである」と述べて居る。

支那共產黨の最大弱點が勞働者出身黨員數の餘りに少ないにあることは曾て述べたが、其最大原因は申迄もなく支那の幼稚な經濟狀態にある。一部の論者は、勞働者の少數は蔽ひ難き事實だが、、、たる資本家階級の規模は一層小さい。何となれば產業に於ける外國資本の勢力が壓倒的な割合で國内に侵入することは半植民國家の常例であ

り、此部分の產業に從事する勞働者も亦當然民族資本家階級と對立する無產階級の陣營に參加するからである。從て支那資本家階級は到底支那無產階級の、ではあり得ないと斷定する。併し此種の意見には少くも三つの弱點がある。第一は支那資本家階級の規模を過小に見積つたことである。此誤謬は現に南京政府が民族資本家階級の支持により て、曲りなりにも全國を統一するだけの威力と實力とを示して居ることにより明かであると思ふ。第二の弱點は支那勞働者が、所謂プロレタリア意識を體得するに困難な心理的事情の下に置かれて居ることを看過した點にある。抑も支那人の社會生活を支配する意識は家族主義のそれであり、家族主義的生活意識は個人主義以前のもので、從て社會主義的生活意識とは至つて縁遠い關係に立つ。玆に此問題を詳論する遑はないが、試みに顯著なる一例を擧ぐれば、一九二六年秋から翌年春にかけての共產系勞働組合運動史は、共產黨の代表する社會主義的イデオロギーと、青幇の代表する家族主義的イデオロギーとの決鬪であつたと云ふことが出來る。この決鬪に於て勝利は國民黨の軍事政治的勢力を背景とする共產系の手に皈したとは云へ、非常なる苦戰の末に贏ち得た効果は、前掲「城市農村工作指南」の引文からも大體推知される程度の極めて貧しいものに過ぎなかつた。上海に於ける兩者の抗爭は引續き今日に及んで居る。尤も產業勞働者の間では家族主義的イデオロギーに對する社會主義的イデオロギーの優勢が確實に實現されつつあることは疑ひ難い。第三の缺陷は支那社會の人口構成上に於ける勞働者の地位の低いと云ふ事實を忘れた點にある。假りに第一及び第二の缺陷を補正し得たとしたところで、即ち無產階級は資本家階級よりも優勢であり且つ產業勞働者の總てが（七字削除）を確立し得たと假定しても、この一握りの無產階級軍を以て、廣大な地域に撒布された幾億の農民を指導して有効な（四字削）を敢行せしめ得ると考へることは、恐らく一般人の持つ數の觀念が之を許さぬであらう。（以下三十四字削除）、支那共產黨の存在理由を拒むことは出來ない。只現代支那の持つ客觀的諸條件に照らして支那共產黨の當面に執り得べき正當なる任務を考ふる場合、我々は或る時機に比べて著しく右傾した第六次大會決議の中にすら、往々にして首肯し難い部分のあることを認めざるを得ない。

## 六

次には支那共產黨の「農民に對する任務」である。「農民運動の中心標語は、（以下三十三字削除）」と云ふにある。これが共產主義者の所謂、、、、の要點なのであるが、（四字削）の客體は土豪劣紳地主であり、農村に於ける（四字削）は「貧農」である。無產階級は貧農を指導しつつ此れと共に（四字削）の基本部隊を構成する。この基本部隊に對して農村内の他の社會層は如何なる關係に立つかと云ふと、「中農は强固なる同盟者である。故意に富農に對して燥急な鬪爭を仕掛けることは誤りである。何となればそれは農民と地主階級との間に横はる主要

矛盾點を混亂させるからである。それかと云つて富農及び半地主階級に對する鬪爭を拋棄せよと云ふのでは決してない」。(以下七行削除)

抑も現代支那の革命行動の中心が農村にあることは、支那共產黨が第五次全國代表大會に之を宣言したのみならず、左翼國民黨も亦同樣の見解を執つて居る。共產主義者の(十七字削除)、其理論的根據を、(五字削除)「、、、」に置く。若し支那の農村に封建勢力ありとする共產主義者の認識が正しくば、之を(二十一字削除)彼等の結論も亦正しいであらう。左翼國民黨は獨立した一政黨でなく、謂はば志を同じくする人々の疎鬆なる集團に過ぎないのであるから、強ち一貫した認識なり主張なりがあるのでは無い。其中の急進的な意見は、所謂第三黨(中華革命黨)と稱ぶところなき、、、であるが、然らざる人々は多く合法主義を執つて居る。合法主義者の理論的根據は共產主義者とは正反對に、農村の封建性を否定するところにある。此見解は傾聽の價値あるものと考へるから後日詳細に評解する積りだが、たとへ封建性否定の說が正しいとしても、只それだけでは現代支那農村の資本主義的性質を立證することにはならない。何となれば封建性及び資本主義性の外に第三の狀態が存在し得ないとは限られず、實際に於て支那の農村にはそれが明かに存在する。而して此第三狀態は合理主義的方法のみでは排除し得ないものであると同時に、又必ず、、に訴へねばならぬ性質のものでもない。所謂第三狀態を具體的に表現すれば「鄕紳」の經濟的政治的勢力である。之は思ふに支那社會特有の現象であり、殊に鄕紳の支配的地位は過去の一千年間に亙りて存續せるものであるから、簡單に茲で說明し盡すことは困難である。他日農村革命を解說する際に讓る外ない。

## 七

次は(五字削)に關する任務である。今日共產主義者の所謂(七字削)の建設された地方は、西は湖南廣西境から東は廣東省の北部海岸線近くに亙る南嶺山塊一帶である。此地方に於ける最高指導者は、廣東省の彭湃氏、江西湖南の毛澤東並に朱德氏である。彭毛の二氏は共に共產系農民運動の初期から戰線に立つて來た人々であり、朱德氏は湖南軍の將校出身で、多分一昨年秋から參加したものらしい。廣東省北部の(七字削)は此一年來小康を保つて居ると思はれるが、江西湖南のそれは隆替常ならず、昨秋は湖南軍首領魯滌平氏の爲に江西省萍鄕炭鑛を奪はれて最も重要な策源地を覆へされ、又本年一月下旬以來湖南江西廣東福建四省の包圍討伐を受けて目下苦戰の最中である。南嶺地方(五字削)に關する消息は討伐軍又は地方官憲の公報や國民黨系新聞記事によりて傳へられるに過ぎないから、正確な事情を知ることは困難だが、(五字削)內部に無產階級の指導勢力が缺乏して居ること、之に反してルンペン・プロレタリアが壓倒的な數及び勢力を持つて居ること、從て安定を得た(五字削)管下以外では農民の生活は必ずしも自由でないことと想像される。支那のやうな古い人口過剩社

會にルンペン・プロレタリアの數及勢力の横溢して居るのは決して不思議でない。或時代の共産主義者はルンペン・プロレタリアを辯護する爲に、其發生の責任者たる軍閥及び帝國主義者を非難し甚だしきは公然彼等と結托して（四字削）を組織したものであるが、發生の原因が何であらうとも、ルンペン・プロレタリアの數と勢力とを頼みとして、、、、の實現を容易ならしめやうとしたり、（七字削）を樹立してルンペン・プロレタリアの農民壓迫に利器を提供したりすることが、共産主義者の本意ではあるまい。恰も彼等が上海で産業勞働者に組織を與へる爲に都市ルンペン・プロレタリアの結社たる青幇と戰つて之を壓伏し得たやうに、農村でも共産黨の基本部隊たる無産階級の數及び組織、それから流出す勢力を以て出國に巣喰ふルンペン・プロレタリアを排除しつつ農民の（四字削）を組織し激勵し指導するに非ざれば、決して健全な（七字削除）を樹立することは出來ない。それは兎に角（七字削除）の樹立後に於ける當該管内の黨の任務は大體次の如きものである。

一、徹底的に土地問題黨綱を實行すること（註）
二、（七字削除）機關を建設し、廣大なる群衆を誘導して（八字削）せしめること
三、（削除）
四、出來得る限り近隣都市及び勞働運動との連絡を保つこと
五、（七字削除）が都市に及んだ場合には、徹底的に勞働者階級の生活狀態を改良し、之によりて（六字削除）に於ける（八字削除）を實現すること
六、出來得る限り正規的な（九字削除）を擴張すること

この外尚ほ注意すべき點は（七字削除）に於ける經濟政策に關するものである。それは（一）貨物の商業的交易の保存、（二）均産主義的傾向の克服である。（一）に關しては、、、の店主小資産階級が怠工の虞れがあるから、適正なる經濟政策を立てて之を豫防せねばならぬと説き、（二）に關しては、從來小資産階級（小商人小手工業者等）の（五字削除）して之を均分する傾向があつたが、「斯様な方法は生産經濟を破壞して（七字削除）を動搖せしむる」ものだと誡めて居る。

註　所謂土地問題黨綱は、一九二七年十一月の中國共産黨中央臨時政治局擴大會議が、次の大會迄效力を附與すると云ふ條件で採擇した「土地問題黨綱草案」に第六次大會が若干の修正を加へて決定したものである。生憎私の手許には草案だけあつて黨綱が無い。江蘇省委員會の「第六次大會報告大綱」によれば、草案と黨綱との重要な相違點は、前者に於ける「（十字削除）」の標語が、「（十二字削除）」に改められた點にあると云ふ。之は草案が支那共産黨左傾の最高調時に作られたものであるに對し、黨綱は彼等が一時的亢奮から醒めた後に作られたと云ふ事情に基く當然の相違である。此點に注意して左の草案を讀めば、現行の、、、、方針を大體誤りなく把捉し得ると思ふ。但し黨綱原文を入手次第、それに照して訂正を加へ得る機

會あることを期待する。

中國共產黨土地問題黨綱草案

一、(全文削除)。

二、(二十四字削除)及び押田制度を全廢する。(十二字削除)。

三、農民代表會議(七字削除)は農村内の、、、、機關である。それは地味高低位置を斟酌して(五字削)する。從來の小作農中の富裕者が富農となることを許さない。(以下二十字削除)にあづかることが出來る。同時に共產黨は革命的なる土地改良の實行に努力せねばならぬ。

四、(二十五字削除)は總て農民代表者會議の管理に歸する。是等の土地の小作制度を撤廢する。

五、(全文削除)。

六、(全文削除)。

七、(全文削除)。

八、農民代表會議は基金を用意して勞働能力を喪失した無產者(疾老病癈等)の生活を保障せねばならぬ。

九、(四十一字削除)森林保護及び植林の方法を講じ且つ鑛山の開掘を行ふ。

一〇、水利及灌漑方法改良の工事は農民代表會議に於て之を行ふ。泉流湖沼等は完全に農民の使用に歸する。農民は農民代表會議を經て此權利を行使し得る。

共產黨は水利の改良及び灌漑源の擴張に新式の技術機械動力等を使用することを其重要任務の一つと認める。共產黨は灌漑改良を目的とする農民の共同組合運動を組織及援助する。

一一、共產黨は水旱濟防止工事、築堤、引水路及び溜池の開鑿、牧場の施設等を實行し且饑饉豫防の設備を整へることに努力せねばならぬ。

一二、一切の苛酷なる契約及び高利債務を取消す。共產黨は低利農業資金即ち農業銀行及び農民の信用組合を組織せねばならぬ。

一三、共產黨は農民の組合運動を組織且つ援助する。即ち農產物及び農民の家庭手藝生產品の賣捌き、農民の日用必需品及び家庭手藝原料品等の買入れを此機關によつて行ふこととする。共產黨は工業を發達せしめて廉價なる新式農具を農民に供給せねばならぬ個人の肥料販賣壟斷を禁じ、肥料の買入は農民の組合に處理せしむる。共產黨は又農村道路の新設及修繕の如き建設事業を行ふべきである。

一四、(十一字削除)、厘金及徵稅請負人制度と共に完全に之を廢止する。(四字削除)は改めて單一的なる稅制を定め其收入の一部を村落の公費に充當する。徵稅は收穫後に年一回を限つて之を行ふ。統一的貨幣制度及度量衡制度を確定する。

一五、農業勞働者及苦力を保護する法律を制定する。政府は工業の發展及び公共事業に於ける種々の工事即ち道路の修築等を行ひ、

農村手藝を奬勵し、苦力及び失業者の勞働機會を保障せねばならぬ。

第二項の押田とは保證金附きの小作權を意味する。第三項に所謂富農とは勞働者を使役して農業を營むものである。第四乃至六項は(十三字削除)を規定したものである。第七項は(以下四十九字削除)原則を明かにしたものである。第九乃至十一項は(十三字削除)經營に關する原則を規定したものである。第十二項は一切の苛酷なる契約及高利債務廢棄の原則を規定したものである。農民の主要金融方法たる高利債務を否定した共産主義者は、農業銀行及農民信用組合によりて低利資金の供給を計らうとするものである。第十三項は農民の販賣及購買組合組織に關する原則である。第十四項は(四字削)の租税政策を明かにしたものである。それは從來の一切の課税及徴收方法を廢止し單一的税制を定めると云ふのであるが、其內容に就ては何等聞く所がない。第十五項は農業勞働者及苦力の保護、並に苦力及失業者の爲に勞働機會の保障を與へることを規定したものである。(三字削)にも保護を與ふべき農業勞働者の存在を豫想して居るのは、之を雇入れる富農等の存在を豫想する爲めであらう。(以下二行削除)、

## 八

最後に支那共産黨の「帝國主義、軍閥及び國民黨に對する任務」を紹介しやう。共産主義者から見ればこの三つの勢力は同一色の反動勢力であるのみならず、互に不可分なる連環狀の存在である。國民黨に就て云へば、「彼等は總て反革命的派別であり、買辦地主土豪郷紳民族資産階級を代表するものである。汪精衞の左派即ち張發奎陳公博等も亦同樣に反革命である。何となれば彼等は南昌暴動(一九二七年八月)及び廣州暴動(同年十二月)に際し、完全にファシストと成下つたからである」。ところで地主土豪郷紳は農村に於て軍閥の基本階級たるものであり、買辦は勿論民族資産階級も亦、共産主義者によれば帝國主義勢力を國内に導き入れるものである。此事實に徴し、地主軍閥及資本家階級のブロックたる國民黨政權が、帝國主義者の手先を勤めることは當然だと共産主義者は主張する。この優勢なる敵陣を攻擊する爲には「(以下四行削除)」。この鬪爭に用ひらるべき戰術は次の如きものであると說く。

一、最大限度の減税を要求すること
二、高利搾取に反對する鬪爭即ち信用組合生產消費組合等の組織運動を行ふ
三、大體に於て他人を搾取せざる下層小資産階級即ち小商人や小手工業者、小資産階級知識分子の一部分、小資産階級中の勤勞者、游民無產階級等を國民黨及び民族資産階級から引離すこと
四、店員手工勞働者職人苦力の經濟的要求を援助しつつ是等の都市貧民的小資産階級を組織し、彼等を誘導して無產階級と連絡せしめ、

且つ彼等をして（五字削除）に彼等の集團的生產を組織することの利益を知らしむること

五、（七字削除）以前に於ける對國民黨戰術は、國民黨各派の反革命的罪惡及び國民黨政權の反動的要素を暴露しつつ、彼等の手から大衆を奪ひ返すにある。

## 九

節を重ねて述べ來つたところにより大體明かなる如く、第六次大會の決定した革命方略は、これを一九二七年十一月の政治局擴大會議決議に比較するとき、著しい右傾（ブハーリン氏も亦曾て此語を用ひた）の證跡を認め得る。彼等の用語に從へば、この方向轉換は支那の客觀的狀勢が一九二七年下半期の「（四字削）」から翌年の落潮に入込んだと云ふ事實上の變遷に順應するものである。右傾した共產主義者は所謂高潮時代の（四字削）を原則的に拋棄して、勞働者農民及下層小資產階級の間に「準備行動」を押進めつつ第二の高潮を待つこととした。「政治決議案」中には第二高潮に對する見透しを述べて居るが、それは餘りに樂觀的であり且つ根據の正確を缺くものであるから、改めて玆に紹介する程の價値を認めない。又支那共產黨としては彼等が曾て一九二七年二月に上海で採用したやうなブルヂョア的「平民政權」の獨方針を棄てて、勞農サウエートの新方針を採用したのは、同年八月の政治局決議を嚆矢とする。第六次大會決議も亦此の方針を踏襲して居るのだが、曾て第五節にも少しく說及んだ通り、私は支那及支那共產黨の持つ客觀的諸條件に照し、此方針すら急進に過ぎると考へて居る。更に（四字削）の理論的根據に關する共產主義者の謬謬であるが、總てこれ等の重要問題は他の機會を得て暢論することとしたい。

# 英國勞働黨と今後の政局

蠟山政道



## 一

輝しき六月（グロリアス・ジューン）！ 陰鬱な天候の下に一年の大半を暮す島國イギリスにとつて、六月と云ふ月は本當に待たれる好時節である。この時節の到來と共に、政界も亦、四年半の保守反動の雰圍氣から解放される日が來るのだ。今回の總選擧が、如何に多くのイギリス人に待たれたことであらうかは、我々の充分想像し得る所である。

しかるに、多くの新聞報道の傳ふる如く、今回の總選擧ほど歴史あつてこの方、靜穩な選擧は無かつたと云ふ。そこには、五百萬の婦人有權者が新に加はり、共産黨も「勞働者農民の政府樹立」てふ獨立の旗幟を立てゝ選擧場裡に現れた。それにも拘らず、これと云ふセンセーションを起すやうな「事件」も「騷動」もなく、極めて平穩裡に選擧は行はれたと云ふ。それはなぜであらうか。

先づこれに就て、充分の材料を未だ手にしてゐないが、二三臆測がましい批評をして見たい。なぜなら本文の序言として、それが必要と思はれるから。

一九二四年の總選擧の場合の如く、「ジノヴイエフ事件」のやうな共産黨に絡る問題が、勞働黨と共産黨との關係の明白に公然と大衆に知られるやうになつた今日、再び起り得ないことは云ふまでもない。さうかと言つて、議會が外交問題のやうに一般民衆の血を湧かし易い問題で解散になり、それが是か非かと言ふやうな論爭があつた譯でない。政府と言へば、未曾有に尨大な多數を負ふて、あらゆる持札を出し盡し、いはば有能無能の批評は何れとしても、その能力の限りを盡して自然の往生を遂げた政府である。しかも、その政府が、「安全第一」と云ふ、十年前の日本に流行つたやうな古くさい標語を掲げて、選擧戰に臨んでゐるのである。悠然としてパイプを口に銜へつゝフロレンスの鐘の聲を聞き乍ら羅馬の古典を思ひ出すと云ふ閑日月のある

ボールドウインが、保守黨の氣持ちであつて見れば、これに對してエキサイトするなど、云ふことは、一體望む方が無理である。我々は指導者を要す」とオブザヴァの主筆ガーヴインが、毎週筆を刮して叫んでも、ボールドウインの閑雅な古典主義を如何ともすべからずであつた。保守黨は遂に安全第一主義を一歩も出づるを得なかつた。しかもこの主義に共鳴したものが、結果の示す如く、八百數十萬人あつたのである。騷ぎの起る道理がない。

然し、保守黨及びその贊成者がそうであつても、反對黨たる勞働黨及び自由黨の側に於て、何故に今回の總選擧を騷しいエキシタブルなものにせしむる原因がなかつたか。先づ自由黨から語らう。云ふまでもなく自由黨にとつては、この戰ひは大事な戰ひである。自由黨は、前回の選擧で、勞働黨内閣を倒すべく保守黨と共同戰線を張つた爲めに反つて保守黨に投票を奪れ、あはれ輕蔑に値するやうな小數黨に成り下り、黨内は内訌續きで今日に至つた。されば、今回の總選擧は、既に蠶食された地盤を奪還ずると共に、黨内の統一を企圖すべき、一石にして二鳥を擊つの好機會であつた。ロイド・ジョーヂを中心とする所謂自由黨左翼分子は、この爲めに數年來準備を怠らなかつた。昨秋發表した「英國産業の將來」は、その努力の一所産であるが、勞働黨のホイットレーの批評した如く、英國最近經濟史の參考書として、何人も一冊を書棚の中に入れて置いてもよい本ではある。序にその姉妹篇である「土地と國民」も座右に置いてよい。しかし、かうした數百頁の書册を何册出した所で、一般大衆の關心を引くことにはならない。全體から見れば、僅かな讀書階級に、個人主義を捨てた「自由黨は何處へ行く」か、と疑惑を抱かしむるに過ぎない。

自由黨再生の爲めに爲さるべき「政治的離れ業」と鳴り物入りの「急製的ジャヅ」とは、遂に六十餘頁のパンフレット「失業征伐」であつた。他の二黨が未だ所謂公式な選擧綱領を發表しない三月十二日と云ふに、自由黨は逸早く名乘りを擧げた。ロイド・ジョーヂを中心に、七名の領袖の寫眞を掲げた、全紙大の廣告は、保守黨の諸新聞まで現れた。その中には、エドワード・グレーの顏までも見えてゐる。しかし、それを見ては、エキサイトするどころか、そぞろこの傳統的な古い政黨の再生の惱みを感じない譯には行かない。今尙ほ歐洲戰爭勃發當時の經驗を忘れ兼ねてゐる英國の大衆は、昔と今とを思ひ合せて、それこそ今昔の感に打たれたことであらう。勞働黨系の諸新聞が、ロイド・ジョーヂのこの提案に、聊か狼狽したものか、今更らしく、之を攻擊したが、その必要は無い。英國の勞働大衆には、今や多年の苦難の間に、政治家の信用すべきものと然らざるものとを判じ得る能力が養はれてゐる。彼等の胸は、ロイド・ジョーヂの笛に、輕々しく踊るべく餘りに重苦しく壓迫されてゐる。十年の不況に壓抑され底深く燃えてはゐるが、容易に燃え上らない彼等の胸奥の火をかきたてゝ、炎々として燎原を燒く火と化せしむることは遂に自由黨の任

務ではなかつたのである。

然らば勞働黨は如何。今回の總選擧が平穩に、何事もなく、アッケなく行はれた原因の大部分は、勞働黨側にあるやうに思はれる。今回勞働黨のとつた選擧戰術こそは、私にとつて不可解である。勞働黨が最初に公式にその選擧綱領を發表したのは、四月十二日、ロンドンのアルバート・ホールに於ける演說會であつた。この日マクドナルドの演說に現れた所は、極めて低調平凡であつた。勿論大體の要旨は、昨秋バーミンガム大會で採擇された黨の新綱領「勞働と國民」に出てゐるものには違ひないが、撰りに撰つて、平々凡々な題目のみを擧げ、苟も社會主義を奉ずる政黨として肝心な問題には少しも觸れてゐない。ただ一點失業問題を解決すべき方策の決定に當る特定の行政機關の設置のみを擧げたに止まる。換言すれば、黨の重要政綱たる產業國有策などの項目を力說することを避け、又失業問題の如き重大方策の具體的方法を述ぶることを控え、ただ之に當る行政機關の設置を力說して、一切を曖昧の裡にボヤしてしまつたのである。そして、『勞働黨はプログラムの上に立つてゐるものでなく、原理の上に立つてゐるのだ』などとマクドナルドは云つてゐるのであるが、その原理にした所で、別に選擧大衆の心底に訴へるやうなものが示されてはゐない。私は未だ選擧の實際の模樣に就て知る材料を充分手にしてゐないので全般に亘つて論斷し得ないのであるが、少くとも勞働黨幹部の選擧に臨んだ態度は、全く共產黨の得たり賢しと罵る如く、有產者黨としてこそ應しい、穩和的な態度であつた。そこに大衆の激化を招く何物もなかつた。平凡な總選擧、それは一九二九年の總選擧の名であり、歐洲戰後十年にして、新たなる時代の開幕を告ぐる政治的事件としては、餘りに平凡であつた。しかも、かくして、勞働黨は第一黨として二八八名の議席を得て、北部愛蘭土を除けば第一位の投票數八百三十一萬七千票を獲得し得たのである。

## 二

勞働黨の穩和なる選擧綱領とその態度とに對しては、既に五月初旬に於て保守黨及び自由黨系の新聞雜誌に、それを奇怪なりとする議論が出た。或者は、之を勞働黨のカモフラージなりとした。即ち勞働黨幹部は選擧民に對して「勞働と國民」の中の危險な部分を巧みに隱蔽してゐるのである、と考へた。或者はかうも考へた。即ち所謂「今日の社會主義」(Socialism in our time)なるものは、獨立勞働黨その他のランク・アンド・ファイルに於ける左傾分子の壓迫によつて採用されたものであるが、その實行性は短期の勞働黨內閣によつては實現の見込無いものである。之を知つてゐる幹部としては、若し之を選擧綱領に掲げたならば、大衆をして之が勞働黨の確定方策だと思ひこませ、後に失望せしむる危險がある、と云ふのである。

この二つの見方は、互に異つた觀察に基いてゐるが、私はその何れが眞に近いか斷定し得ない。その眞否は近い將來に於て、徐々に實際

の行動から示されるであらう。それ故、ここに豫斷的な見解を立てる必要はないと思ふが、勞働黨組閣後の政界の模樣を展望しよう、とする本文に於ては、この點に對する多少の見解を持たずしては、本論に進み得ない。私の見解はどちらかと言へばその後者に近い。然し、問題としたいのは、マクドナルド始め勞働黨幹部が、何故に「今日の社會主義」を選擧戰の標語とせずに、個々の大したものでもないお題目丈けで選擧を爭つたかの理由を今少しく吟味して見る必要のあることである。之を勞働黨の右傾化と言つただけでは、答案にはならないと思ふ。何故に選擧戰では右傾化する必要ありやに答へなければならぬ。又何故に「今日の社會主義」論や失業問題の社會主義的解決の如きは、選擧項目として不適當なりやに就て判斷を下さなければならぬ。

私は、之に就ては、現代英國に於けるデモクラシーと社會主義との關係を吟味することによつて説かれ得る一問題だと考へる。又近頃共產黨によつてその存在の理論的根據を教へられた社會民主主義が何處の國でも早晩當面しなければならぬ一問題だと思ふ。社會民主主義は、終局的にはデモクラシーを國民的意義——階級的意義に對して——に解する。而して、この國民的デモクラシーの基礎によつて、卽ち選擧過程を把握した所の權力を以て、社會改造を行はなければならぬ約束にある。社會民主主義と雖も、權力を握ることが社會改造の前提である。その點は、何れの政治上の主義にも同一である。そこで選擧綱領は如何なる基準から定めらるゝものであるか。それは飽くまで權力獲得の手段たるに過ぎない。その手段を獲得するのに、目的卽ち社會改造の方法たる社會主義のプログラムまでを揭げて爭ふのがよいか惡いかは、當該デモクラシーの內容に鑑みて選擧に臨む政治家の考慮しなければならぬ所である。

かく論じ來れば、當然に勞働黨がその「勞働と國民」に揭げた社會改造の根本方策の性質が選擧大衆の構成する政治組織たるデモクラシーと如何の關係あるかを問はなければならぬ。デモクラシーは政權の基礎又は權力の源泉たるに過ぎぬのであつて、本來經濟組織の內面的構造と直接關係の無いものである。後者の改造方策はデモクラシーから生れ出でるものでもなければ、又それによつて執行されるものでもない。それは經濟政策と行政技術の司る所であつて、之と一般大衆は至大の關係を有するには相違ないが、大衆の直接要求する所、又容易に理解する所は政策と技術の過程ではなくて、その結果又は所產である。今や選擧戰に於て勞働黨の一般大衆に訴ふる所は、社會主義實現の爲めの權力を委任されることの一事であつて、社會主義の方策を語る所にない。又一般大衆の勞働黨に求むる所も各箇の生活經驗に觸れる實質的利益の賦與又はその約束であつて、その利益の與へられる方策過程ではない。

デモクラシーと社會主義との結合を、選擧戰てふ一點より眺むる時、右の如き距離と相違の存することを認めざるを得ない。勿論その距離と相違とは、一方デモクラシーの智識的發展により、又他方社會

主義の技術化的發達によつて、いくらでも短縮されるであらう。然しデモクラシーの祖國、資本主義の模範たるイギリスに於ても、今日に於ては、その二者の距離と相違とは未だ甚だ大なりと言はなければならぬ。勿論勞働黨及び黨員の素質、活動から見れば、その黨の綱領のみをとつて見ても、最近十年間に如何に發達したかは思ひ半ばに過ぐるものがある。一九一八年の「勞働と新社會秩序」に於て極めて幼稚な產業國有論と財政改革論とを揭げて、戰後の社會改造に英雄的な氣持で臨んだ當時に比すれば、所謂資本主義そのものの相對的安定を齎らした新らしい諸事情の研究と經驗とが加はつたとは言へ、今回「勞働と國民」はその政策の深さと廣さとに於て格段の差異がある。惟ふに英國勞働黨の社會民主主義は、その社會改造の方策に於て、その成立當初より三箇の變遷階段を經てゐる。單純なフエビアニズムの生產的國有主義より、ギルド・ソシアリズムの經營民主的統制主義を加へ、更に戰後に至つて金融資本を樞軸とする一般的產業統制主義に轉化しつゝある。若し帝國主義時代に於ける資本主義が金融獨占時代に入つたと云ふ立言が正しいとすれば、社會民主主義も亦當然それに伴ふて帝國主義時代に適應する方策に向ふ筈である。共產黨が社會民主主義の小ブルジョア主義を論じ、帝國主義時代に於ける存在の根據を說くは當つてゐる。その社會民主主義の政策綱領に尙ほ多分の成長力と可動性との存することを逸し、將來に於て、具體的の經綸として一定期間に歷史的の役割を演ずべき可能性に就ての研究を怠つてゐるのは、彼等の立場も尙ほ、已れに阿るの類で、社會主義そのものに就て消極的の一面を代表するに過ぎぬことを示すものである。

斯くの如く社會民主主義の經濟方策と行政技術とは內面的進化を遂げつゝあるが、この變化は廿年前否十年前に於て到底豫想し得なかつたものである。餘程のドクトリネーアでもなければ、昔の考へも今も同じだとは言へない筈である。ジ・デ・エッチ・コールのやうな一應理論に拘泥しさうな人でも、最近の著述『英國の社會及び經濟政策に於ける今後の十年』の序文に於て、『自分は約二十年の間社會主義者であつた、又現在も、若し何だと言へば元よりも一層社會主義者である。然し私の社會主義觀は變轉し來れる世界に依つて變化せしめられた』と言つてゐる。ギルド社會主義を唱へた當時の彼の書物と、今日の新著とを比較するならば、その目次の示す所丈けでも、その視野の如何に廣きに擴大し、その洞察の如何に深きに達してゐるかが判然するであらう。大體に於て勞働黨とその關係黨員の變化は斯くの如く認め得る。

然し乍ら、そはあくまで黨內の變化であり、且つ經濟政策の行政方法の變化たるに過ぎぬ。之を一般大衆の理解と投票の下に齎らすことは自ら別箇の問題である。若し、今回の勞働黨の選擧綱領が、一般黨員の水準より低き、餘りに低きものであつたとするならば、そは一に選擧大衆の擴大、デモクラシーの增大にその理由を求むべきではあるまいか。卽ち、獲得すべき選擧大衆に增大したるに反して、政策綱領

は單純なる標語や立法形式に表現し得ざる精密なる實際政策と行政技術との連關と化しつゝある。このギャップを如何に充すかは、一度や二度の總選擧によつて遂げられそうもない事柄である。ここにマクドナルド始め勞働黨幹部がその來るべき內閣の運命を大衆デモクラシーの基礎の上に、少數有能な經綸家の組織經濟政策參謀本部の活動に負はしめんとした所以が存するのではあるまいか。これによつて、黨內の左右兩翼を抑制すると共に廣き選擧民層の現實的要求に添はんとした計畫が潛んで居るのではあるまいか。これ勿論私の一家言であるが、若しそう解するならば、失業問題の如き大問題に當面し、反動四年の政治に昂騰し行く大衆の不滿を負ひ乍ら、尙ほ且つ平穩無事なる選擧戰を試みることを利とせる理由が解せられるであらう。

## 三

斯く考へ來るならば、今回の總選擧の最大の論爭題目は、實は、失業問題でもなければ、產業復興問題でも、將又海軍軍縮問題でもなく、それは實にマクドナルドが英國全土に高唱して廻つた「何れかの政黨をして絕對多數を得しめよ」の叫びでなければならぬ。然らざる限り、今日英國の當面せる事態を根本的に改造することなどは出來ない。然るに、勞働黨幹部の還算か、或はその力未だ足らざる爲めか、總選擧の結果は遂に絕對多數を獲得し得ないことが判明した。僅か六十名に充たざる自由黨が、遂に勞働黨內閣の死命を制することになつた。

そこで當然問題となるのは、自由黨が如何なる條件の下に、又如何なる內容に於て、勞働黨を援助するかの問題であらう。勿論その形式としては、政策協定の如き議會以外に於ける提携を爲すことはあるまいが、議會內部に於ける駈引に於て、自由黨の考慮は、勢ひ二箇の方面に走ること〻考へられる。その一つは、黨としての自由黨の存續の問題であつて、三黨鼎立の今日、現行の選擧法を以てしては、到底再生の見込はないことが判明したから、之から脫却する爲めに選擧制度の改正を企圖しやせぬかと云ふことである。これには恐らく兩大黨の反對がある上に、長い間の憲政上の傳統を破ることでもあり、且つその改正が議會及び政府の安定を齎らすものかと、言へば必ずしもそうでないから、多分ものになるまいと考へられる。他の一つは、選擧の際の公約、殊に自黨の失業對策に就て、勞働黨と如何に接衝するかの點である。ロイド・ジョーヂは、選擧中に言明したことがある。卽ち自分が政權が握れなくても、握つた者を强制して自分の約束を果さしめることが出來る、と。若し勞働黨の失業方策が自由黨の所期する結果を齎らしさへすれば可なりとするならば問題は比較的簡單であるが、その方策の內容及び過程に於て兩者の合致を見なければならぬとすればそこに可なり多くの難點がある。

自由黨の失業對策は、臨時緊急策たることを特色とし、交通や都市計畫の如き主として土木建築の如き一、二の產業部門のみに據つて、し

かも自給的な公債によつて支辨し得る、となしてゐる。然るに、勞働黨は失業問題には恒久的原因ありとし、それを除去拔本するの策を執るに非ざれば、之を解決し得ないとしてゐるから、臨時應急策に餘り重きを置かず、殊に特殊の産業部門のみに依據することは、勞働者階級の政黨として賛成し得ない所である。斯くの如き二者の相違を如何にして調和せしむるかは、今から見て殆んど想像に苦しむ所である。勿論勞働黨内閣がカモフラージして、自由黨との妥協を策すれば別として、然らざれば勞働黨と自由黨との協調は、失業對策の皮相的部分に止まる虞があらう。例へば、トーマスが選擧中發表した鐵道電化や社會保險の改正に依る失業者減縮の方策の如きは、自由黨の容易に賛成する所であらうが、問題は今一歩を進めて自由黨の大規模なる緊急方策が或る程度まで實施されたと假定した曉に、生じて來る。その緊急方策の撤去を可能ならしむるやうな狀態を確保する爲めに、勞働黨の所謂恒久策の實施に入るべきや否やの問題が生じて來る。卽ち、炭坑業を始め動力交通業の國有化、銀行金融及び信用投資の統制的管理、大衆購買力の再分配と言つたやうな一連の方策の實施こそは、自由黨と勞働黨との協同の持續を將來に向つて決定せしむるテストとなるであらう。この際自由黨の左翼分子の或者は、勞働黨の傘下に走り、他は保守黨の陣營に逃れることゝならう。卽ち再び國民大衆の批判の下に、自由黨の去就は内部的に分裂することによつて決定せられる必然的の趨勢にある。

然し、この時期は一年若しくは二年の後であつて、それまでは失業問題の外、數多くの社會政策的改良施設の實施と、對外的及び國際政策の分野に於て、自由黨との協調は多分に保たれるであらう。對露國交の恢復、對支關係の是正、軍縮問題及び賠償問題等はその主たるものであつて、當面の機會もその解決を容易ならしむべく充分熟してゐる、しかも是等の對外的國際的政策の實施は、内政的諸方策の實施に要する財源費用の問題と直接に因果關係を有するものなるに於てをや。軍備問題を解決せずしては、失業問題は解決できない。軍備費と社會政策費との膨脹は、十九世紀の末葉より帝國主義時代に入れるイギリスの資本家的政府の惱みであつた。この矛盾を切斷せずしては、この矛盾的遺産を繼承せる勞働黨の社會民主主義は實現の餘地はない。勞働黨が國際平和政策に異常の熱心を示す所以のものは、マクドナルドのやうなパシフイストの熱情のみに胚胎するものでなく、スノーデンの如き計數に明るい財政家の要望からも出てゐる。

恰もよし、太西洋を越えて海の彼方には、巨人フーヴアーが國民的輿論の背景を以て、軍縮問題に固い決意と深い用意のあることを示してゐる。加ふるに五年前勞働黨内閣の名を成さしめた、賠償問題專門委員會の議長たりしドウズが、英國大使として兩者の間の橋渡しとなつてゐる。天の配劑は寔に妙である。これからして何事も生れないやうであつたなら、今日の人類は何事も爲し得る能力なしと云ふことになる。所謂「數學的均一」（マセマテイカルパリテイ）の外に「政治的均一」（ポリテイカルパリテイ）を齎らし得る機運と

條件とが具備されてゐるのだ。斯くの如き客觀的社勢に應じて、ロイド・ジョーヂの自由黨が、單なる一黨一派の私的因由によつて勞働黨に反對し得る理由は存しない。それは勞働黨に屈すると曰んよりも寧ろ國際的輿論に服するものであるからである。

右の如き諸條件の規定する範圍内に於て、勞働黨と自由黨との協同は成立つものと見られる。然し、そは決して二者の政策協定ではなくて、政策一致と見るべきである。黨の成立當初より「獨立」を標榜し來れる貴い傳統を有する勞働黨は、その最少限度に於て既成政黨との協定や連合を排せねばならぬ。勿論、その實質に於て二者の協同を可能ならしむるやうな政策が樹立されることを以て、共産黨の罵倒する如く表門で獨立を表明し、裏門で握手するやうなものとも見られる。然し、デモクラシーを原理とし社會民主主義を主張する政黨が、假令第一黨だとしても、絶對多數を有しない限り、この事實は避けられない。こゝに社會民主主義の特異性と現代的意義とが存する。なぜなら、デモクラシーは結局に於て被治者の政治である。階級黨として發生した勞働黨も、嚴密に言へば、既にチャーティスト運動の歴史に遡るまでもなく、當初からして、既に多くの小ブルジョア分子を包容して來た。況んや今日に於て黨の勢力と地盤とは一千萬人以上の國民大衆の上に擴がつてゐるに於てをや。この廣大な大衆的デモクラシーを基礎とする社會民主主義が、尚ほ且つ絶對多數を包容し得ない時、そは妥協と漸進の道を歩むべく餘儀なくされることは、當然過ぎる程當然である。社會民主主義の試煉時は未だ來らぬ。彼等が眞に試みされる時は、自由黨の勢力を粉碎した時である。それは、恰も今日僅かに五萬人の贊成者しか有せぬ共産黨の革命的社會主義が、勞働者階級の名に於て、眞に社會民主主義の勞働黨と論議を爭ふの日が、甚だ遠い將來であつて、少くとも勞働黨が絶對多數の地盤を確保し得た後日のことであるのと似てゐる。マックス・ベーアが『現代英國論』一九二六年に於て今日英國の勞働運動の中心問題は「勞働黨か共産黨か」の爭ひに存する、と結論したのは聊か言ひ過ぎである。そは彼自身の修正主義より共産主義に移つた個人的心理の反映でしかない。

英國政局の今後の推移を展望せんとして、私はその基本的見解を述べたに止まる。個々の政策や問題に就ての解明に就ては、他日再び論述の機會が與へられるであらう。（昭和四年六月七日）

# プロレタリヤ文學理論の展開

青野季吉

## 一

ブルジョアジーの文學は理論の推進力を完全に失つて仕舞つた。かう断言しても、今日では何人も不服を唱へる者はないであらう。高山樗牛の理想主義的文學理論、田山花袋・島村抱月・長谷川天溪等の自然主義的文學理論、夏目漱石・阿部次郎・小宮豐隆等の唯美主義的、文化主義的文學理論の昔を想起すると、そこにはそれらの力強い文學理論の推進力が、創作行動の背後に働いてゐた。理論は創作を生み創作は理論に反映して、常に理論が創作をリードしてゐたと言つてもよい。だが、今日のブルジョアジーの創作行動の背後には、さうした意味の理論と言ふものが、完全に消滅してしまつた。今日のブルジョアジーの創作行動は、さういふ意味の理論の拍車をうけて推し進められてゐるのでなく、それ自身の惰性的な力によつて動いてゐるのだと言つても過言ではないであらう。事實、今日、ブルジョアジーの文壇の何處に、文學理論らしい理論があるであらうか？ただそれだけを想ひうかべても、人は私のいまのやうな断言に不服を唱へはしないであらう。

人は言ふでもあらう。最近のブルジョアジー文壇の例へば形式主義文學理論の如き、立派に創作行動をリードしてゐるものではないかと。私は敢て答へる。形式主義文學理論の出現には、ブルジョアジーの文壇の理論的蘇生を思はせるものがあるのは事實である。だが、形式主義文學理論なるものを立入つて檢べて見ると、それは理論らしい構成をもつてゐるものでなく、いかなる意味においても前期の指導的文學理論と比され得るものではない。ブルジョアジーの文壇の最後の理論的努力が形式主義文學理論を生んだとすれば、それは決してその理論的蘇生を物語るものではなくて、反つてその理論的死滅の過程を實證するものである。

ブルジョアジーの文學において失はれた理論的推進力は、プロレタリアートの文學において力強く再生した。理論の權威は今や完全にプロレタリヤ文學の陣營に移り、およそ文壇において見られる生々した、

努力的な、體系化へと前進しつゝある理論は、恐くこれプロレタリヤ文學の理論だと言つてよい。

批評と理論とは、闘爭と建設の前衞的武器である。ブルジョアジーの文壇が何等かの意味において闘爭と建設の段階にあつた時には、批評と理論とが創作行動をリードしてゐた。だが一度ブルジョアジーの文壇がその段階を通過して、完成と爛熟とに達し、沒落の過程に一歩を踏み入れると、最早や批評と理論とは、そこで何等積極的な力と意義とを持ち得なくなつた。そうしてこの闘爭と建設の前衞的武器は、新らたにその歴史をつくり始めたプロレタリアートの文壇に移つてしまつたのである。

日本のプロレタリア文學の運動は、過去約十年の歴史を持つてゐる。この年月は、ブルジョアジーの文壇内の文學流派の運動として見れば、決して短かい年月ではない。それだけの時の經過のうちには、その流派の文學理論が一應完成され、それに基く創作が一應完成される。だが、プロレタリヤ文學運動にとつてはその年月は、決して長い年月ではない。と言ふ譯は、プロレタリヤ文學の運動は、ブルジョアジーの文壇内の文學流派の運動と根本的に異つて、一個の階級的の文學運動であり、その文學を理論的にも作品的にも完成させるところのプロレタリヤ文化環境の生成と相俟つて、始めて實質的に前進し得る文學運動だからである。從つてこゝで、若しその文學理論が一應手つ取り早く完成され、それに基いた文學的創造が一應手つ取り早く完成されたら、それこそ奇蹟に近いのである。

私はいま、過去約十年の日本のプロレタリヤ文學運動内の、理論的努力の所産を概觀しやうとする。この仕事はいかなる意味においても、それを總決算して、そこに何等か『一應完成されたもの』を觀ようがためではない。いま日本のプロレタリアートの文學理論的努力は、新らしい展開と建設とへ生々と踏み出してゐる。批評的・理論的・關心の波は、過去に曾つて觀たことのないほど隆起してゐる。この機會に、過去の理論的努力の所産を人々の記憶に新らたにし、その展開の姿を多少とも具體的に輪廓づけて見度いからに外ならない。

## 二

日本のプロレタリヤ文學理論の展開は、これを大正十五年の『目的意識論の提唱』以前と以後とに分けて取扱ふのが便利でもあり、妥當でもある。と言ふのは、この提唱を境界として、その展開のテンポにおいても、實質においても、甚しい相違があるからである。これを言ひ換へれば、それ以前に、漸次的に生成しつゝあつたプロレタリヤ文學理論が、それを境として一つの辨證法的飛躍を遂げたのだと言つてもいいであらう。

そこで先づ順序として『目的意識論』以前から觀て行くことにする。

この時期の文學理論の內的、外的に特性的な點は、一、ブルジョアジ

ーの文壇との闘爭の過程において、漸次にそれが展開されて行つたことである。プロレタリヤ文學はそれが文學運動である以上、當然文壇的ブルジョアジーと先づ闘爭せざるを得ない。しかもその闘爭は後者の社會上・文學上のイデオロギーにたいする攻撃をおいて他にないのは言ふを俟たない。而してその攻撃は必然に、プロレタリアートの社會上・文學上のイデオロギーの積極的な展開でもあり、またあつたのである。二、その文學理論が、斷片的、素朴的、非組織的だつたことであり、當然それは謂ゆる『混階級的』だつたことである。これはいかにも當然なことであつて、そうであつたなかにも、プロレタリアートの文學運動が不可避的に取上ぐ可き問題、後の時期において力強く展開された問題を既に一應取上げてゐたことは、大いに注目されていいと思ふ。三、一般に外國特にロシヤにおけるプロレタリヤ文學理論の示唆・影響が全然なかつたことである。日本のプロレタリヤ文學運動は、外國のそれが『質的に飛躍した』（コーガン教授）一九一七年の革命に刺戟されて起つたのであつたが、彼地の文學的實踐は、久しい間日本のプロレタリヤ文學運動に何等寄與する機會を持たなかつた。從つて日本のプロレタリヤ文學理論は、マルクス主義的方法を唯一の指針として、全く孤立的と言つてもいい狀態において、素朴的、斷片的に漸次に展開されたのである。

そう言ふ狀態であつたが故に、種々な問題が取上げられ、この時期に相應した程度において展開されたが、その中歷史的、發展的意義に最も富んだもの若干を指摘しておかう。

第一にはプロレタリヤ文化及び文學の可能論である。ロシアでは一九二六年に至つても『まだ我が大家の間に於てさへ、プロレタリヤ文化乃至文學が存在し得るといふことに就いては、確乎たる定見がない』（コーガン教授）のであつたが、日本ではそれが無雜作に――或はロシアに比して無批判的にと言つてもよいであらう――取扱はれてしまつて、直ちにプロレタリヤ文化及び文學の可能が信ぜられ、提唱された。これは必らずしも日本のプロレタリヤ理論家が單純であつた爲めばかりでなく、ブルジョアジーの文壇との闘爭といふ必要が生んだ現象でもあつたと解してよいであらう。イデオロギーの分野では、プレハーノフが指摘してゐるやうに、往々かゝる現象が生ずるのである。

二、ブルジョアジーの文學打倒論である。これは別に説明するまでもないが、たゞ注意を促しておき度いのは、ブルジョア・イデオロギーに由つて成る文學の打倒の必要は説かれたが、嘗てプロレタリヤ理論家の何人によつても、在來の文學的達成から何等攝取すべきものはないなど説かれたことが無かつたこと、これである。然るにブルジョアジーの側の攻撃者は、プロレタリヤの文學運動は、一切の文化的・文學的遺産を放棄し、泥濘の中に叩き込むものでもあるかのやうに言つた。これは誣妄である。當時は自然の理由から、まだ、文學上のいかなる遺産を繼承すべきかが問題にならなかつたばかりである。

三、文學運動の組織論。プロレタリヤ文學運動は、組織ある集團の運動として始めて發達することが出來、その組織は、他のプロレタリヤ運動主體と有機的に結合して始めて、階級的意義を發揮することが出來る、といふ理論が、多くの反對者――無政府主義者、一部のマルクス主義者すらの――を斥けて、最初から確立され、展開された。ただその集團の行動の規定等に關しては、勿論、明確な理論的展開を見なかつた。

四、讀者及び大衆性の問題。これはプロレタリヤ文學の謂ゆる第一期の進出期に起つた問題である。當時のプロレタリヤ文學が、事實において、インテリゲンチヤ及び少數の前衛的勞働者にしか讀まれないのを觀て、一部の人々は、その大衆化の要を唱へ、その方法として、既成の娯樂的要素を多分に取入れた通俗藝術を提唱し、それを實踐に移しすらした。これにたいしてプロレタリヤ文學の主流は、同じく大衆化の要を認めながら、右の機械的な方法を斥け、運動全體の中によつて漸次的にプロレタリヤ文學を大衆化すべきであり、また大衆化し得ると主張した。その後の事實を見ると、右の機械的方法による大衆化は全然失敗し、當時インテリゲンチヤと少數の前衛的勞働者にしか讀まれなかつたプロレタリヤ藝術が、今日、萬をもつて數へられる勞働者及び農民の心臓へ『喰入つて』來てゐるのである。

五、リヤリズムの固持及び『調べた藝術』論。それは勿論、部分的な、多分に自然主義的なリヤリズムではあつたが、とにかく日本のプロレタリヤ文學は、その出發の當初から、リヤリズムを固執して來た。そして表現主義、未來主義等々の偏向と戰つて來た。しかもこのリヤリズムの歩みが、主として勞働者出身の作者によつて、半ば無意識的に採用・固執され、右の偏向が主としてプロレタリヤ化したインテリゲンチヤによつて、これも半ば無意識的に爲されたといふ事實は注目に値する事實である。『調べた藝術』の提唱は、恰かもその部分的、體驗的リヤリズムが行詰つた時期に、文字となつて現はれたものである。(こゝで一寸附言しておくが、プロレタリヤ文學において『行詰り』と云ふ場合は、その大衆化への漸次的な歩みが頓挫した場合で、ブルジア文學の場合のやうに、主として作家の主觀的條件に關聯したことではない。)その提唱は『調べた』といふ標語でも示されてゐるやうに、部分的でなく全體的、個人體驗的でなく階級經驗的のリヤリズムへの進出を要求したものであつた。これは正に、謂ゆる綜合的リヤリズムへの素朴的な要求の現はれと言つて差支へないであらう。

この時期には、これらの理論的展開があつたに拘らず、根底的にそれを裏附け、やがてそれを組織し、統一すべきイデオロギーの意識的高揚も、把握もなかつたと言つてよい。そこで『目的意識論』の提唱が、この時期の自然發生的狀態に終結を與へ、意識的プロレタリヤ文學運動の扉を開いたのである。

## 三

『目的意識論』の概要は、『プロレタリヤの文學は、自然に發生し、生長する。それは何ものをもつても抑へることが出來ない。また自然生長があればこそ、運動が成り立ち、それが必然となるのである。しかし自然生長は、飽までも自然生長であつて、それが目的意識にまで質的に變化するためには、その自然生長を導き、引上げる力がなければならぬ。‥‥プロレタリヤ文學運動は飽くまでも、目的を自覺したプロレタリヤ藝術家が‥‥自然生長的なプロレタリヤの藝術家を、目的意識にまで‥‥引上げる集團的活動である。そこに運動の意義がありそこに運動の必然がある。‥‥』(青野季吉)と云ふにあつて、それは要するにプロレタリヤ文學及び文學運動に、プロレタリヤ・イデオロギーの徹底的浸透を求めたものに外ならなかつた。

この提唱は一方では文學運動の組織の上に、他方では文學理論そのものゝ上に、劃期的な展開を與へた。卽ちその組織の上では、プロレタリヤ・イデオロギーのヘゲモニーを執らない例へば無政府主義的要素は、これをモメントとして淸算された。文學理論の上ではプロレタリヤ・イデオロギーの高調・體驗的・部分的リヤリズムの止揚が、力強く前面に押し出された。

だが、それにも拘らず、その理論的努力が甚しく機械的な偏向を執つたのは、事實である。たとへば組織論の上で、プロレタリヤ文學團體をもつて、前衛的組織と誤認した偏向や、文學理論の上で一部の人々によつて謂ゆる『進軍ラッパ主義』が唱導された如きは、その顯著なものである。この責任の一部は確かに、提唱者の提唱の仕方が、かなり簡結であり、約束的であつたことに起る。だが、その責任の他の部分は、文學及び文學運動をそれとして取扱はないで、當時マルクス主義政治理論界を支配してゐた謂ゆる福本主義の機械的・公式的理論を、そのまゝ文學及び文學運動に、無批判的に當てはめたことに存する。

それにつゞいて現在までのプロレタリア文學理論的の發展の過程はこれを要するに、『目的意識論』によつて示唆された方向の徹底、それから生じた諸偏向の淸算の過程であつたと言つてよい。例へば極く最近『政治的價値と藝術的價値』の問題を提出した平林初之輔氏は、その提唱をもつて『目的意識の昇華』だと註釋してゐる。

『目的意識論』は言はゞそれまでの自然發生的な、組織論、作品論、批評論にたいして、基礎的な、根本的な出發を促したもので、プロレタリヤ文學理論は、當然、これをモメントとして、統一化、組織化への方向を執り、特殊化、具體化へと進出しなければならぬ約束をもつてゐた。またその約束は、徐々にそれ〴〵の集團の理論的努力によつて果されて來た。

この提唱は、やはり前期的特性をもつて、一般に外國特にロシアの文學理論的努力とは、直接何らの關係なく、日本のプロレタリヤ文學運動それ自身のうちから、辯證的に展開されたものであつたが恰かもこの前年にロシアのプロレタリア文學運動は、『ロシア共產黨の文藝政

策」に現はれてゐる理論的努力をなしてゐた。そしてその努力のうちに、黨（プロレタリアートの前衛的組織）と文學運動との關係、プロレタリヤ文學運動と同伴者との關係、文藝批評の基準の問題等の根本的な問題が、決定的に取扱はれてゐた。これを我々のところにおける『目的意識論』にくらべると、その準備と、その規模と、その具體性において決して同日の談ではないが、そしてまたそれはロシアのプロレタリヤ運動の進行と、日本のそれとが同日の談でないと同じに、當然のことであるが、それにも拘らず恰かも時を同じうして、同じ基礎的な性質の理論的努力が、この世界の二つの部分にあつたと言ふことは深い意義のあることでなければならない。だが、これは決して偶然事ではない。と言ふのは、プロレタリヤ文學理論は世界的共働によつて建設されなければならぬほどの未墾地であり、しかも各國のプロレタリヤ運動は、國際的プロレタリヤ運動に、多かれ少かれ合流して進行してゐるからである。

## 四

『目的意識論』以後のプロレタリヤ文學理論の特性的な點は、何人にも明かなやうに、第一には、それが組織的、統一的方向をとつて進んで來たことである。前期のやうに素朴的、抽象的、孤立的な形において問題が把握され、展開されるやうなことがなくて、ともかく文學理論に體系的構成への努力の方向を執つて進んで來てゐる。第二、それは、前期においてはブルジアジーの文壇との鬪爭の過程において、徐々に展開されたものであつたが、この期に及んでは、プロレタリヤ文學運動自體の內部的鬪爭の過程において、可成り急速なテンポをもつて展開されて來たことである。それと言ふのはブルジョア理論に鬪爭力が極度に、弱化し、乃至は消滅すると共に、プロレタリア文學運動の陣營內に、問題が具體化し、特殊化さるにつれて理論的對立が當然な理由で、發展したからである。第三、それは前期においては、プロレタリヤ政治理論と、多かれ少かれ關聯して展開されたとは言へ、まだその關聯の度合、結合の程度は、稀薄であつたと云へる。だがこの期に及んではその度合、程度が比較にならぬほど緊密になり、層一層緊な關係に這入り込みつゝ展開されたことである。たとへばプロレタリヤ政治理論の方面で、前衛と大衆の機械的分離理論が前景を占めて來ると、プロレタリヤ文學運動の組織理論の方面において、それと符節を合した理論的方向が執られ、前衛と大衆との有機的、組織的結合の必要と、その組織理論が政治方面の前景に掲げられると、それと同じ必要を槓杆とした理論が、文學上理論的努力の日程に上ると言つた類ひである。第四、この時期には一般に外國特殊にロシアにおいて達成されたマルクス主義文學理論が、非常な熱心をもつて、我々のところへ紹介され、それが我々のところの文學理論の展開に力強い拍車となつたことである。この事實に大いに留意しておく必要がある。この期におけるプロレタリヤ文學理論が、急速なテンポをもつて展

し、こゝに一種の批評時代、理論時代を現出したについては、他の諸條件の共に、この條件が大いに貢獻してゐる。ブルジョアジーの前代の諸文學流派の理論が、ヨーロッパにおける達成を攝取して、乃至は直輸入して、急速に一應完成させられたに反して、プロレタリヤの文學理論にその理論上の本源がなかつた。が、この期に及んで始めて、その本源と我々のところとの流通の路がひらけたのであつた。かくて、これまでは單獨の努力によつて展開された文學理論が、國際的共同努力によつて展開される事情となつたのである。たとへば問題の『ルナチヤルスキーのテーゼ』のごとき、いかに我々のところの文學理論の展開に、有力な槓杆として作用したことであらう。またかの綜合的リヤリズムの提唱のごとき、我々のところの實踐的方向がよし自然發生的にそこには向つて進んでゐたと言へ、その理論的基礎づけが、いかにマーツアの『歐洲プロレタリヤ文學の道』に負ふところがあつたかは、說明するまでもないであらう。

我々は次に、然らば、我々のところの文學理論が、いかに具體的に展開されたか、その最も重要なもの若干の觀察に移るであらう。

## 五

この時期に入つて日本のプロレタリアートの理論的努力は、先づ文學運動の組織理論の方面に、ついでプロレタリヤ文學の全內容の方面に輝かしい進出を見せた。だが、それと共にプロレタリヤ文學運動の

陣營に二個の意見の對立、二つの傾向の對立が明白となつた。それは今日誰でも知つてゐるやうに、『文藝戰線』を機關とする團體のそれと『戰旗』を機關とする團體のそれとである。（この二個の團體の對立はヨリ多く政治的理由によるものであるが、それぞれの政治的意見は、何等かの形態において、文學上の理論で反映せざるを得ず、事實またそれは最初は明白の形をとつてゐなかつたが、問題が具體化されるに從つて、漸次に明白となつて來たのである。）だが、その對立は、一切の取上げられた問題において見られる譯でなし、問題によつては二つの團體の見解が、かなり接近してゐる場合、乃至一致してゐる場合すらある。これは寧ろ自然なことと言つてよからう。

文學運動の組織理論はこの時に決定的に明白になつたと言つてよいプロレタリヤ――マルクス主義――文學團體は、原則としてマルクス主義黨に附屬し、その一つの機關として初めて、十分な意味においてその名に値するものたることが出來る。これは最早確立された意見であつた。だが實際的に言つて、それならば現在實質的にマルクス主義黨として認め得られ、その下にプロレタリヤ文學團體が附屬す可き黨は、果して何處に求められるか？といふ問題になると、そこに二つの意見が對立してゐるのである。更にその文學團體の內部と構成に關する理論になると、一層その對立が鮮明になつて來てゐる。

文學團體の主體は藝術技術家をもつて構成すべきであり、その主體の外圍に、文學藝術的の大衆を結合すべきである、といふのがだいた

い一方の意見であり、文學團體の組織をもつて、事實上、ほゞ政治團體の組織と同一的に取扱ふのが、他方の態度である。そして前者が、その組織および運動において、純粹型を主張してゐるに反して、後者が實に混合型をとつてゐるのは、その主張からの當然の所産と言つてよいであらう。

この時期において、プロレタリヤ文學の内容及び形式の問題が、それについで最も熱心に追求されたが、その結果は、謂ゆる綜合的リヤリズムの理論である。

曩にも一寸述べておいたが、日本のプロレタリヤ文學は、既に前期の終る頃から、事實的に、この方向を執つて進んでゐたのが、こゝで理論的に意識化され、一層それが前方に押しやられたのに過ぎない。こゝでも事實が理論に先行したのである。この理論の構成者は藏原惟人君等であつた。私はいま、これが說明を便宜上マーツアの『歐洲プロレタリヤ文學の道』からかりて來やう。

『……若しも藝術家が、プロレタリヤの現實のエピソード的な、隔離された偶然な場面及び現象の限界によつて滿足しないならば、若しも彼がすべてのエピソード、すべての偶然の中に全體としての現實との聯繫、過去及び未來への歷史的過程との聯繫を見るならば――その時彼は必然に常に卑俗なる自然主義をのみでなし、またそれが個人的な(廣義に於ける)現象の隔離されたる選擇をのみ許すといふ限りにおいて、分析的リアリズムをも棄てて、綜合的リヤリズムの道に進んで行かなければならない。……綜合的リアリズムがその形式的プランに於いて、分析的ブルジョア的リアリズムと異る所は、先づ第一に、現象と思想とは廣汎な、辯證法的理解によつて決定されるコンポジションの性質にあるのであるから、我々はこの綜合的コンポジションの基本的性質を强調しなければならない。』

日本で展開された綜合的リアリズムの理論は、主としてこの引用文中に聯繫を高調したもので、それはまた與へられた日本プロレタリアートの現實から當然なことでもあつたのである。日本のプロレタリヤ文學の作品と批評とは、その出發の頭初から常にリヤリズムを固執し諸種の小ブルジョア的惑亂に發した傾向と戰つて來たが、綜合リヤリズムの理論と共に、そのリヤリズムはプロレタリヤ化に一應徹底したものとなつたと言つても、差支へないであらう。

それについでプロレタリヤ文學の理論的努力が、最も多く消費されたのは、謂ゆる大衆化理論であらう。この問題は、これを一應解決のついた問題としてゐる人々があるやうだが、正しくはまだ解決のついてゐない問題である。現にこの月の『新潮』にも、勝本清一郎君はこの問題について、注目すべき意見を述べてゐる。

大衆化の問題では、藏原惟人、林房雄、中野重治、青木壯一郎等の諸君が最も熱心に討究したが、いまその概要を見ると、プロレタリヤ大衆の間に實在する層の相違、文化水準の相違、年齡の相違等を基礎として、プロレタリヤ文學の分化――たとへば高級文學、通俗文學、少

年文學等々へ——の必要を說く者と、その機械的な取扱ひ方を非難するものとが存在するやうである。特にそれは『藝術性』に關する論點と關聯して、一層問題を生んでゐる。

この點で最近注目すべき理論を展開したのは、前記の勝本淸一郎君の論文である。勝本君は『プロレタリヤ藝術の確立運動は、大衆化運動と結びつかなければならぬ。プロレタリヤ階級の中にこそ、將來に於ける新らしい建設的な生活內容の萌芽があり、次代の新らしい「藝術性」のための諸條件の準備がある筈だからである。その中へと擴大して行かなければ、それらを獲得することが出來ぬ。卽ちプロレタリヤ藝術は、大衆化して行くことによつて、次第に藝術性を喪失してゆくどころか、かへつて益々新らしい內容と、形式と、それを裏づけるべき新「藝術性」の諸條件とを、みづからの肉とも血とも骨骼ともなして行くのである云々』と言つてゐる。

プロレタリヤ藝術の確立運動と、大衆化運動とが結びつかなければならぬことは、こゝで勝本君によつて新らしく强調されてゐるが、曩にも述べたやうに、日本のプロレタリヤ文學の理論的努力において、曾つて素朴的に展開されたものであつた。プロレタリヤ文學は、元來プロレタリヤ大衆の文學であり、プロレタリヤ大衆の文學であつて始めてその新らしい藝術性を獲得して來るもので、いかなる意味においても、そこに謂ゆる高級の純藝術と、低級の通俗藝術とを區別さるべきでない。プロレタリヤ藝術の大衆化は、そう言ふ機械的方法によつてでなく、プロレタリヤ文學運動全體の大衆的進出と相俟つて、次第に新らしい藝術性をくみとつていつて大衆化されて行くのであり、また行かねばならぬものである。尤も、現に、プロレタリヤ大衆の中には、層の相違、文化水準の相違等が存する以上、大衆化の實踐には飽までそれを忘却してはならないが、しかしそれの認容は、決して直ちに高級文學と通俗文學との區別を必要とするものではない。問題はそツト根本的な點に在るのである。

それは兎に角として、この時期に展開された理論のうちで、最も多産的な、最も重要なものは、大衆化を中心とした理論であつて、この問題は、單に現在プロレタリヤ文學が大衆の心臟に入つてゐないからこれを、早速どうかしたけならぬと言つた見地からでなく、もつと本質的な見地から、これからもますます論議され、展開さるべきものであり、また爾かあるであらうと考へられる。

## 六

極く最近プロレタリヤ文學理論の展開に、一つの貢獻を與へたものに平林初之輔君の謂ゆるマルクス主義文學の再檢討——『政治的價値と藝術的價値』との考察である。尤も、この考察はそれ自身がプロレタリヤ文學理論に貢獻したと見べきでなく、それによつて先進理論分子の間に重要な問題の再認識が惹起されたと言ふ、消極的な性質のものである

平林君の主張は、餘りに知れ渡つてゐるから、こゝに說明するまでもないが、要するにプロレタリヤ文學をもつて、政治的價値がヘゲモニーを握り、藝術的價値がその下に隷屬する文學、政治的文學であるとし、それをプロレタリヤ文學の文學としての特性であるとしたものである。これにたいして先進理論分子は、ほとんど擧げて批評し、論難したと言つてよい。その批評や論難は勿論一樣ではないが、政治的價値と藝術的價値とを機械的に切離すことの誤謬、プロレタリヤ文學の價値をかく二元的に取扱ふことの誤謬を指摘する點では、ほゞ一致してゐたかのやうに思ふ。

この『再檢討』は、プロレタリヤ文學存在の根本問題に觸れたものであつて、この時期にかゝる根本的な疑問が、しかも平林君のやうな先進理論分子によつて揭げられるのは、一見不可思議のやうであるが、しかし平林君が、よしその論旨は間違つてゐるにしても、かゝる根本的な疑問を揭げて來たについては個人的な理由をおいて他にも相當に理由のあることだと考へられる。

日本のプロレタリヤ文學理論は、この時期に入つて、前に述べたやうに意識的となり、具體的となつたが、それが意識的となり具體的となるにつれて、殆んど常に問題を根本にかへして、これまで多かれ尠かれ曖昧にされ、十分に意識的に把握されてゐなかつた點が、再檢討されなければならないのは當然である。例へばいまの大衆化の問題の場合でも、諸先進分子の理論のうちに、常に根本的な問題の再檢討が見られたのである。平林君の場合は、たゞそれが、プロレタリヤ文學の文學としての存在權さへも疑ふやうな斷結に到達してゐるので一つの强いショックとなつたのに過ぎない。

我々は、ここに日本のプロレタリヤ文學理論の展開の跡を輪廓づけて來たが、この足跡に明らかに觀てとれることは常にそこには、內につゝまれてゐるものが、次第に外に意識的に取り出され、抽象的な認識が具體的把握にと進み、諸々の偏向が勇敢に淸算され、共同的な努力によつて建設がなされてゐるといふことである。

文學理論は、いまや完全に、プロレタリアートのものである。(六・八)

# 經濟時評

## 泥沼に喘ぐ最近の我が財界

高橋龜吉

### 一、特融で激成された財界の矛盾

一つ嘘言を吐くと、それを彌縫するためには百の嘘言を重ねなくてはならず、かくて、嘘言の爲に自らを亡ぼすに至る。財界に於てもさうだ。一つ無理な彌縫をやれば、その破綻を繕ふためには更に幾つかの彌縫を重ねゝばならず、かくて遂に財界自らを最後の破滅の淵に導くのである。大正九年以來に於ける我が財界の彌縫は、正に、その典型的なものである。例へば、我が財界は、大正九年の反動に接するや、之に應ずべく、徹底的な財界整理を敢行する代りに、「政府の救濟」、「借金の上塗」、「蛸配當」等、有ゆる手段を弄して彌縫を續けたがその結果は、輸入超過の連續と云ふ破綻を露骨にした。かくて、關東大震災を機會に、爲替の暴落と云ふ形に於て、我が財界の破綻は天日の下に曝露した。然るに、大正十五年、若槻内閣は此の破綻を繕はんがために、人爲的平價金解禁政策を強行せんとして却つて昭和二年の金融大恐慌を招いた。しかも此の大恐慌を處理すべく新に立つた田中内閣は、此の機會に我が財界の整理を促進せしめる代りに、十億圓近くの「特融」放出に由つて、又々之を「救濟」した。しかし乍ら、此の「特融」を持ち出した資本家階級も、此の特融を可決した政友會及民政黨も、「特融」の結果が如何なることを意味するかの、金融的知識に就ては全くゼロであつた。斯くて、一方には「特融」を行ひながら一方には之と全然矛盾する金融政策を採り、ために、我が財界は、愈々その位地を惡化し、遂に今日の如く、文字通り泥沼に陷つて了つた

のである。

一體、震手法、臺灣並に日銀の特融法等に由つて、約十億圓の金が日本銀行から出て行つた――しかも、その殆んど全部は近い内には返らない性質のものである――と云ふことは、結局此際の我が財界に次の如き現象を起さゞれば止まない、金融的意味を持つてゐるものである。換言せば、「特融」に由る約十億圓の「救濟資金」の放出は、それに伴つて、次の如き現象の起ることを覺悟してのみ、當時、之を斷行し得る性質のものであつたわけである。

(1)約十億圓のインフレーションのため、金利下落、物價騰貴、爲替下落を伴ふこと。

(2)右の結果、財界は所謂「中間景氣」となり、資本家は利益を增大し、有價證券は騰貴し、斯くして、特融は囘收せられ、財界は常態に復歸する。

しかし、右のコースを我が財界が採るためには、爲替は益々下落することを覺悟せねばならないこと已述の如くである。然るに、田中内閣や銀行家共は爲替の下落を何よりも恐れてゐる。蓋し、そのわけの一つは、此際爲替を崩落さしては、「特融」と云ふが如き無謀極る（五字削除）が如何に多大の損失を我が國に與えてゐるかを國民の前に曝露するに至り、その責任を問はれる惧の多大なることであつた。いま一つの理由は、早晩。平價金解禁を斷行せねばならないと考へる限り（即ち平價切下げ解禁の覺悟のない限り）、爲替の下落を何よりも防がなければならなかつたからである。さり乍ら、若し爲替の下落を恐れるならば、實は、「特融」なんかやるのが初めから間違つてゐたわけであること、以上所說に由つて讀者の容易に看取せられる所であらう。

現に、當時日銀總裁の井上準之助氏は特融囘收後にあらざる限り、平價金解禁は困難なりとの意を漏したこと周知のことであつて、これは、以上所說の事實を、程度に差はあるが、兎に角消極的に告白したものと見るべきである。ところが、政府や銀行家共は、「特融」は斷行したが、爲替は下落さしたくない、と云ふが如き極めて虫の良い矛盾を、平氣で兩立させようとしたのである。「特融」に次いで、我が財界が、後述の如く、二進も三進も出來ざる泥沼に陷るに至つた禍因は玆に在る。財界政界の内情をよく知り、目先の利く井上準之助氏が、途中で日銀總裁を逃げ出したことなどは、以上の情勢を考へ合す時、「旨く逃げた」と云ふ當時の評判が、如何なることを意味したかを容易に理解出來るであらう。

## 二、政府及銀行家財界を攪亂す

「特融」の結果、財界は案の如く、金利安、物價高、爲替安、中間景氣擡頭のコースを崩し始めた。それは昨年春頃からのことである。然るに、之を見て狼狽し始めたのは政府と銀行家であつた。先づ、銀行家の中からは平價金解禁即行が唱え出された。政府は有ゆる手段を以て金利の低下を阻止することに全力を擧げた。しかも、滔々として

金利は低下し、爲替は下落した。斯くて、一番先きに困つたのが一流銀行であつた。

一流銀行は、恐慌に由る預金の偏傾と、特融資金の横溢とのため、資金を山と積むに至つたが、しかし、政府の已述の如き景氣抑壓政策のため、財界は之を消化する力を整へるに至らない。かくて、銀行の手許に遊資は益々堆積し、金利は釣瓶落しに下落するに至つたが、しかし、資金の需要は、政府の景氣抑壓政策（平價解禁の脅威及び金利低下反對）のため一向に起らず、愈々、銀行の經營は不利に陷つたのである。なる程、銀行は、出來るだけの金を公債社債の有價證券に換へた。しかし、それも低金利のため利廻安く、且つ、他日金利の反動高期に於て市價反落の危險を愈々大にするものである。加ふるに、普通ならば、我が金利が異常に低率なれば、之を利子高き外國に投資することが出來るのであるが、解禁を前にしては、他日の爲替騰貴（平價解金に由る）の危險で之を試みる余地がない。

茲に於て彼等銀行家は、此の窮地を脱せんとして昨秋に至り、遂に平價金解禁即行の決議をなすに至れること周知の如くである。蓋し、金解禁成らば、解禁懸念のために手控へられたる事業も起り、取引も行はれて、內地に資金の需要を喚起するのみならず、高金利の外國證劵に投資することに由つて、遊資を有利に處分し得るからである。加ふるに、此の解禁即行決議は、當時、平價解禁即行が如何なる打擊を齎らすかに無智の一部資本家を動かして、商工會議所、生絲業者等々の解禁即行決議を伴ひ、斯くて、市場は、解禁恐怖の小恐慌に襲はれるに至つた。

此の市場の小恐慌を見るや、流石に、平價解禁即行の打擊大なることに氣づいた爲か、政府は容易に解禁に着手する意向を見せず、此間銀行家先づ、實踐的に解禁即行決議を取消して、その解禁態度を豹變した。それは即ち、本年二月一日から實施せられた預金利子の引下げであつた。なる程、此の利下げは、一方から云へば、銀行が市場の低金利に耐え得ずして、コスト引下げのために、「自衞上致方なしにやつた利下げ」——當時日銀總裁はかう之を辯解した——であつた。が、同時に又、此の利下げは、市場金利を更に低下せしめ、金解禁を益々不能ならしめるものであつた。事實、銀行家の此の預金利子引下げは、表面上は自衞上致方なしにと云ふことであつたが、內實は政友內閣に金解禁斷行の意志なきものを見くびつた結果であつたこと、當時內情を知る者の一致した見解であつた。さればこそ、日銀總裁などが、公開の席上で、わざ〳〵之を「銀行自衞上致方のないことだ」と辯解せざるを得なかつたのである。

現に又、銀行の此の預金利子引下げは、金解禁打切りの狼烟として一般財界人に理解せられ、之を劃期に、市場の諸物價は再び騰貴し始め、爲替は更に下落に轉じた。かくて、金解禁は政友會の續く限り不能だ、と云ふことが財界の信仰になつた。たゞ、當時、貴族院關係よ

り、突然政友會內閣倒壞の危險極めて濃厚となりしため、財界は間もなく之を警戒するに至つた結果として、右の解禁不能相場は、未だ十分に市場には現はれるに至らなかつた迄である。

## 三、金解禁問題進退谷る

以上の如く、「政友會には解禁能力なし」と財界から見くびられることは、しかし、政友會にとつては、財界人の一種の不信認決議である。多分に功名心を持合はしてゐる政黨人にとつては餘り氣持の善いことではない。加ふるに、此の秋に於て、在外正貨が一億圓を割つて向ふ一ヶ年間の政府對外支拂高をも賄ふに足らなくなつた。ところで、その補充方法は、(一)內地正貨を現送すること、(二)利子高の如何に拘らず外債を募集すること、(三)爲替決濟を行ふこと、の三つしかないが、現狀に於ては(一)及(二)は金解禁問題の解決を前提としてのみ實行可能であり、(三)は爲替相場を益〻下落せしめるため、平價切下げ解禁を覺悟せざる限り到底實行し得られるものでない。こゝに於て、政府は、此の在外正貨の缺乏と云ふ壓力から、嫌でも應でも、金解禁問題を出來るだけ早く解決せねばならぬ羽目に陷つたのである。

のみならず、之を財政的に云ふも、財界四圍の事情は、到底、政友會の傳統的積極政策を維持し得ざる立場に在り、又、その一枚看板たる兩稅地方委讓案は、貴族院關係から、次期議會には之を拋棄せざるを得ざる事情に在る。以上何れの行詰を打開すべき方向轉換に對しても、その口實としては、此際、金解禁を斷行するを以て、最も政治的に便宜とする。

斯様のわけで政友會內閣は此の難局を凌駕するため、是か非でも、金解禁斷行をなす外致方なしと、私かにその決意をなすに至つたものゝ如くであつた。株式市場に於ける政商筋の解禁見越買の盛行、及び中橋商相その他の解禁斷行言說等は要するにその反映であつたと見るべきであらう。しかし、此の時に於ては、先に解禁即行を決議した銀行家連は已述の如く已に非解禁見越に轉じてゐて、預金利子は引下げる、高値の有價證券は多分に抱え込むと云ふわけで、金解禁に對する財界の位地と政界の事情とは著しく喰違ひを生ずるに至つてゐた。

されば、政府の金解禁意向が、四月中旬頃より市場に流布せられ始め、その後、之を實證する幾多の事實と、之を不可避とする政府の事情とが漸次に判明するに及んで、有價證券市場は、その結果を恐れて少恐慌狀態に陷り、公社債及株式相場は慘澹たる崩落を呈するに至つた。此間、有數の證券業者にして瀕死の重傷を受けるもの一二に止らず、又、銀行界に對しても、穩かならぬ「浮說」が市場に流布せられ、之を放置するに於ては、財界人心の不安のため、或は再び、金融界の大恐慌を呼び起すやも知れず、とする危險が刻々と財界を襲ふに至つた。こゝに於て去月三十日、鄉、團、井上の所謂財界三巨頭が立ち、「三土藏相に解禁態度を聽くと云ふ名に於て「懇談」し、遂に、政

相をして「昨今の如き財界の狀態の下に、金解禁を輕々と實行することの出來ぬは勿論である」と言明せしめて、一應、金解禁卽行論を打切らしたのであつた。これ迄、財界は藏相に對し、その解禁態度をハツキリさすべく幾度かその聲明を要求したが、藏相は常に之を曖昧にして來たが、こゝに至つて、兎に角、右の程度に於て之をハツキリさすべき餘儀なくせられたのである。否、此の藏相の言明こそは、財界の實情を無視して、對外關係乃至政治的理由で金解禁を斷行せんとすることの如何に危險であるかを漸く認識するに至つた「告白」と解すべきものである。斯くて、實業界及び政界の輕卒なる金解禁卽行論者は、コソ〳〵と姿を消すに至つた。と共に、市場も、當面の解禁恐怖から一時免がれて一先づ相場は落ちついた。

だが、此際、金解禁を一年以上も打切る、と云ふことは、後述の如く不可能だ。されぱと云つて、こゝ一ヶ年內外の中に、最近の解禁懸念恐慌程度の打擊なしに、金解禁を斷行し得る準備を整へることも後述の如く不可能だ。金解禁問題はいまや、全くヂレンマに陷つて了つた。

## 四、泥沼の深味に益々陷る我が財界

此の際、平價解禁を近く斷行することは、左の如き事情のため、財界に恐慌を招く惧れが多大である。

(1)「時融」と金解禁懸念のため、我が金利が異常に安く、加ふるに米國の金利が異常に高い。ために、解禁は少からぬ金利高を齎らし證券市價を暴落せしめ、巨額の有價證券を所有する銀行、證券業者等財界の心臟に多大の打擊を與へ且つ事業經營を困難にす。

(2)今日の爲替相場の位地では、平價解禁のため物價に一割以上の下落を起し、財界に多大の損害を與へ、且つ、事業の經營を益々困難にし、(1)と共に財界恐慌の危險を愈々大にする。

(3)その上、貿易關係を益々惡化せしめ、國際勘定尻の不均衡を增大して、正貨準備の危殆を招き、以上(1)及(2)の傾向を更に激化する。

こゝに於て去月末に現はれた程度乃至それ以上の財界の衝動を避けんとする限り、以上の如き諸事情を克服する手段を先づとらねば金解禁は不可能だ。が、その準備を効果的に遂行し得る手段を、いま我が財界は失つてゐる。蓋し、その唯一の効果的方法は、金融を緊縮し、金利を引上げることであるが、それは「時融」のため日銀の金融統制力が失はれてゐて出來ぬ。なる程、解禁準備としていま公債整理論が八釜敷い。だが、あれは銀行家共が、公債市價を釣上げて、この六月末に決算期を有利に粉飾しようとするのが、第一の目的で、要するに公債市價の下落を或る程度まで阻止せんとする、銀行家救濟の一手段に過ぎぬ。眞に、解禁準備を財政的にやらうと云ふには、一方に增稅し一方に支出を節して剩金を積立て、以て、財界のインフレーションを緊縮せしめねばならぬが、そんなことが、いまの政黨內閣に出來るものではない。加ふるに、日本で金解禁を阻んでゐる主なるものは財

政關係ではなくて、財界關係だ。この點は歐洲諸國のそれとは丸で事情が異つてゐる。にも拘らず、資本家階級が、いま、我が解禁を阻むものは、專ら財政關係――しかも公債整理に――にあるかの如く吹聽するのは、要するに、之に由つて所有公債の暴落を防がんとするトリックに過ぎない。若し然らずば彼等の金融的無知を告白してゐるに外ならぬ。

果して然らば、假令公債整理問題に何とか解決、――それも整理の程度は知れてゐるが――されても、以上所掲の如き解禁阻害事情は少しも克服されたことにはならぬ。然るに、若し、右の如き事情で、此際、金解禁の斷行が、こゝ一ヶ年以内にいよ〳〵不可能なること明かとなるらんか、次の如き事情のために、爲替は更に下落を續けて、平價解禁は愈々絶望的狀態となるに至る。

(1)在外正貨の欠乏のため、政府の對外支拂は爲替決濟の外なきに至る。

(2)平價解禁期待で或は積極的或は消極的に投機の力で釣上げられて來た爲替相場がその投機的支持を失ふに至る。

斯様のわけで、政府としては、平價解禁を固守せんとする限り、是が非でも、來年度豫算と共に、出來るだけの解禁準備を整えて――その準備が如何に不十分であるかを問ふの遑なく――愈々解禁問題を決定せねばならぬ羽目に押し詰められてゐる。事實、我が政治家も資本家も、こゝ一ヶ年内外の中に解禁問題を片付けるべく必死と踠いてゐる。從つて、我が財界は三土藏相の「三五頭」への言明にも拘らず、一解禁遠からずの警戒を毫も弛めるわけには行かない。換言せば、我が財界は、依然、解禁懸念のために、その經濟活動を極度に萎縮せしめられざるを得ないのである。

斯かる狀態の永續は、我が財界の健康を愈々衰弱せしめるものだ。解禁の衝動に對抗し得る體力を益々失ふものだ。しかも、政府及資本家連の右の如き必死の踠きにも拘らず、之を經濟的に見る限り、一種の××を覺悟せぬ限り、玆一ヶ年内外の中に、平價解禁に成熟せる準備を整え得られる見込はない。尤も、現在の米國の景氣が破れて金利が暴落せば、金融關係からは解禁に極めて都合よくなるが、それと共に米國の物價は下落するから物價關係は惡化する。が、萬一を僥倖せば、此の米國の金利反落のみである。

× × ×

以上が最近に於ける我が財界の大まかな展望である。だが、之に由つて、概略ながら、我財界が彌縫を重ねる度びに、次ぎ次ぎと新なる破綻に脅かされ、更にその彌縫を續ける間に、益々泥沼の深味に陷沒して行く狀を看取するに難くないであらう。「特融」をやつたからには平價切下げ金解禁を斷行する外に、此際我が財界の健康體復歸を期する速効法はないこと斯様にして、嫌でも應でも認めざるを得ざるに至らう。(六・一〇記)

# 街頭時評

赤神良譲

×

『生』きてゐるといふ感じの第一要素は、刺戟を感じるといふことである。だから人間がその『生』に執着すればする程、必ず次から次へとより强烈なる刺戟を求めて來るに違ひない。

實際人間にとつては、全く刺戟のない狀態に置かれる程、苦痛なものはない。名妓のなれのはてだといふモヒ中毒の患者が、市外大久保の西向天神に祈願を籠めながら、盜んではモルヒネ注射の金を稼いでゐた。所が或日おでん屋の赤鍋を盜み、それを古道具屋に賣拂つたので足がつき、捕へられて留置場に入れられた。その女が留置場の中で、「どんなご處分でも受けますから、注射だけはさして下さい」と泣き續けてゐたそうである。生ける屍の如く、刺戟に對して全く感受性を失つて、そして生きてゐるといふことは、無氣味な、人間らしい苦痛以上の苦痛であるに違ひない。單調な刺戟のない獨房に二三年もゐる囚人は、多く發狂する、さもなければ極度の憂鬱症となり、或は自殺をする、して見ると刺戟は確に生活の推進力である。そこで人々は、生きてゐるといふ感じを何とかして呼起す爲に、時としては苦痛をさへ求め出して來るのである。

然るに刺戟と感覺との間には、ウェベル・フェヒネルの法則が介在してゐる、「感覺を算術級數的に持續するには、刺戟を幾何級數的に增大せねばならぬ」といふ平凡だが然し誤りのない法則が、その支配權をば持つてゐる。だから同一の刺戟はすぐ平凡化され、飽和されて、その刺戟力をば失ふて了ふ。そこでより强烈な、より加速度的にその度合を强めて來る刺戟か、或は又更に新しい種類の刺戟かを、走馬燈の如く眩暈苦しく求めて來る。そこにモダーンの基調があり、所謂高速度時代の原理がある。だから又現代は慌しく、騷々しく、眩暈いてゐる。ジヤズに、チャールストンに、レヴユウに、その本をば見出してゐる。彼等は熱狂し、泥醉し、耽溺する。

斯くして近代文化は變態となり、病態となつて、急調な旋渦の中に叫びをあげながら周章てふためいてゐる。そしてそこに又スポーツ・ファンの心理があり、ダンス流行の心理があり、漫談・ナンセンスの

流行、射利射倖の心理がある。

×

ヴェブレンは、このスポーツ・ファンの心理を説明して、それは人間性の一時的先祖歸りであり、野蠻時代の教養への逆戻りである、そして一體貴族富豪並に無頼漢を含む所の閑散階級は、その心理發展の過程に於いて低級であり、掠奪的であると言つてゐる。成程、スポーツの形式は、多く古き戰術の型にその起原を發してゐるか、或は戰術の爲にするものにその起原を有してゐるかである。吾々は茲に野球を考へる、そしてそれは、昔、アメリカ・インデアンの部落が、その部落相互の間に盛に爭鬪を繰返した時代に、その起原を有してゐると言はれてゐる。一般に原始的な野蠻未開の人種にとつては、その戰術は、屹度、投石することであり、棍棒で擲倒し、薙倒すことであつた。ダビテに似たインデアンの若者が、颯然春風を切つて礫を飛ばせば、ガテのゴリアテ然たる七尺ゆたかの巨漢は、その棍棒を斜に構へて、飛び來る礫を戛然と撥返すのであつた。そこに彼等は投石の練習と、それをば棍棒で擲返す所の手練とを積む必要に迫られてゐた。そしてそれは今日に遺傳されて、野球試合の形式をなし、神宮球場の直球となり、安打となり、或はカーブとなり、三壘打となつて、數萬のファンをして唸らせてゐる。斯く考へて見ると、そこに相撲があり、ラグビーがあり、ホッケーがあり、ゴルフがある。槍投げ、砲彈投げ、圓盤投げがある。そしてそれは投飛すことによつて、敵の頭蓋骨を粉碎しやうとした遺物である。擊劍があり、柔道があり、弓があり、マラソンがあり、競馬があり、射擊がある。

けれどもこの説明は、まだ何故にこの閑散階級が、スポーツに熱狂するかの理由を、充分に説明するものではない。彼等には過剩してゐるエネルギーがある、だから彼等には强烈なる刺戟を呼んで、醇化しやうとするいらだゝしさがある。そしてスポーツはその過程に於いて多くの不安を持つてゐる、だから又豫想しがたき變化性と新し味とを持つてゐる。

その手段に於いて、彼等は「擲る」「蹴る」「打つ」「投げる」といふ、心の獰猛さに對する慰安を持つてゐる。恰も漫畫の持つ快感が、打たれるといふことから、そして蹴られるといふことからやつて來た樣に、「親爺教育」の痛快性は、何時もマギーの腕力に發生し、彼女の手にする麵棒から飛散する。そして若しその畫面から、ジグスの瘤が取去られ、顏に貼られてゐる十字の絆創膏が剝取られ、目の周圍から紫色の打身傷が消し去られるならば、それは最早や近代人から、何等の笑を買ふに値しない。喜劇、道化芝居、茶番狂言、それ等は打たれ、張倒されることに、その哄笑性を抱いてゐる。「打たれる奴」のゴンモンが打たれれば打たれる程、蹴飛されれば蹴飛される程、觀客は哄笑の泡を、癲癇病者の樣に吹き出して來る。

畢竟するに人間には、打ちのめしたい、蹴倒したいといふ、フロイド式の潛在意識が多分にあるからであらう。近時の流行探偵小説の特

つ被虐性も、亦その不安と殘忍性の伴ふ强烈なる刺戟によるものであり、江戶子のチャンといふなり走り出してゐるといふ火事の持つ魅力も、亦その不安と殘忍性にあるのである。現代人は遂に急坂のカーブを描いて、そのより强い刺戟を喘ぎながら追掛けてゐる。

×

羅馬の末期、煽動政治家共は民衆の暴力を借りて、その政權を壟斷した。そこで民衆はその政府に向つて勞働權を要求した、若し勞働者がその職を求めて政府がそれを與へることが出來ないならば、政府はそれを賠償する義務があると、政府はそれを彼等に賠償した。けれども彼等は隴を得ては蜀を望まざるを得ない、彼等は働くことなくして充分なる食を得た、そこに過剩せるエネルギーのやり所に苦しまねばならない。彼等は「人はパンのみにて生きる能はず、吾等に娛樂を與へよ」と、その娛樂權の要求によつて、その過剩せるエネルギーを發散しやうとした。そこで政府は彼等の爲に公設浴場を建築した、肉を與へ、酒を與へ、女奴隸を與へた。彼等は肉を食つて湯に浸り、酒を飮んではその女奴隸に戲れたのであつた。では彼等にとつてそれは樂園(パラダイス)であつたのか？　いや、彼等は進んで自分の胃腑の狹小であることに、多大の不平を感じ出して來た。けれども又彼等は嘔吐術を發明した、嘔吐しては再びその胃腑に詰込むのであつた。斯くして彼等は殆ど總ての刺戟に慢性となつて了つた。彼等の或者は遂には生きてゐることさへ本當に厭はしくなつて來た、酒を飮み風呂に入つて、手頸の動脈を切り、その出血による朦朧の私語の中に、死の快感を堪能しやうとした。

又彼等の或者は、奴隸と獅子とを鬪はし、奴隸の頭蓋骨が獅子の一擊によつて粉々にされ、腦漿が四散するのに興奮し、大腿骨のモリモリと嚙碎かれる音に喝采した。實際、彼等の神經系は、斯くの如くに無化されたる不安と殘忍性とによつてのみその刺戟を感じ得るまでに、あらゆる刺戟に中毒し、痲痺して了ひ、爲にいらだつてやり所に窮してゐる過剩エネルギーに、惱まされねばならなくなつてゐた。だから又暴帝ネロは、剛壯なる快感をば貪らんが爲に、火を羅馬百萬の全市に放つて、それを燒拂ふといふが如き壯擧にさへ出たのであつた。

それ故に吾々は又東亞の富を掠奪して、一時世界の資金をマドリットに集中した西班牙人が、彼の鬪牛に熱狂し、投げ出さるゝ人馬、刺さるゝ牛、ドス黑く砂土を彩る血に、快哉を叫ぶ心理と、飽くなき搾取に肥滿してゐた羅馬の貴族が奴隸を虐使し、はては動物と、、せしめて、それを見物(みせもの)となし、單なる好奇心より打殺し燒殺したといふ心理と、近代人がスポーツに淫蕩して行く心理との間に、また相似通ふ一條の氣脈を發見することが出來るのである。

×

近代人、殊にその都會人は、餘りに强き刺戟によつて圍繞されてゐる。だから又彼等はその刺戟のより强きものをば、追掛け廻さねばならない。サラリーマン、學生、小僧、勞働者、彼等はその通勤、通

學、用達の途上に於いて、ロダンの彫刻に似たる太き足の肉感に惱み、事物貪たる飼獅者の腰部に、その視線を群づかせねばならない。然るに彼等の事務室は如何に殺風景であり、彼等の學校は修道院の如く、又その工場は牢獄の如く、單調の灰色にぼやけてゐる。而も彼等の仕事は近代大資本主義の寵兒である、「分業といふ奴」によつて全く無趣味のものとされて了つてゐる。彼等の或者は、終日一つの印をべたべたと押して行き、或者は一つの穴を一日掘續けてゐる、又學生の或者は終日一本の試驗管を捻ねくり廻し、或者は三ヶ年間一冊の六法全書に沒頭して暮さねばならない。彼等はその歸途に於いて又何物をか見るであらう、カフエーの店頭に於いて、橫町の鈴懸の木蔭に於いてけれども彼等はその家に歸つて、營養不良に黄ばんでゐる女房の顏を、飽かず眺めねばならない、下宿屋のお上の低いだゞ廣い鼻に、相變らずの敬意を表さねばならない。

山地であるウエルスの馬より、ペイブされたる平々坦々砥の如き道をば走る倫敦の馬が、より短命であるが如く、近代人はその分業によつてより短命にされてゐる。彼等はその能力の一少部分を除りに虐使する。けれども他の多くの部分は全然それを使用してゐない。そこに鬱結し、過剩してゐるエネルギーがある。だから彼等は絶えずエキサイトしやうとしてゐる、道を大呼して走る者がある時には、彼等は彌次馬となつて、その後を追ふて反射運動的に走り行くであらう。滸川の浚渫機に、小犬の喧嘩に、自動車の衝突に、電車の脫線に、ペンキ屋の看板書きに、彼等は如何に多忙の時であつても、その一時をさかずにはゐない。況んや熱球を發飛す野球に於て、濛然砂煙をたてゝ汗馬を飛す競馬に於いて、又その他のありとあらゆるスポーツに於いて、彼等はプレミヤム附の切符さへ、少しも意とするに足らない心のじれつたさを持つてゐる。前日の夜からつめかけ、二三日前から會社をば缺勤するもどかしさを持つてゐる。まして爲すこともなく、多量の營養分を貪食してゐるブル階級は、絹のワイシヤツを着て日比谷原頭で草を刈り、北海道に熊を狩り、南洋に鰐、マレーに虎を狩り出さねばならなくなる。だから新しきトルコは、法律を以つて、彼等に道路修繕の爲にする強制勞働を課して、以つてその過剩エネルギーを發散せしめやうとする、さもなければ彼等は、(以下二十七字削除)

×

新しきものは、未知數の刺戟をもつてゐる、そして未知數の刺戟はより強烈である、だから近代人は新しき物、新しき物へと高速度に跳廻つて行く。トーキーが來る、彼等は無條件にトーキーを迎へねばならない、「古い」といふことは近代人にとつて、洵に致命傷そのものであるからである。彼等はアメリカ人の系辭が理解出來やうが出來まいが、それは問題ではない。如何にもそれを理解し得るかの樣に見せかけ、活辯の「古さ」を罵倒して、新人としての地步を、如何にして確保するかが問題である。私が巴里に着いた次の日に、私の友人が私を佛蘭西座に伴れて行つた、私の友人は巴里に住んでから八九年になる

であらう、佛蘭西婦人と結婚して、その間に二人の子供を持つてゐる。けれども滿場の佛蘭西人が笑ひこけてゐる中に、彼だけは呆然として決して笑はない。勿論私も笑はない。彼はその奥さんの袖を引いて、何を笑つたかの說明を求めて、そして笑ふ。更に彼はその默洒落を私に飜譯する。そして私は笑ふ、三段返しの笑である。

然し我國に於ける新人は、どうしてその笑を笑ふであらうか、活動寫眞館は宜しくこの新人の名譽の爲に、古き芝居の制度であつた「拍手する人(クラツパー)」を常置する必要があらう、そしてそのクラツパーの拍手によつて拍手し、笑ひによつて笑ひ、涙によつて涙を流す、といふトーキーの新しき見方が始められねばならなくなることであらう。恰も渡米した實業團の人々が、その案內役であつた神田男爵をば事々に眞似て、男爵が水を飲むならば彼等も飲み、笑ふならば彼等も笑ひ、便所に立つならば吾も吾もと便所に押掛けて、米人を驚倒せしめたといふが如き、滑稽味がよしあらうとも、新しきものでそれがある以上、近代人は必ずそれに向つて走らねばなるまい。

近時のダンス流行も亦その例にもれるものではない、それは三分交代制により、或は五分交代制によつて、胸から胸へと刹那刹那にその强き性的刺戟を貪り得るからであらう。從つてそれは一方全く職業的に考へられ、そして他方それは享樂的に考へられてゐる。而もその流行の一大要因として、吾々は又その安價性を閑却してはならない。

緊張は必ずその次のリズムに於いて、弛緩を伴ふて來る。そして弛緩してゐる心にとつては、手輕であり安價であるといふことが、その第一要件でなければならない。だから近代人の心理は、一方强烈な刺戟を求めると同時に、他方微温なる安逸さと容易さとを求めてゐる。そしてそれは明に心理現象に於ける辯證論に外ならない。だから又漫談・ナンセンスの流行する社會相は、火酒(ウヲツカ)に次いで求められるプレン・ソーダの味と、その心理的リヅムを同じくし、深き思索の勞を倹ずして、ウイトに觸れる輕き口づけの快味に、その流行の原因を持つものでなければならない。

更に吾々はこの近代的なる安價性を經濟的に見る。そこにバット(煙草)の賣行があり、品切れがある。一幕十錢芝居の提唱があり、勞働者に夏期の休暇を與へやうといふ主張がある。再び吾々が進んで考へるならば、そこに投機經濟、一六經濟の流行を超えて、儀式經濟の流行があり、彼等はいつまでも一錢銅貨を賽錢箱に投込むことによつて、あらゆる幸福を求め、本氣になつて、そのペラ棒の利廻を求めてゐる。彼等の心臟は最早疲れてゐる漬け樣にカンプルを注射するか、さもなければ靜かに寺の和尚に呼びかけて置く必要があるらしい。」

# 日本大衆黨の分裂問題

## 日本大衆黨の足跡と將來

河野密

### 一

我が國の無產政黨が、分裂とか內紛とか合同とか、多かれ少なかれ陣營內の諸問題——言はゞ『區劃整理』——を中心としてのみ、その存在を社會一般に印象してゐる觀のあるのは極めて殘念なことである。無產政黨として、かうした初步的な階級を早く脫却して、具體的の業蹟——成果に依つてその存在理由を顯證したいと云ふのが、我々が日本勞農黨を組織した頃からの宿願であつた。合同論の巨濤をリードしながら、萬難を排して『日本大衆黨』を結成したのも、かうした理由からに外ならぬ。ところが事全て志とたがひ、合同半年後の今日に於て、再び所謂『日本大衆黨の分裂騷ぎ』を以て一般世人に目見ゆるに至らうとは！

我々としては實に泣いても泣ききれぬ痛恨事である。

然し今となつては、徒にかけた茶碗をつぎ合はせて見るやうな愚は敢てしまいと思ふ。最も惡いことは彌縫策であり、無批判な泣き言だから。唯私は、率直に全てを大衆の面前にさらけ出して、その公正なる批判に訴へたいと思ふ。恐らくこれに依つて『日本大衆黨』に被せられてゐる濡れ衣がある程度まで明かになるであらうし、前途多事な我が無產政黨界の交渉に對して多くの示唆を與へるであらうから。

### 二

昨年の後半無產政黨界を風靡した一つの與論は合同論であつた。然かもこの合同論なる旋風の中心點をなすものは、言ふまでもなく、日本勞農黨であつた。日本勞農黨は、その標幟とした『階級的大衆的統一主義』の旗じるしに依つて、期せずして合同問題の中心勢力に祭り上げられて了つた。舊日勞黨としては、始めて時代の潮流にのつたもので、一面から

言へば最も得意の時代である。然し——禍福は糾へる繩の如し——最も得意の時代は同時に最も危機を包藏する時代でもあつた！　正直に言つて、當日勞黨は、時代の潮流に依つて押し上げられた無産政黨の王座に於て、ハタと當惑して了つたのである。自ら大衆に口約した『統一主義』を具現するに當つて、一度ならず二度三度旋回したのはこの故に外ならぬ。

然し兎も角結果は七黨合同となつて表はれた。こゝに至る過程に於ては隨分曲折もあつたが、そしてまた隨分無理もしたが、曲りなりにも『日本大衆黨』として『統一主義』が具體化されたのは、實踐的に一大巨歩を進めたものだと言つて過言でないと思ふ。

我々が無理な黨内事情を押し切つて『日本大衆黨』を結成したのは、日勞黨を更生せしむる道これ以外になしと信じたにも依るが、より多く階級的正義の命ずるところに從つたものである。今にして思へば具體的事情の檢討が不足してゐたに違ひない。また餘りにも一本調子であつたらう。然し、後に發生した諸問題に依つて『日本大衆黨』の結成そのものに對してまで疑惑の眼を投ずるものがあるならば、階級的斜視眼者と言はざるを得ない。我々は『日本大衆黨』の結成に當つて、もつと愚直で、もつと正義的であつた。」

## 三

合同萬歳の聲に依つて迎へられた『日本大衆黨』が、洋々たるその前途を期待せられるにも拘らず、第一に躓いたのは所謂『清黨運動』であつた。既に合同の直後、合同の經過に關する中傷的の記事が十二月二十二日か三日のやまと新聞に掲載された。然しこれは多くの人々の眼にふれなかつたと見えて遂に問題にならなかつた。然るに超えて一月、××××に依つて『清黨』と題するリーフレットが各方面に撒布せらるゝに及んで、問題は俄然惡化した。『清黨』の內容はもとより荒唐無稽であるが、その編輯は極めて巧妙であり、文章は探偵小說の一節のやうに暗示的であつた。再讀し三讀してあの手かと思ふものも、一讀した時にはオヤト思はせる丈けの惡意が秘められてあつた。殊に惡魔的の成功を收めたのは、所謂田中大將事件と幸の湖事件（『清黨』はこの二つの問題を主題としてゐる）とを結びつけて、巧に麻生、平野、河野、田所と云ふやうに一聯の結合を作つて了つたことである。

我々は勿論リーフレット『清黨』を一笑に附すべきものと考へてゐた。またそれが合同直後の政黨を守る所以であるとも考へてゐた。計らざりき、足許から伏兵が一齊に蜂起しやうとは！

リーフレット『清黨』が撒布されると云ふ噂をきいて、左樣なことは止めて呉れと云ふ諒解を得に行つたのは——後で知つたことだがこれは『清黨』第二號を出すべき材料蒐集の穽にかゝつたものだが——私と三輪君と鈴木茂三郎君とであつた。『清黨』を黨のために撒布して呉れるなと諒解を得に行く御當人が後には筆をひるがへすやうに、流言を擴大化

じて行くその人にならうとは、神ならぬ私には解らなかつた。

四

『清黨』の問題が喧しくなると共に、黨の常任中央執行委員會は、心ならずもこの問題をとり上げて論議せざるを得なくなつた。然し我々には、合同政黨の前途を守るために常任中央執行委員會がいかなる態度を採るべきかは、初めから明白であると思はれてゐた。然るにどうであらう、常任中央執行委員會が開かれると、鈴木、黒田、古市の諸君は、異口同音に問題の決定を遷延せしめ、黨内不安の狀態を持續せしめやうとの戰法をとるではないか。殊にその極まるところは、この問題を否定的に取り扱つた黨の機關紙の發送を、鈴木、大道の諸君まで郵便局にかけつけて阻止せんとするにすら至つたのである。然かもそれから一日間をおいて發行された『勞働新聞』には、全頁を擧げてこの問題が誇張的に取扱つてあるのだ！

所謂『清黨』問題の結末は、二月十三日の第二回中央執行委員會で一と先づ解決せられた。この中央執行委員會に於て、鈴木、黒田大道、古市の諸君が、開會劈頭に當つて辭任退場したのは言ふまでもない。が半ヶ月間に渡る『清黨運動』の毒瓦斯は、全く黨員の氣を腐らせて了つた。由來俚耳に入り易いものは他人の惡罵である。況んやリーフレット『清黨』の如き巧妙なる材料をもち、『勞農新聞』の如き宣傳機關を有つにをいてをや。好望なる前途を惠まれた合同政黨は、今や、却つてその前途に暗澹さを感ぜざるを得なくなつた。

五

『清黨』運動が黨内的に解決すると共に黨は直に東京市議戰に臨まざるを得なかつた。この頃から平野君はばつたり黨に出なくなつた。扁桃腺で九段坂病院に入院してゐたのも事實であるが、然しその行動は腑に落ちないこと許りであつた。私は直觀的に『平野は逃げる』と考へたので、爾來一切の黨務を平野君から切斷し、些か獨斷專行の譏りがあつたが、全てを自分の手で行ふことにした。平野君は二月の末からその脫退まで遂に一日もその姿を黨に見せなかつたのである。

我々は適當の時機に平野君に書記長の辭任を勸告する積りであつた。少くとも私は數回その目的で平野君を訪ねたが、遂に會ふことが出來なかつた。約束しておいてその日に訪問すると留守であつたりした。

正直に言つて我々は毫末も平野力三そのものを信賴してゐはしなかつた。唯平野の有てる大衆を如何にして彼から切り離すかと云ふことが主たる我々の關心事であつたのである。合同政黨『日本大衆黨』に於て、平野を書記長に据ゑたのも、合同政黨の化學的融合を達成するまではまた止むを得ない手段であつたと言はねばならぬ。

ところが『勞農新聞』を中心としての放送はどうであらう。

『平野は大衆黨のドル箱だから罷めさせるも

のか』と云ふ失敬なのから初つて、『平野の辭表を握りつぶしてゐる』と言ふ見當ちがひから、『帝國勞農黨』のやぶにらみに至るまで、的を外れて攪亂的流言計りではないか。これではいかな寛仁大度のものと雖も我慢がならないであらう。かつて二月の中央執行委員會に於て、舊農民黨系の除名案に反對して舊無産大衆黨を助けた我々も、涙をふるつて馬稷を斬らざるを得なくなつた所以である。

## 六

こんな『日本大衆黨』の內紛史は讀者には決して愉快ではなからう。書く私にとつても餘に馬鹿々々しい氣がさしてならない。これが無産政黨の『問題』かと、世の識者に嗤はれさうでしかたがない。從つて最近に於ては我々はつとめてこれを默殺して來た。然るに我々が默殺すればするほど威丈高になつて喧嘩を賣つて來るのだからたまらない。……がもう止めやう。今の私にとつて重大なことは、過去を語つて徒に『自己辯護』することではなしに、『日本大衆黨』の足跡を靜觀し批判することに依つて、これからの針路を決定しやうと云ふにあるから。

合同政黨『日本大衆黨』が何故かくも早くしかもかくも脆く崩れたか？——に關しては多くの原因を擧げることが出來ると思ふ。

第一に、合同政黨に於て中心的の支柱がなかつたと云ふことである。當然支柱の役割を演ずべき舊日勞黨は、合同の際の無理に依つてこの任務を果すことが出來なかつた。

第二に、徒に八方圓滿主義をとつて、一定の方向に黨の針路を向けなかつたことである。多少の無理があつても、勇敢に黨の方向を確立すべきであつたらう。

第三に、無條件合同を主張した舊無産大衆系の諸君が、直に分派的な運動を黨內に於て始めたことである。所謂『淸黨運動』の紛糾が戰線統一同盟とからみ合つてゐることは思半ばに過ぎるであらう。

第四に、勞働組合、農民組合等の經濟戰線の連絡を作つて下から黨をしめ上げなかつたことである。勿論假すに時をもつてすればこれをやる積りであつたが、思ひもつかない問題に引つかゝつてそれにまで及ばなかつたのは殘念である。

第五に、既成政黨の魔手が連りに動いたと云ふことである。今の無産政黨の實力を以てしては、なか／＼既成政黨の分裂政策に對抗することが困難である。況んや未だ化學的融合を遂げてゐない合同政黨が、舊黨のつぎ目からメスをふるはれてはたまつたものではない。

## 七

が『日本大衆黨』の成敗の跡に於て最も痛切に感ずるのは、日本の無産階級運動の有つ弱點である。

日本の無産階級運動はその歷史まだ長からずして、既に多くのルンペンを醸生した。これ等のルンペンは、もとより一定の定見なく、平生は飄六政治家として各勢力の間を遊泳し、一朝事あれば附和雷同してさわぎ立て

るのである。日本大衆黨の『内紛』が、これ等のルンペン分子に依つてどれ程擴大されたかも知れぬ。

これ等の飄六政治家の報道に基づいて、公式的な戰略を樹立するものに机上戰術家がある。これまた我が無產階級運動の生み出した一形態である。彼等は、何をなすべきか、また何をなすべからざるかと云ふ一定の見通しの上に戰術を考究するのでなく、飄六政治家の報告を基礎として小手先の戰法を生み出す從つて部分的に成功するも大局的には大なる失敗を招かざるを得ない。

我々は日本大衆黨の内紛史に於て、これ等の分子の思ふ存分の活躍を經驗した。然かもその結果はかの通りである。『淸黨』運動に於て黨のために眉を顰めたのは常に大衆をもてる指導者であつた。大衆を有たざるものは概ね階級的の舞踏病患者である。我々は之等の舞踏病患者に依つて日本大衆黨が今日の悲境に陷つたことを悲しむ、然し今これ等の内紛より切離された日本大衆黨が、眞の大左翼政黨として果敢なる一步を踏み出すであらうことを信ずるものである。

日本大衆黨の短い歷史に於て、我々は無產政黨運動の將來の上に多くの暗示を得た。然しその最も大きなものゝ一つは、大衆的行動の重要性である。大衆的行動の重要性とは、一方に於ては多くの飄六政治家並に机上戰術家からの絕離であり、他方に於ては一切の『驅け引』の排除である。全ては大衆の面前に於て、大衆の規模に於て、然かも大衆の意志を以て。——これが無產政黨の生きる唯一の道であることを痛感する。尚無產政黨將來の展望に關しては、他日詳細に述べる機會のあるであらうことを期待する。

(一九二九、六、五)

# 共同戰線黨の旗の下に

鈴木茂三郎

## 一

指導方針にこだはらない右翼、中間、左翼のいづれでもない勞働者、農民、小市民をブルジョアジーに對する日常的鬪爭の全戰線に集結したところの大衆的共同戰線黨は、さうした共同戰線黨たるが故に、ダラ幹(墮落幹部)の發生增殖する危險、ブルジョア的影響の侵入跋扈する間隙を、黨自體のうちに孕んでゐる。

そして、かゝる危險と間隙を、多分に持つものであればこそ、それは共同戰線黨たり得るのである。

それ故に、ブルジョア的影響と、そしてダ

ラ幹の徒入、發生に對して、黨大衆の尖端を行く先進分子は、とりわけ嚴肅果敢に批判し鬪爭しなければならぬ。

批判と鬪爭は、憎惡の爆發や、純眞の憤激でなく、尖鋭な意識的鬪爭でなければならぬ。

殊に現在の情勢は、無產政黨の財政問題が整備されてをらない、そのことは幹部をしてブルジョアジーとの通路に、鰐のやうな口を開かしめることになり、反動的支配階級の彈壓と懷柔の、兩端の政策は、今日ほど辛辣に遂行されたことはない。そのことは一般大衆をして右翼的傾向へ逸走せしめる惧れさへある。

現在のあらゆる情勢は、我々に、共同戰線黨が必然に內藏する、危險と間隙に對する嚴肅、果敢なる批判と鬪爭を、要求して已まない。

## 二

七黨合同によつてなれる日本大衆黨は、かかるものとしての共同戰線黨であるが、しかも合同大會の宣言が示すやうに、社民並に左翼地方政黨との全合同を遂行して、單一無產政黨を實現すべき階級的任務を荷ふ唯一の輝ける階級的大衆黨なのだ。

これら諸黨の幹部は、澎湃たる農勞大衆の合同に對する要求に促迫されて合同のために立ち上つたとはいへ、舊日勞黨は、黨內の私黨的暗鬪の激化による崩壞を救ひ、舊日農は日勞の×××君との××××××政黨――世上に名高き「旗かつぎ運動」の挫折を轉開すべく、不純な動因に强要されてやをら立つた。

だから彼等は、合同大會の日の各黨代表者による合同協議會にて粉碎された「合同政策は反共產主義を指導方針とする黨でなければならぬ」との精神を汲みとつた「合同打ち切り」といふ黨の執行方針三ヶ條を、大會の翌日の第一回中央執行委員會に持ち出して再無產大衆、民憲委員の强烈な反對を浴びつゝ多數決で可決し去つた。

此のことは、右も左もない共同戰線黨の本質に對する叛逆であり、全合同への宣言に對する裏切りである。

此のことは又、勞農大衆の要望する階級的合同を掬り代えて、共同戰線黨の持つ危險と間隙の上に、ブルジョアジーへの通路を切り開いたものである。

そして、彼等の階級的合同を、ブルジョアジーへの通路に掬り代える努力は、合同協議會に於ても、周到に準備されたのである。

以下各黨の提出條件を比較せよ、そして孰れの黨が階級的合同に對する熱意に燃えてゐたかをも確めて、今更らしく彼等の高潮する合同に對する誠意を嘲笑してやるが好い。

### 合同政黨に對する各黨が合同協議會に提出したる條件要項

| | 日勞黨 | 農民黨 | 無產大衆 | 民憲黨 |
|---|---|---|---|---|
| 黨名 | 第一希望日本勞農黨(略稱日勞黨)第二希望日本勞働農民黨 | 農民勞働黨 | 統一勞働農民黨 | 勞農大衆黨 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 委員長 | 高野（日勞系） | 麻生（日勞） | 高野 | 高野 |
| 書記長 | 平野（農民） | 平野 | 日勞黨より | 日勞黨より |
| 同次長 | 河野（日勞） | 河野 | 次長なし | 無産大衆より |
| 統制委員長 | 三輪（日勞） | 淺原（民憲） | 大道（大衆） | 農民黨より |
| 綱領政策 | 舊日勞黨のまゝのものを原案とす | 原案を提出せず | 七黨の綱領より共通點を摘出して作製したるものを原案とす | 原案を提出せず |

舊無産大衆黨の階級的努力は、綱領に主要努力を置いた。就中「我國の國情に即し」（平野君一派は、これを反動的愛國黨の客觀的條件としてゐる）や「合法手段に依り」（合法的共同戰線黨には無用且つ有害である）を綱領より削除する事と、「我黨は無産政黨の全合同の完成を期す」を挿入することのために、根強く論陣を張つたけれども、日勞、農民の同盟軍のために敗れた。

三

されば、我々は、平野君の田中反動政府との醜聞や反動團體との愛國黨組織計畫や、そして舊日勞黨の幹部諸君の平野君を死守されたことや、所謂日本大衆黨問題を、偶發的な事件だなどとは考えてゐないのである。

必然なことが、もう來たのだ。

醜聞問題の摘發者が何人であれ、黨が合同直後の情勢にあれ、又平野君の辯解に努むるやうに、合同前の出來事であれ、いやしくも合同を條件として取引された田中反動政府との醜聞が全國的に暴露され、しかも疑ひは濃く、否定すべき根據なくして、事實無根だなどと、黨大衆を僞瞞して、平野君の野望を黨内にて準備せしむることは斷じてゆるされない。

我々は、調査をさえ拒む舊日勞の幹部諸君と抗爭しつゝ調査を遂行した。

「勞農新聞」は双方聽取書の調査全文を報導したのに、河野密君の部長たる黨機關紙は、「私等はそんなことは無い」といふ河野君の一身上の辯明の立場から書かれた記事と、我々に對する慢罵を滿載し續けた。

黨の中央執行委員會は、統制委員會の右の聽取書はもとより、淺原健三君の證言の朗讀をさへ封鎖して、ブルジョア政治ゴロ某の陳述書だけを讀みあげて、事實無根でありますと決定せしめたのである。

だが、さうしたことはもう書くまい。彼等は秘密結社をつくつたなどと、官憲の口眞似をして、毒付いたことなども言ふまい。次いで徹底的に暴露された平野君の、反動的愛國政黨計畫が、合同と同時に黨内で準備されてきたことが、照魔鏡に映し出されたやうに明確になつた今日、それを言ひ、書くことは、舊日勞の幹部諸君の良心をゆさぶつていたましく惱亂させるだけのことだから。

我々が、平野君を除名せよ、黨執行部は引責辭任せよ、「執行方針」を撤回して地方政黨

を合同せよ、黨大會を開けと、そこで、要求したことが、何故に、除名に値ひするか。

## 四

裏切者平野君に對しては、溫容寬大なりし黨執行部も、我々に對しては勇猛果敢であつた。支配階級との鬪爭に對しては、合法萬能主義の彼等も、左翼との鬪爭には、黨規に對しては非合法主義者であつた。

たつた三人の常任によつて、黨大會で選出された中央執行委員を除名したのだから。

だから、それによつても彼等の意圖は極めて明瞭である、

除名によつて左翼大衆と分裂して共同戰線黨を爆破しやうと言ふのだ。

だが、我々は、大衆的壓力によつて分裂を防ぎ、飽くまでも共同戰線黨を守り育てあげねばならぬ。

共同戰線黨を守り、育てゆくことは、もとより爾く容易で單調である筈がない。黨の持つ危險と間隙に對する、批判、鬪爭が、假借なく執拗に戰ひ拔かれねばならぬ限り、發展の過程に、萬丈の波瀾をゑがくは當然である。

眼前の情勢が、たとえいかに展開しやうとも、我々は斷じて、失望しない、ひるまない。

階級的共同戰線黨の旗をかゝげて、まつしぐらにすゝまう。

# 大衆黨分裂と吾々の鬪爭方向

平野力三

## 一

過ぐる五月十五日の吾が全日本農民組合擴大中央委員會の脫退聲明を端緒として、黨員卅萬、吾國第一の大勞農黨として誇つてゐた日本大衆黨は、急速に崩壞の一路を踏み出し今や、刻々に現實的沒落に入り込みつゝある。

即ち、同月十六日には、舊日勞黨のみとなつた所謂幹部派は、大衆黨緊急中央執行委員會の決議をもつて、左右兩翼の理論家――政治家、平野力三、中澤辨次郎、鈴木茂三郎、黑田壽男、猪俣津南雄を黨から除名した。之に對し、黨內極左翼たる舊無產大衆黨派は本部派（日勞）の決議に反對し、十七日から、除名反對、舊日勞黨の分裂主義反對、日本大衆黨臨時大會開催要求、同幹部總辭職要求等の鬪爭スローガンを揭げて『下からの統一戰術』を展開した。此の左翼の一群は、最近更に、六月八日に開かれる大衆黨全國中央執行委員會に先だち、「分裂反對統一戰線同盟委員會」を召集し、前記の鬪爭スローガンを強調し、

之が容れられぬ場合を豫想して、別に左翼政黨を結成すべく、京都勞農大衆黨、千葉勞農黨、中國無産黨、岩手無産黨及び奈良統一無産黨等の地方的左翼政黨と既に內交渉を始め必死の暗中飛躍を試みつゝある。

之に對し、吾が舊日農黨系は、右翼主義の傳統的指導精神に從つて、五月十五日の擴大中央委員會において「政黨問題對策委員會」を設置し、同一指導精神にある社會民衆黨との合同に新なる鬪爭方向を求めつゝある。

一體、「輝やける」無産者的統一理論に指導され、幾十萬に餘る全國に散布した廣汎なプロレタリアと貧農との戰線統一——合同の熱望を取り上げて結成された日本大衆黨が、昨年十二月廿日に産聲を上げて此の方、僅に半ケ年の中に分裂——崩壞への歩みを進めるに到つたのは、何故であるか—

「何が彼をそうせしめたか？」

## 二

此の問題に對し、今日、各舊黨は、各々のイデオロギイ的見地から、相互に對立的な回答を與へてゐる。舊日勞黨は曰ふ。

舊無産大衆黨及び舊日農黨の左右兩翼を指して『日本大衆黨結黨の階級的意義を沒却し、徒らに舊黨意識に捉えられて內部對立を激成し、黨の統制を亂したる』（五月十六日、大衆黨の決議）ものとし、分裂の原因を『舊黨意識』に歸してゐる。

更に舊無産大衆黨は曰く、

『…現執行部にして階級的良心あらば引責辭職し、淸新潑剌たる新執行部を整備するの途に出づべきであつた。然るに現執行部はわれら除名の暴擧に出でた。吾等は斷乎としてかゝる除名に承服することを拒む』（五月十七日、舊無産大衆黨の聲明書）と、之又、精神、意識に分裂の基本原因をもつてきてゐる。

だが、之等二系列の政治家のあらゆるエセマルクス的修辭學の展開にも拘はらず、以上の如き分裂觀は、明白に誤りである。けだし、唯物論者としてのマルキストが、事物——事象の發生——發展並に沒落の諸過程を觀察するに當つて『良心』『意識』を決定的なモメントとして揭げるが如きは、直接的な自己矛盾でなくて何であるか？

吾々の見解は、以上の如き二見地の明白なる對蹠物を成すものである。

成る程、吾々も一應は、分裂の直接的モメントを小有産者的な山川式『戰線統一論』に發見するが、それと同時に、吾々は、此の誤まれる統一論が何故に誕生し、成育したか？の社會的根據を、日本資本主義の發展における特殊性の中に看取するのである。（六月號「文藝春秋」所載小生論文を參照されたい）。

經濟鬪爭から政治鬪爭への移行期が著しく短かつたこと、全體として吾が階級鬪爭史が極めて貧弱であつたこと、そのために政治的經驗が未熟であり、歐洲の諸經驗吸收に急がしく、批判的でなかつたこと、之等一連の客觀的狀勢が、必然に日和見的な、調和的な、センチメンタルに陷入つた山川式『階級的、大衆的統一理論』を生誕し、成長せしめた所の現實の根據である。

されば、かゝる根據に基いて發生し發展した日本大衆黨は、その根據の消滅と共に、即ち階級鬪爭の正しき發展と共に、必然に沒落し行く一つの徒花に過ぎない。

果然!!　支配階級必死の彈壓政治と之に抗爭するプロレタリヤと貧農との同盟の左右兩翼の對立激化に伴つて、此の怪しげな中間派的統一黨は、漸次この誤謬の本源を暴露し、遂にその必然的な墓穴に到達したのである。

## 三

眞の階級戰線の統一が、漫然たる左中右の全部面のセンチメンタルな統一でなく、一個の明確な宗派的指導精神の下への全勞農小市民大衆の同化と吸收とであるとするならば、吾が國現下の客觀的狀勢の下においては、左右兩翼の何れのイデオロギイが當面の鬪爭を最も勝利的に指導し行くであらうか？

吾々は、明白に次の如くに答へ得るであらう。曰く、右翼社會民主々義である、と。

元より、吾々右翼社會民主々義者は、如何なる場合においても、常に、（以下三行削除）突き破ることもあり、又、現に小作爭議や勞働爭議その他の經濟的——政治的デモンストレーションや演說會等においても甚だ屢々此のいばらの柵を乘り越えて鬪爭してゐる。斷じてウルトラ派の强ふるが如く、一貫して鬪爭の合法性を主張するものではない。然し乍ら日本支配階級があらゆる全體性を自らの武器として利用してゐる際には反對に、吾々も此の合法性を極度に利用することが出來るし、又、利用すべきである。絕對に合法性利用を拒絕するかのウルトラ派の鬪爭を見よ！「地下運動」等と稱へてはゐるが、その實は全く手も足も出ないではないか？　都市工場プロレタリヤの一少部分はともかくも、その大部分及び地方貧農大衆の殆んどすべては、全くウルトラ的指導の下に結果され得てゐないではないか？

最近特殊の尖銳さをもつて展開されつゝある全國市町村會選擧戰の現實の成果は、右のことを最强力に立證してゐるであらう。

## 四

吾々は、今や、不可避的であつたとは云へ從來克服することを得なかつた統一に關する戰術的誤謬をハツキリと認識し、此の誤謬の淸算と克服との唯一の通路を、一步々々踏みしめつゝある。

即ち、これは、同一指導精神の下に立ち、同じ大右翼主義の旗の下に戰へる社會民衆黨とのブロツクであり、より進んではそれとの合同である。此の大右翼主義の旗の下に全勞農小市民大衆を合理的に就集してのみ、初めて眞に幾多の階級的戰列が統一されうるのである。かゝる階級的統一意志の下に、吾々は去る五月十五日設置された「政黨問題對策委員會」の名において、その後、屢々社會民衆黨とのブロツクを提唱した。

然るに、社民黨は、この七萬の貧農大衆の溢るゝが如き、自覺せる統一意志に接して、二三幹部の除外と云ふが如き甚だ重要ならざる條件をもつて對して來たのである。

吾々は、之を社民黨全大衆の一般的な集中的見解の現はれと見ず、反對に、同黨内の二三分裂主義的幹部の專横的陰謀と見て、飽くまでも同黨大衆との下からの共同戰線の展開共同鬪爭委員會の設置と擴大とによつて、吾々の正しき、唯一つの進路を開拓し行くであらう。

大衆と大衆との、現實の、活潑な、階級的共同鬪爭、唯それのみが、此の險阻な、ジクザグな統一の諸過程を、確實に克服しつつあるのである。何物にも恐るゝ所なく、吾々の階級進路に必然に立ち塞がるであらう、諸々の障害に對し、尖鋭なる抗爭を續けつゝ、吾々は勇敢に、大膽に、自らの正道を戰ひ取り行くであらう。

之、吾々が今後に取り行く所の鬪爭の一般的方向である。

---

# 前號の讀者へ

（本誌前號河上肇氏「第二貧乏物語」の終三頁を止むを得ず削除しましたため、その裏頁にあつた山川均氏の「時評」一頁分も除かれるやうになり、讀者諸氏に御迷惑をかけました。山川氏の除かれた分（六二頁）を次に掲載します。）

## 時評

### 勞働黨勝たば

山川均

英國の總選擧は二旬のうちに迫る。ロンドン電報は、しきりに政戰の酣を報じてゐる。東洋におけるイギリスの現在の内閣が、謂ゆる怪文書や怪解明によつて總選擧の形勢を有利に導びかうとしたやうに、眞物の英國の現在の内閣は、例のジノヴイエフ書翰事件の狂言が當つたゝめに、筋書通りに政權を握つた内閣であつた。しかし何等の總選擧にもジノヴイエフの書翰が落ちてゐるわけではない。

「赤露の魔の手」で嚇かされて算盤を取り落とした英國の小ブルジョアも、氣を落着けて採算してみると、大資本の内閣保守黨の内閣で、これだけ儲かつたといふ數字は出て來ない。遙かの前方に見える赤露の魔の手よりももつと怖ろしい、英國資本主義の凋落に伴ふ不安は後ろに迫つて來る。そこで總選擧の形勢は、どうやら勞働黨に有利に展開してゐるらしい。

今度の總選擧について、何人も興味を持つことは、新たに擴張せられた五百萬の婦人の投票が、いづれの黨に向つて投ぜられるかといふことである。本來、保守黨と自由黨とが立脚する社會層の性質には、五年前と五年後と少しも變りはない。しかし保守自由兩黨が代表する社會層の外には、多かれ少かれどつちつかずの層がある。一九二四年一月には勞働黨を勝たせ、十ケ月後には勞働黨を敗つて保守黨を勝たしめたこの浮動的な投票が、五百萬の婦人の新投票と共に、英國の次の政權を決定する。

# マルクス＝エンゲルス全集

## 第九回配本

六月下旬

### 第三卷 ＝約六百頁＝

**イギリスに於ける勞働階級の狀態**（エンゲルス――一八四五年）

**哲學の貧困**（マルクス――一八四七年）

の二大著述を初めとして、ドイツ社會主義諸雜誌よりの諸論文、「アメリカに於ける勞働者運動」、その他マルクス、エンゲルスが壯年時代に書かれた潑溂たる諸論文が收められてある。

## 配本濟

| | | |
|---|---|---|
| 第一回配本 | 第一卷 | 學位論文以下二十數篇 |
| 第二回配本 | 第十二卷 | 反デューリング論以下二十篇 |
| 第三回配本 | 第四卷 | ドイツに於ける共產黨の諸要求以下卅篇 |
| 第四回配本 | 第五卷 | 革命反革命以下四篇 |
| 第五回配本 | 第六卷 | 東方問題以下六篇 |
| 第六回配本 | 第二卷 | 經濟學批判大綱以下四十篇 |
| 第七回配本 | 第七卷 | 經濟學批判以下十篇 |
| 第八回配本 | 第十一卷 | 剩餘價値學說史第三卷 |

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

# 經濟學全集

## 第九回配本

# 商業學（上）

（第三十七卷）

商業總論
取引所……向井鹿松

信託業……呉文炳

倉庫論……内池廉吉

商業は、あらゆる近代企業が營む共通領域として最近特に顯著なる發達を遂げ、且つさまざまな、それ自身の機關をつくり出してゐる。向井・呉・内池三教授の權威者たるは萬人の認むるところ、三氏多年の蘊蓄をかたむけて成つた本書は正に斯學に一大示標を揭ぐるものと信ず。

## 配本濟

- 第一回配本　經濟學原理　福田徳三著
- 第二回配本　經濟學大綱　河上肇著
- 第三回配本　日本社會經濟史　本庄榮治郎著
- 第四回配本　唯物史觀經濟史　山川均・河野密・石濱知行・著
- 第五回配本　各國經濟史　野村兼太郎・石濱知行・嘉治隆一・丸岡重堯・平貞藏・著
- 第六回配本　經營經濟學　增地庸治郎・太田哲三・吉田良三・著
- 第七回配本　經濟學前史　高橋誠一郎著
- 第八回配本　マルクス經濟學說の發展（上）　河西太一郎・猪俣津南雄・向坂逸郎

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# 山岳・深溪・氷河

# 秋の尾瀬

武田久吉

## 一　尾瀬の紅葉

尾瀬の秋色を見て來た友は、異口同音にそれが日本一だと賞讃する。然し燕平の紅葉を見たある人は、その歸りに尾瀬を通つて、燕平の炎を見た眼にはどこに紅葉があつたかと思はれる位のものであると言つた程だから、燕平は正に日本一の折紙を附けられる資格があり、尾瀬はそれに次ぐ可き勝地と稱してよからう。遮莫尾瀬は單に紅葉の色彩のみでなく、山川のたゝずまひが已に凡でないから、それに錦繡の美が加はれば、景色としてその右に出づる地は少なからう。

そんな議論は別として、私達は秋の尾瀬を訪ふ準備に忙殺された。食料、防寒具、寫眞の材料等を取揃へる外、同行者との打合せ、旅程も二三種編成して、天候によつて或は伸縮し、或は道程も變化しやうといふのだから、リーダーとしての自分は相當骨が折れる。同行の一人は山岳會員の大江君、他は京大の山本君で、何れも風景美を十分に鑑賞するといふ丈では滿足せず、植物も採り、素敵な寫眞も撮らうといふ慾張り方に於ては流石のリーダーも一歩を讓らなければならない强の者。

變色乾涸して將に凋落せんとする紅葉も美しいが、それよりも尙生色を保つ姿を、それに秋草の花も見たいといふ慾望から、わざと紅葉期に先立つこと約半月、九月の下旬を以て出發と定めたのは、決して皮肉な譯ではない。

## 二　土出まで

例の偉大なリュックザックを背負つた山本君と、上野驛で落合つて、上越南線で沼田まで行く。澁川を出ると車窓の風物已に凡ならずといふ譯で、或は吾妻川上流の山々に見とれたり、或は大利根兩岸の

岩壁に觀察の眼を向ける。

沼田に着くと直に自動車で追貝迄走らせる。例によつて宿屋で一と休して、鎌田行の自動車の出る間を利用して、名勝吹割瀑を見に行く。一兩年前二十五勝の一とかに當選したといふこの瀑も、水はズット上手から發電所に引かれる爲め、全く乾涸して見る影もない。日本の名勝地も、年々かうして標本の樣に成つて行くのかと思ふと心細い。「朝顏に釣瓶取られて」の風流があつた人の子孫は、名瀑の水を涸らす現代を産み、それによつて金錢上の成功を喜んで居る。

次の自動車は短時間にして吾々を鎌田に運んで呉れた。この自動車道も、水電の御蔭で出來たのだから……とさる風景學の大家が語られた事を思ふと、吾々は感謝を餘儀なくされる譯であらうか。

鎌田で日光境の山々の間から流れ出す小川を渡る。河口も今は堰き止められて貯水地となつて居るが、昔は狹い乍らも景色の好い所であつた。やがて片品川を渡る。磧にはアカマツとコゝメヤナギが多く、又シラカンバの稚樹も一二本目につく。オホイタドリの姿が北の國を思はせる。

大きな桑畑の間に點綴した人家の間を、花の多い縣道で越本、中里を經て、土出で片品川沿の三松館に宿をとつたのは、もう夕暮に近かつた。

## 三　山ノ鼻の小屋に

土出から約一里、片品村最終の部落である戸倉で勢揃をし、輕からぬ荷を人夫に托して、笠科川の谷に分け入つたのは、日も麗な翌朝であつた。急な坂を下つてから笠科川を渡る附近から、路は頗る細まつて、生ひ茂るスゝキには玉の露を宿し、クリの木の林内にはヤマナラシの肌が青白く光る。二十幾年振かで通るこの路も、昔に變らぬ淋しさである。十二平から小坂を登つて、山ノ神の小祠を後にすると、晝尚暗い十二横手の密林である。黄ばんだトチの葉が地に敷き、踏みしめるトクサの間からは水氣がにじみ出る。

西栗澤の丸木橋は怪しく腐れ落ち、霜に赤く染まりかけたヤマブダウの蔓を頼りに澤を渉る。ブナの大木にカヘデの種類も交り、ネマガリダケの下生も彌々深くなる。

一ノ瀬には危橋が架けられてあつたが、吾々は川を徒渉してから對岸の畔で中食。焚火の白い烟は靜に立昇つて、巨樹の梢にからんで行く。右を見ても左を見ても、鳥の聲も聞こえぬ靜けさ。

大赤澤を渡る手前、鍋取ゼンの下流の美しさ。恐らく笠科の谷の最も美しい所はこの一ノ瀬の前後であらうか。

二ノ瀬を渡り、三ノ瀬を越し、間もなく小赤澤を過ると、路は直に

# 秋の尾瀬

武田久吉

## 一　尾瀬の紅葉

尾瀬の秋色を見て來た友は、異口同音にそれが日本一だと賞讃する。然し燕平の紅葉を見たある人は、その歸りに尾瀬を過つて、燕平の炎を見た眼にはどこに紅葉があつたかと思はれる位のものであると言つた程だから、燕平は正に日本一の折紙を附けられる資格があり、尾瀬はそれに次ぐ可き勝地と稱してよからう。遮莫尾瀬は單に紅葉の色彩のみでなく、山川のたゝずまひが已に凡でないから、それに錦繡の美が加はれば、景色としてその右に出づる地は少なからう。

そんな議論は別として、私達は秋の尾瀬を訪ふ準備に忙殺された。食料、防寒具、寫眞の材料等を取揃へる外、同行者との打合せ、旅程も二三種編成して、天候によつて或は伸縮し、或は道程も變化しやうといふのだから、リーダーとしての自分は相當骨が折れる。同行の一人は山岳會員の大江君、他は京大の山本君で、何れも風景美を十分に鑑賞するといふ丈では滿足せず、植物も探り、素敵な寫眞も撮らうといふ慾張り方に於ては流石のリーダーも一歩を讓らなければならない強の者。

變色乾涸して將に凋落せんとする紅葉も美しいが、それよりも尚生色を保つ姿と、それに秋草の花も見たいといふ慾望から、わざと紅葉期に先立つこと約半月、九月の下旬を以て出發と定めたのは、決して皮肉な譯ではない。

## 二　土出まで

例の偉大なリュックザックを背負つた山本君と、上野驛で落合つて、上越南線で沼田まで行く。沼田を出ると車窓の風物已に凡ならずといふ譯で、或は吾妻川上流の山々に見とれたり、或は大利根兩岸の

岩壁に驚異の眼を向ける。

沼田に着くと直に自動車で追貝迄走らせる。例によつて淀屋で一と休して、鎌田行の自動車の出る間を利用して、名勝吹割瀑を見に行く。一兩年前二十五勝の一とかに當選したといふこの瀑も、水はズット上手から發電所に引かれる爲め、全く乾涸して見る影もない。日本の名勝地も、年々かうして標本の樣に成つて行くのかと思ふと心細い。「朝顔に釣瓶取られて」の風流があつた人の子孫は、名瀑の水を涸らす現代を産み、それによつて金錢上の成功を喜んで居る。

次の自動車は短時間にして吾々を鎌田に運んで呉れた。この自動車道も、水電の御蔭で出來たのだから……とさる風景學の大家が語られた事を思ふと、吾々は感謝を餘儀なくされる譯であらうか。

鎌田で日光境の山々の間から流れ出す小川を渡る。河口も今は堰き止められて貯水地となつて居るが、昔は狹い乍らも景色の好い所であつた。やがて片品川を渡る。磧にはアカマツとコヽメヤナギが多く、又シラカンバの稚樹も一二本目につく。オホイタドリの姿が北の國を思はせる。

大きな桑畑の間に點綴した人家の間を、石の多い縣道で越本、中里を經て、土出で片品川沿の三松館に宿をとつたのはもう夕暮に近かつた。

## 三　山ノ鼻の小屋に

土出から約一里、片品村最終の部落である戸倉で整備をし、輕からぬ荷を人夫に托して、笠科川の谷に分け入つたのは、日も麗な翌朝であつた。急な坂を下つてから笠科川を渡る附近から、路は漸々細まつて、生ひ茂るスヽキには玉の露を宿し、クリの木の林内にはヤマナラシの梢が青白く光る。二十幾年振かで通るこの路も、昔に變らぬ淋しさである。十二平から小坂を登つて、山ノ神の小祠を後にすると、晝尚暗い十二横手の密林である。黄ばんだトチの葉が地に敷き、踏みしめるトクサの間からは水氣がにじみ出る。

西栗澤の丸木橋は怪しく腐れ落ち、箱に赤く染まりかけたヤマブダウの蔓を頼りに澤を渉る。ブナの大木にカヘデの種類も交り、ネマガリダケの下生も彌々深くなる。

一ノ瀬には危橋が架けられてあつたが、吾々は川を徒渉してから對岸の堺で中食。焚火の白い烟は靜に立昇つて、巨樹の梢にからんで行く。右を見ても左を見ても、鳥の聲も聞こえぬ靜けさ。

大赤澤を渡る手前、鍋取ゼンの下流の美しさ。恐らく笠科の谷の最も美しい所はこの一ノ瀬の前後であらうか。

二ノ瀬を渡り、三ノ瀬を越し、間もなく小赤澤を過ると、路は直に

アテ坂の急坂にかゝる。重い荷を背にした體には、流石に汗の流れ出るを覺ゆる。それでも昇り切つてカラマツの巨樹の下から、遙に笠科山を望んだ時には、昔の記憶は自ら蘇つて、若かりし日の勇氣が體に漲るのを感じた。

笠科山（大高）も小高も、赤尾瀬ヶ原の北に立つ景鶴山も、古めかしい解釋かも知れないが、肩から上の突起は、風蝕の結果出來た地形ではあるまいかと想像したり等して、やがてツナギ澤を左にして、幾つかの小い山の鼻を廻れば、終に鳩待峠の平坦な頂に着く。空にはいつしか雲が擴がつて、未だ三時頃だといふに、夕暗が迫るかの如く、サウシカンバの梢がカサ〳〵と鳴る。



笠科川

此處からは、前の年にも來たことのある熟路。オホシラビソやネズコの下を北に降る脚も自づと速く、やがて川上川の川沿に下れば、あとは略々平坦な路を行く。闊葉樹は再び量を増し、ブナやサウシカンバが多い。川縁にはトカチヤナギの姿も目に入る。

水量の減じた川上川は、足もぬらさずに渉れ、シラネアフヒの多い木の下路を、山ノ鼻を廻ると、樹林の彼方には、今夜の宿りから青い烟が立つて居る。

山本君を誘ひ出してあたりの景を見に行く。何といふ靜けさだらう。そして何といふ美しさだらう。俗臭といふものは薬にしたくも見當らない。夕暮がアブラガヤの赭茶けた穗に忍び寄る頃、小屋に歸つて爐邊に脚を伸した。

## 四　柳平と尾瀬ケ原

今日の豫定は、心行く迄原を縦横に探らう、そして泊りは下田代の檜枝岐小屋といふのだから、一日にしては楽過ぎる位である。人夫は一と足先に、そして寫眞器と脚架丈を持つて、吾々は柳平に向ふ。前夜の暖氣から、或は雨模樣かと懸念し乍ら起き出て見ると、朝日は至佛山の頂を照して居た。然し春と違つて、鳥の聲一つしない尾瀬ヶ原の秋は、靜寂の極である。

それでも、輝く旭日にシラカバの幹は白銀の如く光り、緑濃いカラマツの梢は、エメラルドの新緑美こそないが、晴々しい色で、もう赤味がかつた原の草と、美しい對照をして居る。すがすがしい朝の氣分。きのふの薄暮とは全く趣が變つて、日崎山の頂をかすめて飛ぶ白い雲にも活氣がある。

山ノ鼻の濕原に立つて、目を四方に働かせて居た山本君は、三脚を伸したまゝ茫然として居る。聞けば、何處から寫してよいのか、皆目見當がつかないといふ。右往左往、位置を定めるのに餘程骨が折れるらしい。

至佛山から流れ出す貉澤を渡つて、柳平に足を入れる。猫又川の水も著しく減じて、春とは全く趣をかへ、これなら徒渉に何の苦もあるまい。大きなトカチヤナギや、雪の爲めか幹のいやに曲りくねつたコゴメヤナギ、それに交つてトカチヤナギの若木が、極めて小規模乍ら幾分上河内を思はせるが、秋の日には生ひ茂る雑草に、路を失はんとしたことも屢々である。雑草を抽いて立つ王者は、何と言つてもエゾウバユリで、中にも莖の高さ七尺七寸に餘り、葉の長さが二尺以上、その幅八寸を算した怪物もあつた。

日崎越えに掛る小濕原に出る。至佛の麓の針葉樹林が如何にも美しい。黄味を帶びたネズコ、暗緑色のオホシラビソ、すつきりとしたヒメコマツ。夫々に色も姿も異つて、獨特の景觀を呈する。日崎山に寄つた方はブナの密林で、まゝオホシラビソを混じ、林縁にはシラカバの優しい姿が軟かい感じを與へる。

小屋に歸る頃には、空にはいつしか雲が瀰漫して、今にも泣き出さん許りの景色に、急いで中食を濟ませて東に向ふ。川上川迄の深い草原を行くこと一二丁。雨はもう肩をかすめて雨着の用意を促す。カラマツの梢の天狗ノ巣を仰げば、滴は頰を打つ。鶴ノ鼻、上ノ大堀の探勝も放棄して、牛首を過ぎ、樹林を出はづれると、もう暫くの間は身を隱す木立もない。風に乘じて横なぐりに降る雨に射すくめられ乍ら、大小の池塘の間に通ずる滑り勝な小徑を拾つて、大堀川の丸木橋迄辿る。水は急に增して、橋は一部水面下に横はる。そして急流、冷水、斷崖といつた有難からぬ條件に肝を冷し乍らどうやら渡り終へる。ホット一と息吐いて、行手左を見渡せば、雨の中に景鶴のヌウ岩

アテ坂の急坂にかゝる。重い荷を背にした體には、流石に汗の流れ出るを覺ゆる。それでも昇り切つてカラマツの巨樹の下から、遙に笠科山を望んだ時には、昔の記憶は自ら蘇つて、若かりし日の勇氣が體に漲るのを感じた。

笠科山（大高）も小高も、赤尾瀬ヶ原の北に立つ景鶴山も、古めかしい解釋かも知れないが、肩から上の突起は、風蝕の結果出來た地形ではあるまいかと想像したり等して、やがてツナギ澤を左にして、幾つかの小い山の鼻を廻れば、終に鳩待峠の平坦な頂に着く。空にはいつしか雲が擴がつて、未だ三時頃だといふに、夕暗が迫るかの如く、サウシカンバの梢がカサ／＼と鳴る。

此處からは、前の年にも來たことのある熟路。オホシラビソやネズコの下を北に降る脚も自づと速く、やがて川上川の川沿に下れば、あとは略々平坦な路を行く。闊葉樹は再び量を増し、ブナやサウシカンバが多い。川緣にはトカチヤナギの姿も目に入る。



笠科川

水量の減じた川上川は、足もぬらさずに渉れ、シラネアフヒの多い木の下路を、山ノ鼻を廻ると、樹林の彼方には、今夜の宿りから青い烟が立つて居る。

山本君を誘ひ出してあたりの景を見に行く。何といふ靜けさだらう。そして何といふ美しさだらう。俗臭といふものは薬にしたくも見當らない。夕暮がアブラガヤの赭茶けた穗に忍び寄る頃、小屋に歸つて爐邊に脚を伸した。

## 四　柳平と尾瀬ケ原

今日の豫定は、心行く迄原を縦横に探らう、そして泊りは下田代の檜枝岐小屋といふのだから、一日にしては樂過ぎる位である。人夫は一と足先に、そして寫眞器と脚卵丈を持つて、吾々は柳平に向ふ。

前夜の陰氣から、或は雨模様かと懸念し乍ら起き出て見ると、朝日は至佛山の頂を照して居た。然し春と違つて、鳥の聲一つしない尾瀬ヶ原の秋は、靜寂の極である。

それでも、輝く旭日にシラカバの幹は白銀の如く光り、綠濃いカラマツの梢は、エメラルドの新綠美こそないが、晴々しい色で、もう赤味がかつた原の草と、美しい對照をして居る。すが／＼しい朝の氣分。きのふの薄暮とは全く趣が變つて、日崎山の頂をかすめて飛ぶ白い雲にも活氣がある。

山ノ鼻の濕原に立つて、目を四方に働かせて居た山本君は、三脚を伸したまゝ茫然として居る。聞けば、何處から寫してよいのか、皆目見當がつかないといふ。右往左往、位置を定めるのに餘程骨が折れるらしい。

至佛山から流れ出す豁澤を渡つて、柳平に足を入れる。猫又川の水も著しく減じて、春とは全く趣をかへ、これなら徒渉に何の苦もあるまい。大きなトカチヤナギや、雪の爲めか幹のいやに曲りくねつたコ・メヤナギ、それに交つてトカチヤナギの若木か、極めて小規模乍ら幾分上河内を思はせるが、秋の日には生ひ茂る雜草に、徑を失はんとしたことも屡々である。群草を抽いて立つ王者は、何と言つてもエゾウバユリで、中にも莖の高さ七尺七寸に餘り、葉の長さが二尺以上、その幅八寸を算した怪物もあつた。

日崎越えに掛る小濕原に出る。至佛の姿の針葉樹林が如何にも美しい。黄味を帶びたネズコ、黝綠色のオホシラビソ、すつきりとしたヒメコマツ。夫々に色も姿も異つて、獨特の景觀を呈する。日崎山に寄つた方はブナの密林で、まゝオホシラビソを混じ、林縁にはシラカバの優しい姿が軟かい感じを與へる。

小屋に歸る頃には、空にはいつしか雲が瀰漫して、今にも泣き出さん許りの景色に、急いで中食を濟ませて東に向ふ。川上川迄の深い草原を行くこと一二丁。雨はもう肩をかすめて雨着の用意を促す。カラマツの梢の天狗ノ巣を仰げば、滴は頰を打つ。鶴ノ類、上ノ大堀の探勝も放棄して、牛首を過ぎ、樹林を出はづれると、もう暫くの間は身を隱す木立もない。風に乘じて横なぐりに降る雨に、射すくめられ乍ら、大小の池溏の間に通ずる滑り勝な小徑を拾つて、大堀川の丸木橋迄辿る。水は急に増して、橋は一部水面下に横はる。そして急流、冷水、斷崖といつた有難からぬ條件に、肝を冷し乍らどうやら渡り終へる。ホツト一と息吐いて、行手左を見渡せば、雨の中に景鶴のヌウ岩

が見えつ隱れつする。

沼尻川を渡つて漸々下田代に掛かる。晴れた日なら鼻の先にそゝり立つ燧ヶ嶽も、雲に遮られて、唯麓の木立のみがボーッと霧の中にかすむ。

六兵衞を渡ればもう一と息で檜枝岐小屋だ。丈高く伸びたアシの間を分けて、泥濘に滑る足を踏みしめ乍ら、狹い小屋に轉び込む。雨は益々激しく降つて、所々漏り始めた。應急修理と、濡れた衣服の乾燥とが、この半日の仕事。それでも夜は、きのふよりも氣溫の低いに似ず、溫かく休むことの出來たのは、一にはこの小屋の建て方にもあると思はれる。

## 五　三條瀑

晴れやかな朝を豫期したにも拘はらず、空は一面に曇つて居る。然し假に雨の落ちる氣はひもないので、荷を殘して探瀑に出かける。燧の裾のブナ林は何時見ても見事である。たまさかの通行人が彫りつけた姓名、年月、年齡等が、幾分人間の臭を漂はす外、自然はありのままに人に邀る。それでも最近には駄を牽ける程の道路が拓かれた爲め、尾瀬平から見れば淋さが少いが、それでも靜なことは相變らずの景色である。赤川を渡つて水電の所謂社宅を訪れる。留守居の夫婦に茶を侑められるまゝに、暫く腰を下して雪中籠居の話等を聞く。降雪量は累計一百尺內外に達するさうだが、積雪として地に敷くは十尺前後だといふ。尾瀬平が一面の雪原と化し、細い水流等は所在さへ判らず、從つて沼尻川を除いては橋を必要としない眞冬の景を想像して、スキーの快味が偲ばれる。

新道で三條瀑を訪れる。昔は赤田代から河流を傳ふ方が、藪と鬪ふよりも樂であつたが、ブナの密林の中に開かれた新道の方が危險は少しもないから、増水時にはこれによる方が確に得策である。然し名瀑平滑は、オホゾリ澤を過ぎる頃、木の茂みを透してその片鱗を窺ふに過ぎないのは遺憾である。

瘠尾根の今にも崩れ落ちそうな突端にある觀瀑台に下るには、この邊の山に似つかはしい細徑で、木の根岩角を文字通り攀ぢるのも面白い。尤も多人數であつたら危險でないとは言へない場所だが、この位な險を冒して見る價値は十分にある名瀑。それは今眼前にたぎり落ちて居る。減水時とて水量こそ少いが、却つて増水の時の樣に飛沫を浴びる患はない。落ち口から五十幾間かの綱を下して瀑底に達しなかつたといふから、高さは恐らく日光の華嚴に優るとも劣るまいが、幅はそれに數倍して居る。

コメツガの立木を頼りに、遙か下流に眼をやれば、只見の峽谷は深

く左右の山裾を抉つて、木の間隠れに銀蛇の蜒々として行く末も見定めかねる。

## 六　長藏小屋に

名殘盡きぬ尾瀬平に別れを告げて、長藏小屋に向つたのは三時半に近かつた。橅生のだら〱登り、それにこの夏道が更に改修されたので、足が捗る。ダンゴヤの澤に近い頃、霜に染つたトチの梢が、陰欝な山路を明くする。然し上るにつれて増加する針葉樹は、大海の底へでも引き込まれる樣な暗さを感じさせる。時間の遲い爲め道草一切抜きにして、急ぐ。その故で白砂の濕原に來たのは僅か一時間程した時であつた。薄暗い森林から出て、とも角も打ち開けた濕原に出ると、景色は急に一變して、池塘の水のゆすらぐのも足を止めるに足りる。流石の山本君たまり兼ねて、一枚寫さなければ一歩も進めないと嘆聲を發する。休憩半時。

下田代に接する燧ヶ嶽の裾あたりからボツ〱現れたエゾマツは、白砂に來ると大分に姿を見せ、中に枝垂れたトラノヲと稱する形のも眼に入る。



三　條　瀑

正五時出發。白砂の小川を渡つて、沼尻川の右岸に沿うて辿る時、西の空には雲切れがして、夕日は前面の樹林を金色に染めた。終日陽の光に餓えた眼には、彌陀の來迎も斯くやと許りに喜び勇み、加之翌日の快晴に心も躍り、足搔も輕々と彌々沼尻平に出る。

見よ眼前に展開した尾瀬沼。背にした際には未だ薄雲がまつはるが、湖を距てゝ大清水平から三平へかけた平らかなスロウプは、夕榮に輝いて、風に動く湖面には金波銀波が躍る。然し密林の中で暮れては足元があぶないから、片時も早くと湖畔の細徑を急ぐ。

淺湖の濕原にかゝらうとする手前、暗いオホシラビソやエゾマツの

林中に、黒い人影が動く。何かと目を据ゑて見れば、別路を取つて今日長藏小屋に着かれた大江君が、人夫と一緒に迎に來られたのであつた。六時長藏小屋の閾を跨いで、久闊を舒する。

## 七　尾瀬沼の舟遊

尾瀬平からは百七八十米も高い丈に湖畔は中々の寒さだ。午前五時氣溫二十七度（華氏）。庭前には長大な霜柱が立つて居る。然し天氣無類飛切りといふのだから有難い。

沼に映ずる燧の倒影を寫すのだとか、高山植物を見るのだとかして、良い加減長藏小屋の近くで遊んだ後、舟を出す。檜ノ突出を廻つて早稻澤に上陸、三平の下で清水を得て中食。沼の彼方に聳える燧の姿に、大江君も山本君も恍惚として居る。

南岸を大淸水に行く。ジユンサイの葉が波に漂ひ、紅い花が葉の間に隱れつ見えつ。朝の靜かなのにも似ず、午後は北西の風が強く、小沼への舟行は可なりの難航であつたが、山本君は腕に覺えの艪を巧に操つて、小沼東方の上陸地點に滑ぎ寄せる。フトキの大群落の間を、舟を進める時の壯快さ。

小沼の水は著しく減じて居るが、一周し得る迄には至らない。密林で取り圍まれる故か、尾瀬沼の波高いにも似ず、湖面は全く靜で、鏡の如き倒影が鮮明に映じて居る。湖畔の濕原には霜に染つた草が赤い毛氈の様に擴げられて居る。曾ては此處で紫電一閃、霹靂の音を聞いて逃げ出し、沼尻から長藏小屋まで雹に襲はれつゝ命から〳〵走つたこともあつたが、今日の靜かさはまた何といふ事であらう。三人は唯もう限り無き愉悅に浸る。

沼尻から雪崩窪にかけては、ヲヒルムシロいやが上に繁茂して、艪でも棹でも舟は中々進まない。此處に斗出した半島狀の浮島を湖上から探らうとする計畫は、困難と危險との爲めに遺憾乍ら中止するの止むなきに至つた。そして吾々は北岸に沿うて押出の濕原へと進むことゝなつた。

曾てはこの附近の林内に堂小屋を建てゝ、燧登山者の假泊に便にしてあつたが、それも年月と共に腐朽して今は跡だになく、二十幾年の昔私が初めて足を尾瀬に入れた頃の思出も空しい。濕原にはシヤウジヤウバカマの實もこぼれ去つて、ヌマガヤの葉のみ風に靡いて居る。

木の影は長く濕原の上に落ちて、陽の低まるに促されて、再び舟を進める。大入洲の奧、金色に染め出されたヒメコマツやコメツガの美しさに醉つた吾々は、徐に舟を長藏小屋に返す。日は沼尻の彼方に沈まんとし、十三日の月は檜ノ高山の右に昇つた。何といふ麗しい黃昏であらう。鷸の羽音が靜寂を破る。

## 八　山人と語る

生の良い鮨に夕食を終り、採集品の整理も濟めば、爐邊に長藏老人の氣焔を聞く。孫の頭を撫でつゝ尾瀨の今昔を談る主人の赭顏は、幾十年かの苦鬪を物談るに十分である。南會津の山奧檜枝岐に生れ、十歲の時父を失つてその爲め小學教育も完全に了へなかつたが、獨學で文字に親み、後或は皇典講究所に學んで社掌となつたり、又は水產講習所の淡水養殖の講習に出席して鮭鱒の孵化技術を習得したり、時には政治を談じ、時勢を論じ、或は植物愛護に努力したり、鄕土殊に尾瀨地方一帶の保護と開拓とに渾身の精力を打込んで奔走すること四十年。今日尾瀨が自然の儘に殘されて、その國寶的價値を保有し得るは、一に翁の努力の賜物に外ならない。

總じて破壞は易く保護は難い。殊に自然から利益を搾取しやうとする事業家の魔手から一地方の自然を完全に保護しやうとするには、絕大な資金を擁するか、左なくば世間の廣大な同情後援に賴らなければ、その遂行は容易でない。而も尾瀨沼山人の生國檜枝岐の村民は、山人の目的が一に私利私慾に在りと誤解し、嫉妬の餘り事業の妨害を試みて止まないと言ふに至つては實に言語道斷である。その迫害に耐へて奮鬪し來つた勇氣は實に敬服に價する。尾瀨一帶の價値が年一年と世間に認められ、その保護の必要が識者の間に絕叫され、やがてそれが實現した曉には、長藏翁の功績は尾瀨の名と共に不朽に傳はるに相違あるまい。

尾瀨破壞の大立物は、何と言つても水電事業である。沼尻に約六十尺の堰堤を築いて、湖水面を三十尺以上も增加し、これを小沼に引き、その南端から隧道によつて第一發電所に落し、一旦沼尻川に奔下した水を三條瀑の上方に堰き止め、尾瀨ヶ原全部を水底に沒して、而もその水を柳平の上手から、日崎山の下をくゞらして利根川入りに流し、至佛の西側を渠によつて湯の小屋附近に導き、こゝに一大發電所を設置しやうといふ計畫がある。

或はこれを只見川に落し、落差の大なるを利用して更に大規模の發電を試みんとするのであるが、何れにせよ、貴重な植物を滅し、本州最大の濕原であり、又その風致の他の追隨を許さぬものを、水底に沒し去らうとする無謀の計畫である。

尤も自然の美を解せず、科學的に見た尾瀨の價値を知らない企業家が、單に地圖を展べて發電能力ある地を物色するとしたら、尾瀨に白羽の矢を立てるも無理からぬことであらう。然しそれを許可する官憲が、輕々に事を斷じて、少數事業家の爲めに、國寶的否それ以上の價値ある尾瀨を破壞して、國家的損失を將來するの愚擧を敢へてするか。

吾人が默じて放任することの出來ない問題である。

## 九、燧ケ嶽

尾瀬に遊んで、沼に君臨する燧に登らない人は先づ少なからう。その頂は既に尾瀬一帶を下瞰するに適する許りでなく、波濤の如く連る山々、岩越兩毛の奥に蟠る大山高岳の大幅畫的展望を擅に出來るのであるから、一投足の勞を敢てしないのは大きな損失と言はなければならない。

尾瀬沼北岸の路が修理された今日、船に由るよりも時間の經濟にならうと、前々日通つた路を沼尻迄辿る。空は晴れて居るが、朝燒の氣味であつたから、きのふの快晴は望めないがそれでも雨の虞もないらしい。

いよ〳〵登りにかゝる頃から、風が强く吹き始め、雲の飛ぶこと矢よりも速い。風通しの惡い谷間を上る故か、日向に出るといやに暑苦しい。

登るにつれて景は益々廣く、沼は脚下に横はり、日光界の連山は歩毎に浮き上る様に思はれる。明治二十一年に長藏氏が開いたといふこの路は、年々踏み固められて、今では案内者がなくとも迷ふ虞は毫もない。

爆裂火口趾を經て、俎嵓の肩に達したのは約一時間後の事であつた。原が眼の下に展開し、至佛から武尊迄の連山が一幅の畫をなすので、撮影を試みやうと、岩角の上に三脚を据ゑたものゝ、强い風に煽られて、中々リリーズを押すチャンスを見出すに苦しむ。その内に雲霧は山々の肩にまつはり始めて、氣を苛立たせる。下を見ると大江君と山本君も、等しく被寫體を物色して、苦心慘澹たる様子である。

小一時間も岩角に佇立した後、一と息に頂上の三角點に驅け上つて、主なもの四五枚を撮影してから中食にかゝる。氣溫は四十八度といふのだから、大して寒くはない筈だが、何分にも風が强いので指頭がこゞえるかとさへ思はれる。止むなく窪地にかゞんで、有合せの木片や小枝を掻き集めて火を點じ、體を温め乍ら首を出しては展望に耽る。それでも慾の淺くない三人は、雲の切れ間を見ては、或は平ケ岳方面とか、或は會津駒とか、又は日光方面の撮影に、眼の色を變へて居るのも、後で思へば滑稽至極である。

燧ケ嶽は再三再四の噴火爆發によつて、頂には四つのピークが立つが、就中三角點のある俎嵓と、その西に當る最高峯柴安嵓との二つが傑出し、遠望の場合にこの山の特徴となつて、十里二十里の距離から、この山を衆山の中に識別する標識となる。俎嵓は北東南の三方を望むには申分がないが、尾瀬平や利根奥の山々を望むには柴安嵓に

一籌を輸するのは止むを得ない。兩峯の間には又猛烈な爆發が起つたらしく、爆裂口趾から西北に大きな濕澤が流出する。又山の東北面には鍛冶師の用ふる金鈇形の殘雪が顯はれるといふが、所謂「山岳家」の中でこれを見た者は未だ恐らく之有るまい。

飄風はいつ止むといふ氣はひもなく、雲は遠近の山を包んで、四面は漸く模糊として來るので、吾々は下山と定める。二時間許りで沼尻に下りたが、山本君は心醉措かない白砂に今一度遊び度いし、一には未だその景に接しない大江君にも喜を頒ち度いといふので、沼尻川について西する。池塘をねらふ者、エゾマツの好標本を物色する者、思ひ〳〵に位置を定めて三脚を据ゑる。然し濕原の撮影程困難なものは少いと見えて、流石の名手達も中々の苦心の様に見受けた。

例によつて正五時には出發。今朝の路を再び急行して、一時間で長藏小屋に歸着。最初のプログラムによると、今夜が長藏小屋最後のものである。然し大江、山本兩君の希望もあり、私としても異存がないので、モウ一日延長して、どこかを探らうといふ緊急動議が提出され、直に可決された。

## 十　尾瀬平の再遊

朝起きて見ると幸にして今日も晴天だ。どこへ行からうかといふ問題は、議論百出で中々決定しない。菖蒲平へ登らうなんといふ慾張つた説も出る。三條にしやうか、或はズツト縮少して復も燧に登らうかといふ案も出る。結局大江君の希望によつて、尾瀬ヶ原に遊ぶこと〻し、時間の許す限りの所迄行くこと、然し明早朝出發の必要もあり、今迄の採集品の整理もあるし、荷物を纏めるにも手間が懸らうから、歸りは晩くならない様といふ條件附である。

尾瀬平への往復とあれば、何と言つても氣が樂なので、ブラ〳〵景色を眺め乍ら、時々は撮影に時間をかけて行くから、暮色に迫はれて長藏小屋に歸る時程急行出來ない。

白砂濕原は今日こそ朝の明るい間に通るのだから、是非一枚はといふ意氣込である。池の水に漣の立つた所だとか、或は靜止して樹林の影が映つたのがとか、銘々勝手な注文をするから、とかく時間がか〻りがちである。

燧の裾の心地よい木立を縫うてから、檜枝岐小屋に出る時の感じはいつ來ても惡くない。そして打ち開けた濕原の彼方に、至佛の雄大な姿を仰ぐ時、感嘆の聲を放たない人は先づ少なからう。

道草が祟りをなして、小屋に着いたのは十二時を少しは廻つて居たらう。折柄小屋修理とかの爲めに來た人夫の呉れた鮇に舌皷打つて、熱い茶を貰つて中食にする。尾瀬に來る度毎に、必ず一度は泊ることの

小屋は、私にとつてなつかしいものゝ一つであるが、昔のものは既になく、現存するものは昭和二年の建造に係る。聞けば掘立式のこの小屋は、年々雪の爲めに柱が地中に押込まれ、幾年かの後には這ひ込む程になるから、勢ひ改築の必要があるとか。その建て方は檜枝岐一流のもので、如何程焚火をしても煙は屋根裏から易々として散じ去るのである。

朝の様子にも似ず、空はいつしか曇つて、ドンヨリとしたいやな天氣になつてしまつた。さりとて此處から引きかへすのも遺憾であるし、雨さへ降らないのなら、展望の概觀を得るに差閊へもないから、足を燧岳に入れることにする。先達而は土砂降りの中を駈足で通過したのだから、燧は山本君にも熟知の地域でもないし、大江君に至つては燧山上から下瞰して遊意勃然と起つて居た際とて、兩君の活躍振りも目ざましいものである。三脚も一々畳む暇なくて伸したまゝにあちこちと逸物を逐ひ、路を外れて右に左に好位置を定めるに忙しい。

下田代を出はづれて沼尻川を渡る。今日は水も澄んで而も淺い。川沿の木立の中にはマユミの果實が目を牽く。

中田代に入つてからは、路の左右にある池塘が一番吾々の注意を牽くもので、その中に生へて居る水生植物の中には珍らしい種類があるから、大江山本兩君の撮影慾をそゝること一と通りでないらしい。かくて大堀川も越し、牛首も間近くなつて、上田代も今一と息といふあたり迄來たが、遺憾にして時間が前進を許さない。兩君はネムロカウホネの花を見付けて、藝術的寫眞の撮影に腐心する。陸上の植物と異つて、池畔から水中のものを狙ふのは中々樂でない。或は遠きに過ぎ、或は近きに失し、葉の位置等も思ふ様にならない。水に濡れた葉をハンケチで拭ふやら、その努力は驚嘆す可きものである。

とかくする内三時も過ぎた。池塘を前景として雲の掛る至佛を寫したのを最後として、不承なしに引き上げることゝする。それでも未練がましく一二度は三脚を立てたが、豫定よりも時間の伸びたのに苛立つて、沼尻川を渡つてからは全速力で急行する。

檜枝岐小屋を通過したのは四時四十五分。先達而の時よりも一時間以上遅い。これでは下手をすると沼尻あたりから暗闇を辿ることゝなつて、初めから背水の陣を布いて提灯を携へなかつた結果、飛んだ困難を甞めはしまいかと思ふと、餘程の急行を要することになる。それでも五時半には白砂を通り、大入洲に來たのが六時。足を限りに急行して、あと十五分で長藏小屋に達し、あの距離を一時間半で戻つたレコードを作ることになつた。

## 十一　鬼怒沼林道

鬼怒沼を經て八丁、湯泊り。あれから西澤金山にかゝつて日光湯本に出るのが一行の希望であつたので、出來得る限りその實現を望んだのであつた。そしてあの長い上岩國境の縱走には、雨天は禁物である。先年も長い鬼怒沼林道を霧の日に通過したので、今度は晴天の日をとの注文が向ふから外れて、起床して見ると空は曇つて山には霧が掛つてゐる。これでは寧ろ音無しく三平を越して戸倉に出た方が得策であろが、今市營林署は八丁ノ湯に人を派して吾々を待ち受けて居る報告が昨夜届いて居る。責任上雨を犯しても私丈は鬼怒沼林道をとらなければならない。而も一日豫定を繰り下げた爲め、先方ではきのふから八丁ノ湯の巡視小屋に出張して、一行の來るのを今や遲しと待つ譯である。

兩君に謀ると、降られる迄も行を共にしやうと一決して、重い荷は長藏君に持つて貰ふこととし、大江君の記念撮影を最後として、名殘惜しい尾瀬に別を告げ、午前七時出發する。十五六分の後、一行は大江川を渡つて林道に吸ひ込まれて行く。ふり返つても懷しい沼の姿は木立に遮られてもう見られない。

一時間程登つて小淵澤の田代に來たが、霧の深い今日は流石に道草もせず、一同無言の儘行を續ける。東に國境を辿ること半時許りで、山稜は急に南に曲つて袴腰に續く。林道は然しその北麓を捲んで赤安の西に取りつくことになる。オホシラビソの密林と、執拗な霧の爲めに眺望は更にない。

赤安も頂上を通らずに北裏を捲き、その東麓を離れて東南に下り始めたのは十時であつた。これから黑岩山の南腹、引馬峠への道と岐れる所までは、倦き〳〵する程で、而も約二時間を要したのは驚く可き距離である。

今にも降りそうな空は幸に濃霧以上に惡化しないので、こゝに一と休して中食する。煙草休みも碌々しないで出發。今度は西南に山稜附近を行く。晴天なら折々木立の切れ目から遠望も可能なのであるが、時折見える山の姿も、どの山のどの邊に當るのか、見定めるさへ物憂い。殊に鬼怒沼山の西側、東又の谷に面する斜面の如き、晴れた日なら知らず、唯々陰慘な氣の漲るを覺えるのみで、一刻も早く鬼怒沼濕原に出度いと、氣のみあせつて足は一向に捗らない。

それでも黑岩山から一時間半許りの後、吾々は濕原の北端に吐き出された。折柄東又の谷を越して來る霧は、すだまの踊りもかくやと思はれる形をして、濕原の東側を南へ走つて行く。

鬼怒沼濕原の北端は、幾分北に向つて傾斜し、水は明に東又の谷に落ちるのも妙である。その直南で傾斜が殆ど平らと見えるあたりに、恐らく最大と思はれる池がある。鬼怒の本流を距てゝ東南に聳え

る根名草山は双峯駝の形して、影を池上に落して居る。この池水は然しこれぞといふ排水口を持たないから、直接鬼怒川に流下するとは稱し難い。更に南に歩を移すと、濕原は徐々に南に傾き、又大小二十餘個の池が點在し、その或者は細溝を穿つて滿水の時は日向恐し澤の水源をなし、末は鬼怒本流に流下する。然し假令大雨又は融雪期と雖も、それ等の池が悉く連絡して、濕原全體が一つの沼を現出することは到底あり得ない。

襲ひかゝる霧を靜に眺めて居たら、或は絹織る姫の姿も現れるかとも思はれたが、霧は漸く凝つて雨となり、時は容赦なく過ぎるので、未だ脫俗の域に達しない三人は蒼惶南に急坂を下つて、遂に本流の左岸に立つた。雨足は漸く滋く、脚は幾回かの徒渉に濡れる。暫く右岸の踏み跡を拾つて、日光澤溫泉の舊址を過ぎ、日光澤が瀑となつて鬼怒に注ぐを左に見て復も左岸に移り、再び右岸を攀んでから次に左岸に渡ると、懷しい八丁ノ湯は吾々を迎へて異れた。濡れた服を脫ぎ捨て、透徹玉の如き溫泉に浴して汗を洗ひ、川俣溫泉から運ばれた浴衣と丹前に體を包んで、爐邊の熊皮に坐した時は、鬼怒川奧の無人境に在るとは思へなかつた。

雨は間もなく止んで、やがては明皎々たる十六夜の月光が、ヤマハンノキの梢を漏れて木影を下草の上に投げる。屋內には榾火の炎が山話に興ずる人々の顏を赫く照す。夜半一同の寢靜まつた頃、大江君を誘つて復も浴場に出かける。浴槽に溢れる小熱いいで湯に浸り乍ら、明月を掠めて飛び去る白い雲を眺める喜悅は、到底人界のものではない。殊に尾瀬沼に舟を浮べて月を賞する豫定が、寒氣の爲めに實現されなかつた曉、八丁ノ湯に月の光りと溫泉を浴びた思出は、命ある限り幾度か蘇るものであらねばならない。

## 十二　訣別

翌朝一行は快晴に喜び勇んで鬼怒川を下り、川俣溫泉に汗を流してから、西澤金山の廢址を經、山王峠から切込刈込にかゝつて、夜の帳が全く下りてから日光湯本の人となつた。明治二十九年以來、幾度となく此處を訪れた私は、その變遷、發展の目覺ましいのに驚嘆せざるを得ない。旅館の建築が壯大になつたと共に、四周の散步道も改修され、殊に大正十三年以來電燈は晝を欺く明るさを放つて居る。

家を出てから早十日に近い。足を岩越兩毛の深山に入れ、本邦濕原中の白眉である尾瀬と神祕の鬼怒沼を訪ね、最後に奧日光の名勝を探つてから、幸多き吾々は西と東に袂を別つた。

# 溪谷の趣味

冠松次郎

古人は山岳と云はずに山水と云ふ言葉を多く用ひた。山と云ふものの中には勿論溪谷も含まれてゐるし、その山から出てゐる水系の全部はそれに屬してゐる譯であるけれども、私等には、山岳と云ふだけでは何となく物足りない。そして潤ひのないやうに感ぜらるゝ。殊に內地の登山に於てさう思へるのである。

「山水に親む」、或ひは「谷から山へ」、それが山に對する私の標語である。

私は總ての場合とは云はないが、或る一座の山岳を探るときには、その山のもつてゐる最も大いなる溪谷を溯つて、その頂を極めることを最もよい方法であると思つてゐる。

私は今日もさう云ふ方針で進んでゐるし、將來とてもその方法でなければ、複雜な山岳美を味ふことが出來ないと信じてゐるものである。

山巓へ！、とあこがれて行く登山家の、等閑にし易いものに溪谷である。誰でも美溪の風趣に接して、それを惡いと思ふものはないが、山巓へと一向に天上を差して登つて行く人達は、多くの場合溪谷の溯行を登山の一手段として、美は山巓にのみ集中されてゐるかの如き幻想に捕へらるゝ。

山巓から山巓へとうつゝて行く縱走の旅に於て、その趣きは殊に深刻である。

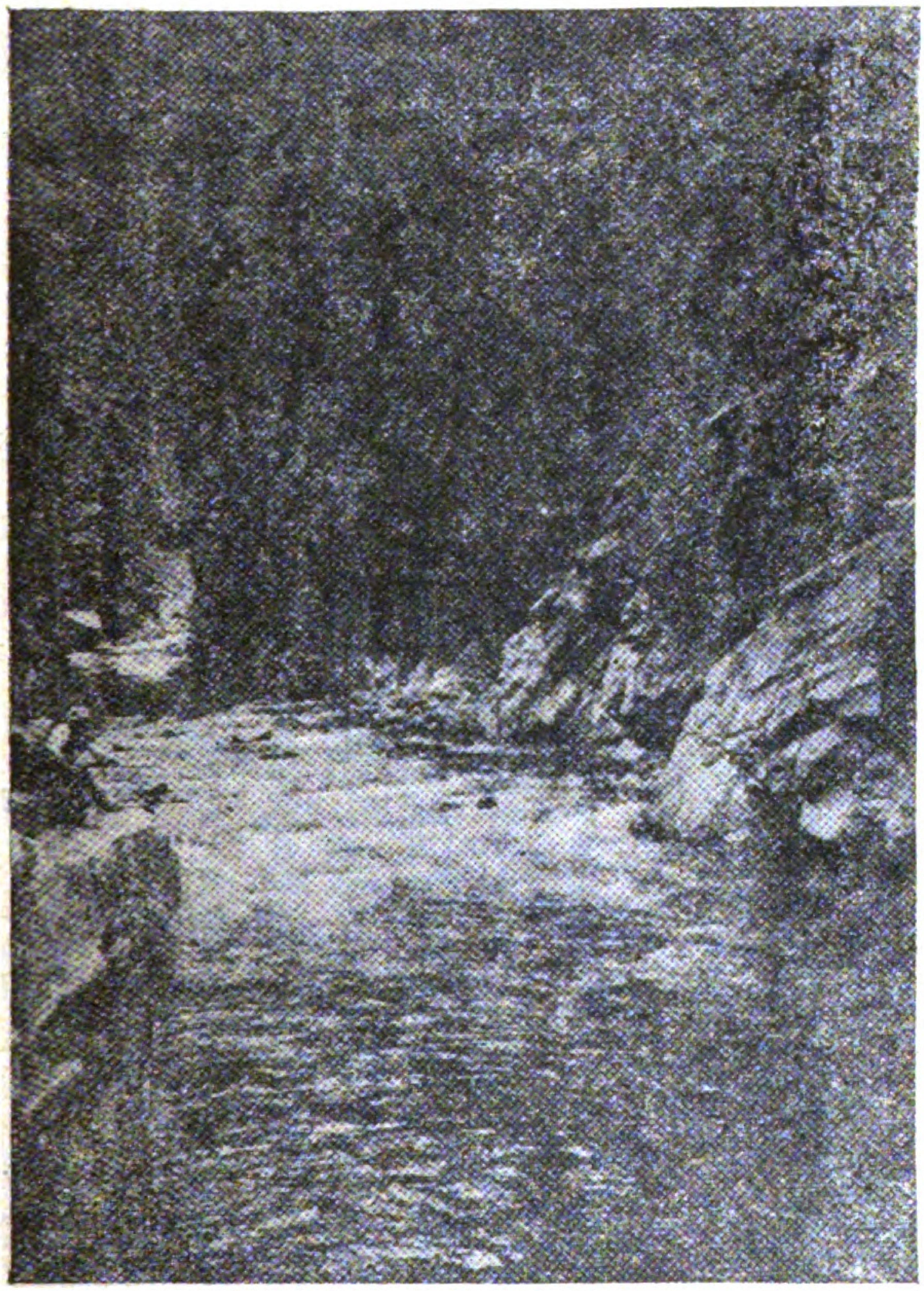
以下私は、登山季節とされてゐる夏期を標準として、少しばかり卑見を述べたいと思ふ。

日本の高山地方の山々は、現今では殆ど登りつくされ、人跡の到らない山頂は全くなくなつたと云つてよい位である。然しながらそれ等

の山々から出る溪谷には、まだ跋渉されてゐないものが相當に多く、その中には幽邃深奥なる自然境を爲してゐるもの、その山岳美を知らんとするのには是非探らなければならないものも多く含まれてゐるのである。

吾人はある雄大なる山岳を極めて、その天上の豪奢を喜ぶとき、自分の脚下を繞つて鬱々として繁茂してゐる森林の美觀に驚き、その脚底を貫流する溪川の閃きに、深奥なる山岳の大觀を全體として味ふことが出來る。展望の壯觀を喜ぶ私等の憧憬心は、もつと近くに、その山を中心とした自然美に親まんとする。

ロッククライミングにその山體の剛堅壯麗に觸れ、波濤の如き連山を辿つてその抑揚の悠大を味ふものは、更に脚下に深く秘められてある深谷の幽邃なる美觀に打たれ、森林を潜り、谷溝について、遂にその山々を彫飾する大溪谷の中に、廖廓たる自然の神秘を味はんとする。



廊下の入口　口元のタル澤落口附近

自由に奔放する谷水の流動美に魅せられた私等の心は、森林を貫き岩壁を縫つて行く水の姿態、奔放、旋回、凝止、靜淀、斷落、曲折の綜合美に、山巓で得られなかつた、複雜な自然のギャラリーに、私等は安心して自分等の身體を投入する。羚羊の如くに、岩魚の如くに。

風塵にまみれない純美の原始林に圍まれてゐる溪川、一の汚濁を止めてない清澄な水の色調は、その谷を構成する岩質によつて、周圍の森林の色彩によつて、空の色、日の輝やき、谷の走向等によつて變向の自在を示してゐる。朝、晝、夕の谷の趣き、四季の變遷などを考へるときは、私等は、

一つの山岳を中心として、數夏を費やすも、尙探り得られぬ、汲みつくせない大自然の含蓄を知るのである。

谷から山へ、一つの山の頂を極めると云ふことだけならば一回の登山で足りるのであるが、大きな山岳を繞り、それを貫ぬいてゐる溪谷を探つて、その山上を極めることになると、少なくとも二三回の旅行をしなければならない。山頂はどの山でも一つであるが、その山から滲出する溪谷は、大きな山岳程數も多く、長大なものがあるからである。

私は過去十數年の間、登山はなるべく縱走の方法をとらずに、美溪を探つて山上に至ることにしてゐた。日本アルプスのやうな狹い地域に亘つてゐる山岳地は、その山々の頂きをのみ極めることを以て足りるとすれば、左程の年月を費やさずにこれをなし遂げることが出來る。然し、若し溪谷美を尋ねて山上の光榮に浴することを欲したならば、そして數多い溪谷の景觀を收めることを目的の一としたならば、私等は短かい自分の一生を通じて、毎夏或ひは毎年一二回位の山旅では、とてもその大部分を跋渉しつくすと云ふ譯には行かないので、この意味に於て日本の山水は洵に無盡藏の感を抱かしめる。

山岳縱走の旅は天上の光榮を享樂し得るのに最もふさはしいものである。

山上の隙谿地を行くのであるから、展望は勿論よい筈で、自分を中心として其周圍に展開される山々の雄觀、雲霧の變幻、大空の麗かさ等を眺めること、爽昧山頂に立つて壯麗なる日輪を拜し、朝暾に浴して欣舞する大山岳の華々しさ、夕陽に臨郭を金光にけむらせてゐる逆光の山々、正に沈まんとする落照を受けて薔薇色に匂ふ、空と溶け合ふかと思ふほどデリケイトの空線をほのかにそめてゐる山々の色調に恍惚たること。

強烈なる夕日を背にして、山頭に寄せては碎け逢々として延び上つて行く霧の男波に向つて立つとき、首の周りに金色の輪を描いて杳然として現はれる自己の壯嚴な幻影を霧の鏡に見出すこと、遙かに大洋を俯瞰し、その渺漫たる煙波の上を、靜かに煙を曳いて行く汽船、蒼蒼たる山谷、田野、高原を貫いて蠢いて行く汽車などを見て驚喜の眼を見張り、茫々たる雲海の底に明滅する、下界に光る漁火の如き電燈の光りに胸をときめかすと云ふことなど、山上生活の面白味であり、縱走によつて滿喫し得る特權であらう。

それのみでなく、縱走の旅に於ては、少ない日數に於て多くの山頂を極めらるゝと云ふ便利がある。單に何々の山々を踏破したと云ふことを誇とするやうな人等にとつては、これ程經濟的な都合のよい方法はないのである。併しながらそれは一利一害であつて、恰も屋上を

るやうな縦走の旅行では、たとへば宮殿や寺院の尖塔、殿堂などを見たのみにては、その外面の華麗、輪廓の宏壮を味へるとするも、内部の裝飾美、その奥龕の壮嚴、如何に古き星霜を、十數世紀の年月を、深く秘められた内陣の神秘が、私等に何を物語つてゐるかを知るよしもないやうに、山上をのみ歩いてゐるのでは、その懐に森林がどんなに美しいか、溪谷が如何に幽深であるか、溪谷に到る地形の構造が如何なる委曲をつくしてゐるかを、如實に知ることが出來ないのである。實際はそればかりではなく、數年間も續けて、或る地方の山々を探つてゐると、山々の脈がどう云ふ風に走つてゐるか、何處にどう云ふ形の殘雪があるかと云ふことまで覺えてしまつて、遂には山上生活のみでは、興味は自然に索然たるものになつてしまう。

森林へ、溪谷へ、こゝでも私等の自然に對する思慕は、私等の身體を山巓から溪谷へと、ぐんぐん引づつて行くのである。

然しながら、山巓から溪谷へ或は溪谷から山巓へと、溪觀を手段としずに目的として探勝するまでには、多くの場合、登山家は多少の年月を經なければならないのである。勿論各自の傾向による處が多いとしても。

山巓を縦走して行く山旅では、自然の過程を親切に味ふことが少ないやうである。

裾野から、或は谷筋から登つて、森林帯、灌木帯、草木帯、残雪、偃松、岩稜と云ふやうな經過を辿ることが少ない。勿論縦走をするとしても、最初は矢張り高原とか谷とかから漸次に頂稜へうつゝて行くのであるから、過程はあるのであるが、然しそれは溪谷から一つ一つの山巓へ登るものの饒多なる變化を有するものに比して甚だ貧弱と云はねばならない。

山脈のある部分に於ては、山の深さ奥行がない爲に、谷からすると云ふことは、勞力のみ徒に多くその効果がこれに伴はないので、山傳ひに行くことの形勝に及ばない處もないではない、然し奥行のある大きな連嶺になると、そこには必ず幾つかの深溪が入つてゐて、私等を神秘な幽邃な、或は豪快な壮麗なその美觀を通して山上の雄大を潤色してくれる。

私は今、日本アルプス地方で最も立派な二三の大山岳に就て、溪谷美が如何にそれ等の山岳の登山を豐富ならしむるかを述べて見やう。

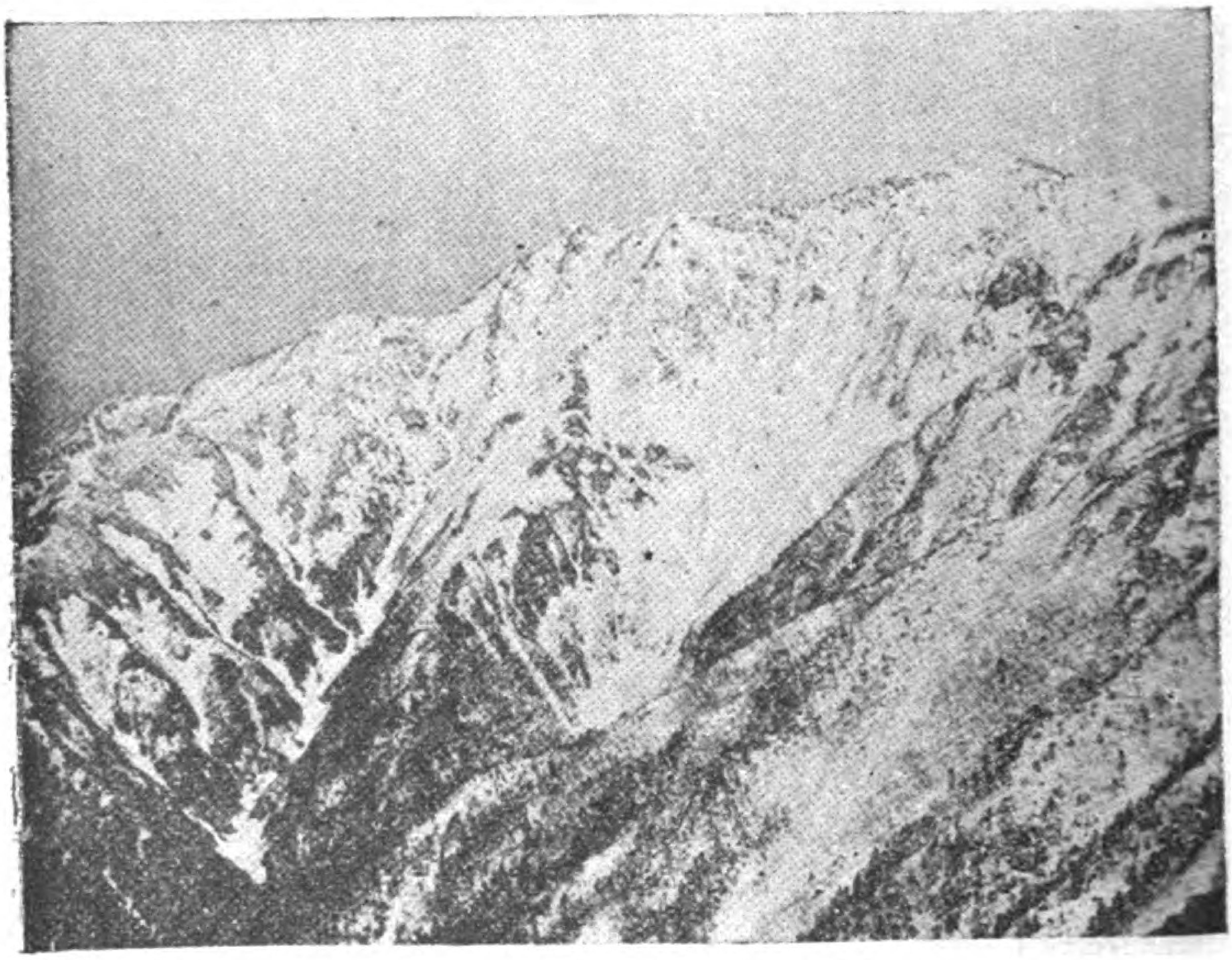
黒部川の源頭、常願寺川の水上に、巨體を横へてゐる越中薬師岳は、南方黒部五郎岳方面から頂稜を辿つてその頂を極め、更に長大なる山稜を下つて數河乗越に到り、五色ヶ原を經て立山まで縦走するとするも、僅かに二泊三日の行程にて足りる。そして更に何れもその絶巓を

極め、優秀なる展望を貪り、圏繞の山谷の大觀を樂しむことが出來るのである。

　然しこれを、この巨大な山岳を、若し溪谷から極めんとしたならばどうであらう、私等は先づ常願寺川方面では、藥師岳の絶巓からその西面に向つて薙ぎ落ちてゐる岩井谷の深谷につかねばならないであらう。

　立山村藤橋から立山温泉道を辿り、常願寺川の上流眞川湯川の合流點より、常願寺川本流の眞川に沿つて、數河谷の落口を横ぎり、村杉平を經て眞川の川瀬を溯り、岩井谷の落口に辿りつく。本流眞川に遜色がない位の岩井谷の深溪は、深林の欝蒼たる底を貫ぬいて落走する溪川の美は却つて前者を凌いでゐる。

　溯るに從つて谷は漸次に豪快の趣を呈し、巨岩の間を奔放する激湍、溪側を圍む闊葉樹の層翠は私等の行く手に展開される。



聖岳

　やがて岩井谷の本流と分れて、藥師本岳からくる嵓谷の急溪を登つて行くと、谷一杯に漲つてゐる鮮翠の間に殘雪は大雪溪となつて下つてる。山峽が天上に向つて開けると、當面に、殘雪と新翠とをふまへて、藥師頂稜の山濤が奔馬の如く現はれてくる。

　長い〱大雪溪を登りつめて、ザレにうつり、花野を縫つて、絶巓の宮に額き、その傍に立つて、黒部谷を渉つてくる長風に衣を打たせ、環繞の大觀に蕩然たるときの心地は何とも形容が出來ない。

　二日の間深谷に閉されて、森林や溪川の美を味ひながらも、自分達の目的にしてゐる山の爲に展望の美を遮られてゐたものが、僅かに山頂の一角に達したとき、私等の額を壓してゐた大嶂壁が脚下に沈むと、俄然自分を取り圍んで延展してゐる大山岳の壯

觀は、幕を切つて落された大ドームの下に展開される。その壯快、その喜悅は、縱走の旅に於て日々山上を見慣れながら行くものゝ感じとは雲泥の差がある。

然しながら、黑部川方面からこの山へ登らんとするものは、更に幾層の溪谷の變化と、山岳の複雜とを鑑賞し得らるゝと云ふことを忘れてはならない。

黑部川の源頭鷲羽乘越からその溪水について降り、祖父谷落口、五郞澤落口の快闊優美な谷沿ひの高原を中心とした景觀を收め、更に降つてアカギ澤の落口を過ぎて、カベケ原の大スロープの壯快な風姿に親しみ、藥師澤の谷筋に入り、太郞兵衞平より藥師岳を極めることが出來る。

黑部源流地のゆつたりした溪川を圍んで、雲ノ平、芋平、カベケ原、太郞兵衞平等の悠大な高原は、遠いなだらかな山側を自由に延びて、その上に鎖峙してゐる鷲羽岳、黑岳、赤牛岳、双六岳、蓮華岳、黑部五郞岳、上ノ岳等の雄大なる山岳の觀望は、隨分變化に富んだ、のんびりしたコースを私等に與へてくれる。そしてこれ等の高峯に登るによい、美しい支流は、黑部本流に向つて到る處に注いでゐて、私等の前に優秀な登高の道は自から拓かれてゐる。

黑部川の中流「平」方面から上流に向つて溯り、中廊下、奧廊下の境をなす金作谷の溪を登つて、藥師岳東面直下に彫鑿せられてゐる模式的の大カールの上に辿りついて、直ちに絕巓を極めるコースは、藥師岳登山としてはユニックなものであらう。

然しこれは溪谷が深刻であり、藥師岳の東面が複雜であるだけ、私等はその絕景をかち得る爲には、相當の努力と辛勞とを覺悟しなければならない。そして熟練せる山人の先導を條件としなければならない。

日本アルプス唯一の綱渡し場のある平ノ小屋附近の黑部川にも、今では釣橋が架けられてある、對岸針ノ木澤落口の廣場にうつゝて、針ノ木澤の丸木橋を渡り、黑部川の左岸につけられた東信步道を辿つて約二時間、東澤の落口上で東澤を徒涉して、濶葉樹の磧原を横ぎつて尾根の上りを約五十米突の崖側道にうつり、一高一低の步道を辿る。

やがて對岸にあたつて黑ビンガの岩峯が聳えてゐる。赤牛岳直下から黑部川へ灘ぎ込んでゐる口元のタル澤に出ると、その附近から廊下の深淀が青みどろのやうになつて深い峽隙に光つてゐる。

口元のタル澤を横ぎつて暫くすると、道は漸次に降りとなり、廊下澤落口の下手に到つて磧に降る。そこに泊場があるが藪が深くいぶせい所なので、更に磧に出で東信步道に合し、崖側を上り緩傾斜の細道を又川瀬に向つて降つて行くと、深い〳〵山峽を通じて、目的の藥師

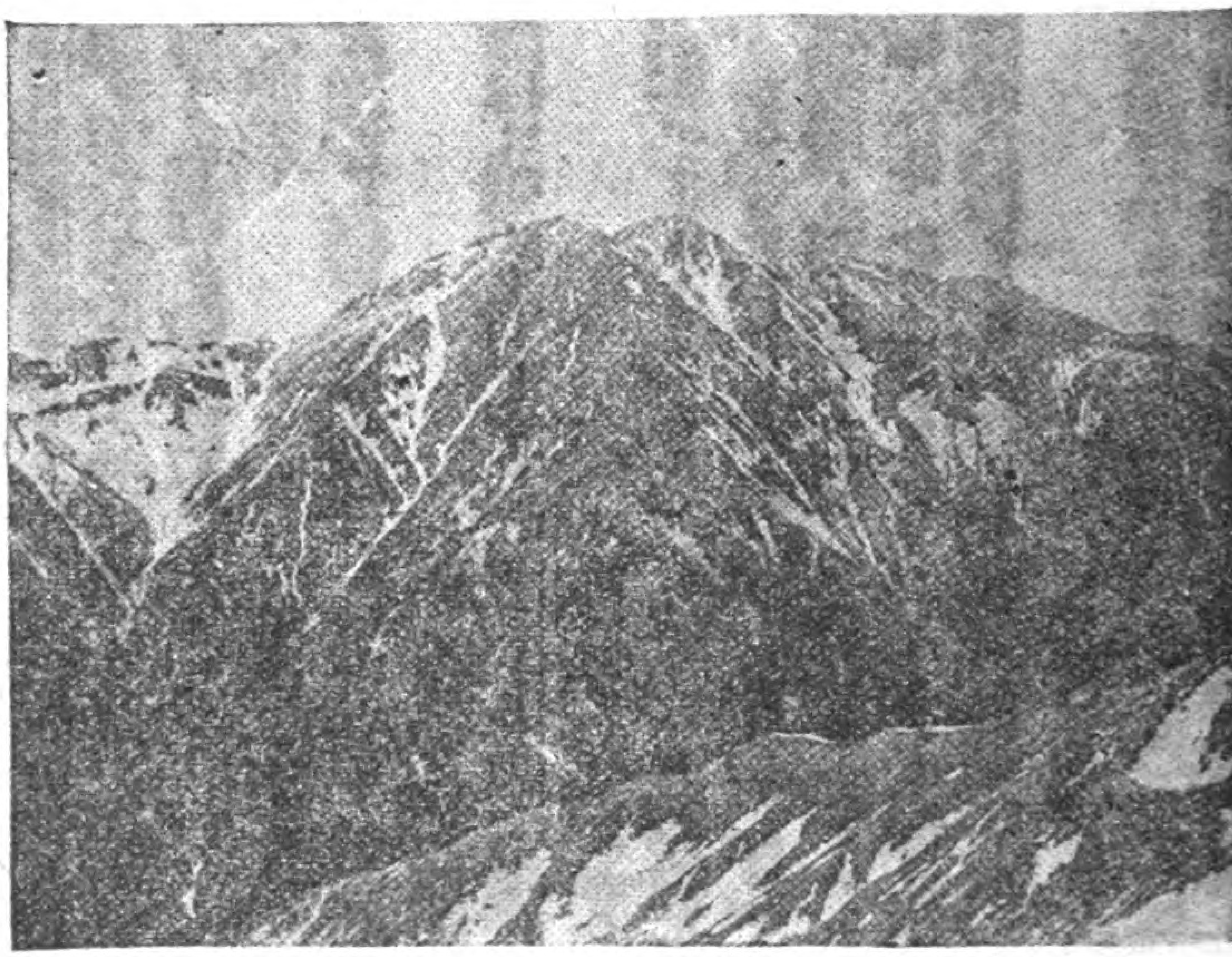
岳が現はれてくる。そして落葉松の森林の美觀はその附近の溪觀に光彩を放つてゐる。

東信歩道を捨てゝ濶い〳〵河原に向つて奔川を横ぎり、更に進んで快濶廣茫たる磧の中の砂地にキャンプ場を營む。

藥師岳の全容は上流を隔して高く蟠り、その立派なカールまで鮮かに仰ぎ見ることが出來る。この附近は中廊下隨一の好野營地で、平ノ小屋から略一日行程である。

この間は川瀬のみを通れば非常に愉快な谷渉りが出來る。平から東澤落口間の優美なる森林と淺流、快闊なる明るい感じのする谷筋、下の黒ピンガ下の狹流、口元ノタル澤落口附近の廊下狀の峽間とトロを過ぎると、川瀬は又闊谿となり、數河澤落口附近の闊い河原に到つて一日の行程は終る。これは勿論減水期を選ばねばならない。

更に上流に向つて進る。



赤石岳

數河澤の泊場から對岸にうつゝて進むこと數町、廊下はやがて嶮峻となり、道は右岸の岩壁の間に崖側を僅かに通じてゐる。一ヶ所鐵線がかゝつて約四丈の岩壁を降ると、岩の膝頭にボールトが打ち込んである。その先は中廊下の核心を爲す地點で、岩壁が俄然雄峻壯麗な趣をなし、峽流は深刻の岩壁の狹間を小きざみに曲折し奔落してゐる。

道は右岸の岩場を上り又高所を通じてゐる。對岸に上の黒ピンガの豪壯な岩峯を眺めながら細道を行くと、谷著しく左方に曲りやがて又溪側に近く道を降つてゐる。緑岩の角岩を積み重ねたまとまりのよい深い廊下の直上を辿つて段丘の上に降り暫く行くと、藥師岳から壯大な雪溪が降りてゐる。それが金作谷である。東澤落口からこの谷までを中廊下と稱してゐる

ので、この谷の落口から上流は直ちに奥廊下の域に入るのである。

戻つて數河澤落口から東信歩道を辿らずに川筋を溯つて行くと上廊下中で最も嶮岨であり、豪快雄大な溪趣を味ふことが出來る。上の黒ビンガを中心とした素晴しい廊下の壯觀は、下廊下の新越澤落口から下ノタル澤に至る深峽に比することさへ出來る。

この間は東信道を辿れば數河澤落口下の泊場から半日、川瀬を溯れば一日の行程である。

金作谷落口からその雪溪を上つて、藥師岳の頂まで半日にして達することが出來る。

この谷は藥師絶巓からくる雪溪と、北藥師からくるものと合する處で段を爲し、それから雪溪が急激となり、ある處では岩壁が露出し相當嶮峻の登りとなつてゐる。やがて藥師頂點直下の壯大なカールの上に上り、顧ると黒塊山岳、三ッ岳、野口五郎岳、烏帽子岳より針ノ木岳に到る連嶺、立山群峯、槍ケ岳、穗高山の壯觀などを、双眸の下に收めらるる。

大カールから數十分にして、藥師岳の最高點に達することが出來る。藥師の頂上を辭し太郎兵衛平の高原に降り、有峰の山村に出てその高原の風趣を賞し、和田川の深溪に森林の美觀を味ひながら千垣驛に下るコースは、日本アルプス登山路としては第一級のものである。

南の高山地方卽ち赤石山系にその例を取れば、私は先づ、赤石、聖、鹽見を中心とせる溪谷よりする興味ある旅程を推賞しなければならない

聖岳について云へば、遠山川最奥の山村、和田、木澤、下栗、大野の勝景に親み、遠山本流の川瀬に降り、北俣澤の合流點附近から、兎洞、易老渡、西澤渡に到る偉大なる溪流を溯り、聖岳を極めることがどれだけ愛溪登山家を喜ばすことか。そして大井川支流中の美溪聖澤を下つて、聖の大タル壯觀を恣にするコースの興味津々たることを思へば、上河内岳方面から山稜を聖岳に到り、兎岳を越えて行く縱走などは、全く物の數にならない。

赤石岳でもそうである。遠山川の北俣の出合或は兎洞から大澤岳に上り、若くは兎岳の鞍部に達して赤石岳に到り、赤石澤の深谷を降るか又は小澁川の溪谷を下る面白味は、山稜を行くものに比して、遙かに優れたる複雜なる景觀を私等に與へてくれる。

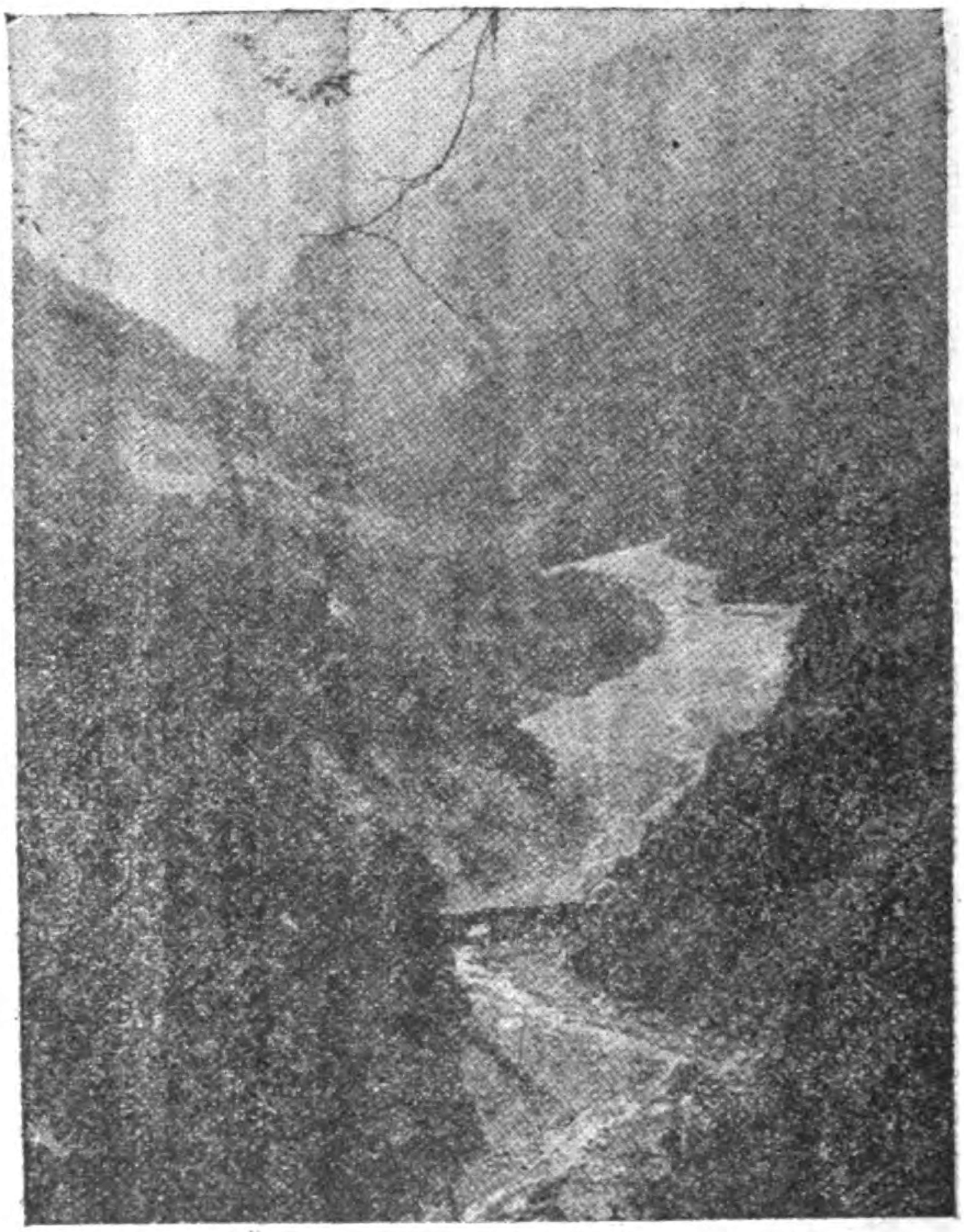
三峰川を溯つて鹽見岳を極め、更に小西俣によつて悪澤岳(東岳)、西河内岳(前荒川岳)を探勝して奥西河内を大井川に降る旅は、あの長い〳〵仙丈岳との間の馬鞍尾根や、西河内岳から小河内岳を經て鹽見岳に到る山稜を行くものよりも、遙に壯絶深奥の自然美を探り得る

ことは勿論である。

立山群峯を中心とせる、溪谷よりする登高については、餘りにその道筋が多く、美觀は踵を接して到るとも云へる位であるから、限りある紙面に於てそれを述ぶることは出來ない。

立山群峯への登山路、私は優に三十筋の立派な登山路を擧げるのに躊躇しない。そしてその大部分は溪谷について行くものであつて、殊に黒部川方面に於て、最も深邃豪麗なる溪觀を有するのを、私は誇とするものである。

御山谷の優美、御前谷の深刻、内藏ノ助谷の複雜、仙人谷の嶮岨、仙人ノ湯の奇觀、小黒部谷の幽邃等があり、而して劍澤の深刻豪宕に到つては、立山群峯を中心とせる溪谷美の壓卷である。



小澁ノ谷

劍ノ大澤、高さ四百米突を圍繞せるその廊下の壯觀は、飛水の偉觀、岩壁の峻麗は、斷じて日本隨一の風景であると、私は安心して高唱するものである。

歐洲アルプスについては、その地方を知らない私は、適切に消息を述べる資格はないが、大體登山についての交通に便なその山地は、溪流を溯り、森林を分けて登ることは少く、氷河を登り山頂に達することが多くの場合であると云へる。

日本の高山地方に比して遙に廣大の地域に亙つて、高さも優れ形も立派な多くのピークをもつてゐる歐洲アルプスの群山叢峯は、大氷河を以て彫飾せられ、到底日本アルプスに於て見ることの出來ない偉觀は到る處に展開されてゐる。

然しながら、高度に於て劣り、一の氷河をもたない日本アルプスにも、大アルプスを凌駕する程の特色は具備してゐる。

豐潤な森林、溪川の清絶がそれである。水蒸氣の濃密な我國の山地は、森林に潤ひがあるやうに、歐洲アルプスの如く氷河の移動作用によつて、砂礫の混交せる灰白色の濁水を流してゐる溪水に異なり、純美澄明の美溪に富んでゐる。

私は日本の誇とするに足るべき溪谷美を等閑視して、山上にのみ憧憬れて行く登山家の爲に、この點を特に注意を喚起したいのである。

丁度歐洲大戰の直前であつたかと思ふが、獨逸のある武官が、常念山脈から槍ケ岳へ上つて、梓川を上高地に降つた。歐洲アルプスに親んでゐる彼は、山頂の壯觀を左程賞美しなかつたが、梓川の川瀬を上高地高原に辿りついたとき、あの潤ひのある白樺や川楊の美林、清絶純美な梓川の溪流を眺め、その上に夕日に照り映えて行く穗高山の雄大、噴煙を一文字になびかせてゐる燒岳の怪偉な姿を仰いで、思はず帽子を振つて喜んだと云ふことである。

そしてその時彼はこれこそ本當の日本アルプスであると讃嘆の聲を洩したのであつた。

私はその話を聞いたとき、誠にこれあるかなと思つたのであつた。

そして却つて異國人の方が眞に日本の山水を見る眼を持つてゐるのを驚かずにはゐられなかつた。

兎に角溪流や森林を等閑にした、日本の山岳美觀は少なくとも私等には大きなギャップを感せしめずにはおかない。

寫眞を見てもさうである、溪谷の上に森林を通して見た大山岳の偉觀は、勿論各その特長はあるとしても、山稜のみ重錯せるものよりも遙かに魅力をそゝるのである。そしてそれは當然すぎる程、當然であると私は思つてゐる。

山の構造と地質の研究、さう云ふことに全く素人の私、何等基礎的知識をもつてゐない私でさへ、溪谷を辿るとき、樣々な石を集めて磧を爲してゐる邊を歩くときは、思はずその幾個かの石塊を拾つて、その岩質を比較し研究して見たくなる。そして源流地の山々を登りその山々を構成してゐるものと同質であることを知るとき、ある程度の滿足を覺える。從つて溪谷山岳の構造を知らんとする慾望も自から生じて來る譯である。

私は所謂專門大家と謂はるゝ人達の多くが、日本で最も大いなる山岳地、日本アルプスの地質でさへ、構造でさへ、躬自ら精密に調査し

たもの丶あるのを聞かないことを甚だ不思議にも亦遺憾にも思ふものである。

私等は溪谷を辿るとき、兩岸を埋めて繁茂してゐる森林の美觀に原始的の情景に接する。

林相の整美、それこそ谷渉りの者の目を喜ばす最大な魅力でなければならない。落葉松、黒檜、栂、樅、白檜等の集團せる美林を辿るとき、私等はその樹木の特長と美觀とを味ひ、自然の大いなる心やりを知る。

川楊の美、栂、桂、七葉樹、楢、白樺、楓などの錯綜せる濶葉樹の春秋の光耀は、私等を有頂天にせずにはおかない。

木々の特質美を知ること、その綜合美を觀賞することは、溪谷跋渉者の必然的に貪り得べき享樂の大いなるものである。

谷渉り即ち溪谷の跋渉は溯行がよいか下降がよいか、これは可なりむづかしい問題であつて、個々の溪谷によつてその趣は異つてゐる。從つて一概にこれを述べることは、多くの場合獨斷に失する惧れがある。

行程の進渉に伴つて山上の雄大は益々近づいてくる溯行の旅は、漸次に自然美の中樞を脱して、人寰に下つて行く下降の場合より、勿論遙かによい譯である。そしてこれは何人も異論はあるまい。

然し少なくとも私一人の經驗では、下流から上流に雪山を眺むることよりも、寧ろ上流から下流を望みその落差の美にひたる方が面白味を感じ、溪流の壯大さを感ずることが多い。

山上から降りてくる幾多の尾根が、丁度扇子の骨がその要に集まり、つゞめられて行くやうに、谷底に向つて集まつて行く。その焦點に於て溪川は惜くも姿をかくしてしまう。その先に如何なる情景が、どんなに素晴しい谷の美觀が私等を待つてゐるかと思ふと、私等はたまらなく心の踊躍を感ずる。そしてその方へ吸ひ込まれて行く自分の身體をどうしやうもない。

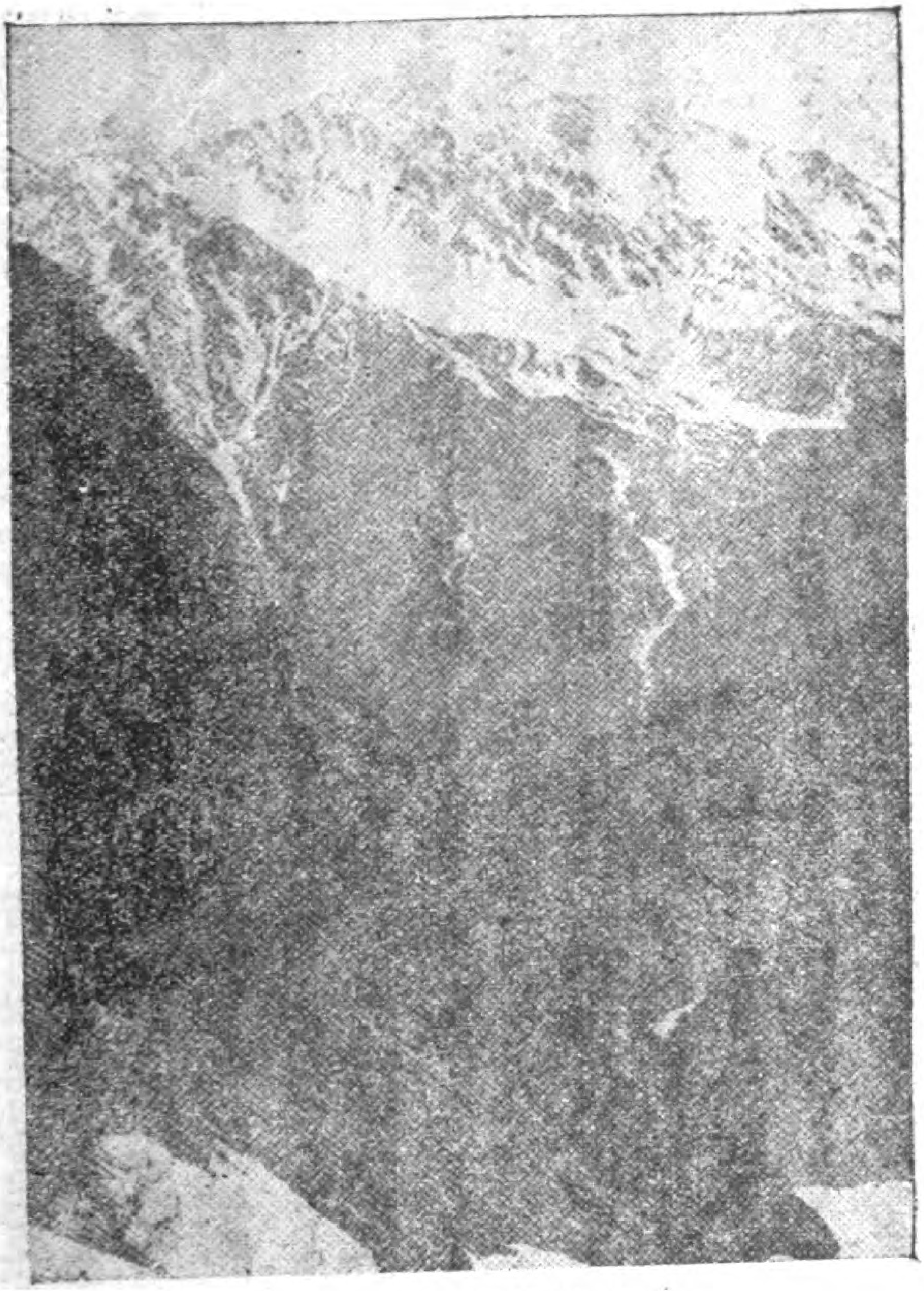
これは殊に山岳縱走の場合に於て、行くさきざきが明瞭に眺め得らるゝものとは全く極端なる趣を呈してゐる。溪谷に對して神秘的の感を深からしむる大なる理由がそこに存在するのではないか。

まざ〱と眼前に發舒せらるゝ、流水の姿態、落差の美、谷筋の川瀬の曲折と抑揚を最もよく味はへるのは下降の場合を最とする。

私等がある一つの雪溪を登攀する場合、その傾斜の急激なるを左程感じない時に於ても、或程度まで登つて下流を顧みるとき、その俯角

の案外大いなるのに驚くことが常である。溪流を溯るとき、川床の激甚なる勾配に氣づかずに進むときにも、一度下流を顧みるとき、落差の激甚なるのに驚くことは屢々である。而も溪水の落差の美、川床の斷落の壯、山上より谷底に向つて集中せらるゝ幾多の尾根の錯綜せる雄大さは、谷渉りのものゝ最も深い魅力を感ずるものであるから、私一人の考では溯行よりも下降をよいと思つてゐる。

溪水に隨つて降ることそれが谷渉の眞の趣味ではあるまいかと私は思つてゐる。谷は溯るべくして降るべからずなどゝ云ふことは私には何の意味を爲さない言葉である。



立山本峯とタンボ澤

次に谷渉りの季節について少しばかり述べて見やう。谷渉り卽ち溪谷の跋渉は何時がよいか、それには勿論夏期が最もよい筈である。

溪水の中にあつて流水の姿態を眺めること、岩壁、森林の美を觀賞すること、瀞淀を徒渉し、川瀨や磧をさまよつて、上下流の山々を溪川に集中せしめ、それを全體の景色として眺むるやうな自由な谷歩き。

一言すれば、流水の只中にあつて水に親み、大自然を觀賞することは、夏期獨特の享樂であつて、他の季節に於ては到底痛切にこれを味ふことの出來ないものである。

春は水が多い。秋は水が冷い。冬は不可能である。

渓側の歩道の多く殘雪に埋めつくされてゐる春は、崩雪、崩石の爲危險を伴ひ、山上は自由に殘雪の上を辿れるときでも、谷底は跋渉不可能の處が多い。殊に黑部川の廊下のやうな絶嶮では全く手の下しやうがない。

然し山々の殘雪の美觀、谷々の新綠の優麗は、この季節の谷渉りの最もよく味へる特色である。

秋は山上は新雪に脅かされるので縱走は困難である。然し渓側の岨道にはまだ雪が降りてゐないので、自由に歩くことが出來る。草は凋み倒れ、木の葉の疎らになるこの季節には、岨道から渓流を縱觀するのに最も都合がよい。然し谷水は寒冷にして案外多く、徒渉は非常に困難である。

晶燦たる新雪に浴した連嶺の威容、霜葉に埋めつくされてゐる紅葉の美觀は、何してもこの季節以外には味ふことが出來ない。

冬期には枯林の間から、或は蒼林の上を壯嚴なる冬山の姿を見て喜ぶ私等も、渓谷跋渉によつてその山々を極めることは不便になる爲、私等は勢ひ尾根や山稜について行かなければならない。從つて谷渉りの興味は多くの場合沒却せられ易いことも已むを得ないのである。

渓谷よりする登山では、多くの場合泊場を谷間に求める。山上の吹き曝しに野營をすることに比して、風當りの少い谷筋には、流木や枯木などの燃料は到る處にあつて、暖をとり炊事をするのに充分であつて、雪を溶かし偃松で炊いたまづい飯を啖り込まずに、淸冽な谷水と、豐富な燃料とによつて、都會で食する以上の美味の飯を炊くことが出來る。

釣り上げたばかりの潑溂たる鮎の美味、ウドの芳烈な香り、蕗や筍などの軟かな谷の味を試みることも谷旅に附隨した大きな享樂の一つである。

食物の美味に誘惑せられて、私等は思はず數杯を過ごすことが常である。然しながら食物の甘味からくる食慾の增進によつて、私等は體力の減退を防ぎ、慰安を得ることは實に偉大なものである。

山上に野營することの多かつた旅から都會へ歸つたときには、美味に飢へて美食を漁る習慣であつたが、谷旅をするやうになつてからと云ふものは、更にそう云ふ傾向を示さなくなつた。これも谷渉り禮讚の理由の一つである。

明月に輝やく前川の美しさ、夢のやうな大渓谷の景趣、樹間に閃めく星華の光りは私等の心を冥想の境に引き入れる。谷間を流れてくる朝夕の霞や霧の蕩漾、その中に模糊として隠見して行く谷澗森林のトーンは私等の前に限りなき詩の國を展開する。

岸邊近い美しい砂洲の上にキャンプを營み、渓聲に耳を傾けて眠につく。その氣分は何とも云へない。晝間間斷なく動きつゞけた私等の四肢は打ちくつろぎ、リズミカルの渓聲の愛撫に私等の神經は完全に鎭靜せられ、丁度赤兒が子守歌で知らず知らず眠に入るやうに、陶然として宵の國にさまやうのである。

安眠を貪つた私等は、やがて曉をつぐる無數の小鳥の奏樂に、美しい夢の國から樂しい現實の境に誘かれて行く。

森林の隙間洩る美晴の光り、朝暾に映じてゐる雪山の色彩などを眺めながら、清麗な水を掬んで嗽ぎ、愛すべき山人達と、焚火を中にして朝飯につく。その氣分は到底山上の旅にては味へない快樂と閑寂と餘裕とをもつてゐる。

以上私は渓谷の趣味について卑見を述べて見た。紙面に限りがあり、生憎と落ちついて書く日子を持たなかつた爲に、まだ書きたいと思ふことも殘つてゐるし、書き落したこともあるやうであるが、それは他日を期して又發表するとして、本稿はこれで擱筆することゝする。

# マッターホルンの麓

浦松佐美太郎

村の北のはづれから、風に騒ぐ小波の様に、チーゲ（山羊）の鈴の音が、高く低く響いて來る。南へだらだら上りになつた、たつた一本しかない村の通を、牧童に追はれつゝ、チーゲの群が進んで來る。兩側の家の間から、一匹二匹、

ひよいひよいと現れては、此の仲間が殖えてゆく。鈴の音は益々賑になる。からんころんと忙しげに鳴る鈴の音が、村の南のはづれて消えかゝると、教會の鐘が鳴り出す。ツエルマツトの朝が始まる。

教會の塔の先が、朝日にきらりと光る。さすがカソリツクの所から、教會のお堂だけは、こんな山奥の村に不似合な程大きい。併し、釣合が餘程生臭と見えて、周圍との調和とか、建物の美しさとかを、少しも考へてない、大篦棒な品物である。

兩側から谷を押し狹める樣に、差挾んでゐる高い崖に切取られて、青空が、南から北へ細長く流れてゐる。北の方は、谷が東へ曲つてゐるので空がそのまゝ窄まつて、僅かに崖の背越しにテツシユ（四四九八米）、ドーム（四五五四米）の頂が、ちらりと見えるに過ぎない。南の方は、大きく谷が開けて、遙かに氷に包まれた眞白な山並が見渡せる。稍々低く窪んでゐる所がテオドウルの峠だ。峠の向ふに伊太利の空がのびのびとしてゐる。

地の底から生え拔けた樣な、マツターホルン（四四八二米）の大きな姿が、たゞ一つ北の大空に聳えてゐる。茶褐色の岩肌にまだらに殘つた白雪が、朝日に眩ゆい程爽かに輝いてゐる。

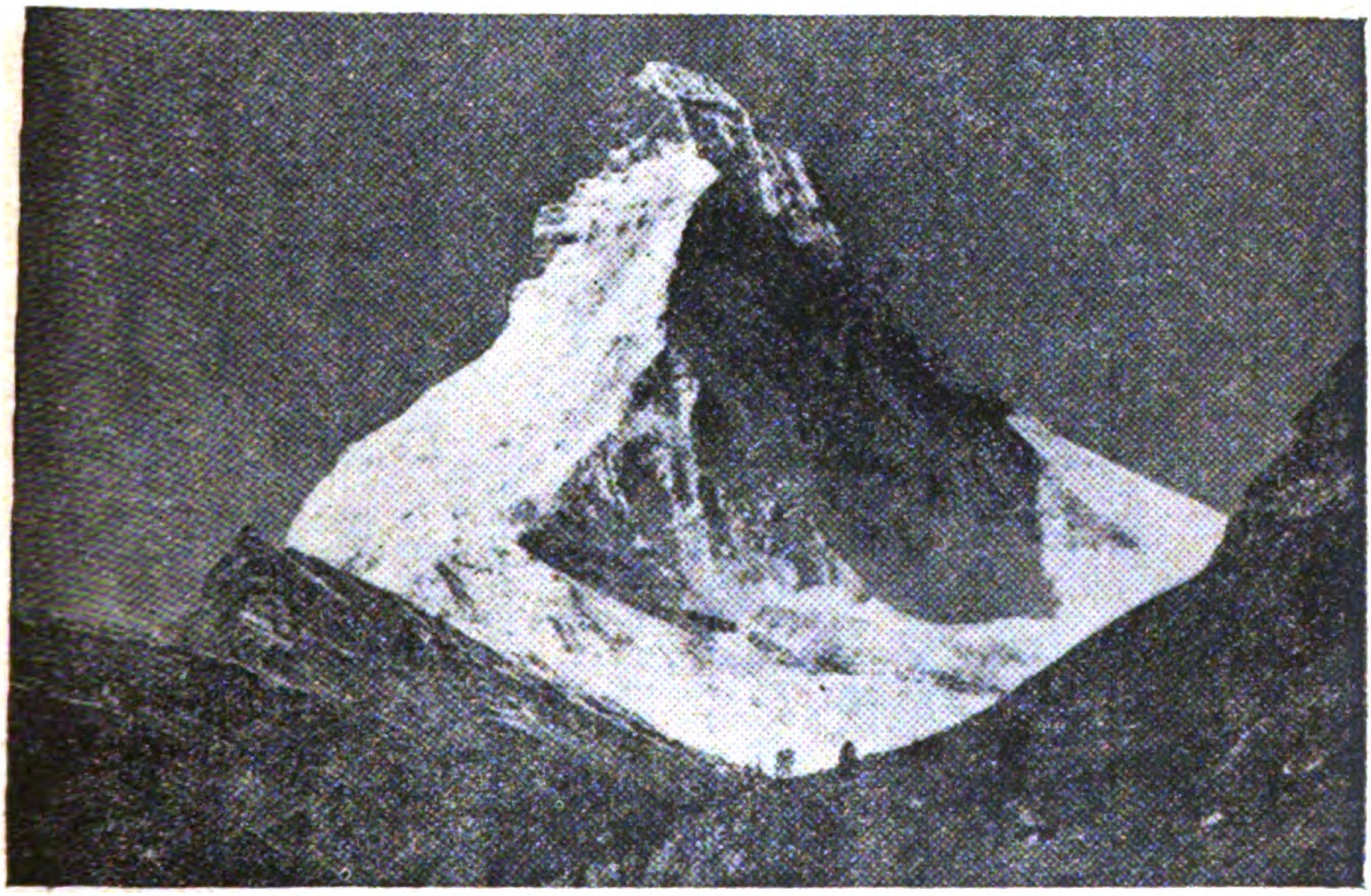
思へば此の山一つの爲に、幾萬の人が此の谷へ、自然への限りない憧れに驅られて、入つて來たことか。それ程底知れない力を以て、人の心に迫つて來る。美しいの一言だけでは言ひ盡せない、力強いと付加へても尚足りない。はつきりと大空に、鋭い直線で描き出す二本の山稜の上に、ゆらぐ光を見るがいゝ。青でもない、緑でもない、身も魂もその中に熔し込んで、空高いあの岩の上に、しがみつかさずには置かない、不思議な光が燃えてゐる。

朝飯の終る時分になると、村のあつちからひよこり、こつちからひよこり、パイプ咥へてワリスの服にワリスの帽子といふいでたちの、がつしりした男が現れて來る。落ち付く場所はきまつてる。ホテルモンテローザの向ふ側の石垣の前。朝日を一杯に受けたホテルの壁には、ウヰムパーの記念像が黒々と輝いてゐる。ウヰムパーが初めてマツターホルンへ登つた時の話なぞ、今更らしく此處へ書く要もあるまい。

シーズンの盛りのツエルマツトには、瑞西だけではない、佛蘭西からも、伊太利亞からも、一流の山案内が集つて來る。山にゆかずに殘つてゐる其等の連中が、きつと毎朝此處へ寄り集まる。之等の山案内の、ひとりひとりを捕へて聞いても、面白い話が數知れず出來やう。それ程に皆が逸話を持ち、アルペンの歴史に輝かしい何頁かを持つてゐる。ツエルマツトの夏は、山案内だけから見ても壯觀だ。もう一つ此の連中の集る場所がある。それは道を今少し停車場の方へと下る。

有名な靴屋のブルゲネルの前を過ぎて、ごちやごちや並んだ何軒かのよろづ屋を飛越すと、ホテルモンセルバン。此處の前にも十人二十人、ぼつりぼつりと集つて來る。垣根に凭れて、パイプの烟を呑氣さうにふかしてゐる。ツエルマツトの山案内はカソリツクだから、日曜には山へゆくことが出來ない。だから他所から來た連中が、日曜にマツターホルンへでも登らうものなら、村にたつた一つの大きな望遠鏡のまはりに集つて、なんのかんのと批評を飛ばしてゐる。

ホテルの朝飯の終る頃になると、やれトーマスクツクの、やれアメリカンエキスプレツスのなんて觀光團の連中が、一目でそれと知れるいでたちで、お辨當とステツキと寫眞器



ツエルマツトより見たるマツターホルン

をぶら下げてぞろぞろ町へ流れ出て來る。騾馬に乘つてはしやいでゆく連中なぞ、如何にも面白い。シユワルツゼーへ、ゴルネルグラートへ、プログラムはおきまりである。

ゴルネルグラートへは、村の停車場の前から出る登山電車で登る。恐らくアルプスの展望臺として、一番いゝ所の一つだらう。廣漠たる氷河を前にして、それを取圍む、モンテローザ(四六三八米)、リスカム(四五三八米)、ブライトホルン(四一七一米)、マツターホルンの大きな眺めは、あらゆる人に耐え難い魅力を感じさせるであらう。月のいゝ夜に此處へ立てば、山を愛する者は泣き度い程、感情の差し迫るのを覺えるだらう。

**マツターホルンの直ぐ足許にある**

小さな池、シュワルツゼーもいゝ。池のほとりに、サンタマリアを祀るいとさびたお堂がある。此處から見たワイスホルン（四五一二米）、ダンブランシュ（四三六四米）の三角形の山稜を描く線は、惜い程透きとほつてゐる。

プログラム通り此處らを見物した連中は、一廉のアルプス通になつて、谷を下つてその次の日程の場所へと旅を續けてゆく。夏のツエルマツトは此の入代り立代り山を見物に來るお客で賑はつてゐる。

ツエルマツトの麓の次の登場者は山へ登る連中だらう。ホテルモンテローザ、山へ登る人達に依て見出され、山に登る人達に依て大きくなり、今も山へ登る人達で夏中一杯になつてゐるホテル。其處の前に道を挾んで並べられた椅子の上に、各國から集つて來た連中が、日向ぼつこに出て來る。お互同志の挨拶、山案内とのお早う、ひとしきり賑かになる。山案内とプランを語る者、山から下りて來た眞赤な雪焼の顏をのびのびさしてゐる者、如何にもツエルマツトらしい氣分になる。今日、山の小屋へ發つてゆく者は、山へ持つてゆく品々を買準へるのに忙しい。靴屋の前には、修繕に持込まれた靴が山と積まれてゐる。釘を打つ音が、耳を傾けてゐると如何にも氣持いゝ。午近くになれば、山へゆく連中が磨き上げたアイスアックスを小脇に、ふくれ上つたルックサックを背負つて思ひ思ひの方向へ出掛けてゆく。こつこつと鳴る靴の釘の音が、見送る者の耳にも緊張して響く。

ツエルマツトの山と云へば、四千米以上の山だけでも三十を越えやう。山の名を全部擧げるとなれば、片假名でぎつしり埋めても何頁かにならう。併し何と云つても一番有名なのは、マッターホルンに違ひない。

マッターホルンは孤立してゐるだけに、よく雲を捲く。獨逸の言葉では山が煙草を吸ふと云ふけれど、激しい日には、下から眺めてゐても、ごうごうたる音が耳を打つと思ふ位に恐ろしい勢で、雲がまるで黑煙の様に、あの光つた頂上あたりから大空目がけて流れてゆく。私がツエルマツトで買つた山の手帳の扉にも、こんな事が書き付けてある。

「千九百二十七年八月十五日瑪利亞昇天節にツエルマツトにて購ふ。北西の風強く、雲は眞白なるマッターホルンの肩より、峠の彼方伊太利亞の空へ、物凄じく吹き流されてゐる。」

その年松方と二人マッターホルンを、ツムットの山稜から攀ぢて伊太利亞へ下つた時も、ひどく風に吹かれた。朝の一時に小屋を出て、間もなくしてから吹き始めた風は、頂上を越えて伊太利亞側へ下りる迄吹き荒れてゐた。頂上の近くでは、息を吸ふ爲に岩陰に顏を時々突込まなければならない程、猛烈な風だつた。風に吹きちぎられた雲の

合間に透かし見た、伊太利亞の谷の緑は、夢かと思ふ程美しかつた。

ヴアルトウルナンシユ側の裾を廻つて、フルックの峠を越えてツエルマットへ歸り着いたのは翌日の午前一時に近かつた。疲れ切つた體を床に横たへると、そのまゝ午過ぎる迄ぐつすり寢込んでしまつた。直ぐ前のホテルツエルマッターホーフの庭でやつてゐたお茶の音樂を、疲れた頭に、幸住むと人の云ふ山の向ふのその向ふから、風に流れて來る音樂の樣に、床の上でうつゝともなく聞いてゐたのを思ひ出す。午後のお茶と云へば、ホテルモンセルバンの前のお菓子屋の庭がいゝ。山から歸つた日なぞ、大きな華美なパラソルの下で、いゝ音樂に耳を傾けながら、お茶を啜る一時は樂しい。雪と氷と岩と、色にすれば白と黑との、その大きなうねりの上に果てしもない大きな青空が擴がつてゐる。その中で、自分の持つあらゆるものを、最後の零になる迄投出して、敬虔な氣持で彷徨つて來た山の一日を思ひ返す。吹雪に散々に打ちのめされて歸つて來た時でも、思出は何時も樂しい微笑になる。

マッターホルンが男性的とするなら、線が細く女性的に美しいのはワイスホルンだらう。ランダの村からワイスホルンの小屋へゆく途中で、石なだれに脚を折られて倒れてゐた羊を、いたはつてやつた。傷口を路ばたの清水で洗つてやりながら、山にゆく友達がなだれにやられたのを、介抱してゐる樣な氣持になつた。

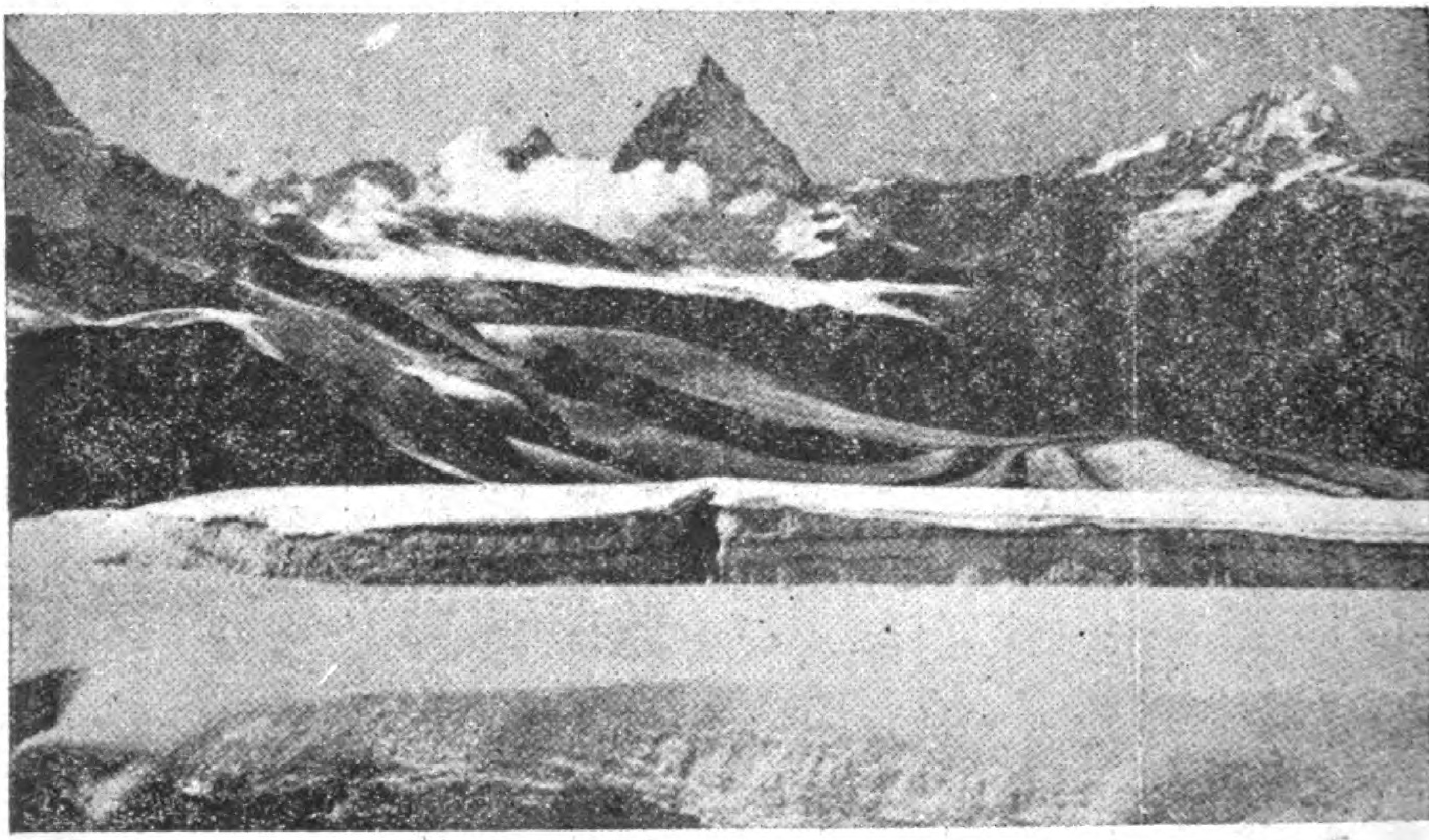
去年ダンブランシユをチナールの谷から登つて、ツエルマットへ下つて來る時、すつかり夜になつてしまつた。靜かな谷の夜を山から下りて來る時、自分の靴の音が此の上もなく親しまれる。白い沫をあげて流れてゆくマッテルヴイスプの岸を、眞暗になつてから、重い靴を引きずる樣にして下つて來る時、通りすがりにぷんと鼻をついた乾し草の匂が、疲れた體の隅々に沁み渡る樣に覺えた。今もあの隅に乾き切つた、アルプの秣の爽な匂を懷しく思ひ出す。

ツエルマットの村は、昔のまんまのお百姓の家と、新しく出來たホテルとが、軒を並べてゐる所が面白い。白木造りのシヤレエの羽目板が、古くなつて黑光りしてゐる。その窓ぎわにならべられたチエレーニアムの赤い花、お坊さんの家の古い古い壁の畫、二階から往來へぢかに下りてゐる曲りくねつた石の梯子段。皆古いツエルマットの匂を豐かに漂はしてゐる。ドレッスで晩餐の食卓についた、そのホテルから一足出れば、それで私達はもう古いツエルマットの空氣の中にゐる。ツエルマットが人の心を惹く一つのわけはきつと其處にもあらう。

少し丘を登つたウインテルマッテンの上にある、古さびたマリア樣のお堂から眺めた、マッターホルンは美しさの限りとでも云はふか。時を知らせる、お堂の上の鐘が右に左にゆれる。その向ふにマッター

ホルンが靜かに靜かに浮んでゐる。更に登つてリーフエルアルプ迄ゆく。道を挾むアローラ松の枝をすかして仰ぐマツターホルン。山の好きな者なら誰だつて眼頭の熱くなるのを感じるだらう。

私の好きな所がもう一つある。ツエルマットの村を外れて、ツムットの奔流に沿ひながらシエーンビユールの小屋へ登つてゆく。暫く松と杉の林をゆくと、やがてツムットの村に出る。雪崩の通る道を避けて、青々と牧草に蔽はれた崖鼻に、二十軒程の家が小さな禮拜堂を眞中に、こぢんまりと集つてゐる。それを通り越すと、ツムットの氷河が廣々と擴がつて來るのが見える。その向ふの大空に、マツターホルンの北の全面が、大きく大きく浮上つて來る。其の崖道の曲り角に、小さなあづまやがある。入口にチーゲの鈴がぶら下げてあつて、御用の方は之を



モンテローザの氷海

鳴して下さいとある。からんからんと紐を引けば、崖下の石で積み上げた牛番小屋から、大きな山靴をはいた婆さんが御用はと出て來る。空一杯に溢れる光に、マツターホルンの氷の斷崖が、きらりきらりと煌いてゐる。氷河を渡る風に汗ばんだ頰を吹かせながら、しぼり立てのミルクを味はふことが出來る。秋晩く山から下りて來て、此處を通りすがつた事がある。鈴も看板も皆取片付けられてゐて、もう駄目かなと思つたものゝ、殘り惜しくてエミールと二人で崖の上から怒鳴つたら、何時も見る婆さんの、赤いハンカチで髮を後へぐつと結はえた頭が、牛番小屋の屋根の下から現はれて、日に燒けた顏が笑ひながら上を仰いだ時は占めたと思つた。

ツエルマットの谷へ落ちて來る氷河は實に大きい。モンテローザから、ぐらつ

と大きな牛眼を瞠いてマッターホルン迄、氷の海とでも形容したい程一面に氷に閉ぢ込められてゐる。その上に斜めに陽を浴びて、静かに微笑してゐる雪の山々。モンテローザ、リスカム、ツヴイツンゲ、ブライトホルンの姿は如何にも粋だ。それに比べて、ツエルマツトの後の方に聳えてゐる、ワイスホルン、チナールロートホルン、オーバーガーベルホルン、メンブランシユなぞの大きな岩を彫つて造り上げた様な姿。あの岩肌を見ただけでも、思つただけでも、岩の割目をしつかり掴りしめて。あのかりつとした岩の上を、思ひ切り攀ぢ登りたい気持にわくわくさせられる。

　氷河から融ける氷は、ヴイスプの河となつて、ツエルマツトの谷を落ちてゆく。岩の上に踊り上つて、岸に音立てゝ飛んでゆく。此の谷の流れの壮観さには、ツエルマツトへ登る汽車に乗つた人達が、先づ第一に目を瞠らされる。谷を駆け落ちた流は、ローヌの谷に出て本流と一緒になつてヂユネーブの湖水へ流れてゆく。ローヌの谷はすくすくと生ひ立つたポプラの並木道が美しい。その両側にはワリゼルワインで名高い葡萄畑が、一面に拡がつてゐる。シムプロン急行が、此の谷の向ふ側をカンデルステーキへと、大きな電気機関車に引かれて走るの様に走つてゆく。ツエルマツトから帰る時、此の汽車の窓からローヌのポプラの並木の頭を越して、真白な山を眺めてゐると、何時も何か一番大事なものを置き忘れて来た様に思へて、汽車がトンネルに入つて景色が全く変つてしまふ迄、窓を離れる事が出来ない。ツエルマツトは、山も人もワインも皆いゝ。

陽がマツターホルンの向ふ側へ落ちると、深い谷だけに日の暮れるのが早い。テツシユとドームの頂に未だ陽が赤々と燃えてゐても、谷はもう暗くなり始める。教会の後を川岸の方へ、少し下りると墓地がある。幾人かの、山に心も身も捧げ盡してしまつた人々の魂が、此の山懐に抱かれてゐる。岩を噛む谷の流が直ぐ下に聞える。振り返ると、周囲の空は水の様に淡く、燻銀の様に輝いてゐる。マツターホルンが黒々と浮影の様に、輪廓の一々の細い線までもはつきりと見せてゐる。ホテルの窓にぽつりぽつり灯が入り出す。一杯のワインに上機嫌になつた靴屋のブルゲネルが、店一杯に歌ひ出すヨーデルの張り切つた声が、一本しかない村の通りを、北から南へつき抜いてゆくのも此頃である。村の酒場から、手風琴でかなでる楽しげな踊の音楽の、流れて来るのも間もなくである。

　からんころん、チーゲの鈴の音が聞え出す。[illegible]アルプへ行つたチーゲの群が帰つて来るのだ。村の通を下りながら、自分自分の家へ群から離れて帰つてゆく。やがて村のはづれとなれば、一匹のこらずゐなくなつて、鈴の音もはたと止む。高く低くチーゲの鈴の音が、村を遠

り過ぎてゆく。空を仰いで星が光れば、山にある人々に、幸多かれかしと祈る時である。

四、五、二一。



# 富士の冬

槇有恒

二月の或夜私等は富士の五合目の石室に泊つてゐた。

何の爲めにと聞かれても答へやうのない山の誘惑に本氣に引き付けられて、住居を背負つた位の満足で着物も食物もそして其上に纐やかんじき等の七道具までルックサックに詰め込んだものだ。その中から取り出して、之れに縋れば寒さがかんかん音して跳反へつて終うなんかと自惚れて潜り込むだ寝袋。だが袋は薄つぺらなもので皆蓑蟲然と轉つてゐる。石室の外には吹雪が激しかつた。山腹に狂亂する冬が、私等の僅かばかりの命や火を見付け出して、一撃の下に粉砕爲やうと鬨聲をあげて小屋に衝たつて来る。その度毎に細い雪が何處からとも無く吹き込んで蓑蟲共は眞白だ。誰れかゞ零下二十二度だよと云ふ。あゝ寒い譯だと皆んな承知をする。思へば二日前には事務所の机に向つてゐたんだが、それも遠い十年前の生活のやうに消えて、今は蠟燭の光に照らし出された此小さな世界だけだ。鮮やかに浮き出た此雰圍氣が山友達と云ふのであらう。誰れかは歌つてゐる。一人は蠟燭の焔を見詰めてゐる。焚火の勢が衰へて行くやうに私等は朧な眠に落ちた。

年の若い仲間が――山では年の若い者程先きに立つて働くと云ふ規律が在るのであるが、朝の二時半頃には跳ね起きて先づ靴を穿き丹念にゲートルを巻きつけた。身拵へを済して焚火を盛んに燃やしてゐるその音に、一人二人と眼が醒めて天氣は何うだと聞く。四時半石室の外へ小さな口から這ひ出る、外は沈痛な程靜かに空も山も凍りついてゐる。昨夕吹き荒んだ吹雪が何もかも敲き固めて終つて、空氣までも水晶のやうに硬く冷い。見上げると長大な斜面が星の世界にまで突き込んでゐる。頂から一途に下るその蒼白な斜面が下に[illegible]つて幾條か

に較れてゐる。その端の雪の消えた邊りから暗褐色の緩いうねりが擴がり出して、廣大な裾野を形作つてゐる。裾野の闇の中には彼方此方に掃き集められたやうな燈の光が群つてゐる。かじかむで蹲まつてゐる村や町なのであらう。

私等は各々に定められた順に從つて同じやうな調律と間隔とを持して一列になつて登り出した。綱を背負つてゐる者もある。魔法瓶の大きなのがルックサックから頭を出してゐるのもある。厚い防寒具に顔まで包んだ人影が、幾個かのランプに足元を照しながら悠然と登つて行く。やがて足元の雪に明るさが差したかと思ふと、東に棚引いた大陸のやうな雲の上が朗かに明け出した。見る間に重い夜が消散して早い光が頂を染めた。そして伊豆の海も、山中の湖水も、輕ろやかに光り出した。私は今雲端を上つたばかりの目映い太陽に向ひ瞑目して暫一杯に息を吸つた。光だ、そして此廣大にして清冽な空氣だ。オロマニヤに罹つた患者達は初めて爰に魂が落ち付くのを感ずるであらう。

六合目八合目の雪に埋もれた小屋を經て九合目に達した。手に取るやうに近い頂上の一端から雪煙が昇つてゐる。強い風が私等にも襲ひ掛つて來た。咄嗟に氷斧(ピッケル)を強く打ち込み身體を伏してどつと當る力に耐える。數歩を進める。また風が來る。それに雪面の凍結がかんじきの歯を跳ね反へす程に硬い。氷斧を振ひ出した。一足毎に足場を切つて行く。遲々として進むのだが激しい勞働だ。息が切れる、汗がにじみ出る、一列に綱で結び合つた誰れもが同じやうに一歩を吊つては次ぎの一歩を構へる。懸命な重い歩調だ。斯うして登つてゐるときは辛苦な時だ。だがその辛苦の中から何かしら解放されて行くやうな爽かさが湧いて來る。自分達の小さな立場を守り乍ら渾身の力に働いてゐるのだ。堅く信じてそして生きてゐる時なのだ。模糊の中に求めてゐるものが現實になつて來るやうだ、

頂上に着いたのは九時頃であつた。何の石室も吹き溜りの雪に半ば埋められて、全容を顯はしてゐるものは一つもない、たゞその前の鳥居だけが一つ雪の上に建つて風をうけてゐる。

巨大な火口を廻る劍ヶ峯を始めとした外輪山も、或は又火口壁も堅く凍結して荒寥たる眺望である。不穏な黒雲が一團又一團と大日あたりから吐き出されて、高い空を渦卷いて馳つて行く。風は谷々強さを加へ天氣の變調の兆が明瞭になつて來た。幾分間か極めて短い時を過つて、私等は直ちに下山の途に就いた。再び身體を一本の綱に繋ぎ合つて—登りにも繋ぎ合つたが、之れは急傾斜面を上下する際に萬一足を滑らして轉倒するやうなことがあれば引止める爲めである。鳥居を抜けて一目天上界より下界にまで續く雪の斜面を一直線に下り出した。友の歩調が頗る早い、喜びに躍つてゐるやうだ。自由な而も確實

な力の入つた脚が雪を蹴り氷を碎いて馳けるやうに下る。頂上に眺めた天氣模樣は私等の速度よりは遙かに早やく飛び被さつて來た。小さな龍卷を其方此方に卷き起しながら激しい吹雪が寄せる。再び五合の石室に辿り着いたのは十時頃であつた。火を燃し湯を沸かしなどして始めて寛いだ氣持になつて食物も充分にとつた。思ひ出話や戲談の笑ひさゞめきの内に、繩を卷き直して居る者もあれば、パイプを長閑に燻らしてゐる者もある。一通り休憩を得て寢袋や其他重々しい防寒具などは皆ルックサックに詰め込んで小屋の始末をした。

冬の登山の特色の一は荷の重いことだ。登りにも下りにも大した相違の無い重い荷を背負つて歩かなければならない。五合の石室を後にして私等はピッケルを小脇に抱へて終つて歩いてゐる樣はすつかり調子を落した戰後の氣分であつた。又自然其ものも三合目邊を境界として冬の厳しさが急に薄らいで終ふ。二合五勺の邊りであつたらうか雪中登山と印刷したお札が數枚雪の中から現はれてゐた。須走口の此二合と三合の間は最も壯大な雪崩の掛るところと思ふ。殊に晩春の登山には注意を要することゝ思つた。やがて氷と雪と岩とのみの境涯から、靜かな森林の中を一筋に下つた。冬枯の林には鳥の聲一つ聞かず、時折梢に風が鳴るばかりであつた。

山頂には今も四大が離れ合つて荒んでゐるであらうか、林の中には幾千萬と數限りの知れない生命が穩やかに春を待つてゐるのだ。沈思して長い冬を忍んでゐるその中を、私等の一行が假令寒氣を剛したとて、それも暫時で又深い靜寂が永く亘つて人つ子ひとり通らない。須走の宿に午後二時頃歸着した。村の街道には柔軟な日が─併し熱のさめた冷やかな日が、鋭い光を撒き散らしてゐた。

一體富士程古來より感興を與へた山が他に在るであらうか。譬にも云ふ富士の山程に、此山に關しての詩歌文章繪畫は充ちてゐる。尤も今の慌しい生活が、江戸人程に味ふ餘裕を與へないにしても、何処か心の隅に潛んでゐることには優るとも劣ることはあるまい。その潜在する姿が折に觸れては甦つて來る。古人が福慈岳常雪不得登臨と云つたが、そんな恐怖は消滅して終つたが、それでも其感想に相通ずる一脈の氣高い力が私等にも働きかける。

冬の登山を思ひ付いたのも偶々倫敦に居つた時、仲間から富士は好い山だぞ歸つたら登らうと勸められて、新らしくその姿が甦つて來たのであつた。夫れ迄は恰も室の隅に置去りにした飾物同然であつた富士を引き寄せて大切に眺め出した。するとその優佳な斜面の作る線が手を把つて靜かに導いて與れる。自ら誘かれるともなく惹かれて千尺又千尺と登つて行く。六七合目邊から些か急激にひかれて頂上に

至ると、ふつつりと切れて大空へ投げ出される。何處へ連れて行くと云ふのか、虚空に行手を失つた魂は元に歸つて亦も裾野から登り初める。幾度繰り返しても突き詰められぬ線だ。そして唯一筋に何んの跳躍も無く簡素な曲線を畫いて昇つてゐる。何處を見ても誇張がないが、堪へるやうな力で魂に食ひ込んで來る。恰度傑れた佛像に浮ぶやうな不可思議な沈默の力だ。屈托のない廣大な裾野を引いて、孤高を持してゐる姿は飽く迄己れの境涯に悦樂してゐるやうだ。

マッターホルンが手強い闘を挑み掛けるやうな意慾が見えない。全く八面玲瓏として大空高く聳えてゐる。

今更ながらに眺め入つてゐると、限り無い憧憬に驅られて懊惱する。幾百年の間人の魂を捕へた力だ。

渡る日の影も隱ろひ照る月の光も見えず白雲もい行き憚り時じくぞ雪は降りけると歌はれた富士は、遼遠の昔にもそして又今も人々に最も近く生きてゐる山である。

# 火と氷のシャスタ山

## （富士山との比較考察）

小島烏水

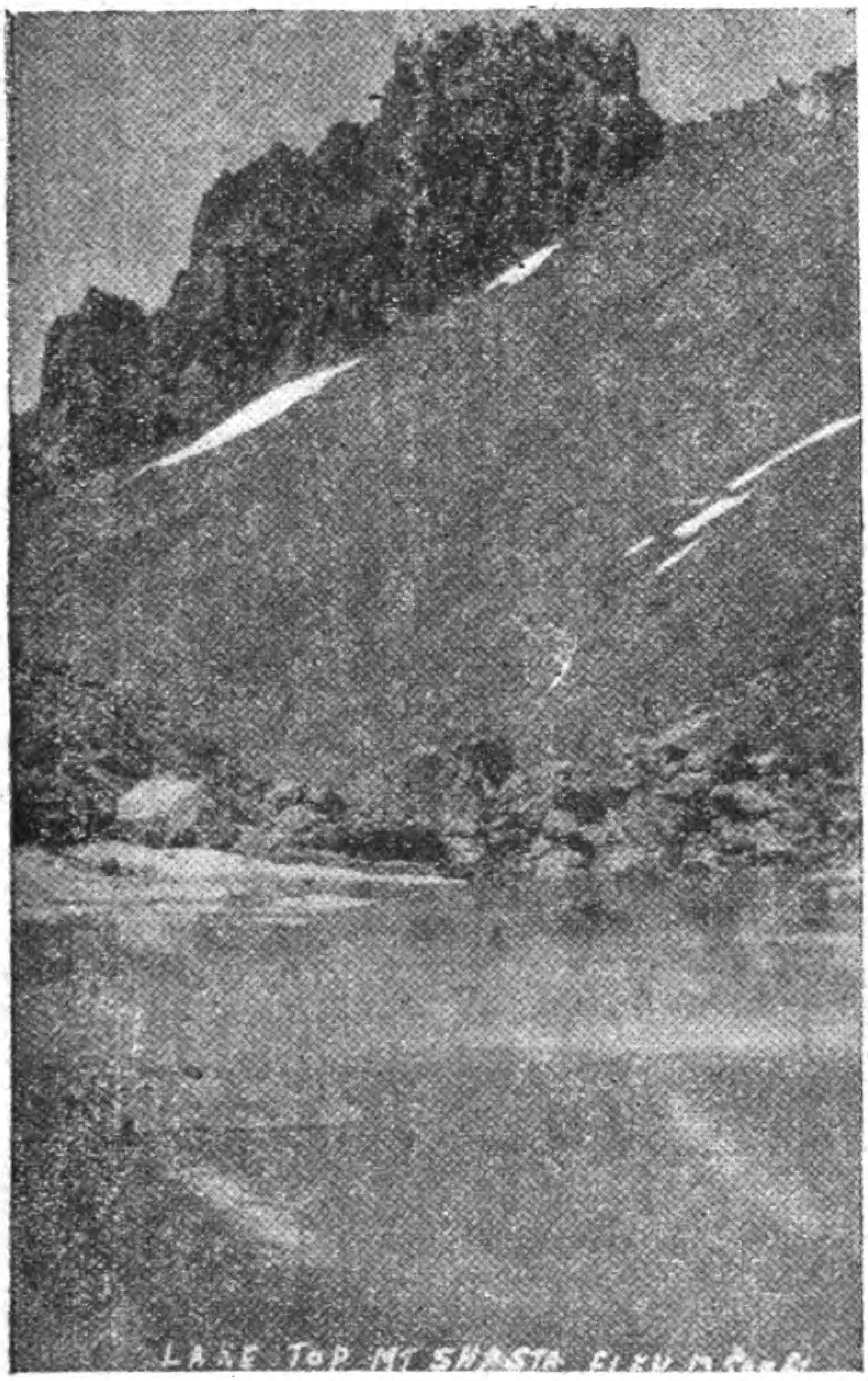
山仲間から、アメリカで、好きな山は、何かと聞かれると、一番先きに、頭に浮ぶのは、シャスタ山である。がそれは必ずしも、好きであるからではない、位置が南に偏り過ぎて、雪が早く融けるし、氷河は小ッぽけな塊まりに過ぎないし、富士山のやうに、新火山岩で、砂磧や岩石が、崩れ易いので、高山植物は稀薄であるし、「好き」になるところまでは行かないが、それでも、最も多く心を惹かれる山である。何故といふに、カリフオルニアからオレゴン州への、境近い街道に、山が聳えて、複式二重の成層火山、シャスタとシャスチナと、二人の容姿端麗なる姉妹が、見る角度に依つては、並んで手を繋ぎ合つてもゐるし、又背中合せに、丈くらべをしてゐるやうでもあり、何處となく

人懐かしい山に見えるからである。その麓を、汽車が通つてゐることは、恰度富士山の裾を、御殿場から佐野（今は「裾野」驛）三島、沼津と、通つて行くやうで、しかも東海道が、古くからの街驛であるやうに、シヤスタ山麓の村落も、街道も、一八四八年以後の、米國西海岸への移民時代には、或時には、印度人と白人とが、必死になつて闘つたり、殊に一八五一年、シヤスタ山から、三十五哩離れたワイレカといふところに、金鑛が發見されてからは、砂金を夢見る山師たちが、鶴嘴をかついで、ほう〱たる髯面を炎熱に曝して、野鼠の群のやうに、通行したところで、今では御伽話か、英雄譚の、古い舞臺になつてゐる。かつて桑港の古本屋で見たその頃の石版畫に、シヤスタ火山が、虚空に拋げられた白炎のやうに、盛り上つてゐる下を、二頭立ちの幌馬車が、のろくさと、運ひずつて、幌の中には、旅の家族とおぼしい女交りの一連が、窮屈さうに、ギツシリ詰まつてゐるが、屋根の上には、チヨツキ一枚になつて、シガアを燻らしてゐる荒くれ男たちが、不行儀に、臂や脛をむき出しに寢そべつてゐるところを、描いたのがあつたが、延んびりとした大陸性の、高原に、引く一筋路を、澄み切つた大空の下に、おそらく、ガタピシと、石コロに蹴つまづきながら、走つて行く一輛の馬車は、漂泊の姿そのもののやうに、一抹の旅愁を、引くのに充分であつた。

それは、カウボーイの土地である。未だ草分け時代の空氣が、澱んでゐる。石と打つかつても、林に這入つても、人と自然が闘爭する時のいきりが立つてゐる。この凡べてを總括して、美くしいものは、この山の險々たる肉塊である。新火山のことだから、土の締まりは、しつくりしてゐない、むしろ危ツかしいほど、柔かな肉つきではあるが、紫色の陶器のやうな、粗朴な釉藥を、うツすり掃いた赤る味と、火力の衰へた痕のほてりを殘して、内へ内へと熱を含むほど、外へ外へと迸つて來る力が、十方無礙に放射することを感ずる。絶頂の火口は、今こそ休火山ではあるが、烈々と美を噴く熔爐になつてゐる。その美の泉を結晶したものは、絶頂から斷壁へと、こびりついてゐるところの、氷河である。汽車の窓からも、その中の最大（といつても長さは二哩半位しかないが）の、ホイツトニイ氷河が、銀流しに光つてゐるのが見える。さうして鐵路の附近に、氷河湖の跡が、乾からびて、今は青草の生えた牧場になつて、牛が遊んでゐる。その邊の農家の石垣は、氷河の推し流した礫石を使つたりしてゐるのが、私たち富士山で、萬年雪を物色したり、日本アルプスで、「カアル」の痕を、氷河時代の遺蹟か否かと、論じ合つたりしてゐる手合ひに、いかに珍らしかつたらうか。

その氷河で思ひ出したが、私が桑港にゐるとき、一九二四年九

月十八日の夕、新聞の號外賣りが、聲高く「ラッセン火山大爆裂、シャスタ氷河大融解」と、大の字盡くしで呼んでゐるので、耳寄りに思つて買つて見ると、いかにもシャスタ山の、氷河融解、大洪水來と、拳大の活字で見出しがついてゐる。それは同日附け、ダンスシールからの電報で「シャスタの南東頂上が缺損して、マックラウド谷が吹き飛ばされ、谷の痕跡が、一筋も殘らない」などと、誇張した報道であつたが、事實は、その前年の冬に雪が少なかつたので、氷河は既に五月の始めに、新雪から解放せられ、底部から溶解して、空洞になり、激しい瀧水で、氷河のトンネルが出來たのが、支持の力を失つて、崩落を始め、岩石や砂礫を押し流して、山麓の村々へと、冠せて來たのであつたが、その當時、村では、二三分毎に、太砲の音のやうな響きが聞え、氷河を源とするマッククラウド河は勿論、サクラメント河まで、水色が一變して、當分は濁りがつゞいたといふことであつた。私は、その夕、電燈煌々として自動車の目まぐるしく飛び交ふ賑やかな町中で、一枚の號外を握つて、地質時代の出來事であるところの、氷河退却時代が、眼のあたりに見られるのだと思つた。飛び廻る自動車も、忙しさうに歩く行人も、右往左往に、悲叫遁走する、有らゆる生物の、混亂の姿でゞもあるかのやうに取られた。



シャスタ山上の湖

それから私は思ふ、外國の山を見るには、二つの見方が、經驗されはしまいか、即ち自分の國の自然に似てゐる方面と、似てゐない方面との二つである。蕪村であつたか誰だつたか、「花茨故郷の路に似たるかな」は、似た方からの見方だ。その反對に、似ても似つかぬところに、新らしい驚異の心を抱かれることもある。シ

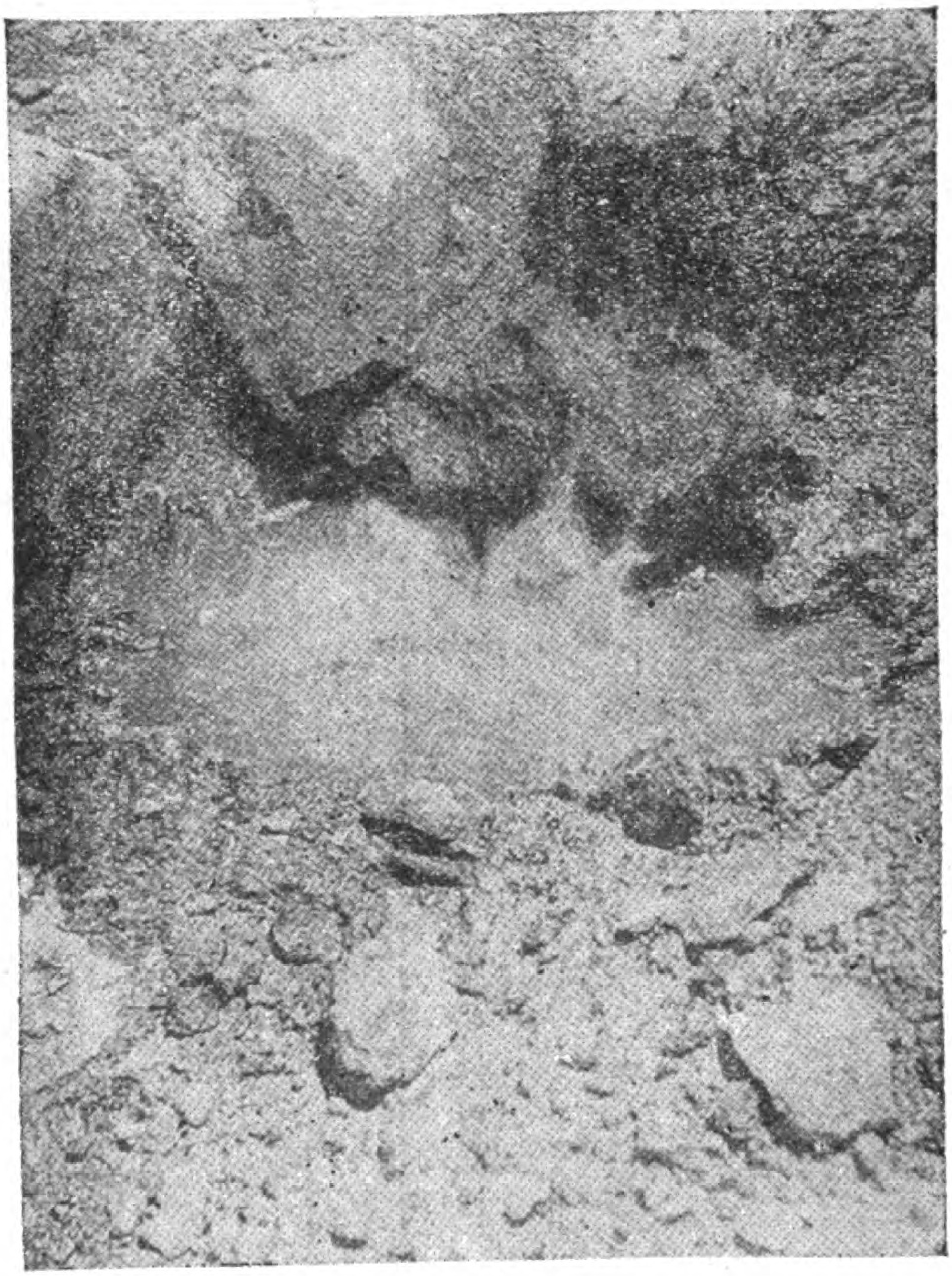
ヤスタに就いて言ふと、氷河地形などは、我が富士山とに似ない方面だが、その他に於て、多くの似顔は、合せ鏡をしてゐる姉妹でもあるかの如くに感じられる、さう思ふとき、我々日本人に取つて、シヤスタ山は、もう錠前を卸した山ではなくなつた。

私の觀察したシヤスタを、漢文者流の口調を借りて、人間本位で言ふならば、とかくに不遇の山水である。第一にシヤスタ山は、太平洋沿岸に近い山としては、早く發見された方ではない。同じ太平洋岸でも、有名な航海者「ヴアンクウバア」が、フッド火山や、ベエカア火山や、レイニーア火山を發見してから、三十四年も後に、シヤスタは、やつと存在を認められた。西班牙の探檢者たちが、加州にシエラ・ネヴアダ山脈を見つけたよりも、三世紀も遲れてゐる。メキシコの大火山、ポポカテペトルの第一登山が、報告されてから、三百年も後になつて、シヤスタは地圖の上に戸籍が入つた。併し始めて登られたのは、一八五二年のことで、この邊の山としては、遲い方でもなかつたが、あとから探檢された他州（ワシントン州）の、レイニーア山の方に、國立公園を取られてしまひ、レイニーア山に關しては、詳細なる地形圖、地質圖や、一般民衆向きの、要領を得た説明案内などが、出版せられて、世の中に紹介されてゐるが、シヤスタには、未ださういふものは、何にも出てゐない（恰も富士山が「天地の別れし時ゆ神さびて」とか、古くから言はれてゐながら、今日では、やゝともすると、最近發見の日本アルプス上高地あたりに、國立公園を、お先に奪はれさうな形勢であるが如くに）。第二にシヤスタ山は、初めは海拔一萬四千五百餘尺と測られて、米國最高の山と信ぜられてゐたのに、その方は、今では、シエラ・ネヴアダの、マウント・ホイットニイに最高の位置を取られてしまひ、精密なる實測の結果は、一萬四千一百尺に減じて、レイニーアの一萬四千四百尺に比してすら、下位に落ちてしまつた（恰も日本最高の富士山が、久しく信ぜられてゐた三、七七八米突といふ高さが、最近實測の結果、却つて減少して、愈よ臺灣の新高山の下位に落ちたやうに）。第三にレイニーア山や、その屬する所のカスケード山脈を主として、探檢する山岳會には、「マザマ」（ポートランド市）があり、「マウンテイニーア」（シアトル市）があり、又南の方シエラ・ネヴアダを研究する山岳會としては、盛大なるシエラ山岳會（桑港）があるにも拘はらず、シヤスタは、その中間に占居するため、どつち就かずの繼子扱ひを、兩方の山岳會から受けてゐること（恰も日本アルプスや、秩父山脈が、登山家の興味の中心になつて、獨立別居の富士山が、大分閑却される傾向があるやうに）。第四は、山の不幸は、住人の不幸になつて、シヤスタ山と、切つても切れぬ歴史中の人を、埋沒しやうとしてゐる。即ちシヤスタ山を、世に紹介するために、全力

を細くした土地草分けのシッソン翁（J. H. Sisson）といふ開拓者のために、シッソンといふ地名が出來、同名の停車場まであつたのが、いつの間にか、土地がシヤスタ・シチイと改名せられて、あたらシッソン翁の名は、草莽の間に埋められやうとしてゐる（恰も富士山の修行者の名が、今日忘られかけて、日本アルプスの先達、ゴウランドだの、ウエストンだのといふ名が、若い人たちの口の端に上るやうになつた如くに）。それから第五、第六の「恰も」が、未だ續いて擧げられるが、もうその點は打ち切つて、私たち同行四人が、シヤスタ山に登つたのは、大正八年九月十一日のことで、未だこの山の草分けを記念するための、シッソンの名が、殘つてゐた時分であつた。その頃、シヤスタに登る人は、一夏を通して、百人か百五十人位と登錄せられてゐたし、殊に日本人の登山としては、私たちが初めてのものであつた（前に日本人が登つてゐたといふ記錄があるならば、是非知らせていたゞきたい）。その私たちの登山にしてからが、時間不足のために、絕頂の雪ヶ峰ともいふべき、シヤスタ・ピークまでは、達しなかつたのだから、一番の實際地形圖を、スケツチしたくらゐの輕い氣分で、讀んでいたゞきたい。何も登山記だからと言つて、死に身になつてコチコチと緊張しなければならないと、いふものでもなからう。

シヤスタへ行くには、私たちの居住地、桑港から、オレゴンへと北向する南太平洋鐵道の便を借りるのである。汽車はサクラメントの大河に沿うて走る、川の底には、堅い凝灰岩などが、露出してゐるが、シヤスタを距ること、五十哩位のところから、熔岩が、兩岸に段丘を作つてゐる。そして段丘の上に、小舍が建てられたり、馬鈴薯や唐黍が植ゑられたりして、この邊の畑としては、手入れが屆いてゐる。その熔岩は、シヤスタの南麓から迸しつたのであるが、一寸富士山から、桂川に沿うて猿橋まで達してゐるところの「猿橋熔岩」に似てゐる。併し富士山の方では、熔岩の延長八里くらゐで、厚さも今日見らる▲ところでは、四、五米突ばかりの薄い皮であるが、サクラメントへ流れるシヤスタ熔岩の厚さは、五十呎から二、三百呎に達してゐる。川上の方へ「シヤスタ」が、白い姿を爛々と光らして、汽車の窓から、大抵は右に見えるが、「左富士」のやうに、左に見えることもある。それほど川は、S字の環を繋ぎ合つてゐる。前に述べたシッソンの停車場へ着くまでには、ダンスミユールといふ、材木を伐り出すので賑やかな古驛があり、その次には、シヤスタ・スプリングといつて、シヤスタ火山の噴出熔岩なる岩壁の隙から、地下の伏流が、富士の白絲の瀑のやうに、千筋とまでは行かなくとも、太い布や、纖細な絲を擺いて、たぎり落ちるところもある、「壯夫故鄕の瀑に似たるかな」が、屢々想ひ出される。

シッソンといふ寂びしい停車場は、富士ならば、御殿場驛に當るところであるが、この方面から見たシャスタは、一座の尖れる火山にしか見えない、それが、シャスタの主峰であるが、汽車が北へ走るに隨つて、いつの間にか、主峰の傍に、又一つの同じやうな大火山が出て來る、それはシャスチナで、高さは日本の富士山と同じく、一萬二千三百尺であるが、シャスタ主峰は、それよりも更に、約二千尺高く、海拔一萬四千百六十二尺と註せられてゐる。火口は、シャスタに一つ、シャスチナに一つ、その雙峰を繋ぎ合はせるところの、プラットフオームにも、一つあるといふ話であるが、私はそれをよく知らない。シャスチナは、多分側火山として噴出したのが、一體の双生兒のやうに、シャスタと接合したのだらうと思ふ。成立の原因は違つても、富士の愛鷹山の頂上部が、假に爆裂飛散せずに原形を保存してゐたとすれば、小さなシャスチナ位に、なつてゐるかも知れない。



シャスタ山頂の硫氣洞

だが、シッソン、ウイードあたりから、仰ぎ見るシャスタの偉大さは、アルプス式の山々に見ることの出來ない鮮明美がある、孤にして閑である、獨にして秀で、單にして完き姿である。日本アルプスでも、さうであるが、アルプス式の山は、高臺の上に乘つかつて、群峰になつてゐるから、槍ケ岳とか「マッタアホルン」とかいふ特異の山形を除いたら、遠くからは、一寸解り兼ねるが、シャスタはさうでない、富士もさうである如く、一見分明である、足許から頂上までの直徑の高

さは、モン・ブラン以上である（移民時代の一愛山家は、「シャスタに登つてモン・ブランを笑つてやれ」と言つた）。その立體構成面の威嚇的偉大さを、驚くべき簡單なる曲線で、統整して、しかも歪曲に至つては、富士で謂ふところの八百八谷の皺から、おのづと發生する凹凸面の、複雜なる入り亂れる、眼もあやになることを如何ともしがない。

私たち一行四人は、九月九日の夕、シッソンに着いて、驛前のバアク・ホテルといふのに泊つた、目ぼしい商家といつては、よろづ屋風の荒物屋と、鍛冶屋があるくらゐのもので、私は靴屋に案內してもらひ、氷河に辷らない用心に、獸皮を貼りつけて、釘を打つてもらつたが、舊式の蠟燭を使つて、靴屋のおやぢが、シユツ、シユツと、線香花火式にやつてくれた。登山の準備をしたくも、碌なものが無いところで、此節の日本アルプスの登山口の、設備の方が、よほど行き屆いてゐるくらゐだから、その貧弱さの、見當がつくであらう。

山麓帶の裾野で、日に焼けて、疲勞をひどくしたくないので、行程は短かいにも係らず、翌十日は朝出立した。馬を五頭、一頭は荷物を積んで、案內者の、チヤアレス・グーチといふ男は、裸馬に乗り、アルペン杖を横たへながら、片手で荷物馬を曳いて先登に立つて行く。私は馬に慣れないので、少なからず閉口したが、同行中の神田君は、この仲間では馬術の達人で、私の馬の綱を、時々引いてくれた。

本街道から製材所の横を切れると、もう既に裾野であるが、富士のそれとは違つて、乾き切つた砂漠で、セーヂと通稱する白ッ茶けた草や、マンザニタと呼ばれるところの、灌木などが、茂つて、馬蹄の砂が、濛々と舞ひあがるには、馬上面を伏せて、眼をねぶるばかりであつた。

それでも、森林帶に入ると、さすがに涼しい、中でもシヤスタ松と呼ばれる喬木の一種は、この山、特有とまでゆかなくても、この山の產として最も名高いのであるが、富士の落葉松を、富士松と呼ぶたぐひであるかも知れない。尚ほ登ると、俗にホワイト・バーク・パイン（白皮松）と呼ぶ喬木が出てくる、高さは二百尺位に達するのは珍らしくはない。土地の人たちは、この森林帶の立派さを、演說してゐるが、レイニーア火山や、ベエカア火山の、それに較べると、さほどの物ではない。ホールスキヤムプといふ平地に出て、馬を下り、野營の仕度をする。海拔九千尺、水も少しはある。今は、このところに「シャスタ・アルパイン・ロッヂ」といふ立派な山小舍が、建設されたさうで、毎年六月十五日から九月十五日まで「小舍開き」をやつて、毎年四五百人の登山者は、缺かさないといふ話であるが、私たちの登つた頃には、未だ小舍はなく、シエラ山岳會、登山家の「睡眠袋」を、馬に積ませて來たので、蓑蟲のやうに、その中にすつぽり潜り込んで、寢たが、

乾き切つた小石交りの砂地の上で、草原を褥にする贅澤は、思ひも寄らず、睡眠不足が祟つて、翌くる日の登山には、大分こたへた。

森林帶の盡きるところから、大雪溪が始まるが、この雪溪の長々しい傾斜は、さすがに白馬岳あたりの比ではない。翌くる十一日の朝、一行はこの單調の雪溪を、のたり、のたりと登つて、巨大な墜石を戴いた雪の「テーブル」の側へ立つて寫眞を取つたり、雪の穴ぼこの中へ、更紗の紋でも切り嵌めたやうに、小さい翼を休めてゐるところの、可憐なる高山蝶を、いぢくつたりして、雪溪を、ものの三千五百尺許登ると、富士山の胸突八丁にも喩へられるところの、火口壁へとぶつかつた。これを越えると、絶頂に辿りつくことになるので、こゝでさへ、高さは一萬三千尺近い見當である。最後の噴火のあつたといふ「レッド・ブラッフ」の赭ら岩が、眉　同時に眺望する山だ。



シャスタと高度を爭ふ同山脈のマウント・レイニーア

日本アルプスのやうに、柔らかい　を焦がすばかりに、近く聳えてゐる。足許一面に、熔岩や、輕石が、狼藉して、歩きにくい。牛懷時計を見ると、彼是午後二時に近い、空氣も稀薄になり始めて、絶頂まで、遲々たる足取りでは、今夜中にホテルまで、戻り得られるか否かも、覺束ないので、こゝから下山することにした。

シャスタへの登路は、氷河踏査を主とするならば、私たちの路を取らずに、南のマッククラウド村から登るか、又は稍や北行して、シャスタとシャスチナ間の、窪地を目指して登る方が、よかつたといふことを、後から聞かされた。後の路を取れば、九千尺の高度から、ホイトニイ氷河の末端が出現して、「クレツヴアス」や、石堆の狀態がよく判明するといふことであつた。

登山記としては、これだけだ。短かくして、呆氣ないのは、私も知つてゐる、併しシャスタ山は、我が富士山の如く、登る山であるが、この山を中心にして、周圍の展望は變化する、

大空へ掛けた額面として、横から見たり、裏返しに見られる山だ。

私は、その後、幾回となく、山麓を通過した、半周した、約四分の三まで廻つた。かくて観たところを綜合して言へば、山の頸部は、三十五度の傾斜から、次第に緩和して二十度、十五度、十度と、延んびりした線を、大裾野へ引き落し、末端は五度位にちゞむでゐるが、富士山の如く、草山三里、木山三里、石山三里といふ割り當ては、シャスタには應用出來ない。草山は、まあいゝとして、木山はシャスタでは、谷地帶になつてゐるし、殊に石山に該當するところは、萬年雪と氷河の喰ひ込みで、岩頸は、鉈でえぐつたやうに「サアク」の鈴成りが出來てゐるから、サアク帶と呼ぶ方が適當である、その「サアク」からは、言ふまでもなく、氷河が流れてゐて、九千尺以上に五個あるといふ話であるが、私の望んだのは、ホイットニイ氷河と、南方のマック・クラウド氷河の二つである。前者は前にも述べた通り、シャスタとシャスチナの間の、鞍部に懸垂してゐるが、アルプスのペルニース、オバアランド山地あたりの、大氷河に比べると、恐らく雛形ぐらゐの小さいものだらうが、それでも、擬似氷河ではない。小さいなりに、完全な真氷河であることは、「クレッヴアス」の凹凸は、可なりの遠くから肉眼でもハッキリと見えるし、大氷河でなくては、滅多に見られないところの、側堆石までを具備してゐるのでも伺はれる、終堆石は弦の切れた半弓を掛けたやうに、針葉樹帶の上に、鮮明に懸かつてゐるのみならず、そこから流下した堆石は、累々として、山麓に土堤を高く築いてゐる。只だ巨大な堆石が、現在見當らないのは、何分にも、氷河が小さく、谷の削り方も淺くて、「剝ぎ取り」が、深く利かない爲めであらう。もう一つのマック・クラウド氷河の方は、現在では最小の氷河であるが、山麓同名の村に、「マッド・クリーク」といふ小流があつて、その岸壁には、氷河の引ッ掻いた條痕が、鮮明に殘つてゐるところを見ると、昔は今よりも、大きな氷河であつたことを示してゐるらしい。

要するに、シャスタの氷河は、この山の屬するキャスケード山脈の最南端だけあつて、キャスケードの氷河としては、一番小さいものであることに疑ひはないが、假りに、富士山の氷河が成立したとしたら、或は又、日本アルプスの劍岳や立山群峰が、もう一千米突も高くて、氷河の小塊が出來るといふ想像が、容れられるとしたら、まあこんなものだらうと推測せられるだけに、何となく、捨てがたく思はれるのである。

こゝで、冒頭に戻つて、同じ言葉を繰りかへす、アメリカで好きな山は何かと聞かれると、一番先きに頭に浮ぶのは、シャスタ山である、それは必ずしも、好きであるからではないが、最も多く心を惹かれる

山であると。

終りに、この一文を、同行四人の中、馬術の達人であつた神田君の靈前に献げる。同君は、その後歸朝して、過般の大震災で、鎌倉で壓死の不幸に遭はれた、他の二人は、野坂溢明君と國府精一君とである、今は米國と日本に別れてゐて、共に健在である。

# ドフィネ日記

松方三郎

## 一

ツェルマットをたつたのは丁度二十何年か前にザミの親爺さんがウェッターホルンの頭上で雷に打たれた命日に當つて居たのだから、八月の二十日の事である。

たまに騾はや〳〵と村の一本道を歩いたせいだらうか、それとも、あるいは本當にシーズンが終りに近づいて居たからなのであらうか、その頃のツェルマットを馬鹿に靜かだと思つた。一番でヴィスプに下る御客も私達の他には土地の人が少しばかり、勿論之から何遍も汽車を乗換へて國境の向ふ側までのして行かう等と云ふ酔興な特志家は他には居ない。それに私達四人の誰一人もドフィネは愚か、グルノーブルも識らないのだから、時間表を繰り乍ら汽車の組み合せを考へる時などは途方もなく遠い所に行く様な氣がしてならなかつた。それにしても、小學校の先生を相勤めて居るザミが同じスウィスのジュネーヴが初めてだとは、全く呆れはてた話である。尤もそれはその日の午後、ジュネーヴで往來のめまぐるしさに憤慨した彼が、全く不用意に白狀してしまふ迄私達は知らなかつた事なのである。グルノーブルに着いたのは夜晩かつた。停車場の前の宿屋が一杯で、町の中まで荷物もろ共馬車で運ばれた私達が泊つたのは、グランド・ホテルとか云ふ名だたるホテルの、併し、ヨタ〳〵の昇降機で遙か上に登つた屋根裏であ

つた。

都會を暫く離れて居た人間にとつて、明け渡つた世界の大部分が人の家の屋根に滿たされて居るのを見出すと云ふ事は變な經驗であつたが、もう今日は又山の中に行くのだと云ふ考へが、その氣分をとりなして與れた。併し本當に土地不案内の私達は食卓のキャンタロウプに贊嘆して居る内にまんまとP・L・Mの乘合自動車を乘りはづして、別に一臺の車をラ・ベラードに走らせなければならなかつた。

町を外れた所から恐ろしく眞すぐな、木の生ひ繁つた道を猛然と飛ばして田舎に出るともうベルドンヌの山が直ぐ近い。自動車はその山鼻を廻つて東へ走る。水力電氣か何かのダムが幾つかある山あひを拔けて展けた所に來たら、氷河をチラリと乘せた頂きが見えた。車はその山を左に見送つて驀地に谷の奧へと走つてしまふ。成程、行く手には又一つの氷河を戴いた山波が横はつて居る。さうして街道が此の山の裾につき當つた時、私達の車は岐道を右に、山鼻を大きくからんで急角度に登つた。廻り切つて見廻した時、河床はもう崖の遙か下におちて、車は今までとは打つて變つて荒れ果てた山の斜面を走つて居た。なれた運轉手がフランス式の離れ業をやる度に私達は顏を見合せる。汗をかいても歩いた方がよかつたと云はぬばかりに。

サン・クリストフのあたりで行く手の中空に大きな氷河がギラリと光る。

ラ・ベラードに着いたのは晝頃であつたらう。日曜の遊山に此處まで乘合で來た人達が午飯をしたゝめて居る最中であつた。あんな幅つたい乘合でよくもあの山道を來た物だと私達はその人達の度胸に敬意を表して當てがはれた部屋に入つた。

宿屋としては此の家一軒しかなく、本當に小さい此の村落は、ガリンデルワルドやツェルマットに馴れた私達には全く意外なものに思はれた。而も之がドフイネの山登りの中心地として名を知られた所なのだ。

一樣に灰色の石造りの、どれもこれも默りこくつてうづくまつて居る樣な家、その中に教會だけが一きは目だつてそれと見分けられる。探して見れば『山案内ガスパール某』の家等と看板出した家もあるが、山に登り相な顏をした人も見當らない。間もなく乘合は町から來たゞけの御客を乘せて谷の下へ消えて行つてしまふ。

その午後を私は、要するに、何一つの仕事らしい仕事もせず樂しんだ。エミールやザミみたいに家に手紙を出すと云ふ殊勝な心掛をもたない人間は、河原の石の上で晝寢をするか、取入れ時の――猫の額みたいに小さい――麥畑や、白樺の木立の間をうろつくより他にする事

# 日本地理風俗大系（豫

## 現代術の眞髄を

傳統の美、鬱勃新興の生命！此二つを併せ把握して『新興の日本』は何れへか行く。人は云ふ世界の樂園は東に日本あり、西に瑞西ありと。彼はしかし國家としての權威、雄偉なる民族的使命を有しない。彼は麗しき山河を有するのみで數千年來連綿たる高貴の民族的血液を有しない。我まその全部を保有して武矣に專門大家の總論と解説を以てする。學問と藝術の兩面から今日の日本を寫眞にするには在來の寫眞は全部役に立たない。故に我社は數萬圓を投じて特に撮影班を組織し、本土は勿論、殖民地の端まで出張して撮影する。撮影班は、普通寫眞、活動寫眞の三班からなり各々專門技師が擔當する。この寫眞こそ我國空前の美麗なるものであり、千古に傳ふべく、海外に比して優にその長を誦はるるものである。

京都帝大講師 子爵 田中阿歌麿
東京高師教授 東京文理科大學助教授 田中啓爾
東北帝大教授 理學博士 高橋純一
廣島高師教授 高尾常磐
九州帝大教授 文學博士 長沼賢海
廣島大學教授 栗田元治
小寺融吉
小島烏水
京都文理大助教授 文學博士 新村出
廣島高師教授 下村彦一
學習院教授 遠藤金重

### ▽一粒擇の名作

# 綜合せる大陣容!!!

港灣協會々長 海軍少將 關田駒吉

他其交渉中

## 編輯委員

東京文理大助教授 田中啓爾
東京女高師教授 飯本信之
奈良女高師教授 帷子二郎
廣島高師教授 下村彦一
撮影・編輯事務主任 橋本基
撮影技師 坂本技師

に取り扱ふと同時に之に藝術的氣品を吹き込む苦心が寫眞班にある。各班を統率する監督者は文學美術の造詣と寫眞撮影及び印刷の經驗に富む一流の大家故、寫眞の一枚一枚が悉く苦心の名作で科學的に貴重な參考品であるばかりではなく藝術品としても後世に殘るものである。所謂藝術寫眞や名勝寫眞と同一視さるべきものではない。

## ▽秀麗な體裁

本全集は學問的に貴重な參考書であると共に藝術品として世界の出版界に誇るべきもの故、特に大なる犧牲を拂つて最上の用紙に最新の印刷法を用ひ堅牢なる製本と壯麗極りなき至高の裝禎を以て提供する

## 全十二卷

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第一卷 總論・大東京 | 第四卷 中部地方 | 第七卷 九州地方 | 第十卷 朝鮮 |
| 第二卷 關東地方 | 第五卷 近畿地方 | 第八卷 北海道・樺太 | 別卷一 滿洲 |
| 第三卷 奥羽地方 | 第六卷 中國・四國地方 | 第九卷 臺灣・南洋 | 別卷二 山嶽 |

# 全世界に類例のない創意的地理風俗の大集成

がない。

併し一寸河上に上れば、ホンの少しではあるが、山と山との間にメイジュの一角が見える。雲に包まれたり、又その中から立ち現れたりする赭い／＼グラン・ピックの頂きは全く此の世ならぬ眺めである。

夕方、山から歸つて來た山羊たちが、狹い橋を渡る。

暮れた後は、わけて川の音が高い。

ザミが歌を唱ふ。

併し、天氣が何となく思はしくないので、四人共機嫌が惡い。此の川の流れや、白樺の木立や、周りの山々が、まるで日本の上高地みたいだと、浦松と二人で說明しても見たが、エミールもザミも一向感激しない樣だつた。

兎に角、此の村に居る位なら山の小屋に居た方がよいから、食料を少し澤山もつて、明日はプロモントアールまで行かうと決める。此の村でとぢ込められてはとてもあの二人はもたない。山登りをして居れば元氣だが、里におりると、さうして一寸雨でも續かうものなら、忽ち故郷を戀しがると云ふ人達なのだから。

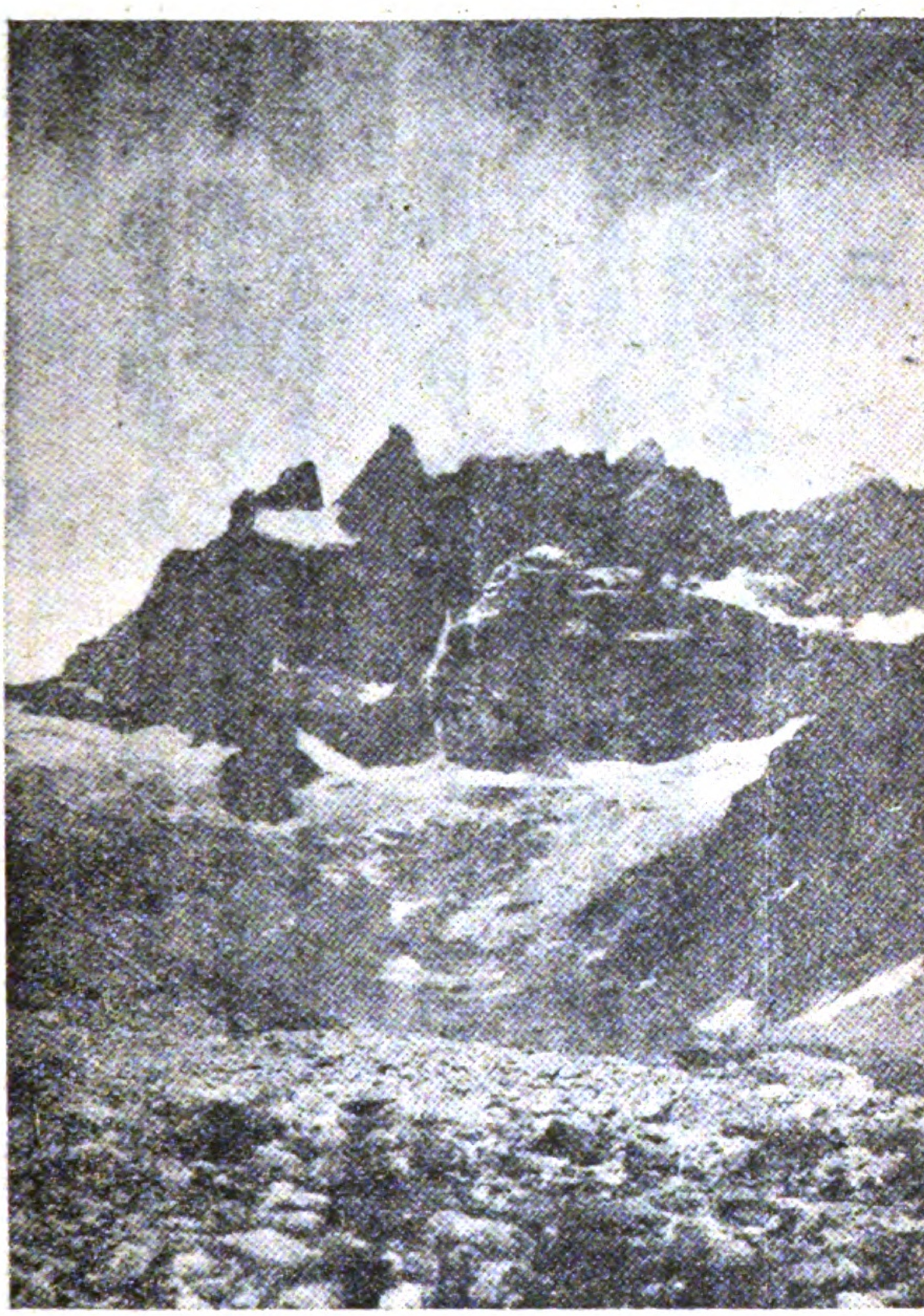
## 二

エタンソンの谷は、一口に云へば、荒れはてた物淋しい谷であつた。兩側の斜面と云ひ、谷の床と云ひ一樣に大小樣々のデブリに蔽はれて居て、その間を綴る、地にすれ／＼の偃松や、かすかに咲いた花、そして又、登るに從つて右から、又左から顏を出す氷河の下端、之等の何れもがたゞ要するに、この谷全體を包む空氣を一きわ强めて居るに過ぎない。

谷の下を見かへれば、ヴェネオンの谷を隔てた山々が冷やかに立ち、行く手はと見ればメイジュの三千尺の岩壁がひたすらにそゝり立つ。危く支へられたカレーの氷河、たつた一すぢ横ざまにかゝつた殘雪の帶。それをのけてはたゞ一色に赭い壁。

ドフィネ、氷い間幾度びと心に描いて居たそのドフィネ、其處に今こそ居るのだ。私はさう感じた。

併し、此のごろた石の谷間を行く／＼あちこちと枯木を漁つて登ると云ふ事は何としても愉快な仕事ではない。焚木を備へつけて居ないフランスの山小屋の事をつく／＼と話っても見たが何とも致し方ない。登過ぎめい／＼ルックザックの上に偃松の枯枝をつけて、兎にも角にも、シャテルレの岩小屋に辿りついた。プロモントアールの小屋の出來た今日では迷ひはぐれた山羊でゝもなければ此の小屋には泊らない。併し、その代り、嫌でももう一度重い荷を背負つて一汗かかなければならない。



南に面して居るからであらうか、エタンソンの氷河はひどく小さい。たゞモレイン丈けは一人前に長い。

モレインを登り切つて、プロモントアールと呼ばれるその名の通り、岬の様に突き出した岩岬の裾にたてられた小屋に着いたのは四時であつた。

食器を洗つたり、机をふいたり――こんな事は使つたあとで必ずそれを洗ふ習慣になつて居るスウイスの小屋では全く必要のない事だ――一通り清潔作業がすんだあとで夕食の仕度にかゝる。暫くしてオーストリアの若い人が二人來る。小屋は廣いから何人來やうと差支へない。尤も焚木代りに寢藁を大分もやしたと見えて此の方は頗る賴りな

寫眞說明

エタンソンの谷、即ち南より見たるラ・メイジュ。向つて左端の鞍部（ブレーシュ・ドゥ・ラ・メイジュ――三三〇〇米）の右上に、岩壁の上に乘つて居る小さい氷河（グラシエー・カレー）の右が主峯グラン・ピック（三九八七米）、その右の切れ込みがブレーシ・ツイグモンデイである。尾根が幾度びか東に向つて上下してピック・サントラール（三九七〇米）に至り、それから間もなく急激に落ちて再び徐々にピック・オリエンタール（三九一一米）に上る。小屋はエタンソンの氷河を二つに分けて突出して居る岬の様な堡壁（プロモントアール）の裾にある。ピック・サントラールは一八七〇年、グラン・ピックは一八七七年――マッターホルンの初めて登攀せられてから十二年後――初めて登られた。『岩山の女王』（Königin der Felsberge Europas）と呼ばれた、此の山の、特に此の谷から見た眺めは全く獨特の魅力を持つ。

い。

果してその翌日は天氣が思はしくなかつた。一日籠城とする。一寸登頂ブレーシュまで登つて向ふ側の谷を眺めた以外は、食料儉約のためになるたけ靜かに蟄居して居た。肝心のメイジュのグラン・ピックはあとから〳〵雲に襲はれて居て、カレーの氷河から上は仲々現れない。

籠城ときまると、おのづかから小屋の事などが氣になり出さない譯に行かない。小屋の帳面に事々しくSans Guide（案内なし）等と書く事は勝手であるが、使つた道具をそのまんまで出て行つてしまつたり、藁を燃してしまつたりするのは全く感心しない。尤もフランスの小屋には机や椅子やひどいのになると小屋の戸まで燃されたのがあると云ふ話であるから恐ろしい話だ。併し、壁に掲げられたフランス山岳會のモットウを見るがいい。"Pour la Patrie, Par la Montagne"が、山登りも國家を擔がねばならないとなつては全く荷がかちすぎる。そのためであらうか、今日ラ・グラーヴからブレーシュをこえて來た二人連れの若い人々もフランス人ではなかつた。

夜は風が烈しかつた。定めし此の風が雲をはらつてくれるのだらうと大人しくねて居たが、風はつのる一方で、度々小屋が吹き飛ばされ相にゆれる。

明方になつても止まない。

駄目だ。とても駄目だ。毛布をかぶり直して私は眼を閉ぢた。

## 三

『七時三十分、プロモントアールの小屋
十一時十分、グラン・ピック
四時、ベルグシュルンド
四時四十分、ロシエ・ドゥ・レーグルの小屋
七時三十分、ラ・グラーヴ』

その日の日記に之だけの事が記されて居る。

要するに私達は天候は勿論怪しくはあつたが出かけたのだ。何つちにしても食料に限りがあつて、ラ・ベラードに退却するか、でなければラ・グラーヴに越えるより仕方がなかつた私達は、同じ事ならば縦走は出來なくともせめてグラン・ピックまでなりと行つて見る事にした。尤も四人が四人とも——全く惡い心掛けなのだが——腹の中では、神若し許し給はゞ、大概の天氣はかまはずに尾根をかけてしまほふと覺悟をきめて出かけたのだ。七時半の出發は此の山としては勿論おそい。出發ときめる迄何遍も小屋から出ては天氣を見なければなら

なかつたからである。

小屋はプロモントアールの壁壁そのもの丶上に辛うじてのつて居る。従つて、小屋の敷居を踏み出した次の一歩はもう岩にかけられなければならない。

山の本には随分と詳しく何處を何うへづつて何處をどう登る等と書いてある。Castelnau's Camp とか Pyramide Duhamel 等と云ふ名に、夫々此の山の初期の登攀史と結びついた人や事件からつけられた名前だからまだよいとしても、Pas du Chat だの Cheval Rouge だの Chapeau du Capucin 等と胎内くゞり式に事々しく名前をつけたのは全く目まぐるしい次第である。幸ひこう云ふ山には人の登れる登攀線はおしなべてさう澤山はない。それ故登つた人があると云ふ事さへ知つて居れば、あとはそれ程重大な相違はないのである。實際私達は自分達のとつたルートがカステルノーのそれであるか、ブルチエラー或は又他のヴァリアンテであるかを知らない。私達はたゞ手のかゝり足のかゝる岩から岩へと率直に登つた。岩はどれもこれもダイヤモンドの様に固く、がつしりとして動かなかつた。ザミと私、エミールと瀬松。二人づゝであるから手間どらないで早い。小屋の上を登り切つてエタンソンの氷河から來たクーロアールに入り右手に大きくからんだつき當りがカレーの氷河の下の驚くべく大きな岩壁。岩壁では手におへないと、又左へ岩の割目を求めてからむ。さうして二度エタンソンの氷河の眞上に出る所で遂に這つて岩と岩とのすき間を拔けた。Pas du Chat と云ふ所かも知れない。カレーの氷河におりたのはそれから間もなくであつた。氷河を斜にグラン・ピックの根元へと登つて、再び新しい岩にとりついたのは十時頃であつたらう。岩は例によつて素晴しくいゝ。

が、その最後の登りを半分もきたと思つたその時の事である。乾燥し切つた恐ろしく高い音響が私達を岩にたゝきつけた。薄い霧が頂上をかすめて走つて居る。さうだ、とうとう來たんだ。私達は黙つて顔を見合せて、ピッケルを岩の間に置いて自分達は少し離れた岩かげに身をかくした。パラパラつと霰が降る。勿論、すべて之は咄嗟の間の事であつた。

暗雲から雲が來る、來る。エクランのドームがその黒雲から出たり又隠れたりして居る。天氣は確かによくない。

尤も雷はそれつきり來なかつた。霰もほんの少しであつた。併し、電氣に鋭敏なザミの懸命で私達は暫く動く事が出來なかつた。雷に對して不死身に近いエミールは初めから一向感動して居ないのだから始末が悪い。

何うやら大丈夫と再び動き出してから、尾根にとりつく迄はほんの

幾分かの時間だつた。ラ・グラーヴの村を谷の下の方にチラリと見た。併し、今は風景を賞玩する閑がない。踏つた左の足が何千尺の中空にぶらさがつて居るか等と氣まぐれな事を考へる閑もない。Cheval Rouge も Chapeau 何とかもない。たゞ眞向に痩尾根を頂上に。

頂上では辛うじて互ひに「グルュース」を交しただけであつた。私達は直ちに避雷針のてつぺんの樣なその頂上を離れる必要があつた。雲が又かゝつて來て、霰が降つて來たからだ。さうして二度目のアブザイレンでブレーシュ・ツイグモンデイの底にとゞいた頃はもう又私達は嵐の中に包まれて居た。

此處からピック・サントラールまでの所謂メイジュの東尾根は大凡四つの食ひ込みによつて五つの峯に分たれて居る。メイジュの持つ魅力の少からぬものは此の尾根にあるとさへ云はれたその尾根が、何處で何うなつて居たのか、正直に云へば、私はよく憶えて居ない。私達は始終霰に打たれて居た上に、遠のいたと思つた雷が又私達をおびやかし出したからなのである。

どのキレットでゝあつたか　私はジジジーと云ふ樣な尖つた音に耳を欹てた。頭の髮を誰かに引ばられる樣に痛いと思つて帽子をとつたら、その帽子について毛がブラシの樣にたつてしまつた。ターンと云ふ音響にそれが終つたのは殆んどそれと同じ瞬間であつた。岩かげに大いそぎで身を匿した頃は多分泥棒を通り越して非常な手おくれだつたに相違ない。かと云つて直ぐ眼の先きに雷が落ちたあとでのん〱と尾根を歩く氣は一向にない。こんな事を何遍となく繰返した。浦松はピッケルを持つた方の腕をやられた。もう少しでピッケルは腕かまるごとエリキで黒くなる所だつたと思ふと實際危い所だつた。併し恐ろしいもので、しまひには私達もなれてしまつて、大概雷の出し來をジジジーと云ふ獨特の音や、風や霰の具合で豫感する事が出來、又、雷がいつも一種の臭を伴つて居ると云ふ事をも知る樣になつた。唯困つた事には不死身のエミールだけはシアー〱として足場なんか切つて居る。當人は生れつき電氣には感じが鈍いのだから仕方がない。エミールと綱を一所にした浦松は隨分これに弱つた樣だ。そんなわけで私はその肝心の尾根が何うなつて居たかをよく憶えて居ない。霧のすき間から見下ろすと、何時も、私達の居る斜面が急におちて見えなくなつた所から遥かに下の方に氷河が見えた。私達は始終尾根の北側を出來るだけその脊をさけてへづつて居たのだ。南側はエタンソンの氷河に向つてのしかゝつて居て手がつけられない。何處かで霧を通してチラと見たピック・サントラールと來ては、まるで大きな岩庇の樣に南にかしいで出て居た。

キレットにおりては向ふ側の岩にとりつく。さうして又おりる。グ

ラン・ピックから綱でおりて來てしまつたと云ふ事は、要するに、背水の陣をしいて來たと云ふ事と同樣なのだから、私達は何とでもして此の尾根づたひを續けなければならない。さうやつて私達は四時間の間——天氣ならば二時間もかゝらないのに——その尾根の上に風と雷と霰とにさらされ通しで居た。

それ故ピック・サントラールから最後のアプザイレンで氷河の上に下りた時の感じは全く變なものであつた。緊張の後の空虛。危險から解放せられた安心、と同時に過ぎたその時間に對する云ふに云はれない不思議な執着。こんなものが雜然と私の心を滿して居た。

振りかへると尾根の上はまだ雲に蔽はれて居る。百メートル上のあそこでは今もまだ頭の毛が天に向つて立ち、ピッケルが魅惑的な音をたてるのだ。

私達は綱を一本にして氷河を急いだ。知らない土地で日が暮れてはやり切れない。それに霧までがまいてくる。その霧の中で私達をタビュシエの氷河の中に失はれてしまふ事から救つて、驚くべき正確さを以てロシエ・ドゥ・レイグルの小屋につれて行つたのは、全くエミールの「感」であつた。

小屋には薪一つない。たゞ食卓と椅子とだけがまだ燃やされずにあつた。濕り切つた綱を漸くの事でほどいて、少しばかり食物をとる。考へて見ると小屋を出て以來殆んど何にも食べてゐない。

小屋からの下りは見通しがきかないために山稜を選ばざるを得なかつた。質の脆い、濕りきつたスレイトのその山稜を下ると云ふ事は第一全く面白味のない事であり、又非常に骨の折れる事でもあつた。

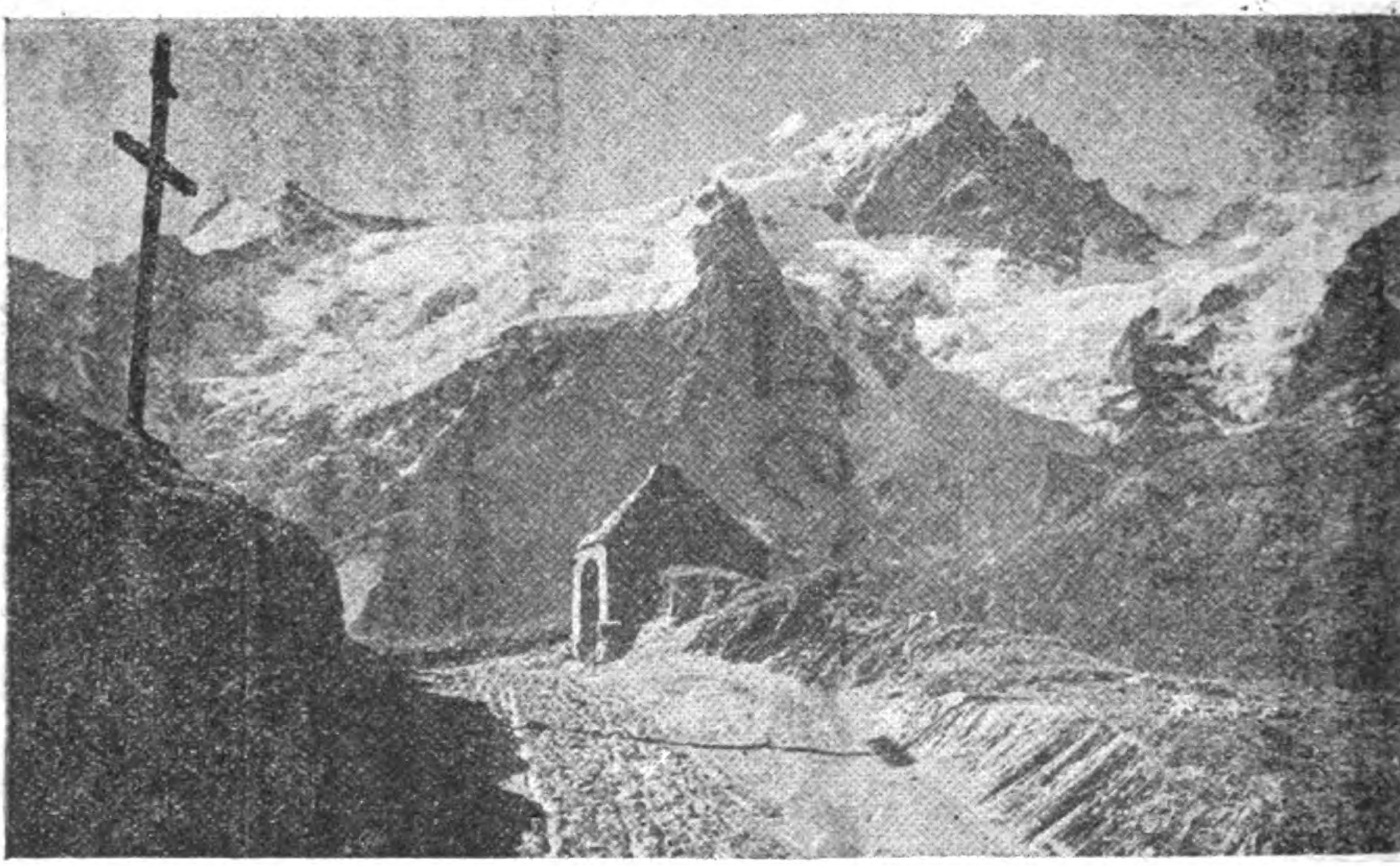
下は雲であつた。羊の群が枯草のアルプにしよんぼりと私達を迎へる。里は近い。

泥で見えなくなつた靴を、ロマンシュの流れで洗ひ出して、ラ・グラーヴに入つたのは、もう日の暮れ〴〵であつた。

食堂から出て來た人々が、帳場の前にたつた私達をとりまいた。私は、何故かその人達をマリオネットの人形達か何かの樣に觀じた。電氣をかけられたせいか、何となく自分達がその人達とまるでかけ離れた世界の住人である樣に考へないわけに行かなかつたのだ。今から考へれば雨に濡れしよぼれた泥々の四人づれを異樣の生き物と眺め入る方が確かに人間らしい事だつたに相違ないのだが。

濡れた着物をぬいだが下着の他に着がへはない。仕方なしに生蕃の樣に毛布をまいた。食事を部屋に運んでもらつて食べる。なりがなりだものでマリオネットの世界に出る事が出來ない。

## 四



ラ・グラーヴ側、即ち北より見たるラ・メイジュである。グラン・ピックに迫つて居る二つの氷河の右はメイジュ氷河、左はタピュシエの氷河である。

ラ・グラーヴの朝は朗かであつた。暴しのあとの澄み渡つた空に、朝日を受けてくつきりと浮び出したメイジュの美しい尾根。谷を隔てゝ望まれる八千尺の懸崖と新雪に装はれたグラン・ピック。

私達はたゞ嬉しくて小さな村をうろついた。ロータレに行くトンネルの方へ上つて行つたり教會の庭に上つて行つてその眺めを貪つた。或は又、壁と壁とにはさまれた路地の峡間を通して、その恐ろしく聳えたつたグラン・ピックを仰いだ。さうして一わたりうろついた後で漸く綱を太陽に干したり、荷物をかたづける事にかゝつた。

勿論あの恐ろしく澄んだ空がもう眞夏のそれではなく、既に秋の空を想はせるものであると云ふ事は、私達の心の何處かに暗い陰を投げないわけではなかつた。それにしても私達の掴んだ機會は或は此の年の最後の機會であつたかも知れない。メイジュは薄氷がかゝつては全く近よれない山であるし、秋の太陽は眞夏のそれの様にその氷を溶かして乾かす熱を持つて居ないのだから。

その日私達は幾度びか此の眺めを見かへり乍らロマンシュの谷を下つた。ロータレの峠から來た乗合は私達を乗せたら一杯であつた。子供達が走つて行く自動車に香りの高いラヴアンドの花束をなげつける。買つて與れと云ふのだ。

乘合の事故、某の瀧、某の峽谷と車掌が說明する度びに車は速力を弱める。ブール・ドアザンの村では車が一休みする間あたりを步いたが、何を見ても心を引くものがない。さうやつて私達の心はまだドフィネの眞中をさまよつて居る內に、私達の身體は容謝なく、グルノーブルの町中に運ばれて來てしまつた。新雪のあとのあの山々で、全く何が出來やう。何の頂きも雪と氷で鎖されて手におへるものはありはしない。それを百も承知の上であり乍ら、何故か强く心がその山々の中に殘つて仕方がない。

一週間後の事エギーユ・ダルジャンティエールの頂上に、私達はもう一度メイジュの頂きを——併し遙か〳〵遠くに見た。

それは全く賴りない程遠くに望まれたのに過ぎなかつたけれ共、私達四人は聲を擧げて歡んだ。

エタンソンの谷から見上げたあの赭い岩壁、誠に『岩山の女王』の名に相應しいその姿が先づ記憶の中に呼びかへされる。さうして、人間と云ふよりは凡そ生物の香りの乏しいその谷の空氣、それが殆んど抵抗すべからざる力を以て私の心を引きつけて居ると云ふ事を、私は此の時本當に悟つた。

# 山の憶ひ出を辿りて

木暮理太郎

## 一、白峯北岳

日は忘れたが明治二十六年の八月であつた、初めて木曾の御岳に登つた時、兼てこの山は高さ一萬七百尺、日本第二の高山であると地理書で敎へられ、又近所の御岳講の講中で登山したことのある人の話にも、頂上からは富士山が高く見えるだけで、外に目に立つ山は無いと聞かされてゐたので、さうと許り信じてゐた私は、意外な眺望にすつかり驚いてしまつた。成程南には目ぼしい山もなく、西には遠く白山

が桔梗色にふはりと横たはつてゐる丈であつたが、北はどうだらう、つい鼻の先に、鞍の輪のやうに或は猫の耳のやうに双峯を對峙させた、頂上の小さい割りに恐ろしく根張りの大きな山が立ちはだかつてゐる。何だか自分より高いやうな氣がする。頂上より一段低い南側の斜面に眞白く殘つてゐる雪の量も、この二ノ池の西側に積つてゐる雪などよりはずつと多い。御岳講の人がこんな素派らしい山に氣が付かないとは不思議なことだ、何山だらうと考へる。すぐ乘鞍岳の名が頭に浮んだ、絶頂の形が如何にも鞍に似てゐるからである。地圖を見ると果して乘鞍岳の名が大きく記入されてゐるので、同じ大さの文字で記入されてゐる立山と共に、附近に匹敵するものなき高峰たることを表はしてゐるのであらうと思つた。常時携帶してゐた地圖は、陸地測量部發行の輯製二十萬分一の圖で、私は此圖が一枚に繼ぎ合されて、明治二十三年の勸業博覧會に出品されてゐたのを見て、かうも詳しい地圖があるものかと感心してしまひ、漸く手に入れて鬼の首でも取つたやうに秘藏してゐたものである。然し實際使用して見ると、唯大體の位置とか方向とかを知るに差支ないといふのみで、登山には全く役に立たないことが多い許りか、時には大に迷惑することがあつたにも拘らず、他に良地圖がないから止むなく用ゐてゐたのである。其頃農商務省地質局から兎に角測量した地形圖の發行されてゐることなどは少しも知らなかつた。

乘鞍岳の後には、三峰駢立して、恰も穂先が三つに分れた槍のやうに、鋭く天を刺してゐる山がある、山骨稜々たる岩山であることは、遠目にも判然と認められた、山肌に喰ひ込んだ雪がきら／＼と光つてゐる。これは槍ヶ岳に相違あるまいと斷定したが、三峰の中の左が槍で、中央が奥穂高、右が前穂高であることは知る由もなく、一座の槍ヶ岳が峯頭三岐したものと考へてゐた。これが後になつて穂高登山の機會を逸せしめた一の源因となつたのは是非ないことである。槍ヶ岳の右にも亦左にも、肩から上を抜き出してゐる高い山の幾つかゞ見られたが、どれも名を知らない山ばかりである。

轉じて東を眺めると、長大な連嶺が横一文字にすうと屏を壓して聳えてゐる、高さはこゝより低いやうであるが、これは又何と長いことか、掻き退けたいやうな胸苦しい壓迫を感ずる。この山は駒ヶ岳であることは疑ふ餘地がない。更に驚いたのは、この高い駒ヶ岳の連嶺の上に、十指を屈して尚ほ餘りある大岳がづらりと並んでゐることであつた。私の貧弱な山の知識にこれが驚異でなくて何であらう、暫くは膽が硬張つて息もつけぬ程だつたが、漸く身も心も落付いてからよく見れば、それらの山の一つ一つが皆違つた形を持つて、強く存在を主張してゐる。富士山も勿論其中にあつた。私の眼は富士の左の方に一

際高く聳立してゐるかと思はれる稍や圓錐形の山に惹き付けられた。北の槍ヶ岳のやうに惟奇ではないけれども、凛々しく引き締つた威嚴のある山だ、それに高さも高い。二ノ池の小屋の主人に山名を尋ねて見たが知らない、幸に泊り合せた駒草採りの男が居て、「あれは甲州の山で白峯といふのだ」と教へて呉れた。私は此時初めて遠く御岳の頂上から白峯に長揖したのである。

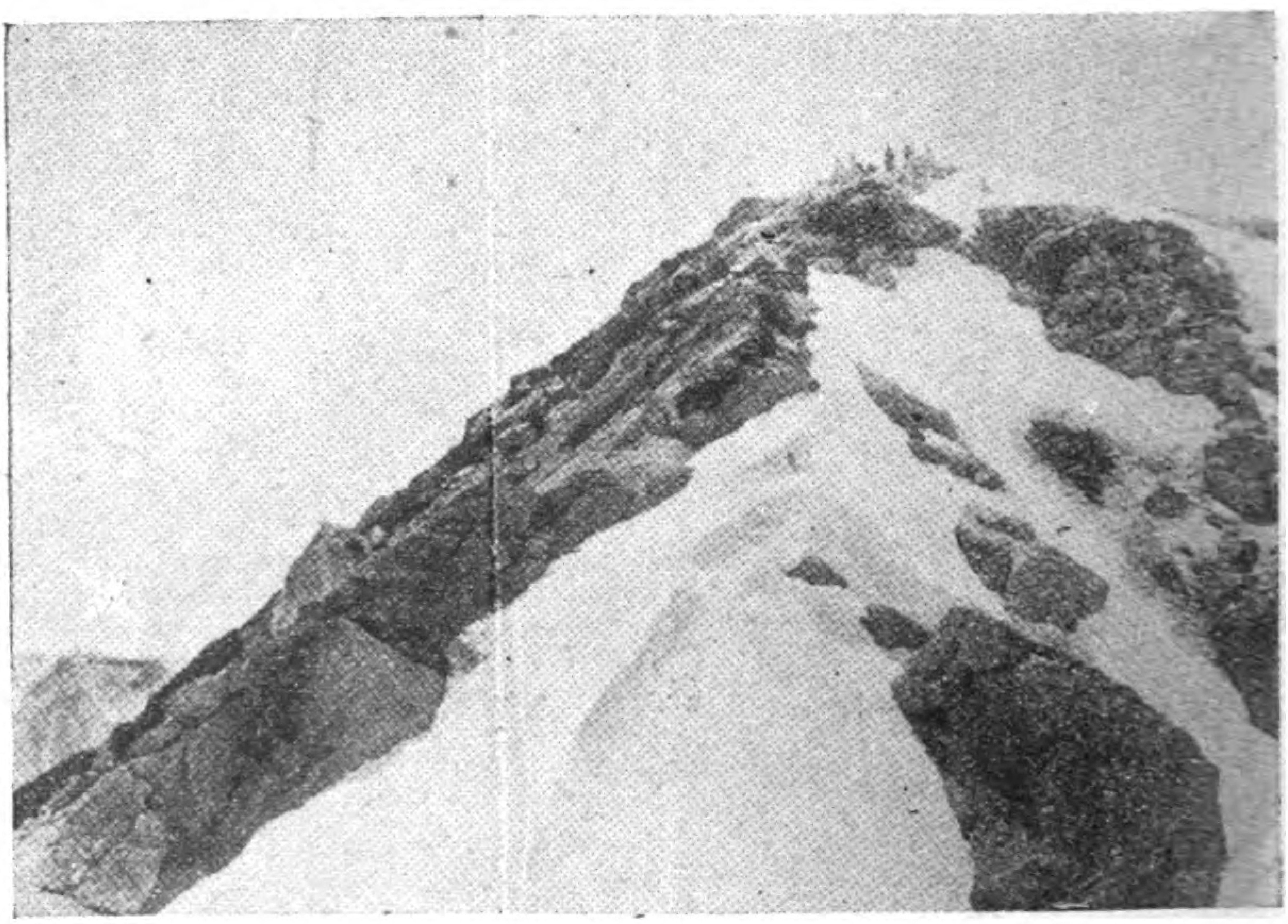
志賀重昂先生の「日本風景論」が出版されて、東都の紙價を高からしめたのは、翌明治二十七年の十月であつた。私は其時仙臺に居たので、初版も再版も手に入らず、漸く第三版を購ふことを得て、再讀三讀した。それで明る二十八年の夏には、風景論に記載された花崗岩の高峰を片端から登る積りで、立山からの歸途、先づ槍ヶ岳へと志して島々に行つたが、不幸にして案内者が得られず、それなら一人で登らうと主張したところ、熊が多いから危險であると嚇されて終に斷念したのは、今考へると實に遺憾で、せめて上高地から穗高へ登る可きであつた。このことは島々で勸められたのであるが、それ程の山なら御岳から見えぬ筈もなからうし、且又風景論にも記載が缺けてゐたので氣にも止めなかつたのは、何と云はれても致方ない失策であつた。

槍ヶ岳の登山が阻まれたので、大野川から乘鞍岳に登り、再び御岳を擧ぢ、黑澤から駒ヶ岳に登つて、玉窪の小屋に一泊し、宮田に下り、こゝで甲斐駒の登路を質問に及んだ。すると此處では分らぬから高遠へ行つてお聞きなさいと教へる。高遠で聞くと、それは溝口まで行かなければ確には知れないと答へる。かうして最後に辿り着いたのが黑川に沿うて一里ばかり遡つた、人家僅に二戸の戸臺であつた。小松傳彌といふ人の家に泊る。小黑川の奧では盛に伐木してゐるので、大きな家の土間から表座敷にかけては、人夫やら請負師やらで混雜してゐる。湯から上ると親方らしい精悍な男が來て、お前さん字が書けるだらう、一つこの上書きを頼むと言ひながら、綴ぢの帳面を五六册持ち出した。厭ともいへず言はれる儘に書いてやると、お禮に其日人夫が採つて來た三百目許りの松茸の走りをくれた。大したものだ、三圓がものはあると大勢が評價する。それを灰の中で蒸し燒にして晩食の膳に上せたのは、思ひ設けぬ御馳走であつた。

明れば忘れもせぬ八月十七日、暴風雨を突いて駒ヶ岳に登つた。尤も出掛る頃はよく晴れてゐたが、南風が少し強く吹いて山の頂には雲が纏つてゐたので、盆の翌日ではあり、老年のお婆さんは心配して、何くれとなく注意してくれた。尾根には水が無いからと、まだ少し靑い林檎を二十も買つたのは、重くて閉口した。主人は半紙に描いた登

路の略圖を渡して、近年登る人が殆どないから路が消えてゐるやうも知れぬ、河原を離れて尾根に上る所には、目じるしとなる大きな岩が立つてゐるから、注意して見失はぬやうにと再三念を押した。そして別れ際に甲州へ下つたら知らせてくれるやうに、はい必ず知らせますと約束しながらそれを果さなかつたのは、濟まないことをしたと今も思つてゐる。

　この日の荒れは可なり强いものであつた。涼しい朝風に吹かれながら心地よく河原を辿り、赤河原から川を離れて尾根を上る頃にはもう雨がぽつ〱落ちて來た。濃霧があたりを罩めて、黒木の林は夕闇に襲はれたやうに薄暗くなる。林には縞栗鼠が非常に多く、群を成して木から木へと跳び移つてゐる。時には二三尺の距離まで近寄つて來る。せめて一疋でも捕へて見たいと思つて、其度毎に荷物を投げ出して追ひ廻したけれども、どうなるものでもなかつた。風は次第に勢を増して、頭上でも谷底でも物凄い音を立てる、たまに木立の隙間から谷の空を見上ると、百千の蝗のやうに木の葉などがちぎれ飛んで行く。其中を覺束なくも細徑を拾つて、獨り登つて行くのは心細くないこともなかつた。それでも林の中はまだよい。木立が盡きて花崗岩の蝕爛した砂地に偃松などの點綴した斜面に出ると、風の勢が急に一しほ加はつたやうに烈しく吹きつける。殊に刀利天から上は、横なぐりの風と雨とで立つて歩けない。地に伏し岩に抱き付いて匐ひ上つた。蝙蝠傘も糸立も用をなさないのみならず、吹き飛ばされる心配があるから、ぐる〱丸めて腰にさした。そして濡れに濡れて頂上に着いたのは午後三時頃であつたらう。幸運にもこの時の風は南で、しかも磯臭いと思はれるほ



甲斐駒ケ岳の頂上（五月）―橋本鉃四郎氏撮影

ど生温るいものであつたから、濡れても一向に寒さを覺えず、岩陰に雨を避けてゐると、體温で衣服も乾く有樣であつた。

頂上には測量の櫓が黑く焦げて立ち、柱の一本は無慘に碎かれてゐる。少し北寄りの大きな岩の蔭に天幕が張つてあつた。試に内を覗いて一泊を乞ふたところ、暗い奥の方で、何處から來た、こゝへは泊められない、二里半下ると小屋があるから其處へ行つて泊るがよいといふ聲がした。頂上で一夜を明し、翌朝の大觀を心ゆくまで味ふことにしてゐた私は、それには頓着なく、雨を凌げさうな岩蔭を探してゐると、樽を背負つた人夫が出て來て、これから下るのは大變だ、わしが旦那に願つて泊めてやるから、水を汲んで來るまで待つてゐなと親切に言つて呉れた。お蔭で天幕の片隅に寢られたのは難有かつた。聞けば二三日前櫓に落



南より見たる白峯北岳（右）と甲斐駒（左）（前川滿壽雄氏撮影）

雷があり、それから感電して二人は即死、一人は大怪我をなし、今朝山から背負ひ下した許りとのことであつた。

夜が明けても風は收まらず、曇つた空からは未だ雨が落ちてゐた。然し雲は高いので鳳凰山や地藏岳の上にはつきりと富士の姿も眺められる。南方は間近い山の巓に屯した一團の亂雲に遮られてゐたが、其雲が次第に消え去ると、水淺黄に澄んだ晴空が露れて、其處に雄渾極りなき一座の山の姿が翻然と描き出された。思ひ切り右に張つた肩の彈力ある線のうねり、まるで青竹を撓めたやうにはち切れさうな力が籠つてゐる。それからグイとのし上つた峯頭は稍右に傾いてはゐるが、均齊の美を缺く程ではない。巓は小さく根張りの大きいことは、御嶽から眺めた乘鞍岳と同樣である。唯全體に少し痩せて峻嶒の感が遙に

淋しい。九合目あたりの萌えた緑の若草の色かと想像したけれども、それは雨に洗はれた偃松であつたらう。何にしても男らしい山だ。私は思はず飛び上つてあれは何山だらうと叫んだ。其時に天幕から首を出した水汲みの人夫は、笑ひながら「あれは白峯だに」と答へる。白峯白峯。私の記憶は甦へつた、さうだ、白峯だ、曾て御嶽の頂上から遙拝したあの白峯の北岳だ。

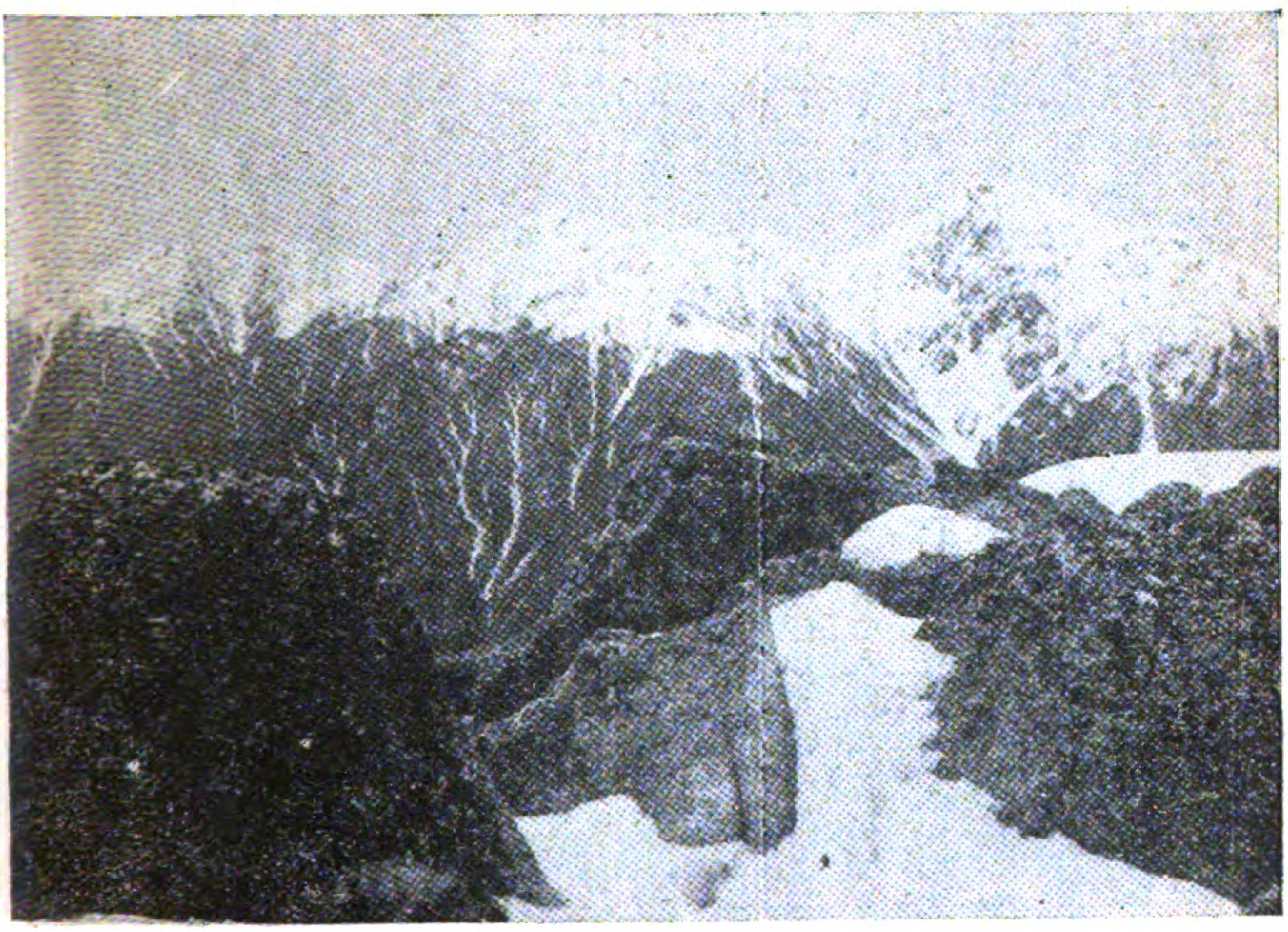
私は遠からず此山に登らうと固く決心した。

明治三十年の夏、三たび御嶽に登つての歸るさ、權兵衛峠を踰えて伊那に出で、再び戸臺を訪れて、また小松方に一泊した。小黒川の砂防工事業は既に完了したものか、谷間はもとの静寂に返つて、往來の人影も稀である。主人に一昨年の禮を述べ、白峯登山の目的を話して相談すると、白峯に登るには野呂川の廣河原の小屋まで行かなければならない。わしは登つたことはないので、いゝかわるいか知らないが路は通じてゐるさうである。早朝出發すれば一日で往復されるといふし、途中のお池の側にも小屋があると聞いてゐる、遲くなれば其處へ泊るもよからう。野呂川の谷には多數の人夫が入り込んで小屋掛してゐる。明日はお盆の十三日に當るから、人夫衆は里に歸つたらうが、小屋に番人は居る筈である。こゝから廣河原まで一日でも行かれるが、慣れぬ人が無理をするでもないから、明日はゆつくり立つて北澤の小屋に泊り、次の日廣河原に行きなさるがいゝ、さうすれば足も疲れないから、一日でお山をかけるにも都合がよからうとの話だつたので、すつかり安心して翌くる朝遲くまでぐつすり寢てしまひ、宿を出たのは午前九時頃であつた。

涼しい筈の朝の谷間も、日が高いので河原の石は焼けはじめてゐた。寫眞も撮さなければ記録も取らない、至つて暢氣な旅でありながら、支度といへば單物に輕衫草鞋、荷物といつても着換の單物二三枚にシャツ一二枚、それに寒さの用意として眞綿入りの筒袖襦袢二枚、それを油紙に包んで振分けにして肩に掛けた身輕さの爲か、ゆつくり歩く積りでもいつか急ぎ足になつてしまふ。駒ケ岳への道と岐れ、暫く澤に沿うて遡るとやがて道は繁つた林の中に入り、一時間も登るともう峠の頂上で、間もなく北澤の小屋に着く。大きな小屋はひつそりとして人の氣配もない。こゝに泊れと勸められてゐたが、未だ正午にもならないし、この調子なら廣河原まで行かれぬこともあるまいと、用意の晝飯を濟して、河に沿うた道を急ぎ下つた。危險な所には針金が張つてあり、路も修繕が行き屆いてゐるので、二ケ所ばかり淺い徒渉をした外には、記憶に殘る程の出來事もなく、夕方廣河原の小屋に着いてしまつた。途中二三の小屋もあり又四五人の岩魚釣りも見掛けた、これは或は小屋の番人達の慰であつたかも知れない。

廣河原の小屋には老人が二人殘つてゐた。明日蘆安に歸るといふ老人の一人は、二度北岳に登つてゐるさうで、今一日早く來れば、わしが案内して上げたに、惜しいことをしたといふので、もう一日歸りを延して明日案内して貰へまいかと持ち掛けて見る。今日歸る筈の所を一日延したので、明日はどうでも歸らなければならぬといふ。止むなく路筋の模様を詳しく聞いた上、半紙に略圖を描いて貰つた。

翌朝は漸く足元の明るくなつた頃に小屋を立つて、教へられた澤を遡つた。老人は澤の入口まで送つて來て、別れ際に、お池からの上りが分りにくいと思ふから氣を付けるやうにと注意する。そし



地藏岳より白峯三山を望む—五月（橋本欽四郎氏撮影）

て薄雲りの空模様を眺めながら、獨り言のやうに晝から雨にならねばよいがと呟く。澤はさして水量は多くないが岩は大きい。其上をあちこち跳びながら傳つて行く面白さに、側目もふらず登つて行く。澤が急に狹くなつて左右に崖が現はれる、オヤと思つて立ち止まつた、どうもお池への上り口は何時の間にか通り過ぎてしまつたらしい。後を顧ると、黑木の繁つた駒ケ岳續きの連嶺が澤の口を塞ぎ、その五合目あたりと向ひ合つてゐる。行手には谷の奧に北岳の肩から胸のあたりが間近く望まれ、赤黑くむき出しになつた谷の筋が幾本も山肌に刻まれてゐる。所々漆喰を塗り固めたやうに白く殘つてゐるのは雪だ。それを見る

ともう引返す氣にはなれない。よしあれを何處までも登り詰めやう、針ノ木峠よりひどいことはあるまいと、其儘前進を續けた。

老人が懸念したやうに空は次第に雲行きが怪しくなる。狹くなつた澤はまた廣まつて、河原には小石交りの砂地が現はれ、勾配も緩やかで、あたりは流木が狼藉してゐた。こゝで澤が三つに分れる、左のものは殘雪が最も多いので、之を登りたいと思つたけれども、頂上からは餘り東に寄り過ぎた肩のはづれへ登り着くらしいので止めにする。中央のものは細く急で取り付けさうもない。それで右のものを登ることにした。始めは傾斜もゆるく樂に登れたが、澤が二岐してゐる所を取つてからは、俄然急峻の度を増し、小瀑布が連續して現はれる。瀑を押分けて高い崖の上を迂廻したり、瀑のしぶきを浴びながら梯をへずつたりして、三時間餘りも惡戰苦鬪を續けた後、未だ尾根に出られないで一休みしてゐる中、終に雨が降つて來た。かうなると早いもので、瞬く暇に濃霧はあたりを罩め、歸りの望さへ覺束なくなつた。餘儀ないで元の道を引返したが、へとへとに疲れて小屋に歸つたのは、カンテラの光が雨の中にぼうと滲み出す黄昏時であつた。

明くる三十一年の夏、鳳凰山に登つた序に南御室から再び廣河原に至り、去年と同じ澤筋から今年こそ白峰の絶頂を極めんと、人夫を一人同伴して、今度は三岐した左の澤を登り、カンジキを持たない爲に非常な困難で苦しめられたが、午前十時頃東の肩に辿り着き、直に頂上を指して雲霧の中を過ぎた頃、俄や大雷雨に襲はれ、またも絶頂を極めずして下山するの止むなきに至つたことは、容易に忘れ難い憶であつた。

私が北岳の頂に立つことを得たのは、それから十數年の後である。

## 二、朝日岳

鬱蒼たる森林があり、清い谷川が流れ、其上に高山植物と殘雪との美しさを兼ねた、そして人間の訪づれたことのない險峻な境地を、有るが儘の姿を失はない中に尋ねて見たい。さうした考で私は友人田部、森の二君と倶に三人の人夫を伴ひ、越中小川の谷から黒部川の北又に入り、支流惠振谷を遡つて、白馬岳の北に尙は八千尺近い高度を保ちながら、世に忘れられてゐる朝日岳を探つたのであつた。大正六年七月二十四日から二十七日に至る四日間は、短い旅ではあるけれども、樂しい思ひ出の深い印象となつて殘つてゐる。

小川の谷は想像してゐたよりも荒れすさんでゐた。いつも谷に入る毎に「吸ひ込まれる」といふ氣持で一杯であるのに、この谷では吐き出され度さへ思つた。小川温泉の元湯のある所は、谷間とはいひなが

ら、海岸から三里足らずの距離であるにも拘らず、附近に殘雪が見られたのは、如何に積雪量の多いかを語つてゐる生きた證據だ、涼しい聲の河鹿やひぐらしは盛に鳴き立てるが、木蔭のない河原の砂や小石は日に燒けて、其上に張つた天幕の中は、寢苦しい程蒸し熱かつた。

小川の谷から越道峠を踰え、小さい谷に沿うた道を下つて、北又に達した。峠の頂上からは殘雪美しい淸水、猫又の連嶺が東南に望まれる。北又の水量は思つたよりも多かつた。これから流に沿うて惠振谷の落口まで遡らなければならない。徒渉二十餘回、一時間を要する。中にも一枚岩の河床が雨樋のやうに抉れて、一丈近い飛瀑を奔下させてゐる上を徒渉した時には、皆危く足を浚はれる所であつた。

魚止瀑に近づくと谷は一曲して左に折れ、絕壁の間に長い瀞をなし、四五十間にして又右に曲り、それから奥は如何なつてゐるか知ることが出來ない、唯だ何處ともなくごうといふ地響のやうな音が聞えるばかりである。私はこゝで不思議な現象を經驗した。谷が左に曲る下手の所は、瀞から押出された小石が積まれて淺い瀬をなしてゐる。



南より見たる朝日岳(又木周夫氏撮影)

其中を歩きながらふと行手を仰ぐと、すぐ前の低い尾根の梢越しに一條の大瀑が懸つてゐる。ほんの落口だけしか目に入らぬけれども、低いとはいへ尾根を越して見えるのであるから、これは餘程の大瀑であるに相違ないと想つた。皆に注意してやりたいと思つて、暫く其處に待つてゐる中に、外の事に紛れて誰にもいふことを忘れてしまつた。然し附近にそんな大瀑のあることは話にすら聞かない。或は魚止瀑のことを始終念頭に置いたので、それが幻覺に現れたのか、謎は未だに解けないでゐる。

瀞と絶壁で前途を塞がれたので、雪崩の押した急峻な小溪を傳つて尾根に登り、川の樣子を窺つた。どうも惠振谷の落口へは絶壁續きで下れさうもない。止むなく尾根傳ひに登ることにして、木立を縫ひ藪を押分け、五時間も登り續けたが、前面に見えてゐる雪までは、近いやうでも容易に達せられない。人夫はこれから惠振谷へ下りて夫を遡る方が尾根を辿るよりも得策であるといふ。晝から少しも水を飲まないので皆喉が渴き切つてゐる。下るとなれば一刻も早い方がよい。それで左の谷を目懸けて、懸樋のやうな岩の窪を木につかまりながら百五十米も下ると、細い谷に淸冽な水が流れてゐる。一同飽まで夫を飲んで漸く蘇生の思ひをした。更に尾根といふ程でもない小さな隆まりを二つ踰えると惠振谷の河原に出て、其處に野營した。落口からは百三四十米の高距にある地點である。

野營地の附近は水楢、橡、栂などの大木が欝蒼と繁つた見事な闊葉樹林である。河原の平な砂地にピンと形よく天幕を張つて、淸い水に一日の汗を洗ひ流し、ゆつたりした氣持で焚火の周りにくつろいだ心地は、いつものことながら實に好い。夜は蒸し暑いこともなく、朝は火の側が戀しい位であつた。

午前七時半に野營地を立つて、雪溪の終りまで登り詰めたのが午後二時であるから、休憩時を合せて七時間近くを費してゐる。懸崖と深潭と、瀑布と奔湍との連續ともいふ可きこの谷は、小規模ながら人の冒險心を滿足せしむるに足る要件を備へてゐる。今にも崩れ落ちさうな雪橋を渡つたり、綱を用ゐて懸崖を人と荷物と別々に下ろしたり、岩壁の一寸した窪みに手足を托して、危く瀞の上を横にへずつたり、又は守宮のやうに壁にへばり付いて、飛沫を顔に浴びながら瀑を超えたりする。下から仰ぐと大盤石の林立した中を水は小躍りして落ちて來る。普通ならば疾くに雪溪となる可きものが單に雪の斷續するに止まつてゐる、そして漸く雪溪に辿り着いたかと思へば、そこは最早山腹の緩い傾斜地で、雪溪の便を借りなくとも樂に登れる場所である。

雪溪が終つた頃、正面に左右同じ程度の高さの山が現れる。どちらに登つた方がよいか、樣子を見る爲に右の尾根に登つた人夫が忽ち「熊、々」と大聲に叫ぶ。この事あるは今朝から絶えず暗示されてゐた。兩岸に生えてゐる大虎杖の若芽が嚙み切られてゐる跡を注意して見ると、初めは切り口が褐色に變つてゐたのが、上るに從つて次第に新しいものとなり、雪溪の間近では生々しい液が未だ乾かないでゐた。口に出してはいはないが誰も熊の居ることに氣が付いてゐたらしい。歸つて來た人夫に聞くと四頭も居たといふ。私はちらつと二頭しか見掛けなかつた。

もうあたりの山はどれも矮性の灌木を交へた一面の草原で、大きな

残雪が其間に様々な形を描いて美しく横はつてゐる。どの山に登り着いたにしても、目的の朝日岳に遠くないことは確であるから、左の山腹を登り初めた。足もとに點々として高山植物の可憐な花が風にゆれてゐる。偃松が出て來た。少し登ると傾斜のゆるい高原狀をなした段に出る、一面に岩銀杏を敷き詰めた緑の地に、白山一華と珍車の花が白い模様を織り出してゐる。蝦夷塩竈の紫花、白山小櫻の紅花、深山キンポウゲの黄花など、色とりどりに美しい。登るに從つて植物の光景も多少變つて來る。高根薔薇の艶麗、高根撫子の可憐、黄花石楠の濃艶に加へて、伊吹麝香草、車百合、千島桔梗などが現はれ、少し岩の露出した所には、姿のいゝ眞栢や唐松などが生えてゐる。苔桃や岩高蘭も多い。間もなく一の山の頂上に達したが、それは朝日岳ではなかつた。南に向つて同じやうな隆起を三つ許り踰えると、朝日岳の頂上に達した。



雪倉岳附近（又木周夫氏撮影）

頂上は西南の方向に長い高原狀を成してゐる。雨にさいなまれ風に虐げられながらも、自然の儘の恣なる草木の姿よ。皆は荷を投げ出してそこらを歩き廻つた。得撫草や、白馬岳では殆ど絶滅に瀕した白馬淺葱の多いのが人目を惹いた。頂上の東側は矢張り草原で、絶えず大雪田が續いてゐる。附近に適當な野營地が見當らないので、惜くも頂上を南に下り、赤男山との鞍部より百米ばかり上の所で、大雪田から音を立てゝ水の流れ落ちてゐる窪に天幕を張つた。こゝからは南に雪倉、白馬、旭、猫又、劍の諸山が見られ、東には妙高火山群と岩菅らしいものが望まれる。

久振りで夜明けに聞く時鳥の鳴く音は耳に快かつた。毛勝連山の上にぽつかり浮き上つた白山を見付けて覺えず聲を擧げる。これから雪倉岳に至る間の山稜は、全く雪と高山植物との樂園とも稱す可く、一々其名を擧ぐるの煩に堪へ

ない。東側には廣い窪地が續き、偃松と雪との配合が千差萬別で實に面白い。それでも一ケ所雪倉岳への登りに、赤石岳の南側のやうに巨岩の堆積したキレト狀の場所があつて、岩壁には無數の岩燕が群れてゐた。この岩壁は樂に踰えられる。第一の小隆起を登つたところに、草色の水を湛へた瓢形の池がある。私達はそれを雪倉ノ池と命名した。此附近は恐らく白馬連山の中で、最も整つた自然の高山植物園ではあるまいか。私は幾度も〳〵足を停めて、偃松の間に咲き誇る鮮紅な高根薔薇の花に見入つた。

私達は其日の夕方に白馬岳の頂上に着いた。そして無慘に踏み荒されたあたりの光景に對して、鱗粉の剝げ落ちた秋の蝶のみじめさを想ひ出さずにはゐられなかつた。

# 宇垣一成論

鶴見祐輔

## 一

『宇垣といふ男は、少々大きい聲を出しても、逃げ出さない男だ』

さう言つて、尾崎咢堂氏が、宇垣一成氏を批評した相だ。

そこに宇垣一成氏の今日の人氣の根底がある。

彼はその風貌の示すやうに、非常に重厚な、信念のある人物だといふ印象を、大勢の人に與へてゐる。その印象がいつとなしに漠然と、全日本に擴がつて、宇垣といふ聲が、一般日本人の脣に上つてゐるのだ。

日本はいま、經濟上社會上の過渡期に立つてゐる。その急激に來た變化に戸惑ひして、大勢の國民が精神的に非常な不安を感じてゐる。それがそのまゝ寫眞のやうに出てゐるのが、今日の畸形的な政狀だ。

さういふ時に大勢の人が、暗中に模索するやうに求めるのは、頼りになる人物、どつしりとして動かない男だ。それに丁度誂へたやうに出來上つてゐるのが、宇垣一成といふ人の風貌だ。會つての感じだ。今までの仕事ぶりだ。

そこで何時ともなしに、宇垣だ、宇垣だ、といふ評判が出てきて、インキが吸取紙に擴がるやうに、日本中にひろがつていつたのだ。

それは今日の日本の政界が、如何にも人材拂底だからだ。今まで國民の囑望してゐた人が、或は死し、或は老いて、世間視聽の外に沒してゆくと、後に殘つた僅かばかりの人々が、夕方の星のやうに、急にきら〳〵光り出すのだ。

その一つの星が宇垣一成氏だ。

## 二

『田中内閣が倒れたら、後は誰だらう』

誰だつて、さう考へて見ないものはない。いかに贔屓眼に見ても、政友會内閣の命數はもう定まつてゐる。その倒れた後に一たい誰が來るかといふことが、大勢の人の念頭に浮むことだが、憲政常道論でゆけば、濱口、さうでなければ、宇垣、と大勢の人が考へてゐる。

民政黨が自分の力で、政友會内閣を殪せば、この次の天下が民政黨にゆくことは、誰だつて疑ふものはない。ところが、今のところでは、政友會内閣は民政黨の力では倒れさうもない。むしろ内からの破綻で倒れるか、乃至は政友會以外の聯合勢力の包圍攻撃で殪れさうだ。

さうなると、この天下は民政黨だけにゆくと定まらない。それではどこへ往く。

色々な名前が擧げられる。齋藤實、山本權兵衞、床次竹二郎、平沼騏一郎、伊藤巳代治、ところが、大勢寄つてたかつて、あれでもない、これでもないといつてゐるうちに、何時とはなしに、宇垣一成だといふ人が多くなつてしまつた。成程といふ人が多くなつてきた。

そこで宇垣一成といふ名前が、山を出でざる謝安のごとく、隱然として天下を動かすやうになつてきたのだ。今ごろ田中内閣の拓相などになる彼ではない。

しかし彼は果して今日世間で買つてゐるだけの人物であるのか。又昭和時代といふ民衆政治の時代の政治家たる手腕と人格とを具へてゐるのか。

それを檢討する前に、我々は先づ彼の過去を一瞥して見る必要がある。




### 三

彼は岡山縣和氣郡の出身で、彼の兄は今でもその村の村長をしてゐる。彼は日清戰爭直後に陸軍士官學校に入校したが、當時は軍人熱の全盛時代で、從て秀才が爭つて陸軍を志願したので、競爭は仲々激しかつた。しかし彼は在學時代は、大して糞勉强もしないで、悠々と上席を占めてゐた。卒業の時は恩賜の軍刀を頂いた優等生の一人で、たしか三番か四番であつた。その當時から頭腦の明晰と常識の發達との故をもつて、未來の陸相と言はれてゐた。

日露戰爭時分は彼は少佐位で、あまり順境でなかつた。參謀か何かで、川村景明大將の率ゐた鴨綠江軍について元山あたりから、滿洲に

攻め込んだ。從つて大した戰歷も擧げられなかつた。戰爭がすむと、暫らくして留學を命ぜられて獨逸に往つた。歸つて來ると、次第に彼の運の開ける時が來た。彼は拔擢せられて教育總監部の課長になつたが、それが明治四十一年であつた。その時に彼は陸軍諸制度の改革をやつた。それまで日本の陸軍は多く外國模倣であつたのを彼は日露戰役の經驗を基礎として、改良案を立て、日本獨特の陸軍制度を作つた。

それが認められて彼は陸軍省の軍事課長に拔かれた。その時の軍務局長が今の首相の田中大將で、大臣が上原元帥だつた。

その時に彼が更にその才幹を發揮する機會が來た。それは有名な二個師團增設問題だ。これが祟つて大正元年末に西園寺內閣が暗礁に乘り上げて、次に出來た第三次桂內閣が憲政擁護運動といふ大波にぶつかつたのだが、その政治的大暴風雨の發端であつた二個師團增設といふ問題で天下の耳目を聳めたのは、軍務局長の田中義一であつた。彼が朝野の老若政治家の間を縱橫馳突して、とう〳〵西園寺內閣の破產まで持つてゐつてしまつたやうに世間では見てゐたが、實はその蔭で一切の切り盛りをやつてゐたのは、渺たる陸軍大佐の宇垣だつた。彼が案を立て、田中を十二分に働かしたのだ。

ところが西園寺內閣が倒れると、軍務局長の田中は第一旅團長に出されて、間もなく洋行したが、彼は依然として新しい陸相の木越大將の下で軍事課長をやつてゐた。その時陸相の選任で手古摺つた首相の山本が思ひ切つて、豫後備將官でも陸海軍大臣になれるといふ官制の改革を決意して、木越に命じて立案させた。ところが課長の宇垣がどうしても承知しないで判を押さない。そこで一體なら懲戒免官にでもすべきところを、人物が人物なので惜んで死一等を減じて、名古屋の步兵第六聯隊長に左遷した。それと同時に木越も陸相をやめることになつた。この時分に、宇垣といふ男はたゞ者ではないといふことを、陸軍部內の人が認めるやうになつた。

彼は陸軍少將になるとまた元の古巢の教育總監部に舞ひ戾つて第一部長になつたが、この時に彼のした仕事は、大正七年の日支軍事協定だ。彼は北京に乘り込んでいつて、段祺瑞を相手にあの面倒な取定めを結んだのだが、これがまた彼に對支外交の知識を與へる機緣になつた。

それから歸國すると、田中參謀次長に招かれて、その下に移つて第一部長になつた。この時に彼は西比利亞出兵の中心人物になつた。

それから暫らく陸軍大學校長などしてゐたが、中將となると今度は姬路の師團長に出された。この時分は彼はあまり順境ではなかつたやうだ。

ところが原內閣のときに田中陸相が、また彼を引張り出して、次官にした。田中といふ男は世間の評判と違つて案外長閑といふことには淡泊であつた。

大正十二年末の虎の門事件で山本地震內閣が倒れて、清浦內閣が出

来ると、上原元帥などが福田大將を田中の後に据えて陸相にしやうとした。清浦も一時はこれに承諾の内意位は與へたらしい消息が、新聞に出てゐた。ところが田中が承知しないで、町田、尾野、河合などゝいふ陸軍大將を五六人集めて相談して、一體陸軍では大臣の變る時は、前大臣が後繼者を推薦する慣例になつてゐるのを、今度だけ變へるのはよろしくないといふので、すつた揉んだの揚句、田中陸相が該記五大將と相談の結果、三人の陸相候補者を清浦首相に出した。さうして三人のうちでも宇垣が一番よいと思ふと、裏書して出したので、大正十三年一月成立した清浦内閣に、宇垣が陸軍大臣として入閣したのだ。

四

清浦内閣が短命で倒れて、加藤伯の所謂護憲内閣が出來ると、宇垣氏が陸相としてその眞骨頂を示さなければならぬ時節が到來した。それは加藤内閣の政綱たる行政財政整理の一部としての軍縮だ。

その前にも軍縮は世界の大勢で、山梨陸相の時にも軍事整理はやつてゐたのであるが、加藤内閣の整理は隨分徹底してやらうといふのであつて、その眼目は陸軍であつた。

宇垣はこれを正面から引受けて立つた。

さうして彼が、陸軍の第二維新と呼ばれた大整理を斷行した。

彼は何人も斷行することを得なかつた師團の廢止を決行して、四個師團を減少し、二十五萬の常備軍を大約二十萬に縮少し、經費に於て二千五十八萬六千三百五十九圓の節約を行つた。あの時の行政整理の全額が六千八百六萬千百十六圓であつたのだから、三分の一を陸軍でやつたのだ。さうして一方飛行機、タンク等の新兵器の充實をやつたから、陸軍は量に於て減じたけれども、質に於て改良せらるゝの結果を見た。

當時陸軍部内にも強硬なる反對があつて、一時は軍縮は加藤内閣破船の暗礁となるかとの危惧すら抱かしめたのであつたが、彼の威望と手腕とによつて、遂に反對を排して實行してしまつた。

この結果、帝國陸軍としてはその新陣形成り、歐洲戰後の新形勢に順應するを得たると共に、政治的には加藤内閣は行政整理の完成を以て、護憲内閣の實を擧ぐることを得たのである。

しかし彼が、常鱗凡介にあらざることを示して、次第に政治家としての才幹を一般に認識せらるゝに至つたのは、この軍縮以外、國務大臣としての見識と態度とによつたのであつた。

その一つは、彼の所謂機密費事件に對する議會の應酬であつた。彼が前陸相田中大將に關する該質問に對し、一方は首相の答辯、他方は陸軍の名譽維持との板挾みとなりつゝ、率直簡明に徹した答辯は、敵味方を感服せしめた。その時から彼が議院政治家として亦、出色の人物たることを認めしむるに到つたのである。

この時尾崎咢堂は、本議場に於て宇垣陸相を面責し、辭句壯烈、言

々火を吐くの概があつたが、彼は大臣席に坐して泰然自若たりしのみならず、咢堂の演説終るや、ぷいと立つて出ていつてしまつた。その傍若無人の態度に、咢堂は彼の膽力を看取して、冒頭の如き言を爲したのである。

しかし彼の政友をして、特に彼に感服せしめたのは、普選案が貴族院の修正に會つて、進退兩難の窮地に陷つた際であつた。遂に兩院協議會の議には掛つたが、兩院固く取つて譲らないうちに、議會の延會の期日は切迫し到底通過困難と見へてきた。

その時若槻内相は、普選案にして通過せざるならば、内閣を投出すにしかずと主張し、加藤首相は寧ろこれを兩院の繼續委員會に移さうといふ意見であつた。然るにひとり黨外の閣僚たる宇垣が、頑として聽かず、飽く迄も普選案通過のために決戰せんことを主張したので、遂に閣内の形勢一變して、普選案は首尾よく成立を見たのである。當時の内情を知れる人々は、彼の勇氣を深く多とし、その將來を囑望するやうになつた。

ところが隱れたる事實として、彼の人となりを立證したのは、若槻内閣總退却の時であつて、彼は最後まで樞密院と鬪はんことを主張してゐた相だ。

さうして、若槻内閣が總辭職と決すると、彼は田中新首相の切なる勸告を辭して、閣員の連帶責任論から辭職してしまつた。

## 五

宇垣氏は内閣を去ると間もなく、兼任の朝鮮總督も罷めて、舊の武人に返り、軍事參議官の閑職についた。

ところが、彼が平の軍人になつて、政治に何の縁故もない軍事參議官になつてゐると、世間は次第に彼を目して後繼首相なりとして喧傳し、訪客その門に蝟集し、彼は何時の間にか、嵎を負ふ虎のごとく、田中内閣に對し隱然として一敵國たるの觀を呈するに至つた。

ことに昭和三年の總選擧に於て、政友會が絶對多數を獲得し得ずして、政局安定を缺いて以來、宇垣一成の名は、後繼首相候補者中の一白眉として、世間の問題と化するに至つた。

然らば何故に彼に首相候補者としての可能性があるのか。吾人は茲に少しく、彼の實勢力とその人物を檢討するの要がある。

彼は日本民族が、いま殆んど無意識に要求してゐる三つのものを持つてゐる。

その一つは、彼の勇氣だ。彼の實行力だ。

日本民族は傳統的に實行界の勇者を讃仰する。秀吉を好み、家光を好み、星亨を好み、幡隨院長兵衞を好む。今日ムツソリーニの人氣もそれである。

殊に今日のごとく混沌として百事停頓してゐる時代に於ては、誰か出て來て、溜飲が下る程、やつつけて貰ひたいといふ燃えるやうな希

望が、全日本にある。一種の英雄待望氣分だ。

それが今日の政治家の中で、一番宇垣一成氏にあり相だといふのが、彼の今日の人氣だ。丁度地震內閣組織前山本權兵衞伯に對してあつたやうな期待だ。

いま一つは、彼の頭腦だ。

彼は今日の政治家中、罕に見る頭腦明敏の男だ。彼が軍政の第一人者たるは天下周知のことであるが、彼と語るものは、彼が外交上の見識に於て、當代屈指の人物たることを發見する。彼が若槻內閣末期に、幣原外交に一新奇軸を出さんとしてゐたことは、消息通の知るところだ。また彼が田中內閣成立直後、先輩たる田中首相兼外相を訪問して、對支政策について獻策し、先づ國論を統一し、次に英米の意見を纏め、然る後に對張作霖策を講ぜよ。然らずんば必らず、禍內外より到るべし、と爲したのは實に適切の見識であつた。若し田中外相が彼の言を容れて、日本國內の對支論を統一し、次に英米の意見を日本に引き寄せて、然る後に悠々と支那に向つたならば、日本の對支外交は今日とは全然生面を異にしてゐたであらう。

彼は第一次山東出兵に反對であつた。それはこの出兵が支那の民心を日本より離反せしめ、率いて張作霖をして却て自己の地位保有の必要上排日態度に出でしめんことを恐れたからである。果して彼の憂へたるごとく、奉天に排日が起つた。彼はかうして時代を見拔く力を持つてゐる。

彼は外交のみならず、內政についても、常に一隻眼を具へてゐる。彼が一時農民黨の首領になるであらうと喧傳せられたのはその一例だ。彼は軍政の方面より、日本陸軍の中堅たる農民の向背に留意し、次第に農民勞働運動より、都市勞働運動まで研究し、その結果、日本の無產黨發達上、工業勞働者と農業小作人との一致したる政治運動を爲すの不可能なるを看破し、進んで健全なる農民黨の樹立の可能なるや否やの研究を、隨分と踏み込んで調査したらしい。その結果彼は、ある理由より、今日の儘の形では、有力なる農民黨の完成の不可能なることを感じて手を引き、從てこの後農民黨首領といふ噂も立消えとなつたが、一時は隨分突つ込んで研究したものらしい。

## 六

かうゆう風に、彼は常に現實の問題として、各種の重要問題の研究を行つてゐる。さうして、明晰なる頭腦をもつて、必らず結論に到達してゐる。

此處に彼の實行家としての强味があるのだ。彼の實行力は、單純なる糞度胸でなくして、科學的研究と、熟慮の結果である。從て彼は自己の研究したる問題については確乎不拔の信念がある。それが彼の政治家としての强味だ。

彼が渺たる一課長であり乍ら豫後備將官陸相制に反對して、陸相をも首相をも恐れなかつたのもそれだ。彼は師團長として演習などする

時は、輕々しく參謀の言ふことなど聞かぬさうだ。その軍を動かせと、いくら參謀が言つても聞かない。そこで參謀總長から統監たる陛下に上奏し、陛下の御名に於て命令すると初めて聞く、といふ風であつた相だ。それは彼が、用兵についても非常な確信があつて、他人の言葉位では、動搖しない爲めだ。

もう一つの彼の持つ要素は、彼が話し易い人だといふことだ。それは儀式の言葉で言へば、包容力に富んだ人だといふことだ。もつと人間らしい言ひ方をすれば、親しみ易い人だといふことだ。彼は誰に會つても、氣の置けない顏をして、ふん〳〵と話を聞いてゐる。さうしてその相手の苦痛とし不平とするところを、よく汲み取つて同情する。だから大勢の客が、別に求むるところなくとも自然と彼の門に足が向くのだ。そこに彼が政治家としての大切な持ち味がある。一寸見ると伊部燒の狸の置物のやうな顏をして、彼は愉快さうに、何時までも相手の話を聞いてゐる。努めてやつたのでは、あのやうにいつも疲らずにはやれるものではない。そこに彼の人間らしい溫味があるのだ。だから彼の傘下に集らうといふ氣の政治家は、民政黨内にも、政友會内にも、隨分ある筈だ。

七

けれども、人物としてどれだけ特色があつても、それだけで首相になれる譯のものではない。宇垣氏が凡庸政客に立ち越える多くの特色があるにしても、彼が丁度、その時代の潮合に乘り合はさなくては、天下取りにはなれない。

然るに彼は一面、非常に有利な地位に居るやうで、また他面非常に危險な地位に居る。その一つは、彼が評判がよ過ぎるといふことである。政治家である以上は、味方ばかりはない。また人間は利害に關係なき好き嫌ひがある。然るに今日の宇垣氏は、あまりに評判がよ過ぎる。評判倒れになる心配は確かにある。

民政黨によく、政友會にも惡くなく、元老にもよく、貴族院にも同情者多く、財界に後援者がある。丁度十年前の後藤伯かこんな地位に居た。その結果は、自重してどちら付かずに居るうちに時機が去つてしまふ。

宇垣氏があれだけの人氣を持つて、どうゆう機會を捕へて飛び出してくるかといふことは、仲々六ケしいことだ。うつかりすると、自重して萬全を策してゐるうちに好機が去つて、彼よりも若い人の舞臺に轉換してゆかないとも限らない。

もう一つ彼に取つての不利益は、彼は地味な男で、大隈侯や、後藤伯やなどゝは全然違ふ。これ等の人は派手な積極的な人であつたから、どんな境遇に居ても、溌剌と動いて天下大衆の耳目のうちに生きてゆく。宇垣といふ人は、重厚な地味な人であるから、自ら動いて天下の視聽を聳かさない。從つて今日のやうな畸形的な政狀の時には天下の問題になるが、誰かもつと天下を取りさうな人が一人出て來た

ら、そつちに人氣を攫はれてしまふ。彼の政界進出は受け身であつて、寄せ手でない。彼は一見ムツソリーニーのやうに強くあるやうであるが、ムツソリーニーのやうに、羅馬進軍といふ大芝居を打つ性格ではない。

彼は缺點の少ない人間だ。それは往々にして、平凡に墮し易い。民衆は超凡を渇仰する。玄人は地味な平凡を好む。そこに玄人と素人との喰ひ違ひがある。今のところでは、宇垣氏は玄人の評判で出さうな模樣だ。ところが民衆政治の時代は、少數の玄人だけの思ふやうにはゆかない。どうしても大向の人氣が必要だ。この缺陷を宇垣氏はどうして補はうとするのか。

## 八

宇垣氏が首相になつたら、隨分と思ひ切つた大仕事をするに違ひない。

しかしそれは、彼が政界に出てくるきつかけで定まる。彼が自由手腕の揮へるやうな道具立で乘り出してくるか、または手も足も縛られた形で出てくるかで違ふ。

一體宇垣氏が、どうゆう場合に內閣組織が出來るかといふことを考へて見ると、二つしかない。

その一つは、今日のまゝの丸腰の一人ぼつちの宇垣氏に大命の降下する場合だ。丁度山本權兵衞伯や、淸浦伯に大命が降つたやうな場合だ。それは單純な中間內閣とか、超然內閣とかいふことではない。日本のみにあつて外國にない政治形式だ。元老が宇垣氏を最適任者なりとして、推薦するのだ。

しかし元老の推薦も勿論元老個人の意見や感情で出てくるのではなくして、宇垣氏を推薦すれば誰よりもよく內閣組織の出來るといふ見込のついた場合だ。それはもつと簡單に言へば、衆議院の大多數も宇垣內閣を後援するといふ見込のつく場合だ。

今日のところ、其の見込は必しも無いと言へない。今のまゝでは、議會は來年解散するより外はない。民政黨にゆけば勿論解散だが、政友會內閣のまゝでも、どうしても貴族院と衝突して、民意を問ふといふことになり相だ。さうして解散の結果、二大政黨の一つが果して絕對多數を取れるかといふと、どうも六ケしい。

そこでどうせ解散で政局の安定が出來さうもないとなれば、喧嘩兩成敗で、兩方の政黨に同情者の多い黨外の人間が出てくるといふ機運が動いてくる。さうして、今一番人氣のあり無疵な宇垣ならといふことを、大勢の人が考へ出すと彼の乘出しの場面が開けてくるわけだ。

今日のやうな過渡期の日本に於ては、政爭が外國で見られない程苛烈だ。それを緩和する爲めには、黨外の人物にやらして、公平な總選擧を一度やらして見たいといふ考が、可成り大勢の人の頭にある。憲政常道論もいゝが、今日の政爭は常道論の軌道を脫線してゐるのだから、これを正道に引き直すためには、黨外の人間に一度思ひ切つた

政治をやらして、今日の不景氣やら、對支外交やらを片附けさしたいといふ氣持が、隨分大勢の人の頭の中にある。その仕事に宇垣氏が一番狎り役だと、人々が考へてゐるのだ。たゞその時困るのは、既成政黨の借り馬に乘つて出てくるのだから、いくら乘馬道樂の宇垣氏でも、うまく乘りこなせるかどうか疑問だといふことだ。

玆に見のがし難き宇垣氏の弱點は、軍人だといふことだ。この普選時代に、また假軍人でもあるまいといふ反對は可成りにある。その立前から云へば宇垣氏は、思ひ切つて衆議院にでも出て來たらどうだ、といふものがある。これは正論であり、また大に民衆の喝采しさうな芝居だ。選擧もないのに、いきなり代議士にもなれまいといふかも知れないが、何も今すぐ衆議院に議席を持たなくも、軍人をやめて丸腰になつて、俺は代議士になつて政黨を作るのだといふ氣を示せば充分だ。

これは壯快であるが困難だ。今日宇垣氏が旗上げをして何人の人が集まるか豫想がつかない。たゞ彼が最初少數黨をもつて甘んじて將來の大成を期するといふことであつたら、隨分深刻な變化を、日本の政界に與へるのではないかと思ふ。この次の總選擧は、前回と餘程違ふであらう。日本の民衆政治も、決して今日のまゝでは推移しまい。その大きい變化を見越して、命を的に出ていつたら、彼は非常に大きな足跡を、日本の政治史上に殘すかも知れない。何となれば、かうして組閣する時は、彼は瘦せてもかれても自分の馬に乘つて出て來るのだから。

けれど彼の一番の強味は、彼が總理大臣たらうとして、少しも躁つてゐないといふことだ。乃公出でずんば蒼生を奈何せんといふ時までは、ぢつとしてゐるといふ態度だ。政治は水ものだ。何時どんな事件が突發して、御勅使が宇垣一成の質素な家に見えるか知れない。その時までは、宇垣たるもの、泰然として坐つてゐることだ。さうして、時節到來と見たら、疾風迅雷のやうに蹶起して、丁度ビスマークが組閣したときのやうな勇氣で、滿天下が反對しても斷々乎として、思ひ切り新味のある處を寄せて、自分の思ふやうな內閣を作つて出て來ることだ。(四、六、四)

# 遊臺灣日記

蘇峰迂人

## 四一　林家の訪問

二月二十七日、午前九時臺北鐵道ホテルを發し、自動車にて板橋に向ふ。淡水河を臺車にて渡り、更に自動車にて、林氏の邸宅を訪ふ。此れは臺灣第一の富豪林維源氏が、清朝道光の末年に築造したる大庭園にて、其側なる林氏五房の住宅地を數れば、其の面積約三町となる。一萬坪足らずの庭園は、日本內地では珍らしからぬが、支那では庭園と云へば、建物が主にして、それに池とか、花壇とか、木とか、石とか、小徑とかを添ふる迄にして、先づ一萬坪の家と見る方が、分りが宜い程である。

＊　＊　＊　＊

案內には林家の一人、林熊光君が同伴した。君は帝大出の新進人にて、書籍蒐集者として、予も屢々東京の文求堂邊りにて接見したる舊知である。林氏五房と云へば、其の五人の兄弟が、棟を並べて住みたるものにして、今は何れも財產を分配し、それぞれ別居しつゝあれば、此の大邸宅大庭園は、無住の姿となつてゐる。併し此家を保存する爲め、一個年十萬圓(?)を費してゐるとか。若し內地流の賃貸價格にて納稅せば、如何に林氏の富を以てするも、とてもたまつたものではあるまいと思はるる。

＊　＊　＊　＊

庭內には數百年の老榕樹がある。上には陸橋があり、その下にはトンネルがある。汲古書屋、觀稼樓、舞臺、來青閣、定靜堂など、其の迴廊を繞りて、相連つてゐる。予等は定靜堂にて

茶を喫し、題名簿に左の二句を書した。

故國依然喬木在。典刑復見老成人。

按件役の一人、許君は首肯して、其の場所と其人とに適切なるを嘆賞した。此れは申す迄もなく東坡先生の句である。

＊　＊　＊　＊

林氏は福建省の人、福建即ち閩には林姓甚だ多し。政治家には林則徐あり、詩人には林佶あり、文學批評家には林西仲あり。其他予の知る林姓十指を屈するに遑あらず。此處の林氏は福建省漳州府の奥地から、林應寅始めて臺灣に來り、其子平侯は十八にして臺灣に渡り、米とか鹽とか、數々の物を商ひ、一代にて數百萬の富豪となつた。此れが有名なる林本源家の始祖だ。其の本源と家號したるは、飲水思源、其の本源を忘るゝ勿れの意味である。彼は衣食足りて、學問を愛し、書家呂西村、畫家謝琯樵、文士葉東谷などを招聘し、此れが爲めに臺灣の文化に燦然として光を放つた。呂西村の漢隷などは、實に手に入つたもの。平侯の子が林維源で、此の時代が林氏の黄金時代、此の大庭園も、當時に築造せられたと聞く。

＊　＊　＊　＊

予は餘計なる事ながら、斯く考へた。とても此儘にては荒廢するの外はあるまい。何とか總督府にて之を買上げ、之を保存して、博物館の別館として使用したらば、所謂臺灣の古蹟保存としても、頗る妙ではあるまい乎。歷史乏しき臺灣には、此丈のものを、此儘荒廢せしむるは、何となく殘り惜しく思はるゝ。

## 四二　淡水に向ふ

林氏邸を辭し、板橋から臺北へ引き返し、一路淡水に向うた。案内者には舊淡水郡守、現文敎局員鈴木氏を伴うた。淡水港は、臺北の北十三哩、淡水河口に在り、從來は中部の鹿港、南部の安平と共に三大要港たり。而して更らに其の以前に溯れば安平と共に、和蘭人の占居したる二大要港であつたが、今は河口沙に埋められ、大船の出入が甚だ難く、戎克貿易衰へて、汽船貿易行はるゝ時代には、殆んど日一日とさびれ行くばかりの傾向だ。

＊　＊　＊　＊

淡水街の入口にて、荒木郡守に迎られ、相伴うて先づゴルフ場に赴く。面積實に七萬坪、一帶の高丘を占め、眺望絶佳の由

なれども、雲霧濛々、雨點さへ降りかゝりつゝあり。鈴木、荒木舊新の郡守、何れも我事の樣に、懊惱してゐた。

* * * * *

轉じて劉銘傳の築地したる舊砲臺を見、更らに即今英國領事館となりつゝある紅毛城を見た。此れは安平の赤嵌城と、全く其趣を一にしてゐる。蘭人占居以前には、西班牙人の據りたる、『サン・ドミニヨ城』の遺址とも云ふ。果して然る乎、否乎。

* * * * *

此れから丘陵を歩して公會堂に至つた。前に淡水河を控へ、洲沙、風帆、烟霧の中に出沒す。前の觀音山や、背の大屯山が其姿を沒したるを、案內役の舊新兩郡守は口惜しがつたが、予は此にて滿足した。丘陵には薊や、蒲公英が、今を盛りと咲いてゐた。西洋人の子供達が、野花を集めてゐた。六十年來の貿易港であつた面影は、丘陵一帶を占むる西洋館が之を語りてゐる。

* * * *

公會堂では荒木郡守及び夫人の肝煎にて、官民有志及び予等の同縣人の諸氏と會食した。此地は鱸や黑鯛が名物とて、刺身の新鮮には敬服した。蛤も內地から移殖したとて、其の吸物を供せられた。但し折角好風味であつたが、餘りに濫獲に取り盡して、今や再び種切れとなる虞がありと聞いた。諸君から頻りに公會堂の額をとの注文にて、予は『江山如畫裡』と書いた。實は江城如畫裡の句を故らに斯く改めたのだ。而して荒木郡守の需に應じて、

寄語風流老郡守。宦遊占斷此江山。

の二句を書した。郡守の官舍は、淡水河口に臨み、眞に好別莊である。荒木郡守は郡守中の長老である。老字を冠するも、不足はあるまい。

## 四三　草山雅集

淡水を去る時、荒木郡守から、贈られたる蜜柑を袖にし、自動車中にて喫しつゝ北投に至つた。此處は臺北を距る三里、汽車の便がある。此れは清朝の光緒二十年（明治二十六年）獨逸人オーソ氏が發見したる由にて、今は一種の溫泉街をなしてゐる。予等は公衆浴場に赴き、其の閑室にて茶を喫した。一浴五錢、終日二十錢。浴池以て泳ぐ可く、浴室以て遊ぶ可し。而して其の庭園以て徜徉するに足る。予は取り敢へず試みに一浴し

た。無色透明、アルカリ質の湯である。

＊　＊　＊　＊

此れから二里十六町を登れば、草山溫泉だ。途中の溪谷硫黃の氣濛々として上りつゝある。其の臭氣やゝ鼻につく。中間に頂北投の溫泉がある。海拔一千二百尺、草山は實に珍らしき幽邃の地だ。臺北に比して、其の溫度七八度の差がありと云ふ。此地は今上陛下、攝政王殿下として、鶴駕を枉げさせ給ひし所、而して予等の入りたる貴賓館は、御駐駕の跡と承る。

＊　＊　＊　＊

當夕は臺北の文人墨客が、故らに予等の爲めに、淸宴を催さるゝこととて、一浴間もなく附近の一亭に赴く。座には幣原總長、佐藤參謀長、其他內地本島の詞客、名士あり。小松詞宗專ら斡旋に勗めてゐる。而して詞宗が其の珍襲にかゝる、賴家一門の書牘、書幅、及び藪孤山、井上梧陰等、東肥出身名士の書、若しくは明治七年征臺一件の書類等を陳列せられたるは、予が尤も感謝する所であつた。

＊　＊　＊　＊

座中の石川欽一郎畫伯は、尤も勉強して、諸人の注文に應ぜられた。予も食逃げは恐れ多しとて、即與一首を書して、諸君の斧正を乞うた。

凄凄芳樹雨如レ煙。洗二骨靈泉一人欲レ仙。
駘蕩蓬萊春二月。草山深處會二群賢一。

此れは惡詩ではあるが實詩である。

＊　＊　＊　＊

追々とお鉢が予に廻り、諸君から書畫帖や、色紙や、短冊や、扇子や、紙やを差し附けられ、恥をかくと共に、大汗をかいた。乃ち倉皇謝して予等の寓所に還り、再び其汗を洗うて、靜かなる夢を結んだ。夜中覺め來りて、雨かと疑うたら、朝來起き來れば、泉流であつた。本日は好天氣である。

昭和四年二月二十八日午前七時二十分　草山溫泉に於て。

## 四四　草山及其の附近

二月二十八日、今日は休養デーだ。草山の貴賓館の一室に、双脚を伸ばして快眠しつゝ起き出で、園內を徜徉した。如何に硫黃の氣に強きかは、溫泉と混じたる澗水が、悉く硫黃色を呈しつゝあるを以て知らる。而して室內に於ける予等の携帶物が、

眼鏡や、黄銅印が變色しつゝあるを見て悟る。斯く硫黄氣多きを以て、溫泉の脈は、隨處に地上に噴出しつゝある。

*　*　*　*　*　*

予は過日電報にて照會し來れる、大日本海戰の二十五回記念日までに、落成す可く、鎭海灣頭に建立する、其の記念碑の撰文の依囑に應じて執筆した。六百字內外との制限にて、一切を其中に羅括す可く、頗る骨が折れた。而して稿を脫して肩身の輕きを覺えた。

*　*　*　*　*　*

午後から臺北州大橋技師の案內にて七里山を上り、大硫黄孔を經て竹子湖に至つた。此れは七里山の中腹に在る平地にて、此處にて蓬萊米の原種を作りつゝあり。展望尤も妙。淡水河、基隆河の流域、及び大屯山火山彙の諸山、殆んど一幅の鳥瞰圖をなしてゐる。憾らくは雲霧生じて、十二分の展望が出來なかつた。

*　*　*　*　*　*

臺灣に來りて喜ぶ可き一は、植林の事業が閑却せられないことだ。殊に此の附近は大正十二年、攝政王殿下御渡臺の記念事業として造林し、專ら琉球松や、內地の黑松を植ゑ、何れも繁茂しつゝある。

*　*　*　*　*　*

即今御大典記念として、大屯山公園を計畫し、草山、北投、金山の諸溫泉、淡水の海水浴場を打つて一團となし、大屯山、七星山、紗帽山などを其の中に取り込む一大遊園地の計畫あり。先づ取り敢へず草山盆地に、三十餘萬圓もて、其の手初めをなす由と聞く。

*　*　*　*　*　*

草山盆地は溫泉隨處に湧き、又清泉の巖角より迸り出づるもの、混々として休せず。而して閑花芳草野に敷き、雜樹老木林に滿つ。以て公共浴場を設く可く、以て別莊を構ふ可く、以て子供の天國、老人の極樂、而して職務に疲れたる者の休養場たるに足る可し。

*　*　*　*　*　*

我等は七星山と紗帽山の峽間にある、幣原博士、大島博士などの別墅を見舞ひ、晩來高橋臺北州知事の招宴に列した。場所は貴賓館の西洋間にて、それに林本源氏邸の常抱の料理人が、

腕を揮うたふ料理なれば、座客何れも滿足し、且つ滿腹した。來客は我等一行及び臺北官民の重なる人々、及び石川、郷原の兩畫伯、國島漫畫子等にて、予等夫妻も、直ちに漫畫子の爲めに獄門に晒され、一座どよめき渡つた。吾妻は石川、郷原兩畫伯より少からざる土産、前者は臺灣の風景、後者は臺灣の花木等の畫を頂戴した。而して予も亦た釣り込まれ、惡筆數紙を揮ひ、座中諸賢の需に應じた。

昭和四年三月初日　草山温泉場に於て。

## 四五　芝山巖と和尚州

今日は三月一日だ。二月五日東京を發したが、早や『二月既過三月來』頃となつた。枕上偶ま左の一篇を得た。

昨非不レ可レ追。明是不レ可レ期。
擺脫是非意。隨緣又隨時。
偶來蓬萊島。南北極二津涯一。
送迎有二知友一。常春無二四時一。
木瓜熟果果。芭蕉實垂垂。
草山雲深處。緋櫻花滿レ枝。
山中靈泉湧。亦足レ醫二勞疲一。
人生行樂耳。古人不二吾欺一。

朝起先づ之を記して東道の一人、夜牛生に貽る。其他餘儀なき事情にて、數紙を書す。

* * * *

草山の二夜は、此行の尤も快暢の峠であつた。三月一日九時に、貴賓館を立つて、士林方面に向つて山を下る、朝霧漸く霽れて、淡水河畔歴々として掌中にあり。而して觀音山と、大屯山とは河をさし挾んで屹然相對す。途中に自動車が、懸崖に乘り掛け、田中内閣の現狀にも比す可きものがあつた。此れは霧にて咫尺辨ぜず、此に至りたるものであらう。霧中山路の自動車は、猶ほ霧中近海を航する船舶の如く、危險千萬だ。此邊桃花の名所なれども、今は桃葉の時節となりてゐる。

* * * *

芝山巖は、平原中に突起せる丘陵で、一寸大なる陵墓の如く見ゆ。其形圓きため、一に圓山など稱せらる。砂巖にて、樹木欝蓊。其上に開漳聖王廟があり、之を惠濟宮と云ふ。廟の後には觀世音がある。乃ち神と佛とが同居である。此れは此邊開拓

の福建省漳州の人々が、本土から奉じて來たものであらう。

*　*　*　*　*

領臺の當初、故伊澤修二君が、此處に始めて此地を卜し、學務部を措き、教學の事に從うた。而して明治二十九年一月一日、部員楫取道明外六氏土匪に襲はれ、其難に殉じ、今や士林巖は寧ろ此が爲めに有名になつてゐる。

*　*　*　*　*

予等は伊藤公の書せられたる殉難記念碑前に一拜し、轉じて士林園藝試驗支所に赴き、櫻井所長から柑橘栽培に就き、一通りの話を聞き、園中所産のレモン湯や、グレープフルートを喫し、更に方向を轉じ、北投の八勝園に赴けば、熊本縣人諸有志は、既に予等の來るを遲しとしつゝあり。乃ち一浴して、膝を接して午餐を共にした。

*　*　*　*　*

此れから歸途に就き、臺北を通り拔け、淡水河の大鐵橋を渡りて、新莊郡鶯州庄和尚州なる李氏の桶柑園を視た。桶柑は椪柑に比すれば、皮厚く保存に便、而して其の季節は、椪柑の正さに終る比、即ち今頃から出で始む。將來尤も有望の一である。予等は其の黄金を綴り、枝は地に垂れつゝある中より、其の最善なるを擇取して、之を試食した。而して李氏の家に至れば、大邸宅にて、五家族同居と云ふ。予は其の家主の需に應じ、『爲善最樂』の四字を書した。

*　*　*　*　*

此夕は予等過日招待を受けたる返禮として、臺北に在る新聞雜誌通信者諸君を、ホテルに請じ、晩餐を共にした。同業者の集會とて、互に忌憚なき意見を交換し、爲めに得る所少くなかつた。

昭和四年三月二日午前五時、今朝は此れから宜蘭方面に向はんとす。旅行も眞に多事、然も是皆な自業自得のみ。一笑。

## 四六　澳底の北白川宮御上陸記念碑

三月二日、一天かき曇る、天氣都合頗る怪しくある。午前七時二十分、臺北停車場を發して宜蘭に向ふ。此れが臺灣漫遊の打止めだ。

*　*　*　*　*

車窓から眺むれば、細雨霏々、九時二十分貢寮に着する頃は、

更らに風が加はつて來た。それに冷氣人を襲ひ、始めて臺灣の氣候の激變と、其の寒氣とに驚かされた。

・・・・・

停車場前から、直ちに輿に乘つた。此れは二本の竹棒を左右に貫き、その兩端に小片の板を挾み、それを前後から負ふが如く、左右の肩に擔ひて行くのだ。風雨にて四方油布に鎖し、唯風の吹き込む透間から才かに行路を見るのみ。

・・・・・

我等は三十五町を過ぎて、所謂澳底の、北白川宮能久親王御上陸の地點にたどり着いた。そこには四阿屋があり、椅子があり、茶があり、露營の當時親王が召し上がりたるものを偲ばする爲め、甘蔗さへ盤上に備へてあつた。

・・・・・

同行の西村大尉は、近衛師團の各輸送船が、明治二十八年五月二十九日、澳底灣に投錨し、親王が三十一日午前七時、御上陸露營し給うたる當時を物語つた。當時も今日の如く風浪が高く、御上陸が頗る危險であつたと指點した。

・・・・・

我等は折角の甘藷を喫せんとするも、四阿屋には、風伯が雨師を伴ひ襲撃し、閉口した。予はせめて親王御上陸記念碑と、其の御飮用あらせられたる海濱の清水井を觀んとて、毛布を頭から被りて、風雨を衝いて疾驅した。碑は戰利品の砲身を利用したもの丶由にて、五尺六寸、それに鐵臺四尺六寸、石臺三段五尺六寸である。

・・・・・

附近は白沙にて、小松が成長しつゝある。

竹輿軋軋度二崔嵬一。蹈二盡白沙一碧海開。
一片銅標人不レ見。風驅二萬馬一雲濤堆。

歸來貢寮庄の役場にて辨當を喫し、十一時五十六分の汽車にて宜蘭に向うた。

・・・・・

此れから澳底、大里、大溪、龜山など、何れも東海岸にて、危礁亂立し、西海岸の洲渚とは、頗る趣きを殊にしてゐる。臺灣の地勢は、西海岸は延長し、東海岸は縮小する傾向あり。而して大里、大溪間の草嶺トンネルは、延長七千百二呎、本島第一の長トンネルと聞く。

## 四七　宜蘭

我等は宜蘭も雨ならんと心配した。されど曇天ではあつたが、仕合せにも雨は降らない。但だ暑中のつもりで來た爲め、突然の寒氣には閉口した。二時宜蘭著、直ちに途中迄出迎られたる石渡郡守、岡本街長等の案内にて、宜蘭神社に參拜した。神社は員山庄の小山の頂にあり。眺望甚だよし。祠官藤崎翁は中島氣山翁の友人とて、一見舊の如く談じた。轉じて農林學校に赴き、柳川校長、岩瀨教諭等と相語り、學校の爲めに「培養國本」の四字を書した。岩瀨君は予の舊知にて、屢ば書信を往復したもの、相見て眞に愉快であつた。校庭にはスウヰートピーが今や滿開であつた。それから孔子廟に至れば、宜蘭街の諸耆老相集つて迎へた。予等は先づ文宣王の靈位に、一瓣の香を獻げた。規模は臺南ほどではないが、如何にも古色を帶びてゐた。それから西鄉菊次郎氏が築きたる西鄉堤に赴き、本島人が建立したる西鄉廳長の德政碑を見た。此の堤防は宜蘭川の氾濫を防ぐ爲め、當時の廳長西鄉菊次郎氏が築造したるものにして、明治三十四年九月竣成したるもの、延長實に九百三十四間、爾來更らに延長したと聞く。予は西鄉翁とは面識あり、今ま其人を懷うて低徊之を久しうす。

*　　*　　*　　*

轉じて公園に赴き、小學校に至れば、茶話會の連中は、予等を待ち兼ねてゐた。大講堂立錐の地がない。聞けば蘭陽三郡、即ち宜蘭、羅東、蘇澳三郡の諸有志の來會とのこと。此れには頗る驚いたが、今更ら逃げ隱れも出來ず、諸君の芳情に對して、聊か半時間ほど、予の臺灣に關する聞見一斑を開陳した。かくて礁溪溫泉樂園に著したのは、午後六時比であつた。

取り敢へず溫泉に一浴し、晚餐を喫するや否や、羅東なる我が同縣諸君の來訪あり、其中には水俣出身者二名、其中の一名は德富姓を名乘りてゐる。奇遇此上なし。又た岩瀨教諭其他二三子來り、相與に新を談じ舊を語つた。而して諸君何れも臺灣の頌德表を陳べ、臺灣が眞に久住の樂天地であることを立證したるは、予に取りて甚だ滿足の至りであつた。

昭和四年三月三日午前六時半　礁溪溫泉に於て。明日は方さに臺灣を發して歸京に途に上らんとす。

## 四八　礁溪より基隆を經て臺北に還る

三月四日、曇天、昨日よりも更に寒。臺北に來りて、殆んど冬を忘れ、臺南、高雄、恒春に遊んで、炎熱に苦みたる我等は。歸途に就く數日前から、內地の寒氣に對する準備として、追々とその練習を受けつゝありと思へば、別段の苦情もない

＊　　＊　　＊

礁溪の樂園は、その停車場から一町にも足りない。溫泉宿として斯る地の利を占めたるものはあるまい。此邊は地を掘る二三尺に至れば、何れも湯が出づると云ふ。無色透明、實に玉の如き湯である。我等が停車場に至る頃は、既に雨となつた。

＊　　＊　　＊

八時三分礁溪を發し、昨來の線路を戻りて、八堵驛にて基隆行きに乘り換へ、青木稅關長、三浦郡守、土居大每記者などに出迎られ、十一時八分基隆驛に著すれば、相ひ換らず、名物の雨にて、我等は直ちにクルベー濱を過ぎ、佛國將士の墓畔を橫ぎりて、大砂灣頭の巖亭支店に至れば、同縣の諸君五十餘人列坐しあり。實は歸日切迫に付き、縣人會と官民會と合同しては如何との評定もあつたが、縣人會にて固く執りて、別に一會を催ほすこととなり、若し德富翁が來らぬならば、相擧つて推し掛けんとの意氣込であつたと云ふ。諸君の好意謝す可し。

＊　　＊　　＊

我等は時計の針を眺めつゝ、御馳走に預つた。而して諸君に辭して倉皇停車場に至れば、尙ほ發車時刻五分を剩した。零時三十五分基隆を發し、一時三十三分臺北に還り、行李の整頓をした。

＊　　＊　　＊

斯くて午後五時から予等が臺灣視察に就て、特別の好意を忝くしたる諸君、予等と特殊の緣故ある諸君、卽ち豐田內務局長、丸茂交通總長、平島秘書官、幣原博士、田端市尹、松岡富雄、鈴木重嶽、佐藤臺灣新聞支局長、山中圖書館長、平澤教授、其他及び令夫人達を、ホテルに招き、留別の小宴を催した。

＊　　＊　　＊

予は卓上に於て諸君の芳情によりて、如何に豫定の日程を、豫期以上の成績にて完了したるかを語つた。此れはお世辭ではない、勿論全き眞實であつた。而して更らに一二の所感を付け

加へた。卓上も賑かであつたが、晩餐後の茶話は種々の面白き題目にて、一層賑かであつた。斯くて八時頃相ひ散じた。

昭和四年三月四日午前五時半　臺北鐵道ホテルの一室に於て。本日は愈よ臺北を去り、併せて臺灣を去る。昨日の臺北は曇天であつたが、夜半から雨となり、點滴の音、客眠を攪しつゝあつた。此れは臺灣と惜別の涙の雨と諦むるの外はあるまい。

## 四九　臺灣を去るに際し、若干の希望を語る

三月四日、愈よ臺灣を去るの日だ。微雨蕭々、天氣何となく陰欝。此行豫じめ三禁制を設く、曰く講演せず、宴會に赴かず、揮毫せずと。而して三禁共に若干の除外例を餘儀なくせらる。早朝名殘りの揮毫に、汗をかいた。

＊　＊　＊　＊

谷河臺日主筆來訪、予の臺灣視察の感想を徴す。予曰く、臺灣の眞相未だ內地に諒解せられず、內地に於ける臺灣は、概して三十年前の臺灣也。今日の要は、先づ現在の臺灣と、歷史の臺灣とを區別し、臺灣が樂土たり、健康地たり、久住の地たることを、內地に宣傳するにあり。

＊　＊　＊　＊

第二は、臺灣に於ける諸業亦た臺灣が守成の期にあらず、創業の期たるを自覺するを要す。固より糖業の如きは、既に發展の餘地少きまでに進步したらんも、自餘開物成務の業、殆んど未だ緒に就かざるもの多くある。今日は決して小成に安ず可き時にあらず。

＊　＊　＊　＊

第三は、基隆より恒春に於ける、北南縱貫の道路を完成するにあり。今日の如く基隆臺北間さへ、自動車が容易に往來せず、高雄屏東間さへ、自動車交通不可能にして、何んぞ縱貫道路と云はんや。道路ありて橋梁なきは、眞正の道路にならず。

＊　＊　＊　＊

第四は、東西臺灣の聯絡だ。今日の臺灣は、西海岸の臺灣にて、東海岸は殆んど取り遺されてゐる。今日の臺灣は、云はゞ半身不隨の臺灣である。されば如何に中央山脈は高峻險阻であるも、何とか之を貫通して、西東兩岸を、陸路から聯絡せねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

第五は、蕃地の整理だ。今日の如く臺灣面積の四分の三以上を

を十萬人足らずの生番人に一任し去りて顧みざるは、餘りに無頓著である。而して生番人をして山を荒らし、水源を枯らし、若しくは洪水氾濫の素因を作らしめて、之れを天災同樣に諦むるは、如何にも腑甲斐なく、且つ無責任である。」

* * * * *

第六、臺灣の施政は、強く且つ正しくあらねばならぬ。濫りに迎合政治を事とするは、內地人と本島人とを問はず、何れの爲めにも大毒である。それには何よりも統督其人を得、而して此れと同時に其人の腰を据ゑて、自由手腕を揮はしめねばならぬ。今日の如く統督が內閣更迭毎に更迭し、一年や二年にて交代する有樣にては、とても臺灣統治の實を擧ぐる事は困難だ。已むなくんばせめて、其の任期でも定めたきものと思ふ。

* * * * *

尙ほ臺灣は人口增加の現狀から見ても、到底唯一農業にては覺束なし。漸次工業方面に手を擴げ、南清、南洋、海峽植民地邊に、其の市場を求めねばならぬ。それには動力の供給が、何よりも大切だ。日月潭問題の如きは、此の旨義によりて解決せねばなるまい。

* * * * *

臺灣大學の設立は、少くとも南方文化の焦點とし、南方文化の硏究所として、其の特色を發揮せねばならぬ。之を一般的の大學たるに止らしむるは、是れ屋上屋を架するの類のみ。

* * * * *

以上は予が語りたる要點であつた。此れは當日の臺灣日々新報の夕刊に揭げられ、予は之を基隆に於ける蓬萊丸に於て之を讀んだ。

## 五〇 基隆に於ける顏氏邸の別宴

名殘り惜しくも、三月四日午前十一時十五分にて臺北を發した。官民諸位、令夫人其他の情味饒かなる見送りを忝くし、二時十二分基隆に著するや、直ちに官民の重なる方々に迎へられ、顏國年君の邸に赴き、午餐會に列した。

* * * * *

雨は基隆の名物とて、來る時も雨、去る時も雨。顏國年君の邸は、約五萬坪の庭苑を擁し、如何にも宏大なる構造にて、家も庭も日本內地式が七八分である。庭上の築地は、既に此時を

過ぎてゐたが、尙ほ名殘りを留めてゐる。基隆は今や臺灣の表玄關とて、一年二億圓の貨物を吞吐してゐる。而して土地としては石炭產地を附近に有し、此れが特產だが、卽今南支に於ける日貨排斥の爲め、それが停滯して、當業者は、聊か當惑の樣子だ。

＊　＊　＊　＊　＊

顏氏は基隆と云はず、臺灣きつての大金持である。此れは故顏雲年氏が一代に成したるもの。氏は一個の苦力頭から身を起して、鑛業に手を付け、善企善働、而して成金時代に成功して、他の成金と趣を殊にし、其の得たるものを、殆んど反動時代に把持した。

＊　＊　＊　＊　＊

予は顏國年氏から其兄の傳記を得て之を一讀し、如何にも傑物であつたと思うた。而して此漢の嗜好が詩であつたことは、いよいよ以て面白く感じた。氏は漸く知命の齡に達して逝いたが、其の遺業は乃弟國年氏が守りて、愈よ家道を隆昌ならしめた。惟ふに此の兄弟の事業に於ける、恰も岩崎氏兄弟に肖たり。兄は彌太郎に類し、弟は彌之助に類す。唯だ規模の大小は、其の地處位に於て、致方なし。

＊　＊　＊　＊　＊

予等は雨中顏氏の庭苑を徜徉し、土產物仕入の爲め、珊瑚店などを素見し。蓬萊丸に乘り込みたるは、午後三時半頃であつたらう。

＊　＊　＊　＊　＊

四時出帆との豫定であつたが、積荷が多くて、五時半を過ぎた。其中には巨大なる水牛などもあつた。此れは東京國技館の臺博に持出す爲めと聞く。水牛を空中に吊り上げて、中甲板に卸す狀は、一寸見物であつた。流石の水牛も、空中飛行は、生來初めての事にて、其の狼狽の樣、察す可しだ。

＊　＊　＊　＊　＊

臺北から態々見送られたる紳士淑女は勿論、松岡君夫婦は臺中から、又須佐美君は、臺灣の南端高雄から船まで見送られた。臺灣新聞の佐藤君、總督府の有馬君など、始終此行を共にしたる連中とは、殊更ら惜別の情に禁へなかつた。

## 五一　蓬萊丸船中の安樂窩

蓬萊丸は、來時の瑞穗丸に比して、姉船であらう。此れは英國南潯航路會社の船にて、現代的贅澤を盡したる構造を、商船會社にて、聊か實用的に改造したるなれども、予等措大漢に取りては、寧ろ果報過ぎる程である。約一萬噸、平均十五海浬を出してゐる。

＊　＊　＊　＊

我等同行四人、予等夫婦、仁藤生、及び臺灣新聞東京支局長德富迪君である。四日の晩餐には、吾妻だけ落伍した。妻は未だ醉はさるも、醉ふ心配の爲め、室内に籠居した。他の兩人何れも晩餐の卓に出でたが、何れも途中から失敬した。斯くて予の一行は、予を除けば、全滅となつた。

＊　＊　＊　＊

船長江副君は、長崎の人にて、其の少年時代を熊本に過し、予等に就ても知所少からず。而して其の談論は、船乘り一流の特色と共に、更らに痛快を加へてゐる。予も仕合に此れが爲めに寂寥を免れた。

＊　＊　＊　＊

三月五日、晴天だ。予は三度の食事、朝夕の入浴以外は、讀書に耽つた。若し無線電信なくんば、船中は全く極樂であるが、然も此れが爲めに、娑婆の風が、海面を吹き渡りて、我等の消淨心を攪亂するも、笑止の至りと思ふ。されど決して無線電信を詛ふ譯ではない。

＊　＊　＊　＊

偶ま假睡を醒せば、卓上に無線新聞一紙が載りてゐる。其中には澤正の死が傳へられてゐる。既に彼の危篤の報に接したる予は、今更ら驚く譯ではないが、さりとて餘りに天は無情である。惟ふに彼程藝術に眞劍味の者も、多くない。

＊　＊　＊　＊

予は今まベルロクのロベスピエルを讀んだ。ベルロクの此の著は、三十歳の壯作であるが、其の批評は概して妥當である。予は如何に贔屓目で見ても、ロベスピエルを好むことは出來ぬ。彼は要するに田舍辯護士の魁たるに過ぎない。彼に比すればダントンは、如何にも偉大である、其の過失は多しと雖も。

＊　＊　＊　＊

別に王安石と、蘇東坡の絶句集がある。彼等は同時代の人にて、政治家としては、正反對の地に立たが、然も文壇の上には、

相互の共通點もあれば、識認もあつた。而して其の絶句の、何れも所謂波瀾を捲いて小詩に入れたる點は、他人の追隨を容さない點がある。

昭和四年三月六日午前六時半　蓬萊丸船室中に於て。

## 五二　門司、馬關、別府

三月六日、終日讀書、久し振りに眞成の休息を得た。甚だ身勝手であるが、文明の利器は、相換らず、我等を惱してゐる。それは無線電信だ。用事ある者には此程調法の物はないが、用事なき者には、此程當惑の物はない。浮世の風は相變らず、我が清淨なる船室を襲うて來た。而して來つゝある。

＊　＊　＊　＊　＊

晩餐の卓には、予を除いて全滅したる同行四人、悉く出揃うた。江副船長は、頻りに揶揄したが、何れも唯々として閉口してゐた。但だ海上穩かとなつた爲め、何れの卓上も賑合うた。

＊　＊　＊　＊　＊

五月七日、豫定の如く七時前に六連島の檢疫所を過ぎ、八時前には門司に著した。東京から阿部、矢野の二女婿、熊本水俣

の故郷からは、從弟德永、古川町長、一木校長など出迎へた。而して大阪から二人の用務を持ちたる友も來た。福日の池田君も、記者としてではなく友人として來た。小倉から人見未亡人も來た。

＊　＊　＊　＊　＊

當日は馬關海峽に珍らしき好天氣だ。但だ予等に取りての心殘りであつたのは、門司稅關長泉至剛君が、名古屋に榮轉せられて、此處にて相見ざる一事であつた。されど君に取りては榮轉且つ好轉なれば、祝す可きは勿論である。

＊　＊　＊　＊

我等の一行中、德富迪君は、直行したれば、船上にて相別れた。同君は臺灣新聞東京支局長であつたが、御先祖樣に對して先生に盡すとて、始終周旋した。予は君が神經衰弱に陷らねばよいがと、心配した程、細心の注意を、此の旅行の爲めに加へた。君は確かに此の旅行を成功せしめたる一人である。

＊　＊　＊　＊　＊

我等は大阪及び關門の友人達に伴はれ、大吉に至り、用談し、且つ午餐の馳走を受けた。馬關は河豚の名所にて、大吉は馬關

に於ける河豚の老舗だ。但だ我等臆病者共は、主人側の調笑にも拘らず、一同辭退した。所謂寶の山に入りて、手を空しく返るものであらう。されど古人の句に、『河豚汁や鯛もあるのに無分別』と。予は之を以て一生の金箴としてゐる。此れは單に河豚に限りたることではない。

＊　＊　＊　＊

但だ河豚汁を拔にしても、大吉の料理は、臺灣腹には結構であつた。それから諸友に送られて、一時半に門司を發し別府に向うた。觀光團の如く、鄕友親戚相伴うて行く。予は寧ろ汽車の緩行を悦んだ。

＊　＊　＊　＊

沿道柳は旣に青眼を展せんとしつゝある。梅花は隨處に滿開だ。予は端なく山陽が『落日寒潮豐州路。始見周防數點山』の句を想起して、彼の旅行と予等の旅行とを、對照するを禁じ得なかつた。

＊　＊　＊　＊

六時頃別府著、日名子旅館に入つた。而して日名子太郎君を加へ、一行七人晩餐を共にし、打揃うて明日耶馬溪を目論見んだ。東道の主人は勿論日名子君である。

昭和四年三月八日午前六時　日名子旅館に於て。

## 五三　別府より由布院を經て耶馬溪に至る

三月八日、日名子柚軒翁を東道として、午前七時半、別府から由布院まで、山越にて赴く。此の路は昭和二年十月廿一日別府から日田に赴く際一度經過し、予が大好物の一となつた爲め、今回も繰り返すこととした。

＊　＊　＊　＊

道は鶴見嶺の半腹から、由布山の腰を踰えて行く。殘雪斑々氷柱は隨處に掛りてゐる。山路霜柱は寸餘。臺灣にては八十度以上の炎熱に、扇を使ひ、煽風機を轉じ、汗を流し、西瓜を喫したると對照し、宛も夏と冬とを、一度に過したる心地がする。

＊　＊　＊　＊

山を下りて由布院なる龜の井別邸に至れば、中谷翁は予等の來訪の意外に驚いてゐる。而して翁は昨日獵の雉を携ひ來りて、之を煮付け、今朝東京大森に歸らんと欲して、此の如く準備してゐたとて、青竹の筒を示した。今更らながら相互の奇緣

を悦び、予は數字を書して貼つた。

＊　＊　＊　＊

前遊の際には滿地鷄頭花であつたが、此度は猫柳が萠出でたるのみにて梅花は纔かに一輪二輪と云ふところ。予等は其の溫泉の餘りに清淨なるが爲めに、覺えず一浴を試みるを餘儀なくした。

＊　＊　＊　＊

此れから卽今新設の鐵道線路に沿うて、ひた奔りに奔り、中村町を過ぎ森町に入つた。此れは久留島家の舊治にて、今に其の屋敷が存してゐる。之を過ぐればやがて新耶馬溪の入口たるトンネルに至る。

＊　＊　＊　＊

予は大正二年七月一日、二日の兩日もて、平福百穗畫伯及び西村生と偕に、耶馬溪の勝を探つた。今回が二度目である。予に於ては左程珍しくないが、吾家の山の神に於ては初見なれば、當人の希望に任せて、此遊を企てたるもの、左りとて予に於ても無論快遊であつた。

＊　＊　＊　＊

前遊には中津から山陽の所謂る耶馬溪を見、新耶馬溪の入口なる山移りの一庵に宿し、痩蚤の犧牲となり、翌二日新耶馬溪を見て、其の森町に赴くトンネルに至つたが、今回は之を逆にして、此の新耶馬溪の出口のトンネルから入つた。而して其のトンネルは道路改修の爲めに、前のトンネルの下に穿つたから、予等の前遊の際に通過したるトンネルは、宛も山腹にあるの看をなしてゐる。

＊　＊　＊

耶馬溪の山水の奇は、姑らく措き、柿軒君の携へ來れる予が舊著『山水隨縁記』中の百穗翁の挿畫の、實に藝術的良心の結晶たるに驚いた。

＊　＊　＊

君のスケッチは、一見すれば淡々著筆、宛も不用意の作に似たれども、其の一木一石、悉く眞に逼らさるはなし。予等は悉く卷中の挿畫と實景とを對照し、眞景に感嘆するよりも、寧ろ百穗翁のそれに感嘆した。

## 五四　耶馬溪、羅漢寺、中津

新耶馬溪は、奇石怪巖もて、山陽の所謂る耶馬溪に優てゐる。而して此の山骨稜々を見るには、今が全く見頃と云ふ可き也。

＊　＊　＊　＊

我等は深瀨字蔦の巢の、鹿鳴館と大層なる名號を付けたる一店に上りて、携へたる辨當を喫した。主人字を請ふ、乃ち『天斧創成』の一句を書して與へた。主人は名物の卷柹――潤筆料？――を差出した。

＊　＊　＊　＊

此より山移に至り、普賢橋畔の橋本屋前に出でた。此處は大正二年七月一日の夜を、平福君と與に瘦蚤に喰はれつゝ過した舊跡だ。其の店構は依然たる當時の光景だ。

＊　＊　＊　＊

前遊では羅漢寺の峻阪に、平福翁と與に、玉の汗に浴したが、今度はそれ程ではなかつた。上りて指月庵に至れば、扇子が欲しかつた。寺僧も代り、家も新たに葺きたれども、其の光景は舊に仍りて、小品ながら愛するに堪へたり。山陽が此處に至らずして、徒らに羅漢寺をけなしたるを惜しむ。

＊　＊　＊　＊

人は紅葉の耶馬溪、新綠の耶馬溪を艷稱す。されど野梅亂點の耶馬溪亦た尤も佳。野梅は多からざるも、亦た隨處にあり。幽香脈々、眞に愛す可し。

＊　＊　＊　＊

我等の中津に入つたのは、午後五時頃であつた。卽今賣却沙汰にて、問題となつてゐる自性寺を訪うて、大雅堂の書畫を觀た。過日迄一人前二十錢であつたが、今は五十錢に値上げしてゐる。此處も再遊だ。平福翁の大雅堂畫のスケッチが、『山水隨緣記』に掲げてあるのと、對照して、原畫よりも、寧ろ其のスケッチの妙に舌を捲いた。

＊　＊　＊　＊

福澤翁の獨立自尊の記念碑を公園に觀、更らに其の邸宅を訪うて、翁の少時勉强したと云ふ土藏の二階を下から眺めた。庭には梅と夏橙がある。宛も梅花書屋と云ふ樣である。其の家は上級でない士族相應のもの、何れの藩でも、大同小異。但だ之を此の如く保存し、其の向側には附屬の庭苑さへ設け、而して其の周圍には煉瓦の墻を築きたるなど、如何にも其の鄕黨の誇りたる翁に對する、鄕人及び門人の心掛けを感じた。

＊　＊　＊　＊

我等が其の訪問帳に記名し、既に宅番の老婦人に挨拶して車に上りたるは、五時半を過ぎてゐた。此れから一氣呵成に駛りて別府に著したのは、既に午後八時を過ぎてゐた。此日は午前七時半から午後八時まで、終日山路を馳驅した。行程實に一百二十餘哩であつた。

## 五五　國東半島に遊ぶ（一）

三月九日、昨夜耶馬溪見物から還り來れば、熊本なる醫科大學長山崎博士から、專介もて一長卷を寄せ來つた。それは横井小楠を中心として、其の交友及び門人の書簡其他を蒐めたるものだ。其中には予の父母、父方母方の伯叔父母等、要するに其の一半は、予の姻戚關係のものであつた。予は實に涙の出づる程、山崎博士の用意周到に感謝した。乃ち一詩を賦して、題跋の命に應じた。

＊　＊　＊　＊

題には『桃李滿門』の四字を、大中小三通りに書いた。而して跋として、左の拙作を錄した。

小楠天挺傑。實學極二眞原一。宿志在二天下一。
桃李滿二其門一。崇論駭二世俗一。孤鶴衆鳥喧。
晩節拜二朝徵一。遭難喪二其元一。匇匇六十載。
識者哀二其寃一。昭和御極日。枯骨浴二天恩一。
丹心報レ君節。赫赫照二乾坤一。吾黨獸堂子。
愛レ人及二兒孫一。寄來一長卷。展披淚欲レ吞。
兒孫何須レ說。偏使二風教敦一。」

＊　＊　＊　＊

本日も亦た榊軒君を東道として、午前八時半より出掛けた。德永君は熊本に、阿部君は大阪に、矢野君は落伍し。同行は予等兩人、仁藤生と東道者四人のみ。然も昨日同樣の好天氣、遊運好し。

＊　＊　＊　＊

我等は宇佐の少し前から西國東郡田染村の眞木の國寳佛參詣に赴いた。春光熙々、梅花は恒に我等を逆迎す。途中まで田染小學校長廣岩君出迎へ、やがて河野渡邊の舊新兩村長道傍に待ち受け、相ひ伴うて眞木大堂に至る。當日は緣日とて、參詣者村徑、野路に雜沓し、加ふるに牛馬市さへありて、如何にも賑かであつた。

眞木大堂は數株の老杉の中にある横十間、奥五間の堂宇にて、本尊阿彌陀如來、その兩側に四天王あり。左には不動明王とその兩側二童子、右には威徳明王、以上九佛が國寶となつてゐる。何れも鎌倉時代の雄健勁豪なる氣に充ち、特に威徳明王の尊像は、柯蔭精舍の愛染明王を聯想せしむるものがある。予は唯だ斯る偏鄙に、斯る國寶の存在したるを、意外に思はざるを得なかつた。

＊　＊　＊　＊

河野前村長の宅にて、午餐を喫した。同家にて甘酒や、饅頭やの馳走になり、此れから同村字蕗の富貴寺を訪うた。

昭和四年三月十日午前六時半　別府日名子旅館に於て。

## 五六　國東半島に遊ぶ（二）

大分縣は九州に於ける黨爭地として、熊本と共に、其の横綱を張りてゐる。渡邊田染村長の語る所によれば、眞木大堂と富貴寺とを連絡する捷路の開鑿さへも、その爲めに運び兼ねる由。黨爭も町村に波及しては、折角の自治制も空名となる。

＊　＊　＊　＊

富貴寺の大堂は、即今世に知られたるものとしては、九州に於ける唯一の藤原時代の建築と聞く。此は眞木大堂に對して、蕗大堂と稱してゐる。三間四面四注屋根舟肱木の阿彌陀堂の建築に屬してゐる。何となく奥州中尊寺の光堂や、日野法界寺や、宇治の平等院を聯想せしむる、藤原期典型的の建物だ。

＊　＊　＊　＊

其の壁畫は殆んど剝落し去りたるも、仔細に檢し來れば、隱隱として見る可し。內陣の須彌堂には格狹間を作り、其の四方の圓柱は、卷柱にして、菩薩と寶相華とを彩繪し、其の後壁には淨土曼荼羅を描き、內陣天井下の小壁には、佛像、外陣四周の長押上の小壁には彌陀來迎の圖があると聞いたが、然も今は其の痕跡なく才かに辨ずる程である。內部外陣の天井は、小組格天井、內陣は折上格天井にて、是等は文和二年祐禪大德の修理したるものなる可く。今にも當時の棟木に其の銘字が存してゐる。

＊　＊　＊　＊

此の大堂は小高き山の麓に作り、其の磴道の入口から、大堂の周邊に至る迄、殆んど古碑の行列と云ふも不可なく、應安の

石佛、延文の供養塔、仁治の石塔、其他鎌倉から室町にかけての碑塔の類林立し、中には慶長の年號を墨書したる石塔さへ見出された。

＊　＊　＊　＊

予は今更ながら、斯る藤原期の精金美玉に比す可き建築物が此の僻陬に存するを意外とせざるを得ない。云ひ後れたるが、國寶の阿彌陀如來の木像は、是亦藤原期にして、慈容の相、眞に我をして愛著せしむるものがあつた。

＊　＊　＊　＊

此れから高田町に還り、青宇田の畫像石を見た。高田小學校の古澤君待受け、詳細說明せられた。此れは小高き山の麓、老松の天に聳ゆる一帶の山坡に、八十三體の畫石が駢列してゐる。其の年號は明德から至德の間にて、何れも南北朝期である。小堂の石藥師も、恐らく同時代のものであらう。駢列の畫像中には、經文の如きもの、全く剝蝕して、辨じ難きものもあり、阿彌陀尊像の如きは、上下二片に中斷したるものがあり。或は四五片に缺損し、其の何の畫像であるか、一寸知り難きものもある。されど其の大體に於て、此れが石垣の材とならずして、斯く保存せられたるは、全く田舍に在つた爲めであらう。

＊　＊　＊　＊

此れから宇佐に參拜し、大正二年彌勒寺の跡にて、唐草紋樣や、蓮花紋樣の瓦を掘り出したる跡を訪ひたるも、今は何時も柳の下に居らず、空しく一二の布目瓦片を拾うたるのみ。それから大樂寺の白梅、紅梅の咲き亂れたる所に、寺の小娘の案內にて、國寶の佛樣を觀、それから日出に立ち寄り、八幡社の大楠や、松屋寺の蘇鐵や、帆足萬里先生の墓や、それぞれ大正二年の舊遊を繰り返し、薄暮別府に還つた。

昭和四年三月十一日綠丸の船室中にて　時に船は今治港を經由して多島海の中を過ぎつゝあり。

## 五七　別府及び瀨戶內海

三月十日、昨夜後藤是山君、熊本より來り、今朝池田湖風君——實は夜半來著の由——福岡から來り見る。諸君と雅談俗談相交へて語り、やがて辨當を携へ、觀海寺溫泉の最高處、松屋旅館の最高樓に上りて、展望し、快談し、會食し。それから地獄巡りと出掛けた。地獄も時と與に追々增加し、氣烟噴出の場

所に、水を注ぎ、それを沸騰せしめたる人造地獄も少からずと聞く。我等は鶴見地獄を見、海地獄にては、所有主千壽君の接待にて、半熟卵を喫し、竈地獄にては、一個八十五日生き延びると云ふ饅頭三個を喫し、血の池地獄にては、血染の手拭をハンケチに擇び、而して歸宿の上、當分左官屋を稼いだ。左官屋とは塗ること、即ち揮毫を意味す。何れも親友の希望もだし難く、此れを此行最終の義務として憤發した。

＊　＊　＊　＊

鳳山麥風基隆雨。　踏遍蓬萊南北州。
歸路泉都春色好。　梅花新柳滿二灣頭一。

即興として、同遊の諸君に書し貽つた。

＊　＊　＊　＊

發せんとするの際、九州新聞の高木亮君亦至つた。此に於て予が嘗て相見んと期したる人に、悉く値ふを得た。予の滿足知る可きである。此れは來る五月熊本に於ける、小橋先生に關する講演會其他に就て、打合せの用件ありたれば也。

＊　＊　＊　＊

一行四人——予等夫婦、矢野君、仁藤生——綠丸に乘り込む。諸君相送りて船に至る。靈泉寮主人、日名子縫軒君、及び大分測候所長山川君等相送りて大分に至り、船を去る。近き將來の五月を約して。

＊　＊　＊　＊

綠丸すみれ丸の姉妹船は、何れも一千七百噸の新造船にて、何れも神戸三菱造船所の建造にかかり、近代的の便宜と美觀とを盡してゐる。實に此上なき調法の船にて、特に此の二船の新造により、從來別府大阪間一日一往復航海に加へて、一日二往復となり、此れが爲めに大阪と別府とには、宛も一大船橋を架したる趣がある。

＊　＊　＊　＊

特に別府發夜間の航路は、今治にて天明に至り、朝來多島海を過ぎ、瀬戸内海の風光を坐ながら賞するは、尤も好都合である。予は今や實に綠丸の船室中にて、本文を認めつゝ、此の風光の美を賞しつゝある。

昭和四年三月十一日午前六時半。

## 五八　大阪の風京都の雪

三月十一日、綠丸は穩かに航進しつつある。午前五時には今

治港を經由し、此れから瀬戸内海の尤も美なる多島海を縫うて行く。王朝の古、四國、九州、中國の貢船を惱ました海賊、南北朝以來の海賊大將軍、戰國時代の倭寇、何れも此の詩情滿々たる島嶼に巣うたることを想起し、櫻花に毛蟲が巣うたると對照し、獨り面白く感じた。

＊　＊　＊　＊

天氣は何となく異狀を呈しつゝある。朝來日光は黄色を帶び、陰晴屢々變じ、時に小雨となる。神戸から佐藤密君相迎へて同船し、最近の蘆花全集の卷頭に掲げたる、明治三十一年一月、横須賀にて撮影したる寫眞を示さる。其中にて兩親、弟、及び萬熊の四人、既に缺けてゐる。生死茫々、誰か其眞を會する。別に縮冊の『時務一家言』がある。その外包と、表紙の見返しとに、『贈佐藤仁兄、大正四年三月、著者不肖兒萬熊』と題してある。予は君の依賴を待つ迄もなく、兩書に所感を誌した。船は豫定の午後四時より早く天保山の棧橋に着いた。上陸すれば盲風人を吹き倒さんとして、凄まじき勢であつた。それにも拘はらず、親戚、舊新の知友の待ち受けられたるは、快心の至りだ。

＊　＊　＊　＊

直ちに梅田停車場から京都行の汽車に乘り、車中にて新版の新聞に有り附いた。山は何れも鹿の子まだらである。雪がちらちらと舞ひ出した。例の如く三條小橋の萬家に入りて、兩脚を伸ばした。

＊　＊　＊　＊

夜に入れば雪片花の如し、全く雪降りである。京都の寒さは、覺悟の前の事とて、今更驚きもしないが、一週間以來、扇子を使ひ、煽風機を廻し、西瓜を喫し、汗を拭きたる我等としては、其の變化の急轉に、聊か面喰はざるを得ない。

＊　＊　＊　＊

只今（十二月午前五時半）起て空を見れば、星が碧霄にきらきらと光つてゐる。而して屋瓦は何れも素白、寒冷の氣、見たばかりで身慄ひがする。

＊　＊　＊　＊

予は氣候の變化を、目のあたり見るにつけて、此の一月以來、予の身邊の變化にも、自ら驚かさるを得ない。何事も運命と諦むればそれ程氣安きことはない。如何に人算の功を誇るも、到底人間は天算の安排に一任するの外はない。

昭和四年三月十二日午前五時半　京都萬家の一室に於て。

## 五九　濱寺の半日

三月十二日、夜來の雪霽れ、屋瓦皆白し、二月以來、臺灣全島を跋渉し、宛も一個月間に、春夏秋冬を經過したる心地す。

＊　＊　＊　＊

待ち設けたる神戸の四女は、其夫と二孫とを伴うて來た。正午過ぎ七條停車場より、阿部博士と與に濱寺に赴き、本山松陰翁邸を訪ふ。翁の蒐儲の書畫、武具等を見る。

＊　＊　＊　＊

予は刀劍、小道具の類には、全くの素人である。されば翁の肥後裝の大小、及び肥後鍔の蒐集を見ては、實に快心洞目を禁じ難い。肥後鍔は、其の特技たる象眼は固より、其の意匠と云ひ、其鍛へ方と云ひ、實に大巧如拙の極に達してゐる。此れも畢竟藩祖細川三齋の感化と云はねばならぬ。予は實に如何に個人の感化が、偉大であるかを、實物によりて、教育せられたる心地がした。

＊　＊　＊　＊

別に各種の鏡面がある。其中には主人公が、金の上都から獲來りたる珍品もあつた。書畫も餘りに多くして、一々記憶しないが、北齋の八十八歳書きの武者繪〔頼政？〕鄭板橋の書竹、文衡山、董玄宰の書畫帖などは、今尚ほ眼前に髣髴として再現し來る。巨然の山水は、董其昌の審定書を掲げ、羅振玉の蒐儲にして、所謂大物にして、手輕き鑑賞品でない。雪舟の中釋迦、左右文珠、普賢の三幅對は、小品ではあるが、如何にも超妙の域に逼つてゐた。

＊　＊　＊　＊

翁に伴はれ、其の附近の近藤樵仙君の畫室を訪ひ、轉じて翁の創立にかゝる、富民協會の本部に抵り、其の陳列室、書庫等を觀る。而して松林中の旗亭にて、大每の幹部諸君と與に、晩餐の饗應に預つた。

＊　＊　＊　＊

凡そ書畫骨董を蒐集するには、種々の動機がある。他人の所有せざる物を所有して、之を自から誇りとし、且つ世に誇らんとする者がある。世間に雷同して、所謂お附合ひに然かする者がある。蓄財若しくは殖財の一方便として然かする者がある。

美術を愛好し、之を鑑賞するの餘、然かする者がある。研究の標本、若しくは資料として然かする者がある。松陰翁の蒐集振りを見れば、其の最後の一に幾いかと察せらるゝ。若し之を併と云はゞ、佳僻である。但だ予は翁の擅場である考古的藏儲を観るの遑あらざりしを、次回の樂みとして殘し置いた。

昭和四年三月十三日午前六時　京都高家に於て。御大典後の見物客は、御大典の當時に幾倍す。宿屋も中々大繁忙の様子である。

## 六〇　雨雪中の山鼻

三月十三日、今日は寒い、底冷がする、天氣は何となく險惡の徴候がある。實は東京から、大阪、神戸から來れる、諸ろの親戚達と、近郊に出遊せんと企てたが、扨も綾憎な天氣である。

＊　＊　＊　＊

午前中一寸、谷村秋村君を見舞うた。維摩の室ではないが、君の室一杯、殆んど奇書珍籍だ。實は其病を訪ふつもりであつたが、最大好物に釣り込まれ、御輿が据つて動かなかつた。

＊　＊　＊　＊

瞥見したる中にて、大字本景德傳燈錄は、室町初期の高僧法親の寄儲にして、其の書入れや、印記もある。五山板としては、元の延祐版を、妙葩の覆刻したもの、前後二種ある。されど此の大字本は極めて珍、極めて稀。秋村君は高麗板ではあるまいかとの説であつたが、予は恐らくは南北朝、若しくは室町初期の板にして、宋元板の覆刻ならんと推した。

＊　＊　＊

天氣模様、更らに改善せられなかつたが、折角の思ひ立ちの爲め、意を決して子供二人を合せ一行十二人、雨を衝いて山鼻の平八に出掛けた。其門に入る頃は、霙となつた。傘をさすさへ困難だ。

＊　＊　＊

紅葉や、新綠の頃には、其の座席さへ見出すこと、容易でないが、今日と云ふ今日は、何れの建物も、全く空屋にて、人のけはいさへなかつた。大聲に怒鳴れば、漸く案内の女中が出て來つた。豫じめ電話をかけてゐたから、高野川端の一亭に入つた。其處には火鉢が並べ、座蒲團が敷いてあつた。

＊　＊　＊

霙は雪となり、又た雨となつた。水入らずの親戚共の寄合に

て、他に遠慮もなければ、何れも座談に興じつゝ、且つ半は慄へつゝ、午餐を倶にした。

* * * * *

京都の變化は、何れの方面にも、行き渡りてゐる。旅客の目には、それが餘りに痛切に映ぜらるゝ。其中に於て、平八の如きは、先づ時代の風潮を、餘りに多く被らない一であらう。世の中には最新で名物もあれば、最舊にて名物もある。何れもそれぞれ取柄がある。されど京都から歴史的色彩と韵致とを取り去らば、剩す所幾許ある可きぞ。春日燈籠を、鮎の子たわしにて洗滌するが如きは、餘りに感心す可きことではあるまい。

* * * *

歸來天候恢復の徴なく、夜大阪から用談の客が來たる頃は、又雪となつた。此の如くして予等は臺灣に思ひ掛けなく避寒旅行をなしたる、差引勘定を、京都にて償ひつゝあり。人事天候、兩ながら乘除の算盤は、嚴重であり、精細である。

昭和四年三月十四日午前六時半　京都萬家に於て。

## 六一　三夜莊の午餐

三月十四日、天候は依然不定、晴天に雪が降る。日の照り雨は、狐の嫁入と云ふが、日の照る雪は、狸の聟入にやあらむ。

* * * *

大谷光瑞師の歸朝は、恰も予等の京都入と同日であつた。今日は前日からの約束にて、師を三夜莊に訪ふこととした。

* * * *

先づ桃山御陵を拜し、其の裏道から乃木神社を徑ぎり、竹林を過ぐれば、やがて三夜莊前の大乘社、及び光壽會の事務所に至る。

* * * *

大谷師は予等を待ち詫びてゐられた樣子だ。途中にてまごつき、遲刻したからだ。座には師の外に、師の土耳其に於ける事業の支配人格たる上村氏、及び神戸の森本瑞明氏、名古屋の橘瑞超氏など相見えた。三夜莊の眺めは、何時來ても、絕景だ。眼下に宇治川の清流を帶び、畿甸の山川、歷々として指顧の間にあり。外には淡雪がふら〱と舞ひ、内には電氣ストーヴを擁し、師の快談を聽く。是亦人間の一樂事である。

師は土耳其にて黃疸に罹り、一時入院せられたと聞くが、今や其の健康恢復し、前回相見たる際に比すれば、寧ろ一層の元氣を覺えた。佛國の葡萄園から、土耳其の養蠶事業など、一として予等には耳新らしき話ならざるはなかつた。

*　　*　　*

本日は予等の爲めに、特に料理通なる森本瑞明夫人の手を勞して、午餐を饗せられた。卓上にはその他に、四方の師を崇拜する人々からの到來物が陳列せられた。何れも師の食味を熟知して、寄せ來るものなれば、一として珍味ならざるはなかつた。予等は豫て其の覺悟にて、朝飯を聊か差し控へたれども、寧ろ何故に朝餐を全廢せざりしやを悔いた。

*　　*　　*

予等は御馳走のみならず、更らに珍味の裾分けさへ忝なくしたるは、餘りに果報過ぎたる話であつた。而して次回には閩中の筍の御馳走の豫約さへあつた。予は念を推して、『御忘れなき樣』にと挨拶した。

*　　*　　*

此の數日は、忙がしくは無かつたが、騷がしかつた。然るに去る者やら、出掛る者やらにて、久し振りに予一人となつた。予は始めて臺灣以來の疲勞を、此の數時間の獨居にて療した。

昭和四年三月十五日午前六時半　本日は特急にて、愈よ大森なる山王草堂に還らんす。家に歸るは、樂しけれども、用事が山の如く待つてゐるには、聊か閉口せざるを得ない。

## 六二　身邊の變化

三月十五日、今日は珍らしく快晴。午前十時十五分特急にて京都發、七條停車場の待合所の一半は、嚴めしき警官が占領してゐる。そは共産主義者故山本代議士の送葬監視の爲めであらうと推せらる。

*　　*　　*

汽車中は春日がさしこんで、氣持が好かつた。同行は臺灣行者三人に、二人の女婿を加へ、五人にて、賑かであつた。逢阪山を越え、關原を過ぐる迄は、一面の銀世界であつた。雪白比良山一角ばかりでなく、湖面を除けば、山も、野も、家根も、畑も、悉く雪であつた。

點點布帆明鏡開。比良雪色映二天臺一。
春寒京洛連日雨。白淨乾坤滿目來。

關ケ原以東は、遠山を除けば、殆んど雪を見なかつた。名古屋、靜岡、沼津などには、若干の知友に出會し。國府津に至れば、柴山、淺峰、田中、長瀧の諸氏出迎へ、横濱にて下車すれば、親戚、舊故皆々出迎へ、更らに大森停車場に待ち合せたる人々と挨拶し、久し振りに大森なる山王草堂に還つた。

* * * * *

此行二月五日發し、三月十五日還る。足跡は臺灣の北の端から南の端までに及び、別府や、京都などにても、多少の道草を喰うた。僅かに一個月足らずの旅行ではあつたが、如何にも愉快であつた。

* * * * *

更らにそれよりも特筆す可き一は、予が身邊の變化だ。一月十六日には、國民新聞を去るの聲明書を公にした。而して三月十五日歸家の際には、予が特定寄書家として、東日、大毎に『近世日本國民史』、小品、及び隨時の論文、雜說等を寄稿するの契約略ぼ成つた。此れは予から毫も要めたのではない、全く對手向の懇望に任せたのだ。國民新聞の社長が、大毎、東日の寄稿家となる。眇たる予の一身ではあるが、予に取りて實に思掛けなき變化である。最近二個月以來に、斯る變化を來たす可しとは、神ならぬ予が固より豫知す可き筈がない。但だ明治十三年の夏、予が十八歲にして志を立て、京都同志社を飛び出し、東京に出でたるは、東日の社長福地櫻痴氏に就て新聞記者たるにあつた。然も遂ひに其志を遂せず、翻然悟る所あり、故山に歸り、讀書數年、明治十九年『將來之日本』の原稿を懷いて上京し、茲に四十年の文章報國の生活は開始せられた。

* * *

十八歲にして東京日々の記者たらんと欲したる予が、六十七にして、其文を東京日々に揭ぐる樣に相成りたるも、何等かの因緣ではあるまい乎。予は斯る事共を回想しつゝ、徐ろに草堂の安樂窩に、旅塵を拂うた。

昭和四年三月十六日午前七時半　山王草堂梅花旭光に映ずるの窓邊に於て。（完）

昭和四年五月三十日午前七時　熊本縣八代町弓削君邸に於て。

蘇峰老人一枝瀉

# 金解禁の準備

前田繁一

## 一

金解禁問題は大正八年以來、即ち原内閣當時に、時の農商務大臣山本達雄男が原首相に金解禁斷行の必要を進言して以來、繰り返へしむし返へし各方面に於て研究し論議された所である。例へば加藤友三郎内閣の大藏大臣たりし市來乙彥氏は、大藏大臣に就任するに際して必ず自己の手で金解禁を斷行せん事を決意し、某氏に之れを契つた。さうして財界各方面の名士を招致して金解禁に對する意見も聞き、日銀總裁たりし井上準之助氏と共に着々其の準備を進め、爲替相場其の他が解禁を可能とするに至つたが爲に、遂に大正十二年の四月、井上日銀總裁はいざ決行の好機來れりと市來藏相を促したものである。然し事實は遂に決行せずに終つた。又前内閣の片岡藏相も、自己の手に依つて金解禁を決行すべく、之れが準備として内地正貨の現送を續けたものである。然るに現内閣は正貨現送を非なりとして之れを廢し、昨年の秋東西銀行團を始め、各種の經濟團體が即行決議を爲すに及んで、政府は「尙時期に非らず單に聞き置く」と稱して取り合はず、最近に至つて某閣僚が金解禁近しと洩したと云ふので今度は逆に經濟界が大いに狼狽し、爲に國債價は暴落し株價や綿糸布が慘落、財界は一大恐慌來?を思はするの狀態となつた。此の財界の不安狀態に政府が又狼狽、再三閣議及び關係閣僚會議を開いて對策を議し、遂には當分金解禁を行なはずと云ふ事を暗示すると同時に、漸く眞劍に此の問題を研究せんとする態度を採るに至つた。斯くの如く金解禁の問題は前後十年間に亘つて各方面で研究論議されたものであり、我が國の貨幣制度を名實共に完全なる金本位制度に復歸させる爲に、又我が國の金本位制度をして金本位制度たるの實質を喪失せしむるが如き重大なる金の輸出禁止を、單なる大藏大臣の命令(大藏省令)一つで行ひ、然も無期限で之れを行つて居ると云ふ不合理を改むるが爲に、金の輸出禁止を解くの必要ありとする事は最早何人も異議の無い所である。否一日も早く金解禁を斷行すべしと云ふのが國民の聲である。然るに何が故に依然「金解禁を行へ」とか、「いや時期でない」とかを繰り返へさねばならないか、何が故に金解禁論の擡頭に依つて財界が狼たへ、政府が狼狽しなければならないか、問題は結局金解禁に依つて來るべき影響を逃れんとし、又は其の影響を輕からしめんが爲の準備が無く、さりとて其の影響を甘んじて受けるだけの覺悟が全然出來て居ない爲に外ならぬ。從つて現在我が國に於ける金解禁問題の論點は、金解禁の準備如何に存すると云ふべきである。

而して如何なる準備を如何なる程度に進めるか、如何なる程度の準備で滿足すべきかに依つて此の問題は解決するのである。

## 二

金解禁の準備とは解禁の爲の正貨の流出、物價の急激な低落、金利の急騰其の他解禁に依つて招來すべき各種の影響を成るべく少く、成るべく輕くする爲に必要なる對策を講ずる事たるや言ふを俟たぬ。所が此金解準備として、然らば果して如何なる程度の對策を必要とするかと云ふ事になれば、同じ鶯に對して豐臣秀吉が「鳴かずんば、鳴かして見やう」と云ひ、織田信長が「鳴かずんば殺してしまへ」と云ひ、德川家康は「鳴くまで待たう」と云つた樣に、人各々其の立場の異なるに從つて違つて來る。今何等私的の利害關係を持たず、公平に批評し得る立場に在る財界政界の巨頭であり、何れの內閣が金解禁を決行せんにも無視する事の出來ない財界政界の巨頭の意見を參考の爲に質して見ると、

高橋是清氏は「金解禁の必要は云ふ迄もない。然し實行するのには準備がいる。即行決議をした銀行に一向準備が出來て居ないばかりか、財界に殆んど見るべき準備がないぢやないか、財界の準備としては先づ銀行は產業資金の利率を引下げて大いに產業の助長に努め、產業界は生產費を減じ製品價を安くし、外國品の厄介にならずともすむ樣自給自足の途を樹てねばならぬ。政府は財政を緊縮し、公債を整理し、民力の休養に努めねばならぬ。要するに金解禁の爲に正貨が半減してもよいとして、半減すれば正貨の流出が止まると云ふ見極めがつかねば駄目だ。」

山本達雄氏は「財界に準備しろ準備しろと云つた所で、其處は營利を目的とする集團だ。政府が一向財政緊縮や公債整理もせず、又何時解禁する事やら見當さへ付かないと云ふのでは、一日でも一月でも多く儲けたいとの思想の生れるのは當然で準備の出來る筈がない。少く共金解禁をやらうとの意志があり、財界の何物たるかを知る程の者なら、準備の出來るのを待たずして積極的に準備せねばならなくするのに限る事を知る筈だ。即ち半年なり一年後には解禁するんだと云ふ事を明かにする。さうすれば政府自身もそれぞれ準備の必要が起り、財界もいやでも準備する樣になる。」

濱口雄幸氏は「豫告付きの解禁は一利一害あつて考慮を要する。然し假りに民政黨の內閣が出來たとすれば、自分等は直ちに金解禁の準備に着手する。即ち財政緊縮を計畫し公債整理の案を樹て、特融の回收計畫を樹てるのを始め適當なる方策を樹立する。然し其の準備たるや決して之等の計畫の實效を待つの要なく、たゞ計畫だに樹てば良い。あとは單なる事務的の手續きあるのみで、此の計畫が立ち此の事務的の手續きだに終れば、政府は直ちに金解禁を斷行すべきであると信ずる。

井上準之助氏は「金解禁を行ふには先づ政府に於て豫算を大いに緊縮し、公債の徹底した整理案を樹立するのを始め、金解禁に必

要なる各種の施設を爲すべきである。さうして國民への反應を見るべきである。之れで尚十分なる反響なき時は、政府は又次ぎの議會に更に緊縮した豫算、十分なる公債の整理案等を提出して國民に呼び掛くべきであり、其の反響を見るべきである。斯くして幸に金解禁を決行するに十分なりと認むるだけの反響があつた時、政府は始めて共處で金解禁を決行すべきである。然るに若し現内閣が之れを爲さずして、徒らに人氣取りの爲に金解禁を實行する樣な事があれば、財界は實に憂ふべき一大不詳事を惹起するであらう。從つて斯くの如き無謀な金解禁が（何れの内閣によらず）決行さるる樣な事があれば自分は全力を擧げて其の反對を爲す覺悟である。」

と云つて居る。即ち斯くの如き公平な立場に在る人々に於てすら、其の觀る所其の云ふ所が斯くまでに違ふのである。

## 三

一方現内閣の金解禁に對する態度如何を觀るに、從来所謂積極政策だの産業立國だのと稱して、財政は膨脹するに任せ國債は濫發し、地方債は無暗に認可して地方財政をも放慢に導き、財界に對しては空景氣を煽らん事に終始し來つて、殆んど其の行ふ所云ふ所の總てが、金解禁を不可能に導かんとするに非らざるかを思はせるの狀態にあつた。然も閣僚は今にも金解禁を行ふかの如き言を放つたり之れを打ち消したり、所と時の異るに從つて種々なる言辭を用ふるが爲に、財界は極度の不安にかられて國債や株式が大暴落を演じ、對外的には信用を失墜して爲替の變動甚だしく、大震災の年すら一ヶ年の正金建値變更は二十數回に過ぎなかつたものが、昨年の如きは實に九十回の變更を見るに至つたのであつた。然るに此の政府の無責任なる言動の財界に及ぼした影響、對外的に及ぼした影響の余りにも甚しかつたのに漸く目が覺めたのか、それ共在外正貨の激減に驚いてか、兎も角も最近漸く金解禁の準備として財政緊縮の必要と公債整理の必要を口にし、金解禁の爲には地租委讓の政策も又止むを得ずとさへ口外するに至り、現に經濟審議會をして公債整理案を審議立案せしむるに至つたのである。

## 四

金を解禁すれば爲替がパーに回復し、圓價が國際間に十圓は十圓として通用するのであるから、從來に比して外國品が安く輸入出來る。從つて輸入が増大し之れが爲めに日本の正貨が海外に流出する。正貨の流出は金利を昂騰せしめ輸入の激増は内地物價を低落させる。金利の昂騰は公債、社債、株式等に對する投資を不利に導いて低落を誘致し、産業界は金融難と金利高で生産費は寧ろ増加を餘儀なくさるる上に、物價低落に依つて苦るしくなる。勢ひ事業の縮少改善に迫られて失業者が多くなる。金融界は擔保品の値下りで損をする。斯うした關係で財界は一層不景氣になる。從つて金解禁を行ふが爲には、先づ大消費者たる中央財政及び地方財政の經費を緊縮節約して購買力を減じ、以て國民全體の勤儉節約を促し、一方通貨を縮少して物價を極度

に引下げ、金解禁の際物價が急角度の低落を演じないですむ様にし、國債地方債を整理して金解禁後の證券界に興ふる影響を防ぎ、日銀制度の改善其の他に依つて完全に通貨の統制力を養ひ、一方民間銀行は不良貸の整理を行つて以つて金融界に及ぼす影響を少なからしむる事が必要であり、産業界では經營方針を改善して生產費を低減し、製品價を安くして置いて物價低落に堪へ得る様に準備して置く事の必要なるは云ふ迄もない。然し問題は果して何時になつたら此の準備が出來るかに在る。日本の財界の現狀、產業界の現狀を以てして、果して高橋氏の云ふが如き自給自足の域に達するのは何時の事であらうか、吾人は到底之れを期待する事が出來ない。故に我が國に於て自給自足の域に達するのを待つて金を解禁せんとする高橋氏の言は、結局我國は金解禁の時期來らずと云ふ結論に到達するのではあるまいか。さもなくば自給自足を待つ間に日本の正貨は激減する。正貨の流出を惜んで正貨現送もせず外資輸入も意の如くならずとして、假りに一部に提唱さるゝが如き爲替決濟に依らんか、爲替信用の濫用となり圓價の慘落となり、遂には獨逸、佛蘭西、伊太利の如く平價の切り下げを餘儀なくされ、日本の財界をして破綻に導くであらう。又金解禁の準備として財政の緊縮や公債整理の必要なる事は高橋、濱口、井上の三氏及び現內閣の唱ふる所に何人も異議のない所であるが、然し井上氏の云ふが如く、果して政府が徹底せる豫算の緊縮、徹底せる公債の整理を實行し得るであらうか、又財界が政府の豫算緊縮に應じて遺憾なき準備を實行するであらうか。假りに兩者共希望する様に實行をするとして、果して何程の時日を經過すれば實現するであらうか、其の成り行きには甚だ疑問なきを得ない、要するに金解禁の準備を如何なる程度に於て滿足すべきかは、金解禁の影響を重く見るか輕く見るかに依つて違つて來るのであるが、一面には金の輸出を禁じて居ても、大正九年に二十一億七千八百萬圓あつた我が國の正貨が最近では約半額の十一億七千萬圓に激變して居る事や、我國獨り未解禁國なるが爲に世界の思惑が圓價に集注し、爲に爲替が激變して對外貿易上非常に不利である事を考へ、且つ何時かは解禁しなければならないのであり、何時かは解禁に依つて影響を受けねばならない以上、然も解禁後に非らざれば眞に我が國の財界は樹て直し難い以上、或る程度の準備で滿足し、解禁すべきではあるまいか、困難なる準備準備で漫然年月を經過すればする程正貨は激減し、準備の必要程度は層一層增大し、解禁をして益々困難に導くのである。故に先づ政府は準備の成り次第金解禁を決行する旨を明かにして民間に準備を促すと共に、政府は財政緊縮、公債整理其の他の計畫を樹てゝ公表し、其の後の貿易關係や爲替の狀態を見て適當なる時機に解禁を決行するのが妥當ではあるまいか、さもなくば一年位の猶豫期間を公表して官民協力して準備を進め、期間の到來と共に實行するのも一方法であらう。兎も角も準備の必要は何人も認める所であるが、激減したとは云へ尙戰前の三倍近くの正貨を有する今日に於て、官民が一致協力して準備を進め、或程度の準備で滿足して解禁するに非らずんば、流出して止まぬ我が國の正貨が激減し、益々解禁難となる事を忘れてはならない。

# 美しき書籍の話

日夏耿之介

日本の出版史にも誇らしい數頁がある。陀羅尼經勅版の事は百萬塔に殘つて寧ろ印刷史に屬すといふべきであらうが、春日版、高野版、臨川寺版、大内版等を經て、角倉本に至つて初めて吾等の嗜慾を、書籍全體としての小藝術的効果から無限にそそられるものあるを強感する。

素庵の死は寛永九年であるが、同じ十四年には光悦がその後を追ふてゐる。嵯峨本運動は慶長十三年即ち沙翁死前八年の「伊勢物語」前後からと見て正しく十七世紀前半の偉業である。古雅掬すべく、フレクシビリテイと靜謐と落付きとを兼有する日本的製本の美は、爾來續いては來たが、たまに面白いものがあつても大部分は偶然の産物で、製本を藝術品と觀ての全意識的所産ではない。明治維新後日本綴の良工漸く亡び、時あつて是を托せむとしても高價について致方もない。能樂と歌舞伎と浮世繪と共に日本綴本の技術も亦保存せしめる事が急務の一であらう。

美しき書籍は、現代に於ては明かに亡びつつある。が、その要求は全くないのではない。格安の普及本が本能的に要求せられてゐると同じ程度の強さで、一部の人々の間にのみは熱狂的に美裝版が歡迎せられてゐるのである。十年の昔、ほんのそゞろ語りに、吾徒が初版本の興味を談り且論じたのが一奇縁ともなつて、初版本を八釜しくいふ者は古本屋や書物好きの者のみにとどまらなくなつた。況んや豪華版などといふ新語も通用する樣になつた今日、出版界に格安本でない限りは中途半端の値段の本が賣れなくて、ずんと高價な限定豪奢版本が結局賣れゆきがよいのである。豪奢版の興味は、單に金持の息子のお道樂のみにとどまらない。その日を漸くに生活してゆく程度の人々が、刻苦して貯へ拔いた中から、若い番號の豪奢版の立派である事、限定せられてある事、初刻本である事の喜びを味はひ乍ら、辛じて購ひ取つて唯一の怡樂を感じてゐる涙ぐましい實例を度々見せられる。

然し、この要求は自然であり、要求の事實は儼然たる事實ではあつても、まことにビブリオーファイルやメニヤなどの專門的の眼を見はらせる程の立派な眞の豪奢版本があるだらうか。遺憾ながら絶えてない。印刷も製本も材料も今日の程度で豪奢本を作らむとするは、足なくして歩行せむとするたぐひである。今日の豪奢版といふは、多く西洋本の夫れの寫しであるが、大部分は西洋クリスマス贈本程度の美しさの模倣であつて、活字にも

用紙にも何等技藝的豪奢の面影は認められぬ。たまに用紙に意を用ゐても、その紙を生かす程度の立派な活字が使はれてゐない。用紙と活字に成功しえても表紙の皮革の使用法に慣れてゐない。畢竟、豪奢版の要求は眞實であり切實であるが、今日の程度に滿足してゐる供給者需用者は美本の何たるを解せぬ黄口の兒輩にすぎない。

プライヱイト・プレスの運動は、英吉利では一八九〇年代から特に目立つて來てゐる事實である。ウヰリアム・モリスのケルムスコット・プレスを初め、ダブスプレス、ヹール・プレス、アシェンデンプレスなどを古顏として、是等の流風をしたひ起つた今日の英吉利のプライヱイト・プレスの面々——ナンサッテュ・プレスといひ、スカラアティス・プレスといひ、ホガアス・プレスといひ、ゴオルドン・コカレル・プレスといひ、フォレスト・プレス、ジョン・ロドカア・ペアトリイ・プレス、グレヂノッグ・プレス、ファンフロリコ・プレス、クレセット・プレス、ペガサス・プレス、(在巴里)、ピイタ・デイヴィズなどその他の野心的なる數々のプレスのうちには單に外裝の表面的なる美をよそほつてゐるにすぎない本の出版屋も交つてはゐるが、(カザノバ・ソサヤティー刊行本のごとき、決して藝術的に美裝せられたるものとは云はれない。)又そのある者の中には、ウヰリヤム・モリスのケルムスコット・プレスに於ける、コブデン・サンダスンのダブスプレスに於けるが如き古風流を學んで、少くともある種の刊行物に於ては倫敦一流の出版者を斷然リイドしてゐる業績を示してゐるが如きものもある。ナンサッテュの如きがその好適例であらう。又、この種の出版物には學問のあるものも多い。たとへば、エヱラアド・メネルの如きが最も恰好の例證であらう。

今たま〳〵手許にある數種の限定豪奢版本に就て誌してみるならば、ケルムスコット版のキイツ詩集は、固よりモリス自らが手掛けた限定本として、表紙皮革の吟味といひ、製本といひ、カート、イニシヤル、クユ・ド・ランプの類といひ、特製用紙といひ、プレス專用四種活字の一種であるゴオルドン・タイプといひ、表紙用草色紐といひ、それら全ての諧調美といひ、凡そ近代書誌上の逸品であるに違ひはないが、特にわれ等の注目を牽く個所々々は、モリスの意匠は別として、是は偶然の功果であるが、表紙皮革の黄色に色づいた點(同じ皮革を以て包める同じケルムスコット本の沙翁詩集に此色が出てゐない所を見ると偶然の功果に違ひないと思はれる。)骨太なケルムスコット活字の黒印刷の間に、標題や數字だけが赤印刷に附してあるその間の一種の諧和、W・Mすかし入りのコワ張つた用紙の感じとゴチック好みの活字の姿態とが不思議の諧調を發揮してゐる點などである。この骨太活字はモリスの中世趣味から來たもので、モリスと一致してゐる事いふ迄もないが、本文の性質によつては纖細な感じの活字の方がより佳い場合もあらう。そこで、その後に出た豪奢版の活字にはその要求に應じたものも少くない。

つい先日とどいた Discours des Sorciers はロドカアの初譯 An Examen of Witches はロドカア本の一であるが、二色刷で各章起句の一字と欄外文字とが赤刷になつてゐるだけは別に特異でないが、表紙が草色刷のフル・パアチメントであるのは面白い。此色刷フル・パアチメントは日本でも詩集類に縱横無盡に活用してみたい。カンステブル版のゴチック小說ウォルポオルの「オトラント城綺譚」はチスキック・プレス本だが、七枚の色刷銅版畫が技術的に卓れてゐる。同じ社の一ベックフォド旅日記」二冊本も特に美版本でもないが、用紙印刷が瀟洒に出來てゐてプライエイト・プレスならぬ大資本屋本としては善本の隨一であらう。牛津大學出版部が、從來の敎科書向標準詩集文庫の外に、特に十七世紀神秘詩人などを目安にして學問的良心を基とした、矢張り美本と迄はゆかぬが立派な裝幀のライブラリ・エディションの詩集類を續出してゐるのは佳い事である。

ロドカア本の「マレウス・マレフィカアルム」は例の近年巫妖の邪學書に關するその稀覯書を續々公表して惜まないサマアズ師の校訂本だが、表紙の灰色バックラムに配するに背中が紅色パアチメントで、型が大きいから此種の內容と一致してよい。ファンフロリコ版の故ゴッス氏校訂ベドオズ全集はホルバインの「死の舞踏」の密畫を所々に鏤めた七百五十冊限定本で、中味の佳い割合に表紙の黑布と模樣紙はぎ分けの色の配合が失敗してゐるのは殘念である。フォーンテュン・プレスのサマアズ師拉甸譯本ルドボコ・マリヤ・シニストラアリの「デモニヤリテイ」は九十番迄がアーノルド不晒手ずき紙本、一二九〇番迄がパチラア手ずき紙本であるが、その手ずき紙に極上インク刷の本文をかつきりと印刷して、黑バックラムでしつかり表紙包みにしたのは研究本などには一種の新型であらう。以上いづれも限定本のみである。

ナンサッチュ如きが、新刻本出るごとに賣切れ、賣切れる每に元價の何倍を示してゆくのは、小氣味よくもあれば小憎らしくもある。ランダアも、トマス・ブラウンも、沙翁も、ダンテも、シエリも、ヘリックも、學問的良心の上に藝術上の滿足を加へんとする限定本が續々全集的刊行を告げてゆくのも面白い。吾々の望むものは、學的完璧本か、藝術本かであるが、此二者が一致するに越した事にない。近時の此計畫中には成功したものも成功せぬものもある樣だが、何れにせよ此企ては日本のとつて學ぶべき唯一の道である。日本人の歷史と氣質と趣味とが要求する究局の物は、澁い凝つた地道の中に華やかさを藏する者である。日本綴であれ、支那趣味であれ、西洋輸入型であれ、所詮はこゝに落付くに違ひはなからう。

# 藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

48

丸本としての淨瑠璃の分解は色々の意味に於いて行はれ得る。その一つは、三段五段六段乃至九段の各段が、有機的統一を失つて、各段がそれぞれの首尾と脈絡とを持つた個體として獨立する傾向を增せば增すほど、各段が一種の劇として分解することである。その二つは、敍事ともつかず抒情ともつかず、組唄風に微かな連絡の絲を辿つて繋ぎ合せられた景事道行その他の節事が、その美しい曲節を主目的として、母體を離れて獨立することである。さうしてその三つは、出來るだけ單純な劇的組織を基礎としつゝ、動作よりは抒情を主とする端物の新種が發生することである。丸本を丸本として一貫する長い意志に弛みを生ずるとき、その中に綜合されてゐる敍事詩劇抒情詩等の要素がそれぞれに分離して、獨立に、若くは音樂との綜合によつて、自己を主張せむとするとき、淨瑠璃には當然に分解作用が起つて來なければならぬ。さうしてこの三つの意味の分解が孰れも事實として行はれたのであつた。

第一の意味の分解は全然物理的で新しい化合や新しい變質を惹起する性質のものではないから茲では論外に置く。第二第三の意味に於ける端物は義太夫の集大成以前、江戸淨瑠璃の中で既に行はれてゐた。それは操淨瑠璃の外に歌舞伎の舞踊地として、又「淋しき座の慰」として、歌舞伎淨瑠璃及び座敷淨瑠璃が要求されたからである。それが段物と並んで行はれ、而も次第に勢力を增しつゝあつたことは土佐、外記、就中半太夫節の語り物を見てもわかるであらう。河東節が淨瑠璃のこの系統を大成する。端物が自覺的に音曲としての獨立を遂げたのである。併し此處に來るまでには、段物の分解による端物の成立がなければならなかつた。半太夫節の隆興の際にこの過

程を物語つてゐる。半太夫節の中には最初から端物として作られたやうなものもあるが、初代半太夫の正本は概して六段の時代淨瑠璃であつたのを、そのうちの景事道行、節事等がそれだけとり出されて、主として端物として行はれるに至つたものらしい（佐々醒雪氏「俗曲評釋」の中河東節の部參照）。半太夫節の丸本が散佚に歸して「仁保鳥」のやうな端物集のみか殘つてゐるところを見ても、この節の歷史が段物分解の歷史であつたことが想見されるであらう。さうしてそれが上方で集成せられた「松の葉」や「松の落葉」の中で、淨瑠璃の部の大部分を占めてゐるところを見れば、元祿寶永の頃上方に於ける座敷淨瑠璃の要求を充したものは、義太夫節の解體したものではなくて江戸上りの半太夫節であつたことも明かに想像される。初代河東が半太夫を離れて自立したのは享保三年、この年は、上方に於いては、時門松が竹本座の正月を賑はした年である。「國性爺合戰」が未曾有の大入をとつたのはこの三年前（正德五年）、「心中天の網島」が初興行を飾つたのはその二年後（享保五年）、義太夫節はまだ强健な綜合力を維持して、段物として盛んに臨璨を靡はしてゐた頃であるが、その同じ時に、江戸淨瑠璃解體の形勢は既に確定的であつた。段物分解の萌芽は早くから江戸に——氣短かで、明快な手つとり早いことが好きで、長い、綜合的な、粘り强い意志を持つこと少き江戸つ兒の間に——孵育されつゝあつたのである。

併し歌舞伎淨瑠璃や座敷淨瑠璃の要求がある以上、上方と雖も亦端物淨瑠璃の發生を見るべき事情は具備してゐる。上方に於いてこの系統を代表するものは、義太夫節と相並んで元祿寶永享保の頃に行はれた一中節であるが、それは河東節最長の曲と稱せらるゝ「隅田川舟內」で河東と掛合の曲を殘すほど東西呼應しつゝ、而も近松が義太夫のために作つた詞藻を借用すること多い點に於いて、流石に上方のものであつた。それは操淨瑠璃と別途に發生したものとして、河東節のやうに段物の崩壞を前提とする趣が少い。さうして義太夫節そのものの一節が座敷淨瑠璃として酒宴の間に語られたことも、（冥途の飛脚で、三世相の一節が語られてゐることもその例とすべし）たゞその段物としての勢力の派生と見るべきであつて、未だ續淨瑠璃解體の徵候としては見ることが出來ないのである。義太夫節分解の理由は、更に後れて、義太夫節それ自身の中に發生して來なければならなかつた。

然らばその理由とは何であるか。此處にも一貫した意志の弛緩が一つの理由にはなつてゐるであらう。外觀から云へば種々幅の廣い作品が續出しても、それはそれ〴〵の山を持つた一段物の積み重ねであつて、合作の弊風が甚しくなると共に、相互の間には矛盾衝突がある場合さへ頻發し、脚色をくるりくるくるとひねくり廻してゐる間に、全曲として支離滅裂に陷るのが寧ろ原則と云はるべきであつた。故に前に云つた第一の意味の分解が自然になつて來るのは當然である。併し一度一段物の出發點を與へられた以上、五段續の慣習によつて綜淨瑠璃の外形を必要とする操座以外に、一段物の新作が、他のもつと根本

的な新要求に促がさるゝまゝに、新しい節として分離するのに何の不思議があらう。義太夫節そのものゝ内部にかういふものゝ發生を準備する事情が既に具つてゐたのである。

さうして義太夫節がその敍事的抒情的要素を減じて益々科白劇に近づいて行つたといふ事實が、私の茲に云ふ「他の根本的な要求」の獨立を刺戟する。近松にあつても景事道行その他の節事が全體の中に稍獨立せる部分として存在してゐたことは事實であるが、それは寧ろ曲の全體に浸潤してゐる音樂的要素から支持されるものであつて、他の乾燥せる部分と不調和なるが故に驅逐される危險を持つてゐるのではなかつた。彼の丸本を讀む者は、後世のそれに比して敍事抒情の部分が相應の分量を以て白づめの堅くるしさを緩和してゐることを發見するであらうが、此等の部分も優に音樂のための餘地を作つてゐたのである。さうして更に正本の節附を見れば、この音樂が人物の白の中にも亦融け込んでゐた趣を看取することが出來るであらう。然るに義太夫の院本が劇的に傾き過ぎると共に、この音樂の水分が全體の外に搾り出される危機を生じて來た。それは道行景事などが虐待される結果を生じたのみではない。宗輔の門松の道行が双蝶々の「道行菜種の亂咲」に萎縮してしまつて、前者の「春に育つも花誘ふ、蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず、知られず知らぬ中ならば、浮れ初めまい、狂ふまいもの、味氣なや」が後者の「春にも育つ花誘ふ、長吉は情の味知らず、長五郎はわが譯知らず、知らず知られぬ中ならば、浮れ初めまい狂ふまい」といふ瀟洒に堕落し、又前者の「主は忘れてゐさんすか、過ぎし月見は井筒屋で底意限なき夜と共に、踊りあかした面白さわしや今迄も忘りやせぬ、忘れぬ物よ、見あかぬ君が、外八文字屋の道中姿、目つきで、殺す、所體になづむ……」以下の名文句が、後者の「いつかは見そめ逢そめて、かの井筒屋の月見の夜、ともに可愛うなりそめて、花ならば連理の枝、鳥ならば比翼の鳥、變るまいぞや變らじと、いひ交したは違はぬ〳〵四季の花、春は朧に八重霞、柳は緑花は紅、その紅の内ぞ床しき、床しなつかし逢たし」といふ骨なしぶよぶよの卑俗な文句に下落するやうな結果を生じたのみではない。原因結果が如何に交錯するかは知らず、この場合には院本が劇的に傾くと共に、感情の音樂的高翔の翼が萎縮した。若し詳しく海音出雲以後の淨瑠璃を研究するならば、恐らく義太夫節そのものゝ内部にも、この散文化散文劇化に反抗する音樂強調の努力の交錯を見出し得るであらうが、孰れにしても大勢は既に決せられてゐた。故に次第に義太夫節の外にはみ出して來た音樂的要素が、前にあげた短い意志と結合して、其處に淨瑠璃の新種を要求することは極めて自然であると云はなければならぬ。さうして實際吾々は茲に豐後節の勃興に遭遇するのである。元祖宮古路豐後掾は、系統から云へば都一中の門人であり、年代から云へば正德享保の頃近松の晩年からその歿後十余年の間に活動した人であつて、義太夫節の頽廢期に出てそれから分派して一流を始めた人といふのではないが、その流派の歷史的意義及作

用から云へば、私の見方は決して不當ではないであらう。豐後節正本集と「宮古路月下の梅」、「宮古路窓の梅」等を見るに、その語物には一中節とほゞ同樣なる道行景事等の類も少くはないが、豐後節得意の語物とされてゐる「睦月連理𢢫」や「加賀お菊妹背中酌」などは一貫した筋を有する段物であつて、一中系の景事や道行などよりもより多く段淨瑠璃の正系を相續してゐる。固より「外題年鑑」に享保三年竹本座に出勤して博多小女郎を語つたと記された國太夫が豐後掾の前名であるか別人であるかは研究を要するところで、吾々は「聲曲類纂」の「享保三年戊十一月大坂竹本座に於て始て芝居を勤む、夫よりこのかた國太夫節とて諸國に聞ゆ」といふ記事を直ちに繼承するわけには行かないが、兎に角彼の仕事が一中から伸びてその蔓を義太夫節の畠に絡まうとしてゐたことは認めなければならぬ。段淨瑠璃に於ける音樂的要素、抒情的要素の獨立が豐後節の存在理由となつた。故に吾々が第二の意味の分解よりも寧ろ第三の意味に重きを置いて豐後節の勃興を解釋するのは、決して失當とは云へないのである。座敷淨るりは今や「座敷」を出て市井の間にその聲を張り上げた。さうして燎原の火のやうに蔓衍するその勢力が忽ちに三ヶ津に擴がり、特に一擧にして天下の御膝元花の御江戸を征服して、碩儒太宰春臺に浩嘆を發せしめ、又淫風を煽り心中や駈落を續出せしめるといふ、或意味に於いて名譽ある非難の的となつた。かくて江戸に留ること六七年、元文四年遂に官命によつて禁止されたが、その世間に卸した根は確乎不拔であつた。上方に於いても薗八節としてその後繼を殘したが、わけて江戸に於いては、その子に當る常盤津、富本、新內、その孫に當る淸元が長く此地を占領して遂に今日に至つたのである。

豐後節のかういふ勢力の根元は何處から來たか。それが座敷淨瑠璃の系統に屬する唄物と接近してゐるのも一つの理由にはなるであらう。併しそれが澁かつたり意氣だつたり華かだつたりするだけでは、假にも心中獎勵の非難を受けるまでに人心に喰ひ込むことは出來ないであらう。又それが歌舞伎の舞踊地として用ゐられることも長く人心に親しみを持つ理由の一つではあるであらう。併しそれが親しみを持たせる機緣になるのは、その前に音曲そのものが舞臺に適合する力を持つことを前提とするのであつて、この前提がなければ如何に人爲的に强行しようとしてもその音曲を舞踊地として用ゐ難きこと、例へば歌澤や追分と同樣でなければならぬ。而も單に舞踊地として有効であるだけでも、官憲の禁止を必要とするほどの勢力を持つことは到底出來ないのである。然らば豐後節のこの勢力は果して何に基くか。吾々はこの場合、聲樂に於ける歌詞の意義と、歌詞の意味に纒綿な力を與へる根元としての曲節の意義を考慮に置くことを餘儀なくされる。豐後節獨特の强味は、それが段淨るりの一つの派生として、一つの物語りを——而も最も當時の人心に訴へる物語りを——持つところにある、而もその物語りの感情にふさはしき哀切悽愴の聲調をこれに伴はせるところにある。それがたゞ河東や一中のやうに澁い上品な座敷淨瑠璃

として、端唄や地唄のやうに全體として一貫する意味を發見するにも苦むやうな歌詞を伴ふに過ぎなかつたならば、この勢力は到底出て來なかつたであらう。又それが豐後自身の末流なる常磐津の「乘合船」や、清元の「三社祭」のやうに、主として舞踊地として作曲せられたのみならば、其處にも當時の官憲を聳動するやうな「弊害」を發生する理由はなかつたのである。たゞそれが新内の「明烏」や「蘭蝶」のやうに、又富本及清元の「小菊」や常磐津の「夕霧」のやうに人の心に作用すればこそ、それは一擧にして全國を風靡し、數年ならずして官憲の禁令を招くほど、時代との緊密な交渉を持つことが出來た。約言すれば、豐後節は時代の意識に對する何等かの新使命を帶びて歷史の舞臺に出現したものでなければならぬ。

茲に於いて吾々の眼は再び淨瑠璃と時代の戀愛文化との交渉に向ふ。「河東上下、外記袴、半太羽織に、義太股引、豐後かはいや丸裸」──この丸裸といふ言葉が、この謎を解くために吾々に與へられた鍵である。豐後節そのものゝ曲節は既に吾々の耳には失はれてゐるが、その子孫である常磐津新内清元から、恐らく明治以後の要求に迎合するために加へられた上品らしい莊嚴の外衣を脱がせれば、ほゞその味ひを想像することが出來るであらう。これに今日殘存してゐる豐後及び豐後諸流の段物の歌詞を配して綜合すれば、それは一點に集中して前後を顧みぬ感情の──主として戀愛感情の、丸裸な絶叫を特色とするものであつたと見らるべきである。前にあげたおさん伊八(連理の椽)お菊幸助(妹背中酌)や、新内の伊太八尾上(歸咲名殘の命毛)、綱五郎花咲(二重衣戀占)などの脚色を見るに、人物の數も乏しく、境位の構造も極めて簡單に、與へられた點の間の最短距離をつなぐ數條の直線が舞臺の輪廓を仕きつてゐる。脚色は明快で混雜したところはないが、又混雜する必要もないほどゆとりのない趣向の中で、男女の主人公に「限りのない」(明烏の中の時次郎の白)嘆きをそゝぎ出させるべく、作者はひたすらに急ぐのである。今や戀愛は一點に凝縮する。西鶴や近松に見るやうな廣い人生との交渉は最早全然顧られない、戀愛以外の人生はたゞ戀愛を惠むもの若くは滅すものとして意義を有つのみである。固より近松その他の作品から借用されたものは、それぞれの流派のものとして新作された作品に比較すれば、更にゆとりもあり曲折もあるが、それも新淨瑠璃の精神に從つて、(三)ひたすら戀を唄ふ方向に敷衍せられ若くは短縮せられる。さうしてその戀は──その戀は官能の戯れを盡す艶冶妖嬌の趣を備へてゐさうに見えながら、その背景に咲き滿ちた花のやうな豐かな明るさを缺いてゐるために、刹那的ではあるが何處となく神經的な陰影を持つ。さうして常磐津から清元に來るに從つてゆとりのある明るさの次第に減

少して來たものが、踊つて新内を見れば最早官能の誘惑さへ殆んど影を潛めて、たゞ不幸な二つの魂のいとし可哀の絶叫が「限りなく」耳を貫くことを發見するのである。「音曲叢話」に、元文五年九月一日（禁令の一年後）豐後椽に旗下の士米田氏の女と淺草奥山で情死したと評いてあるさうであるが、その眞偽は疑ふべしとするも（高野氏日本歌謠史九八二頁、謠曲類纂宮下參照）。人は豐後節を聽いて確に死にたくなつたであらう。文化以後吉原で新内語りの入廓を禁じたといふのも決して理由のないことではないのである。

豐後節は、それが爛熟文化と交流する限り、かういふ性質を持つてゐるとすれば、其處には藝術として如何なる創造的意義があるか。それが享保以後の時代を全體として反映するものでないことは、豐後諸流と同時に行はれた黄表紙洒落本等の輕薄さ加減を參照すれば明かである。而もそれが時代の一つの潮流を反映する一面をも持つてゐることは、遊廓の自己崩壞と一般社會の道徳的硬化から來る戀愛の不幸を眼中に置くとき、おのづから領會することが出來るであらう。この不幸な魂の愛慾が此處に反映される。不幸な魂は此處に自分達の嘆きを代表する一つの藝術を發見する。それは最早一般社會の動脈硬化を撼すべき積極的効果を期待させる力を持つてゐないが、少くとも彼等の胸はこの藝術を通して溜息をつき、涙によつて和げられることが出來たのである。さうして人の魂はこの狹い穴にもぐり込むことによつて、少くとも集中して一つの事に溺れ、その意味において或種の深さを持ち、浮薄な散漫な生活から脫れようとするいゝ樣の滿足を見出して來る。此處に豐後諸流が時代の子としてその急所に觸れたから、多少の創造的意義を以て時代に先驅する點が成立するのである。豐後節流の戀はこの時代にざらに行はれた戀とは撰を異にする。それは總この時代の戀の理想としてこれを愛する人達の生活に一種の潤みを與へることが出來た。所謂享保以後の時代は人生の或一點に豐後節が存在することを眞面目に必要とした。さうしてこれを必要と感ずる人はたゞに平民のみならず、「士大夫」の家にもあつたのである。吾々は再び此處に藝術の一般社會的使命を見る。それはこの場合には、再び平民藝術の特權階級征服である。

併し私は豐後節の歷史的意義にかういふ觀察を下すとき、その中に發達した滑稽諧謔の一面を見おとしてゐるのではない。假令清元や新内の節のまろばし方のぐいゝ上りとどかゝ落ちとに滑稽を發見するのは不都合であるとするも、舞踊地に用ゐらるゝ唄詞の聯想の働かし方、これにつるゝ曲節の頻繁な轉調に諧謔を發見することは、何人の怒りをも買はないであらう。輕業的とんぼがへりに興味を持つ點に於いて、それは正しく德川後期の黄表紙や狂歌の用途である。併し此處に心か

らの快活を見ることを私は拒みたい。近松の諧謔に見るやうな自然なふくらみ、連想の戯れを漂はして行く翼の輕さはもう此處には失はれてゐる。それは求められたる陽氣である點に一種の憂鬱の陰影を持つ。さうしてこの陰影が新内の滑稽として正面から打出されるとき、それは始めて一種の魅力を持つて來るのである。「小とみ七兵衞、不心底闇蛇」のやうな不心中な心中が一篇の主題となることは、それ自身に於いて既に時代意識の轉調を示すものであるが、これを取扱ふ作者の諧謔には一種の神經的な憂鬱がある。さうして一九の膝栗毛のやうな放漫に氣さんじなものゝ中から、特に市子の段と赤坂の段とを選擇して來るとき、新内精神の骨髄は最も鮮かに浮んで來るのである。二つとも滑稽は氣さんじが死と對面するところに生ずる。彌次郎兵衞がその飄輕の皮をはいで善良な弱さを暴露するところに、相應に深刻なフモールの空氣が醸し出されるのである。これは時代末的な滑稽である。さうしてこの滑稽が一本筋な戀愛の絶叫と反映し合ふとき、豐後節的戀愛の姿は更に反面から補足される。眞正の快活は孰れの方面にもない。陰慘の氣は何處となく地平線上に漂つてゐるのである。

(註一)。私が豐後太夫を江戸に留ること六七年とするのは尾崎久彌氏の說に賛同しての計算である。享保十五年名古屋を經ての江戸下りが不可能であつて、少くとも彼の江戸滯留が享保十八年以後でなければならぬことは、同氏の證明によつて最早疑問の余地がないやうに思はれる(同氏新著「江戸軟文學考異」中「豐後掾江戸下り年代考」參照)。

(註二)。近松作夕霧の吉田屋を豐後諸流のそれ、就中そのうちの代表的のものと見るべき常盤津の「其扇屋浮名戀風」とを比較すれば、近松の原文が如何なる方針の下に改作されたかを見ることが出來るであらう。常盤津の改作者はその戯曲的な部分を簡約して、唄ひ得る部分を十分に堪能するまでに唄はうとする。さうしてその結果、劇的簡潔を犧牲にして無意味に頽するまでくどきを敷衍する。近松の警告に反いて「年もゆかぬ娘を」といふべきところを「年はもゆかぬ娘をば」といふ方向に様式化するのである。――「文句にてには多ければ何となく賤しきもの也、然るに無功なる作者は、文句をかならず和歌又は俳諧の如く心得て、五字七字等の字くばりを合さんとする故、おのづと無用のてには多くなる也。たとへば、年もゆかぬ娘をといふべきを、年はもゆかぬ娘をばといふ如くになる事、字わりにかゝはるより起りて、自然と詞づらいやしく聞ゆ。大やうは文句の長短を揃て書べき事なれ共、淨るりはもと音曲なれば、語る處の長短は節にあり、然るを作者より字くばりをきつしりと詰過れば、かへつて口にかゝらぬ事有物也。この故に我作には此かゝはりなき故、手にはおのづから、少し」(難波土産、發端)。



以上私は近松から出發して豐後諸流にいたるまで淨瑠璃の變遷を概觀した。さうして脚本の詞章を越えて遂に音樂の一端に觸れた。義太

夫節の場合には作者を主眼に置いて演奏者を殆んど全く論外に置いたものが、豐後諸流に到つて作者を問題外にして曲節そのものの構造及び特質を首位に据ゑたのは、義太夫の音樂史上に於ける事業を輕視するからではなくて、豐後節の勢力を理解する上に於いて歌詞作家の個性と獨創とは殆んど問題にならないからである。義太夫の事業はこれを取扱ふに困難な事情から、約束として切り捨てられた。豐後節の歌詞作者はそれ自身として問題とするに價ひせぬが故に、彼等が追隨してその手足となつた曲節によつてその勢力の根柢を見るより仕方がないのである。今、文學の範圍を越えた曲節の一瞥に續いて、吾々は自然に演劇の考察にひき入れられようとする誘惑を感ずる。併し出發點を近松と西鶴とにとつた以上、吾々はこの誘惑をふりきつて、先づ西鶴以後に於ける小說變遷の趨勢を見て置かなければならぬ。

西鶴以後の浮世草紙は、九分九厘までは、一つの徵候であつて創造ではない。西鶴に於いては著しかつた特異のレンズは、此處では次第に平板に歸して通し眼鏡に近づいて來る。故にそれは其處から他に波及するやうな力強い像を結ぶことが出來なかつた。其處から後世に燃え繼ぐやうな熱を發することが出來なかつた。尤もレンズが平板になるにつれて、世相の反映が實に卽く度を增してゐることは事實である。寫實といふ言葉を淺く使へば、それは新聞記事的の意味に於いて西鶴よりもより多く寫實である。藝術として失ふところに比例して記錄としての意味は增加してゐる。故に元祿後半から享保元文にかけての「浮世」の姿を見るために、それが歷史上の參考になることは爭ひ難い。併しこの記錄は、固より歷史的眞實を求める心から出發してゐるのでもなく、世相の心理解剖を目的とするものでもなく、それはたゞ娛樂と敎訓の動機から導かれてゐる「面白いお話」に過ぎないから、歷史上の參考として見る場合にも、この動機から來る誇張は勿論假借してかからなければならないのである。この娛樂と敎訓の動機に、私は西鶴近松以後の文藝が流れ行きつゝある潮流を見る。この意味に於いて此等の浮世草紙は一つの徵候的價値を持つてゐるのである。

私はこれを例證するために、江島屋其磧の「傾城色三味線」(元祿十五年)と「傾城禁短氣」(正德元年)とをとる。それは前にも云つたやうに西鶴の讚仰である、祖師西鶴の敎義を碎いてこれを通俗にした所謂敎科書である。その文章は平易流暢にして俗耳に入り易く、その話しぶりは樂々として人を娛ましめるにふさはしい。其處には西鶴の好色二代男に見るやうな敎訓がもつとあらはに流れてゐるが、それは人生の大義を說かうとするのではなくて、粹の何であるかを知らせようとするのであるから、身分相應の眞實を持つてゐて、後の敎訓や爲永春水の作品のやうに、裸にひつかけた纏綿じみた虛僞と矛盾の醜態を

さらすにはいたらない。一度西鶴近松の飛瀑となつて峽谷を出でた文學の流れは、今や稍々打開けた野の間を、それ自身の普勢を知らずに、先驅創業の勢に押されておのづから流れて行くのである。

其碩の說く曉道の極意は何であるか。彼はこの點に於いても――或ひは、この點に於いて猶更、祖師西鶴の敎說を素直に祖述する。禁短氣第二卷「野傾の兩宗あづかり論」に於いて女道を若道の上に置くのは、一見男色大鑑の若道優位論に反對してゐるやうであるが、あれが西鶴の一貫せる主張と實行とでなかつたことは前に（第三十七節）云つた通りであるとすれば、これも亦祖師に對して異を樹てた部類には入れ難い。兎に角曉道の極意について其碩は西鶴を祖述する――「傾城大師の語に、傾城狂ひによい程といふほどなし……とかく使はるゝだけはばたく／＼と使うて仕廻またしき時に分別すれば、差替の一腰も質入の一ツも殘る物ぞかし……とかく商賣は心なかう、遊興は短くばつと出て、しやんとやむが此道の至極の悟道と、傾城久末期の名言をのこされぬ」（禁短氣、一ノ四）。「女郎は無欲でもつたもの、又大臣も金銀の沙汰なく、賢過ぎた方より、少し鈍き方が、大樣にしてよし」（色三味線、京之卷、五）「銀つかうて氣苦勞せうよりは、銀つかはずに用心のよい、家内にました事なし、大臣と色里で稱美せらるゝほどの身ならば、少し鼻の下の長いこそ、諸分藥なれ」（同上、大坂の卷、六）――これが全篇を貫通して隨所に綴致さるゝ根本觀念である。一々の說話は、この意味に於いて遊興をすゝめ、この意味に於いて限りを知ることを敎へるために、面白可笑しく、穩和な諧謔と誇張まじりに語されてゐるのである。さうして其碩はこの說話を構へるために、單に西鶴の趣向を時々拜借するのみならず、又彼の文章の一節の無斷借用をも隨處で繰返してゐる。その實例は擧げるに遑なきほどであるが、この借用にあたつて原文が冗長に、而も骨拔きに增補改刪されてゐることは、恰も出雲が近松の文句を頂いて使用する場合と同樣である。ただ其碩はあたまから西鶴を頂いてこれを表看板にしてゐるだけに、盜んで而も知らぬ顏をしようとする剽竊者のさもしさを見せない、これがせめてものとりどころである。

併し其碩の作品は純粹に西鶴の影響のみによつて出來上つてゐるのではない。他の浮世草子と同樣に、其處には近松及び彼によつて代表される歌舞伎や淨瑠璃系の文學の合流が見られる。彼が西鶴の文章を借用すると等しく近松の文句のパラフレーズをも試みてゐることは、禁短氣の一の三「下心僧都の興女要集に曰、女郎に噓の眞、眞の噓といふ事あり……」以下の文章が、「三世相」や「冥途の飛脚」にある「誠も噓も元一つ」の一節の書き替へであることによつても明かである。さうして文句の間に發見されたこの一つの關係に、更により根本

的な交渉への視野を開く。一つの思想の借用は、思想的背景の共通を豫想するからである。實際其磧は西鶴よりもより多く分別を強調する意味に於いて一歩近松に歩み寄つた。それは近松のやうに道義的な高處を持たず、從つて結局西鶴の戀愛から情熱を奪つて、淺く、なまぬるく、分別臭くしたといふ結果を齎してゐるに過ぎないが、それだけに一層それを俗に入り易くしたといふ効績めいたものはあるであらう。前に（三十六節）擧げた愛相づかしの動機も亦これを例證する。色三味線、京之卷、第二「花を繕ふ柏木の衣紋」の愛相づかしは、近松の天の網島の小春の愛相づかしに先つこと約二十年、禁短氣、一之卷、第一のもろこしの愛相づかしは、これに先つこと約十年、固より其磧のそれは分別臭い打算であつて、小春のやうに「義理につまりて哀れ」なる情熱の輝きを見せるものではないが、兎に角兩者の間に思想的背景の共通なものがあることは、これによつても認めなければならぬ。其磧に於けるかういふ思想的背景は何處から來たか。それが色三味線と殆んど時を等しくして起つた近松の世話物の直接の影響であり得ぬことは云ふまでもない。西鶴の好色物の熱をそのまゝ繼承するところに此種の冷却を期待し難きことも亦云ふまでもない。それは二代男の一部分を成して、藝術的には末節に過ぎぬ「物の限りを知らしむる」說教の純粹化から來たか。西鶴後期の武家物町人物に見らるゝ義理分別の說教の信奉から來たか。元祿末期以前の近松の作品若くは歌によつて代表せらるゝ歌舞伎や淨るりの一般的感化から來たか。孰れにしてもこれは「置土產」をも含めて西鶴の戀愛文學から、直接には生れ難き一つの傾向である。恐らく其磧は一般にこの時代に漂つてゐた思想の中から、これを淺く常識的に限定して、この思想的背景を得て來たのであらうが、時間の先後を問題外にして類型として見れば、それは西鶴の世界から一步を近松の方に移して、兩者の熱をさました中間領域に於いてのみ始めて可能である。さうしてこの思想的背景が西鶴の通俗化に役立つた。禁短氣が特例を示すやうに、遊女の愛相づかしが遊女の誠の辯護論に用ゐられた。恐らく二代男をも含めて西鶴の好色物を忌避した常識も、其磧の粹道の極意を承認することは出來たであらう。それは西鶴のやうに危險な熱を持つことが少いからである。同時により多く町人の分別を戀愛と調和させてゐるからである。其磧は、西鶴のやうにその說教に背く者をも愛を以てかき抱くやうなことをしない。彼の藝術的淺薄と偏狹とが却つて世間との妥協を容易にしたのである。

　其磧及び同期に於ける浮世草子の中間的位置は、その文學的形態の上に更に明瞭にあらはれてゐる。歌舞伎や淨瑠璃に愛用せられてゐる趣向がこれほど著しく重視されることは、西鶴には決してないことで

ある。一代男の女護ヶ島渡りや、二代男の「大往生は女色の臺」は、趣向といへば趣向であるが、それは全篇を貫くイデーの掉尾の幻想であつて、外から被せられた衣ではなかつた。然るに今は、傾城買の心玉が飛び込んだり飛び出したりして遊蕩の首尾を括り（色三味線）、今義經は今辨慶と共に今常盤をたづねるために、諸國の遊里を巡歷する（御前義經記）のである。さうしてこの傾向は部分的にも認めることが出來る。色三味線で下關稻荷町の遊女に「當流義經北國落」を演じさせてその臺本を長々と揭載してゐるのなどはまだ手輕な方である。「御前義經記」の如きは節付までした道行を嵌め込んでゐるのである（卷の三）。西澤一風の作に特にこの傾向が多かつたことはこの浮世草子の名前を一瞥しただけでも明かであらう。それは「御前義經記」である。「女大名丹前能」である、「寬濶曾我物語」である、「風流今平家」である。これは小說と歌舞伎や淨瑠璃との合流を喜ぶ時代趣味の反映として徵候的意義を持つ現象ではあるが、浮世草子にとつては決して芳ばしい潮流ではなかつた。歌舞伎や淨るりに於いてこそ、趣向は舞臺の上に緊張と波瀾とを作り、目先の變化によつて人心を牽引する理由となれ、本來世相の描寫を本體とする浮世草子にあつては、それは局面の變化に取つて多少の賑かしになるだけで、趣向の複雜はたゞ虛假の外皮として全體の現實的感銘を薄くするに過ぎなかつた。結果は緊張ではなくてたゞ稀薄であつた。作者の側から見れば、役者評判記の版元八文字屋の傭文士として「役者口三味線」から出發した其磧にとつて、又遂に淨瑠璃作者に落付くべき素養と趣味とから出發した西澤一風にとつて、これは固より自然の成行であるとも云ひ得るであらう。併し浮世草子そのものは、此傾向を追ふ限り、次第に曖昧に陷つて遂に藝術上の存在理由を失はなければならぬ。故に一風が最後に淨瑠璃に移り、其磧が息子氣質以來氣質物に活路を求めたのは、當然の經路と云はなければならぬ。浮世草子に於ける淨るり歌舞伎との合流は、西鶴から、後の讀本への一線を劃くものとして、僅かに徵候的價値を發揮するに止る。

吾々はかういふ徵候的價値を外にして、其磧等の浮世草子に如何なる創造的意義を認むべきであるか。西鶴の戀愛からその熱を奪ひ、淺い常識的な安易にひきおろしたのはその創造ではない。西鶴がその境位に睛を點ずるために（五人女のお七吉三の如き）、又人物の心性の特質を描くために（一代男の高雄及び野秋の如き）、若くは特殊な諧謔を遊ばせるために（五人女のおまん源五兵衞の如き）兎に角角立つて使用した性的機微の描寫を、遊仲間の會話のやうな放肆せる自由を以て、平氣に無恥に取入れて來る叙述法も亦決して新しい創造を意味しない。又西鶴の「一般の限りを知らしむる」說教を硬化させて、こ

の一筋を以て押し通さうとする粹道の極意も、西鶴の世界の限定であつてその擴張を意味するとは云へないであらう。然らば後期の浮世草子には果して如何なる創造的意義があるか。少くとも其處に描かれた戀愛には如何なる新樣があるか。問題をこの程度に寬くするとき、其處で最も吾々の眼につくものが確かに一つはある。それは客も遊女も「賢く」なつてゐることである。戀愛の戰ひに理知が勝つて來てゐることである。固よりこれは殆んどあらゆる時代に繰返されろ嘆きであつて、箕山は既に寬文の昔にこれを云ひ、西鶴は貞享元年の二代男に、人皆賢すぎて遊びが小さくなつたことを說き、其磧の色三味線は元祿十五年に箕山や西鶴の嘆いた「古い代」を仰いで今の賢く先くゞりをする世の行末が結局どうなつて行くべきかを幇間共に語り合はしてゐるが（京之卷、五）、又この時代を得難いものとして、元祿の遊客は他人百金を費せば我は千金を費し、享保よりは他人十金を費せば我は五金を費して歸ると云ふ「我衣」の著者が出て來るのである。恐らく凡ての時代の人が德川時代の遊里に於いて理想的大盡であるためには賢過ぎるのであつて、これを其磧の時代にのみ限るのは歷史的遠望が足りない結果であるが、それにしても其磧の描ける戀が西鶴の描ける戀に比して遙かに賢くなつてゐることは爭ふわけに行かない、而もこの賢さは情熱の冷却と伴ふが故に一層目立つて來るのである。其磧は或微溫的な熱を以てこの狀態を嘆く。併し彼自身の作品がその賢さと微熱とによつてこの時代の子であることを證明してゐるのを如何にすべき。其處にはこの賢さとこの微熱の間から或る戀の新樣も發生し得る。併し彼の作品はこの新樣の戀の魂について何の積極的な表現をも與へてゐないのである。

もう一つ注意すべきは、禁短氣三之卷に於いて、巾着山白人寺の白人會議が將に勃興せむとしつゝある素人趣味を解剖してゐることである。これも亦戀の新樣の一つとして、此處に說かれてゐることは歷史上の參考とするに價する。併し其磧の筆はこの白人との戀を描寫して、これに前進の力を與へるのでも、これを後にひき戾さうとするのでもない。彼は保守的にも進步的（カ）にも、この潮流の方向の動きに參加する力を持たない。故に其處にも亦魂ある白人文學の出現を見るを得ないのである。凡そ如何なる客觀的描寫でも、それが把握の深さを持つてゐる限りは、この深さによつて未來の創造に參加する。把握の深さが作品の魂となつて將來に働きかけて行くからである。併しこの最後の一點をも缺如するとき、それは自分があとから追隨して行く時代の反射鏡であるに止つて、何の創造的意義をも持つことが出來ない。私が其磧等の浮世草子から創造的意義を有つて戀愛文化の發展に對する積極的貢獻を否定するのは極端に過ぎるであらうか。問

より如何なる歴史的存在も何かの方面に痕跡を殘さぬものはない。私は前にそれが両派と後の讀本とを繋ぐ一線としての意味を認めた。それは主として時代の流れを示す徴候的意義であるが、其處には又讀本の發生を促す原因的意義がなくもなかつたであらう。もう一つ私は、禁短氣流の話法が後世に於ける心學の末流鳩翁道話のやうなものに影響を與へたことを認めてもよい。併しそれが彼の時代に働きかける力は、九分九厘まで藝術的ではなかつた。それは恐らく當時全國に散在してゐた醉道修業の志願者に教科書として役に立つたであらう。さうして後世の洒落本で皮肉られてゐるやうな多くの半可通を養成したであらう。その狀態は丁度今日の俳壇のやうであつたらうと私は想像する。全國に亘つて自ら粹人たらんと志す者が無數である限り、その勢力も亦全國的でなければならぬ。併しそれが藝術上創造的であるかどうかは全然別個の問題である。

然らばこの時代の戀愛には獨得の魂を持つ新樣かなかつたか。私は佐々醒雪氏の俗曲評釋の中から、近松播磨外一名の地唄「別世界」を拜借する。

「風鈴ソンの、お足も取りて時の用。花も憂し月もよしなしたゞ戀り、のいて長者にならぬがまこと。合 匪いてゐても飽きのない、大事の大事の男の名でも、いれぼくろには纏つけず 腕にしみこむ墨あがり。今風樣といはれてゐたら、肥えてであらうもの、これたらやいの。合 とゝとかかとで暮すかましよ。勝山ほどきはらけ髮、長崎や めてぽつとせに 形はきさんじ氣は高う、粹のとまりの別世界。」

佐々氏はこれに註して「摺鉢が作中でも、ことに出色のものである。享保元文の粹の思を咏じ盡して餘蘊なきもの、江島其磧の粹道と甚だよく似てゐる……元祿の戀は熱烈なるが爲に、俗謡としてはやゝ濃艶に過ぎる。化政度は輕薄に流れた、この洒脱な調は享保から天明までに限つてゐるやうである」と云つてゐられる。私の特に引用した色三味線や禁短氣とは年代に於いて稍齟齬する點がないこともないが、大體に於いて首肯するに足るであらう。私は氏の「江島其磧の粹道に甚だよく似てゐる」といふ言葉を、甚だよく當篏るといふ意味に解釋する。其磧が輪廓を描いたところにこの地唄が魂を入れるのである。それは西鶴の置土産のうちでも私が最も愛誦するもの〻一つなる江戸の樣振總賢の昔話（卷二の二）に似た世界であるが、あれにはもつと陰影の深い、さびたところがある。その「洒脱な調」に於いて享保元文の戀が更に置土産の先にあることは、歌詞によつても想像することが出來よう。私はこれに副へて又河東節の二三の短曲（例へば禿萬歳のやうなもの）を擧げたい。この時代の眞正の魂は、老大な浮世草子よりも、寧ろかういふものにその表現を得てゐるのである。



犯罪小說

# 蟲

江戸川亂歩

## 五

それ以來、彼が殺人罪を犯したまでの約五ヶ月の間、柾木愛造の生活は、尾行と立聞きと隙見との生活であつたと云つても、決して云ひ過ぎではなかつた。その間彼は、まるで、池内と芙蓉との××につき纏ふ、不氣味な影の如きものであつた。

凡そは想像してゐたのだけれど、實際二人の××を見聞するに及んで、彼は今更らの様に、身の置きどころもない恥しさと、胸のうつろになる様な悲しさを味つた。それは寧ろ肉體的な痛みでさへあつた。池内の壓迫的な、けだものの様な猫撫で聲には、彼は人のゐない襖の外で赤面した程、烈しい羞恥を感じたし、芙蓉の、晝間の彼女からはまるで想像も出來ない、亂暴な赤裸々な言葉使ひや、それでゐて、その音波の一波毎に、彼の全身が總毛立つ程も懷しい、彼女の甘い聲音には、彼はまぶたに溢れる熱い涙をどうすることも出來なかつた。そして、（以下二十三字削除）彼は恐怖の爲に、膝から下が無感覺になつて、ガク〳〵と震へ出しさへした。

彼はたつた一人で、薄暗い襖の外で、あらゆる羞恥と憤怒とを經驗した。それで充分であつた。若し彼が普通の人間であつたら、二度と同じ經驗を繰返すことはなかつたであらう。いや、寧ろ最初から、その様な犯罪者めいた立聞きなどを目論見はしなかつたであらう。だが、柾木愛造は内氣や人厭ひで異常人であつたばかりでなく、恐らくはその外の點に於ても、例へば、秘密や罪惡に不可思議な魅力を感ず

る所の、あのいまはしい病癖をも、彼は心の隅に、多分に持合はせてゐたに相違ないのである。そして、その潜在せる邪悪なる病癖が、彼のこの異常な經驗を機縁として、僅かに目覺めたものに違ひないのだ。

世にもいまはしき立聞きと隙見によつて覺える所の、むづ痒い恥辱、涙ぐましき憤怒、歯の根も合はぬ恐怖の感情は、不思議にも、同時に、一面に於ては、彼にとつて、限りなき歓喜であり、類もあらぬ陶醉であつた。彼ははからずも覗いた世界の、あの兇暴なる魅力を、どうしても忘れることが出來なかつた。

世にも奇怪な生活が始まつた。柾木愛造の凡ての時間は、二人の戀人の媾曳の場所と時とを探偵すること、あらゆる機會をのがさないで、彼等を尾行し、彼等に氣づかれぬ樣に立聞きし隙見することに費された。偶然にも、その頃から池内と芙蓉との××が、一段と濃かに、眞劍になつて行つたので、その逢ふ瀬も繁く、彼等が夢現の戀に醉ふことが烈しければ烈しい程隨つて、柾木が、あの歯ぎしりする樣な、苦痛と快樂の錯綜境にさまよふ事も、益々その度數と烈しさを増して行つた。

多くの場合、二人が別れる時に言ひ交はす、次の逢ふ瀬の打合はせが、彼の尾行の手掛りとなつた。彼等の媾曳きの場所はいつも築地河岸の例の家とは限らなんだし、落合ふ所も樂屋口ばかりではなかつたが、柾木はどんな場合も見逃さず、五日に一度、七日に一度、彼等の逢ふ瀬の度毎に、邪悪なる影となつて、彼等につき纏ひ、彼等と同じ家に泊り込み、或は襖の外から、或は壁一重の隣室から、時には、その壁に隙見の穴さへあけて、彼等の一擧一動を監視した。（それを相手に悟られない爲に、彼はどれ程の艱難辛苦を嘗めたであらう。）そして、ある時はあらはに、ある時はほのかに、戀人同志の、あらゆる言葉を聞き、あらゆる仕草を見たのである。

「僕は柾木愛造ちやないんだからね。そんな話はちとお門違ひだらうぜ。」

ある夜のひそ／＼話の中では、池内がふとそんなことを言ひ出すのが聞えた。

「ハハハ、、、、全くだわ。あんたは話せないけど可愛い可愛い人。柾木さんは、話せるけど、虫酸の走る人。それでいゝんでしよ。あんなお人好しの、でくの坊に惚れる奴があると思つて。ハハハ、、、。」

芙蓉の低いけれど、傍若無人な笑ひ聲が、錐の樣に、柾木の胸をつき抜いて行つた。その笑ひ聲は、いつかの晩の自動車の中でのそれと、全く同じものであつた。柾木にとつては、無慈悲で意地悪な厚さの知れぬ壁としか考へられない所のものであつた。

彼の立聞きを少しも氣附かないで、ほしいまゝに彼を嘲る二人の言葉から、柾木は、やつぱり彼がこの世の除けもので、全く獨りぼつちな異人種であることを、沁々痛感しないではゐられなかつた。彼は人種が違ふのだ。だから、かういふ卑劣な厭棄すべき行爲が、却つて

俺にはふさはしいのだ。この世の××も俺にとつては××ではない。俺の様な生物は、この外にやつて行き様がないのだ。彼は段々そんな事を考へる様になつた。

一方、彼の芙蓉に對する戀慕の情は、立聞きや隙見が度重なれば重なる程、愈も絶え絶えに燃え盛つて行つた。彼は隙見の度毎に、一つづゝ、彼女の肉體の新しい魅力を發見した。襖の隙から、薄暗い室内の、蚊帳の中で（もう其頃は夏が來てゐたから）海底の人魚の様に、ほの白く蠢く、芙蓉の絽の長襦袢姿を眺めたことも、一度や二度ではなかつた。

その様な折には、彼女の姿は、母親みたいに懷しく、なよなよと夢の様で、寧ろ幽幻にさへ感じられた。

だが、まるで違つた場面もあつた。そこでは、彼女は物狂はしき妖女となつた。振りさばいた髪の毛は、無數の蛇ともつれ合つて、（十三字削除）まぶしいばかり、桃色に輝き、（十字削除）空ざまにゆらめき震えた。柾木は、（十三字削除）ワナワナと震ひ出した程である。

ある晩のこと、彼はこつそりと、二人の隣の部屋に泊り込んで、彼等が湯殿へ行つた間に、境の砂壁の腰貼りの隅に、火箸で小さな穴をあけた。これが病みつきとなつて、それ以來、彼は出來る限り、二人の隣室へ泊り込むことを目論んだ。そして、どの家の壁にも、一つづつ、小さな穴をあけて行つた。彼はこの狐の様に卑劣な行爲を續けながら、ふと「俺はこゝまで堕落したのか。」と、慄然とすることがあつた。但し、それは烈しい驚きではあつても、決して悔恨ではなかつた。世の常ならぬ愛慾の奴隷が、彼を淸玄の様に、執拗な恥知らずにしてしまつた。

彼は不様な格好で、這ひつくばひ、壁に鼻の頭をすりつけて、辛棒強く、小さな穴を覗き込むのだが、その向ふ側には、凡そ奇怪で絢爛な、地獄の覗き繪がくりひろげられてゐた。毒々しい五色のもやが、目もあやに、もつれ合つた。ある時は、芙蓉の うなじが、眼界一杯に、つややかな白壁の様に擴がつて、ドキンドキンと脈をうつた。ある時は、彼女の柔かい足の裏が、眞正面に穴を塞いで、老人の顏に見えるそこの皺が、異様な笑ひを笑つたりした。だが、それらのあらゆる幻惑の中で、柾木愛造を最も引きつけたものは、不思議なことに、彼女のふくらはぎに、一寸ばかり、どす黒く血をにじませた、掻き傷の痕であつた。それはひよつとしたら、（二十一字削除）彼の目の前に異様に擴大されて蠢いてゐた、まぶしい程つややかな、薄桃色のふくらはぎと、その表面を無殘にもかき裂いた、生々しい傷痕の醜くさとが、怪しくも美しい對照を爲して、彼の眼底に焼きついたのであつた。

だが、彼のこの人でなした所業は、恥と苦痛の半面に、奇怪な快感を伴つてゐたとは云へ、それは、日一日と、氣も狂はんばかりに、彼をいらだたせ、惱ましこそすれ、決して彼を滿足させることはなかつた。襖一重の隣を聞き、眼前一尺の姿を見ながら、彼と芙蓉との間には、無限の隔りがあつた。彼女の身體はそこにありながら、摑むこと

も、抱くことも、觸れることさへ、全く不可能であつた。しかも、彼にとつては永遠に不可能な事柄を、池内光太郎は、彼の眼前で、さも無雜作に、自由自在に振舞つてゐるのだ。柾木愛造が、この世の常ならぬ、無残な苛責に耐へかねて、遂にあの恐ろしい考を抱くに至つたのは、誠に××もないことであつた。それは實に、途方もない、氣違ひめいた手段ではあつた。だが、それがたつた一つ殘された手段でもあつたのだ。それを外にしては、彼は永遠に、彼の戀を成就する術はなかつたのである。

## 六

彼が尾行や立聞きを始めてから一月ばかりたつた時、惡魔が彼の耳元に、ある不氣味な思ひつきを囁き始めたのであつたが、彼はいつとなく、その甘い囁きに引入れられて行つて、半月程の間に、たうとうそれを、思ひ飜す餘地のない實際的な計畫として、決心するまでになつてしまつた。

ある晩、彼は久しぶりで、池内光太郎の自宅を訪問した。彼の方では、あの秘密な方法で、屢々池内に會つてゐたけれど、池内にしては、一月半ぶりの、やゝ氣拙い對面だつたので、何かと氣を使つて、例の巧みな辯口で池内自身も、その後芙蓉とは、まるで御無沙汰になつてゐる體に、云ひつくらうのであつたが、柾木は、相手が芙蓉のことを云ひ出すのを待ち兼ねて、それをきつかけに、さも何氣なく、

「イヤ、木下芙蓉と云へば、僕は少しばかり君にすまない事をしてゐるのだよ。ナニ、ほんの出來心なんだけれど、實はね、もう一月以上も前のことだが、芙蓉がS劇場に出てゐた時分、丁度芝居がはねる時間に、あの邊を通り合はせたものだから、樂屋口で芙蓉の出て來るのを待つて、僕の車にのせて、家まで送つてやつたことがあるのだよ。でね、その車の中で、つい出來心で、僕はあの女に云ひ寄つた譯なのさ。だが君、怒ることはないよ。あの女は斷然はねつけたんだからね。とても僕なんかの手には合はないよ。君に内緒にして置くと、何だか僕が今でも、君とあの女の間柄をねたんでゐる樣に當つて、氣が濟まないものだから、少し云ひにくかつたけれど、恥しい失敗談を打あけた譯だがね。全く出來心なんだ。もうあの女に會ひ度いとも思はぬよ。君も知つてゐる通り、僕は眞劍な戀なんて、出來ない男だからね。」

といふ樣なことを喋つた。なぜ、さうしなければならないのか、彼自身にも、はつきりは分らなかつたけれど、あの一事を祕密にして置いては、何だか拙い樣に思はれた。それをあから樣に云つてしまつた方が、却つて安全だといふ氣がした。

狂人といふものは、健全な普通人を、一人殘らず、彼等の方が却つて氣違ひだと、思込んでゐるものであるが、すると、柾木愛造が、人嫌ひであつたのも、彼以外の人間を、異國人の樣に感じたのも、凡て、彼が最初から、幾分氣違ひじみてゐたことを、證據立てゝゐるのかも知れない。事實、彼は最早や氣違ひといふ外はなかつた。あの戀

拗で、恥知らずな尾行や立聞きや覗見たとも、云ふまでもなく狂氣の沙汰であつたが、今後は彼は、それに輪をかけた、實に途方もない事を始めたのである。と云ふのは、あの人厭ひた陰氣者の柾木愛造が、突然、新青年の様に、隅田川の上流の、とある自動車學校に入學して、毎日缺かさずそこへ通つて、自動車の運轉を練習し始めたことで、しかも、彼は、それが彼の恐ろしい計畫にとつて、必然的な準備行爲であると、眞面目に信じてゐたのである。

「僕は最近、不思議なことを始めたよ。僕みたいな古風な陰氣な男が、自動車の運轉を習つてゐると云つたら、君は定めし驚くだらうね。僕の所の婆やなんかも、僕が柄にもなく朝起きをして、一日も休まず自動車學校へ通學するのを見て、たまげてゐるよ。毎日々々練習用のフォードのぼろ車をいぢくつてゐる内に、妙なもので、少しは骨が分つて來た。この分なら、もう一月もしたら、乙種の免狀位取れ相だよ。それがうまく行つたら、僕は一臺車を買込むつもりだ。そして、自分で運轉して、氣散じな自動車放浪をやるつもりだ。自動車放浪といふ氣持ちが、君は分るかね。僕にしては、實にすばらしい思ひつきなんだよ。たつた一人で箱の中に坐つてゐて、少しも人の注意を惹かないで、しかも非常な速度で自由自在に、東京市中を放浪して歩くことが出來るのだ。君も知つてゐる様に、僕が外出厭ひなのは、この自分の身體を天日や人目にさらす感じが、たまらなくいやだからだ。車にのるにしても、運轉手に物を云つたり指圖をしたりしたければならぬし、僕がどこへ行くかといふことを、少くとも運轉手丈けには悟られてしまふからね。それが、自分で箱車を運轉すれば、誰にも知られず、丁度僕の好きた土藏の中にとぢ籠つてゐる様な氣持のまゝで、あらゆる場所をうろつき廻ることが出來る。どんな賑やかな大通りをも、雜踏をも、全く無關心な氣持で、隱れ簑を着た仙人の様に、通行することが出來る。僕みたいた男にとつては、何と理想的な散歩法ではあるまいか。僕は今、子供の様に、乙種運轉手免狀が下附される日を、待ちこがれてゐるのだよ。」

柾木はこんな意味の手紙を、池内光太郎に書いた。それは彼の犯罪準備行爲を、態と大膽に曝露して、相手を油斷させ、相手に疑を抱かせまいとする、捨身の計略であつた。この場合、大膽に曝露することが、徒らに隱蔽するよりも、却つて安全であることを、彼はよく知つてゐたのだ。無論その時分にも、一方では例の七日に一度位の、尾行と立聞きを續けてゐたので、彼はその手紙を受取つてからの、池内の擧動に注意したが、彼が柾木の奇行を笑ふ外に、何の疑ふ所もたかつたことは、いふまでもない。

隨分金も使つたけれども、僅か二月程の練習で、彼は首尾よく乙種運轉手の免狀を手に入れることが出來た。同時に、彼は自動車學校の世話で、新型フォードの中古品を買入れた。やくざなフォードを選んだのは、費用を省く意味もあつたが、當時東京市中の賃自動車には、殆半フォードが使用されてゐたので、その中に立混つて、目立たぬと

いふ點が、主たる理由であつた。ある理由から、彼はそれを買入れる時、客席の窓に新しくシェードを取りつけさせることを忘れなかつた。前にも云つた様に、彼のK町の家には、廣い荒庭があつたので、車庫を建てるのも、少しも面倒がなかつた。

車庫が出來上ると、柾木はそこの扉をしめ切つて、婆やに氣附かれぬ様に注意しながら、二晩もかゝつて、大工の眞似事をした。それは、彼の自動車の後部のクッションを取りはづして、その内部の空ろな部分に、板を張つたり、クッションそのものを改造したりして、そこに人一人横になれる程の、箱を作ることであつた。つまり、外部からは少しも分らぬけれど、そのクッションの下に、長方形の、棺桶の様な、空虚な部分が出來上つた譯である。

さて、この奇妙な仕事がすむと、彼は古着屋町で、貨車の運轉手が着さうな、黒の詰襟服と、スコッチの古オーバと(その時分氣候は已に晩秋になつてゐたので)目まで隱れる大きな鳥打帽とを買つて來て、(か様な服裝を選んだのにも、無論理由があつた。)それを身につけて運轉手臺におさまり、時を選ばず、市中や近郊をドライヴし始めたのである。

それは誠に奇妙な光景であつた。雜草の生ひ茂つた荒庭。所々はげ落ちた土藏。倒れかゝつたあばら家。くづれた土塀。その荒涼たる化物屋敷の門内から、假令フォードの中古にもしろ、見たところ立派やかな自動車が、それが夜の場合には、怪獣の目玉の様な、二つの眼光を、ギラ〳〵と光らせて、毎日〳〵、どことも知れず辷り出して行くのである。婆やを初め、附近の住民達は、もうその頃は噂の擴まつてゐた、この奇人の、世にも突飛な行動に、目を見はらないではゐられなかつた。

一月ばかりの間、彼は、運轉を覺えたばかりの嬉しさに、用もないのに自動車を乘り廻してゐる、といふ體を裝つて、無闇と彼の所謂自動車放浪を試みた。市内は勿論、道路の惡くない限り、近郊のあらゆる方面に遠乘りをした。ある時は、自動車を、池内光太郎の勤先の會社の玄關へ横づけにして、珍しく池内を誘つて、宮城前の廣場から、上野公園を一廻りして見せたこともあつた。池内は「君に似合はしからぬ風流だね。だが、フォードの古物とは氣が利かないぢやないか。」など云ひながら、でも、少なからず驚いてゐる様子だつた。若し彼が、現に彼の腰かけてゐた、クッションの下に、妙な空隙が拵へてあること、又遠からぬ將來、そこへ何者かの死體が隱されるであらうことを知つたなら、どんなにか青ざめ、震へ上つたことであらうと思ふと、運轉しながら、柾木は背中を丸くし、顔を胸に埋めて、湧上つて來るニタ〳〵笑ひを、隱さなければならなかつた。

又ある晩は、たつた一度ではあつたけれど、彼は大膽にも、當の木下芙蓉の散歩姿を、自動車で尾行したこともあつた。若しそれを、相手に見つかつたならば、彼の計畫は殆ど駄目になつてしまふ程、實に危險な遊戲であつたが、併し、危險な丈けに、柾木はゾク〳〵する程

愉快であつた。洋裝の美人が、さも氣取つた樣子で、步道をコツ〳〵と步いて行く。その斜うしろから、一台のボロ自動車が、のろ〳〵とついて行くのだ。美人が町角を曲るたびに、ボロ自動車もそこを曲る。まるで紐でつないだ飼犬みたいな感じで、誠に滑稽な、同時に不氣味な光景であつた。「御令孃、ホラ、うしろから、あなたの棺桶がお伴をしてゐますよ。」柾木はそんな歌を、心の中で呟いて、薄氣味の惡い微笑を浮べながら、ソロ〳〵と車を運轉するのであつた。

　彼がこんな風に、自動車を手に入れてから、一月もの長い間、辛抱强く無駄な日を送つてゐたのは、云ふまでもなく、池内を初め婆やだとか近隣の人達に、彼の眞意を悟られまい爲であつた。彼が自動車を買つたかと思ふと、すぐ樣芙蓉が殺されたのでは、少々危險だと考へたのである。だが、これは寧ろ彼の杞憂であつたかも知れない。何故と云つて、表面に現はれた所では、柾木と芙蓉とは、たゞ小學校で顏見知りであつた男女が、偶然十數年ぶりに再會して、三四度席を同じうしたまでに過ぎないし、それからでも、已に五ヶ月の月日が經過してゐるのだから、柾木が自動車を買入れた日と、芙蓉が殺害された日と、假令ピツタリ一致したところで、この二つの事柄の間に、恐ろしい因果關係が存在しやうなどゝ、誰が想像し得たであらう。どんなに早まつたところで、彼には少しの危險さへなかつた筈である。

　それは兎も角、流石用心深い柾木も、一月の間の、さも呑氣さうな自動車放浪で、最早や充分だと思つた。愈々實行である。だが、その前に準備して置かねばならぬ、二三のこま〳〵した仕事が、まだ殘つてゐた。と云ふのは、貸自動車の目印である、ツーリングの赤いマークを印刷した紙切れを手に入れること、自動車番號を記したテイルの釣り板の替え玉を用意すること、芙蓉の爲に安全な墓場を準備して置くことなどであつたが、前の二つは大した困難もなく揃へることが出來たし、墓場についても、實に申分のない方法があつた。彼は邸の荒庭の眞中に、水のかれた深い古井戸のあることを知つてゐた。ある日彼は、庭をぶらついてゐて、態とそこへ足を辷らせ、向脛に一寸とした傷を拵へて見せた。そして、その事を婆やに告げて、危いから埋めることにしようと云ひ出したのである。丁度その頃、近くに道路工事があつて、不用の土を運ぶ馬力が、每日彼の邸の前を通り、工事の現場には、「土御入用の方は申出て下さい」と立札がしてあつた。柾木はその工事監督に頼んで、代金を拂つて、二車ばかりの土を、彼の邸内へ運んで貰ふことにしたのである。馬方は、彼の荒庭の中へ馬車を引き込んで、そこの片隅へ、亂暴に土の山を作つて行つた。あとは、いつでも好きな時に、人足を頼んで、その土を古井戸の中へほうり込んで貰へばよいのである。云ふまでもなく、彼は井戸を埋める前に、芙蓉の死骸をその底へ投込み、上から少々土をかけて、人足たちに氣附かれることなく、彼女を葬つてやる積りであつた。

　さて、準備は滯りなくととのつた。もう決行の日を極めるばかりである。それについても、彼は確かな目算があつた。といふのは、屢々

述べた樣に、彼は其の時分までも、例の尾行や立聞きを續けてゐたので、彼等（池内と芙蓉と）が次に出會ふ場所も時間も、知れてゐたし、當時芝居の切れ目だつたので、芙蓉は自宅から約束の場所へ出かけるのだが、そんな時に限つて、彼女は態と帳場の車を避け、極まつた樣に、近くのある大通りの角まで歩いて、そこで通りすがりのタキシーを拾ふことさへ、彼にはすつかり分つてゐた。實を云ふと、それが分つてゐたからこそ、彼はあの變てこな、自動車のトリックを思ひついた程であつたのだから。

## 七

十一月のある一日、その日は朝から清々しく晴れ渡つて、高台の窓からは、富士山の頭が、ハッキリ眺められる樣な日和であつたが、夜に入つても、肌寒いそよ風が渡つて、空には梨地の星が、異樣に鮮かにきらめいてゐた。

その夜七時頃、柾木愛造の自動車は、二つの眼玉を歡喜に輝かせ、爆音華やかに、彼の化物屋敷の門を辷り出し、人なき隅田堤を、吾妻橋の方角へと、一文字に快走した。運轉台の柾木愛造も、輕やかにハンドルを握り、彼に似合はしからぬ口笛さへ吹き鳴らして、さもいそいそと嬉し相に見えた。

何といふ晴々とした夜。何といふ快活な彼のそぶり。あの恐ろしい犯罪への首途としては、餘りにも似合はしからぬ陽氣さではなかつたか。だが、柾木の氣持では、陰慘な人殺しに行くのではなくて、今彼は、十幾年も待ちこがれた、あこがれの花嫁御を、お迎ひに出かけるのだつた。今夜こそ、嘗つては彼の神樣であつた木下文子が、幾夜の夢に耐へ難きまで彼を惱まし苦しめた、木下芙蓉の肉體が、完全に彼の所有に歸するのだ。何人も、あの池内光太郎でさへも、これを妨げる力はないのだ。アア、この歡喜を何に例へることが出來やう。透通つた闇夜も、闌干たる星空も、自動車の風よけガラスの隙間から、彼の頬にざれかゝるそよ風も、彼の世の常ならぬ結婚の首途を、祝福するものでなくて何であらう。

木下芙蓉の、その夜の媾曳の時間は、八時といふことであつたから、柾木は七時半には、もうちやんと、いつも芙蓉が自動車を拾ふ、大通りの四つ角に、車を止めて待構へてゐた。彼は運轉台で、背を丸くし、鳥打帽をまぶかにして、うらぶれた辻待ちタクシーの運轉手を裝つた。前面の風よけガラスには、ツーリングの赤いマークのはいつた紙を目立つ樣に張り出し、テイルの番號標は、いつの間にか、警察から下附されたものとは、まるで違ふ番號の、營業自動車用のにせ物に代つてゐた。それは誰が見ても、ありふれたフォードの、客待ち自動車でしかなかつた。

「ひよつとしたら、今夜は何か差支が出來て、約束を變へたのではあるまいか。」

待遠しさに、柾木がふとそんなことを考へた時、丁度それが合圖で

でもあつた樣に、向ふの町角から、ひよつこりと、芙蓉の和服姿が現はれた。彼女は、態と地味な拵へにして、茶つぽい袷に、黒の羽織、黒いショールで、顔を隱して、小走りに彼の方へ近づいて來るのだが、街燈の作りなした影であつたか、顔色も、どことなく打沈んで見えた。

丁度その時は、通り過ぎる空自動車もなかつたので、彼女は當然柾木の車に走り寄つた。いふまでもなく、柾木の僞瞞が効を奏して、彼女はその車を、辻待ちタクシーと思ひ込んでゐたのである。

「築地まで、築地三丁目の停留所のそばよ。」

柾木が運轉台から降りもせず、顔をそむけたまゝ、うしろ手にあけた扉から、彼女は大急ぎで辷り込んで、彼の背中へ行先を告げるのであつた。

柾木は、心の内で凱歌を奏しながら、猫背になつて、命ぜられた方角へ、車を走らせた。淋しい方を幾曲りして、車は順路として、ある明るい、夜店で賑つてゐる、繁華な大通りへさしかゝつたが、この大通りこそ、柾木の計畫にとつて、最も大切な場所であつた。彼は運轉しながら、鳥打のひさしの下から、上目使ひに、前の風よけガラスに映る、背後の客席の窓を見つめてゐた。今か今かと、ある事の起るのを待構へてゐた。

すると間もなく、案の定まぶしい燈光をさける爲に、半年以前、柾木と同乘した時と同じ樣に、芙蓉が客席の四方の窓のシエードを、一つ一つ卸して行くのが見えた。（當時の箱型フォードは凡て、客席と運轉手臺との間に、ガラス戸の隔てが出來てゐた。彼が自動車を買入れた時、態々シエードを取りつけさせた理由は、それであつた。）柾木は、胸の中で小さな動物が、滅茶苦茶にあばれ廻つてゐる樣に感じた。一里も走りつゞけた程喉が乾いて、舌が木の樣にこはばつてしまつた。だが、彼は斷末魔の苦しみで、ぢつとそれを堪へながら、なほも走らせるのであつた。

賑かな大通りの中程へ進んだ頃、前方から氣違ひめいた音樂が聞えて來た。それはその町のとある空地に、大テントを張つて興業してゐた、娘曲馬團の客寄せ樂隊で、舊式な田舍音樂が、蠻聲を張り上げて、かつぽれの曲を、滅多無性に吹き鳴らしてゐるのであつた。曲馬團の前は、黒山の人だかりが、人道を埋め、車道は雷の樣な音を立てて行交ふ電車や、自動車、自轉車で、急流を爲し、耳を聾する音樂と、目をくらます雜踏が、その邊一帶の通行者から、あらゆる注意力を奪つてしまつたかに見えた。柾木が豫期した通り、これこそ屈強の犯罪舞台であつた。

彼は車道の片側へ車を寄せて、突然停車すると、目に見えぬす早さで、運轉台を飛び降り、客席に躍り込んで、ピッシャリと中から扉をしめた。そこは丁度露店の燒鳥屋のうしろだつたし、假令見た人があつたところで、完全にシエードが下りてゐるのだから、客席内の樣子に氣づく筈はなかつた。

躍り込むと同時に、彼は芙蓉の喉を目がけて飛びついて行つた。彼の兩手の間で、白い柔いものが、しな〳〵と動いた。

「許して下さい。許して下さい。僕はあなたが可愛いのだ。生かして置けない程可愛いのだ。」

彼はそんな世迷言を叫びながら、白い柔いものを、くびれて切れてしまふ程、ぐん〳〵としめつけて行つた。

芙蓉は、運轉手だと思ひ込んでゐた男が、氣違ひの様に血相かへて飛び込んで來た時、殺される者のす早い思考力で、咄嗟に柾木を認めた。だが、彼女は、惡夢の中での様に、全身がしびれ、舌が釣つて、逃げ出す力も、助けを呼ぶ力もなかつた。妙なことだけれど、彼女は大きく開いた目で、またたきもせず柾木の顔を見つめ、泣き笑ひの様な表情をして、さあこゝをと云はぬばかりに、彼女の首をグツと彼の方へつき出したかとさへ思はれた。

柾木は必要以上に長い間、相手の首をしめつけてゐた。離さうにも、指が無感覺になつてしまつて、云ふことを聞かなかつたし、さうでなくても、手を離したら、ピチ〳〵躍り出すのではないかと、安心が出來なんだ。だが、いつまで押へつけてゐる譯にも行かぬので、怖る怖る手を離して見ると、案外にも、被害者はくらげの様に、グニヤ〳〵と、自動車の底へ、くづおれてしまつた。

彼はクッションを取りはづし、難儀をして、芙蓉の死骸を、その下の空な箱の中へおさめ、元通りクッションをはめて、その上にぐつたり腰をおろすと、氣をしづめる爲に、暫くの間、じつとしてゐた。外には、相變らず、かつぽれの樂隊が、勇ましく鳴り響いてゐたが、それが或は、彼をだます爲に、態と何氣なく續けられてゐるので、安心をして、シェードをあげると、窓ガラスの外に、無數の顔が折り重なつて、千の目で、彼を覗き込んでゐるのではないかと思はれ、迂濶にシェードを上げられない様な氣がした。

彼は一分位の窓の隙間から、おづ〳〵と外を覗いて見た。だが、安心したことには、そこには彼を見つめてゐる一つの顔もなかつた。電車も自轉車も歩行者も、彼の自動車などには、全く無關心に、いそがしく通り過ぎて行つた。

大丈夫だと思ふと、少し元氣づいて、亂れた服裝をととのへたり、隱し殘したものはないかと、車の中を改めたりした。すると床のゴムの敷物の隅に、小さな手提鞄が落ちてゐるのに氣づいた。無論芙蓉の持物である。開いて見ると、別段の品物も入つてゐなかつたが、中に銀の懐中鏡があつたので、序にそれをとり出して、自分の顔を寫して見た。丸い鏡の中の顔は、少し青ざめてゐたけれど、別に惡魔の形相も現はれてゐなかつた。彼は長い間鏡を見つめて、顔色をととのへ、呼吸を靜める努力をした。やがて、やゝ平靜を取戻した彼は、いきなり運轉臺に飛び戻つて、大急ぎで電車道を横切り、車を反對の方角に走らせた。そして、人通りのない淋しい町へ淋しい町へと走つて、とある神社の前で車を止め、前後に人のゐないのを確めると、ヘツドラ

イトを消して置いて、喇叭の間に、シェードを上げ、ツーリングのマークをはがし、テイルの番號標を元の本物と取り換へ、再び頭光をつけると、今度はすつかり落ちついた氣持で、車を家路へと走らせるのであつた。交番の前を通る度に、態と徐行して、「お巡りさん、私や人殺しなんですよ。このうしろのクッションの下には、美しい女の死骸が隱してあるんですよ。」などゝ獨ごちて、ひどく得意を感じさへした。

## 八

邸について、車を車庫に納めると、もう一度身の廻りを點檢して、シャンとして玄關を上り、大聲に臺所の婆やを呼び出した。

「お前濟まないが、一寸使ひに行つて來ておくれ。淺草の雷門の所に、〇〇といふ洋酒屋があるだらう。あすこへ行つてね、何でもいゝから、これで買へる丈けの上等の葡萄酒を一本取つてくるのだ。サア、こゝにおあしがある。」

さういつて、彼が十圓札を二枚つき出すと、婆やは、彼の下戸を知つてゐるので、「マア、お酒でございますか」と妙な顏をした。柾木は機嫌よくニコ／＼して「ナニ、一寸ね、今晩は嬉しいことがあるんだよ。」と辯解したが、これは、婆やが雷門まで往復する間に、芙蓉の死骸を、土藏の二階へ運ぶ爲でもあつたけれど、同時に又、この不可思議な結婚式の心祝ひに、少々お酒がほしかつたのでもあつた。

婆やの留守の三十分ばかりの間に、彼は魂のない花嫁を、土藏の二階へ運んだ上、例の自動車のクッションの下の仕掛けを、すつかり取はづして、元々通りに直して置く暇さへあつた。かうして彼は、最後の證據を煙滅してしまつた譯である。この上は、あかずの土藏へ闖入して、芙蓉の死骸そのものを目撃しない以上、誰一人彼を疑ひ得る者はない筈であつた。

間もなく、半ば狂せる柾木と、木下芙蓉の死骸とが、土藏の二階でさし向ひであつた。燭臺のたつた一本の蠟燭が、赤茶けた光で、そこに恥もなく横はつた、花嫁御の冷い裸身を照らし出し、それが、部屋の一方に飾つてある、等身大の木彫りの菩薩像や、青ざめたお能の面と、一種異様の、陰慘な、甘酸つぱい對照を爲してゐた。

たつた一時間前まで、心持の上では、千里も遠くにゐて、寧ろ怖いものでさへあつた、世間並に意地悪で、利口者の人氣女優が、今何の抵抗力もなく、赤裸々のむくろを、彼の眼前一尺に曝してゐるかと思ふと、柾木は不思議な感じがした。全く不可能な事柄が、突然夢の様に實現した氣持であつた。今度は反對に、輕蔑したり、憐んだりするのは、彼の方であつた。手を握るはおろか、頰をつついても、抱きしめても、抛り出しても、相手はいつかの晩の様に、彼を笑ふことも、嘲ることも出來ないのだ。何たる驚異であらう。幼年時代には彼の神樣であり、この半年の間は、物狂はしきあこがれの的であつた木下芙蓉が、今や全く彼の占有に歸したのである。

死骸は、首に青黑い絞殺のあとがついてゐるのと、皮膚の色がやゝ

青ざめてゐた外は、生前と何の變りもなかつた。大きく見開いた、瀬戸物の樣にうつろな目が、空間を見つめ、だらしなく開いた唇の間から、美しい齒並と舌の先が覗いてゐた。唇に生色がなくて、何とやら花やしきの生人形みたいであつたが、それ故に、却つて、（十二字削除）皮膚は青白くすべつこかつた。仔細に見れば、二の腕や×のあたりに生毛も生えてゐたし、毛穴も見えたけれど、それにも拘らず、全體の感じは、すべつこくて、透通つてゐた。

非現實的な蠟燭の光が、身體全部に、無數の柔い影を作つた。胸から腹の表面は、砂漠の、砂丘の頂の樣に、陰ひなたが、雄大なるうねりを爲し、身體全部は、夕日を受けた、奇妙な白い山脈の樣に見えた。氣高く聳えた嶺續きの、不可思議な曲線、滑かな深い谷間の神秘なる陰影、柾木愛造はそこに、芙蓉の肉體のあらゆる細部に亘つて、思ひもよらぬ、微妙な美と秘密とを見た。

生きてゐる時は、人間はどんなにぢつとしてゐても、どこやら動きの感じを免れないものだが、死者には全くそれがない。このほんの僅かの差違が、生體と死體とを、まるで感じの違つたものに見せることは、恐ろしかつた。芙蓉はあくまでも沈默してゐた。あくまでも靜止してゐた。だらしのない姿を曝しながら、叱りつけられた小娘の樣に、いぢらしい程おとなしかつた。

柾木は彼女の手を取つて、膝の上で弄びながら、ぢつとその顏に見入つた。強直の來ぬ前であつたから、手はくらげの樣にぐにや〱してゐて、その癖非常な重さだつた。皮膚はまだ、日向水位の溫度を保つてゐた。

「文子さん、あなたはたうとう僕のものになりましたね。あなたの魂が、いくらあの世で意地惡を云つたり、嘲笑つたりしても、僕は何ともありませんよ。なぜつて、僕は現にかうして、あなたの、、、そのものを、、にしてゐるのですからね。そして、あなたの聲や表情は、聞えもしなければ、見えもしないのですからね。」

柾木が話しかけても、死骸は生人形みたいに默り返つてゐた。うつろな目が、霞のかゝつた樣に、白つぼくて、白眼の隅の方に、目立たぬ程、灰色のポツ〱が見えてゐた。（それの恐ろしい意味を、柾木はまだ氣づかなんだけれど）顎がひどく落ちて、口があくびをした樣に見えるのが、少し氣の毒だつたので、彼は手で、それをグッと押し上げてやつた。押し上げても、押し上げても、元に戻るものだから、口を塞いでしまふのに、長い間かゝつた。でも、塞いだ口は、一層生前に近くなつて、厚ぼつたい花瓣の重なり合つた樣な格好が、いとしく、好ましかつた。可愛らしい小鼻がいきんだ樣に開いて、その肉が美しく透通つて見えるのも、云ひ難き魅力であつた。

「僕達はこの廣い世の中で、たつた二人ぼつちなんですよ。誰も相手にしてくれない、のけ者なんですよ。僕は人に顏を見られるのも恐ろしい、人殺しの大罪人だし、あなたは、さう、あなたは死びとですからね。僕達はこの土藏の厚い壁の中に、人目をさけて、ひそ〱と誰

をしたり、顔を眺め合つてゐるばかりですよ。淋しいですか。あなたはあんな華やかな生活をしてゐた人だから、これでは、あんまり淋し過ぎるかも知れませんね。」

彼はそんな風に、死骸と話し續けながら、ふと、古い〳〵記憶を呼起してゐた。田舍風の、古めかしく陰氣な、八疊の茶の間の片隅に、内氣な弱々しい子供が、積木のおもちやで、彼のまはりに切れ目のない垣を作り、その中にチンと座つて、女の子の様にお人形を抱いて、涙ぐんで、そのお人形と話をしたり、頬ずりをしたりしてゐる光景である。云ふまでもなく、それは柾木愛造の六七才の頃の姿であつたが、その折の内氣な青白い少年が、大きくなつて、積木の垣の代りに、土藏の中にとぢ籠り、お人形の代りに芙蓉のむくろと話をしてゐるのだ。何といふ不思議な相似であらう。柾木はそれを思ふと、(二十三字削除)それが遠い昔のお人形ででもある様に、(三十三字削除)さうしてぢつとしてゐると、まぶたが熱くなつて、目の前がふくれ上つて、ポタ〳〵と涙が流れ落ち、それが熱い頰と冷い頰の合せ目を、顎の方へツー〳〵と辷つて行くのが感じられた。

土藏の中は全く別世界であつたし、相手が魂のない生人形であつたから、柾木はあらゆる恥を忘れ、子供の様に顔をしかめて、しやくり上げながら、泣き度い丈け泣き、喋り度いことを喋つた。(以下四行削除)

か様にして、籠城者と死骸との、此世のものならぬ狂態は、不氣味に、執拗に、その夜一夜、夜のあけるまでも、續けられたのである。

## 九

その翌朝、北側の小さな窓の、鐵格子の向から、晩秋のうららかな青空が覗き込んだ時、柾木愛造は、青黑く汚れた顔に、黄色くしぼんだ目をして、部屋の片隅の、菩薩の立像の足元にくづをれてゐたし、芙蓉の水々しいむくろは、(十七字削除)悲しくも既に強直して疊の上に横はつてゐた。だがそれは、ある種の禁制の生人形の様で、決して醜くなかつたばかりか、寧ろ異様になまめかしくさへ感じられた。

柾木はその時、疲れ切つた腦髓を、むごたらしく使役して、奇妙な考へに耽つてゐた。最初の豫定では、たつた一度、芙蓉を完全に占有すれば、それで彼の殺人の目的は達するのだから、昨夜の内に、こつそりと、死骸を庭の古井戸の底へ隱してしまふ考へであつた。それで充分滿足する筈であつた。ところが、これは彼の非常な考へ違ひだつたことが分つて來た。

彼は、魂のない戀人のむくろに、かうまで彼を惹きつける力が潜んでゐやうとは、想像もしてゐなかつた。死骸であるが故に、却つて、生前の彼女にはなかつたところの、一種異様の、人外境の魅力があつた。むせ返る様な香氣の中を、底知れぬ泥沼へ、果てしも知らず沈んで行く氣持だつた。、、、、であつた。、、、、であつた。それ故に、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

彼は最早や渓溶のたきがらと別れるに忍びなかつた。彼女なしには生きて行くことは考へられなかつた。この土藏の厚い壁の中の、別世界で、彼女のむくろと二人ぼつちで、いつまでもいつまでも、不可思議な戀にひたつてゐたかつた。さうする外には何の思案も浮ばなかつた。「永久に……」と彼は何心なく考へた。だが、「永久」といふ言葉に含まれた、ある身毛もよだつ意味に思ひ當つた時、彼は餘りの怖さに、ピヨコンと立上つて、いきなり部屋の中を、忙し相に歩き始めた。一刻も猶豫のならぬことだつた。だが、どんなに急いでも慌てゝも、彼には(恐らく神樣にだつて)どうすることも出來ないのだ。

「蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、ゝゝゝゝゝゝゝゝ」

彼女の白い腐爛の壁を、無數の群蟲が、ウヂヤ〲と這ひ廻つた。あらゆるものを喰ひつくす、それらの微生物の、ムチ〲といふ咀嚼の音が、耳鳴りの樣に鳴り渡つた。

彼は長い躊躇のあとで、怖は怖は、硝の白い光線に曝された、戀人の上にかゞみ込んで、彼女の身體を注視した。一見した所、死後強直が、さき程よりも全身に行渡つて、作り物の感じを増した外、さしたる變化もない樣であつたが、仔細に見ると、もう目がやられてゐた。白眼の表面は、灰色の斑點で、殆ど覆ひ盡され、黑目もそこひの樣に溷濁して、虹彩がモヤ〲とぼやけて見えた。そして、目全體の感じが、ガラス玉みたいに、潤つこくて、固くて、しかもひからびた樣に、潤ひがなくなつてゐた。そつと手を取つて眺めると、指の尖が、中へ石灰でも詰めた樣に、鉛色に不透明になつて、拇指が、片輪みたいに、掌の方へ曲り込んだきゝ、動かなかつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

彼は胸から背中の方へ目を移して行つた。無理な寢方をしてゐたので、肩の肉が皺になつて、そこの部分の毛穴が、異樣に大きく開いてゐたが、それを直してやる爲に、一寸身體を持上げた拍子に、背中の床に接してゐた部分が、ヒヨイと彼の目に映つた。それを見ると、彼はギヨクンとして思はず手を離した。そこには、かの「死體の紋章」と云はれてゐる、靑味がつた鉛色の小斑點が、已に現はれてゐたのだつた。

これらの現象は凡て正體の曖昧な、極微有機物の作用であつて、死後強直といふえたいの知れぬ現象すらも、腐敗の前兆を隱す所の、一種の痲痺であつた。柾木は嘗つて、何かの書物で、この極微有機物には、空氣中に棲息するもの、空氣なくとも棲息するもの、及兩棲的なるものの三種類があることを讀んだ。それが一體何者であるか、どこからやつて來るかは、非常に曖昧であつたけれど、兎も角、目に見えぬ魔術の如きものが、恐ろしい速度で、秒一秒と死體を蝕みつゝあることは確かだつた。相手が目に見えぬえたいの知れぬ蟲丈けに、どん

な狂暴よりも一層恐ろしく、ゾッとする程不氣味に感じられた。

柾木は、焰の見えぬ焼け焦げが、見る〳〵周圍を擴げて行くのを、どうすることも出來ない時の様な、恐怖と焦燥を覺えた。立つても居つてもゐられない氣持だつた。と云つて、どうすればよいのか、少しも考へが纏まらなんだ。

彼は何の當てもなく、せか〳〵と梯子段を降りて母屋の方へ行つた。婆やが妙な顔をして「ご飯に致しませうか。」と尋ねたが、彼は「いや、」と云つた丈けで、又藏の前まで歸つて來た。そして、外側から藏の鍵前を卸すと、玄關へ走つて行つて、そこにあつた下駄を突かけ、車庫を開いて、自動車を動かす支度を始めた。エンヂンが溫まると、彼はそのまゝ運轉台に飛乗つて、車を門の外へ出し、吾妻橋の方角へ走らせた。賑かな通りへ出ると、その邊に遊んでゐた子供達が、運轉台の彼を指さして笑つてゐるのに氣づいた。彼はギョッとして青くなつたが、次の瞬間、彼が和服の寢間着姿のまゝで車を運轉してゐたことが分つた。ナアンだと安心したけれど、そんな際にも、彼は顔を眞赤にして、まごつきながら、車の方向を換へ始めた。

大急ぎで洋服に着換へて、再び門を出た時も、彼はどこへ行かうとしてゐるのだか、まるで見當がついてゐなかつた。その癖、彼の頭は、脳味噌がグル〳〵廻る程、忙しく働いてゐた。眞空、ガラス箱、氷、製氷會社、鹽づけ、防腐劑、クレオソート、不燃性、………死體防腐に關するあらゆる物品が、意識の表面に浮上つては沈んで行つた。彼は町から町へ、無意味に車を走らせた。そして、非常な速度を出してゐる癖に、同じ場所を幾度も幾度も通つたりした。ある町に氷と書いた旗の出てゐる家があつたので、彼はそこで車を降りて、ツカ〳〵と家の中へ這入つて行つた。店の間に青ペンキを塗つた大きな氷室が出來てゐた。「もし、もし」と聲をかけると、奥から四十ばかりのお神さんが出て來て、彼の顔をジロ〳〵と眺めた。「氷をくれませんか。」と云ふと、お神さんは面倒臭さうな風で「いか程」と聞いた。無論彼女は病人用の氷の積りでゐるのだ。

「アノ、頭を冷すんだから、澤山は入りません。少しばかり分けて下さい。」

内氣の蟲が、彼の言葉を、途中で横取りして、まるで違つたものに飜譯してしまつた。

細繩でからげて貰つた小さな氷を持つて、車に乘ると、彼は又當てもなく運轉を續けた。運轉台の床で氷がとけて、彼の靴の底をベト〳〵にぬらした時分、彼は一軒の大きな酒屋の前を通りかゝつて、そこの店に三尺四方位の上げ蓋の箱に、鹽が一杯に盛り上つてゐるのを發見すると、又車を降りて、店先に立つた。だが、不思議なことに、彼はそこで鹽を買ふ代りに、コップに一杯酒をついで貰つて、車を止めたのはそれが目的ででもあつたかの様に、グイ〳〵とあほつた。

何の爲に車を走らせてゐるのか、分らなくなつてしまつた。たゞ、何かにウオトウオーと追駆けられる氣持で、せか〳〵と町から町を走

り廻つた。呑みつけぬ酒の爲に、顏がカッカとほてつて、肌寒い氣候なのに、額にはビッシリ汗の玉が發疹した。そんなでゐて、併し、頭の中の、彼の邸の方角に當る片隅には、絶えず美容の死體が鮮かに横はつてゐた。そして、その幻影のクッキリと白い裸體が、燒け焦げが擴がる樣に、刻々に蝕まれて行くのが、見えてゐた。「かうしてはゐられない。かうしてはゐられない。」彼の耳元で、ブツ〱ブツ〱そんな呟きが聞えた。

無意味な運轉を二時間餘り續けた頃、ガソリンが切れて、車が動かなくなつた。しかも、それが丁度ガソリン販賣所のない樣な町だつたので、車を降りてその店を探し廻り、バケツで油を運搬するのに、悲慘な程間の拔けた無駄骨折りをしなければならなかつた。そして、やつと車が動く樣になつた時、彼は初めて氣附いた樣に「ハテ、俺は何をしてゐたのだつけ。」と暫く考へてゐたが、「ア、さうだ。俺は朝飯をたべてゐないのだ。婆やが待つてゐるだらう。早く歸らなければ。」と氣がついた。彼は側に立止つて彼の方を見てゐた小僧さんに道を聞いて、家の方角へ車を走らせた。三十分もかゝつて、やつと吾妻橋へ出たが、その時又、彼自身のやつてゐることに不審を抱いた。「御飯」のことなどとつくに忘れてゐたので、車を徐行させて、ボンヤリ考へ込まなければならなかつた。だが、今度は意外にも、天啓の樣に、すばらしい考へがひらめいた。「チエッ、俺はさつきから、なぜそこへ氣がつかなかつたらう。」彼は腹立たしげに呟いて、併し晴々した表情になつて、車の方向を變へた。行先は本郷の大學病院わきの、ある醫療器械店であつた。

白く塗つた鐵製の棚だとか、チカ〱光る銀色の器械だとか、皮を剝いだ赤や青の毒々しい人體模型だとか、薄氣味惡い品物で埋まつてゐる、廣い店の前で、彼は暫く躊躇してゐたが、やがて、影法師みたいにフラ〱とそこへ這入つて行くと、一人の若い店員を捉へて、何の前置きもなく、いきなりこんなことを云つた。

「ポンプを下さい。ホラ、あの死體防腐用の、動脈へ防腐液を注射する、あの注射ポンプだよ。あれを一つ賣つて下さい。」

彼は相當ハッキリ口を利いたつもりなのに、店員は「ヘ？」と云つて、不思議相に彼の顏をジロ〱眺めた。彼は、今度は顏を眞赤にして、もう一度同じことを繰返した。

「存じませんね、そんなポンプ。」

店員はボロ運轉手みたいな彼の風體を見上げ見下しながら、ぶつきら棒に答へた。

「ない筈はないよ。ちやんと大學で使つてゐる道具なんだからね。誰か外の人に聞いて見て下さい。」

彼は店員の顏をグッと睨みつけた。果し合ひをしても構はないといつた氣持だつた。店員はしぶ〱奥へ這入つて行つたが、暫くすると少し年とつた男が出て來て、もう一度彼の注文を聞くと、變な顏をして、

「一體何にお使ひなさいますんで。」
と尋ね返した。
「無論、死骸の動脈へフォルマリンを注射するんです。あるんでせう。隠したつて駄目ですよ。」
「御冗談でせう。」と番頭は泣き笑ひみたいな笑ひ方をして、「そりやね、その注射器はあるにはありますがね。大學でも時たましか注文のない様な品ですからね。あいにく手前共には持合せがないのですよ。」と一句一句、叮嚀に言葉を切つて、子供に物を云ふ様な調子で答へた。そして、氣の毒相に枉木の取亂した服装を眺めるのだつた。
「ぢや、代用品を下さい。大型の注射器ならあるでせう。一番大きい奴を下さい。」
枉木は自分の言葉が自分の耳へ這入らなかつた。たゞ轟々と喉の所が鳴つてゐる様な感じだつた。
「それならありますがね。でも、變だな。いゝんですか。」
番頭は頭を掻きながら、躊躇してゐた。
「いゝんです。いゝからそれを下さい。サア、いくらです。」
枉木は震へる手で蟇口を開いた。番頭は仕方なく、その品物を若い店員に持つて來させて、「ぢやあまあお持ちなさい。」と云つて枉木に渡した。
枉木は金を拂つて、その店を飛び出すと、それから、今度は近くの藥屋へ車をつけて、防腐液をしこたま買求め、慌だしく家路についたのであつた。

## 十

ギヤッと叫んで逃げ出す程、ひどくなつてゐるのではないかと、枉木は息も止まる氣持で、階段を上つたが、案外にも、美蓉の姿は、却つて、朝見た時よりも美しくさへ感じられた。觸つて見れば強直狀態であることが分つたけれど、見た所では、少しむくんだ青白い肉體が艶々しくて、海底に住んでゐる、ある血の冷い美しい動物みたいな感じがした。そして、(以下三行削除)朝までは、眉が奇怪にしかめられ、顔全體が苦悶の表情を示してゐたのに、(併し、その表情は(二十一字削除))今彼女は、聖母の様にきよらかな表情となつて、彼がふさいでやつた脣の隅が、少しほころび、白い歯でニッコリと笑つてゐた。目が空ろだつたし、顔色が蠟の様に透通つてゐたので、それは大理石に刻んだ、微笑せるそこひ(盲目の奇しき魅力!)の聖母像であつた。
枉木はすつかり安心した。さつきまでの焦燥が馬鹿々々しく思はれて來た。若し美蓉のこの刹那の姿を、永遠に保つことが出來たら、そして、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、(以下十字削除)してゐられたら。叶はぬことと知りながら、彼は果敢ない願を捨て兼ねた。
彼は醫學上の智識も技術も、まるで持合はせなかつたけれど、物の

本で、動脈から防腐劑を注射して、全身の惡血を壓し出してしまふやり方が、最も新しい手輕な死體防腐法であることを讀んでゐた。防腐液のうすめ方も記憶してゐた。そこで、甚だ不安だつたけれど、兎も角、それをやつて見る事にして、階下から水を入れたバケツや洗面器などを運んで（婆やに氣附かれぬ爲に、どれ程みぢめな心遣ひをしたことであらう）フオルマリンの溶液を作り、注射の用意をととのへた。

書物には、、、の、、とあつたので、（以下七行削除）鰻みたいにヌメ〱と滑るのを、拇指と人差指で逃がさぬ樣に壓へて置いて、（以下十六字削除）、切口から、かたまりかけた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

柾木は、まるで彼自身が手術でも受けてゐる樣に、まつ靑になつて、烈しい息づかひをしながら、針をつけないガラスの注射器に、防腐液を含ませ、その先端のとがつた部分を動脈の切口にさし込み、繼目の所を息が洩れぬ樣に指で壓へ、一方の手で、ポンプを押した。だが、こんな作業が彼の樣な素人に出來るものではなかつた。彼の指がしびれた樣になつて、云ふ事を聞かなかつたせゐもあるけれど、いくら壓しても、ポンプの中の溶液は減つて行かぬのだ。いら〱して、力まかせにグイ〱壓すと、（二十七字削除）逆に彼の腕にはねかへる。何度やつても同じ事だ。そこで彼は、まるで器械いぢりをする小學生の樣に、汗みどろの苦鬪で、或は血管との繼目を糸でしばつて見たり、或はもう一本の靜脈に同じことやつて見たり、あらゆる手段を試みたが、丁度器械いぢりの小學生が、骨を折れば折る丈け、却つて器械を滅茶滅茶にしてしまふ樣に、（十八字削除）結局、彼が無駄な素人手術を思ひあきらめたのは、もう夜の十時頃であつたが、（何と驚くべき努力であつたらう。彼は午後から、殆ど十時間の間、この一事に夢中になつてゐたのだ）その頃には、用意の洗面器が、（以下二行削除）

血管の切口を糸でしばつたり、血のりを掃除したり、バケツの水で手を洗つたりしてゐる內に、失望の隙につけ込んで、睡魔が襲ひ始めた。昨夜一睡もしてゐないのだし、二日間ぶつ續けに、頭や身體を極度に酷使したので、如何に興奮してゐたとは云へ、もう氣力が盡きたのである。彼は、バケツや洗面器の赤黑く淀んだ汚水を仕末することも忘れて、クラ〱とそこへぶつ倒れたまゝ、いきなり鼾をかき始めた。泥の樣な眠りだつた。

殆ど燃え盡きて、ジー〱と音を立てゝゐる、蠟燭の光が、死人の樣に靑ざめた顏の、鼻の頭にあぶら汗を浮べ、大きな口を開いて泥醉してゐる柾木の氣の毒な姿と、その横に、畸形に浮上つて見える、芙蓉のむくろのなまめいた姿との、奇怪な對照の地獄繪を、赤々と照らし出してゐた。

## 十一

翌日柾木が目を覺ましたのは、もうお晝過ぎであつた。睡りながらも、彼の心は「かうしてはゐられない。かうしてはゐられない。」といふ氣持で、一晩中、闘爭し苦悶し續けてゐたのだが、さて目が覺めると、却つてボンヤリしてしまつて、昨日までのことが、凡て惡夢に過ぎなかつた樣にも思へ、現に彼の目の前に横はつてゐる芙蓉の死骸を見ても、部屋中にみなぎつてゐる、藥品の匂や、(十四字削除)それも夢の續きで、まだ本當に起きてゐるのではないといふ樣な感じがしてゐた。

　だが、いつまで待つても、夢は醒めさうにもない。假令これが夢の中の出來事としても、彼はもうぢつとしてゐる譯には行かなかつた。そこで、彼はその方へ這つて行つて、やゝはつきりした目で、戀人の死體を檢べたが、そこに起つたある變化に氣附くと、ギョッとして、俄かに意識が鮮明になつた。

　芙蓉は寢返りでも打つた樣に、一晩の中に姿勢がガラリと變つてゐた。昨夜までは、死骸とは云へ、どこかに反撥力が殘つてゐて、(九字削除)無生物といふ氣持がしなかつたのに、今見ると、彼女は全くグツタリと、身も心も投げ出した形で、やつと固形を保つた、重い液體の一塊の樣に、横はつてゐた。觸つて見ると、(十二字削除)既に死後強直が解けてゐることが分つた。だが、そんなことよりも、もつと彼を擊つたのは、芙蓉の全身に現はれた、おびたゞしい屍斑であつた。不規則な圓形を爲した、鉛色の紋々が、まるで奇怪な模樣みたいに、彼女の身體中を覆つてゐた。

　幾億とも知れぬ極微なる蟲共は、いつ殖えるともなく、いつ動くともなく、まるで時計の針の樣に正確に、着々と彼等の領土を侵蝕して行つた。彼等の極微に比して、その侵蝕力は、實に驚くべき迅さだつた。しかも、人は彼等の暴力を目前に眺めながら、どうする事も出來ぬのだ。手をつかねて傍觀する外はないのだ。一度戀人を葬る機會を失したばかりに、生體に幾倍する死體の魅力を知り初め、痛ましくも地獄の戀に陷つた柾木愛造は、その代償として、彼の目の前で、いとしい戀人の五體が、戰慄すべき極微物の爲に、徐々にしかも間違ひなく、蝕まれて行く姿を、拱手して見守らなければならなかつた。戀人の爲に死力を盡して戰ひたいのだ。だが、彼等の恐るべき作業はまざまざと目に見えてゐながら、しかも、戰ふべき相手がないのだ。嘗てこの世に、これ程の大苦痛が存在したであらうか。

　彼は追ひ立てられる樣な氣持で、昨日失敗した防腐法を、もう一度繰返すことを考へて見たが、考へるまでもなく駄目なことは分り切つてゐた。防腐液の注射は無論彼の力に及ばぬし、氷や鹽を用ゐる方法も、そのかさばつた材料を運び入れる困難があつた外に、何となく彼と戀人とを隔離する感じが、いやであつた。そして、假令どんな方法をとつて見た所で、幾分分解作用をおくらすことは出來ても、結局それを完全に防ぎ得るものでないことが、彼にもよく分つてゐた。彼の慌だしい頭の中に、巨大な眞空のガラス瓶だとか、死體の花氷だと

かの、荒唐無稽な幻影が浮んでは消えて行つた。製氷會社の薄暗い冷藏室の中で、技師に嘲笑されてゐる彼自身の姿さへ、空想された。だがあきらめる氣にはなれなんだ。（以下三行削除）

「ア、、さうだ。死骸に、、、をしてやらう。せめて、うはべだけでも塗りつぶして、恐ろしい虫共の攝かつて行くのを見えない様にしよう。」

考へあぐんだ彼は、遂にそんなことを思立つた。あきらめの悪い姑息な方法には相違なかつたけれど、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この様な一時のがれをでも試みる外はなかつた。

彼は大急ぎで町に出て、、、、、とを買つて歸り（これらの異様な擧動を、婆やはさして怪まなんだ。彼の不規則な生活や、奇矯な行爲には、慣れつこになつてゐたからだ。彼女はたゞ、土藏から出て來た柾木の身邊に、病院へ行つたやうな、ひどい防腐劑の匂の漂つてゐたのを、いささか不審に思つた。）別の洗面器にそれを溶いて、人形師が生人形の仕上げでもする様に、芙蓉の全身を塗りつぶした。そして、不氣味な屍斑が見えなくなると、今度は、普通の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。最初はたゞ屍斑や陰氣な皮膚の色を隱すのが目的であつたが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。彼は、、、、、、、、、、、に向つて、妖艶なる裸像を描く、世にも不思議な畫家となり、、、、、、、、、、、、、、（二十四字削除）夢中になつて、、、、のであつた。

、、、、、、、、、、、、、、、、、妙なことに、彼が嘗つてS劇場で見た、サロメの舞臺姿に酷似してゐた。生地の芙蓉も美しかつたけれど、、、、、、、、、、、、、一層生前のその人にふさはしくて、云ひ難き魅力を備へてゐた。蝕まれて、最早や取返す術もなく思はれた、芙蓉のむくろに、この様な生氣が殘つてゐたことは、しかもそれが生前の姿にもまして、、、、、、、を持つてゐたことは、柾木にとつて寧ろ驚異でさへあつた。

それから三日ばかりの間、死骸に大きな變化もなかつたので、柾木は、日に三度食事に降りて來る外は、全く土藏にとぢ籠つて、、、、、、、、、、、、、、明日なき戀人のむくろとさし向ひで、氣違の様に、泣きわめき、笑ひ狂つた。彼には、それがこの世の終りとも感じられたのである。

その間に、一つ丈け、少し變つた出來事があつた。ある午後、粉飾せる死體のそばで、疲れ切つて、泥の様に眠つてゐた柾木は、婆やが土藏の入口の所で叩いてゐる、呼鈴代りの鳴子の音に目を覺ました。それは來客の時に限つて使用することになつてゐたので、彼は若しや

犯罪が發覺したのではないかと、ギョッとして、飛び起ると、芙蓉の死骸に頭から蒲團をかぶせて置いて、ソッと階段を降り、入口の所で暫く耳をすましてゐたが、思ひ切つて厚い扉を開けた。すると、そこにはやつぱり婆やが立つてゐて、「旦那様、池內様がお出でなさいました。」と告げた。彼は池內と聞いてホッとしたが、次の瞬間、「ア、、奴めたうとう俺を疑ひ始め、様子をさぐりに來たんだな。」と考へた。「ゐると云つたのかい。」と聞くと、婆やは惡かつたのかとオド〳〵して「ハイ、さう申しましたが。」と答へた。彼は咄嗟に心をきめて「構はないから、探して見たけれどゐないから、多分知らぬ間に外出したのだらうと云つて、返して下さい。それからね。當分誰が來ても、僕はゐない様に云つて置くのだよ。」と命じて、そのまゝ扉を締めた。

だが、時がたつに從つて、池內に會はなかつたことが、悔まれて來た。勇氣を出して會ひさへすれば、一か八か様子が分つて、却つて氣持が落ちついたであらうに、なまじ逃げた爲に、池內の心をはかり兼ねて、いつまでも不安が殘つた。靜かな土藏の二階で、默りこくつた死骸を前にして、ぢつと考へてゐると、その不安がチリ〳〵とお化けの様に大きくなり、身動きも出來ない程の恐怖に襲はれて來、彼はその恐怖を打消す爲め丈けにも、居續けの遊蕩兒の様な、焼けくそな氣持で、ギラ〳〵と毒々しい（十四字削除）

## 十二

三日ばかり小康が續いたあとには、恐ろしい腐敗が待ち受けてゐた。その間の死體に、別段の變化が現はれなかつたばかりでなく、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、たといふのは、例へば消える前の蠟燭が、一時異様に明るく照り輝く様なものであつた。いまはしき虫共は、表面平穩を装ひながら、その實死體の內部に於て、幾億の極微なる吻を揃へ、ムチムチと、五臟を蝕み盡してゐたのであつた。

ある日、長い眠りから目覺めた椎木は、芙蓉の死體に非常な變化が起つてゐるのを見て、餘りの恐ろしさに、あやふく叫び出す所であつた。

そこには、最早や昨日までの美しい戀人の姿はなくて、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、あとけなくふくれ上つて、空ろな目から、半開の唇から、（十九字削除）椎木は甞つてこの死體膨脹の現象について記載されたものを讀んだことがあつた。目に見えぬ極微な有機物は、群をなして腸膜を貫き、之を破壊して血管と腹膜に侵入し、そこに瓦斯を發生して、組織を液化する醱酵素を分泌するのだが、この發生瓦斯の膨脹力は驚くべきものであつて、死體の外貌を巨人と變るばかりでなく、横隔膜を頸部咽喉の邊まで押上げる力を持つてゐる。同時に體內諸々の血液を、皮膚の

表面に押し出し、彼の吸血鬼の傳說を生んだ所の、死後循環の奇現象を起すことがある。

遂に最後が來たのだ。死體が極度まで膨脹すれば次に來るものは分解である。（二十二字削除）征木はおどかされた幼兒の樣に、大きなうるんだ目で、キョロ〳〵とあたりを見廻し、今にも泣き出し相に、キユッと顏をしかめた。そして、そのまゝの表情で、長い間ぢつとしてゐた。

暫くすると、彼は突然何か思出した樣子で、ピョコンと立上ると、せか〳〵本棚の前へ行つて、一册の古ぼけた書物を探し出した。背皮に「木乃伊」と記されてゐた。そんなものが今更ら何の役にも立たぬ事は分り切つてゐたにも拘らず、命をかけた戀人が、刻々に蝕まれて行くいらだたしさに、物狂はしくなつてゐた彼は、熱心にその書物の頁をくつて、たうとう次の樣な一節を發見した。

「最も高價なる木乃伊の製法左の如し。先づ左側の肋骨の下を深く切斷し、其傷口より內臟を悉く引き出だし、唯心臟と腎臟とを殘す。又、曲れる鐵の道具を鼻孔より挿入して、腦髓を殘りなく取出し、かくして空虛となれる頭盖と胴體を棕櫚酒にて洗浄し、頭蓋には鼻孔より沒藥等の藥劑を注入し、腹腔には乾葡萄其他の物を塡充し、傷口を縫合す。かくして、死體を七十日間曹達水に浸したる後、之を取出し、護謨にて接合せる麻布を以て綿密に包裹するなり。」

彼は幾度も同じ部分を讀返してゐたが、やがて、ボイとその本を放り出したから思ふと、頭のうしろをコツ〳〵と叩きながら、空目をして、何事か胴忘れした人の樣に、「なんだつけなあ、なんだつけなあ。」と呟いた。そして、何を思つたのか、突然階段をかけ降り非常な急用でも出來た體で、そそくさと玄關を降りるのであつた。

門を出ると、彼は隅田堤を、何といふこともなく、急ぎ足で歩いて行つた。大川の濁水が、ウジヤ〳〵と重なり合つた無數の虫の流れに見えた。行手の大地が、伸縮する微生物で、覆ひ隱され、足の踏みどもない樣に感じられた。

「どうしよう。どうしようなあ。」

彼は歩きながら、幾度も幾度も、心の苦悶を聲に出した。或る時は、「助けてくれエ」と大聲に叫び相になるのを、やつと喉の所で食ひ止めねばならなかつた。

どこをどれ程歩いたのか、彼には少しも分らなんだけれど、三十分も歩き續けた頃、餘りに心の內側ばかりを見つめてゐたので、つい爪先がお留守になり、小さな石につまづいて、彼はバッタリ倒れてしまつた。痛みなどは感じもしなかつたが、その時ふと彼の心に奇妙な變化が起つた。彼は立上る代りに、一層身を低く土の上に這ひつくばつつて、誰にともなく、非常に叮嚀なおじぎをした。

變な男が、往來の眞中で、いつまでもおじぎをしてゐるものだから、たちまち人だかりになり、通りがゝりの警官の目にも止つた。それは親切な警官であつたから、彼を助け起して、住所を聞き、家迄ひとで

も思つたのか、態々吾妻橋の所まで送り届けてくれたが、警官に連れ立て歩きながら、梃木は妙なことを口走つた。

「お巡りさん。近頃残酷な人殺しがあつたのを御存じですか。何故残酷だといひますとね。殺された女は、天使の様に清らかで、何の罪もなかつたのです。と云つて、殺した男もお人好しの善人だつたのです。變ですね。それはさうと、私はその女の死骸のある所をちやんと知つてゐるのですよ。教へて上げませうか。教へて上げませうか。」

だが、彼がいくらそのことを繰返しても、警官は笑ふばかりで、てんで取合はうともしなかつたのである。

× × × × ×

それから數日の後、梃木がまる二日間便所にも降りて來ないので、婆やが心配をして家主に知らせ、家主から警察に届出で、あかずの藏の扉は、警官達の手によつて破壊された。薄暗い土藏の二階には、（十八字削除）二つの死骸が轉つてゐた。その一人は直ぐ主人公の梃木愛造と判明したけれど、もう一人の方が、行衛不明を傳へられた、人氣女優木下芙蓉の、なれの果てであることを確めるには、長い時間を要した。何故と云つて、彼女の死骸は、（四十四字削除）梃木愛造は（芙蓉の死骸によつて命を奪はれたとの判定であつた。）（三十字削除）恐ろしいことには、彼の醜く歪んだ、斷末魔の指先が、（二十四字削除）

（をはり）

# 勞働者生活實記

## 鑛山の勞働と生活を語る

高橋長太郎

私は常に、鑛山勞働者ほど悲慘極まる者は他にない、と思つてゐる。

私は十四の時から坑内で働いた。それ以來昨年の春家族と一緒に現在の所へ移つて來るまで約十七年間といふ長い期間を、私は最初の約十年間は喰ふための必要から、殘りの數年間を日本鑛夫組合の組織運動だとか爭議の應援などで、相當廣い範圍にわたつて鑛山から鑛山へと飛びまはつたのであるが、その長い間の色んな出來事を思ひ出す度に、何よりかも先きに私の頭の中に浮んで來る感じは、あらゆる種類の勞働者の中で鑛山勞働者が一番悲慘だ、といふことである。これは、私が鑛山勞働者であるからとか、若くは日本鑛夫組合員であるからとかいふ鑛夫に對する私の同情的贔屓目からの感じばかりでは斷じて無い。恐らくそれはほんたうに鑛山勞働者の生活を知る者であるならば、誰だつてきつと私と同じやうな考へを持つ、持たずにはゐられないからである。

ともすれば輿論の外に殘され勝ちの鑛夫の生活、勞働狀態、それは確かに悲慘そのものの存在である。先づ考へても見るがいゝ、鑛夫ほど非人間的家屋の中に住んでゐる者が他にあるであらうか。鑛夫ほど粗末なものを喰つて然も烈しい勞働をやつてゐる者が他にあるであらうか。半農半鑛夫で暮しを立てゝゐる小さな鑛山の鑛夫は別として、その他の鑛夫の殆んど全部は會社で建てた薄い板圍ひの棟割り長屋に住んでゐるのであるが、その一戶の廣さは、鑛山に依つて多少の相違はあつても、大體六疊一間位いの廣さのものが一つあるきりなのだ。其所に、もつとも最近には疊を敷いてある所も大分出來はしたが、しかしその甚だしいのになると今でも、床板の上へぢかに莚を敷いただけの所も隨分あるのである。それはちようど乞食小屋のやうな所に三人も四人も若くはそれ以上の家族がひと塊りになつて住み、そしてどう踠いても踠きされないまでに、恐ろしい力でぎゆッと締めつけられ

てゐる（それは資本主義の最大強大な力だ）極度に窮迫した生活の中で、辛じてその日その日の暮しを立てゝゐるのである。鑛夫達のこの生活狀態を、何といつていゝのか私はそれを表現する言葉をさへ知らない。いや、それは生活の方面ばかりでは無い。それと同じことを私は鑛夫達の勞働の上に於ても感ずる。坑内のあの例へようのない深い闇と、ぐツと息詰つて來る高い熱度と、落磐と爆發と不治のヨロケ病と、彼等とは切つても切れない作業上の恐怖、苦痛の中で、鑛夫達はまつたく命がけで働いてゐるのだ。坑内勞働が他の勞働より樂であるなぞとどうしていへるものか！

この窮迫せる生活と、不安と恐怖と苦痛その儘の勞働――私は簡單に先づその勞働狀態から述べることにする。

鑛夫達は每年所謂日の短い秋の十月頃から翌年の三四月の頃までは、仕事を休むか夜番でも無い限り太陽の顏を見ることが出來ない。だから、それこそまつたく闇から闇への勞働だ。だが、坑外の暗さはまだ我慢が出來る。鑛夫達がそれ以上に苦痛を感ずるのは、何といつても、まつたく一寸先も見えない坑内のあの深い闇だ。それはちやうど墨汁の中へ顏を突込んででもゐるかのやうに眞黑い闇。その闇の中でカンテラの細い光り一つを頼りに胸を掻き毟りたくなるほどに息苦しい熱度と空氣の流通の悪い所で、一切の危險（それは一瞬の間に自分の息の音をとめてしまふ危險（それは例へば落磐、ガス及びダイナマイトの爆發等）とたたかひながら働かねばならぬといふことだ。坑内の熱度の高い所では、ぢつと立つてゐるだけでもグラグラッと眩惑を覺ゆるほどである。空氣の流通の悪い所は、それは寧ろ空氣などゝいふものゝ無い所に居るやうな息苦しさである。常磐地方の入山、綴、その他二三の炭坑の熱度の高い所では、其所で働いてゐる鑛夫は働きながら一日に三四升の水を飲む。飲まなければ働けないのだ。さうして飲んだ水は暫く經つうちに體中から小便のやうに吹き出る。炭坑にはこんな場所が相當にあるのである。それに比較すると銅山の方が幾分樂である。私の知つてゐる限りでは、銅山にはかうまでにひどい所は無いやうだ。然しそれでも足尾銅山のやうな奧深い銅山の地下約千尺邊りへまで降りると、降りただけでも、もうまつたく地の底へ埋められてしまつたやうに息苦しく、そして熱い。（空氣の關係などからさう深くない小さな鑛山などでも隨分熱くそして呼吸の困難な所もあるが、しかし何といつても下へ行けば行くほど苦しくなるのである）そんな所で働くのだから、それこそ文字通りに地獄の苦しみだ。

坑内勞働者としての私の一番最初の經驗は足尾銅山に於てゞあつた。そしてそれは私がまだやつと十四の時であつたが――その頃私は郷里を飛び出して上京したばかりで、淺草公園で物珍らしいまゝにぼんやり遊んでゐたのだつたが、その頃下谷にあつた橋本組といふ人夫募集屋の人夫引きの甘言にひつかゝつて足尾へ送られたのである――その時坑内で感じた一番最初の苦痛は、暗いじめじめとした然し熱度の高い穴倉へ放り込まれて空氣穴を密閉されてしまつたやうな息苦しさ

であつた。其所は坑口に近くさう熱い所で無かつたけれども、肺臓を何かでぐつと壓迫されてゐるやうな息苦しさで、私は直ぐに病氣になりはしまいかとさへ思つた。

　若し私のこの記述に僞りがあると思ふ人があるならば、試みに足尾銅山の八番坑（地下約千尺）邊りへ行つて見給へ。晝飯頃になると其所のケージ場の附近を取卷いてゐる褌までもとつてしまつて全身眞黒く泥だらけになつた人間の群れが、水中から拾ひ上げられた金魚のやうに息苦しさうに口を開いて、からうじて肩で呼吸をしながら、坑外から運び込れて來る飲料水を今か今かと待つてゐる鑛夫達の異樣な姿にぶつかるであらうから。

　そんな所で、鑛夫達は、いつ何時自分の生命を無慘に奪つて行くかも知れぬ危險に脅やかされながら働くのだ。だから、この地球の上の仕事といふ仕事の中で、坑內勞働が一番苦しい――と私はいつも思ふのである。

　然らば、そんな勞働に從事しながらその得るところの賃銀は如何？

　この點に就いても、私は鑛山勞働者が一番不幸であると思ふ。鑛山によつて勞働賃銀に多少の相違のあることは事實だ。働きさへすれば普通に喰つて行けるやうに賃銀を支拂つてゐる鑛山もある。が然しそれと同時に、働いても働いても飯場へなり會社へなり借金になるばかりで、滿足に喰つてさへ行かれない鑛山もある。そしてどつちかといへば後者の方が多いのである。さういふ譯で賃銀は鑛山によつて多少相違するがその他にもう一つ勞働者の仕事の種別に依つてもまた多少の相違があるのである。

　鑛山勞働者の中で一番待遇もよく、また他の者より比較的にいゝ稼ぎをするのは坑夫である。そして坑夫は九分通り請負賃銀だ。その次が支柱夫、車夫、雜夫といふ順序になる。だから、少々の例外はあつても、雜夫なんかよりは坑夫や支柱夫の生活の方が樂である。しかし、どんな者でも最初から坑夫や支柱夫にはなれない。仕事の上に、ある程度の熟練を必要とするからである。それで坑內勞働者になつて一番最初にやらされるのは雜夫だ。私も雜夫をやらされた。雜夫といふのは、坑夫がダイナマイトで爆破した岩石の破片をトロの來る所まで運び出したり、支柱夫が使用する坑木を運搬したり、トロを押す車夫の手傳ひをしたり、その他その日その日の必要に應じて色んなことをやらされるのである。

　まだ子供ではあつたが私はその雜夫をやつて一日に四十錢近くになつた。（當時の雜夫は一人前になつても五六十錢にしかならなかつた）そしてさうして働いた金は一ケ月に一回の勘定日になると、飯場頭が直接會社から受取つて來て有無をいはせず色んな費用を差引いてしまふのだ。その當時の飯場の飯料が一日に二十錢（現在では全體的に賃銀も上つてゐるがそれと同じ程度に飯料其他一切の品物の値段も上つてゐる）飯料は喰つても喰はなくても飯場頭にとられる。その飯料の他に副食物として頭の煮たのでも、大根、芋のやうなものから豆腐に

ちつとばかり醤油をかけたのまでが小さな皿に一杯で七錢均一、作業用の草鞋、カンテラの油、そんな物の代價が皆な飯場頭に前借りになつてゐるので、それを差引れると殘りはまつたく無くなつてしまふのであつた。一生懸命に働きながら自分では直接に一錢の現金をも使はずに、私は最初の一年ばかりの間に飯場頭へ數十圓の借金になつたやうであつた。

雜夫の狀態はそんな風だ。誰もが眞黑になつても垢の染みた半天一枚で坑内から歸つて來るとまた仕事に出るまで、年中敷ッ放しになつてゐる飯場の蒲團の中へ潜り込んでばかりゐるのだつた。

だが坑夫若くは支柱夫だからといつて、この雜夫より圖抜けていゝ稼ぎをする譯ではない雜夫よりは幾分生活が樂だといふだけで、結局はどう働いても金なんか一文も殘らないやうになつてゐるのだ。そのもつとも好箇の一例として私は左に秋田縣尾去澤銅山の話を申上げることとする。

だがその前に一説したいことは、大抵何所の鑛山の會社でも鑛夫一人一人に對してその家族數に應じて、そして一人が例へば一日に五合の米を喰ふものとすれば家族共に五人で住んでゐる所へは二升五合といふ風に、勘定日から勘定日まで米の貸下げをすることになつてゐるのである。勿論その代價は鑛夫の勞働賃銀から差引いて殘額だけを會社は勘定日に鑛夫へ拂ひ渡すのだ。だから、會社は代金を引つかけられる心配も從つて損をすべき筈も無いのである。

ところが前記秋田縣の尾去澤銅山では、それが例へ現に使用してゐる鑛夫の家族の者であつても十五才以上の者で鑛山へ働きに出てゐない者に對しては、米の貸下げをしないといふ規定があるのである。これはつまり十五才以上の者は一人殘らず鑛山へ働きに出ろといふ會社の腹なのだ。普通鑛夫の方でも働きに出さないと米が不足するから仕方なく働きに出すのである。それはそれでいゝ。働ける者は皆な働くがいゝだらう。だが、問題はそれからなのである。さうして一軒の家から二人の人間が働きに出るやうになつて果して二人分の收入があるかといふと、それが無いのだ。二人で働くやうになると同時に會社は今まで一人の鑛夫に支拂つてゐた例へば一圓なら一圓の賃銀をいきなり六十錢位ゐに値下げをしてしまふのである。そして後から働き始めた者にもその程度の賃銀をしか支拂はないのだ。かうして、今まで一人で働いてゐた時分には一圓であつたものが六十錢になり、今まで一人で一圓の收入があつたものが今度は二人で一圓二十錢の收入しかないことになるのである。

何と馬鹿〳〵しい話ではないか。一人の一日の勞働賃銀が二十錢であらうとは！　そしてこれは三人四人と家族の者が總出で働いてもこの手でやられるから、結局一家の收入の上には大して變化の無いことになるのである。

これではどう働いても生活が樂になる筈が無いではないか。然も尾去澤銅山ではいふのである。會社は一人一人の勞働力に對して賃銀

支拂ふのではなくて、一軒の家を單位としてその家族が餓ゑ死をしない程度に賃銀を支拂ふのだ。これを稱して三菱の一戸當り平均主義といふのである！と。

それでも、それだけの賃銀でも取れる中はまだ上等の方なのだ。全然中央の輿論の外にある鑛山では、血みどろになつて働いたその賃銀をすら、滿足に受取れぬことが時々あるのである。手早い話が、現在の常磐炭坑にはもう二ケ月も三ケ月も賃銀を支拂つてゐない炭坑がべたにあるのである。

私は常に思ふ。坑内勞働者の生活ほどその坑内と同じやうにたゞ眞黑く慘澹たる生活が他にあるであらうか――と。

# 自由勞働者汗の手記

山内大造

つい此の間迄私は深川にゐました。

多少は覺悟して居ましたが、まさかこれ程までに世智辛いとは思はなかつた東京へ、始めて飛び出して來たのは十七の夏、丁度震災の翌年で、未だ随分その當時の面影を想像させるものゝ散在してゐる頃でした。それから約二年間を苦學生と名の付く程の誰でもが、一度は經驗する道を辿つて、遂に十九の八月頃學校への愛想盡かしと、永い間の失業と生活苦とにすつかり閉口垂れた體を富川町の知人の許へ持ち込んで仕舞ひました。爾來最近まで、一度病氣の爲に暫らく歸國した事もありましたが、在京中の最も長い期間を此處で過しました。否正直に言へば、過すことを餘儀なくされました。

別に郷に入つては郷に從への諺に從つた譯でもありませんが、もう其頃では新聞廣告の、臨時人入れ欄さへも、オチ〳〵と一行一行を丹念に見てゐられない程、窮乏して來てゐましたので、梅雨明け頃から遂に一人の自由勞働者として、泥と汗とで幾度もなめし更へされた、半纏と腹掛けとに身を包む生活を始めました。

朝は大抵五時には食事を濟ませて、何々組と言ふ親方の所、つまり人夫の仲買人の所へ出掛けてゐないと、とても望みはありません。

ではその五時迄に行つてゐればどうにかなるのかと言へば、決してそうではなくて只先方で選拔する時間に、間に合はせ得ると言ふだけの事なのです。ですから四時半頃から五時六時七時頃の富川町の、あの數多いめし屋は宛から芋を洗ふ樣な有樣で、ガツ〳〵と大きな丼へ顔を寄せた儘、總べての男は一氣に恰かも追ひ立てられてゞもゐるかの樣に、食つて仕舞ふが早いか、生きる爲に血みどろな前進をするのです。

その中へ交つて私も、金のない儘に僅か五錢のコハ飯を一杯食つただけで、未だ不足でひだるい腹をかゝえて親方の所へ出掛けることもありました。

私が始めてやつたのは、今は立派に出來上つてゐますが、あの本所の三ノ橋の工事でした。その日親方の所へ行つて見ると、丁度巧い具合に壹圓六十五錢で仕事場の跡片附と云ふのがあつたものですから、スグ札を貰つて仲間に入つて現場へ出掛けました。さて行つて見ると、仕事場の跡片附けとは眞赤な嘘で、基礎工事の爲に貯水池程も掘り下げられてある泥土を、トロに乘せて約三十度許りも傾斜した側壁を押上げる仕事です。無論ワイヤーで引き上げる動力の加勢もあることはあるのですが、その泥土を滿載したトロの重量と緊張した針金を見ては、場所が急坂なだけに、實に素人目にはお話にならない程な危險さを感じました。見る〳〵内に二十人許り來たのが八人ばかりになつて、愈よ、仕事にかゝる時には六人になつて仕舞ひました。皆ケツを割つたのです。無論仕事にオジ氣を覺えると言ふよりも、報酬の點で皆二の足を踏んだのです。幸ひにその時は私はトロ押しの役目は逃れましたが、その代り重い鶴嘴とスコで道路の掘り割りを命ぜれたのでした——その時、人間と言ふものは、どうしてもやらなければ、死ぬより外にないと云ふ切端つまつた場合は何んな事でもしかねないものだと、熟々痛感しました。

•

所が私は間もなく一つのことを考へさせられる樣になりました。と言ふのは元來がこの自由勞働なるものは、ずつと遠い過去は、幾分一つの職業としての形態なり、又實質を持つてゐたのでせうが、現在では全く失業者と言ふことの代名詞になつてゐるのですから——仕事がなくて多少の力業は遣つてもいゝとか、又はもうどうにも動きの取れなくなつた人達が、唯一の血路でゝもあるかのやうに期せずして皆この自由勞働者群へと合流して來る有樣なので、勞力の需要供給が均衡を缺いで仕舞つてゐるのです。實際私達にしても仕事にあり付く方が不思議で、アブれる方が先づ當然な位なものなのです。こんな具合なので、自由勞働者とまで成り下つた人間は、少なくとも現在では餓死するか、又はそれに準ずるもの丶手で徐々に始末を付けられるかの域にまで墜ちて來てゐると言ふのが、懸値のない全くの眞實です。その中へ、前言した樣に二ツチもサツチも行かなくなつた種類の男として自由勞働者になつた私は、その實狀を裏書きでもするかの樣に、殆んどアブれ通して來ましたので、斯るものとしての生活手段は、丁度これから縊死しようとする男が、首に繩を卷き付けておもむろに踏み台を蹴飛ばそうと觀念の眼を閉ぢかけるのと、同じ運命に置かれてあるんだと、一日増しに痛感させられました。

でも不思議な事には、今度こそもう一二日の内に何とかならなければ、大變なことになつて仕舞ふんだがと、冷や〳〵し乍ら三度の食事を二度にして、しかも一日を二十五錢位で濟せる算段をしてゐると、ヒヨツクリと溝掘りや、トラツクの砂利積みや、又はあの年中行事である道路の掘り返へしたんかの仕事に有り付いて、ホーツと一息付ける仕末なのです。でも勿論そうであるからと言つて、少しも呑氣には構へてゐられないのです。

そこで私は自然アブれた日は、K橋の紹介所へ出かけることを怠らない樣、必然的に戒心して來ました。

それは丁度夏も中頃暑い盛りの或る朝でした。私の恐れてゐた取越し苦勞が正に覿面に現はれて、實に廿日に餘るアブれ通しを喰つて、とう／＼ポケットには七錢しかない窮況にぶつかりました。

え丶糞、今朝もどうせ又アブれるんだらうと思へば、惜くつて五錢のかけ一つ食ふ氣にもなれず、只何時もの樣に早く起き出したゞけで親方の所へ出掛けました。さて出掛けて見ると、又その氣になつて、どうぞと言つた樣に全たく哀願的に親方の顏を眺めましたが、

「おう、お前も來い」とは、とう／＼言つて吳れなかつたのです。

萬事休す、私は全たくふ投けの樣な氣持になつて仕舞ひました。

こうなつては今日こそは何うにか、何か、否何でもい丶自分に出來る樣な仕事の授かります樣にと、心の内に、——笑はないで下さい、——念じつ丶K橋まで行く元氣付けに、一六勝負をやる樣な悲壯な氣持で、一杯五錢のかけを食つたのです。そしてボツ／＼焦り／＼して來だした日脚しを恨めしく思ひ乍ら、恥かしい話ですが今日こそはこんなにまで困つてゐる俺の爲に神も何かの仕事を與へる樣、自分の爲に一枚の求人カードを拔いて待つてゐて下さるだらうと、打ち割つて言へばかなりな不安の中にも、並々ならぬ希みをかけて行つたのでした。求職カードを差出して全たく悲喜交々と言つた具合に、無暗みに悲觀したり、又未だ取りもせぬ虎の皮算定をやつたりしてゐる内に、名前を呼ばれたので×番の係員の前へ、何とも只名狀し難い氣持ちで、かなりな敬意を表して立ちました。

スルと彼はロクすつぽカードの記入事項を見もしないで、只簡單に

「君、ないねこんな仕事は、」

と、ニベもなく放ねつけたのでした。そしておみくじでも引くやうな氣持で書いて出したカードはデスクの上へ放り出されて了ひました。そのカードを唯一の命の綱にして前に立つてゐた私は、その時の氣持をとても口や筆では言つて見られそうもありません。何處かの冷たい暗い世界へ突き落されて行く樣な氣持になつた私は、喘ぐやうに

「ないでせうか」と、たゞこれだけを無限の哀れを籠めて言つたのでしたが、「ないね、」とこれはこの男の癖かも知れませんがニユツと顎を突き出して、嘲ける樣な薄笑ひを浮べたのでした。

もう夢中になつた私は、こんな風に一度、係員の所に何も適當な仕事のない時は、類似の部へ聞き合すことをするのを知つてゐたのですが、この係員は、とてもそんなことをやつて吳れそうもないと思ひましたから、

「では△番の方で見て戴きたいと思ふんですが」と言つて見ると、彼は何を言ふんだと言はぬばかりに、「△番へ行つて見る、フン お前そば屋の出前持ちか箱屋か料理屋の下足でもやるのかい、それとも宿屋の風呂焚きでもするのか、」とまあこうなんです。私は全たく急に何とも言ふべき言葉が出ませんでした。ゲッと咽喉が詰つて仕舞つたからで

す。一時カアッとしたが、漸く冷靜に考へて見ると、私のポケットにはタッタ二錢しきやないのぢやありませんか、晝飯は拔くとしても、夜になつたとて一個の大福餅さへ咽喉を越し兼ねてゐるんです。眼へこそ出しませんでしたが、胸の中は渦卷淚で一杯になりました。

私はもう一生懸命でした。

「すみませんけれど、廻すだけ廻して見て下さい」と言ふと、今度は又オッかぶせる樣に、

「判らんね君は、今言つてる樣に出前持か箱屋でもやるなら廻すが、料理屋の下足でも、いゝかね、まさかね、又來て見給へ、へ番つて言ふけれどあの通り商店内勤としてあるだらう、今言つた以外のものはありつこないんだ、又何時か來て見給へ」とこうなんです。それでも私は自分の今が今なので、

「ホントに僕困つてゐるんですから、何か職工の見習ひでも」私の求職は商店か工場の雜役夫と言ふのでした――と言ひますと、「駄目駄目、君此處へ來るんで困らん人は一人もゐないんだぜ、又にし給へ」と、サッサと次ぎの男を呼び出しました。もう否應なく係員のデスクの前を立ち去らなければなりませんでした。

その夜、私はもうポケットへ手を突つ込んで見る勇氣もなく、ツクネンと座つてピン〳〵とヒヽの入りそうな程、漸く強く熱して來る頭を抱えて、限りない恐怖に襲はれてゐました。

一個のやせても枯れても將來ある青年に料理屋の下足や、箱屋を紹介してやつて、これで紹介事業足れりと濟ますんであらうか、そして金網の中で細かい數字や算盤球と睨めつこをしてゐる連中と同じ樣な通り一ぺんなビジネス氣分でこんな仕事を扱つてゐるんでは、生死の境を彷徨する者にとつて、只無意味なお爲ごかしと氣休の施設としか考へられませんでした。世の中には預け込んだお金でさへ銀行へ引き出しに許り行くんでは面はゆいと言ふ人間も居るさうです。まして紹介所のドアーを潛ることは並大抵でない連中も多いだらうに、その唯一の頼りにする係員が斯んな有樣では、喘ぎ苦しむ下層者の路頭に迷ふ人々は、決してそれによつて幸な目に逢ふ機會が與へて貰へようう道理はないんだと、熟々私はそう思ひましたから矢張今まで通り三日に一度、五日に二度でもいゝ立ちん坊をやつて食つて行くことに斷然決心しました。

さてそうすれば夜店に出てゐる梱箱の草根薬のやうに、見す〳〵自分もカサ〳〵になる時が近いのだと、これも覺悟の一つにしなければなりませんでした。無論これは私に限つたことではなく現在の幾千幾萬の自由勞働者全部の運命なのです。

こんな具合に、馬鹿に、突き詰めて思ひ巡してゐると、ついこの一週間程の間に死んで行つた二人の自由勞働者のことが思ひ出されました。

一人の方は、私が丁度始めて三ノ橋の工事に行つた時知り合つた男で、五十近い齡の割に顏の小さい男でした。その男は金がなくて死る

所のない儘に、橋梁工事の未完成な桁木の隙き間へ、もう上へは電車のレールだけは敷いてあるその下へ、毎晩十時頃になると恰も機關室へ下りて行く火夫のやうにスッポリと身を落し込んで、まだ上を通過して行く電車が揺り落す砂埃りを、まるで製粉工場の運搬人のやうに眞白く浴びた儘、翌朝の電車が來る迄を唯一の安息所に選んでゐた程、素晴らしい鼻通のきく男でした。六日前の晩、その日までかなり永い間アブれてゐた所へ巧く仕事が見付かつて、何時もは砂埃りより入つてゐなかつた腹掛けの丼へ數枚の銀貨が入つたので、スッカリ有頂天になつた彼は、その夜は今までの分までも取り返へす樣な積りで、あの強い泡盛りを幾杯も引掛けました。そして給仕女が汚い手先きで差し出して呉れたツリ錢さへ、勘定出來ない程に醉つ拂つて、フラ／＼と電車通りへ出たのでしたが、その時が彼に取つて最期でした。まるで天下取りのやうな氣持になつてゐる彼の眼前へ、車庫歸りの電車がかなりな速度で走つて來たのを見ると、彼は完全に理性を失つてゐたから堪りません、

「よう、兄弟、えへッ、もう不可ねえ」

と言ふ樣な鷹揚な、盃を拒む樣な手付きをした時、彼の體はすつかり車道の中へ入つてゐたのです。クッキリとライトが彼の姿を照して見せたのが見納めでした。氣味の悪い急停車が行はれた時には、ホンの一瞬でしたがもうピリとも動かなくなつた黒いものが、後部の運轉臺近くの車輪の間に挾まれて、捲き上る砂塵を無雜作に浴びてゐました。

もう一人の自動車にやられた男の方は私達がゐた直ぐ近所で、妻君も子供もあつて、一軒家を持つた仲仕頭なのでしたが、酒の爲に昨年からその仲仕頭を解かれて、仕方なく失職者＝自由勞働者の圏内に入つてゐました。この男は餘程子福者（？）で、一番上の子供から二人位ゐ迄と、下の一人二人は確かに見譯けが付いてゐましたが、中の連中は兄やら弟やら、姉やら妹やらさつぱり見當が付かない位で、確か十二人もあつたと思ひます。それなのに、もう二ケ月程したら産れるんだと云つてお内儀さんが大きな腹を抱へてゐました。二疊と六疊との二間切りの家で、あの多人數の、しかも一番上の娘はもう年頃になつてゐるのに、兩親は本能に對する戒心なんか持つてはゐない樣でした。酒の爲に仕事先を失敗つたにも拘はらず、相變らずこの男は度を過すまで呑まないと決して承知しないで、又呑んで醉ふとどうしても只では濟まない暴れ者でした。

ある夜の十二時頃、グデン／＼に醉つ拂つた彼は、最早人通りもロクになくなつた電車通りをウロ付いてゐたために、猿江の方から大橋の方へ向つて行つた自動車にやられて、夢中の儘死んで行つて仕舞ひました。

此處で又可笑しい事には前の電車にやられた男は轢き手は判然り判つてゐるけれども、何分浮浪者で知る邊もない爲に縣の照會の仕樣がなくウヤムヤになるし、又自動車にやられた男は、本人の方は家も持

つてゐたし、丁寧に子供も十二人余も拵らへて行つたけれども、生憎加害者が全然判明しない爲に、これも亦どうやらウヤムヤになつて仕舞つた樣でした。

これ等は何でもない樣ですが、現在に於ける自由勞働者の運命を非常に暗示してゐるのです。最早や否應なく死を迫られてチリムヤとしめ木にかける樣にして殺されないものはこの二人の樣な死に方をして行くのですし、そうでないものは、自分で自分を殺すことは出來兼ねる儘に、見す〱自分達の社會的存在はてんで勘定の内に入れられてゐないことは判り切つてゐながら、私自身もさうだつたのですが、より永く息を續ける爲に、私達に取つては×とも考へられる社會の爲に余儀ない下積みをやらされて行くのです。

それはとに角、私は正直な所を言ひますと、もう二三年も之等の何とか始末を付けなければならない人達が、放つて置かれて若し不幸にも、今の儘皆が死なゝかつたならば、どんなことになるかも分りません。何分息をしてゐて物が見えて、それで口から物が入れられないと、實際××ぢやありませんから。(終り)

# 女工生活斷片

萩原テイ

可成りに廣いケーブルの部は隅から隅迄精巧な機械でうづまつてゐた。

右手近くに刻々と色糸が卷かれてゆく木管を、私はあらゆる神經と視力を集中して、時々一尺程手前で親指と人差指とで輕く押へ乍ら、くゞらせる手先と方寄りの急速に廻轉してゐる糸巻にも目をやつた。

大仕掛けの水車の中にゐる樣なカタ〱轟々と騷音の中に、慣れぬ疲れや、空腹に機械油をかいだ胸の惡さも、唯々仕事を無事に終り度い一心で忘れてゐた。

ズズー――突然後で異樣な物音を聞くと、間もなく私の頭上で、ベルトが止ると共に火車の樣に廻つてゐた赤い糸巻が角度を見せたので、ハットして右手の四角な棒を前に押して機械を止めた。

「滑川さんもう止めて塗料の手前の纖維部に湯が有りますから手を洗つて下さい。」

痩せてヒヨロ長い木部といふ主任が言つた。

「今日から此の人にケーブルの方をやつてもらうから宜敷教へてやつて呉れ」

といつて横柄な職工長の鈴木に伴はれて私は朝木部に引渡された時、

「何卒宜しくお願ひいたします」と馬鹿丁寧に挨拶した。第一印象のいゝ男だつた。

此れも青い痩せた矮小な娘が氣を利かせて私の爲に湯を汲んで呉れ

た。禮を言つて汗と油で塗れた小足や顔を洗つて身繕ろひしてゐると、

ボッ―――と尻長に五時の汽笛が工場内に鳴り響いた、と廣い工場内を呻り廻つてゐたあらゆる部門の騒音がハタ、と止んだ。

隣り合せの第一工場からはブリキ鑵を下げて幾人かの女工さんが走り出した。

筋向ふの塗料部からはコンクリートの上を便所に行く足音や、急に解放された、といつた樣な青年職工の顔も見えた。斯くして賑やかな話聲と共に職工達は、蟻の道行の樣に群を成して門の方へと押出して行つた。私は日時の下に主任の印を押した通勤簿を持つて粗末な公園のベンチを並べた樣な食堂を通つて通用門の側で立つてゐた。

「あ、あの滑川さん私白鼻さんと一緒に成つて來ましたの、お待遠さま。」

私の友人で今日から此の大和電線會社の女工に成つた杉山さんがニコ／＼出て來た。私と小柄な肥つた杉山さんと青白く肉付の乏しい白鼻さんと三人は人の波に混つて、貧相けな小石混りの露路を工場の塀に沿ふて曳舟の通りへ出た。

燒き付く樣な七月始めの日光を浴びてドロ／＼した溝の泥水を道路いつぱいに撒き散らすのでムッとした其の惡臭に私の胸が急に惡くなつた。

「ねえ無事に入れて良かつたわこれでもう安心々々」杉山さんは一人ではしやぐ。

「えゝ白鼻さんお蔭で助かりましたわ。」

私は苦しい中から泌々禮を云つた。

「いゝえ、でもね、此の會社ではどんなに人手が入用でも永年勤めた職工の紹介が無きや入れませんの、何年にも募集の札なんか張り出した事ないわ。」

心臓が惡いらしい白鼻さんは、青白い顔に鼻の穴が黒く覗いて、眼はどんよりして時々白い歯をニッと出して笑ひ乍らぽつ／＼と説明して呉れた。

「實際噂以上に嚴重らしいわ、杉山さん氣を付けませうよね」

白鼻さんを覗き乍ら私は注意した。

「えゝ先刻は御免なさいね、貴女顔が少し窶れたわ、まさか失業中で喰はずに暮した譯でも無いでせう。」

「甘く行つたもので質草が無く成つたら職に有り付いたわ」私は苦笑ひした。

「でもお勘定迄困るでせう。」

「でもね河田が三日程前から醫者通ひを止めて急に自由勞働を始めたの。」

「まあどうしてあの體で續くか知らねえ。」

「毎月家賃は十五圓でせう。ワイフにばかり働かせるのも心苦しい、て此の炎天を帽子も被らないで何程留めても聞かないんですの。」

途中此處ばかりは涼し相な氷屋と荒物やの角で白鳥さんと別れた。

「ねえ未だ早いし大和電線に潜入した手柄を報告旁々組合へ寄つて行きませうよ。」

杉山さんがいふので私も共に立寄つた。

向島勞働組合の本部の入口の掲示板には週刊の無産者新聞が新らしく張り出されてゐた。

「日本樂器株式會社の爭議愈々決戰に入る。」

大きな活字が眼に付いた。

組合の事務室では裏庭に面した戸障子を全部外して書記の田中さんが忙しくペンを動かしてゐた。私達はづか〳〵と近寄つた。

「今日は」

「よう河田君萩原君お揃ひでようこそ。」

「皆さんは濱松へ爭議の應援に行つたんでせう。」私は聞いた。

「えゝ僕も之から行く考へですが留守が無くて閉口です。出版から婦人部の常任として笠井まき子君が行つたでせう、此度やられたらしいんで是非河田君にお願ひしたいと本部から依頼されたんですが如何でせうなあ。」

「私も旅費さへ出來ればと思つてゐたんですけれど、昨日やつと日傭工場たる大和電線へ入れて今日二人共一日の勞働力を搾られて來たんです。」

「それは大成功です、實はもう一人婦人部員が急行したんですが、品川から三ツ目の驛でやられたらしいです、で入れたらそちらの方を堅實にコツ〳〵やつて下さい、結構でした。」

「前例もありますから此度は相手が大きい丈に尚更失敗せぬ樣本當を緊密に調査し乍らゆう〳〵組織に掛る考へです。」

「大丈夫よ、私だつて最後迄戰ひ拔くわ。」

若い杉山さんは一人で氣勢を上げてゐた。

此の頃は私に取つて實に煉獄の痛苦を想はせた。工場内では男工には勿論の事職工長監督主任に到る迄信頼を得る爲には仕事に忠實に、殘業も日に十日近くは人並にやつて隨に無理をし乍ら或時には若さと空腹に倒れそうなのを我慢して通つた。然し殘念乍ら今の私は生理的變化が明るい希望の中へ時々暗い影を投げた。最初は天氣の故で此んなに眠いんだらう位に思つてゐた所、六月の末に月經を少し見た限りで七月を過ぎ八月に入つても無かつた。そして日頃瘦せも知らぬ私は急に食が不味くて喰へなく成つた。妊娠、私達に取り失業中の飢えや爭議中の檢束にも増して此れ以上の恐怖は無い。かといつて金は無し結局成るが儘に任せる外仕方なかつた。

が暑苦しい夏の一日を少量のパンや果物で命を繋ぐ間では走り續けても片道二十分位掛りそうた今の工場へ行き、タイヤの破れた自轉車見たいにやつと自身の體を引摺り乍ら家へ歸ると、これもへと〳〵に疲れた河田が[illegible]に日焼けした顔を上向けに半分は泥に汚れた足をその儘、座蒲團の上に大の字に倒れて私の顔を見るが早いか、

「飯、飯、」と急き立てる。

そうして蚊の大群に攻められ乍ら夕飯を終へると留守中に同志が持つて來た通知が二人を待つてゐる。本部の執行委員會婦人部會、工場内の對策委員會其他緻や、ビラが少しも休養を許さない。

「××ベルト會社に勤めてゐる我等の用意に依つて新らしく組織された三名の婦人の爲に自己紹介を兼ねて茶話會を催す是非來て欲しい、」と通知を受けてゐた私は、朝牛乳一合と午に少しのパンを喰べたが作業中に吐いて終つて綿の如く疲れた體を機にのめしてゐたが強いて出ていつた。翌日の朝、

「仕事も大切だ、が今日は休んだらどうか。」

と河田に再三云はれた。

「でも昨日の殘業は口實を作つて休んだでせう、主任が自分でも辛いからつて、夜は非常に樂だし調査も可成り進んでゐますから。」

強いて家を出たが惡酒に醉つた樣で足下が定まらず頭はクラ〱と目暈がした。

丁度其日は私の所へ糸籆を運んで來る女工さんが休んだので、小林といふ小娘に主任が

「瀧川さんに道を教へ乍らエナメルへ行つて歸りに二人で糸籆を持つて來いよ」といふ。

尋常六年を終へると間も無く入つたといふ小林さんに何でも話して呉れた。暗い顏をし乍らも夜業の時は一時間だけ時間を取れるのでお母さんが嬉こぶといつて如何にも働く事を樂しむかの如く

「でもね家の母ちやんはせめて夜學でもといふけれど！ あたいね、夜學よりはお金を澤山頂だいて第一と第三に活動が見たいのよ。」

そう言つては日活は誰がいゝの松竹はどうのといつて刀を振上げた俳優や島田に結つた女優の寫眞を信仰者が神や佛の××出す樣に如何にも大切らしく、すつぺりした懷から數枚出しては見せたり見たりしてゐた。

「私見たいに世帶を持つと活動を見る閑も無いわ、貴女は隨分好きですねえ。」

「でも叔母さんあたい外に樂しみは無いの、月末に少しも多くお金を取ると母ちやんが喜ぶでせう。だから一生懸命働らいて皆勤を取つて其の半分だけお金をもらつて見に行くのよ。」

「隨分臭い工場ねえ、此度出來掛つた青塗りの大きな平家は何でせうね。」

「彼處はね素晴しい新式の機械を据え付けるんですつて、何龍闘とかでね、木部さんがいつたけど一番ぼろい儲けをするのは此のケーブルだから來年は全部此家も新らしく作るんですつてあたい其時は洗滌所を付けて欲しいわ。」

油が乘ると可愛いゝ小雀は良く饒舌つた。

「ね、塗料の匂ひは鍛冶場でせう」塗料の側を廻つて行程へ更に化合場が作業も續いた。

「えゝ其次は第二でせう次が第三工場で右側の方がゴム部なの、次は電氣部でせう、次が倉庫で其の向は今行くエナメルの部よ。」

「まあ、――ぢやあの西洋作の家は――。」

「あそこには偉い監督が、大勢ゐて事務を取つてゐるの、美しい女事務員も幾人もゐるわ。」

その若い女事務員が時々紙切を持つて工場内へ姿を見せると男女工は皆一齊に羨望の眼を向けるのだつた。

午休みに第一工場から杉山さんがやつて來た。

「あのね總聯盟の人達はこちらの先手を打つて爭議を起す計畫ですつて。」

「此の場合對立が何分不利だしそれにね數人の總聯盟の人達丈で四百に近い人員は一寸動かせるものではありませんよ、」

「私今月中には女工さんを四人位きつと組織する覺悟よ、」杉山さんは鬼の首でも取つた樣だ。

「しかしね勞働組合何て言葉を矢たらに振り廻しては駄目よ、私ロープの部が一番苦心するわ、同じ大和電線内でも食堂から會計迄別箇でせう。廣い所で女工さん丈でも百六十名からゐるらしいの、誰か婦人のオルガナイザーを入れて欲しいわ。」窓越しにロープの方を指さして私は云つた。

「一般の不平は何といつても三時休みの無い事と外出の不自由な事でせう、」

「擧れば幾らでもあります、お便所はあの通りだし、雨が工場の内に降るのですもの。これといふ洗面所も無し第一監督が多過るわ。」

「今晩工場會から集會の通知來たでせう。」

「え、工場内の組織分子をもつと活潑に活動さゝる事だし私調査だけでも三ケ月は掛る豫定よ。」

「日本樂器應援基金はどう成つて――。」

「各工場内の分會からも集めたけれど明晩の七時半迄之の本部に集合して婦人部員が五組に分れて三人宛新聞を賣るの――。」

「私も出たいけど家で出して吳れないわ」

「いゝのよ無理しなくとも、じやね私少し工合惡くて眞直ぐ家へ歸りますから後で本部へレポを屆けて下さいねサヨナラ――。」

晝の休みには此んな會話がよく交された。

が午後の半日も可成りに苦しい永い時間であつた。

今朝も一杯丈でも飯を喰べ樣として、いざ釜の蓋を取ると米の臭い臭ひがムンと來て胸が一杯に成つて辨當も入れずにだるい體を汗ばんだ單衣に包んで工場へと通はねばならなかつた。

空腹と暑氣の爲に體の中心を失ふと頭がぼうとして糸を押へた左の手が何時か外れて糸を鐵の心棒に卷き付けて終ふ。

遂には二間もはなれて巨大な機械の前に目を晒してゐる年增の女工に見付かつて主任から時々注意された。が間も無く意識がモーローとして同じ失敗をくり返した。時には腰掛けてゐた四分板が體の重味に

機械しに諸共ターキの上へのめつた。

斯ふして穴へでも入り度思ひを何處かくり返し乍ら一時間が十時間にも想はれて切ない時を日を過したが、翌日に成ると今日こそ休もうかな、と想ひ乍らも何倒れる迄やつて見ようと重い足を工場へと運ぶ。

私達女工が解放される日――それは全プロレタリアの肩にかゝつてゐる――私達は地球の女王となるであらう。それまで、私達は人間らしい生活は出來ないのだ。

# 「カムサツカ」から歸つた漁夫の手紙

小林多喜二

「函館市××町」――さうなつてゐた。然し、そんな町は函館には無かつた。ヒラ〳〵した附箋が三枚ついてゐた。市内で出した手紙だつたが、それで、四日もかゝつて、やうやく「××勞働組合」に着いた。

罫紙に近い、粗末な半紙に、折れた鉛筆の心を爪で削ぎ出して書いたやうな、揃はない大きな字をならべてゐた。然し文章は中學位は行つたらしく、漁夫らしくなくしつかりしてゐた。「積取人夫」の安宿で、疊の上へヂカに置いて書いたらしく、その綾目と凸凹がハツキリそのまゝ紙についてゐた。(讀み易いやうに直して、こゝへ出すことにする。)

× ×

私は今急いでくにに歸らなければならないのです。子供が二人、それに妻が死にかけてゐるのです。それも病氣でなら、まだしも、食えなくてゞす。あいつ等は、たしかに一年位も滿足に飯を食つてはゐないんです。然し私はこれだけは、どうしても書いて行かなければならないと思つてゐます。私達のために働いてゐてくれる貴方方にとつて、きつと何かの役に立つと思ふからです。

十月十四日、私達は半年振りで、生きて「カムサツカ」から歸つてきました。喜び、勇んで、仲間と一緒にサンパンを大急がせに急がせて、波止場へくると、棧橋に四、五人××が立つてゐました。

「お前等は××丸でカムサツカから歸つてきたものだな。」

訊かれたので、「さうです……。」と云つたら、ものも云はずに兩方の腕をとつてしまひました。私には何んのことか、ちつとも分りませんでした。

波止場一帶はカムサツカ歸りの漁夫で、沸き立つてゐました。稅關の構内では、吏員がマスクを口にあてて、漁夫の荷物をゴロゴロ轉かして、調べてゐました。通つて行くと、みんな仕事の手をやめ

て、こつちを見ました。私は足がどうしても浮いて、まるで二人の××に時々ブラ下るやうに引きづられた。街は、カムサツカ歸りの何萬人といふ漁夫を目當てにした各商店や會社の立カンバンやビラで一杯でした。そのうちで、二つだけは後でも思ひ出せる程、頭にのこりました。

> 國際漁業戰の勇士！
> 北氷洋の荒波と戰ひて、我帝國の覇氣を示して凱旋せる漁夫諸君よ！
> 我が函館の全市民は衷心より‥‥

> 、、、、、、、、、、、、
> 私慾飽くなき彼等資本家のために、
> 虐使、虐待されたる漁夫諸君よ！
> 來れ！
> 我等こそ唯一の味方なのだ。我々は手をつなぎ合はせて、彼奴等と戰はう。
> ××勞働組合

「何時の間に貼りやがつたんだ。」
「畜生奴等！」そして、一人が自動電話へ走つて行つた。
他の一人の××は、いきなりそのビラを剥ぎとると、靴の踵で何度も、何度も踏みにぢつた。私はそれ等をチラッと見たゞけだつた。それどころではなかつたんです。然し、それで今××勞働組合を思ひ出せたのです。

私はカムサツカの五ケ月を、どんな風に働いてきたか云へない。豚の方が羨ましい位、たゝきのめされてきた。そして函館の棧橋を踏むには、踏んだ。然し私は××につかまつたまゝ、そのまゝ一直線に×××の暗い處へ入れられてしまつたではないか。持つてゐた金はすつかり取り上げられてしまつた。私は、五ケ月もの間くにで歸りを待つてゐる子供などのことを考へれば、どうすればいゝんだ。男だつて泣ける。私は×××の壁を兩手でたゝきながら、喚きました。

その度に「今に分るんだ。何を吠えてるんだい。」と、毆ぐりつけられた。

私はこゝに四ケ月ほゝり込まれてゐました。何んのために引つ張つて來られたか、それは後で分りました。

然し私がどうしてカムサツカ迄行くやうになつたか、少し書きます。

雪が降つて、十二月になると、私達の村では皆「親方」を待つのです。毎日々々の南瓜と馬鈴薯で、子供も何もまるでその南瓜か馬鈴薯そつくりに、黄色く生氣なくなり、首がやせて、眼だけギロ〳〵してくるのです。それに大晦日と正月を控えて、實際どうしていゝのか分らなくなつてしまひます。そこへ漁場の親方がやつてくるんです。だから、たまつたものでない、ガツ〳〵のどをならして、三、四、五月

を八十圓で「身賣り」してしまふのです。これが十二月から五月迄の一家の生活費になるわけです。一ヶ月十四圓足らずにしか當りません。彼奴等はうまいところをつかんで、うまい時期にやつてくるものです。

百姓は百姓だけを三倍に稼がふが、それでは食えなくなつてきてゐる。漁夫も磯船で、コチヨ〳〵魚を釣つたり、刺したりしてゐたんでは間に合はなくなつてきた。發動機船が磯船に臭いガソリンをひツかけて、自由に走り廻つてくる。漁夫も「身賣り」をしなければならない。居殘る村の女が云つてゐた、五月頃の村は、ひツそりかんとしてゐて、裏山で吹いてゐる誰かの口笛も、濱で誰かゞしてゐる話聲も、どこにゐたつて、まるでそのまゝ聞える位だつて。ウソでも何んでもないのです。

漁場では、風の吹きやう一つ、波の動きやう一つで、「それッ切り」です。然し、代りを何時でも傭はれる親方は、そんなことには冷淡です。戰爭にでも來てるんだと思へば、諦めがつくかも知れないが、毎日々々の仕事が「命がけ」で、それも死んだつて、怪我をしたつて、どうしてくれるワケでもない。忙がしい時は間に合はせに、（十四字削除）。春だけで終る仕事ですから、お互にチリ〴〵バラ〴〵になれば、それッ切りで、泣き寢入りしか仕方のない事です。

北海道は雪が降るためか、どうか知りませんが、季節々々だけの、二、三ヶ月仕事が多いので、そのためにどんなに勞働者達が苦しめられ、身體を壞してゐるか、分らないと思ふんです。それッ、鰊が群來た、となれば、夜業はおろか、一睡もしないで、三日位はブッ續けに働かせられる。こんなことが、二度しか續かなくたつて、人間はおかしくなつてしまふ。時化がくると分つてゐて、沖に引ッ張り出される。次の朝、漁夫の（十五字削除）、上つくてる。一と春に、そんなことが何度もあります。

漁があれば、「九一」によつて、漁夫にも少し分前が當ることになつてゐます。然し、それも當るといふことだけで、そんな事になれば、親方達はまた考へたものです。

朝鮮人やアイヌは、丁度日本の勞働者がアメリカで嫌はれるのと同じやうに、嫌はれてゐます。

鰊漁場が終ると、その後へすぐ建つ「大謀網」に雇はれたり、烏賊つりをしたり、夏になつて、一文なしで村へ歸つてくるのです。秋になると、今度は石狩あたりのアキアヂ漁場（鮭漁場）に又「身賣り」する。順繰りにさうしなければならないやうに出來てゐるやうです、ちアんと。

私は、そして、とう〳〵今年カムサツカ迄出掛けて行くやうになつてしまつたのです。かうなつたら、最後かも知れません。然し食ふためなら、我々勞働者は北極迄も行くでせう。然しやつぱり樺太あたりへ行くのとは異ひ、函館の港を出るときは、さすがに背中が寒かつた。デッキに一時間もつかまつたきりだつた。妻と二人で、内地から

雪の深い北海道へ初めて移住してきた時のことが、頭へチリ〳〵とかへつてきた。又！　又俺達は北へ追はれるのか、フトそんな氣になると、いくら樞木のやうな漁夫だつて、何んか、かう、ゐても立つてもゐられなくなるやうです。たつた風呂敷包一つ持つた、薄汚い朝鮮人が北海道のどの汽車にも、必ず一人は乘つてゐる、あれを憐んだことがあつた。今度こそ、それがそのまゝ自分だと思はさるのです。

船の中では、濕氣と粗食のために、脚氣になるものがゐた。然し、そんなことにかまつてはゐない。どし〳〵仕事をさせた。

「好き勝手に、脚氣になつたんだろ。飯が惡かつたり、場所が惡るかつたりしてなるんだつたら、お前え等ばかしでなしに、この船にゐる何百人ッて奴が、みんな脚氣にならなけアならないんだ。横着者。」監督が喚めき立てた。――始終（四字削除）を持つて歩いてゐた。

その横着者のうち、二人はカムサッカの漁場に着かない前に、横着から起きた脚氣から死んでしまつた。（以下八行削除）

私達の漁場は、ロシアの國營漁場の近くにあつた。そこで働くことになつた。カムサッカは二時にはもう夜が明けたし、夜は十時になつてもまだ明るい、それに內地のうるさい眼が離れてゐるのをいゝ口實にして、私達はのめされる程働かされた。色々な契約も、函館の話とはまるッきり異つてゐた。

「こゝへ來た以上、戰爭と同じなんだ。いゝか、露助に負けてならないんだ。死ぬ覺悟で働け。行く〳〵は、この邊を我が帝國のものにしなければならないんだ。」で、死ぬ覺悟で働かなければならなかつた。

が、少し離れたロシア國營の漁場では、ロシア人の漁夫達は、どんなに眼の前に魚が群て來ても、一日七時間だけ働くとサッサと仕事をやめたし、日曜は一日休んだ。本を讀むものは本を讀み、遊ぶものは遊ぶし、それに賃銀もよく、見てゐて羨やましかつた。私達は、ロシア人が仕事を了へてから、更に、もう十時間も働かなければならなかつた。

「な、露助はあんな樣だから、國を滅してしまつたんだ。」我々はさう云はれると、それはさうだ、と思つた。死んでも、日本のために働き通さなければならない、と思つた。殊に、國を離れて何百浬も遠い異郷のもとで働いてゐるのだと思ふと、涙がゾク〳〵出るやうな興奮を覺えた。

だが、一方仕事は締木にでもかけられたやうに苦しくなつた。群來たと云ふので、三日もブッ續けに働かせられると、監督に丸太棒で足をさらはれて、毆りつけられても、まだ眠つてゐる漁夫がゐた。

日本語の出來るロシア人が時々やつてきた。來る度に、色々のことを云つた。

「ロシアは働く者だけが、××××出來る國だ。」と云つた。

「日本はどうだね。君達は、日本のため、日本のためと云ふが、日本の誰のために、こんなに××しにされてゐるんだネ。×××一人のためにだらふ。そんな心掛のいゝ勞働者がゐると、×××が喜ぶだらふ

な。×××一人に、半期五百五拾萬圓儲けさせてやるために、何萬人といふ人間がへたばるのか。」

　何云つてるんだい、露助奴！　と思つた。そんなことを本氣で聞くものなんか、一人も居なかつた。かへつて、かういふ事がありました。ロシアの國營漁場の進出を恐れてゐる××××××が、國營漁場に使はれてゐる×××をこつそり煽動して、ストライキをわざと起させたり、器具を壞させたりしたことがあります。私達はそれに應援さへしたのでした。

　漁期が終りさうになると、少しでも多く、少しでも多くといふので、仕事は尻上りに増々ひどくなつてきました。毎日一人位づゝ、仕事をしながら、倒れるものが出來た。そんなことが十日も例外なしに續かれると、皆はさすがにゾッとし出した。

　八月の二日だつた。仕事を怠けたといふので、漁夫の一人が監督に毆ぐりつけられた。（以下三行削除）

「あんまりだ。あんまりだ。」皆さう云つた。

　それがきつかけだつた。

　今迄ストライキの「ス」の字も知らなかつた漁夫が、皆仕事から手を引いてしまつた。

「どうせ××れるんだ。どうとも勝手にしてくれ。」と云ひ出した。

　これには勿論詳しいいきさつがあり、是非お知らせしたいのだが、今書いてゐられない。が、初め會社の方で強く出たゝめに、（十五字削除）したりしました。然し本當のところ、資本家達こそ、何時でも私達の身體を××てゐたのではないか。ちつとも亂暴なことでないと思つてゐます。

　この事件はロシア國内に起つたことなので、その解決のためにロシアの裁判にかゝることになつたのです。私達はロシアの國がイヤなので、あまり氣が進みませんでした。（以下五行削除）それで不拂賃銀として、一人當り四百圓の金を會社から出すことが出來たのでした。ストライキが終つてから分つたことですが、今迄國から來た手紙を會社が全部抑えて、一通も渡してゐなかつたことです。それには妻や子供からの火がつくやうな金の催促の手紙が、何回も何回も來てゐたのでした。

　私達は喜び、勇んで函館へ歸つてきました。處が、波止場から私達は、そのまゝ××に引ッ張つて行かれたのでした。引つ張つて行かれたことは前に書きました。然し私は何んのためか、ちつとも分らなかつたのです。私は飢えてる子供のことを考へると、ちつとなんかしてゐられません。私は喚きました。

「頼みますから、あの金のうちから、子供のところへ送つてやつて下さい。」

「馬鹿野郎、あの金を一體何んだと思つてるんだ。白ッぱくれやがつて。圖々しい奴。」

　私には何んのことか分りません。ところが、一週間目に××××の

前に呼び出されました。

「お前はカムサツカで××して、こつそりロシアから（五字削除）として、この大金を持ち歸つたさうではないか。ちアんと、お前等が稼く前に、會社から無線があつたんだ。第一、お前達漁夫がこれだけの大金を、正直に働いて持つてる筈が無いんでないか。」

それで私はハッキリ分つたのです。何もかも。この彼奴等のからくりが。赤化漁夫、赤化漁夫といふが、その正體はこんなものだつたのです。それに、私はもつと餘計なものまで分つてしまつたのでした。私達から取り上げたあの金は、（二十九字削除）分つたのでした。

私は毆ぐられたり、蹴られたりして、（七字削除）ゐました。出た今、私はこの事こそ是非皆に知らせて貰はなければならない事だと思ひました。そして「――」（五字削除）からなつて始めて、私にも分つたのです。

ごて〳〵書きました。　これだけ。

（一九二九・六・八）

# 濟州島の話

中井猛之進

濟州島は朝鮮の南、九州の西にあつて周圍六十里もある大島であり、中央にある漢拏山は海拔六千五百尺もある。上海に向て航海する時、右舷に當つて其大きな島影を見る人は、斯んな大きな島なのかと驚くが、さて此島に渡つた內地人は餘り多くはない。今は全羅南道に屬して島廳が置かれてある。

## 史實と傳說

濟州島の主邑たる濟州の後の小高い所に黑松の大木の生へる平坦の地がある。周らすに土塀を以てし中に祠を建てゝ濟州島民の祖先たる、良、高、夫を祭り三姓壇と謂つて居る。島民中、良、高、夫の姓を持つものが金を出し合つて其祠を維持し其祭を絶やさない。中央に三つの穴があり今は草が生ひ茂つて居るが其穴が良、高、夫三神の誕生した所だと謂はれて居る故に三姓壇を一に三姓穴とも謂ふ。

高麗史古記に曰く、耽羅（濟州島の古國名）は南海の中に在つて其初めは住民が無かつたが三神人が地から湧き出た、其年長者を良乙那と曰ひ次を高乙那と曰ひ三番目を夫乙那と曰つた。三人は常に遊獵を事として居り皮衣を纒ひ肉食許りして居た所、或日の事紫泥の封印（昔時詔勅は紫色の印泥を用ゐた）をした木函が東海の濱に浮んで居るのを發見して開いて見ると其中に石の函があつて一人の使者が隨いて來て居る、其使者は紫衣（人君の服）を纒ひ紅帶を結びて居り一見貴人である事が判つた。其石函を開くと中には靑衣を纒つた處女が三人と駒や犢や五穀の種子が入れてある。時に使者が嚴に曰ふには「我は是れ日本國の使である。吾が王が此三女を御生誕になつた。而して海中に島があつて神の子三人が國を開かうとして居ながらも配偶の無いのを御覧はされ此三女を配せんとの思召で私を侍らせて遣はされたのである。宜らく配を作して開國の大業を成せよ」と謂ふと共に使者は雲に乘つて去つてしまつた。其故三人は年の順で年長者は年長の王女と夫婦となり、次は次の王女を若年者は一番年若の王女を娶つた。次に矢を射て土地をトひ甘き泉の湧き出で土地の肥たる處を撰んで住所と定め、良乙那の居所を第一徒と曰ひ高乙那の居所を第二徒と

曰ひ夫乙那の居所を第三徒と曰つた。此に於て始めて五穀を播き駒や犢を放牧し日々に富を成して子孫が繁榮した。

其後高乙那の第十五代の孫高厚と高淸と季の弟の三人が舟を作つて海を渡つて新羅の盛な時に同國の耽津に到着した。之に先ちて新羅國では客星が南方の空に見はれたので太史が之れは異國來朝の象でありますと新羅王に上奏をした。其故高等が來た時には王は大變に喜んで直に彼等を引見し星が出た瑞祥に因んで高厚を星主と呼び、高淸を王子と呼び季の弟を徒內と命名し國號は初めて碇泊した耽津に因んで耽羅と曰ふ事にした、而して衣冠束帶を下賜した、云々。

以上が耽羅國即ち濟州島の緣起である。此史實が島民に信ぜられて居る事は恰も吾人日本人が天孫御降臨を信ずると同じであるから濟州島民は其祖先を日本人だと信じ此所のみは反日氣分など薬にしたくもない。康熙年間に出來た八疊大の地圖が島廳に保存されて居る。此圖は濟州島の史實を調べるに必要のものであるが之には九州を女人國としてある。即ち日本は母の國と曰ふ意味なのである。

## 地勢

濟州島は殆んど凡てが山であつて平地は少い。面積は約十九萬町步ある。其を分けると森林地、無立木地、耕地となる。森林地は島の中央部の一番高い所を占めて海拔二千尺以上の地で約一萬五千町步あり、其下の海拔一千尺より二千尺の間が無立木地で主として牧場に使用され、三萬餘町步あり其下の海岸迄約十四萬町步が耕地となつて居る。

山は玄武岩と「アルカリ」岩とより成る休火山であつて中央にある漢拏山が其主體である頂に噴火口があつて其一部に水を湛えて白鹿潭と曰ふ。之れは往古群仙が此池の傍で白鹿(酒)を飲んだから附けた名だとの事である。漢拏山の高い事は朝鮮十三道に有名なもので東土錄には「漢拏の絕頂俯して南極を看る」とある。此南極は南極星即ち「サウザンクロツス」であつて香港邊迄行かねば見えぬ星である。此星が漢拏の山頂からは見えると曰ふのである。時は十月頃から五月の始め迄ある。私が大正二年五月中旬に始めて登つた時には山頂は華氏四十度であつた。

漢拏山の外に大小無數の側火山がある。其上には必ず噴火口があつて如何に昔時盛に活動したかが判る。火口湖を持つて居ると謂はれて耽羅史に出て居る山は澤山にあるが現に知られて居るものには沙羅岳、文岳、水靈岳、元堂峰、金帛峯の五峯がある、其他に感德峯と云ふのにも淺い火口湖があつたので住民が水田にしようと思つて埋めたら水の出ない平地になつた。

火山噴出の史上に顯はれてゐるのが二つある。東國輿地勝覽卷三十八に「瑞山、高麗穆宗五年六月山あり海中に湧く。山四孔を開き赤水湧出し五日にして止る。其水皆瓦石と成る。十年瑞山海中に湧出す。大學博士田拱之を遣はし往て之を視せしむ。人の言く山の始めて出づるや雲霧晦冥地動雷の如し、凡そ七晝夜始めて開霽す山の高さ百餘丈

周圍四十餘里なるべし草木無く烟氣其上を羃す之を望めば石硫黄の如く人恐懼して敢て近づかず拱之躬ら山下に至て其形を圖し以て進む。」

とある。穆宗六年は一條天皇の寬保年間西曆千二年即ち今を距る九百二十七年である。

又耽羅誌島嶼の部に、

「飛揚島、高麗穆宗十六年山あり耽羅の海中に湧出するは即ち此島にして飛揚の名蓋し諸を此に取るか。」

とある。穆宗十六年は三條天皇寬仁元年即ち今を距る九百十五年である。此外にも傳說で知られて居るのに漢拏山の北側の中腹に宵產峯と云ふ小丘がある。此丘は一夜の中に出來たから宵產峯と謂ふのだとの事である。

斯樣に多くの火山が活動した丈けあつて島は八丈島や櫻島を大規模にした樣に熔岩だらけである。其故住民は畑に石が多くて困るから其石を畑の周圍に積んで石垣として居る。河らしい河は少いが雨が降ると水が流れ出し殊に山中で大雨に遭ふと雨の霽る迄は激流に遮られて歸る事が出來ない。然し凡てが燒石の山であるから諺にも燒石に水と謂ふ如く水は皆地中に染み込み海岸近くになつて急に出て來るのが多い。從て海岸近くの深い溪谷に急に滾々たる清水が湧出して深潭をなし激流を形し奇觀絕景に乏しくない。此水の稍高い所から出た爲めに大瀑布を作つて居るのが西歸浦の正房瀑である。高さ十餘丈幅四間水量極めて豐富であり瀑壺には臺灣に產すると同種の大鰻が居る先年捕へて島廳の標本にしてあるのは直徑四寸長さ六尺もある。然し之れは未だ小さいので最も大きいのは時々人頭大の頭を擡げる。土民は之を淵の主と呼んでゐる。水の出の惡い所では、泉が干潟地にあるから干潮時に水汲をしなくてならぬ。而して水汲は女の仕事故其村の女は干潮が夜中に當る時には眠らずに潮の引くのを待つて居る。

## 風俗習慣

濟州島は人口十八萬ある。多くは漁業を營むが女が男よりも多いので古來女護の島と謂はれて居る。日鮮併合後島民は皆其妻の籍を入れた時第一第二より始まり第七妻迄を算したものが珍らしくなかつた。然し男子が女子を養ふ義務はないから女子は凡ての勞働に從事し其體格もよい。朝鮮內唯一の海女の產地で每年二千餘の海女が夏期に朝鮮の沿岸に出稼ぎするのみならず島の產物たるあわび、なまこ、さざえ、若布等は皆海女の採收する所である。採つては入れる竹籠の浮には夕顏の殼を用ゐる。女子は又耕作にも從事し又男子用の朝鮮帽は其製造額が全鮮第二と謂はれて居るが皆妙齡の婦人の手に成るものである。勿論男子も働くものは澤山あり特に近年は漸次男子が他から移住した爲め其數が殖え從て男子の勞働に從事するものが增した結果、薪材を伐り出す事、漁業、耕作等は半ば男子の手に依つて居る。

上陸して先づ目に附くのは島に馬の多い事である。皆形の小さい朝鮮馬であつて澤山に他へ移出もするが島內では乘用、荷物運搬用並に

耕作に用ゐる。道路が悪い爲め車が用ゐられない爲め車は一つもない。其故此馬が無かつたら荷物の運搬は不可能である。濟州島は前記の通り水流の少い所であるから水田は少く畑地が最も多い。種子を蒔いた後は馬に踏ませないと土は火山灰であるから風に飛ばされて仕方がない。其故十數頭の馬を一所に集め之を一種の呼聲で追つては回轉させる。其聲は。

ホーホツ〱〱〱〱ホツホオー

と云ふので、斯ら呼び乍ら手を延すと馬は必ず道を避ける。山間の一本道で馬群に遭うて進退谷まつた時急にホーホツ〱〱とやると馬は驚きあはてゝ一齊に道を轉ずる。

土語は大に朝鮮語と異り對岸の全羅南道の人すら始めて渡つたものは言葉の通じないのに困る位である。衣服の作りも朝鮮とは異なつて居るが特に女が男を恐れず男を見ても隱れず道をきけば出て來て教へる程であり、朝鮮の女の様に頭の上に物を載せて歩かず、背に水甕を負ふ事、子供を日本式に背負ふ事などは目に附く。通例女は跣足で歩く、燒石原で草鞋を穿つも痛い位である所を跣足で歩くから其足は嘸かし固い事であらう。

月に一回は市が立つが女が別に着飾つて出る事はなく反て若い男が小ざつぱりした風をして出掛けるのも可笑しい。

島には南京蟲（ピンヂ）が少い。大正二年に行つた時などは何處へ行つても全く居ないので安●して民家に宿る事が出來た。之れも朝鮮と著しく異なる點である。

宗教は儒教が最も盛んであるが近來は佛國の天主教が大に廣められた。佛教は至つて振はないが昔は相當に盛んであつたと見え遺跡は所々にある。迷信は相當に盛んで淫祠を敬ひなどする。大正十年に虎疫が大流行して一萬人以上の死者を出した。當時全羅南道廳は特に防疫隊を派遣したけれども土民は此疫病は神意に依るものと信じ之を防げば神の怒に觸れると稱し手に〱獵物を携へて極力防疫隊の侵入を防ぎ爲めに防疫隊は命からがら逃げ歸つた事がある。之を見ても一般が無智且質朴であるとが判る。木浦港より島に渡る船上波穏かなる時は或者は島の歌を歌ひ或者は詩を賦して互に示し合つて居る。宛然太古の風ありと謂ふべし。

## 產物

產物は海產を主とし鰮漁は特に盛んであるが漸次其產額を減じて行く。之れは內地の漁民が鰮網を用ゐて濫獲した爲めである。廣島縣の荒川某の如きは大正元年頃迄に鰮漁で三十萬圓を利得したとて土民羨望の的となつて居た。鯨を除く外は島で捕れぬと云ふ魚は殆んどなく烏賊、さわら、鯖、まぐろ、鯛、鰤、鮑魚、海鼠等殆んど捕れぬものはなく、對馬と相對して魚の巢の様な所であつたが近年海岸の森林を伐採した爲め魚附が非常に惡くなつた。

農產物中米は少くて僅かに五千石にも足らぬ。麥は三十五萬石を越

え豆類八千石、雜穀三萬石等を始め甘藷は最も多く作られ年々百萬石以上も採れる。蔬菜は餘り盛でない。林業は總督府の役人が島の事情を知らず又出張するものも餘り林業の知識のないもの許りであつた爲め眞相が傳へられなかつた爲めと齋藤と云ふ山林課長時代に島に適せぬポプラとアカシアを植ゑさせようとした事などが崇つて衰微一方である。然し島の氣候は九州の北部とよく似て居るから日本人が杉を試植したのは相當に成績を擧げて居る。故曾根統監がミツマタの試作をさせたが之れは島民に熱心がない爲め失敗に終つた。山林を最も多く害したのは椎蕈業者で大森林を伐り倒しては椎蕈の栽培をした爲め其後にはユヅリハ、クサギの樣な役にも立たぬ雜木のみが生へ廣汎な良林は一變してしまつた。昔元寇の時元は兵船五百艘を此島で作らせた。其位島が良材に富んで居たのは當時から有名なものであつて其が日鮮併合後迄も續いて居たが椎蕈業者の無慈悲の手に依りて、昔日の俤は地を拂ひ僅かに山上に其一部の俤を止むる迄になつたのは返す返すも惜しい事である。然し此れが爲め一時は年々二、三萬圓の椎蕈を産出し少數の椎蕈業者丈けは其懷を肥し得た。竹はよく成育するので竹材の利用は朝鮮全道其比を見ざる迄に發達して居る。舊佐面松堂里にカヤノキの純林がある。此林は日本全國何處にも見えぬ偉觀であつて蒸餾業者の垂涎萬丈のものである。十年前迄は楠の自生があつて相當の大木になつて居たが之れも次第々々に伐り採られて今は全く其跡を絶つたが栽植したものは發育がよい。

風が強いから果樹の栽培は思はしくないが柑橘類はよく出來、天然にも橘や枳殼がある位故蜜柑、橙子、柚等を始め十餘種が植ゑられて居り發育も惡くない。就中青橘、瓶橘など云ふ品種は他に見られぬものである。

朝鮮馬の産額多く、朝鮮の南部に向ての唯一の馬の供給所となつて居る。牛も可なり産するが岩石の多い爲め年々足をくぢき用をなさぬものが頻出する。

## 陸生の動植物

哺乳動物は至つて少く朝鮮半島に普通に住む豹、ヌクテ、ノロ、ハリネズミ等も居ず僅かに濟州イタチと云ふ特有のイタチが住んで居る。時折、飼犬、飼猫、豚などが野性を帶びて山に逸出する事があるが久しからずして死滅する。哺乳類は少いが鳥類は相應に多く約五十種も知られて居り小さき雀、シジウガラの類より大なるヲジロワシに至り、特にサイシウアカゲラと云ふキツツキの類やシマシジウガラ、サイシウヤマガラなど云ふ特産の鳥類も住んで居る。爬蟲類は種類は少いが個數は多くヒバカリ、キスヂヘビなどが燒石の間石垣の間に屢見するが人に害を與へたと云ふ事は聞かぬ。ムカデの多いのは濟州名物の一で一寸石を起せば二匹や三匹は必ず走り出す。特に色の黒い長さ數寸の大ムカデがさく〳〵疊の間や壁の上を匍ひ出して驚かされる事は屢々ある。

植物は大變種類が多く草木を併せると千五百種位ある。特に緯度から云へば長崎、福岡邊に當る位南にあるから氣候が暖かく、琉球や臺灣に行かねば見られぬオホタニワタリが、西歸浦の直ぐ前にある芽島には生へて居る位故、半熱帶植物に乏しくない。從つて海岸から五、六百米突迄は常綠濶葉樹が多くて、常に青々として居り、以前はセキコク、フウラン、ナゴラン等が澤山に樹に附着して居たけれども、今は殆んど採り盡してしまつた。紅いツバキは澤山あるが、紫の藤はない。五、六百米突より千二、三百米突迄は落葉の濶葉樹林に被はれて居り、山上は高山植物があつて、特に面白いのは、ガンカウラン、イハウメ、クロマメノキ、クロミノウグヒスカグラなど云ふ朝鮮の中部以北か、日本の中部以北の高山でなくてはない高山植物がある事である。ガンカウランは又非常に多く私は內地、朝鮮の山では斯んなに多くある所は見た事がないが、土人は「シローミ」と稱して其黑い實を食し、海岸に多くあるクロイゲ（土名サンドンナム）の黑い實と共に賞美されて居る。頂上に僞柏があつて一時は多くよい盆栽を出したが、今は採り盡す懼があるから採收を禁止して居る。燒石の磊々たる間に刺の多い植物の多いのも一特色であらう。曰くジヤケツイバラ、テリハノイバラ、サイシウノイバラ、クロイゲ、フユザンシヨウ等を始め十餘種の有刺植物が雜然と繁つて居る。特にカラタチの叢は大したもので、南側の溪流に沿うて密生し到底入り込む事は出來ない。海濱に水仙の自生があつて多く生へて居る事は、恰も房州、城ケ島、初島などの様である。櫻や桃や、柿が自生して居るのも興味ある事實であるが、嘗て漢拏山の中腹で東京に最も多く植ゑてある「染井吉野」と云ふ櫻が自生して居るのを發見したのが、學界では異常の發見とされて居る。何となれば染井吉野の自生地は今迄に知れて居ないし濟州島では古來櫻を賞美したり栽培したりしないのに、山の中腹の原始林中に唯一本染井吉野があつたと謂ふのだから、驚異と謂ふの外はない。採收者は同島に十餘年住んで一身を天主教の布教に捧げた佛國のタケーと云ふ宣教師で、彼は眞面目な人で虚言など謂ふ人でなく、又彼は前後九年間濟州島の山で植物を採收して廻り、大に此島の植物を世に出した人である。

## 島の名所

名所として從來擧げられたるは城山日出。正房瀑布。山房窟跡。竹島古戰場。天帝淵瀑布。紗峰落照。龍淵夜泛。三姓穴古墳。古藪牧馬。楠林秋色。靈室奇巖。鹿潭晩雪。瀛丘春花の十二勝であるが一二を除く外は規模が小さ過ぎる。其故私としては次の八景を擇びたい。

### （一）漢拏山上の眺望

山頂は西部南部は外に斷崖を廻らし、内に舊火口を有し、白鹿潭があり、南鮮に特有のサイシウシラベなるモミの一種の林と、既に縮まりしゲンカイツヽジと、屈曲せる枝を交へるダケカンバとの生へる所に、大自然の盡きぬ眺めはあるけれども、頂に登つて四望する時の

雄大さは蓋し南鮮第一である。遙かに南鮮の諸峯を北に見、東に九州の山を望み屈曲せる島の汀界線は夢の如く脚下に展開し、沙丘は洒せる布の如く、斜面の牧場の起伏せる間に、緑の帶の如く、谷に沿うて繁る林の綾く狀の美しさなどは、到底筆にも言葉にも及ぶべからざるものがある。

(二) 漢拏山のツツジ

漢拏山の中腹にツクシアカツツジと云ふ大輪の紅花を開くツツジの大木がある。大きいのは床柱にする事が出來るので、朝鮮では有名なものとなつて居る。其花は五月に開き美麗である。峽谷に沿ひてはテウセンヤマツツジの紫紅花が咲き揃ふ、瀛邱の春花などは其一部の眺めに過ぎぬ。又山上五千尺以上にはゲンカイツツジの大きな叢があつて、之れが一齊に開花する時は何十町歩のツツジ園を作り眞の御花畑をなす。

(三) 月汀の沙丘

月汀と云つても必ずしも月汀に限られず、濟州島の東北端に長さ數里に亘る沙丘がある。此沙丘は世界唯一の珍沙丘である。其理由は沙が皆介殼の微粒で出來てゐるからである。近海に棲んでは死する介の殼は、波に碎かれて沙粒となつて、長さ十數里幅一、二里の沙丘を作つて居る。試に沙を採つて之に酸を注ぐと皆融けてしまふ。

(四) 西歸浦

西歸浦は島の南端中央に位して、島廳の支廳のある所であり、又島の中で一番暖い所である。其近い所に爐烘と云ふ部落がある。其は暖くて爐邊に居る樣だから名けたのであるが、北よけの所ではタウゴマが多年生になり、芭蕉が冬も青々として居る。斯る有樣故西歸浦一帶は山も部落も青々とし、特に其前にある芽島蚊島は亞熱帶らん群りであり、程遠からぬ所にある正房瀑より流るゝ淸流には鮎を産する。

(五) 正房瀑

西歸浦に注ぐ正房川を遡つて、五丁にして一大瀑布が轟然として落下し、高さ十二丈幅四間に及び南鮮第一の飛瀑をなす。瀑壺は深淵をなし、天地淵と呼び、既に記した如き大鰻を産する。之れより急湍を下つて僅々二町にして潮のさす川口となる。而して此二町の間に鮎を始め、種々の河魚が棲み、其以下海迄三町の間には海魚が棲む。鮮人の金桂斗の詩がある。

名不虛傳還二房　災天飛瀑逼寒光
一條勝破靑山屹　萬丈垂流白練長
瀛雪凝生明眼界　碧雲退却快腦塘
看來知有朝宗意　日夜奔歸大海廳

(六) 寨坡の春色

寨坡は濟州邑內より山越をして、西歸浦に行く時、通る峠上の平地で、漢拏山の肩、海拔四千尺の所にある。淸き流れと斧の入らぬ林とがあり、春の新緑と一時に咲き揃ふ花とに飾らるゝ時は、仙境に入る

の思がある。濟州島を訪ふものゝ一度は通る値のある所である。

（七）飛揚島

飛揚島は島の西北部に孤立する、有史後に活動した火山島で、中央の火口壁の一番低い所は、海拔二百五十尺あるのに、火口底は百尺よりない。磯附近は奇巖怪石其態を擅にし、水をたゝへて海魚が住む。此島よりする濟州本島の眺めは、特に偉觀中の偉觀で、漢拏山より十數個の側火山が順次此島に向つて居るのが明に判る。

（八）圓錐釜岳に對す

釜岳は漢拏山の最高峯である。削り成せる岩壁千尺、其下より次第に緩斜面となり濟州笹の茂る圓錐と云ふ大突起になる。其中間に立て双方を見る所に、釜岳對圓錐の眞價値がある。圓錐に對して漢拏の中腹に一峯がある。其峰の圓錐に向ふ側は殆火口が破れて、、、、、の形をなし其上に樹木の密生する狀は、、、の如く一見何人も苦笑を禁じ得ない。之に向つて突出する圓錐は、土民之を、、に譬へ合せて陰陽と云ふ。是亦大きな聲では云はれぬ濟州島の一名所である。先年米國「アーノルド」樹木園の現園長「ウヰルソン」氏が、私と共に渡島した時私が其說明をしてきかせたら、彼は大聲を擧げて笑ひこけ暫く見とれて居たが「實によく出來て居る全く見物だ」と感心して居た。自然の惡戲も此所に至つて極まれり。一つ拜みに出懸ける人はあるまいか。（完）

# 街路樹と小公園

上原敬二

漂茫とした熔岩の荒野に、火口の御靈火を目指して息杖に喘ぎ〳〵巡禮の登つて行く姿は、信仰的に見えて山の自然を彩る點景となるものである。それは雪のアルプスを仰ぎ見るサボアの溪谷であつても、御神火の燃え續いて居る淺間や阿蘇や三原の山腹であつても、將たまた富士の御中道であつても、かうした涙ぐましい懺悔の白衣姿は靈世界の國々でなければ見られない情景である。ボヘミヤより、チロールより一途にローマのヴアチカン宮を指して忍從の旅に上る人の心持ちも、ルードの靈水を求めてアラビアの砂漠を彷徨したら若い母子の心境も、六十六部に姿を窶して菩提と冥福とを祈る世捨人の心境もそこに東西の別がある筈はない。

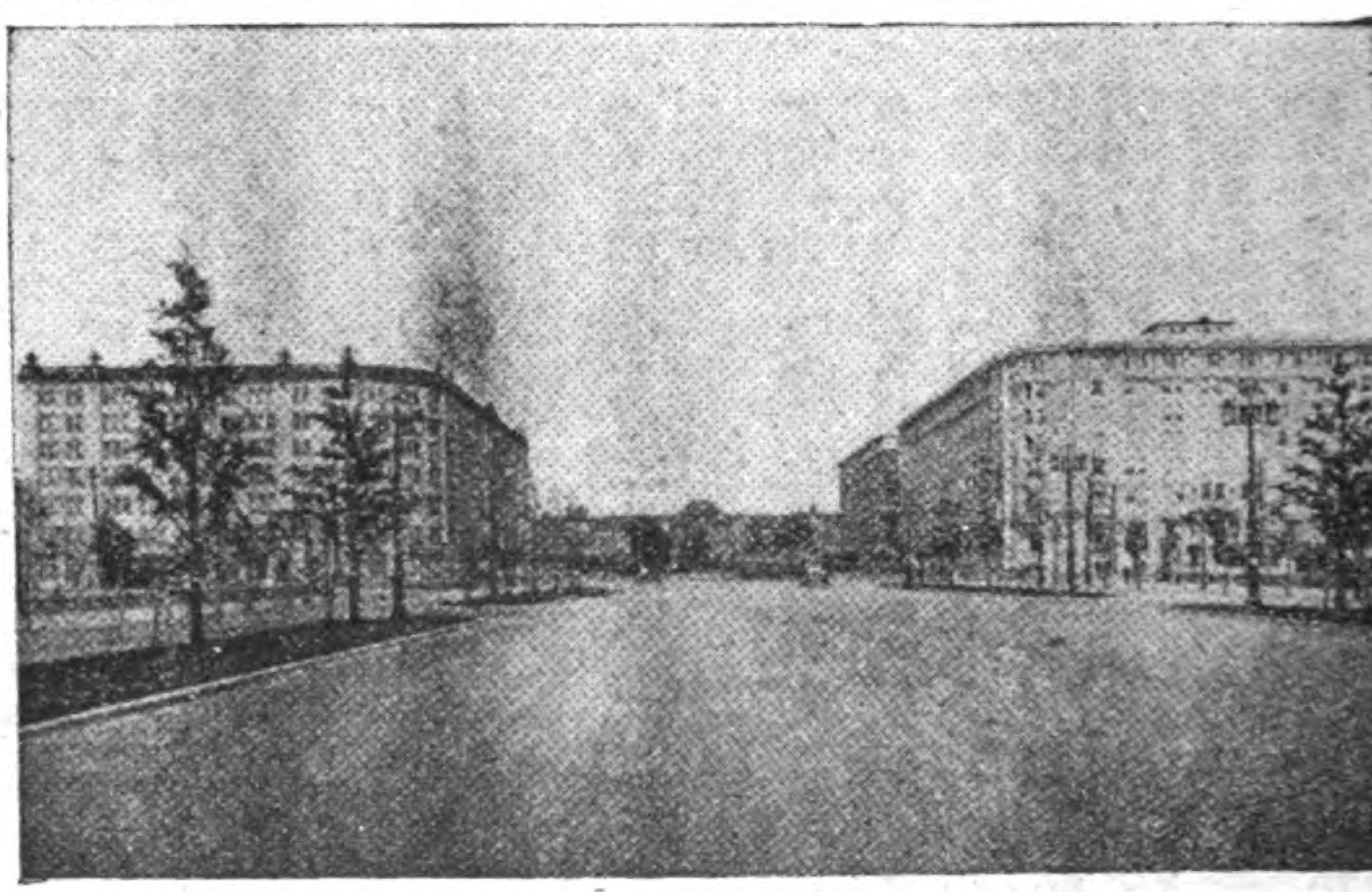
然かもかうした流浪の旅路に上る者の荒野を往くに唯一つの目印しとなつたものはそこに立てられた標木の一列であつた。森を行けば枝を折つて枝折りとし、河を渡れば轉石を並べて飛石道とし、辻には標石あり、山には目標樹ありとするも、然し一眸際涯のない砂漠、砂原、熔岩の廣野を横ぎる時にはどうしてもそこに標柱となる一列のマークがなければならぬ。踏しめた道の跡は吹き捲くる砂風に蔽はれて立どころに消え去るべく、一雨に流されて再び新しき處女地の砂に踏み出さなければならぬ、かくて風に耐へ、雨に沐し、無言の先達となつて忍從の心を信仰の彼岸に傳へてくれるこの標木の一列こそ近代道路樹の祖先をなす遺物である。道路あつての並木ではなくて、並木あつての道路となる。然しもかくして標木は次第に第一期の道路樹に植ゑかへられる、ポプラ、カタルパ、アカシアは早期の樹種として先づ選ばれたのであつた。かやうにして並木に導かるゝまゝに來往漸く繁くなり、信仰の道は國防の道となり、政治の道となり、產業の道となり、田園の道路樹は國道の道路樹に代り、終に都市に小自然を導き入れる動機となつて茲に街路樹の出現を見るまでに進んで來たのである。

殊に古代の支那はその都市蜿蜒たる城壁を以て繞らされ、その內に井然たる區劃を施し之れを點綴するに楊柳桃李の類を以てした。長安、洛陽の都何れも花としては桃李を植ゑ、水邊街角に楊柳を植ゑたのである。就中

長安の都は桃に適して居たと見える、貞元二十一年劉禹錫貶せられて朗州司馬となり居ること十年にして召還された時その以前見るを得ざりし桃樹の新植されたのを觀て「紫陌の紅塵面を拂うて來る、人として花を看て回るを道はざるものなし、玄都觀裏桃千樹、盡く是れ劉郎去後の栽」と詠じて居る。白樂天は『花枝缺くる處靑樓開く艷歌一曲酒一盃』と陶然とした氣持ちを歌つて居る。

都巷の楊柳を詠じた文獻はいくらでもある。「遺却す珊瑚の鞭、白馬驕つて行かず、章臺楊柳を折る、春日路傍の情」これは少年行として人口に膾炙するもの、陌頭の楊柳は亦よく詠ぜられる。「陌頭楊柳の枝、已に被ひて春風吹く」と亦李太白は「昨夜東風武陽に入り、陌頭の楊柳黃金の色」と歌つて居る。

水邊道路の楊柳は支那都市村巷の景觀である。「柳下に舟を艤し花間に馬を走らす、觀者の趣、個中に倍す」花によりて帽を整へ柳を借りて船を維ぐ」と云ふ氣分はよくこの情景を髣髴せしめる。この花柳の巷に酒を呼び、鳥を迎へ、友を招いて春の怡樂にひたる所に都巷の内と雖も支那大自然かふるやうだ。かくの如くにして「村花と路柳とは遊子衣上の塵、山霧と江雲とは行李擔頭の色」といふやうな秀麗な句に見る文章上の道路樹木觀が出來て來る。



東京驛前大通り

廟や寺院の門の内外の路の兩側に柏樹を植ゑ列べたものこれを樾といふ、樾は互に兩側の樹木が枝を交錯して來る態に卽ち枝が相互に飛び越える意を示したる者ならんと云ふ。林樾といふ字があるが蓋し今日我々の考へて居る植樹帶に相當するものであらうと思ふ。

路巷に植ゑた並木の記事は相當にもあるが地方國道に栽植したるものの記載は少い、亦文章の上に假令ありとするも實際には極めて少ない『山徑幽深にして十里の長松路に引く』といつたやうな句は多くはない。

自然美を謳歌したものとして風景美の研究者の好んで讀むべきものに阿彌陀經がある、その中に「舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹」といふ一節があつて極樂堂塔のほとり種々な珍木を植ゑつらねた樣が髣髴とする、さうして「風吹動諸寶行樹」と述べて極樂淨土の樣がありくと眼前に展開するやうに見える。

我國の道路樹木は都市に始まらず海道に始まつて居る。即ち「類聚三代格」に曰く

淳仁天皇天平寶字三年六月二十二日乾政官符

應畿内七道諸國驛路兩邊遍種菓樹事

右東大寺普照法師奏狀偁道路百姓來去不絶樹在其傍足息疲乏夏則就蔭避熱飢則摘子噉之伏願城外道路兩邊栽種菓子樹木者奉勅依奏

嵯峨天皇弘仁十二年四月二十一日太政官符

應禁制所損路邊樹木事

右得大和國解偁道邊之木夏季蔭爲休息處秋結實民得食而威頑民徒代損去來之輩益失便宜望請特加禁制矣令更然者依請

かくの如く路傍樹として植ゑたものは果實を有するものであつた。然もその種類の如きは今日明ではないが、現在に於ても外國の都市に於て果實を生ずる樹種を並木に用いて居るがまづ熱帶を除いては多くは堅いか、澁いか、一寸之れを口にする氣のないものが多い。中々に道傍の樹木に甘美な果實が生じて居るのがいつまでも保存されるやうなことは熱帶や寒帶地方の都市に於ては望み得ないことである。熱帶の如く又山間僻地の如く、その果實に豐富であるか、又物珍らしくなく人口の少い地方ではかくの如き園道樹も成立し得る。されば紀元四世紀にギリシア教會の長老聖ジオン・クリソストムは「路傍に立つ樹木の實は熟するまで保つこと難し」と道破してこれが格言にまでなつた事實を否定することは出來ない。

萬葉集卷二には「たちばなのかげふむ路のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて」といふのがあるが井上通泰氏はこの「たちばな」は道の並木であると解釋して居る。筆者も同感である。「たちばな」の並木なんて何と風流ではあるまいか、然しこれもそう大した大道路のものではなく、かの雍陶の名高い「城西友人の別墅を訪ふ」の詩の轉結である「村園門巷多く相似たり、處々春風枳殼の花」の程度のカラタチの並木位であつたやうな氣がする。

萬葉集卷十九に「春の日にはれる柳を取持ちて見れば都の大路おもほゆ」といふのがある、當時早くも都の大路には柳を植ゑてあつた、催馬樂の歌に大路に沿ひてのぼれる青柳が花やあをやきしたひを見れば今さかりなりやとあるは平安京の大路であらう、はれる柳とは芽の出でたる意である、所謂支那の柳眠である、「風は柳眠を開き、露は桃腮に浥ぎ、黄鶯は春を呼び、青鳥は雨を送る」の秀句あり、新緑期を彩飾する。ありし日の平安京の柳を偲ぶ時我々は京都府廳の前に恐らくは今頃柳眠雨に濕へるであらうあの柳の並木がよりよくいつまでも保存されてあらんことに愛樹の心をよせる。

かくして海道の並木は織田、豐臣の時代に其の歴史を殘して居る。江戸時代に及ぶに從つて我國が世界に誇るべかりし幾多の並木の伐採せられた記錄を讀むのは傷心に耐へない。

それでも板倉勝重の植栽にかゝると傳ふる山城加茂の堤、明智光秀の植栽と傳ふ丹波龜岡の並木、天正二年築造の熊谷堤とその前よりあつた櫻の並木、松平正綱寄進の日光杉並

例幣使街道の杉並木、東海道の松並木、慶長六年の植栽、近江なる粟津縄手の松並木、淡路街道の松並木、武藏の自然を飾る馬場大門の欅並木、何れか懐古して今昔の感深からざるものがあらう。殊に日光の杉並木の如き、社殿でこそあれ日向國狭野神社の杉並木の如き、最早や世界的に聲明を馳するものを見るに拘らず、今日それ等の手入管理の方法は間然することなしといへやうか。來遊する外人より『日本には並べられた樹はあるも並木なし』と暗にこの自然物への無關心を非難された事實を聞き流してよからうか。都市の小並木さへも嘗つては町人の義務として手入保護を講ぜられたことがあつた。明治十二年五月の違式詿違條例追加街路取締規則の中には簡にして明、率直にこの規定がのつて居る。國民は均しくこの偉大なる天然記念物としての國道並木に心よりの尊敬と溢れるばかりの熱愛とこみあげて來る撫育の意氣を示したいものである。

我々は茲に眼を轉じて世界の並木を大觀するの順序となつた、然も彼の世界名鑑の一つとして夙に世界の津々浦々にまでも名の知られて居るあのアブニュー・ミドルハルニスの並木の繪があることは如何許り心强からうか。この繪こそウエストケルクホーフの落葉に静かに眠つて居るマインデルト・ホベマの傑作である。オランダが素通りの旅客にさへ明なる程に並木（ニレ殊に多し）の多い國であることもこれで頷れやう、我國の松並木を描いて名高かつた廣重と比べられるか。

そのニレこそ筆者の選んだ世界の五大並木樹種の一つである。楡の都ニューヘブンは正しく我が北都札幌を聯想せしめる、楡はアメリカの都市に代表とされる道路樹木である。その扶疎たる夏の新緑の姿は正しく青春期の我が葉櫻の形態を持つて居る。壯大なるシカゴのミッドウエーの五列の楡樹の如き百年後の雄大さが想像される。

楡に次ではプラタヌスである。これも種類はいくつかあるが全米の都市を通じてニレと共に最も多く用ゐられる樹種である。然も高原にも水邊にも原野にも野生せる姿が多いので都鄙交々この姿を觀賞し得る。プラタヌスは何となくアメリカの國民性を代表せるかの如き氣持がある。我國より渡米したイテフが國都ワシントンの主要道路樹木となり盛んに先住ポプラを驅逐せるが如き亦一興である。

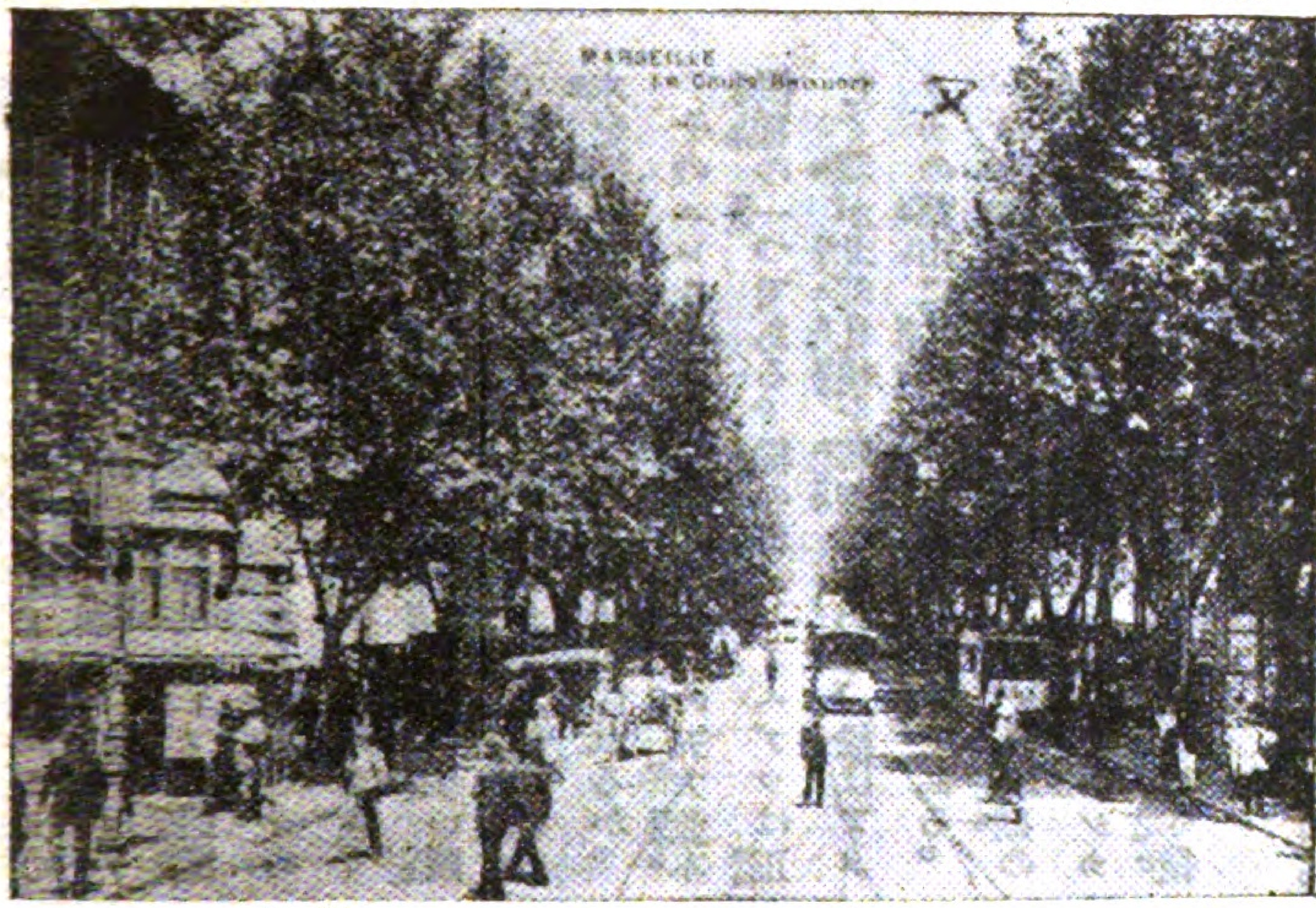
我國でこそその大木を見ることが稀であるが彼のナポレオン一世の居城フォンテンブローに通ずるフランスの街道の如き合抱以上の大樹を以て見事なる植樹帶をなし一見我が日光の杉並木に聯想が及ぶ。

海を渡つて濠大陸に移ればここは道路樹木としては新大陸に見るを得ない巨幹老木が仰がれる、然も巍然として各々その歴史に輝くのである。

近世プロシアを大成したフレデリック大王は十七世紀にベルリンの市街を統制し、スプレーの河畔まで擴がつて居た市外林の拓かれたあとにボダイジュの並木を二列に植ゑたのであつた。この兩側の並木は次第に生長して遂にこれを中心としてウンテルンリンデンと

呼ばれる近世街路は出來上つたのであつた、即ちボダイジュのこの種類（リンデン）こそ世界に於ける重要道路樹木の種類となつた、このリンデン街はベルリン目拔きの街路で幅員九十八呎、二列に植ゑられ、今は處々マロニエを交ぜる、長さブランデンブルグ凱旋門よりフレデリック大王像まで三分の二哩、この街路樹の繁生狀態としては決して代表的のものとは云へないが、名稱の因つて生じた來歷の發祥地として有名である。リンデンは獨逸の片田舍、瑞西諸都市の到る所にありその葉冠に陰を宿して道行く人の慰となる。

第四の樹種はマロニエである、即ちトチノキである、我が東京の櫻田門外官衙道路の兩側のそれである。これも歐洲諸都市に至る所見られる樹種であるが殊にフランスの諸都市、就中パリのそれが餘りにも有名である。この樹下こそ戀をささやくにふさはしく、涼を納るるもよく、思索に助けとなるにもよい、チャンチャック・ルーソーならずともこの樹下に愛人と手をとり、チャールス・ダーウインならずともこの樹下に思索の緖をほごしたいものだ。


マルセイユ　ベルサンス通り

溫帶都市を一巡して樹木の記載は熱帶に及ぶ、こゝこそは眞に樹木の天國、道路樹木も熱帶だけは恐らく眞の樂園であらう、雨露の惠しげく、愛の日影は強くさし添ひ、人少く害少し、熱帶道路樹種は人各々差別をつけてその愛憎を語るであらう、然し私はやはり椰子の類を以て熱帶道路樹の王者としたい、素より色美しいものを求めれば緋に燃える鳳凰木あり、黃金をあざむくゴールデンシャワーの如きあると云ふもその雄大さに於て矢張り椰子の各種が望ましき路傍の武者立である。

以上道路樹木はこゝに輪廓だけはその大觀を盡くしたつもりである、即ち標木より發達した早期の並木としてポプラの如きものより次第に一列のものとなり數列に及び、或は田園より都市に及び、大國道の道路並木とまで進んで來た。然も道路樹木の發達はこれのみに止まらない、次でその集團は一つは道路公園式に發達し、他は小公園式のものとなり地方鄕黨の社交休養等より見たる中心地に發展するものである。獨逸に於けるハインの發達、英國に於けるコンモンの發達何れもこの街路樹の思想の延長を否定しないわけにはい

かない。獨逸にはアレーバウムと云ふ語がある、道路に植ゑた樹木といふ意ではなく、即ちストリートツリーの意ではなく道路に植ゑらるべき特性を有する樹種である。宛もラバーズレーンが戀人と共に歩む道でなくして、共に歩むにふさはしき路の意でもあると同じ。かくして次第に始めは無言の東道であつた街路樹が、夜間に於ける無言の巡査と譬へられる街燈を誘つて細長かりし體軀は次第に幅を増して茲に道路公園の第一歩へと變形して來る。又は公園道とも云ふべき形態に變じて來るのである、前者は純然たる道路であつて公園の機能を帶ぶるもの、後者は公園にして然も道路の目的を達するもの、然も外觀は少しも渝はない。かくの如き公園の中間物が出來上る、さうしてこの稍細長い、比較的短い綠地は都市の中樞を帶狀に走つて行くうちに沿道住民の爲めに、又自動車を驅つて休養をとるものゝ爲めに百般の自由空地としての利益を惜しげもなく與へてくれる。さうしていつか公園への連絡の途中そこに地形上、或は土地買收上止むを得ず若しくは故意にも、細長い姿は曲り角や交叉路や記念碑や海岸や橋梁にゆき當つてそこに一部分に膨みをもつやうになり、その地區にふさはしい、小な公園が出來る、又かつてあつた何かの空地と連絡する結果小な除地式の公園が出來る、近所の子供が遊びに來る、さゝやかな花壇、植込が出來るやうになり、後には細長かつた道路ときり放されてもそこに尙ほかつ小な自然の姿は都市の中に三角州のやうに殘されてしまふ。人の潮流と車の激流はそれを除けて都心にどん〳〵と流れて行くのにこゝばかりは安全な地帶としていつまでも樹林に圍まれて近所の人々の天國のやうに保護されて行く、かうして發達してきた小公園も亦公園發達史中の一つの種類に數へられるもので立派に道路樹木が導いてくれた功績の一つと認められる。

都市のうちには小公園のみではない、更に大きな隣保利用の近隣公園もあれば、運動專門の運動公園もあり、動植物園を中心とした教化公園もあれば、社寺を中心とした境内地の利用準公園もあるべく、郊外に出でれば、やがて大公園の工事場にも行き當るであらう。然もその發達の根源には道路に對するささやかなる注意と並木の如き小自然に向けられたる天然愛護の思想が影響して居るのである。バイブルは我等に教へて曰く「不注意なる罪人は道路を修理せざれば地獄に陷ん」と、せめては都市を走る道路をして我等の體内に流るる脈管の思あらしめたいものだ。

（四、五、五）

# 太平洋に於ける平和の「軍備」

高木八尺

○

「力と義とが世界を支配す、義の準備成る迄は力の世なり」と昔フランスの哲人が言つてから幾百年を經ても、正義の準備整つたとして世を力の支配から解放する日は、中々來た樣にも見えない。人類社會の始まつて以來原始生活の鬪爭より現代の戰爭に至る迄、形こそ種々なれ戰爭と云ふものゝ絕えたことはない。近世國家の發生以後戰爭は所謂「國家の政策遂行の具」となり、(文明諸國は成る程奴隸制を廢止し、自治を發達せしめたが)、今尙國際關係に於ては『力の審判』に依る紛爭の解決の正當なることを疑ふ者は稀である。殊に我國に於て然るのか、「不戰條約」の議論は如何に喧ましくとも、眞に『不戰』の實質を論じ、國際平和と「戰爭の消滅」の爲めに深刻な叫聲を擧げる人を聞かなかつた。帝國主義的傾向はさることながら、其の理由の一半は、恐らくは多數の人々の間に存する所謂ブルジョアの平和論に對する白眼視と冷淡の態度であつたに相違ない。多くの優れたる頭腦は獨斷して云ふ、平和は現存社會組織と本質的に相容れず、本を改めずんば一切は無益だと。

○

乍然、問題はしかく單純であり吾人の閑却輕視を許す性質のものであらうか。「戰爭か平和か」の問題は、今日の人類に提出され居る最も嚴粛な又現實直接な質問なのではあるまいか？

過去一世紀間に起つた科學の進步、諸機械の發明、産業の革變發達は、人類の生活にショットウェル教授の所謂「世界史上の最大の革命」を齎した。世界諸國の國際生活の相依關係は急速に密接交錯の度を加へた。過般我が海軍航空隊の二艇が南洋への往復二千五百海里を非常時間に成し遂げた壯擧は(無論其背後に血のにじむ樣な犧牲と獻身の行爲の存することを忘るべきでないが)當に上記の意味に於ける時代の進步を表徵する目醒しい代表的の一事件であつたと云へる。科學と機械とは、空間と時間とを征服して、幾千年の間人類を拘束せし反覆服役の鐵則を破り、革進と飛躍の希望を供し、世界をして獲得の時代より協調創造の時代に進ましめんとする。

此の趨向を扶けたものは逆說の如くなれど一面には戰爭其ものゝ進化であつた。今日の戰爭は、單に絕大の破壞力を發達せしめたに止らず、又同時に一國にとりては國內の民力

と資源との總動員又全體的提供の要求であり、加ふるに世界の國際生活にとりては萬國に波及する攪亂騷擾である。捕てゝ加へて戰爭の手段は結局に其目的を達し能はず、戰勝國と雖戰敗國と共に破壞と疲弊に苦しむの免れ難き事情が明となつた。世界大戰は（假令直ちに「戰爭を絕滅する爲めの戰爭」たり得ず又假令「デモクラシーの爲めに世界を安全にする」こと能はざりしとは云へ）如上の事實を痛切に世界の諸民の頭にたゝき込み燒き附けた點に於て深甚の重要義を持つた。誠にノーマン・エンヂェルの叫んだ「大なる幻想」の禍害は如實に證明されたのである。

斯の如き事實と經驗に基いて國際聯盟が生れ、ロカルノ諸條約が生れた。而して又「不戰條約」の議が起つた。かくて人類は其の發達史上に曾て見ざる一大轉向を試みんとして居ると云はれる。

○

「不戰條約」の前身である「恒久平和條約案」を『太平洋のロカルノ』と稱して、起草者ショットウェル博士が親しくハワイに於ける『太平洋問題調査會』の國際會議に提出し、日本代表の意向を問ふたのは、一昨年の夏であつた。其後滿二年にして右ショットウェル案の一半を爲す「政策の具としての戰爭の排棄」の宣明が「不戰條約」によりて將に成し遂げられんとして居る。而して今秋京都に開かるゝ右「調査會」Institute of Pacific Relations の第三回國際會議には、恐らくショットウェルは再び來つて、彼の恒久平和案の後半部を爲す「仲裁と調停」を中心とする國際紛爭平和的解決の機構の建設の目的の爲めに貢獻努力せんと期するのであらう。彼と協力してパリ會議以來令名あるハンター・ミラーが會議に對する提案の準備に盡し居れりと聞けば、其の用意の程も窺はれる。

顧れば一昨年の調査會（インスチチユト）の大會は誠に多事であつた。太平洋問題に關係深き數ヶ國の民間代表者が、東京、上海、紐育、桑港、ロンドン、シドニー、等の各地より布哇に集まり、「人口食糧問題」、「支那問題」、「太平洋に於ける國際機關の問題」等を中心として、三週間を討議に送つた。各方面の代表者と專門家を含む百五十名の出席會員は、相異れる國と人種と文明とのおのづからなる代表者であつたが、夫々最も大膽直截に最も坦懷に意見を開陳し交換して、所謂「圓卓」の方法に依る討議——寧ろ懇談的なる會議を進めたのであつた。會議の後何千哩を隔つる人々の參集合議の勞が十二分に報ひられたと思はぬ者はなかつた。

會議の大切な一事項は支那問題であり、又之に際してなされた中華民國の蹶勃たる國民的要望の力強い披瀝であつた。不平等條約撤廢の問題は、一面に於て高所よりするステーツマンシップの問題であると共に、他面に於ては「如何なる方法によつて」の問題を伴ふ現實性あること言を俟たない。此の重要な問題は又今秋の大會に於て重ねて各國會員の前に置かれる譯である。

支那問題に關聯して起つた著しい出來事として、會議に於ける討議三日の後、初め正

衝突を豫想された英支兩國の代表者の間に却つて接近協調の傾向が顯著となつた事を擧げたい。英國側の中心人物（前印度國民議會議長）サ・フレデリック・ホワイトは會議後俄に支那視察を決し、爾來一兩度の歸英を除いては引續き支那に滯在してゐるが、其後英國の對支政策の一新を見しこと、更に最近同氏の國民政府顧問として事業が始まらんとして居ることは、今は周知の事實である。

○

「不戰條約」と云ひ「支那關係」と云ひ「太平洋問題調査會」は、結果に於てはかなり現實の政治問題に緣の近い仕事に觸れて來た。抑々此の調査會の成立が、かの所謂排日移民法に基ける動搖を直接の機會としたことも事實であつて、從つて一九二五年に開かれた最初の會議は之を移民問題の會議と稱するも過言に非るべく、又一昨年の會議と雖學術的なる人口食糧問題の形に於て我が國の重要問題が明確に關係諸國の識者に對して陳述せられしことも事實である。乍然之等の事實によつてインスティテュートが目前現實の政治問題に就てのみ其の全注意を傾注するものと解すれば甚だしく誤る。本來インスティテュートは二面の任務を企てゝ居る。一は各國に於ける「太平洋諸問題」の間斷なき調査研究である。卽常設の機關による精確なる事實の發見である。二は各國會員間の聯絡による情報の交換と、殊に二年毎に開く大會に於ける諸問題の討議による重要問題の了解、及之に基く國際關係の改善である。會の組織としては布哇に「中央事務局」を存し、各國に夫々「調査會」の設立あらしめ、最高機關としては各國理事長を以て組織する「中央理事會」を置く。我が國に於ける『太平洋問題調査會』も、此故に、確實なる事實の調査機關たることを當面の目標として其の實を果さんと企圖するのである。されば從來の大會での我が代表の態度は、移民問題についても又人口食糧問題についても、根柢に於て科學的研究的なりし事に變りはなかつた。

○

今秋京都の大會の重要問題の一は恐らく滿洲問題であらう。會議の開催地が我國である丈けに、日本側として各方面の見界の有力なる代辯者を得るに便なる點は勿論重要な一面には相違ないが、調査會としては其の本來の使命を重んじて精確なる事實の調査と其の知識に基く協調の爲にする努力を忘るべきでないと思ふ。

先年マセドニアに於ける人口中の人種別が國際の爭點となつた時、相爭ふ三國の中、ブルガリアの學者達は調査の結果ブルガリア人の數は百十萬、セルビア人の數は僅に七百と報告したのに對し、セルビア政府の調査によればブルガリア人五萬七千、セルビア人二百萬であり、更に又希臘側の調査によればセルビア人は一人もなしとされたと云ふ。獨逸の評論家は之を酷評して「新興國に於て指導者が愛國的熱心を要求するに當り、其の存在を證明する敎授連を見出す事は易い」と云つて居るが、若し之をしも事實なりとすれば、此の如きは人類の自己に對する侮辱であり、又

「調査會」の使命に對する激しき挑戰であるとせざるを得ない。

○

一昨年大會を終るに當り議長の役を務めし米國のウイルバー博士（現内務卿）は、會議の總評を試み、彼にとつて最も大なる發見は、太平洋方面に於ける國際紛爭處理の機關の不備缺陷といふ事であつたとし、會議が現存の國際關係の機構の下に支那の諸問題を取扱はんとするに當り、如何に無力と困難を感じたるかを例示して、「近代式大ビルデングの火災に際し、之を消し止めんとして手桶に水を入れて集り來れる老人の一團」の感を禁じなかつたと云つた。太平洋の沿岸に現在に火災の危險なしと誰が保障し得よう。一面には禍根を斷つて炎燒を未發に防ぎ、一面には消火設備の完成を企てゝ事件の鎭靜の道を開き平和解決の機構を樹立せんとするのが、第三回太平洋問題調査會大會の眼目と云へると思ふ。

「義の準備成る迄は力の世なり」といふ。正義と平和とは準備なしには來ない。平和を贏ち得んとすれば先づ其の代價を支拂ふ用意がなければならぬ。正義と平和の標幟を懸げて、人々に、果して血を流して悔まざる程の用意があらうか。例へば經濟的帝國主義に伴ふ既得權の問題に就て眞に根本的の分別と覺悟とが存するか。一方に平和主義者が安樂椅子により紅茶を啜りつゝ無代價の理想論を續ける限り、戰爭は續く。曾て侵略と獲得の軍備の爲めに智力を傾け財力を盡し一身をも犧牲にしてためらふ所なかつた人類は、今や新しき光明を認め、平和の爲めにする軍備（プリペアドネス）の爲めに、臥薪嘗膽すべき日が來たのではなからうか。殊に東西兩文明の接觸線に立ち、歐亞兩人種の前衞線に身を置く今日の我が國民が、祖國と將來の同胞の爲めに、三思すべき秋が來たのではなからうか。（四、六、七、）

# 自傳的に見た日本社會主義運動史（六）

堺利彦

目次



## 一 社會民主黨禁止の後

『社會民主黨は唯だ其の宣言を天下に發表せしのみにて滅亡した』が『社會は青天に霹靂を聞けるが如く、驚きの目を瞠いて之を迎へた。』その『社會民主黨が禁止されてから一個月あまりの後、萬朝報を中心として「理想團」が組織された。』我々は今漸く、その理想團について語るべき順序に到達した。

萬朝報——黒岩周六——内村鑑三——社會主義——理想團・こう書き並べただけでも、當時の空氣を呼吸した人々に取つては、實に非常な興味——極めて複雜な、デリケートな、多面的な、意味の深い、含蓄の多い、大なる希望と大なる疑惧とを同時に併せ有する、一種特別の感情、——それを今一つ換言すれば、頼もしさと、あぶなかしさとが堅くナヒ合はされた所の、そして兎にかく、今日から見れば、たまらぬほど懐かしい、然しながら同時に矢張り一面の失望を伴ふ所の、夢を思ひ出して樂しむような心持が、胸の奥からムク／＼と湧き起つて來ることを覺えるに相違ない。私は實に今、そうした夢まぼろしの間に立つて、周圍の雲や霧を半ばその儘に、半ば今日の光を透して、畫がいて見るつもりである。

明治三十四年五月二十日の萬朝報を見ると、その第一面の『言論』欄に、『新政黨出づ』と題する論文（大要前掲）があり、それに續いて社會民主黨の宣言綱領の大部分が掲載されて居る。翌廿一日の同紙第

一面には、二段半ばかりの抹殺の跡――慘憺の感じを與へられる、謂はゆる下駄の跡――がある。前日の禁止の命令の爲、宣言綱領の續きが掲載され得なかつたのである。

越えて廿四日の紙上に、『社會黨鎭壓策、幸德生』と題する『言論』がある。『今日に於いて鎭壓の目的を達せんと欲せば、……社會主義者を悉く國外に放逐し、政治、經濟、倫理、宗教、哲學の著者を燒盡し、且つ今後是等著書の輸入を禁止せざる可らず。(内務大臣)末松君にして能く此方法を決行するの勇氣と決斷と手腕とを有するに於ては、或は末松君の一代位ゐは鎭壓の效を奏するを得ん』

同日の『机の塵』には次の如き記事がある。『社會民主黨の禁止に就ては、邦字新聞はブル〳〵もので、同黨を攻撃するの外は、殆んど沈默を守つて居るが、流石に英字新聞中には同黨に同情を表してゐる者が多い△先日の萬朝報に掲げた「新政黨出づ」と題した論文が、果して安寧秩序に妨害があるとすれば、英字新聞の論調は更に大に妨害のやうに、我等には見受けられる△神戸クロニクルや横濱ヘラルドなどは、無論同黨の禁止は内相の權力内には相違ないが、アンナ命令は實際には殆ど無効であるとまで論じて居る』

廿六日の同紙には河上翠陵の『獨逸政史の一節(末松内相の一考を煩す)』と題した『言論』がある。矢張り、社會黨の鎭壓され得るものでない事を論じて居る。三十日には秋水の『日本の民主々義』がある。民主々義が結局、社會主義に歸せねばならぬ事を說いて居る。六月三日の『机の塵』には、次の如く書いてある。『日々新聞は十日も前に禁止された社會黨を今になつて攻撃しはじめ、三日も續けて長い論文を書いた』『獨逸社會民主黨の根據は主にハンブルクやブレーメンだから獨逸帝國の臣民ではない、なぞは如何にも苦しい口實だ、獨逸社會民主黨は公然堂々乎として現に帝國議會に數十の議席を占めて居るではないか』

四日の『言論』には『爲政者と社會的運動』がある。『日本の社會運動に志すの士は、斷じて彼等(無政府黨、虚無黨)の如き短慮に倣はざるべきなり、如何に迫害せらるゝも、幾度鐵窓の中に投ぜらるゝも、飽くまで平和の手段を取り、飽くまでも着實の步調を取り、以て徐に世人の疑惑誤解を釋くことを努めざるべからず、斯くの如くにして始めて能く社會改良の事を企つるを得べきなり。』これの筆者は多分、河上君であつたらうと思ふ。

七日の『言論』『暴行者に對する眞の政策』は、大なる注目に値する。署名はないが、明かに黑岩君の筆である。『爰に四五の有志、社會民主主義の爲に一の黨を作り、其綱領を發表するや、……吾人は内務省の此の所業の、殆んど言論の自由と結社の自由とに對する一の暴行たるを認めざる能はず』『結黨者の一人が吾人に寄せたる私書』には『小生等は俗吏を敵手にして犬死する程の愚に非ざるも、……此儘泣き寢入るは天下同志に對し愧づ可きの極に候て髀肉嘆て堪へ難く候へ共、憤慨の餘り未だ策の出づる所を知らず候、如何の運動方

法が小生等の目的を達するに便なる可きか、高教を賜りたく候」
とあり、「是れを讀む者、誰か結黨者の窮狀を察せざらん」
「然れども此の「ムチヤ」なる「言語に絶したる」暴行者と爭ふは頗に所謂「犬死」のみ「今日の問題は「如何にして此の暴行者の下に於いて暴行を受けざる社會黨を作る可きや」に在らずして「此暴行を制し得る憲法的の公明なる政黨を作る」にあり、先づ暴行者を制肘する政黨を作り、言論結社といふが如き、憲法の自由を恢復したる後ならでは社會黨を作るに由なし「吾人は社會黨と全然主義を同じくする者には非ず、從つて社會黨の爲に之を言ふに非ず、唯だ我國の現在の爲に、將來の爲に、憲法の爲に、百般の公義的事業の爲に、之を言ふ、先づ社會黨ならざる、公明の政黨を作れ、今の我國に暴行者ありて政黨なし、政黨を起して、今の政府と云ひ、今の政黨と云へる暴行者を取りしづめざれば、一切の事、河淸を待つが如けんのみ、此の暴行以外の政黨を作る有志者はなきか、有らば來れ、吾人進んで執鞭の勢に從はん、無くば請ふ隗より始めん哉」

この文中にある『結黨者の一人』は正に幸德であつた。幸德、黑岩、二人の間に種々の默契があり、諒解があり、多少の約諾があつた事は明瞭である。私（堺）は當時、この論文を讀んで、いよく黑岩がやりだすなと思つた。『執鞭の勢』と云ひ、『隗より始めん』と云ふ所に、大なる頼もしさを感じた。この論文には大見出しが使つてあつた。大見出しと云つても、二號活字に過ぎなかつたが、萬朝報が二號見出しを用いるのは極めて稀な場合であつた。

## 二　黑岩君と萬朝報の總勘定

我々はこゝで更に、當時の萬朝報の全體について簡單な概觀を試みる。

萬朝報は『新人物の採用に依つて』着々としてその『氣品を高め』つゝあつた。『曾ての惡辣が、今は峻烈として威嚴を持つ』て來た。『宗教界の奇傑』『内村鑑三氏が遂に呼び迎へられ』た。『社會改良の叫びが期せずして朝報社の内外に動いて居た。』『内村鑑三氏は一たび朝報社を離れたが、やがて『再來』した。『内村氏の個人的（宗教的）改良主義と、秋水等の（政治的）社會主義とは、明かな對立を爲して居た。』『然し又、内村氏の戰鬪的な所、一世を敵として戰はうとした所』に『兩者間の共通點』があつた。『朝報社に大なる機運が動きかけて居た。』『理想團の突然たる前影』が投げられて居た。『理想團の豫備的聲明』も發せられて居た。黑岩氏は『意氣大いに揚るものゝ如く』であつた。彼は年來の『嗜好に耽るの弊』を棄てゝ、今や『他の有用な事業』に向つて其の『精力』を加へんとして居るのであつた。

然し或人はそれを冷罵し嘲笑した。狼が法衣を纏ひかけて居る。『蝮の膽六』が『志士仁人』に化けかけて居ると。私の如き、大なるアコガレを以て萬朝報に入つた者すら、間もなくそこを『久戀の地に非ず』と云ひ出したり、時としては、『黑岩、士を遇するの道を知らず』な

どと日記に書いたりした。もちろん私は、結局のところ、『深く彼に嘱望し』『大なる頼もしさを感じた』のであつたが、それでも猶、心の底の底には、折々不安と疑問が起つて來る事を免れなかつた。

その頃、朝報社は三十間堀から弓町（今の處）に移轉した。當時としては、殊に汚ない事で有名だつた朝報社としては、それは大變な變化であり、進歩であつた。我々も可なり好い氣持になつて居た。黒岩君の得意想ふべしであつた。然しそれは、單なる輕い意味の得意ではなかつた。彼はこの移轉と同時に、彼の新たなる生活、新たなる運動、新たなる事業を始めようとして居るのであつた。

彼は社會民主黨禁止の後を承けて、既に『眞の政黨』『憲法的なる公明の政黨』の組織を唱道し、『隗より始めん』とさへ云ひ出したのである。然し彼はこの時、彼自身と、萬朝報その者とについて、社會公衆の面前に於いて、一應、充分なる、過去の總勘定を爲すの必要を感じたものと思はれる。

六月十九日から『新聞紙の道徳』と題する、（これも二號見出しの）長論文が連載された。『周六述』と署名してあつた。私はこゝにその大要を抄録して、その總勘定を檢査するの必要を感ずる。

## 三　利の新聞か、義の新聞か

（一）『利と義』この二つが『總ての人間の行を逼出する二大元動力』である。『新聞紙は利の爲の機關なる乎、將た義の爲め機關なる乎』十九日

（二）『大新聞』は『人を責』める『義の新聞』であり、小新聞は『人に媚』びる『利の新聞』である。以下『新聞紙墮落の歴史』を語る。（二十日）

（三）東京日々、郵便報知、朝野新聞、皆な同じく墮落した。時事の如きは元來『利に固着』した『拜金新聞』である。『大阪の新聞』亦然り。この『滔々たる流弊に抗せんとする者は無き乎』（廿一日）

（四）『利を計り、讀者に媚』ぶるの傾向は止むを得ずとしても、其間に於いて、『其の本來の性質が義に在ることを遺るゝ勿れ』謀利一方の商人の業に非ずして、志士仁人の業なることを記憶せよ』今や新聞界に『投機競爭』の流行がある。ロンドンでは『脫字搜索競爭』まで流行して居る。萬朝もそれを勸められたが、『山師の事』として斥けた。ツマリ、世間の新聞紙は、『富豪に對する身賣』『口留錢』を取るもの』など樣々である。そこで『疑問が起る』『新聞紙は到底、「利」一方、人に媚ぶる一方に非ざれば成立する能はざるか』（廿二日）

（五）星亨は利の代表者である。『彼の仆れたるは社會の「利」「義」の波動に關する何等かの消息に非ずとせんや』（廿三日）

（星は廿一日に、『教育界の惡魔』として、伊庭想太郎から刺殺された。この事については猶ほ少しく後に記す。）

（六）『利の成功が果して成功の名に値する成功なるやを危む』『新聞紙は到底第一流の成功者たること能はず』『單に商品を以て觀る大阪の

新聞紙と雖も、其の利の爲には多少尊敬の必要あるを認め、政論に人生に社會に、多少の抱負あり意見ある人を買入れて之を推戴……せんと勉むるに非ずや』

『人を責むる者は先づ己を責めざる可からず』『萬朝報は如何なる新聞紙ぞ』『請ふ吾人をして吾人の立つ所の地と、行くべき所の道とを明かにして、讀む人の判斷に供せしめよ』（廿四日）

（七）萬朝報は『惡事、惡德、强迫、取財、嫉妬、某々の機關』などといふ、種々樣々の『惡評』を蒙つて居る。然し萬朝報の如く『世間の批評を度外に措きたる者も稀ならん』『若し萬朝報を惡德の新聞とせば、彼は如何の抵抗にも拘はらず其の惡德を貫きて止まざる者なるべし』

『或程度までは、萬朝報は戰はんが爲に生れたり』『朝報は何の爭の爲に戰はんと欲するか、吾人自ら敢て義の爲めと云ふが如き崇高の性質有るには非ず、然れども斷じて利の爲には非ざるなり』

『彼が人の私身を抗擊したるの一事』『士君子の非難を受くと聞く』

『然れども朝報は曾つて「惡を責む」「惡を除く」と云ふより以外の心を以て人を責めたること無し』『有體に云ふ、吾人は惡人に對しては極端に無慈悲なり』『初は之を改めしめんと欲す、然れども到底其の改む可らざる迄に固結したる者を見るや、唯だ之を戮するを知りて宥すを知らず、此點に於て吾人には露ほども雅量なし、吾人若し不識庵其人の地に在りて機山の死を聞かば、箸を投じて泣くを爲さず、我れに敵したる者の相當の運命として天に謝せんのみ、若し此心は英雄の心にも非ず、又君子の心にも非ず、唯だ朝報の心のみ』（黒岩君は折々、會話中にも、文章中にも、極めて適切な英語を使ふ癖があつた。）

『然れども吾人豈、朝報の執り來りし旨義一切を擧げて盡く是なりと云はんや、今に至りて大に昨非を悟りたるを覺ゆるが如き箇所亦無きに非ず』『吾人は餘りに不平の人たるに過ぎたること是なり』『正直に、吾人は絶望の人たりしなり』『所謂先覺なる者の無信實、無精神、無爲、無識に絶望し、政治なる者の穢きに失望し、社會、風俗、交際の淺劣なるに絶望し、其の結果は先づ一切を罵倒し、破壞し、燒殺し盡すに非れば理想行はれずと爲したるなり』『朝報社同人は、皆年少氣鋭、其の病とする所は、書を讀むに過ぎて世間を知るに不足なりき、……俗世度し難きに絶望したるなり』

『吾人は新聞紙を以て今の政治の下に立てる者とは爲さゞりき』『吾は新聞紙に依りて吾が政治を行はんと欲したり』『此點に於て朝報は確に虛無黨、破壞黨、無政府黨たりしなり』『而も社中同人の外に事を共にする友もなく力を合すべき同志も無き者と信じたり』

『今にして之を觀るに、必ずしも同志なきに非ず、之を求むるを知らざりしのみ、必ずしも今の政治、今の社會の、獨り斯の如く理想に遠きに非ず』『社會を破壞するは社會を理想に接近せしむる所以に非ず』

『恕し得る限り其の病を恕して、而して理想を以て之を救ふこと、看護者が病者に對するが如く成らざる可らざるを知れり』

『萬朝報なる者の心事、明かに斯くの如し、是れ彼の新聞なる乎、私利の新聞なる乎、更に問ふ、新聞紙の道德を說き、同業者に義を以て責むるの資格あり耶』

『唯だ聊か吾人の意を强くするは、此新聞が、當然に彼の新聞の榮ゆべき如く榮え來りたる一事なり‥此の便宜は、……世人の信任なり、委托なり、吾人爲す無くして其委托と信托に背きて可ならんや』(廿五日)

## 四　修飾と强辯の解釋

私は、その當時、之を讀んで、修飾の跡が全く無いとは感じなかつた。今日は猶更である。然し今日でも、私は矢張り、之を讀み返した結果、むしろ黑岩君に對する同情が增すことを覺える。

この文章は根本に於いて率直なる告白である。同時に、將來に對する發奮であり、誓約であり、宣言である。私はこの文中に於いて、人を欺き、世を胡麻化さうとする、ズルイ僞善の氣を感じないで、むしろ只だ頼もしさを感じさせられる所の、强い自負心と批判力とを見た。

私は今、こゝに一つ思ひだす事がある。それは、私が黑岩君の下を離れてから後、何かの折々に、幾度も幾度も思ひだした事である。曾て黑岩君が私等に向つて、――『私等』といふ中には、內村さんもあり、秋水もあつたと思ふが、――次の如く語つた。平生から飾り多く新聞記事を書きなれたので、その技巧が自然、一種の癖になつて、自分の思ふ事を率直に有の儘に語らうとしても、ツイ知らず强辯に落入る點が少なくないと。

この『强辯』といふ言葉が、當時、黑岩君の口から出た其の儘であるか否かは、充分確かでないが、私がそんな意味に聞取つた事だけは眞實である。又この話が、右の『新聞紙の道德』の發表されたより以前の事であつたか、以後の事であつたかも明瞭でないが、ツイ前に私が『修飾の跡』と云つたのも、ツマリこの『强辯』の跡なのである。

そこで要するに私は、黑岩君の修飾と强辯を、當時も、その後も、多くの場合、善意に解釋して、精進努力の過程と見て居たのであるが、然し折々はそれが、事態の發展、感情の變化等につれて、その修飾を矢張り僞善と解し、その强辯を矢張り胡麻化しと解する心持にならざるを得ない場合もあつた。それらの事は段々後に記す。

## 五　星の死と黑岩の判決

星の死に對する萬朝報の態度は甚だ興味あるものであつた。『嗚呼星亨』彼の一死、萬事休す矣、吾人、豈、邇りて之を指摘して死屍に鞭つの冷酷に出づるに忍びんや‥暗殺は陰險怯懦の所爲也、嗚呼我國未だ斯くの如き蠻風を脫するに力らざる乎』

『彼の正面の敵手は、就中、『一識嘆筆を投じて機山の死を嘆惜したるの概あるべし』

右の筆者は誰(或は誰々)であつたか明瞭でないが批評の立場は寧ろ

ろ平凡であつた。次に左の意味の『暗殺論』が出た。明かに秋水の筆であつた。暗殺の『根本原因』は『社會が判斷と制裁の力を喪失せる』に在る。社會の『腐敗墮落を救治する』卽ち『今の(十三字削除)』より外に、暗殺を無くする方法はない。

所が、黑岩社長はおのづから別個の意見を持つて居た。彼は『利己代表者』の仆れたのを見て大なる勝利を感じた。惡人に對しては極端に無慈悲なる』『筆を投じて泣くを爲さず、我に敵したる者の相當の運命として天に謝せんのみ』と判決した。彼は後に『死屍に鞭うつの辯』を作り『吾人を以て星亨を觀るに、彼が廉恥に缺如たりしは爭ふ可からず』と斷じ、昂然として死屍に鞭うつ事を敢てした。彼は確かに一段高き立場に立つて居た。そして『此心は英雄の心』でも『君子の心』でもなく、『唯だ朝報の心』だと云つた。『朝報の心』は卽ち黑岩一人の自負心であつた。彼は矢張り社中を壓倒する力を持つて居た。

## 六　黑岩と内村

然らば當時、『内村さん』は一體どういふ風に『黑岩さん』を見て居たのであらうか。一體、どういふ風に『大阪の新聞紙と雖も、……抱負あり意見ある人を買入れて之を推戴』すると黑岩さんが云つた事は、矢張りそのまま、萬朝報と内村さんとの關係にも當てはまるのではないか。黑岩が内村を利用して居たのに過ぎないか。内村は知りつゝ利用されて居たのであるのか。それとも二人は相當に深く信じあひ、許しあつて居たのであるか。我々はそれを如何に觀察して居たのであるか。

それらの事は次號に於いて稍や委しく語る積りである。

七月二日、萬朝報の言論欄に『平和なる檄文』(黑岩周六述)といふ大見出しが現はれた。そしてそれに、『吾等と心を同じくする人は來れ、與に倶に社會救濟の爲めに理想團を作らん』といふ激語があつた。これが卽ち待ち設けられた『理想團』の發表であつた。

# プロレタリア詩人に就て

岩淵威夫

プロレタリア詩人が、被搾取階級の苦痛の活路を、未來の漠然たる期待の中に求めたり、或は悲觀的な絶望の怒號に又は壓迫者に對する單なる個人的なアナキスチックな呪詛に爆發させてゐた時代は過ぎた。現在のプロレタリア詩は、其處に幾多の誤謬はあれ、資本に對する組織的闘爭の必要や階級利害の衝突に闘し、又勞農大衆の威力と未來の勝利への確信と喜悦に向つて意識的に構成されてゐる。そして最近特に勞農大衆の闘爭の線に沿ふて進展しつゝあるプロレタリア詩は、階級對立の激化と共にその取材の範圍も廣汎化して來てゐる。では、最近のプロレタリア詩人にどう言ふ人がゐるか――紙數に限りがあるので詳論はさけその概略を紹介することゝする。

先づ『文藝戰線』に據る詩人で、階級現實を巧みに把握し、その表現に於て野性的感覺の新鮮さとメカニックの強固さを持つて、新しくプロレタリアの情調を出した詩人に武本龍夫がゐる。殊に『文戰』一月號所載の『レールに刻む生活のトン』の如き秀ぐれたものである。又、プロレタリア抒情詩人に高橋辰二がゐる。彼には未だ藝術至上的殘滓がないでもなかつた。併し『村よ、お前の求むる蕉へ』に於て、完全にそれを清算し新しい形式とリズムを以て農民に呼びかけてゐる。其他、米田曠、石井安一、古賀不美男、寺澤資郎、女性の特殊な感覺を以て日常闘爭を詩にもる伊藤花子など。併し、一般に未經驗の材料を再組織する場合に概念的になる缺點が尠くなかつたが、階級對立の尖鋭化された最近になつて、その闘爭と組織を、潑剌たる生活姿態を以て工場や街頭から唄ひ出す詩人が多くなつた。その代表的な者に、今村恒夫、堀ひで子、佐藤怨などがゐる。

文戰派の詩人が、その表現に於て藝術的であるが象徴的であるに反し、戰旗派は一般に敍事詩的であり説明的である。前者が未經驗の材料を詩に構成する場合概念的であるがリアルな敍事詩的形式をとり乍ら詩として一般に概念的であり説明に墮してさへゐるのが後者である。そして、こうした戰旗派の傾向の必然として、易々と取材を廣汎化してゐる。これは大いに希むべきではあるが、詩として失敗してゐるに於ては考ふべきである。プロレタリア詩の力は、その闘爭の尖鋭な内容と大衆に對する力強い藝術的影響の中にこそあるのだ。これはヒユマニズムの殘滓の影響と詩への要素を實生活から把握することなく机上にデッチ上げる所から來る。此處に中野重治の必然の沒落があると言へるし、又、上野壯夫のかの魅力あるテンポの速さや荒削のリズムも、畢竟こうした日本の階級現實から遊離してゐる故の賜である。この派に據る詩人は他に三好十郎、白須孝輔、森山啓、波田、仁木二郎、狹間二郎、西澤隆二、江森盛彌などがゐる。併し、最近になつて森山啓、白須孝輔を初め新しく擡頭して來た詩人は、戰旗の如上の傾向を着々清算しつゝある。例へば田木繁、小林剛夫等がそれで、殊に田木の『拷問に耐へる歌』の如き本年度初期の傑作詩として推賞に値する。又、あの眞正面からぶつかつて行く態度の上野壯夫（目下入獄中ときく）などは、現在の戰旗では將來期待していい才能ある詩人であろう。（一九二九、六、四）

# 詩（懸賞佳作）

## 山雀の言葉

林　蓉一郎

A

石楠の梢をとぶ微かな羽音・・・
彼女は侏儒のやうな濕地の茸を敲いて叢へ隱れる
誰かきて追ひかけてくれ
朝月のやうにうすれて行く散らし音の鳥を
夜がくれれば木の上の巣に
またひとり、おれはつめたい草を藉くのに

B

ある月夜、おれは椎の實のやうに谷間へ轉げ落ちた
そこでおれは青朽葉の一枚に
虹鱒のやうな食欲を感じた

小徑には病みほほけた松葉が積む
松葉は老耄の百面相である
彼等は占筮師のやうに碧天の星を當てる
・・・故い星曆を繰つて行く林間の音なき風
女よ、おれはそこで玉蟲の字韻を拾ひ
假名ばかりな君の稚い手紙を讀むのだ・・・

C

みどり葉が圍む谷あひの清冷な流に
星の掌がはつきりとみえる

若い楓が傘を水面に展いて青い手型を捺すのだ
……夜更けて水底へ沈む纎い指先を潜つて
いつぴきの魚は杳かに中天へ舞ひあがり
草の葉が編んだ魚籃の窗へ流れ星の帶を吹き叩く

D

曉ちかく、野葡萄を草屋根に載せて
ひとりの若い男が流を漕いですぎた…
岸では夜もすがら、貝のやうな皓歯の女が
熱てる片脛を濡らすのだ

# へんなのりて

古迫勇

これは奇妙な見送り人だ。

首のない畫家。
顋の干上つた詩人。
豚のやうに肥えたニヒリスト。
黑眼鏡をかけた宿なし。
營養の足りない子供をつれた狐のやうな女。
金がとれずに追ひかけまわしてゐる片眼の洋服屋。
脚の半分ない男。
みんな默つてすぱ／＼莨を吹かしてゐる。
秋風の立つプラツトホーム、
ベルが鳴る！
さあ大變！のりてがゐない。
汽車は動き出す。
洋服屋が慌てる。
見送り人は煙りのなかで嘘をした。

碇になつたおれの詩

おれはつかれてゐる。
むやみにつかれてゐる。
空をみてるとつかれてくる。
山をみてるとつかれてくる。
おれは一枚のよれ〳〵になつた莚となる。
人が笑ひながら踏んづけて行つた。
けものが吠えながら馳けて行つた。
ひた〳〵と潮がその上を浸して行つた。
おれは氣が遠くなりながらじつと笑つてゐた。

## 赤い蕈茸の家

森の奥の赤い蕈茸の家に
銀のやうな鬚をはやしたよぼ〳〵の爺さんが
鍬をかついで花園の手入れをしてゐる。
僕を見るときまつてお出でお出でをする。
やさしく笑つていつも手招きするのだが
つひ一度も行つた事がない。
秋にでもなつて
ぽか〳〵と暖かな日和がつゞいたら
一度行つてみやうと思つてゐる。

## 用　事

角の花屋でしばらく待つてゐてくれ。
なにかみづ〳〵しい花でも探して。
僕はその細い露地を曲つて
急いで用をたしてくる
時雨れぬうちにちよつと用をたしてくる。

## 猫の尻つ尾

空腹をかゝへて
一日中町をうろついて
かへつてきたが、
夕食の膳に
猫のしつぽがのつてゐる。

空腹と猫のしつぽに
あゝあ　今日も暮れてゆくのか。

## 無機物地帶

仲　村　渠

鐵橋を渡れば展けてゆく膨大な地帶。
海を埋めて
粗野な街をひろげてゆく健康な三角洲を
けなげな犯罪が花畑のやうに美しいほとりを
堀割の麗しい濁流に沿ひて
鮮な溺死體を迎へ
涼しい肥料船へあひさつをかはし
ゆくてには水沫をあげる浚渫船の躍ける筋肉
また、たえまなく僕らの眼に錯綜する鐵線路の鮮明な東西南北
霙をかむつてくる貨物列車
またもや前進してくる鐵材運搬車のたのしい地ひびきを越え
はるか海岸線を飾つてゐる貨物船の美しい無表情よ。
いろんな人種を持つて
海をおひやつて擴がるこの地帶のなかを
ぼくの戀びと！
この賣春婦はつよい股で渉つてゆくのである。
その心臓は美しい無機物なのである。

## 體　操

煉瓦塀をおし破つて轉(まろ)びにゆく青い草地
肩にのぼる花やかな雲
雲をよんで刺しとめる新しい劍
口にとびこんでくる微細な飛行機
飛行機が逃げぐちを求める一枚の空

# 四十五文字の歌

磯部美知

ベゴニアの　芽の五分許り　萌え出しを
いたはりながら　陽ざしを追ひて
庭のあちこち　抱へ移せる

空俵　焚けばめら〳〵　立ちのぼる
焔をめぐり　うちかざす手の
同胞なれば　よく似たるかな

一週に　一度和服の　嬉しさよ
袂の底を　隅なくさがし
「朝日」の折れを　發見したり

朝飯は　海苔か煮昆布か　納豆に
定まりあれど　日曜の日は
寛ぎありて　味ひ食ふ

弟は　物干に居て　繪筆揮ひ
浪花節など　時々うなり
通りの人の　顔をあげさす

庭下駄の　感じによるも　柔かし
見れば地表は　霜綴し來り
濕ひの中　青きもの萌ゆ

# 無産政黨の自治體進出

## 八幡市會に無産黨の進出

龜井貫一郎

昨年の八月新聞を賑はした處の、又我々が飽く迄も抗勢したる處の八幡市分區制問題は何と誰が辯解の辭を設け樣とも、明に無産政黨の八幡市會進出を阻止するの陰謀であつた事は之を否定し得ないものである。人口は僅に十三萬に過ぎざる都市を六區に分割して市會議員を選出せんとするにあるが故に我々は之を稱して微少選擧區制と稱した。其の制定者が內面に意圖した處は、要するに工場に於て集結された勢力を、其居住區域に於て分散せしめんとするにあつた事は明である。

× × ×

之を爲した處の公新會なるものは市會に於ける民政派と政友派の合同勢力である。昨年の總選擧に於て新興勢力が新なる政治的動向を示すに至るや遽々然として今迄相敵視し相抗爭したる二つのブルジョワ政團は玆に相提携して無産政黨に對抗することになつたのである。そして其の連衡を彼等は公新會と稱したのである。尤も事玆に至るには他の特殊の事情もあつたらしい。併し其の事情の何たるかは玆に公開の紙上に於て之を說明するを潔しとしない。

× × ×

八幡市會總改選は斯の如き制度の下に鬪はれたのである。しかも既政政黨一致の攻勢の下に鬪かはれたのである。公新會は內部に於ける政友民政の內部鬪爭を續けながら、無産政黨に對しては公然一致の步調を取つて來た。市の中央にある旭座を借りて無産政黨批判演說會をする事にした。劇場代でも三百五十圓もする處である。大規模の宣傳は行はれた。大衆は當日を待つた。彼等が如何なる批判を行ふかと云ふ事に興味を持つたのである。然るに當日になつて急に辻に立看板が立てられた。「雨天の爲め中止」と云ふ立看板であつたのである。そして旭座は云ふ迄もなく野天劇場でない屋根はあるのである。だが其の中止になつた事情は更に面白い。當時福岡

に市會議員選擧に應援に來て居られた中野正剛君や杉浦武雄君や我敬愛する老闘士工藤テチオ君に對して主催者は出演を希望したのだそうである。處が三君共に之を拒絕せられたのだそうである。三君の日頃の言論行動に徵して拒絕の意思の那邊にあつたかは之を忖度するに難くない。さて三君の中一人でもと思つたのが一人も出演不可能と來たので出演者が居ない。市會議員候補者や其他の應援辯士が無産黨は共産黨であると云つたり龜井は五十萬の資產を有する有產階級であるとやつて見たりするのでは市民の方が承知をしない。事程左樣に我が八幡の大衆諸君は階級的に又政治批判的に自覺して居られるのである。其處で市民政黨左翼の若手から故障が出て取止めになつたのであると聞いて居る。さすがは全國階級戰の最も尖銳化した處である丈けに既成政黨諸君は死力をつくして我等に對立された。しかし其の言論に於て殆んど全部が何等政策を說かず、一に我々を謾侮誹謗し無根の事實を宣傳するに止まつて居たのは甚だ遺憾と言はざるを得ない。

×　×　×

斯如き連合勢力の下に於てのみならず、今一つは、未曾有の言論封鎖の下に於てこの戰は戰はれたのである。我々は何等過激の言辭を弄するをつゝしみ尙それでも注意中止ありたる場合は次回の演說で訂正する樣に努めて居たのである。それにも拘はらず「貧富の懸隔が甚しいのはいけない」で中止「我々ももう少し良い生活をしたいものである」で中止「既成政黨のやつて來た樣な政治は惡い政治である」で中止「既成政黨にのみ政治は委して置かれない」で中止「社會民衆黨を共産黨だと言つて居る政治家があるのは世界の大勢を知らないものだ」で中止「言論は壓迫す可きものでない」で中止「八幡市と言ふ船が沈めば、乘つて居る市民も沈んでしまう」で中止「買收にかゝつてはいけない」と云へば中止、甚だしきは西尾代議士が「法律は守らなくてはならない（買收の事をさす）」で中止となつた。中止となつて、、もしないのに、、は頻發した。

今此の稿を書いて居る嘉穗郡の縣會議員補缺選擧でも「候補者が皆樣を裏切る事があつたら、皆樣の面前で彼の首を申受くる位の覺悟で推薦して居る」で中止、「聖德太子の政家憲法第四に曰く、凡そ上下の爭は」で中止、「これ我々が兩稅委讓に反對した理由である」で中止、そして今朝は候補者を、、が呼んで「斯樣に中止が多くては辯士を、、しなければならない」との御託宣である。

一體福岡縣は一寸外から想像もつかない警察政治の處である。是れは鑛業資本主義の最高度に達して居ることと對比して、其の理由を發見し得るものである。だがこの事は稿を改めて書き度い。この明瞭な選擧、、には法曹團の活動と嚴正なる檢事局の力を俟つ積りであり、斯の如き警察政治下に於ては、今迄の九州勞働運動の（以下三行削除）

×　×　×

だが、當面の問題に關して今や我々は八幡に市會議員九名を持つ。戸畑の二名小倉の二名佐世保の三名を合して十五名である。我々は何をなす可きか。併しながら此問題は現今に於ける日本地方自治制度の官僚的歪曲によつて一の制約を持つ。國會に於て知事公選が實現せざる限り、又條例が一々內相の認可を要する限り、又特別税や附加税の制限外課税が一々大藏省で拒否される限り、我々が如何にレジョナリズムの上に眞面目に考へ樣とも當分は無駄な事だと云はねばならない。故に當面我々の任務は建設的な方面に於ては、市會の議事を公衆化し、民衆自治に對する大衆の理解を高める事が、其の任務であり、制遏的な方面に於ては、利權政治を看視することであり、當面の重大なる我が市會議員の任務としては、待合、料理屋、役員爭奪陰謀（利權に手を觸れざる事は勿論）に對して行動によつて之を批判する倫理的任務と市會を市民共同生活體の管理事務としての能率を高める上に於て、市政を科學的數量的統計的に分析する研究的任務である。我々は中央政治の民衆化と相俟つて幾年の春を又忍びながら眞に民衆的自治制の確立に邁進しよう。今日の政弊は一面から觀察するならば、一般政治家の政治經濟常識と品格が大衆の常識と品格より下位にあると云ふ事が原因であると云つて差支ない。然らば我々に未來はある。殊に鐵の火煙散る處、煙突の洒漫き處、炭を生む處、船のむらがる處、門司、小倉、若松、戸畑、八幡五市相接近する處、眞に資本家の天地である北九州は同時に勞働階級の天地であり、こゝにこそ始めて、地方數大工場大鑛山分賦制、行政地域の封建的分割原則に近代經濟的分割原則を加へたる特殊管理地域制、從つて公共企業の公營制を布いて、眞の社會的地方自治を實現し得るものと信ずる。

# 無產政黨の村政

須永好

想像的問題であつた無產政黨の活動は愈々現實となつて其の獲得した議員は衆議院に於て、府縣會に於て、或は市町村會に於てさかんに活動して居る。町村に於ては過半數の議員を獲得して無產黨の手に依つて村政を行ふ地位を獲得した所さへ出來て來た。無產政黨の政治は我が日本に於ても夢の問題でなく、今日の問題となつて來た。無產政黨が村政を行つたらどうなるか？　私は大正十一年以來無產階級の手で村政を行つて來た強戸村の經驗からこの問題に答へて見ようと思ふ。

一國の政治が其の國の經濟事情を考へることなしに諒解出來ない樣に強戸村に於ても其の經濟情態を知ることなしに村政を解するこ

とは出來ないであらう。強戸村は淺草驛から東武線電車で約三時間の處治良小橋驛を中心とした約一方里の村である、人口五一八〇、戸數八三〇、水田三三一町、畑二一四町、山林五一四町、國稅負擔額(昭和二年度ニ於テ)一〇、九八四圓の農村である、主として農蠶を營み、戸數を職業別にすれば、自作一一二戸、自作兼小作二三一戸、小作三四一戸、商業七一戸、工業其の他七五戸にして耕地所有別戸數は十町歩以上五戸、五町歩以上、二〇戸、三町歩以上二二戸、一町歩以上八三戸、五反以上二六戸、五反未滿二〇三戸で二十町歩以上耕地を有する地主はなく村外地主の有する耕地は僅に十九町歩にして、不在地主、大地主等は少い村である。桐生、足利、伊勢崎等機業地を距ること三里弱の地點にあり、近代工業の盛になる以前は賃織りを唯一の副業として居た土地であるが、最近この唯一の副業を機械に奪はれ農家は過少農として苦しんで居ること他のかうした村と變りない。

強戸村に於てかうした情態が小作爭議を卷き起させたのは大正十年十月の事でそれ以來小作農及自作兼小作農の組織した農民組合が小商人や職人の協援を受け乍ら強戸村の支配勢力となり地主や金持ちが有志として持つて居た勢力と取つて代つたわけである。

小作人の村會議員が何人出やうとそれが階級的活動をしないなら問題はないが、議員があらふがなからふが階級的な勢力が一度起きては村政に一大變化の起きるのは經濟的事情に於て地主のいひなりになつて居た小作人が小作米を自分で決めて持つて行く様になつた事に因つて當然である。大正十一年は抑へがたき農民組合の勢力に村長や村會議員が微力な職權を以て反抗した一年であつた。組合側には村稅の滯納同盟、小學兒童の同盟休校、消防手の總辭職等を以て村長や村長辭職後縣より派遣した臨時代理村長等の滯納處分や組合切り崩しに對抗し大衆の威力を以て勝利を獲得した年である。そうした事のあつて以來地主は微力な村長や、村會議員の職權を以て小作人に當る様な愚な事は止めて專ら今の制度が持つ絕大な所有權の威力に依つて小作人に當らん事を決意し、小作人に對し經濟的な壓迫を徐々加へることを戰術としたが村政に於ては組合のいひ分を一も二もなく用ゆる様になつた、大正十四年の五月の選擧に於て小作人が定員十二名の村會議員を八名迄獲得し得たのもこれが爲である。地主のこの戰術は賢明ではあつたが時を得て居なかつた。小作爭議に於てはそれ程專らであつたにも拘らず時の力はいつも小作人を有利ならしめて地主はいつも敗れた。剩へ小作人に渡して了つた村政の方はどうであつたらふ。時は無產政黨の運動の漸く起らんとする時で強戸村の小作人が苦もなく獲得した村政に於ける地位は余りに輝いて無產階級に大きな希望を與へて力となつた。こうした大きな動きの中に無產政黨に依る強戸の村政は四年間行はれて來たのであるがそれには隨分細心な注意が拂はれて居る。

吾々が其の手に依つて村政を行はんとすれば其の政策を行ふよりも先ず大きな三つの問

迫と戰はねばならぬ。法規の拘束、經濟的支配階級の壓迫、監督官廳の抑壓がそれである。これは今回の市町村會議員選擧に於て多數の議員を無產政黨に於て獲得した町村に於て自ら階級的村政を行はんとして必ず體驗するに違ひない事である。

今日の法規が一から十まで資本家本位のものであることは論ずるまでもない事で少しでも無產階級本位の政策を行はんとすれば必ず拘束を受けることになる。可能な範圍に於てこの法規の許す範圍であるから吾々はあらゆる逆用をしても尙ほ失望せざるを得ない。法規の拘束は誰も豫め覺悟の事であるが案外不用意にして壓迫を受けるものは經濟的支配階級の壓迫である。假りにも一村の政治が地主や資本家の壓迫を受けるとは曉の樣な事實で、、の政治が現在の經濟組織の中に於ては、、、、の支配を受けるが如く止むを得ない事である。一例を擧げれば山梨縣北巨摩郡鹽崎村に於て農民黨に屬する保坂村長が小學校改築の爲に二萬圓の起債認可を受けて居ながら其の村債の引受けてがなく折角の計畫が行はれず困り果てゝ居るが如きがそれである。尙ほ保守的な村に於ては重大な問題である祭禮の寄附、土木の寄附、警備費の寄附、敎育費の寄附等一切が停止するのであるから充分な用意なくしては村政をあざやかに行ふことは出來ない。公の事のみか彼等は經濟的權利を濫用して用地の問題や建物の問題等に到る迄利用して迫るのであるから容易ではない。火の見櫓の敷地明渡しを請求したり、村役場が借家である場合其の明渡しが請求されたりすることは必然の事である。法規の約束と關聯して抑壓をほしいまゝにするのは官廳の監督指揮認可權である。彼等が多く、、、、、、、、、、である以上、又既成政黨の走狗たらざるを得ない地位である以上無產黨村の事に親切であり得る筈がない。そこで彼等は法規の許す限り抑壓を試るのである。こゝでは皮肉にも法規は吾々の楯として用ひねばならぬ程である。

強戶村で無產階級が村政を支配する程の實力を有するに到つたのは大正十一年の鬪爭直後からであつたが吾々は其の力を持つて地主村長、地主村會議員をして吾々の行はんとするところを行はしむる事に努めた。それは監督官廳が法を枉げても彼等の爲に許すことを前例として將來悟まるるに違ひない無產階級の手に依る行爲を容易ならしむる爲であつた。そして役場事務の習練と地主村長の行爲を監視する爲に徐々に役場書記を更迭せしめて鬪爭的青年を送り込むことに努めた。大正十四年の選擧に於て過半數の議員を獲得したが同時に村長助役を更迭せしむることは避けた。それは當時の町村制は村長助役は知事の認可を受くる制度であつたからである。政友知事の元に於て憲政系村長の認可が半年もかゝると云ふ時であるから無產黨村長の認可が一年位かゝるのは覺悟でなければならぬ。半年ならずして新町村制になることが知れて居るのであつたからそうした愚は之を避けて大正十五年十二月に到つて村長助役共無產黨から出したのである。それ迄には役場書記、收入役

は勿論農會、分會、青年團に到る迄其の役員は無產黨側で獲得して居たのである。かくしてこの間無產黨の政策を進めたのである。村稅に於ては上に重く下に輕くのスローガンをそのまゝ（とはいへ法規の許す限りではあるが、）實行し家屋稅賦課決定に於て、雜種稅賦課稅に於て特別稅戶數割の賦課に於て手段のあらん限り上に高くした。即ち家屋稅賦課決定に於て隣村に於て最低五十七錢であるに强戶の最低は二錢であり隣村に於て最低二十四圓であるに强戶は八十七圓であることによつて其の情態が知られるであらふ。雜種稅賦課稅に於ては荷車、荷積馬車、リヤカー、學生用自轉車を除く自轉車の賦課稅を半額とし、特別稅戶數割に於ては大正十一年地主村會の當時に於て上から八十九人で半額負擔して居たものを二十三人で半額負擔をせしむる樣にした。從つて中產以下の負擔は著しく低くなつて十錢賦課の戶數二百十三戶一圓以下の負擔四百八十三戶といふ樣になつた。之を隣村に比べると著しい相違である。尙小學校高等科に於て徵收して居た授業料は之を廢し兒童になさしむる寄附は一切之を禁じた。支出に於ては、役場、學校の使丁給料を增額し、就學奬勵費を支出して貧困兒童の就學を補助し服役軍人（勿論戶數割を平均額以下納むる家庭の）の家族手當を出し、土木、警備費を增額して一切村營としたのである。

尙ほ强戶村に於ては明治四十五年以來小學校の增改築をせず、其の爲の基金の積立も地主村會當時は一文もしないのであるが無產黨になつてからは前記鹽崎村の如き失敗を防ぐ爲に年々一千圓以上年に依つては二千圓以上を積立現在七千圓以上の積立をして居る。かうして經濟的壓迫、法規の拘束、監督指揮認可權の抑壓と戰ひながら村民を失望せしめず、尙ほ曲りなりにも無產政黨の主張を如實に行つて來たのである。尙ほ强戶村無產階級の功績はそれ丈に止まらず對外的にも大きな意義を持つて來た。群馬縣下の無產階級運動の中心勢力となり、官廳の橫暴例へば警察廳舍寄附金割附等に反對して官吏の鼻の塵を拂ふことのみに專念の他町村町村長に一顧を促すが如き役割を演じつゝ來た事である。

# 無產政黨の眞迫力

坂本孝三郎

市民の一般的福利を市政の上に顯現するといふオーストリーの首府ウヰーン市政の綱領は、同市の豫算面に反映せられ、一九二七年に於ては、旣に社會事業並に住宅、新墓地事業費は全體の二八%に上り、水道、道路費一七%。福祉事業費一五%といふ素晴らしい數

字を示した。

またその歳入に於ては、社會政策的方針に基く租税收入及び財産收入を以て全體の七五%を占め、市民生活の全分野に亘つて着々として市政の社會化を行つてゐる。

就中、同市が最も力を注ぎつゝあるのは、その經費支辨の割合を見ても明瞭なる如く市營住宅の建設である。また快適なる市民生活に必要なる住宅標準法の制定、現に實施しつゝある家賃制限法の如きは、近代都市の生活に必須の事項である。

かくの如きは固より戰後に於けるオーストリヤの一般社會事情に、基因するものであるがその主因は言ふまでもなく、同市に於ける壓倒的勢力たる無産政黨の政治的進出によるのである。

×

私が今回大阪市會に乘り出した理由の一はそこにあるのである。即ち我々は今や全無産階級的立場に於て、ウヰン市のそれが理想的のものだとは言はない、だが少くなくともその程度にまで速かに我々のその立場を大阪市政の上に反映させ、從來のブルジョア政治の根本に一大斧鉞を加へねばならぬ。

故に、私は選擧戰に於ても、他の多くの同志と共に、既成政治勢力に對して階級的攻撃力を加へると共に從來一切の政治的生活を否認され來たつたところの大衆の勢力を背景として　たゞ満腔の闘志と誠實と大膽とを唯一の武器として敢然戰つたのである。その結果我々の同志は立候補二十四名中十三名の多數を市政壇上に送り、來るべき階級戰の前哨戰として靜かにその威力を自治體の上に反映したのである

だが、問題は一切これからである。

×

從つて今後、私の市政への方策は可なり多岐であるが、就中、財政及び社會政策はその主要なる目標であり、殊に財政々策は根本的に立て直さなければならぬと考へる。即ち、今日の大阪市に於ける二億五千萬圓の膨大なる豫算は、その大部分は特別會計に屬し、各種公營事業の使用料的形式に於て殆んど民衆の人頭割的負擔となつてゐるのみならず、租税に於ても結局民衆がその大部分を負擔してゐるのである。しかも絶大なる不勞所得たる不動産に對しては殆んど何等の課税もなされてゐない。地租の如きも大阪市の如き大都會に於ては、課税標準價格の數十倍に賣買されてゐるのである。凡そ斯くの如き不條理、不都合がどこにあるか、これは特別市税、獨立課税權獲得等に關聯をもつ問題ではあるが、せめて都市計劃の區域内だけでも土地增加税間空地税の徵收が行はれるに非ざれば、都市財政の安定確保は不可能であり、從つて市民の福祉は永久に蹂躙されなければならぬと信ずる。かくの如き事項は、今日の大阪市政に一日も等閑に付し得られざる重要事項である。

また都市計劃にしても、昔時の都市計劃と今日のそれとはその根本の精神に於て甚だ相違せるものがなければならぬ筈である。即ち昔時の都市計劃は、帝王又は權力者が自己の

赫々たる權威を中外に示さんためになされたものであつて、その目的とするところも、都市の美觀そのものにあつた。即ち紀念塔、凱旋門、宮殿、寺院等を建設し、壯麗、輪奐の美を極め榮華を誇つたものである。しかもそれは人民の膏血を絞つて實行したものである。彼の希臘のペリクレスが雅典を大理石を以て飾つたのも、羅馬のオーガスチン大帝が華麗なる宮殿、凱旋門等を建立したのも、みなこの心理に依るものである。かくして生れた都市の大通りは、壯麗にして燦爛、人目を眩耀するものがあるが、一歩裏通りに這入れば、幾多の貧民窟あり、薄暗き日光の下に、不健康そのものゝ如き陋屋がある。そこには惡疫が襲つてゐるのである。

しかし乍ら近世的意義を有せる今日の都市計劃はかくの如きものではない。それは帝王の權力でもなければ、支配者の野心でもない。即ち、その對象とするところのものは綜合的有機體としての都市、及びその都市に住む市民全體でなければならぬのである。

しかし乍ら今日の都市計劃が、果してかく公明に切言し得るであろうか。大阪市に於ても今宮とか長柄方面の地帶に對して、新鮮なる空氣と日光を與へることを果して親切に留意したのであるか、目貫の場所に廣小路を設け、壯麗な橋梁や建築物を建て、都市の外觀を美しくするだけならば、過去の權力者もなしたところである、今日の都市計劃は都市の外觀に浮身を窶すよりも、都市の實質的改善が必要なのである。そこにも無產政黨の力强い眞迫力が必要である。

×

最後に、無產政黨の自治體進出の重要なる使命は、民衆に、政治と經濟殊に家庭生活との連鎖を知らしめることである。今日の政治が、金權の露骨と辛辣を極めた民衆搾取の政治であるにも拘らず、政治が民衆に興味中心にしか理解されてゐないのは、巧妙なる既成職業政治家の作戰によるとは言へ、未だ民衆に政治が理解されないからである。政治と經濟が結び付き家庭にまで理解される時、如何に無產政黨が眞摯であり、熱烈であるかゞ理解さるるであろう。それ故にこそ市政のあらゆる機械を通じて大衆との協同と動員を期さなければならぬ。それと共に市會は、中央政治と異なり、階級的立場を嚴守するは言ふまでもないが、私黨的容氣を打破し、市民代表として眞面目に、出來る丈け親切にその職分を盡したいと思ふ。

（四・六・九）

新刊

# マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそれはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解說はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の內容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る。程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中聚め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

菊判クロース裝 定價三圓卅錢
四一五頁 索引六頁 送料十八錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋
横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

# 小酒井不木全集

全八巻 一冊一円

〆切六月廿五日

第一回配本 探偵小說短篇集

——堂々七百頁—— 目下配本中

讀め科學と文藝の交響を！

世界に誇るべき不木の全姿

| | |
|---|---|
| 1 | 殺人論及毒と毒殺 |
| 2 | 犯罪文學研究及近代犯罪事實談 |
| 3 | 探偵小說短篇集 |
| 4 | 探偵小說長篇集 |
| 5 | 生命神祕論及鬪病術 |
| 6 | 學者氣質及不木軒隨筆 |
| 7 | 醫談女談 |
| 8 | 病間錄 |

## 豫約略規（內容見本進呈）

**體裁** 本文四六判ルビ附九ポイント、各册紙數平均五百頁、總クロース上製。

**頒布方法** 全八巻豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ直接御申込下さい。

**刊行期日** 昭和四年五月第一回を刊行し、爾後毎月一册づつ刊行、昭和四年十二月完結。

**申込方法** 先づ御申込の際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最終の會費に充てるのですから、最初の月の會費は別に御拂込願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

**會費** （一）每月拂一册に付壹圓、（二）一時拂（全八巻）七圓五十錢。

**送本料** 會費の外に送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送附を希望せらるる向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市內六錢、書留六錢增。

**拂込方法** 振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやう御拂込下さい。但郵便切手代用は一割增に願ひます。

發行所 東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

# 日本探偵小說全集

全十二卷

第二回配本

**8** 保篠龍緒集

**20** 佐藤春夫集・芥川龍之介集

第一回配本濟 谷崎潤一郎集・大下宇陀兒集

## 總內容

### 保篠龍緒集

妖怪無電
紅手袋

リュパン紹介の隨一人者たる氏の創作は、恰も和製ルブランの面影がある。豪快な筆力、轉變極りなきその內容は、讀者をして怪奇の陶醉境に誘惑せずにはおかぬであろう。

### 佐藤春夫集

指紋
オカアサン
時計のいたづら
痛ましい發見
女誡扇綺譚
アダムルツクスが遺書
陳述

氏の「指紋」はいろ〳〵の意味に於て懷かしく忘れがたき作品である。谷崎氏の作に醉はせられた讀者は、更に氏の同じ肉迫力をもつ纖細優美さに三嘆を惜しまないであらう。近作「陳述」二篇の如き、如何に斯界を刺戟したかは贅言を要しまい。

### 芥川龍之介集

開化の良人
開化の殺人
妙な話
黑衣聖母
影
奇怪な再會

大正文壇の第一人者として謳はれた氏は、探偵文學の方面にも亦永劫朽ちざる巨跡を遺した。「開化の良人」「開化の殺人」「奇怪な再會」などは共に斯界に異常なショックを與へた奇品である。

發行所 東京・芝 愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

# Onoto the Pen

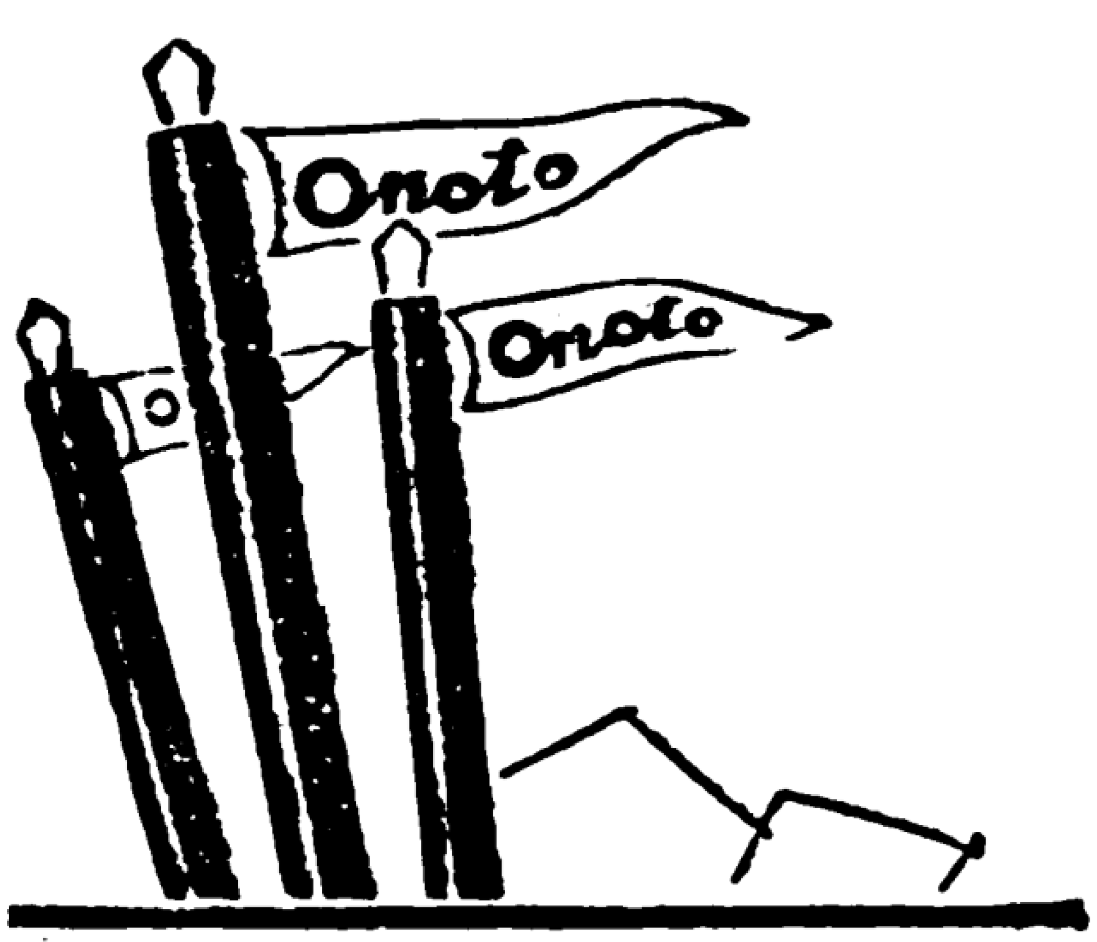
## オノト優勝！

萬年筆の競技大會でフォームさスピードさ
耐久力に總ての萬年筆をリードしたのが
オノト！　オノト！　オノト！

＊　＊　＊　＊　＊

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ　三十五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）




# ¥1.50

"VALET"
Auto-Strop
Safety Razor

## バレー繁昌記

バレーは今東京の市場の花形となつてゐます
帝都通りでも書く人があるなら其人は
バレー繁昌記を書く事になります

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

## バレー自働研安全剃刀

C型　一・五〇　二・〇〇　三・三〇　四・八〇
型　一三・五〇以上　各種

替刃利用ナイフ　刃一枚付　・九〇
送料各・一八（カタログ進呈）

販賣所・大百貨店・著名洋物雑貨金物店等



東京日本橋通

大阪　神戸　京都　名古屋　**丸善株式會社**　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京―神田・芝三田・早稲田・丸ビル

# サロヂニ・ナイヅ夫人

## ——鶯にしてまた鷲なる印度の萬能婦人——

サバルワル

…然れどもわが國土の塵埃は、われにとりて
いや慕はしき哉、自由の國なる英國よりも。

一

これは閨秀詩人サロヂニ・チヤトパデハヤが、まだ花羞しき少女の頃にうたつた詩の一節である。その當時、彼女は甘醇な生に醉ひしれて、外國政府が彼女の國人たちに加へる彈壓には殆んど氣づかないかの如くであつた。

楚々たる東方の麗はしき花、サロヂニ・ナイヅ夫人の詩人として、また政治家としての名聲は、すでにこの國（日本）にも知れ渡つてゐるところであるが、今度いよいよ彼女はこの國に來る。――印度民族の非公式の大使、印度文化の化身にして且つその紹介者、スワラヂ（印度自治）の最高代表者である彼女は――印度の指導を受容し支持するに足るべき偉大なる魂（マハトマ・ガンヂ）の委任をうけて渡來するのである。元來、彼女はヒンヅ教徒なのであるが、同一信仰を抱く民族にも劣らぬほどの支配力を異教者回教徒間にも持つてゐて、現代印度新時代の大衆の精神を確く把握すると共に、また一方に於ては、舊時代に屬する人々からも彼等の指導者として敬慕を得てゐる。

さうして政治家としての彼女は、峻嚴にして策謀に富むところの精神をもつて、祖國の解放のために戰ひ、婦人參政權を主張する婦人代表の急先鋒である。かくの如く彼女は印度政界に於て最も重要な地位を占めると同時に、一方では傑出した詩人であり、劇作者であり、指導者、社會運動家、改革者である。近ごろ、彼女の一友人は彼女を「印度の鶯」と呼ぶと、別の一人は又「印度の萬能婦人」と稱し、また別の一人は「青年印度の豫言者、老印度の代辯者」と言ふのであつた。

## 二

しかし彼女のうたふ歌と詩は、專ら自然と人間性の美に對する敬虔のみを流露してゐる。その詩は、英文學を識る全世界の人々を魅了し盡して、歐洲及び東洋の諸國語に翻譯され、リーザ、レーマン、コールリツヂ等は、これを作曲した。非難のできないリヅム、透明美、用語の純粹性、甘美な旋律などが、その詩篇の特性であらう。一九一四年、彼女は英國のロイヤル・ソサイエテイ・オブ・リテラチヤの會員に選ばれた。詩人としての彼女はあまりに思索的なラビンドラナツ・タゴールの創造するものとは遠くかけ離れた世界に住み、こゝには繪畫美にひらめき旋律美にふるえるところの世界があつて、讀む人の心を激しく鼓動せしめる魔術がひそんでゐる。それは「印度」のみが釀すところの微妙な魔術なのである。この彫琢された詩には、その一行にも人間性と自然との驚嘆すべき色彩と形態との集りがあつて、印度の生活面を極めて魅惑に富む萬華鏡とする。譬へば Leili（それはたゞ歌といふことを意味してゐる）といふ詩に於て、彼女はわれわれをリヽカルな翼に載せて殆んど印度の心臓にまで運んでくれる。神秘な自然と宗教の、後者と前者の、その兩者と生命との交流である。

時として、彼女は印度古典に靈感を仰ぐことも無くはないが、主として彼女は彼女自身の國土と生活とを直接に題材としてゐる。その詩のいちじるしい特徴は、表現の言葉の外には西方的なものとは一切無關係で、彼女自身の個性を極度に麗はしく保存してゐるといふ點である。捕へ難いほどに微妙な方法によつて、表現は西方の言葉に借りながらも、或る不思議な氣分、東方の女性の感性を暗示してゐるのである。西方の批評家がわれわれに示した如く、そこには東方の魔術があるのだ。それ故、哲學といふ點では、ナイヅ夫人は形而上學の世界にあまり深く沈潛してゐるとはいへない。けれど彼女にとつて戀愛は自己犧牲と獻身との道であり、その「罪」は、その德と同じく美しいものである。彼女の處女詩集"The Golden Threshold"を推奬しその序を書いたアアサア・シモンズの言葉を借用すれば「彼女の神經細胞は常に美といふものに對して嬉しくふるえてゐる……」疑ひもなく彼女を詩人としたのは、美の慾求であるが、彼女の詩のうちにも必ず



サロヂニ・ナイヅ夫人

しも苦悶の響きがないともいへない。絶望の聲といふほどまで强烈でにないが、肉體の弱さに對する苦悶の體驗が反射されてゐるのである。ひとへに人生は積極的で歡喜に充ちたものでなければならないのだ。それにしても彼女の詩には狹義の國家主義的な形相は見えないが、ナイヅ夫人は印度更生を堅く信じてゐる人なのである

彼女の書翰に於けるすぐれたる才能について語らなければ、ナイヅ夫人のスケッチは完全とはいはれない。他日それは保存されて印度文學研究者の伴侶ともなるであらうが、彼女には詩に於けると同樣に、散文の才能が完全に惠まれてゐる。この方面に於て榮えある作家となることは彼女にとつて困難なことではないであらう。

彼女の特質を更らに擧げてみれば、それはその輝かしい話術である。豐富な回想と逸話と——人と事件との不思議なまでに洗練された記憶に富み、彼女は疲れることなき潑剌さで、數時間にわたる談話を續けることができる。おだやかで同時に辛辣なユーモアがあり、彼女の出現はいかなる應接室や講堂の空氣をも明るくする。

三

彼女の生涯の幸運は世俗の富によつてゞなく、それよりもはるかに尊く永遠的なる他の富によつて測らなければならない。アゴルナツ・チヤトパデハヤとその愛妻バラダスンダリ・デビの如き人を兩親とした事こそ、彼女の幸運といはなければならない。印度に多くの男性と女性の學者、詩人、聖者を供給した名家チヤトパデハヤ家に、サロヂニ・ナイヅが更らに一つの實を加へたのだ。ヒンヅ古典の言葉を借りれば、ブラハミン家庭の數代にわたる「タパ」卽ち贖罪は、彼女の詩的天才として實を結んだのである。

故アゴナツ・チヤトパデハヤ博士は、カルカツタ大學に學び、更らにエディンバラ及びボン大學で優秀な成績をおさめ、そしてホープ化學賞をかち得た。卽ちケンブリツヂやロンドン大學の教授達と、その競爭試驗に伍して第一位を得たのである。彼は南印度のハイダラバツド王國の「敎育の父」として知られてゐたが、サロヂニがこの世の光りを見たのも、この父によりこの土地に於てゞあつた。一八七九年の事である。

十二才のときサロヂニはマドラス大學の入學試驗に應じた。彼女の文學的興味は早くから開け、十四才の頃までには、彼女は殆んどすべての英詩人を讀んだ。セリー、テニスン、ブラウニング等が愛誦する詩人であつたのだ。

すでにこの頃めざめた詩的慾望は今や表現を求めて苦悶してゐた。「メヘル・ムニール」といふ小さな詩劇を散文で書いたのは、この頃のことである。少數の友人の間に頒布せられたその一部は、一八九五年、故ニザム（ハイダラバツド王の稱號）に捧げられた。王はサロヂニの詩に對する熱心さを見て、彼の天分を開發しようとする希望のあまり、父チヤトパデハヤ博士にメツセイヂを送つて、賞品として何を

望むかをたづねた。その結果、彼女は一八九五年に當時としては莫大な金であるところの年三百ポンドの留學費と潤澤な旅費とを受けた。

ケンブリッヂ大學に於ては十八才未滿の學生に入學を許可しないことになつてゐたので、當時十六才にすぎなかつたサロヂニは暫くロンドンのキングス・カレッヂに聽講した。定年に達してケンブリッヂのガートン・カレッヂに入つたのである。しかし大學の機械的な生活や校則は彼女に不向であつたらしい。暫くの後、健康を害してガートン・カレッヂを急に去らなければならなかつた。さうして彼女はスヰスとイタリイの旅に立つた。

ロンドン滯在中に於ける彼女とエドマンド・ゴスとの交友は、あまりに有名だ。ゴスは彼女に、アングロサクソンのセンチメントを描くよりも祖國の情熱を描くやうに諭へた。彼女の心のなかに大きな動搖があつて、その後十年を經て彼女の處女詩集 The Golden Threshold が出たのは、その結果であり、それがゴスに獻ぜられた所以である。

## 四

歐洲から歸國して勇敢にも階級と傳統とを打破して一八九八年、自から選んだ男性と結婚した時にこそ、彼女の生命の凱歌は揚つたのだ。ゴビンダラヂユル・ナイヅ博士とは彼女が歐洲に出發する以前に相愛の間であつたのだが、博士はサロヂニの家系とは異つた階級に屬し、彼女の兩親のやうにブラーミンではなかつた。しかし彼は善良な男子であり、サロヂニの結婚生活は多幸であつた。二男二女を惠まれてゐる。

家庭に於て、その子供達から敬慕される母の姿は、何と感動的な樣子であることだらう。妻として母として、また主婦として、彼女は理想的な婦人である。彼女の多角的な活動のうちで、この家庭生活は最も尊敬すべき一面でなければならない。ヒンヅの「ダハルマ」即ち「人生觀」は、あらゆる階級あらゆる土地に存在する最高のものとして、母性といふ理想をもつてゐる。われらヒンヅ人は母性尊重の國民である。その國土はマザア・ランドである。われわれの神聖なる河ガンヂスは、マザア・ガンヂスといはれてゐる。ショペンハウエルが人生の慰安を茲に發見したヒンヅの聖書ウパニシャッドは、父性否寧ろあらゆる人事關係よりも先づ母性を敬愛すべきものと教へてゐる。神性の象徴は父性でなく母性である。現代に於てすら印度國歌は「母にひざまづけ」といふ起句に始まる。

## 五

政界に於て婦人參政權が問題の焦點となつた時、ナイヅ夫人は樞軸となつて立つた。彼女とその一黨の印度婦人指導者達の戰術は、ヒンヅ・ダルマに訴へるといふにあつた。時は來た。この時、印度女性の選士ナイヅは印度婦人の理想を「青空に消ゆることなき火の文字で、記されなければならない」と叫んだ。——家庭を守ると共に社會的運動

に進出しなければならないといふ女性の意見に對して、すべての男性達は反對をしなかつた。かくて印度婦人の智識は向上し、男子と同權の選擧權を持つやうになつたのである。あらゆる社會の部門に於て重要なる地位を占める婦人が、その結果として續々と現れ、ナイヅ夫人自らも、まる一年間印度の大都ボンベイ市長となつたことがある。

最近、ロンドンに於けるルーターの特派員に對して語るところによれば、彼女は英國に於ける二十一才以上の女子の婦人參政權獲得は單に「印度婦人がすでに多年にわたつて享有してゐた自由に對して一歩を踏み出したにすぎない。……私が英國婦人運動をいかに考へるか？正直にいへば私はこんな運動に參加することを恥ぢとする。それは婦人が自からの劣れることを告白することに他ならない。……印度に於ては性の問題は起らない。問題はたゞ誰が仕事するに最も適當であるかといふことである」

また或る機會に彼女は言ふ。「婦人は單に家庭の爐邊の火を守るだけではなく、國民生活の烽火を燃え上らしめるものである。戰ひに際して鬪士の心を培ひ、不和に際して聖徒の心を保つものは婦人である。自己克服と自己實現とは、印度婦人の典型的な特質である」

更らにナイヅ夫人は言ふ。文明について箴言を發すとも結局婦人に於て最も重要なものは家庭である。そしてそれは如何なる他の活動よりも一國民の建設あるひは破壞に影響を持つ。家庭の幸福を助けまた妨げるところのものは、人生の經驗生活方面に對する男女の態度に因る。「婦人は男性の敵ではない。彼女は自ら仕へることによつて自らを支配しなければならない。彼女は彼女の生命をもつて奉仕するところの男性の活動を呼び醒さなければならない。婦人との協力が實現せられた曉にこそ、世界の總ての爭鬪と苦惱とは終り、田園も戰火の下に荒廢することはないであらう」

一九一九年、マハマツト・ガンヂの運動が起つたとき、彼女はサチアガラの誓約に參加した最初の一人である。かくて彼女は政界に身を投じたのである。それ以前數年間も、彼女は直接政爭のうちには入らなかつたが、愛國的な義務としての社會運動政治運動には參加し續けて來たのであつた。彼女に最も影響を與へ、彼女を社會的に進出せしめた初期の印度政事運動家は、印度國民議會の大立物であつた故ゴカアレ氏である。ガンヂすらもゴカアレ氏を彼の政治的指導者として、またグル（教師）として認めてゐる。ゴカアレとナイヅの交友關係は長く且つ深いものであつた。

一九一八年以後はガンヂのみが印度の政治運動の中心的勢力である。ガンヂ、印度最大の人物、三億にあまるヒンドスタン民族の胸の奥に坐して類ひなきガンヂ……ナイツ夫人は彼を全印度と共に愛してゐる。一九一九年、ガンヂ等に加はつた後の彼女の全努力全生活は、專らサチアガラ運動を支持してゐる。地方旅行中も人々に運動加盟の祈誓をすることを忘れない。またサチアガラの日、即ち四月六日、ボンベイの街上に四萬の群衆を率つたこともある。

爾來、彼女の一言一動はガンヂ使徒としてのそれである——勿論その政治的主張は彼女の詩的熱情のなかに醇化されてゐる。一九二二年三月十一日、ガンヂ捕縛の噂は全印度に憂鬱のかげを投げた。アハメダバッドに於ける十八日の歴史的訊問に關して、當時ガンヂと密接に連絡のあつたナイヅ夫人はその傍聽者として最も精彩ある報告を果してゐる。この訊問こそ現代に於ける最もキリストに近い人物をキリスト教徒政府が反逆罪人として裁いたものである。最も「平和の主」に近い社會運動家を平和攪亂者として處罰したのである。

## 六

一九一五年、ボンベイに於ける國民議會にのぞみナイヅ夫人は議會演壇の處女演説をこゝろみたが、自治の決議を支持し、印度擧國一致の豫想を謳つた詩をもつて、その雄辯を結んだ。その日にこそ彼女の政治生涯は始まつたといつていい。一九一七年、カルカッタに於ける國民議會の彼女の熱情的な演説の結末は次の如くである。

「私は一女性にすぎない。けれど私は皆さんに告げなければならない。時は迫り、あなたがたが闇の路に炬火を持つ人を要する時、戰旗をかゝげる旗手を要する時、あなたがたの信念がぐらつき倒れようとする時、印度の女性はあなたがたの傍らに立つて旗手となり、あなたがたの力を支えるでありませう」

一九一八年五月、コンヂヴアラムに開かれたマドラス州國民議會の司會者は彼女であつたが、それは國民議會の歷史中で最も熱狂的なものであつた。しかし彼女は議事進行を計つて、すばらしい能力を示した。

その後、彼女は祖國のために運動に加入せしめるべく青年達を勸誘した時、即席演説をしたことがある。その際、彼女は詩と夢想の聖域を棄てゝ政治の分野に進出したことについて、次のやうに辯明してゐる。「今日、あなたがたの前に立つて私は誇りにふるえながら叫ぶとができます——私は今やあなたがたと一しよに立つのみではない。あなたがたに身を捧げてゐるのである。何となれば私は私の生命を委ねてゐるところの美の幻を今や再び新しい光りに於て見たからである。人々は幾度となく私に訊ねます——何故にあなたは象牙の塔の夢をすてゝ市場へ出て來たのであるか？何うしてあなたは詩人の笛をすてて國民を戰爭に驅る人々の激しいラッパとなつたのであるか？——それは詩人の任務は薔薇の花園のなかに立つ夢の象牙の塔に獨り住むのではなくて、彼の住むべきところは民衆と共にあるからです。街道の埃のなかに、戰爭の困窮のなかに、詩人の運命は横はる。彼が何故に詩人であるかといふ理由は、危難の時、敗北と絶望との時、次の如くに夢想家に告げるからです——若し諸君が眞實を夢みるならば、あらゆる困難、あらゆる幻影、あらゆる絶望、それ等はマヤ（空の空）なるものにすぎない。たゞ一つ大切なことは希望である。いま私は諸君の前に、諸君の高き夢と共に、不屈の勇氣と共に、不屈の勝利と共に、私

は立つてゐるのである――それ故、今この爭鬪のうちにあつて印度のため勝利を得るや否やが偏に皆さんの手中に在る時、かよわい手弱女なる私は家を出でて參つたのです。夢を夢みる人なる私は、市場に出でて參りました。そして叫びます。行け、友よ、勝利に！」

　ナイヅ夫人は一九二五年、印度國民議會の議長に選ばれた。それは――印度國民が印度國民に與へ得る最高の名譽であるが、このとき、彼女が現代最大の指導者であるといふことは、全世界の承認を經たわけである。今日に於けると同樣、ヒンヅ教と回教との諸問題は、中介者、融合者としての手腕を要すること切なるものがあつたが、それは婦人として母として詩人としてのナイヅ夫人に甚だ應はしい任務であつたことを、人々は正しくも信じた。ヒンヅ教の親を持ち純然たる回教徒の周圍の中に生育したといふことは、その兩者の立場を了解するに甚だ好適であつたのだ。

　ナイヅ夫人が印度國民の聖なる聲たる國民議會の前に立つて、議長としてのアドレスを讀む前に、多くの人々のメッセイジが讀まれたが、就中、詩人ラビンドラナツ・タゴールは言つてゐる「この議長ナイヅが詩人として又女性として、貧困と無智と病氣と確執とのために母乳を失ひ、生命は衰へ、喜びの光りは殆んど消えてゐるこの國民の搖籃への愛と奉仕とに向つて、國民議會の活動を指導することができるであらう」

## 七

　ナイヅ夫人は言ふ「全人類の五分の一が未だに政治的服從を強ひられて自己の未來を支配し自己の法則をつくることができない時にあたつて、世界平和に就いていかに雄辯に談論するとも、果して何の意味があり何の眞實性があらう？」「強力の國民にありては平和は勇氣である。弱き國民にありては、それは怯懦である。印度の平和は服從より來る平和であるといふが如き觀念を抱くことは絕對に不可である。それは勝利より來る平和である。究極は印度の自由である……來たれ！汝は、われ等を囚人となすことができるであらうが、われ等を征服し去ることはできないのである……われ等の魂に汝は觸れることはできない。印度は決して自らを怯者にするが如き平和に滿足することはできない。」

　英國の強力なる軍隊が、この弱き無抵抗の國民に對して備へられてゐるのだ。バートランド・ラツセルが言ふごとく「人間の肉體的自由を奪ふことはできよう。しかし精神的自由は彼の生得の權利である。世界のあらゆる陸海軍も彼の同意なくしては、それを奪ふことはできない。」

　印度問題は印度人自らによつて解決すべきである。勿論その道程には幾多の困難が橫たはつてゐる。しかし自由に對する印度の意欲はいかなる道をも切り開き、いかなる障害をも排除するに足るだけの力を

もつてゐる。ナイヅ夫人は言つてゐる「われわれは英國に訊ねる。英國はわれわれの國にペンによる解決を與へようとするのであらうか、それとも劍による解決を與へようとするのであるか？ 選擇は英國の自由である。若し彼女がペンの道を選ぶならば、われわれは欣然として唯自由のみを求めるところの大國民的態度をもつて協定するであらう。しかし若し劍を把つて來るならば、われ等もまたこれに備へて、必要の場合はわれわれの骨を鍛えて劍をつくり上げるであらう。われわれは救助を乞はない。同情と金錢を望まない。」

ナイヅ夫人は、印度は最も完全に自治の準備をなしてゐると主張する。印度の社會構成の二三の害惡は、外國に於ては甚だ誇張されて傳へられてゐる。外來の支配者は自己の利益を擁護するために、印度の價値について甚だ誤れる宣傳をなしてゐる。彼等は明らかに眞理を無視しつゝ、早婚、寡婦問題、階級問題等を利用して、印度國民の獨立に對する當然の生得權を拒絶する口實を作成しつゞけて來た。

しかしナイヅ夫人はこの宣傳のために日本に來るのではない。東洋に於て最も有力にして印度に同情を有する日本民衆に親交を得ようとする目的であるに違ひない。彼女は、古くから宗教と文化によつて結ばれたこの國（日本）に來て、全くアット・ホームな氣持にひたることができるであらう。

けれども印度に歸るや否や、彼女は再び印度解放鬪爭の新しき渦卷きに身を投じるであらう。何となれば マハトマ・ガンヂは昨年の十二月のカルカッタに開催された全印度國民議會に於て鬪爭として宣言してゐる。――若し英國政府が一九二九年十二月三十一日までに印度自治の國民的要望を認めなければ、印度國民の無抵抗主義鬪爭をあくまで指揮するであらう、と。おそらくナイヅ夫人は、若しガンヂが再び無抵抗主義の鬪爭を開始する場合には、その右手となつて働くであらう。結末にあたつて私はかゝる時が到來した場合に、彼女自身を最も雄辯に語つてゐるが如き彼女自身の言葉を聞かう。

> われ等が母なる國の苦惱のうちにこそわれ等の悲哀の最高の慰安はあるなれ、母なる國に拜跪することにこそ罪の解脫はあれ。彼女のために生きん事これ最も輝やかなる生命の凱歌にして、彼女のために死すこそ尊き不滅の王冠を贏る所以なれ。

# 探偵小說の變遷

森下雨村

## 一

犯罪を取扱つた文獻、または探偵的興味をもつた讀物を過去に遡つて求めるならば、恐らく人類が文字を案出した昔にまで溯らねばなるまい。探偵小說の起源にしても、ホフマンやヴォルテール、さてはチョーサーや一千一夜物語なんどを引合に出して詮索するとなると、それこそ果しもないことで、やはりエドガア・ポウの「モルグ街の殺人」あたりをスタートとして考へて見るのが宜いと思ふ。

その「モルグ街」が出たのが一八四一年だから、爾來ざつと九十年、文學の中での最年少者といふわけで、その變遷と云つても文藝史上の大きな流が語るほどの目覺しい歷史をもつ筈がなく、それに元來が確然たる一つの目的をもち、明確な約束と傳統の下に、獨特の要素、並に形式とテクニックをもつて進んで來た文學だけに、そこに大した變化のあらう道理もないのであつて、要するに年代を逐ふて主要なる作家と作品の傾向でも語つてみる他はないと思ふ。

「モルグ街」を筆頭にその三部作が、典型的な探偵小說であるに拘らず、ポウがその主人公デュパンに探偵の名を冠してゐないといふことを興味あり氣に云ふものがあるが、これはデュパンが犯罪捜索の專門家ではなかつたといふよりも、當時まだデテクティヴ—探偵といふ言葉が用ひられてなかつたと解釋すべきであつて、ポウ自身が「モルグ街」その他を書いた動機は、明に探偵的興味に驅られたものであることは疑ひもないことである。探偵といふ言葉が初めて用ひられたのは、ウイルキ・コリンズの「月長石」（一八六二年）からで、それまでの間には約二十年の溝があつたのである。もつとも、この期間は探偵小說が急激な發達を遂げるための準備時代であつて、ポウの影響をうけること最も多かつたフランスの文壇には、その模倣的作品が盛んに現れたものである。が、特に記すべきほどのものはなく、當時世に出たもので探偵小說的興味をもつたものと云へば、先づデュマの「ブラヂュロン伯爵」（一八四八年）と、ヂッケンスの「强盜」（一八五三年）であらう。ヂッケンスの作は近代探偵小說への英文壇最初の貢獻で

あると云はれてゐるが、その內容手法から見て今日の探偵小說とは無論趣きを異にしたものである。たゞ作中の主人公バッケット探偵部が、作者と親交のあつた倫敦警視廳の一探偵部をモデルとしたもので、ある意味に於てデュパンと並稱される性格であるといふ點に興味がある。ヂッケンスには尙ほ未完に終つた「エドウィン・ヅルイドの祕密」がある。もしこの作が完結されてゐたならば、探偵小說の先驅的大作としての名を恣にしてゐたであらうとは、一般の一致するところである。

一八六〇年にウィルキ・コリンズの「白衣の夫人」が出、六八年には名作「月長石」が出た。コリンズはボウの傳統を英國に移し、探偵小說をリアリズムの世界に導き、近代探偵文學の素因を作つて、ガボリオへの橋渡しをした作家で、「月長石」に出て來る探偵カッフはデュパンやルコックの名に蔽はれた傾きはあるが、探偵文學の史上に永久に殘るべき一つの性格である。

コリンズの後にルコックの作者エミイル・ガボリオが出た。ルコックは自らデュパンの後繼者を以て任じた性格で、ボウを探偵小說の父と呼ぶならば、ガボリオはその後を繼いだ探偵文學の保護者であり管理者である。コリンズの描いたカッフ探偵がどこまでも獵犬の如く、香を嗅ぎ足跡を追ふ努力勤勉家であるに對し、ルコックは勤勉に加ふるに緻敏なる推理と觀察をもつて進んでゆくところ、明にボオの傳統をついで探偵小說の手法に一步を進めたものと云へる。ガボリオの代表作として擧げらるゝものに、「書類一一三」(一八六七年)「ルコック探偵」(一八六九年)、「他人の錢」(一八七四年)等がある。ガボリオと並んで佛蘭西にボアゴベがある。極めて多產な作家で、探偵小說の普及に力あつたことは疑ふべくもなく、ドイルなどは明にその影響を受けてゐると云はれてゐるが、ガボリオの盛名に壓せられて一般には知られるところ少い傾きがある。彼の處女作は「囚人大佐」(一八七二年)で、その他「塔上の祕密」、「浮浪者の群」、「赤い切符」等數十篇の作がある。

時を同じくしてアメリカに女流作家アンナ・キャザリン・グリインが出た。「リーヴンワス事件」(一八七八年)がその代表作である。多產な點で、またポピュラーな點で、探偵小說の普及に貢獻したことはボアゴベと同樣であるが、その取材と手法に於ては遙に淸新なものがあり、探偵小說の發達史上に意義ある地步を占める作家だと云はれてゐる。

尙ほグリインとガボリオの系統をひいた同時代の作家にファガス・ヒュームがある。その代表作「二輪馬車の祕密」は當時にあつて五十萬部以上の賣行きを示し、十九世紀末の大衆讀物の中で第一の成功を收めた小說である。

## 二

ヒュームの「二輪馬車の祕密」が出た一八八七年に、偶然にも時を

同じくしてドイルの「深紅の糸」が出た。ドイルの出現によつて探偵小說は完成の域に入るのであるが、こゝで明治時代の日本探偵小說界を振返つて一瞥を加へるのが便宜であらう。と云ふのは、黑岩淚香氏によつて代表せらるゝ明治年代の探偵小說なるものは、ポオに始つてヒユームに至るまでの海外探偵小說の移植に過ぎないからである。

日本に紹介された最初の探偵小說は、神田孝平氏（乃武男の先考）譯の「和蘭美政錄」に收められた「楊牙兒奇談」であることは諸家の意見の一致してゐるところらしい。原作者、原名ともに明でないが、飜譯されたのが文久二年と云へば、ポオの作が出てから僅に二十年で、確に日本最古の飜譯探偵小說であらう。

それについで、何にが紹介されたか、私はさうした詮索は一向にしてゐないが、木村毅君によると饗庭篁村氏譯のポオの「黑猫」があり、內田不知庵氏にも同じ譯があり、森田思軒氏に「ピット・エンドペンヂユラム」が、山縣五十雄氏にも「黃金虫」の譯があるとのことである。ずつと下つては森鷗外氏に「モルグ街」の飜譯もあるが、年代順に云ふならば、讀賣新聞に譯載したといふ篁村氏の「黑猫」が、恐らく一番古いであらう。しかし、探偵小說の飜譯者としては、廣く外國の作品を漁つた點で、また廣い範圍の讀者をもつてゐた點で、何と云つても黑岩淚香氏を推さねばなるまい。淚香氏の飜譯については故上野仙八君の熱心な研究があるが、それによると今日からしても全く敬服に値するほど多方面にわたつて作品を譯出したもので、我々の知らない作家もかなりに多いやうである。尤もガボリオとボアゴベを主として選んだのは云ふまでもないことで、年代順に云つて都新聞に掲載された「法廷の美人」は別として、單行本となつた最初の「塔上の犯罪」が、ボアゴベの Crime on the Tower であり、翌二十一年十一月に出た「人か鬼か」がガボリオの Widow Lerouge であり、その翌二十二年の「他人の錢」が同じくガボリオの Other People's Money であり、小說飜譯の末期、明治卅八年に出て、最も世に知られた「巖窟王」までがボアゴベの作であるといふ風に、數十に上る淚香物の材料を一々點檢してゆくと、ウイルキ・コリンズから、グリン女史をはじめ、當時海外の大衆文壇を賑はした作品は殆ど漏すところなく涉獵しつくして、その傑作のみを巧みにも譯出してゐるのであつて、その炯眼と努力とは寧ろ驚嘆に値する。それもガボリオなり、ボアゴベなりがその處女作を出したのが一八七二年から七五年で、淚香氏が「塔上の犯罪」その他に手を着けたのが明治十九年から二〇年、即ち一八八六年の前後であるから、原作が世に出てから十三四年の後であつて、今日尚ほガボリオやボアゴベの作が飜譯紹介されつゝあることを思ふと一層の敬意を表せざるを得ない。淚香と同じく探偵物の飜案を試みた人に丸亭素人と彌亭笑船とがある。素人に「探偵ルコック」の譯があるが、何と云つても探偵小說の飜譯移植に力あつたのは淚香氏で、同時に隱れたる功勞者として森田思軒氏を推さねばならぬ。思軒氏は淚香氏よりも以上に當時の新しい海外文學を涉獵した人である

が、ユーゴーその他主として純文學作品の紹介に努め、大衆文學の方面は涙香氏に讓つたと思はれる筋がある。涙香氏が探偵小説に手をつけるやうになつたのも、恐らく思軒氏に負ふところ少くあるまいと思ふ。

とに角、涙香氏の探偵小説飜譯は明治二十年に始り、卅八年の巖窟王に至るまで數十篇に及んでゐるが、それは要するに涙香氏の努力と譯出者としての手腕を語るもので、日本の探偵文學の發生と發達には、何等の交渉もないと見るべきであつて、記述は再び外國に還らなければならぬ。

三

コーナン・ドイルのホームズ物語は探偵小説の典型的作品であり、教科書である。彼はポウが築いた骨組をとり、ガボリオの手法に學んで、古い殼をすて、新しい工風をこらして、全然新しい作風を示し、精錬され淨化された標本的作品を産み出したのである。

一體、ポウに創りヒユームに至る約五十年間を假りに探偵小説發達第一期として、これを通觀してみると、無論ポウの影響が與つて力あることは云ふまでもないが、一面からすると探偵小説の上にも當時の大きな時代思潮が、重大な關係をもつてゐることは爭はれない。即ちローマンティシズムから自然主義へのあの大きな渦卷が、やはり探偵小説の發生にも、またその發達にも非常な力をもつてゐるのである。つまり理智の世界への一大轉換であつた自然主義運動の大衆文學へ向つての進出が、ポウの蒔いた種子に培つて、コリンズを生み、ガボリオを生んだと見るべきで、敢てヴィドックをまたずとも、ゾラ、ユーゴーを始め好んで人間惡の世界を描出した當時の文藝作品には、探偵的興味をもつたものが少くないことも考慮に入れる必要があらう。それだけに詩人であり、また病的とも云ふべき尖鋭な頭腦の持主であつたポウの作は別として、コリンズにしろ、ガボリオ、もしくはボアゴベにせよ、その作風には初期に於ける自然主義文學の影響が甚しく、プロットは複雜を極め描寫は精緻と云はんよりも寧ろ冗漫に流れて、探偵的興味は時に傍系視されると云つた風なものが少くなかつた。それがドイルの出現と共に全然一掃されて、直截、簡勁、平滑を特徴とする近代探偵小説の新しい作風が生れたのである。

ドイルについては多くの言葉を用ひるまでもなく、むしろ彼によつて新時代を劃された探偵小説界が、その作品によつて如何なる刺戟を受け、如何なる方面に新機軸を求めんとしたかを尋ねるべきであらう。

ホームズの出現について、簇出した探偵作家の中で、先づ指を屈すべきものがアーサー・モリソンである。彼の努力は探偵小説に實在性を附與せんとした點にあつて、その主人公マルテン・ヒユイットは全能的なホームズよりも明に多分の人間味をもち、作品全體としてもかなりの現實味をもつてゐる。同じくオースチン・フリーマンの「ソ

ーンの「ソーンダイク博士」も、ホームズ物語から轉回しようとして科學探偵小說の新領土を開拓した作品である。共にドイルに刺激されて生れ出た諸多の作家の代表的なもので、前者は明察神の如きホームズの代りに實際的な法律家を以てし、後者は全然新しい科學者を案出して探偵小說の一つの型を破らうとしたのであつた。さう云へば「紅はこべ」や「隅の老人」を以て有名なオルチー夫人が、題材をフランス革命にとつたのも歴史の方面に新展開を試みたものであり、またチエスタトンが「師父ブラウン」によつて、單なる探偵的興味以外に、宗教道徳の方面から人間の犯罪性を見ようとして、犯罪そのものよりも犯罪心理の解剖に力を注いでゐる事實など、すべてドイルによつて完成された探偵小說の型を打破しようとしたものである。彼等はさうした意味で、いづれも近代探偵小說史上に特筆すべき功勞者であるが、作品全體としてはホームズ物語を凌駕するほどの成功を收めたとは云ひがたく、またそのリアリズムにおいても、ドイルよりは一歩を進めたとは云へ、依然として推理と分析に主力を注ぎ、コリンズのカツフ探偵に見るが如き實在性は見られないのである。

彼等とは全然別途の方向に、新しい探偵小說を生み出して成功したものに、佛蘭西のモウリス・ルブランがある。怪盗紳士として現れ、後半犯罪搜索に從事して、驚くべき天才的推理と冒險に讀者を忘我の境に導くアルセーヌ・リユーパン物語は、とも角もポピユラーな點に於て、ホームズ物に匹敵する讀物である。同じく佛蘭西に「黄色の部屋」の作者ガストン・ルルーがある。彼には「一夜の秘密」「黒衣夫人の香」等雜多の作があるが、殆ど見るべきものはなく、「黄色の部屋の秘密」のみ珠玉の如く光つてゐる。

なほ探偵作家として知られた人々に、英國にメーソン、フレッチヤ、クリスチー、フイリッポット、ビーストン、ウオーレス、ハンシヨウがあり、米國にマッカリ、ランドン、ヴン・ダインがあり、佛國にマシヤールがあり、瑞典にドウーゼ、ヘルシルがあり、その他相當著名ある作家を一々擧げ來れば三四十にも上るであらう。

で、それら現代作家の作品の傾向はどうかと云ふと、大體に於て本格派の傳統を踏んでゐることに間違ひはなく、また近代科學の影響が著しいこと等も認められるが、それよりも一層顯著な事實は、海外の探偵小說界の中心勢力をなしてゐる英米兩國作家の作風が、最近の十余年間に全然相容れざる各自の傾向をとつて來たことである。英國の作家が何處までもドイルの傳統により本格探偵小說の主流を歩んでゐるに反し、ポウを生みグリインを生んだ米國の作家は、悉く低級な映畫式興味をねらつて、目まぐろしいプロットの變化を主とした通俗作品に甘んじてゐるのである。我々から云はしむれば、これは明に邪道に墮したものであるが、その由つて來るところはアメリカの生んだ近代文明の餘波であつて、安價なる刺戟と興味を渇望する物質文明の中毒患者を讀者としなければならない以上、それもまた已むを得ない傾向であらう。そのアメリカに理智的推理と心理的搜索とを上揚

てする新味ある青年探偵フィロ・バンスを提出したヴァン・ダインの出現は、米國の探偵文壇に對する皮肉な反抗の聲とも見られよう。

英國作家の作品に最近目につく傾向は、モリソン、フリーマン、の後を繼いだ新しい作家によつて、十九世紀後半からドイルに至る作品に多い直覺的推理をもつた論理學的犯罪搜索家が漸く影をひそめて、保守的な實際的探偵が活躍しだしたことである。曾て倫敦警視廳に樞要な地位を占めたジョージ・デルノー、さてはウイルス・クロフツ、エ・フィルディングの諸作がそれである。その主人公はいづれも在來の探偵に較べて、より人間的であり、實際的であつて、犯罪の搜索と解決に讀者をして眞に首肯せしむるものがある。かうした傾向は、探偵小說に淸新の興味と、文學的興味とを併せもたうとするので、探偵文學が當然見出すべき新しい進路であると思ふ。

## 四

海外の作品については、言ふべきことの半ばをも盡してはゐないが、後はまた他日に讓つて、今一度振返つて日本の新しい探偵文壇を瞥見しよう。

淚香氏の飜譯小說が多大の感興を呼んだ後をうけて、岡本綺堂氏の「半七捕物帳」が江湖の喝采を拍したことは人の知るところ。その半七物語の材料のそこばくが海外作品、或は支那の文獻に負ふところあるとしても、それは綺堂氏の洗錬された手法と、探偵的興味の點から殆ど批推の餘地なきあの物語の價値を寸毫も傷けるものではない。ついで谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏、並に里見弴氏等の作に、當然探偵小說と呼ばるべき傑れた多くの作品があることも世間周知のことである。これら諸家の作品は直接間接に日本の探偵文學の發生と發達を促したもので、ボウの三部作以外の諸作までが探偵小說の範疇に入れられてゐると同樣、日本の探偵小說史に重要な位置を與へらるべきである。

が、日本の探偵小說界を今日の隆盛に導いた直接の功績を、過去十年間、主として海外作品の紹介につくして來た雜誌「新青年」と、その飜譯者に歸することに、恐らく何人も異存はないであらう。世界各國の代表的作品を殆ど網羅的に飜譯し紹介した努力は、やがて眞摯な創作家の輩出を促し、僅々六七年の間に英米につぐ多數の作家と幾多の傑れたる作品を世に送つて、日本の大衆文壇に未だ見ざる光彩を放たしめたのは全く同誌の力である。

日本の探偵小說界を代表する一人は故小酒井不木氏であつた。博學と多才、殊に稀に見る俊敏明澄の頭腦をもつて、先づ犯罪並に犯罪文學の研究より入り、ついで自ら創作の筆をとつて珠玉の如き幾多の名篇を示し、探偵文壇の發達に寄與するところ甚大であつた。殊に氏に感謝すべき一事は、一般讀書界の探偵小說觀を覺醒すると同時に、日本の探偵文壇を最も健全なるコースに指導したことである。その意味に於て小酒井不木氏が犯罪文學研究、並にその作品のみならず、一般

犯罪の研究によつて日本の探偵小說界を振興せしめた功績は永久に記念さるべきものである。

小酒井氏と並び稱すべき作家は、江戸川亂歩氏である。眞劍なる作家的態度と、異色に富むその作品は、日本のみならず歐米の探偵文壇にもその例を見ざるところであつて、「心理試驗」その他の傑作が、もし海外に紹介されるならば、氏は明に世界的探偵作家としての地位を與へらるゝであらう。

甲賀三郎、大下宇陀兒の兩氏は本格派を代表して第一線に立つ作家である。共に筋の構成に、特異の手腕を有し、一つは輕快の筆致をもつて、一つは流麗の文章をもつて知られてゐる。その他、平林初之輔、横溝正史、山下利三郎、夢野久作、久山秀子、水谷準、牧逸馬、橋本五郎、濱尾四郎、川田功、山本禾太郎、城昌幸氏等それ〲特色ある天分に惠まれた多くの作家があるが、今はそれらの人々について寸評を試みる閑もない。

要するに、日本の探偵小說壇はその發生の若々しいに似ず、歐米のそれに比較して決して劣るところない健全な發達を遂げつゝある。まだ日が淺いために長篇に見るべきものが少いのは是非ないとして、短篇の方面では、海外作家の作品を凌駕するの域にまで達してゐるものも多い。日本の探偵文學がかうした順風に棹したのは、水先案内となつた小酒井、江戸川諸氏に負ふところ少くないは素よりとして、その主要なる素因は延原謙、妹尾韶夫、星野辰男・田中早苗その他の有力な飜譯家諸氏によつて紹介された海外の作品が、讀物となつて、探偵文學に共鳴するアマチュア作家が眞劍の努力を積んだ結果であつて、私は探偵小說愛讀者の一人として、それらの飜譯者諸氏に常に感謝を捧げる次第である。

# 新刊批評

## 水上瀧太郎氏著 「果樹」

久保田万太郎

『果樹』は「果樹」「鳩」「花束」「女事務員」「罹災者」「兇双」「素人小説家の經驗」「命の親」「晩年」等の諸篇を收めた水上瀧太郎氏の第十一集である。

このうち「果樹」と「鳩」と「花束」とは氏の初期の作風に屬し、「女事務員」と「罹災者」と「兇双」と「素人小説家の經驗」とは、その後氏のまへに展開されたあらたな作風に屬してゐる。すなはち「果樹」その他はあくまで純一な詩情に浸つて筆を遣つたもの、「女事務員」その他はことさらその「詩」の粉飾を捨てて、より深く、より大きな人生に直面しようとする氏の一轉機を示したものである。――「果樹」その他と同じ道をたどつたものにかつての「蟲の命」があり「邂逅」があり「喧嘩」がある。さうしてそれは、遠くかの「ぼたん」「うすごほり」に出立してゐる。「女事務員」その他と同じ道をたどつたものにかつての「動人」があり「大阪」があり「日曜」があり「大阪の宿」がある。さうしてそれは……いふならばそれは、遠くかの「暗」「評議員會」「良縁」等に出立してゐる。決してそれは氏に來た偶然の轉機ではなかつたのである。

氏の他の、われ〳〵昔からの讀者を喜ばせ、且、力强く感じさせるものはつねに決してかりそめでないその「態度」である。その筆を遣る態度である。この『果樹』の場合にあつても、そこにその二つの系統●、そのそれ〳〵の諸篇をつらぬいてゐるたゞしい用意と深い配慮とをだれもがはツきりみ出だすであらう。――たとへば四つに組んだすまふの、あくまでさう堂々と四つに組んだ大關ずまふの、器用な小手さきのあへしらひ、みためだけに仕事をあたまで嫌つたのが氏の作のすがたである。――一つにその勝つたときのことにして、敗けた場合の寂しさのより強く感ぜられるのも重厚なその取口によつてゞある。――忌憚なくわたしはいふであらう、「果樹」と「鳩」との完成感のさういつてもつゝましいまへにいかにその「素人小説家の經驗」の失敗のあらはに眼立しいことよ……

あくまで强い正義感は、氏の、『處女作』（第一短篇集）以來の道づれである。『その春のころ』（第二短篇集）にも、『海上日記』（第四短篇集）にも、『大空の下』（第六短篇集）にも、『亞米利加記念帳』（第七短篇集）にも、さうして勿論『大阪の宿』（長篇）にも、影の形にそふの逆、むしろ形の影にそふかのやうにつねにその歩みをともにして來た。ことに、その後、あらたな作風の

そこに展開されてからいよ〳〵その存在はあきらかになつた。と同時に、漸くその正義感にいたはりが出來て來た。――いたづらに強いばかりでなく、うちへ溜める力のしづかに、しづかにさうして冷かに、弱いもの、はかないもの、幸うすいものゝうへにそそぐ泪はいよ〳〵しげく、いくぢのないもの、だらしのないもの、未練たらしいもののへおくる嘲りのかげはいよ〳〵濃くなつた。――まへのものゝいゝ例を「花束」の靜枝にみ、あとのものゝいゝ例を「罹災者」の大田原三造と「兇刄」の板倉傳次郎とにわたしはこれをみた。――わたしはいま戯れに、花束の靜枝をもつて、「うすごほり」「途すがら」以來の、氏にとつての永遠の女性とこれを呼ぶであらう。

卷末の「命の親」と「晩年」とに、わたしは、さらにまた展開するであらう氏のもう一度のあらたな作風を感じて今後の氏のいよ〳〵多望、なるべきを知つた。「命の親」はしばらく措く、『晩年』の、本格すぎるほど本格の、秋の鹿にしきをさへおもはせるすまふ振りの、その水のやうにしづかな作者の心もち、その大空のやうにきはまりない作者の視野。――つとにわたしの期待してゐる長篇作家水上瀧太郎の出現の、この作によつて圖らずその一歩をふみ出してゐることをみ出し、一人禁ずることの出來ない欣快をわたしは感じたのである。(東京市芝區愛宕下町改造社發行・定價貳圓)

新明正道氏著

## 「群集社會學」

松本潤一郎

六月の大氣のやうな現代ではある。霽るれば難しい陽が仰がれるであらう。霖雨。人はその内に激しい意欲にさいなまれ、際知らぬ焦燥に驅られて息づく。若し低迷する暗雲のあなたに異様の怪物の影が捕へらるるならば、それは現代社會に於ける群集に譬へられる筈である。革命と擾亂と暴動と、さてはデモンストレーション、ストライキ、此等のものゝ間を彷徨し、そこに躍動するのは群集といふ亡靈ではないか。我等はルボンが群集を以て現代を表徴する存在となしたのに同感し得る。社會狀勢を審にせんとならば、怪物「群集」の解剖學と生理學とを明にしなくては徒勞である。

本邦學者の間に從來餘り注意を喚起せずに居つた此群集といふ存在物の包括的な學的考察を企てたものが本書の内容をなす。著者は例の懸敏な把握力に訴へて問題をこなして居る。群集の概念と特徴、その組織や過程の分析から始まり、社會問題として群集の淵源の講究、群集への對策、それの政治的關聯等を闡明する。分析や闡明は常に著者の斷案として生きて居る。之を群集社會學と題するのは、群集を單純な心理現象と見ずに、一個の社會形態と見做すからで、社會心理學的研究、即ち所謂群集心理學を社會學の俎上にまで引上げたからである。グラハム・ワーラスに曾て、群集心理學の題

材は再說と再吟味を要求する」と嘆じたが、新明氏は此再說を社會學的に仕遂げんとする。

テオドール・ガイゲルの群集論は假令フイアカント的にではあるが、矢張り群集を社會學的に再吟味したものであるから、本書と對照して興味を深うする。ガイゲルは群集概念を考察して、客觀性を具備する社會集團となし、革命群集などの個々の現實群集はその基層と認められる所の、否定意識を持つ「陶汰の殘滓」即ちプロレタリア大衆の表現現象と考へる。群集の本體は夫々の現實的群集ではなく、むしろその背後に潜む社會大衆であるといふのが彼の再吟味の基調であるが、新明氏のは現實群集と社會公衆とに共通するフロイド的リビドの活躍を群集的特質に擬する。其意味では精神分析學を群集研究に應用したかのマーチンに一致する觀點が本書を支配する。

著者は群衆諸學說を卷末に摘要し批判するのであるから、研究者への好指針となるが、本書の實質は反って一般群集事象の解明からして、現代社會への一展望を提供する用意に滿ちる。その際氏の採る立場が社會學的であり、原理をフロイド說に依據せしめた事を指摘して、此書が又學的に嶄新なる企圖に出でたことを高く評價したい。（東京市本鄕區切通坂町一九ロゴス書院發行・定價九十五錢）

## 新刊紹介

◆**靈華追悼畫集**（先頃惜しまれて物故した吉川靈華畫伯追悼のために關如來氏の編したもの卷首には畫伯の出世作菩提達摩より一昨年秋の畫壇に高評だつた離騷を始め、氏一代の傑作約九十圖を載せ文に畫伯の遺文數篇が收められてある。その中の一篇「傳統の意義」を讀むと、短文ではあるが畫伯の藝術家としての高き氣魄を窺知し得ると共に、鏑木畫伯のいへる如く如何に「善き學者であり善き批評家」であつたかをはつきり知る事が出來る。卷末には平福百穗、脇本樂之軒、鏑木清方、松林桂月その他の諸氏の追憶記またとりどりに人として藝術家としての畫伯を傳へて餘蘊がない。尙本畫集賣上の一端は印稅として遺族に贈る由。四六倍判東京市下谷中淸水町一五・會心舍發行・定價參圓八十錢）

◆**勞働組合法の生成と變轉—英國**（著者は序文に於て英國が勞働組合運動の祖國であり、勞働組合法に就いても最も古く且多樣な經驗を持つてゐるが故に英國を研究對象とした事を述べてゐるが、資本主義日本に於て近く必ず現實の法案の形に於て問題となるべき勞働組合法を迎へん日の爲に一讀さるべき好著である。——山中篤太郎著・東京神田區表神保町二・同文館發行・定價四圓八十錢）

**ロマノフ朝の終末**（大竹博吉監輯・ロシヤ大革命の裏面史譚選輯の第二輯で、退位前後のニコライ二世を中心にロシヤの大動亂記である。東京麴町區內幸町一ノ五・ロシヤ問

題研究所發行・定價參圓）

◆**情熱的論理**（北村兼子著・菊池寛氏が現代の才女と序文で呼んでゐる著者の近業姦通考以下才筆才藻の近代風景五十三篇を集む・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**土の精神**（山村暮鳥著・東京小石川區白山前町二四・素人社書店發行・定價貳圓）

◆**スパイクの跡**（人見絹枝著・國寶的選手人見女史のスポーツ界に志を立てゝからの自傳であり戰ひの歷史である・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**原阿佐緒抒情歌集**（原阿佐緒著・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**永井ゑい子詩文**（永井元編・米國サンフランシスコ市ポスト街六八五永井元氏發行・一三四六頁に亘る大部の遺稿集・非賣品）

◆**議政壇上を直視して**（渡邊貫知郎著・東京府下蒲田町御園二二四・普選徹底會出版部發行・定價壹圓五十錢）

◆**綠玉冠事件**（コナンドイル作・延谷正雄譯註・東京神田表神保町一・健文社發行・五十錢）

◆**リンカーン**（內ヶ崎作三郎著・リンカーン誕生百二十年祭記念修補改版寫眞八葉入・東京京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**グラッドストン**（永井柳太郎著・東京京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**在京朝鮮人勞働者の現狀**（東京府學務部社會課編・社會調査資料第七輯）

◆**性教育**（山本宣治著・全八卷山本宣治全集の第三卷）　**性と社會**（同上第四卷）（本全集は一般の豫約出版と異なり各卷自由購讀の便あり、高倉輝、安田德太郎兩氏の編輯で倉田白羊氏の裝幀、四六判四三四頁、背革の氣持のいい書物、性及び性教育に關心をもつ人の必讀書・東京本鄉區湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行定價壹圓八十錢）

◆**哲學序說**（木村秀吉著・現代哲學のもつ重要なる諸問題の全姿相を解說論述しつゝ哲學が人間生活の上にもつ實踐的な價値と意義を明白にすべく努めつゝ詳述した頁緊なる哲學概論。――東京市本鄉區眞砂町一五文書堂出版・定價參圓參十錢）

◆**詩集野**（木山捷平著・東京小石川區白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價八十錢）

◆**Voici ce qu'on a fait de la Georgie** (Henri Barbusse アンリ・バルビュス著・Ernest Flamarion, Editeur. 26, Rue Racine, Paris 巴里エルネスト・フラマリオン社發行・定價十二フラン）

# 新刊書讀餘錄

福田德三

近來ブック・ルヴユーと云ふことが、可なり盛んになつて來た。これは甚だ賀すべきことである。日本では新刊書は必ず新聞廣告をすることになつて居るが、歐羅巴では其れは殆んど見當らぬ。其代りブック・ルヴユーが盛んで、讀書子のよき相談相手となる。此頃は日刊新聞中其れを試むるものが、殖へて來た。就中讀賣新聞が、眞の善い意味で、其れをやつてゐる。廣告部の羈肘を受けないで、而して然る可き專攻の人の手に成る評論を多くのせてゐる。其姉妹誌とも見るべきものに『ブック・マン』と云ふ雜誌が出來、年に一回か二回、更らに其新刊欄を一括して新刊書の總目錄を發行してゐる。發行所は、池袋の圖書研究會で、發賣店は、たしか岩波書店であつた。これは、讀書子に取りて便利調法此上ないもので、內務省へ納本された限りの新刊書を悉く網羅してある。又、此れに洩れた諸官廳發行の出版物は、官廳刊行圖書目錄と題するものが、印刷局から刊行されて、すでに二冊計り出てゐる。此二つさへあれば、先以て我邦の新刊書の全體を一目の下に知り得るわけである。其外に出版業組合の編纂刊行する總目錄があるが、これは少し後れるから、矢張り圖書研究會出版の目錄の方が一般讀書子には便利であらう。（會社銀行其他の團體の非賣品の出版物については、まだ此便が具つて居らぬは殘念なことである。）

吉野博士は、嘗て中央公論で、新刊書の批評をされたことがあり、我〻は大いに參考の便を得たことである。此頃は中央公論を見ぬから、其れが繼續されてゐるや否や知らぬ。私は迚も吉野博士の樣に博覽強記でないから、其眞似は企てゝも及ばぬことであるが、此頃所〻の新聞社、雜誌社などから推薦に値する書物についての問合に接するが、一〻答書を差出す遑を見出さない。ソコデ、思ひ付いて、近頃讀過した新刊書の中、讀書子に推薦したいと思ふもの若干について、批評とか紹介とか云ふ程の者でなく、ほんの讀後の感想を雜談的に書き綴つて見た。『改造』では時々これを揭げて與れるとのことであるから、草稿の一部分に若干朱を入れて、玆に差出すこととした。殘りの部分も或は追つて揭げて貰ふかも知れない。

先年物故した、ジョージ・アンウヰン氏は、『其れについて、何か薦むるに足ることある書物にあらざれば、決して評論』せざることを主義とすと公言してゐた。私の此文も、先づ其心持で綴つたものである。

## （一）總選擧讀本（普通總選擧の第一回）

藤澤利喜太郎著（岩波書店發行）

此書は、昭和三年二月二十日に行はれた我邦始めての普選による總選擧の結果を統計的に研究するを目的としたとは、著者の自ら云ふところであるが、單なる統計研究のみに止まらず、選擧制度に關するあらゆる問題を、極めて分りよく、而も、精密に取扱つてゐる。著者が種々論考の結果、書名を『讀本』としたのは、內容を讀まない內は、或は例の流行を追ふものではないかとの邪推を起させるかも知れぬが、全篇を一讀過すれば、其題名の如何にも自然的に而して恰好なることを見出さゞるを得ない。第一節には、我邦に於ける普選法成立の經過を敍述してゐるが、其れは乾燥無味な經過列擧表でなく、選擧法の根本問題の重要なものについて說明を加へて、其れらの問題が、我普選法に於いて、如何解決せられたかの經過を敍し、更らに、其利害得失を、公平な立場から批判を加へつゝ、敍述の筆を進めてある。『讀本』の名は、此一節だけについても、すでに、內容を現はすに最も適切なものと感じた。甚だ御恥しい話であるが、私自身此一節に敍述してあることの半以上は、此書によつて初めてこれを學んだのである。僅か五十餘頁の一節であるが、著者の敍述の如何にも平明簡潔で而も要領を脫して殆んどすべての問題を網羅してあるが爲め、此節を讀んだ人は、必ず卷末まで讀み續けざるを得なくなる。著者の立場は、極めて公平であるが、其れは、決して無味、無色と云ふ意ではない。著者は徹底した普選論者であり、否比例代表法に關する熱心なる研究者であり、而して、其政治上の意見は、——私は、玆に、案外にもと云ふ添語を許して頂きたいと思ふ——極めて進步的なデモクラチックなものであるのである。私は、色々な機會に於いて、著者とは、公的に、學問的には交際はしてゐるが、また一度も、私的會話を交はしたことなく、唯漠然たる感想で、著者を、普通の意味で我邦數學の大先輩にして、統計學開拓の先驅者、貨幣制度についての豐富なる意見の保持者とのみ思つてゐた。然るに、此讀本を讀んで、著者の案外にも、意外にも、甚だ徹底したデモクラットたること、而して、其デモクラシーは我々の樣な漠然たるものでなく、一々實證的に具體的に、就中選擧法の上について、丹念に商量せられたものなるを知つて、實は驚いたのである。著者は我が小野塚、美濃部兩博士と、寸分異らざる意味に於いての——少くとも、選擧法の上に於いては——進步的論者である。而も著者は、唯だ議論をする計りでない、其主張、其抱負を、着々として、我邦の實狀の上に實現せんとする熱心の漲り溢れたる、其點に於いては、或は、小野塚、美濃部兩博士を凌ぐかの概を此讀本の隨處に示してゐるに至つて、私は私の驚きを更めて高めざるを得なかつた。

第二節以下は、第一節の出立點の上に立つて、我國缺格條項、基本資料、總選擧の結果の批判、黨派別的票數、選擧干涉の統計的研究を數節に分つて、敍述——といふより、むしろ、論述——し、最後に、第七

ゐる。

節に至つて、我が代議政治の進趨を論じて第七節の初めに、『二大政黨の妖夢』と云ふ一項がある。曰く『我が邦に於ける政治的觀察を誤らしむる重なる原因は二大政黨對立の幻想である』と。私は私の目を疑つた。何となれば、二大政黨對立論は、デモクラットの常套語の如くであるのに、今や其のデモクラットたること寸分の疑ない著者が、此の斷言を敢てするは、案外千萬なことであるから。而して、其れは、私から見れば、實は眞に徹底したデモクラットの主張其ものであるから。私は明治三十八年から約十五年間慶大の御情けを蒙つて辛ふじて生きてゐた。しかし、私が最も不快に感じたことは、鎌田塾長の二大政黨對立論を何十回となく拜聽せざるを得ざることこれであつた。塾長の地方講演は何處も、官學私學併存の功能論で、其例として、日本からは赤穗義士の始末について、官學者の愚論に對抗した、私學者の正論——義士に死を賜ふ可し云々の——の例と、西洋からは、イギリスの二大政黨の御利役論であつた。陛下の政府と、陛下の反對黨との二大黨の對立、これがイギリスの政治の世界に冠たる所以である。其の如く、學問界にも、官學と私學とは二大分派と對立せさる可からず云々と云ふのが、前後五六十回、私が聞かされた御談義であつた。私は、實に馬鹿々々しいことと思つた。ソコデ明治四十年頃であつたか、慶大の講演會で、『二大政黨對立の愚論』と云ふ講演を敢てした。其以來色々な機會で、保守、自由對立の英國の政界は、必ず變化する、而も遠からず根本的に飜されると斷言しつゝあつた。今此書の著者の口から同樣のことを聞く、私は實に驚かざるを得なかつたのである。

此書の中から、痛快な文句を引用しようとなれば、其れは實に限りなくある。其一例をあげよう。『學校教育を卒へた後に、富豪の婿となつて時めく暖衣飽食の徒には、選擧權があり、就職難の深淵に呻吟し、具さに生活難の辛酸を嘗めつゝある貧乏人は先づ以て公私の救恤を受けてゐるや否や、其の身元調を受けざれば、選擧權の有無が判然しないとは、如何にも、悲慘な矛盾である』（六一頁）

『然るに何事ぞ、此の良好なる結果を無視し、幾多弊害の記憶尚は新なる小選擧區制へ逆戻せんと主張するが如き、咄々怪事』『一種の小刀細工によつて作爲的に之を否定せんとし、……恰も治承の昔、淨海入道が入り日を麾いたのと同一の暴逆的心理を暴露するものである』（二二四——二二五頁）

『小選擧區還元によつて、一時的に無産黨の進出を阻止せんとするが如きは、偶ゝ多年間議會非認論を誘起する危險を孕む、國家永遠の生命から見れば、銘々の利害といふが如きは、菜の花に戯る蝶の如きものである。』（二四九頁）

此書の最重要な内容を爲す第一回普選の統計的研究と調査とについては、元より、私の冗言を容るゝを須たぬ。實に限りなき

豐富な資料が滿載されゐて、而して、其れは、何れの事項についても、單なる統計の記述でなく、活きた事實を其活きた姿に於いて、我々の眼の前に活動せしめてゐて、平々坦々たる事實の物語りの中に、著者の熱烈なる主張、卓越した抱負が織り込まれてゐる。如何な粗末な讀み方をするものでも此書に對しては、卷末まで倦怠を覺ゆることは、決してないと信ずる。

私は從來衆議院議員の立候補應援に屢々參加したことがある。此頃は、府會や町會の其れにも興味を有つ樣になつた。然るにも拘らず、實は選擧制度については、殆んど何物をも知らなかつた。今此書を讀んで慚汗背を沾すと共に、此書を便りとして、今後は、少しでも、此の問題に思を潜めねばならぬことを痛感した。少くとも、此讀本一冊丈けは、苟くも選擧權を行使するものは、必ず一讀して置かねばならぬ。繰返して云ふ、『選擧讀本』なる名は、此書に適するに、此上なき適當なものである。私は、これが藤澤博士の著であるから、斯く言ふのではない。此書が他の誰人の、――全く未知無名の人の――筆に成るものであつても、此内容を備へたものならば、私は必ず言はんと欲する。此書は、萬人必讀の讀本であると。唯だ其の目的の爲めには、此書の定價は高きに過ぐ、モツト細字にくみて、頁數を減じ、手頃の本としたら、後藤新平氏の『政治の倫理化』くらゐの程度に普及するであらう。否、必ず普及せしめねばならぬ。殊に府會や町會の選擧にさへ、出勤時間を心配しつゝ投票場へ蝟集して、おとなしく順番を待つサラリーマン、印絆纒にゲートールをつけて、手に入場證をつかんで巡査の叱言に腹も立てずに立ち暮らす勞働者諸君と、朝の一時間二時間を空費させられる樣になつた此頃、私は、自分に力があるなら、此書一本づゝを、其れらの人々へ進呈したいと念ぜざるを得ざるものである。

## (二) 民法原論第三卷

### 債權總論上

富井政章著（有斐閣發行）

藤澤博士の書は、云はゞ餘技に屬するものと云へよう。其れにしても他の學者が、恩給に徒食逸居して居る間に、右の如き力作を出されたことに驚いた私は、更らに富井博士の此の新著に接して、驚異の念を高めざるを得ない。我々は、必ずしも怠けてはゐないつもりであつたが、富井博士の高齢を以てして、而して、蒲柳の質、永年の宿痾に惱んでゐる人に、其專門の學科について、此新刊あることを見て、我々は一には愧ち、一には奮發心を著しく刺戟せられざるを得ぬ。

債權の問題は、民法中でも、私共に關係の深いものであるだけ、私は一々丹念に各章節を追つて熟讀した。博士の民法原論第一、二の兩卷は私共が民法について、僅に熟讀した最初の邦文の書物であつて、當時すでに、其文章の簡潔、其論述の森嚴、一字

一句を苟くもせず、含蓄の甚だ深いものなるに敬服したものである。私共の樣に、極僅かしか法律の書物を讀まぬものには、普通の純法律書はとても全篇を通讀する忍耐を有ち能はぬ。要所〻〻を飛讀にする以上には、殆んど出來兼ぬることである。正直なことを申せば、邦文の法律書で、私が全篇を通讀したのは、學生時代には、江木衷氏の民法論ぐらゐのものであり、其後には岡松參太郎博士の無過失損害賠償論と牧野英一博士の諸著――但し刑法を除く――ぐらゐのものにすぎない。此頃は、勝本氏、小町谷氏、岩田氏、孫田氏、穗積氏の諸著ありて、此れらは、飛讀みするに忍びないものである。尤も、老穗積博士の諸著、宮崎博士の諸論文、其れらは、一字一句を嚼するほど讀んだが、其れは普通の意味にての法律書と云はんより、より大なる意味にての法律文化學の書である。また美濃部、小野塚、中田諸氏の著作や論文も、大抵は讀むが、何れも、法律書と云ふつもりでない、もつと廣い意味に於てゞある。

然るに今富井博士の債權總論は最も嚴密の意にての法律書であり、而して、右擧げた諸學者の著作とは、文體の上に於いても著しく異るものである。然るにも拘らず、私は全篇二百七十二頁を一氣に讀過し、更らに亦た初めに戻つて再び讀み直して、節毎にノートを取りつゝ考一考を加へて行つた。何となれば、此書は、唯一回讀過して架上に積み上ぐるには、餘りに惜しいものであるから。

著者の議論には、私は勘からざる――否、殆んど各項に渉つて――異存を惹き起すことなくして、已み能はなかつた。殊に、金錢債權、就中利息、損害賠償債權、就中責任原因と因果原因などについては、私は經濟學研究者の立場から、著者の說に追從することが、如何しても出來ないものである。其れと共に、自分の有つてゐた今迄の考の如何にも、粗末千萬なものであることを、深く反省せしめられた。從つて今玆に異論などを申述べる勇氣は全くない。向後篤と考へる出立點を此書に置く必要を痛感したのである。

## （三）

日本國體論（日本評論社發行）

日本民族論（日本評論社發行）

日本人口論（巖松堂發行）

永井亨著

永井博士は、或意味にては、實に珍らしい學界の掘出物である。而して、數ある博士の著述中玆に掲げた三部作――私は敢て左樣云ふ――こそ、近來の出版物中の掘出物であらう。其中でも、日本國體論は、書題だけを見ると、例のカビ臭いものらしく考へられようが、內容は、全く此の感想を裏切るものである。何となれば、其れは極めて大膽な、併亦た同時に極めて穩健な議論を

平々坦々たる筆路の上に展開してゐるものであるから。

元より、マルキストなどから見たら、其議論は如何にも生温い、或はタイム・サーヴヰングのものとも云へよう。しかし、著者の態度には、回避の跡は一點も見出されない。著者は、衷心から、其議論を考へて考へて考へ拔いたものであらう。其れも單に頭で考へたに止らない。著者は、其燃ゆる心を以て感じ、悟り、憤り、喜びつゝ考へに考へ拔いたものであらう。其れでなくては彼の大膽さは出て來ない。其れと共に、著者は其の鋭い頭を極度まで働かせた。其れでなくては、彼の愼重さは、迚も眞似られるものではない。

日本民族論は、右書よりは、少しく、すべての點に於いて劣つてゐる。しかし、其れは、日本人口論への一のプロローグとして見るときは——其れが著者の欲するところであるか、否か、私は知らないが——成程と首肯し得られる節が澤山に見出される。

日本人口論こそ、著者最得意の題目であらう。日本人口論については、高田、河上、兩博士の論戰あり、那須博士の著あり、其他實に多數の人口論策を以て、我々は惠まれてゐる。去乍、私を以て見れば、永井博士の此書のみが、眞に問題の肯綮に觸れた唯一のものである。私は、日本人口論については必ずしも、著者と同一の考を有つてゐるものではない。否現に人口食糧問題調査會に於いては、最も多くの論戰は、著者と私との間に交はされてゐるのである。然るにも拘らず、私は著者の此書を以て、日本人口論に關する唯一の眞正なる研究を滿載したものなるを斷言して憚らないものである。

## (四) リカルドウの價値論及其批判史

堀經夫著(岩波書店發行)

此書に就いては、別文に簡單に述べてあるから、蛇足を添ふる必要はないが、私は、此書を得て、日本の經濟學研究、必ずしも西洋の後塵を拜するものでない有力の左券を得たことを喜ばざるを得ないものである。

著者の態度には、衒學的なところが毛頭微塵も見出せない。これは、實に珍らしいこと——少くとも、我が經濟學については——である。私如きは、此書に接して、年甲斐もない自分の衒學癖——自分は決して衒つた覺はないが、人に云はれて見れば、一言も辨疏する餘地はない——に、穴にも入りたく覺ゆる。更らに又た、著者は、あらゆる文獻を周到細密に商量考證したにも拘らず、些にても所謂考證家臭い跡を示して居らぬ。就中、著者は、端的にリカルドと其批判者との著書其ものに肉薄し、實に痛ましい程、綿密に、仔細に、其議論について考へて考へて考へ拔いた。此れは、學問の批判としては、實に恐る可き態度である。天下無敵である。私共は一學說を評論しようとするときは、原著以外、其關係文獻の商量に大半の力を消耗して仕舞ひ、肝腎の著者其

もの丶商量には、却つて手薄となる惡習慣の爲めに、年來惱まされてゐる。著者は、此惡習を決然と一蹴して起つた。其英姿は、私共の老眼にも、如何にも水際立つて雄々しく映ずる。

私は、著者が此書を外國文に譯出して汎く世界の學界に問はれんことを切望する。私が此くの如きことを云ふは、故左右田博士の一論文についてを除くの外は始めてのことである。

## （五）貨幣概論

山崎覺次郎著（日本評論社發行）

貨幣の概念、種類及特質、職能、貨幣制度、貨幣の數量、貨幣の價値、同對外價値の六章から成り、別に附錄として法規、統計等を添へてある。四十年に近い學究生活の云はゞ總勘定錄と見るべきもの、一章一節悉く推敲に推敲を重ねたもので、其點からは、富井博士の民法原論と一對を成すものとも云ひ得られよう。唯だ彼者は、形は學生用なるが如くにして、其實は、一の純學問的の書であるに反し、山崎博士の此書は、形も內容も學生用のものである。而も若年の學生を目的とするものでなく、老書生を主たる目的とするものであることは、十二行三十字と云ふ、極めて贅澤な印刷振りがこれを示してゐる。全篇百二十八頁、これを此頃の圓本型に組み込めば、恐らく二三十頁のものに壓搾されて、仕舞ふであらう。其れで定價一圓八十錢とは、近來珍らしい餘裕に富んだ出版物である。（尤も附錄は細字で入れてある。）

著者の議論は、終始一貫して、實に穩健其ものである。從つて此書は、オルソドックス貨幣理論の金科玉條である。誰人が讀んでも、寸毫の差支ない、而して誰人も、必ず一應は首肯せざるを得ざる議論のみを載せてある。尤も、著者は、或程度までは『カルタル・テオリー』を採用されたこともあるが、此書には、其れも極めて穩健な姿に於いて述べられてゐるから、其說の創始者クナップ、否其布演者ベンヂクセンについて非難せられた樣な危險性は、些もこれを見出すことは出來ない。

著者の其昔し公にした論文には、極めて謙遜な態度を以てではあるが、しかし、確信に充ちた獨自の創說が往々にして、含まれてゐる。カルタル・テオリーについて許りでなく、對內、對外な兩價値についても、又問題は少し外へ出るが、購買力平價說についても、更らに、兌換制度については殊に著しく、左樣であつた。然るに本書には、其昔しを知らぬ人にも氣の付く程度には、其れらは現はれてゐない。著者の老境圓熟の姿は、斯くして、遺憾なく此の一書に示されてゐる。其れと共に、研究者たる其の面目は茲には、著しく其影を薄くしてあることは、爭ふことは出來ない。其れは、やがて、我々皆のものが、追從すべき道程であることを、著者は、此一書に於いて示されたものであらう。（四・六・八）




# 一筋の道を歩む者

吉田絃二郎

元、伊太利の牧者たちが吹いた樂器だといふことだが ocarina といふきはめて簡單な樂器がある。形が鵞鳥に似てゐるので oca (鵞鳥) から來た名だといふことである。terra-cotta で作つたものらしいが、ちよつと見たところでは鐵ででも作つたやうに眞つ黒で非常に堅い感じがする。大地震のころであつた、あの地震に燒け出された一友人が、その ocarina だけはポケットに入れてゐて、燒け出されの男とも思へぬほど暢然たる風貌でよく ocarina を吹いてゐた。鵞鳥の脚に當るところが歌口になつてゐて、その翼にあたるところに指を當てるべき幾つかの孔が竝んで明いてゐる。

ocarina は直に日本の素燒の鳩を聯想させた。今日でも田舍に行つたら恐らく昔のまゝの素燒の鳩が見出されるであらうが、わたくしたちの子供時代には道ばたの店頭によく竝べられてゐたものである。頭と翅だけは胡粉や赤い繪具などをほんの一刷毛だけさつと塗つてあつたが、全體は赭土のまゝで、尻の方の孔に口を當てゝ吹けば、ちよつと甘酸つぱいやうな變な土の香がしたものである。子供たちはででつぽう、ででつぽうと森の青鳩の眞似して吹いたものである。

ocarina を吹く聲を聽いた時、わたくしはふたたびわれ〳〵の田園の土の鳩を思ひ出した。

ででつぽう、ででつぽう……きはめて單調な聲である。リズムといふものを感ずることすらもできないほどの短い音である。しかも眼をつむつて土の鳩を思へば、三十幾年前のわたくし自身の環境がよみかへつて來る。三十幾年前の田園の姿が、草が、木が、白雲が、さながらに泛んで來る。土鳩の聲の單調そのものゝごとき metre のなかに何といふ懷郷、憂鬱、悠久、寂寞がこめられてあることだ。靜かにも靜かな、虔しやかな土の聲、故郷の土の聲、日本そのものゝ土の聲がそこから漂ふて來る。

terra-cotta で作られた ocarina は恐らく伊太利の土の聲を傳へてゐるものであらう。ocarina は日本の土の鳩よりもその構造に於いても複雜である。日本の土の鳩は尻の方の孔から息を吹き込むだけになつてゐるが、伊太利の ocarina は歌口を附けるために、鵞鳥の脚にあたる部分を特に作り足してある。それから指を當てるための孔が數個あり、したがつていろ／＼な歌に合せて吹くことができる。ともかく簡單ながら一つの樂器である。ocarina に比べると日本の土の鳩はただ、ででつぽうでででつぽうといふ靑鳩の聲だけのものである。無論樂器ではなく、どこまでも子供の玩具である。

伊太利の土の鵞鳥は技巧を持つてゐる。變化を持つてゐる。その時その折につれて甲の聲を出すこともできれば乙の聲を出すこともできる。恐らく南歐の菩提樹の下の若い牧人たちの唇にあてられては戀の歌をうたふこともできるであらう。そこに行くと日本の土の鳩ははなはだ無器用である。どこまでも四つ五つの子供の玩具であり、焦つても躁つてもででつぽうでででつぽうといふ靑鳩の鳴き眞似をするより他に何の能もない。

伊太利の土の鵞鳥はおしやべりである。

日本の土の鳩は能なしである。

伊太利の土の鵞鳥は terra-cotta であり、日本の土の鳩はたゞの素燒である。terra-cotta は日本の素燒にくらべては堅い感じがする。ocarina と土の鳩の感じはまさに伊太利の terra-cotta と日本の素燒の堅さ柔かさの感じである。日本の土の鳩はあたたかいが、伊太利の terra-cotta の鵞鳥は冷たい。

わたくしは數年前日本に來てゐたリイチが燒いた小さな壺を時々戶棚の中から出して見るが、どうも日本人の作つた壺ほど柔かでない。英吉利に歸つてからは燃料にも困つてゐて、何でも大分遠い田舍から山の木を伐り倒して殘つた木の根株などを汽車で運んで燒いてゐるといふ噂なども聽いたが、日本的、東洋的なものをもとめてゐたリイチの作品も英吉利に歸れば日一日と一層英吉利人的に還元してゆく。結局東人は東人、西人は西人に還らなければならぬ。

伊太利の terra-cotta の鵞鳥が日本の鳩より賢くとも、技巧的であらうとも、敏感であらうとも、わたくしにとつては鈍感な、無技巧的な一本調子のあはれなる日本の土の鳩がなつかしい。日本の鳩の方が遙かにわれ／＼自身に近いものを持つてゐることに氣付く。

十五六のころは親の膝下から離れて學校の寄宿舍にはいつてゐた。そのころは親と別々にゐなければならぬくらゐなら、乞食をしてもいいから學校なんか止めて親のところに歸つて行きたいと思つた。二十代になると時として父への叛逆を思ふやうになつた。故鄕への叛逆者ともなつた。ところでこのころになると妙に故鄕といふものが懷かしくなつて來た。時間的にいへば故鄕に住んでゐた時間よりは、東京へ住んでゐる時間の方が長くなるが、故鄕といふものゝ力が日一日と强く後からわたくしの魂を引きつけてゐるやうな氣がする。いかにも

妙な力である。わたくしがまだ生まれない以前からわたくしの魂のなかに巣喰うてゐた故郷といふものゝ靈魂が、現在のわたくしの裡に眼をさまして來たといふのか。

土の鳩の聲をなつかしむ心が三十幾年振で、現在のわたくしの魂の底に頭をもたげかけてゐる。

三十幾年前の日がよみがへつて來る。胸苦しいほどに。

土の鳩を買つて貰ふ。山の赤土そのまゝの鳩である。窯のなかから取り出されたばかりの松薪の香がする。土の鳩の尻に唇を當てると乾き切つてゐる素燒の肌はわたくしの唇に痛いほどに吸ひついてしまふ。同時に焦けた甘酸つぱいやうな赤土の香が子供心にも不思議なわびしさを喚び起す。

あのころ土の鳩を拵へてゐた男たちも死んでしまつたであらう。そして子供等の手から捨てられた土の鳩とともに靜かに故郷の土に還つてしまつたであらう。土の鳩を買つてくれた父も故郷の土に還つてしまつた。

故郷の土に還るといふことは、このころのわたくしには宗教以上の安心をあたへてくれるやうな氣がする。

伊太利の terra-cotta は伊太利の土である。伊太利の土はどうしても冷たい。堅い。わたくしの魂の安息所ではない。

土の鳩は日本の土である。土の鳩とならば一緒に土に還つてゆくのはむしろなつかしい。故郷の土が、故郷の父の墓がいつもわたくしの後からわたくしの魂を不思議な糸で手繰つてゐる。一年また一年と故郷の土が戀ひしくなる。

わびにわび、生きに生きてやがて疲れ切つて死ぬであらう時、われわれを靜かに眠らせてくれる故郷の土を思ふだけでも胸がほてるやうな感じを覺えるやうになつた。土といふものが人間の魂を惹きつけてゐる力の強さはまつたく恐ろしい。土の鳩の聲のごとくいかにも靜かであり、愼しやかであり、單調であるが、そは一度は一切をかの女の懷に引き戻さないでは置かぬほどの執念さを持つてゐる。なつかしくもあるが、その暗い底力を想像すれば恐ろしいほどだ。

日本の文學そのものが明治大正を通じて terra-cotta の上に踊り過ぎてはゐなかつたか。ocarina の冷たい、堅い、賢い、饒舌な、そしてどこまでも自分等のものでない諧律に合はせてうたつてゐたのではなかつたか。もし現代の文學界に行き詰りがあり、疲勞があるとするならばそれは新らしき方向への轉換もさることながら、さらに一層日本の土自身に還らんとする一步前の佇立であらしめたい。

農民に還れ、土に還れといふ言葉のうちには、その根柢に於いてわれ／＼の祖國そのものゝ歷史に還れ、祖國の土に還れといふ民族的な自覺、民族的な矜持、民族的な意識が潜められてゐるのではないか？階級的思想のさらに奧にわれ／＼の魂に一層強く喚びかける新らしい力が醱酵しかけてゐるのではないか。

かつて叛逆せられたる鄕土、かつて捨てゝかへり見られなかつたわ

れ〳〵の郷土、われ〳〵の祖國の歷史は今われ〳〵に喚びかけてゐるではないか……。ocarina の諸律に踊つてゐる都會人的環境を破壞するために。そこに住み、そこに醉ひ、そこに享樂しつゝある腐敗な歪になつた人間の魂と、sincerity を失つた、思ひ上つた藝術を破壞するために。

×

文藝史上に於ける、外國文學の影響は明治大正を通じてまことに著しいものであつた。わたくしたちはかなり久しい間その目まぐるしい渦卷のなかに放り出されてゐた。まつたくあわたゞしい暴風雨時代であつた。しかも文藝上の暴風雨は一吹き吹いたところで、少かの間を置いてはさらに新らしい方向と力と速さを以て吹きつけて來た。たしかにわたくしたちの時代の作家たちは幾つかの暴風雨に逢ひ、さらに幾つかの暴風雨に打ちのめさるべき宿命の下に置かれてある。

　さてそれ等の暴風雨のなかに置かれ、暴風雨を感じ、叩かれ、矯められて、或ひは歪曲した後の自分自身を考へて見るに、十年一日のごとく一つの靜かな窓から人生を凝視し、溜息し、絶望し、翹望し、氣鬱し、或る時は諦悟し、或る時はさらに疑惑し、低徊してゐるのみである。

　一本の指を外から見る。滿足もしないで皮を剝ぐ、肉を切る。さらに骨を削り、髓を切り心を剖ぐ。遺されたるものは無そのものである。憂鬱である。吐息である。あきらめである。絶望である。

　しかしこのやうな人生の眺め方、人生の生き方或ひは經驗は、決して無駄ではなかつた。かつては伊太利の若き寺院畫家たちの藝術的良心となつて動いてゐたラファエル前派の sincerity、つゞいては英吉利に於けるロゼツチ一派の同名の文學運動に見出さるゝ sincerity はわたくしたちの文學運動の第一の收穫であつた。そしていつも文學運動の根本的な力として動いてゐた。かつては羅馬やフロレンスの町々に於ける寺院畫家たちの神への跪拜であつた sincerity がわれ〳〵の時代にありては人間への跪拜となつたにせよ、sincerity はやはり運動の中心となつて生きてゐた。

　すべての藝術家にとりて一番恐ろしいことはかれが賢明でないといふことでなくて、かれが sincerity を失ふといふことである。自分自身への sincerity を失つて、人間へ對しての sincerity を忘れて、時代を追つかけようとすることは恐ろしい誘惑である。

　黑い法衣の上に荒縄を結んで羅馬やフロレンスの寺々の壁畫を描いてゐたP・R・Bの畫家たちの眞摯さと生一本さはいつの時代の藝術家をも生かす。英吉利に於けるP・R・Bの詩人たちの藝術を生かしたやうに。sincerity は知識以上であり、賢明さ以上である。

　一つの運動の先驅者となつて新らしい時代を切り拓いてゆくといふことはまことに男性としての快心事であるにちがひない。しかしそれと同時に餘りに表面的に、あまりに無雜作に看過されてしまつた過去に於いてなほ靜かな觀察と思索と謙遜とを惜しまないところの眞摯も

抹殺せられなければならぬ。

たとへばイプセンを論ずること、ストリンドベルクを云々することとが今日の社會に於いてはすでに時代遅れであるかのやうに考へられてゐる。トルストイやドストエフスキイの總決算がすでに果されたかのやうに見做されてゐる。しかし有體にいつてわたくしはなほイプセンのブランドにも、ロスメルス・ホルムにも魂を動かされる。ストリンドベルクの「死の舞踏」にも現代の何れの戲曲にもまして深い感激を見出す。

或ひは愛蘭土の劇文學に對しても同樣なことを告白することができる。

これ等の古典的文藝はいかにも大まかな線描の底に魂の安息と無限性とを內包してゐる。そこではたとへばイプセンやストリンドベルクに見出さるゝ懊惱すらが象徵の霧幕によりて柔かなフオーカスを形作つてゐる。

しかしてこれ等の文藝がわたくしの魂をほとんど病的にまで惹きつけて置く魅力はかれ等に共通な象徵の蒼白き夢であり、北方民族共通の憂鬱な眼である。

×

二三年前の秋であつた。わたくしはそのころ信濃の沓掛にゐた。淺間の高原は日も日も暗鬱な雲と、冷たい雨にとざされはじめてゐた。避暑の都會人たちもすつかり歸つてしまつて、後には夏の間だけ都會人の別莊に飼はれてゐた仔犬が捨てられて、あらしの後のやうな寂莫とした別莊地をうろつき廻つてゐたりした。別莊地の都會人たちはかれ等の子供等の遊び對手に別莊地附近の農家から仔犬を貰つて來る。仔犬は夏の間別莊の子供等の玩具がはりになつてゐる。かれ等が都會に歸る時仔犬は容赦もなく荒野の中に捨てられる。

高い山の上に冬を越す別莊地番人の家が一軒殘つてゐるだけで、人といつては一日に一度か二度沓掛から淺間の山腹を傳ふて六里ケ原を橫切る旅人を見るくらゐのことで、捨てられた仔犬はやがて芒の原の中に凍死するより他はない。わたくしは散步のたんびに落葉松の林のなかや、芒の野徑のなかで捨てられた仔犬に逢つた。仔犬は人懷しさに七丁でも八丁でも蹤いて來た。わたくしはそのやうな時よく詩人バアンズのことを思ひ出した。都會人に對する憤りをさへ感じた。

日暮れころであつた。わたくしは淺間の腰をめぐつて六里ケ原に通ずる山徑を沓掛の方へ步いて來る途中で金剛杖を突き、油桐紙につゝんだ行李を背負つて、いかにも旅馴れた足取りで淺間の方へ登つてゆく一人の老人を見た。背が高く、老人とは思はれぬほどがつしりと引きしまつた筋肉をしてゐた。ちよつと聲をかけて見ようとも思つたが、老人の風貌があまりに寂然としてゐたので、聲をかけるのさへ躊躇しなければならなかつた。

八ケ嶽も淺間も眞つ暗な雨雲につゝまれてしまつて、まつたく山は凄いほどの嵐の氣合をみなぎらしてゐた。暗い雲は西に裂かれ、北に

引きちぎられ、蹴落され、投ち上げられ、暗い大空そのものが今にも襲ひ來るであらう大暴風雨におびえ切つてゐるやうな夕暮れの山徑を老人は歩一歩踏みしめて登つて行つた。いかにも力強く踏みしめて。

わたくしは二三度振りかへつて老人を見た。かれは振りかへりもせず暗澹たる山風の中を山を登つて行つた。金剛杖の先に結びつけた鈴の音が時折り風鈴の音のごとくしづかに疾風のなかを響いて來た。

無論もうそのころは淺間に登る季節でもなく、時間からいつても淺間に登る時刻でもなかつた。かれは六里ヶ原を突つ切つて草津あたりへ行く人にちがひない。その長い山徑の間には淺間の山腹の峰の茶屋と、六里ヶ原の訓去の茶屋くらゐなもので、別には人家といふものはない。どうして今夜の嵐を避けるつもりであらう。どうして今夜の嵐のなかを六里ヶ原をたゞ一人で突つ切るつもりであらう？　わたくしはそんなことを考へながら老人の姿を見送つた。雲は直ちにかれの姿をもつゝんでしまつた。山には雷鳴すら聞えはじめた。

寂然たる憂鬱な眼！　わたくしは同時にイブセンやストリンドベルクの顔を想ひ出した。

孤獨なる寂人、孤獨なる天才、孤獨なる英雄……わたくしは黙々として嵐の夜六里ヶ原を突つ切つて行つて老人の姿を想ひ出すごとに自ら頭を下げないではをれないやうな氣がする。

たゞ一條の道を歩めばいゝ。寂しくとも。孤獨であらうとも。かれの sincerity が命ずるところに向つて、かれの sincerity が燃ゆるところに向つて歩一歩、地を踏みつゝ歩くより他に生くる道はない。Ocarina は伊太利の土の聲を語るであらう。そこに ocarina の sincerity が生き、動き、燃えてゐる。terra-cotta の藝術の香が漂ふ。土の塊は日本の土の聲を語るであらう。そこに日本人の魂の sincerity が生き、動き、呼吸してゐる。そこに日本の素焼の藝術のナイーヴな、本然的な、個性的な、郷土的なかの女自身のものがある。

×

凡そ藝術家にとりて最も直接な不幸はかれがあまりに時代に無關心的なことであり、同時にかれがあまりに時代に關心的なことである。かれの藝術的眞率さからしてかれが時代に關心的であることはかれの藝術の新鮮さと覇氣をあたへる。けれども藝術的眞率さを伴はぬ時代への關心は卑しむべき迎合、變節、藝術的良心の破壞、藝術そのものの破産に終らなければならぬ筈だ。

あわたゞしいテムポ、高速度的な行進曲の上に浮動し蠢動してゐる現代人の生活現象が神經過敏な作家の心の面に映つて來ないわけはない。しかし作家自身がかれ等とともにジャズに合せて踊つてはいけない。かれ等が刹那の幸福に醉つてゐる間に、作家は恒久の人間の悲しい宿命を考へてゐるべき筈だ。

藝術家の生活を想ふ時わたくしは或る友人から聽いた長谷川二葉亭の話を想ひ出す。或る春の日の上野はちやうど花のさかりであつた。誰も彼もが花にうかれて、花下に亂舞してゐた。わたくしの友人は不

圖花の下に握り太なステッキを抱へた二葉亭がいかにも憂鬱な眼をして默然として佇立してゐるのを發見した。この大きな都會中の人たちが春に醉つてゐた時二葉亭四迷一人は花の下に憂鬱な眼を瞬いて、狂醉せる人々をぢつと見つめてゐた。

醒めたる凝視、憂鬱なる凝視。イプセンにそれを見、ストリンドベルクにそれを見、最も buoyant な愛蘭土のシングのごとき作家すらが魂の底深くいかにも醒めたる凝視を潜めてゐるではないか。

もしわれ〳〵の文藝から、醒めたる凝視が失はれるならば文藝は滅びなければならぬ。テンポの速い、今日の所謂大衆的なる觀點に立つて今日のジョーナリズムを支配して行かうとする資本主義は恐らくわれ〳〵の藝術を滅すであらう。カフエの文學、重役室の文學、舞踏室の文學、作家も醉ひ、大向うも醉ふ。われ〳〵は窒息しさうだ。都會氣分を、カフエ氣分を破壞すべきだ。土に還れ、田園に還れ。われ〳〵の魂を生かすべき新鮮な空氣が待つてゐる。そこに醒めたる凝視の世界がある。

世界苦といふことは人間が生きてゐるかぎりつゞくにちがひない。文藝はいつもその根柢に世界苦を感じてゐなければならぬ。

×

一つの窓からぢつと人生を凝視してゐる。十年二十年一日のごとく。

人はかれを笑ふであらう。かれの愚を笑ふであらう。

もつと明るい窓もあるであらう。もつと日當りのいゝ窓もあるであらう。もつと眺めの廣い窓もあるであらう。

しかしかれは狭い薄暗い北の窓に面して、夜も晝も恐らく死ぬ日まで、同じ憂鬱な世界を眺めてゐるであらう。

一つの作家が一つの環境に置かれる。一つのテムペラメントを賦へられる。終生的な宿命である。

人生は賭博である。冒險である。自分等が歩いてゐる道がはたして何處に行くのか、何處に終るのか。勝つか、負けるか。それは誰にもわからない。冒險であるからには命をかけてかゝらねばならぬ。賭博であるからには丁か半か何れかを張らなければならぬ。張るならばできるだけ大きく張らなければならぬ。そのかはりには一歩過まては一敗地に塗れて再起することはできないことを覺悟してかゝらなければならぬ。

文藝の道に於いても同樣である。自分が置かれた窓が南に向いてゐるか、北に向いてゐるか。それはすでに運命である。自分の窓はどこまでも自分の窓である。世につれて強ひて窓を切り變へる必要はない。

わたくしの前にかつて一筋の徑が横たはつてゐた。わたくしはたゞその一筋の徑を辿つて歩みをつゞけて來た。それは明るい徑でもなく、かゞやかな徑でもなかつた。わたくしは前方を見た。誰も歩いてゐなかつた。わたくしは後方を振りかへつて見た。そこにも誰もゐな

かつた。わたくしはいつも孤獨なる自分自身を見出した。

わたくしは思ふ。藝術の世界ではたゞ人おの〳〵自分一人の道を歩むより他に道はない。藝術は畢竟最も孤獨なる暴君である。孤獨なるエゴイストである。寂しき孤獨である。すべての藝術は徹頭徹尾一人の力である。一人の意力である。一人の操持である。かれは一面に於いて時代よりも強く、時代よりも高く生きてゐる。

今日のジョーナリズム、今日の資本主義、今日の所謂大衆的趣味はやがて藝術的作品をわたくしたちの社會から葬つてしまうかも知れない。けれども藝術家は生きる。生きてさらにかれ一人の道を歩むであらう。

わたくしのやうな下根の者にはたゞ一人の人間といふものを見ることすらなか〳〵容易ではない。二十代に見た人生、三十代に見た人生、四十になつてから見た人生、まだ〳〵何時まで見つめてゐても人生そのもの〻持つ陰翳といふものはなか〳〵掴めさうにもない。掴めさうにもない。トルストイが何う、イブセンが何うだなどと、その境まで行き着かない人間が總勘定をつけてしまうのはどんなものであらう。

たゞ一人の人間をすらほんたうに見ることはほとんど不可能である。たゞ一人の人間の魂の陰翳の深さ、複雑さ、たゞ一人の人間の生涯のわびしさ、うれしさ、ありがたさ、寂しさ、それを掴み、それを感じ得るだけでも下根の身には一生を費してなか〳〵不可能な冒険である。

一生鯉の繪ばかり書いてゐた繪師もあつた。

一生一つの面だけ打つてゐた面師もあつた。

このやうな藝術家があるといふことは愉快である。

自分の sincerity が命ずるところに向つて生きてゆく、考へてゆく、歌つてゆく。それより他に道はない。時非にして破るればそれまでのことである。

Ocarina を吹く人もあらう。が、わたくしは土の鳩を吹く人間に生みつけられてゐるやうに思ふ。

一番恐る〻ことはわたくし自身の心が sincerity から遠ざからうとすることである。

無論 sincerity を云々するやうな資格はわたくしにはない。たゞ凡人の願ひとして、自分に持たぬものを欲するのみである。

# 「フランス最近の文壇の傾向は」と問はれて

武林無想庵

フランス最近の文壇の傾向だつて？　そんなことが僕にわかるものか！　わかつてたまるものか！　なるほど、僕はこの足掛七年といふもの、フランスの國境からほとんど一歩も足を踏出さずにゐた。さうしてその間ほとんど毎日フランス語で書いた本を目にしない日とてはなかつた。併しフランス語がわかればわかるほどフランス文學といふものがだん／＼にわからなくなつた。云ひかへれば、樂に本が讀めるやうになるに隨つて、フランス文學の視界が幾何學的級數にひろがつて行つて、その地平線がとても手がつけられないやうに擴がつて了つたものだ。佛說ではないが、フランス文學は全く洪大無邊だよ。

これは併し文學に限つた事ではなく、繪畫だつて、音樂だつて、彫刻だつて、つまり藝術だつて、科學だつて、宗教だつて、哲學だつて、つまり、フランスといふもの丶一切合財がわれ／＼の常に西洋文明と一口に云つてのけるもの丶總和であつて且つその粹の粹だからだと思ふ。

たとへばポオル・ヴレリイを讀むとする。ヴレリイは卒然として出現したわけぢやない。マラルメを離れては、まづかれの作品に手がつけられないものと覺悟しなければならない。たとへそれが難解極まる詩そのものでなくても、かの十九世紀の末に稿を起して、二十世紀の上四半期に原文より長い原文より複雜な序文を附して世の中に發表したダギンチに關する感想の如き單なる散文ですら、一ト通りや二タ通りの素養では、その大意さへオイソレとは飲ひかねると云つたやうな代物だ。さうしてそれがどんな大部の本かと云ふと、たつた百ページあまりの文章にすぎないんだから、ます／＼呆れかへらざるを得ない。のみならず、そいつが二十年といふ長日月を經て、今日印刷に附

されてゐる形式にまで、漸く漕ぎつけられたんだときいては、全く開いた口もふさがらない。

アン・リネーアの Sagesse qui rit がやはりその例に洩れない。どころか、さう云つた氣の長い點に關しては、さすがのヴレリイも三舍も四舍も五舍も避けるだらう。個人主義者であるところのかれが、道德について思を潛めて以來、この書物に手をつけてから、もう四十年も經過して了つてゐる。さうして今日のところではまだその前半だけしきや發表されてゐない。

僕はこの一週間前七年ぶりで日本へ歸つて來た人間だが、日本では今何事によらずまづ第一にテンポが早くなくちやいけないんだと、例の辻潤が東京驛でいち早く僕に訓示してくれた。

――テンポつて何だい。

――テンポだよ。

――楕圓形のまん中へ正方形の孔のあいた、さうして三本足らない事をもつて、進化論を既に凌駕してゐる、かの青銅錢の事かい？

――困るなア、どうも……だから、つまり、テンポが遲いんだよ。

――何がネ？

――チヨツ！ 君がさ。

――へえ、さうかい？

とは答へたが、僕にはまだそのテンポなるものの正體が、實はよく分つてゐないのだ。が、どの道日本人の事なんだから、きつとそのテンポといふことが、もちろん例の immédiatisme といふ特有の脳性から派生した内容が、たま〲フォノグラフやラヂイオの殺到に面くらつて思はず口ぐせになつた地震以來の音樂的テクニックなんだらう位まではほゞ見當がついてゐる。

そこで Sagesse qui rit にかへる。とだけ云つたら、あとは云はなくたつてわかつてゐるだらう。少くともテンポの早い國の人國である以上はだ。つまり、四十年以前と云ふと、多分坪内逍遙先生が小説神髓を日本紙の本で發表された時代の事だらう。さうしてゾラと爲永とを結びつけて、書生氣質といふ題だけ八文字屋をきかした大作でアッと云はした時代の事だらう。その時代から、わが畏敬するアン・リネーアは一つ事ばかり、實際、たつた一つ事ばかりクヨ〲と今日まで思ひつゞけてゐたものだ。

そこなんだ、僕のフランス文學について感じた事は。決してそれが所謂「最近」といふ事にはならないけれど、そこがフランス文學の全般的傾向だ。が、それだからと云つて、かの地の文人墨客が、われもわれもと兩國橋の上で身投女を見つけた時のやうに、ワイ〲と物見高く、悉く四十年五十年と手間ひまのかゝる文章に精根を枯らしてばかりゐるといふわけでは勿論ない。

きけば、日本では今文學そのものがなくなつて了つたといふ。さうしてそれは地震の結果だといふ。何の事だか僕には全然わからない。七千萬人とかあるといふ日本人のうち、十萬人地震にとられたからと

云つて、あとの六千九百九十萬人の日本人が、卒然として文學を失つて了つたなどゝは、斷然わからない。たとへ地震が秦の始皇であつたにしてからが、壁の中から四書でも五經でも、いくらでも出て來たものだ。さうしてその四書五經が新聞を見ると毎日の廣告欄を賑はしてゐる。タラシッタの意味ぢやないのだ。何々全集何々全集といふアレだ。文學は決して失なつてゐないばかりでなく、前代未聞の大選出だ。イヤぢやありませんか？……電車の中の廣告を見上ると、菊池寛作東京行進曲とある。イヤぢやありませんか？……東京行進曲は小説ぢやないんでせうか？　文學ぢやないんでせうか？

　フランスにだつて、そんなのは所謂汗牛充棟だ。毎日掃きすてゝも掃きすてきれないほどある。ヴイクトル・マルゲリットのギヤルソンヌは半年にして五十萬部賣盡した。モオリスデコブラのヴエニスのマドンナは三ケ月で三十萬賣盡した。さうしてそれがこの頃はじまつた事かといふと、百年も二百年も前からいつだつてさうなのだ。さうしてそれがやつぱり文學なんだ。政治でもなければ、宗教でもなければ、科學でもなければ、やつぱり正眞正銘の文學なんだ。さうしてそれを文學と云つてあへて憚らないのは、必ずしもフランスに地震がなかつた爲ぢやない。何百萬人となく千九百十四年の役に失はうが失ふまいが、文學はいつだつて文學なんだ。出版がキヤピタリズムにならうがなるまいが、文學はいつだつて文學なんだ。と、さう大氣焔をあげて置いて、さて考へて見ると、實は日本だつてさうなんだ。統計によると、日本では書紀以來、人畜に數多く死傷のあつた地震に、平均二年に一度の割合になるさうだ。して見ると、若し地震が文學を滅ぼした事が本當なら、日本には文學なんてものは決して存在できなかつた筈になる。それだけでも地震と文學とには何等の關係がなかつた事がよくわかる。源氏以來、平家以來、曲亭以來、いつだつてさうぢやないか？

　もう一度「最近の傾向」にかへる。フランス文學の傾向は今云つたとほりだが、併しそれは最近ぢやない。最古でもない。ヘチヤムクレでもない。ベラボウでもない。それが即ちフランス文學の傾向なんだ。羅典民族の一派であつて、さうしてフランス語を喋るものゝ文學なんだ。さうしてその文學たるやその民族と共に常に終始してゐる。オーギユスト・コントの哲學までコツ〳〵積上つたフランスの思想に實證といふ名に於いて科學といふ名に於いて、自然主義と稱するジヤン・ジヤク・ルツソーにはじまつた一大ロマンテイズムの絶頂に達した。それがエミール・ゾラであつて、同時にアナトール・フランスだつた。ゾラのそれは下水のそれであつて、アナトール・フランスのそれは骨董のそれではあつたが、共に十八世紀から押されて來た、共に同じロマンテイズムの最高潮であつたことに變りがない。さうしてそれが一千九百十四年七月三十一日をもつて木端微塵に碎け散つた。さうしてその一々の破片こそ、實は御所望の「最近の傾向」と云はゞ云ひ得るものなんだらう。ジードがその一破片だ。ヴアレリイがその一破

――（「フランス最近の文壇の傾向は」と問はれて）――

片だ。プルーストがその一破片だ。アンドレエ・ブルトンがその一破片だ。破片だ。破片だ。さうして凡ての陶器と同様に、それがフランス民族の破片であるがために、却つて陶器に思を潜める者どもにとつては、完全なる需要の形式を具へた時代より尊まれるといふ事になる。

一斑を推して全豹を知るといふアレだ。一をきいて十を知つても、それでも差支ない。テンポのはやい發明な日本人なら、その位の事は朝飯前の話だらう。ところが一斑ばかりいくら並べ立てゝ見たところで、決してそれだけでは全豹を成さぬと同じく、又一ばかり幾萬遍きいて見たところで、十はさて置いて、きいただけの一すら知らないと同じく、フランス人の破片ばかり陳列したところで、それだけではフランス文學の傾向はわかる筈がない。ところが、日本人はとても新しいものばかり追ひかけてその日を送つてゐる人種だと見えて、歸るか歸らないに、さつそくかうしたお土産を請求されるには困つて了ふ。

一體日本人は新しいといふ事を何と心得てゐるんだらう？　日に日に新にしてとは、湯の盤の銘に打込んであつたものだといふぢやないか？　盤の銘なんだ。盤とは水を容れる道具だらう。水を容れるんだから、水が新しいのだ。盤を毎日とりかへる意味ぢやなからう。だから日に日に新なのは水であつて盤ぢやない。ところが日本人の新しものずきは、その所謂水の事ぢやなくて、盤の方に對してさうなんだから助からない。ゾラがはやれば翕然として悉くゾラだ。ワグネルがはやれば翕然として悉くワグネルだ。ニイチエがはやれば、イプセンがはやれば、マルクスがはやれば、シネマがはやれば、ラデイオがはやれば、洋行といふ伊勢詣がはやれば、何にかぎらず翕然としてその何にかぎらずだ。日に日に新なりを知つてゐる以上は温故知新もきいた事があるだらう。古きをアタタメてぢやない。去年もらつた老酒をおかんする事ぢやない。古きをタヅネてだ。古いものゝきらひな奴に新しいものゝわかつた例はない。維新以來、日本人はいゝ氣になつて、どし〳〵古いものを毀して行つた。さうして日清日露歐洲大戰と戰爭のある毎に、その破壞のテンポが加速度的にはやくなつて行つた。さうしてその破壞したものの上に新しく建築したのが今日の日本ぢやなくて、歐羅巴文明をその破片だけ拾ひあつめて來ては、そいつを間にあはしてゐるのが今日の日本の現状なんだ。要するに骨惜しみの結果なんだ。さうしてその骨惜しみを利口だとまで考へてゐる。だから全く手がつけられない。

それはなるほどフランスだつて毎年草は生へる。が、フランスの草はフランスの土から生へる。獨逸の土からも伊太利の土からも生へない。斷然生へない。だからフランスの土を知らなければフランスの草はわからないといふ結論になる。ところで、今年はどういふ草が生へたかときかれると、僕だつて一寸返事に困る。が、たとへばニースでは今薔薇がさいてゐると答へたとする。たとすると、その返事をきいた者は、なアんだ、薔薇なんか一向珍しくない。日本だつてとうの昔

から咲いてゐらア、と思ふだらう。ところがニースの薔薇を目撃したものは、たとへそれが直接ニースから輸入したばかりのものであつても、ニースの薔薇と日本の薔薇とはいかに天地月鼈の差のあるものであるかゞ頷けるであらう。

同様に、マルセル・プルーストが、ヴレリイが、今フランスへ集つて來る世界の文學青年達の目標になつてゐる作家をかつぎ出して、それはかう〳〵いふ傾向の作家だと云つて見たところで、結局ニースの薔薇のたぐひにきまつてゐる。

早い話がジャン・コクトオだ。もう二年ばかりになるが、コクトオはカトリツク信者になつた。イギリスのチエスタトンも同様にカトリツクになつた。チエスタトンはイギリスの話だから別としても、あの今の日本の若い新しい人々のお目あてとなつたコクトオがどう氣がちがつて、古いも古いも、まるで日本の帝國議會のやうに腐りきつてゐると思はれてゐるカトリツク信者になンぞなつたんだらう、と驚くかも知れない。ところが、親しくフランスの土を踏んだものから考へれば、ロマン・ローランだつて、アンリ・バルビユスだつて、ジヤン・コクトオだつて、みんなフランス人である以上は、フランスの葡萄酒をのみ、フランスのパン、フランスの乾酪をたべて大きくなつた以上は、やつぱり生活のうちから一番自分に温かい感じを求めざるを得ない場合には、どうしてもマリア様に接近したくなるのに、決して何の不思議はないと思ふ。

けれどもフランスの土を踏まない人々にとつては、たとへラブレイを讀み、ラシーヌを暗誦しても、それが新しいものを追ひかける料見でゐるかぎり、コクトオとコクテールとは一緒になつても、コクトオとカトリツクとはどうしても一致する氣づかひはないであらう。

だから温故知新だといふのだ。フランス文學の最近の傾向を知りたければ、何よりもまづ第一にシベリア鐵道に乘ることだ。浦鹽斯德をとほつて行けば、ニガレリヤでたつた一度のりかへるだけで、十六日目位には、だまつてゐても、チヤンとギヤール・デユ・ノールの停車場へつく。さうしてそのギヤール・デユ・ノールといふのは、とりもなほさずフランスの巴里なんだ。眼耳鼻舌身意の六根六識六塵を活潑に地に旋回させて、まづ巴里そのものゝ姿を獲得すべしだ。

西洋人のいふ意味では、決してこれを都會とはとても云ひかねるであらうけれど、とにかく全世界の大都會のうちで、現在この東京市ほど新しい都會はないであらう。さうしてギヤール・デユ・ノールへ到着した時の巴里位恐らく古くさい都會はないであらう。巴里を中心とせるフランスはとても〳〵古い國だ。活動寫眞でばかり巴里を知つてゐるものは、巴里の本物を目の前にした時、かれは必ずこれがあの美しい巴里かとガツカリして了ふにきまつてゐる。それほど巴里は古くさいのだ。

勿論、地震といふものゝない天恵によるけれど、單にそればかりでなく、フランス人ほど古いものを愛する念の深い國民はない。だから

え豆類八千石、雜穀三萬石等を始め甘藷は最も多く作られ年々百萬石以上も採れる。蕃薯は餘り盛でない。林業は總督府の役人が島の事情を知らず又出張するものも餘り林業の知識のないもの許りであつた爲め眞相が傳へられなかつた爲めと齋藤と云ふ山林課長時代に島に適せぬポプラとアカシアを植ゑさせようとした事などが祟つて衰微一方である。然し島の氣候は九州の北部とよく似て居るから日本人が杉を試植したのは相當に成績を擧げて居る。故曾根統監がミツマタの試作をさせたが之れは島民に熱心がない爲め失敗に終つた。山林を最も多く害したのは椎蕈業者で大森林を伐り倒しては椎蕈の栽培をした爲め其後にはユツリハ、クサギの様な役にも立たぬ雜木のみが生へ廣汎な良林は一變してしまつた。昔元寇の時元は兵船五百艘を此島で作らせた。其位島が良材に富んで居たのは當時から有名なものであつて其が日鮮併合後迄も續いて居たが椎蕈業者の無慈悲の手に依りて、昔日の俤は地を拂ひ僅かに山上に其一部の俤を止むる迄になつたのは返す返すも惜しい事である。然し此れが爲め一時は年々二、三萬圓の椎蕈を産出し少數の椎蕈業者丈けは其懐を肥し得た。竹はよく成育するので竹材の利用は朝鮮全道其比を見ざる迄に發達して居る。舊左面松堂里にカヤノキの純林がある。此林は日本全國何處にも見えぬ偉觀であつて碁盤業者の垂涎萬丈のものである。十年前迄は楠の自生があつて相當の大木になつて居たが之れも次第々々に伐り採られて今は全く其跡を絶つたが栽植したものは發育がよい。

風が強いから果樹の栽培は思はしくないが柑橘類はよく出來、天然にも橘や枳殼がある位故蜜柑、橙子、柚等を始め十餘種が植ゑられて居り發育も悪くない。就中青橘、瓶橘など云ふ品種は他に見られぬものである。

朝鮮馬の産額多く、朝鮮の南部に向ての唯一の馬の供給所となつて居る。牛も可なり産するが岩石の多い爲め年々足をくぢき用をなさぬものが頻出する。

## 陸生の動植物

哺乳動物は至つて少く朝鮮半島に普通に住む豹、ヌクテ、ノロ、ハリネズミ等も居ず僅かに濟州イタチと云ふ特有のイタチが住んで居る。時折、飼犬、飼猫、豚などが野性を帶びて山に逸出する事があるが久しからずして死滅する。哺乳類は少いが鳥類は相應に多く約五十種も知られて居り小さき鶯、シジウガラの類より大なるヲジロワシに至り、特にサイシウアカゲラと云ふキツツキの類やシマシジウガラ、サイシウヤマガラなど云ふ特産の鳥類も住んで居る。爬蟲類は種類は少いが個數は多くヒバカリ、キスヂヘビなどが燒石の間石垣の間に散見するが人に害を與へたと云ふ事は聞かぬ。ムカデの多いのは濟州名物の一で一寸石を起せば二匹や三匹は必ず走り出す。特に色の黒い長さ數寸の大ムカデがさ〳〵と疊の間や壁の上を這ひ出して驚かされる事は屡々ある。

植物は大變種類が多く草木を併せると千五百種位ある。特に緯度から云へば長崎、福岡邊に當る位南にあるから氣候が暖かく、琉球や臺灣に行かねば見られぬオホタニワタリが、西歸浦の直ぐ前にある芽島には生へて居る位故、半熱帶植物に乏しくない。從つて海岸から五、六百米突迄は常綠濶葉樹が多くて、常に青々として居り、以前はセキコク、フウラン、ナゴラン等が澤山に樹に附着して居たけれども、今は殆んど採り盡してしまつた。紅いツバキは澤山あるが紫の藤はない。五、六百米突より千二、三百米突迄は落葉の濶葉樹林に被はれて居り、山上は高山植物があつて、特に面白いのは、ガンカウラン、イハウメ、クロマメノキ、クロミノウグヒスカグラなど云ふ朝鮮の中部以北か、日本の中部以北の高山でなくてはない高山植物がある事である。ガンカウランは又非常に多く私は內地、朝鮮の山では斯んなに多くある所は見た事がないが、土人は「シローミ」と稱して其黑い實を食し、海岸に多くあるクロイゲ（土名サンドンナム）の黑い實と共に賞美されて居る。頂上に圓柏があつて一時は多くよい盆栽を出したが、今は採り盡す憫があるから採收を禁止して居る。燒石の磊々たる間に刺の多い植物の多いのも一特色であらう。曰くジヤケツイバラ、テリハノイバラ、サイシウノイバラ、クロイゲ、フユザンシヨウ等を始め十餘種の有刺植物が雜然と繁つて居る。特にカラタチの叢は大したもので、南側の溪流に沿うて密生し到底入り込む事は出來ない。海濱に水仙の自生があつて多く生へて居る事は、恰も房州、城ケ島、初島などの樣である。梅や桃や、柿が自生して居るのも興味ある事實であるが、嘗て漢拏山の中腹で東京に最も多く植ゑてある「染井吉野」と云ふ櫻が自生して居るのを發見したのが、學界では非常の發見とされて居る。何となれば染井吉野の自生地は今迄に知れて居ないし濟州島では古來櫻を賞美したり栽培したりしないのに、山の中腹の原始林中に唯一本染井吉野があつたと謂ふのだから、怪異と謂ふの外はない。採收者は同島に十餘年住んで一身を天主教の布教に捧げた佛國のタケーと云ふ宣教師で、彼は眞面目な人で虛言など謂ふ人でなく、又彼は前後九年間濟州島の山で植物を採收して廻り、大に此島の植物を世に出した人である。

## 島の名所

名所として從來擧げられたるは城山日出。正房瀑布。山房窟跡。竹島古戰場。天帝淵瀑布。紗峰落照。龍淵夜泛。三姓穴古墳。古藪牧馬。橘林秋色。靈室奇巖。鹿潭晚雪。瀛丘春花の十二勝であるが一二を除く外は規模が小さ過ぎる。其故私としては次の八景を撰びたい。

（一）漢拏山上の眺

山頂は西部南部は外に斷崖を廻らし、內に噴火口を有し、白鹿潭があり、南鮮に特有のサイシウシラベなるモミの一種の林と、風に縮まりしゲンカイツ、ジと、屈曲せる枝を交へろダケカンバとの生へる所に、大自然の盡きぬ眺めはあるけれども、頂上に登つて四望する時の

雄大さは蓋し南鮮第一である。遥かに南鮮の諸峯を北に見、東に九州の山を望み屈曲せる島の汀界線は夢の如く脚下に展開し、沙丘は洒せる布の如く、斜面の牧場の起伏せる間に、綠の帶の如く、谷に沿うて繁る林の續く狀の美しさなどは、到底筆にも言葉にも及ぶべからざるものがある。

（二）漢拏山のツツジ

漢拏山の中腹にツクシアカツツジと云ふ大輪の紅花を開くツツジの大木がある。大きいのは床柱にする事が出來るので、朝鮮では有名なものとなつて居る。其花は五月に開き美麗である。峽谷に沿ひてはテウセンヤマツツジの紫紅花が咲き揃ふ、瀛邱の春花などは其一部の眺めに過ぎぬ。又山上五千尺以上にはゲンカイツツジの大きな叢があつて、之れが一齊に開花する時は何十町歩のツツジ園を作り眞の御花畑をなす。

（三）月汀の沙丘

月汀と云つても必ずしも月汀に限られず、濟州島の東北端に長さ數里に亙る沙丘がある。此沙丘は世界唯一の珍沙丘である。其理由は沙が皆介殼の微粒で出來てゐるからである。近海に棲んでは死する介の殼は、波に碎かれて沙粒となつて、長さ十數里幅一、二里の沙丘を作つて居る。試に沙を採つて之に酸を注ぐと皆融けてしまふ。

（四）西歸浦

西歸浦は島の南側中央に位して、島廳の支廳のある所であり、又島の中で一番暖い所である。其近い所に爐烘と云ふ部落がある。其は暖くて爐邊に居る樣だから名けたのであるが、北よけの所ではタウゴマが多年生になり、芭蕉が冬も青々として居る。斯る有樣故西歸浦一帶は山も部落も青々とし、特に其前にある芽島蚊島は垂綠垂らん許りであり、程遠からぬ所にある正房瀑より流るゝ淸流には鮎を産する。

（五）正房瀑

西歸浦に注ぐ正房川を遡つて、五丁にして一大瀑布が轟然として落下し、高さ十二丈幅四間に及び南鮮第一の飛瀑をなす。瀑壺は深淵をなし、天地淵と呼び、既に記した如き大鰻を産する。之れより急湍を下つて僅々二町にして潮のさす川口となる。而して此二町の間に鮎を始め、種々の河魚が棲み、其以下海迄三町の間には海魚が棲む。鮮人の金桂斗の詩がある。

名不虛傳還二房　災天飛瀑逼寒光
一條勝破青山乾　萬丈垂流白練長
凍雲凝生明眼界　暑雲退却快腦塲
看來知有朝宗意　日夜奔歸大海藏

（六）蛤坡の春色

蛤坡は濟州邑內より山越をして、西歸浦に行く時、通る峠上の平地で、漢拏山の肩、海拔四千尺の所にある。淸き流れと斧の入らぬ林とがあり、春の新綠と一時に咲き揃ふ花とに飾らるゝ時は、仙境に入る

の思がある。濟州島を訪ふものゝ一度は通る値のある所である。

（七）飛揚島

飛揚島は島の西北部に孤立する、有史後に活動した火山島で、中央の火口壁の一番低い所は、海拔二百五十尺あるのに、火口底は百尺よりない。磯附近は奇巖怪石其態を擅にし、水をたゝへて海魚が住む。此島よりする濟州本島の眺めは、特に偉觀中の偉觀で、漢拏山より十數個の側火山が順次此島に向つて居るのが明に判る。

（八）圓岳釜岳に對す

釜岳は漢拏山の最高峯である。削り成せる岩壁千尺、其下より大斜に緩斜面となり濟州笹の茂る圓岳と云ふ大突起になる。其中間に立て双方を見る所に、釜岳對圓岳の眞價値がある。圓岳に對して漢拏の中腹に一峯がある。其峰の圓岳に向ふ側は舊火口が破れて、、、、、の形をなし其上に樹木の密生する狀は、、、の如く一見何人も苦笑を禁じ得ない。之に向つて突出する圓岳は、、、士民之を、、に譬へ合せて陰陽と云ふ。是亦大きな際では云はれぬ濟州島の一名所である。先年米國「アーノルド」樹木園の現園長「ウヰルソン」氏が、私と共に渡島した時私が其說明をしてきかせたら、彼は大聲を擧げて笑ひこけ暫く見とれて居たが「實によく出來て居る全く眞物だ」と感心して居た。自然の惡戯も此所に至つて極まれり。一つ拜みに出懸ける人はあるまいか。（完）

# 街路樹と小公園

上原敬二

漂茫とした熔岩の荒野に、火口の御靈火を目指して息杖に喘ぐ〱巡禮の登つて行く姿は、信仰的に見えて山の自然を彩る點景となるものである。それは雪のアルプスを仰ぎ見るサボアの溪谷であつても、御神火の燃え續いて居る淺間や阿蘇や三原の山腹であつても、將たまた富士の御中道であつても、かうした涙ぐましい懺悔の白衣姿は佛世界の國々でなければ見られない情景である。ボヘミヤより、チロールより一途にローマのヴアチカン宮を指して忍從の旅に上る人の心持ちも、ルードの靈水を求めてアラビアの砂漠を彷徨したら若い母子の心境も、六十六部に姿を窶して菩提と冥福とを祈る世捨人の心懷もそこに東西の別がある筈はない。

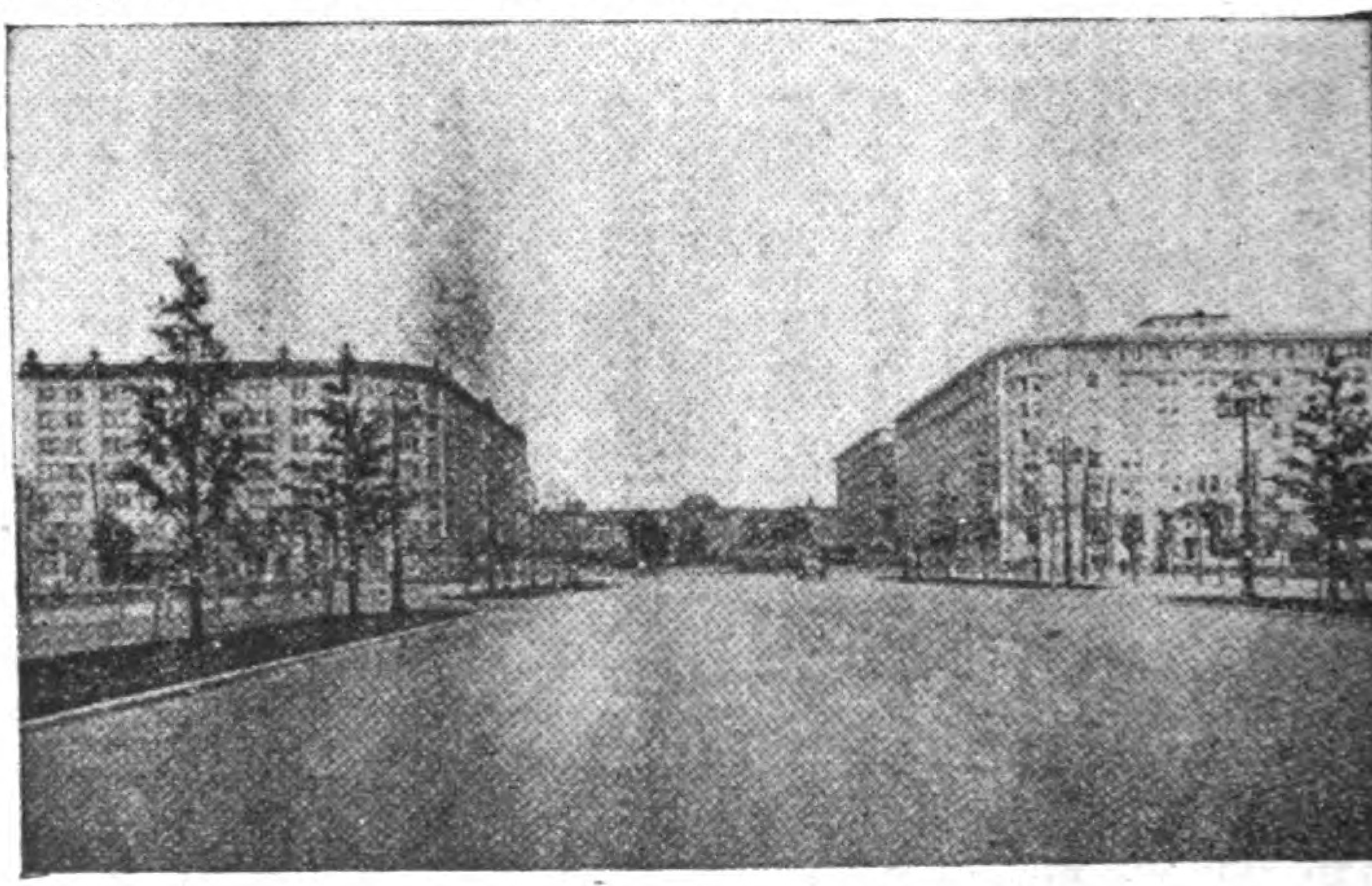
然かもかうした流浪の旅路に上る者の荒野を往くに唯一つの目印しとなつたものはそこに立てられた標木の一列であつた。森を行けば枝を折つて枝折りとし、河を渡れば轉石を並べて飛石道とし、辻には標石あり、山には目標樹ありとするも、然し一眸際涯のない砂漠、砂原、熔岩の曠野を横ぎる時にはどうしてもそこに標柱となる一列のマークがなければならぬ。踏しめた道の跡は吹き捲くる砂風に蔽はれて立どころに消え去るべく、一雨に流されて再び新しき處女地の砂に踏み出さなければならぬ、かくて風に耐へ、雨に沐し、無言の先達となつて忍從の心を信仰の彼岸に傳へてくれるこの標木の一列こそ近代道路樹木の祖先をなす遺物である。道路あつての並木ではなくて、並木あつての道路となる。然もかくして標木は次第に第一期の道路樹に植ゑかへられる、ポプラ、カタルパ、アカシアは早期の樹種として先づ選ばれたのであつた。かやうにして並木に導かるゝまゝに來往漸く繁くなり、信仰の道は國防の道となり、政治の道となり、商業の道となり、田園の道路樹は國道の道路樹に代り、終に都市に小自然を導き入れる動機となつて茲に街路樹の出現を見るまでに進んで來たのである。

殊に古代の支那はその都市蜿蜒たる城壁を以て繞らされ、その内に井然たる區劃を施しこれを點綴するに楊柳桃李の類を以てした。長安、洛陽の都何れも花としては桃李を植ゑ、水邊街角に楊柳を植ゑたのである。就中

長安の都は桃に適して居たと見える、貞元二十一年劉禹錫貶せられて朗州司馬となり居ること十年にして召還された時その以前見るを得ざりし桃樹の新植されたのを觀て「紫陌の紅塵面を拂うて來る、人として花を看て回るを道はざるものなし、玄都觀裏桃千樹、盡く是れ劉郎去後の栽」と咏じて居る。白樂天は『花枝缺くる處青樓開く艷歌一曲酒一盃』と陶然とした氣持ちを歌つて居る。

都巷の楊柳を詠じた文獻はいくらでもある。「遺却す珊瑚の鞭、白馬驕つて行かず、章臺楊柳を折る、春日路傍の情」これは少年行として人口に膾炙するもの、陌頭の楊柳は亦よく詠ぜられる、「陌頭楊柳の枝、已に被ひて春風吹く」と亦李太白は「咋夜東風武陽に入り、陌頭の楊柳黄金の色」と歌つて居る。

水邊道路の楊柳は支那都市村巷の景觀である、「柳下に舟を艤し花間に馬を走らす、觀者の趣個中に倍す」「花によりて帽を整へ柳を借りて船を維ぐ」と云ふ氣分はよくこの情景を髣髴せしめる。この花柳の巷に酒を呼び、鳥を迎へ、友を招いて春の怡樂にひたる所に都巷の内と雖も支那大自然がかゝるやうだ。かくの如くにして「村花と路柳とは遊子衣上の塵、山霧と江雲とは行李擔頭の色」といふやうな秀麗な句に見る文章上の道路樹木觀が出來て來る。


東京驛前大通り

廟や寺院の門の内外の路の兩側に柏樹を植ゑ列べたものこれを樾といふ、樾は互に兩側の樹木が枝を交錯して來る態に卽ち枝が相互に飛び越える意を示したる者ならんと云ふ。林樾といふ字があるが蓋し今日我々の考へて居る植樹帶に相當するものであらうと思ふ。

路巷に植ゑた並木の記事は相當にもあるが地方國道に栽植したるものの記載は少い、亦文章の上に假令ありとするも實際には極めて少ない『山徑幽深にして十里の長松路に引く』といつたやうな句は多くはない。

自然美を謳歌したものとして風景美の研究者の好んで讀むべきものに阿彌陀經がある、その中に「舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹」といふ一節があつて極樂堂塔のほとり種々な珍木を植ゑつらねた樣が髣髴とする、さうして「風吹動諸寶行樹」と述べて極樂淨土の樣があり〱と眼前に展開するやうに見える。

我國の道路樹木は都市に初まらず海道に初まつて居る。即ち「類聚三代格」に曰く

淳仁天皇天平寳字三年六月二十二日乾政官符

畿内七道諸國驛路兩邊遍種菓樹事

右東大寺普照法師奏狀稱道路百姓來去不絶樹在其傍足息疲乏夏則就蔭避熱飢則摘子噉之伏願城外道路兩邊栽種菓子樹木者奉勅依奏

嵯峨天皇弘仁十二年四月二十一日大政官符

應禁制斫損路邊樹木事

右得大和國解稱道邊之木夏季陰爲休息處秋結實民得食焉而或頑民徒代損去來之輩益失便宜望請特加禁制奨令更然者依請

かくの如く路傍樹として植ゑたものは果實を有するものであつた。然もその種類の如きは今日如ではないが、現在に於ても外國の都市に於て果實を生ずる樹種を並木に用いて居るがまづ熱帶を除いては多くは堅いか、澁いか、一寸之れを口にする氣のないものが多い。中々に道傍の樹木に甘美な果實が生じて居るのがいつまでも保存されるやうなことは温帶や暖帶地方の都市に於ては望み得ないことである。熱帶の如く又山間僻地の如く、その果實に豐富であるか、又物珍らしくなく人口の少い地方ではかくの如き國道樹も成立し得る。されば紀元四世紀にギリシア教會の長老聖ジオン・クリソストムは「路傍に立つ樹木の實は熟するまで保つこと難し」と道破してこれが格言にまでなつた事實を否定することは出來ない。

萬葉集卷二には「たちばなのかげふむ路のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはすて」といふのがあるが井上通泰氏はこの「たちばな」は道の並木であると解釋して居る。筆者も同感である。「たちばな」の並木なんて何と風流ではあるまいか、然しこれもそう大した大道路のものではなく、かの雍陶の名高い「城西友人の別墅を訪ふ」の詩の轉結である「村園門巷多く相似たり、處々春風枳殼の花」の程度のカラタチの並木位であつたやうな氣がする。

萬葉集卷十九に「春の日にはれる柳を取持ちて見れば都の大路おもほゆ」といふのがある、當時早くも都の大路には柳を植ゑてあつた、催馬樂の歌に大路に沿ひてのぼれる青柳が花やあをやきしなひを見れば今さかりなりやとあるは平安京の大路であらう、はれる柳とは芽の出でたる意である、所謂支那の柳眠である、「風は柳眠を開き、露は桃腮に浥ぎ、黃鸝は春を呼び、青鳥は雨を送る」の秀句あり、新緑期を彷彿する。ありし日の平安京の柳を偲ぶ時我々は京都府廳の前に恐らくは今頃柳眠雨に濕へるであらうあの柳の並木がよりよくいつまでも保存されてあらんことに愛樹の心をよせる。

かくして海道の並木は織田、豐臣の時代にその歷史を殘して居る。江戸時代に及ぶに從つて我國が世界に誇るべかりし幾多の並木の伐採せられた記錄を讀むのは傷心に耐へない。

それでも板倉勝重の植栽にかゝると傳ふる山城加茂の堤、明智光秀の植栽と傳ふ丹波龜岡の並木、大正二年築造の熊谷堤とその前よりあつた櫻の並木、松平正綱寄進の日光杉

日光街道の杉並木、東海道の松並木、慶長六年の植栽、近江なる粟津繩手の松並木、淡路街道の松並木、武藏の自然を飾る馬場大門の欅並木、何れか優占して今昔の感深からざるものがあらう。殊に日光の杉並木の如き、社殿でこそあれ日向國狹野神社の杉並木の如き、最早や世界的に聲明を馳するものを見るに拘らず、今日それ等の手入管理の方法は閑然することなしといへやうか。來遊する外人より『日本には並べられた樹はあるも並木なし』と暗にこの自然物への無關心を非難された事實を聞き流してよからうか。都市の小並木さへも滑つては町人の義務として手入保護を講ぜられたことがあつた。明治十二年五月の違式詿違條例追加街路取締規則の中には簡にして明、率直にこの規定がのつて居る。國民は均しくこの偉大なる天然記念物としての國道並木に心よりの尊敬と溢れるばかりの熱愛とこみあげて來る撫育の意氣を示したいものである。

我々は茲に眼を轉じて世界の並木を大觀するの順序となつた、然も彼の世界名鑑の一つとして頓に世界の津々浦々にまでも名の知られて居るあのアブニユー・ミドルハルニスの並木の繪があることは如何許り心强からうか。この繪こそウエストケルクホーンの落葉に靜かに眠つて居るマインデルト・ホベマの傑作である。オランダが素通りの旅行にさへ明なる程に並木(ニレ殊に多し)の多い國であることもこれで領けやう、我國の松並木を描いて名高かつた廣重と比べられるか。

そのニレこそ記者の選んだ世界の五大並木樹種の一つである。楡の都ニユーヘブンは正しく我が北都札幌を聯想せしめる、楡はアメリカの都市に代表とされる道路樹木である。その扶疎たる夏の新綠の姿は正しく青春期の我が葉櫻の形態を持つて居る。壯大なるシカゴのミツドウエーの五列の楡樹の如き百年後の雄大さが想像される。

楡に次ではプラタヌスである。これも種類はいくつかあるが全米の都市を通じてニレと共に最も多く用ゐられる樹種である。然も高原にも水邊にも原野にも野生せる姿が多いので都鄙交々この姿を觀賞し得る。プラタヌスは何となくアメリカの國民性を代表せるかの如き氣持がある。我國より渡米したイテフが國都ワシントンの主要道路樹木となり盛んに先住ポプラを驅逐せるが如き亦一興である。我國でこそその大木を見ることが稀であるが彼のナポレオン一世の居城フォンテンブローに通ずるフランスの街道の如き合抱以上の大樹を以て見事なる植樹帶をなし一見我が日光の杉並木に聯想が及ぶ。

海を渡つて舊大陸に移ればここは道路樹木としては新大陸に見るを得ない巨幹老木が仰がれる、然も毅然として各々その歷史に囁くのである。

近世プロシアを大成したフレデリック大王は十七世紀にベルリンの市街を統制し、スプレーの河畔まで擴がつて居た市外林の拓かれたあとにボダイジユの並木を二列に植ゑたのであつた。この兩側の並木は次第に生長して遂にこれを中心としてウンテルンリンデンと

呼ばれる近世街路は出來上つたのであつた、即ちボダイジュのこの種類（リンデン）こそ世界に於ける重要道路樹木の種類となつた、このリンデン街はベルリン目抜きの街路で幅員九十八呎、二列に植ゑられ、今は處々マロニエを交ぜる、長さブランデンブルグ凱旋門よりフレデリック大王像まで三分の二哩、この街路樹の繁生狀態としては決して代表的のものとは云へないが、名稱の因つて生じた來歴の發祥地として有名である。リンデンは獨逸の片田舍、瑞西諸都市の到る所にありその葉冠に陰を宿して道行く人の慰となる。

第四の樹種はマロニエである、即ちトチノキである、我が東京の櫻田門外官衙道路の兩側のそれである。これも歐洲諸都市に至る所見られる樹種であるが殊にフランスの諸都市、就中パリのそれが餘りにも有名である。この樹下こそ戀をさゝやくにふさはしく、涼を納るるもよく、思索に助けとなるにもよい、チャンチャック・ルーソーならずともこの樹下に愛人と手をとり、チャールス・ダーウインならずともこの樹下に思索の緒をほごしたいものだ。



マルセイユ　ベルサンス通り

溫帯都市を一巡して樹木の記載は熱帯に及ぶ、こゝこそは眞に樹木の天國、道路樹木も熱帯だけは恐らく眞の樂園であらう、雨露の惠しげく、愛の日影は強くさし添ひ、人少く害少し、熱帯道路樹種は人各々差別をつけてその愛憎を語るであらう、然し私はやはり椰子の類を以て熱帯道路樹の王者としたい、素より色美しいものを求めれば緋に燃える鳳凰木あり、黄金をあざむくゴールデンシャワーの如きあると云ふもその雄大さに於て矢張り椰子の各種が望ましき路傍の武者立である。

以上道路樹木はこゝに輪廓だけはその大觀を盡くしたつもりである、即ち標木より發達した早期の並木としてポプラの如きものより次第に一列のものとなり數列に及び、或は田園より都市に及び、大國道の道路並木とまで進んで來た。然も道路樹木の發達はこれのみに止まらない、次でその集團は一つは道路公園式に發達し、他は小公園式のものとなり地方郷黨の社交休養等より見たる中心地に發展するものである。獨逸に於けるハインの發達、英國に於けるコンモンの發達何れもこの街路樹の思想の影響を否定しないわけにはい

かない。獨逸にはアレーバウムと云ふ語がある、道路に植ゑた樹木といふ意ではなく、即ちストリートツリーの意ではなく道路に植ゑらるべき特性を有する樹種である。宛もラバーズレーンが戀人と共に歩む道でなくして、共に歩むにふさはしき路の意でもあると同じ。かくして次第に始めは無言の東道であつた街路樹が、夜間に於ける無言の巡査と譬へられる街燈を誘つて細長かりし體軀は次第に幅を增して玆に道路公園の第一歩へと變形して來る。又は公園道とも云ふべき形態に變じて來るのである、前者は純然たる道路であつて公園の機能を帶ぶるもの、後者は公園にして然も道路の目的を達するもの、然も外觀は少しも違はない。かくの如き公園の中間物が出來上る、さうしてこの稍細長い、比較的短い綠地は都市の中樞を帶狀に走つて行くうちに沿道住民の爲めに、又自動車を驅つて休養をとるものゝ爲めに百般の自由空地としての利益を惜しげもなく與へてくれる。さうしていつか公園への連絡の途中そこに地形上、或は土地買收上止むを得ず若くは故意にも、細長い姿は曲り角や交叉點や記念碑や橋梁にゆき當つてそこに一部分に膨みをもつやうになり、その地區にふさはしい、小な公園が出來る、又かつてあつた何かの空地と連絡する結果小な除地式の公園が出來る、近所の子供が遊びに來る、さゝやかな花壇、植込が出來るやうになり、後には細長かつた道路ときり放されてもそこに尙ほかつ小な自然の姿は都市の中に三角州のやうに殘されてしまふ。人の潮流と車の激流はそれを除けて都心にどん〳〵と流れて行くのにこゝばかりは安全な地帶としていつまでも樹林に圍まれて近所の人々の天國のやうに保護されて行く、かうして發達してきた小公園も亦公園發達史中の一つの種類に數へられるもので立派に道路樹木が導いてくれた功績の一つと認められる。

都市のうちには小公園のみではない、更に大きな隣保利用の近隣公園もあれば、運動專門の運動公園もあり、動植物園を中心とした教化公園もあれば、社寺を中心とした境内地の利用樂公園もあるべく、郊外に出でればやがて大公園の工事場にも行き當るであらう。

然もその發達の根源には道路に對するさゝやかなる注意と並木の如き小自然に向けられたる天然愛護の思想が影響して居るのである。バイブルは我等に敎へて曰く「不注意なる罪人は道路を修理せざれば地獄に墮ちん」と、せめては都市を走る道路をして我等の體内に流るる脈管の思あらしめたいものだ。

（四、五、五）

# 太平洋に於ける平和の「軍備」

高木八尺

○

「力と義とが世界を支配す、義の準備成る迄は力の世なり」と昔フランスの哲人が言つてから幾百年を經ても、正義の準備整つたとして世を力の支配から解放する日は、中々來た様にも見えない。人類社會の始まつて以來原始生活の闘爭より現代の戰爭に至る迄、形こそ緩々なれ戰爭と云ふものゝ絶えたことはない。近世國家の發生以後戰爭は所謂「國家の政策遂行の具」となり、(文明諸國は成る程奴隷制を廢止し、自治を發達せしめたが)、今尚國際關係にかては『力の審判』に依る紛爭の解決の正當なることを疑ふ者は稀である。殊に我國に於て然るのか、「不戰條約」の議論は如何に喧ましくとも、眞に『不戰』の實質を論じ、國際平和と「戰爭の追放」の爲めに深刻な叫聲を擧げる人を聞かなかつた。帝國主義的傾向はさることながら、其の理由の一半は、恐らくは多數の人々の間に存する所謂ブルジョアの平和論に對する白眼視と冷淡の態度であつたに相違ない。多くの優れたる頭腦は獨斷して云ふ、平和は現存社會組織と本質的に相容れず、本を改めずんば一切は無益だと。

○

乍然、問題はしかく單純であり吾人の閑却蔑視を許す性質のものであらうか。「戰爭か平和か」の問題は、今日の人類に提出され居る最も嚴粛な又現實直接な質問なのではあるまいか?

過去一世紀間に起つた科學の進歩、諸機械の發明、產業の革變發達は、人類の生活にショットウェル教授の所謂「世界史上の最大の革命」を齎した。世界諸國の國際生活の相依關係は急速に密接交錯の度を加へた。過般我が海軍航空隊の二艇が南洋への往復二千五百海里を卅餘時間に成し遂げた壯擧は(無論其背後に血のにじむ様な犠牲と獻身の行爲の存することを忘るべきでないが)當に上記の意味に於ける時代の進歩を表徴する目醒しい代表的の一事件であつたと云へる。科學と機械とは、空間と時間とを征服して、幾千年の間人類を拘束せし反覆服役の鐵則を破り、革進と飛躍の希望を供し、世界をして獲得の時代より協調創造の時代に進ましめんとする。

此の趨向を扶けたものは逆說の如くなれど一面には戰爭其もの、進化であつた。今日の戰爭は、單に絶大の破壞力を發達せしめたに止らず、又同時に一國にとりては國内の民力

と資源との總動員又全體的提供の要求であり、加ふるに世界の國際生活にとりては萬國に波及する擾亂騷擾である。搗てゝ加へて戰爭の手段は結局に其目的を達し能はず、戰勝國と戰敗國と共に破壞と疲弊に苦しむの免れ難き事情が明となつた。世界大戰は（假令直ちに「戰爭を絶滅する爲めの戰爭」たり得ず又假令「デモクラシーの爲めに世界を安全にする」こと能はざりしとは云へ）如上の事實を痛切に世界の諸民の頭にたゝき込み燒き附けた點に於て深甚の重要義を持つた。誠にノーマン・エンヂェルの叫んだ「大なる幻想」の禍害は如實に證明されたのである。

斯の如き事實と經驗に基いて國際聯盟が生れ、ロカルノ諸條約が生れた。而して又「不戰條約」の議が起つた。かくて人類は其の發達史上に曾て見さる一大轉向を試みんとして居ると云はれる。

○

「不戰條約」の前身である「恒久平和條約案」を『太平洋のロカルノ』と稱して、起草者ショットウェル博士が親しくハワイに於ける『太平洋問題調査會』の國際會議に提出し、日本代表の意向を問ふたのは、一昨年の夏であつた。其後滿二年にして右ショットウェル案の一半を爲す「政策の具としての戰爭の排棄」の宣明が「不戰條約」によりて將に成し遂げられんとして居る。而して今秋京都に開かるゝ右「調査會」Institute of Pacific Relations の第三回國際會議には、恐らくショットウェルは再び來つて、彼の恒久平和案の後半部を爲す「仲裁と調停」を中心とする國際紛爭平和的解決の機構の建設の目的の爲めに貢獻努力せんと期するのであらう。彼と協力してパリ會議以來令名あるハンター・ミラーが會議に對する提案の準備に盡し居れりと聞けば、其の用意の程も窺はれる。

顧れば一昨年の調査會（インスチチユト）の大會は誠に多事であつた。太平洋問題に關係深き數ヶ國の民間代表者が、東京、上海、紐育、桑港、ロンドン、シドニー、等の各地より布哇に集まり、「人口食糧問題」、「支那問題」、「太平洋に於ける國際機關の問題」等を中心として、二週間を討議に送つた。各方面の代表者と專門家を含む百五十名の出席會員は、相異れる國と人種と文明とのおのづからなる代表者であつたが、夫々最も大膽直截に最も坦懷に意見を開陳し交換して、所謂「圓卓」の方法に依る討議――寧ろ懇談的なる會議を進めたのであつた。會議の後何千哩を隔つる人々の參集合議の勞が十二分に報ひられたと思はぬ者はなかつた。

會議の大切な一事項は支那問題であり、又之に際してなされた中華民國の勃勃たる國民的要望の力強い披瀝であつた。不平等條約撤廢の問題は、一面に於て高所よりするステーツマンシップの問題であると共に、他面に於ては「如何なる方法によつて」の問題を伴ふ現實性あること言を俟たない。此の重要な問題は又今秋の大會に於て重ねて各國會員の前に置かれる譯である。

支那問題に關聯して起つた著しい出來事として、會議に於ける討議三日の後、初め正面

衝突を豫想された英支兩國の代表者の間に却つて接近協調の傾向が顯著となつた事を擧げたい。英國側の中心人物（前印度國民議會議長）サ・フレデリック・ホワイトは會議後俄に支那視察を決し、爾來一兩度の歸英を除いては引續き支那に滯在してゐるが、其後英國の對支政策の一新を見しこと、更に最近同氏の國民政府顧問として事業が始まらんとして居ることは、今は周知の事實である。

○

「不戰條約」と云ひ「支那關係」と云ひ「太平洋問題調査會」は、結果に於てはかなり現實の政治問題に緣の近い仕事に觸れて來た。抑々此の調査會の成立が、かの所謂排日移民法に基ける動搖を直接の機會としたことも事實であつて、從つて一九二五年に開かれた最初の會議は之を移民問題の會議と稱するも過言に非るべく、又一昨年の會議と雖學術的なる人口食糧問題の形に於て我が國の重要問題が明確に關係諸國の識者に對して陳述せられしことも事實である。乍然之等の事實によつてインスティテュートが目前現實の政治問題に就てのみ其の全注意を傾注するものと解すれば甚だしく誤る。本來インスティテュートは二面の任務を企てゝ居る。一は各國に於ける「太平洋諸問題」の間斷なき調査研究である。即常設の機關による精確なる事實の發見である。二は各國會員間の聯絡による情報の交換と、殊に二年毎に開く大會に於ける諸問題の討議による重要問題の了解、及之に基く國際關係の改善である。會の組織としては布哇に「中央事務局」を存し、各國に夫々「調査會」の設立あらしめ、最高機關としては各國理事長を以て組織する「中央理事會」を置く。我が國に於ける『太平洋問題調査會』も、此故に、確實なる事實の調査機關たることを當面の目標として其の實を果さんと企圖するのである。されば從來の大會での我が代表の態度は、移民問題についても又人口食糧問題についても、根柢に於て科學的研究的なりし事に變りはなかつた。

○

今秋京都の大會の重要問題の一は恐らく滿洲問題であらう。會議の開催地が我國である丈けに、日本側として各方面の見界の有力なる代辯者を得るに便なる點は勿論重要な一面には相違ないが、調査會としては其の本來の使命を重んじて精確なる事實の調査と其の知識に基く協調の爲にする努力を忘るべきでないと思ふ。

先年マセドニアに於ける人口中の人種別が國際の爭點となつた時、相爭ふ三國の中、ブルガリアの學者達は調査の結果ブルガリア人の數は百十萬、セルビア人の數は僅に七百と報告したのに對し、セルビア政府の調査によればブルガリア人五萬七千、セルビア人二百萬であり、更に又希臘側の調査によればセルビア人は一人もなしとされたと云ふ。獨逸の評論家は之を酷評して「新興國に於て指導者が愛國的熱心を要求するに當り、其の存在を證明する教授連を見出す事は易い」と云つて居るが、若し之をしも事實なりとすれば、此の如きは人類の自己に對する侮辱であり、又

「調査會」の使命に對する激しき挑戰であるとせざるを得ない。

○

一昨年大會を終るに當り議長の役を務めし米國のウイルバー博士（現內務卿）は、會議の總評を試み、彼にとつて最も大なる意見は、太平洋方面に於ける國際紛爭處理の機關の不備缺陷といふ事であつたとし、會議が現存の國際關係の機構の下に支那の諸問題を取扱はんとするに當り、如何に無力と困難を感じたるかを例示して「近代式大ビルヂングの火災に際し、之を消し止めんとして手桶に水を入れて集り來れる老人の一團」の感を禁じなかつたと云つた。太平洋の沿岸に現在に火災の危險なしと誰が保障し得よう。一面には禍根を斷つて炎焼を未發に防ぎ、一面には消火設備の完成を企てゝ事件の鎭靜の道を開き平和解決の機構を樹立せんとするのが、第三回太平洋問題調査會大會の眼目と云へると思ふ。

「義の準備成る迄は力の世なり」といふ。正義と平和とは準備なしには來ない。平和を贏ち得んとすれば先づ其の代價を支拂ふ用意がなければならぬ。正義と平和の標幟を懸げて、人々に、果して血を流して悔まざる程の用意があらうか。例へば經濟的帝國主義に伴ふ既得權の問題に就て眞に根本的の分別と覺悟とが存するか。一方に平和主義者が安樂椅子により紅茶を啜りつゝ無代價の理想論を續ける限り、戰爭は續く。曾て侵略と獲得の軍備の爲めに智力を傾け財力を盡し一身をも犧牲にしてためらふ所なかつた人類は、今や新しき光明を認め、平和の爲めにする軍備（プリペアドネス）の爲めに、臥薪嘗膽すべき日が來たのではなからうか。殊に東西兩文明の接觸線に立ち、歐亞兩人種の前衛線に身を置く今日の我が國民が、祖國と將來の同胞の爲めに、三思すべき秋が來たのではなからうか。（四、六、七）

# 自傳的に見た日本社會主義運動史（六）

堺利彦



目次



## 一　社會民主黨禁止の後

『社會民主黨は唯だ其の宣言を天下に發表せしのみにて滅亡した』が『社會は青天に霹靂を聞けるが如く、驚きの目を睜いて之を迎へた。』その『社會民主黨が禁止されてから一個月あまりの後、萬朝報を中心として「理想團」が組織された。』我々は今漸く、その理想團について語るべき順序に到達した。

萬朝報――黒岩周六――内村鑑三――社會主義――理想團。こう書き並べただけでも、當時の空氣を呼吸した人々に取つては、實に非常な興味――極めて複雑な、デリケートな、多面的な、意味の深い、含蓄の多い、大なる希望と大なる疑惧とを同時に併せ有する、一種特別の感情、――それを今一つ換言すれば、賴もしさと、あぶなかしさとが堅くナヒ合はされた所の、そして兎にかく、今日から見れば、たまらぬほど懐かしい、然しながら同時に矢張り一面の失望を伴ふ所の、夢を思ひ出して樂しむような心持が、胸の奥からムク〳〵と湧き起つて來ることを覺えるに相違ない。私は實に今、そうした夢まぼろしの間に立つて、周圍の雲や霧を半ばその儘に、半ば今日の光を透して、書いて見るつもりである。

明治三十四年五月二十日の萬朝報を見ると、その第一面の「言論」欄に、『新政黨出づ』と題する論文（大要前掲）があり、それに續いて社會民主黨の宣言綱領の大部分が掲載されて居る。翌廿一日の同紙第

一面には、二段半ばかりの抹殺の跡――惨憺の感じを與へられる、謂ゆる下駄の跡――がある。前日の禁止の命令の爲、宣言綱領の續きが掲載され得なかつたのである。

越えて廿四日の紙上に、『社會黨鎭壓策、幸徳生』と題する『言論』がある。『今日に於いて鎭壓の目的を達せんと欲せば、……社會主義者を悉く國外に放逐し、政治、經濟、倫理、宗教、哲學の著者を燒盡し、且つ今後是等著書の輸入を禁止せざる可らず、(内務大臣)末松君にして能く此方法を決行するの勇氣と決斷と手腕とを有するに於ては、或は末松君の一代位ゐは鎭壓の効を奏するを得ん』

同日の『机の塵』には次の如き記事がある。『社會民主黨の禁止に就ては、邦字新聞はブル〳〵もので、同黨を攻撃するの外は、殆んど沈默を守つて居るが、流石に英字新聞中には同黨に同情を表してゐる者が多い△先日の萬朝報に掲げた「新政黨出づ」と題した論文が、果して安寧秩序に妨害があるとすれば、英字新聞の論調は更に大に妨害のやうに、我等には見受けられる△神戸クロニクルや横濱ヘラルドなどは、無論同黨の禁止は内相の權力内には相違ないが、アンナ命令は實際には殆ど無効であるとまで論じて居る』

廿六日の同紙には河上翠陵の『獨逸政史の一節(末松内相の一考を煩す)』と題した『言論』がある。矢張り、社會黨の鎭壓され得るものでない事を論じて居る。三十日には秋水の『日本の民主々義』がある。民主々義が結局、社會主義に歸せねばならぬ事を說いて居る。六月三日の『机の塵』には、次の如く書いてある。『日々新聞は十日も前に禁止された社會黨を今になつて攻撃しはじめ、三日も續けて長い論文を書いた』『獨逸社會民主黨の根據は主にハンブルクやブレーメンだから獨逸帝國の臣民ではない、なぞは如何にも苦しい口實だ、獨逸社會民主黨は公然堂々乎として現に帝國議會に數十の議席を占めて居るではないか』

四日の『言論』には『爲政者と社會的運動』がある。『日本の社會運動に志すの士は、斷じて彼等(無政府黨、虛無黨)の如き短慮に傚はざるべきなり、如何に迫害せらるゝも、幾度鐵窓の中に投ぜらるゝも、飽くまで平和の手段を取り、飽くまでも漸進の步調を取り、以て徐に世人の疑惑誤解を釋くことを努めざるべからず、斯くの如くにして始めて能く社會改良の事を企つるを得べきなり。』これの筆者は多分、河上君であつたらうと思ふ。

七日の『言論』『暴行者に對する愼の政策』は、大なる注目に値する。署名はないが、明かに黒岩君の筆である。曰く『四五の有志、社會民主主義の爲に一の黨を作り、其綱領を發表するや、……吾人は内務者の此の所爲の、殆んど言論の自由と結社の自由とに對する一の暴行たるを認めざる能はず』『結黨者の一人が吾人に寄せたる私書』には『小生等は俗吏を敵手にして犬死する程の愚に非ざるも、……此儘泣き寢入るは天下同志に對し恥づ可きの極に候て髀肉鳴て堪へ難く候へ共、憤慨の餘り未だ策の出づる所を知らず候、如何の運動方

法が小生等の目的を達するに便なる可きか、高教を賜りたく候」
とあり、「是れを讀む者、誰か結黨者の窮狀を察せざらん」
「然れども此の「ムチヤ」なる「言語に絶したる」暴行者と爭ふは眞に所謂「犬死」のみ「今日の問題は「如何にして此の暴行者の下に於いて暴行を受けざる社會黨を作る可きや」に在らずして「此暴行を制し得る憲法的の公明なる政黨を作る」にあり、先づ暴行者を制肘する政黨を作り、言論結社といふが如き、憲法の自由を恢復したる後ならでは社會黨を作るに由なし「吾人は社會黨と全然主義を同じくする者には非ず、從つて社會黨の爲に之を言ふに非ず、唯だ我國の現在の爲に、將來の爲に、憲法の爲に、百般の公義的事業の爲に、之を言ふ、先づ社會黨ならざる、公明の政黨を作れ、今の我國に暴行者ありて政黨なし、政黨を起して、今の政府と云ひ、今の政黨と云へる暴行者を取りしづめざれば、一切の事、河清を待つが如けんのみ、此の暴行以外の政黨を作る有志者はなきか、有らば來れ、吾人進んで執鞭の勞に從はん、無くば請ふ隗より始めん哉」

この文中にある『結黨者の一人』は正に幸德であつた。幸德、黒岩、二人の間に種々の默契があり、諒解があり、多少の約諾があつた事は明瞭である。私（堺）は當時、この論文を讀んで、いよく黒岩がやりだすなと思つた。『執鞭の勞』と云ひ、『隗より始めん哉』と云ふ所に、大なる賴もしさを感じた。この論文には大見出しが使つてあつた。大見出しと云つても、二號活字に過ぎなかつたが、萬朝報が二號見出しを用いるのは極めて稀な場合であつた。

## 二　黒岩君と萬朝報の總勘定

我々はこゝで更に、當時の萬朝報の全體について簡單な概觀を試みる。

萬朝報は『新人物の採用に依つて』簇々としてその『氣品を高め』つゝあつた。『曾ての惡辣が、今は峻烈として威嚴を持つ』て來た。『宗教界の奇傑』『内村鑑三氏が遂に呼び迎へられ』た。『社會改良の叫びが期せずして朝報社の内外に動いて居た。』『内村鑑三氏は一たび朝報社を離れたが、やがて『再來』した。『内村氏の個人的（宗教的）改良主義と、秋水等の（政治的）社會主義とは、明かな對立を爲して居た。』『然し又、内村氏の戰鬪的な所、一世を敵として戰はうとした所』に『兩者間の共通點』があつた。『朝報社に大なる機運が動きかけて居た。』『理想團の漠然たる前影』が投げられて居た。『理想團の豫備的聲明』も發せられて居た。黒岩氏は『意氣大いに揚るもの丶如く』であつた。彼は年來の『嗜好に耽るの弊』を棄てゝ、今や『他の有用な事業』に向つて其の『精力』を加へんとして居るのであつた。

然し或人はそれを冷罵し嘲笑した。狼が法衣を纏ひかけて居る。『蝮の周六』が『志士仁人』に化けかけて居ると。私の如き、大なるアコガレを以て萬朝報に入つた者すら、間もなくそこを『久戀の地に非ず』と云ひ出したり、時としては、『黒岩、士を遇するの道を知らず』な

どと日記に書いたりした。もちろん私は、結局のところ、『潔く彼に屬望し』『大なる頼もしさを感じた』のであつたが、それでも猶、心の底の底には、折々不安と疑問が起つて來る事を免れなかつた。

その頃、朝報社は三十間堀から弓町（今の處）に移轉した。當時としては、殊に汚ない事で有名だつた朝報社としては、それは大變な變化であり、進歩であつた。我々も可なり好い氣持になつて居た。黒岩君の得意想ふべしであつた。然しそれは、單なる輕い意味の得意ではなかつた。彼はこの移轉と同時に、彼の新たなる生活、新たなる運動、新たなる事業を始めようとして居るのであつた。

彼は社會民主黨禁止の後を承けて、既に『眞の政黨』『憲法的なる公明の政黨』の組織を唱道し、『隗より始めん』とさへ云ひ出したのである。然し彼はこの時、彼自身と、萬朝報その者とについて、社會公衆の面前に於いて、一應、充分なる、過去の總勘定を爲すの必要を感じたものと思はれる。

六月十九日から『新聞紙の道德』と題する、（これも二號見出しの）長論文が連載された。『周六述』と署名してあつた。私はこゝにその大要を抄錄して、その總勘定を檢査するの必要を感ずる。

## 三　利の新聞か、義の新聞か

（一）『利と義』この二つが『總ての人間の行を選出する二大元動力』である。『新聞紙は利の爲の機關なる乎、將た義の爲め機關なる乎』十九日

（二）『大新聞』は『人を警』める『義の新聞』であり、小新聞は『人に媚』びる『利の新聞』である。以下『新聞紙墮落の歷史』を語る。（二十日）

（三）東京日々、郵便報知、朝野新聞、皆な同じく墮落した。時事の如きは元來『利に固着』した『拜金新聞』である。『大阪の新聞』亦然り。この『滔々たる流弊に抗せんとする者は無き乎』（廿一日）

（四）『利を計り、讀者に媚』ぶるの傾向は止むを得ずとしても、其間に於いて、『其の本來の性質が義に在ることを遺るゝ勿れ』謂利一方の商人の業に非ずして、志士仁人の業なることを記憶せよ』今や新聞界に『投票競爭』の流行がある。ロンドンでは『脫字搜索競爭』まで流行して居る。萬朝もそれを勸められたが、『山師の事』として斥けた。ツマリ、世間の新聞紙は、『富裕に對する身贔屓、口錢を取るもの』など樣々である。そこで『疑問が起る』『新聞紙は到底、「利」一方、人に媚ふる一方に非されば成立する能はざるか』（廿二日）

（五）星亨は利の代表者である。『彼の仆れたるは社會の「利」「義」の波動に關する何等かの消息に非ずとせんや』（廿三日）

（星は廿一日に、『教育界の惡魔』として、伊庭想太郎から刺殺された。この事については猶は少しく後に記す。）

（六）『利の成功が果して成功の名に値する成功なるやを危む』『新聞紙は到底第一流の成功者たること能はず』『單に商品を以て觀る大阪の

新聞紙と雖も、其の利の爲には多少尊敬の必要あるを認め、政論に人生に社會に、多少の抱負あり意見ある人を買入れて之を推戴……せんと勉むるに非ずや』

『人を責むる者は先づ己を責めざる可からず』『萬朝報は如何なる新聞紙ぞ』『請ふ吾人をして吾人の立つ所の地と、行くべき所の道とを明かにして、讀む人の判斷に供せしめよ』(廿四日)

(七) 萬朝報は『辱事、惡德、强迫、取財、嫉妬、桀々の機關』などといふ、種々様々の『惡評』を蒙つて居る。然し萬朝報の如く『世間の批評を度外に措きたる者も稀ならん』『若し萬朝報を惡德の新聞とせば、彼は如何の抵抗にも拘はらず其の惡德を貫きて止まざる者なるべし』

『或程度までは、萬朝報は戰はんが爲に生れたり』『朝報は何の事の爲に戰はんと欲するか、吾人自ら敢て義の爲めと云ふが如き崇高の資質有るには非ず、然れども斷じて利の爲には非ざるなり』

『彼が人の私身を抗擊したるの一事』『子君子の非難を受くと聞く』

『然れども朝報は曾つて「惡を責む」「惡を除く」と云ふより以外の心を以て人を責めたること無し』『有體に云ふ、吾人は惡人に對しては極端に無慈悲なり』『初は之を改めしめんと欲す、然れども到底其の改む可らざる迄に固結したる者を見るや、唯だ之を戮するを知りて宥すを知らず、此點に於て吾人には露ほども雅量なし、吾人若し不識庵其人の地に在りて機山の死を聞かば、箸を投じて泣くを爲さず、我れに敵したる者の相當の運命として大に誚せんのみ、蓋し此心は英雄の心に非ず、又君子の心にも非ず、唯だ朝報の心のみ』(黑岩君は折々、會話中にも、文章中にも、極めて通切な英語を使ふ癖があつた。)

『然れども吾人豈、朝報の執り來りし旨義一切を擧げて盡く是なりと云はんや、今に至りて大に昨非を悟りたるを覺ゆるが如き箇所亦無きに非ず』『吾人は餘りに不平の人たるに過ぎたること是なり』『正直に、吾人は絶望の人たりしなり』『所謂先覺なる者の無信實、無精神、無爲、無識に絶望し、政治なる者の穢きに失望し、社會、風俗、交際の淺劣なるに絶望し、其の結果は先づ一切を罵倒し、破壞し、燒殺し盡すに非れば理想行はれずと爲したるなり』『朝報社同人は、皆年少氣鋭、其の病とする所は、書を讀むに過ぎて世間を知るに不足なりき、……俗世度し難きに絶望したるなり』

『吾人は新聞紙を以て今の政治の下に立てる者とは爲さゞりき』『吾は新聞紙に依りて吾が政治を行はんと欲したり』『此點に於て朝報は確に虛無黨、破壞黨、無政府黨たりしなり』『而も社中同人の外に事を共にする友もなく力を合すべき同志も無き者と信じたり』

『今にして之を觀るに、必ずしも同志なきに非ず、之を求むるを知らざりしのみ、必ずしも今の政治、今の社會の、獨り斯の如く理想に遠きに非ず』『社會を破壞するは社會を理想に接近せしむる所以に非ず』

『恕し得る限り其の病を恕して、而して理想を以て之を救ふこと、猶醫者が病者に對するが如く成らざる可らざるを知れり』

『萬朝報なる者の心事、明かに斯くの如し、是れ義の新聞なる乎、利の新聞なる乎、更に問ふ、新聞紙の道德を説き、同業者に義を以て責むるの資格あり耶』

『唯だ聊か吾人の意を强くするは、此新聞が、當然に義の新聞の榮ゆべき如く榮え來りたる一事なり』『此の便宜は、……世人の信任なり、委托なり、吾人爲す無くして其委托と信托に背きて可ならんや』(廿五日)

## 四　修飾と强辯の解釋

私は、その當時、之を讀んで、修飾の跡が全く無いとは感じなかつた。今日は猶更である。然し今日でも、私は矢張り、之を讀み返した結果、むしろ黒岩君に對する同情が增すことを覺える。

この文章は根本に於いて卒直なる告白である。同時に、將來に對する發奮であり、誓約であり、宣言である。私はこの文中に於いて、人を欺き、世を胡魔化さうとする、ズルイ僞善の氣を感じないで、むしろ只だ頼もしさを感じさせられる所の、强い自負心と批判力とを見た。

私は今、こゝに一つ思ひだす事がある。それは、私が黒岩君の下を離れてから後、何かの折々に、幾度も幾度も思ひだした事である。曾て黒岩君が私等に向つて、——『私等』といふ中には、内村さんもあり、秋水もあつたと思ふが、——次の如く語つた。平生から飾り多く新聞記事を書きたれたので、その技巧が自然、一種の癖になつて、自分の思ふ事を卒直に有の儘に書かうとしても、ツイ知らず誇張に陷入る點が少なくないと。

この『强辯』といふ言葉が、當時、黒岩君の口から出た其の儘であるか否かは、充分確かでないが、私がそんな意味に聞取つた事だけは確實である。又この話が、右の『新聞紙の道德』の發表されたより以前の事であつたか、以後の事であつたかも明瞭でないが、ツイ前に私が『修飾の跡』と云つたのも、ツマリこの『强辯』の跡なのである。

そこで要するに私は、黒岩君の修飾と强辯を、當時も、その後も、多くの場合、善意に解釋して、精進努力の過程と見て居たのであるが、然し折々はそれが、事態の發展、感情の變化等につれて、その修飾を矢張り僞善と解し、その强辯を矢張り胡魔化しと解する心持にならざるを得ない場合もあつた。それらの事は段々後に記す。

## 五　星の死と黒岩の判決

星の死に對する萬朝報の態度は甚だ興味あるものであつた。『嗚呼星亨』『彼の一死、萬事休す矣、吾人、敢て遡りて之を指摘して死屍に鞭つの冷酷に出づるに忍びんや』『暗殺は陰險怯懦の所爲也、嗚呼我國未だ斯くの如き蠻風を脱するに至らざる乎』

『彼の正面の敵手は、就中、「識庶涙を投じて機山の死を嘆惜したるの概あるべし』

右の筆者は誰(或は誰々)であつたか明瞭でないが批評の立場は寧

ろ平凡であつた。次に左の意味の『暗殺論』が出た。明かに秋水の筆であつた。暗殺の『根本原因』は『社會が判斷と制裁の力を喪失せる』に在る。社會の『腐敗墮落を救治する』即ち『今の（十三字削除）』より外に、暗殺を無くする方法はない。

所か、黒岩社長はおのづから別個の意見を持つて居た。彼は一利ゝ代表者』の仆れたのを見て大なる勝利を感じた。惡人に對しては極端に無慈悲なる』『箸を投じて泣くを爲さず、我に敵したる者の相當の運命として天に謝せんのみ』と判決した。彼は後に『死屍に鞭うつの辯』を作り、『吾人を以て星亭を觀るに、彼が廉恥に缺如たりしは爭ふ可からず』と斷じ、昂然として死屍に鞭うつ事を敢てした。彼は確かに一段高き立場に立つて居た。そして『此心は英雄の心』でも、『君子の心』でもなく、『唯だ朝報の心』だと云つた。『朝報の心』は即ち黒岩一人の自負心であつた。彼は矢張り社中を壓倒する力を持つて居た。

## 六　黒岩と内村

然らば當時、『内村さん』は一體どういふ風に『黒岩さん』を見て居たのであらうか。一體、どういふ風に『大阪の新聞紙と雖も、……抱負あり意見ある人を買入れて之を推戴』すると黒岩さんが云つた事は、矢張りそのまま、萬朝報と内村さんとの關係にも當てはまるのではないか。黒岩が内村を利用して居たのに過ぎないか。内村は知りつゝ、利用されて居たのであるのか。それとも二人は相當に深く信じあひ、許しあつて居たのであるか。我々はそれを如何に觀察して居たのであるか。それらの事は次號に於いて稍や委しく語る積りである。

七月二日、萬朝報の言論欄に『平和なる檄文』（黒岩周六述）といふ大見出しが現はれた。そして『吾等と心を同じくする人は來れ、與に倶に社會救濟の爲めに理想團を作らん』といふ大聲があつた。これが即ち待ち設けられた『理想團』の發表であつた。

# プロレタリア詩人に就て

岩淵威夫

プロレタリア詩人が、被搾取階級の苦痛の活路を、未來の漠然たる期待の中に求めたり、或は悲觀的な絶望の怒號に又は壓迫者に對する單なる個人的なアナキスチックな呪詛に爆發させてゐた時代は過ぎた。現在のプロレタリア詩は、其處に幾多の誤謬はあれ、資本に對する組織的鬪爭の必要や階級利害の衝突に關し、又勞農大衆の威力と未來の勝利への確信と喜悅に向つて意識的に構成されてゐる。そして最近特に勞農大衆の鬪爭の線に沿ふて進展しつゝあるプロレタリア詩は、階級對立の激化と共にその取材の範圍も廣汎化して來てゐる。では、最近のプロレタリア詩人にどう言ふ人がゐるか――紙數に限りがあるので詳論はさけその概略を紹介することゝする。

先づ『文藝戰線』に據る詩人で、階級現實を巧みに把握し、その表現に於て野性的感覺の新鮮さとメカニックの强固さを持つて、新しくプロレタリアの情調を出した詩人に武本龍夫がゐる。殊に『文戰』一月號所載の『レールに刻む生活のトン』の如き秀ぐれたものである。又、プロレタリア抒情詩人に高橋辰二がゐる。彼には未だ藝術至上的殘滓がないでもなかつた。併し『村よ、お前の求むる蒸へ』に於て、完全にそれを清算し新しい形式とリズムを以て農民に呼びかけてゐる。其他、米田驍、石井安一、古賀不美男、寺澤春郎、女性の特殊な感覺を以て日常鬪爭を詩にもる伊藤花子など。併し、一般に未經驗の材料を再組織する場合に槪念的になる缺點が尠くなかつたが、階級對立の尖銳化された最近になつて、その鬪爭と組織を、潑剌たる生活姿態を以て工場や街頭から唄ひ出す詩人が多くなつた。その代表的な者に、今村恒夫、堀ひで子、佐藤怨などがゐる。

文戰派の詩人が、その表現に於て藝術的であるが象徵的であるに反し、戰旗派は一般に敍事詩的であり說明的である。前者が未經驗の材料を詩に構成する場合槪念的であるがリアルな敍事詩的形式をとり乍ら詩として一般に槪念的であり說明に墮してさへゐるのが後者である。そして、こうした戰旗派の傾向の必然として、易々と取材を廣汎化してゐる。これは大いに希むべきではあるが、詩として失敗してゐるに於ては考ふべきである。プロレタリア詩の力は、その鬪爭の尖銳な內容と大衆に對する力强い藝術的影響の中にこそあるのだ。これはヒユマニズムの殘滓の影響と詩への要素を實生活から把握することなく机上にデッチ上げる所から來る。此處に中野重治の必然の沒落があると言へるし、又、上野壯夫のかの魅力あるテンポの速さや荒削のリズムも、畢竟こうした日本の階級現實から遊離してゐる故の賜である。この派に據る詩人は他に三好十郎、白須孝輔、森山啓、渡田、仁木二郎、狹間二郎、西澤隆二、江森盛彌などがゐる。併し、最近になつて森山啓、白須孝輔を初め新しく擡頭して來た詩人は、戰旗の如上の傾向を着々清算しつゝある。例へば田木繁、小林關夫等がそれで、殊に田木の『拷問に耐へる歌』の如き本年度初期の傑作詩として推賞に値する。又、あの眞正面からぶつかつて行く態度の上野壯夫（目下入營中ときく）などは、現在の戰旗では將來期待していい才能ある詩人であらう。（一九二九、六、四）

# 詩（懸賞佳作）

## 山雀の言葉

林 蓉一郎

A

石楠の梢をとぶ微かな羽音・・・
彼女は侏儒のやうな湿地の茸を敲いて叢へ隠れる
誰かきて追ひかけてくれ
朝月のやうにうすれて行く散らし音の鳥を
夜がくれば木の上の巣に

またひとり、おれはつめたい草を藉くのに

B

ある月夜、おれは椎の實のやうに谷間へ轉げ落ちた
そこでおれは青朽葉の一枚に
虹蚓のやうな食欲を感じた

小徑には病みほほけた松葉が積む
松葉は老耄の百面相である
彼等は占筮師のやうに碧天の星を當てる
・・・故い星暦を繰つて行く林間の音なき風

女よ、おれはそこで玉蟲の字韻を拾ひ
假名ばかりな君の稚い手紙を讀むのだ・・・

C

みどり葉が閉む谷あひの淸冷な流に
星の掌がはつきりとみえる

若い楓が傘を水面に展いて青い手型を捺すのだ
……夜更けて水底へ沈む繊い指先を潜つて
いつぴきの魚は杳かに中天へ舞ひあがり
草の葉が編んだ魚籃の窗へ流れ星の箒を吹き叩く

D

暁ちかく、野葡萄を草屋根に載せて
ひとりの若い男が流を漕いですぎた……
岸では夜もすがら、貝のやうな皓歯の女が
熱てる片脛を濡らすのだ

## へんなのりて

古迫 勇

これは奇妙な見送り人だ。

首のない實家。
顎の干上つた詩人。
豚のやうに肥えたニヒリスト。
黒眼鏡をかけた宿なし。
營養の足りない子供をつれた狐のやうな女。
金がとれずに追ひかけまわしてゐる片眼の洋服屋。
脚の半分ない男。
みんな默つてすぱ／＼莨を吹かしてゐる。
秋風の立つプラットホーム、
ベルが鳴る！
さあ大變！のりてがゐない。
汽車は動き出す。
洋服屋が慌てる。
見送り人は煙りのなかで嚏をした。

莚になつたおれの詩

おれはつかれてゐる。
むやみにつかれてゐる。
空をみてるとつかれてくる。
山をみてるとつかれてくる。
おれは一枚のよれ〱になつた莚となる。
人が笑ひながら踏んづけて行つた。
けものが吠えながら馳けて行つた。
ひた〱と潮がその上を浸して行つた。
おれは氣が遠くなりながらじつと笑つてゐた。

## 赤い蕈茸の家

森の奥の赤い蕈茸の家に
銀のやうな鬚をはやしたよぼ〱の爺さんが
鍬をかついで花園の手入れをしてゐる。
僕を見るときまつてお出でお出でをする。
やさしく笑つていつも手招きするのだが
つひ一度も行つた事がない。
秋にでもなつて
ぽか〱と暖かな日和がつゞいたら
一度行つてみやうと思つてゐる。

## 用事

角の花屋でしばらく待つてゐてくれ。
なにかみづ〱しい花でも探して。
僕はその細い露地を曲つて
急いで用をたしてくる
時雨れぬうちにちよつと用をたしてくる。

## 猫の尻つ尾

空腹をかゝへて
一日中町をうろついて
かへつてきたが、
夕食の膳に
猫のしつぽがのつてゐる。

空腹と猫のしつぽに
あゝあ　今日も暮れてゆくのか。

# 無機物地帯

仲村渠

鐵橋を渡れば展けてゆく膨大な地帶。
海を埋めて
粗野な街をひろげてゆく健康な三角洲を
けなげな犯罪が花畑のやうに美しいほとりを
堀割の麗しい濁流に沿ひて
鮮な溺死體を迎へ
涼しい肥料船へあひさつをかはし
ゆくてには水沫をあげる浚渫船の躍ける筋肉
また、たえまなく僕らの眼に錯綜する鐵線路の鮮明な東西南
北
雫をかむつてくる貨物列車
またもや前進してくる鐵材運搬車のたのしい地ひびきを越え
はるか海岸線を飾つてゐる貨物船の美しい無表情よ。
いろんな人種を持つて
海をおひやつて擴がるこの地帶のなかを
ぼくの戀びと！
この賣春婦はつよい股で渉つてゆくのである。
その心臟は美しい無機物なのである。

## 體操

煉瓦塀をおし破つて轉びにゆく青い草地
肩にのぼる花やかな雲
雲をよんで刺しとめる新しい劍
口にとびこんでくる微細な飛行機
飛行機が逃げぐちを求める一枚の空

# 四十五文字の歌

磯部美知

ベゴニアの 芽の五分許り 萌え出しを
いたはりながら 陽ざしを追ひて
庭のあちこち 抱へ移せる

空俵 焚けばめら〳〵 立ちのぼる
焔をめぐり うちかざす手の
同胞なれば よく似たるかな

一週に 一度和服の 嬉しさよ
袂の底を 隅なくさがし
「朝日」の折れを 發見したり

---

朝飯は 海苔か煮昆布か 納豆に
定まりあれど 日曜の日は
寛ぎありて 味ひ食ふ

弟は 物干に居て 繪筆揮ひ
浪花節など 時々うなり
通りの人の 顏をあげさす

庭下駄の 感じによるも 柔かし
見れば地表は 弛緩し來り
濕ひの中 青きもの萌ゆ

# 無產政黨の自治體進出

## 八幡市會に無產黨の進出

龜井貫一郎

昨年の八月新聞を賑はした處の、又我々が飽く迄も抗爭したる處の八幡市分區制問題は何と誰が辯解の辭を設け樣とも、明に無產政黨の八幡市會進出を阻止するの陰謀であつた事は之を否定し得ないものである。人口は僅に十三萬に過ぎざる都市を六區に分割して市會議員を選出せんとするにあるが故に我々は之を稱して微少選擧區制と稱した。其の制定者が內面に意圖した處は、要するに工場に於て集結された勢力を、其居住區域に於て分散せしめんとするにあつた事は明である。

× × ×

之を爲した處の公新會なるものは市會に於ける民政派と政友派の合同勢力である。昨年の總選擧に於て新興勢力が新なる政治的動向を示すに至るや遽々然として今迄相敵視し相抗爭したる二つのブルジョワ政團は茲に相提携して無產政黨に對抗することになつたのである。そして其の連衡を彼等は公新會と稱したのである。尤も事茲に至るには他の特殊の事情もあつたらしい。併し其の事情の何たるかは茲に公開の紙上に於て之を說明するを潔しとしない。

× × ×

八幡市會總改選は斯の如き制度の下に鬪はれたのである。しかも既成政黨一致の攻勢の下に鬪かはれたのである。公新會は內部に於ける政友民政の內部鬪爭を續けながら、無產政黨に對しては公然一致の步調を取つて來た。市の中央にある旭座を借りて無產政黨批判演說會をする事にした。劇場代でも三百五十圓もする處である。大規模の宣傳は行はれた。大衆は當日を待つた。彼等が如何なる批判を行ふかと云ふ事に興味を持つたのである。然るに當日になつて急に辻に立看板が立てられた。「雨天の爲め中止」と云ふ立看板であつたのである。そして旭座は云ふ迄もなく野天劇場でない屋根はあるのである。だが其の中止になつた事情は更に面白い。當時福岡

に市會議員選擧に應援に來て居られた中野正剛君や杉浦武雄君や我敬愛する老闘士工藤テチオ君に對して主催者は出演を希望したのだそうである。處が三君共に之を拒絶せられたのだそうである。三君の日頃の言説行動に徵して拒絶の意思の那邊にあつたかは之を忖度するに難くない。さて三君の中一人でもと思つたのが一人も出演不可能と來たので出演者が居ない。市會議員候補者や其他の應援辯士が無産黨は共産黨であると云つたり龜井は五十萬の資産を有する有産階級であるとやつて見たりするのでは市民の方が承知をしない。事程左樣に我が八幡の大衆諸君は階級的に又政治批判的に自覺して居られるのである。其處で市民政黨左翼の若手から故障が出て取止めになつたのであると聞いて居る。さすがは全國階級戰の最も尖鋭化した處である丈けに既成政黨諸君は死力をつくして我等に對立された。しかし其の言論に於て殆んど全部が何等政策を說かず、一に我々を誣侮誹謗し無根の事實を宣傳するに止まつて居たのは甚だ遺憾と言はざるを得ない。

× × ×

斯如き連合勢力の下に於てのみならず、今一つは、未曾有の言論封鎖の下に於てこの戰は戰はれたのである。我々は何等過激の言辭を弄するをつゝしみ尚それでも注意中止ありたる場合は次回の演說で訂正する樣に努めて居たのである。それにも拘はらず「貧富の懸隔が甚しいのはいけない」で中止「我々ももう少し良い生活をしたいものである」で中止「既成政黨のやつて來た樣な政治は惡い政治である」で中止「既成政黨にのみ政治は委して置かれない」で中止「社會民衆黨を共產黨だと言つて居る政治家があるのは世界の大勢を知らないものだ」で中止「言論は壓迫す可きものでない」で中止「八幡市と言ふ船が沈めば、乘つて居る市民も沈んでしまう」で中止「買收にかゝつてはいけない」と云へば中止、甚だしきは西尾代議士が「法律は守らなくてはならない（買收の事をさす）」で中止となつた。中止となつて、、もしないのに、、は頻發した。

今此の稿を書いて居る嘉穂郡の縣會議員補缺選擧でも、「候補者が皆樣を裏切る事があつたら、皆樣の面前で彼の首を申受くる位の覺悟で推薦して居る」で中止、「聖德太子の政家憲法第四に曰く、凡そ上下の爭は」で中止、「これ我々が兩稅委讓に反對した理由である」で中止、そして今朝は候補者を、、が呼んで「斯樣に中止が多くては辯士を、、、しなければならない」との御託宣である。

一體福岡縣は一寸外から想像もつかない警察政治の處である。是れは鑛業資本主義の最高度に達して居ることと對比して、其の理由を發見し得るものである。だがこの事は稿を改めて書き度い。この明瞭な選擧、、には法曹團の活動と嚴正なる檢事局の力を俟つ積りであり、斯の如き警察政治下に於ては、今迄の九州勞働運動の（以下三行削除）

× × ×

だが、當面の問題に關して今や我々は八幡に市會議員九名を持つ。戸畑の二名小倉の二名佐世保の三名を合して十五名である。我々は何をなす可きか。併しながら此問題は現今に於ける日本地方自治制度の官僚的歪曲によつて一の制約を持つ。國會に於て知事公選が實現せざる限り、又條例が一々內相の認可を要する限り、又特別稅や附加稅の制限外課稅が一々大藏省で拒否される限り、我々が如何にレジョナリズムの上に眞面目に考へ樣とも當分は無駄な事だと云はねばならない。故に當面我々の任務は建設的な方面に於ては、市會の議事を公衆化し、民衆自治に對する大衆の理解を高める事が、其の任務であり、制遏的な方面に於ては、利權政治を看視することであり、當面の重大なる我が市會議員の任務としては、待合、料理屋、役員爭奪陰謀（利權に手を觸れざる事は勿論）に對して行動によつて之を批判する倫理的任務と市會を市民共同生活體の管理事務としての能率を高める上に於て、市政を科學的數量的統計的に分析する研究的任務である。我々は中央政治の民衆化と相俟つて幾年の春を又忍びながら眞に民衆的自治制の確立に邁進しよう。今日の政弊は一面から觀察するならば、一般政治家の政治經濟常識と品格が大衆の常識と品格より下位にあると云ふ事が原因であると云つて差支ない。然らば我々に未來はある。殊に鐵の火煙散る處、煙突の濁漫き處、炭を生む處、鉛のむらがる處、門司、小倉、若松、戸畑、八幡五市相接近する處、眞に資本家の天地である北九州は同時に勞働階級の天地であり、こゝにこそ始めて、地方資大工場大鑛山分賦制、行政地域の封建的分割原則に近代經濟的分割原則を加へたる特殊管理地域制、從つて公共企業の公營制を布いて、眞の社會的地方自治を實現し得るものと信ずる。

# 無產政黨の村政

須永好

想像的問題であつた無產政黨の活動は愈々現實となつて其の獲得した議員は衆議院に於て、府縣會に於て、或は市町村會に於てさかんに活動して居る。町村に於ては過半數の議員を獲得して無產黨の手に依つて村政を行ふ地位を獲得した所さへ出來て來た。無產政黨の政治は我が日本に於ても夢の問題でなく、今日の問題となつて來た。無產政黨が村政を行つたらどうなるか？ 私は大正十一年以來無產階級の手で村政を行つて來た強戸村の經驗からこの問題に答へて見ようと思ふ。

一國の政治が其の國の經濟事情を考へることとなしに諒解出來ない樣に強戸村に於ても其の經濟情態を知ることなしに村政を解するこ

とは出來ないであらう。强戶村は淺草驛から東武線電車で約三時間の處岩良小橋驛を中心とした約一方里の村である、人口五一八〇、戶數八三〇、水田三三一町、畑二一四町、山林五一四町、國稅負擔額（昭和二年度ニ於テ）一〇、九八四圓の農村である、主として農蠶を營み、戶數を職業別にすれば、自作一一二戶、自作兼小作二三一戶、小作三四一戶、商業七一戶、工業其の他七五戶にして耕地所有別戶數は十町步以上五戶、五町步以上、二〇戶、三町步以上二二戶、一町步以上八二戶、五反以上二六戶、五反未滿二〇三戶で二十町步以上耕地を有する地主はなく村外地主の有する耕地は僅に十九町步にして、不在地主、大地主等は少い村である。桐生、足利、伊勢崎等機業地を距ること三里弱の地點にあり、近代工業の盛になる以前は賃織りを唯一の副業として居た土地であるが、最近この唯一の副業を機械に奪はれ農家は過少農として苦しんで居ること他のかうした村と變りない。

　强戶村に於てかうした情態が小作爭議を卷き起させたのは大正十年十月の事でそれ以來小作農及自作兼小作農の組織した農民組合が小商人や職人の協援を受け乍ら强戶村の支配勢力となり地主や金持ちが有志として持つて居た勢力と取つて代つたわけである。

　小作人の村會議員が何人出やうとそれが階級的活動をしないなら問題はないが、議員があらふがなからふが階級的な勢力が一度起きては村政に一大變化の起きるのは經濟的事情に於て地主のいひなりになつて居た小作人が小作米を自分で決めて持つて行く樣になつた事に因つて當然である。大正十一年は抑へがたき農民組合の勢力に村長や村會議員が微力な職權を以て反抗した一年であつた。組合側は村稅の滯納同盟、小學兒童の同盟休校、消防手の總辭職等を以て村長や村長辭職後縣より派遣した臨時代理村長等の滯納處分や組合切り崩しに對抗し大衆の威力を以て勝利を獲得した年である。そうした事のあつて以來地主は微力な村長や、村會議員の職權を以て小作人に當る樣な愚な事は止めて專ら今の制度が持つ絕大な所有權の威力に依つて小作人に當らん事を決意し、小作人に對し經濟的な壓迫を益々加へることを戰術としたが村政に於ては組合のいひ分を一も二もなく用ゆる樣になつた、大正十四年の五月の選擧に於て小作人が定員十二名の村會議員を八名迄獲得し得たのもこれが爲である。地主のこの戰術は賢明ではあつたが時を得て居なかつた。小作爭議に於てはそれ程專らであつたにも拘らず時の力はいつも小作人を有利ならしめて地主はいつも敗れた。剩へ小作人に渡して了つた村政の方はどうであつたらふ。時は無產政黨の運動の漸く起らんとする時で强戶村の小作人が苦もなく獲得した村政に於ける地位は全國に輝いて無產階級に大きな希望を與へて力となつた。こうした大きな動きの中に無產政黨に依る强戶の村政は四年間行はれて來たのであるがそれには隨分細心な注意が拂はれて居る。

　吾々が其の手に依つて村政を行はんとすれば其の政策を行ふよりも先ず大きな三つの障

迫と戰はねばならぬ。法規の拘束、經濟的支配階級の壓迫、監督官廳の抑壓がそれである。これは今回の市町村會議員選擧に於て多數の議員を無產政黨に於て獲得した町村に於て自ら階級的村政を行はんとして必ず體驗するに違ひない事である。

今日の法規が一から十まで資本家本位のものであることは論ずるまでもない事で少しでも無產階級本位の政策を行はんとすれば必ず拘束を受けることになる。可能な範圍に於てこの法規の許す範圍であるから吾々はあらゆる逆用をしても尙ほ失望せざるを得ない。法規の拘束は誰も豫め覺悟の事であるが案外不用意にして壓迫を受けるものは經濟的支配階級の壓迫である。假りにも一村の政治が地主や資本家の壓迫を受けるとは嘘の樣な事實で、、の政治が現在の經濟組織の中に於ては、、、、の支配を受けるが如く止むを得ない事である。一例を擧げれば山梨縣北巨摩郡鹽崎村に於て農民黨に屬する保坂村長が小學校改築の爲二萬圓の起債認可を受けて居ながら其の村債の引受けてがなく折角の計畫が行はれず困り果てゝ居るが如きがそれである。尙ほ保守的な村に於ては重大な問題である祭禮の寄附、土木の寄附、警備費の寄附、教育費の寄附等一切が停止するのであるから充分な用意なくしては村政をあざやかに行ふことは出來ない。公の事のみか彼等は經濟的權利を濫用して用地の問題や建物の問題等に到る迄利用して迫るのであるから容易ではない。火の見櫓の敷地明渡しを請求したり、村役場が借家である場合其の明渡しが請求されたりすることは必然の事である。法規の約束と關聯して抑壓をほしいまゝにするのは官廳の監督指揮認可權である。彼等が多く、、、、、、、、、、である以上、又既成政黨の走狗たらざるを得ない地位である以上無產黨村の事に親切であり得る筈がない。そこで彼等は法規の許す限り抑壓を試るのである。こゝでは皮肉にも法規は吾々の楯として用ひねばならぬ程である。

強戸村で無產階級が村政を支配する程の實力を有するに到つたのは大正十一年の鬪爭直後からであつたが吾々は其の力を持つて地主村長、地主村會議員をして吾々の行はんとするところを行はしむる事に努めた。それは監督官廳が法を枉げても彼等の爲に許すことを前例として將來惱まさるに違ひない無產階級の手に依る行爲を容易ならしむる爲であつた。そして役場事務の習練と地主村長の行爲を監視する爲に徐々に役場書記を更迭せしめて鬪爭的青年を送り込むことに努めた。大正十四年の選擧に於て過半數の議員を獲得したが同時に村長助役を更迭せしむることは避けた。それは當時の町村制は村長助役は知事の認可を受くる制度であつたからである。政友知事の元に於て憲政系村長の認可が半年もかゝると云ふ時であるから無產黨村長の認可が一年位かゝるのは覺悟でなければならぬ。半年ならずして新町村制になることが知れて居るのであつたからそうした愚は之を避けて大正十五年十二月に到つて村長助役共無產黨から出したのである。それ迄には役場書記、收入役

は勿論議會、分會、青年團に到る迄其の役員は無産黨側で獲得して居たのである。かくしてこの間無産黨の政策を進めたのである。村税に於ては上に重く下に輕くのスローガンをそのまゝ(とはいへ法規の許す限りではあるが、)實行し家屋税賦課決定に於て、雜種税賦課税に於て特別税戸數割の賦課に於て手段のあらん限り上に高くした。即ち家屋税賦課決定に於て隣村に於て最低五十七錢であるに强戸の最低は二錢であり隣村に於て最低二十四圓であるに强戸は八十七圓であることによつて其の情態が知られるであらふ。雜種税賦課税に於ては荷車、荷積馬車、リヤカー、學生用自轉車を除く自轉車の賦課税を半額とし、特別税戸數割に於ては大正十一年地主村會の當時に於て上から八十九人で半額負擔して居たものを二十三人で半額負擔をせしむる樣にした。從つて中産以下の負擔は著しく低くなつて十錢賦課の戸數二百十三戸一圓以下の負擔四百八十三戸といふ樣になつた。之を隣村に比べると著しい相違である。尚小學校高等科に於て徴收して居た授業料は之を廢し兒童になさしむる寄附は一切之を禁じた。支出に於ては、役場、學校の使丁給料を增額し、就學奬勵費を支出して貧困兒童の就學を補助し服役軍人(勿論戸數割を平均額以下納むる家庭の)の家族手當を出し、土木、警備費を增額して一切村營としたのである。

尚ほ强戸村に於ては明治四十五年以來小學校の增改築をせず、其の爲の基金の積立も地主村會當時は一文もしないのであるが無産黨になつてからは前記隣村の如き失敗を防ぐ爲に年々一千圓以上年に依つては二千圓以上を積立現在七千圓以上の積立をして居る。かうして經濟的壓迫、法規の拘束、監督指揮認可權の抑壓と戰ひながら村民を失望せしめず、尚ほ曲りなりにも無産政黨の主張を如實に行つて來たのである。尚ほ强戸村無産階級の功績はそれ丈に止まらず對外的にも大きな意義を持つて來た。群馬縣下の無産階級運動の中心勢力となり、官廳の横暴例へば警察廳舍寄附金割附等に反對して官吏の鼻の塵を拂ふことのみに專念の他町村町村長に一顧を促すが如き役割を演じつゝ來た事である。

# 無産政黨の眞迫力

坂本孝三郎

市民の一般的福利を市政の上に顯現するといふオーストリーの首府ウキーン市政の綱領は、同市の豫算面に反映せられ、一九二七年に於ては、既に社會事業並に住宅、新開地事業費は全體の二八%に上り、水道、道路費一七%、福祉事業費一五%といふ素晴らしい數

字を示した。

またその歳入に於ては、社會政策的方針に基く租稅收入及び財產收入を以て全體の七五%を占め、市民生活の全分野に亘つて着々として市政の社會化を行つてゐる。

就中、同市が最も力を注ぎつゝあるのは、その經費支辯の割合を見ても明瞭なる如く市營住宅の建設である。また快適なる市民生活に必要なる住宅標準法の制定、現に實施しつゝある家賃制限法の如きは、近代都市の生活に必須の事項である。

かくの如きは固より戰後に於けるオーストリヤの一般社會事情に、基因するものであるがその主因は言ふまでもなく、同市に於ける壓倒的勢力たる無產政黨の政治的進出によるのである。

×

私が今回大阪市會に乘り出した理由の一はそこにあるのである。卽ち我々は今や全無產階級的立場に於て、ウヰン市のそれが理想的のものだとは言はない、だが少くなくともその程度にまで速かに我々のその立場を大阪市政の上に反映させ、從來のブルジョア政治の根本に一大斧鉞を加へねばならぬ。

故に、私は選擧戰に於ても、他の多くの同志と共に、無產政治勢力に對して階級的攻擊力を加へると共に從來一切の政治的生活を否認され來たつたところの大衆の勢力を背景として　たゞ滿腔の同志と誠實と大膽とを唯一の武器として敢然戰つたのである。その結果我々の同志は立候補二十四名中十三名の多數を市政壇上に送り、來るべき階級戰の前哨戰として靜かにその威力を自治體の上に反映したのである

だが、問題は一切これからである。

×

從つて今後、私の市政への方策は可なり多岐であるが、就中、財政及び社會政策はその主要なる目標であり、殊に財政々策は根本的に立て直さなければならぬと考へる。卽ち、今日の大阪市に於ける二億五千萬圓の膨大なる豫算は、その大部分は特別會計に屬し、各種公營事業の使用料的形式に於て殆んど民衆の人頭割的負擔となつてゐるのみならず、租稅に於ても結局民衆がその大部分を負擔してゐるのである。しかも絕大なる不勞所得たる不動產に對しては殆んど何等の課稅もなされてゐない。地租の如きも大阪市の如き大都會に於ては、課稅標準價格の數十倍に賣買されてゐるのである。凡そ斯くの如き不條理、不都合がどこにあるか、これは特別市稅、獨立課稅權獲得等に關聯をもつ問題ではあるが、せめて都市計劃の區域內だけでも土地增加稅間空地稅の徵收が行はれるに非らざれば、都市財政の安定確保は不可能であり、從つて市民の福祉は永久に蹂躪されなければならぬと信ずる。かくの如き事項は、今日の大阪市政に一日も等閑に付し得られざる重要事項である。

また都市計劃にしても、昔時の都市計劃と今日のそれとはその根本の精神に於て甚だ相違せるものがなければならぬ筈である。卽ち昔時の都市計劃は、帝王又は權力者が自己の

赫々たる權威を中外に示さんためになされたものであつて、その目的とするところも、都市の美觀そのものにあつた。即ち紀念塔、凱旋門、宮殿、寺院等を建設し、壯麗、輪奐の美を極め榮華を誇つたものである。しかもそれは人民の膏血を絞つて實行したものである。彼の希臘のペリクレスが雅典を大理石を以て飾つたのも、羅馬のオーガスチン大帝が華麗なる宮殿、凱旋門等を建立したのも、みなこの心理に依るものである。かくして生れた都市の大通りは、壯麗にして燦爛、人目を眩耀するものがあるが、一歩裏通りに這入れば、幾多の貧民窟あり、薄暗き日光の下に、不健康そのものゝ如き陋屋がある。そこには惡疫が襲つてゐるのである。

しかし乍ら近世的意義を有せる今日の都市計劃はかくの如きものではない。それは帝王の權力でもなければ、支配者の野心でもない。即ち、その對象とするところのものは綜合的有機體としての都市、及びその都市に住む市民全體でなければならぬのである。

しかし乍ら今日の都市計劃が、果してかく公明に切言し得るであらうか。大阪市に於ても今宮とか長柄方面の地帶に對して、新鮮なる空氣と日光を與へることを果して親切に留意したのであるか、目貫の揚所に廣小路を設け、壯麗な橋梁や建築物を建て、都市の外觀を美しくするだけならば、過去の權力者もなしたところである、今日の都市計劃は都市の外觀に浮身を窶すよりも、都市の實質的改善が必要なのである。そこにも無產政黨の力强い眞迫力が必要である。

×

最後に、無產政黨の自治體進出の重要なる使命は、民衆に、政治と經濟殊に家庭生活との連鎖を知らしめることである。今日の政治が、金權の露骨と辛辣を極めた民衆搾取の政治であるにも拘らず、政治が民衆に興味中心にしか理解されてゐないのは、巧妙なる旣成職業政治家の作戰によるとは言へ、未だ民衆に政治が理解されないからである。政治と經濟が結び付き家庭にまで理解される時、如何に無產政黨が眞摯であり、熱烈であるかゞ理解さるるであらう。それ故にこそ市政のあらゆる機械を通じて大衆との協同と動員を期さなければならぬ。それと共に市會は、中央政治と異なり、階級的立場を嚴守するは言ふまでもないが、私黨的空氣を打破し、市民代表として眞面目に、出來る丈け親切にその職分を盡したいと思ふ。

（四・六・九）

新刊

# マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

菊判クロース裝 定價三圓卅錢
四一五頁 索引六頁 送料十八錢

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解説はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の内容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る。程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中聚め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

# 小酒井不木全集

全八卷　一冊一円

第一回配本　探偵小說短篇集

—堂々七百頁—　目下配本中

〆切六月廿五日

讀め科學と文藝の交響を！

世界に誇るべき不木の全姿

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 殺人論及毒と毒殺 | 犯罪文學研究及近代犯罪事實談 | 探偵小說短篇集 | 探偵小說長篇集 | 生命神祕論及鬪病術 | 學者氣質及不木軒隨筆 | 醫談女談 | 病間錄 |

## 豫約略規（內容見本進呈）

**體裁** 本文四六判ルビ附九ポイント、各冊紙數平均五百頁、總クロース上製。

**頒布方法** 全八卷豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ直接御申込下さい。

**刊行期日** 昭和四年五月第一回を刊行し、爾後每月一冊づつ刊行、昭和四年十二月完結。

**申込方法** 先づ御申込の際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最終の會費に充てるのですから、最初の月の會費は別に御拂込願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戾し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

**會費** （一）每月拂一冊に付壹圓、（二）一時拂（全八卷）七圓五十錢。

**送本料** 會費の外に送本料を申受けます。壹冊に付十四錢。尙書留送附を希望せらるる向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市內六錢、書留六錢增。

**拂込方法** 振替貯金又は爲替でその月の一日迄に齊金するやう御拂込下さい。但郵便切手代用は一割增に願ひます。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# サロヂニ・ナイヅ夫人

## ――鶯にしてまた鷲なる印度の萬能婦人――

サバルワル

…然れどもわが國土の塵埃は、われにとりて
いや羨はしき哉、自由の國なる英國よりも。

### 一

これは閨秀詩人サロヂニ・チヤトパデハヤが、まだ花羞しき少女の頃にうたつた詩の一節である。その當時、彼女は豊醇な生に醉ひしれて、外國政府が彼女の國人たちに加へる彈壓には殆んど氣づかないかの如くであつた。

楚々たる東方の麗はしき花、サロヂニ・ナイヅ夫人の詩人として、また政治家としての名聲は、すでにこの國（日本）にも知れ渡つてゐるところであるが、今度いよいよ彼女はこの國に來る。――印度民族の非公式の大使、印度文化の化身にして且つその紹介者、スワラヂ（印度自治）の最高代表者である彼女は――印度の指導を受容し支持するに足るべき偉大なる魂（マハトマ・ガンヂ）の感化をうけて渡來するのである。元來、彼女はヒンヅ教徒なのであるが、同一信仰を抱く民族にも劣らぬほどの支配力を異教者回教徒間にも持つてゐて、現代印度新時代の大衆の精神を確く把握すると共に、また一方に於ては、舊時代に屬する人々からも彼等の指導者として敬慕を得てゐる。さうして政治家としての彼女は、峻嚴にして策謀に富むところの精神をもつて、祖國の解放のために戰ひ、婦人參政權を主張する婦人代表の急先鋒である。かくの如く彼女は印度政界に於て最も重要な地位を占めると同時に、一方では傑出した詩人であり、劇作者であり、指導者、社會運動家、改革者である。近ごろ、彼女の一友人は彼女を「印度の鶯」と呼ぶと、別の一人は又「印度の萬能婦人」と稱し、また別の一人は「青年印度の豫言者、老印度の代辯者」と言ふのであつた。

## 二

しかし彼女のうたふ歌と詩は、專ら自然と人間性の美に對する執着のみを流露してゐる。その詩は、英文學を語る全世界の人々を魅了し盡して、歐洲及び東洋の諸國語に飜譯され、リーザ、ハニマン、コールリツヂ等は、これを作曲した。非難のできないリヅム、透明美、用語の純粹性、甘美な旋律なぞが、その詩篇の特性であらう。一九一四年、彼女は英國のロイヤル・ソサイエテイ・オブ・リテラチヤの會員に選ばれた。詩人としての彼女はあまりに思索的なラビンドラナツ・タゴールの創造するものとは遠くかけ離れた世界に住み、こゝには繪畫美にひらめき旋律美にふるえるところの世界があつて、讀む人の心を激しく鼓動せしめる魔術がひそんでゐる。それは「印度」のみが醸すところの微妙な魔術なのである。この彫琢された詩には、その一行にも人間性と自然との驚嘆すべき色彩と形態との集りがあつて、印度の生活面を極めて魅惑に富む萬華鏡とする。譬へば Leili（それはたゞ歌といふことを意味してゐる）といふ詩に於て、彼女はわれわれをリヽカルな翼に載せて殆んど印度の心臓にまで運んでくれる。神秘な自然と宗教の、後者と前者の、その兩者と生命との交流である。時として、彼女は印度古典に靈感を仰ぐことも無くはないが、主として彼女は彼女自身の國土と生活とを直接に題材としてゐる。その詩のいちじるしい特徴は、表現の言葉の外には西方的なものとは一切無關係で、彼女自身の個性を極度に麗はしく保存してゐるといふ點である。捕へ難いほどに微妙な方法によつて、表現は西方の言葉に借りながらも、或る不思議な氣分、東方の女性の感性を暗示してゐるのである。西方の批評家がわれわれに示した如く、そこには東方の魔術があるのだ。それ故、哲學といふ點では、ナイヅ夫人は形而上學の世界にあまり深く沈潛してゐるとはいへない。けれど彼女にとつて戀愛は自己犠牲と獻身との道であり、その「罪」は、その德と同じく美しいものである。彼女の處女詩集 "The Golden Threshold" を推奬しその序を書いたアアサア・シモンズの言葉を借用すれば「彼女の神經細胞は常に美といふものに對して嬉しくふるえてゐる……」疑ひもなく彼女を詩人としたのは、美の慾求であるが、彼女の詩のうちにも必ず


サロジニ・ナイヅ夫人

しも苦悶の響きがないともいへない。絶望の聲といふほどまで強烈でにないが、肉體の弱さに對する苦悶の體驗が反射されてゐるのである。ひとへに人生は積極的で歡喜に充ちたものでなければならないのだ。それにしても彼女の詩には狹義の國家主義的な形相は見えないが、ナイヅ夫人は印度更生を堅く信じてゐる人なのである。

彼女の書翰に於けるすぐれたる才能について語らなければ、ナイヅ夫人のスケッチは完全とはいはれない。他日それは保存されて印度文學研究者の伴侶ともなるであらうが、彼女には詩に於けると同様に、散文の才能が完全に惠まれてゐる。この方面に於て榮えある作家となることは彼女にとつて困難なことではないであらう。

彼女の特質を更らに擧げてみれば、それはその輝かしい話術である。豐富な回想と逸話と——人と事件との不思議なまでに洗練された記憶に富み、彼女は疲れることなき潑溂さで、數時間にわたる談話を續けることができる。おだやかで同時に辛辣なユーモアがあり、彼女の出現はいかなる應接室や講堂の空氣をも明るくする。

三

彼女の生涯の幸運は世俗の富によつてゞなく、それよりもはるかに尊く永遠的なる他の富によつて測らなければならない。アゴルナツ・チヤトパデハヤとその愛妻バラダスンダリ・デビの如き人を兩親とした事こそ、彼女の幸運といはなければならない。印度に多くの男性と女性の學者、詩人、聖者を供給した名家チヤトパデハヤ家に、サロヂニ・ナイヅが更らに一つの美を加へたのだ。ヒンヅ古典の言葉を借りれば、ブラハミン家庭の數代にわたる「タパ」即ち贖罪は、彼女の詩的大才として實を結んだのである。

故アゴナツ・チヤトパデハヤ博士は、カルカツタ大學に學び、更らにエデインバラ及びボン大學で優秀な成績をおさめ、そしてホープ化學賞をかち得た。即ちケンブリッヂやロンドン大學の教授達と、その競爭試驗に伍して第一位を得たのである。彼は南印度のハイダラバッド王國の「教育の父」として知られてゐたが、サロヂニがこの世の光りを見たのも、この父によりこの土地に於てゞあつた。一八七九年の事である。

十二才のときサロヂニはマドラス大學の入學試驗に應じた。彼女の文學的興味は早くから開け、十四才の頃までには、彼女は殆んどすべての英詩人を讀んだ。セリー、テニスン、ブラウニング等が愛誦する詩人であつたのだ。

すでにこの頃めざめた詩的慾望は今や表現を求めて苦悶してゐた。「メヘル・ムニール」といふ小さな詩劇を英文で書いたのは、この頃のことである。少數の友人の間に頒布せられたその一部は、一八九五年、故ニザム(ハリデラバッド王の稱號)に捧げられた。王はサロヂニの詩に對する熱心さを見て、自己の天分を開發しようとする希望のあされ、父チヤトパデハヤ博士にメッセイヂを送つて、賞品として何を

望むかをたづねた。その結果、彼女は一八九五年に當時としては莫大な金であるところの年三百ポンドの留學費と潤澤な旅費とを受けた。

ケンブリッヂ大學に於ては十八才未滿の學生に入學を許可しないことになつてゐたので、當時十六才にすぎなかつたサロヂニは暫くロンドンのキングス・カレッヂに聽講した。定年に達してケンブリッヂのガートン・カレッヂに入つたのである。しかし大學の機械的な生活や校則は彼女に不向であつたらしい。暫くの後、健康を害してガートン・カレッヂを急に去らなければならなかつた。さうして彼女はスヰスとイタリイの旅に立つた。

ロンドン滯在中に於ける彼女とエドマンド・ゴスとの交友は、あまりに有名だ。ゴスは彼女に、アングロサクソンのセンチメントを描くよりも祖國の情熱を描くやうに諭へた。彼女の心のなかに大きな動揺があつて、その後十年を經て彼女の處女詩集 The Golden Threshold が出たのは、その結果であり、それがゴスに獻せられた所以である。

## 四

歐洲から歸國して勇敢にも階級と傳統とを打破して一八九八年、自から選んだ男性と結婚した時にこそ、彼女の生命の凱歌は揚つたのだ。ゴビンダラヂュル・ナイヅ博士とは彼女が歐洲に出發する以前に相愛の間であつたのだが、博士はサロヂニの家系とは異つた階級に屬し、彼女の兩親のやうにブラーミンではなかつた。しかし彼は善良な男子であり、サロヂニの結婚生活は多幸であつた。二男二女を惠まれてゐる。

家庭に於て、その子供達から敬慕される母の姿は、何と感動的な樣子であることだらう。妻として母として、また主婦として、彼女は理想的な婦人である。彼女の多角的な活動のうちで、この家庭生活は最も尊敬すべき一面でなければならない。ヒンヅの「ダハルマ」即ち「人生觀」は、あらゆる階級あらゆる土地に存在する最高のものとして、母性といふ理想をもつてゐる。われらヒンヅ人は母性尊重の國民である。その國土はマザア・ランドである。われわれの神聖なる河ガンヂスは、マザア・ガンヂスといはれてゐる。ショペンハウエルが人生の慰安を茲に發見したヒンヅの聖書ウパニシャッドは、父性否寧ろあらゆる人事關係よりも先づ母性を敬愛すべきものと教へてゐる。神性の象徴は父性でなく母性である。現代に於てすら印度國歌は「母にひざまづけ」といふ起句に始まる。

## 五

政界に於て婦人參政權が問題の焦點となつた時、ナイヅ夫人は樞軸となつて立つた。彼女とその一黨の印度婦人指導者達の戰術は、ヒンヅ・ダルマに訴へるといふにあつた。時は來た。この時、印度女性の選士ナイヅは印度婦人の理想を「青空に消ゆることなき火の文字で、記されなければならない」と叫んだ。——家庭を守ると共に社會的活動

に進出しなければならないといふ女性の意見に對して、すべての男性達は反對をしなかつた。かくて印度婦人の智識は向上し、男子と同權の選擧權を持つやうになつたのである。あらゆる社會の部門に於て重要なる地位を占める婦人が、その結果として續々と現れ、ナイヅ夫人自らも、まる一年間印度の大都ボンベイ市長となつたことがある。

最近、ロンドンに於けるルーターの特派員に對して語るところによれば、彼女は英國に於ける二十一才以上の女子の婦人參政權獲得は單に「印度婦人がすでに多年にわたつて享有してゐた自由に對して一歩を踏み出したにすぎない。……私が英國婦人運動をいかに考へるか？正直にいへば私はこんな運動に參加することを恥ぢとする。それは婦人が自からの劣れることを告白することに他ならない。……印度に於ては性（セックス）の問題は起らない。問題はたゞ誰が仕事するに最も適當であるかといふことである」

また或る機會に彼女は言ふ。「婦人は單に家庭の爐邊の火を守るだけではなく、國民生活の烽火を燃え上らしめるものである。戰ひに際して闘士の心を培ひ、不和に際して聖僧の心を保つものは婦人である。自己克服と自己實現とは、印度婦人の典型的な特質である」

更らにナイヅ夫人は言ふ。文明について斷言を發すとも結局婦人に於て最も重要なものは家庭である。そしてそれは如何なる他の活動よりも一國民の建設あるひは破壞に影響を持つ。家庭の幸福を助けまた妨げるところのものは、人生の經驗生活方面に對する男女の態度に因る。「婦人は男性の敵ではない。彼女は自ら仕へることによつて自らを支配しなければならない。彼女は彼女の生命をもつて奉仕するところの男性の活動を呼び醒さなければならない。婦人との協力が實現せられた曉にこそ、世界の總ての爭鬪と苦惱とは終り、田園も戰火の下に荒廢することはないであらう」

一九一九年、マハマット・ガンヂの運動が起つたとき、彼女はサチアガラの誓約に參加した最初の一人である。かくて彼女は政界に身を投じたのである。それ以前數年間も、彼女は直接政爭のうちには入らなかつたが、愛國的な義務としての社會運動政治運動には參加し續けて來たのであつた。彼女に最も影響を與へ、彼女を社會的に進出せしめた初期の印度政事運動家は、印度國民議會の大立物であつた故ゴカアレ氏である。ガンヂすらもゴカアレ氏を彼の政治的指導者として、またグル（敎師）として認めてゐる。ゴカアレとナイヅの交友關係は長く且つ深いものであつた。

一九一八年以後はガンヂのみが印度の政治運動の中心的勢力でもある。ガンヂ、印度最大の人物、三億にあまるヒンドスタン民族の胸の奥に坐して類ひなきガンヂ……ナイヅ夫人は彼を全印度と共に愛してゐる。一九一九年、ガンヂ等に加はつた後の彼女の全生涯は、恐らサチアガラ運動を支持してゐる。地方旅行中も人々に運動加盟の勸誘をすることを忘れない。またサチアガラの日、即ち四月六日、ボンベイの街上に國禁の書類を賣つたこともある。

爾來、彼女の一言一動はガンヂ使徒としてのそれである——勿論その政治的主張は彼女の詩的熱情のなかに醇化されてゐる。一九二二年三月十一日、ガンヂ捕縛の噂は全印度に憂鬱のかげを投げた。アハメダバッドに於ける十八日の歴史的訊問に關して、當時ガンヂと密接に連絡のあつたナイヅ夫人はその傍聽者として最も精彩ある報告を果してゐる。この訊問こそ現代に於ける最もキリストに近い人物をキリスト教徒政府が反逆罪人として裁いたものである。最も「平和の王」に近い社會運動家を平和攪亂者として處罰したのである。

## 六

一九一五年、ボンベイに於ける國民議會にのぞみナイヅ夫人は議會演壇の處女演説をこゝろみたが、自治の決議を支持し、印度擧國一致の豫想を謳つた詩をもつて、その雄辯を結んだ。その日にこそ彼女の政治生涯は始まつたといつていい。一九一七年、カルカッタに於ける國民議會の彼女の熱情的な演説の結末は次の如くである。

「私は一女性にすぎない。けれど私は皆さんに告げなければならない。時は迫り、あなたがたが闇の路に炬火を持つ人を要する時、戰旗をかゝげる旗手を要する時、あなたがたの信念がぐらつき倒れようとする時、印度の女性はあなたがたの傍らに立つて旗手となり、あなたがたの力を支えるでありませう」

一九一八年五月、コンヂヴアラムに開かれたマドラス州國民議會の司會者は彼女であつたが、それは國民議會の歴史中で最も熱烈なものであつた。しかし彼女は議事進行を計つて、すばらしい能力を示した。

その後、彼女は祖國のために運動に加入せしめるべく青年達を勸誘した時、即席演説をしたことがある。その際、彼女は詩と夢想の聖域を棄てゝ政治の分野に進出したことについて、次のやうに辯明してゐる。「今日、あなたがたの前に立つて私は誇りにふるえながら叫ぶとかできます——私は今やあなたがたと一しよに立つのみではない。あなたがたに身を捧げてゐるのである。何となれば私は私の生命を委ねてゐるところの美の幻を今や再び新しい光りに於て見たからである。人々は幾度となく私に訊ねます——何故にあなたは象牙の塔の夢をすてゝ市場へ出て來たのであるか？　何うしてあなたは詩人の笛をすてて國民を戰爭に驅る人々の激しいラッパとなつたのであるか？——それは詩人の任務は薔薇の花園のなかに立つ夢の象牙の塔に獨り住むではなくて、彼の住むべきところは民衆と共にあるからです。街道の埃のなかに、戰爭の困窮のなかに、詩人の運命は横はる。彼が何故に詩人であるかといふ理由は、危難の時、敗北と絶望との時、次の如くに夢想家に告げるからです——若し諸君が眞實を夢みるならば、あらゆる困難、あらゆる幻影、あらゆる絶望、それ等はマヤ（空の空）なるものにすぎない。たゞ一つ大切なことは希望である。いま私は諸君の前に、諸君の高き夢と共に、不屈の勇氣と共に、不屈の勝利と共に、私

は立つてゐるのである――それ故、今この爭鬪のうちにあつて印度のための勝利を得るや否やが偏に皆さんの手中に在る時、かよわい手弱女なる私は家を出でて參つたのです。夢を夢みる人なる私は、市場に出でて參りました。そして叫びます。行け、友よ、勝利に！」

ナイヅ夫人は一九二五年、印度國民議會の議長に選ばれた。それは――印度國民が印度國民に與へ得る最高の名譽であるが、このとき、彼女が現代最大の指導者であるといふことは、全世界の承認を經たわけである。今日に於けると同樣、ヒンヅ教と回教との諸問題は、中介者、融合者としての手腕を要すること切なるものがあつたが、それは婦人として母として詩人としてのナイヅ夫人に甚だ應はしい任務であつたことを、人々は正しくも信じた。ヒンヅ教の親を持ち純然たる回教徒の周圍の中に生育したといふことは、その兩者の立場を了解するに甚だ好適であつたのだ。

ナイヅ夫人が印度國民の聖なる聲たる國民議會の前に立つて、議長としてのアドレスを讀む前に、多くの人々のメツセイジが讀まれたが、就中、詩人ラビンドゥラナツ・タゴールは言つてゐる「この議長ナイヅが詩人として又女性として、貧困と無智と病氣と確執とのために母乳を失ひ、生命は衰へ、喜びの光りは殆んど消えてゐるこの國民の搖籃への愛と奉仕とに向つて、國民議會の活動を指導することができるであらう」

## 七

ナイヅ夫人は言ふ「全人類の五分の一が未だに政治的服從を強ひられて自己の未來を支配し自己の法則をつくることができない時にあたつて、世界平和に就いていかに雄辯に談論するとも、果して何の意味があり何の價値があらう？」「強力の國民にありては平和は勇氣である。弱き國民にありては、それは怯懦である。印度の平和は服從より來る平和であるといふが如き觀念を抱くことは絕對に不可である。それは勝利より來る平和である。究極は印度の自由である……來たれ！汝は、われ等を囚人となすことができるであらうが、われ等を征服し去ることはできないのである……われ等の魂に汝は觸れることはできない。印度は決して自らを怯者にするが如き平和に滿足することはできない。」

英國の強力なる軍隊が、この弱き無抵抗の國民に對して備へられてゐるのだ。バートランド・ラッセルが言ふごとく「人間の肉體的自由を奪ふことはできよう。しかし精神的自由は彼の生得の權利である。世界のあらゆる陸海軍も彼の同意なくしては、それを奪ふことはできない。」

印度問題は印度人自らによつて解決すべきである。勿論その道程には幾多の困難が橫たはつてゐる。しかし自由に對する印度の意欲はいかなる道をも切り開き、いかなる障害をも排除するに足るだけの力を

あつてゐる。ナイヅ夫人は言つてゐる『われわれは英國に訊ねる。英國はわれわれの國にペンによる解決を與へようとするのであるか、それとも劍による解決を與へようとするのであるか？　選擇は英國の自由である。若し彼女がペンの道を選ぶならば、われわれは欣然として唯自由のみを求めるところの大國民的態度をもつて協定するであらう。しかし若し劍を把つて來るならば、われ等もまたこれに備へて、必要の場合はわれわれの骨を鍛へて劍をつくり上げるであらう。われわれは救助を乞はない。同情と金錢を望まない。』

ナイヅ夫人は、印度は最も完全に自治の準備をなしてゐると主張する。印度の社會構成の二三の害惡は、外國に於ては甚だ誇張されて傳へられてゐる。外來の支配者は自己の利益を擁護するために、印度の實情について甚だ誤れる宣傳をなしてゐる。彼等は明らかに眞理を無視しつゝ、早婚、寡婦問題、階級問題等を利用して、印度國民の獨立に對する當然の生得權を拒絕する口實を作成しつゞけて來た。

しかしナイヅ夫人はこの宣傳のために日本に來るのではない。東洋に於て最も有力にして印度に同情を有する日本民衆に親交を得ようとする目的であるに違ひない。彼女は、古くから宗教と文化によつて結ばれたこの國（日本）に來て、全くアット・ホームな氣持にひたることができるであらう。

けれども印度に歸るや否や、彼女は再び印度解放鬪爭の新しき渦卷きに身を投じるであらう。何となれば マハトマ・ガンヂは昨年の十二月のカルカッタに開催された全印度國民議會に於て鬪爭として宣言してゐる。――若し英國政府が一九二九年十二月三十一日までに印度自治の國民的要望を認めなければ、印度國民の無抵抗主義鬪爭をあくまで指揮するであらう、と。おそらくナイヅ夫人は、若しガンヂが再び無抵抗主義の鬪爭を開始する場合には、その右手となつて働くであらう。結末にあたつて私はかゝる時が到來した場合に、彼女自身を最も雄辯に語つてゐるが如き彼女自身の言葉を聞かう。

われ等が母なる國の苦惱のうちにこそわれ等の悲哀の最高の慰安はあるなれ、母なる國に拜跪することにこそ罪の解脫はあれ。彼女のために生きん事これ最も輝やかなる生命の凱歌にして、彼女のために死すことぞ尊き不滅の王冠を贏る所以なれ。

# 探偵小說の變遷

森下雨村

## 一

犯罪を取扱つた文獻、または探偵的興味をもつた讀物を過去に遡つて求めるならば、恐らく人類が文字を案出した昔にまで溯らねばなるまい。探偵小說の起源にしても、ホフマンやヴォルテール、さてはチョーサーや一千一夜物語なんどを引合に出して詮索するとなると、それこそ果しもないことで、やはりエドガア・ポウの「モルグ街の殺人」あたりをスタートとして考へて見るのが宜いと思ふ。

その「モルグ街」が出たのが一八四一年だから、爾來ざつと九十年、文學の中での最年少者といふわけで、その變遷と云つても文藝史上の大きな流が語るほどの目覺しい歷史をもつ筈がなく、それに元來が確然たる一つの目的をもち、明確な約束と傳統の下に、獨特の要素、並に形式とテクニックをもつて進んで來た文學だけに、そこに大した變化のあらう道理もないのであつて、要するに年代を逐ふて主要なる作家と作品の傾向でも語つてみる他はないと思ふ。

「モルグ街」を筆頭にその三部作が、典型的な探偵小說であるに拘らず、ポウがその主人公デュパンに探偵の名を冠してゐないといふことを興味あり氣に云ふものがあるが、これはデュパンが犯罪搜索の專門家ではなかつたといふよりも、當時まだデテクティヴー探偵といふ言葉が用ひられてなかつたと解釋すべきであつて、ポウ自身が「モルグ街」その他を書いた動機は、明に探偵的興味に驅られたものであることは疑ひもないことである。探偵といふ言葉が初めて用ひられたのは、ウイルキ・コリンズの「月長石」(一八六二年)からで、それまでの間には約二十年の溝があつたのである。もつとも、この期間は探偵小說が急激な發達を遂げるための準備時代であつて、ポウの影響をうけること最も多かつたフランスの文壇には、その模倣的作品が盛んに現れたものである。が、特に記すべきほどのものはなく、當時世に出たもので探偵小說的興味をもつたものと云へば、先づデュマの「ブラヂュロン伯爵」(一八四八年)と、ヂッケンスの「強盜」(一八五三年)であらう。ヂッケンスの作は近代探偵小說への英文壇最初の貢獻で

あると云はれてゐるが、その內容手法から見て今日の探偵小說とは無論趣きを異にしたものである。たゞ作中の主人公バッケット探部が、作者と親交のあつた倫敦警視廳の一探部をモデルとしたもので、ある意味に於てデュパンと並稱される性格であるといふ點に興味がある。ヂッケンスには尙ほ未完に終つた「エドウィン・ヅルイドの祕密」がある。もしこの作が完結されてゐたならば、探偵小說の先驅的大作としての名を恣にしてゐたであらうとは、一般の一致するところである。

一八六〇年にウィルキ・コリンズの「白衣の夫人」が出、六八年には名作「月長石」が出た。コリンズはボウの傳統を英國に移し、探偵小說をリアリズムの世界に導き、近代探偵文學の素因を作つて、ガボリオへの橋渡しをした作家で、「月長石」に出て來る探偵カッフはデュパンやルコックの名に蔽はれた傾きはあるが、探偵文學の史上に永久に殘るべき一つの性格である。

コリンズの後にルコックの作者エミイル・ガボリオが出た。ルコックは自らデュパンの後繼者を以て任じた性格で、ボウを探偵小說の父と呼ぶならば、ガボリオはその後を繼いだ探偵文學の保護者であり管理者である。コリンズの描いたカッフ探偵がどこまでも獵犬の如く、香を嗅ぎ足跡を追ふ努力勤勉家であるに對し、ルコックは勤勉に加ふるに鋭敏なる推理と觀察をもつて進んでゆくところ、明にボオの傳統をついで探偵小說の手法に一步を進めたものと云へる。ガボリオの代表作として擧げらるゝものに、「書類一一三」（一八六七年）「ルコック探偵」（一八六九年）「他人の錢」（一八七四年）等がある。ガボリオと並んで佛蘭西にボアゴベがある。極めて多產な作家で、探偵小說の普及に力あつたことは疑ふべくもなく、ドイルなどは明にその影響を受けてゐると云はれてゐるが、ガボリオの聲名に壓せられて一般には知られるところ少ない傾きがある。彼の處女作は「囚人大佐」（一八七二年）で、その他「塔上の祕密」「浮浪者の群」「赤い切符」等數十篇の作がある。

時を同じくしてアメリカに女流作家アンナ・キャザリン・グリインが出た。「リーヴンワス事件」（一八七八年）がその代表作である。多產な點で、またポピュラーな點で、探偵小說の普及に貢獻したことはボアゴベと同樣であるが、その取材と手法に於ては遙に淸新なものがあり、探偵小說の發達史上に意義ある地步を占める作家だと云はれてゐる。

尙ほグリインとガボリオの系統をひいた同時代の作家にファガス・ヒュームがある。その代表作「二輪馬車の祕密」は當時にあつて五十萬部以上の賣行きを示し、十九世紀末の大衆讀物の中で第一の成功を收めた小說である。

## 二

ヒュームの「二輪馬車の祕密」が出た一八八七年に、偶然にも時を

同じくしてドイルの「深紅の糸」が出た。ドイルの出現によつて探偵小説は完成の域に入るのであるが、こゝで明治時代の日本探偵小説界を振返つて一瞥を加へるのが便宜であらう。と云ふのは、黒岩涙香氏によつて代表せらるゝ明治年代の探偵小説なるものは、ポオに始つてヒュームに至るまでの海外探偵小説の移植に過ぎないからである。

日本に紹介された最初の探偵小説は、神田孝平氏（乃武男の先考）譯の「和蘭美政録」に收められた「楊牙兒奇談」であることは諸家の意見の一致してゐるところらしい。原作者、原名ともに明でないが、飜譯されたのが文久二年と云へば、ポオの作が出てから僅に二十年で、確に日本最古の飜譯探偵小説であらう。

それについで、何にが紹介されたか、私はさうした詮索は一向にしてゐないが、木村毅君によると饗庭篁村氏譯のポオの「黒猫」があり、内田不知庵氏にも同じ譯があり、森田思軒氏に「ピット・エンドペンヂュラム」が、山縣五十雄氏にも「黄金虫」の譯があるとのことである。ずつと下つては森鷗外氏に「モルグ街」の飜譯もあるが、年代順に云ふならば、讀賣新聞に譯載したといふ篁村氏の「黒猫」が、恐らく一番古いであらう。しかし、探偵小説の飜譯者としては、廣く外國の作品を漁つた點で、また廣い範圍の讀者をもつてゐた點で、何と云つても黒岩涙香氏を推さねばなるまい。涙香氏の飜譯については上野仙八君の熱心な研究があるが、それによると今日からしても全く敬服に値するほど多方面にわたつて作品を渉獵したもので、我々の知らない作家もかなりに多いやうである。尤もガボリオとボアゴベを主として選んだのは云ふまでもないことで、年代順に云つて都新聞に掲載された「法廷の美人」は別として、單行本となつた最初の「塔上の犯罪」が、ボアゴベの Crime on the Tower であり、翌二十一年十一月に出た「人か鬼か」がガボリオの Widow Lerouge であり、その翌二十二年の「他人の錢」が同じくガボリオの Other People's Money であり、小説飜譯の末期、明治卅八年に出て、最も世に知られた「巖窟王」までがボアゴベの作であるといふ風に、數十に上る涙香物の材料を一々點檢してゆくと、ウイルキ・コリンズから、グリン女史をはじめ、當時海外の大衆文壇を賑はした作品は殆ど漏すところなく渉獵しつくして、その傑作のみを巧みにも譯出してゐるのであつて、その烱眼と努力とは寧ろ驚嘆に値する。それもガボリオなり、ボアゴベなりがその處女作を出したのが一八七二年から七五年で、涙香氏が「塔上の犯罪」その他に手を着けたのが明治十九年から二〇年、即ち一八八六年の前後であるから、原作が世に出てから十三四年の後であつて、今日尚ほガボリオやボアゴベの作が飜譯紹介されつゝあることを思ふと一層の敬意を表せざるを得ない。涙香と同じく探偵物の飜案を試みた人に丸亭素人と菊亭笑庸とがある。素人に「探偵ルコック」の譯があるが、何と云つても探偵小説の飜譯移植に力あつたのは涙香氏で、同時に隠れたる功勞者として森田思軒氏を推さねばならぬ。思軒氏は涙香氏よりも以上に當時の新しい海外文學を渉獵した人である

が、ユーゴーその他主として純文學作品の紹介に努め、大衆文學の方面は涙香氏に讓つたと思はれる筋がある。涙香氏が探偵小説に手をつけるやうになつたのも、恐らく思軒氏に負ふところ少くあるまいと思ふ。

とに角、涙香氏の探偵小説飜譯は明治二十年に始り、卅八年の巖窟王に至るまで數十篇に及んでゐるが、それは要するに涙香氏の努力と譯出者としての手腕を語るもので、日本の探偵文學の發生と發達には、何等の交渉もないと見るべきであつて、記述は再び外國に還らなければならぬ。

## 三

コーナン・ドイルのホームズ物語は探偵小説の典型的作品であり、教科書である。彼はポウが築いた骨組をとり、ガボリオの手法に學んで、古い殻をすて、新しい工風をこらして、全然新しい作風を示し、精錬され淨化された標本的作品を産み出したのである。

一體、ポウに創りヒユームに至る約五十年間を假りに探偵小説發達第一期として、これを通觀してみると、無論ポウの影響が與つて力あることは云ふまでもないが、一面からすると探偵小説の上にも當時の大きな時代思潮が、重大な關係をもつてゐることは爭はれない。即ちローマンティシズムから自然主義へのあの大きな渦卷が、やはり探偵小説の發生にも、またその發達にも非常な力をもつてゐるのである。つまり理智の世界への一大轉換であつた自然主義運動の大衆文學へ向つての進出が、ポウの蒔いた種子に培つて、コリンズを生み、ガボリオを生んだと見るべきで、敢てヴィドックをまたずとも、ゾラ、ユーゴーを始め好んで人間惡の世界を描出した當時の文藝作品には、探偵的興味をもつたものが少くないことも考慮に入れる必要があらう。それだけに詩人であり、また病的とも云ふべき尖鋭な頭腦の持主であつたポウの作は別として、コリンズにしろ、ガボリオ、もしくはボアゴベにせよ、その作風には初期に於ける自然主義文學の影響が甚しく、プロットは複雜を極め描寫は精緻と云んよりも寧ろ冗漫に流れて、探偵的興味は時に傍系視されると云つた風なものが少くなかつた。それがドイルの出現と共に全然一掃されて、直截、簡勁、平滑を特徴とする近代探偵小説の新しい作風が生れたのである。

ドイルについては多くの言葉を用ひるまでもなく、むしろ彼によつて新時代を劃された探偵小説界が、その作品によつて如何なる刺戟を受け、如何なる方面に新機軸を求めんとしたかを尋ねるべきであらう。

ホームズの出現について、簇出した探偵作家の中で、先づ指を屈すべきものがアーサー・モリソンである。彼の努力は探偵小説に實在性を附與せんとした點にあつて、その主人公マルチン・ヒユイットは全能的なホームズよりも明に多分の人間味をもち、作品全體としてもかなりの現實味をもつてゐる。同じくオースチン・フリーマンの「ソ

ーンの「ソーンダイク博士」も、ホームズ物語から轉囘しようとして科學探偵小說の新領土を開拓した作品である。共にドイルに刺激されて生れ出た諸多の作家の代表的なもので、前者は明察神の如きホームズの代りに實際的な法律家を以てし、後者は全然新しい科學者を案出して探偵小說の一つの型を破らうとしたのであつた。さう云へば「紅はこべ」や「隅の老人」を以て有名なオルチー夫人が、題材をフランス革命にとつたのも歷史の方面に新展開を試みたものであり、またチエスタトンが「師父ブラウン」によつて、單なる探偵的興味以外に、宗教道德の方面から人間の犯罪性を見ようとして、犯罪そのものよりも犯罪心理の解剖に力を注いでゐる點など、すべてドイルによつて完成された探偵小說の型を打破しようとしたものである。彼等はさうした意味で、いづれも近代探偵小說史上に特筆すべき功勞者であるが、作品全體としてはホームズ物語を凌駕するほどの成功を收めたとは云ひがたく、またそのリアリズムにおいても、ドイルよりは一步を進めたとは云へ、依然として推理と分析に主力を注ぎ、コリンズのカッフ探偵に見るが如き實在性は見られないのである。

彼等とは全然別途の方向に、新しい探偵小說を生み出して成功したものに、佛蘭西のモウリス・ルブランがある。怪盜紳士として現れ、後半犯罪搜索に從事して、驚くべき天才的推理と冒險に讀者を忘我の境に導くアルセーヌ・リユーパン物語は、とも角もポピユラーな點に於て、ホームズ物に匹敵する讀物である。同じく佛蘭西に「黃色の部屋」の作者ガストン・ルルーがある。彼には「一夜の秘密」「黑衣夫人の香」等雜多の作があるが、殆ど見るべきものはなく、「黃色の部屋の秘密」のみ珠玉の如く光つてゐる。

なほ探偵作家として知られた人々に、英國にメーソン、フレッチヤ、クリスチー、フィリッポット、ビーストン、ウォーレス、ハンショウがあり、米國にマッカリ、ランドン、ヴン・ダインがあり、佛國にマシヤールがあり、瑞典にドウーゼ、ヘルレルがあり、その他相當著名なる作家を一々擧げ來れば三四十にも上るであらう。

で、それら現代作家の作品の傾向はどうかと云ふと、大體に於て本格派の傳統を踏んでゐることに間違ひはなく、また近代科學の影響が著しいこと等も認められるが、それよりも一層顯著な事實は、海外の探偵小說界の中心勢力をなしてゐる英米兩國作家の作風が、最近の十余年間に全然相容れざる各自の傾向をとつて來たことである。英國の作家が何處までもドイルの傳統により本格探偵小說の主流を步んでゐるに反し、ボウを生みグリインを生んだ米國の作家は、悉く低級な映畫式興味をねらつて、目まぐろしいプロットの變化を主とした通俗作品に甘んじてゐるのである。我々から云はしむれば、これは明かに邪道に墮したものであるが、その由つて來るところはアメリカの生んだ近代文明の餘波であつて、安價なる刺激と興味を追求する物質文明の中毒患者を讀者としなければならない以上、それもまた已むを得ない傾向であらう。そのアメリカに現實的探索と心理的搜索とを以

てする新味ある青年探偵フィロ・バンスを提出したヴァン・ダインの出現は、米國の探偵文壇に對する皮肉な反抗の聲とも見られよう。

英國作家の作品に最近目につく傾向は、モリソン、フリーマン、の後を繼いだ新しい作家によつて、十九世紀後半からドイルに至る作品に多い直覺的推理をもつた論理學的犯罪搜索家が漸く影をひそめて、保守的な實際的探偵が活躍しだしたことである。曾て倫敦警視廳に樞要な地位を占めたジョージ・ヂルノー、さてはウイルス・クロフツ、エ・フィルディングの諸作がそれである。その主人公はいづれも在來の探偵に較べて、より人間的であり、實際的であつて、犯罪の搜索と解決に讀者をして頗に首肯せしむるものがある。かうした傾向は、探偵小說に清新の興味と、文學的興味とを併せもたうとするので、探偵文學が當然見出すべき新しい進路であると思ふ。

## 四

海外の作品については、言ふべきことの半ばをも盡してはゐないが、後はまた他日に讓つて、今一度振返つて日本の新しい探偵文壇を瞥見しよう。

涙香氏の飜譯小說が多大の感興を呼んだ後をうけて、岡本綺堂氏の「半七捕物帳」が江湖の喝采を博したことは人の知るところ。その半七物語の材料のそこばくが海外作品、或は支那の文獻に負ふところあるとしても、それは綺堂氏の洗錬された手法と、探偵的興味の點から殆ど批判の餘地なきあの物語の價値を寸毫も傷けるものではない。ついで谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏、並に里見弴氏等の作に、當然探偵小說と呼ばるべき傑れた多くの作品があることも世間周知のことである。これら諸家の作品は直接間接に日本の探偵文學の發生と發達を促したもので、ポウの三部作以外の諸作までが探偵小說の範疇に入れられてゐると同樣、日本の探偵小說史に重要な位置を與へらるべきである。

が、日本の探偵小說界を今日の隆盛に導いた直接の功績を、過去十年間、主として海外作品の紹介につくして來た雜誌「新青年」と、その飜譯者に歸することに、恐らく何人も異存はないであらう。世界各國の代表的作品を殆ど網羅的に飜譯し紹介した努力は、やがて眞摯な創作家の輩出を促し、僅々六七年の間に英米につぐ多數の作家と幾多の傑れたる作品を世に送つて、日本の大衆文壇に未だ見ざる光彩を放たしめたのは全く同誌の力である。

日本の探偵小說界を代表する一人は故小酒井不木氏であつた。博學と多才、殊に稀に見る俊敏明澄の頭腦をもつて、先づ犯罪並に犯罪文學の研究より入り、ついで自ら創作の筆をとつて珠玉の如き幾多の名篇を示し、探偵文壇の發達に寄與するところ甚大であつた。殊に氏に感謝すべき一事は、一般讀書界の探偵小說觀を啓蒙すると同時に、日本の探偵文壇を最も健全なるコースに指導したことであらう。その意味に於て小酒井不木氏が犯罪文學研究、並にその作品のみならず、一般

犯罪の研究によつて日本の探偵小説界を振興せしめた功績は永久に記念さるべきものである。

小酒井氏と並び稱すべき作家は、江戸川亂歩氏である。眞劍なる作家的態度と、異色に富むその作品は、日本のみならず歐米の探偵文壇にもその例を見ざるところであつて、「心理試驗」その他の傑作が、もし海外に紹介されるならば、氏は明に世界的探偵作家としての地位を與へらるゝであらう。

甲賀三郎、大下宇陀兒の兩氏は本格派を代表して第一線に立つ作家である。共に筋の構成に、特異の手腕を有し、一つは輕快の筆致をもつて、一つは流麗の文章をもつて知られてゐる。その他、平林初之輔、横溝正史、山下利三郎、夢野久作、久山秀子、水谷準、牧逸馬、橋本五郎、濱尾四郎、川田功、山本禾太郎、城昌幸氏等それ〴〵特色ある天分に惠まれた多くの作家があるが、今はそれらの人々について寸評を試みる暇もない。

要するに、日本の探偵小説壇はその發生の若々しいに似ず、歐米のそれに比較して決して劣るところない健全な發達を遂げつゝある。まだ日が淺いために長篇に見るべきものが少いのは是非ないとして、短篇の方面では、海外作家の作品を凌駕するの域にまで達してゐるものも多い。日本の探偵文學がかうした隆運に棹したのは、水先案内となつた小酒井、江戸川諸氏に負ふところ少くないは素よりとして、その主要なる素因は延原謙、妹尾韶夫、星野辰男・田中早苗その他の有力な翻譯家諸氏によつて紹介された海外の作品が、好指導となつて、探偵文學に共鳴するアマチュア作家が眞劍の努力を積んだ結果であつて、私は探偵小説愛讀者の一人として、それらの翻譯者諸氏に深く感謝を捧げる次第である。

# 新刊批評

## 水上瀧太郎氏著
## 「果樹」

久保田万太郎

『果樹』は「果樹」「鳩」「花束」「女事務員」「罹災者」「兇双」「素人小説家の經驗」「命の親」「晩年」等の諸篇を收めた水上瀧太郎氏の第十一集である。

このうち「果樹」と「鳩」と「花束」とは氏の初期の作風に屬し、「女事務員」と「罹災者」と「兇双」と「素人小説家の經驗」とは、その後氏のまへに展開されたあらたな作風に屬してゐる。すなはち「果樹」その他はあくまで純一な詩情に浸つて筆を遣つたもの、「女事務員」その他はことさらその「詩」の粉飾を捨てて、より深く、より大きな人生に直面しようとする氏の一轉機を示したものである。——「果樹」その他と同じ道をたどつたものにかつての「蟲の命」があり「邂逅」があり「喧嘩」がある。さうしてそれは、遠くかの「ぼたん」「うすごほり」に出立してゐる。「女事務員」その他と同じ道をたどつたものにかつての「勤人」があり「大阪」があり「日曜」があり「大阪の宿」がある。さうしてそれは……いふならばそれは、遠くかの「嗜」「評議員會」「良縁」等に出立してゐる。決してそれは氏に來た偶然の轉機ではなかつたのである。

氏の他の、われ〳〵昔からの讀者を喜ばせ、且、力強く感じさせるものはつねに決してかりそめでないその「態度」である。その筆を遣る態度である。この『果樹』の場合にあつても、そこにその二つの系統の、そのそれ〳〵の諸篇をつらぬいてゐるたゞしい用意と深い配慮とをだれもがはツきりみ出だすであらう。——たとへば四つに組んだすまふの、あくまでさう堂々と四つに組んだ大關ずまふの、器用な小手さきのあへしらひ、みためだけに仕事をあたまで嫌つたのが氏の作のすがたである。——一つにその勝つたときのことにして、敗けた場合の寂しさのより強く感ぜられるのも重厚なその取口によつてゞある。——忌憚なくわたしはいふであらう、「果樹」と「鳩」との完成感のさういつてもつゝましいまへにいかにその「素人小説家の經驗」の失敗のあらはに眼立しいことよ……

あくまで強い正義感は、氏の、『處女作』（第一短篇集）以來の道づれである。『その春のころ』（第二短篇集）にも、『海上日記』（第四短篇集）にも、『大空の下』（第六短篇集）にも、『亞米利加記念帳』（第七短篇集）にも、さうして勿論「大阪の宿」（長篇）にも、影の形にそふの逆、むしろ形の影にそふかのやうにつねにその歩みをともにして來た。ことに、その後、あらたな作風の

そこに展開されてからいよ〳〵その存在はあきらかになつた。と同時に、漸くその正義感にいたはりが出來て來た。――いたづらに強いばかりでなく、うちへ潛める力のしづかに、しづかにさうして冷かに、弱いもの、はかないもの、幸うすいものゝうへにそそぐ泪はいよ〳〵しげく、いくぢのないもの、だらしのないもの、未練たらしいものへおくる嘲りのかげはいよ〳〵濃くなつた。――まへのものゝいゝ例を「花束」の靜枝にみ、あとのものゝいゝ例を「罹災者」の大田原三造と「兇双」の板倉傳次郎とにわたしはこれをみた。――わたしはいま戯れに、花束の靜枝をもつて、「うすごほり」「途すがら」以來の、氏にとつての永遠の女性とこれを呼ぶであらう。

卷末の「命の親」と「晩年」とに、わたしは、さらにまた展開するであらう氏のもう一度のあらたな作風を感じて今後の氏のいよ〳〵多望、なるべきを知つた。「命の親」はしばらく措く、『晩年』の、本格すぎるほど本格の、秋の庭にしきをさへおもはせるすまふ振りの、その水のやうにしづかな作者の心もち、その大空のやうにきはまりない作者の視野。――つとにわたしの期待してゐる長篇作家水上瀧太郎の出現の、この作によつて圖らずその一歩をふみ出してゐることをみ出し、一人禁ずることの出來ない欣快をわたしは感じたのである。(東京市芝區愛宕下町改造社發行・定價貳圓)

## 「群集社會學」

新明正道氏著

松本潤一郎

六月の大氣のやうな現代ではある。霽るれば難しい陽が仰がれるであらう。霖雨。人はその內に激しい意欲にさいなまれ、際知らぬ焦燥に驅られて息づく。若し低迷する暗雲のあなたに異様の怪物の影が捕へらるるならば、それは現代社會に於ける群集に譬へられる筈である。革命と擾亂と暴動と、さてはデモンストレーション、ストライキ、此等のものゝ間を彷徨し、そこに躍動するのは群集といふ亡靈ではないか。我等はルボンが群集を以て現代を表徵する存在となしたのに同感し得る。社會狀勢を審にせんとならば、怪物「群集」の解剖學と生理學とを明にしなくては徒勞である。

本邦學者の間に從來餘り注意を喚起せずに居つた此群集といふ存在物の包括的な學的考察を企てたものが本書の內容をなす。著者は例の慧敏な把握力に訴へて問題をこなして居る。群集の概念と特徵、その組織や過程の分析から始まり、社會問題として群集の淵源の尋究、群集への對策、それの政治的關聯等を闡明する。分析や闡明は常に著者の斷案として生きて居る。之を群集社會學と題するのは、群集を單純な心理現象と見ずに、一個の社會形態と見做すからで、社會心理學的研究、即ち所謂群集心理學を社會學の俎上にまで引上げたからである。グラハム・ヲーラスに倣て、群集心理學の題

材は再說と再吟味を要求する」と嘆じたが、新明氏は此再說を社會學的に仕遂げんとする。

テオドール・ガイゲルの群集論は假令ファイアカント的にではあるが、矢張り群集を社會學的に再吟味したものであるから、本書と對照して興味を深うする。ガイゲルは群集概念を考察して、客觀性を具備する社會集團となし、革命群集などの個々の現實群集はその基層と認められる所の、否定意識を持つ「陶汰の殘滓」即ちプロレタリア大衆の表現現象と考へる。群集の本體は夫々の現實的群集ではなく、むしろその背後に潜む社會大衆であるといふのが彼の再吟味の基調であるが、新明氏のは現實群集と社會公衆とに共通するフロイド的リビドの活躍を群集的特質に擬する。其意味では精神分析學を群集研究に應用したかのマーチンに一致する觀點が本書を支配する。

著者は群集諸學說を卷末に摘要し批判するのであるから、研究者への好指針ともなるが、本書の實質は反って一般群集事象の解明からして、現代社會への一展望を提供する用意に滿ちる。その際氏の採る立場が社會學的であり、原理をフロイド說に依據せしめた事を指摘して、此書が又學的に嶄新なる企圖に出でたことを高く評價したい。(東京市本郷區切通坂町一九ロゴス書院發行・定價九十五錢)

## 新刊紹介

◆**靈華追悼畫集**(先頃惜しまれて物故した吉川靈華畫伯追悼のために關如來氏の編したもの卷首には畫伯の出世作菩提達摩より一昨年秋の畫壇に高評だつた離騷を始め、氏一代の傑作約九十圖を載せ次に畫伯の遺文數篇が收められてある。その中の一篇「傳統の意義」を讀むと、短文ではあるが畫伯の藝術家としての高き氣魄を窺知し得ると共に、鏑木畫伯のいへる如く如何に「善き學者であり善き批評家」であつたかをはつきり知る事が出來る。卷末には平福百穗、脇本樂之軒、鏑木淸方、松林桂月その他の諸氏の追憶記またとりどりに人として藝術家としての畫伯を傳へて餘蘊がない。尙本畫集賣上の一端は印稅として遺族に贈る由。四六倍判東京市下谷中淸水町一五・會心舍發行・定價參圓八十錢)

◆**勞働組合法の生成と變轉―英國**(著者は序文に於て英國が勞働組合運動の祖國であり、勞働組合法に就いても最も古く且多様な經驗を持つてゐるが故に英國を研究對象とした事を述べてゐるが、資本主義日本に於て近く必ず現實の法案の形に於て問題となるべき勞働組合法を迎へん日の爲に一讀さるべき好著である。――山中篤太郎著・東京神田區表神保町二・同文館發行・定價四圓八十錢)

**ロマノフ朝の終末**(大竹博吉監輯・ロシヤ大革命の裏面史譚選輯の第二輯で、退位前後のニコライ二世を中心にロシヤの大動亂記である。東京麴町區内幸町一ノ五・ロシヤ問

題研究所發行・定價參圓）

◆**情熱的論理**（北村兼子著・菊池寛氏が現代の才女と序文で呼んでゐる著者の近業姦通考以下才筆才藻の近代風景五十三篇を集む・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**土の精神**（山村暮鳥著・東京小石川區白山前町二四・素人社書店發行・定價貳圓）

◆**スパイクの跡**（人見絹枝著・國寶的選手人見女史のスポーツ界に志を立てゝからの自傳であり戰ひの歴史である・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**原阿佐緒抒情歌集**（原阿佐緒著・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**永井ゑい子詩文**（永井元編・米國サンフランシスコ市ポスト街六八五永井元氏發行・一三四六頁に亘る大部の遺稿集・非賣品）

◆**議政壇上を直視して**（渡邊貫知郎著・東京府下蒲田町御園二二四・普選徹底會出版部發行・定價壹圓五十錢）

◆**綠玉冠事件**（コナンドイル作・橋谷正雄譯註・東京神田表神保町一・健文社發行・五十錢）

◆**リンカーン**（內ヶ崎作三郎著・リンカーン誕生百二十年祭記念修補改版寫眞八葉入・東京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**グラッドストン**（永井柳太郎著・東京京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**在京朝鮮人勞働者の現狀**（東京府學務部社會課編・社會調査資料第七輯）

◆**性教育**（山本宣治著・全八卷山本宣治全集の第三卷）**性と社會**（同上第四卷）（本全集は一般の豫約出版と異なり各卷自由購讀の便あり、高倉輝、安田德太郎兩氏の編輯で倉田白羊氏の裝幀、四六判四三四頁、背革の氣持のいい書物、性及び性教育に關心をもつ人の必讀書・東京本郷區湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行定價壹圓八十錢）

◆**哲學序説**（木村秀吉著・現代哲學のもつ重要なる諸問題の全姿相を解説論述しつゝ哲學が人間生活の上にもつ實踐的な價値と意義を明白にすべく努めつゝ論述した眞摯なる哲學概論。――東京市本郷區眞砂町一五文書堂出版・定價參圓參十錢）

◆**詩集野**（木山捷平著・東京小石川區白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價八十錢）

◆**Voici ce qu'on a fait de la Géorgie** (Henri Barbusse アンリ・バルビュス著・Ernest Flammarion, Editeur. 26, Rue Racine, Paris 巴里エルネスト・フラマリオン社發行・定價十二フラン）

## 改造社近刊書

◆**現代文藝評論**・正宗白鳥著

◆**藝術と無產階級**・藏原惟人著

◆**藝術に關する走り書的覺え書**・中野重治著

# 新刊書讀餘錄

福田德三

近來ブック・ルヴューと云ふことが、可なり盛んになつて來た。これは甚だ賀すべきことである。日本では新刊書は必ず新聞廣告をすることになつて居るが、歐羅巴では其れは殆んど見當らぬ。其代りブック・ルヴューが盛んで、讀書子のよき相談相手となる。此頃は日刊新聞中其れを試むるものが、殖へて來た。就中讀賣新聞が、眞の善い意味で、其れをやつてゐる。廣告部の製肘を受けないで、而して然る可き專攻の人の手に成る評論を多くのせてゐる。其姉妹誌とも見るべきものに『ブック・マン』と云ふ雜誌が出來、年に一回か二回、更らに其新刊欄を一括して新刊書の總目錄を發行してゐる。發行所は、池袋の圖書研究會で、發賣店は、たしか岩波書店であつた。これは、讀書子に取りて便利調法此上ないもので、內務省へ納本された限りの新刊書を悉く網羅してある。又、此れに洩れた諸官廳發行の出版物は、官廳刊行圖書目錄と題するものが、印刷局から刊行されて、すでに二册計り出てゐる。此二つさへあれば、先以て我邦の新刊書の全體を一目の下に知り得るわけである。其外に出版業組合の編纂刊行する總目錄があるが、これは少し後れるから、矢張り圖書研究會出版の目錄の方が一般讀書子には便利であらう。（會社銀行其他の團體の非賣品の出版物については、まだ此便が具つて居らぬは殘念なことである。）

吉野博士は、嘗て中央公論で、新刊書の批評をされたことがあり、我〻は大いに參考の便を得たことである。此頃は中央公論を見ぬから、其れが繼續されてゐるや否や知らぬ。私は迚も吉野博士の樣に博覽強記でないから、其眞似は企てゝも及ばぬことであるが、此頃所〻の新聞社、雜誌社などから推薦に値する書物についての問合に接するが、一〻答書を差出す遑を見出さない。ソコデ、思ひ付いて、近頃讀過した新刊書の中、讀書子に推薦したいと思ふもの若干について、批評とか紹介とか云ふ程の者でなく、ほんの讀後の感想を雜談的に書き綴つて見た。『改造』では時々これを掲げて與れるとのことであるから、草稿の一部分に若干朱を入れて、茲に差出すこととした。殘りの部分も或は追つて掲げて貰ふかも知れない。

先年物故した、ジョージ・アンウヰン氏は、『其れについて、何か薦むるに足ることある書物にあらざれば、決して評論』せざることを主義とすと公言してゐた。私の此文も、先づ其心持で綴つたものである。

## （一）總選擧讀本（普通總選擧の第一回）

藤澤利喜太郎著（岩波書店發行）

此書は、昭和三年二月二十日に行はれた我邦始めての普選による總選擧の結果を統計的に研究するを目的としたとは、著者の自ら云ふところであるが、單なる統計研究のみに止まらず、選擧制度に關するあらゆる問題を、極めて分りよく、而も、精密に取扱つてゐる。著者が種々勘考の結果、書名を『讀本』としたのは、內容を讀まない內は、或は例の流行を追ふものではないかとの邪推を起させるかも知れぬが、全篇を一讀過すれば、其題名の如何にも自然的に而して恰好なることを見出さゞるを得ない。第一節には、我邦に於ける普選法成立の經過を叙述してゐるが、其れは乾燥無味な經過列擧表でなく、選擧法の根本問題の重要なものについて說明を加へて、其れらの問題が、我普選法に於いて、如何解決せられたかの經過を叙し、更らに、其利害得失を、公平な立場から批判を加へつゝ、叙述の筆を進めてある。『讀本』の名は、此一節だけについても、すでに、內容を現はすに最も適切なものと感じた。甚だ御恥しい話であるが、私自身此一節に叙述してあることの半以上は、此書によつて初めてこれを學んだのである。僅か五十餘頁の一節であるが、著者の叙述の如何にも平明簡潔で而も要領を隱擇して殆んどすべての問題を網羅してあるが爲め、此節を讀んだ人は、必ず卷末まで讀み續けざるを得なくなる。著者の立場は、極めて公平であるが、其れは、決して無味、無色と云ふ意ではない。著者は徹底した普選論者であり、否比例代表法に關する熱心なる研究者であり、而して、其政治上の意見は、——私は、玆に、案外にもと云ふ添語を許して頂きたいと思ふ——極めて進步的なデモクラチックなものであるのである。私は、色々な機會に於いて、著者とは、公的に、學問的には交際はしてゐるが、まだ一度も、私的會話を交はしたことなく、唯漠然たる感想で、著者を、普通の意味で我邦數學の大先輩にして、統計學開拓の先驅者、貨幣制度についての豐富なる意見の保持者とのみ思つてゐた。然るに、此讀本を讀んで、著者の案外にも、意外にも、甚だ徹底したデモクラットたること、而して、其デモクラシーは我々の樣な漠然たるものでなく、一々實證的に具體的に、就中選擧法の上について、丹念に論證せられたものなるを知つて、實は驚いたのである。著者は我が小野塚、美濃部兩博士と、寸分異らざる意味に於いての——少くとも、選擧法の上に於いては——進步的論者である。而も著者は、唯だ議論をする計りでない、其主張、其地位を、齊ゝとして、我邦の實狀の上に實現せんとする熱心の漲り溢れたる、其節に於いては、或は、小野塚、美濃部兩博士を凌ぐかの慨を此讀本の隨處に示してゐるに至つて、私は私の驚きを更めて高めざるを得なかつた。

第二節以下は、第一節の出立點の上に立つて、貧困缺格條項、基本資料、總選擧の結果の批判、黨派別的票數、選擧干涉の統計的研究を數節に分つて、叙述——といふより、むしろ、論述——し、最後に、第七

節に至つて、我が代議政治の進趨を論じてゐる。

第七節の初めに、『二大政黨の妖夢』と云ふ一項がある。曰く『我が邦に於ける政治的觀察を誤らしむる重なる原因は二大政黨對立の幻想である』と。私は私の目を疑つた。何となれば、二大政黨對立論は、デモクラットの常套語の如くであるのに、今や其のデモクラットたること寸分の疑ない著者が、此の斷言を敢てするは、案外千萬なことであるから。而して、其れは、私から見れば、實は眞に徹底したデモクラットの主張其ものであるから。私は明治三十八年から約十五年間慶大の御厨けを蒙つて辛ふじて生きてゐた。しかし、私が最も不快に感じたことは、鎌田塾長の二大政黨對立論を何十回となく拜聽せざるを得ざることこれであつた。塾長の地方講演け何處も、官學私學併存の功能論で、其例として、日本からは赤穗義士の始末について、官學者の愚論に對抗した、私學者の正論——義士に死を賜ふ可し云ふの——の例と、西洋からは、イギリスの二大政黨の御利役論であつた。陛下の政府と、陛下の反對黨との二大黨の對立、これがイギリスの政治の世界に冠たる所以である。其の如く、學問界にも、官學と私學とは二大分派と對立せさる可からずと云々と云ふのが、前後五六十回、私が聞かされた御談義であつた。私は、實に馬鹿々々しいことと思つた。ソコデ明治四十年頃であつたか、慶大の講演會で、『二大政黨對立の愚論』と云ふ講演を敢てした。其以來色々な機會で、保守、自由對立の英國の政界は、必ず變化する、而も遠からず根本的に翻されると斷言しつゝあつた。今此書の著者の口から同樣のことを聞く、私は實に驚かざるを得なかつたのである。

本書の中から、痛快な文句を引用しようとなれば、其れは實に限りなくある。其一例をあげよう。『學校教育を卒へた後に、富豪の婿となつて時めく煖衣飽食の徒には、選擧權があり、就職難の深淵に呻吟し、具さに生活難の辛酸を嘗めつゝある貧乏人は先づ以て公私の救恤を受けてゐるや否や、其の身元調を受けざれば、選擧權の有無が判然しないとは、如何にも、悲慘な矛盾である』(六一頁)

『然るに何事ぞ、此の良好なる結果を無視し、幾多弊害の記憶尙ほ新なる小選擧區制へ逆戻せんと主張するが如き、咄々怪事』『一種の小刀細工によつて作爲的に之を否定せんとし、....恰も治承の昔、淨海入道が入り日を麾いたのと同一の暴逆的心理を暴露するものである』(二二四——二二五頁)

『小選擧區還元によつて、一時的に無産黨の進出を阻止せんとするが如きは、偶ゝ多年間議會非認論を誘起する危險を孕む、國家永遠の生命から見れば、銘々の利害といふが如きは、菜の花に戯る蝶の如きものである。』(三四九頁)

此書の最重要な內容を爲す第一回普選の統計的研究と調査とについては、元より、私の冗言を容るゝを須たぬ。實に限りなき

豐富な資料が滿載されゐて、而して、其れは、何れの事項についても、單なる統計の記述でなく、活きた事實を其活きた姿に於いて、我々の眼の前に活動せしめてゐて、平々坦々たる事實の物語りの中に、著者の熱烈なる主張、卓越した抱負が織り込まれてゐる。如何な粗末な讀み方をするものでも此書に對しては、卷末まで倦怠を覺ゆることは、決してないと信ずる。

私は從來衆議院議員の立候補應援に屢々參加したことがある。此頃は、府會や町會の其れにも興味を有つ樣になつた。然るにも拘らず、實は選擧制度については、殆んど何物をも知らなかつた。今此書を讀んで斷汗背を沾すと共に、此書を便りとして、今後は、少しでも、此の問題に思を潜めねばならぬことを痛感した。少くとも、此讀本一冊丈けは、苟くも選擧權を行使するものは、必ず一讀して置かねばならぬ。繰返して云ふ、『選擧讀本』なる名は、此書に適するに、此上なき適當なものである。私は、これが藤澤博士の著であるから、斯く言ふのではない。此書が他の誰人の、――全く未知無名の人の――筆に成るものであつても、此内容を備へたものならば、私は必ず言はんと欲する。此書は、萬人必讀の讀本であると。唯だ其の目的の爲めには、此書の定價は高きに過ぐ、モット細字にくみて、頁數を減じ、手頃の本としたら、後藤新平氏の『政治の倫理化』ぐらゐの程度に普及するであらう。否、必ず普及せしめねばならぬ。殊に府會や町會の選擧にさへ、出勤時間を心配しつゝ投票場へ蝟集して、おとなしく順番を待つサラリーマン、印絆纏にゲートルをつけて、手に入場證をつかんで巡査の叱言に腹も立てずに立ち暮らす勞働者諸君と、朝の一時間二時間を空費させられる樣になつた此頃、私は、自分に力があるなら、此書一本づゝを、其れらの人々へ進呈したいと念ぜざるを得ざるものである。

## (二) 民法原論第三卷

### 債權總論上

富井政章著（有斐閣發行）

藤澤博士の書は、云はゞ餘技に屬するものと云へよう。其れにしても他の學者が、恩給に飽食逸居して居る間に、右の如き力作を出されたことに驚いた私は、更らに富井博士の此の新著に接して、驚異の念を高めざるを得ない。我々は、必ずしも怠けてはゐないつもりであつたが、富井博士の高齢を以てして、而して、蒲柳の質、永年の宿痾に惱んでゐる人に、其專門の學科について、此新刊あることを見て、我々は一には愧ぢ、一には奮發心を著しく刺戟せられざるを得ぬ。

債權の問題は、民法中でも、私共に關係の深いものであるだけ、私に一々丹念に各章節を辿つて熟讀した。博士の民法原論第一、二の兩卷は私共が民法について、眞に熟讀した最初の邦文の書物であつて、當時すでに、其文章の簡潔、其論述の精緻、一字

一句を苟くもせず、含蓄の甚だ深いものなるに敬服したものである。私共の樣に、極僅かしか法律の書物を讀まぬものには、普通の純法律書はとても全篇を通讀する忍耐を有ち能はぬ。要所〻〻を飛讀にする以上には、殆んど出來兼ぬることである。正直なことを申せば、邦文の法律書で、私が全篇を通讀したのは、學生時代には、江木衷氏の民法論ぐらゐのものであり、其後には岡松參太郎博士の無過失損害賠償論と牧野英一博士の諸著——但し刑法を除く——ぐらゐのものにすぎない。此頃は、勝本氏、小町谷氏、岩田氏、孫田氏、穗積氏の諸著ありて、此れらは、飛讀みするに忍びないものである。尤も、老穗積博士の諸著、宮崎博士の諸論文、其れらは、一字一句を暗ずるほど讀んだが、其れは普通の意味にての法律書と云はんより、より大なる意味にての法律文化學の書である。また美濃部、小野塚、中田諸氏の著作や論文も、大抵は讀むが、何れも、法律書と云ふつもりでない、もつと廣い意味に於てゞある。

然るに今富井博士の債權總論は最も嚴密の意にての法律書であり、而して、右擧げた諸學者の著作とは、文體の上に於いても著しく異るものである。然るにも拘らず、私は全篇二百七十二頁を一氣に讀過し、更らに亦た初めに戻つて再び讀み直して、節毎にノートを取りつゝ考一考を加へて行つた。何となれば、此書は、唯一回讀過して架上に積み上ぐるには、餘りに惜しいものであるから。

著者の議論には、私は尠からざる——否、殆んど各項に渉つて——異存を惹き起すことなくして、已み能はなかつた。殊に、金錢債權、就中利息、損害賠償債權、就中責任原因と因果原因などについては、私は經濟學研究者の立場から、著者の說に追從することが、如何しても出來ないものである。其れと共に、自分の有つてゐた今迄の考の如何にも、粗末千萬なものであることを、深く反省せしめられた。從つて今玆に異論などを申述べる勇氣は全くない。向後篤と考へる出立點を此書に置く必要を痛感したのである。

## （三）

日本國體論（日本評論社發行）
日本民族論（日本評論社發行）
日本人口論（巖松堂發行）

永井亨著

永井博士は、或意味にては、實に珍らしい學界の掘出物である。而して、數ある博士の著述中玆に掲げた三部作——私は敢て左様云ふ——こそ、近來の出版物中の掘出物であらう。其中でも、日本國體論は、書題だけを見ると、例のカビ臭いものらしく考へられようが、内容は、全く此の感想を裏切るものである。何となれば、其れは極めて大膽な、乍併亦た同時に極めて穩健な議論を

平々坦々たる筆路の上に展開してゐるものであるから。

元より、マルキストなどから見たら、其議論は如何にも生温い、或はタイム・サーヴキングのものとも云へよう。しかし、著者の態度には、回避の跡は一點も見出されない。著者は、衷心から、其議論を考へて考へて考へ拔いたものであらう。其れも單に頭で考へたに止らない。著者は、其燃ゆる心を以て感じ、悟り、憤り、喜びつゝ考へに考へ拔いたものであらう。其れでなくては彼の大膽さは出て來ない。其れと共に、著者は其の鋭い頭を極度まで働かせた。其れでなくては、彼の愼重さは、迚も眞似られるものではない。

日本民族論は、右書よりは、少しく、すべての點に於いて劣つてゐる。しかし、其れは、日本人口論への一のプロローグとして見るときは——其れが著者の欲するところであるか、否か、私は知らないが——成程と首肯し得られる節が澤山に見出される。

日本人口論こそ、著者最得意の題目であらう。日本人口論については、高田、河上、兩博士の論戰あり、那須博士の著あり、其他實に多數の人口論策を以て、我々は惠まれてゐる。去乍、私を以て見れば、永井博士の此書のみが、眞に問題の肯綮に觸れた唯一のものである。私は、日本人口論については必ずしも、著者と同一の考を有つてゐるものではない。否現に人口食糧問題調査會に於いては、最も多くの論戰は、著者と私との間に交はされてゐるのである。然るにも拘らず、私は著者の此書を以て、日本人口論に關する唯一の眞正なる研究を滿載したものなるを斷言して憚らないものである。

## (四) リカルドウの價値論及其批判史

堀經夫著(岩波書店發行)

此書に就いては、別文に簡單に述べてあるから、蛇足を添ふる必要はないが、私は、此書を得て、日本の經濟學研究、必ずしも西洋の後塵を拜するものでない有力の左券を得たことを喜ばざるを得ないものである。

著者の態度には、衒學的なところが毛頭微塵も見出せない。これは、實に珍らしいこと——少くとも、我が經濟學については——である。私如きは、此書に接して、年甲斐もない自分の衒學癖——自分は決して衒つた覺はないが、人に云はれて見れば、一言も辯疏する餘地はない——に、穴にも入りたく覺ゆる。更らに又た、著者は、あらゆる文獻を周到細密に商量考證したにも拘らず、些にても所謂考證家臭い跡を示して居らぬ。就中、著者は、端的にリカルドと其批判者との著書其ものに肉薄し、實に痛ましい程、綿密に、仔細に、其議論について考へて考へて考へ拔いた。此れは、學問の批判としては、實に恐る可き態度である。天下無敵である。私共は一學說を評論しようとするときは、原著以外、其關係文獻の商量に大半の力を消耗して仕舞ひ、肝腎の著者其

ものゝ商量には、却つて手薄となる惡習慣の爲めに、年來惱まされてゐる。著者は、此惡習を決然と一蹴して起つた。其英姿は、私共の老眼にも、如何にも水際立つて雄々しく映ずる。

私は、著者が此書を外國文に譯出して汎く世界の學界に問はれんことを切望する。私が此くの如きことを云ふは、故左右田博士の一論文についてを除くの外は始めてのことである。

## （五）貨幣概論

山崎覺次郎著（日本評論社發行）

貨幣の概念、種類及特質、職能、貨幣制度、貨幣の數量、貨幣の價値、同對外價値の六章から成り、別に附錄として法規、統計等を添へてある。四十年に近い學究生活の云はゞ總勘定錄と見るべきもの、一章一節悉く推敲に推敲を重ねたもので、其點からは、富井博士の民法原論と一對を成すものとも云ひ得られよう。唯だ後者は、形は學生用なるが如くにして、其實は、一の純學問的の書であるに反し、山崎博士の此書は、形も内容も學生用のものである。而も若年の學生を目的とするものでなく、老書生を主たる目的とするものであることは、十二行三十字と云ふ、極めて贅澤な印刷振りがこれを示してゐる。全篇百二十八頁、これを此頃の圓本型に組み込めば、恐らく二三十頁のものに壓搾されて、仕舞ふであらう其れで定價一圓八十錢とは、近來珍らしい餘裕に富んだ出版物である。（尤も附錄は細字で入れてある。）

著者の議論は、終始一貫して、實に穩健其ものである。從つて此書は、オルソドックス貨幣理論の金科玉條である。誰人が讀んでも、寸毫の差支ない。而して誰人も、必ず一應は首肯せざるを得ざる議論のみを載せてある。尤も、著者は、或程度までは『カルタル・テオリー』を採用されたこともあるが、此書には、其れも極めて穩健な姿に於いて述べられてゐるから、其說の創始者クナップ、否其布演者ベンデクセンについて非難せられた樣な危險性は、些もこれを見出すことは出來ない。

著者の其昔し公にした論文には、極めて謙遜な態度を以てではあるが、しかし、確信に充ちた獨自の創說が往々にして、含まれてゐる。カルタル・テオリーについて計りでなく、對內、對外な兩價値についても、又問題は少し外へ出るが、購買力平價說についても、更らに、兌換制度については殊に著しく、左樣であつた。然るに本書には、其昔しを知らぬ人にも氣の付く程度には、其れらは現はれてゐない。著者の老境圓熟の姿は、斯くして、遺憾なく此の一書に示されてゐる。其れと共に、研究者たる其の面目は玆には、著しく其影を薄くしてあることは、爭ふことは出來ない。其れは、やがて、我々皆のものが、追從すべき道程であることを、著者は、此一書に於いて示されたものであらう。（四・六・八）




# 一筋の道を歩む者

吉田絃二郎

元、伊太利の牧者たちが吹いた樂器だといふことだが ocarina といふきはめて簡單な樂器がある。形が鵞鳥に似てゐるので oca（鵞鳥）から來た名だといふことである。terra-cotta で作つたものらしいが、ちよつと見たところでは鐵ででも作つたやうに眞つ黑で非常に堅い感じがする。大地震のころであつた、あの地震に燒け出された一友人が、その ocarina だけはポケットに入れてゐて、燒け出されの男とも思へぬほど暢然たる風貌でよく ocarina を吹いてゐた。鵞鳥の脚に當るところが歌口になつてゐて、その翼にあたるところに指を當てるべき幾つかの孔が並んで明いてゐる。

ocarina は直に日本の素燒の鳩を聯想させた。今日でも田舍に行つたら恐らく昔のまゝの素燒の鳩が見出されるであらうが、わたくしたちの子供時代には道ばたの店頭によく並べられてゐたものである。頭と嘴だけは胡粉や赤い繪具などをほんの一刷毛だけさつと塗つてあつたが、全體は赭土のまゝで、尻の方の孔に口を當てゝ吹けは、ちよつと甘酸つぱいやうな變な土の香がしたものである。子供たちはででつぽう、ででつぽうと森の青鳩の眞似して吹いたものである。ocarina を吹く聲を聽いた時、わたくしはふたたびわれ〳〵の田園の土の鳩を思ひ出した。

ででつぽう、ででつぽう……きはめて單調な聲である。リズムといふものを感ずることすらもできないほどの短い音である。しかも眼をつむつて土の鳩を思へば、三十幾年前のわたくし自身の環境がよみかへつて來る。三十幾年前の田園の姿が、草が、木が、白雲が、さながらに泛んで來る。土鳩の聲の單調そのものゝごとき metre のなかに何といふ懷鄕、憂欝、悠久、寂寞がこめられてあることだ。靜かにも靜かな、虔しやかな土の聲、故鄕の土の聲、日本そのものゝ土の聲がそこから漂ふて來る。

terra-cotta で作られた ocarina は恐らく伊太利の土の聲を傳へてゐるものであらう。ocarina は日本の土の鳩よりもその構造に於いても複雜である。日本の土の鳩は尻の方の孔から息を吹き込むだけになつてゐるが、伊太利の ocarina は歌口を附けるために、鵞鳥の脚にあたる部分を特に作り足してある。それから指を當てるための孔が數個あり、したがつて、いろ〳〵な歌に合せて吹くことができる。ともかく簡單ながら一つの樂器である。ocarina に比べると日本の土の鳩はただ、ででつぽうででつぽうといふ靑鳩の聲だけのものである。無論樂器ではなく、どこまでも子供の玩具である。

伊太利の土の鵞鳥は技巧を持つてゐる。變化を持つてゐる。その時その折につれて甲の聲を出すこともできれば乙の聲を出すこともできる。恐らく南歐の菩提樹の下の若い牧人たちの脣にあてられては戀の歌をうたふこともできるであらう。そこに行くと日本の土の鳩ははなはだ無器用である。どこまでも四つ五つの子供の玩具であり、焦つても躁つてもででつぽうででつぽうといふ靑鳩の鳴き眞似をするより他に何の能もない。

伊太利の土の鵞鳥はおしやべりである。

日本の土の鳩は能なしである。

伊太利の土の鵞鳥は terra-cotta であり、日本の土の鳩はたゞの素燒である。terra-cotta は日本の素燒にくらべては堅い感じがする。ocarina と土の鳩の感じはまさに伊太利の terra-cotta と日本の素燒の堅さ柔かさの感じである。日本の土の鳩はあたたかいが、伊太利の terra-cotta の鵞鳥は冷たい。

わたくしは數年前日本に來てゐたリイチが燒いた小さな壺を時々戸棚の中から出して見るが、どうも日本人の作つた壺ほど柔かでない。英吉利に歸つてからは燃料にも困つてゐて、何でも大分遠い田舍から山の木を伐り倒して殘つた木の根株などを汽車で運んで焚いてゐるといふ噂なども聽いたが、日本的、東洋的なものをもとめてゐたリイチの作品も英吉利に歸れば日一日と一層英吉利人的に還元してゆく。結局東人は東人、西人は西人に還らなければならぬ。

伊太利の terra-cotta の鵞鳥が日本の鳩より堅くとも、技巧的であらうとも、敏感であらうとも、わたくしにとつては鈍感な、無技巧的な一本調子のあはれなる日本の土の鳩がなつかしい。日本の鳩の方が遙かにわれ〳〵自身に近いものを持つてゐることに氣付く。

十五六のころは親の膝下から離れて學校の寄宿舍にはいつてゐた。そのころは親と別々にゐなければならぬくらゐなら、乞食をしてもいいから學校なんか止めて親のところに歸つて行きたいと思つた。二十代になると時として父への叛逆を思ふやうになつた。故郷への叛逆者ともなつた。ところでこのころになると妙に故郷といふものが懷かしくなつて來た。時間的にいへば故鄕に住んでゐた時間よりは、東京へ住んでゐる時間の方が長くなるが、故郷といふものゝ力が日一日と強く後からわたくしの魂を引きつけてゐるやうな氣がする。いかにも

妙な力である。わたくしがまだ生まれない以前からわたくしの魂のなかに巣喰うてゐた故郷といふものゝ蠱惑が、現在のわたくしの裡に眼をさまして來たといふのか。

土の鳩の聲をなつかしむ心が三十幾年振で、現在のわたくしの魂の底に頭をもたげかけてゐる。

三十幾年前の日がよみがへつて來る。胸苦しいほどに。

土の鳩を買つて貰ふ。山の赤土そのまゝの鳩である。窯のなかから取り出されたばかりの松薪の香がする。土の鳩の尻に唇を當てると乾き切つてゐる素焼の肌はわたくしの唇に痛いほどに吸ひついてしまふ。同時に焦けた甘酸つぱいやうな赤土の香が子供心にも不思議なわびしさを喚び起す。

あのころ土の鳩を拵へてゐた男たちも死んでしまつたであらう。そして子供等の手から捨てられた土の鳩とともに靜かに故郷の土に還つてしまつたであらう。土の鳩を買つてくれた父も故郷の土に還つてしまつた。

故郷の土に還るといふことは、このころのわたくしには宗教以上の安心をあたへてくれるやうな氣がする。

伊太利の terra-cotta は伊太利の土である。伊太利の土はどうしても冷たい。堅い。わたくしの魂の安息所ではない。

土の鳩は日本の土である。土の鳩とならば一緒に土に還つてゆくのはむしろなつかしい。故郷の土が、故郷の父の墓がいつもわたくしの後からわたくしの魂を不思議な絲で手繰つてゐる。一年また一年と故郷の土が戀ひしくなる。

わびにわび、生きに生きてやがて疲れ切つて死ぬであらう時、われわれを靜かに眠らせてくれる故郷の土を思ふだけでも眼がほてるやうな感じを覺えるやうになつた。土といふものが人間の魂を惹きつけてゐる力の强さはまつたく恐ろしい。土の鳩の聲のごとくいかにも靜かであり、慎しやかであり、單調であるが、そは一度は一切をかの女の懷に引き戻さないでは置かぬほどの執念さを持つてゐる。なつかしくもあるが、その暗い底力を想像すれば恐ろしいほどだ。

日本の文學そのものが明治大正を通じて terra-cotta の上に踊り過ぎてはゐなかつたか。ocarina の冷たい、堅い、賢い、饒舌な、そしてどこまでも自分等のものでない諧律に合はせてうたつてゐたのではなかつたか。もし現代の文學界に行き詰りがあり、疲勞があるとするならばそれは新らしき方向への轉換もさることながら、さらに一層日本の土自身に還らんとする一歩前の佇立であらしめたい。

農民に還れ、土に還れといふ言葉のうちには、その根柢に於いてわれ／＼の祖國そのものゝ歴史に還れ、祖國の土に還れといふ民族的な自覺、民族的な矜持、民族的な意識が潜められてゐるのではないか？階級的思想のさらに奥にわれ／＼の魂に一層强く喚びかける新らしい力が醱酵しかけてゐるのではないか。

かつて叛逆せられたる郷土、かつて捨てゝかへり見られなかつたわ

れ〳〵の郷土、われ〳〵の祖國の歴史は今われ〳〵に喚びかけてゐるではないか……。ocarina の諧律に踊つてゐる都會人的環境を破壞するために。そこに住み、そこに醉ひ、そこに享樂しつゝある腐淹な歪になつた人間の魂と、sincerity を失つた、思ひ上つた藝術を破壞するために。

×

文藝史上に於ける、外國文學の影響は明治大正を通じてまことに著しいものであつた。わたくしたちはかなり久しい間その目まぐるしい渦卷のなかに放り出されてゐた。まつたくあわたゞしい暴風雨時代であつた。しかも文藝上の暴風雨は一吹き吹いたところで、少かの間を置いてはさらに新らしい方向と力と速さを以て吹きつけて來た。たしかにわたくしたちの時代の作家たちは幾つかの暴風雨に逢ひ、さらに幾つかの暴風雨に打ちのめさるべき宿命の下に置かれてある。

さてそれ等の暴風雨のなかに置かれ、暴風雨を感じ、叩かれ、矯められて、或ひは歪曲した後の自分自身を考へて見るに、十年一日のごとく一つの靜かな窓から人生を凝視し、溜息し、絶望し、翹望し、氣鬱し、或る時は諦悟し、或る時はさらに疑惑し、彽徊してゐるのみである。

一本の指を外から見る。滿足もしないで皮を剝く、肉を切る。さらに骨を削り、髓を切り心を剖く。遺されたるものは無そのものである。憂鬱である。吐息である。あきらめである。絶望である。

しかしこのやうな人生の見方、人生の生き方或ひは經驗は、決して無駄ではなかつた。かつては伊太利の若き寺院畫家たちの藝術的良心となつて動いてゐたラファエル前派の sincerity、つゞいては英吉利に於けるロゼッチ一派の同名の文學運動に見出さるゝ sincerity はわたくしたちの文學運動の第一の收穫であつた。そしていつも文學運動の根本的な力として動いてゐた。かつては羅馬やフロレンスの町々に於ける寺院畫家たちの神への跪拜であつた sincerity がわれ〳〵の時代にありては人間への跪拜となつたにせよ、sincerity はやはり運動の中心となつて生きてゐた。

すべての藝術家にとりて一番恐ろしいことはかれが賢明でないといふことでなくて、かれが sincerity を失ふといふことである。自分自身への sincerity を失つて、人間へ對しての sincerity を忘れて、時代を追つかけようとすることは恐ろしい誘惑である。

黑い法衣の上に荒繩を結んで羅馬やフロレンスの寺々の壁畫を描いてゐたP・R・Bの畫家たちの眞率さと生一本さはいつの時代の藝術家をも生かす。英吉利に於けるP・R・Bの詩人たちの藝術を生かしたやうに。sincerity は知識以上であり、賢明さ以上である。

一つの運動の先驅者となつて新らしい時代を切り拓いてゆくといふことはまことに男性としての快心事であるにちがひない。しかしそれと同時に餘りに表面的に、あまりに無雜作に看過されてしまつた過去に對してなほ靜かな觀察と思索と躊躇とを惜しまないところの眞率も

尊敬せられなければならぬ。

たとへばイプセンを論ずること、ストリンドベルクを云々することが今日の社會に於いてはすでに時代遲れであるかのやうに考へられてゐる。トルストイやドストエフスキイの總決算がすでに果されたかのやうに見做されてゐる。しかし有體にいつてわたくしはなほイプセンのブランドにも、ロスメルス・ホルムにも魂を動かされる。ストリンドベルクの「死の舞踏」にも現代の何れの戯曲にもまして深い感激を見出す。

或ひは愛蘭土の劇文學に對しても同樣なことを告白することができる。

これ等の古典的文藝はいかにも大まかな線描の底に魂の安息と無限性とを内包してゐる。そこではたとへばイプセンやストリンドベルクに見出さるゝ懊惱すらが象徴の霧幕によりて柔かなフオーカスを形作つてゐる。

しかしてこれ等の文藝がわたくしの魂をほとんど病的にまで惹きつけて置く魅力はかれ等に共通な象徴の蒼白き夢であり、北方民族共通の憂鬱な唄である。

×

二三年前の秋であつた。わたくしはそのころ信濃の沓掛にゐた。淺間の高原は日も日も暗欝な雲と、冷たい雨にとざされはじめてゐた。避暑の都會人たちもすつかり歸つてしまつて、後には夏の間だけ都會人の別莊に飼はれてゐた仔犬が捨てられて、あらしの後のやうな森閑とした別莊地をうろつき廻つてゐたりした。別莊地の都會人たちはかれ等の子供等の遊び對手に別莊地附近の農家から仔犬を買つて來る。仔犬は夏の間別莊の子供等の玩具がはりになつてゐる。かれ等が都會に歸る時仔犬は容赦もなく荒野の中に捨てられる。

高い山の上に冬を越す別莊地番人の家が一軒殘つてゐるだけで、人といつては一日に一度か二度沓掛から淺間の山腹を傳ふて六里ヶ原を横切る旅人を見るくらゐのことで、捨てられた仔犬はやがて芒の原の中に凍死するより他はない。わたくしは散歩のたんびに落葉松の林のなかや、芒の野徑のなかで捨てられた仔犬に逢つた。仔犬は人懷しさに七丁でも八丁でも蹤いて來た。わたくしはそのやうな時よく詩人バアンズのことを想ひ出した。都會人に對する憤りをさへ感じた。

日暮れころであつた。わたくしは淺間の腰をめぐつて六里ヶ原に通ずる山徑を沓掛の方へ歩いて來る途中で金剛杖を突き、油桐紙につゝんだ行李を背負つて、いかにも旅馴れた足取りで淺間の方へ登つてゆく一人の老人を見た。背が高く、老人とは思はれぬほどがつしりと引きしまつた筋肉をしてゐた。ちよつと聲をかけて見ようとも思つたが、老人の風貌があまりに寂然としてゐたので、聲をかけるのさへ躊躇しなければならなかつた。

八ヶ嶽も淺間も眞つ暗な雨雲につゝまれてしまつて、まつたく山は凄いほどの嵐の氣合をみなぎらしてゐた。暗い雲は西に裂かれ、北に

引きちぎられ、蹴落され、投ち上げられ、暗い大空そのものが今にも襲ひ來るであらう大暴風雨におびえ切つてゐるやうな夕暮れの山徑を老人は歩一歩踏みしめて登つて行つた。いかにも力強く踏みしめて。

わたくしは二三度振りかへつて老人を見た。かれは振りかへりもせず暗澹たる山風の中を山を登つて行つた。金剛杖の先に結びつけた鈴の音が時折り風鈴の音のごとくしづかに疾風のなかを響いて來た。

無論もうそのころは淺間に登る季節でもなく、時間からいつても淺間に登る時刻でもなかつた。かれは六里ヶ原を突つ切つて草津あたりへ行く人にちがひない。その長い山徑の間には淺間の山腹の峰の茶屋と、六里ヶ原の[illegible]去の茶屋くらゐなもので、別には人家といふものはない。どうして今夜の嵐を避けるつもりであらう。どうして今夜の嵐のなかを六里ヶ原をたゞ一人で突つ切るつもりであらう？　わたくしはそんなことを考へながら老人の姿を見送つた。雲は直ちにかれの姿をもつゝんでしまつた。山には雷鳴すら聞えはじめた。

寂然たる憂鬱な眼！　わたくしは同時にイブセンやストリンドベルクの孤獨を思ひ出した。

孤獨なる旅人、孤獨なる天才、孤獨なる英雄——わたくしは獨りごとして嵐の夜六里ヶ原を突つ切つて行つて老人の姿を思ひ出すごとに自ら頭を下げないではをれないやうな氣がする。

たゞ一筋の道を歩めばいゝ。寂しくとも。孤獨であらうとも。かれの sincerity が燃ゆるところに向つて、かれの sincerity が燃ゆるところに向つて歩一歩、地を踏みつゝ歩くより他に生くる道にない。ocarina は伊太利の土の聲を語るであらう。そこに ocarina の sincerity が生き、動き、燃えてゐる。terra-cotta の藝術の香が漂ふ。土の塊は日本の土の聲を語るであらう。そこに日本人の魂の sincerity が生き、動き、呼吸してゐる。そこに日本の素燒の藝術のナイーヴな、本然的な、個性的な、郷土的なかの女自身のものがある。

×

凡そ藝術家にとりて最も直接な不幸はかれがあまりに時代に無關心的なことであり、同時にかれがあまりに時代に關心的なことである。かれの藝術的眞率さからしてかれが時代に關心的であることはかれの藝術の新鮮さと活氣をあたへる。けれども藝術的眞率さを伴はぬ時代への關心は卑しむべき迎合、變節、藝術的良心の破壞、藝術そのものの破産に終らなければならぬ筈だ。

あわたゞしいテムポ、高速度的な行進曲の上に浮動し移動してゐる現代人の生活現象が神經過敏な作家の心の面に映つて來ないわけはない。しかし作家自身がかれ等とともにジャズに合せて踊つてはいけない。かれ等こそ刹那の享樂に醉つてゐる間に、作家は悠久の人間の悲しい宿命を考へてゐるべき筈だ。

藝術家の生活を想ふ時わたくしは或る友人から聽いた長谷川二葉亭の話を思ひ出す。或る春の日の上野はちやうど花のさかりであつた。誰も彼もが花にうかれて、花下に亂舞してゐた。わたくしの友人に不

櫻花の下に握り太なステッキを抱へた二葉亭がいかにも憂鬱な眼をして默然として佇立してゐるのを發見した。この大きな都會中の人たちが春に醉つてゐた時に二葉亭四迷一人は花の下に憂鬱な眼を瞬いて、狂醉せる人々をぢつと見つめてゐた。

醒めたる凝視、憂鬱なる凝視。イプセンにそれを見、ストリンドベルクにそれを見、最も buoyant な愛蘭土のシングのごとき作家すらが魂の底深くいかにも醒めたる凝視を潜めてゐるではないか。

もしわれ〳〵の文藝から、醒めたる凝視が失はれるならば文藝は滅びなければならぬ。テンポの速い、今日の所謂大衆的なる觀點に立つて今日のジョーナリズムを支配して行かうとする資本主義は恐らくわれ〳〵の藝術を滅すであらう。カフエの文學、重役室の文學、舞踏室の文學、作家も醉ひ、大向うも醉ふ。われ〳〵は窒息しさうだ。都會氣分を、カフエ氣分を破壞すべきだ。土に還れ、田園に還れ。われ〳〵の魂を生かすべき新鮮な空氣が待つてゐる。そこに醒めたる凝視の世界がある。

世界苦といふことは人間が生きてゐるかぎりつゞくにちがひない。文藝はいつもその根柢に世界苦を感じてゐなければならぬ。

×

一つの窓からぢつと人生を凝視してゐる。十年二十年一日のごとく。

人はかれを笑ふであらう。かれの愚を笑ふであらう。

もつと明るい窓もあるであらう。もつと日當りのいゝ窓もあるであらう。もつと眺めの廣い窓もあるであらう。

しかしかれは狹い薄暗い北の窓に面して、夜も晝も恐らく死ぬ日まで、同じ憂鬱な世界を眺めてゐるであらう。

一つの作家が一つの環境に置かれる。一つのテムペラメントを賦へられる。終生的な宿命である。

人生は賭博である。冒險である。自分等が歩いてゐる道がはたして何處に行くのか、何處に終るのか。勝つか、負けるか。それは誰にもわからない。冒險であるからには命をかけてかゝらねばならぬ。賭博であるからには丁か半か何れかを張らなければならぬ。張るならばできるだけ大きく張らなければならぬ。そのかはりには一歩過まてば一敗地に塗れて再起することはできないことを覺悟してかゝらなければならぬ。

文藝の道に於いても同樣である。自分が置かれた窓が南に向いてゐるか、北に向いてゐるか。それはすでに運命である。自分の窓はどこまでも自分の窓である。世につれて強ひて窓を切り變へる必要はない。

わたくしの前にかつて一筋の徑が横たはつてゐた。わたくしはたゞその一筋の徑を辿つて歩みをつゞけて來た。それは明るい徑でもなく、かゞやかな徑でもなかつた。わたくしは前方を見た。誰も歩いてゐなかつた。わたくしは後方を振りかへつて見た。そこにも誰もゐな

かつた。わたくしはいつも孤獨なる自分自身を見出した。

わたくしは思ふ。藝術の世界ではたゞ人おのおの自分一人の道を歩むより他に道はない。藝術は畢竟最も孤獨なる暴君である。孤獨なるエゴイストである。寂しき孤獨である。すべての藝術は徹頭徹尾一人の力である。一人の意力である。一人の操持である。かれは一面に於いて時代よりも強く、時代よりも高く生きてゐる。

今日のジヨーナリズム、今日の資本主義、今日の所謂大衆的趣味はやがて藝術的作品をわたくしたちの社會から葬つてしまふかも知れない。けれども藝術家は生きる。生きてさらにかれ一人の道を歩むであらう。

わたくしのやうな下根の者にはたゞ一人の人間といふものを見ることすらなかなか容易ではない。二十代に見た人生、三十代に見た人生、四十になつてから見た人生、まだまだ何時まで見つめてゐても人生そのものゝ持つ陰翳といふものはなかなか摑めさうにもない。トルストイが何う、イプセンが何うだなどと、その境まで行き着かない人間が總斷定をつけてしまふのはどんなものであらう。

**たゞ一人の人間をすらほんたうに見ることはほとんど不可能である。**

たゞ一人の人間の魂の陰翳の深さ、複雜さ、たゞ一人の人間の生涯のわびしさ、うれしさ、ありがたさ、寂しさ、それを摑み、それを感じ得るだけでも下根の身には一生を費してなかなか不可能な冒險である。

一生鯉の繪ばかり書いてゐた繪師もあつた。

一生一つの面だけ打つてゐた面師もあつた。

このやうな藝術家があるといふことは愉快である。

自分の sincerity が命ずるところに向つて生きてゆく、考へてゆく、歌つてゆく。それより他に道はない。時非にして破るればそれまでのことである。

ocarina を吹く人もあらう。が、わたくしは土の鳩を吹く人間に生みつけられてゐるやうに思ふ。

一番恐るゝことはわたくし自身の心が sincerity から遠ざからうとすることである。

無論 sincerity を云々するやうな資格はわたくしにはない。たゞ偶人の願ひとして、自分に持たぬものを欲するのみである。

# 「フランス最近の文壇の傾向は」と問はれて

武林無想庵

フランス最近の文壇の傾向だつて？　そんなことが僕にわかるものか！　わかつてたまるものか！　なるほど、僕はこの足掛七年といふもの、フランスの國境からほとんど一歩も足を踏出さずにゐた。さうしてその間ほとんど毎日フランス語で書いた本を目にしない日とてはなかつた。併しフランス語がわかればわかるほどフランス文學といふものがだん〳〵にわからなくなつた。云ひかへれば、樂に本が讀めるやうになるに隨つて、フランス文學の視界が幾何學的級數にひろがつて行つて、その地平線がとても手がつけられないやうに擴がつて了つたものだ。佛說ではないが、フランス文學は全く洪大無邊だよ。

これは併し文學に限つた事ではなく、繪畫だつて、音樂だつて、彫刻だつて、つまり藝術だつて、科學だつて、宗教だつて、哲學だつて、つまり、フランスといふものゝ一切合財がわれ〳〵の常に西洋文明と一口に云つてのけるものゝ總和であつて且つその粹の粹だからだと思ふ。

たとへばポオル・ヴレリイを讀むとする。ヴレリイは卒然として出現したわけぢやない。マラルメを離れては、まづかれの作品に手がつけられないものと覺悟しなければならない。たとへそれが難解極まる詩そのものでなくても、かの十九世紀の末に稿を起して、二十世紀の上四半期に原文より長い原文より複雜な序文を附して世の中に發表したダギンチに關する感想の如き單なる散文ですら、一ト通りや二タ通りの素養では、その大意さへオイソレとは飛ひかねると云つたやうな代物だ。さうしてそれがどんな大部の本かと云ふと、たつた百ページあまりの文章にすぎないんだから、ます〳〵呆れかへらざるを得ない。のみならず、そいつが二十年といふ長日月を經て、今日印刷に附

されてゐる形式にまで、漸く漕ざつけられたんだときいては、全く開いた口もふさがらない。

アン・リネーアの Sagesse qui rit がやはりその例に洩れない。どころか、さう云つた氣の長い點に關しては、さすがのヷレリイも三舍も四舍も五舍も避けるだらう。個人主義者であるところのかれが、道德について思を潜めて以來、この書物に手をつけてから、もう四十年も經過して了つてゐる。さうして今日のところではまだその前半だけしきや發表されてゐない。

僕はこの一週間前七年ぶりで日本へ歸つて來た人間だが、日本では今何事によらずまづ第一にテンポが早くなくちやいけないんだと、例の辻潤が東京驛でいち早く僕に訓示してくれた。

——テンポつて何だい。

——テンポだよ。

——楕圓形のまん中へ正方形の孔のあいた、さうして三本足らない事をもつて、進化論を夙に凌駕してゐる、かの青銅錢の事かい?

——困るなア、どうも……だから、つまり、テンポが遲いんだよ。

——何がネ?

——チヨツ! 君がさ。

——へえ、さうかい?

とは答へたが、僕にはまだそのテンポなるものの正體が、實はよく分つてゐないのだ。が、どの道日本人の事なんだから、きつとそのテンポといふことが、もちろん例の immédiatisme といふ特有の屬性から派生した内容が、たまく\フオノグラフやラデイオの殺到に面くらつて思はず口ぐせになつた地震以來の音樂的テクニツクなんだらう位まではほゞ見當がついてゐる。

そこで Sagesse qui rit にかへる。とだけ云つたら、あとは云はなくたつてわかつてゐるだらう。少くともテンポの早い國の人國である以上はだ。つまり、四十年以前と云ふと、多分坪内逍遥先生が小說神髓を日本紙の本で發表された時代の事だらう。さうしてゾラと爲永とを結びつけて、書生氣質といふ題だけ八文字屋をきかした大作でアツと云はした時代の事だらう。その時代から、わが畏敬するアン・リネーアは一つ事ばかり、實際、たつた一つ事ばかりクヨく\と今日まで思ひつゞけてゐたものだ。

そこなんだ、僕のフランス文學について感じた事は。決してそれが所謂「最近」といふ事にはならないけれど、そこがフランス文學の全般的傾向だ。が、それだからと云つて、かの地の文人墨客が、われもわれもと兩國橋の上で身投女を見つけた時のやうに、ワイく\と物見高く、悉く四十年五十年と手間ひまのかゝる文章に精根を枯らしてばかりゐるといふわけでは勿論ない。

きけば、日本では今文學そのものがなくなつて了つたといふ。さうしてそれは地震の結果だといふ。何の事だか僕には全然わからない。七千萬人とかあるといふ日本人のうち、十萬人地震にとられたからと

云つて、あとの六千九百九十萬人の日本人が、卒然として文學を失つて了つたなどゝは、斷然わからない。たとへ地震が秦の始皇であつたにしてからが、壁の中から四書でも五經でも、いくらでも出て來たものだ。さうしてその四書五經が新聞を見ると毎日の廣告欄を賑はしてゐる。クラシックの意味ぢやないのだ。何々全集何々全集といふアレだ。文學は決して失なつてゐないばかりでなく、前代未聞の大進出だ。イヤぢやありませんか？……電車の中の廣告を見上ると、菊池寛作東京行進曲とある。イヤぢやありませんか？……東京行進曲は小説ぢやないんでせうか？　文學ぢやないんでせうか？

フランスにだつて、そんなのは所謂汗牛充棟だ。毎日掃きすてゝも掃きすてきれないほどある。ヴイクトル・マルゲリツトのギヤルソンヌは半年にして五十萬部賣盡した。モオリスデコブラのヴエニスのマドンナは三ケ月で三十萬賣盡した。さうしてそれがこの頃はじまつた事かといふと、百年も二百年も前からいつだつてさうなのだ。さうしてそれがやつぱり文學なんだ。政治でもなければ、宗教でもなければ、科學でもなければ、やつぱり正眞正銘の文學なんだ。さうしてそれを文學と云つてあへて憚らないのは、必ずしもフランスに地震がなかつた爲ぢやない。何百萬人となく千九百十四年の役に失はうが失ふまいが、文學はいつだつて文學なんだ。出版がキヤピタリズムにならうがなるまいが、文學はいつだつて文學なんだ。と、さう大氣焔をあげて置いて、さて考へて見ると、實は日本だつてさうなんだ。統計によると、日本では書紀以來、人畜に數多く死傷のあつた地震に、平均二年に一度の割合になるさうだ。して見ると、若し地震が文學を滅ばした事が本當なら、日本には文學なんてものは決して存在できなかつた筈になる。それだけでも地震と文學とには何等の關係がなかつた事がよくわかる。源氏以來、平家以來、曲亭以來、いつだつてさうぢやないか？

もう一度「最近の傾向」にかへる。フランス文學の傾向は今云つたとほりだが、併しそれは最近ぢやない。最古でもない。ヘチヤムクレでもない。ベラボウでもない。それが即ちフランス文學の傾向なんだ。羅典民族の一派であつて、さうしてフランス語を喋るものゝ文學なんだ。さうしてその文學たるやその民族と共に常に終始してゐる。オーギユスト・コントの哲學までコツ／＼積上つたフランスの思想は實證といふ名に於いて科學といふ名に於いて、自然主義と稱するジヤン・ジヤク・ルソーにはじまつた一大ロマンテイズムの絶頂に達した。それがエミール・ゾラであつて、同時にアナトール・フランスだつた。ゾラのそれは下水のそれであつて、アナトール・フランスのそれは骨董のそれではあつたが、共に十八世紀から押されて來た、共に同じロマンテイズムの最高潮であつたことに異りがない。さうしてそれが一千九百十四年七月三十一日をもつて微塵粉灰に碎け散つた。さうしてその一々の破片こそ、實は御所望の「最近の傾向」と云はゞ云ひ得るものなんだらう。ジードがその一破片だ。ヴレリイがその一破

片だ。プルーストがその一破片だ。アンドレエ・ブルトンがその一破片だ。破片だ。破片だ。さうして凡ての陶器と同様に、それがフランス民族の破片であるがために、却つて陶器に思を潜める者どもにとつては、完全なる需要の形式を具へた時代より尊まれるといふ事になる。

一斑を推して全豹を知るといふアレだ。一をきいて十を知つても、それでも差支ない。テンポのはやい發明な日本人なら、その位の事は朝飯前の話だらう。ところが一斑ばかりいくら並べ立てゝ見たところで、決してそれだけでは全豹を成さぬと同じく、又一ばかり幾萬遍きいて見たところで、十はさて置いて、きいただけの一すら知らないと同じく、フランス人の破片ばかり陳列したところで、それだけではフランス文學の傾向はわかる筈がない。ところが、日本人はとても新しいものばかり追ひかけてその日を送つてゐる人種だと見えて、歸るか歸らないに、さつそくかうしたお土産を請求されるには困つて了ふ。日に日に新にしてとは、湯の盤の銘に打込んであつたものだといふぢやないか？ 盤の銘なんだ。盤とは水を容れる道具だらう。水を容れるんだから、水が新しいのだ。盤を毎日とりかへる意味ぢやなからう。だから日に日に新なのは水であつて盤ぢやない。ところが日本人の新しものずきは、その所謂水の事ぢやなくて、盤の方に對してさうなんだから助からない。ゾラがはやれば翕然として悉くゾラだ。ワグネルがはやれば翕然として悉くワグネルだ。ニイチエがはやれば、イブセンがはやれば、マルクスがはやれば、シネマがはやれば、ラディオがはやれば、洋行といふ伊勢詣がはやれば、何にかぎらず翕然としてその何にかぎらずだ。日に日に新なりを知つてゐる以上は温故知新もきいた事があるだらう。古きをアタタメてぢやない。去年もらつた老酒をおかんする事ぢやない。古きをタヅネてだ。古いものゝきらひな奴に新しいものゝわかつた例はない。維新以來、日本人はいゝ氣になつて、どし〳〵古いものを毀して行つた。さうして日清日露歐洲大戰と戰爭のある毎に、その破壞のテンポが加速度的にはやくなつて行つた。さうしてその破壞したものの上に新しく建築したのが今日の日本ぢやなくて、歐羅巴文明をその破片だけ拾ひあつめて來ては、そいつを間にあはしてゐるのが今日の日本の現狀なんだ。要するに骨惜しみの結果なんだ。さうしてその骨惜しみを利口だとまで考へてゐる。だから全く手がつけられない。

それはなるほどフランスだつて毎年草は生へる。が、フランスの草はフランスの土から生へる。獨逸の土からも伊太利の土からも生へない。斷然生へない。だからフランスの土を知らなければフランスの草はわからないといふ結論になる。ところで、今年はどういふ草が生へたかときかれると、僕だつて一寸返事に困る。が、たとへばニースでは今薔薇がさいてゐると答へたとする。たとすると、その返事をきいた者は、なアんだ、薔薇なんか一向珍しくない。日本だつてとうの昔

から咲いてゐらア、と思ふだらう。ところがニースの薔薇を目撃したものは、たとへそれが直接ニースから輸入したばかりのものであつても、ニースの薔薇と日本の薔薇とはいかに天地月鼈の差のあるものであるかゞ頷けるであらう。

同樣に、マルセル・プルーストが、ヴレリイがと、今フランスへ集つて來る世界の文學靑年達の目標になつてゐる作家をかつぎ出して、それはかう〳〵いふ傾向の作家だと云つて見たところで、結局ニースの薔薇のたぐひにきまつてゐる。

早い話がジャン・コクトオだ。もう二年ばかりになるが、コクトオはカトリック信者になつた。イギリスのチエスタトンも同樣にカトリックになつた。チエスタトンはイギリスの話だから別としても、あの今の日本の若い新しい人々のお目あてとなつたコクトオがどう氣がちがつて、古いも古いも、まるで日本の帝國議會のやうに腐りきつてゐると思はれてゐるカトリック信者になンぞなつたんだらう、と驚くかも知れない。ところが、親しくフランスの土を踏んだものから考へれば、ロマン・ローランだつて、アンリ・バルビュスだつて、ジャン・コクトオだつて、みんなフランス人である以上は、フランスの葡萄酒をのみ、フランスのパン、フランスの乾酪をたべて大きくなつた以上は、やつぱり生活のうちから一番自分に溫かい感じを求めざるを得ない場合には、どうしてもマリア樣に接近したくなるのに、決して何の不思議はないと思ふ。

けれどもフランスの土を踏まない人々にとつては、たとへラプレイを讀み、ラシーヌを暗誦しても、それが新しいものを追ひかける料見でゐるかぎり、コクトオとコクテールとは一緒になつても、コクトオとカトリックとはどうしても一致する氣づかひはないであらう。

だから溫故知新だといふのだ。フランス文學の最近の傾向を知りたければ、何よりもまづ第一にシベリア鐵道に乘ることだ。浦鹽斯德をとほつて行けば、ニガレリヤでたつた一度のりかへるだけで、十六日目位には、だまつてゐても、チヤンとギヤール・デュ・ノールの停車場へつく。さうしてそのギヤール・デュ・ノールといふのは、とりもなほさずフランスの巴里なんだ。眼耳鼻舌身意の六根六識六塵を活潑に地に旋回させて、まづ巴里そのものゝ姿を感得すべしだ。

西洋人のいふ意味では、決してこれを都會とはとても云ひかねるであらうけれど、とにかく全世界の大都會のうちで、現在この東京市ほど新しい都會はないであらう。さうしてギヤール・デュ・ノールへ到着した時の巴里位恐らく古くさい都會はないであらう。巴里を中心とせるフランスはとても〳〵古い國だ。活動寫眞でばかり巴里を知つてゐるものは、巴里の本物を目の前にした時、かれは必ずこれがあの美しい巴里かとガッカリして了ふにきまつてゐる。それほど巴里は古くさいのだ。

勿論、地震といふものゝない天惠によるけれど、單にそればかりでなく、フランス人ほど古いものを愛する念の深い國民はない。だから

赫々たる權威を中外に示さんためになされたものであつて、その目的とするところは、都市の美觀そのものにあつた。即ち紀念塔、凱旋門、宮殿、寺院等を建設し、壯麗、輪奐の美を極め榮華を誇つたものである。しかもそれは人民の膏血を絞つて實行したものである。彼の希臘のペリクレスが雅典を大理石を以て飾つたのも、羅馬のオーガスチン大帝が華麗なる宮殿、凱旋門等を建立したのも、みなこの心理に依るものである。かくして生れた都市の大通りは、壯麗にして燦爛、人目を眩耀するものがあるが、一歩裏通りに這入れば、幾多の貧民窟あり、薄暗き日光の下に、不健康そのもの丶如き陋屋がある。そこには惡疫が襲つてゐるのである。

　しかし乍ら近世的意義を有せる今日の都市計劃はかくの如きものではない。それは帝王の權力でもなければ、支配者の野心でもない。即ち、その對象とするところのものは綜合的有機體としての都市、及びその都市に住む市民全體でなければならぬのである。

　しかし乍ら今日の都市計劃が、果してかく公明に切言し得るであらうか。大阪市に於ても今宮とか長柄方面の地帶に對して、新鮮なる空氣と日光を與へることを果して親切に留意したのであるか、目貫の場所に廣小路を設け、壯麗な橋梁や建築物を建て、都市の外觀を美しくするだけならば、過去の權力者もなしたところである、今日の都市計劃は都市の外觀に浮身を窶すよりも、都市の實質的改善が必要なのである。そこにも無産政黨の力强い眞迫力が必要である。

×

　最後に、無産政黨の自治體進出の重要なる使命は、民衆に、政治と經濟殊に家庭生活との連鎖を知らしめることである。今日の政治が、金權の露骨と辛辣を極めた民衆搾取の政治であるにも拘らず、政治が民衆に興味中心にしか理解されてゐないのは、巧妙なる既成職業政治家の作戰によるとは言へ、未だ民衆に政治が理解されないからである。政治と經濟が結び付き家庭にまで理解される時、如何に無産政黨が眞摯であり、熱烈であるかゞ理解さるるであらう。それ故にこそ市政のあらゆる機械を通じて大衆との協同と動員を期さなければならぬ。それと共に市會は、中央政治と異なり、階級的立場を厳守するは言ふまでもないが、私黨的空氣を打破し、市民代表として眞面目に、出來る丈け親切にその職分を盡したいと思ふ。

（四・六・九）

新刊

# マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそれはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解說はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の內容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る。程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中聚め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

菊判クロース裝　定價三圓卅錢
四一五頁　索引六頁　送料十八錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪　神戶　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

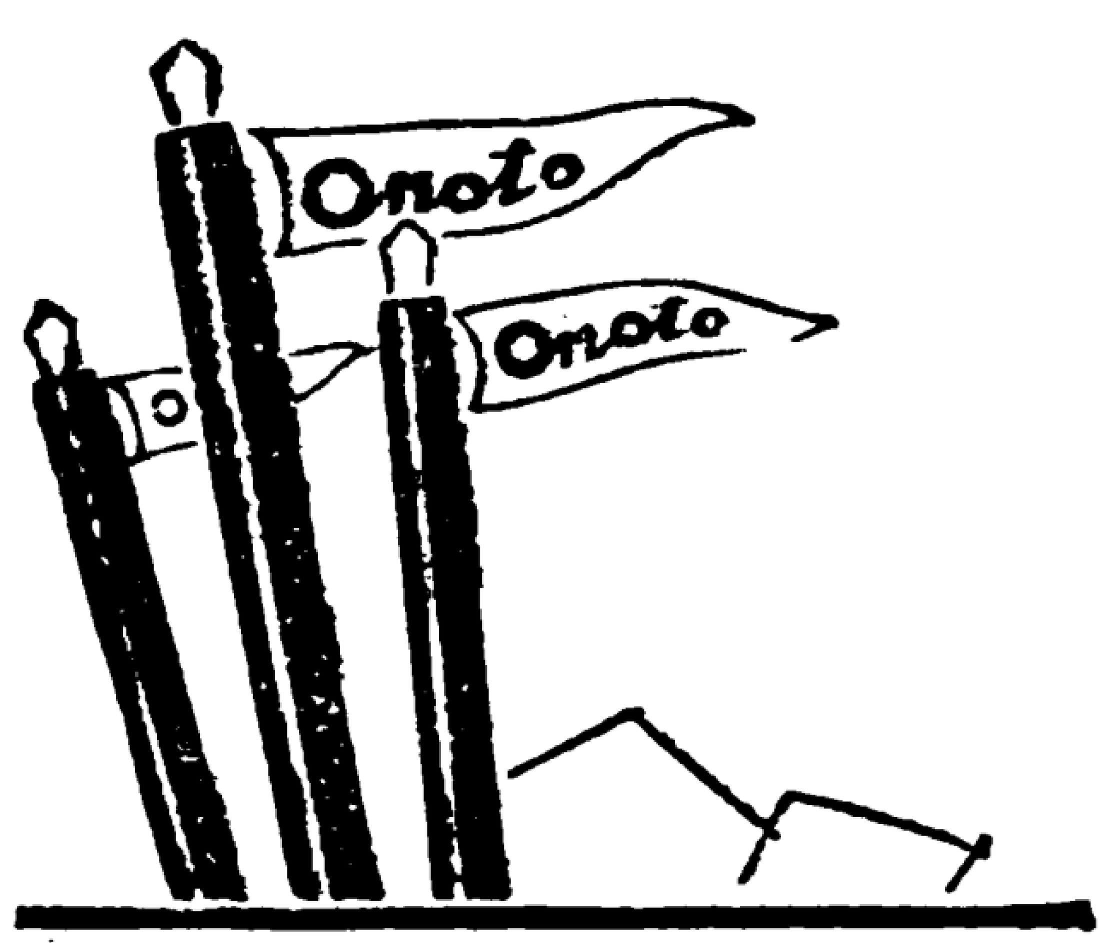
# Onoto the Pen

## オノト優勝！

萬年筆の競技大會でフォームとスピードと
耐久力に總ての萬年筆をリードしたのが
オノト！　オノト！　オノト！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ　三十五錢
送料各十八錢（カタログ進呈）




# ¥1.50

"VALET"
AutoStrop
Safety Razor

## バレー繁昌記

バレーは今東京の流行の花形となつてゐます
流行遅りでも書く人があるなら其人は
バレー繁昌記を書く事になります

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

### バレー自働研安全剃刀

C型　一・五〇　二・〇〇　三・三〇　四・八〇
〇型　一三・五〇以上　各種

替刃利用ナイフ　刃一枚付　・九〇
送料各・一八（カタログ進呈）

販賣所・大百貨店・著名洋物雜貨金物店等



東京日本橋通

## 丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京―神田・芝三田・早稲田・丸ビル

# サロヂニ・ナイツ夫人

## ——鶯にしてまた鷲なる印度の萬能婦人——

サバルワル

…然れどもわが國土の塵埃は、われにとりて
いや慕はしき哉、自由の國なる英國よりも。

一

これは閨秀詩人サロヂニ・チヤトパヂハヤが、また花羞しき少女の頃にうたつた詩の一節である。その當時、彼女は豐醇な生に醉ひしれて、外國政府が彼女の國人たちに加へる彈壓には殆んど氣づかないかの如くであつた。

楚々たる東方の麗はしき花、サロヂニ・ナイツ夫人の詩人として、また政治家としての名聲は、すでにこの國(日本)にも知れ渡つてゐるところであるが、今度いよいよ彼女はこの國に來る。——印度民族の非公式の大使、印度文化の化身にして且つその紹介者、スワラヂ(印度自治)の最高代表者である彼女は——印度の指導を受容し支持するに足るべき偉大なる魂(マハトマ・ガンヂ)の權化をうけて渡來するのである。元來、彼女はヒンヅ教徒なのであるが、同一信仰を抱く民族にも劣らぬほどの支配力を異教者回教徒間にも持つてゐて、現代印度新時代の大衆の精神を確く把握すると共に、また一方に於ては、舊時代に屬する人々からも彼等の指導者として敬慕を得てゐる。

さうして政治家としての彼女は、峻嚴にして策謀に富むところの精神をもつて、祖國の解放のために戰ひ、婦人參政權を主張する婦人代表の急先鋒である。かくの如く彼女は印度政界に於て最も重要な地位を占めると同時に、一方では傑出した詩人であり、劇作者であり、指導者、社會運動家、改革者である。近ごろ、彼女の一友人は彼女を「印度の鶯」と呼ぶと、別の一人は又「印度の萬能婦人」と稱し、また別の一人は「青年印度の豫言者、老印度の代辯者」と言ふのであつた。

## 二

しかし彼女のうたふ歌と詩は、專ら自然と人間性の美に對する教育のみを流露してゐる。その詩は、英文學を語る全世界の人々を魅了し盡して、歐洲及び東洋の諸國語に飜譯され、リーザ、ハニマン、コールリツヂ等は、これを作曲した。非難のできないリヅム、透明美、用語の純粹性、甘美な旋律なぞが、その詩篇の特性であらう。一九一四年、彼女は英國のロイヤル・ソサイエテイ・オブ・リテラチヤの會員に選ばれた。詩人としての彼女はあまりに思索的なラビンドラナツ・タゴールの創造するものとは遠くかけ離れた世界に住み、こゝには繪畫美にひらめき旋律美にふるへるところの世界があつて、讀む人の心を激しく鼓動せしめる魔術がひそんでゐる。それは「印度」のみが釀すところの微妙な魔術なのである。この彫琢された詩には、その一行にも人間性と自然との驚嘆すべき色彩と形態との集りがあつて、印度の生活面を極めて魅惑に富む萬華鏡とする。譬へば Leili (それはたゞ歌といふことを意味してゐる) といふ詩に於て、彼女はわれわれをリ、カルた翼に載せて殆んど印度の心臓にまで運んでくれる。神秘な自然と宗教の、後者と前者の、その兩者と生命との交流である。

時として、彼女は印度古典に靈感を仰ぐことも無くはないが、主として彼女は彼女自身の國土と生活とを直接に題材としてゐる。その詩のいちじるしい特徵は、表現の言葉の外には西方的なものとは一切無關係で、彼女自身の個性を極度に麗はしく保存してゐるといふ點である。表現は西方の言葉に借りながらも、或捕へ難いほどに微妙な方法によつて、る不思議な氣分、東方の女性の感性を暗示してゐるのである。西方の批評家がわれわれに示した如く、そこには東方の魔術があるのだ。それ故、哲學といふ點では、ナイヅ夫人は形而上學の世界にあまり深く沈潛してゐるとはいへない。けれど彼女にとつて戀愛は自己犧牲と獻身との道であり、その「罪」は、その德と同じく美しいものである。彼女の處女詩集 "The Golden Threshold" を推奬しその序を書いたアアサア・シモンズの言葉を借用すれば「彼女の神經細胞は常に美といふものに對して嬉しくふるへてゐる……」疑ひもなく彼女を詩人としたのは、美の慾求であるが、彼女の詩のうちにも必ず



サロヂニ・ナイヅ夫人

しも苦悶の響きがないともいへない。絕望の聲といふほどまで强烈でにないが、肉體の弱さに對する苦鬪の體驗が反射されてゐるのである。ひとへに人生は積極的で歡喜に充ちたものでなければならないのだ。それにしても彼女の詩には狹義の國家主義的な形相は見えないが、ナイヅ夫人は印度更生を堅く信じてゐる人なのである

彼女の書翰に於けるすぐれたる才能について語らなければ、ナイヅ夫人のスケッチは完全とはいはれない。他日それは保存されて印度文學研究者の伴侶ともなるであらうが、彼女には詩に於けると同樣に、散文の才能が完全に惠まれてゐる。この方面に於て榮えある作家となることは彼女にとつて困難なことではないであらう。

彼女の特質を更らに擧げてみれば、それはその輝かしい話術である。豐富な回想と逸話と——人と事件との不思議なまでに洗練された記憶に富み、彼女は疲れることなき潑溂さで、數時間にわたる談話を續けることができる。おだやかで同時に辛辣なユーモアがあり、彼女の出現はいかなる應接室や講堂の空氣をも明るくする。

## 三

彼女の生涯の幸運は世俗の富によつてゞなく、それよりもはるかに尊く永遠的なる他の富によつて測らなければならない。アゴルナツ・チヤトパデハヤとその愛妻バラダスンダリ・デビの如き人を兩親とした事こそ、彼女の幸運といはなければならない。印度に多くの男性と女性の學者、詩人、聖者を供給した名家チヤトパデハヤ家に、サロヂニ・ナイヅが更らに一つの美を加へたのだ。ヒンヅ古典の言葉を借りれば、ブラハミン家庭の數代にわたる「タパ」即ち贖罪は、彼女の詩的天才として實を結んだのである。

故アゴナツ・チヤトパデハヤ博士は、カルカツタ大學に學び、更らにエディンバラ及びボン大學で優秀な成績をおさめ、そしてホープ化學賞をかち得た。即ちケンブリツヂやロンドン大學の教授達と、その競爭試驗に伍して第一位を得たのである。彼は南印度のハイダラバツド王國の「教育の父」として知られてゐたが、サロヂニがこの世の光りを見たのも、この父によりこの土地に於てゞあつた。一八七九年の事である。

十二才のときサロヂニはマドラス大學の入學試驗に應じた。彼女の文學的興味は早くから開け、十四才の頃までには、彼女は殆んどすべての英詩人を讀んだ。セリー、テニスン、ブラウニング等が愛誦する詩人であつたのだ。

すでにこの頃めざめた詩的慾望は今や表現を求めて苦悶してゐた。「メヘル・ムニール」といふ小さな詩劇を英文で書いたのは、この頃のことである。少數の友人の間に頒布せられたその一部は、一八九五年、故ニザム（ハイデラバツド王の稱號）に捧げられた。王はサロヂニの詩に對する熱心さを見て、彼の天分を開發しようとする希望のあまり、父チヤトパデハヤ博士にメツセイチを送つて、賞品として何を

望むかをたづねた。その結果、彼女は一八九五年に當時としては莫大な金であるところの年三百ポンドの留學費と潤澤な旅費とを受けた。

ケンブリッヂ大學に於ては十八才未滿の學生に入學を許可しないことになつてゐたので、當時十六才にすぎなかつたサロヂニは暫くロンドンのキングス・カレッヂに聽講した。定年に達してケンブリッヂのガートン・カレッヂに入つたのである。しかし大學の機械的な生活や校則は彼女に不向であつたらしい。暫くの後、健康を害してガートン・カレッヂを急に去らなければならなかつた。さうして彼女はスヰスとイタリイの旅に立つた。

ロンドン滯在中に於ける彼女とエドマンド・ゴスとの交友は、あまりに有名だ。ゴスは彼女に、アングロサクソンのセンチメントを描くよりも祖國の情熱を描くやうに誨へた。彼女の心のなかに大きな動搖があつて、その後十年を經て彼女の處女詩集 The Golden Threshold が出たのは、その結果であり、それがゴスに獻ぜられた所以である。

## 四

歐洲から歸國して勇敢にも階級と傳統とを打破して一八九八年、自から選んだ男性と結婚した時にこそ、彼女の生命の凱歌は揚つたのだ。ゴビンダラヂュル・ナイヅ博士とは彼女が歐洲に出發する以前に相愛の間であつたのだが、博士はサロヂニの家系とは異つた階級に屬し、彼女の兩親のやうにブラーミンではなかつた。しかし彼は善良な男子であり、サロヂニの結婚生活は多幸であつた。二男二女を惠まれてゐる。

家庭に於て、その子供達から敬慕される母の姿は、何と感動的な樣子であることだらう。妻として母として、また主婦として、彼女は理想的な婦人である。彼女の多角的な活動のうちで、この家庭生活は最も尊敬すべき一面でなければならない。ヒンヅの「ダハルマ」即ち「人生觀」は、あらゆる階級あらゆる土地に存在する最高のものとして、母性といふ理想をもつてゐる。われらヒンヅ人は母性尊重の國民である。その國土はマザア・ランドである。われわれの神聖なる河ガンヂスは、マザア・ガンヂスといはれてゐる。ショペンハウエルが人生の慰安を茲に發見したヒンヅの聖書ウパニシヤッドは、父性崇拜ろあらゆる人事關係よりも先づ母性を敬愛すべきものと敎へてゐる。神性の象徵は父性でなく母性である。現代に於てすら印度國歌は「母にひざまづけ」といふ起句に始まる。

## 五

政界に於て婦人參政權が問題の焦點となつた時、ナイヅ夫人は樞軸となつて立つた。彼女とその一黨の印度婦人指導者達の戰術は、ヒンヅ・ダルマに訴へるといふにあつた。時は來た。この時、印度女性の選出ナイヅは印度婦人の理想を「青空に消ゆることなき火の文字で、記されなければならない」と叫んだ。――家庭を守ると共に社會的活動

に進出しなければならないといふ女性の意見に對して、すべての男性達は反對をしなかつた。かくて印度婦人の智識は向上し、男子と同權の選擧權を持つやうになつたのである。あらゆる社會の部門に於て重要なる地位を占める婦人が、その結果として續々と現れ、ナイヅ夫人自らも、まる一年間印度の大都ボンベイ市長となつたことがある。

最近、ロンドンに於けるルーターの特派員に對して語るところによれば、彼女は英國に於ける二十一才以上の女子の婦人參政權獲得は單に「印度婦人がすでに多年にわたつて享有してゐた自由に對して一步を踏み出したにすぎない。……私が英國婦人運動をいかに考へるか？正直にいへば私はこんな運動に參加することを恥ぢとする。それは婦人が自からの劣れることを告白することに他ならない。……印度に於ては性（セックス）の問題は起らない。問題はたゞ誰が仕事するに最も適當であるかといふことである」

また或る機會に彼女は言ふ「婦人は單に家庭の爐邊の火を守るだけではなく、國民生活の烽火を燃え上らしめるものである。戰ひに際して鬪士の心を培ひ、不和に際して聖者の心を保つものは婦人である。自己克服と自己實現とは、印度婦人の典型的な特質である」

更らにナイヅ夫人は言ふ。文明について萬言を費すとも結局婦人に於て最も重要なものは家庭である。そしてそれは如何なる他の活動よりも一國民の建設あるひは破壞に影響を持つ。家庭の幸福を助けまた妨げるところのものは、人生の經驗生活方面に對する男女の態度に因る。「婦人は男性の敵ではない。彼女は自ら仕へることによつて自らを支配しなければならない。彼女は彼女の生命をもつて奉仕するところの男性の活動を呼び醒さなければならない。婦人との協力が實現せられた曉にこそ、世界の總ての爭鬪と苦惱とは終り、四隣も戰火の下に蹂躪することはないであらう」

一九一九年、マハマット・ガンヂの運動が起つたとき、彼女はサチアガラの誓約に參加した最初の一人である。かくて彼女は政界に身を投じたのである。それ以前數年間も、彼女は直接政爭のうちには入らなかつたが、愛國的な義務としての社會運動政治運動には參加し續けて來たのであつた。彼女に最も影響を與へ、彼女を社會的に進出せしめた初期の印度政事運動家は、印度國民議會の大立物であつた故ゴカアレ氏である。ガンヂすらもゴカアレ氏を彼の政治的指導者として、またグル（教師）として認めてゐる。ゴカアレとナイヅの交友關係は長く且つ深いものであつた。

一九一八年以後はガンヂのみが印度の政治運動の中心的動力である。ガンヂ、印度最大の人物、三億にあまるヒンドスタン民族の胸の奧に坐して類ひなきガンヂ……ナイツ夫人は彼を全印度と共に愛してゐる。一九一九年、ガンヂ等に加はつた後の彼女の全努全生に、専らサチアガラ運動を支持してゐる。地方旅行中も人々に運動加盟の勸誘をすることを忘れない。またサチアガラの日、即ち四月六日、ボンベイの街上に同志の書類を賣つたこともある。

爾來、彼女の一言一動はガンヂ使徒としてのそれである——勿論その政治的主張は彼女の詩的熱情のなかに導化されてゐる。一九二二年三月十一日、ガンヂ捕縛の噂は全印度に憂鬱のかげを投げた。アハメダバッドに於ける十八日の歴史的訊問に關して、當時ガンヂと緊接に連絡のあつたナイヅ夫人はその傍聽者として最も精彩ある報告を果してゐる。この訊問こそ現代に於ける最もキリストに近い人物をキリスト教徒政府が反逆罪人として裁いたものである。最も「平和の主」に近い社會運動家を平和撹亂者として處罰したのである。

## 六

一九一五年、ボンベイに於ける國民議會にのぞみナイヅ夫人は議會演壇の處女演説をこゝろみたが、自治の決議を支持し、印度擧國一致の豫想を謳つた詩をもつて、その雄辯を結んだ。その日にこそ彼女の政治生涯は始まつたといつていい。一九一七年、カルカッタに於ける國民議會の彼女の熱情的な演説の結末は次の如くである。

「私は一女性にすぎない。けれど私は皆さんに告げなければならない。時は迫り、あなたがたが闇の路に炬火を持つ人を要する時、戰旗をかゝげる旗手を要する時、あなたがたの信念がぐらつき倒れようとする時、印度の女性はあなたがたの傍らに立つて旗手となり、あなたがたの力を支えるでありませう」

一九一八年五月、コンヂヴアラムに開かれたマドラス州國民議會の討論者は彼女であつたが、それは國民議會の歴史中で最も騷擾激烈たものであつた。しかし彼女は議事進行を計つて、すばらしい能力を示した。

その後、彼女は祖國のために運動に加入せしめるべく青年達を勸誘した時、即席演説をしたことがある。その際、彼女は詩と夢想の聖域を棄てゝ政治の分野に進出したことについて、次のやうに辯明してゐる「今日、あなたがたの前に立つて私は誇りにふるえながら叫ぶとができます——私は今やあなたがたと一しよに立つのみではない。あなたがたに身を捧げてゐるのである。何となれば私は私の生命を委ねてゐるところの美の幻を今や再び新しい光りに於て見たからである。人々は幾度となく私に訊ねます——何故にあなたは象牙の塔の夢をすてゝ市場へ出て來たのであるか？何うしてあなたは詩人の節操をすてゝ國民を戰爭に驅る人々の激しいラッパとなつたのであるか？——それは詩人の任務は薔薇の花園のなかに立つ夢の象牙の塔に獨り住むのではなくて、彼の住むべきところは民衆と共にあるからです。街道の埃のなかに、戰爭の困窮のなかに、詩人の運命は横はる。彼が何故に詩人であるかといふ理由は、危難の時、敗北と絶望との時、次の如くに夢想家に告げるからです——若し諸君が眞實を夢みるならば、あらゆる困難、あらゆる幻影、あらゆる絶望、それ等はマヤ（空の空）なるものにすぎない。たゞ一つ大切なことは希望である。いま私は諸君の前に、諸君の高き夢と共に、不屈の勇氣と共に、不屈の勝利と共に、私

は立つてゐるのである——それ故、今この爭鬪のうちにあつて印度のための勝利を得るや否やが偏に皆さんの手中に在る時、かよわい手弱女なる私は家を出でて參つたのです。夢を夢みる人なる私は、市場に出でて參りました。そして叫びます。行け、友よ、勝利に！」

　ナイヅ夫人は一九二五年、印度國民議會の議長に選ばれた。それは——印度國民が印度國民に與へ得る最高の名譽であるが、このとき、彼女が現代最大の指導者であるといふことは、全世界の承認を經たわけである。今日に於けると同樣、ヒンヅ教と回教との諸問題は、中介者、融合者としての手腕を要すること切なるものがあつたが、それは婦人として母として詩人としてのナイヅ夫人に甚だ應はしい任務であつたことを、人々は正しくも信じた。ヒンヅ教の親を持ち純然たる回教徒の周圍の中に生育したといふことは、その兩者の立場を了解するに甚だ好適であつたのだ。

　ナイヅ夫人が印度國民の聖なる聲たる國民議會の前に立つて、議長としてのアドレスを讀む前に、多くの人々のメッセイジが讀まれたが、就中、詩人ラビンドウラナツ・タゴールは言つてゐる「この議長ナイヅが詩人として又女性として、貧困と無智と病氣と確執とのために母乳を失ひ、生命は衰へ、喜びの光りは殆んど消えてゐるこの國民の搖籃への愛と奉仕とに向つて、國民議會の活動を指導することができるであらう」

## 七

　ナイヅ夫人は言ふ。「全人類の五分の一が未だに政治的服從を強ひられて自己の未來を支配し自己の法則をつくることができない時にあたつて、世界平和に就いていかに雄辯に談論するとも、果して何の意味があり何の眞實性があらう？」「強力の國民にありては平和は勇氣である。弱き國民にありては、それは怯懦である。印度の平和は服從より來る平和であるといふが如き觀念を抱くことは絕對に不可である。それは勝利より來る平和である。究極は印度の自由である……來たれ！汝は、われ等を囚人となすことができるであらうが、われ等を征服し去ることはできないのである……われ等の魂に汝は觸れることはできない。印度は決して自らを怯者にするが如き平和に滿足することはできない。」

　英國の強力なる軍隊が、この弱き無抵抗の國民に對して備へられてゐるのだ。バートランド・ラッセルが言ふごとく「人間の肉體的自由を奪ふことはできよう。しかし精神的自由は彼の生得の權利である。世界のあらゆる陸海軍も彼の同意なくしては、それを奪ふことはできない。」

　印度問題は印度人自らによつて解決すべきである。勿論その過程には幾多の困難が橫たはつてゐる。しかし自由に對する印度の意欲はいかなる道をも切り開き、いかなる障害をも排除するに足るだけの力を

もつてゐる。ナイヅ夫人は言つてゐる「われわれは英國に訊ねる。英國はわれわれの國にペンによる解決を與へようとするのであるか、それとも劍による解決を與へようとするのであるか？ 選擇は英國の自由である。若し彼女がペンの道を選ぶならば、われわれは欣然として唯自由のみを求めるところの大國民的態度をもつて協定するであらう。しかし若し劍を把つて來るならば、われ等もまたこれに備へて、必要の場合はわれわれの骨を鍛えて劍をつくり上げるであらう。われわれは救助を乞はない。同情と金錢を望まない。」

ナイヅ夫人は、印度は最も完全に自治の準備をなしてゐると主張する。印度の社會構成の二三の害惡は、外國に於ては甚だ誇張されて傳へられてゐる。外來の支配者は自己の利益を擁護するために、印度の僞情について甚だ誤れる宣傳をなしてゐる。彼等は明らかに眞理を無視しつゝ、早婚、寡婦問題、階級問題等を利用して、印度國民の獨立に對する當然の生得權を拒絶する口實を作成しつゞけて來た。

しかしナイヅ夫人はこの宣傳のために日本に來るのではない。東洋に於て最も有力にして印度に同情を有する日本民衆に親交を得ようとする目的であるに違ひない。彼女は、古くから宗教と文化によつて結ばれたこの國（日本）に來て、全くアット・ホームな氣持にひたることができるであらう。

けれども印度に歸るや否や、彼女は再び印度解放鬪爭の新しき渦卷きに身を投じるであらう。何となれば マハトマ・ガンヂは昨年の十二月のカルカッタに開催された全印度國民議會に於て鬪爭として宣言してゐる。——若し英國政府が一九二九年十二月三十一日までに印度自治の國民的要望を認めなければ、印度國民の無抵抗主義鬪爭をあくまで指揮するであらう、と。おそらくナイヅ夫人は、若しガンヂが再び無抵抗主義の鬪爭を開始する場合には、その右手となつて働くであらう。結末にあたつて私はかゝる時が到來した場合に、彼女自身を最も雄辯に語つてゐるが如き彼女自身の言葉を聞かう。

われ等が母なる國の苦惱のうちにこそわれ等の悲哀の最高の慰安はあるなれ、母なる國に拜跪することにこそ罪の解脱はあれ。彼女のために生きん事これ最も輝やかなる生命の凱歌にして、彼女のために死すこそなき不滅の王冠を贏る所以なれ。

# 探偵小說の變遷

森下雨村

## 一

犯罪を取扱つた文献、または探偵的興味をもつた讀物を過去に遡つて求めるならば、恐らく人類が文字を案出した昔にまで溯らねばなるまい。探偵小說の起源にしても、ホフマンやヴォルテール、さてはチョーサーや一千一夜物語なんどを引合に出して詮索するとなると、それこそ果しもないことで、やはりエドガア・ボウの「モルグ街の殺人」あたりをスタートとして考へて見るのが宜いと思ふ。

その「モルグ街」が出たのが一八四一年だから、爾來ざつと九十年、文學の中での最年少者といふわけで、その變遷と云つても文藝史上の大きな流が語るほどの目覺しい歷史をもつ筈がなく、それに元來が確然たる一つの目的をもち、明確な約束と傳統の下に、獨特の要素、並に形式とテクニックをもつて進んで來た文學だけに、そこに大した變化のあらう道理もないのであつて、要するに年代を逐ふて主要なる作家と作品の傾向でも語つてみる他はないと思ふ。

「モルグ街」を筆頭にその三部作が、典型的な探偵小說であるに拘らず、ボウがその主人公デュパンに探偵の名を冠してゐないといふことを興味あり氣に云ふものがあるが、これはデュパンが犯罪捜索の專門家ではなかつたといふよりも、當時まだデテクティヴー探偵といふ言葉が用ひられてなかつたと解釋すべきであつて、ボウ自身が「モルグ街」その他を書いた動機は、明に探偵的興味に驅られたものであることは疑ひもないことである。探偵といふ言葉が初めて用ひられたのは、ウイルキ・コリンズの「月長石」(一八六二年)からで、それまでの間には約二十年の溝があつたのである。もつとも、この期間は探偵小說が急激な發達を遂げるための準備時代であつて、ボウの影響をうけること最も多かつたフランスの文壇には、その模倣的作品が盛んに現れたものである。が、特に記すべきほどのものはなく、當時世に出たもので探偵小說的興味をもつたものと云へば、先づデュマの「ブラヂュロン伯爵」(一八四八年)と、ヂッケンスの「強盜」(一八五三年)であらう。ヂッケンスの作は近代探偵小說への英文壇最初の貢献で

あると云はれてゐるが、その內容手法から見て今日の探偵小說とは無論趣きを異にしたものである。たゞ作中の主人公バッケット警部が、作者と親交のあつた倫敦警視廳の一警部をモデルとしたもので、ある意味に於てデュパンと並稱される性格であるといふ點に興味がある。ヂッケンスには尙ほ未完に終つた「エドウィン・ヅルイドの秘密」がある。もしこの作が完結されてゐたならば、探偵小說の先驅的大作としての名を恣にしてゐたであらうとは、一般の一致するところである。

一八六〇年にウィルキ・コリンズの「白衣の夫人」が出、六八年には名作「月長石」が出た。コリンズはポウの傳統を英國に移し、探偵小說をリアリズムの世界に導き、近代探偵文學の素因を作つて、ガボリオへの橋渡しをした作家で、「月長石」に出て來る探偵カッフはデュパンやルコックの名に蔽はれた傾きはあるが、探偵文學の史上に永久に殘るべき一つの性格である。

コリンズの後にルコックの作者エミイル・ガボリオが出た。ルコックは自らデュパンの後繼者を以て任じた性格で、ポウを探偵小說の父と呼ぶならば、ガボリオはその後を繼いだ探偵文學の保護者であり管理者である。コリンズの描いたカッフ探偵がどこまでも獵犬の如く、香を嗅ぎ足跡を追ふ努力勤勉家であるに對し、ルコックは勤勉に加ふるに緻密なる推理と觀察をもつて進んでゆくところ、明にポオの傳統をついで探偵小說の手法に一歩を進めたものと云へる。ガボリオの代表作として擧げらるゝものに、「書類一一三」（一八六七年）「ルコック探偵」（一八六九年）、「他人の錢」（一八七四年）等がある。ガボリオと並んで佛蘭西にボアゴベがある。極めて多產な作家で、探偵小說の普及に力あつたことは疑ふべくもなく、ドイルなどは明にその影響を受けてゐると云はれてゐるが、ガボリオの聲名に壓せられて一般には知られるところ少い傾きがある。彼の處女作は「囚人大佐」（一八七二年）で、その他「塔上の秘密」、「浮浪者の群」、「赤い切符」等數十篇の作がある。

時を同じくしてアメリカに女流作家アンナ・キャザリン・グリインが出た。「リーヴンワス事件」（一八七八年）がその代表作である。多產な點で、またポピュラーな點で、探偵小說の普及に貢獻したことはボアゴベと同樣であるが、その取材と手法に於ては遙に淸新なものがあり、探偵小說の發達史上に意義ある地步を占める作家だと云はれてゐる。

尙ほグリインとガボリオの系統をひいた同時代の作家にファガス・ヒュームがある。その代表作「二輪馬車の秘密」は當時にあつて五十萬部以上の賣行きを示し、十九世紀末の大衆讀物の中で第一の成功を收めた小說である。

## 二

ヒュームの「二輪馬車の秘密」が出た一八八七年に、偶然にも時を

同じくして、ドイルの「深紅の糸」が出た。ドイルの出現によつて探偵小説は完成の域に入るのであるが、こゝで明治時代の日本探偵小説界を振返つて一瞥を加へるのが便宜であらう。と云ふのは、黒岩涙香氏によつて代表せらるゝ明治年代の探偵小説なるものは、ボオに始つてヒユームに至るまでの海外探偵小説の移植に過ぎないからである。

日本に紹介された最初の探偵小説は、神田孝平氏（乃武男の先考）譯の「和蘭美政錄」に收められた「楊牙兒奇談」であることは諸家の意見の一致してゐるところらしい。原作者、原名ともに明でないが、飜譯されたのが文久二年と云へば、ボオの作が出てから僅に二十年で、確に日本最古の飜譯探偵小説であらう。

それについで、何にが紹介されたか、私はさうした詮索は一向にしてゐないが、木村毅君によると饗庭篁村氏譯のボオの「黒猫」があり、内田不知庵氏にも同じ譯があり、森田思軒氏に「ピット・エンドペンヂユラム」が、山縣五十雄氏にも「黄金虫」の譯があるとのことである。ずつと下つては森鷗外氏に「モルグ街」の飜譯もあるが、年代順に云ふならば、讀賣新聞に譯載したといふ篁村氏の「黒猫」が、恐らく一番古いであらう。しかし、探偵小説の飜譯者としては、廣く外國の作品を漁つた點で、また廣い範圍の讀者をもつてゐた點で、何と云つても黒岩涙香氏を推さねばなるまい。涙香氏の飜譯については上野仙八君の熱心な研究があるが、それによると今日からしても全く敬服に値するほど多方面にわたつて作品を飜譯したもので、我々の知らない作家もかなりに多いやうである。尤もガボリオとボアゴベを主として選んだのは云ふまでもないことで、年代順に云つて都新聞に掲載された「法廷の美人」は別として、單行本となつた最初の「塔上の犯罪」が、ボアゴベの Crime on the Tower であり、翌二十一年十一月に出た「人か鬼か」がガボリオの Widow Lerouge であり、その翌二十二年の「他人の錢」が同じくガボリオの Other people's Money であり、小説飜譯の末期、明治卅八年に出て、最も世に知られた「巌窟王」までがボアゴベの作であるといふ風に、數十に上る涙香物の材料を一々點檢してゆくと、ウイルキ・コリンズから、グリン女史をはじめ、當時海外の大衆文壇を騒がした作品は殆ど漏すところなく涉獵しつくして、その傑作のみを巧みにも譯出してゐるのであつて、その炯眼と努力とは事實驚嘆に値する。それもガボリオなり、ボアゴベなりがその處女作を出したのが一八七二年から七五年で、涙香氏が「塔上の犯罪」その他に手を着けたのが明治十九年から二〇年、即ち一八八六年の前後であるから、原作が世に出てから十三四年の後であつて、今日尚ほガボリオやボアゴベの作が飜譯紹介されつゝあることを思ふと一層の敬意を表せざるを得ない。涙香と同じく探偵物の飜案を試みた人に丸亭素人と菊亭笑福とがある。素人に「探偵ルコック」の譯があるが、何と云つても探偵小説の飜譯移植に力あつたのは涙香氏で、同時に隠れたる功勞者として、森田思軒氏を推さねばならぬ。思軒氏は涙香氏よりも以上に當時の新しい海外文學を涉獵した人であ

が、ユーゴーその他主として純文學作品の紹介に努め、大衆文學の方面は涙香氏に讓つたと思はれる筋がある。涙香氏が探偵小説に手をつけるやうになつたのも、恐らく思軒氏に負ふところ少くあるまいと思ふ。

とに角、涙香氏の探偵小説飜譯は明治二十年に始り、卅八年の巖窟王に至るまで數十篇に及んでゐるが、それは要するに涙香氏の努力と譯出者としての手腕を語るもので、日本の探偵文學の發生と發達には、何等の交渉もないと見るべきであつて、記述は再び外國に還らなければならぬ。

## 三

コーナン・ドイルのホームズ物語は探偵小説の典型的作品であり、教科書である。彼はボウが築いた骨組をとり、ガボリオの手法に學んで、古い殼をすて、新しい工風をこらして、全然新しい作風を示し、精錬され淨化された標本的作品を産み出したのである。

一體、ボウに創りヒユームに至る約五十年間を假りに探偵小説發達第一期として、これを通觀してみると、無論ボウの影響が與つて力あることは云ふまでもないが、一面からすると探偵小説の上にも當時の大きな時代思潮が、重大な關係をもつてゐることは爭はれない。即ちローマンティシズムから自然主義へのあの大きな渦卷が、やはり探偵小説の發生にも、またその發達にも非常な力をもつてゐるのである。つまり理智の世界への一大轉換であつた自然主義運動の大衆文學へ向つての進出が、ボウの蒔いた種子に培つて、コリンズを生み、ガボリオを生んだと見るべきで、敢てヴィドックをまたずとも、ゾラ、ユーゴーを始め好んで人間惡の世界を描出した當時の文藝作品には、探偵的興味をもつたものが少くないことも考慮に入れる必要があらう。それだけに詩人であり、また病的とも云ふべき尖鋭な頭腦の持主であつたボウの作は別として、コリンズにしろ、ガボリオ、もしくはボアゴベにせよ、その作風には初期に於ける自然主義文學の影響が甚しく、プロットは複雜を極め描寫は精緻と云んよりも寧ろ冗漫に流れて、探偵的興味は時に傍系視されると云つた風なものが少くなかつた。それがドイルの出現と共に全然一掃されて、直截、簡勁、平滑を特徴とする近代探偵小説の新しい作風が生れたのである。

ドイルについては多くの言葉を用ひるまでもなく、むしろ彼によつて新時代を劃された探偵小説界が、その作品によつて如何なる刺激を受け、如何なる方面に新機軸を求めんとしたかを尋ねるべきであらう。

ホームズの出現についで、簇出した探偵作家の中で、先づ指を屈すべきものがアーサー・モリソンである。彼の努力は探偵小説に實在性を附與せんとした點にあつて、その主人公マルチン・ヒユイトは全能的なホームズよりも明に多分の人間味をもち、作品全體としてもかなりの現實味をもつてゐる。同じくオースチン・フリーマンの「ソ

ーンの「ソーンダイク博士」も、ホームズ物語から轉回しようとして科學探偵小說の新領土を開拓した作品である。共にドイルに刺激されて生れ出た諸多の作家の代表的なもので、前者は明察神の如きホームズの代りに實際的な法律家を以てし、後者は全然新しい科學者を案出して探偵小說の一つの殼を破らうとしたのであつた。さう云へば「紅はこべ」や「隅の老人」を以て有名なオルチー夫人が、題材をフランス革命にとつたのも歷史の方面に新展開を試みたものであり、またチエスタトンが「師父ブラウン」によつて、單なる探偵的興味以外に、宗教道德の方面から人間の犯罪性を見ようとして、犯罪そのものよりも犯罪心理の解剖に力を注いでゐる事實など、すべてドイルによつて完成された探偵小說の型を打破しようとしたものである。彼等はさうした意味で、いづれも近代探偵小說史上に特筆すべき功勞者であるが、作品全體としてはホームズ物語を凌駕するほどの成功を收めたとは云ひがたく、またそのリアリズムにおいても、ドイルよりは一步を進めたとは云へ、依然として推理と分析に主力を注ぎ、コリンズのカッフ探偵に見るが如き實在性は見られないのである。

彼等とは全然別途の方向に、新しい探偵小說を生み出して成功したものに、佛蘭西のモウリス・ルブランがある。怪盜紳士として現れ、後半犯罪搜索に從事して、驚くべき天才的推理と冒險に讀者を忘我の境に導くアルセーヌ・リューパン物語は、とも角もポピュラーな點に於て、ホームズ物に匹敵する讀物である。同じく佛蘭西に「黃色の部屋」の作者ガストン・ルルーがある。彼には「夜の秘密」、「黑衣夫人の香」等雜多の作があるが、殆ど見るべきものはなく、「黃色の部屋の秘密」のみ珠玉の如く光つてゐる。

なほ探偵作家として知られた人々に、英國にメーソン、フレッチャ、クリスチー、フィリッポット、ビーストン、ウォーレス、ハンショウがあり、米國にマッカリ、ランドン、ヴァン・ダインがあり、佛國にマシャールがあり、瑞典にドウーゼ、ヘルシルがあり、その他相當名ある作家を一々擧げ來れば三四十にも上るであらう。

で、それら現代作家の作品の傾向はどうかと云ふと、大體に於て本格派の傳統を踏んでゐることに間違ひはなく、また近代科學の影響が著しいこと等も認められるが、それよりも一層顯著な事實は、海外を探偵小說界の中心勢力をなしてゐる英米兩國作家の作風が、最近の十余年間に全然相容れざる各自の傾向をとつて來たことである。英國の作家が何處までもドイルの傳統により本格探偵小說の主流を步んでゐるに反し、ポウを生みグリインを生んだ米國の作家は、悉く低級な映畫式興味をねらつて、目まぐろしいプロットの變化を主とした通俗作品に甘んじてゐるのである。我々から云はしむれば、これは明に邪道に墮したものであるが、その由つて來るところはアメリカの生んだ近代文明の餘波であつて、安價なる刺激と興味を渇望する物質文明の中毒患者を讀者としなければならない以上、それもまた已むを得ない傾向であらう。そのアメリカに現實的確證と心理的搜索とを加

てする新味ある靑年探偵フィロ・バンスを提出したヴァン・ダインの出現は、米國の探偵文壇に對する皮肉な反抗の聲とも見られよう。

英國作家の作品に最近目につく傾向は、モリソン、フリーマン、の後を繼いだ新しい作家によつて、十九世紀後半からドイルに至る作品に多い直覺的推理をもつた論理學的犯罪搜索家が漸く影をひそめて、保守的な實際的探偵が活躍しだしたことである。曾て倫敦警視廳に樞要な地位を占めたジョージ・デルノー、さてはウイルス・クロフツ、エ・フィルディングの諸作がそれである。その主人公はいづれも在來の探偵に較べて、より人間的であり、實際的であつて、犯罪の搜索と解決に讀者をして眞に首肯せしむるものがある。かうした傾向は、探偵小說に淸新の興味と、文學的興味とを併せもたうとするので、探偵文學が當然見出すべき新しい進路であると思ふ。

## 四

海外の作品については、言ふべきことの半ばをも盡してはゐないが、後はまた他日に讓つて、今一度振返つて日本の新しい探偵文壇を瞥見しよう。

淚香氏の飜譯小說が多大の感興を呼んだ後をうけて、岡本綺堂氏の「半七捕物帳」が江湖の喝采を拍したことは人の知るところ。その半七物語の材料のそこばくが海外作品、或は支那の文獻に負ふところあるとしても、それは綺堂氏の洗練された手法と、探偵的興味の點から殆ど批推の餘地なきあの物語の價値を寸毫も傷けるものではない。ついで谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏、並に里見弴氏等の作に、當然探偵小說と呼ばるべき傑れた多くの作品があることも世間周知のことである。これら諸家の作品は直接間接に日本の探偵文學の發生と發達を促したもので、ポウの三部作以外の諸作までが探偵小說の範疇に入れられてゐると同樣、日本の探偵小說史に重要な位置を與へらるべきである。

が、日本の探偵小說界を今日の隆盛に導いた直接の功績を、過去十年間、主として海外作品の紹介につくして來た雜誌「新靑年」と、その飜譯者に歸することに、恐らく何人も異存はないであらう。世界各國の代表的作品を殆ど網羅的に飜譯し紹介した努力は、やがて眞摯な創作家の輩出を促し、僅々六七年の間に英米につく多數の作家と幾多の傑れたる作品を世に送つて、日本の大衆文壇に未だ見ざる光彩を放たしめたのは全く同誌の力である。

日本の探偵小說界を代表する一人は故小酒井不木氏であつた。博學と多才、殊に稀に見る俊敏明澄の頭腦をもつて、先づ犯罪並に犯罪文學の研究より入り、ついで自ら創作の筆をとつて珠玉の如き幾多の名篇を示し、探偵文壇の發達に寄與するところ甚大であつた。殊に氏に感謝すべき一事は、一般讀書界の探偵小說觀を啓蒙すると同時に、日本の探偵文壇を最も健全なるコースに指導したことである。その意味に於て小酒井不木氏が犯罪文學研究、並にその作品のみならず、一般

犯罪の研究によつて日本の探偵小説界を振興せしめた功績は永久に記念さるべきものである。

小酒井氏と並び稱すべき作家は、江戸川亂歩氏である。眞劍なる作家的態度と、異色に富むその作品は、日本のみならず歐米の探偵文壇にもその例を見ざるところであつて、「心理試驗」その他の傑作が、もし海外に紹介されるならば、氏は明に世界的探偵作家としての地位を與へらるゝであらう。

甲賀三郎、大下宇陀兒の兩氏は本格派を代表して第一線に立つ作家である。共に筋の構成に、特異の手腕を有し、一つは輕快の筆致をもつて、一つは流麗の文章をもつて知られてゐる。その他、平林初之輔、横溝正史、山下利三郎、夢野久作、久山秀子、水谷準、牧逸馬、橋本五郎、濱尾四郎、川田功、山本禾太郎、城昌幸氏等それ／＼特色ある天分に惠まれた多くの作家があるが、今はそれらの人々について寸評を試みる暇もない。

要するに、日本の探偵小説壇はその發生の若々しいに似ず、歐米のそれに比較して決して劣るところない健全な發達を遂げつゝある。まだ日が淺いために長篇に見るべきものが少いのは是非ないとして、短篇の方面では、海外作家の作品を凌駕するの域にまで達してゐるものも多い。日本の探偵文學がかうした隆盛に棹したのは、水先案内となつた小酒井、江戸川諸氏に負ふところ少くないは素よりとして、その主要なる素因は延原謙、妹尾韶夫、淺野玄府、田中早苗その他の有力な飜譯家諸氏によつて紹介された海外の作品が、好評となつて、探偵文學に共鳴するアマチユア作家が眞劍の努力を積んだ結果であつて、私は探偵小説愛讀者の一人として、それらの飜譯者諸氏に常に感謝を捧げる次第である。

# 新刊批評

水上瀧太郎氏著

## 『果樹』

久保田万太郎

『果樹』は「果樹」「鳩」「花束」「女事務員」「罹災者」「兇刃」「素人小說家の經驗」「命の親」「晩年」等の諸篇を收めた水上瀧太郎氏の第十一集である。

このうち「果樹」と「鳩」と「花束」とは氏の初期の作風に屬し、「女事務員」と「罹災者」と「兇刃」と「素人小說家の經驗」とは、その後氏のまへに展開されたあらたな作風に屬してゐる。すなはち「果樹」その他はあくまで純一な詩情に浸つて筆を遣つたもの、「女事務員」その他はことさらその「詩」の粉飾を捨てて、より深く、より大きな人生に直面しようとする氏の一轉機を示したものである。——「果樹」その他と同じ道をたどつたものにかつての「蟲の命」があり「邂逅」があり「喧嘩」がある。さうしてそれは、遠くかの「ぼたん」「うすごほり」に出立してゐる。「女事務員」その他と同じ道をたどつたものにかつての「勤人」があり「大阪」があり「日曜」があり「大阪の宿」がある。さうしてそれは……いふならばそれは、遠くかの「噂」「評議員會」「良緣」等に出立してゐる。決してそれは氏に來た偶然の轉機ではなかつたのである。

氏の他の、われわれ昔からの讀者を喜ばせ、且、力強く感じさせるものはつねに決してかりそめでないその「態度」である。その筆を遣る態度である。この『果樹』の場合にあつても、そこにその二つの系統の、そのそれぞれの諸篇をつらぬいてゐるたゞしい用意と深い配慮とをだれもがはツきりみ出だすであらう。——たとへば四つに組んだすまふの、あくまでさう堂々と四つに組んだ大關ずまふの、器用な小手さきのあへしらひ、みためだけに仕事をあたまで嫌つたのが氏の作のすがたである。——一つにその勝つたときのことにして、敗けた場合の寂しさのより強く感ぜられるのも重厚なその取口によつてゞある。——忌憚なくわたしはいふであらう、「果樹」と「鳩」との完成感のさういつてもつゝましいまへにいかにその「素人小說家の經驗」の失敗のあらはに眼立しいことよ……

あくまで強い正義感は、氏の、『處女作』（第一短篇集）以來の道づれである。『その春のころ』（第二短篇集）にも、『海上日記』（第四短篇集）にも、『大空の下』（第六短篇集）にも、『亞米利加記念帳』（第七短篇集）にも、さうして勿論『大阪の宿』（長篇）にも、影の形にそふの逆、むしろ形の影にそふかのやうにつねにその步みをともにして來た。ことに、その後、あらたな作風の

そこに展開されてからいよ／＼その存在はあきらかになつた。と同時に、漸くその正義感にいたはりが出來て來た。――いたづらに強いばかりでなく、うちへ矯める力のしづかに、しづかにさうして冷かに、弱いもの、はかないもの、幸うすいものゝうへにそそぐ泪はいよ／＼しげく、いくぢのないもの、だらしのないもの、未練たらしいもののへおくる嘲りのかげはいよ／＼濃くなつた。――まへのものゝいゝ例を「花束」の靜枝にみ、あとのものゝいゝ例を「罹災者」の大田原三造と「兇刄」の板倉傳太郎とにわたしはこれをみた。――わたしはいま戯れに、花束の靜枝をもつて、「うすごほり」「途すがら」以來の、氏にとつての永遠の女性とこれを呼ぶであらう。

巻末の「命の親」と「晩年」とに、わたしは、さらにまた展開するであらう氏のもう一度のあらたな作風を感じて今後の氏のいよ／＼多望、なるべきを知つた。「命の親」はしばらく措く、『晩年』の、本格すぎるほど本格の、秋の崖にしきをさへおもはせるすまふ振りの、その水のやうにしづかな作者の心もち、その大空のやうにきはまりない作者の視野。――つとにわたしの期待してゐる長篇作家水上瀧太郎の出現の、この作によつて圖らずその一歩をふみ出してゐることをみ出し、一人禁ずることの出來ない欣快をわたしは感じたのである。（東京市芝區愛宕下町改造社發行・定價貳圓）

新明正道氏著

## 「群集社會學」

松本潤一郎

六月の大氣のやうな現代ではある。霽るれば難しい陽が仰がれるであらう。霖雨。人はその內に激しい意欲にさいなまれ、際知らぬ焦燥に驅られて息づく。若し低迷する暗雲のあなたに異様の怪物の影が捕へらるるならば、それは現代社會に於ける群集に譬へられる筈である。革命と擾亂と暴動と、さてはデモンストレーション、ストライキ、此等のものゝ間を彷徨し、そこに躍動するのは群集といふ亡靈ではないか。我等はルボンが群集を以て現代を表徴する存在となしたのに同感し得る。社會狀勢を審にせんとならば、怪物「群集」の解剖學と生理學とを明にしなくては徒勞である。

本邦學者の間に從來餘り注意を喚起せずに居つた此群集といふ存在物の包括的な學的考察を企てたものが本書の內容をなす。著者は例の慧敏な把握力に訴へて問題をこなして居る。群集の概念と特徵、その組織や過程の分析から始まり、社會問題として群集の淵源の尋究、群集への對策、それの政治的關聯等を闡明する。分析や闡明は常に著者の斷案として生きて居る。之を群集社會學と題するのは、群集を單純な心理現象と見ずに、一個の社會形態と見做すからで、社會心理學的研究、卽ち所謂群集心理學を社會學の俎上にまで引上げたからである。グラハム・ヲーラスに倣て、群集心理學の題

材は再說と再吟味を要求する」と嘆じたが、新明氏は此再說を社會學的に仕遂げんとする。

テオドール・ガイゲルの群集論は假令フイアカント的にではあるが、矢張り群集を社會學的に再吟味したものであるから、本書と對照して興味を深うする。ガイゲルは群集概念を考察して、客觀性を具備する社會集團となし、革命群集などの個々の現實群集はその基層と認められる所の、否定意識を持つ「陶汰の發祥」卽ちプロレタリア大衆の表現現象と考へる。群集の本體は夫々の現實的群集ではなく、むしろその背後に潜む社會大衆であるといふのが彼の再吟味の基調であるが、新明氏のは現實群集と社會公衆とに共通するフロイド的リビドの活躍を群集的特質に擬する。其意味では精神分析學を群集研究に應用したかのマーチンに一致する觀點が本書を支配する。

著者は群集諸學說を卷末に摘要し批判するのであるから、研究者への好指針ともなるが、本書の實質は反って一般群集事象の解明からして、現代社會への一展望を提供する用意に滿ちる。その際氏の採る立場が社會學的であり、原理をフロイド說に依據せしめた事を指摘して、此書が又學的に嶄新なる企圖に出でたことを高く評價したい。（東京市本郷區切通坂町一九ロゴス書院發行・定價九十五錢）

## 新刊紹介

◆**靈華追悼畫集**（先頃惜しまれて物故した吉川靈華畫伯追悼のために關如來氏の編したもの卷首には畫伯の出世作菩提達摩より一昨年秋の畫壇に高評だつた離騷を始め、氏一代の傑作約九十圖を載せ次に畫伯の遺文數篇が輯められてある。その中の一篇「傳統の意義」を讀むと、短文ではあるが畫伯の藝術家としての高き氣魄を窺知し得ると共に、鏑木畫伯のいへる如く如何に「善き學者であり善き批評家」であつたかをはつきり知る事が出來る。卷末には平福百穗、脇本樂之軒、鏑木清方、松林桂月その他の諸氏の追憶記またとり〲に人として藝術家としての畫伯を傳へて餘蘊がない。尚本畫集賣上の一端は印稅として遺族に贈る由。四六倍判東京市下谷中清水町一五・會心舍發行・定價參圓八十錢）

◆**勞働組合法の生成と變轉―英國**（著者は序文に於て英國が勞働組合運動の祖國であり、勞働組合法に就いても最も古く且多樣な經驗を持つてゐるが故に英國を研究對象とした事を述べてゐるが、資本主義日本に於て近く必ず現實の法案の形に於て問題となるべき勞働組合法を迎へん日の爲に一讀さるべき好著である。――山中篤太郎著・東京神田區表神保町二・同文館發行・定價四圓八十錢）

**ロマノフ朝の終末**（大竹博吉監輯・ロシヤ大革命の裏面史譯選輯の第二輯で、退位前後のニコライ二世を中心にロシヤの大動亂記である。東京麴町區內幸町一ノ五・ロシヤ問

題研究所發行・定價參圓）

◆**情熱的論理**（北村兼子著・菊池寛氏が現代の才女と序文で呼んでゐる著者の近業姦通考以下才筆才藻の近代風景五十三篇を集む・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**土の精神**（山村暮鳥著・東京小石川區白山前町二四・素人社書店發行・定價貳圓）

◆**スパイクの跡**（人見絹枝著・國寶的選手人見女史のスポーツ界に志を立てゝからの自傳であり戰ひの歴史である・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**原阿佐緒抒情歌集**（原阿佐緒著・東京麹町區下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓八十錢）

◆**永井ゑい子詩文**（永井元編・米國サンフランシスコ市ポスト街六八五永井元氏發行・一三四六頁に亘る大部の遺稿集・非賣品）

◆**議政壇上を直視して**（渡邊貫知郎著・東京府下蒲田町御園二二四・普選徹底會出版部發行・定價壹圓五十錢）

◆**緑玉冠事件**（コナンドイル作・橋谷正雄譯註・東京神田表神保町一・健文社發行・五十錢）

◆**リンカーン**（內ヶ崎作三郎著・リンカーン誕生百二十年祭記念修補改版寫眞八葉入・東京京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**グラッドストン**（永井柳太郎著・東京京橋南紺屋町十二・實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**在京朝鮮人勞働者の現狀**（東京府學務部社會課編・社會調查資料第七輯）

◆**性教育**（山本宣治著・全八卷山本宣治全集の第三卷）**性と社會**（同上第四卷）（本全集は一般の豫約出版と異なり各卷自由購讀の便あり、高倉輝、安田德太郎兩氏の編輯で倉田白羊氏の裝幀、四六判四二四頁、背革の氣持のいい書物、性及び性教育に關心をもつ人の必讀書・東京本郷區湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行定價壹圓八十錢）

◆**哲學序說**（木村秀吉著・現代哲學のもつ重要なる諸問題の全姿相を解說論述しつゝ哲學が人間生活の上にもつ實踐的な價値と意義を明白にすべく努めつゝ講述した頗警なる哲學概論。――東京市本郷區眞砂町一五文書堂出版・定價參圓參十錢）

◆**詩集野**（木山捷平著・東京小石川區白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價八十錢）

◆**Voici ce qu'on a fait de la Georgie**（Henri Barbusse アンリ・バルビユス著・Ernest Flamarion, Editeur. 26, Rue Racine, Paris 巴里エルネスト・フラマリオン社發行・定價十二フラン）

# 新刊書讀餘錄

福田徳三

近來ブック・ルヴユーと云ふことが、可なり盛んになつて來た。これは甚だ賀すべきことである。日本では新刊書は必ず新聞廣告をすることになつて居るが、歐羅巴では其れは殆んど見當らぬ。其代りブック・ルヴユーが盛んで、讀書子のよき相談相手となる。此頃は日刊新聞中其れを試むるものが、殖へて來た。就中讀賣新聞が、眞の善い意味で、其れをやつてゐる。廣告部の掣肘を受けないで、而して然る可き專攻の人の手に成る評論を多くのせてゐる。其姉妹誌とも見るべきものに『ブック・マン』と云ふ雜誌が出來、年に一回か二回、更らに其新刊欄を一括して新刊書の總目錄を發行してゐる。發行所は、池袋の圖書研究會で、發賣店は、たしか岩波書店であつた。これは、讀書子に取りて便利調法此上ないもので、内務省へ納本された限りの新刊書を悉く網羅してある。又、此れに洩れた諸官廳發行の出版物は、官廳刊行圖書目錄と題するものが、印刷局から刊行されて、すでに二册計り出てゐる。此二つさへあれば、先以て我邦の新刊書の全體を一目の下に知り得るわけである。其外に出版業組合の編纂刊行する總目錄があるが、これは少し後れるから、矢張り圖書研究會出版の目錄の方が一般讀書子には便利であらう。(會社銀行其他の團體の非賣品の出版物については、また此便が具つて居らぬは殘念なことである。)

吉野博士は、嘗て中央公論で、新刊書の批評をされたことがあり、我々は大いに參考の便を得たことである。此頃は中央公論を見ぬから、其れが繼續されてゐるや否や知らぬ。私は迚も吉野博士の樣に博覽强記でないから、其眞似は企てゝも及ばぬことであるが、此頃所々の新聞社、雜誌社などから推薦に値する書物についての問合に接するが、一々答書を差出す暇を見出さない。ソコデ「思ひ付いて、近頃讀過した新刊書の中、讀書子に推薦したいと思ふもの若干について、批評とか紹介とか云ふ程の者でなく、ほんの讀後の感想を雜談的に書き綴つて見た。『改造』では時々これを掲げて與れるとのことであるから、草稿の一部分に若干朱を入れて、茲に差出すこととした。殘りの部分も或は追つて掲げて貰ふかも知れない。先年物故した、ジョージ・アンウヰン氏は、『其れについて、何か薦むるに足ることある書物にあらざれは、決して評論』せざることを主義とすと公言してゐた。私の此文も、先づ其心持で綴つたものである。

## (一) 總選擧讀本(普通總選擧の第一回)

藤澤利喜太郎著(岩波書店發行)

此書は、昭和三年二月二十日に行はれた我邦始めての普選による總選擧の結果を統計的に研究するを目的としたとは、著者の自ら云ふところであるが、單なる統計研究のみに止まらず、選擧制度に關するあらゆる問題を、極めて分りよく、而も、精密に取扱つてゐる。著者が種々勘考の結果、書名を『讀本』としたのは、内容を讀まない內は、或は例の流行を追ふものではないかとの邪推を起させるかも知れぬが、全篇を一讀過すれば、其題名の如何にも自然的に而して恰好なることを見出さゞるを得ない。第一節には、我邦に於ける普選法成立の經過を叙述してゐるが、其れは乾燥無味な經過列擧表でなく、選擧法の根本問題の重要なものについて說明を加へて、其れらの問題が、我普選法に於いて、如何解決せられたかの經過を叙し、更らに、其利害得失を、公平な立場から批判を加へつゝ、叙述の筆を進めてある。『讀本』の名は、此一節だけについても、すでに、內容を現はすに最も適切なものと感じた。甚だ御恥しい話であるが、私自身此一節に叙述してあることの半以上は、此書によつて初めてこれを學んだのである。僅か五十餘頁の一節であるが、著者の叙述の如何にも平明簡潔で而も要領を壓搾して殆んどすべての問題を網羅してあるが爲め、此節を讀んだ人は、必ず卷末まで讀み續けざるを得なくなる。著者の立場は、極めて公平であるが、其れは、決して無味、無色と云ふ意ではない。著者は徹底した普選論者であり、否比例代表法に關する熱心なる研究者であり、而して、其政治上の意見は、——私は、玆に、案外にもと云ふ添語を許して頂きたいと思ふ——極めて進步的なデモクラチックなものであるのである。私は、色々な機會に於いて、著者とは、公的に、學問的には交際はしてゐるが、まだ一度も、私的會話を交はしたことなく、唯漠然たる感想で、著者を、普通の意味で我邦數學の大先輩にして、統計學開拓の先驅者、貨幣制度についての豐富なる意見の保持者とのみ思つてゐた。然るに、此讀本を讀んで、著者の案外にも、意外にも、甚だ徹底したデモクラットたること、而して、其デモクラシーは我々の樣な漠然たるものでなく、一々實證的に具體的に、就中選擧法の上について、丹念に商量せられたものなるを知つて、實は驚いたのである。著者は我が小野塚、美濃部兩博士と、寸分異らざる意味に於いての——少くとも、選擧法の上に於いては——進步的論者である。而も著者は、唯だ議論をする計りでない、其主張、其抱負を、着々として、我邦の實狀の上に實現せんとする熱心の漲り溢れたる、其點に於いては、或は、小野塚、美濃部兩博士を凌ぐかの慨を此讀本の隨處に示してゐるに至つて、私は私の驚きを更めて高めざるを得なかつた。

第二節以下は、第一節の出立點の上に立つて、貧困缺格條項、基本資料、總選擧の結果の批判、黨派別的票數、選擧干涉の統計的研究を數節に分つて、叙述——といふより、むしろ、論述——し、最後に、第七

節に至つて、我が代議政治の進趨を論じてゐる。

第七節の初めに、『二大政黨の妖夢』と云ふ一項がある。曰く『我が邦に於ける政治的觀察を誤らしむる重なる原因は二大政黨對立の幻想である』と。私は私の目を疑つた。何となれば、二大政黨對立論は、デモクラットの常套語の如くであるのに、今や其のデモクラットたること寸分の疑ない著者が、此の斷言を敢てするは、案外千萬なことであるから。而して、其れは、私から見れば、實は眞に徹底したデモクラットの主張其ものであるから。私は明治三十八年から約十五年間慶大の御情けを蒙つて辛ふじて生きてゐた。しかし、私が最も不快に感じたことは、鎌田塾長の二大政黨對立論を何十回となく拜聽せざるを得ざることこれであつた。塾長の地方講演は何處も、官學私學併存の功能論で、其例として、日本からは赤穗義士の始末について、官學者の愚論に對抗した、私學者の正論——義士に死を賜ふ可し云ふの——の例と、西洋からは、イギリスの二大政黨の御利役論であつた。陛下の政府と、陛下の反對黨との二大黨の對立、これがイギリスの政治の世界に冠たる所以である。其の如く、學問界にも、官學と私學とは二大分派と對立せさる可からず云々と云ふのが、前後五六十回、私が聞かされた御談義であつた。私は、實に馬鹿々々しいことと思つた。ソコデ明治四十年頃であつたか、慶大の講演會で、『二大政黨對立の愚論』と云ふ講演を敢てした。其以來色々な機會で、保守、自由對立の英國の政界は、必ず變化する、而も遠からず根本的に飜されると斷言しつゝあつた。今此書の著者の口から同樣のことを聞く、私は實に驚かざるを得なかつたのである。

此書の中から、痛快な文句を引用しようとなれば、其れは實に限りなくある。其一例をあげよう。『學校教育を卒へた後に、富豪の婿となつて時めく暖衣飽食の徒には、選擧權があり、就職難の深淵に呻吟し、具さに生活難の辛酸を嘗めつゝある貧乏人は先づ以て公私の救恤を受けてゐるや否や、其の身元調を受けざれば、選擧權の有無が判然しないとは、如何にも、悲慘な矛盾である』（六一頁）

『然るに何事ぞ、此の良好なる結果を無視し、幾多弊害の記臆尙は新なる小選擧區制へ逆戻せんと主張するが如き、咄々怪事』『一種の小刀細工によつて作爲的に之を否定せんとし、……恰も治承の昔、淨海入道が入り日を麾いたのと同一の暴逆的心理を暴露するものである』（二二四——二二五頁）

『小選擧區還元によつて、一時的に無產黨の進出を阻止せんとするが如きは、偶ゝ多年間議會非認論を誘起する危險を孕む、國家永遠の生命から見れば、菜の花に戲る蝶の如きものである。』（二四九頁）

此書の最重要な內容を爲す第一回普選の統計的研究と調査とについては、元より、私の冗言を容るゝを須たぬ。實に限りなき

豐富な資料が滿載されゐて、而して、其れは、何れの事項についても、單なる統計の記述でなく、活きた事實を其活きた姿に於いて、我々の眼の前に活動せしめてゐて、平々坦々たる事實の物語りの中に、著者の熱烈なる主張、卓越した抱負が織り込まれてゐる。如何な粗末な讀み方をするものでも此書に對しては、卷末まで倦怠を覺ゆることは、決してないと信ずる。

私は從來衆議院議員の立候補應援に屢々參加したことがある。此頃は、府會や町會の其れにも興味を有つ樣になつた。然るにも拘らず、實は選擧制度については、殆んど何物をも知らなかつた。今此書を讀んで慚汗背を沾すと共に、此書を便りとして、今後は、少しでも、此の問題に思を潜めねばならぬことを痛感した。少くとも、此讀本一冊丈けは、苟くも選擧權を行使するものは、必ず一讀して置かねばならぬ。繰返して云ふ、『選擧讀本』なる名は、此書に題するに、此上なき適當なものである。私は、これが藤澤博士の著であるから、斯く言ふのではない。此書が他の誰人の、――全く未知無名の人の――筆に成るものであつても、此內容を備へたものならば、私は必ず言はんと欲する。此書は、萬人必讀の讀本であると。唯だ其の目的の爲めには、此書の定價は高きに過ぐ、モット細字にくみて、頁數を減じ、手頃の本としたら、後藤新平氏の『政治の倫理化』ぐらゐの程度に普及するであらう。否、必ず普及せしめねばならぬ。殊に府會や町會の選擧にさへ、出勤時間を心配しつゝ投票場へ蝟集して、おとなしく順番を待つサラリーマン、印絆纏にゲートールをつけて、手に入場證をつかんで巡査の叱言に腹も立てずに立ち暮らす勞働者諸君と、朝の一時間二時間を空費させられる樣になつた此頃、私は、自分に力があるなら、此書一本づゝを、其れらの人々へ進呈したいと念ぜざるを得ざるものである。

## (二) 民法原論第三卷

## 債權總論上

富井政章著（有斐閣發行）

藤澤博士の書は、云はゞ傑拔に屬するものと云へよう。其れにしても他の學者が、恩給に倚食逸居して居る間に、右の如き力作を出されたことに驚いた私は、更らに富井博士の此の新著に接して、驚異の念を高めざるを得ない。我々は、必ずしも怠けてはゐないつもりであつたが、富井博士の高齡を以てして、而して、蒲柳の質、永年の宿痾に惱んでゐる人に、其專門の學科について、此新刊あることを見て、我々は一には愧ぢ、一には奮發心を著しく刺戟せられざるを得ぬ。

債權の問題は、民法中でも、私共に關係の深いものであるだけ、私に一と丹念に各章節を辿つて熟讀した。博士の民法原論第一、二の兩卷は私共が民法について、眞に熟讀した最初の邦文の書物であつて、當時すでに、其文章の簡潔、其論述の森嚴、一字

一句を苟くもせず、含蓄の甚だ深いものなるに敬服したものである。私共の樣に、極僅かしか法律の書物を讀まぬものには、普通の純法律書はとても全篇を通讀する忍耐を有ち能はぬ。要所〻〻を飛讀にする以上には、殆んど出來兼ぬることである。正直なことを申せば、邦文の法律書で、私が全篇を通讀したのは、學生時代には、江木衷氏の民法論ぐらゐのものであり、其後には岡松參太郎博士の無過失損害賠償論と牧野英一博士の諸著──但し刑法を除く──ぐらゐのものにすぎない。此頃は、勝本氏、小町谷氏、岩田氏、孫田氏、穗積氏の諸著ありて、此れらは、飛讀みするに忍びないものである。尤も、老穗積博士の諸著、宮崎博士の諸論文、其れらは、一字一句を暗ずるほど讀んだが、其れは普通の意味にての法律書と云はんより、より大なる意味にての法律文化學の書である。また美濃部、小野塚、中田諸氏の著作や論文も、大抵は讀むが、何れも、法律書と云ふつもりでない、もつと廣い意味に於てゞある。

然るに今富井博士の債權總論は最も嚴密の意にての法律書であり、而して、右擧げた諸學者の著作とは、文體の上に於いても著しく異るものである。然るにも拘らず、私は全篇二百七十二頁を一氣に讀過し、更らに亦た初めに戻つて再び讀み直して、節毎にノートを取りつゝ考一考を加へて行つた。何となれば、此書は、唯一回讀過して架上に積み上ぐるには、餘りに惜しいものであるから。

著者の議論には、私は勘からざる──否、殆んど各項に渉つて──異存を惹き起すことなくして、已み能はなかつた。殊に、金錢債權、就中利息、損害賠償債權、就中責任原因と因果原因などについては、私は經濟學研究者の立場から、著者の說に追從することが、如何しても出來ないものである。其れと共に、自分の有つてゐた今迄の考の如何にも、粗末千萬なものであることを、深く反省せしめられた。從つて今玆に異論などを申述べる勇氣は全くない。向後篤と考へる出立點を此書に置く必要を痛感したのである。

## （三）日本國體論（日本評論社發行）
## 日本民族論（日本評論社發行）
## 日本人口論（巖松堂發行）

永井亨著

永井博士は、或意味にては、實に珍らしい學界の掘出物である。而して、數ある博士の著述中玆に掲げた三部作──私は敢て左樣云ふ──こそ、近來の出版物中の掘出物であらう。其中でも、日本國體論は、書題だけを見ると、例のカビ臭いものらしく考へられようが、內容は、全く此の感想を裏切るものである。何となれば、其れは極めて大膽な、乍併亦た同時に極めて穩健な議論を

平々坦々たる筆路の上に展開してゐるものであるから。

元より、マルキストなどから見たら、其議論は如何にも生温い、或はタイム・サーヴヰングのものとも云へよう。しかし、著者の態度には、回避の跡は一點も見出されない。著者は、衷心から、其議論を考へて考へて考へ拔いたものであらう。其れも單に頭で考へたに止らない。著者は、其燃ゆる心を以て感じ、悟り、憤り、喜びつゝ考へに考へ拔いたものであらう。其れでなくては彼の大膽さは出て來ない。其れと共に、著者は其の鋭い頭を極度まで働かせた。其れでなくては、彼の愼重さは、迚も眞似られるものではない。

日本民族論は、右書よりは、少しく、すべての點に於いて劣つてゐる。しかし、其れは、日本人口論への一のプロローグとして見るときは――其れが著者の欲するところであるか、否か、私は知らないが――成程と首肯し得られる節が澤山に見出される。

日本人口論こそ、著者最得意の題目であらう。日本人口論については、高田、河上、兩博士の論戰あり、那須博士の著あり、其他實に多數の人口論策を以て、我々は惠まれてゐる。去乍、私を以て見れば、永井博士の此書のみが、眞に問題の肯綮に觸れた唯一のものである。私は、日本人口論については必ずしも、著者と同一の考を有つてゐるものではない。否現に人口食糧問題調査會に於いては、最も多くの論戰は、著者と私との間に交はされてゐるのである。然るにも拘らず、私は著者の此書を以て、日本人口論に關する唯一の眞正なる研究を滿載したものなるを斷言して憚らないものである。

## (四) リカルドウの價値論及其批判史

堀經夫著（岩波書店發行）

此書に就いては、別文に簡單に述べてあるから、蛇足を添ふる必要はないが、私は、此書を得て、日本の經濟學研究、必ずしも西洋の後塵を拜するものでない有力の左券を得たことを喜ばざるを得ないものである。

著者の態度には、衒學的なところが毛頭微塵も見出せない。これは、實に珍らしいことである。私如きは、此書に接して、年甲斐――少くとも、我が經濟學については――もない自分の衒學癖――自分は決して衒つた覺はないが、人に云はれて見れば、一言も辯疏する餘地はない――に、穴にも入りたく覺ゆる。更らに又た、著者は、あらゆる文獻を周到細密に商量考證したにも拘らず、些にても所謂考證家臭い跡を示して居らぬ。就中、著者は、端的にリカルドと其批判者との著書其ものに肉薄し、實に痛ましい程、綿密に、仔細に、其議論について考へて考へて考へ拔いた。此れは、學問の批判としては、實に恐る可き態度である。天下無敵である。私共は一學說を評論しようとするときは、原著以外、其關係文獻の商量に大半の力を消耗して仕舞ひ、肝腎の著者其

ものゝ商量には、却つて手溜となる悪習慣の爲めに、年來惱まされてゐる。著者は、此悪習を決然と一蹴して起つた。其英姿は、私共の老眼にも、如何にも水際立つて雄々しく映ずる。

私は、著者が此書を外國文に譯出して汎く世界の學界に問はれんことを切望する。私が此くの如きことを云ふは、故左右田博士の一論文についてを除くの外は始めてのことである。

## (五) 貨幣概論

山崎覺次郎著（日本評論社發行）

貨幣の概念、種類及特質、職能、貨幣制度、貨幣の數量、貨幣の價値、同對外價値の六章から成り、別に附錄として法規、統計等を添へてある。四十年に近い學究生活の云はゞ總勘定錄と見るべきもの、一章一節悉く推敲に推敲を重ねたもので、其點からは、富井博士の民法原論と一對を成すものとも云ひ得られよう。唯だ彼者は、形は學生用なるが如くにして、其實は、一の純學問的の書であるに反し、山崎博士の此書は、形も内容も學生用のものである。而も若年の學生を目的とするものでなく、老書生を主たる目的とするものであることは、十二行三十字と云ふ、極めて贅澤な印刷振りがこれを示してゐる。全篇百二十八頁、これを此頃の圓本型に組み込めば、恐らく二三十頁のものに壓搾されて、仕舞ふであらう其れで定價一圓八十錢とは、近來珍らしい餘裕に富んだ出版物である。（尤も附錄は細字で入れてある。）

著者の議論は、終始一貫して、實に穩健其ものである。從つて此書は、オルソドックス貨幣理論の金科玉條である。誰人が讀んでも、寸毫の差支ない、而して誰人も、必ず一應は首肯せざるを得ざる議論のみを載せてある。尤も、著者は、或程度までは「カルタル・テオリー」を採用されたこともあるが、此書には、其れも極めて穩健な姿に於いて述べられてゐるから、其說の創始者クナップ、否其布演者ベンデクセンについて非難せられた様な危險性は、些もこれを見出すことは出來ない。

著者の其昔し公にした論文には、極めて謙遜な態度を以てではあるが、しかし、確信に充ちた獨自の創說が往々にして、含まれてゐる。カルタル・テオリーについて許りでなく、對內、對外な兩價値についても、又問題は少し外へ出るが、購買力平價說についても、更らに、兌換制度については殊に著しく、左様であつた。然るに本書には、其昔しを知らぬ人にも氣の付く程度には、其れらは現はれてゐない。著者の老獪圓熟の姿は、斯くして、遺憾なく此の一書に示されてゐる。其れと共に、研究者たる其の面目は茲には、著しく其影を薄くしてあることは、爭ふことは出來ない。其れは、やがて、我々皆のものが、追從すべき道程であることを、著者は、此一書に於いて示されたものであらう。（四・六・八）




# 一筋の道を歩む者

吉田絃二郎

元、伊太利の牧者たちが吹いた樂器だといふことだが ocarina といふきはめて簡單な樂器がある。形が鵞鳥に似てゐるので oca（鵞鳥）から來た名だといふことである。terra-cotta で作つたものらしいが、ちよつと見たところでは鐵ででも作つたやうに眞つ黑で非常に堅い感じがする。大地震のころであつた、あの地震に燒け出された一友人が、その ocarina だけはポケットに入れてゐて、燒け出されの男とも思へぬほど暢然たる風貌でよく ocarina を吹いてゐた。鵞鳥の脚に當るところが歌口になつてゐて、その翼にあたるところに指を當てるべき幾つかの孔が並んで明いてゐる。

ocarina は直に日本の素燒の鳩を聯想させた。今日でも田舍に行つたら恐らく昔のまゝの素燒の鳩が見出されるであらうが、わたくしたちの子供時代には道ばたの店頭によく並べられてゐたものである。頭と翅だけは胡粉や赤い繪具などをほんの一刷毛だけさつと塗つてあつたが、全體は赭土のまゝで、尻の方の孔に口を當てゝ吹けは、ちよつと甘酸つぱいやうな變な土の香がしたものである。子供たちはででつぽう、ででつぽうと森の青鳩の眞似して吹いたものである。

ocarina を吹く聲を聽いた時、わたくしはふたたびわれ〳〵の田園の土の鳩を思ひ出した。

ででつぽう、ででつぽう……きはめて單調な聲である。リズムといふものを感ずることすらもできないほどの短い音である。しかも眼をつむつて土の鳩を思へば、三十幾年前のわたくし自身の環境がよみかへつて來る。三十幾年前の田園の姿が、草が、木が、白雲が、さながらに泛んで來る。土鳩の聲の單調そのものゝごとき metre のなかに何といふ懷郷、憂愁、悠久、寂寞がこめられてあることだ。靜かにも靜かな、虔しやかな土の聲、故郷の土の聲、日本そのものゝ土の聲がそこから漂ふて來る。

terra-cotta で作られた ocarina は恐らく伊太利の土の聲を傳へてゐるものであらう。ocarina は日本の土の鳩よりもその構造に於いても複雑である。日本の土の鳩は尻の方の孔から息を吹き込むだけになつてゐるが、伊太利の ocarina は歌口を附けるために、鵞鳥の脚にあたる部分を特に作り足してある。それから指を當てるための孔が數個あり、したがつていろ／＼な歌に合せて吹くことができる。ともかく簡單ながら一つの樂器である。ocarina に比べると日本の土の鳩はただ、ででつぽうでゞつぽうといふ青鳩の聲だけのものである。無論樂器ではなく、どこまでも子供の玩具である。

伊太利の土の鵞鳥は技巧を持つてゐる。變化を持つてゐる。その時その折につれて甲の聲を出すこともできれば乙の聲を出すこともできる。恐らく南歐の菩提樹の下の若い牧人たちの脣にあてられては戀の歌をうたふこともできるであらう。そこに行くと日本の土の鳩ははなはだ無器用である。どこまでも四つ五つの子供の玩具であり、焦つても躁つてもででつぽうでゞつぽうといふ青鳩の鳴き眞似をするより他に何の能もない。

伊太利の土の鵞鳥はおしやべりである。

日本の土の鳩は能なしである。

伊太利の土の鵞鳥は terra-cotta であり、日本の土の鳩はたゞの素燒である。terra-cotta は日本の素燒にくらべては堅い感じがする。ocarina と土の鳩の感じはまさに伊太利の terra-cotta と日本の素燒の堅さ柔かさの感じである。日本の土の鳩はあたたかいが、伊太利の terra-cotta の鵞鳥は冷たい。

わたくしは數年前日本に來てゐたリイチが燒いた小さな壺を時々戸棚の中から出して見るが、どうも日本人の作つた壺ほど柔かでない。英吉利に歸つてからは燃料にも困つてゐて、何でも大分遠い田舍から山の木を伐り倒して殘つた木の根株などを汽車で運んで焚いてゐるといふ噂なども聽いたが、日本的、東洋的なものをもとめてゐたリイチの作品も英吉利に歸れば日一日と一層英吉利人的に還元してゆく。結局東人は東人、西人は西人に還らなければならぬ。

伊太利の terra-cotta の鵞鳥が日本の鳩より賢くとも、技巧的であらうとも、敏感であらうとも、わたくしにとつては鈍感な、無技巧的な一本調子のあはれなる日本の土の鳩がなつかしい。日本の鳩の方が遙かにわれ／＼自身に近いものを持つてゐることに氣付く。

十五六のころは親の膝下から離れて學校の寄宿舍にはいつてゐた。そのころは親と別々にゐなければならぬくらゐなら、乞食をしてもいいから學校なんか止めて親のところに歸つて行きたいと思つた。二十代になると時として父への叛逆を思ふやうになつた。故郷への叛逆者ともなつた。ところでこのころになると妙に故郷といふものが懷かしくなつて來た。時間的にいへば故郷に住んでゐた時間よりは、東京へ住んでゐる時間の方が長くなるが、故郷といふものゝ力が日一日と强く後からわたくしの魂を引きつけてゐるやうな氣がする。いかにも

微妙な力である。わたくしがまだ生まれない以前からわたくしの魂のなかに巣喰うてゐた故郷といふもの丶蠱惑が、現在のわたくしの裡に眼をさまして來たといふのか。

土の鳩の聲をなつかしむ心が三十幾年振で、現在のわたくしの魂の底に頭をもたげかけてゐる。

三十幾年前の日がよみがへつて來る。胸苦しいほどに。

土の鳩を買つて貰ふ。山の赤土そのまゝの鳩である。窯のなかから取り出されたばかりの松薪の香がする。土の鳩の尻に唇を當てると乾き切つてゐる素燒の肌はわたくしの唇に痛いほどに吸ひついてしまふ。同時に焦けた甘酸つぱいやうな赤土の香が子供心にも不思議なわびしさを喚び起す。

あのころ土の鳩を拵へてゐた男たちも死んでしまつたであらう。そして子供等の手から捨てられた土の鳩とともに靜かに故郷の土に還つてしまつたであらう。土の鳩を買つてくれた父も故郷の土に還つてしまつた。

故郷の土に還るといふことは、このころのわたくしには宗教以上の安心をあたへてくれるやうな氣がする。

伊太利の terra-cotta は伊太利の土である。伊太利の土はどうしても冷たい。堅い。わたくしの魂の安息所ではない。

土の鳩は日本の土である。土の鳩とならば一緒に土に還つてゆくのはむしろなつかしい。故郷の土が、故郷の父の墓がいつもわたくしの背後からわたくしの魂を不思議な絲で手繰つてゐる。一年また一年と故郷の土が戀ひしくなる。

わびにわび、生きに生きてやがて疲れ切つて死ぬであらう時、われわれを靜かに眠らせてくれる故郷の土を思ふだけでも瞼がほてるやうな感じを覺えるやうになつた。土といふものが人間の魂を惹きつけてゐる力の強さはまつたく恐ろしい。土の鳩の聲のごとくいかにも靜かであり、虔しやかであり、單調であるが、そは一度は一切をかの女の懷に引き戻さないでは置かぬほどの執念さを持つてゐる。なつかしくもあるが、その暗い底力を想像すれば恐ろしいほどだ。

日本の文學そのものが明治大正を通じて terra-cotta の上に踊り過ぎてはゐなかつたか。ocarina の冷たい、堅い、硬い、簡單な、そしてどこまでも自分等のものでない諧律に合はせてうたつてゐたのではなかつたか。もし現代の文學界に行き詰りがあり、疲勞があるとするならばそれは新らしき方向への轉換もさることながら、さらに一層日本の土自身に還らんとする一歩前の佇立であらしめたい。

農民に還れ、土に還れといふ言葉のうちには、その根柢に於いてわれ〱の祖國そのものゝ歷史に還れ、祖國の土に還れといふ民族的な自覺、民族的な矜持、民族的な意識が潜められてゐるのではないか? 階級的思想のさらに奧にわれ〱の魂に一層强く喚びかける新らしい力が醱酵しかけてゐるのではないか。

かつて叛逆せられたる郷土、かつて捨てゝかへり見られなかつた

れ〳〵の郷土、われ〳〵の祖國の歷史は今われ〳〵に喚びかけてゐるではないか……。ocarina の諧律に踴つてゐる都會人的環境を破壞するために。そこに住み、そこに醉ひ、そこに享樂しつゝある腐敗な歪になつた人間の魂と、sincerity を失つた、思ひ上つた藝術を破壞するために。

×

文藝史上に於ける、外國文學の影響は明治大正を通じてまことに著しいものであつた。わたくしたちはかなり久しい間その目まぐるしい渦卷のなかに放り出されてゐた。まつたくあわたゞしい暴風雨時代であつた。しかも文藝上の暴風雨は一吹き吹いたところで、少かの間を置いてはさらに新らしい方向と力と速さを以て吹きつけて來た。たしかにわたくしたちの時代の作家たちは幾つかの暴風雨に逢ひ、さらに幾つかの暴風雨に打ちのめさるべき宿命の下に置かれてある。

さてそれ等の暴風雨のなかに置かれ、暴風雨を感じ、叩かれ、痛められて、或ひは不出した後の自分自身を考へて見るに、十年一日のごとく一つの靜かな窓から人生を凝視し、瞑想し、絕望し、翹望し、氣鬱し、或る時は諦悟し、或る時はさらに疑惑し、低徊してゐるのみである。

一本の指を外から見る。滿足もしないで皮を剝く、肉を切る。さらに骨を削り、髓を切り心を剖く。遺されたるものは無そのものである。憂鬱である。吐息である。あきらめである。絕望である。

しかしこのやうな人生の行方、人生の生き方或ひは經驗は、決して無駄ではなかつた。かつては伊太利の若き寺院畫家たちの藝術的良心となつて動いてゐたラファエル前派の sincerity、つゞいては英吉利に於けるロゼッチ一派の同名の文學運動に見出さるゝ sincerity はわたくしたちの文學運動の第一の收穫であつた。そしていつも文學運動の根本的な力として動いてゐた。かつては羅馬やフロレンスの町々に於ける寺院畫家たちの神への跪拜であつた sincerity がわれ〳〵の時代にありては人間への跪拜となつたにせよ、sincerity はやはり運動の中心となつて生きてゐた。

すべての藝術家にとりて一番恐ろしいことはかれが賢明でないといふことでなくて、かれが sincerity を失ふといふことである。自分自身への sincerity を失つて、人間へ對しての sincerity を忘れて、時代を追つかけようとすることは恐ろしい誘惑である。

黑い法衣の上に荒繩を結んで羅馬やフロレンスの寺々の壁畫を描いてゐたP・R・Bの畫家たちの眞率さと生一本さはいつの時代の藝術家をも生かす。英吉利に於けるP・R・Bの詩人たちの藝術を生かしたやうに。sincerity は知識以上であり、賢明さ以上である。

一つの運動の先驅者となつて新らしい時代を切り拓いてゆくといふことはまことに男性としての快心事であるにちがひない。しかしそれと同時に餘りに表面的に、あまりに無雜作に看過されてしまつた過去に對してなほ靜かな觀察と思索と凝視とを惜しまないところの眞率も

亦弾破せられなければならぬ。

たとへばイブセンを論ずること、ストリンドベルクを云々することが今日の社會に於いてはすでに時代遅れであるかのやうに考へられてゐる。トルストイやドストエフスキイの總決算がすでに果されたかのやうに見做されてゐる。しかし有體にいつてわたくしはなほイブセンのブランドにも、ロスメルス・ホルムにも魂を動かされる。ストリンドベルクの「死の舞踏」にも現代の何れの戯曲にもまして深い感激を見出す。

或ひは愛蘭土の劇文學に對しても同樣なことを告白することができる。

これ等の古典的文藝はいかにも大まかな線描の底に魂の安息と無限性とを内包してゐる。そこではたとへばイブセンやストリンドベルクに見出さるゝ懊惱すらが象徴の霧幕によりて柔かなフオーカスを形作つてゐる。

しかしてこれ等の文藝がわたくしの魂をほとんど病的にまで惹きつけて置く魅力はかれ等に共通な象徴の蒼白き夢であり、北方民族共通の憂鬱な眼である。

×

二三年前の秋であつた。わたくしはそのころ信濃の沓掛にゐた。淺間の高原は日も日も暗鬱な雲と、冷たい霧にとざされはじめてゐた。避暑の都會人たちもすつかり歸つてしまつて、後には夏の間だけ都會人の別莊に飼はれてゐた仔犬が捨てられて、あらしの後のやうな森閑とした別莊地をうろつき廻つてゐたりした。別莊地の都會人たちはかれ等の子供等の遊び對手に別莊地附近の農家から仔犬を買つて來る。仔犬は夏の間別莊の子供等の玩具がはりになつてゐる。かれ等が都會に歸る時仔犬は容赦もなく荒野の中に捨てられる。

高い山の上に冬を越す別莊地番人の家が一軒殘つてゐるだけで、人といつては一日に一度か二度沓掛から淺間の山腹を傳ふて六里ヶ原を横切る旅人を見るくらゐのことで、捨てられた仔犬はやがて芒の原の中に凍死するより他はない。わたくしは散歩のたんびに落葉松の林のなかや、芒の野径のなかで捨てられた仔犬に逢つた。仔犬は人懐しさに七丁でも八丁でも跟いて來た。わたくしはそのやうな時よく詩人バアンズのことを思ひ出した。都會人に對する憤りをさへ感じた。

日暮れころであつた。わたくしは淺間の腰をめぐつて六里ヶ原に通ずる山径を沓掛の方へ歩いて來る途中で金剛杖を突き、油桐紙につゝんだ行李を背負つて、いかにも旅馴れた足取りで淺間の方へ登つてゆく一人の老人を見た。背が高く、老人とは思はれぬほどがつしりと引きしまつた筋肉をしてゐた。ちよつと聲をかけて見ようとも思つたが、老人の風貌があまりに寂然としてゐたので、聲をかけるのさへ躊躇しなければならなかつた。

八ヶ嶽も淺間も眞つ暗な雨雲につゝまれてしまつて、まつたく山は凄いほどの嵐の氣合をみなぎらしてゐた。暗い雲は西に裂かれ、北に

引きちぎられ、蹴落され、捲ち上げられ、暗い大空そのものが今にも襲ひ来るであらう大暴風雨におびえ切つてゐるやうな夕暮れの山徑を老人は歩一歩踏みしめて登つて行つた。いかにも力強く踏みしめて。

わたくしは二三度振りかへつて老人を見た。かれは振りかへりもせず暗憺たる山風の中を山を登つて行つた。金剛杖の先に結びつけた鈴の音が時折り風鈴の音のごとくしづかに疾風のなかを響いて來た。

無論もうそのころは淺間に登る季節でもなく、時間からいつても淺間に登る時刻でもなかつた。かれは六里ヶ原を突つ切つて草津あたりへ行く人にちがひない。その長い山徑の間には淺間の山腹の峰の茶屋と、六里ヶ原の凋落の茶屋くらゐなもので、別には人家といふものはない。どうして今夜の嵐を避けるつもりであらう。どうして今夜の嵐のなかを六里ヶ原をたゞ一人で突つ切るつもりであらう? わたくしはそんなことを考へながら老人の姿を見送つた。雲は直ちにかれの姿をつゝんでしまつた。山には雷鳴すら聞えはじめた。

寂然たる憂鬱な眼! わたくしは同時にイプセンやストリンドベルクの晩年を思ひ出した。

孤獨なる老人、孤獨なる天才、孤獨なる英雄……わたくしは默々として嵐の夜六里ヶ原を突つ切つて行つて老人の姿を思ひ出すごとに自ら頭を下げないではをれないやうな氣がする。

たゞ一條の道を極めばいゝ。淋しくとも。孤獨であらうとも。かれの sincerity が命ずるところに向つて、かれの sincerity が燃ゆるところに向つて歩一歩、地を踏みつゝ歩くより他に生くる道はない。

Occultism は伊太利の土の聲を語るであらう。そこに occultism の sincerity が生き、動き、燃えてゐる。terra-cotta の藝術の香が漂ふ。土の肌は日本の土の聲を語るであらう。そこに日本人の魂の sincerity が生き、動き、呼吸してゐる。そこに日本の素燒の藝術のナイーヴな、本然的な、個性的な、郷土的なかの女自身のものがある。

×

凡そ藝術家にとりて最も直接な不幸はかれがあまりに時代に無關心的なことであり、同時にかれがあまりに時代に關心的なことである。かれの藝術的眞率さからしてかれが時代に關心的であることはかれの藝術の新鮮さと覇氣をあたへる。けれども藝術的眞率さを伴はぬ時代への關心は卑しむべき迎合、變節、藝術的良心の破壞、藝術そのものの破滅に終らなければならぬ筈だ。

あわたゞしいテムポ、高速度的な行進曲の上に浮動し躍動してゐる現代人の生活現象が神經過敏な作家の心の面に映つて來ないわけはない。しかし作家自身がかれ等とともにジャズに合せて踊つてはいけない。かれ等が刹那の享樂に醉つてゐる間に、作家は悠久の人間の悲しい宿命を考へてゐるべき筈だ。

藝術家の生活を想ふ時わたくしは或る友人から聽いた長谷川二葉亭の話を思ひ出す。或る春の日の上野はちやうど花のさかりであつた。誰も彼もが花にうかれて、花下に亂舞してゐた。わたくしの友人は不

圓花の下に握り太なステッキを抱へた二葉亭がいかにも憂鬱な顔をして默然として佇立してゐるのを發見した。この大きな都會中の人たちが春に醉つてゐた時二葉亭四迷一人は花の下に憂鬱な眼を開いて、狂醉せる人々をぢつと見つめてゐた。

醒めたる凝視、憂鬱なる凝視。イプセンにそれを見、ストリンドベルクにそれを見、最も buoyant な愛蘭土のシングのごとき作家すらが魂の底深くいかにも醒めたる凝視を潛めてゐるではないか。

もしわれ〳〵の文藝から、醒めたる凝視が失はれるならば文藝は滅びなければならぬ。テンポの速い、今日の所謂大衆的なる觀點に立つて今日のジョーナリズムを支配して行かうとする資本主義は恐らくわれ〳〵の藝術を滅すであらう。カフエの文學、重役室の文學、舞踏室の文學、作家も醉ひ、大向うも醉ふ。われ〳〵は窒息しさうだ。都會氣分を、カフエ氣分を破壞すべきだ。土に還れ、田園に還れ。われ〳〵の魂を生かすべき新鮮な空氣が待つてゐる。そこに醒めたる凝視の世界がある。

世界苦といふことは人間が生きてゐるかぎりつゞくにちがひない。文藝はいつもその根柢に世界苦を感じてゐなければならぬ。

×

一つの窓からぢつと人生を凝視してゐる。十年二十年一日のごとく。

人はかれを笑ふであらう。かれの愚を笑ふであらう。

もつと明るい窓もあるであらう。もつと日當りのいゝ窓もあるであらう。もつと眺めの廣い窓もあるであらう。

しかしかれは狹い薄暗い北の窓に面して、夜も晝も恐らく死ぬ日まで、同じ憂鬱な世界を眺めてゐるであらう。

一つの作家が一つの環境に置かれる。一つのテムペラメントを賦へられる。終生的な宿命である。

人生は賭博である。冒險である。自分等が歩いてゐる道がはたして何處に行くのか、何處に終るのか。勝つか、負けるか。それは誰にもわからない。冒險であるからには命をかけてかゝらねばならぬ。賭博であるからには丁か半か何れかを張らなければならぬ。張るならばできるだけ大きく張らなければならぬ。そのかはりには一歩過てば一敗地に塗れて再起することはできないことを覺悟してかゝらなければならぬ。

文藝の道に於いても同樣である。自分が置かれた窓が南に向いてゐるか、北に向いてゐるか。それはすでに運命である。自分の窓はどこまでも自分の窓である。世につれて強ひて窓を切り變へる必要はない。

わたくしの前にかつて一筋の徑が横たはつてゐた。わたくしはたゞその一筋の徑を辿つて歩みをつゞけて來た。それは明るい徑でもなく、かゞやかな徑でもなかつた。わたくしは前方を見た。誰も歩いてゐなかつた。わたくしは後方を振りかへつて見た。そこにも誰もゐな

かつた。わたくしはいつも孤獨なる自分自身を見出した。

わたくしは思ふ。藝術の世界ではたゞ人おの〳〵自分一人の道を歩むより他に道はない。藝術は畢竟最も孤獨なる暴君である。孤獨なるエゴイストである。寂しき孤獨である。すべての藝術は徹頭徹尾一人の力である。一人の意力である。一人の操持である。かれは一面に於いて時代よりも强く、時代よりも高く生きてゐる。

今日のジョーナリズム、今日の資本主義、今日の所謂大衆的趣味はやがて藝術的作品をわたくしたちの社會から葬つてしまうかも知れない。けれども藝術家は生きる。生きてさらにかれ一人の道を歩むであらう。

わたくしのやうな下根の者にはたゞ一人の人間といふものを見ることすらなか〳〵容易ではない。二十代に見た人生、三十代に見た人生、四十になつてから見た人生、まだ〳〵何時まで見つめてゐても人生そのもの丶持つ陰翳といふものはなか〳〵掬めさうにもない。掬めさうにもない。トルストイが何う、イブセンが何うだなどと、その境まで行き着かない人間が總斷定をつけてしまうのはどんなものであらう。

たゞ一人の人間をすらほんたうに見ることはほとんど不可能である。たゞ一人の人間の魂の陰翳の深さ、複雜さ、たゞ一人の人間の生涯のわびしさ、うれしさ、ありがたさ、寂しさ、それを掬み、それを感じ得るだけでも下根の身には一生を費してなか〳〵不可能な冒險である。

一生鯉の繪ばかり書いてゐた繪師もあつた。

一生たゞ一つの面だけ打つてゐた面師もあつた。

このやうな藝術家があるといふことは愉快である。

自分の sincerity が命ずるところに向つて生きてゆく、考へてゆく、歌つてゆく。それより他に道はない。時非にして破るればそれまでのことである。

ocarina を吹く人もあらう。が、わたくしは土の鳩を吹く人間に生みつけられてゐるやうに思ふ。

一番恐るゝことはわたくし自身の心が sincerity から遠ざからうとすることである。

無論 sincerity を云々するやうな資格はわたくしにはない。たゞ愚人の願ひとして、自分に持たぬものを欲するのみである。

# 「フランス最近の文壇の傾向は」と問はれて

武林無想庵

フランス最近の文壇の傾向だつて？　そんなことが僕にわかるものか！　わかつてたまるものか！　なるほど、僕はこの足掛七年といふもの、フランスの國境からほとんど一歩も足を踏出さずにゐた。さうしてその間ほとんど毎日フランス語で書いた本を目にしない日とてはなかつた。併しフランス語がわかればわかるほどフランス文學といふものがだん〳〵にわからなくなつた。云ひかへれば、樂に本が讀めるやうになるに隨つて、フランス文學の視界が幾何學的級數にひろがつて行つて、その地平線がとても手がつけられないやうに擴がつて了つたものだ。佛説ではないが、フランス文學は全く洪大無邊だよ。

これは併し文學に限つた事ではなく、繪畫だつて、音樂だつて、彫刻だつて、つまり藝術だつて、科學だつて、宗教だつて、哲學だつて、つまり、フランスといふものゝ一切合財がわれ〳〵の常に西洋文明と一口に云つてのけるものゝ總和であつて且つその粹の粹だからだと思ふ。

たとへばポオル・ヷレリイを讀むとする。ヷレリイは卒然として出現したわけぢやない。マラルメを離れては、まづかれの作品に手がつけられないものと覺悟しなければならない。たとへそれが難解極まる詩そのものでなくても、かの十九世紀の末に稿を起して、二十世紀の上四半期に原文より長い原文より複雜な序文を附して世の中に發表したダヸンチに關する感想の如き單なる散文ですら、一ト通りや二タ通りの素養では、その大意さへオイソレとは窺ひかねると云つたやうな代物だ。さうしてそれがどんな大部の本かと云ふと、たつた百ページあまりの文章にすぎないんだから、ます〳〵呆れかへらざるを得ない。のみならず、そいつが二十年といふ長日月を經て、今日印刷に附

されてゐる形式にまで、漸く濟ざつけられたんだときいては、全く開いた口もふさがらない。

アン・リネーアの Sagesse qui rit がやはりその例に洩れない。どころか、さう云つた氣の長い點に關しては、さすがのヷレリイも三舍も四舍も五舍も避けるだらう。個人主義者であるところのかれが、道德について思を潜めて以來、この書物に手をつけてから、もう四十年も經過して了つてゐる。さうして今日のところではまだその前半だけしきや發表されてゐない。

僕はこの一週間前七年ぶりで日本へ歸つて來た人間だが、日本では今何事によらずまづ第一にテンポが早くなくちやいけないんだと、例の辻潤が東京驛でいち早く僕に訓示してくれた。

——テンポつて何だい。

——テンポだよ。

——楕圓形のまん中へ正方形の孔のあいた、さうして三本足らない事をもつて、進化論を夙に凌駕してゐる、かの青銅錢の事かい？

——困るなア、どうも……だから、つまり、テンポが遲いんだよ。

——何がネ？

——チヨツ！ 君がさ。

——へえ、さうかい？

とは答へたが、僕にはまだそのテンポなるものの正體が、實はよく分つてゐないのだ。が、どの道日本人の事なんだから、きつとそのテンポといふことが、もちろん例の immédiatisme といふ特有の屬性から派生した內容が、たま〳〵フオノグラフやラヂイオの殺到に面くらつて思はず口ぐせになつた地震以來の音樂的テクニツクなんだらう位まではほゞ見當がついてゐる。

そこで Sagesse qui rit にかへる。とだけ云つたら、あとは云はなくたつてわかつてゐるだらう。少くともテンポの早い國の人國である以上はだ。つまり、四十年以前と云ふと、多分坪內逍遙先生が小說神髓を日本紙の本で發表された時代の事だらう。さうしてゾラと爲永とを結びつけて、書生氣質といふ題だけ八文字屋をきかした大作でアツと云はした時代の事だらう。その時代から、わが畏敬するアン・リネーアは一つ事ばかり、實際、たつた一つ事ばかりクヨ〳〵と今日まで思ひつゞけてゐたものだ。

そこなんだ、僕のフランス文學について感じた事は。決してそれが所謂「最近」といふ事にはならないけれど、そこがフランス文學の全般的傾向だ。が、それだからと云つて、かの地の文人墨客が、われもわれもと兩國橋の上で身投女を見つけた時のやうに、ワイ〳〵と物見高く、悉く四十年五十年と手間ひまのかゝる文章に精根を枯らしてばかりゐるといふわけでは勿論ない。

きけば、日本では今文學そのものがなくなつて了つたといふ。さうしてそれは地震の結果だといふ。何の事だか僕には斷然わからない。七千萬人とかあるといふ日本人のうち、十萬人地震にとられたからと

云つて、あとの六千九百九十萬人の日本人が、卒然として文學を失つて了つたなどゝは、斷然わからない。たとへ地震が秦の始皇であつたにしてからが、壁の中から四書でも五經でも、いくらでも出て來たものだ。さうしてその四書五經が新聞を見ると毎日の廣告欄を賑はしてゐる。タラシツタの意味ぢやないのだ。何々全集何々全集といふアレだ。文學は決して失なつてゐないばかりでなく、前代未聞の大進出だ。イヤぢやありませんか？……電車の中の廣告を見上ると、菊池寛作東京行進曲とある。イヤぢやありませんか？……東京行進曲は小説ぢやないんでせうか？　文學ぢやないんでせうか？

　フランスにだつて、そんなのは所謂汗牛充棟だ。毎日掃きすてゝも掃きすてきれないほどある。ヴイクトル・マルゲリットのギヤルソンヌは半年にして五十萬部賣盡した。モオリスデコブラのヴエニスのマドンナは三ケ月で三十萬賣盡した。さうしてそれがこの頃はじまつた事かといふと、百年も二百年も前からいつだつてさうなのだ。さうしてそれがやつぱり文學なんだ。政治でもなければ、宗教でもなければ、科學でもなければ、やつぱり正眞正銘の文學なんだ。さうしてそれを文學と云つてあへて憚らないのは、必ずしもフランスに地震がなかつた爲ぢやない。何百萬人となく千九百十四年の役に失はうが失ふまいが、文學はいつだつて文學なんだ。出版がキヤピタリズムにならうがなるまいが、文學はいつだつて文學なんだ。と、さう大氣焰をあげて置いて、さて考へて見ると、實は日本だつてさうなんだ。統計によると、日本では記紀以來、人畜に數多く死傷のあつた地震に、平均二年に一度の割合になるさうだ。して見ると、若し地震が文學を滅ぼした事が本當なら、日本には文學なんてものは決して存在できなかつた道理になる。それだけでも地震と文學とには何等の關係がなかつた事がよくわかる。源氏以來、平家以來、曲亭以來、いつだつてさうぢやないか？

　もう一度「最近の傾向」にかへる。フランス文學の傾向は今云つたとほりだが、併しそれは最近ぢやない。最古でもない。ヘチヤムクレでもない。ベラボウでもない。それが即ちフランス文學の傾向なんだ。羅典民族の一派であつて、さうしてフランス語を喋るものゝ文學なんだ。さうしてその文學たるやその民族と共に常に終始してゐる。オーギユスト・コントの哲學までコツ〳〵積上つたフランスの思想は實證といふ名に於いて科學といふ名に於いて、自然主義と稱するジヤン・ジヤク・ルトソーにはじまつた一大ロマンテイズムの絶頂に達した。それがエミール・ゾラであつて、同時にアナトール・フランスだつた。ゾラのそれは下水のそれであつて、アナトール・フランスのそれは骨董のそれではあつたが、共に十八世紀から押されて來た、共に同じロマンテイズムの最高潮であつたことに變りがない。さうしてそれが一千九百十四年七月三十一日をもつて木端微塵に碎け散つた。さうしてその一々の破片こそ、實は御所望の「最近の傾向」と云はゞ云ひ得るものなんだらう。ジードがその一破片だ。ヷレリイがその一破

片だ。プルーストがその一破片だ。アンドレエ・プルトンがその一破片だ。破片だ。破片だ。さうして凡ての陶器と同様に、それがフランス民族の破片であるがために、却つて陶器に思を潜める者どもにとつては、完全なる需要の形式を具へた時代より尊まれるといふ事になる。

一斑を推して全豹を知るといふアレだ。一をきいて十を知つても、それでも差支ない。テンポのはやい發明な日本人なら、その位の事は朝飯前の話だらう。ところが一斑ばかりいくら並べ立て丶見たところで、決してそれだけでは全豹を成さぬと同じく、又一ばかり幾萬遍きいて見たところで、十はさて置いて、きいただけの一すら知らないと同じく、フランス人の破片ばかり陳列したところで、それだけではフランス文學の傾向はわかる筈がない。ところが、日本人はとても新しいものばかり追ひかけてその日を送つてゐる人種だと見えて、歸るか歸らないに、さつそくからしたお土産を請求されるには困つて了ふ。一體日本人は新しいといふ事を何と心得てゐるんだらう？ 日に日に新にしてとは、湯の盤の銘に打込んであつたものだといふぢやないか？ 盤の銘なんだ。盤とは水を容れる道具だらう。水を容れるんだから、水が新しいのだ。盤を毎日とりかへる意味ぢやなからう。だから日に日に新なのは水であつて盤ぢやない。ところが日本人の新しものずきは、その本來の事ぢやなくて、盤の方に對してさうなんだから助からない。ゾラがはやれば翕然として悉くゾラだ。ワグネルがはやれば翕然として悉くワグネルだ。ニイチエがはやれば、イプセンがはやれば、マルクスがはやれば、シネマがはやれば、ラデイオがはやれば、洋行といふ伊勢詣がはやれば、何にかぎらず翕然としてその何にかぎらずだ。日に日に新なりを知つてゐる以上は温故知新もきいた事があるだらう。古きをアタタメてぢやない。去年もらつた老酒をおかんする事ぢやない。古きをタヅネてだ。古いもの丶きらひな奴に新しいもの丶わかつた例はない。維新以來、日本人はい丶氣になつて、どしどし古いものを毀して行つた。さうして日清日露歐洲大戰と戰爭のある毎に、その破壞のテンポが加速度的にはやくなつて行つた。さうしてその破壞したものの上に新しく建築したのが今日の日本ぢやなくて、歐羅巴文明をその破片だけ拾ひあつめて來ては、そいつを間にあはしてゐるのが今日の日本の現狀なんだ。要するに骨惜しみの結果なんだ。さうしてその骨惜しみを利口だとまで考へてゐる。だから全く手がつけられない。

それはなるほどフランスだつて毎年草は生へる。が、フランスの草はフランスの土から生へる。獨逸の土からも伊太利の土からも生へない。斷然生へない。だからフランスの土を知らなければフランスの草はわからないといふ結論になる。ところで、今年はどういふ草が生へたかときかれると、僕だつて一寸返事に困る。が、たとへばニースでに今薔薇がさいてゐると答へたとする。たとすると、その返事をきいた者は、なアんだ、薔薇なんか一向珍しくない。日本だつてとうの昔

から咲いてゐらア、と思ふだらう。ところがニースの薔薇を目撃したものは、たとへそれが直接ニースから輸入したばかりのものであつても、ニースの薔薇と日本の薔薇とはいかに天地月鼈の差のあるものであるかゞ頷けるであらう。

　同樣に、マルセル・プルーストが、ヴレリイがと、今フランスへ集つて來る世界の文學靑年達の目標になつてゐる作家をかつぎ出して、それはかう〳〵いふ傾向の作家だと云つて見たところで、結局ニースの薔薇のたぐひにきまつてゐる。

　早い話がジヤン・コクトオだ。もう二年ばかりになるが、コクトオはカトリツク信者になつた。イギリスのチエスタトンも同樣にカトリツクになつた。チエスタトンはイギリスの話だから別としても、あの今の日本の若い新しい人々のお目あてとなつたコクトオがどう氣がちがつて、古いも古いも、まるで日本の帝國議會のやうに腐りきつてゐると思はれてゐるカトリツク信者になンぞなつたんだらう、と驚くかも知れない。ところが、親しくフランスの土を踏んだものから考へれば、ロマン・ローランだつて、アンリ・バルビユスだつて、ジヤン・コクトオだつて、みんなフランス人である以上は、フランスの葡萄酒をのみ、フランスのパン、フランスの乾酪をたべて大きくなつた以上は、やつぱり生活のうちから一番自分に溫かい感じを求めざるを得ない場合には、どうしてもマリア樣に接近したくなるのに、決して何の不思議はないと思ふ。

けれどもフランスの土を踏まない人々にとつては、たとへラブレイを讀み、ラシーヌを暗誦しても、それが新しいものを追ひかける料見でゐるかぎり、コクトオとコクテールとは一緖になつても、コクトオとカトリツクとはどうしても一致する氣づかひはないであらう。

　だから溫故知新だといふのだ。フランス文學の最近の傾向を知りたければ、何よりもまづ第一にシベリア鐵道に乘ることだ。浦鹽斯德をとほつて行けば、ニガレリヤでたつた一度のりかへるだけで、十六日目位には、だまつてゐても、チヤンとギヤール・デユ・ノールの停車場へつく。さうしてそのギヤール・デユ・ノールといふのは、とりもなほさずフランスの巴里なんだ。眼耳鼻舌身意の六根六識六塵を活潑に地に旋回させて、まづ巴里そのものゝ姿を會得すべしだ。

　西洋人のいふ意味では、決してこれを都會とはとても云ひかねるであらうけれど、とにかく全世界の大都會のうちで、現在この東京市ほど新しい都會はないであらう。さうしてギヤール・デユ・ノールへ到着した時の巴里位恐らく古くさい都會はないであらう。巴里を中心とせるフランスはとても〳〵古い國だ。活動寫眞でばかり巴里を知つてゐるものは、巴里の本物を目の前にした時、かれは必ずこれがあの美しい巴里かとガツカリして了ふにきまつてゐる。それほど巴里は古くさいのだ。

　勿論、地震といふものゝない天惠によるけれど、單にそればかりでなく、フランス人ほど古いものを愛する念の深い國民はない。だから

フランス人にまかせてさへ置けば、古いもの丶價値は未來永々に失はれない。同時にフランス人ほど新しいものを好む國民はすくないのだ。だからフランスは常に古い。だからフランスは常に新しい。さうしてその新しいといふ意味が日本人の今日しきりとあこがれてゐる新しさといふ内容とは全くちがふ。フランス人は恰も古い幹から新しい枝が、古い枝から新しい葉が、年々歳々ますく繁茂するといふ意味に於いて、微笑をもつて常に新しいものを迎へてゐる。なぜかといふに幹を枯らしては新しい枝葉は決して生じて來ない事を十二分に承知してゐるからだ。それゆゑにフランス人の愛する新しいものは常に肉あり血ある生きた新物であつて、決して今日の東京市に於けるが如き死せる造花造葉の新しさでは無い。

ギヤール・デユ・ノールへ到着して、若し巴里から何一つ新しいものが發見できなかつた日本人があつたとすれば、その人は人間生活そのものの意義を知らないアンポンタンであり唐變木であるにきまつてゐる。かりにそれがシベリアを通らずに北米合衆國を通過して到着した日本人だとする。さうしていよく巴里を廢都の如く感じたとすれば、かれはアメリカの二十世紀文明なるものが、巴里を建設したフランス人の單なる出店であり枝葉であり末梢神經の具象化にすぎないことに氣のつかぬオツチヨコチヨイであるにきまつてゐる。

羅馬は一日にして、而かもオツチヨコチヨイの手によつては決して出現しなかつたと同樣に、今日の巴里も十年や二十年の人間の努力によつてできたものではない。なるほど今日の羅馬は廢都に近いけれど、その代り巴里は羅馬の基礎の上に築かれてゐる。恰も昔日の羅馬がアテネの基礎の上に築かれたと同樣の意味に於いてだ。だから巴里は最も完成された希臘羅典文明の結晶だと云へる。さうしてその文明は歐羅巴人のこの地上に存在するかぎり永遠に失はれる氣づかひのないものだ。さうして年々歳々その根幹から新しい枝葉を添加して行きつゝあるそれだ。

フランス文學もまたそのとほり、フランス文學の基礎には希臘羅馬の文學が根を張つてゐる。カトリツク文明の肥料で培かはれてゐる。だから古典を離れてはフランス人の表現する文藝は全くわからない。カトリツクの味を理解しなければフランス人の心の動き方はわからない。昔デカルトがゐた。又パスカルがゐた。かれ等は何者だ？ かれ等はカトリツクと希臘思潮の相隔つた産物ではなかつたか？ 又ジヤン・ジヤクがゐた。ヴオルテールがゐた。さうして恐るべき革命として結果した。それは何を意味するか？ 若しプラトンがフランス人の血肉に生きてゐなかつたら、バスチイルは果して破壞されたであらうか？ マリイアントアネツトはコンコルドへ引出されたであらうか？ アメリカ合衆國は獨立したであらうか？ 悉く希臘と羅馬とを語つて餘りある現象ではないか？ それゆゑに希臘羅馬の文明を離れては、歐羅巴及北米には何物もない事になる。從つてフランス文藝はそのすべてを根底として今日巴里に燃やいてゐる全歐米人の結晶體

だと云へる。即ち金剛石の如きものだと云へる。さうしてヴレリイもプルーストもジードもブルトンもその的礫たる抛射線の一つ〳〵だと云へる。さうしてその抛射線に目を射られるには、どうしても丸善通過ではその光りが届いて來ない。昔はナポリを見て死ねと云つた。今は巴里を見て考へよと僕だつたら云ひたい。それこそ百聞は一見に如かずだ。さて、さうして置いてから、なぜそんなところからヴレリイが出現したか？ ジードが出現したか？ 近くはアラゴンが出現したか？ そのあとでトツクリ考へて見なければならない。

斷つておくが、今僕がしきりとジードやヴレリイやプルーストの名を繰返したが、それだからと云つて、ポオル・ブルジエはもう一人の讀者をもたなくなつたわけぢやない。かれは七十歳にして毎年新作を公にしてゐる。又マアテルリンクの如きも、あれほどの世界的名聲を博しても、かれはまだ功成り名遂げて身退いたわけぢやない。かれも七十歳にして毎年著作を公にしてやまない。殊に最近の白蟻の生活の如き、第四元次世界の研究の如き、死の力の如き、老ゆれば老ゆるほど、いよ〳〵本も澤山讀み、いよ〳〵眞理に對する考察を深めてゐる態度は、われ〳〵文筆にたづさはる人間にとつては、どの位心强さを感ずるかわからない。

われ〳〵文士にとつては、フランスは實に立派な國だ。それゆゑにたかゞ二十枚や三十枚の紙數の中へ、單なる若い讀者の好奇心に愬ふべく、最近の雜誌新聞をぬき書きして、その場のお茶を濁すには、全くもつて勿體ない文藝だと思ふ。

のみならず、僕はまだ研究日淺くして、何十萬の讀者の前で、口はばツたく、それフランス文學最近の傾向は、などゝ高慢な口をきく氣になれるほど、それほどまだフランス文學はよくわかつてゐない。だからなぜ改造社の箕輪君に、だしぬけにさう云つた大課題を與へられて、結局、かう云つたたゞ徒らに面食つた文章しきや書けないかといふ事がおわかりにならうと思ふ。

以上云つたとほり、僕は七年フランスにゐて、スッカリフランスに心醉して了つた。さうしてこれからさき死ぬまでフランス文學を研究しつゞけながら一生を過したいと思つてゐる。

そこで今回僕の一寸歸朝したのは、いかにしたら一生巴里に生活して一生フランス文學が研究できるか、その生活費の求め方を讀者諸君に御相談に來たわけだ。

僕のできる事はフランス語の本を讀むことゝ、日本語の文章を書く事だけだ。五十年この世に生きて、自信を持ち得る僕の職業は全くこれだけだ。まことにおはづかしい話だが本當だから仕方がない。

だから僕の生活費といふものは、勢ひこの二つの自信の上から絞り出さなければならない事になる。即ち巴里で出來るだけフランス語の本を讀んで、出來るだけ眞劍な日本文を書いて、さうしてそれを日本の出版界へ送り、讀者諸君の救護の下に、その原稿料若しくは印税を送つていたゞくより外に方法がない事になる。

數十萬の讀者諸君！　何分よろしくお願ひ致します。

終りに臨んで、一言附加へて置く。

今日の日本にとつて、所謂テンポのはやきを誇つてゐる日本にとつて、一見いかにものろくさいやうに見える、一見いかにも硬化したかの如く見えるフランスから、まだ〳〵どの位學ばなければならぬ事が、勿論文學のみにかぎらず、どの位澤山殘つてゐるか、それだけはどうかしてわかつてもらひたい事を、わが愛する日本人全體に告げて置きたいと思ふ。

僕は決してフランス人になりたいのではない。たとへ死ぬまでフランス文學ばかり研究しつゞけようと、僕はどこまでも日本人として終始するつもりだ。それゆゑにこそフランス文學の研究と同時に、自分の見識、自分の意見、自分の表現等すべて悉く日本語の文章をもつてするわけだ。なぜかといふと、凡ゆる國民はその感激の言葉をば決して外國語で吐き出す事ができないからだ。さうして文學は、人間の言葉としての文學は、必ず人間の感激をもつてはじめられなければならぬ筈だからだ。

フランス語に比べると、日本語はとても貧弱だ。國語はその國民のエキスだとする場合には、日本語の貧弱さは直に日本人の生活の貧弱さを示した事になる。僕は日本人としてその貧弱さに耐へない。どうかして今日の日本語をして、フランス語の一々を征服してゐるところの、あの思想的豐饒さに肩せしめたくてたまらない。

ウオルストリートは今日全世界を風靡してゐるであらうけれど、アメリカ人は今日生活内容として、どこに何を求めつゝあるか？　それはフランスの文藝と科學ではないか？　さうしてそのアメリカの所謂四十階的文明をば、その生活内容としては全く空虚なる所謂二十世紀文明をば、どこの何國が急速なるテンポをもつて模倣しようと企てつつあることであらうよ。

この文章を書きつゝある僕は、七年ぶりで祖國に歸つて、また一週間にしきやならぬ僕なのだ。さうして所謂再建の途中にある東京市を見て、まづ何よりも、アブなくて、アブなくてたまらない印象を與へられた。

繰返して云ふ。アメリカは歐羅巴の、殊にフランスの築きあげた文明の、要するにその末梢神經の展開にすぎないといふ事を。さうしてわれ〳〵は東洋人だ。さうしてわれ〳〵東洋に缺けてゐるところのものを充すべく、若し他山の石として本當に研究すべきものがあるとしたら、それは相對時せる西洋文明の末梢ではなくて、云ふまでもなくその幹根であるべき筈だといふ事を。

日本人はもつと本當に西洋文明といふことを知らなくてはならない。西洋の本當の文明といふものは、決してかう云つた具合にとり入れるべきものではない。さうして今日かう云つた結果になつたのは、全くそれは研究の足らぬ事に歸着する。ぬれぬ先なら露をもいとへだ。露が尾花とねた以上は、一旦ねて了つた以上は、あくまでも徹底的に西洋文明の眞髓をつかまなくてはなるまいと考へる。

どうも大變に氣焰をあげてしまつて、まことに相すみません。

# 寺院に棄てられた男・寺院に救はれた男

——凡愚列傳のうち——

長谷川如是閑

## 寺院に棄てられた男

右に採錄したのは、生前に絶えず問題にされてゐた、ある大寺院の世襲的首長——問題にされなかつた大寺院の世襲的首長があつたゞらうか——の遺書である。

「余が遺書を作る！ そんな馬鹿げたことが何處にある？ 生きてゐる余の意志に徹頭徹尾反對し、片端からそれを蹂躙した人々が、余の遺志を何うして尊重する？ 彼等は、この遺書——と彼等は呼ぶだらうが、これは遺書でも何でもない、生前書きしるしたものを無造作に列べた反古だ。戰々兢々として余の遺書を待ちうける必要のない我が同行者の眼に萬が一、觸れることがあれば仕合だとは思ふが、觸れ無くてもいゝ——の冒頭數行を讀めば、必ず漫罵を余の殘骸に浴びせかけて、この紙片を火に投ずるであらう。それでいゝのだ。

「余を圍繞する有象無象は、余が祖先の傳統に反いて、奇蹟を信じ、又大宗派の世襲的首長たる身分を忘れて、徒らに世俗的生活に沒頭することを非難する彼等は、余が宗教及び寺院に對して何ういふ考をもつてゐるかを知つてゐるといふが、彼等は、宗教及び寺院に對する彼れ自身の考をすら知つてゐないのだ。何うして余の考を知る事が出來る？ 正直にいへば、余自身、宗教及び寺院について何等知る所はない、從つて考ふる所もないのだ。いかに×が偉大の佛僧でも、ないものを知ることは出來まい。

「それは少しも不思議なことではない。余は、少時から、數百年前の余等の祖先の時代の幼稚な宗教的表現を暗誦させられ、數千年前の外國人の宗教哲學の飜譯を暗誦させられたが、いつ宗教そのもの、寺院

そのものの性質について教へられた？　それは彼等、余の周圍の有象無象といへども同じことだ。彼等は學校を作り學者を養成して、宗教を研究せしめると稱してゐるが、余の見る所によれば、彼等宗教學者と稱する輩はたゞ數千年前の外國の哲學の文獻を詮索して、その不可思議な文字が何を表現するかを知らうとしてゐるのみだ。たとへ彼等がその悉くを理解し得たとしても、それはたゞ古代インド人が何を考へたかを知るに止まることではないか？　學者共がそれを知つた時に、學者でもない萬人に何の影響する所があらう。學者自身と雖も、それはたゞ萬人の知り得ざるものを知り得たことを誇り得る外に、何を獲たといひ得る？　宗教とは、古代人が如何なる高遠の思想を抱いてゐたかを知るの道か？　彼等としてまさかそれが宗教だとはいひ得まいが、然らば彼等宗教學者等は、その外に宗教について何を知つてゐるのだ？　余は、余自身宗教について少しも知る所がないと同じく、宗教學者等も、余の周圍の僧侶等も、宗教のことは少しも知らぬ——少くとも俗人以上は知つては居らぬと斷言するのだ。

『然らば寺院について誰れが何を知つてゐる？　彼等はいふ、宗教のある所必ず寺院がある。その發達はかく〱、その變遷はかく〱、その國家との關係はかく〱、その今日の制度はかく〱、從つて我等の寺院制度をかくの如くに組織してゐる。その組織にはかゝる長所があり短所がある。等々。

『さうかと思へば、寺院は贅物である、僧侶は宗教の名をかりて寺院によつて搾取する××である。宗教の革新は、先づ寺院の破壞から始めねばならぬと叫ぶものが、俗人よりは寧ろ僧侶に多い。彼等は、自から寺院の中に在るが故に最もよく寺院のことを知つてゐると考へて、天晴れ自己を犧牲にする誇りをもつて寺院破壞を唱道してゐるつもりである。

『よし解つた！　諸君はさつさと自分達の寺院を打ちつぶせばいゝのだ。「腹を切るのが武士だ」と大聲で怒鳴るのはもうやめて、默つて腹を切るがいゝのだ。然し待て。寺院を打ち壞して教會を作るなら同じことだぞ。それは揃つた利益で、家賃のとれぬ大建築を起す代りに、利潤の擧る商賣を始めるのだ。アメリカのカトリツクは金があり餘つてその兩方をやつてゐるのだが、大建築をつぶして大會館を作つて見ても、譯のわからぬ宗教がわけのわかる宗教に早變りする譯でもあるまい。寺院が無くなつても、宗教が殘れば、必ず形の違つた寺院の出來るのは當り前のことだ。妓樓を打ち壞しても、性慾の調節がとれなければ、淫賣が榮えるばかりだ。彼等はそれで、寺院について大に知つてゐると稱してゐるのだ。

『今の社會制度を支配してゐる××××を保存せしめながら、結婚制度の破綻に基く公娼制度だけ廢止すれば、淫賣がこれに代るのは當り前だ。今の宗教制度を支配してゐる××××を保存させながら寺院だけ廢したつて、何處かに××××の塊の出來るのは當然だ——といつたつて余自身寺院について少しも知つてゐるのではないのだか

ら、それから先きは言はない。

『が余は知らざるを知らずとしてゐるのだ。宗教家面の僧侶や、宗教學者面の學者やは、經文を暗誦し、又は飜譯し、又は註釋し、又は出版し、又は販賣すれば、それで宗教も寺院も、わからぬ限もなしと考へてゐるのだ。宗教のことなど少しも知らぬ男だと彼等の笑つてゐる孔子に笑はれる輩だ。

『それ故に余は、たとへ一宗派の世襲的首長なりと雖も、宗教のことも寺院のことも知らぬと公言して少しも憚る所はないのだ。業に宗教を知らず又寺院を知らず、焉んぞ宗教家的、僧侶的言動をとることを得んやである。だから余は公々然と世俗的言動を敢てし、俗人の言ふ所これわが云ふ所、俗人の行ふ所これわが行ふ所と公言するのみならず、實踐に於てもこの外に出ないのだ。だが、所謂宗教家なるものだつて、何處にどんな宗教的言動をやつてゐる？ 見せろ！

『彼等僧侶及び學者等は、宗教をもつて人間の思想を超越したものとする如く、寺院をもつて人間の組織を超越したものと思惟し、昔は國家の××に反對して、萬人はよろしく國家への租稅を×るを可とするも、決して寺院への喜捨を惡る勿れと教へ、今は、×××の搾取は不法にして、寺院の募財は神聖なりと稱する。宗教哲學を飜譯してゐるものはさういふことに誑かれるかも知れないが、われ〳〵無學者にはそんな理屈は通らない。

『從つて余自身は、宗教そのもの〻ことは知らず、寺院は一個の財團なりと考へてゐる。だから寺院に對する余一個の政策を一つにそれに基づけたのだ。余の祖先は、かの天理教の宗祖某女と同じく、その一代に於て財團を完成せしめることが出來なかつたので、恐らく彼れ自身自己の寺院を財團なりと考ふることは出來なかつたであらう。從つて余の祖先にせよ、天理教や大本教の某々女にせよ、寺院のための募財をもつて宗教の最大事業なりと公言したことなどは斷じて無かつたに相違ない。それは神代に於ける日本人の祖先が、政友會、民政黨等をもつて×××の團體なりと公言し得なかつたのと同じである。然し、宗教家が寺院を××集積の本據としたことは、我が祖先の時代より遙か上代に始まつたことで、神佛が一部落のそれとして表現された野蠻時代に於て、既に所謂『僧主』の企てた事業がそれだつたのである。わが祖先はまだ宗教發生の歷史を知らなかつたから、自己の宗教もやがて財團として成長することを自覺するに及ばなかつたのである。

『これはわが宗派のみのことではない。禪宗の如く、不立文字を唱へる宗派に於ても、文字を立てる代りに、寺院を立つることを專念したのである。峨山和尙の如き近代の高僧といはれた人物すら、天龍寺の再建が彼れの畢生の事業たることを公言して憚らなかつた。寺が建てば死んでも遺憾なしといふが如きは——又孔子だが——『朝に道を聽けば夕に死すとも可なり』といつたに對しても面目ない始末である。

『けれどもそれは仕方がないのだ。商家の子等が『家名』と稱するの

は、その資産『家産』のことである。いかに家名を現はした所で、一文なしになつてしまつては、確かに家を潰ぶしたに相違ないのだ。寺院と雖も同様である。弘法大師すら高野山のやうな大財團を發起して、後世幾萬の×××の巣喰ふ所を貽したのである。さればそれらの宗祖の衣鉢を襲ぐ者共は、その財團を潰ぶしては、いかに宗名を擧げても、やはり宗派そのものを潰ぶしたことゝなるのである。故に財團を繼承し、發展せしめることは、これ宗派を繼ぎ、傳燈を盛にする所以に外ならないのである。

『然るに、余は夙うの昔からつらつら我が宗派の財團の形勢を觀てゐるのに、抑もわが祖先の宗旨は、在來の宗教が主として中央貴族階級の資源に立脚したのに對し、地方の豪族又は農民の資源に立脚したもので、それは、恰も封建時代の商業が個人的大資本に依頼したのに對し、近代の商業が零細の資本の大集積によることゝなつたやうに、我が宗派は、零細の資金の大集積によつて、今日の財團を築き上げたのである。これがため我が宗派が、××××の租税政策を妨害する結果となつたのである、我が宗派が至る所に彼等××の壓迫を蒙つたのも已むを得ないことである。

『然るに近代に及んで地方資本の大集積は、××及び商人階級の大規模に企てる所となり、寺院への月掛金は、郵便局への貯金と競爭せざるを得ざるに至り、中小資本家の寺院への喜捨は、銀行、會社の預金吸收、株金募集と競爭せざるを得ざることゝなつた。然し小資本の大集積に於て、寺院の方法は當然××及び商人階級の唯物的の營利的顯著なる方法と競爭する能はざるは當然のことである。

『加ふるに誰れもいふ通り、教育の普及は、簡單明瞭なる我が宗派の信仰に對して最も容易に啓蒙的斧鉞を加ふる結果となり、今やいかに僻遠の無知蒙昧の徒と雖も、呪言一句によつて、人生の最大幸福を獲得せしめるといふ如き寺院の宣傳を信ずることは出來なくなつた。況んや首長をして××××を行はしめることが、一家一族一郷の宗教的慶福の基なりと信ずるやうなものは、殆んど跡を絶つことゝなり、偶くこれあるは、却つて首長をして權利の實行を迷惑と感ぜしめる程のものに過ぎないものとなつた。世態の變遷、人心の進化は眞に恐るべきである。

『けれども、劍によつて立つものは飽くまで劍を磨かざるべからず、財によつて立つものは飽くまで財を集積せざるべからず。寺院は財團としてのみその生命を持續せしめるを得、僧侶は財團としての寺院を生活の根據とする階級である以上、寺院の形態を支持することは余等の生命を維持する所以である。生きんがためには蚤虱と雖も渾身の力を振つて闘ふのである。我等は、宗教の何たるを知らず、寺院の何たるを知らないでも、自己の生命の大切なることは知つてゐる。寺院を維持する目的は、建造物を維持するにあらず、宗旨精神を維持するにあらず、我等僧侶の生命を維持するに在るのだ。我等の宗內の異端を排擊するのも、宗派精神の擁護を冀ふるにあらずして、我等の衣飯の

朽るゝを恐るゝのである。寺院の建造物の腐朽するを恐るにあらず、それに據る僧侶の生活の破滅を恐れるのだ。城郭の壊れることは、それに閉て籠る將卒の討死を意味するが故に、所謂壘を高うし堀を深うするのである。

『余等の地位は正さにこの形勢にあることを知るが故に、余自身は、八方よりの攻撃を排して、財團の根據を堅うする爲めに、寺院をして獨立自活の途を得しめやうと企てたのである。或は寺財を擧げて××を試み、或は海外の土地××に手を伸ばし、或は殖産興業を宗内にすすめ、大に貨殖の事に從ひ、つひに奇蹟を信じて自から異端の汚名を受けるに至りしも、一つに財團としての寺院の地位を自覺したるが故である。かの倨傲、僞善の徒の無自覺にして不遜なる警告の如きは、始めから余の眼中に置かざりし所である。

『不幸にして事志と違ひ、企圖した事業は悉く失敗に終り、余自身一大災厄の淵に沈淪すると共に、一宗の不安動揺を招いたのは、全く余の手腕の余が頭腦に及ばざりしより起つたことで、一宗の僧俗の前に叩頭して罪を謝せねばならぬ次第である。

『然しかくいふは、決して余に對する宗内の攻撃を余自から承認したわけではない。彼等は余自身の事業についてはその失敗の後を見てごうごうと非難の聲をあげてゐるが、もしそれが成功したら、毫も非難せざるは勿論、却つて余を中興の祖など〻稱揚したに相違ないのである。これ實に成敗を以て人を論ずるもので全く凡夫下根の心情である。彼等自身も亦聊かそれを知らぬでもないので、彼等は更らに、余の宗教家らしからざる言動を列擧して、結局余を首長たるの地位に堪へざるものとして排斥するのである。彼等は、余が俗人の如くに或は藝術に親しみ、或は文化的感覺にひたり、或は西式の享樂に耽り、或は科學を弄び、而して我が宗派の傳統を守るに忠實ならずと稱し、これをもつて大宗派の首長の尊嚴を傷くること甚だ大なりと難ずるのである。

『余は決して自からわが宗派に對して忠實ならずとは思はないが、たとへ多少宗派の正統的見地を脱するも、それが甚しく社會の形勢と反せざる限り、必ずしも我が宗派の安寧と昌榮とを妨げるものであるとは考へられない。由來、余自身は、宗教の雰圍氣中に生長したとはいへ、その宗教たるや、教學の組織によつて外より與へられたる制度的強制であつて、決して常に余自身の内に在るものに觸れ得るものではない。たとへば今日の子弟に向つて四書五經を講ずるも、子弟はただそれを支那學の知識として受け容れるのみで、決して現代道徳の内的構成としては受け容れないであらう。同様に、數百年前の宗派的精神が現代文化人の頭腦に反響する程度と性質の如何なるものであるべきかは決してこれを逆睹するに難くないのである。余自身のうちに流る〻二十世紀の血は、我が宗派精神の注射によつて何の反應をも呈さないことは、實驗によるまでもなく明瞭のことである。

『彼等は余が――苟も一宗派の首長たるものが――文化人的感覺を

持つことを以て一大背教なりと揚言する。けれども考へて見るがいい。今もいつた通り、余がそのうちに育てられた宗教的雰圍氣といふのは、決して宗教そのものではなく、又所謂印度哲學でもなく、さりとてインドより西の宗教でも哲學でもないことはいふまでもない。然らば、余がそのうちに成育させられた宗教的雰圍氣とは何んなものかといへば、それは即ち、寺院制度に基づく階級的社會層の空氣そのものである。而して寺院制度に基づく階級的空氣とはいふまでもなく僧侶貴族の階級のそれで、宗教や哲學等の、所謂精神文化の組織から生じた空氣ではなく、全く階級的生活文化の物質的空氣である。それは全く財團としての寺院の經濟的地位が作り上げた文化的享樂の組織である。それは昔の軍國貴族や地方豪族が城砦を築き、兵隊を蓄へ、戰爭を行ふことによつて獲た經濟的利益を集大成して作り上げた軍國貴族文化のそれと同じ性質の者である。それは寺院を築き、僧侶を蓄へ、宣傳を行ふことによつて獲た經濟的利益を集成して作り上げた××××の文化である。

『さういふ性質の文化は、今日の社會に於ける資本家階級の文化と同じく、その階級の經濟的優越による利益の與ふる文化で、物質的生活の享樂として發達する性質のものである。だから寺院貴族は、軍國貴族や×××××と同じく、堂々たる邸宅を構へ、澤山の××を蓄へ、衣食住と性との生活を底知れずに發展させるのである。これら各種の文化的生活のうちで、最も大規模に發展するものが宗教貴族のそれであることは、ヴァチカンの生活を見れば甚だ顯著だが、わが國にだける余等大宗教の首長の生活を見てもその幾分は窺はれる。これは決して『宗教的』生活そのもの丶發展ではない。宗教生活そのものに執すれば、鴨の長明ではないが、住居などは方丈にして足れりである。數町四方の大御殿や、海拔數十尺から數千尺に亘る、谷を跨ち山を拓いた大邸園などが、宗教生活そのものに必然である道理はない。これは一つに宗教貴族の經濟上の地位が彼等に與へた文化形式の發展である。宗教そのものは、か丶る組織に於ては、かの十八間四方の大伽藍の眞中にある一寸八分の金佛よりも遙かに微小な存在たるに過ぎない。余自身の幼時からひたつてゐた雰圍氣は、その一寸八分の金佛の存在さへも全く無視された、金銀瑠璃を鏤りばめた大殿堂そのもの丶空氣である。それは宗教貴族の階級層に現はれた特殊の氣風をもつた空氣で、その氣風の關係で却つて宗教そのもの丶空氣を排除してゐるやうな雰圍氣である。

『而してこの種の空氣は、それ自から社會一般の文化的雰圍氣に順應するものである。宗教貴族の文化はいかに宗教的特殊味を帶びてゐても、決して社會一般の文化的發展と全く隔絶したものではあり得ない。それは氣風の交渉によつて社會一般の空氣に支配されるものである。されば余自身は、自己の階級層の空氣の裡に生きてゐるといふことによつて、自づから近代的空氣を呼吸しないわけに行かないのである。最近の日本の文化がモボ、モガの大群を生んだならば、我等の階級層からも亦必然に、モボ、モガが續出するわけである。余自身が近

代的感覺をもつことによつて、中世紀的宗教家の精神と風采態度とを失つたことを非難するものは、我等の宗教學校で和讃の代りに唱歌を教えることも禁じなければなるまい。

『殊に訝かしいのは、さういふ寺院の僧侶等は、明治以來、寺院の組織に於て、全く、近代の國家組織を眞似て、立憲制度そのまゝ、寺院憲法を國家の憲法になぞらへ、議會制度も日比谷のそれをそつくり踏襲してゐるではないか。寺院組織そのものさへも、時代に順應して近代的となつてゐるのに、寺院貴族のみが中世紀的形式を保存することが何うして出來る？ 僧侶等が宗派議會の選擧に買收××その他の運法を、世俗的議會のそれよりも盛に行ふといふのに、××××の吸收に於て、余等寺院貴族が、僧侶政治家共に遲れていゝと思ふか？ 俗界の政治家共でも、その文化的發展では常に靑年等にひけを取つてゐるではないか。

『これを要するに、僧侶等は余の事業の成敗の跡を見て余を判斷するのであつて、その卑怯にして狡猾なる誠に唾棄すべきである。而して彼等自身は、寺院の形骸が時代と共に萎縮することを知り、且つそれが經濟的の原因によることを知つてゐながら、これを回復するの道も亦經濟的方法によらざるべからざることを悟らず、偶、余等先見の明ある首長等が、そのことを企てれば、何處の宗派でも、寺院は百方それを妨げ、而して失敗すれば糞味噌に攻擊する。が彼等自からは、坐して滅亡を待つ外策の出る所を知らぬ。笑止の至りではないか。

『或は云ふ。寺院經濟のための企業の如きは、所謂士族の商法である、手を出せば必ず失敗する、寧ろ滅亡の基であると。然し考へて見るがいゝ、手を出さなくとも滅亡するのだ。今や(以下二行削除)その爭ひに於て寺院は、勿論昔の寺院のやうに貴族と農民との爭ひによつて漁夫の利を占めることは出來ない。何となれば、中世に於ては、迷信的貴族と無知の農民とは、共に爭の緩和又は解決を當時に於ける知識の獨占者たる寺院の手に待つてゐたので、寺院は丁度今の辯護士のやうに、最も安全の地位に於て最も多くの利益を占めることが出來たのである。然るに今日の資本、勞働の二つの階級の爭に於ては、資本家階級は、近世科學の開拓者だけあつて、嘗ては宗教排擊の急先鋒だつたのである。今日でこそ溺るゝものは藁でも攫むで、寺院の協力を求めてゐるが、然し彼等は無知と迷信とによつて寺院を盲信してゐる譯では決してなく、全く一時の方便に使ふものであるから、決して不當の利得を寺院に與ふる間抜けは演じないのである。といつて正當の利を受くることを寺院が主張しても、その計算が商人の品物の代價と違つて空疎な根據に立つてゐるので、踏み倒される。資本家階級は、寺院に骨を折らせるが、人民の資源は寺へ行かずに、自分達の會社銀行に來るやうに策することを忘れないのである。だから寺院は骨の折れる割に儲けが少ない。と云つて無產階級の財布を覘つても、これ亦近代の科學的精神は、資本家階級の藍より出てそれよりも青く、到底宗教的信仰を彼等の社會意識の根柢に置くほど中世紀的に

なることは出來ないのである。況んや寺院の態度は屢この近代的闘爭に於て無產階級を裏切るので、三歲の童子も『宗教は阿片なり』などゝいふことになつた。これでは寺院がいかに××の後援を求めても、××からも餘り道具にならぬと見離される時の來るのが遠くはないのである。零細なる賽錢の上らざるは當然のことである。尤も淺草觀音が年に何十萬圓の收入をもち、アメリカのカトリツク寺院の資產總計が何十億だなどゝ噂される間は多少安心してゐるもいゝが、然しかやうな形勢を利用して寺院の資產を蒐集することが宗教そのものであるとすれば、寺院の仕事は、各國の大藏省の外債局に委ねてしまうがいゝ。

『余は重ねて告白する。余は宗教の何たるかを知らない。從つて宗教そのものの社會に於ける生命如何といふやうな問題については一言も語る權利がない。だから財團としての寺院の經濟を維持することによつて余等の階級の生命を持續せしめんとしたのである。余の態度と口吻とは如何にも諸君に反抗するが如き外觀を呈してゐるが然し、かりにも世襲的首長の地位を占めたものが、宗派の生命について諸君よりも冷靜であり得る筈はない。

『誤りに余は敢て斷言する。余の言語、擧動が寺院を滅ぼすものであると解するものは、全く原因、結果を顚倒してゐるのである。社會の津浪が寺院の財產を押し流さんとするのを防がんとし却つて自から押し流された余は、たとへ無謀を企てゝ滅びたものであるとはいへ、寺院に對して倍償を求める權利こそあれ、寺院から罪人扱ひをされる法はない。

『余が寺院を棄てたのではなく、寺院が余を棄てたのである。』

## 寺院に救はれた男

銀造がにつちもさつちも行かなくなつたことは珍らしくもないが、銀造自身、につちもさつちも行かなくなつたと考へたのは珍らしいことであつた。

銀造は三十年ほど前に信州から東京にきて、名ばかり『自由』の勞働者の群れに投じて以來、毎月平均二三回は必ず、につちもさつちも行かなくなつたのである。然し彼れはいかににつちもさつちも行かなくなつても、決して、愈〻につちもさつちも行かなくなつたと考へることは決してなかつたものだ。その筈だ。國の畠の中で母親に產み落されてから、水吞百姓の子と育て上げられ文字通り、淺間の燒石にかぢりついて生きて來た銀造は、足の下に土さへあれば生きて行ける植物のやうに、につちもさつちも行かないと考へる能力をさへ失ふことによつて頗る泰然としてゐたのだ。が、その彼が突然、愈〻もうにつちもさつちも行かなくなつたと考へ出したのは、全く年齡のせいであつた。彼れは土だけかぢつて六十近くまで生きて來たのでは

然し、銀造は、人間が今日の社會に於てさう考へた時に當然とるべき三つの道——乞ふか、×××、死ぬか——のうちの何れをとるかといふ段になると、躊躇なしにその第二のものを採るだけの自信はあつた。銀造がにつちもさつちも行かなくなつたのは、彼れの能力に原因したことではなく、その能力の使ひ途のないためであつたので、彼れは、死ぬにも及ばず、乞ふにも及ばず、從つて當然『××』ことになるである。

で彼れは夜更けて、郊外の火葬場の近くの大きい寺院の境内に忍び込んで本堂や庫裡の廻りをうろ／＼してゐるのである。

彼れの新らしい職業に於て、銀造が先づ寺を撰んだのには理由がある。

信州の淋しい山の町に産れた銀造は、町の子供等と共に、その町の外づれにあつた大きい禪寺の境内を遊び場にして居た。それは山村には珍らしい、宏壯な寺院で、その本堂の大屋根は、ごろた石を載せた、多くもない町の家々を押し潰したやうな恰好で、その上に聳へ立つてゐた。貧しい山の町の家々は、全くこの寺院の大屋根を支ふるために掻き寄せられた石塊のやうに見えた。その寺から半道ほど離れた所には隣村の寺があつたが、これも町の寺に劣らぬ堂々たる寺院で、たゞ町の寺は瓦葺だが村の寺は萱葺きであつた。

町の子供等と村の子供等とは、めい／＼自分達の寺を誇り合つてゐたが、町の子供が村の寺の屋根が瓦葺きでないことを嘲ると、村の子供はその寺の萱屋根の葺き返へには三千圓かゝるといふことを何處からか聞いて來てそれに對抗した。然し寺は双方とも荒れ果てゝゐて、町の寺の瓦屋根と村の寺の萱屋根とは、何方が肥料がきいたかを競爭してゐるやうに、共に茫々と草を生やしてゐた。さうして双方とも所謂伽藍堂で、坊主などが住んでゐるとも見へない有様だが、町の方の寺は若い文學士が住職、村の方は白い髯を生やした老僧であつた。然し町の坊さんはいつも縣廳の役人のやうな洋服を着て、大抵東京へ出て留守だつた。村の老僧は、大學者だといふことで、村の人達は、その坊さんが、まるで東京から來た大學の先生の講演のやうな說敎するのを、ちつとも譯はわからないが、自慢してゐた。

然し、子供の銀造は無論そんなことは問題にしてゐなかつた。銀造には、たゞ町の寺の瓦屋根と村の寺の萱屋根とが問題になつてゐただけだつた。彼れは、その素敵に大きい屋根の下にたつた二三人の坊さんだけが住んでゐるのを不思議に思つた。銀造は自分の家などは、その寺の屋根の下に十も二十も入つてしまうと思つた。その自分の小さい家には十人近い人間が住んでゐるのに、その大きい寺に二三人しか人が住んでゐないわけが銀造には何うしてもわからなかつた。自分達のやうにきたない、狹まくるしい家に住んでゐる人達が、どうして皆で寺へ押しかけて行かないのだらうと不思議に思つた。自分達のやうな子供だけは、いつも荒れ果てた寺の境内を遊び場にして、時々本

堂へも侵入して騷ぎ廻つて、追ひ出されることもあるが、村の人達は皆狹くるしい家にごろ〳〵してゐて、何うしてこんながらんとした大きな寺をほうりばなしにしておくのだらう。何故夜夜具を持ち込んで寢に行かないのだらうと、銀造は不思議でならなかつた。

彼れは、學校へ行くやうになつてからは、時々學校へ行つたふりをして町の寺の廻廊に寢ころがつて、辨當を喰つて夕方家に歸ることがあつた。坊さんが留守で見つかる慮のない時には本堂に入つて佛壇の後ろの暗い所で寢たりするが、坊さんに見つけられ相な時は、廻廊の下にもぐり込んで、椽の下に寢ることにしてゐた。

彼れは晝間だけしか寺に寢られないのが殘念でならなかつた。銀造の家は彼れにとつて甚だ寢心地のよい家でなかつた。狹くるしい所に大勢寢るので、夏などはとても暑くてたまらない。皆どたんばたんとめい〳〵の身體をぶつけ合つて轉ろがるので、まるで寢ながら相撲をとつてゐるやうだ。冬は冬で、隙間から吹雪が入つて布團の上に雪のつもつてゐるやうな晩が多かつた。『こんな晩にお寺へ行つて寢たらいゝ氣持ちだらう』と銀造は夏でも冬でも毎晩のやうにさう思はないことはなかつた。それだのに、晝間だけ、しかも泥棒のやうにこそ〳〵と、あの廣い寺に入つて行つて、隅の方で小さくなつて寢るのは馬鹿馬鹿しいことだつた。

『やい子僧、又こんな所に寢てけつかる。』時々坊さんに見つかつて、さう怒鳴られて、襟首をもつて吊り下げられながら追ひ出される時などは、銀造は、譯もなく癪に障つて、吊るされながら『何んでえ何んでえ』と怒鳴るのであつた。

見つかつて坊主に吊り下げられることが度重なるに從つて銀造の『何んでえ〳〵』の聲がだん〳〵大きくなるので、坊主も默つて吊り下げてはゐなかつた。

『この餓鬼、何んでえとは何んだ。學校へも行かずにこんな所に寢てゐる奴があるか。こゝはお前等の寢る所ではない。こん度來ると、棒縛りにして駐在所の巡査に引渡してやるぞ。』

銀造は、吊り下げられながら、『何んでえ〳〵』と怒鳴るのだが、それは、こんな廣い寺に、自分のやうな子供が一人位寢てゐたつて邪魔にもなんにもならないのに、坊主が目の敵にして追ひ出さうとするのが癪に障るからだつた。いかにも、寺で晝寢したゞけで巡査に引渡されるなら、その寺を我物にしてそこで寢たり起きたりして、人を追ひ出すやうな坊主は首斬り役人にでも引渡さずばなるまい。

この事が學校に知れて、銀造の家に學校から注意したので、彼れは親父にこつぴどくどやされたが、その時、彼れは、何うして寺に寢て惡いのだと親父に喰つてかゝつた。親父は、寺に寢たのが惡いのぢやなく、學校へ行つたふりをして寺に寢てゐたのがわるいのだといつて聞かせた。

それから銀造は、時々夜になると――それは夏の[illegible]ことだつたので――家を飛び出して寺へ行つて寢た。家のものも始めは、[illegible]が見へ

ないので大騷ぎしたが、寺の廊下で寢てゐるのだといふことがわかつて皆安心した。銀造は、いくら小言をいはれても、ぢきに又飛び出すので、家のものもしまひには根敗けして、寢るのもいゝが、風を引くといけないから毛布をもつて行けなどゝいふやうになつた。

『坊さんに目つかるでねへぞ目つかるとふん縛ばられて釣鐘堂につり下げられるでの。』

お袋は度々そんなことをいつた。だから銀造は暗くなつてからでなければ出かけなかつた。

銀造が寺を撰んだのは、どんな新らしい歴史でも、古い歴史の傳統から全く離れ切つたものではあり得ないためである。

然し、銀造は餘りに歴史に囚はれ過ぎた。彼れは、夜中に寺の廻りをうろ〳〵してゐるうちに、自分の目的が、新らしい職業のため――卽ち『××』ため――であることを全く忘れてしまつて、それはたゞ彼れの子供時代の歴史を繰り返すためであつたかの如くに、彼れは、子供の時分したやうに、物を持つてゐる坊主の住居の方を窺はずに、何も持つてゐない本尊の住居――本堂――を窺つた。

この新前の侵入者は、子供時代の經驗に助けられて、とう〳〵本堂に入り込んだが、もとより普通の寺院のことだから、賽錢も碌に上つてはゐない。經机の上におひねりが少し許り載つてゐるが、銀造は、子供のうちにもさういふものには氣がつかなかつたので、それよりも子供の時分にさうした如く、本尊の前のお盛り物に向つて突進した。尤もそれは極端に空腹だつたからでもある。

彼れが歴史に囚はれたのはそれだけではなかつた。『歴史は繰り返す』といふ原則をそのまゝに、銀造は、お盛り物を平らげると、そのまゝそこに寢てしまつた。

歴史の繰り返しは停止する事を知らなくなつて、翌朝、坊主は、銀造の襟首をつかんで吊り下げる所だつたが、繰り返す歴史にも時代による變化は免れないのであつて、その襟首をつかんだものが坊主でなしに、その代理人たる巡査であつたゞけが違つてゐた。

所で、この新らしい歴史も亦原則通り繰返されて、その後も銀造は、につちもさつちも行かなくなつたと考へる度に必ず寺院へだけ侵入するのであつた。さうして彼れは『寺院は寢る所』といふ子供時代の所信を何うしても翻すことが出來ないので、本堂に入り込めば、必ず寢た。從つて必ず翌朝、坊主の代理人に襟首をつかまれた。

そこで銀造は、僅かの月日の間に忽ち前科數犯の常習性犯罪者として、國家の犯罪統計の數字を殖やす點に於ては有數の犯罪人たるに至つた。然し、それがために彼れは、もう決して、につちもさつちもゆかなくなつたと考へる必要がないことゝなつた。さういふ時には、寺院に侵入してお盛物を喰つて寢てゐさへすれば、その(七字削除)をもつて(五字削除)され、容易につちもさつちも行くのである。

銀造は、現代に於て寺院に救はれた、極めて珍らしい男である。

# 蘇峰自叙傳(追憶記)

蘇峰　德富猪一郎

## 第十五　同志社在學中の記憶(二)

明治十年の末か十一年の初か、はつきり記憶しない。唯だ此處に想起す一事は、前に記したる矢島伯父に伴はれて、東京より京都に來た醫科大學生の大久保眞次郎が同志社に入學した事だ。予は彼としみ〴〵交際しなかつたが、東京に於ける藤島伯母の家にて屢〻面會した。彼は熊本城北山鹿郡の百姓の伜であつたが、俊才にて、熊本病院附屬の醫學校に入り、和蘭人マン——スの門人となり、緒方正規、中島某、北里柴三郎等と共に選拔されて東京の醫科大學に入つた一人である。多分その學費は、予が伯父矢島直方が擔當したものであらう。彼はやがて醫科大學を卒業する間際であつたか、若くはそれに近かつたか、何れにしても彼はその仲間に於て餓鬼大將の一人であつたらしい。處が彼は何故に醫學校を去つた乎、兎も角矢島伯父に從つて東海道を京都までやつて來た。その後の事は知らなかつたが、後に彼の語る處を聞けば、彼は東本願寺の學僧小栗憲一の許に食客として入り込んだといふ事である。其後彼は如何にして其處を飛び出したか知らぬが、彼の云ふ處によれば、過つたる風をして鉢卷にて佛樣をはり倒して出て來たとか云ふ事である。何れにしても尻の据らぬといふ事は彼の特色の一にて、如何にして同志社に飛込んで來た乎それは予には記憶がない。併し彼が同志社に入つた事は、予にとつては可成り重大なる關係を持つ事となつた。當時同志社にはバイブル・クラスなるものがあつた。その主なる者は何れも熊本からやつて來た我等の上級生にて、

彼等は上は教師たる宣教師や新島先生を凌ぎ、下は他の學生を率ゐ、實に有力なるものであつた。予は第一アメリカの宣教師が威張るのが癪にさわり、第二には、予にとつては友人でもあり、且つ先輩でもあるに關らず、そのバイブル・クラスの連中が、我が物顔に同志社を振舞ふのが頗る癪にさわつてゐた。成程彼等は予より年長者である。又た彼等は大概教室に於ては、教師として予を教へ、予等は又た生徒として彼等より業を授けられてゐる。英書を讀む事、說教をする事、祈りをする事、それ等の點に於ては自分等は固より彼等に及ばない。又た及ばない事をよく知つてゐる。

併し漢學の知識や、學校以外の我國の現狀などに就いては、恐くは予の方が一日の長があると信じてゐる。それで別段彼等には感服してゐない。何かの機會に彼等に一泡ふかしてやらんと思つてゐたのに、それといふ相手もなく、味方もなかつたから、そのまゝゐたが、今偶然にも大久保眞次郎がやつて來た事は、予にとつては一方ならぬ味方を得た心地がした。

當時同志社には、同心交社と稱する一の團體があつた。かゝる變手古な名をつけたのは藏原惟郭氏が字引をひいてつけたのであるといふ事であるが、名は何れにしてもこの團體は所謂バイブル・クラス以下のものが主なる者で、藏原なども其中の論客として認められてゐた。云ふ迄もなく予もその一人、主なる一人であつたかも知れない。然るに大久保は何時の間にかそれに加入した。而して盛んに我輩と同一の側に立つて演說やら、討論をやつた。大久保は予に比すれば又た一日どころでなく、十日以上の長があつた。予は我が家庭から洋學校を經て東京に赴き、東京でも親類の家に寓居して、それから京都に來たばかりで、世間の事抔を知つてゐる筈はなく、折角知つてゐる事も、それは大概ね書物の上から得た知識に過ぎない。處が大久保は多く世間を渡つて來た。何れの時代でも醫者の學生は、普通の學生よりも一口に云へばにやけてゐる。大久保は熊本の醫學生であり、且病院の助手をも勤めてゐた事であれば、最早熊本にゐる中に、一通り世間の味は嘗めてゐたものだ。それが東京に赴き、又た京都に來て、東本願寺の學僧の中に暮してゐたといふからして、予等の知らない世界を多く渡つて來た。彼はたか〳〵辯舌が達者であつた。又た時としては奇想天外よりおつる如き事を云ひ出した。甚だ感激性にも富んで、空涙とは思へない涙

さへ流した事もある。要するに彼はそれ程の腹黑ではなかつたが、却々才子であつた。智慧が多かつた乎、少かつた乎は疑問であるが、種々の事を目論む事は最も長じてゐた。予は悉くとは云はぬが、多くの點に於て彼と共鳴する所が多かつた。彼は又た餓鬼大將の資格があり、その周圍に種々の人を集める事が上手であつた。或人の目からみれば、年齡の差から云ても、經驗の多少から云ても、予も或は當時に於ては彼の子分とみられてゐたかも知れない。併し正直に云へば、予は決して彼を首領抔と仰ぐ氣持はなかつた。予は如何なる場合にも人を子分とせない迄も、自分が人の子分となる樣な事は出來なかつた。併し彼を味方に得て、大にバイブル・クラスに對抗する論陣を張つた。

予が初めて歸鄕したのは、明治十一年の春であつたと思ふ。家を出た時には十四歲の少年であつたが、家に歸つた時には十六歲であつた。併し足掛け三年の後に家に歸つてみれば、熊本は十年の亂にて燒拂はれ、やうやく所々に新築が出來上り、僻處に瓦礫狼藉の有樣が殘つてゐた。予が家は郊外にあつた僥幸ひに厄をまぬがれたが、それでも戰爭の損害は殆んど平等に受けてゐたらしかつた。歸鄕當時は予は恰も水の出鼻にて、恐くは予の生涯に於て最も熱心なるキリスト敎信者であつた時であらう。予は傳道といふ事を積極的にやらなかつたが、キリスト敎に就いて間違つた事を云ふ人がある時には、遠慮會釋なくこれを辯駁し、又た予の信ずる所を說明した。父母は予に就いて如何に考へられたか、恐くは困つたものだ位には思つてゐたらうが、猶一縷の望を予に屬してゐたに相違はない。されば父母は寧ろ外間の非難に對して、予を辯護する位置に立つた樣である。或時父の社中の家に數輩集りたる際に、父に向て『耶蘇敎などを信ずる男は放蕩者より餘程惡しくある。放蕩者は只だ酒色に身を委ねると云ふ丈であるが、異端を信ずる者は如何に品行は方正でも、その害の及ぶ所は多くある』とて、頻りに予の事に就いて吾父を說得したといふ事であるが、予は彼等の無理解を遺憾とし、何れ他日は彼等がその事を悔悟するの期あるべしと考へ、唯だそれ等の事は聞き流してゐた。併し吾父にとつては、如何にも氣毒に考へた。父は全く予とその學友との間に板挾みになつてゐたやうだ。されば予は何れの日か父の心を安ぜんと思つてゐた。當時熊本には父等の仲間によつてたてられたる講習會があつて、何れも握飯を攜へ相會した。而して種々の

問題に就いて討論した。予は父に伴はれ、父の友、後には予の友となつた山田武甫氏の邸に赴き、終日板緣の上に坐つて種々の愚論の取りやりを傍聽してゐた事を記憶してゐる。

兎も角も予は如何にして父母の同意を得たかを知らぬが、予が弟健次郎氏を伴つて同志社に行く事となつた。當時健次郎氏は數へ年の十一歲で、何故に父母が彼を手放して予に托したるか知らぬが、予から考へてみれば父母は意見を予と異にしたがらも予を信じてゐたといふ事がわかる。又た健次郎氏が既にその時に、予の父母の手に合はなかつたではあるまいかと思はるる所もある。手に合ないといふ事は兄弟同樣であるが、合ない方法は餘程異つてゐたかと思はるゝ。予は何れかと云へば、何事も豫定の計畫をなし、それが間違つて來た時に種々問題を生じ來つたが、弟は寧ろ其時〳〵の氣紛れにて問題を起したやうだ。一口に云へば予には物事が豫定の如くさへ行けば何等の問題はないが、弟には豫定そのものがないから、やゝもすれば問題を起す傾きがあつたとでも云へようが。何れにしても予は弟を伴ひ京都に赴く事となつた。而して父は予等兄弟を京都に赴かしむるを心細しと思つた乎、幸ひ父の友人、白杉古澤兩氏が東京に赴くから神戸まで同行といふ事となつた。白杉氏は陸軍少佐を罷めて、當時は何事をしてゐたか知らないが、後には日本鐵道會社の重役となつた。古澤氏は熊本縣の官吏であつたが、當時は多分吾父等と共に役をやめてゐただらうと思ふ。吾等は例の如く熊本から長崎に赴き、飛脚船を待合せて長崎に數日宿泊したが、兩人は何時も吾等兄弟を後に殘して他に出掛けた。予は無邪氣に彼等が歸へり來れば『貴君方は如何なる御用があつて出掛けられた乎、何處に行かれた乎』などと云つて質問した。これは全く予にとつては無邪氣であつたが、彼等は後にこれ程困つた事はないと人に語つたといふ事である。古澤氏はなかなか論客にて、予と年齡は父子の如き差があつたが、常に予を相手に議論をした。或朝出會ひ頭に『貴君方は昨夜のことを知つてゐる乎』ときくから、『寢てゐたから知らない』と云つた。それを聞くや彼は勝ち誇りたる顏をもて、『寢てゐた後の事さへわからぬのに、死んだ後の事がわかつてたまるものか』と、予に向つて予が靈魂不滅說を否定せんと試み、それから一議論初めた事を記憶してゐる。

當時の汽船は固より三等にて、中甲板に茣蓙を敷き、そこに案

客群居してゐるのであつた。たま〳〵船中にて古澤氏と議論をなし、盛んにやつてゐた。予は當時携へたる『天道溯原』といふアメリカのマルテンスが支那文にて著述したもので、耶蘇教證據論とでも云ふべきものであらう。それを引出して盛に辯立じてた。固より古澤氏はそれにやりこめられてゐたが、傍聽者も殆んど雲の如く相集り、中には『書物から引出して理窟を云へば、とてもかなはぬ』抔と云つて、予が小倅にて長者をやり込めるのを面憎しと思つたか、古澤に同情した乘客もあつた。當時予は『唐詩正聲』を携へて頻りに愛讀してゐた。白杉はこれを見て不思議に思ひ、『貴君は變な書物を讀んでゐる』抔といつて、此奴は如何にも變な奴だと云はんばかりの顏をしてゐた。

斯くて神戸から彼等と別れて、我等兄弟は京都に歸つた。後に古澤は熊本に歸へりて父及び父の友人卽ち實學黨の諸先生逹に向つて『貴君方は油斷をしてはいけない。久しからざる中に貴君方はかの小倅共の爲にやりつけらるゝに相違はない』とて、頻りに心配想に話してゐたとの事である。その古澤氏の子は靜岡縣の警察署長、郡長、時としては沼津の市長などをなし、今は熊本に歸りて、熊本市の電氣局長をしてゐる。

十二年の夏は岸和田に赴く事となつた。岸和田の殿樣は岡部長職子とて洋行をなし、又た一時キリスト教をも信じたる人にて、それが緣故であつた乎、否乎は知らぬが、同志社とは可成り關係があつた。予等は三十石船にて伏見から大阪に下り、而して岸和田迄歩行して赴いた。予は健次郎氏を携へたれば、途中車に乘つた。斯くて或一軒の家を借りて二十名内外の學生が自炊する事となつた。各々役目を擔當したのに、人もあらうに予を炊事係の長に選任した。予はその職務を受くるや否や、每日南瓜の汁と決めてそれを日每に勵行した。一日二日は人々も辛抱したが、日が經つに從つて何れも不平を鳴して來た。併し予は平氣で『君等が予を炊事係りにした以上予のやる事に從ふべきである』と平氣でゐた。幾日南瓜の汁が續いたか知らぬが、その中に家永豐吉氏がやつて來た。彼は予に一歲の年長者で、年に不似合に世間の事を知つた者にて、彼は京都の新京極にて競賣りをみて、母の死するや家事を整理する爲に故鄕柳川に歸り、人を集めて競賣りをやつた。故鄕の人々は何事も知らぬ小倅が賣る事なれば定めしよき掘出し物もあらんと集つた。それを家永は京都の新京極の競賣りの風をそのまゝ學んで、盛んにせり上

げ、その爲に意外なる儲をした程の男である。されば彼は予に代つて炊事係となりて、その問題は落着した。予が弟は最も西瓜が好物であつた。或時西瓜を飽食した餘にてもあらう。夜中頻りに腹痛を訴へた。余は半睡半醒の間にそれを聞き流してゐたが、翌朝起出でゝみれば室は勿論、緣から庭の石まで、至る處に下痢の痕が殘つて、その掃除には頗る閉口した。これ程の事であれば、ねむさを忍んでも早く起き出ればよかつたと後悔した。

又た或時友人兩三名申合せて牛瀧といふ處を見物に行つた。山の奥にて瀧があり、なか〳〵よき處であるが、扨茶飯を喰つていよ〳〵勘定といふ事になり、三人持合せの分を出してみても猶ほ若干の不足があつた。今更ら如何ともする能はず、そのまゝ日暮れに近き迄其處に休んでゐたが、遂に同行の一人をしてその事情を申述べ、後から拂ふといふ事にてやうやくそこをのがれ出で來つた。

予が同志社に於て當時親しき友人といふは、杉田勇次郎、辻豐吉、木全祝抔であつた。杉田勇次郎は攝州三田の者にて、彼は固より熊本バンドではなかつた。彼は後に元良博士として心理學の大家となつたが、同志社にゐる中から、スマイルスの自助論を愛讀し、同心交社の集りでは、いつも自助論から引張り出して、發明家の苦心談等を演説した。彼は神は無用のものを作らずといふ事にて、髪の毛もかることをせず、爪も伸ばす丈は伸ばし、如何にも不思議の風采をしてゐた。彼は予よりも若干の年長者であつた。

辻豐吉は卽ち家永豐吉にて、彼は柳川の者にて、その父は聖堂等にて學び、維新の際には、大津縣の知事か何かになつた。漢學などは出來る男であるらしかつた事は、その藏書をみても知らるゝ。其子豐吉氏は洋學校に入る際から英語には堪能であつたが、一見才子らしき風をして、予には彼がバイブル以外種々の英書を讀む力があるから、その意味に於て益友であつた。

木全祝は卽ち後の大西祝博士で、彼は年齡に於て予の後輩であつたが、予は彼に當時から望を囑してゐた。

その他予に利益を與へたと思ふのは、山崎爲德、浮田和民の二氏であつた。山崎氏は後藤新平、齋藤實などと陸中水澤の出身にて、熊本人が維新の際東北に官遊したる關係から、彼も又た熊本洋學校に來つた。而して熊本洋學校から東大の前身開成學校に赴き、開成學校から又た同志社に轉じ來つた。彼にし

て若し東大にゐたならば、東大の誇りとなつたであらう。予は初めて彼から、カーライル、マコーレー、エマースン等の名を聞き、彼が所持してゐるカーライル文集などを瞥見した。又た同志社にて唐宋八家文を所持したのは、彼のみであつたから、予は彼からそれを借覧した。彼の漢學の力は、左程ではなかつた。彼は蘇家三氏、老蘇、大蘇、小蘇と云ふべきを、大蘇、中蘇、小蘇と云つてゐた。大蘇は即ち蘇老泉、中蘇は即ち蘇東坡、小蘇はその弟穎濱である。又た彼は山陽の阿辰を哭するといふ詩を英譯して、それを女子とした。阿辰は即ち辰藏にて固より男である。斯の如き事を云へば、彼が漢學の程度もたいしたものでもなかつたが、兎に角彼は當時の同志社仲間では、英文學にも漢籍にも二つながら卓越してゐたと認められてゐた。

又たその外に浮田和民氏がある。浮田氏は熊本洋學校から予も知つてゐた。予が最初に洋學校に入つた時に、浮田氏は既に上級生としてゐた。予は同志社にて浮田氏からバンヤンのピルグリムス・プログレッスなどの譯讀を授つた。それよりも予に有益であつた事は、君が頻りに馬琴の八犬傳を予に推奬してきかせた事である。それと同時に福澤諭吉氏の文章を予に紹介した事である。予は子供の時から太閤記、三國志、呉越軍談、漢楚軍談等の軍書類はよく讀んだが、小説、艸草紙の類には目をふれなかつた。然るに浮田氏より馬琴を紹介せられ、又たやがて大久保氏から爲永春水の『イロハ文庫』『梅曆』なども紹介せられ、一通りこれを讀んだ。予がその方面の知識は、全く同志社にて得たるものであつた。其後は殆んどそれ等のものに目をふるゝ機會がなかつた。併し予は馬琴の文章とか福澤氏の文章を讀みは讀んだが、予は寧ろ自ら選擇したる福地氏の論文をより多く讀んだかと思ふ。その他苟も當時の出版したるものは、何によらず手當り次第讀んでゐた。されば日々の課業にはあまり勉強しなかつたとするも、讀書には随分骨折つた事は、云ふ迄もない。

(昭和三年七月十九日　大森山王草堂に於て)

## 第十六　同志社を去りたる始末

予の一生の中に於て、是れと云ふべき程の學校教育を受けた事は無いが、併しその中に於て、若し有りとすれば、兼坂先生の塾に於る幼年時代の教育と、同志社に於る少年時代の教育とを

舉げねばなるまい。

兼坂先生の塾に於て、予は平民主義の何者たる乎を體得したる心持がした。

同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を體得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所であり、他は新島先生に負ふ所である。予の眼中に於ては、兩先生必ずしも同等とは思はない。併し最初に予をして、人間は階級とか、門閥とか云ふものに賴らず、赤裸々の自力に賴らねばならぬと云ふ事を知らせたのは、兼坂先生であり。如何なる仕事も恥しい事は無く、恥しい事は仕事をせずして、ぶら〳〵遊んでゐると云ふ事であると知らせたのも、兼坂先生である。

而して人間は唯だ生活するばかりでなく、更により大なる目的の爲に生活するものであつて、人間の生活は畢竟、高尚なる奉仕の爲にするものであり、人間の價値は奉仕する心の純潔と熱誠とに依つて定まるものであると云ふ事を敎へたのは、新島先生である。

以上は必ずしも兩先生の口づから授けられたといふのではない。併し自然に予をして斯く感受せしめ、斯く覺醒せしめたのである。家庭に於ける父母の敎育は申す迄もない。

話元に還へる。明治十一年から十二年にかけては、予も當時學生間に流行した腦病とやらを患ふこと〻なつた。それには種々の理由がある。その主なる理由の一は、予は新島先生を信じ、先生に依つて基督敎を信じたが、併し齡と共に基督敎に對する疑問がむら〳〵と起つて來た。予はそれを如何にして押しつけん乎と心配した。予は洗禮は受けたが、基督敎の主體たる基督に就いては、何等親しむ心は起らなかつた。基督に親しむ心がなくして、基督敎信者と云ふは不思議の樣であるが、事實その通りであつた。

斯くて學校の課程として、基督敎辯證論を讀むにつけて、愈よ基督敎に對する疑が多くなつた。その疑を刺戟したる一は、新島先生以外の宣敎師、及び主なる基督敎信者に對する反感も加つてゐた事は云ふ迄も無い。予は彼等と別に何等交涉はなかつたが、彼等が予の目から見れば、基督敎信者らしき――尠くとも予が標準とする――理想に相當せざる事は、予に於て多大の遺憾であつた。

彼や是やで基督敎に對する胸中の煩悶が出で來つた。それか

ら何につけ彼につけ、感傷的の氣分になつて來た。その中でも死てふ問題が、最も多く予を惱ました。予は人と別れると云ふ事が、子供の時から非常に嫌ひであつた。所謂離別の哀愁と云ふ言葉は、予にとつては詩歌に詠ずるよりも、より痛切であつた。一寸親しき友達と別れる事さへ、幾日も幾日も樂しくなかつたから、予が常にホ！ムシックに惱まされた事も一通りでなかつた。

　親しく相接してゐる際には、左程でもなかつたが、予の心の底には、常に吾が父母が在つた。何時かは永遠の死で相別れねばならぬと云ふ事を煩悶した。死の煩悶と云ふ事は己れの死のみでなく、凡ての死に就いてゞあつた。彼や是やで精神の壓迫から、自然に欝陶しき氣分となり、その結果が當時で稱する所謂腦病となつて來た。



神戸一七雜報記者として同志社を去る際の寫眞。中央に腰掛けたるもの
蘇峰生其右に坐したるもの大西祝氏其次に腰掛けたるもの元良勇次郎氏

　予も人並に每夜必ず祈禱をして居たが、如何なる事を祈つた乎と云ふ事を、祈禱した後にそれを書き付けたものがあつた。

今から見れば、譯もたわいも無きものであるが、その祈禱の最も主なる一は『如何にすれば神を信じ、神と近付く事が出來る乎』と云ふ事であつた。併し如何に祈禱をしても、予の心は寧ろ神より遠ざかつて行つた。併しこれは世間で云ふ神より遠ざかつたのではない。予は別に何等の誘惑も受けず、所謂飲酒喫煙は愚か、その他の事に於ても、普通のクリスチャンの踏む可き事を踏み來つたので、それ等の點では別に窮屈も不自由も感じなかつた。

　神より遠ざかつたといふ事は、寧ろ正常なる——オ！ソドックス——基督敎徒たる事に、困難を感じたからであつた。

前にも記したる如く、予が新聞記者たらんとする決心は、既に明治十年頃から定つてゐたから、その爲には人知れず隨分骨も折り、勉強もした。當時新聞記者などにならんと云ふ事を、他に語つたとて、誰も相手とする者無きは勿論故、予自らも語る必要を感じなかつたが、予はそろ〳〵、その時分から大阪の新聞若くは神戸にて每週發行する七一雜報てふ雜誌等に投書を試みた。それは何時頃であつた乎、はつきり覺えてゐないが、少くとも明治十一年、若くは十二三年、即ち予が十六七八歲の頃であつたらうと思ふ。

斯くてぶら〳〵してゐても致方はないと云ふ事にて、新島先生と相談の上、愈々神戸なる『七一雜報』の編輯を手傳ふ事となり、先生の紹介にてそれに赴いた。それは明治十二年の春であつたかと思ふ。『七一雜報』は前に申す通り、每週一回の雜誌にて、當時宣教師O・H・ギューリック氏(O. H. Gulick)が引受けて居た。その印刷人は今村謙吉氏、その編輯者は村上俊吉氏であつたと覺えて居る。

予は取敢へず今村氏の宅に寄留する事となり、其處よりギューリック氏の宅なる編輯局に通ふこととなつた。當時の神戸は纔か海岸通りに町があつたばかりで、山手通りは、半ば野原や田畑であつた。今村氏の宅は、中山手通であつたと覺えてゐるが、其處から諏訪山の麓邊迄は、散歩するには極めて適當であつた。

予は一日か二日ギューリック氏の許に出掛けて、極めて平凡なる飜譯を手傳うたが、餘りに馬鹿々々しいから嫌氣がさし、早速京都に立還つてしまつた。予は幾何の日子を神戸に送つた乎を記憶しない。されど京都にて予を送別の際に撮りたる寫眞が、未だ出來上らない以前に京都に歸つて來た程であれば、極めて短時日であつた事がわかる。或朝、予が同志社の食堂に出て、食卓に就いてゐるのを友達共は見て、『幽靈ではない乎』と驚いた程である。

予は元來尻の落着かない男ではなかつたが、その時だけは除外例であつた。今更ら考ふれば、新島先生に對しては申譯がなかつたが、當時予は先生に向つて何等釋明する所なく、勝手次第に行動した事は、若氣の至りとは云ひながら、實に慚愧に堪へぬ次第だ。

當時予に新たなる光明を與へたものがある。それは村上作夫

氏の漢籍の講義である。それ迄も同志社には漢籍の先生が居た樣でもあつたが、別に氣にもかけなかつた。然るに十年戰爭後、豐後森の人にて、村上作夫なる人がやつて來た。この人がその門人や同輩を引連れて、同志社の附近に『淑蘭舍』なる私塾を開き、而して同氏が又た同志社の漢學の教師となつた。この人は備中山川方谷翁の門人で、陽明學をやつたと云ふ事であるが、兎に角聲がよく、辯舌は更によかつた。予等は氏より文章軌範、史記等の講義を澤山でもなく、一週に一回か二回聽いたのであらう。氏は金聖歎の才子古文を金科玉條として、その中の若干を拔萃し、それを活字に附して學生に頒つ事とし、それを講じ、時としてはそれを書取らしめた。同時に作文の題目を課し、それを添削して呉れた。この人は當時漸く三十を出た位であらう。なか／＼氣焰もあり、自ら運ぶところのものはそれ程とも思はなかつたが、文章の評論にかけては、頗る明快、痛切の感を與へた。少くとも予は氏に依つて作文に於る新たなる光明を與へられたる感がした。

予は何時頃よりであつた歟、同志社を出て郊外の田中村なる、或る水車の二階を借り、其處に大久保、家永等と合宿し、同志の者は暇を偸んで其處に集り、恰も其處が一の同志社に於ける異分子の倶樂部となつてゐた。

予はその時分水車に對して大聲を發し、三國志などを朗讀するやら、或は演說の眞似事をするやら、兎も角も演說の學習と云ふではないが、自分の思うたる事だけは、人の前に滯りなく述べ得るだけの工風を凝した。その中に大久保や、家永や、その他友人共は同志社を去り、東京に赴いたから、田中村の寓居も解散して、予は再び同志社の寄宿舍に歸つた。これは明治十二年の夏頃であつたらうと思ふ。

要するに予の仲間である、謂はば同志社の異分子は、大概同志社を去り、殘る者は予と若干の友人のみであつた。而して明治十二年には、バイブル・クラスなる上級生も大概卒業の上、所々方々に傳道に赴き、學校に止るものは、その中の小數であつたかと思ふ。予も明治十二年の下半から、十三年の初にかけては、久振りに從順なる同志社の學生となつた。當時は上級生として、聊か羽振りを利かして居た樣に覺えて居る。併し當時に於ても、予が宣教師に對する態度は、今日から考へても、餘り穩かではなかつたと思ふ。從つて宣教師も亦た予に對する態

度は同様であつたかも知れぬ。或日同志社教師の中にて、首座の教師の夫人が、突然寄宿舍なる予の室を訪れた。而して向ふから種々の事を話しかけたが、予は沈默して一言も發せなかつた。彼女もこれには興をさましたと見え、新島先生にその事を訴へ出た相だが、先生は如何にそれを聞いてゐた乎、先生夫人の語る所に依れば、

『襄（先生の事）も德富さんは近頃餘程攘夷熱が昂つて來た樣だと申て居た。』

と云ふ事である。別に攘夷熱と云ふでもないが、宣教師の妻君などが、學生の室に無遠慮に立寄つて見舞ふ事などは、餘計の事と考へて、相手にしなかつたまでゝある。

話は少し前に溯るが、予は同志社の演説會などにても、新島先生夫人などの事を、稠人廣座の前にて大聲疾呼して攻撃したこともあつた。別に惡意があるわけではなかつたが、夫人の風采態度が、先生の爲に信用を厚くする所以でないと感じたからであつて、今更ら考へれば、如何に少年客氣の時とは云へ、先生に對して慚汗背に洽ねきを覺えざるを得ない。併し予は明治二十三年一月二十三日、先生の大磯に於て永眠せらるゝや、直にその傍にて、新島先生夫人の手を握り、

『是迄は兎も角も、これからは貴女を先生同樣と思ふから、今後は何事も私に御賴り下され』と云ひ、不肖ながら今日迄その心を持ち續けて居る。

予は何故に同志社を去つた乎。趣味から云つても、氣分から云つても、何等予と同志社と調和を保つものはない。唯だ予が同志社に居たのは、新島先生に傾倒して居た爲である。予は最初に逢うた時より先生に傾倒して居た。此人は實に立派な人格者であると思つた。種々の事情が加はり、事件が伴つて來た。併しその確信は愈々一層深くなつた。

當時先生は予を如何なる程度に認めたか知らぬけれ共、予は先生に全き價値を與へてゐた。それが予の足を同志社に引止めしめた所以であつた。

併し予の新聞記者たらんと欲する心は、愈々旺盛となつて、新聞記者の學校は、唯だ新聞社あるのみと考へた。そこで大なる記者となる爲には、大なる新聞社に入り、その坩堝の中にて煮られ、陶冶されて、ものになるより外はないと考へた。又た予の友人共は、東京から頻りに來れと招いた。自ら省て見れ

ば、京都には共に語る者が無かつたとは云はぬが、甚だ尠なかつた。併し明治十三年の六月上旬は予も曲りなりにも、同志社の普通科を卒業するからして、それ迄は辛抱して踏み止る事となつてゐた。

然るに十二年の末か、十三年の初頃でもあつたらう。一の問題が持上つた。それは學校の都合にて甲と乙との兩級を合併する事となつた。この合併に於て、乙は得をしたが、乙の得をするだけ甲は損をした。上級生と下級生と合併すれば、上級生が不平を云ふのは、知れ切つた事である。その不平が昂じて、愈々騒が起つた。これは予には關係がないが、予の友人新島公義その他の面々が、被害派であつて、予は義俠心と云ふでもないが、その後押しをした。

種々の關係から予も深入りして、一方では學校の當局者、他方では予及び被害派の面々が相對立する事となつて、事は愈々面倒となつた。學校の當局者中には、後に横濱市長、若くは朝鮮銀行總裁となつた市原盛宏氏等もあつた。事は愈々面倒となつて、愁訴となり、遂には申合せて退校せんとする騒ぎとなつた。然るに此に意外の事が出で來つた。

毎朝學生を講堂に集めて、五分間ばかり訓話と祈禱をなす合がある。然るに吾等も例に依て出席したるが、新島先生がステッキの樣なる三尺許りの木片を携へ來つたから、不思議の事と思つてゐたが、先生は徐て立上り、滿場の教師及び學生に向つて、『今回の騒ぎの出來たのも、畢竟予の不德の致す所と信ずるから、謝罪の爲に自分は諸君の前にて自分を笞める事とする』とて、その木片を擧げて自ら鞭たれた。餘りの事にて滿堂呆れ返つてゐたが、やがてその木片は折れて三つとなつた。予等を初め人々先生の手に縋り、その袖を引き、漸く先生を座に就かしめたが、その時先生は、

吉野山花咲く頃の朝な〳〵
　心にかゝる峰の白雲

なる古歌を誦し、自分は常に此の古歌の如く、學校の事も、諸君の事も心に掛けてゐるが、不敏にして此心が未だ徹底しないと云はれ、これに就いては被害級の面々、今更ら恐縮の至りに堪へず、やがては新島公義氏がその歌を大書し、その歌の傍に不平黨の面々撮影し、これにて段落を告ぐる事となつた。

併し此事あつてより以來、予は何となく氣拙くなり、最早同志

社を去る決心をした。當時予は同志と共に同志社を去て、今出川邊に下宿をしてゐたが、そこが又た不平黨の巣窟となつた。

最初は同志社を去らんとする者、吾も〳〵とあつたが、愈々去るといふ場合になつては、新島先生及び學校當局の說諭に逢つて、漸次に減少した。新島公義氏は新島先生の弟の養子であつて、先生が米國に亡命したる後は、先生の弟がその家を嗣ぎ、弟の跡を又た公義氏が養子として家を嗣ぎ、氏から見れば先生は義理ある伯父であつた。されば公義氏が同志社を去る事を、先生は斷じて許さなかつた。公義氏は同志社を去つて慶應義塾に行くと云つたが、『左樣の事は斷じてならぬ』と止められた。そこで公義氏は板挾みとなつて『此上は致方ない。切腹でもする所であるが、當世ではそれも出來ぬ。せめて坊主になつて諸君に謝罪する』と申出た。併し予は公義氏を坊主にしたとて、何等得る所がないから、それを止め、愈々同志の面々と予の下宿に集り、珍らしく鯛を買つて鯛膾を催した。鯛膾は退校に通ずるからだ。愈々同志社を去る場合には、予の同級生河邊久治及び次の級なる湯淺吉郎二氏であつた。猶ほ津川仙君の長子元彰氏もそれであつたが、同氏は新島先生が仙君より同氏を託されてゐるからとて、强ひて止められたから、思ひ止る事となつた。

當時予等は凡有る所持品、机から食器まで悉くこれを當時古道具屋をしてゐる大澤善助氏に賣拂つた。予は實は旅費に困つたから、公義君を介して新島先生にその借用を申込んだが、流石の先生もその時だけは立腹し、

『德富君の面は千枚張りである乎。予を踏みつけた上に旅費まで借りて出掛けんとするは、餘りに甚がい〻話ではない乎』

と云はれたと聞いたが、予は先生を人間よりも神樣に近き人と思つたから、勝手に右の如き我儘なる相談を持込んだのである。

予は同志社を去り、東京に出立する前日先生の宅を訪うて、その諒解を得、且つ先生より寫眞を受取つたが、此の寫眞の裏には、

『大人とならんと欲せば、自ら大人と思ふ勿れ。

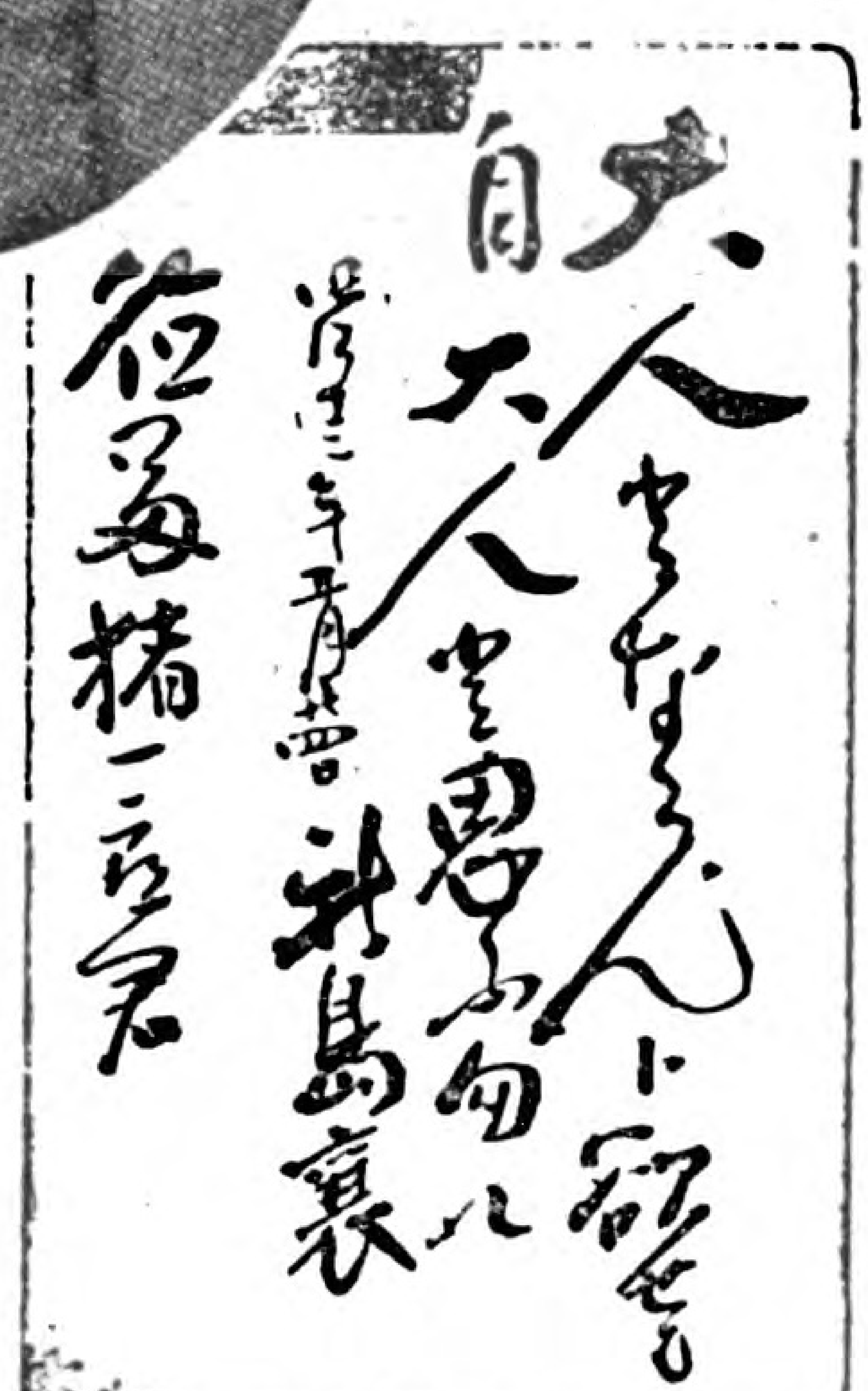
德富猪一郎君　　新島襄』

と書いてあつた。『大人とならんと欲せば、自ら大人と思へ』と云ふ事が普通であるが『思ふ勿れ』と云ふ事は、何故であら

う。先生は予が餘程自惚れでもしてゐるかの如く考へ、予を誡められたものであらう。

扨愈々出發の日となり、今出川の寓居を出で、寺町を眞直に、丸太町上る新島先生の宅に至つた。その時には見送りの友人共が相續いて、先生宅の寺町に面したる門口から玄關先まで人が一杯であつた樣に覺えてゐる。吾等は胸に一物肩には荷物といふ氣持で、各々持物を前後に負ひ、先生の宅に暇乞に出掛けたらば、『暫く上れ』といふ事にて、餘儀なく荷物を下し、上り込んだらば、先生は又そろ〳〵東京行の危險多きを告げ、引止める口氣を漏された。殊に予の同級生河邊に向つては、『飛んで火に入る夏の蟲とは、貴君の事である』抔と頻りにその不可を說かれた。予は河邊に代つて何かと先生に答へ、その爲に時間もすぎ、最早晝時刻に近まつたから、兎も角も別を告げ、又た餘り時間がとれたから、見送りの連中にも先生の門口にて相別れ、其處から予、河邊、湯淺三人、それに公義君が相送つて、三條橋に來たが、最早や晝の時刻も過ぎたから、晝食を喰つて別れやうと、橋の袂なる一樓に登つてそこで晝飯を食つたが、愈々勘定となつた時、公義君がこれは予に任せて呉れと云ふから、不思議に思つて『何故乎』と云へば、公義君が申す樣、『實は君等が去る時、伯父が云ふには、せめて晝飯でも馳走してやれと云つて、予に若干金を渡してゐる。これは予が拂ふのではない。伯父が拂ふのだ』と云ふ事であつて、今更らながら予も『何を云つても先生の方が吾等よりも一枚上である』と、覺えず頭が下つた。





新島襄氏と其筆蹟

# 豫約 募集 豫告

# 牧水全集

## 偉大なる自然詩人の風格を賞慕せ！

わが日本のみが生み得る、眞に日本的な文學の精華として先づ第一に擧ぐべきは若山牧水の作品である。その自然を歌ふやまつたくこれと融化して自然そのものの聲となり、人事を歌ふやまた人間性そのものの流露となり、常に自由にして清新、萬人に愛誦されつつある。まことに氏の短歌こそは人麿、西行、芭蕉等の作と共にわが純粋の民族趣味を發揮せる精華として誇るべきものである。而してその飄々乎として旅に出づるや、常に模すべからざる紀行文となり、脱俗の風格行文の妙、神品とさへ稱せられた。氏はまた傑れたる童謠作家であり、詩人であり、小説家としても侮るべからざるものがあつた。殊に氏の書簡の輕妙洒脱にして眞を打つところは天下一品、たれ人の追隨をも許さぬ。いま牧水の全作品を網羅して餘すところなき本全集を手にする者は＊＊必らずや日本語を語る國民の一人として生れたことを感謝するであらう。牧水はただ單に傑れたる藝術家であつたのみならず、稀に見る高風の人格者であつた。本全集には到るところにその風格の豊かさが漂い輝いてをる。騷然たる現代に本全集を送り得ることは本社の欣快とするところだ。

**編輯顧問**
北原白秋
平賀春郊
福永渙
佐藤緑葉
土岐善麿

**編輯・校訂**
若山喜志子
大悟法利雄

**全十二巻・一冊一圓五十錢**

東京・芝・愛宕下町
**改造社**
振替東京八四〇二番

# 果樹

水上瀧太郎著

小村雪岱裝幀　四六判上製美本

定價貳圓（送料廿錢）

## 最新刊

果樹。鳩。花束。女事務員。罹災者。兇刄。素人小説家の經驗。命の親。晩年。以上九篇の小説は皆優しい眼ざしをして重々しく人生の核心に沈み込んでゐる。その洗練し切つた文章には垢が無い。情理の極まる所、美事に時代精神を捉へて美しい裸にしてしまふ。天使を洗ひ出す靜かなる愛と情熱と貫いて今一卷の集編が成つた。明窓にふさはしい必讀の良書が成つた。再び囂々たる稱讃が注がれるだらう。

---

犬養健著

## 南京六月祭

（南京六月祭、松吉の立場、Kamerad. アリストテレスと語學教師、正義と煙草、黄いろの花、硝子王の存在、秋歌（Cogito ergo sum）、女優、聖ピノチエツト、亞刺比亞人エルアフイ、後序。——）

價 2.00　送料 .20

---

泉鏡花著

## 昭和新集

（**小説** 絵本の春。鱗の糸。半島一奇抄。河伯令孃。卵塔場の天女。ピストルの使ひ方。**戲曲** 戰國茶漬。多神教。**解** 金色夜叉小解。**辯** 芥川龍之介氏を弔ふ。**隨筆、紀行** 城崎を憶ふ。眞夏の梅。火の用心の事。䕺を刈る。啄木鳥。御存じより。）

價 2.80　送料 .20

---

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八〇四二

# 改造文庫

布裝上製　百頁十錢　（裝幀恒川義雄）

**第一部**

- 第十篇　社會主義の發展　エンゲルス著　堺利彦譯（1）
- 第十一篇　マルキシズム認識論　デイツゲン著　石川準十郎譯（1）
- 第十二篇　辯證法的唯物觀　デイツゲン著　山川均譯（2）
- 第十三篇　哲學の實果　デイツゲン著　山川均譯（1）
- 第十四篇　神と國家　バクーニン著　本莊可宗譯（1）
- 第十五篇　婦人論　ベーベル著　山川菊榮譯（6）
- 第十八篇　エミール（上卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
- 第十九篇　エミール（下卷）　ルーソウ著　内山賢次譯（4）
- 第二十篇　國家論　オッペンハイマー著　廣島定吉譯（2）
- 第二十一篇　金融資本論　猪俣津南雄著（4）
- 第二十二篇　日本開化小史　田口卯吉著（1）
- 第二十三篇　日本經濟論　田口卯吉著（1）
- 第二十四篇　日本經濟學說の要領　經濟的帝國主義　瀧本誠一著（2）
- 第二十五篇　日本商業史　横井時冬著（4）
- 第二十六篇　日本工業史　横井時冬著（4）
- 第二十七篇　經濟學の實際知識　高橋龜吉著（2）
- 第二十八篇　リッケルト論文集　リッケルト著（2）
- 第三十篇　女工哀史　細井和喜藏著（4）
- 第三十二篇　社會進化と婦人の地位　ラッパポート著　山川菊榮譯（2）
- 第三十六篇　幸德秋水集　幸德秋水著（2）
- 第三十七篇　中江兆民集　中江兆民著（2）
- 第三十八篇　財產起原論　レヴィンスキー著　貴島克己著（1）
- 第三十九篇　組織論　レーニン著　鈴木厚譯（3）

**第二部**

- 第十三篇　俳諧七部集　萩原蘿月校（3）
- 第十四篇　蕪村七部集　萩原蘿月校訂（2）
- 第十六篇　神皇正統記　宮地直一校註（3）
- 第十七篇　奥の細道　芭蕉紀行文集　萩原蘿月校訂（3）
- 第三十五篇　北村透谷選集　島崎藤村編（1）
- 第三十六篇　樋口一葉選集　樋口一葉著（1）
- 第三十七篇　平凡　二葉亭主人著（1）
- 第四十篇　坊っちゃん　夏目漱石著（2）
- 第四十一篇　草枕　夏目漱石著（2）
- 第四十二篇　それから　夏目漱石著（3）
- 第四十三篇　一握の砂　悲しき玩具　石川啄木著（2）
- 第四十四篇　我等の一團と彼　雲は天才である　石川啄木著（1）
- 第四十五篇　山陰土產その他　島崎藤村著（2）
- 第四十六篇　作曲白秋民謠集　北原白秋著（2）
- 第四十七篇　獄中記　オスカア・ワイルド著　神近市子著（2）
- 第四十八篇　厭世家の誕生日　佐藤春夫著（1）
- 第四十九篇　日輪　横光利一著（1）
- 第五十篇　勞働者の居ない船　葉山嘉樹著（1）
- 第五十一篇　海に生くる人々　葉山嘉樹著（2）
- 第五十二篇　小公子　パアネット著　若松賤子譯（2）
- 第五十三篇　ホワイトファング　ジャック・ロンドン著　堺利彦譯（3）
- 第五十七篇　自選歌集　川のほとり　小泉千樫著（2）
- 第五十八篇　自選歌集　松の芽　中村憲吉著（2）
- 第五十九篇　自選歌集　海山のあひだ　釋迢空著（4）
- 第六十篇　自選歌集　立春　木下利玄著（2）
- 第六十二篇　自選歌集　人間往來　與謝野晶子著（2）
- 第六十三篇　自選歌集　槻の木　窪田空穗著（2）
- 第六十四篇　自選歌集　野原の郭公　若山牧水著（2）
- 第六十六篇　自選歌集　空を仰ぐ　土岐善麿著（2）

以下續刊

數字は定價を示す。1は拾錢、2は貳拾錢、3は參拾錢を以下之に倣ふ。送料1は二錢、2四錢、3六錢、4八錢、6十二錢。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# 最新刊◇新選名作集◇各冊壹圓◇改造社

送料各廿錢

東京芝區愛宕下町

振替東京八四〇二

## 新選 相馬泰三集

（短篇小說）ローマンス、泉水のほとり、地獄、夢、鞭、小さき影、六月、妹、ギフスの床、田舎醫師の子、落第生、卒倒、拳、羽織、M避暑地より、處女、破談、憧憬、欠勤の日、春、家鴨、一日、呪はれた魂、三鞭酒、家長、坂元先生、友、隣人、さよ子、闇、やまひ、B―軒事件、野の哄笑、Y驛附近、幼年の思ひ出、自信、たはむれ、ハンカチーフ、生きもの、喜代子、胸の痛み、亞米利加へ發つ前、SとT、耳火事、（長編小說）荊棘の路。

（六百三十二頁）

## 新選 室生犀星集

童子、後の日の童子、嘆き、わが世、わがことと人のこと、人生、押し花、笛吹く人、聖觀音圖、九谷庄三、喬生と金蓮、芋掘藤五郎、魚になつた興義、秋本の母、お龍大人、姉妹、筍子、母、造り花、花輪をおくる、田舎暮し、山河老ゆる、身邊、或女の一日、忘春述懷、露及の手記、妻が里、妹、彼女、野田山、暮笛庵の寶立、名園の燒跡、あら磯、遺稿「メリイ・ゴオランド」、七時半、神も知らない、木枯、古風な寫眞、山吹、イワンの聖人、天龍寺にて、冬の蝶、手袋、死と彼女ら、觀音院、山のほとり、幾代の場合。

（七百七十頁）

## 新選 久米正雄集

（長篇小說）天と地と。（短篇小說）手品師、虎、銀貨、流行火事、山の湯、父の死、不肖の子、母、競漕、艶書、嫌疑、選任、密告者、ある求婚者の話、彼女と私、秋の夜の話、エロスの戯れ、敗者、歸鄕、墓參、懶い春、金魚、山鳥、峽中記、雪の驛路、車上で、工廠裏にて、招かれざる客、路傍、病床、ある醫師の良心、他人の死、硫酸。

（六百五十七頁）

日本興業銀行參事 法學士 高平隆雄著

# 英米の投資銀行と投資證券

（菊判天金美本）

定價貳圓五十錢 送料廿二錢

## 最新刊

近來國際金融の發達は著しきものがあるが、我が國としても近く金解禁の時期に當面し一層英米の起債市場と密接なる關係に立つべきは言を待たぬのであつて其の實狀を研究し置くことは單に金融業者に止まらず一般企業者にとりても必要なことである。本書は英米の起債市場の實際を説明するとともに英米の投資銀行が長期金融に際し一般各種公市法人、鐵道會社、公益事業會社、一般工業會社、各種不動產、外國債等に對する投資態度の概要を示してある。本書に依つて英米長期金融の一般構成と其の組織を知り得るとともに外資輸入の必要ある場合の良參考書たるを失はぬ。

〔次　目〕



東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

吉田孤羊著

# 啄木を繞る人々

（四六判五百頁 梨地ポプリン極製）

定價壹圓 送料十四錢

情熱と革命の詩人啄木の周圍にはどんな人々が潜んでゐるか？啄木研究十年の著者が、彼を繞る人々七十餘氏との交情を描いて多角多面、歌のモデル、痛ましい戀物語、埋れた薄倖の詩人等々眞に小説以上の盡きざる興趣。

## 好評忽廿版

〔内容〕

**第一編 啄木夫人の生涯と藝術**― 前書、その生ひ立ち、啄木との初戀、その結婚生活、北海道の放浪、家庭の不和、啄木の病氣とその死、房州から函館へ、その臨終、彼女の歌。

**第二編 啄木を繞る人々**― 第一章血緣の人々―嚴父一禎、母堂かつ子、二人の姉、令妹光子、長女京子、その他の人々。第二章故鄕の人々―前書、工藤千代治、齋藤佐藏、畠山東川、ユニオン會の人々―伊東圭一郎、小澤恒一、瀨川草外、小林茂雄、岡山不衣、野村胡堂、金田一京助、上野廣一、小田島孤舟、富田小一郎、新渡戸仙岳、その他の人々。第三章 此海道時代の人々―紅苜蓿の萠芽、大島經男、吉野白村、岩崎白鯨、宮崎郁雨、齋藤大硯、三人の COMMUNIST、二人の文學少年、丸谷喜市、その他の人々。第四章文壇の人々―前書、與謝野寬―晶子、綱島梁川、岩野泡鳴、野口雨情、正宗白鳥、吉井勇、北原白秋、土岐善麿、富田碎花、若山牧水、佐藤北江。

**第三編 石川啄木と女性**― 前書、エロチックな回想、踊の師匠の娘、クリスチャンの女教師、螢の女、靡の女、スヰートピイの女、歌妓―小奴、歌弟子。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

全五卷（四六判。天金。絹裝。木版十度刷
裝幀　平福百穗氏。題簽　菅虎雄氏）

# 葛西善藏全集

一册二圓五十錢
送料各廿二錢

## 第四卷出來

〔內容〕

「感想」醉狸州七席七題。不愉快な程度。敢て陳辯。小感十一篇。冗語二篇。醉狸州閑話。お詫び。

「隨筆」東北の原野を夜汽車で過ぎる時など。近所の床屋の話。僕のポンチ。歲暮酒話。愚痴とクダと嫌味。この頃。故鄉に歸り行く心。一種の寂寞とした感じ。三宿にて。

「日錄」三月の日記。ボケ日記。

「作品批評」讀んだものから（大正十三年六月の諸雜誌）。讀んだものから（大正十三年七月の諸雜誌）。菊池君に。星湖氏の月評脫線ぶり。「戀愛行」の作者に。

「人物記」相馬泰三氏の印象。廣津和郎氏の印象（一）。廣津和郎氏の印象（二）。宮地嘉六氏の印象。谷崎精二氏の印象。宇野浩二氏の印象（一）。宇野浩二氏の印象（二）牧野信一氏の印象（一）。牧野信一氏の印象（二）。酒中印象二三。花袋先生の溫容。

「作品年譜」

既刊

第一卷　小說　自大正元年九月　至大正九年四月　計二十三篇

第二卷　小說　自大正九年五月　至大正十二年四月　計二十三篇

第三卷　小說　自大正十二年五月　至昭和二年　計二十篇

（近刊）第五卷　書簡集（附錄年譜）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# 世界大衆文學全集

## 第十七回配本(七月)二册

### 小デュマ著、プレボオ著◇久米正雄譯
## 椿姫・マノン・レスコオ
（價五十錢）

「椿姫」は巴里歡樂界に咲いた薄倖の名花マルゲリィトの哀しい情史である。生きんが爲に容色を鬻ぐ彼女が、純潔な青年と戀し、眞の愛に目醒めたが、社會や環境が、彼等の戀に幸ひせず、遂に病床に戀しい人の名を呼びつゝ、生涯を惡の華として散る大悲劇である。「マノン・レスコオ」は多情多恨の歌であり、愛と死の讃美歌であり、虐げられた若い魂の哀歌である。倫落の女マノンの艷麗に魅せられた一青年の熱血が、遂に駈落、騙詐、殺人、脫獄等の犯罪となり、流れ流れて他國の荒野にマノンの塚穴を掘ると云ふ哀怨な物語である。

### シユー著◇武林無想庵譯
## 巴里の秘密
（價五十錢）

純文壇、大衆文壇の各大家が、衆口一致で推薦された、待ちに待たれた珠玉篇こそこれだ。シユーは鋭犀な筆鋒で巴里の祕密を餘蘊なく發いた。永い巴里生活に、華の都の底の底まで知り盡した譯者は、誰も手をつけなかつた難譯を見事に流麗に譯された。本篇は、獨逸聯邦の如露石大公國の大子を主人公に、これに纒る波瀾曲折、數奇の極りなき運命を骨子として、一八四〇年代の巴里の情景を遺憾なく描破した、傳奇的、探偵的な、興味津々たる物語である。讀者よ、憧れて待たれよ。

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



# 賴朝から貰つた島

前田河廣一郎

## 1

日名子老人は、島の案内人である。

その島といふのは、房總半島の突端にある、鐵滓の團塊のやうな、何の面白ろ味もない岩山の斷片であるが——鐵道の或る種の高等政策から、半島でのアトラクションの一つになつてゐるので、その宣傳方法として、案内人などといふ大袈裟なものも必要とされたのである。島で拂ふ老人への給金が、殆ど慈善的な額であつたことは、云ふまでもないことだ。

曖昧な理由から、いろいろな名前で呼ばれてはゐるが、最もこの島の封建的な由來を示唆する言葉は、『賴朝から貰つた島』といふ、奇怪な名稱である。普通の名所案内の上では、仁右衞門島と呼ばれてゐる。

この『賴朝から貰つた島』へは、夥しい人間がやつて來る。——

彼等は、兩國驛で仁右衞門島だけを、特別に大きく描き出した地圖を見て、あまり安

くもない汽車賃を拂ひ、太海といふステーションで立派な汽車を降り、すこし歩るいてから、大小各種の親切な廣告板に導かれ、海岸へ出ると、そこから赤塗の箱船に乘せられてのつそり島へ運び込まれるだけである。

島と云つても、陸から半丁ほどの淺瀬をへだてた水面にある岩の瘤なのだが、それを、見物人の好奇心を知り拔いてゐる船頭は、いろいろにジグザグな航路を工風し、時には前の岩鼻へ舳を衝突しそうに見せかけて棹の切りやうで巧みに避けたりするやうなトリックをまで使つて、往復二十錢の船賃を客から徴收するのである。──すべて、企業としてのこの島のからくりは、この二十錢の徴收からはじまる。

夥しい見物人の群は、乘船の際に、崖の上の切符賣場から、朱線で目標の曳いてある『遊覽案内』の小切符を、金と引換へに手交される。そして、渡つた先にはどんな景色が横はつてゐるかとわくわくしながら覗いて見ると、食堂と繪端書の賣店とを見せつけられた上に、日名子老人の手へそつくり一とまとめにして渡されてしまふのである。陸から『島』まで、小兒の投る礫の屆きさうな距離を、どうして橋を架けて渡さないか──と訊ねる人は、橋では、どんなに立派なものを架けても、往復二十錢の渡橋賃は徴收出來ない、といふ事實を知らない。それから、日名子老人の案内で見物しようとする島の『名所』は、踏み込んだ第一歩から、純然たる個人の邸宅地域へ這入つてゐるといふこと、即ち、わざわざ高い汽車賃船賃を使つて、果して、頼朝から貰つたか貰はないかもわからないこの島に、ある特定な日本人家族が棲んでゐるといふ私有財産制を承認して遣りに來てゐることを悟るのである。だが、この馬鹿々々しさは、島をすつかり見つくして、再び汽車に乘つて歸宅するまでは容易に暴露しない性質のものだ。

尤も島の持主に對して、その上一組二十錢の繪端書と、愚劣な宣傳ビラにしか過ぎない『仁右衞門島誌』といふ一枚の紙片を五錢で買つてやるほどの篤志家であれば恐らくそんなことは生涯氣がつかずに濟むであらう。

つまり、かういふ個人邸宅の見物を、いかにも史蹟を研究したかの氣持で見物人を滿足させて歸へすために、薄給ながらも、一人の案内人が抱へられてゐるわけで、それには日名子老人は理想的な人物であつた。何となれば、老人の精神主義は、自分の給金は、船賃を拂ふ見物人から出るのではなくて、特別に島の持主である平野仁右衞門といふ偉らい旦那の手から與へられるのだ、と勘ちがひして有難がつてゐるほどであつたから。本來、日名子老人は、あまり眼の學問といふものをしたことがない。しかし、その不幸を補ふために、耳學の方はす

こぶる發達してゐて、かなりむづかしい言葉でも、良く記憶してゐて相當に人前で云ひこなすことが出來た。そこで、鎌倉時代といふ時代はどんな時代であつたかを知らなくとも、歴史とは殆と沒交渉に、

『――治承年間に、源の賴朝公、石橋山の合戰にお敗けになり、本島へしばらく身を潜められました砌……』

などと、平氣で反覆する彼れの言葉が、誰にも信用出來る程度にひびいたのであつた。その點、彼は音樂的に惠まれて居つたとも云へる。多いときには、日に五十遍も、彼は同じ言葉を繰返へした。

と、同時に、あまり學識のない人が、むづかしい事柄を述べるときの熱心さが、それらの漢語の一スタンザ毎に沁み出てゐて、自然と老人の言葉には、垢で黑光りになつた床板のやうな氣品をさへ添えてゐた。

　村から赤塗りの船が、いろいろな遊覽客や團體を滿載して來ると、ぺこんと叩頭して、『ようこそ！』とか何とか切口上で挨拶してから、物を云ふ幽靈のやうに、客の身邊に、どことなくつきまとつて、島の一木一草もおろそかにせぬ風に說明するのが、この技術のこつで、そこへ、些かなりと客にほかの事を考へる隙を與へてはならない。

『おい、この島は、ほんとに賴朝から貰つたのかい？――』

から客が、侮蔑的な眼付で、孔のあいたゴム毬のやうな老人の頰を眺めでもしはじめたら、忽ち捲り取るやうに、

『え――と、この方の大蘇鐵は、ごらんのとほり稀有の珍木でございまして、その上の老松は古今の名木……茱萸、どべら、さふらん草、濱木綿、その他の藥草、植物の繁茂いたしますること、この島としては實に驚くべきばかり――。』

と早口に、對手の視線を他へ轉ずべく働き掛けるほどの機轉は絕對に必要であつた。

　ときとすると、それが小なまいきな學生であつたりして、折角老人が言葉たくみに騙してやつて、騙されたときの快感を思ふ存分に味はしてやらうとする善良な意志をも無視して、ステッキの尖端で植木鉢をほぢくるやうな質問を濫發することがある。

『……仰せのとほり、鎌倉時代のことは、確かどなたも手に取つてごらんになつたわけではないのでしてな、その眞僞のほどは餘程博識な學者でもないとおわかりになりませぬでな。ではござりますが、何せ元祿十六年は十一月、關東の大海嘯にいたしまして、不幸、當家の系圖、お墨附の文書、その他一切の貴い文獻が浪にさらわれましたので――』

　これだけを『學者』と『元祿』に力をこめて、高飛的に對手に聽かせれば、大概の學生も、ラヂオ問答した子供のやうな顏をして引下

がつてしまふにきまつてゐた。

すべて、こんなことは經驗であり、經驗の淨化した叡智は藝術にまで醇化した。日名子老人は、島の財産の總目錄であつたとともに、そのアカデミツクな博識は、それぞれの古典的な要素のコムポジションによつて、彼れの頭腦に、一つの大きい夢の國を構成させたのである。彼は現實よりも、遙かに大きく高く、この島を考へた。

何一つとして、この島の理想美を組立てるために不必要なものはあつたらうか？

永遠の海がある。海は、無盡藏の寶庫だ。その上に、島は平穩に眠る。陸と島とは、碧い水で隔てられてある。騷々しい村の愚民どもが、漁權のことなどで呶鳴り込むことは、完全にこの濠のやうな水で防がれた。島には、仁右衞門氏だけの撰りに撰つた眷族が棲んでゐた。二つの生洲には、常に魚貝類が貯藏されてあつて、代議士とか、農林次官とかいふ大官珍客の饗膳に備へてゐる。暖かい雨を受けて本邸が建てられてある。奥座敷の金屏風は、庭の緑を反映して崇嚴な曇りを帯びてゐる。池には鯉。いかい、せんくわんとして掘井の水は溢れたる。裏の松林をしゆうしゆうと風が櫛づる。それが、庭先へ颯と縞を織つて流れ込む。何と古木を磨き立てた廊下の光澤は！　奥の陳列室へ足音を忍んで這入つて見るか――滑らかな緣側は要愼しなければならぬ、一つの香爐も、一口の名刀も、皆しづかに夢を見てゐるのだ。はげしい外光を、名工の塗り上げた持佛堂の扉へあててはならない。厨子には神々しい日蓮上人の咒文を切る靈指のやうな題目が躍つてゐる。――これらの什器を秘めた室から、一歩そとへ出ると、上人が太陽を禮拜した岩穴、賴朝公の隠れ家であつた窟がある。奥にはかすかに水滴の咽ぶやうな物音がする。獅子の踊り狂つてゐる姿をそのままの神樂岩！　このあたり、一莖の草と云へども、全身に日光を漲らさぬものはない。俳聖芭蕉の碑には「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」はせをとしるしてある。はせを、おや！　蓬島辨天、稲女稲荷の馬蹄石、初午の季節の賑かな信心深い群集！

――これらを圍んで、邸の外廓には、五尺幅の高い石垣がある。この中古の城壁そのままの逞ましい營造物は、邸内の平和を守護する。同時に、それは村に對する權威の發揚である。村は、代々苗字帯刀の名主格であつた仁右衞門家をあがめなければならない！　この石壁は、三里沖からも見える。……

老人の日常生活の半分をひたしてゐるかういふ幻想は、最もよく平野仁右衞門によつて支持された。この二人が、暇を見て、主從のわけへだてを撤去して談し合つてゐるときには、實際二人の顏から後光が

射すやうに思はれるのだ。

平野仁右衛門と云へども、その點に於ては、超現實的であり、熱心な淨土眞宗の信者であつた。ただ、彼れの場合に於ては、十萬圓からの價額の不動産を管理してゐる關係上、ともすれば、金錢と精神主義の間に生じる矛盾を自覺しないわけには行かなかつたが、さうであればあるほど、佛を拜し、天地を讃辭合掌する氣持がますます昂じて來るといふ一面の徳もそこにはあつた。

『世も澆季ですな――どうでせう、近頃の客の粗惡なこと！』

『さうぢやろ、世間には金のことだけしか考へない馬鹿がうぢやうぢやしとる。たまに東京などへ出ると、もう懲り懲りぢや！』

『頼朝公から戴いた島と云ふが、お前、また封建時代の宰領觀でもあるのかい――と、かう云ふ師範學校の國語の先生といふのがありましたですよ。』

『ほほう、以ての外の話ぢや。それで國文學の教授とは、何のために國語を研究しとるか――いやはや、輕薄な奴が多いて。で、お前、何と答へをつたか？』

『そんなのは、思ふ存分説法してやりたいのですが、相憎と私には學識がたいものでしてな。――よく國史をお調べ下さいもしこの島のことで何かまちがつて居るところがありましたら、その時は改めて御教導を乞ひます――ときあ、先方も御客さまですから、すこし奉つて返しましたでな。』

『ああ、それでいいのだ。あまり議論立てをしても、昔のことはこちらもさう委しくはないて。』

二人の間は、こんな風によくうまが合つた。

總じて、遊覽客も、この頃は隨分と皮肉になつて來た。いゝ加減にこちらに説明させて置いてから、

『ぢや、その元祿年間の海嘯で島の物はすつかり流れたと云ふが、この松はどうして千年の松なんて云ふのかね？――それから、伽羅枕を抱いて逃げた先祖の仁右衛門さんは、やはりこの床柱だの鏡臺になつてゐる――それ、何だつけな南天の木か、それから栂の木、そんな材木も抱いて逃げたといふわけかね？』

など、いやに落ちつき拂つた質問をする人の悪いのもある。

出來るだけ拂つた入場料に應じての快樂を、この島から絞つて歸へらぬと承知しないといふ氣風が、彼等の間に、あさましい勘定高い眼付と、狡猾さうた微笑を増した。さういふ客に限つて、取り立ての鮑も、すぐと東京の値段で評つて見て、

『東京だつて、生きた鮑はザラにあるからたア』

と憎まれ口を叩いて買はずに行くのである。

同じ氣風が、澪一つ越した村の者にまでいつとはなしに浸み込んでゐた。

或る日、郵便ポストへ行つた歸へりに、いきなり呼び留められた老人は、村の運送屋にこんな下劣な質問を浴せられたことがあつた。

『先生！（村では老人を先生と呼んだ）この間の荷は屆えたッペ？品川の古道具屋から來た鎧だに、又、あれで、先生、元祿十六年は十一月をやらかすんだつペ。——何にも商賣だから、おらあじよとも云はねえだが、たまにア村のもんさ酒の一杯も奢つたらどうかつて、仁右衞門へようく云つときなよ、よう！——』

から云つて、店先の若い者達と、日向であッはあッはと彼等は哄笑した。

日名子老人は、杖を鳴はして、島へ急いだ。渡し船へ乘つて、ほかほかと陽にかげろつてゐる島を見て、その言葉をもう一度思ひ出すと、老人の眼には涙が浮かんだ。

それを、又、鮑を採つてゐる淺瀨の海女達が、ちよつと振り向いて、水の底へ傳はるやうに腹を揺ぶつて笑ふのである。

## 2

村は、すべてで、百四戸しかなかつた。うちでも、一番新しい普請は、坂の上の旅館と、海岸の掛茶屋と切符賣場とであつた。そのほかは、螺蠑の殼のやうな漁師達の家である。

螺蠑の殼のやうな家々には、子供も犬ころも鷄も、殆どごつちやに雜居して、いろいろな物音を立てた。亞鉛とサイダーの廣告から成る掛茶屋には、無數の鮑貝の中に、日に燒けた婆さんが控へてゐた。

臆病たらしく背後の小丘へ、海を惧れて逃げたやうなまばらな村の間には、雨が降ると急流に變る勾配の險はしい細道が糸のやうに縫つてゐて、葭垣の圍ひから、黑ん坊のやうな土まみれの子供が出たりはひつたりした。どの家にも、半分石ころのまじつた狹い畑があつて、素足でその地面を踏み硬めたり、片足を犂へかけて船を漕ぐやうに土を掘りかへしたり、素麵のやうな菜つ葉を間引いたりする女の姿が見えた。畑には鰯の細かい鱗が雲母みたいに光つた。蓆と、藁と、襤褸と——無人な茅屋の列には、これだけがやつと村から毟り取られない財産であるかのやうに思はれた。

山の方からくらべると、海濱の方の村はまだしも漁村らしいせせこましさと、何かの秩序を保つてゐた。島へ渡る乘船場の岩には、粗惡なビルデイングほどのステップが刻まれてあつたし、茶屋には線香の强よそうな酒の瓶がならび、白塗の告知板には何かしら文字が書いてあつた。村の端の共同販賣所には、絲木綿を積んだやうな笊が重な

つてゐた。その筋向ひの煙草屋には、赤い郵便局のサインが出てゐて、貴重品のやうに卵がガラス箱の中に鈍い光を放つた。しかし、賑やかだと云つても、村はこれだけのものである。そこには、廂の深い屋內に何かの蠢動があつたとしても、活氣のある聲も、ぴんぴん跳ねかへる魚の山もないのだ。

寢そべつた醉漢のやうな小舟が、岸のむかう側にだらしなく曳上げられて、大空へ口を開いてゐた。船でさへ怠惰してゐる漁村だ。

仁右衞門島とは、妙なコントラストを示してゐる百四戸の村は、掩ふべくもない貧困にこんなに瘦せ細つてゐた。──そこで、この村のありとあらゆる職の達者なものは、村の仕事は留守居のものに任かせきりで、豆相の沖へかけて、鰹漁の手傳をしに出てゐるといふ不思議な現象が生じたのだ。ときには、百人から百五十人ぐらゐの男達が、遠く紀州邊まで出漁して、十日も歸へつて來ないことがある。

それが、鮑を主として、とこぶし、鰈、鹿尾菜、若布、海苔、螺族などの良く取れる島を帶の幅ほどの距離に控へての話である。きわめて矛盾した事柄であるのだが、その矛盾は決して村の漁師達から生じたのではなくて、鐵道の或る種の高等政策から外房州の名所の一つとなつてゐる『賴朝から貰つた島』の採御權の存在に歸因することなのである。

外洋へ出稼ぎに行く漁師達が、村に蟄居して內海をぼちやぼちや掻き廻してゐるときよりも冒險的になり、他所と村の狀態との比較に目ざめたことは云ふまでもない。しかも、彼等の間には、伊豆の初島のやうな、一里四方もある島が、大概の生產物を、村の共同管理として、原始的共產主義を施行してゐるのを目擊して歸るものは尠くはなかつた。

彼等は、ひろい海から歸へつて來て、村の前に立塞がつてゐる時代錯誤的な封建主義の島を見る。その絕頂に挑戰的に築かれた一丈五尺の瓦塀を見る。その澱んだ入江のやうな生ぬるい渡し場の淺瀨を見る。それから、山へ山へと退化して行つた自分達の女房や子供の棲む村を振り仰ぐ。彼等の或るものは、淚を流して憤慨する。醉ばらつて、無茶苦茶に島の方を向いて惡口を云ふ。すこしでも仁右衞門の肩を持つやうなことを云ふ人間を掴まへて、さんざんに毒づいて見る。同じことが幾度も幾度も繰返へされる。

『誰があつた島ア、あの野郎にやつたたかな？』

『賴朝たちうこつたアよ。』

『賴朝──糞喰えだ。おんでもねえこつたは！　法螺吹き爺め、賴朝さ出しやばりやがつたり、東京の役人引張り込んだりしやがつて、どだい己がもんでもねえ癖に、鮑の採取權を唯でせしめやがる！　俺

云ふだ――誰の前でも云つてやるだよ、賴朝は賴朝で昔の人さ、德川さまが土地をお上へ返えしてからは、彼奴だつて俺だつて、同じ人間だ。彼奴が働かずに他人の稼ぎ分を半分づつ持つて行くなら、俺がにもあの野郎の稼ぎ分を半分貰ふ權利があるべえ！　な、おい、理窟アそれなもんだ！』

『ありや、お前、幕府の時代から鮑取りの稅を納める時に、納稅の名義人になつてゐたよ。――そいつを明治になつてから、權利擴張の運動をしたんだつちうこつたな。』

『ねえに、あの野郎、賴朝だなんて駄法螺こきアがつてるが、俺が聽いた話では、もたア紀州から流れ込んだ六部だちうでねえか。その六部、あの島さ來たでな、氣の毒だからあじよとかしてやんべちうて、皆で網い干させてゐたんださうだよ。その證據、あの家アもと天台宗だちうこつてねえか？』

『――ふむ、小湊の近くさ來たので、日蓮宗さ早變りけ？』

『あアさ、それもお前、みんた人寄せの手だアに。あつだごとして、三つも四つも神樣ア狹つけえとこさ祭り上げやがつて、――アレみんな參詣人呼ぶためだつペに！』

『偉らさうなことこきアがつて、ふんとにいけ圖々しイ野郎だな！』

『それから、あの股つこけの案內さ。あいつもいけ好かねえ奴だな。三ふ、お前んとこの餓鬼あこの間あんな眞田虫出したちうでねえかよ？』

『あアにを――俺らが餓鬼だとも、あつだ口ばかりぺらぺらぬかしやがる眞田虫ア持たねえだよ！　はツハ、はツ！』

かういふ酒の上の噂が、だんだん具體化して來て、漁師達のうちの比較的に組織的な頭腦を持つた二三の青年が、どうにかして『賴朝から貰つた島』を向ふに廻はして對抗しようとして、いろいろと工面の良い連中から說き立てて、たうとう、その設立にまで漕ぎつけたのは、網元といふものの一人もないこの村には、當然さういふ形式を取るべき、濱波太村漁業組合事務所といふ組合である。

出來あがつた事務所は、新築の田舍の小學校を縮小したやうな建物で、いかにも事務所らしいテーブルと數脚の椅子があつて、あらしの日には雨の漏り込むガラス窓を、それでも快活さうに海へむかつて開いてゐたのである。ここで、村の組合員達は、法定積立金五千圓の利子の計算をし、組合所有の土地からあがる地代を併せ、一ケ年の通常經費として見積つてある三百五十圓から四百圓までの金の捻出方に對する協議をするとともに、村のゴシツプらしい雜談に耽つたものである。もちろん、さういふ場合の事務所の火鉢には、誰彼の持ち寄りの螺蠑が、炭火のわきにふすふす煮えこぼれて、話のとぎれた隙間、任

意にそれを取り出して、各自が頑張ることも出來たのである。このゴシツプにも、何かしら戰鬪的なものがあつた。

――何と云つても、この村での、最大關心事は、竿の屆きそうな距離にある『頼朝から貰つた島』の經濟狀態にほかならなかつた。――

彼等は、長いこと、この島が、封建主義の泥沼から這ひ上がつて、近代化して來てゐるのを見戍つた。明治四十四年頃には、さすがの仁右衞門も島が嫌になつたかして、權利土地共に四五萬圓で賣り物に出してゐたが、買手がつかずに、つひそのままになつてしまつた。時代は變る。鐵道は寸一寸房總半島を、兩側から捲き尺のやうに包んだ。一種の××的な意味からも、千葉縣の鐵道が、迅速に完成されなければならぬことは、よく人の云ふところであつた。北條と勝浦――東京灣と太平洋を直通させるには、この線路の結びつきによるほかはないのだ。仁右衞門島の持主は、決して村の漁師達のやうに單純ではなかつた。彼は新聞を讀み、雜誌を知り、政治屋と交際した。復活に新機運を見て取つた彼は、房總環狀線の竣工と同時に、彼一流の宣傳術を開始した。鐵道の沿線には、トンネルよりも高いペンキ塗の廣告板へ、『仁右衞門島がここから見えます!』といふ文字を書かせた。しかも、その一般遊覽客の吸收策に腐心してゐる傍ら、彼は一刻も自分の利權のことを忘れなかつた。島の周圍からは、年に二千貫からの鮑が産出する。それをざつと見積ると、時價で一萬圓からの額だ。

『この島は俺のものだ。この島の附近の採鮑權は全部俺のだ。お前達は、鮑取りに使つてやる!』

から頑強に歷史を楯に取つて主張した彼が、村の漁師達と正面衝突をする結果に陷つたのは、當然過ぎるほど當然だつた。法廷での混み入つた係爭が開始される。次官級の人間が視察に來る。しばしば仁右衞門が上京する。村の代表者達も、官憲から呼び出されて、こつぴどく叱責される。

『お前達は、そんな赤い氣焔を擧げたら承知せんぞ! 何時から主義者になつた!』

しかし赤い氣焔でなくて、それは、一ヶ村五百人の死活問題であつた。そして、彼等は頑強に抗爭しつゞけた。

長い裁判沙汰の結局、仁右衞門は、鮑一ヶ年の收獲の半分だけ渫ふことになつて、漸く鳧がついた。この法廷での特典を、彼は仰々しく吹聽した。直ちに、その事は、彼れの宣傳に加速度的な能率をもたらした。彼はこんなことを書き立てて、島の歷史なるものを誇張した。

『此島ハ往昔ヨリ平野仁右衞門ノ所有ニシテ、子孫連綿相繼グ。因ツテ仁右衞門島ト云フ。今ヲ去ル七百四十四年則チ治承年間 源 頼朝公伊豆石橋山の戰ニ敗レ、遁レテ此島ニ暫ラク身ヲ潛メタル時代、

先代仁右衛門ガ待遇シタル爲メ、公ノ愛用セル御羅枕ヲ賜ヘリ、後鎌倉幕府トナルニ及ンデ、島附近一帶ノ漁業權ヲ附與セラレ、僅ナガラ今尚存續ス。』

この文句は、殆ど遊覽地としては何の價値もない彼れの邸宅や岩孔の寫眞とともに、活字と寫眞の力を借りて、あらゆる方面へ撒布された。しかも、かうして好奇の見物人を招來した傍ら、彼は年に七百圓からかかる村の公安費に對して、一錢の負擔をもしようとはしない。自分の家族や雇人は、全部島へ籠居させて置いて、つとめて村人との交際を避け、わづかに工事の時や、渡しの船頭に安い賃錢で三四人の者を村から傭ふことに、過大な感謝を感ぜしめるといふのが、その遣り口である。船頭一日の賃錢はわづかに八十錢にしか過ぎない。その癖、世の中に馬鹿が絶えないところから、『頼朝から貰つた島』を見に來る群衆の數は、平均にして一日百人は下らないのである。生活費は別としても、周圍わづかに二十町足らずの島の一ケ年の諸修理に要る金と云つては、千五百圓どまりぐらゐなものである。渡船賃のほかに、繪端書、寫眞帖、パンフレット、罐詰類、鷄卵、魚貝、酒も料理も出すのである。かうして、切り詰めた雇人の數で、城壁を築いて、『頼朝』の名によつて、仁右衛門はすでに巨萬の富の中に寝ころんでゐる。

その間、村はどうか？——絶對必要に驅られて、はじめて設立されたのが、村としての最も穩當な對抗手段としての漁業組合である。

『これで、赤いたア何のこッた！』

村の會議は、いつも血の氣の多い者が、最後にかう叫ぶことになつて散會となるのだ。

しかし會議を重ねるごとに、たしかに彼等はすこしづつ、仁右衛門の營んでゐる遊覽地企業の全輪廓が見えるやうになつたことは事實である。——次第に、島だけが自治體として、個人資本家の下に自給自足の道を講じて行かうとするならば、そこには、必然、その島の資本主義の關する範圍で搾取される勞働と資本との對立がはつきりして來る。すべてはそれからだ。——仁右衛門がステーションへ出かけるごとに、ろくに挨拶もしない村の青年達は、その肉附のいい後ろ姿へむかつて、ひそかにかう警告した。

島と村とが、最も澄んだ淺瀬を挾んで、かういふ對峙狀態にあつたとき、意外なことが意外な人物から點火されて、鬪爭はずつと深みへ堀り下げられたのである。

## 3

案内人、加名子老人の、現世との一つのつながりは、孫であつた。

彼は、酒を吞まないと年代や姓名の記憶が、はつきりと頭へ浮んで來なかつた。しかし、それと云つて、あまり度を過ごしても、吞まないときと同じ結果になつた。

老人が、驛前の『近江屋』へ屢々立寄つたのも、次の鴫川町まで出かけたのも、決してほかの理由からではなかつたのである。馴染の『近江屋』といふのは、地酒をコップで吞ませる店で、驛の表通りから一段低く坂を下つた店で、中年の婦と一人の娘とが店を經營してゐた。

或る晩、そつと島を拔け出した老人が、やはりそこの腰掛で、惜し惜しみ『てつぱつ』を嘗めてゐると、一人の軍服を着た大男が、無言で上り框へ腰をおろすと、砂まみれな靴を脫ぎはじめた。軍服の腰には、劍が見えなかつた。近所の子供へ、駄菓子を賣つてゐた主婦は、ぎよつとした風に、その男の姿を瞠めたが、ちよつと顏を蒼くすると、また不興氣な顏で、飴玉を袋の中へ投り込んだ。

『あら、父つさん、け？』

陰の方から、娘の燒つた聲が、軍帽をとつたばかりの彼を、抑へつけるやうに詰つた。

『――腹ア減つただ。めし、持つて來う！　もうすぐ消燈喇叭だに、い、にし何してるだか――この餓鬼は？』

男は、締まりのない間拔けな聲で、騒々しく呶つた。この茶店の主人が、こんな軍人であらうとは、日名子老人の豫備知識にないことだつた。彼は、コップの酒が手の中へ滴り落ちるまで、その顏に見入つた。

『あれ、誰だ？――』

男は、爐の鍋へ手をかけた主婦へ、かう無愛想に訊ねて、日名子老人を顎でしやくつた。帽子に食ひこまれた額に赤い線がきわだつて、軍人らしい日燒けが眼についた。

『あアさ、島の先生だに、――仁右衛門さアとこの。』

男は、娘の返事を聽くと、横を向いて、古風な膳から箸を取り上げた。主婦は、好奇心そのものである日名子老人が、もぢもぢ挨拶をしようとして、片手を持ち上げたり振つたりするのを、狡くも見て取つて、妙な目交で口留めをした。猿がまばたきするときのやうに、女の額が眉毛といつしよに動いた。

大きい茶碗から飯を頰張つてゐた男は、突然、娘の說明が今になつて頭へ沁み込んだかのやうに、老人の方へ膝から先に向きなほつた。

『島アどうだね、先生。――（先生かな、この人？）村の奴等ア勞働組合なんちうもんおつぱじめたださうぢやねえけ？　わが大日本帝國には古來勞働組合なんちう怪しからんものは、絕對に必要はない！』

民は働き各々その分に安んじれば、それでよかつぺ！ どうだな、島の先生？ おらア間違つた事ア云はねえ！』

から正面を切つて呼びかけられると、いくら主婦が警告の目交を繰返へしたにしろ、老人としては默つてゐるわけには行かない。ことに、先刻から、話對手が欲しくつてしようがなかつた彼である。

『わしは耄碌してるかも知れん、村の人達アよくわしのことをぼけてると云ふ、しかし、このわしの眼が二つあり、耳がかうしてちやんと揃つてゐて、ほれ、この口が何か物を云つておまんまを食べてるうちは——斷然この村に組合などとゆうもんの必要は認めない！ その點はあんたと同感ですわい。』

老人は 唇を手の甲で擦り擦り、非常に怒つたときのやうに鋭く嶮んだ。その態度がまた殊のほか對手の男の氣に入つたらしい。彼は、發矢と巨きい 掌 でカーキー服のどこかを敲いた。

『や、話せる、話せる。この村で話の出來んなア、お前さんだけだろ。話せるぞ！ 我々帝國軍人は、かかる日本の赤化運動に對して、絶對に相容れざる愛國思想を持つとる。ふむ、そもそもこの赤化運動たるや、ロシア帝國を倒して、世界を革命に導くちう思想の下に躍動するかの憎むべきユダヤ人一味の陰謀である。殺ろしても、八裂きにしても慊らぬ彼等……』

この、限りなく續くであらうことを豫想された演說も、煙管をせわしく敲いた主婦の言葉によつて、端と遮ぎられてしまつた。

『あアさ、わかつただよ。また、この人の十八番がはじまつたア。それより、お汁が冷めたくなるだよ、早うまんま食つたらいいだに！ お客さま、しづかに酒飲んでるとこ何んの邪魔するこたアあつぺさ！』

『まア、食べながら話しませうよ。すると、あんたはここの店の御主人だつたかな？』

取りなし顏に云つた老人は、最後の一滴を 掌 へ落として、ぺろりと舐めた。男は、從順に汁椀へ箸を突込んだ。

『あアにね、おらがとこの父つさんは、すこしこれが惡りいだでね、困つたもんでえすよ。』

主婦さんは、かう云つて、藥指を折り曲げて、三遍ほど自分の蟀谷を敲いて見せた。

『——でも、お見受けしたところ、恰服と云へ、それに、その軍人の服なども。』

『だと、平生あじよともねえですよ。時折はア、何ですか、おこりみてえなもんですかね。この服が至つてはア良くねえでがすよ。——これを着るのが、つまりやまひでしてね、そつで自分はア一遍も兵隊に取られたことねえでがすがね……お祭だの、祝日だのちうと、この

恰好ですからね、そしてからにはア村のもん捕めえて、あんだかんだつて理窟こねるでえすよ。そつでわしらがにアとても店の邪魔んなるからちうてね、しばらく岩和田の方さ行つて貰つたのですよ。それから、はア、競馬がやみつきでしてね、だと、競馬ア不思議にあてるですよ。この間もはア、中山さ行くから婆ア二十兩借せ、倍にして返へすちうから、いつもあてると思つて柳の下にさうさう泥鰌はゐねえだから——と云つても、まア、無理して拵へた錢持つて出掛けたでがすがね、翌る朝んなるちうと、あんたらこつてすけ、五十兩手の切れるやうな紙幣うならべてがらに、婆ア、土産物は急いだから買つて來ねえだ、ちうてさつさと岩和田さ歸へちまつたですからね。………』

日名子老人は、話の間に、娘が新規に充たしたコップをすつかり乾してゐたほど、眼の前に驚くべき食慾を展開してゐる、不思議な人物に見惚れた。尠くとも、老人にとつて、この狂人の特長は、ちつとも狂人らしくないことだつた。

『ほう、すると、軍服を着るのも病ひ、競馬をあてるのもやはり病ひ、だと云ふのかね——？　こりや、双方とも、良い病氣だ。こんな病氣なら、わしらも憑つかつて見たいもんだで。なア、日本は元來、武の國である。建國以來、ひろく世界に君臨して、東洋一の大帝國となつたのも、偏へに國民に尚武の精神があるからで——今日の陸海軍が、それぢや。國家の忠良なる臣民として、たとへ不幸にして兵役の職務を負擔することが出來なかつたと云へ、身に軍服を纏ひたいといふ慾望を起こすことが、既に早や殊勝な心掛けだ。——お主婦、こりや、お前さんの亭主は狂人ぢやない。わしらよりもずうつと正氣な、偉らい人物だよ！』

やや日頃の說明口調にはなりかけたものの、老人の言葉は、杜をめがけて角を突き立てる牛のやうに嚴肅なものだつた。

が、茶店のお主婦は、それを團扇で蠅を取つて抑へるよりも簡單に否定した。勿論、彼女は、あまり大聲は出さないのである。

『そうでねえですよ。これで暴れるんですからな、途方もねえ暴れ様するでがすよ。駐在でも、一度は牢さぶち込めと巡査さんが仰有つたですけどな、皆でお願ひして、やつとはア、岩和田の螺蠑取りに出ることになつたですよ。』

『暴れるといふと——？』

『飲んだら大變だともさ、先生。人殺でも何んでもやりかねねえでえすよ。だから、わしらがとこぢや、この人さひとつたらしの酒ども出さねえでがす。——だと、村んもんも、對手にならねえでな。』

そこで、老人は、一と先づコップをおさめることとして、銅錢をまじへた端た金を盆の上へぢやらぢやらと明けた。軍服の男は、食べ

つた腕を押しのけると、肱枕になつて、健康な白痴を證據立てるやうな高鼾をかいてゐた。

日名子老人は、いつもに似合はず醉つてゐて、歸へりしなに、店先に生つてゐるだいだいの果を、よろめく拍子にぺきりとへし捥いでしまつた。

その男が、村では『伍長』と呼ばれる狂人であることは、翌る朝になつて、島の庭男の喜三次に說明された。父親の病氣のために、年頃になる娘の嫁入り先も定まらないのだと云ふ。母親は、村の人達が寄りつかぬために、ひどく『伍長』を虐待して、一時はほんものの座敷牢を山の上へ拵へて、亭主を監禁しかけたのであつたが、村の人達の忠告で御宿の方の親戚へあづけることになつた。『伍長』といふのは、村のユーモアが、當人の名の後藤長助の頭文字と、彼自身の持つ軍國主義狂とを巧みに共通して聞かせたものであつた。つまり『伍長』の一生涯を通じて、曾ての昔、人並みに一度だけ兵役の義務を負擔させられなかつたことが、何よりも彼れの名譽心に致命的な打擊をあたへたことであつたらしく、精神に異狀を來たした原因は、ほかの遺傳的疾患からであつたとしても、その狂暴性は軍服を着て、當人が考へるやうな×××なるものを發揮しようとすることに發作の緒を見出したのである。狂人の悲しさには、よく千葉の工兵隊で運轉見習ひをする機關車を見ては、それを追ひ駈けた。又、ときには消防の練習に子供のサーベルを拔いて號令を掛けて威張つた。さういふ場合に、對手が彼れの入場を拒んだりすると、忽ち一と隊の下士官でもある氣で、呶號した上に誰彼れの嫌ひなくビンタを喰らはせて步るいた。彼といつしよに暮らした人間の話によると、朝起きると晩寢るまで、この狂人の生活は悉く軍隊式であつて、自分で起床喇叭の眞似をしたり、絕えずあらぬことを口走つては擧手の禮をしたりするさうである。

茶屋の主婦の彼に對する憎みは、半ばは、一見狂人らしくない彼とそれと知らずに緣組みして、あとでさうと知つた口惜しさにもよることだらう、といふのが一般的推測である。

この狂人は、一年に四五回、突然村へやつて來ては、又、風のやうにどこかへ消えた。岩和田の漁師村にゐるかと思ふと、國技館へ行つて相撲を見たり、九段の鳥居の下を拜んだり、又、ときには遠く根岸あたりの競馬場で血眼になつて孔を搜がしてゐたりした。

これらのエピソードを綴り合はせて見ても、老人には、軍人の眞似をして亂暴をする『伍長』と、むやみに歷史を疑ひ、傳統を蔑ろにして世の中を搔き亂そうとする青年達や、勞働組合などといふ外國かぶれのしたものを拵へて、天下の主從貧富の關係を轉倒しようとする今時の勞働者と、はたしてどちらがより多く狂人らしかつたかは、既

かに抵抗出來なかつた。島の平和に直接利益のある人間と出來事のほかは、すべての現象に苛立たしい猜疑心を働かすことだけしか知らなかつた彼は、むしろ『伍長』の心根をさういふ悪るい風潮に對する正當な反逆であるとさへ同情出來た。

このことは、島の主人も老人と同じ見方をわけてゐるかに思はれた。

『さうか、あの男が戻つたと？……』

ただかうだけ受け答へた仁右衛門であつたが、眉目の間には、何かしら許びやかな感情を漂はして、その話を聴いてゐた。

二三日すると、『伍長』は一張羅の軍服を着、鉛で拵へた勲章をいくつも下げて、島へやつて來た。老人がいそいそと生洲のある岩まで出迎へると、彼は恭しく擧手の禮をして、腰にした鐵力のサーベルを引拔くと、眞面目な顔でそれを肩へ持つて行つた。

『只今敵は後方に退却したといふ傳令の報告に接しました。はい。然らばわが一大隊、前へ進め！　トテ・トテ・トテ・タ……』

日名子老人には、それほど狂人扱ひにされる男であるが、多少ちぐはぐな個所はあつても、どうしてからも軍隊の事情が、徴兵に取られもせずに良くわかつてるか、それからしてが、この男の思つたほど氣狂ひでない證據であるやうに思はれてならなかつた。ともかくも、その日の彼は、何か異常な昂奮に驅られてゐるらしく、妙な光を漂はした瞳が充血した眼の中に据はつてゐて、凄いほどだつた。常々雜船の赤ペンキと同じ色の安ゴム靴を穿いて、極端に人を馬鹿にしてかかつてゐる友といふ船頭も、この光景には呆氣に取られたかして、口を開いて『伍長』の後ろ姿を見送つてゐた。茶店からは、娘達が、ガラス窓のむかうに袖を口へあてがひながら、皿をくづすやうな聲で笑つた。『伍長』は軍隊式に歩み出した。

老人は、説明こそしなかつたが、妙な親しみと當惑を感じながら、默つてこの自製軍人のあとからついて行つた。どことなく腫物か何かが腐り爛れてゐるやうな惡臭が、この男の五體から發散した。寶物陳列室では、皮肉にも最近新しく購入した鎧を見ると、『伍長』は威容をただして敬禮した。それから、納屋の方からひよつくり出て來た仁右衛門と三人になつて、裏山へ出て見ると、『伍長』は朝鮮の陣屋の前で、劒をはづすときわめて事務的な表情で立小便をした。主人と日名子老人とは、苦笑しながら、新しく設計しようとする鷄小屋のことを談し合つた。

歸ると云ふのを、無理に引留められた彼は、長いこと母屋へ這入つてゐたが、時折、主客の間に何かの相談ごとでも取りきめてゐるやうな、ぼそぼそとした聲の應答しか、障子の外へは漏れなかつた。

日名子老人は、一團の女の小學生を引率した教員を對手に、得意の辯を揮つてゐた。子供達は、頼朝公の前へ出たやうな顔をして聽いた。しまひに母屋では、酒でも出たらしく、物を頬張りながら、『伍長』が、

『やりますとも！　わしが本式に暴れ出したからには、そんな物アこれッぽちでもねえですよ！――然り、暴力です！』

と念を押すのが聞えた。

すつかり太陽が西へ廻はつて、筍岬あたりからどんよりとした赤らみが潮して來た夕空の下へ出た『伍長』は、赤い顔をして、兩手を振りながら、

『……離れて遠ウき滿洲の、
赤い夕陽に
照らされて、
友は――
野末の石の下ッ！』

と嗄しつぽい聲で、わめき散らした。

恰ど船付場へ行く途中で落ち合つた學校の女の子達を見ると、彼は急に折れ曲がつたサーベルを振り翳して、

『氣を付ッ！　突貫！』

と、大きな舌を出して叫んだ。子供達はわーッと逃げた。

4

いきなり『伍長』が箱船へ飛び乘ると、手荒らく船頭を押しのけて、船を岸から押出してしまつた。狂人の衝動にちがひない。

『何するだよ、この狂人め！』

もう一人の船頭である吉は、舷へ掴まりながら、經木帽の下から狂人を見上げた。吉の赭黑い顔にも血色の變るのが見えた。

『突貫だ！　突貫――突貫！』

『伍長』は棹を撓はせて、がむしやらに岩と岩の間へ、船を一直線に進めた。島には、大勢揃つて乘るばかりにして待つてゐた女の子達が、きいきい云ひながら軍服を着た大男の、突發的な狂暴さを恐ろしいものに騷ぎ立てた。日名子老人は、あんぐり口を開いたまま、船頭と『伍長』との格鬪を見戍つてゐた。龜岩のわきから、一枚ののし餅のやうにだぶりと厚ぼつたい蜒りを打つて、外海から押して來る大浪が、急に取りつかれた犬のやうにくるくる廻はつてる箱船を、ぐるりと一廻轉させたと思ふと、すうつと車へでも乘せたやうに、船付場の崖とは反對の方へ、見る見る五六間の距離を沖へ送り込んだ。

その上には、立ち直つた船頭の吉が、小兵な體軀を梃子のやうに踏

らせながら、狂人の脇腹へ突かかつて行つた。

『伍長』は、太い棹を振りかぶつて、しがみついて來る小男を虫のやうに毆りつけやうとした。棹は大きく空を動いてむなしく、水面を撲きつけた。

その間、赤い船縁を盥のやうに搖りながら、船は更らに四五間ほどむかうへ引波の上を滑つた。

島の上では、日名子老人や敎員や、茶屋の女達までも飛び出して、てんでに聲を張りあげながら、稚船の上の異樣な格鬪に聲援した。

『やつぱり狂人だな――あれぢや！』

はじめて、老人は『伍長』の正體がわかつたやうな氣がした。

『伍長』は慣れない船搖れに、まつ赤にいきみ立てながら、

『このかつてえぼうめ、うぬも組合だつぺ！　これから行つて、組合イぶつつぶしてやろ！　放せ、畜生！』

と對手を罵つた。

吉は、棹と腕と對手の血眼の下に、必死となつてそれらの壓力を躱へ押しこくらうと、肩に力を入れてしがみついてゐた。船の動搖がぽたぽたと海の上へ散亂した。

その光景は、濱波太漁業組合の事務所にゐて、『全國漁業組合』といふ新しく結成された、水産業從業員の政治的運動の本部から送つて來た宣言と綱領とを通讀してゐた、三人の組合の幹事達の眼に映らないわけには行かなかつた。事務所の窓ガラスは、さういふ出來事のために海に面して大きく開かれてあつたのだし、島の大小の事件は一ケ村の最も緊要な死活問題であつたのである。

ただ、はじめ、三人の青年は、稚船の上に絡らみ合つてゐる二人を、冗談をやつてゐるのだ位にしか思はなかつたのだ。

『あれ、吉ツおやれえけ？』

『片方はア「伍長」の野郎だ。「伍長」だ！』

『あ、あの狂人め――喧嘩け？』

『ほだ、こりやほんもんだつぺ。』

『船イ出せ。あいつら岩さぶつつかつてくたばるだよ。』

かうして、三人が、事務所の下の長らく海にひたつたこともない小船を押出してゐる間、島の上では、大聲で切符賣場へむかつて、もう一艘を出すやうに、誰かが叫んでゐた。

賣店の喜三次と日名子老人とが、兩手でメガフオーンを拵へてわめき立ててゐるのである。二人のまわりには、密集した子供達の藤色の袴や、小さな顏や、とりどりの紅い衣裝などとは、風にざわついた何かの植込みのやうに兩腕に閃めいた。小學校敎員は、時計を出してみながら岩の上を歩き廻はつてゐた。

やがて、城廓のやうな正門から、石段を降りて來る仁右衞門とその息子の妻さへ見えて來た。

切符賣場の若い女は、さいぜんからこの光景を眺めてゐて、賣場を自分で放れることも出來ず、しきりに村の方を向いて、船頭の友の方を呼び立ててゐた。

友といふ船頭は、一艘の船を吉に任せて、サボ氣分で共同販賣所の隣りの、サイダーの廣告の下に、地酒をあほつてゐた。彼は、返事だけはするものの、容易にコップの内容を空らにしてしまはうとはしない。

『あの狂人が島さ行つたで、今日はアろくなことねえだよ！』

茶店の婆さんにせき立てられると、友はかう返事しては、サイダーの美人を眺め、田螺の佃煮を惜しさうに口へ運んで行つて、二本の指をしやぶつた。

と、そこへ、事務所から村の方へ廻はつた青年幹事の一人が、大げさに向ふ鉢卷をして、

『おう、探がしてゐただ。』

と云つて飛び込んで來ると、いきなり酒ぼてりのした友の顏へ口を持つて行くと、何かを囁いた。

『こんなこと、きつとあつぺと思つて、待つてただよ。——よしか？飲め！』

友は大きく頷いて、婆さんにもう一杯の酒をねだつた。

二人の青年は、いい加減に流された箱船まで漕ぎつけて、眉間と腰から血を流して、船底に仰向けに寢ながら、げらげら笑つてゐる『伍長』と、その上に棹を身構へて、起きたら一撃で擲してやらうとして息をはづませてゐた、吉との二人を、さほどの面倒もなく自分達の船へ移し、箱船は曳いて、もとの崖下へ戻つた。崖の上下には、村中の人間が總出で、二艘の船の着くのを待つてゐて、渚へ着くと、女達は、早速掌を合はせて、船を棧橋の上へ曳き上げた。誰かが笑つて、鈍刀のサーベルを海へ投げた。

『伍長』は、酒臭い息をふうふう吐きながら、捕虜のやうに、事務所まで若い男達に引摺られて行つた。誰かが、疵口へ手拭をあててやらうとすると、幹事の一人が鋭どい聲でそれを制した。

『うつちやつておきなアよ。——この野郎、しぶてえ野郎だ！』

さう云つて、彼は、『伍長』を一脚の椅子へ押しのめすと、

『うぬ、仁右衞門に絆まれたつぺ。——ぬかせ！ ぬかさねえか、この野郎！ 島の關係だ！』

と云つて、拳を固めて突きつけた。

『野郎、組合ぶつつぶすとぬかしやがつたぜ。そつだから、渡船をおらが手からぶつたくつて、早く二汁へ來うと思ひやがつたんだ。しぶ

てえ野郎だ！』

吉は、紫色に腫れた頬を抑へながら、赤ゴムの靴で『伍長』の向ふ脛を蹴つた。

その咄嗟『伍長』は、鐵管の中でわめくやうに笑つた。感覺のない、うす氣味の悪るい笑ひである。

『全軍ッ、進めッ！』

續いてから叫ぶと、巨きい體軀で他人を弾き飛ばしながら、背後のガラス窓を、双手で紙を破るやうに毆ぐりつけた。ガラスは複雑な悲鳴をあげて、隣家との境へ垂氷のやうにけし飛んだ。一瞬間、呆氣にとられてゐた群集は、急に總立ちに彼れの肩に釣るさがつて、引き倒す、毆ぐる、蹴る、毆ぐる、毆ぐる――の底から、しまひに赤く、赤く、くちやくちやになつた『伍長』の人事不省の姿があらはれた。

動かぬところを、太縄で完全な俵のやうに、半身が縛りつけられ、バケツ一杯の鹹水が、最後の解決を與へた。

『船出せよう！』

毀はれたガラス窓の間から、黄昏れた島の上で仁右衛門、日名子老人、喜三次の三人が一齊に呼び立てるのが倍近くに響いて來た。

『友やん！　友ウゐるけ？』

事務所から向ふ鉢卷が呼び掛けると、小路をへだてた茶屋の婆さんが船頭に代つて答へるのである。

『友ウ、よつく寝入つてるだアよ。』

そこで、『伍長』の縄尻を捕つた消防夫の刺子を着た一人は、戸口までいつぱいに押し寄せた村の人達にむかつて、些か全權の統制權を握つた聲でから命じた。

『誰も船い出すでねえぞ。これから、島とおらア達の村は絶交だ。好きなら仁右衛門の奴、頼朝でも豐臣秀吉でも頼んで、己が船戻しに來たらよかつぺ！』

一と亘り群集の哄笑が濟んでから、血泡を吹いてゐる『伍長』の始末だ。こいつは、一應山の上の遠見の小舎へ縛つたままで一と晩置くことに決議された。

一方『頼朝から貰つた島』の上では、島の萬代不易な主人の仁右衛門と小學校教員との間には、この島の營利事業が開始されて以來の珍問答がそこに展開してゐた。

『どうしたんだね？　この子供達は、僕が責任を持つて父兄に歸へさねばならぬ大切な娘達なんだ。――困るよ、これぢや！　一日往復の切符代を拂つた上は、貴方の方で全責任を負つて貰はんと――僕は、僕は……』

『いや、御尤です。今すぐ何とか致しますから、ちよつとの間、この

お子さん達は、あすこの茶店へ御連れなすつて下さいませんか？――」

先刻から渦潮になつて來る海面に潤んだ眼を投げてゐた仁右衞門は、そこから良い智慧も出ないので、今度は、夕闇の空を振り仰ぎ振り仰ぎから詫びた。相憎と、鮑採りの漁師達も、皆村へ引上げてしまつたあとである。村では、何かで、五六十人がわーツと喊聲を擧げてゐた。

岩の上の女の子達はめいめいに小さな手巾や手の甲を眼へあててしくしく泣き出した。

『俺達は、從來の經濟鬪爭一點張りから眼をさまして、斷然政治的に鬪爭しなけりやならぬ。な、わかつたか、皆、これだよ！　仁右衞門の奴は、××や××にすがつておいらを搾つてゐたんだ。掠奪してやがつたんだ。――政治さ。それが、ブルジョアの政治さ！　あいつらの政治に對抗して、今度アおいらがにも政治がなけりやなるめえ。……プロレタリアの政治鬪爭さ！』

裂けてひゆうひゆう風の吹き込む窓ガラスの下では、何事もなかつたやうに、さいぜんからの續きの『全國漁業組合』のパンフレットを中心に三人の幹部が節を繩めてゐた。鉢卷の青年が、それに註解を加へてゐるのだ。

『脫出せよう！――』

刄物のやうなうす氣味の惡い風の加はつた海の上には、だんだん嗄らびて來る日名子老人の聲が羽虫の鳴くやうに細つて行つた。

靜止の狀態にあることを嫌ひ、靜止の狀態にある物を憎む海は、沖から沖からと押し進へて來る搏擊力をもつて、玩具のやうな「頼朝から貰つた島」の四邊に、ひた押しに肉迫した。

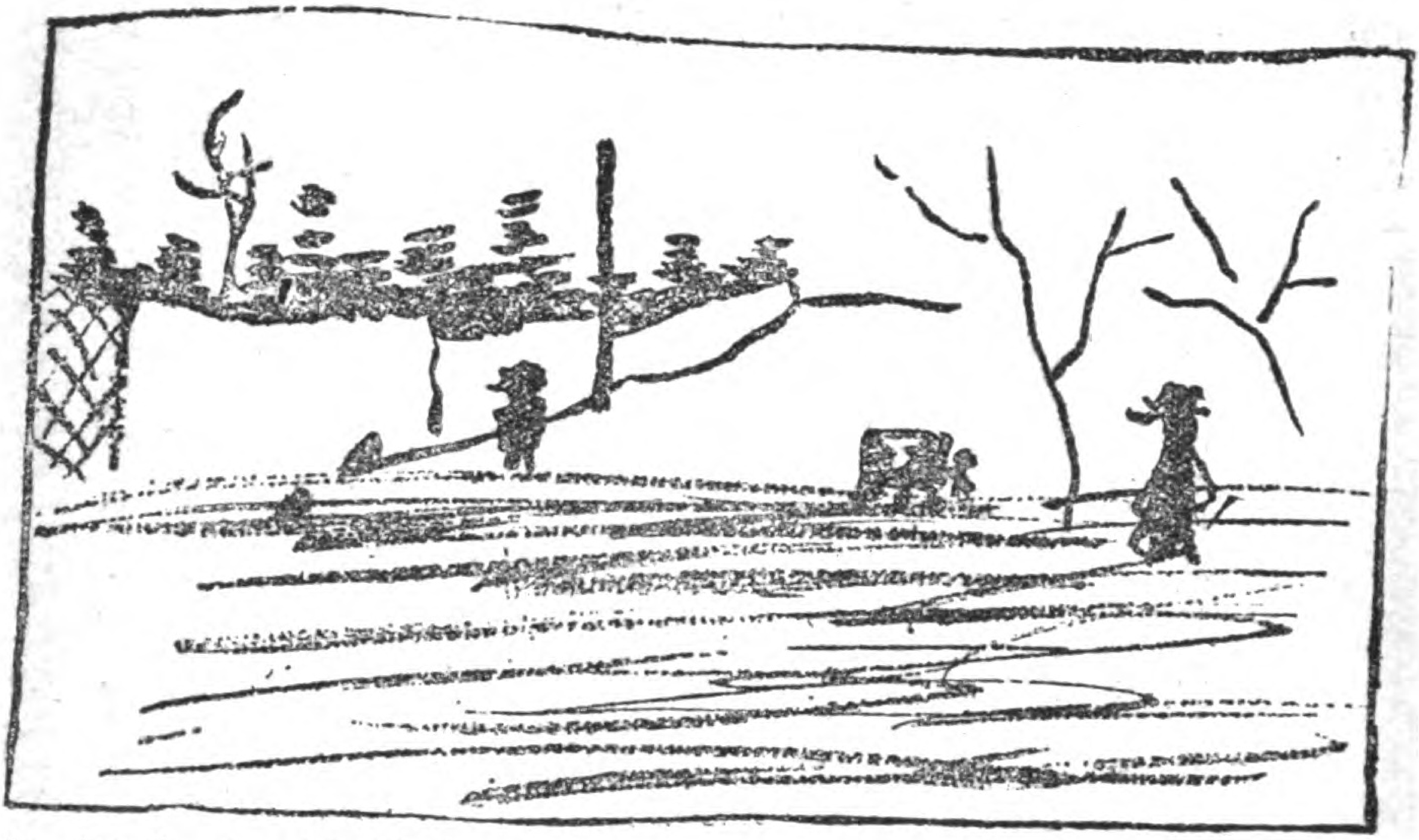
陸を嘲る一聯の白濤のその第一線には、いつも鬪士のやうな波が先驅した。

すべてに氣勢を擧ぐべくはるかに遠く、大砲のやうな沖鳴りさへ加はつた。微力の微弱な電燈が、この時、暮れかかつた凄慘な海の肌を照らして、村のそちこちに點つた。

その光の下で、朦朧とした影を聯ねて、全村は、八幡樣の祠へ行列をつくつた。組合員全部の臨時集合だ。夜を徹しても、新組織に關する對策をしなくてはならぬ。八幡さまは、山の中腹――素足が續く。

漆黑の夜の下に、かすかな島の電燈が涙のやうに瞬つた。子供の投る礫の屆きさうな淺瀬も、潮の加減で、深海のやうに荒れた。襲擊する波は、唸り、吼り、咆號しながら獰猛な白馬の大群のやうに岩といふ岩を蹴り超えた。海と陸とに鬪爭は開始された。空には、嵐が驀地る……。

六月の島は、これからがしけだつた（了）



# 大地

里見弴

## 二の三

いつの間にか、一つ幮のなかにはいつて寢てゐる父親を、翌る朝の目覺めに、子供たちが、それこそサンタ・クロースの贈物どころの騷ぎでなく、躍りあがり、喜び迎へてくれるだらう、といふ昌造の豫期は、もの〻見事に裏切られて了つた。尤も、千葉の話に、八幡山で野宿をした翌朝、東京へ引き返さうとするのを、子供たちに取り縋られ、すぐパヽさんをつれて來るからといふ條件つきで、やつと宥めて放して貰つたと聞いてからは、自分が彼方へ行き着いた時の、子供たちの感情の亢りを、むしろ恐しいもの、困つたものと考へてはゐた。現に昨夜も、くたびれて寢ついて了つたあと〻いふのを、心の底のもの足らなさはそれとして、工まずしてい〻都合にいつたものと思ひ、それゆゑにこそ、揺り起し、抱き擁へて、愛撫の限りを盡す方があたり前で、誰に遠慮も會釋も要らう筈のない場合を、ことさら、そッと寢顏を見て廻るだけに止めたのだ。それと云ふのもみんな、子供たちを、徒な亢奮から、また芝居がゝりの場面から救ひたいばかりの心遣だつた。

してみれば、今朝になつての、子供たちの素ツ氣なさは、願つてもない仕合でなければならない筈を、――一方さう思ひながら、矢つ張り昌造の心は寂しかつた。無理にも、寝起きの薄ぼんやりや、あたりの嬉しさを包んだ含羞や、さういふところへもつて行つてかづけやうとしても、どこともない反撥の氣勢は、おのづから胸へ來てさゝつた。――滲むとも染るともなく、書生や女中たちにまで乘り移つて行つたおしげの感情は、執念ぶかく、こゝにもまたその影を映してゐたのだ。――爽に晴れ輝いた九月五日の朝日のなかに立ち出でながら、昌造の心は、親しい者どもの唱へる楚歌の聲に、靜に暗み沈んで行つた。――靜に、せめてはそれが、自分一人の慰めとはなつたが……

……。

相應の荷も、男手が多いので苦にならなかつた。七つと六つの男の子たちはもとより、次の五つになつたばかりの裕子までが、なんとなく非常時の緊張を見せて、はしやぎ飛び跳るといふのではなく、默々と、しかもしつかり歩みを運んで行つた。前の日の遠足で、歩きつけない足の裏が、ふく〱柔く、まるで猫のそれのやうに腫れあがつて了つた昌造が、なかで一番不景氣な歩きつきをしてゐるくらゐだつた。あとになり先になり、永い間隔をおいた一行の列のなかで、時折はおしげと肩を並べるやうた場合もあつたが、先方は相變らず昨夜からの無愛想を捨てなかつたし、昌造の性分としても、ひと當たりとも御機嫌をつかふやうな口は利けなかつた。追ひ越したり、追ひ越されたりにも、まるで他人のやうな無關心を示し合つた。

四里弱の道を、横須賀に近づくに從つて、往來に人馬の往き來が集く、子供たちは一人一人手でも把つてゐてやらないとあぶないくらゐだつた。長男と次男との手を、左右に操つて、而も昌造は、矢つ張り氣輕に口は利けなかつた。午に近く照り輝く夏の陽のもとに、なほさらに孤獨の寂しさは深かつた。

海岸の××學校の構内で、便船を待つ大勢の人々のなかに、一行の者も、荷物の上に腰をおろしたりして、言葉ずくなのひと團りをつくつた。いつ解纜が出るのか、はつきりしたことがわからないので、空腹のまゝ辨當も開かずにゐた。

どういふ話合になつたのか、あとに殘つて、千葉、長谷部の二人と、極樂寺の壬之助の妻子を迎ひに行く組に、ハートが加はり、こつちには、傭宿の伜が一人だけ供をしてくれることにきまつて、やがてその人達とも別れる時が來た。腕に赤布を捲き、メガホンを持つた海士の命令どほり、避難民は二列縦隊をつくつて、ぞろ〱と艀に乘り込んだ。そこからは、荷物も嵩高なものは、水兵たちが扱つてくれた。石垣の上には同じ道をまた鎌倉の方へ引き返して行かうといふ二

人の若者たちが、帽子を振つたりして、いつまでも見送つてゐた。
　昌造たちが便乘を許されたのは、夕張といふ驅逐艦だつたが、これは、上の男たちにとつては、騒動ちう拾ひもの〻嬉しさ、樂しさだつたらう、ぎつちり人に埋つた甲板を、あちこち歩き廻つてみたがつた。昌造には、けれども、先に立つて、彼等をつれ歩くだけの氣力もなかつたし、第一、ちよつとでも席を立てば、すぐもうそこは他人に占領されて了ひ、坐り場所もなくなるほどの雜沓だつたので、可哀想と思ひながらも、いくぶん叱りつけるやうな調子で云ひ聞かせ、身の周りから離させなかつた。
　横隔膜がビリつくやうな、とてつもなく甲高な汽笛が、突然頭の上で鳴り響いたと思ふと、いつの間にかもう艦は動き出してゐた。相憎左舷に陣どつて了つたために、蒸風呂へでも擲り込まれたやうな陽の直射だつたけれど、速力が加はるに從つて、そよ〳〵と吹きつけて來る海風に、それでもいくぶんか凌ぎ易くなつた。ほツとした思ひで、おそい辨當が開かれた。昌造も、厚い食麵麭の片を、半分ほど口へ押し込んでみたが、さして食慾もなかつた。焦けた鐵板を背に、親同士ぴたり肩をおツつけ合ひ、兩膝を抱き擁えたまゝ、いつか昏々と深い眠りにおちて了つた。
　目を覺した時には、もう艦は停りかけてゐた。つい鼻の先に見える芝浦の埋立地を望んでは、今まで固守してゐた自分自分の尻の据場も放棄し、早速もうおり仕度に、人々は右往左往してゐた。陽もだいぶ西へ廻つて、縮緬皺の海面から、ギラ〳〵とまぶしい反射が來た。
　艀から投げあげられた荷物を前にして、昌造は全く途方にくれて了つた。東京にさへ着けば、それから先はどうにでもなる、とたゞ簡單にさう思ひ込んで來たのだが、いざとなつてみると、――殊にかういふ埋立地のはづれなどで、所詮乘りものなどの得られさうな筈はなかつた。書生の岩井は、前からの脚氣を、午前中の遠路で、自分一人の體さへもて扱ふほどに弱り切つてゐたから、力業に堪えるのは、伸夫と、その三分の一もむづかしいとしても、兎に角昌造と、この二人きりだつた。無口で忠實な俥宿の倅は、背にも胸にも兩手にも、つけられるだけの荷を身につけた。見榮や外聞どころではないので、昌造も大きな信玄袋と鞄とを、振分に肩にかけた。末の敏三をおんぶした女中まで、後手に、風呂敷包の一つくらゐは提げなければならなかつたし、おしげの小脇にも擁え込まれた。さういふ姿で、やつと岸壁を離れた。
　そこには、臨時に海軍省からでも出張して來てゐるやうな建物があり、その玄關前に、十臺ばかりもずらりと自動車が並んでゐたけれど、どれもこれも、何々用と大きく貼札のしてあるのばかりだつた。

うらめしげによち／＼とその前を通りすぎて行くうちに、××新聞社用といふ貼紙が目についた。昌造は、その社のために曾て連載小説を書いたこともあり、全く無關係といふわけでもなかつたし、おまけに、その客席には、記者らしいのが一人、ぽつねんと乘つてゐたので、途中どこか乘りものゝ得られるところまででもと思ひ、近よつて行つて、名刺を見せて、この窮狀をなんとか救つて貰へまいか、と頼んでみた。

「さうですねえ……」

「誰かこゝに來てゐるんですか」

と、建物の方を顎でしやくつてみせて、「誰です？」

「えゝ。……然しどうも、さういふわけには、……お氣の毒さんですが……」

いかにも煮えきらない返事だつた。自動車のなかに待されてゐるくらゐで、それを取りきめるだけの權限は與へられてゐない下級の記者には違ひないのだが、それならそれで、建物のなかにゐる先輩なり誰なりに相談してみてくれゝば、と思つたが、それを云ふのも面倒になつて、廣い原を横ぎり金杉の方へ出て行つた。終日の好晴と思はれた空に、いつか怪しい黒雲が起り、俄に風も横なぎに吹きつけて來た。灰や砂埃も一緒くたに、凄い響のやうに渦き迫つて來る焼跡などでは、目をつぶつて、立ち竦んで了つた。どこまで行つても、一臺の自動車などは一臺も見つからなかつた。有繫に勞れて、兎角おくれがちになる子供たちに氣をつけ、勵したから、どうやらかうやら飯倉近くまで來かゝつた時に、たうとうぽつり／＼大粒の雨が落ちだした。往來の眞ッたゞなか、電車線路の上に、住み捨てられた小屋掛があつたので、取り敢ずそれへ駈けつけた。と同時に、彼方側からも、袢纏着の男が一人飛び込んで來た。どうしたのか、そこに、ふかした薩摩芋の、ひよろ／＼と細長いやつが一本、鍋皿に載つて殘つてゐたが、欽造がそれへ手を出したのと、袢纏着の男が、ひよいとそれをさらつて了つたのとが、丁度また一緒だつた。昌一と欽造とのへんに一生懸命な眼差が、ぢッとその男の手もとに射つけられてゐた。一秒、二秒……、男の手は、皮の赤い筋芋を摑んだまゝ、あげもさげもならないものになつて、夕立の光のなかに止まつてゐた。

「坊ちやん、あげよう」

どうするかと思つて、目を移す遑もなく、すぐもう昌一が、無言でそれをうけとり、いきなり口へもつて行かうとしてゐた。

「お兄ちやん、僕もほしい」

欽造は、鼻聲になつてゐた。

「どれ、おかし」

昌造が近よつて行つて、うけとり、眞二つに折つて兄弟に分けてやつた。二人は、自分だけ先に食べ終つて了はないやうにと、お互に相手の食ひものゝへり具合を見交しながら、さも惜しさうに、少しづゝ口へ入れてゐた。父親の顔などは、ちらりと見あげもしなかつた。——まだひと月とは經たない前のことだつた、昌一を伴つての上京に、隣に乗り合せた子供づれの夫婦者が、自分たちの子供にやるために取り出した菓子を、そばにゐる昌一へも、お愛想に頒け與へやうとすると、急に彼方側にゐた母親の方へ逃げて行き、その膝に堅く顔を伏せて了つて、なんとしても離れない。一旦出したものを引ッ込めもならず、困つてゐる先方に對しても氣の毒で、仕方なく、代りに昌造が手を出して貰ひうけ、改めてそれを渡してやらうとしたが、それでもなほ、母親の膝の上でいや〳〵をするばかりだつたが、これはほんの一例で、一體が、さういふ極端に含羞やの、神經質すぎる子供なのだ。それが、路上に棄てられてゐた芋一本を、袢纒着の男と奪ひ合つてまで食はふとする。父親として、どうしても悲慘を感じなければならない筈の場合だつたが、それが、不思議に、昌造の氣持を明るくした。輕い、いゝ味の滑稽で、ほがらかな微笑さへ浮んで來た。

間もなく小降りになつたので、暮れきらないうちにと、小屋を出ると、二人は、歩きながらもなほその薩摩芋を噛つてゐたが、口の周りに、黄色く、かけらなど附けてゐる具合は、有繋に哀ッぽくて、いゝ氣持はしなかつた。

「もういゝ加減でよせよ」

しッぽの先まで、餘さず食はふとするのへ、思はず尖つた聲が迸つた。思ひがけない、嚴しい父親の表情に、子供たちは、慌てゝ食ひさしを捨てた。

「見ろよ、口の周りにくッつけて」

手布で、手あらくひッこすつてやつた。

砂ッ埃よりはまだしもましとは云へ、夕立めいて、またも落ちかゝつて來た雨に、もうひと息といふところまで漕ぎつけてゐながら、なか〳〵道が捗らなかつた。何ひとつ雨の用意などない一行は、降りが強くなる度に、商家の軒先をかりて、暮れかゝる空を、心細く見あげたりした。

振分の荷を結び合せた信玄袋の紐の、ぎり〳〵と肩にめり込んで來るのがやりきれなかつた。一體、何がはいつてゐればこんなにも重いんだらう、と思つて、肩を替へる序に上からちよつとさはつてみた。口元の方に、ごろ〳〵した丸いものが積み重なつてゐる具合、どうしても果實らしかつた。道ばたのぬかるみも構はず、いきなりおろしてあけてみると、果して、林檎やネーブルだつたが、縁の上でも、そんな

ものを取り出した樣子はなし、途中の用意とは思へなかつた。してみれば、逗子での食ひあましの、わざ〱こつちまで持つて出たところで、別段珍しくもなく、貴重でもなんでもないものが、たゞ女房のちよつとしたもの惜みの氣持だけから、荷のあきへ詰め込まれて來たに過ぎないのだ。——ぐうッとこみあげて來る癇癪は、どうにもこらえやうがなかつた。摑み出しては、一つ一つ、力いつぱいあたりへたゝきつけた。人道と車道との間の、石でたゝんだ淺い三角の溝をねらつたやつが、一番氣持よく、林檎なら、ボカリと割れ、ネーブルならぐちやりとつぶれた。折からの雨を、みんな軒先に避けてゐる時だつたが、なんにも云はずに、いきなり始めたこの狂態を、妻も子も、僕婢たちも、たゞ呆氣にとられて眺めてゐた。十あまりもあつたやつを、一つも殘さず、力まかせにたゝきつけ、踏み躙つて了ふまで、然し昌造は、そんなことは氣にもとまらなかつた。もと〱、女房の目の前でやつてみせるあてつけといふやうな、そんな餘裕のある氣持ではないので、よしんばそこに巡査でも通りかゝつて、氣違と思ひ、交番へつれて行かうとしても、一つでも殘つてゐる限りは、ふりほどいてもさうしずにはゐられないほどに、憎んでも憎んでもなほ憎みたりない果實どもだつた。

麻布の區役所に近いところまで來て、やつとからの人力車に行き合ひ、大きな荷を、載せられるだけそれに積ませた。その時にも、病氣をいたはつて、ほんの小さな自分の荷を一つ持たせたきりの書生の岩井が、早速よつて來て、それを積み込んで了はうとするのに、もう一度昌造は腹を立てさせられた。

「そのくらゐなんだ！　俺が持つてつてやる、かせ！」

力まかせにひつたくられて、北海道から再三手紙を寄せ、是非とも昌造のそばに置いて貰ひたいと云つて、押かけ書生にゐついて了つたやうな、文學青年の岩井は、蒼白い頰にぽろ〱と淚を流した。

おもてでも、人の顏がはつきりしなくなる時分に、やつと檜町の母の家へたどり着いた。思ひがけない早い上京に、みんなどや〱と玄關まで駈け出して來た。

着物を着更へるとき氣がついたのだが、昌造の衣嚢のなかには、いつどこへ落して來たのか、もうあの、番町の佛間から持ち出して來た珠數がなかつた。——蠟燭のもとの、樂しい食事だつた。

二の三終り——つゞく



# 失樂の歌

宇野千代

## 1

街を歩くとまだ宵の口だと言ふのに戸を閉ざしてゐる家が多い。唄聲が往來まで聞える。一月の十日過ぎである。

私は旅から歸つたが、わが家へは歸らず、ほど近いところに宿をとつた。人から聞けばその家は、垣根のそとを通るばかりで、人の心にさへ寒いやうなものを感じさせるほどださうな。その廢屋のやうな中に老つた義母がひとり殘つてゐる。むかし、私と私の良人とがその家を作つたときには、義母はよそに住んでゐた。私たちはそれを迎へた。母と息子とその嫁との小さた巢であつた。みんな燕のやうに翼をよせて不安なく暮してゐた。そして、七年も經つたらうか。私も私の良人も、どこか家のそとの方では、日夜快樂について語られる場所があるやうに思ひ、その方へ聽き耳を立て始める。どのやうなものにも、そして事柄にも、消長があるのであらう。家は古くなつた。家の中の生活も古くなつた。誰が惡いと言ふこともなく、私たちはそとへ出たいやうな氣持になつ

た。その心の隙間から、風のやうにうそ寒い何かが忍び込む。私も私の良人もわれとわが心に氣が附かず知らぬ間に家を捨てて了ふやうなことになつた。ただ、己れの生活を持たない老母のみが、家に殘つてゐる。永久に人の歸りを待つ生活を始める。――そのやうな老母の姿が私をそれから私の良人をあんまり遠くへ遣らないのでもあらうか。或ひはその古い家での生活にうら寂しい未練のやうなものが繋がり、歸るともなく去るともなく、そのやうな近間にばかり居させるのでもあらうか。私の場合には多分にそれであつた。窓をひらくと恐らくはそのわが家の赤い屋根が見えるかも知れない。そのやうな近くであつたが、入りくんだ露路があつて、如何かすると知らぬ他國へ來たやうに思ひなぞらへることも出來た。

その宿の前の原つぱの電線には幾つもの破れた紙鳶がかかつてゐる。みな同じ方へ向いて風に吹かれてゐるのであつた。私は、街を歩いてゐる中にふいに良人に逢ふことを想像する。それはあり得ることのやうな氣がする。けれども彼はどこに居るのか分らぬ。それを思ふと東京の街は、私の心の中で落莫として擴がり、あの日暮れ方、見知らぬ隣り村へ歩いたことのある子供のころのことが思ひ出されて頼りない感じであつた。ふいに私は激しい氣持になつて、あの娘の書いてゐたと言ふ家へ訊きに行かうかと思ふ。私は私の手帳にその所書きを書きとつてゐるのであつた。私は長い間そのこと許り考へてゐた。そして、想像の中で疲れてゐた。私にはこのやうな午後であるが、どこかに、小さな家を借り、あの娘と二人ままごとのやうに、けれどもうそ寒く不仕合せな心をもつて、恐しげに暮してゐることであらう。――灯りがついた。いつの間にか夜になる。原つぱの向ふの板圍ひの家に子供が驅け込むのが見える。「お母さあん、」さう子供の呼ぶやうなのが、ふいに身顫ひのするやうな激しさで、私の心に旅愁を感じさせるのであつた。私は身支度をして街へ出た。それから丘を上つて行つた。

みんな見馴れた風景の中に、私ひとり、まるで變つてゐるやうに思はれた。私はもう一ぺん心を立て直す。すると、私は昔のままであるが、丘も畑も杜もみんな異國の風景のやうに不思議げに見えるのであつた。私は落付きなく歩いた。あの家ではいま義母がひとりの食卓に向つてゐることであらう。さう思つて私は、途中で鰻の佃煮を買つたのであるが、さてその部屋の窓際に立つて聲をかける勇氣があらうか。私にはそれが見える。家の中はどこも暗く、ただその窓にだけタングステンの貧しき灯りがつき、如何かすると影が映る。義母は手慰みの人形をつくつてゐるのだ。――醉ひどれが一人、私に突き當つて通り過ぎた。氣がつくと私は、つい半年ほど前までは私と私の良人と

に共通の友であつたAといふ若い男の家の前まで來てゐた。

「Aさん、」

私はその男の書齋である二階へ聲を掛けたが、同時に、そこで酒宴が開かれてゐるらしい騷聲を聞いた。まだ、ここでも正月であらう。さう思ふと然し、その窓下で人を呼ぶには適しくない自分であつた。私は反射的に物影を探したが、濁み聲の威勢の好い返辭とともに二階の障子があいて、さつと地べたに、サーチライトの向けられたやうな光りが落ちた。私は全く顏を上げた。そしてそこに、AもBもCもDもEもEの妻君も、それはそのまま私の家の茶の間へ集つた連中のそつくりが一せいに首を伸して私の方を見るのを見た。

「あ、」

と誰かが聲を上げた。障子が半分しめられ、またあけられた。私の姿は彼等を驚かし狼狽させたのであつた。音を立てて誰かが階段を下りて來る。もう一人、下りて來る。私はそこの暗い軒下に立つた。風が吹いて、ブリキの空罐の轉つて行く音が、ふいに遠くなつて聽えたのであつた。

「どこ？　どこ？」

玄關から重つて私を探してゐる大勢の顏が見えた。私は笑顏をして見せた。私と彼等との間に出來てゐるやうに見える一つの距離に對して、和睦したかつたのでもあらうか。私は自分でも氣が附かず私の孤獨を哀しんでゐた。

「いつ歸つて來たの？」

「いましがた、」

私は笑ひ乍らその一人に答へた。短い秒時であつたが、私たちの會話は斷れた。そのしんとした中を誰かが音を立てて階段を上り、また下りた。みなの顏は押繪の面のやうに思はれた。ふいに私は彼等がその狹い玄關に折重つて立つてゐるのは、私を迎へるためではなく彼等の背後にあるであらう一つの光景を私の眼から遮るためではあるまいかと疑つた。私は私の心に不幸な感情の生れるのを感じた。自分の不幸がこれらの人人の幸福を少しも妨げなかつたと言ふことを了解する能力を失つたのであつた。長い間、私を避け惧れてゐたみなの行動が、私には間諜のそれのやうに思はれた。私は頭を垂れた。すると、Eが下駄をつつかけて、つかつかと往來へ出て來た。

「來てゐるのだが、——」

私はうなづいて見せた。

「一ぺん僕の女房と一緒に、僕の家まで行つててお呉れよ。」

BもCもDも私の周圍へ集つた。一ばん年齡の若いAは、いつもの稚の媚びるやうにうすい眼を走らせ乍ら

「いまどこに居るの？　さう、それやあ好いや、ぢやあみんなで、ねえ？」

と、見廻して、「少しづつ荷物を運んで上げても好いやね。そうつと窓から運び出しやあ、お母さんにだつて知れやしないだらう。」

「よく遣つたぢやあないか、」

「ぢやあ、とにかく僕の家まで行つてお異れよ。」

それは長い間私の空想し疲れてゐた光景であつた。私は誰の言葉をも聽いてはゐず、自分ひとりの考へに沈んだ。――この感情は避けられるだらうか？　避けられる。私はさう自答した。何か自分の咽喉もとにこみ上げて來る恐しいものに氣附くまいがためであつた。

私は二階を見上げた。皆の雑音が一どきに二階から往來の私のところまで下りて來たために、そこはしんとして、も早や酒宴の席ではなく墓場のやうになり、その墓場の中に坐つてゐるであらう二人のさまが感じられた。私は低い聲で獨り言のやうに言つた。

「一寸上つて、逢つて來たいと思うんだけど、」

「それでは悟郎さんが可哀さうだよ。悟郎さんを苦しめるばかりだよ。」

その言葉は私の耳には這入らなかつた。助けのない子供のやうに私の心は疑ひ深く頑なであつた。どうかしてこの雀のやうな、私にはそのやうに思はれた。人人を欺して二階へ上りたい、とそのこと許りを考へた。

「それでは上りますか。さうだ。逢つた方が好いかも知れない。」

「馬鹿だな。何故逢つた方が好いのだ。」

「好いわあたし。逢はないでも好いわ。」

私は暗い板圍ひにそうて二三歩歩き出した。――みんな往來に出て了つたので、玄關の沓脱には見覺えのある男の靴と赤い鼻緒の下駄が殘つてゐるのであつた。間諜ども！　幇間ども！　卑怯者奴ら！

私は痴愚の心をもつて、うしろにゐる人人の方へそのやうな雑言を送つたのであつたが、少しも慰められはしなかつた。ネ、コ、ソ、ギ、ニ、――私はさう自分に言つた。ナ、ク、ナ、ツ、タ。そしてそのまま、板圍ひに縋つて泣き出した。

「おい、」

振り返ると直ぐ肩のところに良人が立つてゐた。强たか醉つてゐると見えて、見る間にぐたりと首を曲げて裸けた胸を板塀に押しつけるやうに、やつとのことで立つてゐるのであつた。私にはこの胴體だけがふいに塊りになつてあの二階から轉がり落ちて來たやうに思はれた。さあ俺は逢ひに來たぞ。――その塊りが言ふやうに思はれた。私はまた醜を擬うた。まるで遊ぶ。けれども、何か蜘蛛の糸のやうにか

細い歡喜の情が私を哀しませたのであつた。私は少女のするやうに、涙の中で笑つて見せた。

「あたし、こんなに髮が伸びたの、」

「泣くなよ、泣くなよ。」

抑へるやうに聲をひそめて言ふのであつた。私はその良人の眼を貪り見た。見乍ら、自分の額の垂れ髮をそつとひくやうにして見せた。半歳ほども前であらうか。私はその髮を斷つた。それは家庭の中にあつては何となく馴染まない異風であつた。私はそれを知つてゐる。或ひは知らないで何か自分を呼んでゐるやうに思へる窓のそとの方へわれとわが身を投げ出して了つたのであらうか。——私はまたここで良人を見出した。ふいに思ひもかけず長い間の妻としての感情が、昔の主人に出會した奴隷ででもあるやうに胸一ぱいに溢れて來た。それは殆んど快感であつた。私は身を顫はせて後しざりをした。それからごくりと唾液をのんで眼を閉ぢた。何か微風のやうなものが私の瞼を掠めたやうに思はれた。ああ、私は何も失つてはゐはしなかつたのではあるまいか。

だが、良人の眼は私の垂れ髮を見てはゐなかつた。眞直ぐに、まるでほかのところを見てゐた。そしてどこか弱弱しい表情であつた。

「ああ、困つた、困つた。」

「如何して？ ねえ？ 如何して？——赤ん坊が出來たの？」

私は安らかな愛戀の情をもつて訊いた。そこは最早やどこかの道べりの板圍ひの側ではなく、二人の長い間住み馴れた家の中であるやうに思はれた。私はまた笑つた。するとその笑ひに感じて良人の頰にも微かな笑ひが上つた。ふと見ると道べりの青草の中に埋れて何か穿かない良人の素足が見える。その冷たさが私にも傳はつた。私は愛する。だから、この三人の中の誰かが決斷をせねばならぬ。そして恐らくはそれを私が、——私がせねばならぬ。私が行かねばならぬ。それは私が最も輕浮なる者だから、——私はまた顏を覆うた。

「あたしの方は如何でもして遣つてかれるから、何にも心配しないで、」

「さうだ。俺はもう死んだものと思つて呉れると好いんだ今度若し逢へることがあつたなら、また生き返つたのだと思つて呉れ。」

「そんなことを思ふことは出來ないわ。その代り、さつぱりと別れて上げる。もうあたしたちは、夫婦でも何でもないんだもの、」

「お前はそれが出來るか、」

「出來るわ、」

私は自分の頰が寄木細工のやうに歪むのを感じた。その上を雨のやうに涙が溢れ落ちた。

「ああ、俺はこの泥溝の中へ首をつつ込んで死んで了ひたい！」

「何でもないわよ、ゴロちやん。」

私は哀憐の情に驅られて言つた。「おセンだつて、ちやんと生きてるんだもの。夫婦でなくつたつて、ちやんと生きてるんだもの。そいから、あの、――あの、――いつだつて居所を知らしといたげる。お前が逢ひたいときに、あの、あの、あの、」

――はつとして私は二階の方を見上げた。誰かの影がそこに立つたやうに思はれたが、二尺ほど開いたまゝになつてしんとものの音も聞えない。振り返ると背後にはBもCもEもその姿を見せなかつた。私はせかせかと貪るやうに言ひ續けた。「だからあの、その前に、みんなで仲よしになつて、何にも辛くないやうになつて、――おセンだつて、どんなにその方が、樂か、分らない。――ゴロちやん、あたし、逢ひたいの。」

ふいに眞直ぐに顔を上げた。まるで見覺えのない、蒼ざめた、けれども和やかな顔であつた。

「きい子にか。」

「ええ。」

私は良人の腕を摺り抜けた。何だかそれは、芝居の子役がすることのやうに思はれた。私は殆んどその瞬間に、良人のことを忘れた。そして身を踊らせるやうにして玄關へ這入つて行つた。誰もゐない。あは、――私は來て了つた。私はそれを自分の手で玩具をこはすやうにしてこはして了ふことが出來る。蜘蛛の巣を裂くやうにして、裂いて了ふことが出來る。思ひも掛けず慘忍な喜びが私の胸を掠めたが、それはそのまま、私自身を刺し貫くもののやうにもう一度はね返つて戻つて來た。何事も私にとつては最後の唄である。私は醉ひどれのやうに足を踏みしめて階段を上つて行つた。それから障子にぴつたりと體を寄せて、「ごめん下さい。」

「あ、――どうぞ、」

Aの落付いた濁み聲が答へた。一面に散亂した酒肴の中に、Aがひとり、――肩の小さい一人の若い娘とそこに坐つてゐた。そこはついさきがたまで喜びの酒盛であつたのを、不意のことから、酒盃を轉がしたまま逃れ去つたあとのやうであつた。私は何物であらう。（私は自分が、大きな黒い裲襠を着て足を踏まへて這入つて來る仙台萩のあの意地悪なお局ででもあるやうに思はれた。）――Aは眼を上げないで、私の坐るところを作らうとでもするやうに、急いで疊の上を片附け始めた。その太い指さきが、私の眼には波にのつた浮片のやうに揺れて見える。私はそれを見定めようとでもするやうに眼を瞠いて、

「みなさんは？」

「階下、でせう？」

Aはその細い瞼をちらと走らせて、「あの、こちらは志賀きい子さんです。それから、久野さん。」

「いろいろ心配をかけて、――――すみません。」

「いいえ、そんな――」

言ひかけて私は、狼狽てて眼を疊の上に落した。どうぞそんなに私を恐がらないで、――細かい友染の羽織を着て大人めかしく束髮に結ひ乍ら、まだほんの少女であつた。腫れぼつたい一重瞼を伏せたまま、小刻みに顫へてゐる。その小さな頭全體が微風のやうに小さく、顫へてゐるのであつた。ああ、これがリリアンギッシュの技巧だな。私は微かな冷嘲をもつて、この少女の持つ靜かな美しさに抵抗するもののやうに呟いた。〔このやうな少女にあつては、どこかで習ひ覺えたこのやうな身振りまでが愛らしいのであつた。そこには私の持たぬもの、私の失つたもの、私の持ち得ないもの、そのやうなものの凡てがあつた。アノ手ハ、ワタシノ手デハナイ。私は混亂して自分に言ひ聽かせた。仄かな緋縮緬の袖口からむつちりと子供のそれのやうに肥つた小さなうす桃色の手が疊を押へてゐるのであつた。私はじりじりと心の燃え落ちるやうな思ひでそれを貪り見た。それは殆んど快感であつた。明るい、ほのぼのとした和やかな感情が、そのあとから生れた。私は落ついて續けた。

「もつと早くお逢ひしたら宜かつたのにとさう思ふくらゐですの。ほんたうに長い間、みんなで無駄な苦しみをしたやうな氣がして、」

微かな聲を立てて少女が泣き始めた。――人は自尊心を傷けられたと思ふことから逃れるために、凡ゆることの工夫をする。この愛すべき少女が私の幸福を簒奪したと言ふのか。私は私自身の手でそれを殺つた。それを毀した。そしてそこから出發した。――出發した？ では何處へ向つて？ 私は急いで、仰向けに首を強く振つた。そのとき、階段を上つて來る音がして、私のあとを追つて來た良人が姿を現した。

「どうした？」

「何でもないの、」

私は顏を上げて笑つて見せた。「こんなにきい子さんが好い女で、あたしもう、今夜は悲しくも何ともないの、何ともなくなつて了つたのよ。もう安心して自分の好きなことが遣つてかれるやうな氣がしてね、ひとりでにこんな風になつたの。」

良人の痩せた頰が微かに歪んだ。「だからあの、みんなでお祝ひに、どこか、海岸通りの東風亭へでも行きたいの。ねえ、Aさん。貴方もよいと自動車を呼んで吳れない？」

「これから？」
Aは大袈裟に瞼を上げて、「そいつあ豪氣だ。みんな呼ぶんですね。」
どたどたと下りて行つた。
しんともの音の死んだ中に、いつまでもきい子の啜り泣く聲が聽えた。私はその聲を貪り聽いた。すると私の悲哀もその聲の中に溶けて了ふやうに思はれるのであつた。小止みなく涙を拭く、その袂の裏の紅絹が染つて、二つの瞼は、まるで牡丹の花瓣のやうに美しいのであつた。あは、染まつた、染まつた。——私は放心してそれを眺めた。

2

彼女はもう泣いてはゐなかつた。私は稚い花嫁を護る寡婦のやうに、殆んどその腰を抱くやうにして並んで腰を下した。そして、あの古い家の中で人の歸りを待つてゐる老母のために買つた饅頭の包みを、そつと腰掛けの下に隱した。
二臺の自動車は暗い木立を潜りぬけ、閉ざされた家の雨戸の前を通り拔けた。灯りのついた窓が後方へ飛んだ。何と澤山の小さな家々、そして無數の窓窓であることか。——感傷といふものは古い習慣への觀念にしか過ぎませんからね。私は人に話しをするやうに心の中で呟いた。そんなものは、こつちのスヰッチの捻り方一つでどんな風にでもねぢ曲げて了ふことが出來ますよ。するとこの自動車は、——まるで、徴發せられた青バスですよ。戰鬪自動車ですからね。私はよく子供のときに、辛いことがあると、何だお前はジャンヌダルクぢやないかと、さう自分に云つたものでした。——だが、これはまるで、葬式自動車のやうにひつそりと疾走してゐるのであつた。
忽ち新しい國道へ出た。その素晴しく廣い街道のプラタナスの並木の蔭に、ぺつたりと貼りついた書割ででもあるやうに、小さな東風亭の扉が見えた。
「小母さん。」
私は一番さきへ這入つて行つた。直ぐ後から暖簾をくゞらうとする良人の方へ、私は賣女のするやうな微かな流し眼をくれ乍ら、低い内緒聲で、「あの男が、あたしの旦那さまよ。」
「あら久野さん、嘘ばつかり。」
大袈裟に袖を振り上げ乍ら、ふうんと睨みつけの匂ひを殘して若い内儀は料理場の奧へ隱れた。
「あは、あは、あは。」
私は聲を立てて笑つた。その高い笑ひ聲は、ホットレモン、カルピス、温かいお飲物、と書いた細長い色紙を顫はして四方の壁にこだました。氣の輕いまゝおひゆうと高く口笛を吹いた。私は足を踏み鳴らし

乍ら、

「小母さんお酒を熱くして、どつさり。」

私は少しづゝ飲んだ。おぼろに霞んだ醉眼を見据ゑると、AもBもCもDもEもFもFの妻君も、ついさきがたまで自分の幸福をつけねらふ間諜のやうに思はれてゐたこれらの人々が、いまは親しい友達であつた。或ひは、何か狸か狐かゞ、原つぱの眞中で怪しげな酒盛を始めたのであるかも知れない、そのやうにも思はれた。

「お止しなさいよう、」

銚子をぐいとそのままに喇叭飲みをしようとする良人に、きい子が手を上げて止めるのであつた。おし迫つた濃い眉がびくりと動いた。それは醜い妻のする模型のやうな表情であつた。(も早やそれは少女のではなく、充分に成熟した女のものであつたから、)私は遠くからそれを見た。不可思議な玩具のやうな夫婦であつた。そのやうにして彼等は、どこかに隱れ幾月かを暮して來たことであらう。(あの表情には、私の殘して來た古いスタンプがある。)そしてまた、これからも長い間暮すであらう。——私は殆んど平靜であつた。ただ、展望車の遠景のやうに、小さな家の中の窓が見え、窓際の鉢植の花が見え、そしてちやぶ臺のやうなものが見えた。

「ようし、俺が一つ唄ふぞう、」

良人はさういふ時の癖のやうにその薄い脣を捻り合はせるやうに動かして、肩を聳かした。それから眼を閉ぢて唄ひ出した。あの眼もあの肩もあの脣も、——私はごくりと唾液をのんで眼を閉ぢた。ワタシノデハナイ。「風はそよそよ、百人の登ウ城ウ、——平田三五郎どんのウ亂れエ髪イ、」

古い唄であつた。良人はずつと昔にそれをどこかで聽き覺えたのであつたが、何時の間にか一種獨特な彼一人の諧調をもち、殆んど彼一人の唄であつた。そしてまた私の唄であつた。それをいまはこの少女が唄ふ。首を振り肩を搖すぶつて、それはそのまま、私が唄つたのと同じやうにして。——苦しい。この酒盛は苦しい。けれども誰もそれを言つてはならないのだ。

軈て、散會するために、醉態と涸れたやうな笑聲と唄聲とを運んで夜更けの道を再び疾走した。私は自分の宿へ曲る露路口でひとりで車を下りた。

「さやうならア、」

「さよう、ならア、」

見る見る闇の中に呑まれて了ふ自動車の白い窓に、私は帽子を冠らない良人の頭ががくりと前へ隱れて見えなくなつたのを感じた。誰かが手を振つてゐる。——私はひとりで露路を曲つた。

すると向ふから一人の人影が近づいた。巡査だな、私は枯木のやうにまつ直ぐに歩いて居た。

「おいおい、」

私は立留つた。

「君は先刻もここを通つたらう、」

「いいえ、」

「つい先刻も通つたらう。こんなに遲くひとりで何處へ行くのだ。」

「誰か如何かしたのですか。女が何か、」

私ははつきりと殆んど野卑な調子で言つた。「へんなことをしたんですね。」

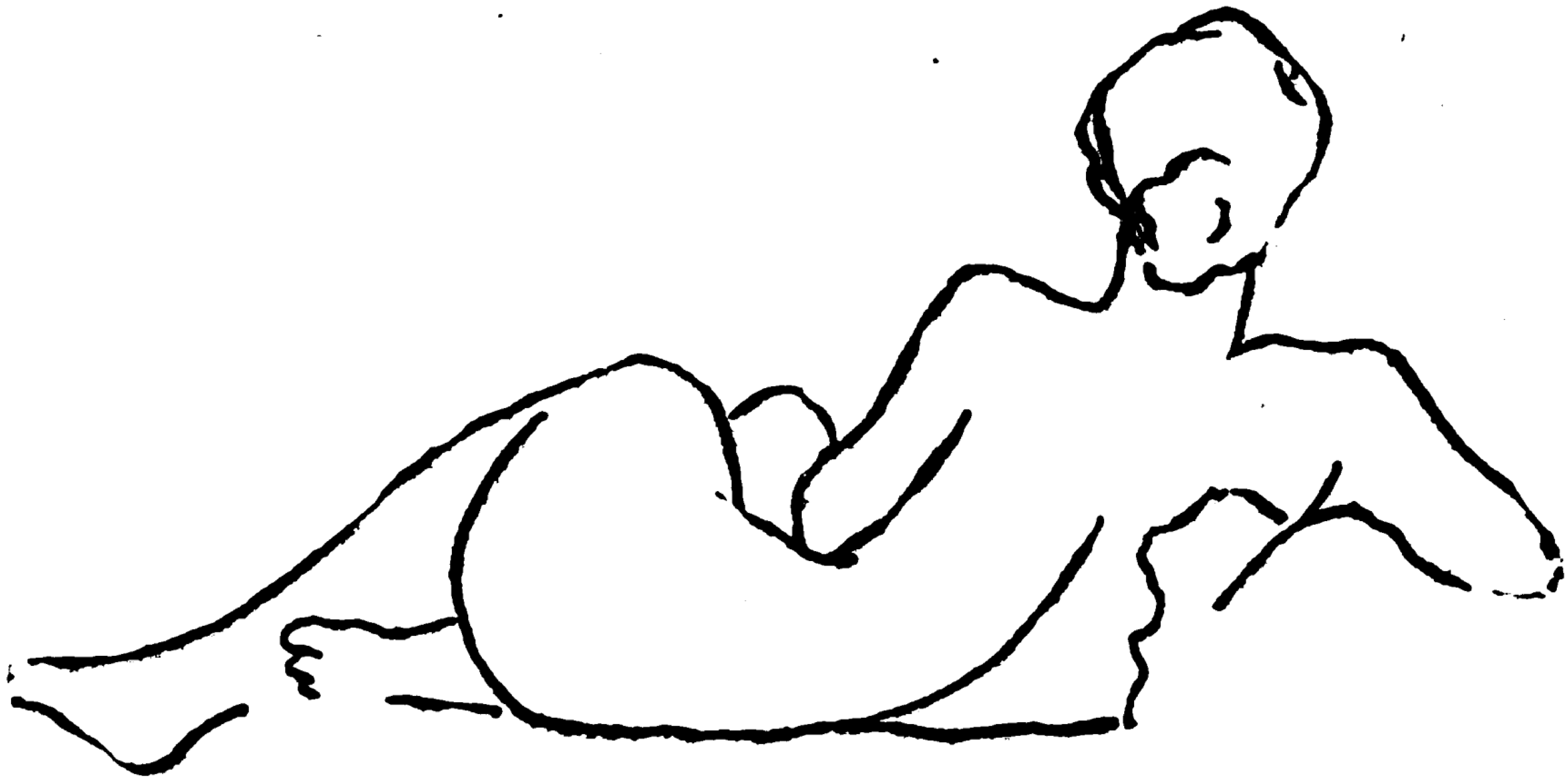
夜の二時に近いであらう。額に垂れ髪をした異風の女が、この閑散な巡査の心にその想像をさせたのであつた。私はまだ醉つて居たので、その醉眼をまともに据えて、それはまことの賣女ででもあるやうに笑つて見せた。

「こんなに遲くうろついては不可ない。早く歸り給へ。」

乾いた固い靴音が遠ざかつた。直ぐ頭の上で、宿の前の腐つぱの電線がびゆう、びゆうと呻つてゐる。ほうい、——私はそれにからんでゐる紙鳶の長い尻尾へ呼吸をかけるやうに仰向いた。そこから、雨戸を閉し忘れた自分の部屋の窓の障子が白く浮かんで見える。——あの中には穴のやうに暗い部屋がある。永久に人の歸りを待たない生活。

私は寒風の中に立留つて、微かに身顫ひした。

——一九二九・六・——大森旅館にて。



# 卍（まんじ）

谷崎潤一郎

## その十六

「どないしなはつてん？」云うてるうちに見る見る顔が青なつて來て、「姉ちやん、姉ちやん、早便所へ連れてヱな」云ひなさるのんで、どないな事になるのやら此方も慌てて、疊の上を這ひ廻るやうにしてはるのんを抱き起すと、はあはあ云ひながら肩に凭りかかつて歩きはるのんがやつとですねん。私は便所の外に立つて、「どうだんねん、どうだんねん」云うてましたが、呻りごゑが段段しんどさうになつて、「うーん、くるしいッ、姉ちやん！　姉ちやん！」云ひますよつて、夢中で中へ駈け込んでみますと、（以下四十一字削除）、しッかりしなはれ！　しッかりしなはれ！」と、肩を撫でたげて、「なんぞ下り物でもしたんかいな」云ふと、默つて首振つて、「あゝ、もう死ぬ、死ぬ、……助けてほしい」と、今にもほんまに消えてしまひさうな蟲の息で、「姉ちやあん、……」と一と聲大きく呼びながら、兩手で私の手頸にしがみ着きますねん。「こんなくらゐな事で何で死んだりするかいな、光ちやん、光ちやん」云うて力つけたげても、もう眼が見え

へんやうにどろんとなつた瞳を上げて、「姉ちやんあてを堪忍してくれるわなあ。あてこないして姉ちやんの傍で死ぬのんやつたら本望やけど、……」と、そないに云ふのんがちよつとぐらゐ狂言としたかつて握つてる手が次第に冷めとなつて來るやうな氣がしますし、さうかて「お醫者はん呼んだげよか」云うても「姉ちやんに迷惑かかるよつて呼んだらいかん、死ぬのんやつたら此んなり死なして」云ひますし、……孰方道そんなりにしとかれしませんので、女子衆に手傳てもろて二階の寢室へ運びましてん。なんせ、突嗟の場合ですよつて布團敷いてる間もあれしませんし、寢室へ入れるのんはどや知らん思たんですけど、下はみんな見透される夏座敷ですし、しよことなしにそないしたんですが、やうやう寢台へ臥さしてしもてから、直きに夫とお梅どんとこへ電話かけに行ことしますと、「姉ちやん何處も行つたらいかん」云うて、袂をぎゆッと握つたまゝちよつとの間も放しなされしません。尤もそないしてるうちに幾分か落ち着いて來たらしう、もうさつきのやうに苦しがらんやうになりはつたのんで、まあ此の分ならお醫者はん呼ばいでもよかつた思ふと、その時だけはほんまにほつとして助かつたやうな氣がしましてん。

　そんな工合で私は傍を離れることが出來しませんよつて、「お便所汚れてるさかい直ぐ掃除しといて」云うて女子衆を下へやつてしもてから、何ぞ藥でも思ひましてんけど、「いらん、いらん」と、イヤイヤしなさつて、「姉ちやん帶ゆるめてエな」と云ひなさるのんで、帶ほどいたげたり、血の附いた足袋脱がしたげたり、アルコールと脱脂綿持つて來て手や足拭いたげたりしましたんやが、そのうちに又發作が起つて、「くるしいッ、くるしいッ、水、水、……」云ひながらシーツや枕を手あたり次第に掻きむしッて、體を蝦のやうに曲げて悶えなさるのんです。私はコップに水酌んで來て、えらい暴れてて飲まされしませんのんを無理におさへつけながら口移しに飲ましたげると、いかにもおいしさうに喉をぐいぐい云はしながら、飲んでしまふと又「くるしい、くるしい」云うて、「姉ちやん、後生やよつてにあての背中の上へ載つてぎゆうッと押してエな」云うたり、何處を揉んでほしい、彼處を撫でてほしい云ふのんで、云はれる通り揉んだりさすつたりするのんですけど、ちよつと直つたか思ふと又直ぐ「痛い、痛い」云うて、なかなか治まりさうもあれしません。そして暫くでも樂になつたあひだには、「ああ、ああ、こんな苦しい目に遇ふのんもみんな姉ちやんの罰やなあ。……これで死んだら姉ちやんかつてもう勘忍してくれるか知らん」と、獨りごとのやうに云うてさめざめ涙を流すのんです。そいから又しても痛なり出して、今度は前よりもつと苦しさうにのた打ち廻つて、何や血の塊みたいなもんが出たらしい云うたりするのんで

すが、何遍も何遍も「出た、出た」云ふたんびに調べてみたかて、ちよつともそないな氣あれしません。」「神經でそんな氣すんねんわ、なんにも出てへんやないかいな。」「出てくれへなんだらあてもう死ぬわ。姉ちゃんはあてが死んだらええ思てんねんやろなあ。」「なんでそんなこと云ふのん？」「さうかて、あてにこんな地獄みたいな苦しみさしとかんと、早樂にしてくれたらええのに、……姉ちゃんやつたらお醫者はんよりよう知つてるくせに、……」そない云ひ出した云ふのんは、いつや私が「ほんちよつとした器具さへあつたら何でもない」云うたことがあつたよつてですけど、もう私にはさつきの「出る出る」云ふ騒ぎの時分から、今日のことがみんな狂言や云ふことが分つてましたのんで、……ほんま云うたら、實はその前からだんだん氣が付いて來てながら、知つて欺されてたのんで、光子さんかて私が欺されてる振りしてるのんを見拔いてながら、何處までもづうづうしう芝居してはりましてん。そんでお醫者の代りに私が手術したげる云うて、そいから先はお互ひが自分で自分を欺き合うて、……もうそんなこと、先生はよう分つてはりますやろけど、結局私は、見す見す光子さんの仕掛けた罠へ自分で自分を落し込んでしまひましてん。…………はあ、その赤いのんは何を使たのんか聞かんとしまひましたんで、今でもときどき不思議に思ひますのんですが、何ぞ芝居に使ふ血糊のやうなもん隠しといて、便所の中でなすくつたのんと違ひますやろか。……「姉ちゃん、そんならもう此なひどいことちよつとも怒つてへんわなあ、きつと勘忍してくれるわなあ？」「何云うてんの、そんなことを聞かんでも分つてるやないかいな。今度こそ欺したらあてあんたを殺してやるわ。」「あてかてさつきみたいな薄情なことされたんやつたら、生かしとけへん。」——ほん一時間ぐらゐのあひだにすつくり元の馴れ馴れしさに戻つてしまひましたんですが、さうなると私は、急に夫の歸つて來るのが恐うなつて來ましてん。一旦ああ云ふ譯になつたのんが、よりが戻つてみましたら、その戀ひしさは前より増して、もうちよつとの間も離れとないのんに、さしあたり此れから先、どないしたら毎日會へるねんやろか。「ああ、ああ、どないせう。光ちゃん明日も來てくれるわなあ？」「此處の家へ來てもええの？」「ええか、わるいか、もうそんなことあてに分らん。」「そんなら一緒に大阪へ行けへん？明日姉ちゃんのええ頃に電話かけるわ。」「あての方からも電話かけるわ。」そない云うてる間に直ッきに夕方になつてしまたのんで、「今日はもう歸るわなあ、ハズさんが戻つて來やはるさかい、……」と、身支度せうとしなさるのんを、「もうちよつと、もうちよつと」云うて何遍も引き留めましけど、「まあ、やんちやッ兒やなあ、そんな分らんことを云うたらいかん、明日きつと知らしたげるさかい大人しいして

待つてなはれや」と、今ではあべこべに私の方がたしなめられて、五時頃に歸つて行きやはりましてん。

夫はその時分大概歸りが六時頃でしたけど、その日はいくらか心配して早歸るか知らん思てましたのんに、やつぱり此なひだぢゆうからの事件が引き續いてると見えて、そいから一時間ぐらゐ立つてもまだ歸つてけえしません。私はそのあひだに部屋片附けたり、寢台綺麗に直したりして、床の上に落つてた光子さんの足袋を拾て、——歸りしなに光子さんは私の足袋穿いて行きなさつたんです。——そのしみの痕視つめながら、まだ何や知らん夢みてるみたいにぼんやりしてましてん。夫にどない云ひ譯せう。此の部屋使たことを云をか知らん。云はんとこか知らん。どない云うといたら此れから先會ふのんに都合ええか知らん。……と、そんなこと考へてると俄かに「歸りはりましたで」と下から知らしますのんで、足袋を簞笥の抽き出しにしもて降りて行きますと、「どうしたんや、さつきの電話のことは?」と、夫は廊下で出會ひがしらにすぐそない云ふのんです。「どうした云うたかて、うちほんまに難儀したわ。あんた何でもつと早歸つて來てくれへなんだん?」「僕かてさう思てたんやけど、生憎と用が片附かなんだのんでしよなあ。……一體どないした云ふのんや?」「何でも彼でも直き病院まで來てくれ云ふねんけど、そんなことしてええか悪いか分れへんし、兎に角明日まで待とくなはれと云うたんやけど、……」「そんで光子さんは行にやはつたんか。」「明日是非一緒に行つてくれ云うて歸りはりましてん。」「お前があんな本貸すよつて悪いのやないかいな。」「誰にも見せへん云やはつたよつてに貸したげたんやけど、ほんまにうち、えらい事してしもたわ。まあ何にしても明日見舞ひに行てこう、中川の奥様かて滿更知らん仲と違ふし、……」私はそない云うて、何は放つといても早速明日の口實を拵へましてん。(つゞく)



# ちんば念佛

小杉天外

## 第一場

時　承元元年十一月の下旬、雪の夜。

所　越後國頸城郡國府、郡司萩原年景の館。

館の主年景（四十歳位）家の子郎等を集めて酒宴を催したところである。郎等の員は六七人、いづれも武勇自慢の荒くれ男。年景の身近には、愛妾朝菜（二十歳）と二人の侍女あり、互に得意滿悦の主人の寵を獲んとして、露骨に媚を競ひ合ふ。二人の少女、今様を唄ひながら舞ふ。屋外の吹雪の音、屢ゝ酒興に湧立つ談笑の聲を消す。

一同　やんや、やんや。

少女等の舞終ると、一同手を拍いて囃す。

右近兵衞（二十五歳位）登場。

年景　おゝ兵衞、如何いたした。餘り遲いので、つひ始めたところぢや。さアこれへ進め。それ、兵衞へ酌をして遣はせ。

兵衞　お待ち下され、今宵は、些と變めて戴かねばならぬ、土産物を持參いたしてござります。

年景　様子あり氣ぢや。はて何で有らう。度々のこれ迄の手柄で、其方の耳を滿足さす様な褒め言葉は、最早種切れになつて居るのぢや。

兵衞　御覧じ下さりませ。

包を解いて生々しき首級を出す。

年景　どうやら、小太郎賓盛が殘黨、我等を狙ひ居るとの噂のある、夜叉の熊太が首のやうぢやが……。

兵衞　殿のお眼にも、矢張り熊太でござりませうが……。お身達には何う覧らるゝ。

郎等甲　ほんに、紛れもない夜叉の熊太ぢや。

郎等乙　いやいや、熊太なら我等見覺がある、もつと鼻が高く、口も大きい口ぢや、もつと猛々しい顔をして居る筈ぢや。

郎等丙　私には何とも云へぬ、熊太と云へば熊太の様ぢや。熊太にしては、些と柔和な顔のやうでもある。

郎等丁　そこは生き顔と死顔ぢや、鳥坂の陣中で剛の者と唄はれた熊太でも、この様な首に成つては、敵の中へ斬入る武者振は見せ得まいて。

郎等戊　夜叉の熊太と云へば、我が殿のためにも始終氣懸りな敵の殘黨ぢや。兵衞殿には、重々勇ましい手柄をされたものぢや。

兵衞　いや、その様に云はれては反つて赤面ぢや。事を明せば、手柄とは云へぬ手柄ぢや。降りしきる雪の黄昏、丁度狐黒塚を登つて參ると、ばつたりと出逢ふた一人の大男、姿風俗は僧したれど、笠を背向けた顔は紛れもない熊太ぢや。私は、ござんなれと思ふた。遣り過して背後から聲を掛けたのぢや。珍らしや熊太、郡司秋原が家の子、右近兵衞を忘れ居つたか……私は隙さず斬りつけたのぢや。

年景　勇ましいことぢや。打物把つては、面前に人を立たせぬと誇つた熊太ぢや、嘸ぞきびしく斬込んで參つたであらう。

兵衞　ところが、其に手應もない仕儀でござりました、氣怯れか、何所ぞ健康でも悪いか、兎角逃げやう逃げやうと懸つて居る様子でござりました。胴を狙つて突いた拙者の刀を、拂ひ除ける氣もなく、山で枯木でも倒れるやうに、どうと仰向に倒れたのでござります。

郎等甲　あの大男の熊太を、仰向に突倒しなされたか。

郎等乙　さぞ、見物でござつたらう。

郎等丙　兵衞殿、お手柄お手柄。

年景　して、何様な聲を發し居つた、定めし無念と叫び居つたらう。

兵衞　耳に留まる様な事は、何にも申しませなんだが、首を擲落す前に、何やらぶつぶつ唇を動かして居る様に見えました故、耳を寄せて聽きますと、それが念佛でも唱へる様に思はれました。

郎等丁　なに、念佛を唱へて死に居つたとな。

郎等戊　あの夜叉の熊太が、念佛を唱へて。

郎等一同　はゝゝゝ。

年景　何はしかれ、天晴の手柄ぢや。兵衞、今宵の褒美ぢや、納めて置け。

年景砂金の一包を與ふ。兵衞躊躇しながら押戴く。

兵衞　何うやら、分に過ぎた下され物に存じます。

年景　何人の面前へ出ても、高らかに誇つて然る可き手柄ぢや、謙遜に及ばぬ事ぢや。

兵衞　首は取りは取りましたが、熊太ほどの勇士の生命も、此う脆いものかと思ふたら、私は變な氣持に襲はれました。

年景　其方の武勇に怖れて、熊太の腕が痺れたのぢや、些か訝る事は無いわい。祝ひの杯ぢや、今宵は過ごせ。

兵衞　戴きまする。

少女等酌をして廻る。

老僕登場。

老僕　親鸞房、只今見えましてござります。

年景　參つたか、これへ案内いたせ。

老僕退場。

兵衞　誰ぞ、賓客がござりまするか。

年景　親鸞房を呼んだのぢや。毎度見慣れた顔の酒盛よりは、異つた者を一人加へるのも酒興を添へる趣向と云ふものぢや。

朝栄　都育ちの貴人とあれば、起居、品位、嘸ぞ床しいことでござんせう。

年景　女子と云ふものは詮方のないものぢや、都の貴人と聞けば、土を踏まずに歩くやうに思ふのぢや、はゝゝゝ。

兵衞　したが、彼の親鸞と云ふ出家は、不思議な辯舌の達人な相でござります。親鸞の法談を聽いて居ると、酒に醉はさるゝ様に、終ひ何様な者でも、念佛宗に歸依して了ふと申すことでござります。

年景　そんな噂は、俺の耳にも入つて居るのぢや。だが夫は、文字と云へば暦の外に讀んだこともない、百姓共を對手にしての辯舌ぢや。流人たる身が、官役に在る俺の前へ出て、舌の根が斯う自由に動かせるものではない。萬一、法談めかしい事を申したら、議論を競べ會ふのも、また一興ではないか。

郎等甲　ほんに、坊と彼の流人殿と、勇ましく議論を鬪はされたら、一段と見物でござりませう。

年景　俺は、佛の經文は終ひぞ手に把つた覺はない、だが、この世の道理に二つはない筈ぢや……。

親鸞（三十五歳）登場。黒の布法衣を着、珠數を手にすれども、髭髮ともに長く伸びて、Angelico の描きたりと云ふサン・マルコ寺院の壁畫の、基督の容貌を髣髴せしむ。

年景　お、親鸞殿、雪の中を好う參られた。

親鸞　踏みなれぬ吹雪の道とは云へ、遂ひ遲刻いたしました、お宥し下さりませ。

年景　親鸞殿、今宵は役目の用事で招いだのではござらぬ、見らるゝ通り、内々の酒事ぢや、その樣に固苦しうせずと、樂々お居でなされい。

朝榮　ほんに、この樣な吹雪の夜路は、初めてでござんせう。まア、火桶の傍へお寄りなされませ。

親鸞　辱うござります。

年景　いや、火桶よりは、腹の中から温まるが早道と申すものぢや。親鸞殿、まア杯を手に把らせられい。

親鸞　有りがたうござりますが、酒はいただきませぬ。

年景　むゝ、下戸でござつたか。然らば、その肴など箸をつけさせられぬか。この年景は、念佛宗門の事は知らうとも思はぬが、肉食も妻帶も許すと云ふ一節だけは、夙から信徒に成つて居りますぢや。はゝゝゝ。

郎等二三人　はゝゝゝゝ。

年景　親鸞殿、何故その樣に辭退なさるゝ。まア椀の物を、口に入れて見なされ。鴨も猪も、みな私の郡内で獵れた物ぢや。

親鸞　何卒お構へ下さりまするな、夕餉は濟まして參りました。

年景　夕餉が濟んだとて、食べられぬ事はござるまい。お身に較ぶれば、五つも年上の私ぢやが、見らるゝ通り、口に適ふた肴ならば、椀を更へても食べますぢや。對手する者さへあれば、酒は夜通しも飲み續けますぢや。これは、健かな體に生れ、富貴の運を惠まれた私に、天から授かつた樂みと申すものぢや。

郎等乙　はゝゝゝ。殿、女子もまた、天から授かつた樂でござりませう。

年景　はゝゝゝ。七郎醉ふたか。いや、今宵は祝ひの酒ぢや、無禮など咎めはせぬぞ。また私は、幾人の女子を愛したとて、男の恥に成らうなどゝ思うて居らぬのぢや。親鸞殿、此所に居る女子共は、この私の威勢に抑へらるゝ孤身の命にして、現も夢路と過ごす可愛い者で

ござる。私の身に執つては、酒と、この女子共があれば、現世が即ち極樂淨土ぢや。お身は出家ぢや、未來ばかり大事に思うて居られ樣が、私には現世ばかりが大事ぢや、現世に思ふまゝの樂を擬れば、人間として最上の滿足と云ふものでござらぬか。私は、不確な未來など、何う成らうと一向構はんのぢや。

**郎等乙**　臆、よう云はれました。

**郎等丙**　現世に樂を擬れば、最上の滿足ぢや。はゝゝゝ。

**郎等丁**　思ふまゝに酒を飮むことぢや。

**郎等戊**　酒の外に、まだ一つ、大事な極樂があるわい。

**郎等一同**　はゝゝゝ。

**親鸞**　否々、各々の云はれる事が、違うて居りませうぞ。

**年景**　何う違うて居りまするな。

**親鸞**　水流れて常に滿たず、火盛んにして久く燃えずでございます、誰が身の上にも、必定旋つて參るものは、未來ばかりでございます。忘れ樣としても、紛らさうとしても、何うなる事ではございませぬ。

**年景**　なる程、人間は一度は死ぬものぢや、この世は無常の世ぢや、それは私にも解つて居ますぢや、なれど、死んだ後にも世界がある、厭でも其所へ行かねばならぬと云ふ事は、私には何所までも信ずる譯に參りませぬ。それとも誰ぞ、死んでから戻つて參つた者があつて、彼の世の咄をした證據でもござりますか。

**親鸞**　其點でござります、戻つて參つた者もなく、證據になる物一つ無いからこそ、怖しい未來であり、また大切な未來ではございますまいか。

**年景**　成程、云はれゝば其樣なものかも知れぬ。

**親鸞**　お釋迦樣の苦學苦行も、悉この不安恐怖から源を發した事と思ひます。若しも、戸の隙間から月夜の庭を窺くやうに、黃泉の樣が窺けるものなら、迷へる者を悟らせ、惱める者をお救ひ下さる、彼の尊い御經文と云ふ物も、この世に遺らなかつた事と思ひます。

**年景**　然らば親鸞殿、釋迦如來の誕生以來、最う二千年も經つと申すことぢやが、弟子から弟子と擴つて、教を說勸める出家の數も、何千何萬と多いことでござらう。だが、一年でも一日でも、この世に佛法が行亘り、善男善女ばかりの世となつた例がござりますか、ござりますまい。いや、佛法ばかりではない。孔子の說かれた儒教とても同じ事ぢや。文字の有る所とさへ云へば、隈無く瀰漫、猿啼く山奥、仁義の敎の知れわたらぬ所は無い筈ぢや、けれども、何時の世にも人は悉小人ばかりで、德を備へた君子と云ふものは、搜しても出て參らぬのぢや。これは何故でござる。佛の敎も、聖人の敎

も、人間には行ひ得ない、無理から組立てられた物なのぢや、人間と云ふものゝ天賦と、相容れない所が有るからぢや。所詮人間と云ふ物は、此の樣にして生きる外に、生き樣がないのぢや。此う作られたのが人間なのぢや。この人間の世は、この儘で進めて行く外に、方法も道も無いのぢや……。

親鸞　否々、然うは云はれますまい。

年景　まア、私の云ふ事を終まで聽かつしやれ……。

郎等甲　殿、確りお遣りなされ。

年景　お身は出家のことぢや、この世を佛法信徒ばかりの世に更へやうとして、念佛を勸められることでもあらうが、私はそれを、無益な骨折と云ひ斷るのぢや。念佛など唱へる暇があらば、此世の生活を樂にする事に力を用ゐるべきぢや。この年景ならば、領地でも擴げる工夫をするのぢや、酒でも飲むのぢや……。

郎等丙　柔な女子の肌でも抱くのぢや。

郎等丁　然うぢや然うぢや。

郎等一同　はゝゝゝゝ。

年景　念佛を唱へぬ身に、淨土とやらへ參りかねた處で、最うこの世で快樂に飽いた身ぢや、些か不足はないのぢや。地獄に落ちるとしてからが、どうせ人間の大部分が、悉な一緒に參つて、獄卒の當てる責苦の鞭も、悉な一緒に受けるのぢや、幾らも諦めやうがあると云ふものぢや。

親鸞　未來に待つて居る現世の報を、爾う手輕には申されますまい。たとへば、一箇の荷物を擔ぐ場合ならば、二人より三人と、擔ぐ人數の增すと共に、肩に受ける重さは減りもしませうが、未來に受ける靈の苦痛は、千萬人と一緒であつても、一分と輕くならう筈はござりませぬ。

兵衞　ほんに、これは道理の至極ぢや。

親鸞　各々には、戸外に狂ふ吹雪の叫びも耳に入らず、酒盛の興に浸つてお居でなさいますが、さて、此の儘打揃うて、慰め合ひ、力にも成り合つて、賑かに參られる黃泉とは、よも信じてお居でゝはありますまい。所詮は一人一人、身も心も離れ離れになられて、足を向けねばならぬ闇路の旅ではございませぬか。これ程分り切つた事を疎かにして、何故後生を願はうとはなさりませぬことやら、私には、世間の人の心が悲しくてなりませぬ。いか程自信の強い者であつても、明日も必定生きて居ると云ふ事は、云ひ斷る事を許さぬ無常の此世ではございませぬか。

坐中しばらく沈默、郎等も酒杯を置き膝を組直す。親鸞閉目して珠數を繰る。

年景　親鸞殿、では念佛さへ唱へれば、その未來の成佛は、乾度間違ございませぬか。

親鸞　それは、親ら分りませぬ。

年景　なに、お身にも分らぬとな。

兵衞　上人にも、分りませぬか。

　坐中互に顏を見合はせる。郎等は互に驚く。

年景　自分にも分らぬ不確なものを　何故人へお勸めなさる。どうして其のやうに　珠數を爪繰り、心を籠めて念佛を唱へなさる。

親鸞　此う致すより他に　救ひを求める道が分らぬからでございます。所有先哲の門を叩き、所有る經文を讀みまして、私も迷ふただけ迷ひ、疑ふだけ疑ひまして、種々と苦しんだ最後に摑んだものは、この穢れた口から念佛を唱へ、一心に彌陀如來に縋る外に、何うする道もないと云ふ、眞に心細い決斷でございました。萬一、彼の世を見て來つた人があつて、お前の信心は間違つて居るぞ、念佛など唱へて居ては、勿勿淨土の道へ出られるものでないと云ひましても、親鸞の阿彌陀如來に歸依する心は、微塵も動搖はしませぬ。この聲の續かん限り、この舌の根の有らん限り、何處までも念佛を唱へて信心の道を進むのでございます。

兵衞　何うやらこれは、難い御說法の樣ぢや。

親鸞　これは、各々へ御挨拶でございます。お互に、佛の御理の如く世に生れ合はせましたのは、限りない幸福な事と存じます。さて、各々の惠まれた短い生涯の時間を、何う過すのが、お互各自の利益なのでございませう。親鸞の樣に、一寸の隙にも念佛を唱へてある可きでせうか。それとも、各々の樣に、酒に醉ひ、獸類に心を惑すが利益でございませうか。孰が正しく、孰が安心を得る道に適ふのでございませう。

兵衞　顧へば二十五年の歲月、風雨人語の響にのみ熟れた耳へ、聽かねばならぬ尊き教を、今こそ初めて聽きました。この世に生を享けたる願には……。

　右近兵衞は短刀にて髻を剪り、親鸞の前へ膝行して、

兵衞　上人樣、今宵よりこの兵衞を、弟子の一人にお加へ下さりませ。

年景　やア　武士たる身が髻を剪つて。

朝栄　お上人樣、お上人樣、何卒この妾も、お導き下さりませ。女は五障三從とやら、罪深いものと承つて居ります。就中この身は、煩惱に穢れ盡した、淺間しい者でございます。この樣な者でも、一心に如來樣を念じ、お念佛を唱へますれば、矢張り救うて下さいませうか、到底叶はぬことでございませうか。

親鸞　其様な懸念は御無用になされ。如来様の御慈悲の廣大さを、人間の心で量つてはたりませぬ。善人でさへお救ひ下さる如来様でございます、何うして悪人を其のまゝにしお措きになりませう。元来、悪人女人の浅間しさを歎かせられたからこそ、救ひの御悲願も發しなされた如来様ではございませぬか。

朝榮　あゝ有りがたや　左様でございましたか……。南無阿彌陀佛。

朝榮は髪を剪らんとして、年景の腰刀に手を掛ける。年景その手を拂ひて、

年景　汝の姿を飾る黒髪は、余に執つて佛の後光にも優す寶ぢや……。親鸞、この場に在つてお身は無用の邪魔物ぢや、疾く歸られい。

親鸞　承知いたしました。

年景　えゝ、未だ念佛など唱へ居るか、疾く疾く去れ。

年景荒らかに戸を開ける。吹雪は渦を巻いて焔のやうに吹込む。

年景は親鸞を曳摺り、吹雪の闇へ蹴落す。

兵衛　おゝ、お上人様。

右近兵衛は親鸞の跡に續いて吹雪の庭へ飛込む。

朝榮聲を揚げて泣く。

年景　現世に生きる者には現世の智慧で澤山ぢや。未来の、成佛のと、みんな無用の思想ぢや。

（幕）

# 第二場

時　建保六年三月下旬。晴れたる或日の午後。

所　常陸國稲田の郷。小さき寺院。

正面は明障子を閉さした本堂の外面と縁廊下。廊下より階段を降れば空庭。階段の左手に、老いたる一人の牛飼、牛と共に眠る。

僧甲登場。彼は難解の疑義でも抱ける如く、首を捻り、口を閉ぢたまゝにて、廊下より階段を降り、牛飼の傍を通り退場。

僧乙、僧丙、僧丁登場。

僧乙　わしには、何うも解せなくなつて了ふた。

僧丙　はやく云へば、これ迄心得て居つた信心だけでは、完全した信心とは申されぬ、此う云ふ意味でござらうか。

僧丁　あの様に、始終經文を調べられ、始終工夫をしてお居でなさるから、去年よりは今年、昨日よりは今日と、新しく妙理を發見なさるゝであらうが、愚僧などの耳には、何が何やら、聽取るばかり

も容易な事ではござりませぬて。

僧乙　わしには、屋根も葺き、壁も塗り上げた家を、また毀して、また新規に建直さいでは、大切の信心の住居にはならぬ、と云ふ樣に解られて、眞に當惑致して了ひますぢやて。

僧丙　だがお上人には、親鸞もなほ考へて見やう、御房達も工夫して見て呉れられいと、毎度のやうに、卑下して仰せられるではござらぬか、未だ動かぬ信條と申すのでは無いかも知れませぬ。

僧丁　下總、下野の信徒衆が、彼方でも此方でも、首を長うしてお出を待つて居ると云へば、大概夏の末か、秋までは御歸庵も難かしからう、愚僧は、その時になれば、また新しい道を發見して、持つて歸らるゝのぢやないかと思はれますて。

僧乙　それも大切は大切ぢやが、私はまた、お上人の健康が案じられてなりませぬ。信徒衆の招待とあれば、雨風野山のお厭ひなく、延つてお出でなさるであらうが、偶然食傷、水あたりも無いとは申されませぬ。

僧丙　ほんに、過般の風邪も、まだ全部癒つたとは見受けませぬが。

僧丁　留めて留まるお上人なら喃。

僧乙丙丁　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

　僧三人共退場。

　朝菜登場。

朝菜　牛飼殿、これ牛飼殿、目を覺まして下され、これさ牛飼殿。

牛飼　あゝ、眠い眠い。お念佛を唱へると、何うして此う眠うなることぢややら。

朝菜　これ牛飼殿、如何でござつた、お上人樣がお立ちなされぬ前に、都合よく間に合ひなさんしたか。

牛飼　私は、終ひ眠つて居りましたで、何も存じませなんだ。

朝菜　何を云ひなさる、此方は今朝ほど、小島から牛を曳いて、このお寺へわが夫を乘せて參られたではござらぬか。

牛飼　そんなら此方樣は、彼の跛の旦那殿の、お内儀樣か。

朝菜　珍らしい物忘れをする人ではある。今朝わが夫の乘る際に、彼の樣に手だすけをして乘せた妾ではないか。これ、あの樣な跛の夫ゆゑ、樣子を見に參りました程に、此方、わが夫へ、密と知らして來てもらぬか。

牛飼　何を知らして參りまするな。

朝菜　妾の參つたことぢやわいなア。何處ぞ、體にお障りはないか、何ぞ用なと殘りませぬか、それを訊いて來て下され。

牛飼　誰に訊いて參りまする。

朝菜　わが夫で無うて、誰へ用がありませう。したが、この履物の樣

子では、多勢の侍徒衆も居ると見える。そんなら、越後から參つた、荻原年景殿と云うて、呼出して下され。

牛飼　越後國蒲原郡……、その後は、鳥影が、何でござりました。

朝菜　いゝえ、蒲原郡ではない、荻原と云ふ苗字ぢやわいなア。いやいや、此方では埒明かぬ、直きに參つて尋ねて見ませう。

朝菜階段を登りかける。

僧宗雲登場。手に一卷の經文を持つ。

朝菜　もし、御出家樣は、右近兵衞殿ではござりませぬか。

宗雲　おゝ、爾う云はるゝ此方はたしか……。

朝菜　年景が妻、朝菜でござります。

宗雲　これはお珍らしい。さては此方樣も、荻原殿と一緒に、此地へお出でございましたか。何しろ、もう十二年も昔の事でござる、見忘れるも餘儀ない次第でござります。

朝菜　もう此のやうな、醜い姿になつて了ひました。

宗雲　無常の娑婆に生を享くる物、衰へぬ物なく、滅びぬ物はござりませぬ。今日荻原殿と顏を合はせました時に、餘りに意外な變り樣で、名を名乘り合ふまでは、お互に氣が付きませなんだ。殊に荻原殿には、生れもつかず、彼の樣な跛になつて居られますので、私は、何處から見られた武士であらうと思ひました。

朝菜　あの樣な跛になりましたが原因で、後生の大事な事も解り、この樣に、遙々とお上人樣を訪ねて、參るやうにもなりましてございます。

宗雲　それもこれも、前世の宿縁でございます。たしか、五年跡とかに、彼の脚を失くなされたとか承はりましたが、左樣でございますか。

朝菜　それでは、まだその譯は、申上げぬと見えます。はい、五年跡でございました。不意に夜討に襲はれ、遂ひ不覺を取りましたのでございます。

宗雲　私はお師匠樣のお指圖で、長らく京の方にばかり居りましたが、越後に戰爭の有つたことなど、少しも存じませんでした。その荻原殿に夜討に參つた敵とは、何者でございます。

朝菜　それは、最う世に亡い者と氣を放して居りました、夜叉の熊太でございました。

宗雲　おゝ、あの熊太が、まだ生存居りましたか……。それでは、彼の時捕者の刄に生命を落したは、何所の何誰であつたことやら……。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

朝菜　あの樣な不具者になりましたのも、その昔、お上人樣を足蹴にした報ぢやと申しまして、明けても暮れても、年景は悔んでばかり

居りました。お目に掛りましたなら、何を措いても先づ、この脚を御覧に入れ、お詫を申上げねばならぬと申して居りましたが……、如何でございませう、お上人様には、年景の昔の無禮を、御宥し下すつたので御座いませうか。

宗雲　宥すの宥さぬのと、お師匠様には、其樣な事を咎立てするお暇なんぞ御座いませんよ。

朝榮　それ程に、御用が多いのでございますか。

宗雲　引く息、吐く息の終らぬ間にも、絶えるか知れぬ儚ない生命でございます、念佛も唱へねばなりません、弟子達をも教へねばなりません、お師匠樣のお心は、傍の眼に映る樣なものではございません。

朝榮　左樣でございますか、有難い事でございます、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

宗雲　朝榮どの、折角これ迄お出でなされましたからは、お師匠様へ、お會ひなされては如何でございます。

朝榮　ほんに、それが願はれます事なら、この身の本望でございます。

宗雲　暫くお待ちなされ、一寸伺つて參りませう。

宗雲階段を昇る時、跛者の年景、杖にすがりながら、僧覺明の法衣の袖を無理に曳きつゝ登場。

年景　お願ひでござる、包まず聽かして下され。御房に、お上人の意の分らぬ筈はない、何卒有のまゝを聽かして下され。年景が迷ひ、年景が悶、この一事に懸つて居ります、覺明殿、お願ひでござる。

覺明　私も、お師匠様に事へて、修行の夜晝を送る身でございます。世の生業に携はる人々の様に、嘘も掛引もございませぬ。お師匠様は、お身の疑はれる様な、左様な些細な動機から、大切な御法話などなさるのではありませぬ。現に御邊の事は、あの通り、快くお宥しなされたではありませぬか。

年景　いやいや、私には爾うは思へませぬ。

宗雲　何うなされたと云ふのでございます。

年景　宗雲殿、御房にも聽いて貰はにゃならぬ。私は、多勢の弟子達が、孰も眞劍になられて、意味の深い、大切な疑を尋される間に交つて、自分の信仰に關はる事など、あまり諄々申上げては濟まんと思うて居りました、始終控へ目にして居りました。けれども私の信仰と云ふものは、申すも恥しい次第ぢやが、それは心細い信仰なのでございます。念佛を唱へて以來、如來様に歸依する心は、他にも負けぬ筈の年景でございますが、一日一日と、信心の日の重なるに連れて、これ迄の罪惡業障の恐怖が、段々と深くなるばかりなの

でござります……。

宗雲　信心が進むと共に、反つて過去の罪惡が身を責める。

年景　左樣でござる。そこで私は考へました、この樣な惡人には、こりや念佛を唱へたばかりで、到底成佛は出來ぬか知れぬ。さて、其樣なら如何にすれば成佛が出來やう。私の往く未來の前途には、最う成佛の道は塞かれて了ふたか、或はまた、何方か氣付かぬ方角に當つて、私のやうな者でも迎へて下さる、御慈悲の御門が開かれてあるか、二つに一つ、其點を確と敎へて戴かないでは、一日も落着いた心で生きて居られるものではない。私の、臆する心を自ら鞭ち、不自由な脚を杖に縋つて、お上人を訪ねて參つたのも、この大切な念願からでござります……。

宗雲　それはまた、生來強い心を持たれた年景殿の言葉とも思へませぬ、一旦信佛の道に入られたからは、成佛に何の疑ひがございませう。

年景　ところで、度々お上人の御法話を聽いて居りますと、この一向念佛の宗旨を、取違へて解釋してはならぬと仰せられました。義理人情に叛いても差支へない、無作法者を爲つても差支へない、口で念佛さへ唱へれば、その儘往生の出來るものぢやと思うてはならぬと仰せられました。もし、淨土と云ふ所が、其樣な人々を迎へる國であつたなら、この娑婆よりも價値のない、穢らはしい國に當るではないか。蓋く淨土と申す所は、義理も行はれ人情も行き亙つて、道理の輝く、眞理の花の薫はしい、至善至美の國でなければならぬ筈ぢや、此う仰せられました、彼の御法話は、正しくこの、お上人を足蹴にした私の事を指して、仰せられに違ひありませぬ。

覺明　それは此方の偏見ぢや。あれは、易行道と云ふ事を履違へて、この世の勤を疎かにし、酒色に身を持崩す信徒もあると聞かれて、弟子達を戒しめられたのでございます。決してお身の事などを指して、仰せられた御法話ではござりませぬ。

宗雲　お身ばかりではありませぬ、お師匠樣の御法話を聽聞する者は、誰の耳へも、この私と云ふ一個人を指して、仰せられるのぢやないかと聞へます、其點が、既成の諸宗と趣の違ふ、活きた我が宗旨なところでございます。

年景　左樣でござらうか。成程、能う承まはれば、さうかも知れぬ。

宗雲　それ程の事を疑はれては、お上人の徳を傷つけると申すものでございます。

年景　ほんに、これは勿體ない事でござりました。いや、宗雲殿、覺明殿、御覽の通り、醜い不具者の上に、下根迷妄の拙者でござるが、實は、お上人の弟子に加へて戴き、朝夕御教導を受けたい念願

でござるか、如何なものでござらう、お上人には、斯様な願ひを、お探上げ下さりませうか……。おゝ、朝菜、何時の間に、其方も参つて居つたか。朝菜、これは、今この場で思ひついた事ではない、其方の娘が不憫さに、胸へ包んでは居つたが、越後を發つ時より、世をも家をも棄てる覺悟で参つたのぢや。

朝菜　その覺悟は、薄々存じて居りました。若し、お前様が許して下さるならば、姿も、今日まで残して参りましたこの髪を落し、佛様に仕へる身になり度い望を抱へて居りました。

年景　左様であつたか、それでは其方の事も、お上人に願ふとしやう。

覺明　まア彼方へ参つて、直々お師匠様へ、願つて見らるゝが宜しうございます。

宗雲　私共も、及ばずながら言葉を添へて上げませう。

朝菜　何卒、宜しくお願ひ致します。

覺明を先に、宗雲、年景、朝菜の順にて、廊下を奥へ入らんとする時、年景突然に倒れて、苦惱の唸り聲と共に顛轉す。

朝菜　時も時、あゝ、困つた事になりました。

朝菜は年景に取縋りて啼く。

宗雲　如何なされた、腹痛でござるか。

覺明　これ年景殿、年景殿。

宗雲　これは、勿々一通りならぬ病氣と見える。

覺明　然うぢや、お師匠様のお藥を。

覺明と宗雲は慌たゞしく奥へ駈入る。朝菜は、介抱の方法なきため、狼狽と悲泣。

間もなく、巾着と水を盛れし椀を持つて宗雲登場。宗雲に續いて覺明と、八人の弟子の僧に交りて、親鸞（四十七歳。圓顱法衣の僧形）登場。

覺明　もうこれは、息も絶え相ぢや。

宗雲　これ、年景殿、藥でござる、これ、藥をお服みなされ。

朝菜　いえいえ、こればかりは、如何なるお藥を戴きましても、癒る病ではございませぬ。年景の體に無い、痛なのでございます。

覺明　體に無い痛とは。

朝菜　今は體に附いて居りませぬ、一方の脚の指が、痛んで参るのでございます。

宗雲　斬り取つた方の、脚の指でございますか。

朝菜　はい、五年跡に斬棄てました脚の指が、今も體に附いて居る様に、痛んで参るのでございます。

覺明　はて、不思議な事もあるものぢや。

朝栄　初めの中は、季節の變り目、または雨降り日の續く夕暮などに、何の前觸があるでもなく、不意に痛んで參る病なのでございます。その度毎の苦みは、御覧の通り、今こそ生命も終るかと思ふばかりでございますが、元より體に附いてない脚の痛、醫師が駈付けて參りましても、藥の用ゐる途はなし、幾人家族の者が居りましても、悉な手を束ねて、見て居るほかに、どうする術もないのでございます。

宗憲　宿業とでも云ふのであらう。

朝栄　この年に入りましてからは、幸ひそれも遠退きまして、大方あれは、心の迷ひ、氣の病とでも云ふのであらう、理屈から推しても、最早形も骨も腐つた脚が、土の中から痛を傳へて來る筈はない、馬鹿な事に惱まされたものぢや、などゝ申しまして、獨で笑つて居りました。また夫でなければ、遙々此地までの旅を、思立つ樣なことはございませぬ。

親鸞　各僧には何う聽かれます。私は、年景殿のこの苦惱こそ、如來の恩惠の、尊い示現ぢやないかと思はれます。私は屢く、念佛一つぢや、念佛さへ唱へれば、外の事は一切必要でないと申します。それは無論、私自身固く信じて居るからこそ申すのです。だが、その念佛を唱へる際、その時の魂の据る點です、何う云ふ心になつて唱へれば宜いのであらう……。此點です、此點に心を籠めて工夫をしなければならぬ樞機骨子があるのです。元より大慈大悲の如來樣です、食べる物を腹に滿たし、着る物を温かに着て、欠伸まじりに唱へる念佛であつても、決して聞いて下さらぬ筈はない、お救ひ下さる事に於ては間違はありません、けれども、少しく勞して多くの報を望む事は、道理に逸れて居ると思ふお互でせう、いかに如來樣がお救ひ下さるからとて、たゞ念佛ばかり唱へて、安閑として居ては濟まないではありませんか。この親鸞が、日夜わが身を顧みて、水の湧く所を求めて土を掘るやうに、始終心の奥を掘つて居るのも此點です。私は、もつと眞劍になり度いのです。體に有つだけの汗を流し、涙も絞り盡す樣な悲しい目に遭ひ、起つ事も、身動きする事も出來ない、絶對絶命の窮地に立つて、最後の一瞬で唱へる樣な、苦しい、併しながら力の滿ちた念佛を唱へたいのです。そんな時に唱へる念佛こそ、深い念佛とも云はれませうし、金剛不壞の信心を得た者とも云はれませう、厭でも如來樣のお耳を向けさせる念佛とも云へませう……。其處へ達したならば、もう淨土の門は、手を拱つて通られるばかりに、開かれてあるとは思ひませぬか……。

（各人みな粛然として、親鸞の言葉に項を垂れる。年景の苦惱は續く。

親鸞　年景殿、さて〳〵お氣の毒なことぢや。情ない業ではあるが、今親鸞の申す事に、暫く耳をお假しなされ。藥で癒はる病ならば、醫師の施す術を賴みに、苦痛を耐へる的もありませう、お身の其の病苦ばかりは、この世に癒す可き何物も無いとすれば、如來樣のお慈悲にでも縋る外に、お身は何處に救の手を求められます。そこです、如來の慈悲の外に、賴む者も、縋る者もないと見極められたなら、お身のその苦痛が、取りも直さず如來樣が投げて下された、意味の深いお慈悲の綱とは氣がつきませぬか……。これ、年景殿、人間の救はれる道、淨土へ參られ道と申すのも、つまりは、惱苦のどんぞこに落ちた者の心の奧から、初めて窺かれる、輝きの一筋道でござりまするぞ……●

苦惱に顚轉しながら、年景幸に身を起して、

年景　南、無、阿、彌、陀、佛……。南無、阿、彌、陀佛……。

念佛を唱へるとは思へぬ怒號の聲を絞る內に、苦惱を超脫したる勇氣と、法悅に輝く柔和な容貌に變り行く。

年景　南無阿彌陀佛。

靜かに唱へて微笑しながら合掌す。親鸞をはじめ衆僧、胡菜、等しく合掌して低頭に念佛す。

牛と牛飼は依然として眠る。

微風落花を送る。

（幕）

# 編輯室より

◇麥酒一杯でスーッとなるやうに。日本の政局もスーッとなつてもらいたい。梅雨上りとともに。

◇文壇も、論壇も、畫壇もあらゆる方面が沈滯し切つている。我々はそこに絶大の注意と苦心を拂つている。こんな狀態で進行すれば我々は逆に無刺戟となるのではなからふか。

◇本月號の本誌を『山岳特輯』とした。筆者は我國當代の山岳で權威と認めらるる人々である。此等の人々が一人の落伍者もなく各力作を下さつたことは感謝にたへない。坐ながらにして氷河、深溪、大山岳の神秘に打たれる。何事も體驗だ、此人達でなくしてかかる至境に辿りつくことが出來ないであらふ羨ましい境地の持主のみだ。

◇誰でも大自然には頭が下る。その壯嚴と、雄麗と、神秘とを太古のままの深溪で味得する氣持はいくら說明しても說明ができない。事情が許すならこの夏季をそうした山河に暮すのは人生の快事だ。しかしまた牛面にはいくら血みどろに働いても喰つて行けぬ人が數多いことをも思ふのである。

◇本誌の創作募集を別項で一覽下さい。しかし應募原稿は一切返戻しないから此事だけは返す〲も御承知ありたい。スケールの雄大なものが欲しい。そして科學的なものも欲しい。あまりに形式ばかりに囚はれないでグングン突き込んだものが欲しい。

◇「日本地理風俗全集」は最近我社が尤も意をこめた雄大な規模のもので科學的立場から云ふも、寫眞の點から見るも絕對に他に見られぬ創意的のものである。學校でやつている形式一點張りでなく趣味と實益を現代的に興味深く集成した。家庭では唯だ單にその寫眞ばかりでも無二の好伴侶となるばかりか兒童敎育、國民敎育に志すものには無二の好全集だ。我國を意識的によく掴むことが自分を強く掴む第一步だ。祖國の自然、人情を一番よく掴んだものが生活戰線で一番成功する。

◇超人「子規」の全集が本社から出版されるのは最大なる喜びである。彼は俳壇にありては芭蕉と共に俳聖と讚仰され、歌壇にありては一千年の迷夢を破つた復興の祖である。

◇彼の閫閘からは漱石、左千夫、節、鳴雪、虛子、碧梧桐、鼠骨、不空等の桃李が輝き出した。彼の根强く又玲瓏たる人格、徹底的藝術眼は實に士人をして尊敬せしめ、讀者をして首肯せしめた。この廉價版の普及は斯壇に偉大なる感激を與へることだらふ。

◇近く本社から現代日本文學全集の姉妹篇として「現代日本詩全集」、「現代日本短歌全集が刊行される。「浮世繪全集」も着々進行中です。

◇若山牧水氏の書翰御持合せの方はどうか暫時御貸しを願ひます。本社「若山牧水全集刊行係大悟法利雄宛てに。そして書留でお願したいものです。

◇このほど歸朝した武林無想庵氏は再び七月二三日頃渡佛します。

## 改造定價

| 冊數 | 定價 | 郵税 |
| --- | --- | --- |
| 壹冊 | 五拾錢 | 參錢 |
| 半ヶ年 | 參圓 | 郵税不要 |
| 壹ヶ年 | 六圓 | 郵税不要 |

## 註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年六月十八日印刷納本
昭和四年七月一日發行

(特價八拾錢)
(郵税三錢)

東京市芝區愛宕下町四ノ六
編輯發行兼印刷人 山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一二二 一一二三 一一二二 一一二四

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.



株式會社秀英舍印刷